全国高体連
五十年史

全国高等学校体育連盟

題字　全国高等学校体育連盟会長　河上　一雄

発刊のことば

全国高等学校体育連盟
会長 河上一雄

全国高等学校体育連盟が、昭和23年（1948）6月28日に創立されて以来50周年を迎え、ここに50周年を記念し五十年史を発刊することとなりました。

全国高等学校体育連盟は、戦後の学制改革による新制高等学校の発足とともに創立され、爾来50年にわたり高等学校体育並びにスポーツ活動の振興と発展のために、大きな役割を果たしてまいりました。

また、経済の成長と社会の安定が進むなか、高等学校への進学率の大幅な上昇とともに、青少年の健全育成をめざしての体育・スポーツ活動の充実を図り、ことに総合体育大会に象徴されるように世界の高等学校教育のなかでも例を見ないすぐれた実績をあげてまいりました。

しかし、時代や社会の大きな変化、ことに情報化・国際化・超高齢化などが進むなか、高等学校教育はいま大きく変革を求められています。

なかでも、これからの学校週5日制への対応、少子化の進行と指導者の高齢化、学校と社会の一層の連携などの課題にどう対処して行くか、まさに学校体育並びににスポーツ活動のあり方が大きく問われています。

こうした課題の解決にあたり、全国高等学校体育連盟のこれまでの歴史と伝統に学ぶなかから解決の糸口が見いだせるものと確信いたします。

心豊かでたくましく未来を切り拓く、心身ともに健全で生きる力をもつ高校生の育成を、これまでの歴史に学ぶなかで図って行くことが大切と考えます。

こうした変革期にあってこそ、ここに発刊されます五十年史は大きな意味をもつと言えるのではないでしょうか。

おわりに、この記念史の刊行にご尽力いただきました関係各位に心より感謝申し上げ、発刊のあいさつとさせていただきます。

皇太子殿下のお言葉

全国高等学校体育連盟が、創立50周年を迎えられたことを、喜ばしくおもいます。

全国高等学校体育連盟は、戦後の学制改革とともに昭和23年に創立されて以来、高校生の体育・スポーツ活動の振興を通じて、青少年の健全育成に努めてこられました。この半世紀の間に、体育施設などの整備・充実が図られるとともに、高校生の競技能力は大きく向上し、各種の大会において、その活躍が大いに期待されております。

ここに、全国高等学校体育連盟が戦後の我が国の高等学校教育に果たしてきた大きな功績を多とするとともに、長年にわたる関係者の努力に敬意を表します。

21世紀を目前にした今日、高等学校教育を取り巻く環境も変わりつつありますが、全国高等学校体育連盟が、時代や社会の変化に対応し、たくましく未来を切り開く力を持った心身共に健康な若人の育成に向け、学校と社会との連帯を一層強めながら今後も活動されるとともに、我が国のスポーツの振興・発展にも寄与されることを期待し、50周年の式典に寄せる言葉といたします。

創立50周年記念式典

と　き　平成10年11月14日(土)10時
ところ　ホテル グランドパレス

記念式典

主催者

来賓

式辞（河上会長）

全国高体連のあゆみ（高田理事長）

皇太子同妃両殿下をお出迎え

受付風景

開式のことば（細田副会長）

記念式典参加者

閉式のことば（神内副会長）

祝賀会

と　き　平成10年11月14日(土)11時30分
ところ　ホテル グランドパレス

あいさつ（河上会長）

開会のことば
（香川県関会長）

乾杯（文部省 遠藤体育局長）

乾杯

歴代役員の皆様

会場風景

スピーチ（中体連安西会長）

スピーチ（高野連牧野会長）

閉式のことば（岩手県長澤会長）

感謝状贈呈

大杉事務局長と司会の山田アナウンサー

祝　　辞

文部大臣
有馬　朗人

全国高等学校体育連盟が、このたび創立50周年を迎えられましたことを、心からお喜び申し上げます。

貴連盟は、昭和23年6月に創立されて以来、高等学校における体育・スポーツの充実・発展と高校生の心身の健全育成に多大の貢献を重ねてこられました。創立50周年という輝かしい節目を迎えられましたことは、ひとえに関係各位の御熱意と御努力のたまものであり、深く敬意を表するところであります。

ところで、来る21世紀において、我が国が活力ある国家として発展し、国民一人一人が明るく充実した生活を送るためには、あらゆる社会システムの基盤である教育の役割が極めて重要であり、子供たち一人一人に［生きる力］をはぐくんでいくことが必要であります。

学校における体育・スポーツ、とりわけ運動部活動は、生涯にわたってスポーツに親しむ能力や態度を育て、体力の向上や健康の増進を図るのみならず、学級や学年を離れて生徒が自発的・自主的に活動を組織し展開することにより、生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感などを育成するものであり、このような子供たちの［生きる力］の育成にとって大きな意義を果たし得るものであります。

本年香川県で開催された全国高等学校総合体育大会の開会式で選手たちが見せてくれた晴れやかな姿や地元高校生の真摯な歓迎の姿は、我が国の将来に確かな希望を感じさせてくれました。近年少子化の影響など運動部活動を取り巻く環境の変化も指摘されておりますが、全国高等学校体育連盟におかれましては、21世紀を生きる子供たちのため、さらに御尽力をたまわりますようお願いいたします。

終わりに、連盟を今日まで支えてこられた関係の皆様方に改めて敬意を表しますとともに、貴連盟のますますの御発展を祈念して、お祝いの言葉といたします。

祝　　辞

日本放送協会会長
海老沢　勝二

体育・スポーツを通じ健全な高校生の育成を目的とした全国高等学校体育連盟が、創立50周年を迎えられ、心よりお喜び申し上げます。

貴連盟は、この半世紀の間、「力と技と明朗な精神」をモットーに、次代を担う高校生に夢と希望を与えてまいりました。今や日本のスポーツ界にとって、不可欠な存在になっています。これもひとえに歴代の会長をはじめ関係各位の努力成果であると深く敬意を表します。

NHKでは、それまでの種目別選手権大会に変わって、現在の形の「全国高等学校総合体育大会」となった1963年（昭和38年）から後援し、高校生の若さあふれる競技模様を全国に放送してまいりました。

その間の放送技術の進歩は目覚ましく、白黒テレビからカラーテレビを経て衛星放送、ハイビジョンテレビと発展してきました。技術の進歩に伴いテレビは、スポーツの迫力・臨場感をより身近に伝えることができるようになりました。

これからもNHKでは、全国高等学校総合体育大会をはじめ、高校スポーツの感動を、全国の国民・視聴者の方に伝えていきたいと思っています。

高校教育におけるスポーツ活動は、青少年の健全な育成と心身の鍛練にとって極めて重要で、スポーツを通してお互いが理解しあい、友情を深めることが期待されています。

「継続とは力なり」という言葉があります。貴連盟が、この記念すべき年を契機に、輝かしい歴史と伝統を顧みながら将来を展望し今後の体育・スポーツの普及振興に一層の力を発揮されますことをお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

発刊に寄せて

財団法人　日本体育協会
会　長　**安西　孝之**

我が国高等学校の体育・スポーツ活動の振興に多大な貢献をされている全国高等学校体育連盟が、このたび創立50周年を迎えられ、ここに「全国高等学校体育連盟創立50周年記念誌」が発刊されますことは、誠に有意義であり、心からお慶び申し上げます。

近年、我が国においては、国民の健康にたいする関心の高まり、生活水準の向上や自由時間の増大とあいまって、スポーツへの要求が著しく高まってきております。

こうした中にあって、全国高等学校体育連盟は昭和23年6月に創立されて以来、高等学校生徒の健全な心身の育成、体力の増強及び体育・スポーツの振興に大きく寄与され、その活動は高く評価されているところであります。

特に、最近では社会環境の変化により児童・生徒の日常生活での身体活動の減少傾向と少子化による部活動への影響、2002年からの学校5日制の実施等諸問題に取組んでいるところと伺っておりますが、今後、日本体育協会といたしましても、貴連盟をはじめとする学校体育団体との協力関係を更に深め、青少年の健全育成とジュニア選手育成強化のため諸施策を推進していかなければと思っております。

どうか全国高等学校体育連盟におかれましては、この50周年という節目を契機に、今後とも全国の高等学校の協力と信頼を基盤として、関係機関及び諸団体との連帯・協力を深められ、体育・スポーツ活動の一層の発展にご尽力していただくことを念願する次第であります。

終わりに、全国高等学校体育連盟のますますのご発展と関係各位のご活躍を祈念して発刊に寄せるお祝の言葉といたします。

祝　　辞

文部省体育局長
遠藤　昭雄

全国高等学校体育連盟が、創立50周年を迎えられ、ここに記念誌を発刊されますことを、心からお祝い申し上げます。

貴連盟は、我が国における高等学校体育・スポーツの振興に多大の貢献をされ、現在約9万の運動部のもと129万人の高校生が加盟している組織として大きく発展を遂げておられます。これもひとえに、生徒一人一人を大切に考え時々に応じて創意工夫を積み重ねてこられた関係各位の御尽力のたまものと、深く敬意を表する次第であります。

ところで、今日の高校生については、社会の変化などに伴い、体力・運動能力の低下傾向や運動に興味を持ち活発に活動する者とそうでない者との二極化、生活習慣の乱れ、ストレス及び不安感の増加など、体と心に関するいくつかの問題が指摘されております。

このような中で、高校生が、生涯にわたり、豊かで活力のある生活を送るためには、平成9年9月の保健体育審議会答申でも述べられていますように、一人一人がライフスタイルに応じたスポーツライフを実現していくことが必要です。そのためには、高等学校での体育・スポーツ活動をさらに改善充実し、生涯を通じてスポーツに親しむ習慣を育てることが重要であります。

文部省といたしましては、平成10年7月の教育課程審議会答申を踏まえ教育内容の改善を図っているところであり、また、運動部活動についても、例えば外部指導者の活用を促進、指導者向けの参考資料の作成など、その改善充実のための施策を実施しているところです。

21世紀に向けてスポーツの重要性は一層高まるものと考えられるところであり、高等学校における体育・スポーツの発展の要である貴連盟におかれましては、より広い視野から、更なる御貢献をくださいますようお願い申し上げます。

どうか、関係各位がますます一致協力され、貴連盟が60周年、100周年と更に飛躍されますことを心から祈念して、お祝いの言葉といたします。

高校総体と
高体連マークの由来

高校総体は従来種目別選手権大会として、全国各地でまちまちに開催されていましたが、昭和38年度から、これからの大会を同一地区で開催することとし、名称も「全国高等学校総合体育大会」となり、略して「高校総体」と呼ばれるようになりました。

また種目別選手権大会のころから「インターハイ」（インター・ハイスクール・ミーティング――Inter highschool meeting――高等学校間の対抗競技の意）とも呼ばれ広く人々に親しまれています。

この大会には図のようなマークが使用されておりますが、これは全国高等学校体育連盟つまり高体連のマークです。

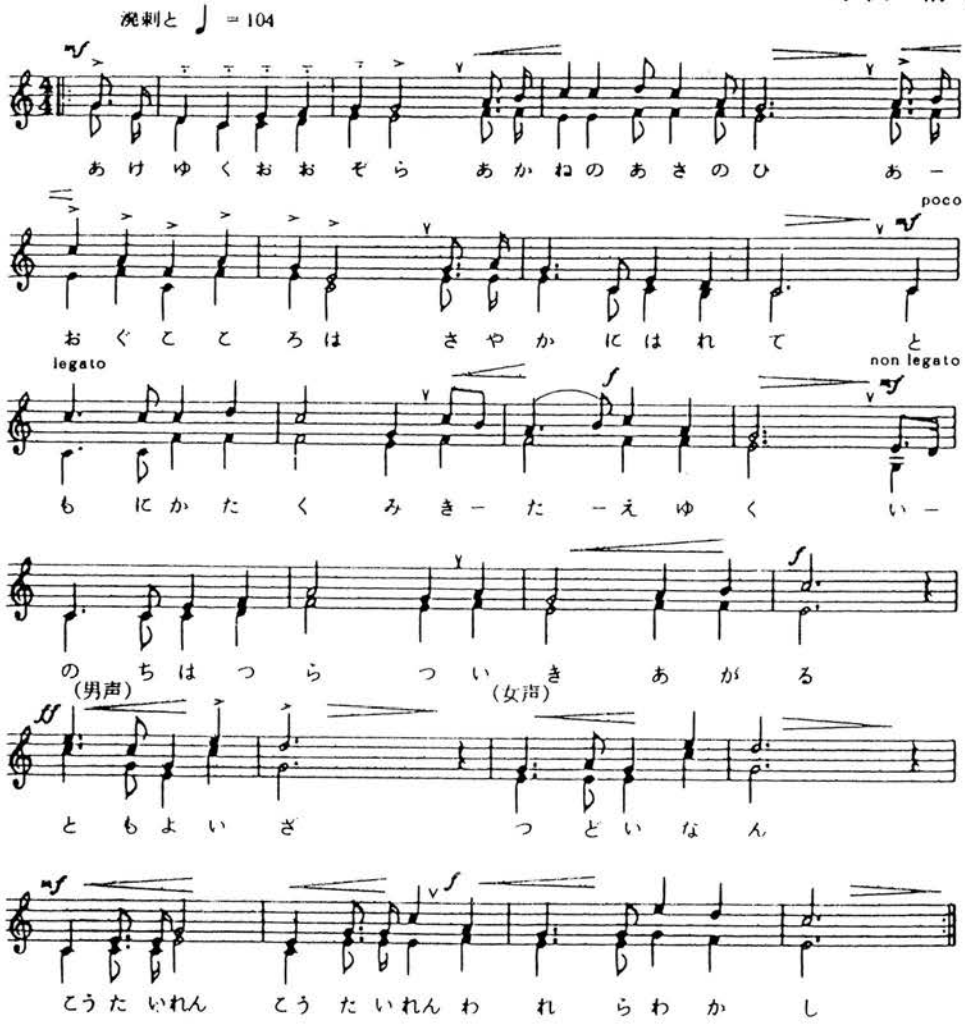
昭和23年に全国高等学校体育連盟が発足し、昭和25年にこのマークが定められました。このマークを構成している3つの「K」は真紅によって浮き出され、次のようなドイツ語の頭文字をとったものです。

KRAFT……力
KUNST……技
KLARHEIT……明朗な精神

これは「若い力とわざと明朗な精神」を象徴し真紅の色彩は「高い理想」と「希望に燃える若人の情熱」を象徴するもので、3つの「K」のマークは高体連旗となって、全国大会はもちろんのこと、高体連の主催による大会には必ず会場に掲げられます。

高体連の歌

増田文雄 作詞
小松　清 作曲



一、あけゆく大空
あかねの　朝の陽　仰ぐ心は
さわやかに晴れて
ともは肩組み　鍛えゆく
生命はつらつ　意気あがる
友よいざつどいなん
　高体連　高体連　われら若し

二、さみどり萌えたつ
希望の　この土
しかと踏みしめ　大気に伸ばす
この手この脚　躍進の
ちから溢れて　血はおどる
友よいざつどいなん
　高体連　高体連　われら若し

三、世紀のひかりは
野山に　波路に
うた声たかく　こだまひびき
たゆまぬ努力　技を練る
行手ほまれの　花かほる
友よいざつどいなん
　高体連　高体連　われら若し

（昭和32年7月15日制定）

全国高体連五十年史

目　次

発刊のことば　全国高等学校体育連盟会長　河上　一雄

巻　頭　皇太子殿下のお言葉

創立50周年記念式典　式典・祝賀会

発刊に寄せて
- 文部大臣　有馬　朗人
- 日本放送協会会長　海老沢勝二
- (財) 日本体育協会会長　安西　孝之
- 文部省体育局長　遠藤　昭雄

高校総体と高体連マークの由来

高体連の歌

50年の歩み
- 歴代会長 …… 2
- 沿革（年表） …… 4
- 40周年記念式典 …… 8

写真で綴る全国高校総体の歩み …… 11

歴代会長回顧録
- 第18代会長　福田　満雄 …… 28
- 第19代会長　久野　猛 …… 29

記念座談会　「全国高体連の歩みと今後への展望」 …… 31

都道府県高体連の歩み

北海道 …… 46	青　森 …… 50	岩　手 …… 54
宮　城 …… 58	秋　田 …… 62	山　形 …… 66
福　島 …… 70	茨　城 …… 74	栃　木 …… 78
群　馬 …… 82	埼　玉 …… 86	千　葉 …… 90
東　京 …… 94	神奈川 …… 98	山　梨 …… 102
新　潟 …… 106	富　山 …… 110	石　川 …… 114
福　井 …… 118	長　野 …… 122	岐　阜 …… 126
静　岡 …… 130	愛　知 …… 134	三　重 …… 138
滋　賀 …… 142	京　都 …… 146	大　阪 …… 150
兵　庫 …… 154	奈　良 …… 158	和歌山 …… 162
鳥　取 …… 166	島　根 …… 170	岡　山 …… 174
広　島 …… 178	山　口 …… 182	徳　島 …… 186
香　川 …… 190	愛　媛 …… 194	高　知 …… 198
福　岡 …… 202	佐　賀 …… 206	長　崎 …… 210
熊　本 …… 214	大　分 …… 218	宮　崎 …… 222
鹿児島 …… 226	沖　縄 …… 230	

専門部の歩み

陸上競技 …… 236
水　泳 …… 248
バレーボール …… 256
ソフトテニス …… 268
サッカー …… 280
バドミントン …… 290
相　撲 …… 300
スキー …… 310
漕　艇 …… 318
レスリング …… 330
テニス …… 340
自転車 …… 350
ホッケー …… 358
ヨット …… 366
空手道 …… 376
なぎなた …… 386
定通制 …… 396
体　操 …… 244
バスケットボール …… 252
卓　球 …… 262
ハンドボール …… 274
ラグビー …… 286
ソフトボール …… 296
柔　道 …… 304
スケート …… 314
剣　道 …… 324
弓　道 …… 336
登　山 …… 346
ボクシング …… 354
ウエイトリフティング …… 362
フェンシング …… 372
アーチェリー …… 380
研　究 …… 392

全国高校総体歴代優勝者一覧

陸上競技 …… 402
水　泳 …… 410
バレーボール …… 415
ソフトテニス …… 417
サッカー …… 418
バドミントン …… 418
相　撲 …… 419
スキー …… 421
漕　艇 …… 424
レスリング …… 426
テニス …… 428
自転車 …… 430
ホッケー …… 433
ヨット …… 435
空手道 …… 436
なぎなた …… 438
体　操 …… 407
バスケットボール …… 415
卓　球 …… 416
ハンドボール …… 417
ラグビー …… 418
ソフトボール …… 419
柔　道 …… 420
スケート …… 423
剣　道 …… 425
弓　道 …… 427
登　山 …… 429
ボクシング …… 431
ウエイトリフティング …… 433
フェンシング …… 435
アーチェリー …… 437
定通制 …… 438

部員数、部数の推移 …… 447

50周年記念事業

式　辞　全国高体連会長　河上　一雄 …… 464
祝　辞　文部大臣　有馬　朗人 …… 466
日本放送協会放送総局長　河野　尚行 …… 467
(財)日本体育協会会長　安西　孝之 …… 468
高体連のあゆみ　全国高体連理事長　高田日呂美 …… 469
次　第（式典・祝賀会・感謝状贈呈） …… 472
準備経過 …… 474
委員一覧 …… 475
記念式典係員名簿 …… 476

歴代役員一覧

(1) 歴代本部役員 …… 480
(2) 歴代都道府県会長・理事長 …… 482
(3) 歴代専門部部長 …… 488
(4) 平成10年度役員 …… 490

被表彰者一覧 …… 509

全国高体連規程集

(1) 全国高体連規約 …… 512
(2) 全国高校総体中央委員会規程 …… 515
(3) 全国高校総体検討委員会規定 …… 517
(4) 全国高校総体開催基準要項 …… 518
(5) 全国高校総体役員編成基準表 …… 527
(6) 全国高体連基本問題検討委員会規定 529
(7) 全国高体連基本問題検討小委員会規約 … 530
(8) 全国高体連表彰規定 …… 531
(9) 全国高体連表彰規定内規 …… 532
(10) 全国高体連表彰規定申し送り事項 … 533
(11) 全国高体連傷病見舞金規程 …… 534
(12) 全国高体連傷病見舞金審査会運営規程 … 536
(13) 全国高体連傷病見舞金基準に関する申し合わせ事項 …… 537
(14) 全国高体連弔慰規程 …… 538
(15) 全国高体連専門部規程 …… 539
(16) 全国高体連研究部規約 …… 541
(17) 全国高体連研究大会開催基準要項 … 544
(18) 全国高体連研究大会役員基準表 … 547
(19) 高等学校競技者の在り方 …… 548
(20) 全国高体連「マーク」委員会規程 … 549
(21) 全国高体連「マーク」使用規程 … 550
(22) 広域通信制高等学校の高体連加盟登録についての申し合わせ …… 554
(23) 新規加盟の基準 …… 555
(24) 全国高校総体協賛に関する規定 … 556

創立50周年記念事業協賛者芳名

(1) 都道府県芳名協賛者 … 562
(2) 専門部芳名協賛者 …… 588
(3) 協賛企業 …… 592

あとがき …… 623

50年の歩み

歴　代　会　長

初代会長

細川　潤一郎 氏
麻布高校
（S 23～24年）

第 2 代会長

星　　一雄　氏
九段高校
（S 25～30年）

第 3 代会長

小松　直行　氏
白鷗高校
（S 31～32年）

第 4 代会長

両角　英運　氏
白鷗高校
（S 33～36年）

第 5 代会長

岩下　富蔵　氏
日比谷高校
（S 37～38年）

第 6 代会長

尾崎　剛毅　氏
駒場高校
（S 39年）

第 7 代会長

田中　喜一郎　氏
日比谷高校
（S 40～42年）

第 8 代会長

新井　廸之　氏
立川高校
（S 43～44年）

第 9 代会長

宮田　豊太郎　氏
駒場高校
（S 45～46年）

第 10 代会長

岸田　文男　氏
日比谷高校
（S 47～49年）

第 11 代会長

井上　敬一　氏
墨田川高校
（S 50年）

第 12 代会長

根津　哲夫　氏
箕面東高校
（S 51年）

第13代会長

磨井　洋　一　氏
八潮高校
（S 52～53年）

第14代会長

風巻　磊蔵　氏
日比谷高校
（S 54～55年）

第15代会長

鈴木　英久　氏
千歳高校
（S 56～58年）

第16代会長

大野　慎一郎　氏
日比谷高校
（S 59年）

第17代会長

家弓　鐵矢　氏
日比谷高校
（S 60～62年）

第18代会長

福田　滿雄　氏
日比谷高校
（S 63～H 4年）

第19代会長

久野　猛　氏
日比谷高校
（H 5～9年）

第20代会長

河上　一雄　氏
日比谷高校
（H 10年～）

沿革（年表）

年度	西暦	会　長	理事長	高体連のできごと	文部省の施策・スポーツのできごと等
23	1948	細川潤一郎		・全国高等学校体育連盟創設（6月28日） ・事務局を麻布高校に置く ・連盟規約作成 ・第１回全国高校陸上競技大会にて主催者として全国高体連の名称が社会的に初めて使用される	・学制改革による新制高等学校発足 ・学徒の対外試合について局長通達
24	1949	〃			・保健体育審議会復活 ・中等学校で体育科を保健体育科と改称 ・国際オリンピックへの日本復活承認
25	1950	星　一雄		・事務局を九段高校に置く ・全国高体連マーク制定(6月2日) ・専門部11部設置（陸上競技、体操、水泳、バスケットボール、バレーボール、卓球、軟式庭球、ハンドボール、サッカー、ラグビー、ソフトボール）	・学校柔道復活
26	1951	〃		・専門部５部設置（スキー、スケート、柔道、バドミントン、相撲）	・学校弓道復活 ・第１回アジア競技大会（インド）開催
27	1952	〃		・自転車専門部設置	・剣道がしない競技として復活
28	1953	〃		・漕艇、剣道しない競技専門部設置	
29	1954	〃		・レスリング専門部設置 ・沖縄県高体連加盟	
30	1955	〃		・全国大会開催基準要項制定 ・弓道専門部設置 ・第１回加盟団体長会議開催	・全国中学校体育連盟発足
31	1956	小松　直行		・事務局を白鷗高校に置く	・高等学校学習指導要領保健体育科編制定 ・第1回世界柔道選手権大会開催
32	1957	〃		・高体連歌制定(7月15日) ・登山、硬式庭球専門部設置	・スポーツ振興審議会設置
33	1958	両角　英運		・ボクシング専門部設置 ・全国大会国庫補助金申請	・国立競技場竣工
34	1959	〃		・ホッケー、ウエイトリフティング、ヨット専門部設置 ・全国大会国庫補助金220万円が本年度より交付	・日本学校安全会法公布 ・第18回オリンピック東京開催決定

年度	西暦	会　長	理事長	高体連のできごと	文部省の施策・スポーツのできごと等
35	1960	両角　英運	高田　　通	・全国大会国庫補助金400万円に増額 ・国際競技参加基準制定 ・両角会長ローマオリンピック視察	・高等学校学習指導要領告示 ・全国体育指導委員協議会発足
36	1961	〃	〃	・全国大会全競技が文部省の後援となる	・スポーツ振興法公布 ・第１回スポーツの日
37	1962	岩下　富蔵	〃	・全国大会国庫補助金500万円に増額 ・フェンシング専門部設置	・文部省にスポーツ課設置 ・日本スポーツ少年団設立
38	1963	〃	尾崎　剛毅	・事務局を日比谷高校に置く ・全国高校選手権が全国高等学校総合体育大会として発足 ・新潟県を主会場に総合体育大会開催 ・ＮＨＫが全国高校総体の後援となる ・全国高校総体中央委員会規程施行	・スポーツテスト実施要項制定
39	1964	尾崎　剛毅	高崎　米吉	・全国高校総合体育大会開催基準要項設定 ・全国大会国庫補助金1,000万円に増額	・第18回オリンピック東京大会開催 ・国立競技場に像「健康美」を建立
40	1965	田中喜一郎	新井　廸之	・全国大会国庫補助金1,080万円に増額	・体力つくり国民会議発足
41	1966	〃	〃	・全国高校総体総合開会式に皇太子殿下、同妃殿下ご臨席 ・日本体育協会より「全国高校総体」に100万円交付される ・全国高校総体にサッカー、相撲が加入 ・ソフトボール部に男子の部を認める ・第１回全国高体連研究大会開催 ・全国高校総体駅伝を京都市で開催	・第１回体育の日
42	1967	〃	〃	・定通制全国大会を全国高体連主催で開催（陸上、自転車）	・ユニバーシアード東京大会開催
43	1968	新井　廸之	藤崎　寛行	・高体連事務局新設（６月25日） ・第１回日韓高校スポーツ交歓競技会実施	
44	1969	〃	〃	・全国大会国庫補助金1,400万円に増額	・児童生徒の運動競技についての通達（学校教育活動と学校教育活動外を区別） ・青少年運動競技中央連合協議会発足
45	1970	宮田豊太郎	湯野　正憲	・全国高校総体に男子ソフトボール加入	・日本体育協会がアマチュア規程を定める

年度	西暦	会　長	理事長	高体連のできごと	文部省の施策・スポーツのできごと等
46	1971	宮田豊太郎	湯野　正憲	・全国高校総体にラグビー加入	・中央教育審議会答申 ・スポーツ安全協会傷害保険発足
47	1972	岸田　文男	〃	・事務局規定施行	・札幌オリンピック冬季大会開催
48	1973	〃	〃		・高等学校学習指導要領施行
49	1974	〃	磨井　洋一	・全国大会国庫補助金2,000万円に増額 ・全国高体連傷病見舞金規程及び審査会運営規程の制定	
50	1975	井上　敬一	〃	・全国大会国庫補助金3,000万円に増額	・派遣社会教育指導主事(スポーツ担当)制度
51	1976	根津　哲夫	〃	・第９回日韓高校スポーツ交歓競技会本年度で終了	
52	1977	磨井　洋一	重田　　一	・総体の規程適正についての審議を始める	・部活動手当の支給を定める人事院規則の改正
53	1978	〃	〃	・全国総体前年度優勝校の出場をとりやめる ・通信制生徒の総体出場を承認	
54	1979	風巻　磊蔵	鈴木　英久	・全国高校総体検討委員会規定施行 ・基本問題検討委員会規定施行	・児童生徒の運動競技についての通知(全国大会を中学校年1回高校年2回)
55	1980	〃	〃	・総合体育大会規模適正を実施する ・全国高体連専門部規程を定める ・「マーク」委員会規定施行	
56	1981	鈴木　英久	松原　久三	・全国高体連被表彰制度を定める ・弔慰規程施行 ・日本体育協会交付金300万円に増額	
57	1982	〃	〃	・空手道専門部設置 ・新規加盟基準承認	・日本学校健康会発足
58	1983	〃	〃	・研究部規約並びに研究大会開催基準要項施行	・臨時教育審議会第１次答申
59	1984	大野慎一郎	〃	・全国研究大会持ち回りとなり、熊本県で開催される	
60	1985	家弓　鐵矢	藤川　侃二		・ユニバーシアード神戸大会開催
61	1986	〃	〃		
62	1987	〃	〃	・北海道で全国総体夏季、冬季全競技開催 ・競技者規定施行	・教育改革推進大綱 ・スポーツの振興に関する懇談会発足

年度	西暦	会　長	理事長	高体連のできごと	文部省の施策・スポーツのできごと等
63	1988	福田　満雄	内藤　　隆	・創立40周年記念式典開催 ・全国高体連40年史発刊 ・「高等学校競技者の在り方」施行	・文部省機構改革 (生涯学習局設置、スポーツ課を生涯スポーツ課、競技スポーツ課に分離) ・国民体育大会2巡目開催 ・第１回全国スポーツ・レクリ エーション祭
H元	1989	〃	〃	・全国総体にアーチェリー・柔道女子団体戦が加わる ・庭球専門部がテニス専門部と改名 ・全国駅伝に女子が加わる	・保健体育審議会「21世紀に向けたスポーツの振興方策について」答申 ・第１回生涯学習フェスティバル開催 ・(財)日本オリンピック委員会設立
2	1990	〃	〃	・全国総体の協賛に関する特別委員会の設置 ・消費税導入に伴い、全国総体宿泊費は外税扱い承認	・スポーツ振興基金設立 ・第１回生涯スポーツコンベンション開催
3	1991	〃	〃	・広域通信制高校の高体連加盟の取り扱いについて協議 ・全国高校総体協賛に関する規定施行 ・傷病見舞金審査基準に関する申し合わせ事項施行	・ユニバーシアード冬季札幌大会開催
4	1992	〃	金原　達人	・全国高校総体の引率責任者について協議 ・基本問題検討小委員会規約施行	・9月より第2土曜日休業
5	1993	久野　　猛	〃	・なぎなた専門部設置 ・全国高校総体に協賛金導入	
6	1994	〃	岡本　裕之	・一条校以外の学校が全国総体参加 ・外国人留学生の参加基準を設ける	・第12回アジア競技大会広島市で開催
7	1995	〃	〃	・外国人留学生の参加制限 ・財団法人化特別小委員会	・ユニバーシアード福岡大会開催
8	1996	〃	高田日呂美	・全国高体連の英語標記を決定	・第15期中央教育審議会第1次答申
9	1997	〃	〃	・創立50周年記念事業実行委員会設立 ・全国総体になぎなたが加わる ・統廃合対象校の特別措置	・保健体育審議会答申 ・長野にてオリンピック冬季大会開催
10	1998	河上　一雄	〃	・創立50周年記念式典開催(11月14日) ・全国高体連50年史発刊	

創立40周年記念式典

と　き　昭和63年11月19日(土)10時
ところ　ホテル グランドパレス

写真で綴る全国高校総体の歩み

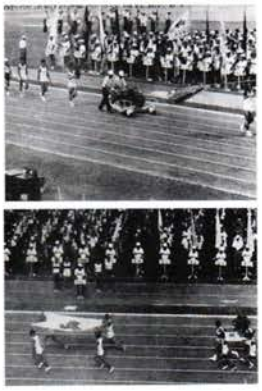
写真で綴る全国高校総体

昭和38年(新潟県外13都府県)

昭和38年度全国高校総体は第1回目の総合大会であり、種目別大会の性格を色濃く残している。もちろん全体のスローガンなどもなく、現在確認できるのは、種目別の参加者を残すにとどまっている。昭和38年度全国高校総体思い出のアルバム

下:総合開会式
夏空に舞い上がる数千の風船。
右: トンガリ帽子で
勢揃いした
大コーラス団

昭和39年(愛知県外13県)



昭和40年(大分県外5県)

昭和41年(青森県外3県)

昭和42年(福井県外6県)

「明るく 清く たくましく」

昭和43年(広島県外1県)

「強く 正しく 美しく」

昭和44年(群馬県外3県)

「公正 闘志 友情」

昭和45年(和歌山県外9府県)

「質実剛健」

昭和46年(徳島県外3県)

「至純 探求 躍動」

昭和47年(山形県外6府県)

「総体は明日の山形生む力」

昭和48年(三重県外3県)

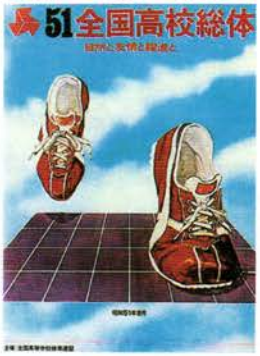
「燃えよ若人」

昭和49年(福岡県外1県)

「明朗 友愛 躍進」

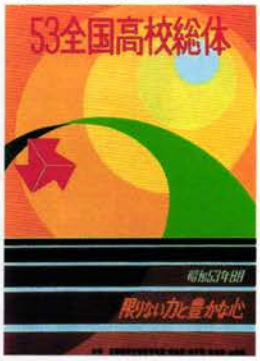
昭和50年(東京都外3県)
「心と技と力」

昭和51年(長野県外5県)
「自然と　友情と　躍進と」



昭和52年(岡山県外3県)
「友よ!清く 仲よく たくましく」

昭和53年(福島県外3県)
「限りない力と豊かな心」



昭和54年(滋賀県外5府県)
「競おう技 深めよう友情」

昭和55年(愛媛県外3県)
「四国路を駆けろ若人 意気と熱」

昭和56年(神奈川県外7都府県)
「はばたけ青春 広げよう友情」

昭和57年(鹿児島県)
「南国に競え若人 はぐくめ友情」

昭和58年(愛知県外3県)
「走れ 跳べ 競え 東海の空」

昭和59年(秋田県外1県)
「東北の緑に染まれ 君の青春」

昭和60年(石川県)
「石川の大地に流せ 君の汗」

昭和61年(山口県外4県)
「燃えろ かがやけ たくましく」

昭和62年(北海道)
「はばたけ 若人 北の大地に」

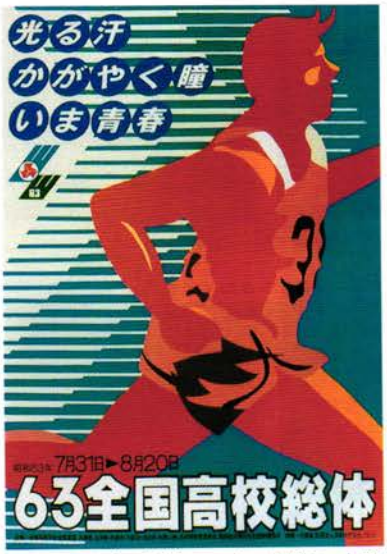
ラグビー(大阪府)

スキー(北海道)

スケート(北海道)

昭和63年全国高校総体（兵庫県外５府県）

総合ポスター



鮮やかな赤で男性ランナーを描き、力強さを強調し、青のバックでスピード感を表しました。そして、未来に向かって限りなく挑戦していく若者の姿を象徴するとともに、大会に参加する高校生の熱い思い、青春のエネルギーと躍動感を表現しました。

兵庫県立明石高等学校　３年　池上　千佳子

シンボルマーク

21世紀を担う若人の飛躍と希望を、大空にはばたこうとする２羽の鳥で表現し、全体の形は近畿２府４県の地形を図案化しました。

青色は大空と知性、緑色は大地と青春を象徴し、主会場である兵庫県の位置に高体連マークを配して、全体の調和を図りました。

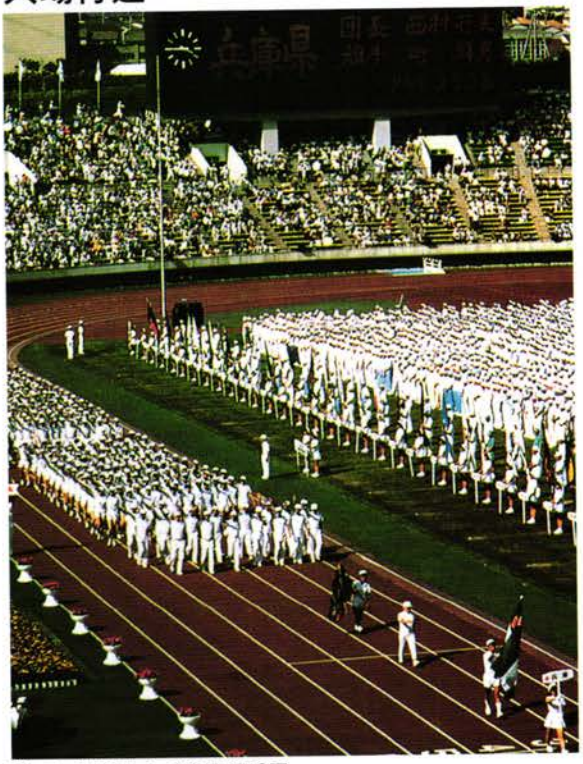
兵庫県立神戸商業高等学校　３年
岩崎　邦子

スローガン

光る汗 かがやく瞳 いま青春

兵庫県立夢野台高等学校　２年　砂川　謙一

入場行進



堂々と入場する兵庫県選手団

選手代表宣誓（県立西脇工業高校　濱矢将直）

平成元年全国高校総体（高知県外３県）

総合ポスター

スポーツを通して練習の苦しみや勝利の喜びを青春の思い出、ドラマとしてそれらのワン・シーンをイラスト化するとともに、背景に四国の空と海のイメージをカラーで
表し、高校生のひたむきさを表現してみました。

高知県立岡豊高等学校　２年　前北　忠男

シンボルマーク

青い海、青い空豊かな自然に恵まれた緑の大地の四国と、若人の祭典・全国高校総体を合わせてイメージしました。

健全な若人を象徴する高体連マークを中心に、大空へ放射状に延びる線と波打つ４本の曲線の流れで若人の力強さ、躍動感を表現しました。渦状の４本の青は、青い空と青い海を表し、四国地図のシルエットは、自然の豊かさと若々しさを表す若緑とし、中心に位置する高体連マークの赤で全体を引きしめ、調和をとりました。

高知県立安芸高等学校　３年　佐竹　　丈

スローガン

競え技 結べ友情 さわやかに

高知県立高知東高等学校　２年　酒井　美紀

入場行進

沖野高知県高体連理事長の先導で三旗・選手団入場

平成２年全国高校総体（宮城県）

総合ポスター

作者の意図

平成２年インターハイのポスターを描くに当り、最初自分なりにテーマを決めました。「力（パワー）」又は、「エネルギー」、それと「動」です。

宮城県立仙台第一高等学校　２年　早坂　英明

シンボルマーク

ふたつの峰は、宮城（MIYAGI）の「M」をあらわすと同時に、蔵王連峰を意味しています。

また、下方のグラデーションは、松島湾をあらわしています。

宮城県下31市町を拠点に行われる、躍動する平成２年全国高校総体の発展する姿を表現したものです。

宮城県工業高等学校　３年　佐藤裕子

スローガン

華ひらけ　無限の力　宮城の夏に

宮城県鼎が浦高等学校　１年　熊谷純子

入場行進

行進の先頭は三旗の入場です

平成３年全国高校総体（静岡県）

総合ポスター

真夏の太陽のもとで力をふりしぼりゴールした瞬間の喜びを表現しました。

静岡県立清水南高等学校　２年　野中　美希

シンボルマーク

高体連マークから高校生が競い合いながら、無限の可能性を求めて飛躍する姿。三本の曲線はインターハイの頭文字(I) の図形。

＜線の色彩＞青色は太平洋と駿河湾を、他の二色は本県の暖かさとみかん及びお茶を表現しました。

静岡県立清水南高等学校　２年　本塚　浩一

スローガン

感動は

静岡県立磐田北高等学校　２年　大石　恵子

入場行進

三旗に先導され、入場行進が開始された

平成４年全国高校総体（宮崎県）

総合ポスター

溢れる若さと太陽のきらめきを大胆に描いた。
色彩については、宮崎の明るくはつらつとした感じを表現している。

宮崎県立佐土原高等学校　２年　河崎　真理子

シンボルマーク

県木フェニックスが高体連マークを包み、２本の曲線は、荒波をデザインしました。
日南海岸の荒波に対して、ひくともしないフェニックスのように逞しく、そして粘り強く頑張る若い力を表現したものです。

宮崎県都城工業高等学校　２年　三瓶　　誠

スローガン

夢 きらめいて
宮崎の空の下

宮崎県立小林高等学校　３年　木上　真理

入場行進

平成５年全国高校総体（栃木県外２県）

総合ポスター

「青春の輝き」を、短距離走、新体操、テニスの各種目を通して、競技している若人の汗と躍動感の中に描きだそうと制作してみました。

宇都宮女子高等学校　２年　青山　記子

シンボルマーク

躍動する若者に姿を栃木県のとりオオルリの羽ばたく形で表し、青は青空とオオルリの青、緑は大自然の緑、オレンジは青春の輝きを表しました。

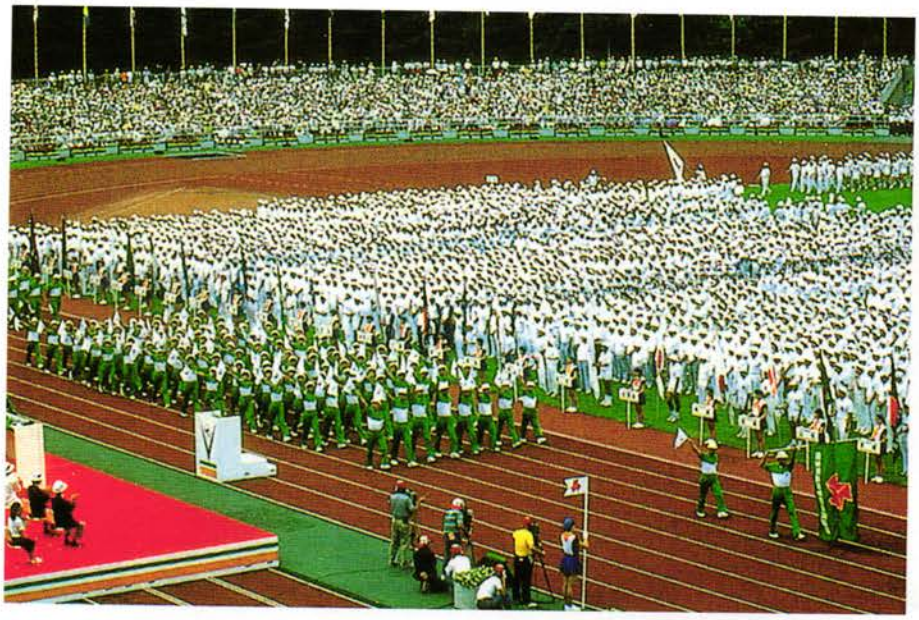
宇都宮中央女子高等学校　２年　小川　史江

スローガン

輝いて見せてください
青春の汗 in 栃木

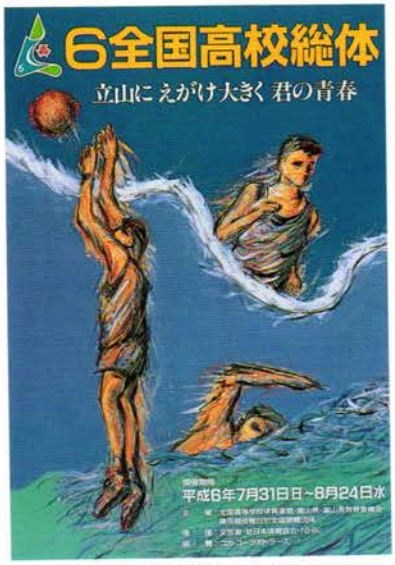
宇都宮市立城山中学校　１年　小倉　レイ

入場行進



平成６年全国高校総体（富山県）

総合ポスター



今を輝かんとする若さあふれる高校生のスポーツに対する喜びや、勝敗から習得することのすばらしさを表す努力をした。基本的な走る姿、球技としてのバスケットボール、水中を魚のように泳ぐ水泳の姿からスポーツの激しい動きを表現した。

富山北部高等学校　３年　島倉　恵美子

シンボルマーク

全体の形は、雄大な“立山”を表し、青色や緑色の富山の豊かな“海”や“山”を表しています。また、高体連マークを囲む“うねる”ような曲線は、インターハイに集う高校生の躍動感やエネルギーを象徴しています。

富山高等学校　３年　山木　玲子

スローガン

伏木高等学校　２年　田中　伸宜

入場行進

平成７年全国高校総体（鳥取県外４県）

総合ポスター

「集え若人　はばたけ未来へ」のスローガンのもと未来へ向かい栄光のRUNをする若者を頭上から描きました。画面の右としたには様々な競技を行っている選手たちを瞬間的にとらえました。

米子高等学校　２年　青砥　祥子

シンボルマーク

作者の意図

運動に必要なスピードとパワーの頭文字のＳとＰを組み合わせてＲをつくり、それを走っているように見せました。

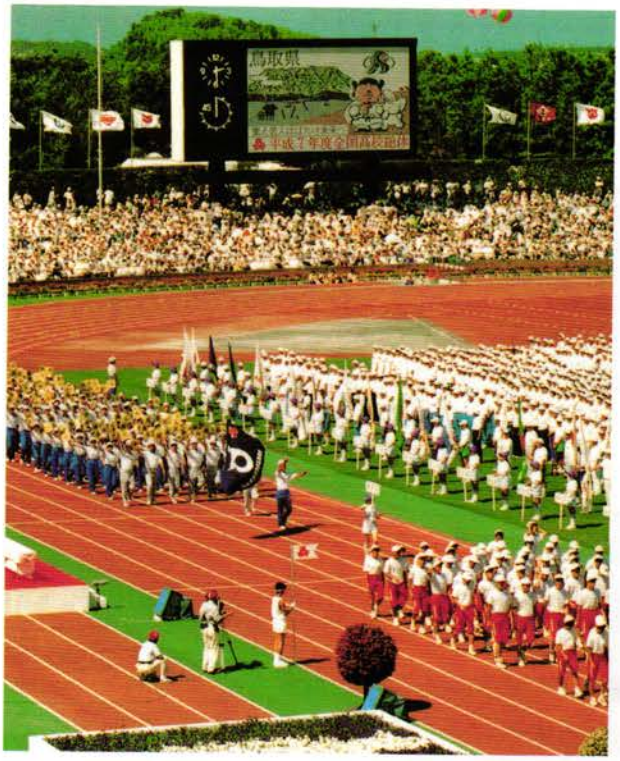
倉吉東高等学校　１年　佐々木　大輔

スローガン

集え若人　はばたけ未来へ

鳥取東高等学校　２年　言水　さつき

入場行進



平成８年全国高校総体（山梨県）

総合ポスター

画面の上部は陸上のスポーツ、下部は水上のスポーツを抽象的に表現した。中央には簡略化した山梨の地形を配し、そこにリニアのようなスピード感を感じさせる線を描いた。

県立石和高等学校　１年　折原　里奈

シンボルマーク

山梨県が、豊かな自然に恵まれた「山紫水明」の地であることを「富士山」と「流れるライン」で表現した。
この大会が、さわやかで若さあふれるスポーツの祭典となるよう「躍動感」と「爽快感」をイメージして仕上げた。

県立甲府東高等学校　１年　川合　正洋

スローガン

かけぬける夏 風を切れ 山梨で

県立甲府昭和高等学校　２年　丸茂　加奈

入場行進

平成９年全国高校総体（京都府）

総合ポスター

シンボルマークに表された「華麗さ」と「力強さ」、スローガンに込められた「さわやかさ」と、「熱意」、そして、若人のスポーツの祭典を新しい感覚でイメージしました。

府立西城陽高等学校　３年　吉田　淳一

シンボルマーク

大会と大会に関わった人々が、京都の地で未来に向かって伸びていく姿と、スポーツの持つスピード感や躍動感、参加者の情熱をKYOTOの「K」と大会の開催される９年度の「９」を使って簡潔に表現した。

府立亀岡高等学校　３年　米津　奈保美

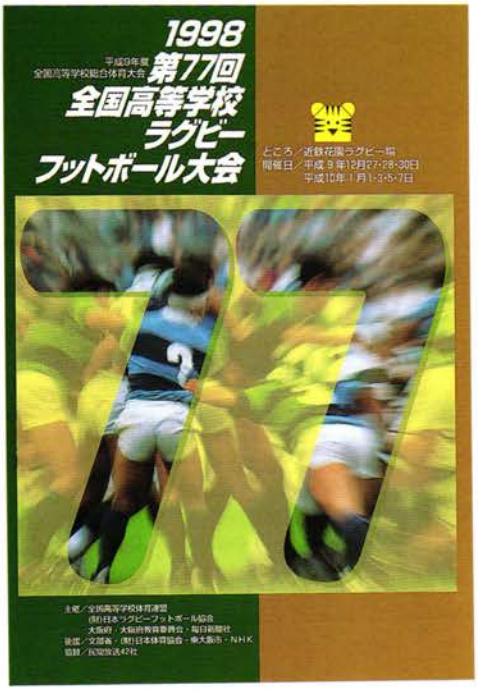
スローガン

風にのれ　君の声援　君の汗

府立園部高等学校　３年　山田　　晃

入場行進

ラグビー競技（大阪府）



スキー競技（北海道）

白い大地の札幌に
今、輝く軌跡が残る

スケート競技（青森県・福島県・宮城県）

駅伝競技（京都府）

全国高等学校総合体育大会開催地等一覧

年度	地域名		開催県	参加選手数	大会スローガン	スキー	スケート	ラグビー	駅伝
38	中	北信越	新潟県外13県	22,204人		福島（猪苗代）	神奈川（駒ヶ丘）	東大阪（花園ラグビー場）	大阪（金岡公園）
39	中	東海	愛知県外13県	21,480人		長野（志賀高原）	長野（蓼科城ノ平）	〃（〃）	〃（長居）
40	西	九州	大分県外5県	23,850人		秋田（花輪）	岩手（盛岡農工・高松池）	〃（〃）	〃（〃）
41	東	東北	青森県外3県	23,975人	若い力の国で	北海道（小樽）	栃木（日光細尾池）	〃（〃）	京都（西京極競技場）
42	中	北信越	福井県外6県	23,720人	明るく清くたくましく	新潟（妙高高原）	北海道（帯広緑が丘）	〃（〃）	〃（〃）
43	西	中国	広島県外1県	23,081人	強く正しく美しく	群馬（水上）	山梨（ハイランド他）	〃（〃）	〃（〃）
44	東	関東	群馬県外3県	23,448人	公正闘志友情	長野（飯山）	長野（美鈴湖）	〃（〃）	〃（〃）
45	中	近畿	和歌山県外9府県	23,337人	質実剛健	山形（米沢）	青森（八戸長根）	〃（〃）	〃（〃）
46	西	四国	徳島県外3県	23,825人	至純探求躍動	中止（兵庫・神鍋）	栃木（日光・宇都宮）	〃（〃）	〃（〃）
47	東	東北	山形県外6都県	23,913人	総体は明日の山形生む力	秋田（大湯）	岩手（岩手県営）	〃（〃）	〃（〃）
48	中	東海	三重県外3県	24,163人	燃えよ若人	青森（大鰐）	北海道（札幌美香保）	〃（〃）	〃（〃）
49	西	九州	福岡県外1県	24,193人	明朗友愛躍進	北海道（名寄）	山梨（ハイランド他）	〃（〃）	〃（〃）
50	東	関東	東京都外3県	23,953人	心と技と力	岐阜（流葉）	青森（八戸）	〃（〃）	〃（〃）
51	中	北信越	長野県外5県	24,014人	自然と友情と躍進と	岩手（田山・網張）	伊香保（日本ランド八戸長根）	〃（〃）	〃（〃）
52	西	中国	岡山県外3県	24,284人	友よ！清く仲よくたくましく	北海道（小樽）	岩手県営（あしがくぼ苫小牧）	〃（〃）	〃（〃）
53	東	東北	福島県外3県	23,628人	限りない力と豊かな心	秋田（鹿角）	長野（軽井沢）	〃（〃）	〃（〃）
54	中	近畿	滋賀県外5府県	22,431人	競おう技深めよう友情	新潟（妙高高原）	北海道（釧路）	〃（〃）	〃（〃）
55	西	四国	愛媛県外3県	22,367人	四国路を駆けろ若人意気と熱	富山（おおやま）	山梨（ハイランド他）	〃（〃）	〃（〃）
56	東	関東	神奈川県外7都県	22,693人	はばたけ青春広げよう友情	群馬（草津）	青森（八戸）	〃（〃）	〃（〃）
57	西	九州	鹿児島県	22,473人	南国に競える若人はぐくめ友情	山形（蔵王）	岩手（県営・厚生年金）	〃（〃）	〃（〃）

年度	地域名		開催県	参加選手数	大会スローガン	スキー	スケート	ラグビー	駅伝
58	中	東海	愛知県外3県	22,532人	走れ跳べ競え東海の空	宮城 (鳴子)	北海道 (釧路)	東大阪 (近鉄花園ラグビー場)	京都 (西京極競技場)
59	東	東北	秋田県外1県	22,748人	東北の緑に染まれ君の青春	福島 (猪苗代)	栃木 (日光・今市)	〃 (〃)	〃 (〃)
60	中	北信越	石川県	22,829人	石川の大地に流せ君の汗	長野 (白馬)	群馬 (伊香保)	〃 (〃)	〃 (〃)
61	西	中国	山口県外4県	23,167人	燃えろかがやけたくましく	岩手 (安代)	青森 (八戸)	〃 (〃)	〃 (〃)
62	東	北海道	北海道	23,383人	はばたけ若人北の大地に	北海道 (旭川)	北海道 (帯広)	〃 (〃)	〃 (〃)
63	中	近畿	兵庫県外5府県	24,210人	光る汗かがやく瞳いま青春	青森 (大鰐)	長野 (軽井沢)	〃 (〃)	〃 (〃)
元	西	四国	高知県外3県	25,850人	競え技結べ友情さわやかに	新潟 (塩沢・六日町)	岩手 (県営スケート場他)	〃 (〃)	〃 (〃)
2	東	東北	宮城県	25,194人	華ひらけ無限の力宮城の夏に	山形 (蔵王)	山梨 (ハイランド他)	〃 (〃)	〃 (〃)
3	中	東海	静岡県	24,979人	感動は"いっしょうけんめい"の熱い風	鳥取 (大山)	栃木 (霧降・日光池)	〃 (〃)	〃 (〃)
4	西	九州	宮崎県	24,947人	夢きらめいて宮崎の空の下	長野 (樽池高原)	北海道 (苫小牧他)	〃 (〃)	〃 (〃)
5	東	関東	栃木県外2県	25,558人	輝いて見せて下さい青春の汗—in栃木	群馬 (片品)	福島 (郡山他)	〃 (〃)	〃 (〃)
6	中	北信越	富山県	25,087人	立山にえがけ大きく君の青春	富山 (おおやま)	青森 (八戸長根他)	〃 (〃)	〃 (〃)
7	西	中国	鳥取県外4県	25,331人	集え若人はばたけ未来へ	秋田 (鹿角)	群馬 (伊香保)	〃 (〃)	〃 (〃)
8	東	関東	山梨県	24,770人	かけぬけろ夏風をきれ山梨で	岩手 (安比)	北海道 (釧路)	〃 (〃)	〃 (〃)
9	中	近畿	京都府	25,456人	風にのれ君の声援君の汗	北海道 (札幌)	青森 宮城 福島	〃 (〃)	〃 (〃)
10	西	四国	香川県外3県	25,590人	輝こう今この時を君たちと	山形 (蔵王) 青森 (大鰐)	長野 (長野・軽井沢)	〃 (〃)	〃 (〃)

全国高体連五十年史発刊に寄せて

第18代会長
福　田　満　雄

全国高等学校体育連盟が創立五十周年を迎えたのは、まことに喜ばしい。

私は、昭和63年に会長となり、5年間その任にあったので、創立四十周年から五十周年の間のちょうど前半期に、全国高体連の仕事に携わったことになる。

この時期には、第1回女子柔道と第1回女子駅伝が実施され、昭和52年の第1回女子空手の頃から顕在化した男子競技種目への女子進出が、一層顕著になってきた。他の種目では、高校生のプロ・スポーツ選手が現われ、話題にもなった。

反面、個々の高校でスポーツの部活動参加者の減少傾向がみられるようになり、全日制の生活指導担当者の会合では、部員が少なくチームを編成できないという嘆きがきかれ、定時制では、剣道を熱心に希望する一人の生徒のために、教員が剣道具をつけて指導する風景がみられた。

生徒の活動に、全国高体連内外のそれまで活動のなかった領域に進出していく側面と、裾野が浸食され始めたのではないかと懸念される側面の認められた時期であった。

組織では、東京都の教員であるため、都の教員定数や異動方針が適用される事務局長の人事と、その職務における全国高体連の仕事の過重な負担に課題があった。8か月にわたる委員会の検討によって、東京都高体連に基礎をおく現行体制の継続が望ましいとする基本認識に達し、事務局長の負担軽減のための予算の配慮と全国の協力が確認された。

これに基づき、市川三男都高体連理事長はじめ近県高体連理事長の事務局に出向いての事務処理、定時制部会や専門部による業務援助など、多くの自発的援助がみられた。課題が完全に解決されたわけではなかったが、この協力は事務局にとって大きな励ましとなった。

運営に関しては、日本経済が好況とみられていたせいもあって、組織の内外から民間活力導入を求める声が寄せられた。外からは、補助金・交付金の増額に期待せず、自ら調達する方途を探れ、内からは、全国高校総体開催県の負担軽減を図れ、というものであった。

内藤隆全国高体連理事長を中心とする委員会の人力によって協賛に関する規定が成り、実施に踏み切ったが、協賛が経済変動に左右され、かえって開催県が迷惑することがないようにという思いが強かった。

五十年は総括の大きな区切りである。これを機に全国高体連が新たな発展をとげるよう願う。

全国高体連の一層の発展を願って

第19代会長
久　野　　猛

全国高等学校体育連盟の50周年を祝う記念式典と祝賀会が盛大に挙行されましたことと、この記念誌が発刊されますことを、関係者の一人として大変うれしく思っております。

私は本年5月まで5年間、関係の多くの方々、とりわけ全国の高体連の先生方に支えていただき、本連盟会長の重責をどうにか勤めおおせました。河上一雄現会長をはじめ記念行事の運営にあたっておられる先生方のご苦労を思えば申しわけないことですが、私自身は仕事を終えたところで、周年行事に安心して参加できる巡り合わせとなりました。記念式典では、5年間のさまざまな場面が走馬灯のように想起され、万感胸にこみあげる中、あらためて高体連の事業の大きさ、大切さに思いをはせておりました。

私の在任中、高体連としてもっとも大きな機関決定事項が「学校教育法第1条に該当する学校以外の学校の全国高等学校総合体育大会参加」問題でした。平成5年度の春、秋の理事会にいたる諸会議で、この問題が徹底的に議論されたわけですが、実際にはもっと前から議論が続いていたのであって、この秋季理事会決定は、いわば議論が尽き、機が熟す状況のなかでの決定であったと考えております。この決定を受けて、平成6年度の富山県での高校総体から、1条校以外の学校の選手の出場が始まりました。

平成6年から7年にかけては「外国人留学生の参加制限」問題で揺れました。結局、原則20%以内とし、各競技種目ごとにその具体化を図ることで解決をみましたが、これは高校教育や高校スポーツの国際化の問題として、やはり大きな決定であったと考えます。

平成5年度に新規加盟が決定された「なぎなた」競技は9年度の京都大会から全国高校総体種目となりました。長年の懸案だった「陸上混成競技等を高校総体陸上競技に合流させる」件も、平成9年度に解決をみまして、おそらく平成13年度の熊本大会から実現の運びになるものと考えられます。

全国高校総体に企業協賛を導入する件は、すでに決定済み事項として引継ぎ、平成5年度に「日本コカ・コーラ」社からの大型協賛導入がスタートしました。

日本高等学校野球連盟との定期的な協議によって、「統廃合対象校に関する特別措置（対象校が合同で出場チームを作ってよい）」を、平成9年に高校野球と高校総体が足並み揃えて決断し

たことも、教育的な配慮として高い評価を得たところです。

さて、現時点で高体連の重要課題として残っている事項についても触れておきたいと思います。

全国高体連の事業は、夏の全国高校総体はもとより冬季の京都での高校駅伝、花園でのラグビー、およびスケート、スキー、さらには各競技団体との共催になる選抜大会、あるいは研究大会等の指導者研鑽事業まで高等学校スポーツ全般にわたる膨大なものです。この膨大な事業を抱えながら専従職員（これも、東京都の財政逼迫の中、あまり大きな声ではいえない状況にあります）が事務局長一人のみであることは、5年間を通して、私には常に最大の心配事でした。いったいあれほどの仕事量を一人に集中させてよいのでしょうか。だから私は、全国高体連の財団法人化を諸会議のたびに訴えてきました。平成5年度にスタートした高校総体への大型協賛の導入が、現在のところ1社にとどまっていることについても、高体連側の受皿整備が十分でない点が隘路になっていると、企業側から指摘されています。

スポーツが人間にとってさまざまな意味で必要不可欠な文化であることは、だれもが認めるところです。真に平和で健康的な人類社会を築くために、今後はスポーツにこれまで以上の成果を期待しなければなりません。スポーツ事業に対するニーズは今後ますます増大しますし、高等学校の生徒には競技スポーツ、生涯スポーツの両面からさらに大きな期待がかけられることになりましょう。高等学校で現在おこなわれている部活動形式のスポーツは、今後の地球規模に拡大する期待に応え続けられるのか、高体連はこれまでの方法でその中枢機関であり続けられるのか、これがこのところの国レベルのさまざまな議論のなかで、強く問われていることを高体連自体が自覚しなければなりません。議論は急展開します。ある日気が付いたら、高体連の命運が、スポーツを十分理解していない識者によって決定されていたという事態を危惧します。ぜひ、平成23年度以降の高校総体2巡目のあり方とともに高体連組織の今後のレイ・アウトに関しても内部議論を早めてもらいたいものです。

全国高等学校体育連盟と日本高等学校野球連盟、はた目にはなんともわかりにくい関係です。私は、この2団体のまったく別組織としての活動が許されてきたことに、これまでの高等学校スポーツの限界を端的に見るように思います。これも、だれに責任があるかといった戦犯さがしをするのではなく、21世紀の高等学校スポーツ構想の一貫として熟慮していただき、改善にむけての具体的な行動を一日も早く起こしていただきたいと考えております。

最後になりましたが、本誌の編集にあたられた先生方のご労苦に深甚なる感謝を申しあげ、全国高体連が50年の成果を踏まえてさらなる発展を遂げられますよう祈念し、ごあいさつとさせていただきます。

50周年記念座談会

全国高体連の歩みと今後への展望

1．日　時　　平成10年9月27日（日）13：00～

2．会　場　　星陵会館

3．参加者　　内藤　　隆氏（元全国高体連理事長）
小野田章二氏（愛知県高体連会長・全国高体連副会長）
粥川　　昌氏（全国高体連バレーボール専門部長・全国高体連副会長）
高田日呂美氏（全国高体連理事長・50周年記念事業実行委員長）
佐久間嘉宏氏（千葉県高体連理事長・50周年記念誌編集委員長）
大杉　一男氏（全国高体連事務局長）

4．司　会　　高田日呂美理事長

○高　田　本日は、大変お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。

【司会：高田日呂美氏】

全国高体連創立50周年を記念し、11月14日に開催されます記念式典と併せて、現在「全国高体連50年史」発刊の準備を進めています。その記念誌の中に、高体連の歩みを振り返る座談会を実施し掲載することになりました。

本日は「全国高体連の歩みと今後への展望」と題し、それぞれの立場で発言をお願いします。

それでは、自己紹介を兼ね各先生方のこれまでの高体連との関わりについて、最初に前回の40周年記念式典の際に理事長を務めていました内藤先生お願いします。

≪高体連との関わり・思い出≫

○内　藤　私は昭和63年から4年間、全国高体連理事長を務め、10年前の40周年記念式典に関わりました。

今思い起こしますと、その頃は昭和天皇のお加減が悪く、その秋に40周年を行うという時でした。高体連は、これまで皇太子殿下・同妃殿下に全国総体に御臨席を賜るという歴史的経緯がありましたが、天皇のご病気のこともあり40周年記念式典は質素に行ってはどうかということで計画していました。

しかし、当時の皇太子殿下並びに東宮の関係者から「社会に自粛ムードがあるが、予定通り実施してもらいたい」との御助言をいただき、40周年式典を当時の皇太子殿下・同妃殿下の御臨席を賜り開催しました。私自身は殿下の前で40年の歩みを御報告申し上げたという思い出があります。

このころから、国際化の波と高等学校の枠との解釈が大変拡大されるようになってきました。

一例としては、高野連が外国籍の生徒の登録を解禁したり、外国人高校の参加を認めた時期であり、高体連に対しても日弁連の人権擁護の立場の弁護士から、国際人権条約の観点から高体連の現在の登録は人種差別にあたる旨の質問書が提出されました。専門部やその上部の競技団体との調整が必要でありその対応に苦労しました。そこで、まず同一年齢にある1条校以外の学校、いわゆる専修学校・専門学校の高等課程の生徒をオープン化すべきではないか、ということで進めていきました。これに対し外国籍の生徒の問題は、上部の競技団体の御理解と専門部に慎重な対応をしていただきながら、時間的経緯の中でこれを受け入れるという方向となり、その後4～5年かかって現在の形になりました。

このころもう一つ問題となっていたのが、全国総体そのものに経費がかかり過ぎるということです。開催地の負担は当時の金額で10億円を越えるものでした。さりとて生徒の加盟費という浄財で組織されている高体連の費用だけでは賄えるはずがありません。このため全国総体の規模適正化ということが叫ばれていました。一方このことは、全国総体に出場することが夢で頑張っている生徒に対しチーム数や出場者数を減らすことになり、生徒の夢を奪うことになります。予算面では規模の適正化を図り、一方では生徒の夢の実現をかなえ、全国総体に出場できる生徒を増やしたい。その思いからアマチュアリズムが強かった高体連も、民間活力を導入し本当に高体連の活動を理解し支援してくれる民間団体から経済的援助を受け入れ、それにより開催地の経費負担を少しでも軽減していくということになりました。また、このころ高体連を法人組織にして、高体連として寄付を集め財政難に対応していくという考えもありました。その後、法人化の問題はいろいろな経緯の中で難しくなってきていますが、現在、お世話になっているコカ・コーラ等の協賛団体を募って協賛金などを導入したのもこのころでした。

このように、高体連が戦後の大きな変革期を迎えたのが40周年のころであり、あれから10年を経過し生徒の実態が大きく変化してきている中で、スポーツ欲求やスポーツ活動の在り方がまた変容してきています。高体連が持っている大きな目的と活動組織の活性化ということが、これから半世紀の大きな課題だろうと思います。

現在、私は私立の広域通信制高校に勤務しています。全国の通信制高校は約80校あります

が、全国高校通信制研究会（全通研）という組織がありその会長という立場で、定通制の全国大会にも関係しています。生徒達の変容を踏まえこの点も何とかしていきたいと考えています。

○高　田　内藤先生は現在、科学技術学園高校の校長先生を務めています。

それでは次に、昭和62年度から全国高体連バレーボール専門部の部長を務めています粥川先生お願いします。

○粥　川　今年でバレーボール専門部長12年目となります粥川です。私はこれまで家弓先生、福田先生、久野先生、そして河上先生と4代の会長とご一緒させていただいています。

私が専門部長になった頃は、バドミントンの遠井部長が22年、卓球の後藤部長が30年、体操の平岡部長が20年という先輩が活躍されていました。時代が変わり現在では私が専門部長の中では一番長くなりました。

家弓会長の時代にはバレーボールが新組織をつくりたい、いわゆる高パ連問題があったり、また高体連役員は学校に勤務している人に限るという定年制ができました。福田会長の時代には、バレーボールがプロ化を目指していたころで、今のVリーグに卒業前の生徒が出場したという問題で、これも大変ご迷惑をおかけしました。久野会長の時代には朝鮮高級学校の問題がありました。

最近、部活動を社会体育の方向へという話しが出ています。高体連がこれまで果たしてきたことを考えると、多くの専門部が活動の場を与えられ種目の基礎をつくってきました。今後、社会体育へ移行していく中で特定の種目だけが伸びていくということにならないかという心配があります。全体的なことを考えると、強化と普及の両観点から生徒にいろいろな夢と活動の場を与えていくという高体連の果たす役割は大きいし、中身は変わってもその精神は残し続けて欲しいと思います。

○高　田　次に愛知県高体連の会長であります小野田先生お願いします。

○小野田　昨年から愛知県高体連の会長を務めています時習館高校校長の小野田です。

私と高体連の関わりは、教員として赴任した豊橋東高校でソフトテニス部の顧問として始まり大分県、青森県など7回ほど全国総体に生徒を引率していきました。青森大会では、結婚されたばかりの当時の皇太子殿下・同妃殿下の御臨席をいただき、生徒にも大変な人気となっていました。また、青森県のねぶた祭りの時期でもありました。今でも当時の生徒との各地での思い出や共に一生懸命汗を流したことが印象に残っています。

高体連の会長として考えてみると、部活動の持つ良さは、技術面もさることながら人間関係にあると思います。若い高校時代に多くの友を得るという人間関係や自分自身の向上心、頑張り、挫折など多くの体験を得られます。部活動の果たす役割、意味にはこのようなすばらしいものがあると思います。

【小野田章二氏】

私の勤務している時習館高校は約240年前の藩校の時代からの学校です。学校の基本方針となる11箇条の定めというものがあり、その第1条に「文武両道に修行すべし」という意味のことが謳われています。これはどこの学校でも同じように、勉強もスポーツも一生懸命やるという人間として生きていくうえで重要な精神です。戦後いろいろな苦難の中から、高体連というすばらしい組織ができ、全国各地を巡る全国総体を開催しています。これは地方のスポーツ振興にすばらしい成果を上げてきていると思います。

しかしながら、教育課程上の位置付けが中途半端であり、もう少しはっきりした位置付けができないかということをいろいろなところで申し上げていますがうまい解決策ができていません。学校教育におけるスポーツの良さ、意義をこれからも声を大にして訴え続けていきたいと考えています。

○高　田　次に50周年記念誌の編集委員長でもあります千葉県高体連の佐久間理事長お願いします。

○佐久間　私は平成8年度から千葉県高体連の理事長を務めています。

高体連との関わりということでは、今回の全国高体連さらには千葉県高体連も50周年という大きな節目の年に、式典の開催や記念誌の

発刊ということでいろいろと勉強の機会を与えていただいたと思っています。

また私は剣道が専門ですが、昭和44年の高校2年生の時に千葉県館山市で、翌年の高校3年生の時には京都市で剣道の全国総体が開催されました。今振り返れば、昭和44年は群馬県を中心とする関東ブロックでの全国総体開催として、千葉県で剣道、弓道、卓球、ソフトテニス、女子バレーボールの5種目を開催した年であり、翌年の昭和45年は、近畿ブロックでの開催でした。現在の全国総体は1県の単独開催の傾向が多くなってきましたが、私たちの高校時代はブロック単位の開催であったということが、編集委員長という立場で高体連の歴史を勉強する中でわかったことです。

千葉県としては、先ほど申し上げました44総体の5種目開催、神奈川県を中心とした56総体では水泳、柔道、弓道、テニスの4種目を開催、さらに平成6年度に第29回全国研究大会を開催しました。また、将来的には平成17年度に全国総体を、平成22年には二巡目の国民体育大会が開催される予定となっています。

現在、千葉県だけの課題ではありませんが、「部員数の減少」「顧問の高齢化」「生徒数減少に伴う財源確保」等の諸問題への対応、さらには21世紀初頭に全国的規模の大会開催が予定さている中で、千葉県高体連として何を準備しどのような体制を整えていかなければならないかという検討をはじめたところです。

○高　田　それでは事務局長の大杉先生お願いします。

○大　杉　平成2年から全国高体連の事務局長を担当させていただいています。内藤元理事長はじめ歴代の理事長の先生方の御指導をいただきながら9年目に入ったところです。

全国高体連は非常に大きな組織であり、全国総体の開催では、各都道府県や開催県の実行委員会等の協力をいただきながら開催しています。

これまで印象に残っていることは、全国総体の経費負担で開催県に多大なご迷惑をおかけしてきた中での協賛金の導入や、内藤先生からお話のありました1条校以外の朝鮮高級学校の件でも、弁護士会との対応でいろいろ大変でした。

【大杉一男氏】

事務局としては各都道府県高体連が生徒数の減少等により財政的に苦しい中で現状の負担をしていただいていることに感謝しています。

これからは、法人化や部活動の社会体育移行などの大きな問題に対応していかなければなりません。事務局だけでは解決できないことも出てきますので御協力をお願いします。

○高　田　ありがとうございました。

これまでの先生方の話と重複しますが、現状を見ますと、朝鮮高級学校の大会参加に始まりました1条校以外の学校の大会参加については平成6年から実施をしていますし、外国人留学生についても平成6年から3年くらいをかけて各専門部で基準を作り大会に参加しています。

また、全国総体の規模適正の問題については現在の状況の中で平成22年までの開催地が内定しています。これに合わせて、文部省が来年度から学校の対外運動競技の基準である、いわゆる「54通達」を撤廃したいという意向がありますので、規模適正との関連がでています。

課題としては、財団法人化や外部指導員の部活動導入の問題、また統廃合対象校の合同チームでの大会参加は昨年度から実施をしていますが、それ以外の合同チームによる大会参加の問題などが大きな問題だろうと思います。

現在、学校部活動の発表の場としての高体連の役割、その基本となる部活動の在り方がいろいろな動きをしています。全国校長会の調査では、高等学校教育の中での部活動の果たす役割を認めている校長先生が多い一方、部活動の社会体育への移行や教員の勤務対応についての意見もあります。また、部活動の位置付けをみると、教育課程審議会でも少し触れていますが、現在のところ学校教育活動ではあるが教育課程内の活動としての位置付けはありません。

このような点について、校長先生の立場で小野田先生いかがでしょうか。

≪部活動の位置づけについて≫

○小野田　学校教育活動の中における部活動の占める割合は大きく、多くの生徒や保護者も期

待をしています。社会体育への移行という意見もありますが、これまでの日本における部活動の果たしてきた役割を考えると一概に良いとはいえないと思います。現在、中央教育審議会でも「心の教育」ということが指摘されています。今、生徒達を取り巻く環境の中で心の教育をどこでするのかということを考えた場合、部活動に期待する面が大きいのではないでしょうか。生徒も保護者もそこに期待し、人気が高いのだと思います。反面、それを推進していく高体連は指導者も増えない、生徒も減少する、経費もかかるなどの問題があります。これは時代の変化をみて各都道府県で検討していることと思います。愛知県でも、今年から少子化の問題や大会運営のスリム化などの検討に入ったところです。

私の根底には、やはり部活動を学校教育の中でしっかり担っていきたいという考えがあります。もちろん、地域社会にサポートしていただいたり、大会運営で変えるべきところは変えるという視点を持ちながら、進めていく必要があると思っています。

○高　田　これから先を見通した学校の中での部活動の在り方という観点で内藤先生いかがでしょうか。

○内　藤　20年前、対外試合の広域交流についての文部事務次官通達として「54通達」が出され、現在各専門部が実施している春の大会は競技団体の名前を前面に出した形態で実施してきた経緯の中で、競技力向上につながる成果はありました。この通達が撤廃されるという話を伺い、そのような規制緩和の時代が来たのだなあという感じがします。

現在の学校でのクラブ活動や部活動は、現行の教育課程ができた時代には相当重視された形で位置付けられたにもかかわらず、他に転用されている場面がないわけではありません。今後完全学校週5日制となり、部活動がどんな形で展開されるのかを考えた場合、先生方の勤務状態とも深い関わりがでてくるのではないでしょうか。今は、好きでやっているという状態で生徒達のために先生方の奉仕していただいて成り立っているという部分がないといえなくもありません。

これからの部活動は、高体連を支えている各運動部の活動が教育課程に基づいて行われ、高体連の活動も評価されることがのぞましく、これは時代が変わろうとも不易のものであると考えています。教育活動という枠の中で行っているから効果があるというものはたくさんあります。教育課程の運用という時流に乗って考えた場合、その他の科目として単位認定をするという考えもあるのではないでしょうか。高体連の活動が支えているということを理解してもらうことが大事だと思います。生徒は、苦しい思いも好きであるという支えで礼儀を覚え、技能を高め生きる力を養うなどの大きな教育効果を持っている部活動は、1年に何単位か、3年間続ければ5単位でも10単位でも認定していく、ということができれば生きる力を高めるということの考え方、目安として大変有効であると思います。

【内藤　隆氏】

また、指導者の面で外部指導者の導入という考えもありますが、やはり日常生徒達と接して慣れ親しんでいる先生が理想だと思います。その場合、指導する先生方の奉仕だけであっていいのか、それなりの処遇改善も必要ではないでしょうか。学校では定数法により教員の定数が定められている中で、教員の仕事の中に文化系も含めた部活動なり、本当の生きる力を養う学習場面を創出できるような指導も、仕事量としてカウントしていくことも定数法改善の刺激となると思います。

私は高体連活動の根底になっている部活動は、生涯学習・社会体育の部分もありますが教育活動の中に位置付けていくことが衰退させない大きな支えであるし、その条件整備として教育課程の中でのしっかりとした位置付けと指導者を認知する処遇の検討が大切だと思います。

○高　田　運動部活動の位置付けについては、教育課程審議会や保健体育審議会に対して全国高体連では、教育活動として教育課程の中にはっきりと位置付けて欲しいという要望を出しています。

今年の4月から学校外活動のボランティアなどの単位認定があり、スポーツ活動も単位認定

ができることになっています。そこで問題となったのは部活動との整合性です。学校で行っている活動の方が単位を認定するのに適切ではないかという意見もあります。学校内で果たす役割を考えると、内藤先生の意見も貴重な意見だと思います。

小野田先生、校長会の中でも部活動についてさまざまな意見があると思いますが。

○小野田　どこの校長先生も日頃「文武両道」を奨励していると思いますが、実際学校ではどうかと考えた場合、部活動に対し教員はサービス、生徒の希望でやむなく顧問になるといった面が見られます。それに対し校長として積極的な対応ができないという現状があると思います。今の話のように学校外の単位認定は真剣に考えられていますが、学校内の一番身近な部活動の単位認定という考え方も教育的意義があるのではないでしょうか。

また、校長会でも部活動を指導する教員の処遇改善の問題は以前から話題となっていますが、先ほどの定数法などいろいろな課題があり、具体的な対応策までには至っていません。

≪部員の状況について≫

○高　田　もう一つの生徒の問題として「部員数の減少」があります。全国高体連への登録数は平成4年の約165万人が最高で、平成9年が約135万人です。この減少の割合は全体の生徒数の減少とほぼ同じということがいえると思いますが、今後はそれぞれの学校での部員数の減少は避けられません。先ほどの位置付けとの問題と合わせ、粥川先生いかがでしょうか。

【粥川　昌氏】

○粥　川　これからの部活動を考えると、現在高体連の大会では、引率教員の制度を設けていますので、技術指導に関しては外部の有能な指導者を得られるならば学校で検討していただき導入しても良いのではないでしょうか。実際に指導する先生がいなくなると部が存続しないという現実があるので外部指導員を導入することにより部活動が活発になることが期待できます。また、地道に活動しているが高体連の定める基準に達していないため加盟できない種目があると思います。準加盟のような形でこれらの活動を育てていくことも大切だと思います。

○高　田　外部指導員の導入は大変重要な課題であり、これこそ地域のスポーツ指導者との連携や人材バンクの情報提供など、これから学校が取り組みやすい状況になれば学校や教育委員会として受け入れやすい体制をつくっていけるのではないかという見通しを持っています。

県理事長としてそれぞれの学校での活動を直接見ている佐久間先生、これまでの課題を含めていかがでしょうか。

○佐久間　千葉県だけの問題ではなく部員数の減少、顧問の高齢化ということが大きな問題だろうと思います。

部員数については、昨年の千葉県の調査によると、県下全体の生徒数減少の割合よりも部員数減少の割合が大きいという調査結果が出ました。これは、単に生徒が減少したから部員が減少したという状況ではないことになります。この原因を探り研究していく必要があるということを痛感しました。

また顧問については、これまで若手指導者が少ない、顧問が高齢化してきている、ということを多く耳にしていました。では実態はどうなっているのかというと具体的な統計資料がありませんでした。そこで千葉県では平成8年度に各専門部と協力し、加盟校の顧問調査を実施した結果、運動部顧問の平均年齢が38.46才であることがわかりました。この数字をどのように捉えるかは論議のあるところだと思いますが、このことに加え新規採用教員も少ない中で、確実に毎年平均年齢が上がっていく状況です。

先ほど申し上げました平成17年に全国総体を控えている千葉県では、部員や顧問の実態を把握し課題を認識する中で、将来に向けた運動部の在り方を研究しているところです。

このような調査・研究は各都道府県でも研究部の組織などで行っていると思いますが、そのデータを持ち寄り全国高体連として全体で研究し今後の方向性を探っていく、またその体制を整えていく必要があると思います。

○高　田　部員数の減少ということでバレー

ボールではいかがでしょう。

○粥　川　バレーボールでは男子が減少してきている実態があります。女子はまだ人気スポーツのひとつになっていると思います。

○高　田　部の参加する割合は減少していないが、ひとつひとつの学校の部員数が減少しているという実態があります。

○粥　川　試合に出場できるぎりぎりの人数の学校が多くなっているのではないでしょうか。

○高　田　これからの高体連を考えると部員数の減少ということが大きな問題となってきますが、全国定通大会では単独の学校ではなく、都道府県で代表して参加している種目があると伺いました。部員数の減少ということでの対応はいかがでしょうか。

○内　藤　定通部会でもこの点に関しては悩んでいます。今年5月現在の在籍生徒数は通信制が約16万人、これに対し定時制が約10万人であり、通信制と定時制の生徒数が逆転しています。これにより定時制の統廃合ということが避けられない流れとなってくると思います。東京都ではチャレンジスクールというような単位認定に挑戦し勉強できるフルタイムの定時制がつくられようとしていると聞いています。

現在は、統廃合がはっきりしている学校は合同チームで良いという緩和措置をとっていますし、都道府県でも選抜チームでも良いということにしている種目もあります。その意味では定通大会も過渡期になっています。また、通信制の場合は毎日登校してくる生徒ではありませんので、学校として出場しても実際には高校以外の他の所属というチームもあり、力の差が歴然としていることもあります。また、県予選を経ずに県代表として出場というケースも考えられます。そうなると全国大会の位置付けが揺らいできますし、何とか工夫し改善しなくてはいけないと思います。通と定の合同チームはどうかという意見もあります。来年からバドミントンが全国大会の種目となりますが、遠くない将来このようなことも認めて行かざるを得ない方向になるのではないでしょうか。

このようないろいろ課題を抱えていますが、全国大会に出場することが高校生としての励みや生き甲斐に役に立っているということを考えれば大会の火は消してはいけないと考えています。

≪財政運営について≫

○高　田　財政状況を考えると、各都道府県により違いがあると思いますが、高体連の財政運営もこれからの課題だと思います。

愛知県が都道府県の加盟生徒数では全国で一番多い訳ですが、財政状況について小野田先生いかがでしょうか。

○小野田　財政面を考えると、生徒が減少している中で常に値上げという問題を抱えています。愛知県では学校から全員分として一律に徴収するものと、県大会などの参加料とがあります。価値観が多様化している状況で、学校からの一律のものを値上げするということをたびたびお願いするわけにも行きません。そこで値上げを考える前に、現在のものをどれだけスリム化できるかということが大切だと思います。生徒数が減少している中で今までと同じではいけません。生徒に不便をかけない範囲で、どのような点がスリム化できるのかを検討し始めたところです。お金がないから値上げをしたいということを繰り返すばかりではこれからは進んでいかないと思います。

○高　田　千葉県でも同じような財政的な問題を抱えていますか。

○佐久間　千葉県では在籍生徒数に応じた学校規模負担金と大会に参加する部数による部負担金の2本立てで加盟校にお願いし、高体連の財源の大きなウェイトを占めていますので、生徒数の減少や部員数の減少が直接高体連の財源に影響してきます。

【佐久間嘉宏氏】

学校規模負担金では運動部への加入を問わず一律に在籍生徒数による負担金となっていますのでこの趣旨を理解していただくことと、生徒数の減少による財源確保のために値上げという問題を抱えています。これは事務局だけでは対応しきれない問題ですので、昨年専門部長の先生や校長先生をメンバーとする「基本問題検討委員会」を設置し、財源問題を含め各種の課題について検討をお願いしている

という状況です。

○高　田　専門部では、都道府県の負担や競技団体に納めるもの、また大会運営に関わる部分もあります。専門部として財政的な問題はいかがでしょうか。

【高田・粥川両氏】

○粥　川　大会運営に必要であるので加盟費以外に参加料を徴収し、また参加料を値上げして運営している実態があります。参加料を支払い大会に参加しますが多くのチームは1回戦で負けていきます。これからはこのようなチームのためにも試合方法の工夫が必要になってくるのではないでしょうか。社会体育では活動場面の多くあるものに目が向くという傾向がありますので、専門部でも頂点のチームだけを考えるのではなくできるだけ全体のチームに目を向けていく必要があると思います。

大会にかかる経費では、チームとして、また個人として負担する経費があります。チームの場合も学校で、あるいは個人で負担し合うというケースもあります。1チーム分を少人数で負担するということもあり、一人の負担が大きいことが考えられます。

競技団体の関係では、各都道府県競技団体と中央の競技団体に納めるものがあります。中央競技団体では財源の中心となるのが高校生であり、かなりの費用負担を担っていると思います。

○高　田　大杉先生、全国総体の場合は、昨年の京都の大会で地元での運営費として約17億円でしたか、かなりの額です。法人化の問題や財政的に厳しい状況にあると思いますが、事務局長として現在の課題についてはいかがでしょうか。

○大　杉　全国高体連からお願いしています各都道府県の負担金はここ10年間値上げせずにきています。生徒数の減少等の厳しい財政状況の中で協力いただいています。

全国総体は、都道府県負担金やコカ・コーラからの協賛金、国庫補助金、ＮＨＫ等の協力により今のところは何とか運営しています。協賛金については、本部としてコカ・コーラ以外に1社でも2社でも開拓をしていきたいと考えています。

≪54通達の撤廃について≫

○高　田　次にこれからの課題の中で、文部省の次官通達としていわゆる「54通達の撤廃」についてお願いします。

これはかつて高校生の全国レベルの大会を2回まで認めることになり、春を中心とする選抜大会と全国総体になりました。これを文部省の規制緩和という流れの中で、来年度から撤廃するということがでてきました。文部省が枠を決めるのではなくそれぞれ主催する中体連や高体連で基準を決めなさい、ということです。現在この問題は基本問題検討委員会に諮っている段階で、今の内容を大きく変更する意見は出ていません。ただ委員の意見では文部省の規制緩和というが規制というよりは各都道府県で全国総体に出場するというよりどころになっているという意見もあります。

このようなことを踏まえ54通達の撤廃について内藤先生いかがでしょうか

○内　藤　ガイドラインとしての54通達は、当時としては強制力をもったものとして存在してきていました。これが撤廃されることにより何か大きく変わるかというと、私はあまり変わらないような気がします。今の高体連活動の中で、撤廃されることで新しい活動を企画・運営するだけの余裕がないと思います。現状で精一杯ではないでしょうか。

むしろ、それぞれの団体の独自性を出すためにはこのような規制をなくして各団体の体力・体質に合わせて目的達成のためのガイドラインを定めていく、ということだろうと思います。

○小野田　学校としては全国大会は年2回ということでわかりやすいし、高体連の大会ということで信頼し他の大会とも区別しやすいということがあります。

○高　田　撤廃されたときに県内の大会が増えるとか減るということが予想されますか。

○小野田　当面は大きな変化はないと思います。

○高　田　学校では大会に参加する場合に、高体連が関係しているということで先生の引率な

どでひとつの基準になっています。これがなくなった場合に何か変化があるということはないでしょうか。

○**小野田**　各競技団体が開催している大会を高体連でやるという余裕がないと思います。

○**高　田**　粥川先生、専門部の立場ではいかがでしょうか。

○**粥　川**　私も大きくは変わらないと思います。全国高体連では共催のできる大会が限定されていますし、全国総体と選抜大会、これ以上に増えることはないと思います。

○**佐久間**　県レベルでは大きな変化はないと思います。それが全国高体連としての対応や変化が出てきた場合に関係してくるのかなという感じです。

≪合同チームの大会参加について≫

○**高　田**　次に、統廃合対象校の合同チームでの参加については平成９年度から認めていますが、それ以外の合同チームの大会参加についてはいかがでしょう。ラグビーでは部員の減った学校同士が合同チームとして、全国大会につながらない県内の大会として参加を認めるという例が大阪府や神奈川県にあります。今後、このような動きは他の専門部にも影響してくると思います。専門部として粥川先生いかがでしょうか。

○**粥　川**　現在の学校対抗制では難しいと思います。大阪府のラグビーをみると、約180チームありますが、15人の大会に出場できるのは約65チームとのことです。そこで10人制や７人制、また合同チームでゲームを行っていますが、全国大会に導入ということは、まだ時間をかけて検討していかなければならないと思います。

○**高　田**　春の全国理事会では、都道府県の大会ではできる範囲から実施して下さいということで、その様子を見ながら全国高体連でも考えていくということになっています。

○**佐久間**　千葉県でもラグビーでは10人制や７人制のゲームを行っています。部員数の少ない学校の生徒にも大会参加の機会を与えるということで専門部で検討して行っていますが合同チームの参加はまだ認めていません。

今後は、特にチームゲーム形態の専門部から合同チームでの大会参加の要望が必ず出てくると思います。部員が少なくとも毎日一生懸命練習に取り組んでいる学校では切実な問題ですので、この実態を把握しながらどのような大会参加の形態が可能なのか、そして基準やルールづくりを各都道府県や専門部で検討していくことが必要だと思います。またこの問題は、高体連の検討に加え加盟校や校長会などの共通理解、県教育委員会との調整も必要だと思います。

○**高　田**　保健体育審議会の答申の中では、大会参加について高体連の柔軟な対応を、ということがいわれています。また文部省の「中学生・高校生のスポーツ活動についての調査研究報告書」でも合同チームに触れており、いわゆる勝つための合同チームではいけない、近隣の合同チームということをいっています。実際に合同チームの大会参加となった場合にはこの辺の基準が大事になってくると思います。

【左より小野田・大杉・内藤各氏】

○**小野田**　学校の校長先生からは「いつから合同チームで参加できるのか」ということで関心が高い問題です。部員の少ない部が現実にたくさんあります。基本的に検討していかなければいけない問題を含んでいますが、できるだけ早く県としても対応を検討していかざるを得ない課題です。

○**内　藤**　全国総体はこれまでの歴史的経過の中で学校チームでの競技力の発表の場としての位置付け、平たくいえばチャンピオンスポーツの大会であると思います。これが加盟数の減少やスポーツ嫌いなどの実態を見ていると、現行の方向を変えるか変えないかという意志決定をする時期にきていると思います。その意志決定をする時に考えなければならないのは、まず加盟都道府県での高校総体、この大会の方向が変わってきている状況があるならば、いち早く全国高体連としてこれを吸い上げてその実態に基づいて全国高体連の方向をどのようにしたらよいかというステップで考えていくことが大事だ

と思います。

つまり、全国高体連が何か新しい形に変えて加盟都道府県に影響を及ぼすということではなく、むしろ加盟都道府県総体の変化が全国高体連に吸い上げられて変えていくという順序で検討していく必要があると思います。今からしかるべき機関で、将来構想はどうあるべきかということが、51年目からの大きな宿題としてあると思います。

≪今後への展望≫

○高　田　それでは最後に、これからの高体連に対する期待や運動部活動の在り方などについてご意見を伺いまとめとしたいと思います。

○佐久間　部員数の減少や指導者不足などを考えると、これまでの増やしていこう、足していこうという膨らみ思考から、これからは何を整理し、何を残しどのような形にするかということだろうと思います。部活動や高体連についてもこのような視点で考えていく必要があるのではないでしょうか。

また今日、生徒の個性化・多様化という中で部活動離れということがいわれていますが、高校期の生徒の持っている、何かに一生懸命取り組む、目標を持って突き進む、汗をかいて体を動かすなどのこの年代特有なもの、本来的な欲求は大きくは変化していないのではないでしょうか。指導する側として、これをどのようサポートし伸ばしていていくかということが求められていると思います。

○粥　川　これからも高体連は続いていって欲しいし、生徒や顧問にとって多くの思い出がつくれればと思います。

今、大学では体育が選択制になるという時代であり、これからの高体連も大きな変化が予想されますが、高体連が高校生にとって励みになる場であって欲しいと思います。

○小野田　今、価値観の多様化などがいわれていますが、スポーツの効用や良さはこれからも変わらないでしょう。高校だけでスポーツが得意になるわけではないので、小さいときからスポーツに親しむ、楽しさや感動を覚えさせる体験などが大切であり、基礎・基本の指導というか、このようにすれば上手になるというような積み上げ、小・中・高の連携が大切だろうと思います。

日本は今、世界に例を見ない高齢社会を迎えています。医療技術の進歩などもあると思いますがこれに多少なりともスポーツや高体連も寄与しているのではないでしょうか。これからもスポーツの持つ良さを、小・中・高が連携し地域とも手を携えて訴え続けてくことが高体連にとっても、また一人一人の生徒を預かる学校としても大切なことだと思います。

○内　藤　高体連に関わったものとして、高体連が将来にわたり継続・発展して欲しいと願っています。

そのためには、まず高体連自身がいかに財政基盤を確立するかということがこれからの大きな課題です。

二つ目は、教育活動に組み込まれたスポーツ活動としての位置付けです。外部指導者の問題もありますが、基本は学校体育の延長の中で高体連が活動していくべきだと思います。なぜならばスポーツは健全な心や体を作っていく反面、やり方によっては危険を伴うという側面もあります。契約や保障が重要視される今の社会では、万が一の際、指導者や活動母体に対して保障を求めるという傾向が強くなってきています。安心して活動できるということが、教育活動の一環として行うことの意義だろうと思います。教育活動であるが故に学校設置者も保証し、高体連も運営面で生徒の安全を考えながら目的を達成していくという、教育活動として位置付けられた団体であって欲しいと思います。

三つ目は、高体連活動は生徒の活動の場を保証するだけでなく、指導者の研修の場としても研究大会などをもっと活用していく必要があると思います。高体連の構成メンバーは一教科にこだわらない指導者の集まりです。その意味では本当に広い視野に立って生徒を指導していると思います。今話し合われた多くの課題について、研究大会でテーマを絞りいろいろな指導者に提言してもらう、そして高体連の役員会に取り上げてどうあるべきかを真剣に考えることが、高体連を発展させていくための大きな推進力になると思います。

今後もさらに高体連が発展することを心から願っています。

○大　杉　事務局としては、加盟都道府県や専門部、それに日常生徒の指導をしていただいて

いる多くの先生方に支えられ、御協力いただいていることに感謝申し上げます。将来に向けてさまざまな課題がありますが、今後も御指導・御協力をいただきながら対応していきたいと思います。

○高　田　長時間にわたり、各先生方から高体連に対する大変熱い思い、貴重な御意見をいただきありがとうございました。

私は昭和38年に教員になったときに勤務した学校が新設校であり、ボールもないしゴールもない、ルールも良く知らないという生徒でチームを作って試合ができるようになった、負けてばかりでしたが初めて試合に勝ったときに涙した生徒のあの目の輝きを今でも忘れることができません。厳しい練習の中でお互い本当の心の交流が生徒同士でもあったであろうし、私自身も部活動の中で生徒達に教えられた、教師として成長させてもらった部分がこの部活動にあったと思います。その後、大会の審判を手伝い役員をやったりということでこれまで高体連に関わりを持たせてもらってきました。

これからの高等学校教育の中で、部活動の占める役割や高体連の果たす責任はさらに重要になってくると思います。時代の変化に対応しながら高等学校教育の中にしっかりと位置付けて高体連がますます発展をして欲しいと思います。それには全国の多くの先生方の知恵をいただきながら、まとまった行動をしていかなければなりません。これからも先生方のご助言をお願いしまとめとさせていただきます。

本日はありがとうございました。

座談会を終えて
前列左より高田・内藤・小野田、後列左より大杉・粥川・佐久間の各氏

都道府県高等学校体育連盟の歩み

北　　海　　道

《事務局》
〒007-0810 札幌市東区東苗穂10条1丁目2—21
道立札幌東陵高校内
TEL 011（792）2060
FAX 011（792）2060

創立年月日：昭和23年5月20日

加盟校数		352校
専門部数		31専門部
加盟部数		5,514部
部員数	男子	45,274名
	女子	27,267名
	合計	72,541名

年度	会長	理事長	記事
23	北浦延次郎	北浦延次郎	北海道高等学校体育連
24	〃	〃	盟発足
			(9支部·17専門部)
25	山口　末一	山口　末一	
26	〃	石栗　英治	空知支部が南北に分離
			柔道専門部
27	〃	〃	機関誌発行
			自転車専門部
28	〃	〃	旭川支部が旭川·名寄
			に分離
29	〃	〃	第9回国民体育大会
30	藤田　範也	大谷　藤松	ヨット、弓道、剣道
			専門部
31	〃	〃	
32	〃	〃	10周年記念式典
33	和田　數雄	富田　友治	スケート·帯広
34	〃	〃	ハンドボール·函館
35	小山田昌康	木村　季吉	柔道·札幌
36	〃	〃	庭球、ボクシング、
			登山専門部
37	萩原　獅郎	二瓶　康典	スケート·帯広
38	〃	〃	
39	山崎　吉松	石黒　英治	
40	〃	〃	
41	吉村　忠幸	木村　季吉	スキー·小樽
42	坂本不二男	〃	20周年記念式典
43	上野　秋造	鳴海　哲夫	
44	〃	〃	
45	真木　　通	遠藤　　忠	

年度	会長	理事長	記事
46	真木　　通	遠藤　　忠	
47	齊藤　国夫	水口　寅雄	ウエイトリフティン
			グ、ボクシング専門
48	〃	〃	スケート·札幌
49	長浜　英作	鳴海　哲夫	スキー·名寄
50	〃	〃	日米·柔道親善
51	〃	〃	日米レスリング
52	〃	〃	30周年記念式典
53	〃	〃	日韓ハンドボール
54	〃	〃	
55	赤塚　利國	梅津　幸敏	日加レスリング
56	〃	〃	
57	仲川　　翠	〃	62総体開催決定
58	〃	〃	〃 準備委設立
59	〃	〃	〃 連絡会議開催
60	青木　　弘	〃	
61	〃	〃	
62	〃	〃	62総体開催
63	安井　友博	工藤　晃司	40周年記念式典
			高体·野連分離
元	山下　克己	〃	国民体育大会
2	〃	浅野　喜圀	
3	遠藤　　隆	〃	研究大会(札幌)
4	〃	〃	スケート·苫小牧
5	日野　嘉輝	〃	
6	〃	〃	
7	〃	〃	
8	金子　盛夫	〃	スケート·釧路
9	〃	西谷内隆幸	スキー·札幌
10	作田　昌明	〃	

1 沿 革

(1)昭和23～32(黎明期)

九州、四国を合わせた面積を有する広大な地ゆえ、発足当時より支部制を敷き、9支部17専門部で北海道高等学校体育連盟が発足した。

この時期は組織の基盤整備に当てられたことが伺える。昭和26年空知支部が南北に分離、28年には旭川支部が旭川、名寄に分離し現在の11支部が完成した。また、専門部も26年柔道、27年自転車競技そして30年にはヨット、弓道、剣道と加盟が続いた。

一方、こうした活動を記録に残すべく「機関誌」が27年に創刊された。途中何度か休刊に追い込まれそうになりながらも、多くの方々の努力により46号として現在も続き、貴重な資料となっている。

加盟生徒数は30年には200校10万人を超える。この間、札幌北(男子体操) 札幌南(男子バスケットボール) 北海(男女羽球、相撲) 小樽千秋(ボート) 苫小牧東・苫小牧工業(アイスホッケー)等の全国優勝校がある。

(2) 昭和33～42(成長期)

36年軟式庭球、ボクシング、登山が新たに加わるとともに、この期は全国大会の開催を積極的に受け入れる体制が整ってきた時期である。33年スケート(帯広)、ハンドボール(函館)34年スキー(小樽)35年柔道(札幌)そして37年再びスケート(帯広)のそれぞれの大会を開催している。全国高体連の一翼を担っていたことが伺える。

戦後ベビーブームの世代が高校生期にあたり、加盟生徒数も42年には354校25万人を超える数となった。この間、スキーの10連勝、スケート男子の9回もの全国制覇がある。冬季種目の圧倒的強さは堅持しているものの夏季種目については、北海(ラグビー) 札幌東(女子バドミントン)小樽千秋(ボート)が気を吐くのみで、機関誌巻頭言に会長が指導者、選手へ檄を送る記述が目立つようになる。

(3) 昭和43～52(充実期)

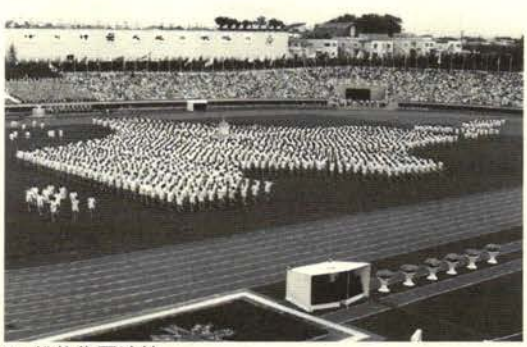
ウエイトリフティング、フェンシングが加わり27専門部を擁する体制になる。発足20年を経過し名実ともに充実した道高体連と言えるのかも知れない。道内だけでなく、積極的に海外との交流を図る時期を迎えた。柔道、レスリング、ハンドボールが日米・日韓の親善試合を展開し、また、アイスホッケーもスウェーデンと交流試合を実施している。 この10年間も残念ながら冬季種目を除けば、低迷の連続と言える。小樽商業・函館水産(ボート)、札幌第一(弓道)苫小牧東・苫小牧工業・駒大苫小牧・日大北海道・帯広大谷・白樺学園(スケート)北照(スキー)等の優勝校がある。

(4) 昭和53～62(発展期)

'62総体に向けた10年間であった。北海道で完全実施することについて、13代会長長浜英作氏が加盟学校に開催を呼びかけるとともに関係機関へ働きかけを行い、その基盤作りに奔走する。その後を引き継いだ14代会長赤塚利國氏が55年誘致申請、15代会長仲川翠氏が57年に開催申請へと準備が着々と進んでいくことになる。'62総体を挟んで60年全国中学、64年国体というそれぞれのトップレベルの大会を開催することが決定し、北海道スポーツにおいて最も充実した輝かしい時期であった。16代会長青木弘氏が60年に就任するとともに、大会スローガン「はばたけ 若人 北の大地に」が全道全ての高校に掲げられ、一段と熱気が高まった。

「皇太子殿下、同妃殿下のご臨席のもとに挙行された総合開会式及び集団演技、補助役員として大会を支えた全道の高校生、同じく高校生が丹精込めて咲かせ、各会場を飾った花々・・・一人一役の合言葉が見事に実を結んだ」と青木会長は感慨深く述べている。

本道選手団も、東海大四(バレーボール)の優勝、網走向陽(ボート)、札幌大谷(フェンシング)等の準優勝があり、また冬季においても駒大苫小牧・白樺学園(スケート)、和寒(スキー)の優勝があり、個人種目の活躍を含めると、発足以来最高の成績を残している。



62総体集団演技

2　10年の歩み

昭和63～平成9

この10年間に5代の会長がそれぞれの課題を解決すべく尽力している。ここに道高体連機関誌巻頭言をもとに、辿ってみることにした。

(1) 63年　17代会長安井友博氏が就任する。成功裡に終わった62総体の後であり穏やかに推移すると思いきや、高体連と高野連との分離問題が残っていた。北海道では高体野連として一人の会長が兼務してきた。しかし、それぞれの加盟校数の増加などにより業務量が増大したこと、また、会長が兼務しているのは当時北海道と愛知県のみであったことなどから、安定したこの時期に分離独立をすることで合意したものである。40周年記念事業終了後新たな道高体連として歩み始めた。

(2) 平成元年～2年　18代会長山下克己氏が就任する。62総体後の各種全道大会に出席しての感想を次のように述べている。

「一方では勝利の栄光を渇仰し、また、一方では生涯に亘る趣味の発見を目指す等々、ますます複雑に多様化するであろう個々人の要求に応えつつ、スポーツ活動を通じ、生徒一人ひとりが充実感が得られる教育活動を達成する義務を担っております。充実感は必ずしも華美・壮大な大会からのみ得られるものでなく、質素であっても補助員をふくめた参加者全てが、生き生きと輝いた大会であるならば人生の一時に大きな足跡を遺すことを考えるとき、この達成は創意・工夫によって十分可能である」

「競技力向上を唱えるなら、学校という枠外での指導とそれに関わる経済的なものを抜きには論ぜられないし、有望選手の発掘・育成と学業の関連も考慮の幅を変えなければ達成されないでしょう。しかし、全道高校体育大会参加選手数1万1千名余と、その十数倍になるであろう支部大会の参加者数を思うとき、参加することにも意義があると感ぜざるを得ません。

(3) 平成3～4　19代会長遠藤　隆氏が就任する。2年の就任期間で二つの大きな事業があった。

平成4年1月、第24回全国研究大会が札幌市教育文化会館で開催された。「明るくたくましい人間を育成する生涯教育・スポーツ活動を目指して」という主題のもと、全国より500名の参加者を得て、盛会裡のうちに幕をおろすと記されているが、大会裏話として当初予定していた講演者の笠谷昌夫氏(札幌オリンピック70mジャンプ優勝者幸雄氏の実兄)が大会3日前御尊父の死によって講師を辞退してきた。急きょ、プロスキーヤーの三浦雄一郎氏にお引き受けいただいたと「思い出」に記している。実行委員会の先生方のご苦労が目に浮かぶ出来事である。

もう一つ、平成5年1月、第42回全国高等学校スケート競技選手権大会の開催（苫小牧市）がある。「走れ闘え舞え！樽前のふもとに」のスローガンのもとに、1281名が参加した大会であった。スケートのメッカ、とりわけアイスホッケーでは釧路市とともに小・中学校、地域、職場等あらゆるところでチームを作り冬を過ごす地域だけに「高校生の大会」への応援ぶりもひときわ際だっていた。

(4) 平成5～8年　20代会長日野嘉輝氏が就任する。3年間の就任期間であるが、就任早々大きな課題として取り組んだのは、いわゆる1条

8年度 全国スキー 北海道選手団

校問題であった。

北海道でもその対応に多くの時間を費やしているのが伺える。全国高体連の諸会議に供応し北海道での常務理事会、理事会の召集も数多くなっている。5年度秋季理事会での決定を受け6年度より実施に移ったが、「競技会では友好的な交流が行われ、心配されるようなトラブルもなく参加する側も迎える側もお互いを認め合い、高め合う場となったことは誠に喜ばしい限りです」と記している。

もう一つ、研究部活動の充実に力を入れている。他都府県よりやや遅れぎみとも感じる本道研究部活動であったが、この期より各種データ処理にコンピューターの活用を取り入れることになった。全道350校の生徒及び父母、指導する顧問教諭へのアンケート調査による分析等に大いに威力を発揮することになった。

この調査をもとに「部活動に対する批判を

しっかり受け止めるとともに、更に新しい時代にふさわしい学校における体育活動としての運動部活動の在り方を早急に検討する必要がある」と述べ、更なる期待を寄せている。

(5) 平成8～9　21代会長金子盛夫氏が就任する。長野オリンピックに伴い、8·9年度に長野県で予定されていたスケート、スキーの全国大会を北海道で開催することになった。

平成9年1月、第46回全国高等学校スケート大会（風をきれ 地氷をかけろ 天に舞え）を釧路市において、また、平成10年1月には、第47回全国高等学校スキー大会（白い大地の札幌に今 輝く軌跡が残る）を札幌市においてそれぞれ開催した。「経済不況にあり、とりわけ北海道においてはその影響が強い中、財源確保に相当な苦労があった。しかし、運営は小さく、しかし感動は大きく！を合言葉に取り組んでいただき、本道選手の大活躍もあり、数々の感動と友情の輪を広げ、素晴らしい成果を残して閉会することができた」と2年連続の全国大会を振り返って、安堵の気持ちを述べている。

3　将来に向けて

いま、教育界も様々な観点から改革が行われつつあり、高体連も時世の変化とともに見直しは避けられない状況にある。

一つは少子化による生徒数の減少である。我が北海道も平成3年度の25万人台を最高に9年度には20万人を割り込み、14年度には17万人台に激減するものと推計されている。全道大会への出場枠を含めた大会運営等の検討を始めたところである。

もう一つは、部活動に対する価値観の変化がある。競技レベルを追求する生徒、楽しみを志向する生徒等いずれも部活動に参加していることに変わりなく、どちらの生徒にも青春期の思い出として残すべく、指導者の創意·工夫が求められているところである。

しかし、50周年という大きな節目を迎えた道高体連には輝かしい実績がある。長い歴史を通して、常に学校の正規の教育課程の枠外に置かれていたにもかかわらず存続発展してきた自負がある。こうしたことから、課題を解決し今後とも更なる前進があるものと期待している。

私と柔道

斎藤制剛
平成8年北海高等学校卒業
現在国士舘大学在学中

平7　全国総体中量級優勝
平8　全日本ジュニア86kg級
平9　講道館杯90kg級準優勝
その他多くの国際大会出場

北海道のスポーツ選手はスキー、スケートをはじめ、すばらしい人達が多い中で、私のような者がこの50年史で書かせていただいて大変光栄に思います。

私が柔道を始めたきっかけは、父の影響である。父は北海高等学校の教員で、柔道部の監督をしている。その父を見て私も柔道という競技に進んで行ったように思う。

中学3年の時、初めて全国大会に出場したが大会の数週間前に手首を骨折してしまった。当日は片手を全く使えずに試合に臨んだが、自分の力を出し切れずに悔しい思いをした。その悔しさが高校生になっても続いていたと思う。

父の勤める北海高等学校に入学した。家では父親、学校では先生·監督という中で、1つ下の弟、そして多くの仲間に恵まれた環境の中で練習に明け暮れた。当然目標は全国上位進出だった。

全国総体に初出場したのは高校2年生の時だった。団体戦は予選リーグで負け、弟とともに優勝を狙った個人戦でも3位であり、中学大会と同じように悔しい思いを残してしまった。

3年生の時は個人戦だけの出場だった。緊張はしていたが、人の倍の稽古をしてきたという自信で自然と肩の力が抜けていたと思う。また共に稽古をし、惜しくも全国大会に出場できなかった仲間の為にも「絶対優勝するんだ」という気持ちも強かったと思う。結果は全試合1本勝ちで優勝することが出来た。

現在もまだ柔道の毎日である。全日本選抜·全日本学生·加納杯があり、さらに国際大会·海外遠征等々各種大会が控えている。とどまることのない坂道ではあるが、自分と闘いながら大きな目標達成に挑みたいと考えている。

その目標とは···弟とともにオリンピックに出場し金メダルを狙うことである。

青　森　県

《事務局》
〒960-8002 青森市新城平岡266-20
県立青森西高校内
TEL 0177（88）0511
FAX 0177（88）1600

創立年月日：昭和23年4月1日

加盟校数		90校
専門部数		39専門部
加盟部数		928部
部員数	男子	10,899名
	女子	6,692名
	合計	17,591名

年度	会長	理事長	記事
23	鹿内 一胤	川田 正徳	第1回県高校総体開催
			県高体連規約制定
24	〃	小笠原源蔵	
25	中村 勇	〃	初の総体総合開会式
26	〃	〃	
27	須郷侃太郎	木村 良三	県高体連旗制定
28	〃	〃	全国高校スキー・スケート・卓球大会開催
29	〃	新岡 精弥	
30	〃	〃	応援団連盟規約制定
31	〃	〃	応援団連盟発足
32	中村 勇	〃	県高野連が加盟
33	〃	〃	10周年記念式典挙行
			県高体連誌創刊
34	〃	〃	知事が総合優勝旗寄贈
35	〃	〃	
36	〃	〃	
37	〃	斎藤 正博	
38	小山 敏夫		全国高校総体開催決定
39	〃	〃	全国高校総体実行委員会発足・事務局設置
40	小木 喬	〃	
41	〃	〃	全国高校総体開催
42	菊池 正	奈良 尹	県総体スローガン採用
43	〃	〃	20周年記念式典挙行
44	〃	〃	第1回指導者講習会
45	〃	渋谷 恭一	
46	辻村 正	〃	
47	〃	〃	
48	丹内 正一	〃	
49	新岡 精弥	〃	52あすなろ国体特別委員会設置

年度	会長	理事長	記事
50	新岡 精弥	渋谷 恭一	
51	〃	〃	学校体育研究会発足
52	〃	〃	あすなろ国体開催
53	〃	〃	30周年記念式典挙行
54	〃	〃	総体総合準優勝杯寄贈
55	〃	〃	体育部活動奨励賞新設
56	〃	下山 晃弘	
57	奈良 尹	〃	県総体スローガン公募
58	〃	〃	
59	〃	〃	
60	工藤 亮衛	〃	
61	花田 陽悟	〃	
62	〃	伊藤 龍一	県高体連研究部発足
63	〃	〃	二専門部加盟
平元	西村 稔弘	〃	一専門部加盟
2	〃	〃	財政検討委員会発足
			総体ポスター公募開始
3	奥寺 栄二	宮崎 徹	定通制総体40周年記念式典、各種大会適正化委員会開催
4	〃	〃	
5	佐々木恒朗	〃	基本問題検討委員会開催
6	〃	〃	高体連定通制新聞創刊
			応援団幹部講習会40回記念大会開催
7	下山 晃弘	〃	財政検討委員会発足
8	〃	〃	50周年記念事業検討委員会設置
			第1回県高体連研究大会開催
9	〃	〃	50周年記念式典挙行
10	小野 次郎	工藤 徳美	全国高体連50周年

1 沿 革

草創期の歩み 昭和22年～32年

本連盟は昭和22年、青森県中学校体育連盟としてその産声をあげ、翌23年、学制改革により青森県高等学校体育連盟と改称された。

その年、第1回県高校総体を開催、同時に総合優勝制が採用された。ただし、総合開会式は昭和25年の第3回大会からであった。

昭和27年には諸規程の制定、県高体連旗の製作、県高体連新聞の創刊、記録映画『躍動する若人』の製作と県内巡回映写会等が実施され、スキー、スケート、卓球の全国高校大会が本県で開催される慌ただしい年であった。

昭和30年、第1回応援団幹部講習会が開かれ、翌年、県高校応援団連盟が結成され、昭和32年には県高野連が加盟し、ほぼ体裁が整った。

青森インターハイへの歩み 昭和33年～41年

昭和33年、連盟発足10周年記念式典が行われ、記念誌として高体連誌第1号が出版された。また、優勝旗が全18競技にわたって揃えられた。

昭和34年、当時の山崎知事から総合優勝旗が10周年のお祝いとして寄贈された。

昭和30年代後半は、本県でさまざまな全国大会が開催され、そこで培われたノウハウを活かすべく、昭和38年、全国高校総体を昭和41年に本県で開催することが決定。これを受け、翌年、実行委員会、事務局が設けられたほか、「全国総体ニュース」が高体連新聞に替わって創刊された。更に、選手強化策として一年生大会を実施。これらの努力が結実し、ボクシング、レスリング、自転車、卓球、相撲で好成績を収めた。

優勝の瞬間（昭和41年青森インターハイ卓球）

青森インターハイは現在の形をなした最初の大会であった。また、皇太子殿下のご臨席を初めて仰ぐという、記念すべき大会となった。

何よりも、当時活躍した選手たちが現在、県スポーツ界指導者の中心となっており、その意味でもこの大会を開催した意義は大きかった。

あすなろ国体への歩み 昭和42年～52年

この時期は「あすなろ」国体開催に向けて本県スポーツ界が一丸となって精進し、レベルアップした時期であった。

昭和43年、連盟発足20周年記念式典を挙行し、翌44年、五年間中断されていた高校総体の総合優勝制度が、「闘魂旗」「明朗旗」として復活された。また、昭和42年から始められていた総体スローガンが、正式に制定された。

昭和49年、52あすなろ国体特別委員会を設置し、あすなろ国体に向けて選手強化委員会規約も制定し、国体少年の部のレベルアップのため、青森インターハイ以上の選手強化がなされた。

昭和52年、あすなろ国体が開催され、少年の部では、自転車、山岳、レスリング、体操などで大活躍し、天皇杯獲得の中心的役割を担った。

あすなろ国体後の歩み 昭和53年～62年

昭和53年、連盟結成30周年記念式典が絶頂期のこの時期に行われ、30周年記念誌『高体連30年史』が出版された。また、お祝いとして、竹内知事から新闘魂旗・明朗旗が寄贈された。

更に、昭和54年、総合準優勝校の健闘も称えるべく、当時の平川県教育長から敢闘杯・友情杯が寄贈され、翌55年には、県教委の発案で体育部活動奨励賞が新設された。

昭和57年、加盟全校の1、2年生を対象に高校総体スローガンの公募が開始された。

62年には研究部が誕生し、その後、運動部活動にかかわるさまざまな研究成果をあげている。

あすなろ国体後の十年間は、連盟結成30年の実績の上に立った安定した時期であるとともに、国体開催時の競技力のレベル維持に努め、他県関係者が驚くほどの好成績維持を成し遂げた時代と言える。この時期を象徴する出来事として、青森西高校が昭和50年第28回大会から62年第40回大会までの13年間、県高校総体女子総合優勝を称える明朗旗を獲得したことが挙げられる。

2　10年の歩み

青森インターハイ、あすなろ国体をステップにして、順調な伸びを見せてきた本県高校スポーツ界は、時代が平成に替わる頃から徐々にその力を落とし、それまでのような圧倒的な強さが影をひそめていった。と言うよりは、他県がインターハイ、国体等の開催で、本県同様、レベルアップしてきたと言った方が妥当であろう。特に、東北各県の強化が著しく、本県勢は東北大会でも優勝することが次第に難しくなってきている状況にある。

昭和63年～平成元年

昭和63年に少林寺拳法となぎなた、翌平成元年に馬術が加盟し、専門部数が過去最高の数に達した。

平成２年

この年からは、それまで県高校総体のポスターを担当していた小林画伯の死去に伴い、ポスターの原画の公募が始められた。また、県定通総体が40回の記念大会を開き、翌年、40周年記念誌を発刊した。

平成３年

各種大会適正化検討委員会が設置され、いつの間にか膨れ上がっていた高体連の冠大会の数を適正な数まで減ずるべく検討を重ねた。更に、高校総体の種目別優勝旗、実に55本を一挙に更新し、翌年、優勝旗用のリボンを更新している。

平成４年

昭和27年以来、年一回の発刊であった高体連新聞を年二回発刊に、また、隔年発刊の高体連誌を毎年発刊にした。更に、平成6年には、高体連定時制通信制新聞を創刊し、年一回発刊していくなど、報道部の活動の場が大幅に増加し、高体連の動きをより詳しく、より迅速に広報できるようになった。

平成５年

県高校総体のアンケートに少数ながらも毎年のように見られる、総合開会式の無用論などを中心に検討する基本問題検討委員会が開かれた。その結果、総合開会式は多くの生徒、関係者に素晴らしい感動を与える、教育的価値の高いものとして継続していくことが確認された。ただし、現状を一部改正し、時間短縮に努めることになった。

平成６年

昭和30年に始められた応援団幹部講習会がこの年に40回の記念大会を行った。

また、スキーの名門東奥義塾高校が県高校総体スキー競技大会で30連覇の偉業を達成した。

平成７年

年々進む生徒数の減少と、諸物価の値上がりのため、将来的な経済面での不安が現実化し始めたことで、財政検討委員会が、平成2年に開かれてから五年ぶりに再開された。審議の結果、平成8年度から、生徒一人の負担金が300円から500円になり、五年間据え置くことを努力目標とすることに落ち着いた。

これを受けて、定通制総体の優勝旗14本が、平成8、9年の二年間で全て更新され、各専門部の選手強化・育成事業への補助、冬季大会への服装費補助の増額等があり、全国大会開催、50周年記念式典等の遂行へ向けた経済的な裏付けもなされることになった。

平成5年の全国高校総体開催基準要項の一部改正により、八戸工業高等専門学校が県高校総体に初めて参加した。

平成８年

県スポーツ振興事業団と県体育協会が、低迷を続けていた本県選手団の国体での総合順位を上げるべく、パワフルジュニア競技力向上対策事業を提示し、本県スポーツ界の中心的存在である高校スポーツのレベルアップに、資金面でのテコ入れを行った。

昭和62年に誕生した県高体連研究部による第1回県高体連研究大会が開かれ、多数の参加者のもと、盛大にそのスタートを切った。そして、50周年記念事業検討委員会が設置されたのもこの年であった。同委員会は翌年10月までに6回も開かれ、綿密な検討審議が繰り広げられた。

その事業の手始めとして、高校総体写真募集が実施され、104点の応募があった。続いて、年度末に記念手記「がんばれ高校生」の公募も行われた。

平成９年

50周年記念事業の三つ目としての第50回県高校総体が、青森市の県総合運動公園陸上競技場での総合開会式を皮切りに実施された。特に、総合開会式では、後半部分にアトラクションとしてマーチングバンド、バトントワリン

グ、ネブタ運行、ウエーブなど、盛り沢山の企画が出されたため、時間がかかるということで、入場行進後の着座が総合開会式史上初めて採用され、県高校総体の新しい伝統が一つ誕生した形となった。

この50回記念大会の最も劇的な出来事は、青森山田高校が闘魂旗・明朗旗のダブル受賞を、しかも、ともに初受賞で達成したことである。この快挙に、人事とは言え、運命というものの魔訶不思議さを見せつけられた思いがするだけでなく、このことが連盟結成50周年という節目を全関係者の心に強く刻み込んだはずである。

連盟結成50周年記念式典は、12月12日に青森市文化会館で盛大、且つ厳粛に挙行され、同時に、記念誌『高体連50年史』が出版された。

第50回県高校総体総合開会式アトラクション

3　将来に向けて

本県では今冬、スキーのインターハイが開かれるのを初めとして、冬季競技の全国大会が続くので、それらをステップにして、競技人口の減少を克服しつつ全国のトップレベルを堅持していきたいと考えている。

次に、全体の競技レベルを上げるために、団体種目、特に、球技種目を全国レベルに一歩でも近付ける方策を模索中である。

その大きな障壁となるのが、生徒数の減少に伴う運動部員数の激減であろう。特に、女子の部員不足が深刻である。しかし、今、50年の歴史を振り返ると、本連盟は各県に先んずる進取の気風を持ち合わせているように思える。とすれば、上記の諸問題を解決するためにこの気風を大切にした上で対処していきたい。

最後のインターハイ

成　田　敦　夫

プロフィール
H3 青森東高校入学
H5 全国高校総体陸上競技100m・200m走で2位
H6 筑波大学入学。後、陸上競技部主将となる。

全国高体連結成50周年おめでとうございます。お世話になりました多くのアスリートを代表して、心よりお祝い申し上げます。

遠く青森を離れ、競技を続けてこれたのは自分を大きく成長させてくれた高校時代があったからだと確信しています。高校入学時、下宿することになり、不安だらけのスタートでしたが、家を離れて親を頼れない分、自分がしっかりしなければという自律心がつき精神的に少し成長したことで、競技面を前向きに考えられるようになりました。

下宿をしてまでも青森東高校に入学したのは、原田先生の指導を受けたかったからです。競技に対する考え方から生活面までご指導頂き感謝しております。練習メニューは全て先生が作って下さいました。しかし、部員は、自分の競技の目標をしっかりと持ち、お互いアドバイスしながら練習していました。先生のトレーニングには、基本となるドリル系の動きを重要視し、その他にも短距離走において最も重要な、最大スピードを向上させるためのチューブによる牽引走や、プライオメトリック系のジャンプ運動など、質の高い科学的な練習がありました。

先生と良いチームメイトに恵まれて、最後のIHを迎える2年生の冬季練習は特別気合が入りました。走り込みの量、練習の質も、全国レベルの合宿に参加できたこともあり、満足できるものでした。ただひたすら優勝を目指して自らを高めていく練習に、IHへの深い思い入れと、何か特別な圧力を感じました。IHまでの予選会では自己新記録をマークでき、自信を持って会場へのりこみました。しかし、優勝を目標にしていた100mは、準決勝の悪い走りを決勝まで引きずって、2位。惨敗でした。気持ちを切り替えて臨んだ200mは、150mまで並走したものの引き離されまたもや2位。精一杯走りましたが、悔いが残りました。でも、この敗北は自分を更に成長させてくれました。

岩　手　県

《事務局》
〒020-0114 岩手県盛岡市高松四丁目17番16号
県立盛岡第三高校内
TEL 019（661）8115
FAX 019（662）9884

創立年月日 ：昭和23年9月19日

加盟校数		95校
専門部数		34専門部
加盟部数		1,750部
部員数	男子	16,163名
	女子	10,000名
	合計	26,163名

年度	会長	理事長	記事
23	松岡修太郎	加藤　昌得	9月19日連盟発足会挙式
24	及川儀右衛門	〃	第1回県高校総体開催
25	小圷　洋	〃	研究集会開催
26	〃	〃	県内ブロック予選会開始
27	樋口　佐平	〃	優秀選手表彰制度制定
28	〃	宮崎　正之	第1回県冬季大会開催
29	〃	西村修一郎	
30	〃	〃	
31	鈴木　長	〃	
32	〃	舘沢　徳栄	
33	桐野　薫	〃	第7回全国高校スケート選手権大会開催
34	〃	〃	10周年記念誌発刊
35	〃	戸嶋　正夫	
36	山口　善次	〃	
37	〃	〃	
38	吉岡　格六	〃	
39	〃	〃	
40	〃	〃	県高校総体総合優勝制廃止
41	〃	〃	全国高校総体4種目開催
42	〃	〃	
43	〃	〃	
44	〃	〃	20周年記念事業実施　県記録集創刊
45	〃	〃	岩手国体開催（第25回）
46	小野寺英長	矢羽々通夫	
47	〃	〃	全国総体2種目開催
48	〃	〃	
49	〃	佐藤　浩	
50	〃	〃	
51	千田　玄	〃	第26回全国高校スキー大会開催
52	〃	〃	第27回全国高校スケート大会開催
53	〃	〃	30周年記念事業実施 全国総体ホッケー開催
54	〃	〃	
55	三浦　均	津田　敬	
56	〃	藤枝　照義	県高校総体基本方針検討委員会設置
57	〃	〃	第32回全国高校スケート大会開催
58	〃	〃	
59	小原房之助	〃	研究部設置　同規定制定
60	〃	〃	
61	〃	〃	第36回全国高校スキー大会 第1回県研究大会開催
62	〃	高橋　英雄	第43回スキー国体開催
63	高橋　力	〃	
元	〃	〃	
2	沖田　岑夫	佐久間研次郎	
3	〃	〃	
4	山影　源吉	藤原　英輔	
5	〃	〃	
6	高橋　英雄	佐藤　剛	平成11年度全国高校総体本県開催決定
7	〃	松田　郁夫	同大会県準備委員会発足
8	〃	鈴木　浩	同大会県高校推進委員会発足 第46回全国高校スキー大会開催
9	長澤　佳彦	〃	平成11年度全国高校総体県実行委員会 発足第53回スキー・スケート国体開催
10	〃	松尾　光則	

1　沿　革

昭和23年に岩手県高等学校体育連盟が発足して50年の歳月が過ぎようとしている。

全国高体連50年史刊行にあたり、当連盟の歩みを紹介したい。

昭和23年9月19日岩手県高等学校体育連盟発会式を花巻市陸上競技場において感激のうちに挙行、同日記念総合体育大会を開催した。実施競技は、陸上、排球、籠球、庭球、卓球、ラグビー、サッカー、体操、水泳であった。

なお、県高体連の連盟規約を定めたが、この年における役員は会長以下併せて18名をもって構成し、参与に各高等学校長、評議員に各高等学校体育教官を充て、事務局を盛岡高等学校においた。

昭和24年度、第1回総合体育大会を花巻市陸上競技場を中心に開催、9種目の競技を実施、参加人員は2,000名を数えた。

優勝旗授与制度を定め、総合開会式に先立って「優勝旗樹立式」が行われた。

昭和26年度、第3回総合体育大会を花巻市で開催、実施競技は15種目となった。参加人員が5,000名を越え、県内を6ブロックに分けて予選会を実施、さらに定時制の部も学校対抗として独立した。この年、前年度における優秀選手の表彰制度を定めた。

昭和27年度、第1回冬季大会を開催した。

この年、連盟規約を一部改正するとともに専門部規定を定めた。

昭和31年度、第8回総合体育大会を盛岡市で開催、実施競技は20種目を数えた。総合開会式後、盛岡市内女子高校生によるマスゲームが行われた。

昭和32年度、第7回全国高校スケート大会を盛岡市高松の池で開催した。

昭和33年度、総合開会式に盛岡市内高校生徒の応援参加があり、現在行われている県下全加盟校生徒が総合開会式に応援参加する端緒となった。また、全国高体連制定の「高体連の歌」が初めて斉唱された。

昭和34年度、総合体育大会の水泳競技を夏季大会として分離した。また、連盟規約を一部改正するとともに支部規定及び事務局規定を定め、更に高体連10周年記念誌を発刊した。

昭和39年度、第1回スキー教室を開催、県内各地域から70名の参加を見た。

昭和40年度、第15回全国高校スケート大会を盛岡農業高校特設リンク並びに高松の池で開催した。県高校総体の総合優勝制度を廃止するとともに優秀選手に対する表彰メダル授与制度を定めた。

昭和41年度、全国高校総体岩手大会（体操、ハンドボール、登山、剣道）を開催、開会式を新装なった県営運動公園陸上競技場において盛大に挙行した。

昭和44年度、7月16日高体連発足20周年を記念し、記念式典・祝賀会を盛大に開催し、記念誌を発刊した。この年から、県高体連記録集を刊行、現在に至っている。

昭和45年度（岩手国体開催年）、国体開催との関連から県民体育大会とドッキングさせ、県民総合体育大会と銘打って国体各競技開催市町村で開催した。この年、学校数の増加に伴い県内を9支部に分割、29専門部を数えるに至った。

昭和47年度、全国高校総体自転車競技大会を紫波町で、スケート大会を盛岡市で開催した。

昭和51年度、第26回全国高校スキー大会が、ノルデイック競技が安代町で、アルペン競技が雫石町で開催された。

昭和52年度、第27回全国高校スケート大会（スピードスケート）を盛岡市の県営スケート場で開催した。

昭和53年度、全国高校総体ホッケー競技大会を岩手町で開催した。高体連30周年記念事業として、事務局所在校に記念碑を建立し、記念式典・祝賀会を盛大に挙行、併せて記念誌を発刊した。

昭和55年度、傷害見舞金規定を制定した。

昭和56年度、総合体育大会基本方針検討委員会を組織し、大会会期等の基本事項について検討を進めた。

昭和57年度、基本方針検討委員会において、高校総体会期を1期にまとめ、6月第1金曜日を総合開会式とし、競技は翌日から3日間以内とすることを基本方針とした。

第32回全国高校スケート大会を盛岡市、金ヶ崎町で開催した。

昭和59年度、高体連研究部規定を定め、研究部を設置した。

昭和61年度、第36回全国高校スキー大会を安代町で開催、各方面の協力により大成功裡に終了。第1回県高体連研究大会を開催した。

2　10年の歩み

円熟期を迎えた当連盟は、この10年間で全国規模の大会等の開催やその準備が相次ぎ、極めて多忙な時期を迎えることとなる。

昭和63年度、第23回全国高体連研究大会が全国各地から多くの先生方をお迎えして、盛岡市において開催された。

県高体連創立40周年記念事業として、記念式典及び交歓会を開催し、記念誌を発刊した。

専門部にアーチェリーを加え、定時制・通信制部会、研究部を専門部とし35部となった。

平成元年度、第39回全国高校スケート大会を盛岡市・滝沢村で開催した。また、東北高体連事務局担当県となった。

平成２年度、第2回全国高校ボクシング選抜大会を水沢市で開催した。

平成11年度全国高校総体の本県開催について、県教育委員会教育長あてに開催依頼書を提出した。

平成３年度、平成11年度全国高校総体の本県開催について、県の方針が決定された。同大会の「主会場地検討委員会」が組織され、検討が開始された。

平成４年度、同大会の本県開催に関連して、基礎資料収集のため宮崎インターハイへ11名の視察員を派遣した。

同大会の主会場地について、主会場地検討委員会の検討を経て「北上市」に決定した。

平成５年度、同大会の競技種目別会場地について、「競技種目別会場地検討委員会」の検討を経て、会場地を内定した。

また、同大会に向けて、競技力の向上を目指し各専門部に選手強化委員会を設置し、海外遠征等を含む各種選手強化対策事業が開始された。

平成６年度、平成11年度全国高校総体に向けた選手強化対策推進計画に基づき、平成7年度強化指定校並びに優秀選手を決め、授与式を開催した。

更に、同大会の本県開催に向けた全県的な意識高揚を図るため、高体連会報を発行した

県高体連スキー教室30周年事業として、記念誌を発行した。

平成７年度、全国高体連理事会において、平成11年度全国高校総体の開催申請が承認され、本県開催が決定した。また、同大会のなぎなた競技会会場が決定された。

一方、平成11年度全国高校総体岩手県準備委員会が発足し、本格的な開催準備が開始された。

平成8年度の強化指定校及び強化指定選手を決定し、強化指定証授与式を開催した。

また、なぎなた競技が全国高校総体の正式競技に決定されたことから、なぎなた専門部を加えて36専門部となった。

平成８年度、第46回全国高校スキー大会が、安代町において開始された。

また、平成11年度全国高校総体岩手県高等学校推進委員会発足し、事務局を盛岡第一高校に設置した。

更に、同大会のスローガン、シンボルマーク、スローガン毛筆作品が決定した。

一方、平成11年度まで継続する強化指定部を決定して、強化指定証授与式を開催した。

記念すべき第1回県高校なぎなた競技新人大会が、釜石市で開催された。

平成９年度、初開催のなぎなた・飛び込み競技を含めた第49回県高校総体が、盛岡市を中心に開催された。

県知事を会長とする平成11年度全国高校総体岩手県実行委員会が発足した。

また、同大会の競技種目別大会日程・競技会場が決定したほか、総合ポスター図案・入賞メダル図案・参加賞図案・大会愛称・大会讃歌曲・ファンファーレ曲も決定された。

第9回全国高校ボクシング選抜大会を水沢市で開催した。

第53回国体冬季大会スケート・アイスホッケー競技会が、1月に盛岡市・石鳥谷町・二戸市で開催された。

更に、同大会スキー・バイアスロン競技会が2月に安代町で開催された。

第50回県高校総体

3　将来に向けて

平成11年度全国高校総体（'99岩手総体）を本県で開催することから、当面は、その準備の推進と大会に向けた選手強化に全力を傾けなければならない状況となっている。

平成10年度においては、'99岩手総体の総合開会式会場となる北上市の北上陸上競技場が完成したことから、第50回県高校総体の総合開会式をリハーサルで開催した。

全加盟校から集まる応援団のバス・新幹線臨時便等での輸送、北上地区を中心とした式典役員・補助員の編成等初めてのことが多かったものの、関係機関・関係者の協力により成功裡に開催することができた。

しかし、いくつかの課題も残されたことから、県実行委員会の指導のもと、開催地・関係機関と密接な連携を図り、次回はより円滑な運営を推進しなければならない。

一方、同大会に向けた選手強化については、県のご理解のもと、選手強化の補助金も大幅に増額になり、いよいよ正念場を迎えているところである。

東北ブロック大会の成績を見ると入賞数が着実に増加してきているが、全国大会においても同様に活躍できるよう、更に強化を推進していく必要がある。

このような状況から、平成11年度までは、岩手総体を目標に組織の全精力を注ぎ込み、準備や強化に万全を期さなければならない。

更に一歩進めて、現在の各種事業を恒久的に実施し、常時各種全国大会で本県の高校生が活躍できる環境づくりを進めなければならない。また、全国的な傾向でもあるが、近年本県においても運動部に所属する生徒数が減少してきており、運動部活動を実践することのすばらしさをより理解させ、多くの高校生が実践するよう対策を講じなければならないと考えられる。このように、課題が多岐にわたる今日、全国高体連と各都道府県高体連が一丸となって高校生の体育・スポーツの振興を一層推進してまいりたい。

明日をめざして

盛田浩史
盛岡工業高校卒
日本大学生物資源科学部1年在籍

プロフィール
H9全国高校総体ウエイトリフテイング83kg級優勝
H9国民体育大会ウエイトリフテイング83kg級優勝

私が、ウエイトリフテイング競技をはじめて知ったのは、高校に入った時のことである。

４月のオリエンテーションで、競技の内容、練習方法等を説明され、自分の努力次第で記録を伸ばし、心身を大いに鍛えることができるすばらしい競技だと興味を持ったものでした。

その後、まもなく入部し、普段は優しいが、練習となると厳しい顔に変わる吉田新一先生から指導を受けて、日本一を目指して基本練習や基礎筋力の養成に励みました。

地道に練習を重ねた結果、平成８年度の全国高校選抜大会に選ばれて出場したが、結果は、山梨県日川高校の原洋一君に続き、運よく第２位に入賞することができた。

その試技は、スナッチ競技でリードしていたが、ジャーク競技であっさり逆転されたもので、基礎的補強運動の重要性を考えさせられたものでした。

その後、この反省をもとに基礎的筋力養成をメインとする練習内容に切り替え、インターハイを目指してトレーニングに励みました。

そして８月、インターハイで原君とまた勝負することとなった。私は、スナッチで大会新記録の１２０kgを挙げ、やや不得意だったジャークも１４５kgを挙げることができ、わずか２，５kgの差で原くんを振り切り、トータル２６５kgの大会タイ記録で優勝することができました。

その後、10月の国体でも原君との一騎打ちとなったが、スナッチ・ジャークとも自己新記録で初めて原君に両種目あわせて勝つことができました。

ライバルの存在と目標に向かってひたむきに努力することの重要さを痛感した１年間であり、一生の思い出となる出来事でした。

宮　　城　　県

《事務局》
〒981-3132 宮城県仙台市泉区将監 10-39-1
県立泉高校内
TEL 022（374）6674
FAX 022（374）0285

創立年月日：昭和 23 年 4 月 1 日

加盟校数		109 校
専門部数		36 専門部
加盟部数		1,740 部
部員数	男　子	21,182 名
	女　子	13,555 名
	合　計	34,737 名

年度	会　長	理事長	記　事
23	宮城音五郎	常松　喬	宮城県中学校体育連盟を本連盟に名称変更
24	〃	〃	
25	高山　政雄	〃	
26	〃	〃	本連盟規約制定
27	〃	〃	第1回県高校総体開催
28	〃	〃	総体開会式雨天で中止
29	〃	〃	生徒会リーダー講習会開催
30	山下　忠	〃	全国選手権2種目開催
31	勝又　朝頼	〃	バド選手権開催
32	〃	〃	全国選手権3種目開催
33	〃	一場　武之	全国選手権2種目開催
34	〃	〃	ハンド選手権開催
35	〃	〃	ヨット選手権開催
36	宇野　量介	〃	全国選手権3種目開催
37	〃	〃	総合優勝制を廃止
38	江渡　丈夫	佐藤　典古	総体開催基準要項制定
39	〃	〃	総体開会式育英で開催
40	大竹　金彌	〃	1回高体連表彰式挙行
41	〃	〃	全国高校総体ヨット競技・飛込競技を開催
42	〃	〃	
43	〃	〃	ボクシング専門部新設
44	〃	〃	総体剣道女子の部新設
45	〃	〃	総体漕艇女子の部新設
46	〃	〃	高体連専門部規約改正
47	〃	遠藤　敬一	全国総体1種目開催
48	〃	〃	冬季種目スケート新設
49	庄司　豊義	〃	生徒会リーダー講習会解消
50	〃	〃	高体連表彰基準改正
52	高橋　章	〃	空手道専門部を承認

年度	会　長	理事長	記　事
51	高橋　章	遠藤　敬一	25周年記念式典挙行
53	〃	〃	全国総体ヨット開催
54	阿部　茂	〃	リーダー養成講座に三宅義信氏を招聘し開催
55	〃	〃	リーダー養成講座に佐藤宣践氏を招聘し開催
56	〃	〃	事務局を仙三高に移転
57	〃	〃	65全国総体の誘致表明
58	遠藤　敬一	佐々木善哉	全国総体スキー開催
59	〃	〃	全国総体宮城県誘致開催を本連盟として機関決定
60	小坂　泰一	〃	全国総体誘致準備委員会設置
61	〃	〃	全国高体連理事会にて全国総体宮城県開催が内定
62	齋藤　富二	佐藤記一郎	県総体柔道競技に女子の部を設ける
63	〃	〃	サッカーに女子の部を設ける
元	〃	〃	ホッケー専門部を新設
2	小沼　照之	齋藤　光次	全国高校総体を開催
3	〃	鈴木　通弘	本連盟事務局を泉高校に移転
4	〃	〃	第20回リーダー養成講座に三宅義信氏を招聘
5	堀田　壽一	〃	本連盟規約一部改正
6	〃	〃	富谷高校の加盟を承認
7	栗生　守男	川島　克	理事長の教頭職が実現
8	高橋　郁夫	〃	冬季I・H実行委設立
9	〃	庄子　利也	全国総体スケート開催
10	〃	〃	アーチェリー準専門部が専門部に昇格

1 沿 革

昭和22年、関係者の懸命な努力により中等学校体育連盟が結成され、学制改革による昭和23年4月の新学校教育制度発足と同時に、いち早く宮城県高等学校体育連盟と改称した。

昭和25年10月に、初代会長が県教育委員長となり、第2代会長に高山政雄氏（仙台第一高校長）が就任し本連盟事務局を県教育委員会保健体育課内に置いた。

昭和26年4月1日、本連盟規約及び専門部規約・支部規約を制定し、さらに組織の整備を図った。

昭和27年、本連盟運動選手規約並びに競技会規程を制定し、5月23日から25日までの3日間仙台市を主会場として、第1回宮城県高等学校総合体育大会が開催された。本大会には54校約2400名の選手が参加し、各方面からの積極的な支援により多くの成果を得、本連盟発展の大きなステップとなった。

昭和28年には、学校体育指導者の資質の向上を図るため、第1回体育研究協議会が開催され昭和29年に本連盟初の全国規模の大会である全日本バレーボール高校女子選手権大会が仙台市で開催された。

また、第1回県下高校生徒会リーダー（幹部）講習会を開催した。

昭和30年、全日本軟式庭球選手権大会と第1回全国高校フェンシング選手権大会の2種目が仙台市で開催された。

昭和31年、第5回県高校総体は24競技で実施され、さらに第7回全日本バドミントン選手権大会が開催された。

昭和32年には、全日本バレーボール高校男子選手権大会、第2回全国高校道路競走大会、第7回全国高校スキー選手権大会が開催された。昭和33年、全国高校バスケットボール選手権大会、第9回全国高等学校対抗自転車競技選手権大会の2種目が仙台市で実施された。昭和34年、第10回全日本高校ハンドボール選手権大会が、高松宮妃殿下御臨席のもとに仙台市で開催された。また、昭和35年、第1回全日本高校ヨット競技選手権大会が七ヶ浜にて開催された。

昭和36年、過去10年間にわたって実施されてきた県高校総体の総合優勝制は、総体検討委員会の審議結果に基づき、昭和37年より廃止されることとなった。

昭和38年、全国高校選手権大会は、「全国高校総体」として開催され、期日と開催地等が統一されることとなった。

昭和39年、この年開催された東京オリンピックに、本連盟出身選手8名が見事出場できたことは、本連盟のみならず本県スポーツ界にとっても、清新の気を吐く快挙といえるものであった。さらに、昭和30年代に入って、自転車競技（東北高校）とフェンシング競技（鼎が浦高校）が、10年間に7回の全国制覇を記録した。

昭和40年、本連盟表彰規程を制定かつ施行し第1回表彰式を共済会館にて挙行した。

青森県を主会場に展開された昭和41年度全国高校総体のヨットと水泳飛び込みの2競技が本県を会場に開催された。

昭和44年、第18回県高校総体から剣道競技に女子の部が設けられ、さらに昭和45年、第19回県高校総体では漕艇競技に女子が参加するなど女子競技の多様性が際立つようになった。

昭和47年、山形県を主会場に展開された全国高校総体のフェンシング競技が仙台市において開催された。。昭和49年、高校クラブ活動におけるリーダーの資質向上と健全育成、さらに高校体育の普及発達を目的とした第1回高校運動部リーダー養成講座を開催した。県高校総体開催基準要項と表彰基準の一部が昭和50年に改正され、さらに本連盟傷病見舞金規定及び傷害審査会運営規程が昭和51年に制定された。

昭和51年は、宮城県高等学校総合体育大会開催25周年に当たり、県スポーツセンターにおいて、記念の集いを開催した。昭和53年には、福島県を主会場に展開された全国高校総体のヨット競技が七ヶ浜で開催された。

昭和56年、本連盟事務局が保健体育課から仙台第三高校に移転した。昭和58年、「燃やせ青春鳴子の白銀」を大会スローガンに揚げ、58年度全国総体・第33回全国高校スキー選手権大会が鳴子町で開催された。昭和59年、本連盟は、「昭和56年度全国高校総体の宮城県誘致開催」を機関決定した。昭和60年、本連盟内に全国総体誘致準備委員会を設置し、会場候補地の選定作業に入った。60年度から新人大会において参加料徴収（300円）。昭和61年に、全国高体連理事会において「昭和65年度全国高

校総体の宮城県開催」が内定した。昭和62年、「昭和65年全国高校総体宮城県開催」の決定通知を受け、「宮城県準備委員会」が設置された。

2　10年の歩み

昭和63年は、本連盟創立40周年に当たり、第37回県高校総体を創立40周年記念大会として開催した。2年後の全国高校総体に向けて、強化指定校及び強化指定選手を競技種目別に決定し重点的な強化に入った。また、県下高校各運動部の一層の充実と強化、そして選手の資質向上を図る目的で、「栄光をめざして」という題の冊子を刊行した。

平成元年の第38回県高校総体が31競技で実施され、総合開会式は改装なつた宮城県陸上競技場で挙行した。同年8月に四国で開催された全国高校総体ではベスト8以上が23種目にも及びこれまでの強化が実り、過去5年間で最高の成績を収めた。

平成2年、第14代会長に小沼照之氏（泉高等学校長）、理事長に齋藤光次氏（仙台第三高等学校教諭）が就任した。第39回県高校総体は、随所に全国高校総体を想定した進行がとられ、開会式終了後は各学校応援団が市中パレードをして大会を盛り上げた。

平成2年度全国高校総体は、「華ひらけ　無限の力宮城の夏に」をスローガンに、皇太子殿下御臨席による総合開会式から始まり、宮城県下各会場において26競技が展開された。特筆すべきは、全県下約95,000名の生徒が「一人一役」を合言葉に大活躍してくれたことと、本県勢が3位以上に29種目、8位以内に65種目が入賞し、本連盟の歴史の上で最も輝かしい成績を残して大会の幕を閉じたことである。

全国高校総合体育大会開会式（平成2年度）

平成3年、本連盟事務局が、仙台第三高等学校から泉高等学校に移転し、理事長に鈴木通弘氏（泉高等学校教諭）が就任した。

当時全国的にも話題になった、東北朝鮮高級学校の本連盟への加盟については、評議員会において否決されたが、全国大会につながらないローカル、学年別大会への同校の参加については条件付きで認められた。本連盟加盟校は106校、加盟生徒数は91,500名の規模に達した。

平成5年、第15代会長に堀田壽一氏（宮城県第三女子高等学校長）が就任した。本連盟組織の中の調査研究委員会が発展的に解消され、新たに「研究部」を創設した。また、本連盟の運営全般に係わる問題を検討する基本問題検討委員会が新設された。

平成6年、全国高体連理事会において、加盟校以外の学校の全国高校総体への参加が、開催基準要項の「大会参加資格の特例」により認められた。そのことを受けて、本県でも第43回県高校総体において、東北朝鮮高級学校、宮城工業高等専門学校、仙台電波工業高等専門学校等が10競技に参加した。

平成7年、第16代会長に栗生守男氏（泉高等学校長）、理事長に川島　克氏（泉高等学校教頭）が就任した。理事長の教頭化については、本連盟の事務局体制強化の上から長年の宿願であった。

平成7年4月、参与会及び評議員会で県高校総体での参加料制度が認められ、総体、新人ともに参加料制度が導入された。第44回県高校総体は、東北朝鮮高級学校の開会式初参加も加わり、33競技で盛大に開催された。

平成7年11月、平成9年度全国高等学校総合体育大会・第47回全国高等学校スケート競技・アイスホッケー競技選手権大会（フィギュア競技）の宮城県仙台市開催が、宮城県及び仙台市教育委員会より承認された。本連盟の加盟校108校、加盟生徒数92,758名、加盟専門部35の規模になった。

平成13年56国体が宮城県で開催されることとなり、現在、本連盟と競技団体連携の下に、指導者及び選手の育成の取り組みがなされている。

平成8年、第17代会長に高橋郁夫氏（泉高等学校長）が就任する。

評議員会において角田養護学校の加盟が承認される。

第45回県高校総体を開催し、角田養護学校が開会式に初めて参加し、また、蔵王高校が独立校として初めて参加した。

平成９年度全国高校総合体育大会(スケート競技フィギュア)の宮城県実行委員会を組織する。平成８年度競技力向上（指導者）研修協議会兼研究大会は、「56国体に向けての強化について」をテーマに、筑波大学体育学系助教授の村木政人氏を招聘して開催する。

本連盟加盟校109校、加盟生徒数全日制98,499名、定時制2,399名。

平成９年、理事長に庄子利也氏（泉高等学校教頭）が就任する。平成９年度全国高等学校総合体育大会スケート競技（フィギュア）を仙台市で開催する。第25回リーダー養成講座に、世界空手道選手権大会優勝者（サンエス株）の阿部良樹氏を招聘して開催する。

平成９年度競技力向上（指導者）研修協議会兼研究大会は、「５６国体に向けての中高一貫強化について」をテーマに、(株)GSSスーパーバイザーヘッドアスレチックトレーナーの村木良博氏と、順天堂大学スポーツ健康科学部助教授鈴木勝彦氏の両名を招聘して開催する。

本連盟加盟校109校、加盟生徒数全日制86,240名、定時制2,396名。

3　将来に向けて

宮城県のスポーツ界は、2001年開催の「56宮城国体」の成功に向けて県民一体となった取り組みが成されている。特に主力である高校生の選手強化に当たっては、高体連の果たす役割が重要であり、多大なる期待を寄せられるところである。これまで開催して来たリーダー養成講習会や指導者研修会の内容を更に充実させ選手強化と併せて各専門部の育成をも図って行く必要がある。

さて、少子化の加速により高体連の運営に大きな影響が出ているが、中でも生徒数の減少は深刻であり、将来を見通した予算確保のための会費値上げへの取り組み、又部活動離れによる運動部存続の危機等、今すぐに対策を打ち解決を急がなければならない課題に関係者一同危機感を持って取り組んでいるところである。

スポーツ活動が社会で評価され再び高校スポーツが活発化するには我々指導者の意識改革こそが不可欠な要素であると考える。21世紀は、スポーツを楽しむ健全な高校生が増えている事を期待したい。

「宮城インターハイに出場して」

佐　藤　充　伸

プロフィール
宮城県小牛田農林高等学校
国士館大学
全国高校総体剣道個人優勝
全国教職員剣道大会個人優勝
宮城県仙台高等学校勤務

高校２年の夏、私は地元開催の宮城インターハイに出場することができた。

高校入学時から「地元で日本一を」を目標に休日を返上しての遠征、出稽古、合宿等厳しい稽古の毎日だった。今振り返れば、常に剣道のことで頭がいっぱいだった高校生であった。

しかし、稽古の成果と試合の結果が比例しない。大会が近づくにつれ不安や焦り、試合へ出場することへの恐怖心等が私の大きな壁となった。そんな挫折しそうな時、「克己」という言葉に出会うことができた。相手に勝つには自分の弱い部分に打ち勝たなければならない。この言葉が、私の弱い気持ちを前向きな考え方ができる強い心に変えてくれたのである。

そして迎えた大会当日。心身共に万全の体勢で団体、個人に出場した。団体は、準決勝対阿蘇高校戦で２－２の本数負けを喫し第三位。しかし個人戦の方で、予想以上に調子の波に乗った私が、決勝進出。名門ＰＬ学園高校の選手と対戦した。時間内で勝敗が決まらず、延長戦に入った。なかなか有効打が出ないまま４回目の延長戦となった。その直後、無心で打った胴が一本となり初めて「日本一」を手にすることができた。一本が決まった瞬間、会場内から沸き起こった大拍手と大声援は、今でも鮮明に思い出される。日本一になった実感は今でもわかない。ただ、一つの目標に向かって頑張ったこの経験は、何ものにも代えられない財産である。　そして、ここまでご指導下さった諸先生方や陰ながらご支援頂いた多くの方々に深く感謝している。

現在は教職の道に進み、宮城インターハイでの経験を生かしながら職務に励行している。生徒の成長へのよい導きとして、自分自身もさらに努力精進していきたい。

最後に全国高体連50周年の記念すべき年を迎え、今後益々の飛躍発展を祈念いたします。

秋　　田　　県

《事務局》
〒010-0974 秋田市八橋運動公園１－５
県立スポーツ会館内
TEL 018（866）5999
FAX 018（866）6988

創立年月日：昭和23年4月1日

加盟校数		66校
専門部数		32専門部
加盟部数		928部
部員数	男子	8,593名
	女子	5,207名
	合計	13,800名

年度	会長	理事長	記事
23	中川　秀松	杉山　忠一	連盟創設
24	〃	〃	生徒表彰規定制定
25	高橋　一郎	羽川　伍郎	ソフトボール部新設
26	〃	〃	柔道･ボクシング･ハドミントン･自転車部新設
27	〃	杉山　忠一	高体連旗完成
28	〃	〃	剣道部新設
29	〃	吉井　忠亮	全国スキー大会開催レスリング･登山部新設
30	〃	〃	第1回県高校総体開催
31	村岡　一郎	〃	弓道部新設
32	〃	〃	全国庭球･体操大会開催 ウエイトリフティング部新設
33	〃	杉山　忠一	全国剣道･ウエイトリフティング大会開催
34	〃	〃	ハンドボール部新設
35	〃	吉井　忠亮	全国高校弓道大会開催
36	〃	〃	第16回秋田国体開催
37	〃	〃	日米高校レスリング大会開催
38	鈴木健次郎	岩谷　文雄	
39	〃	〃	
40	〃	〃	第15回全国スキー大会開催
41	〃	〃	全国高校総体4種目開催
42	山本　一	〃	研究部規程制定　全国大会派遣補助金交付
43	〃	〃	定通部新設
44	〃	〃	
45	菊地　俊一	〃	
46	〃	〃	全県体育主任会議開催
47	〃	〃	第22回全国スキー大会開催

年度	会長	理事長	記事
48	菊地　俊一	岩谷　文雄	
49	〃	〃	空手道部新設
50	小田島邦夫	〃	傷病見舞金規程制定
51	〃	館岡昭之助	なぎなた部新設
52	〃	〃	
53	〃	〃	第28回全国スキー大会開催
54	〃	〃	
55	秋山　光雄	神田　勉	
56	〃	〃	
57	〃	〃	
59	〃	〃	全国高校総体開催
60	畑澤　潤一	小林　誠悦	県高校総体輪番制開催決定
61	〃	〃	基金設定
62	榊田　清	〃	
63	室田　弘	〃	
元	〃	京極　敏	伊藤勝三スポーツ振興
2	〃	〃	
3	〃	〃	
4	有江　和郎	〃	各種委員会規程制定
5	松本　健	斎藤　紀明	
6	〃	細谷　義次	
7	〃	〃	第1回中･高合同コーチサミット開催　全国高校総体県選手団ユニフォーム新調　第45回全国高校スキー大会開催
8	小野寺　清	〃	第1回県高体連研究大会開催
9	高田屋敏夫	〃	第32回全国高体連研究大会開催
10	〃	大塚　三男	

1　沿革

昭和23年度　本連盟創設
専門部13部(陸上競技・水泳・体操・相撲・軟式テニス・野球・卓球・サッカー・バレー・バスケット・ラグビー・スキー・ボート)・研究部発足
昭和24年度　生徒表彰規程制定
昭和25年度　会報作成と配布　ソフトボール部新設
昭和26年度　第5回全国ボクシング大会（秋田市）ボクシング・柔道・バドミントン・自転車部新設
昭和27年度　県高体連旗完成
昭和28年度　全国選抜ラグビー大会（秋田市）
剣道部新設
昭和29年度　第7回全国バスケットボール大会（秋田市）
第4回全国スキー大会（湯沢市）
野球部高野連として独立承認
各専門部長を理事とする
レスリング・登山部新設
昭和30年度　第1回県高校総合体育大会開催
ポスター募集開始
応援団連絡協議会結成
競技別部会長・副部会長制定
専門部長を専門委員長と改称
昭和31年度　対外試合規程・専門部規程制定
第10回全国ボクシング大会（秋田市）　弓道部新設
昭和32年度　第10回全国軟式庭球大会（秋田市）　第10回体操大会（秋田市）
重量挙部新設
昭和33年度　第5回全国剣道大会（秋田市）
第5回全国重量挙大会（秋田市）
昭和34年度　第6回全国レスリング大会(五城目町)
全国バレーボール男子大会（秋田市）　ハンドボール部新設
昭和35年度　第5回全国弓道大会（横手市）
第10回全国スキー大会（花輪町）
ホッケー・フェンシング部新設
昭和36年度　第16回秋田国体開催
硬式テニス部新設
昭和37年度　新人戦を県高体連公式競技会とする
昭和38年度　全県定時制大会開催
昭和40年度　全県高校スキー大会が県体スキー大会から独立開催
総体キャッチフレーズ募集開始
第15回全国スキー大会（花輪町）
昭和41年度　全国高校総体4種目開催(バスケット・バレー女子・フェンシング・テニス)
総体公開演技ロードレース実施
昭和42年度　研究部規程制定
全国大会派遣補助金交付
昭和43年度　定通部新設
全県定通制大会となる
昭和44年度　各加盟校に高体連杯寄贈
昭和46年度　全県体育主任会議開催
昭和47年度　第22回全国スキー大会（鹿角市）
名義使用大会承認（9種目）
昭和49年度　空手道部新設。
昭和50年度　傷病見舞金規程制定。
昭和51年度　名義使用大会承認（4種目）
なぎなた部新設
昭和52年度　総体ファンファーレ募集開始
昭和53年度　第28回全国スキー大会（鹿角市）
全国高校総体誘致委員会結成
昭和54年度　昭和59年全国高校総体
・県誘致委員会発足
昭和55年度　昭和59年全国高校総体
・県誘致開催を決議（秋季総会）
・陳情書秋田県議会採択
昭和56年度　昭和59年全国高校総体
・県準備委員会発足
・秋田県開催内定
昭和57年度　59総体推進委員鹿児島総体視察
昭和58年度　59総体推進委員愛知総体視察
全国高校総体中央委員会開催
昭和59年度　全国高体連理事長会議開催
全国高体連加盟団体長会議
59年度全国高校総体開催
59総体特集号発刊
昭和60年度　県高校総体輪番制開催決定
県高校総体総合開会式を県営陸上競技場で実施
昭和61年度　県高体連規約改正
昭和62年度　県高体連表彰規程改正

59全国高校総体総合開会式（雄和町・県営陸上競技場）

2　10年の歩み

昭和63年度　県高校総体を輪番制開催決定後（61年中央、62年県北）、初めて県南地区中心に開催（開会式：横手市民会館）。平成2年の宮城インターハイ（以下ＩＨ）に向け、県高体連独自の強化対策事業をスタートさせる。8月に全国中学校大会（バスケットボール、体操）が県立体育館で行われ、高体連も競技役員として協力。県高体連40周年式典を12月に平安閣で挙行（出席者3百余名）。3月に記念誌を発行。ＩＨユニフォームを平成元年度から、麻生地の帽子（ハット）、上（半袖）下、（足首を絞ったパンツ）共に白に統一して新調することに決定。

平成元年度　県高校総体を中央地区中心に開催（開会式：県営陸上競技場）。戦前、戦後を通じ野球の発展に尽くした故伊藤勝三氏の、県内高校運動部の強化に役立てて欲しいという遺志により3千万円の公益信託「伊藤勝三スポーツ振興基金」を設定。

平成２年度　県高校総体を県北地区中心に開催（開会式：大館市長根山陸上競技場）。宮城ＩＨの登山で大館鳳鳴高が、アベック優勝（男子縦走、女子総合）を果たす。

平成３年度　県高校総体を県南地区中心に開催（開会式：十文字町営陸上競技場）。県高体連規約第1章名称及び事務局の第2条「本連盟の事務局を会長所在の学校内におく」を『――会長の定める場所におく』に改正。平成7年度全国高校スキー大会開催申請書を全国高体連会長へ申請。

平成４年度　創立時から秋田高にあった県高体連事務局を県立スポーツ会館に移転。また、高体連会長に秋田南高校校長が就任。県高校総体を中央地区中心に開催（開会式：県営陸上競技場）。秋田市の有明次郎氏が優勝旗10本を寄贈。定通制部会の創立30周年記念式典を、10月24日に千秋会館で行う。平成7年度全国高校スキー大会の秋田県開催が決定。平成5年度以降の県高校総体を、2年に一度中央地区で開催する3地区輪番制とする。

平成５年度　県高校総体を県北地区中心に開催（開会式：大館市民文化会館）。昭和61年に会費を値上げ（会費を200円から350円に、入会金は1000円のまま）してから据え置かれている会費の値上げを検討。

平成６年度　県高校総体を中央地区中心に開催（開会式：県立体育館）。今年から1条校以外の学校の参加が認められ、秋田高専から3種目に39人が初参加。「県高校総体40回大会・59ＩＨ10周年」記念祝賀会を6月3日に平安閣で行う。県体協から初めて選手強化費がくる。富山ＩＨで吉田清太郎（レスリング115kg級・秋田商)が個人で2連覇を飾る。

平成７年度　県高校総体を県南地区中心に開催（開会式：秋田ふるさと村ドーム劇場）。傷病見舞金規程（治療見舞金・後遺障害見舞金・死亡弔慰金に分ける。部活動等も対象とする）を改定し、本年度から適用。第1回中・高合同スポーツコーチサミットを、「中・高の一貫指導」をテーマに開催。来年度から、ＩＨユニフォーム（帽子：キャップ、上：白のポロシャツ、下：スカイブルーのハーフパンツとキュロットスカート）の新調と、会費の値上げ（会費350円を550円に）を決定。第45回全国高校スキー大会を2月5日～9日に、1か所で全競技を実施できるという新装なった花輪スキー場で開催。従来の補助員という名称を「スタッフ」に改めて高校生主役の大会運営に努め、最終日には花輪高がリレーと女子総合で優勝を成し遂げて、最高の盛り上がりを見せ、成功裡に終える。

村木真紀子（花輪）の選手宣誓

平成８年度　県高校総体を中央地区中心に開催（開会式：八橋陸上競技場）。第1回県高体連研究大会を翌年の全国研究大会に備え、11月22日に秋田市文化会館で開催。スキーＩＨ（岩手県）のリレーと女子総合で、花輪高が2連覇を達成。引き続いて2月20日～22日に行われた鹿角スキー国体では村木真紀

子（5 kmC・花輪）と月居克夫（複合・鷹巣農林）の優勝をはじめ、好成績を収める。

平成9年度　県高校総体を県北地区中心に開催（開会式：大館市民文化会館）。京都ＩＨで能代工高（バスケット）は5連覇を果たすとともに国体、選抜も制し、2年連続3冠王となる。定通部会35周年記念式典を、9月30日に彌高会館で実施。本県で初の第32回全国高体連研究大会を、1月29日～30日に秋田市文化会館で「夢ある豊かなスポーツ活動をめざして」を大会主題に開催。講演（講師：

開会式で挨拶をする高田屋県高体連会長

福島幸雄元ＮＨＫアナウンサー、加藤廣志前能代工高バスケットボール部監督）を2つにしたり、分科会の発表者をローテーションによる割当てと東北各県の発表だけの20名に精選したり、アトラクションに海洋技術高の「なまはげ太鼓」を実施したりという秋田大会らしさも好評を博した。

3　将来に向けて

平成19年に秋田国体開催が決まっているが、9年後には高校3年生が約3500名減少するという少子化傾向と、生徒・教員のライフスタイルの変容や価値観の多様化など、スポーツを取り巻く情勢は厳しい状況にある。しかし、中・高合同スポーツコーチサミットの継続、アーチェリー・カヌー等の育成、施設や指導者の学社連携、父兄や教員のスポーツマインドの醸成などを推し進めながら、高体連独自の選手強化策の推進や部活動の活性化を図っていきたい。

必勝不敗

畑　山　陽　一

平成7年3月雄物川中学校卒業
平成10年3月能代工高卒業
同年4月早稲田大学入学
能代工高時代に主将を務め、インターハイ優勝連続3回を果たす。海外遠征3回。

私の高校時代の思い出は、全国大会（ＩＨ、国体、選抜）9回のうち、8回を制覇したことである。その中に鳥取、山梨、京都インターハイが含まれ、いずれも猛暑の中での優勝であった。特に1年の時の鳥取ＩＨ決勝は、福岡商業に前半で15点差をつけられたのを、ラスト5分で逆転しただけに印象が深い。山梨、京都ＩＨは、田臥などの優秀な後輩が入り、伝統のトラジッションの速いバスケットで快勝し、2年連続8回目の三冠王も達成できた。

勝ち続けることは難しいが、私達は勝っても驕ることなく、新しい目標を持って更に練習に励み、常に挑戦者であることを忘れなかった。負けて得ることはたくさんあるが、やはり勝って得たことが、私達の大きな財産となった。

私は主将としてチームを一つにまとめることを常に考えていた。バスケットボールはチームプレイなので、一人でも欠けるとチーム全体のリズムも狂ってしまう。そういった意味では私達は、横と縦のつながりが良く、まとまっていた。何よりも厳しかったのが、練習中でのポジション争いである。コートに立ったら上下関係は無く、結果がすべてであった。

ＩＨの前には強化練習があり、ＯＢの方が来て試合をしてくれた。ＯＢの中には大学や実業団で活躍されている方が大勢いた。高校生と違うところは、パワーとスピードである。通用するプレイもあれば、全く通用しないプレイもあった。ＯＢの方と試合することによって、私達は自信を持ってＩＨに臨むことができた。3年間で学んだことはたくさんあるが、私は「心技体」という言葉が一番心に残っている。技術、体力そして“やろう”という気持ちが大切だということを決して忘れず、後輩に戦ってもらいたい。必勝不敗！

山　　形　　県

《事務局》
〒990-2492 山形県山形市鉄砲町二丁目10－73
県立山形中央高校内
TEL 023（624）0929
FAX 023（634）6752

創立年月日：　昭和25年2月

加盟校数		67校
専門部数		36専門部
加盟部数		1,325部
部員数	男子	13,429名
	女子	8,459名
	合計	21,888名

年度	会長	理事長	記事
25	木村芳三郎		第1回県高校総体開催
26	〃		5専門部新設
27	〃		全国高校総体バスケットボール大会開催
28	〃		全国高校バドミントン大会開催
29	〃		第1回県定時制総体開催
30	〃		全国高校陸上・スキー大会開催
31			全国高校柔道大会開催
32	居駒　永俊		「高体連」創刊号発刊
33	〃		9人制バレーボール高校女子大会開催
34	〃		全国高校体操大会開催
35	〃		
36	〃		全国高校登山大会開催
37	東海林憲雄		県新人大会開催
38	〃	米田　満	理事長制をしく
39	佐々木俊光	〃	
40	〃	〃	ボクシング専門部新設
41	〃	〃	
42	庄司　善助	〃	フェンシング専門部新設
43	〃	河田　利夫	47全国高校総体開催決定
44	〃	〃	
45	〃	〃	全国高校スキー大会開催
46	〃	〃	自転車専門部新設
47	〃	〃	47全国高校総体開催
48	〃	〃	
49	〃	〃	
50	伊豆田忠悦	〃	

年度	会長	理事長	記事
51	伊豆田忠悦	河田　利夫	空手道専門部新設
52	〃	山上　一郎	庭球・ホッケー専門部新設
53	蜂屋　英夫 大竹　正治	〃	全国高校総体4種目開催
54	河田　親二	黒木　武彦	事務局を県体育保健課より山形南高校に移す
55	〃	〃	県高体連規約改正
56	〃	〃	高体連30年史発刊
57	河田　利夫	〃	全国高校スキー大会開催 漕艇・ヨット・馬術専門部新設 ラグビー専門部再設
58	〃	〃	研究・広報委員会新設
59	〃	〃	
60	鈴木　静夫	〃	県高体連規約改正
61	〃	〃	事務局を山形中央高校に移す
62	國分　三昭	五十嵐秀男	
63	岩木　信孝	井上　博	アーチェリー専門部新設
元	吉江　正夫	五十嵐秀男	なぎなた・カヌー専門部新設
2	大内　正敏	〃	全国高校スキー大会開催 高体連40年史発刊
3	〃	〃	
4	加藤　稔	〃	国民体育大会開催
5	〃	佐藤　通隆	研究委員会を研究部へ 高体連研究紀要創刊
6	小関　廣明	〃	ライフル専門部新設
7	〃	〃	研究紀要発刊
8	鈴木　寛	〃	スケート専門部新設
9	〃	〃	県高体連規約改正
10	鈴木　正浩	梶原　賢	全国高校スキー大会（アルペン）開催

1　沿　革

昭和20年８月の終戦以降、空白と混乱の中、体育・スポーツ界がいち早く立ちあがり、昭和21年に入ると、各競技種目団体の再発足が進められた。学校スポーツの再開とともに、山形県学校体育連盟が昭和22年１月に発足した。この組織が高校中心の活動であったことから昭和25年２月「山形県高等学校体育連盟」と改称し、名実ともに高等学校の自主的な体育団体が誕生した。

◆昭和20年代

発足当時は、加盟校53校、12専門部であり、理事会のみの構成であった組織は、間もなく加盟校校長で構成する評議員会を議決機関とし、各支部代表・専門部代表からなる理事会を企画執行機関として位置づけるなど現在の規約に近いものに改めた。また、事務局を県教育庁体育課に置いた。

発足と同時に、16種目で、男女別総合優勝制度を取り入れ、第１回県高等学校総合体育大会が開催された。県総体（国体県予選会）を兼ねて種目毎分散の開催であった。第２回大会から定時制の部が設けられ、飛躍的な発展をみた。

◆昭和30年代

昭和30年、第６回県高校総体を、県総体から独立した大会として全国高校選手権大会の予選を兼ねて、全種目一斉の開催を実施した。文字通り総合体育大会となり、総合開会式も行われた。昭和34年から県内四大大会（県総体、県高校総体、県定体、中学総体）を四市輪番で開催することになり、総合優勝制度は、昭和35年第11回大会をもって廃止された。

新人大会は、昭和34年頃から各競技団体の主催で開催されてきたが、昭和37年に本連盟の主催大会となった。また、毎年、計画的に全国大会を本県で開催したことが競技成績にも現われ、体操・バドミントンなど、毎年のように全国制覇するチーム・選手が次々と生まれるようになった。

本連盟結成満10年を記念して、機関紙「高体連」創刊号を昭和32年２月に発刊、現在まで継続している。

一方、組織充実のため、規約改正を行い、昭和37年に私立校代表理事の選出、翌38年理事長制を採用した。昭和38年に全国高校総体が初めて新潟県で開催され、本県の誘致運動の気運も高くなった。

◆昭和40年代

各学校での運動部活動は一層活発化した。全国大会等での活躍はめざましく、高体連は本県スポーツ界の中核として重要な位置を占めるようになった。

全国高校総体が、昭和47年度本県開催決定を受け、「総体は明日の山形生む力」のスローガンのもと、綿密な計画が立てられた。県内高校生一人ひとりが「われら主役」の発意のもとに友情の広場・前夜祭・選手歓迎会等を開催し、県内外から「山形総体は高校生の活動と協力によって成功した大会」と絶賛された。

一方、選手の活躍も重要課題であったが、多くの強化策が講じられた結果、優勝６をはじめ入賞81と未曾有の成果をあげることができた。

なお、前年に47高校総体の前哨戦として本県で開催された第20回全国高校スキー大会においても入賞16を果たす大躍進があった。

インターハイ結団式

◆昭和50年代～

事務局が学校現場に移転したことを契機に組織運営の充実、各種事業の主体的取り組みが促進された年代と言えよう。発足以来、県体育保健課に置かれていた事務局を昭和54年山形南高校（以後、昭和61年山形中央高校に移転され、現在に至る）に移転。これを機に、理事長・事務局長を専任制とし、規約・規定等の見直しを行った。専門部長の位置づけ、各種委員会の設置、分担金・特別分担金の学校拠出等、高体連の活動に合うように改められた。

また「べにばな国体」開催に向けて意識の高揚が図られる中、昭和58年２月、第32回全国高校スキー大会が開催され、全種目入賞を果たすなど、これまでにない入賞20を数え、大きな成果をあげた。

2　10年の歩み

この10年は、半世紀に一度の大イベントである「べにばな国体」前、当年度、後と区切ることができよう。

◆「べにばな国体」前

国体の本県開催決定後、分担金の値上げにより「高体連ニュース」の発刊、諸講習会・研修会・各種大会の充実等が意欲的に推進された。そして60年度より3年継続で取り組んだ「山形県高体連の現状」の調査により本県高校生トップ選手の意識等の実態が把握され、選手強化の方向性がより明らかになった。63年度より、中・高体連各地区会長・理事長会議を開催した。具体策として「べにばな」の少年強化を見据えた中高合同練習会等、収穫は大きいものがあった。平成元年度は強化策が功を奏し、団体入賞数が増えるなど競技力の向上がみられた。また国体では、総合成績が16位と史上最高の成績を収め、なかでも少年の部の大活躍があったことは大きな励みとなった。2年度は県新人・一年生大会、スポーツ強化講習会、県補助事業である新人強化・一年生強化事業等、充実した諸事業が実施できた。全国大会をみると、高校総では5種目の優勝をはじめ、前年を上回る入賞を獲得した。本県を会場にして開催された第40回全国高校スキー大会においても、リレーで北村山高校が2連覇に輝くなどクロスカントリーの活躍で前年を大きく上回る入賞を果した。しかし、国体は善戦健闘はしたものの、少年の部の得点は前年を大きく下回る結果となった。少年の部の中核である高校生の競技力向上は喫緊の課題であり、本番で主力となる一年生に対する焦点化した強化の手立て、指導者が強化に専念できる環境づくり等が再度強く認識された年であった。また、「べにばな国体」を間近にしたなか、本県「高体連40年史」を発刊した。各種記録・資料は、本県高校体育・スポーツ確かな充実・発展の証であり、その後の躍進に資するため後世に残すものとして多大な財産となった。3年度は大きな悲しみにつつまれた年であった。大内会長がご病気療養なされ、ご家族の手厚い看護も空しく不帰の客となられたこである。本県高校スポーツの向上発展に常に心を砕かれ「べにばな国体」少年の部の選手強化の先頭に立ってこられた会長であった。関係者一同その志を継いで国体成功の一翼を担う決意をした。この年から県一年生大会を廃止し、新人大会をより充実する形で実施したことは、本連盟の発展・拡充の方向性を示すものとして忘れてならないことである。全国大会の成績をみると、全国高校総体では自転車の新庄工をはじめ、47インターハイ（山形）以来の好成績を収めた。冬季大会においても大活躍があり、さらに選手権大会でも銃剣道やカヌーなど、活躍は目覚ましいものがあり、「べにばな」への明るい展望がみえた年であった。

◆「べにばな国体」当年度

4年度は「べにばな国体」本番の年とあってすべての大会において国体での活躍を標榜して取り組まれた。各種大会で燃え尽きることなく「本番のべにばなで」を合い言葉に強化策を推進した。県高校総体は盛大であった。競技においてもハイレベルであり、全国目指し記録的にも大きな成果があった。例年行われている定通大会においても参加校減少傾向のなかでも、全日制生徒職員の献身的な協力を得て盛大なものになった。宮崎で実施された全国高校総体では正にべにばな国体の前哨戦だけあって、過去20年間で最高の成績であった。

スローガン「思いっきり躍動21世紀の主役たち」は現在の高校生のためのものであり「べにばな国体」成功が本県高校スポーツ発展の一里塚であることを深く認識し、第47回国民体育大会が本県で開催された。前年度に冬季大会3競技がすでに実施されており、少年はスピードスケート500mの優勝をはじめ各種目に入賞し、夏・秋季大会に期待をつないだ。劇的逆転で栄冠を勝ち得た山形工の水球、三連覇の真室川銃剣道、三冠王達成の左沢女子剣道をはじめ優勝32、入賞135の素晴らしい成績をあげることができた。この成果は長年にわたって各校で日常の強化活動を基本とし、特別強化事業を効果的に実施したこと、中高一貫指導体制を確立したこと、指導者の情熱、信頼関係の確立等々競技力向上のみならず有形無形の財産となった。

◆「べにばな国体」後

5年度はポスト国体元年という意義ある年であったが、米沢東フェンシング部三冠をはじめ勢いを維持した年であった。また新たに指導者研修会の事業を起こしたこと、研究部が独立し「研究紀要」の発刊をみたこともその後の高体

連発展にとって意義深いものとなった。6年度は県高校総体参加基準数の見直しがなされた年であった。各大会では好成績を残し、特に全国高校総体では山形インターハイ以来最高の入賞をなし遂げた。7年度はスポーツ障害が問題視されるなか、研究部がその防止策として「部活動安全指導の手引き」を作成した。8年度は全国大会の好成績に目を見張るものがあり、高校総体での入賞数や選手権でのカヌーの活躍により「べにばな」以降最高の成績を収めた。9年度は高体連として大きな転換期あった。現在および将来を見据えての規約改正を行った。生徒減少傾向の中、各事業充実のための分担金値上げ、優秀校視察など新規程に基づいた各事業の展開、県定通大会充実のための見直し等である。また平成10年度全国高校スキー大会（アルペン）が諸般の事情により急きょ本県で開催されることになり、慌ただしく準備に追われることになった。また、スケート専門部が新たに加入し、36専門部になったことも特筆すべきことである。10年度は急きょ開催決定とはいえ、全国高校スキー大会をスローガン「まきおこせ銀色の風　君の全てをこの瞬間に」｜のもと心に残る大会にしていきたいものである。

生田選手（日大山形）の活躍H10.3

3　将来に向けて

平成10年度より、県教委の組織改編で体育保健課がスポーツ課と保健福利課とに分かれ、スポーツ課の職責はこれまで以上に競技スポーツの強化·向上への取り組みが一層鮮明化したといえる。学校教育現場にも、最近の社会情勢の多様化の波が大きく押し寄せているなか、県高体連は生涯スポーツの観点から高校スポーツを教育活動の一環としてとらえ、心技体の向上をめざし、人間性や社会性を養い、標榜する自己実現を図って努力することを基本理念として対応していくことを肝に銘じて邁進していくことが必要であろう。（梶原記）

日　本　一

清野　志津佳

平成2年左沢高校入学。先鋒として活躍。平成4年に全国選抜、高校総体、国体で三冠達成。平成5年順天堂大学入学。平成8年中退後、現在河北町に勤務。

私は期待と不安を抱きながら左沢高校剣道部に入部した。最初は入部するべきかどうか迷った。しかし、斎藤監督の「日本一になる」という言葉で迷いはなくなった。

日本一になるための練習が始まった。それは想像以上の厳しさがあった。しかし、音を上げる人はだれもいなかった。みんなの目標が同じだったからだと思う。日本一、そして三冠王それだけを目標にやってきたのである。

高校2年の3月、第一回全国高校選抜大会が行われた。初代女王の座につくことができた。夢にまでみた日本一である。しかし喜んでばかりはいられなかった。まだ一つ目の目標なのである。残り二つ。全国高校総体と地元山形で行われるべにばな国体である。高校3年の8月、宮崎県で行われた高校総体。この大会での優勝はこれまでなかった。準決勝、対阿蘇高校戦。崖っぷちに立たされた試合だった。しかし、負ける気はしなかった。監督を信じ、仲間を信じた。結果は2対2の内容勝ち。そして決勝戦対神村学園。3対1で勝ち優勝を決めた。「やった」という言葉しかでてこなかった。本当にうれしい優勝であった。残すは一つ。10月、べにばな国体が開催された。たくさんの方から期待された。それはプレッシャーでもあったが、よい刺激でもあったと思う。監督、そして選手の気持ちは一つになっていた。高校3年間の最後となる試合である。決勝戦対熊本県。3年間の集大成が試合のなかに見事に出、3勝1敗で優勝を決めた。三冠達成の瞬間でもあった。みんなで抱き合って泣いた。3年間頑張ってきてよかったと心から思えたときであった。

今振り返ると、貴重な体験をさせていただいたと思います。先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。そして3年間一緒に頑張ってきた仲間は私にとって最高の宝物です。

福　島　県

《事務局》
〒960-8002 福島市森合町5-72
県立福島高校内
TEL 024（531）3890
FAX 024（536）3004

創立年月日：昭和23年5月23日

加盟校数		119校
専門部数		35専門部
加盟部数		234部
部員数	男子	10,346名
	女子	7,420名
	合計	17,766名

年度	会長	理事長	記事
23	幸野　岩雄	鈴木　勝枝	県高体連準備委員会5月6日開催
24	稲村良之助	〃	全国高体連福島県支部となる
25	〃	〃	県内5支部制とる
26	〃	〃	一般生徒野外活動教室
			尾瀬沼探勝1泊2日
27	〃	〃	県高体連表彰要項作成
28	〃	〃	全国高校バレーボール
			選手権大会　於:郡山市
29	〃	〃	全国高校スキー選手権大会 於:猪苗代町
30	栗原　茂	鈴木　武雄	第1回高校体育大会開催 於:福島市
31	〃	〃	
32	〃	〃	県高校新人バレーボール競技開催
33	鈴木　美雄	鈴木善兵衛	表彰要項職員の部設定水
			泳飛込み　於:会津若松市
34	〃	〃	全国高校バドミントン大会 於:
			会津若松市·漕艇 於:荻野ボート場
35	新谷　茂	〃	県高体連主催山岳リーダー講習会
36	〃	〃	全国高校馬術·男子9人制バレー
			ボール大会開催 於:福島市
37	佐藤　広治	〃	県高校大会参加制限て
			オープン制を廃止
38	〃	佐々木英雄	第13回全国高校スキー
			大会 於:猪苗代町
39	〃	〃	県高校新人大会15種目
40	〃	〃	
41	新谷　茂	松山　六郎	
42	三本杉国雄	〃	
43	〃	〃	事務職員雇用 須藤サヨ
44	〃	〃	
45	〃	〃	
46	玉川　春雄	箱崎　和雄	研究委員会設立

年度	会長	理事長	記事
47	玉川　春雄	箱崎　和雄	53IH開催県議会にて誘致決定
48	〃	〃	野外活動教室開設
49	鈴木　勝枝	陸　勤	事務局福島女子高校内に設置
50	〃	〃	全国理事会にて53IH開催内定
51	山本敬二郎	〃	53総体受諾
52	〃	〃	
53	〃	〃	全国IH開会式及び19種目開催
54	〃	鈴木　正一	3地区方式による高校大会開催実施
55	飯島　護	〃	創立30周年記念大会
56	〃	〃	冬季野外活動開設
57	〃	〃	専門部へ旗30旗寄贈 故大沼勝雄
58	〃	〃	昭和58年度全国高校スキー飛込み大会 事務局設置
59	大槻　進	〃	全国高校スキー 於:猪苗代町スキー
60	〃	高橋　充雄	事務局県立福島工業高校へ移転
61	〃	〃	大会開催に伴う派遣文書様式設定
62	小松　原格	〃	
63	折原　常弘	関川　正道	事務局 S63年以降 福島高校内
元	早川　俊一	〃	
2	〃	浅尾　晃左	
3	紺野　勇	〃	
4	斎藤　久	〃	
5	砂子田敦博	〃	第43回全国高校スケート選手権大会開催
			スピード 国体リハーサル大会開催
6	〃	〃	
7	〃	〃	第50回国民体育大会完全国体開催
8	〃	〃	
9	杉原　陸夫	〃	4/30～6/30 県教育長へ就任
	高城　俊春		第47回全国高校スケート選手権大会
		〃	分離開催 スピード　於:福島県
			フィギュア 於:宮城県
10	〃	〃	アイスホッケー 於:青森県

1 沿 革

(1) 福島県高体連発足

昭和23年

2月17日 東北6県体育協会長・体育課長会議開催 於 大鰐市

決議事項

高体連の事業については、各県体育協会一本化にする

5月6日 県高体連準備員会発足

5月17日 第1回評議員会の開催

福島県中学校校友連盟を名称改め、福島県高等学校体育連盟とし発足する。

目的‥体育事業の推進

組織の位置付け

県体育協会の加盟団体と規制されていた。

昭和25年 下記事項について会議開催

審議事項 高校生の参加する各種大会等については、主催・共催とし、登録費については、各学校一括し関係する競技団体に納付すること。県高体連が県体育協会から、分離し、独立する意志を表示した。

昭和30年2月 会議内容 この申し入れ対し県体育協会は単独開催について猛反対の度を示し、高体連は学校側の要請に基づいて開催するものだと応酬、血相目の色を変えて大論争となった径緯あった。

体育協会側は高校生の大会への出場権を拒否を主張し高体連側は生徒に関する管理権を主張両者譲ることなく会議は流会となった。その後当時の高体連会長栗原 茂氏が涙ぐましい努力をし東奔西走し県保健体育課長細川昌男氏のとりなしで、根本武雄氏 軟式庭球会長・神田久太郎氏 柔道連盟会長 その他多くの方々の協力で承認され、県高体連主催の単独開催が実施可能を見るこができた。

昭和30年 6月4日第1回福島県高等学校体育大会を開催する、午後4時より福島市信夫ケ丘競技場において意義深い開会式を開催する。参加校82校参加人数4,363名の入場行進によって大会3日間の日程で、競技19種目開催。

当時の状況については，全国高体連40年に記載してあるので参照してください。

(2) 躍 進 期

新人大会開催の径偉（S32年～S60年）

競技力向上を踏まえ選手強化面に力を傾注し国体予選後の生徒の活動場面が翌年の高校大会までオフになるため、昭和32年にバレーボール協会主催で大会を開催した。

以後昭和55年までは各競技種目団体が主催として実施されていた。

昭和56年に学校教育活動としての対外競技の運営に移行するよう検討され，昭和58年度全種目を一括し、県教委の共催を得て昭和59年度から高体連主催行事として実施するなお、高体連が主催する大会の規模が拡大され、運営面で支障をきたすようになり、運営方法について検討し、現在に至っている。

ビッグイベント53゛ IHを開催。

種目 19 実施これを機にあらゆる角度から競技力向上等ついて学び、体育・スポーツ分野が拡大された。

(3) 充 実 期

平成7年度に第50回国民体育大会誘致決定以来、本県のスポーツに関する考え方もプラス志向へとスライドし、選手強化に県が本腰をいれ、県競技力対策本部は，強化指定選手・強化指定校をリストアップし強化事業を実施。

なお、施設面の整備化が進み大会おける運営面で容易になった。

しかし、これに伴い借損料が高く、既存施設の活用が次第に薄れるという場面が出てきた。

今後、これらの対応について検討し、県の協力を仰ぎ徐々に免除の対策方向になりつつある実際問題として、時代に即応した組織の改革更には、上限のない競技力向上に対する選手育成の問題、大会運営に伴う安全対策等の研究をし、諸先輩の築いてくれた財産を絶やすことなく原点に戻り努力の途をたどりたい。

2　10年の歩み

日本の政治・経済・教育界はピラミッドを築き上げる過程の中で、頂上を見極めないまゝ岩石が崩れ落ちる現象が県内にもその姿勢が及んでいるのは事実である。高校教育の転機となった、昭和23年学制改革時期に予想もつかない世相の変化に、今活字としまとめるが不可欠といっても過言ではない。

前段に述べた通り、本県では第50回国民体育大会の開催が誘致され、県民のスポーツ熱も高まり、ワールドカップサッカー競技と同状態で国体ムードが洗脳され我々にも及び現在もなお引ずっている現象が見られる。

高校生が強化事業の一環として多く県内外合宿に足を向け競技力向上一筋であった。

本連盟も多様化する国体ムードの中で、業務内容も以前とは異なり数段複雑化し昭和43年に専門事務職員を県公務員処遇で雇用して以来平成5年まで、会長の傘下で理事長と2人で業務をこなすのは非常に難儀であった。

平成3年度より県教育委員会の配慮により常勤講師の1名の増員が3年続き、平成9年度より補充枠が教諭で対応の場ができた。

しかし、今後については，関係機関と打合せをもち、業務遂行に支障のないよう対応したい国体に絡み専門部の加盟もフェンシング・なぎなた・カヌーと平成9年度段階では34の大所帯にふくれ上がりました。

現在加盟校数119校・加盟生徒数80,347人、平成9年度に負担金の値上げ当連盟の本予算の71.0%が負担金で賄っている状況である。

◎会員数推移及び負担額

年度	会員数(人)	負担額（単位:円)
昭和63年	86,393	41,777,590
平成元年	88,159	42,648,610
2	90,599	45.358.210
3	89,899	42,504,170
4	89,172	42,436,000
5	87,369	41,552,030
6	86,323	40,438,320
7	84,870	40,438,320
8	82,487	38,693,550
⑨	82,223	値上げ62,333,160
10	80,799	61,567,350

◎負担金　平成9年度値上げ　　単位:円

	入会金	学校負担金	会費
昭和63年(全)から	600	170	100
平成8年(定)まで	200	100	40
平成9年(全)	800	300	200
(定)	260	170	80

高体連主催大会開催に伴う経費は、会場借用費・審判謝礼等を積算すると、高校大会は本予算の約12.5％・新人大会約9.8%、年間連盟主催・共催大会経費及び専門部運営費等め約30.0%と膨大な数字を占めている。

実際、今回の値 上げについては専門部への交付金の増額さらには諸物価の値上げが主であった以後、少子化問題が大きく反映していく昨今対応策に難を示すことは時期早々の問題になるのではないかと懸念されます。

組織は充実したとはいえ、総ての面に過度期を迎え、創立40周年記念誌に襟をただし自慢し記載した一般生徒の還元事業として、昭和55年度に冬季野外活動スキー教室を沼尻スキー場において開設して以来17年間開設いたしました。開設当時生徒380名・指導者約50名23と大規模な事業であったが、平成4年頃よりケートボードの急激な普及で年々参加者も減少し平成8年度を最後にピリオドを打ちました。主催大会の規模は益々ビッグイベントに成長し、併行し選手の技術は向上し全国高校総体・全国規模大会等において、一部においては入賞29種目も増え、大会に出向く足取りも軽く、会場において、視線の注ぐ場面が多くなったことに対し非常に嬉しく思っております。

しかし、今後、少子化の時代を迎え学校教育にも陰りの影響もくるものと思われます。

本連盟も運営面では、経費面の皺寄が大きく反映することを予測し心の準備をし、大会等における開催方法等を緻密に計画し、本連盟の専門部の安易な何とかなるという考えを捨て根本的な打開策を講じ、更には全国高体連の近い将来財団化にしたいという意向を示しているが、本県においても大なり小なり検討する余地は身近に迫っている問題であると痛感いたします。

文部省は学校における部活動の問題を外部に傾注しているが、時代の先取りだとすれば、やむ得ないかなーと思いますが，かっての指導者は家庭をかえりみず、指導にあたっていた人

達は大勢いたはずです。

このことがベストということではなく、学校という現場で、スポーツを通して、生徒とのコミュニケーションが充分果たされてきたのではないかと信じたい。

私は，原点である学校体育の一環性として、校内での　選手育成　を望んでいるのが本音である。

この問題については、時間をかけ生徒の心身の育成にプラスになる方向へと発展するようにキャッチボールをしてくことが妥当ではないかと思います。

同じ様に県も外部指導者による英才教育方針案を投げかけてきているが、今後、現場での指導者との接点の部分について、どのように対応していくか興味のある場面である。

3　将来に向けて

現在まで組織の拡充·大会運営方法など。数多くの問題点を各関係機関のご指導をうけながら遂行してきたが、急変した灰色の濃霧の時代が至るところにその現象が出てきている。

少子化時代により、まず問題になるのは各学校における、部員数の減少し　切磋琢磨　という文言表現がどんな形で現れるのか疑問を抱きます。

前文での文部省の意向について、意見を述べさせていただきましたが納得いくような気がいたしました。

実際問題として、展望と言われても今後の動きを読めないのが本音であるが、本県も50周年の間、組織つくり、更に競技力向上の問題等について、努力してきた足跡を消すことのないよう、高体連業務を試合に例えれば、出場することが最大の目標でなく、　勝つ　ための対策を講じ、他県の納得する場面があれば、参考にし、これを機に原点に立ち、バインダーに線引し図面を作成し問題点を避けることなく、関係者と膝を交え、慎重に審議し解決の糸口を見い出すべく努力を惜しまない方向に考えているが、展望を語るという事に対して、まっ不可欠に感じます。

全国高校総体の思い出

小　川　博　之
国士館大学陸上部　3年
福島県立田村高等学校出身

平成8年度全国高校総体
陸上競技 1,500 M　5位
3,000 M　2位

4年前、高等学校へ入学して、全国高校総体という、檜舞台で1,500 M決勝に出場し、国で制覇するということの難しさを味わいま した。決勝での記録は、福島県の高校記録高1歴代1位という記録を残すことが出来ました。

しかし、結果は10位入賞すらさせてもらえなかっ。この悔しさと1年生ながらこれまでやれたいう自信に満足した。2年次には1,500 Mに加え5,000Mにおいても出場するこが出来た。1,500 Mでは優勝候補とさわがれてていたが、しかし、またもここで、予選で の転倒だった。直ぐに立上り走りつづけたが、追いつけず、予選落ちであった。このことが尾を引き、5,000Mでもあと1つ入賞に届かず9位に終わってしまった。

中々勝たせてくれない全国の壁は、高く厚く感じる毎日でした。高3最後の年、2種目の出場を決め、再び2種目優勝候補に挙げられた。

最初の決勝種目は1,500 Mであった。あ　とがないんだと自分言い聞かせ望んだが、自分 の中のプレッシャーに負け5位に終った。残すは5,000Mの最後のレースに賭けた勝ちに徹したレース運びをしたが、ケニアの留学生には勝ことが出来なかったが、日本人トップ2位だった。

あれから約2年の月日が過ぎ、この間、国体ジュニア選手権大会と数々のタイトルを手にするこが出たが、高校総体は私にとり、勝負に賭ける厳しさを教えてくれた大会だった。今、競技する自分があるのは、この大会で体験させていただいたからだと、深く感謝いたしております。

地元、福島県で応援してくださっいる方々のためにも大きく飛躍し、日本のタイトル奪取更には、世界へ目指し頑張っていきたいと思っております。

茨　　城　　県

《事務局》
〒310-0045 水戸市新原2-11-1堀原運動公園内
TEL 029（254）0855
FAX 029（254）0855

創立年月日：昭和23年11月22日

加盟校数		138校
専門部数		35専門部
加盟部数		2,506部
部員数	男子	18,454名
	女子	10,997名
	合計	29,451名

年度	会長	理事長	記事
23	西野　正吉	細谷　政一	高体連発足12専門部
24	〃	〃	軟式野球部新設
25	稲葉甲午郎	大川　潤	連盟規約制定
26	〃	〃	全国体操大会(水戸)
27	林　勘二	〃	全国柔道大会(水戸)
28	〃	〃	剣道部新設
29	〃	〃	県高体連旗制定
30	〃	細谷　政一	水海二全日本ハンドボール大会に優勝
31	白土　栄一	〃	表彰バッジ制定
32	〃	〃	弓道他3専門部新設
33	〃	〃	高体連発足10周年
34	〃	〃	ボクシング部新設
35	儀間福次郎	〃	ヨット部新設
36	〃	〃	
37	〃	〃	事務局水戸一高へ移転
38	〃	〃	漕艇部新設
39	〃	〃	東京オリンピック
40	〃	〃	
41	〃	〃	会費値上げ60円
42	高野惣太郎	横須賀　英	事務局水戸農に移転
43	〃	〃	高体連発足20周年
44	〃	〃	
45	〃	〃	空手他1専門部新設
46	〃	〃	ＩＨ出場者に補助金
47	橋本　一郎	〃	専門部参考規程制定
48	〃	〃	スケート部設置
49	〃	〃	茨城国体開催
50	須田　政明	〃	ＩＨ３種目開催
51	河内　義一	雨海左武郎	専門部長会議開催
52	〃	〃	会費値上げ170円
53	〃	〃	30周年記念式典挙行

年度	会長	理事長	記事
54	河内　義一	雨海左武郎	
55	〃	〃	細谷賞の制定
56	樫村　旭光	〃	ＩＨ３種目開催
57	鈴木　勲	〃	
58	鷲　松四郎	〃	長距離の水戸三高活躍
59	〃	小田部光明	事務局長専任　全国空手道大会(水戸)
60	矢口　四郎	下山田　栄	会費値上げ350円
61	根本　義弘	杉山昭一郎	高校総体開会式復活
62	〃	〃	
63	〃	〃	40周年記念式典挙行
元	岩﨑　貞夫	菅又　正雄	
2	〃	〃	
3	〃	〃	全国総体陸上で土浦日大(男子)優勝
4	本橋　利美	大木　弘寿	高体連登録料の導入
5	〃	小祝　仁晃	ＩＨヨット本県開催
6	〃	〃	
7	松　廣義	坂本　忠夫	平成14年度全国高校総体本県開催を誘致
8	小澤　智	〃	アトランタオリンピックに水泳山野井(鹿島学)，女子柔道一見(土日大)出場
9	〃	中村　昌平	平成14年度全国高校総体本県開催内定
10	高野　惣一	田口　弥	平成14年度全国高校総体本県開催決定 レスリング霞ヶ浦9年連続12度目全国総体制覇 全国少林寺拳法大会(水戸) 50周年記念式典挙行

1　沿　革

昭和23年　県高体連発足(県保健体育課内)
　　12専門部　会費3円
昭和24年　軟式野球部設置
昭和25年　連盟規約制定
昭和26年　県北，水戸，県南，県西，県東地区の5地区となる
昭和27年　柔道部設置　会費20円
昭和28年　剣道部設置（しない競技）
昭和29年　県高体連旗制定　会費30円
昭和31年　表彰バッジ制定
昭和32年　レスリング，弓道，バドミントン，登山部設置で19専門部
昭和33年　県高体連発足10周年記念会報発刊
昭和34年　ボクシング部設置
昭和35年　ヨット部設置
昭和36年　県高校総体総合開会式を実施
昭和37年　高体連事務局が水戸一高に移転
昭和38年　漕艇部設置　会費40円
昭和40年　県高校総体は県民総体に合併
昭和41年　事務局に事務局員をおく　自転車，ウエイトリフティング部設置
　　会費60円
昭和42年　事務局を水戸農に移転
　　選手強化，研究調査委員会設置
昭和43年　ホッケー，庭球部設置　県高体連発足20周年記念会報発刊　会費80円
昭和45年　事務局水戸三高へ移転
　　空手道，フェンシング部設置
昭和46年　馬術部設置
昭和48年　スケート部設置
昭和49年　弔慰見舞金規程制定　会費100円
昭和50年　全国総体のバドミントン，ボクシング，ヨットを本県にて開催
昭和51年　初の専門部長会議を実施
昭和52年　会費値上げ170円
昭和53年　県高体連発足30周年記念式典挙行
　　エアライフル部設置
昭和55年　細谷賞の制定　会費250円
昭和56年　全国総体の漕艇，フェンシング，レスリングを本県にて開催
昭和59年　事務局武道館へ移転　事務局長専任
昭和60年　会費350円
昭和61年　県高校総体総合開会式復活
　　なぎなた部設置

2　10年の歩み

昭和63年度　加盟校133校32専門部
　　県高体連クラブ活動人数36,369人

今年度は茨城県高体連40周年に当り記念事業として11月15日（火）に記念式典を挙行，また高体連会報第37号に茨城県高体連発足40周年記念号を合併させ発刊した。

国際交流事業である，日・中交流事業は本年中国に江蘇省にレスリング・ライフル射撃の2種目の選手が訪中した。

全国高校ラグビーフットボール大会で茗渓学園が決勝進出を果たした。大阪工大高との決勝戦は，天皇陛下崩御により試合は中止となったが，茗渓学園の初優勝は本県ラグビー界の快挙であった。

平成元年度　加盟校134校33専門部
　　県高体連クラブ活動人数37,139人

会長に岩﨑貞夫氏（竜一長）が就任，理事長には，菅又正雄氏（笠間頭）が選任された。加盟校については，鹿島学園を加え134校，専門部もスキー部が新設され33専門部になる。

全国高校総体で特筆されるのは，水泳の飛込において，坂田芳寛（土日大）が両種目（高・板飛込）に高得点を重ね，個人総合，団体優勝を飾った。

また，ヨットにおいては，国体22年ぶりの少年男子種目別優勝も快挙である。

平成2年度　加盟校134校33専門部
　　県高体連クラブ活動人数38,363人

平成5年度全国高校総体ヨット競技の本県開催も準備打合せ会議を開き，土浦市の協力を得て進めることになる。

県高校総体の総合開会式は，5月19日笠松で雨の中118校，約4,000人の参加者を得て開催。イベントとして，サッカーの関東県予選会の決勝戦を参加者全員で見学・応援して，県高校最大のスポーツ大会の開幕をアピールした。

全国総体では，バドミントンの常総学院は，創部6年目にして男子団体とダブルスを制した。特に，同校でのダブルス決勝と女子の決勝進出は，レベルの高さと層の厚さを示してくれた。

平成３年度　加盟校134校33専門部
県高体連クラブ活動人数39,431人

規約の改定が行われた。従来の幹事会を各地区・定通部の代表理事，領域別専門部の代表理事，幹事による常任理事会に改め副理事長を複数制にする。

生徒数減少に伴う高体連の財源確保がクローズアップされてきた。

全国高校総体は，陸上競技での土浦日大男子総合優勝は県勢にとって水戸工以来13年振りの快挙であった。

平成４年度　加盟校134校34専門部
県高体連クラブ活動人数39,191人

昭和59年度の機構改革で事務局が県武道館に移転して8年が経過した。この年より事務局は競技場管理棟（前体育研修室）に移る。県教育研修センターオープンに伴い県体育協会の配慮のもと，新しい環境の中で4年度をスタートした。

会長に本橋利美氏（下妻一長）が，理事長に大木弘寿氏（鉾田二頭）が就任される。長い間，加盟申請が出されていた「少林寺拳法」の加盟が認められ，34専門部になる。

高体連の財源確保について「高体連登録料」の導入が承認された。

県高校総体の学校別総合得点制度が，正式に採用される。

平成５年度　加盟校134校34専門部
県高体連クラブ活動人数39,248人

理事長に小祝仁晃氏（太田一頭）が就任される。

全国高校総体ヨット競技が本県で開催される。8月1日の開会式，そして2日から5日までの競技は，日程どおり全て順調に行い終了した。本大会での県選手の活躍はすばらしかった。男子ＦＪ級ソロで土浦日大優勝，霞ヶ浦3位，男子ＦＪ級デュエットで霞ヶ浦が優勝，土浦日大2位，女子ＦＪ級ソロで土浦日大が優勝と，4種目中3種目に優勝し，2位，3位にも入賞と完璧に近い成績を収めた。

平成６年度　加盟校135校34専門部
県高体連クラブ活動人数37,379人

晃陽学園高の加盟があり135校になる。

本県高体連の長年の懸案事項であった「全国高等学校総合体育大会」の開催については，東地区の茨城県・千葉県・埼玉県の未開催3県で調整をして，平成14年は茨城，17年は千葉県，20年は埼玉県という開催順序で関東高体連関係3県での理解を得開催できるよう県当局へお願いをする段階に至る。

平成７年度　加盟校136校34専門部
県高体連クラブ活動人数36,479人

つくば秀英高の加盟があり136校になる。

会長に松廣義氏（水戸三長）に，理事長には坂本忠夫氏（日立商頭）が就任された。

「全国高校総体」の平成14年度開催の内々定を受け9月20日に臨時評議員会を開き平成14年度全国高校総体推進委員会を発足させ本県開催に向け準備を進める。

また，新しい地域による5地区8ブロック制を採用する。加盟校以外の学校が県内大会全てに参加を認められる等，課題の多い1年間であった。

平成８年度　加盟校136校34専門部
県高体連クラブ活動人数33,438人

会長に小澤智氏（中央長）が就任された。

復活11年目を迎えた県高校総体の総合開会式が5月10日笠松にて，128校，3,228名の参加を得て行われた。この年度新しい試みとして，参加者全員が見守る中，地区対抗リレー(16人×100ｍ）が実施され，各地区代表選手は参加者から盛大な声援を受けた。

全国高校総体では，レスリング団体で霞ヶ浦が7年連続10度目の優勝を飾った。

平成8年は，オリンピック開催の年であった。本県高体連史上はじめて，山野井絵理（鹿島学・水泳），一見理沙（土日大・柔道）の両選手がアトランタオリンピック大会に出場した。

平成９年度　加盟校137校35専門部
県高体連クラブ活動人数29,451人

友部東養護学校が加盟，専門部にはアーチェリー部が加盟して，加盟校137，35専門部となる。

理事長に，中村昌平氏（土浦二頭）が就任される。

この年度は，平成14年度に本県開催が内定している全国高等学校総合体育大会に向けての具体的な活動を展開。県教育委員会を中心に進められてきたインターハイ開催競技種目別会場地が県内20市8町3村に決まる。

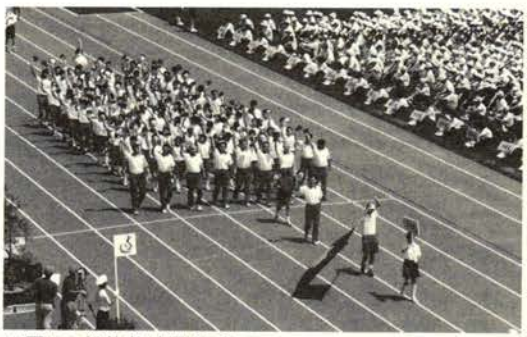
平成14年に向けての強化策として県の財政

的支援を得て中学校·高等学校の専門部の先生を対象に平成７～９年は指導者研修·派遣事業を，平成９～10年は指導者養成事業を行なう。

全国高校総体では，レスリング団体で霞ヶ浦が８年連続11度目の優勝を飾った。

定通制大会では，女子バスケットボールで平成６年にも優勝している，水戸南高通信制が本年度見事優勝。

また，第52回国体（平成９年１月）における冬季大会ではアイスホッケーで水短附が３位と活躍する。



四国'98総体茨城県選手団

3　将来に向けて

平成10年６月２日（火）の全国高体連理事会において，平成14年度全国高校総体の本県開催が正式に決定した。開催に向けての準備も県の指導を受けながら，早急に進めていかなければならない部分もあるが，本県高体連の諸活動が重要な役割を果たすことを認識しながらも，時代の進展や社会の変化とともに生徒数の減少に伴う部活動への影響，週５日制に伴う余暇の活用，生涯スポーツ時代到来を迎えての学校体育と社会体育の関連等新たな課題が提起されてきている。

本県高体連としても，「和」の力を結集し向上心を持って活力ある歩みを刻み，平成14年度に向けさらなる発展に繋げて行くところである。

インターハイを目指し得たもの

坂田芳寛

平成元年土浦日大卒
筑波大，ミキハウス
日本選手権で１M飛板５回選手権獲得，
'97年ユニバーシアード代表，全米選手権
１M飛込２位，３M飛板４位

「高校総体団体優勝」それは個人種目制覇よりも格別な喜びを味わった。

中３の全中でライバル校に入賞者人数１人の差で団体優勝を勝ちとられ，いつも１人で大会に参加していた私は，団体優勝への厚い壁を感じ，悔しい体験をしたと共に，それに憧れた。

高知インターハイの年は様々なことが私の身の周りで起きた。初めての国際大会出場，全日本レベルで対等に戦える技の修得，弟を含めた３人の新入部員，そして祖母の他界，これらの出来事は私に自信やインターハイ優勝への執念厳しい練習に耐える決心を心の中に植えつけてくれた。

チームメイトが増えたことにより，練習中の雰囲気に活気がでて，しかも弟（和也）とはライバル意識を燃やして，日頃から切磋琢磨するようになった。そして，県大会や関東大会で優勝を争いつつ学校の名誉のためにベストを尽くしていった。

本番のインターハイでは，優勝へのプレッシャーから高飛込予選前半は精彩の欠ける演技が続いた。後半は自分の演技に集中することができ，１位で予選を通過した，弟はライバルに追いつかんばかりの奮闘で４位。

決勝では，今までにない体験をした。それは２人の気持ちが通じ合い，終始失敗を恐れない勇気を与え合っていたことであった。しかも，お互いに成功した演技には，それに勝る演技で応えていた。その結果，私は高飛込·飛板飛込共に優勝し，弟は１年生とは思えない安定した演技で他の選手を圧倒した。そして，ライバル校に大差をつけて団体優勝を勝ち取った。

この試合で，飛込という個人競技でもチームワークで難関を乗り越えられれば，ベストに近い成績をだせることを学んだ。

栃　　木　　県

《事務局》
〒320-0057 栃木県宇都宮市中戸祭1-6-3
スポーツ会館内
TEL 028（622）8660
FAX 028（622）7579

創立年月日：昭和21年9月1日

加盟校数		85校
専門部数		33専門部
加盟部数		1,479部
部員数	男子	14,612名
	女子	7,714名
	合計	22,326名

年度	会長	理事長	記事
21	山本　作郎	黒後　梅男	「栃木県学校体育連盟」として発足　国民学校・青年学校　中等学校の2連絡部12専門部を県庁内に設置
22	〃	〃	
23	〃	〃	連絡部が小・中学校、高等学校の2部となる
24	〃	〃	事務局を県教委に移転
26	〃	〃	定時制が加盟
29	篠崎光太郎	〃	全国高校柔道大会、同剣道大会を開催
30	〃	〃	創立10周年記念表彰
31	〃	〃	事務局を県教育会館に移転　全国高校スケート大会開催
32	黒田　邦博	〃	
34	阿部　　鎮	井田　福次	小・中・高分離し高体連独立
35	〃	中岡　哲夫	第1回県高校総体開催
37	〃	〃	第1回定時制総体開催
41	〃	〃	全国高校スケート大会開催
42	〃	遠藤三智男	
43	〃	〃	
44	藤田　三郎	〃	全国高校総体3種目開催
45	〃	〃	
46	〃	半田　　実	全国スケート大会開催
47	佐藤　金作	〃	選手強化委員会設置
48	〃	〃	
49	石川　一正	大島　道夫	参加料徴収開始
51	〃	〃	機関誌「高体連」創刊
52	石川　一正	大島　道夫	高校スポーツ優秀選手賞制定　関東高体連事務局当番となる
53	〃	〃	
54	堀内　肖吉	大塚　敏男	事務局新教育会館移転
55	〃	〃	事務局スポーツ会館に移転　栃の葉国体開催
56	増山　陽章	〃	全国高校総体2種目開催
57	岡島　宣八	〃	
59	〃	〃	全国高校スケート大会開催　調査研究委員会設置
60	〃	〃	
61	〃	〃	発足40周年記念式典
62	徳田　有基	鳥居　行雄	競技運営の一部改善を徹底
2	池田　　收	〃	平5総体開催決定
3	〃	〃	全国高校スケート大会開催
4	山野井　暉	〃	
5	〃	〃	全国高校総体夏季大会開催
6	〃	小堀　信夫	傷害見舞金制度発足
7	荒川　伸夫	〃	全国高体連研究部事務局　関東高体連事務局
8	〃	〃	50周年記念事業実施
〃	10月～小林惺		荒川会長急逝
9	吉田　幸雄	吉田　忠征	大会出張等の考え方を申し合わせ
10	神原　彰夫	〃	平成11年度全国高校スケート大会開催決定

1 沿 革

[昭和20年代]

昭和21年9月1日、終戦直後の荒廃した世情復興をめざすには“まずスポーツ振興から”を合言葉に、従来からの「大日本学校体育振興会栃木県支部」を改組し、国民学校、青年学校中等学校に一本化して、「栃木県学校体育連盟(学体連)」が発足した。発足当時の専門部は、陸上競技、野球、籠球、排球、蹴球、庭球、卓球、相撲、体操、水泳、スキー、スケートの12専門部であり、当時の会費は中等学校職員生徒1名につき年額1円であった。

昭和23年には、新制中学、高校が誕生、組織も小・中・高からなり高等学校の会費は1円から12円に値上げされた。また、ハンドボール、ソフトボール、ダンスの3専門部が新設され15専門部となり、この年、一部の種目を除いて戦後初の学体連主催のスポーツ大会が開催された。

昭和24年には諸物価の高騰から、値上げ後1年にして、会費が12円から40円に上がった。専門部もラグビーが加わり16専門部となった。

昭和26年、定通部が専門部として加盟、さらに、ボクシング、保健、バドミントンと、禁止されていた武道種目の復活第1号として柔道の加盟が認められた。

昭和27年に関東各都県学体連の組織、規約行事等について、意見・資料等の交換が行われ、その後のそれぞれの都県の組織や規約の整備をする上で極めて有意義なものとなった。登山、ウエイトリフティング、弓道、剣道(しない競技)が新設された。

昭和28年に初の学体連関東ブロック連絡協議会が茨城県大洗町で開かれ、各都県共通の問題が協議され、これまで種目ごとに独自に開催されていた関東大会が関東高体連主催となり、翌々30年からは、1県の重複開催により予算的に問題を生じていた大会を関東高体連で調整し、輪番制を採用することになった。

また、昭和29年には初の全国大会となる第3回全国高校柔道大会、第1回全国高校剣道大会を、それぞれ7・8月に日光市公会堂を会場に開催している。

[昭和30年代]

昭和30年に県学体連創立10周年を記念して、功労表彰を行なった。

昭和31年、県教委健康教育課内にあった事務局を県庁正門前の県教育会館に移転。専用事務局を構え、翌年1月の初の全国高校スケート大会の準備に備えた。

昭和32年にはレスリング、自転車専門部を新設した。

この頃から小・中・高校部会をそれぞれ独立した体育団体にしてはどうかの意見が出るようになり、昭和34年4月から、学体連は発展的に分離し、高等学校部会は名実ともに「栃木県高等学校体育連盟」としてスタートした。

翌35年には種目別に行なわれていた全国大会県予選会20種目の会期を統合し、6月18日、県総合運動場陸上競技場を会場に46校4千3百名の参加を得て、開会式が盛大に行なわれ、栃木県高校学校総合体育大会が始まった。

36年には12年振りに会費額が値上げされ50円となった。

定時制通信制総合体育大会は、全日制に遅れること2年、昭和37年に第1回を開催した。

第1回栃木県高等学校総合体育大会

[昭和40年代～昭和62年まで]

昭和44年の全国高校総体は、群馬県が主会場として3県開催。栃木県ではソフトボール、サッカー、バスケットボールの3種目を開催した。昭和49年には、県高校総体の会期を約1カ月繰り上げ、関東高校予選会を兼ねて開催するようにした。このころから昭和55年栃の葉国体のための選手強化が盛んに行なわれ、高校生の競技力が一段と向上してきた。この間、テニス、フェンシング、ホッケー、空手道、なぎなた、アーチェリーの各専門部が加盟。昭和51年には、機関誌「高体連」が創刊された。昭和55年スポーツ会館の竣工に伴い事務局を移転。翌56年神奈川県主会場の全国高校総体は関東一円の変則開催となり、軟式庭球、登山の2種目を栃木県で開催した。

2　10年のあゆみ

[昭和63年]

昭和68年度全国高校総体夏季大会の栃木県開催に向け、態度表明。栃木県推進委員会を設置した。

[平成元年]

全国高体連春季理事会において、平成5年度全国高校総体夏季大会の栃木県開催が内定。併せて平成3年度全国高校総体冬季スケート大会も正式に決定し、栃木県全体にビックスポーツイベントを控えたムードが拡がった。

[平成2年]

平成5年度全国高校総体夏季大会が正式に決まる。その夏、作新学院ボクシング部、宇都宮女子商業高護身道（空手道）部（現　宇都宮文星女子高)がインターハイ5回目の優勝を飾り、いやがうえにも3年後の地元開催への意気が上がってきた。競技種目別会場地も決定する。

[平成3年]

全国高校総体（静岡）では団体優勝こそ逃したものの、個人競技で多くの入賞者を輩出。平成5年のインターハイに向けて着実な競技力の向上が見られるようになってきた。

また、整備が進められてきた県立日光霧降アイスアリーナとアーデル霧降スポーツバレイ屋外リンクが完成し、30都道府県千6百名の選手を迎え、第41回全国高校スケート競技選手権大会が日光市において開催された。

[平成4年]

前年同様、団体優勝はなかったものの、小山高校　青木延明選手がウエイトリフティング2連覇を飾り大いに気を吐いた。2年生の活躍も目立ち、翌年の地元開催での活躍の期待が持てた。県、市町の準備委員会がそれぞれ実行委員会に改組し、準備に万全が期された。

[平成5年]

栃木県の多くの高校生が待ち望んだ「全国高総体夏季大会」が、全国からの若人の精鋭を迎え「輝いて見せてください青春の汗インとちぎ」のスローガンのもと、県下12市7町を会場に盛大に開催された。団体5校、個人6選手が見事に優勝するなど、団体30校、個人48名が3位以内の入賞を果たし、栃木県としてはかつてない優秀な成績を収め、盛会のうちに終了した。

また、県内高校生も一人一役運動を展開し、真心のこもった歓迎振りを示した。

[平成6年]

富山県を会場に開催されたインターハイ、地元開催の翌年ということもあり、心配されたが前年に遜色ない成績を収めた。特に、作新学院ボクシング部と宇都宮女子商業高護身道(空手道)部は堂々の2連覇という見事な成績を収めた。

また、この年、永年の懸案であった「傷害見舞金制度」が発足した。

[平成7年]

平成8年度までの2年間を関東高体連事務局と、全国高体連研究部事務局を引き受けることになり、翌年に控えた50周年記念事業の準備もあり、何かと多忙な年となった。

中国5県で開催されたインターハイでは、大田原女子高ソフトボール部が初の全国制覇。個人でも2名が全国の頂点に立った。その外、団体1校、個人5名が準優勝、団体2校、個人4名が3位以内に入賞した。

また、全国高校軟式野球選手権大会では作新学院軟式野球部が前年に続いて2連覇を成し遂げ、通算5回目の優勝を飾った。

[平成8年]

甲斐の国で開催されたインターハイで、本県勢は地元開催となった昭和55年の「栃の葉国体」、「平5総体」の年を除き、通常年としては最高の成績を収めることができた。白鷗足利高校が昨年の大田原女子高に続き、女子ソフトボール本県勢として2年連続優勝を飾った。また、文星女子高が空手道競技で8度目の全国制覇を成し遂げた。さらに、団体2校が準優勝、3校が3位入賞、個人では10名が優勝、2位に3名、3位に8名が入賞するという立派な成績であった。

9月21日、県教育会館において全国の先陣を切り、栃木県高体連発足50周年記念式典を盛大に挙行。久野全国高体連会長、大杉事務局長もお祝いにかけつけていただいた。引き続き行なわれた祝賀レセプションでは、出席者全員が栃木県高体連の50年の歩みを語り合い和やかなうちに終了することができた。また、記念誌が30周年誌以来、20年振りに発刊された。

ただ、誠に残念でならないのは、この50周年記念行事を成功裡に導かれた荒川伸夫会長がそのわずか18日後に急逝されてしまったことである。

この紙面をお借りし、荒川伸夫先生の御冥福を心からお祈りするものである。

栃木県高体連発足50周年記念式典（平成8年9月21日）

[平成９年度]

京都総体においては、残念なことに５年振りに団体優勝校が出ず、個人優勝者の６名にとどまり、その外、団体２校、個人２名が準優勝、団体３校、個人２名が３位入賞であった。

前年から、平成11年度全国高校総体第49回全国高校スケート・アイスホッケー選手権大会の開催の話が出始め、関係機関・団体等との連絡調整を進めた。栃木県としては冬季スケート総体の開催は８年振り、６回目の開催となる。

生徒数の減少が見られる昨今、栃木県としては久方振りに新加盟校が誕生した。開校２年目の那須高原海城高の加入であった。この加入で加盟校は、全日制83校、定通制13校（うち11校は全日制に併設）の85校となった。

３　将来に向けて

全国的な傾向であるが、少子化の影響と部活動離れから、運動部員数がここにきて激減している。県高校総体の参加人数（エントリー以外の部員も含む）は１年間で約２千名が減少し、高校２校分にも匹敵している。栃木県高体連はこのことに危機感を抱き、平成９・10年度の２年間をかけ、約１万８千名（生徒、保護者、部顧問）を対象に、運動部活動に関する意識・実態調査を実施することになった。

今後は、専門部を含めた組織の拡充とその機能性の発揮、運動部活動の魅力を説き、部員を引き付けることのできる指導者の育成、合理的な選手育成強化計画の策定等を積極的に推進していかなくてはならない。齢50年を経た今、学校教育現場と競技団体関係者のさらなる理解を深めながら、健全な高校体育スポーツの発展をめざし、次の半世紀に向け確実な歩みを進めていきたい。

自分との戦い

青　木　延　明

県立小山高校時代の全国高校総体ウエイトリフティング競技で２年連続の優勝を飾る。
日本大学を経て、現在、栃木県立壬生高等学校に勤務する。

平成３年８月５日、私は17歳の誕生日にインターハイ優勝という最高の栄誉を手にすることができた。３月の全国高校選抜大会で２位に終わった私は、チャレンジャーとして静岡の地に乗り込んだ。３月の時点では逆立ちしても勝てない程の力の差があった。しかし、それから４カ月の間、私はインターハイでの雪辱に向け猛トレーニングを積んだ。そして、迎えた本番では、S120kg、J152.5kg、T272.5kgで優勝することができた。６回成功のパーフェクト試合であった。１回でも失敗すると負けが確定する緊迫した試合を制した最大の武器は、猛トレーニングで培った集中力であった。

それから１年。私は前年度チャンピオンとして宮崎の地に乗り込んだ。前年とは全く違う立場で臨んだ高校３年のインターハイは、息が詰まる程のプレッシャーの中で始まった。優勝して当たり前という周囲の目、急激に力をつけたライバルの存在、しかし、そんな雑念も試合に集中してしまえば関係なかった。試合中の記憶が無い程の強烈な集中力。前年に続き、またもや集中力で試合を制した。S132.5kg、J175kg、T307.5kg、７つの高校新記録、６回成功のパーフェクトでの優勝は、私のキャリアの中でも、一際、輝きを放っている。

こうして私はインターハイ２連覇を成し遂げた。チャレンジャーと前年度チャンピオンという全く違う立場での優勝は、とても貴重な体験であったと思う。しかし、どのような立場で試合に臨んでも、どのような試合展開になろうとも、結局自分との戦いである。自分に打ち勝って手に入れた栄誉は尊いものである。

私のキャリアはまだまだ続くが、今までも、これからも、私の武器は集中力である。

群　　馬　　県

《事務局》
〒371-0805 前橋市南町４丁目35の１
県立前橋商業高校内
TEL 027（224）5046
FAX 027（221）9606

創立年月日：昭和23年４月１日

加盟校数		87校
専門部数		37専門部
加盟部数		1,534部
部員数	男子	13,891名
	女子	8,972名
	合計	22,863名

年度	会長	理事長	記事
23	中村　武雄	茂木　正夫	群馬県高体連結成
24	〃	〃	登山ほか３種目加盟
25	大村　武男	〃	県高体連マーク制定
26	〃	〃	第1回全国高校スキー大会
27	〃	〃	事務局前橋高校火災
28	〃	正木徳次郎	事務局前橋商業高校へ移転
29	〃	〃	第１回全国高校レスリング大会
30	野村吉之助	〃	保健体育科研究会開催
31	松岡重三郎	〃	全国高校バレーボール女子大会
32	〃	〃	
33	〃	〃	全国定通制軟式野球大会
34	〃	〃	県高体連旗改定
35	〃	〃	高校の体育10周年号
36	〃	〃	指導部を研究部と改称
37	坂口健太郎	〃	全国高校登山大会
38	〃	〃	全国高校剣道大会
39	高野栄次郎	〃	全国高校水泳大会
40	〃	〃	44全国総体開催決定
41	〃	竹田　芳文	第１回県高校総体
42	〃	〃	44総体選手強化本部
43	〃	〃	全国総体スキー大会
44	〃	〃	昭和44年度全国高校総合体育大会
45	〃	野木村　浩	
46	藤生　宣明	〃	機関誌を高体連に改称
47	〃	〃	高野賞ほか制定
48	〃	〃	第１回コーチ会議開催
49	藤生　宣明	野木村　浩	
50	〃	〃	県総体群馬テレビ放映
51	〃	〃	全国高校総体スケート大会
52	〃	高橋　毅	創立30周年記念式典
53	〃	〃	三十年史発刊
54	中里　一郎	〃	関東高体連事務局担当
55	〃	〃	56全国総体事務局設置
56	日野　敬三	〃	全国総体３種目開催
57	〃	〃	
58	〃	〃	あかぎ国体で少年活躍
59	〃	佐藤　賢一	交通災害補償制度発足
60	〃	〃	全国高校総体スケート大会
61	金井　秀一	〃	全国高校空手道大会
62	〃	〃	40周年記念絵画を県体協へ寄贈
63	〃	〃	部活アンケート集計
元	〃	大須賀正臣	高体連40号発刊
2	海老原洋三	〃	優秀選手メンタルテスト実施
3	〃	〃	県総体総合表彰規定改定
4	樽井　哲	〃	
5	〃	海野　俊彦	全国総体スキー大会 関東高体連事務局担当
6	〃	〃	全国研究大会で発表
7	栗原　貞夫	〃	全国高校総体スケート大会
8	〃	松本　邦夫	４競技専門部加盟
9	杉山　洋一	〃	50周年記念式典
10	中山　傑	〃	指導者海外研修事業

1　沿　革

昭和23年2月初旬、県体育会館に各学校代表1名が集まって高体連結成に向けて第1回会議を開催した。そして、学制改革と時を同じく4月1日をもって群馬県高体連はスタートした。事務局は、会長・理事長の在任校である前橋高校に置き、13競技専門部が設置された。加盟校は全県下52校で、定時制を含め全員加盟が実現したのは昭和31年である。

昭和25年度には各種目で委員長在任校の校長が部長となり、競技運営等がスムーズに進められるようになった。また、高体連マークも画家清水刀根氏のデザインで作成された。

昭和26年4月1日には機関誌「高校の体育」が創刊され、高体連活動も充実し軌道に乗り始めてきたが、昭和27年12月22日の前橋高校の火災により事務局を失い大きな痛手をうけた。しかし昭和28年度には事務局を前橋商業高校に移転し、再建に向け力強く歩みだした。

昭和30年度は、高体連指導部が高等学校保健体育科研究会（昭和37年度より高等学校保健体育研究会として分離）を開催した。

昭和31年度は、会長に前橋商業高校長松岡重三郎氏が就任し、会長、理事長、事務局が同一校になって事務局運営もスムーズになった。

昭和34年度は、創立10周年を記念して優勝旗を作成し、各専門部に選手権大会用に配布した。

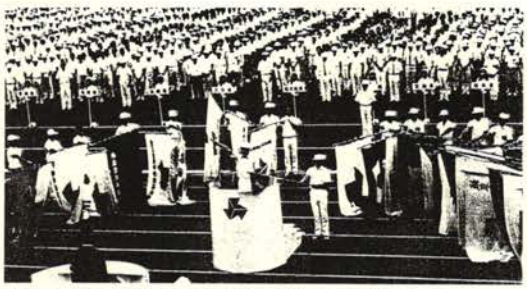
昭和35年度は、ローマオリンピック大会自転車競技に前橋商業高校定時制の久保村寛が出場し、高校生出場第1号になっている。

昭和39年度の東京オリンピックに選手として5名、役員・審判員として28名の高体連関係者が参加した。また、年度末の常務理事会において昭和44年度全国高等学校総合体育大会の本県開催誘致を決議し、昭和41年3月27日に全国高体連会長より本県開催の決定通知を受けた。

昭和41年5月20日、第1回群馬県高等学校総合体育大会開会式が前橋市の県営敷島陸上競技場で開催された。また、11月15日には44全国高校総体準備のために事務局を県庁内に開設した。

昭和43年度は、44全国高校総体の前哨戦となった全国高校総体スキー大会を44年2月5日から5日間、水上町において開催したが、雪不足のため会場を天神平・藤原に変更して実施した。

昭和44年8月1日、「明るい郷土の未来を創る」をテーマとした全国高校総合体育大会が、前橋市の県営敷島陸上競技場で行われた総合開会式をもって開幕し、本県で14種目のほか、神奈川県に4種目、千葉県に5種目、栃木県に3種目をお願いし、26競技が実施された。



昭和44年度全国高校総合体育大会総合開会式

昭和46年度は機関誌「高校の体育」を「高体連」に改称し、翌年度には第6代会長高野栄次郎氏の好意により高野賞（最優秀選手賞）が誕生、同時に優秀選手賞、定時制優秀選手賞が制定された。

昭和48年度は、強化部が全国大会入賞監督を招いて第1回コーチ会議（後に選手強化指導者会議に改称）を開催した。この年から功労賞が年度表彰となる。

昭和50年度は、県高校総体が10回目を迎え、記念として種目優勝盾（持ち回り）を新しいデザインにして各専門部に配布した。また、総合開会式が群馬テレビで初めて放映された。

昭和51年度は、優秀監督賞、定時制優秀監督賞、県高校総体優秀学校賞が制定された。この年より軟式野球（定）が定通制部に吸収される。

昭和52年度は、県高校総体の総合表彰制度を制定した。また、創立30周年記念として各競技専門部の優勝旗を作り直し、「記念式典」を昭和53年2月10日に群馬建設会館において挙行した。翌年度に記念誌「三十年史」を発刊した。

昭和56年度は全国高校総体が神奈川県で開催され、本県で3種目実施された。また傷病見舞金制度が制定された。

昭和58年度は「あかぎ国体」が開催され、少年種別において入賞率81.4%という驚異的な成績を残した。

昭和59年度は、指導者・選手の万一の事故を考えて、高体連交通災害補償（保険）制度を発足させた。（平成6年度で終了）

昭和62年度は、創立40周年記念事業として絵画「榛名富士と湖－80号－」（県美術会会長、豊田一男氏）を県体育協会に寄贈した。

2　10年の歩み

昭和63年度は「昭和」から「平成に」改元された歴史的な年度であると同時に、全国高体連が創立40周年を迎えた年でもある。記念事業の推進にあたっては「全国高体連創立40周年記念事業実行委員会」が組織され、本県から記念誌編集委員会に安田廣美編集部委員長と鈴木信弘編集委員が、財務委員会に佐藤賢一理事長が加わりその成功に貢献した。特に、「全国高体連四十年史」の販売にあたっては本県事務局が窓口になり、全国からの購入希望の対応に多忙な日々を送った。また、第23回全国高体連研究大会において、研究部が2年間にわたって調査研究した「運動部活動振興のために－部活動に関するアンケート調査より－」を第3分科会「部活動等の充実を図るために」で発表し高い評価を得た。

平成元年度は佐藤賢一理事長が退任され、新たに大須賀正臣氏が理事長に就任した。機関誌「高体連」も節目の40号を迎えた。この年は、前橋商業高校水球部が全国高校総体4年連続優勝と国体優勝の二冠、個人では久保田和恵選手（群馬女子短大附属3年）が、女子400mにおいて全国高校総体・国体・日本選手権優勝の三冠という偉業を達成した。

平成２年度は金井秀一会長が転任され、新たに海老原洋三氏が会長に就任した。この年は、第2回全国高校女子駅伝において、群馬女子短大附属高校が日本高校最高記録と大会新記録で堂々の初優勝を飾ったが、本県高校駅伝はこれをピークに低迷が続いている。

平成３年度は、県高校総体の総合表彰規定をメイン会期の実施種目に、水泳、駅伝、スケート、スキーを含めて順位を決定するように改定し、平成4年度の表彰から実施することになった。この年は、全国高校総体の成績は優勝数・入賞数とも前年を下回ったが、国体では一転し少年の部で団体・個人合わせて12競技で優勝して天皇杯13位の原動力として貢献した。また、佐藤賢一前理事長が2月に志半ばにして亡くなるという悲しい年でもあった。

平成４年度は海老原洋三会長が転任され、新たに樽井哲氏が会長に就任した。樽井会長は全国高体連基本問題検討小委員会の委員長として「学校教育法第1条に規定する高等学校に在籍する生徒以外の高体連への加盟や高校総体への参加問題」等について精力的に取り組み、平成6年度からの導入に結びつけた。この年の全国高校総体においては、前橋工業高校自転車競技部と群馬女子短大附属高校軟式庭球部、新島学園高校男子ソフトボール部がそれぞれ団体優勝した。

平成５年度は大須賀正臣理事長が転任され、海野俊彦氏が理事長に就任した。また、関東高体連事務局の5・6年度担当県となり、併せて全国高体連研究部の事務局も受け持った。この年は、全国高校総体において富岡高校男子ハンドボール部が全国初制覇を達成した。6月の関東大会で初戦敗退していることを考えると快挙である。また、片品村において「白い尾瀬　翔ぶ風　光る君」のスローガンのもと第43回全国高校スキー大会を開催した。第1回大会を水上町で開催以来4回目の本県開催であったが、過去の本県開催時より入賞者が少なかった。しかし、補助員として活躍した地元の利根・沼田地区の高校生が参加選手と交流を深めるなど意義ある大会であった。

平成５年度全国高校スキー大会

平成６年度は、学校教育法1条校以外の生徒が参加特例により、各県大会・ブロック大会で出場権を獲得すれば全国総体に参加できることになった記念すべき年であるが、本県での出場申請はなかった。この年より平成7年度全国高校総体スケート競技大会開催準備室を、高体連事務局内に設け本格的な準備に入った。全国高校総体においては個人で3人が優勝した。特にボクシングの関口幸生（伊勢崎工業・3年）は1条校以外の選手と2回戦、準決勝で対戦している。第29回全国高体連研究大会において「群馬県におけるメディカルチェック・体力測定からの一考察」について発表した。

平成７年度は樽井哲会長が転任され、新たに栗原貞夫氏が体育畑出身者として初めて会長に就任した。この年は県高校総体が30回目を迎え、記念大会として総合開会式の入場口に記念アーチの設置や前橋工業高校男子新体操部の公

開模範演技、各競技では団体優勝校に記念優勝盾と個人優勝者にメダルの授与を行った。この年はレスリングの長島康弘（館林・３年）が全国選抜と全国高校総体、国体の三冠を達成した。また、本県で３回目の開催になる第45回全国高校スケート競技選手権大会を「風になれ　氷に刻む　この瞬間に」のスローガンのもと、伊香保町（スピードスケート・アイスホッケー）と前橋市（フィギュアスケート）で開催した。

平成８年度は海野俊彦理事長が転任され、新たに松本邦夫氏が理事長に就任した。高体連に直轄部として新たに漕艇、ホッケー、なぎなた、カヌーの４競技が加盟し33競技専門部となった。全国高校総体では伊勢崎女子高校弓道部と前橋工業高校自転車競技部が団体優勝したのをはじめ個人でも４人が優勝した。また、平成９年度に群馬県高体連創立50周年の記念事業を行うために準備委員会を発足し、記念式典と記念誌の作成が決定した。

平成９年度は栗原貞夫会長が勇退され、新たに杉山洋一氏が会長に就任した。この年は、ウエイトリフティングで山田政晴（育英・２年）が三冠（全国選抜・全国総体・国体）を達成したのをはじめ、全国高校総体個人種目で４人が優勝した。創立50周年記念事業においては準備委員会を実行委員会に改組して準備を行い、12月６日に群馬県民会館小ホールにおいて記念式典を挙行し、併せて館内で祝賀会を開催した。また第32回全国高体連研究大会において、井上竹義先生（自転車競技専門部委員長）が「全国大会に通用する選手の育成について（自転車競技）」を発表した。

３　将来に向けて

高体連も創立以来半世紀を経て、本県スポーツの中核をなし、県民の皆さんより多大な期待を寄せられている。しかし高体連には、生徒数の減少や指導者の育成等多くの課題がある。特に昨今の高校生のスポーツニーズは多様化しており、常に多様な視点と広い視野をもって諸事業に取り組む必要がある。今後の高体連は、長きにわたり築かれた歴史と伝統を継承しつつ、平成10年度より実施する「指導者海外研修事業」のように新しい事業に積極的に取り組むなどの時代に即応した運営を図り、高校体育・スポーツの一層の振興のために努力していきたい。

インターハイの思い出

本宮　万記弘

1968年12月31日生まれ
身長176㎝　体重73kg
群馬ＳＳにおいて10歳より水球を始め、18歳で全日本代表。前橋商業から日体大を経て現在スペインリーグクラブ「タラッサ」に在籍

思い出というものはそれぞれの人の心の中に強く印象を残すもの。特に思い出される事は楽しく喜ばしかった出来事、そして苦しかった出来事だと思う。私は、幸運にもこの２つの思い出を同時に味わう事ができ、今でも自分の中に新鮮に甦り、時に私を強く励まし、またはほほえましい高校時代を振りかえらせてくれる。

その思い出とは忘れるはずもない、前橋商業高校３年生で迎えた昭和61年度島根インターハイの時の事である。それは、照りつけるというよりは地面を焦げ付かせるような異常気象の８月の炎天下、涼みにくる事が本来の楽しみのはずのプールの水もすっかりぬるま湯と化し、その中で試合をした私たち水球選手には今まで味わった事のないほどの大会となった。

私たちは、初日、２日目と予選を勝ち抜き決勝へと駒を進めた。インターハイの若き力の盛り上がりにあわせたように、日差しも日に日に強くなり、決勝戦の日にはその年最高の真夏日を記録し、前日よりさらに厳しいプールコンディションとなり、私たちのチームは氷水で一杯に満たされたクーラーボックスをベンチに備えての戦いになった。

試合前半はシーソーゲーム、まるでサウナの中での全力疾走を思わせる息苦しい暑さの中、休息のベンチで仲間にかけてもらった冷やっと心まで引き締まるような氷水のありがたさ。極限といえる状態で、それでも負けないという仲間の輝いていた瞳。後半、私たちは気力で相手を引き離し見事優勝という栄冠を手にした私たち、　試合後、仲間との祝福を交わし一人になった時、「苦しみに勝った！」という充実感と「俺たちはやったんだ！」という満足感に私の若い心は熱くなり、いつしか頬には真夏の太陽を受け、さらに熱さを増した涙が流れていた。

埼　玉　県

《事務局》
〒336-0007 浦和市仲町３－５－８
県立武道館内
TEL 048（822）6792
FAX 048（822）0281

創立年月日：昭和22年4月23日

加盟校数		249校
専門部数		34専門部
加盟部数		4,172部
部員数	男子	41,250名
	女子	25,691名
	合計	66,941名

年度	会長	理事長	記事
22	五十里秋三	原田　隣造	埼玉県中学校体育連盟として創立 加盟59校･12専門部
23	〃	〃	「埼玉県高等学校体育連盟」に名称変更
24	〃	〃	定時制高校加盟
25	〃	栗原伝次郎	
26	〃	〃	
27	下山　懋	〃	ラグビー･ソフトボール･柔道･漕艇･ハンドボール加盟
28	〃	〃	剣道加盟
29	木村　泰夫	〃	
30	〃	〃	弓道加盟
31	〃	〃	
32	〃	島村　政光	会報「高体連」創刊
33	〃	〃	自転車･登山･バドミントン加盟
34	〃	〃	
35	〃	〃	調査研究部設置
36	〃	〃	硬式庭球加盟
37	〃	〃	
38	〃	〃	
39	〃	黒田　清次	
40	西川　好明	〃	特殊部（８種目）加盟
41	〃	〃	
42	〃	〃	埼玉国体開催
43	〃	〃	事務局県武道館に移転
44	〃	〃	高体連規約改正
45	〃	〃	学校体育研究部設置
46	小関　一郎	〃	全国学校体育研究大会開催
47	〃	〃	
48	矢代　登	宮川　博	加盟校数128校
49	〃	〃	
50	〃	〃	高校総体６種目開催
51	〃	〃	空手道加盟
52	前田　耕平	〃	
53	〃	〃	加盟負担金改正
54	〃	倉持守三郎	
55	村越　五郎	〃	基本問題検討委設置
56	〃	〃	高校総体４種目開催 部長委員長制導入
57	吉川　正就	〃	強化対策委員会設置 アーチェリー加盟
58	〃	〃	
59	小林　泰雄	森　正博	対外試合規程･大会開催基準要項制定
60	〃	〃	関東地区保健体育研究大会開催
61	長谷川肇志	〃	
62	〃	〃	
63	〃	〃	
元	鈴木　勲二	小畔　東	会報「創立40周年記念号」発刊 加盟負担金改正
2	〃	〃	
3	菅野　達也	〃	カヌー･なぎなた加盟
4	〃	〃	
5	〃	小室駿一郎	全国高校総体漕艇開催
6	〃	〃	専各高校総体出場承認
7	渡邊修一郎	〃	
8	〃	久保　正美	少林寺拳法加盟　研究部新設
9	細田　信良	〃	創立50周年記念式典挙行
10	〃	〃	

1 沿革

（1）昭和20年代

昭和22年4月23日、体育・スポーツを通して、青少年に光明を与えようと「埼玉県中学校体育連盟」が設立された。翌23年には、学制改革により「埼玉県高等学校体育連盟」とその名称を変更し現在の高体連が誕生した。創立当時は、加盟校59校、専門部は、陸上競技、体操、水泳、スキー、野球、蹴球、篭球、排球、軟式庭球、卓球、相撲、ダンスの12専門部であった。各専門部とも着々と成果を上げ、特に女子バスケットボール・サッカー・男子漕艇・女子バレーボールは、相次いで全国高校選手権を制覇した。

全国高校サッカー選手権大会（S.27）浦和高校優勝

また、昭和24年には定時制高校も正式加盟し、昭和27年には第1回定時制総合体育大会を開催。更には、昭和33年には通信制も加わり、定通部も充実した活動を行うこととなった。

（2）昭和30年代

昭和30年代に入ると、創立10周年を迎え、連盟の活動をまとめ、記録に残そうという第3代木村会長の案により、会報「高体連」が昭和32年創刊された。以後今日まで毎年発刊され、その当時を省みる貴重な資料となっている。

また、創立以来の懸案であった、学校体育の調査研究を担当する「調査研究部」が、昭和35年に設置され活発な研究活動が行われるようになった。

昭和20年代と同様に各専門部が活躍するなかで、特に、サッカーは、10年の間に6回の全国制覇に輝き、「サッカー王国埼玉」の名を全国に轟かせた。

（3）昭和40年代

創立以来事務局は、浦和高校に置かれ運営されたきたが、昭和43年11月県立武道館に移転し、理事長も専任となった。

また、昭和44年には、規約・諸規程の見直しが行われ、これにより、ほぼ現在に近い規約・規程となった。

これにより、昭和35年以来調査活動を行ってきた調査研究部は、ダンス専門部とともに発展的に解消され、昭和45年6月「学校体育研究部」が正式に誕生した。

また、昭和42年の「埼玉国体」に向けた対策として、昭和40年に、これまで設置されていなかった8種目（レスリング・ボクシング・ウエイトリフティング・馬術・ホッケー・フェンシング・スキー・スケート）が、特殊部として活動を始めた。そして、埼玉国体においては、28専門部の活躍により天皇杯獲得に大いに貢献した。

昭和40年代もサッカーの快進撃が続き、昭和44年には浦和南高校が、高校総体・全国高校選手権・国体の3冠を達成した。40年代後半には、ハンドボール・ホッケー・陸上競技・卓球が全国制覇を成し遂げた。

（4）昭和50年から昭和62年

昭和50年代に入ると、生徒数の増加に伴い毎年加盟校が7～8校ずつ増加し、組織が肥大化する中、諸々の問題が発生する状況となった。そこで、昭和55年に基本問題検討委員会を設置し、規約・規程の見直し、大会開催基準要項・対外試合規程の制定等を行った。これにより、学徒総合体育大会を全国高校総体の予選を兼ねるとともに、県内高校生の最大の大会として位置づけ、それまで室内で開催していた総合開会式を、12年振りに上尾運動公園陸上競技場で盛大に開催する運びとなった。

また、高体連主催の大会を明確にし、専門部ごとに徴収していた大会参加料を廃止。大会に掛かる全経費を高体連から支給することとした。

さらに、これに要する財源を確保するため、加盟負担金の改正を行った。

昭和50年代前半は、卓球・ホッケー・弓道・ウエイトリフティングが全国制覇を果たしたが、全体的に成績は低調となり、各方面から高体連の奮起を促す声が高まった。そこで、昭和57年に強化対策委員会を設置し、強化費の配分・中体連との連携強化・優秀選手指導者の養成を行うこととした。これによる効果が翌年から表れ、昭和58・59年には、それぞれ高校総体団体4種目が優勝を飾った。さらに、昭和62年には男子松山高校・女子埼玉栄高校による、陸上競技アベック優勝をはじめ団体5種目が優勝を果たした。

2　10年の歩み

（1）生徒急増期から急減期

平成に入ると県内加盟校の生徒数もピークとなり、平成2年には、全生徒数約29万5千人とこれまでの最高を記録した。

しかし、数年後を見通すと生徒急減期に入るとの予測から、平成元年には加盟負担金の値上げが行われ、生徒急減期・関東地区での高校総体開催等に備えての特別積立を行った。

また、創立40周年を記念し、それまでの各専門部・加盟校の活動をまとめた「会報」創立40周年記念号を、平成2年に発刊した。

平成3年には、創立以来行われてきた学徒総合体育大会の名称を、「学校総合体育大会」に変更。表彰規程の全面的な見直しを行った。

（2）高校総体における各専門部の活躍

最近10年間の高校総体における成績を振り返ると、団体40種目が優勝を飾る活躍。また、過去に優勝経験のない種目が活躍するなどまさに黄金期といえるだろう。

まず、昭和63年度は、常勝の女子陸上競技で埼玉栄高校が4連覇、男子卓球の熊谷商業高校が2年連続9回目、男子バドミントンで上尾高校が3年振り2回目の優勝を達成したのを始め、女子ハンドボールの浦和実業高校、男子飛び込みの市立川口高校が初優勝に輝いた。

平成元年度は、埼玉栄勢の活躍が目立ち、女子陸上競技の5連覇に加え、男子フェンシングと女子飛び込みが初優勝を飾った。また、ハンドボールでは前年の女子に代わり男子浦和実業高校、男子卓球では熊谷商業に代わり埼工大深谷高校が優勝を成し遂げた。

平成2年度は、初優勝が2種目誕生した。男子体操の埼玉栄高校と冬のラグビーで熊谷工業高校である。また、女子陸上競技の埼玉栄高校、男子卓球の埼工大深谷高校も安定した力で連覇を重ねた。

平成3年度は、夏は女子陸上競技7連覇の埼玉栄高校が唯一の優勝となったが、冬のフィギュアスケートで大井高校が見事初優勝を飾った。

平成4年度は、女子陸上競技8連覇の埼玉栄高校に加え、ボクシングの花咲徳栄高校、女子ソフトボールの星野女子高校、相撲の埼玉栄高校が初優勝に輝いた。

平成5年度は、埼玉栄高校が、女子陸上競技・男子体操・女子飛び込みの3種目に、そして、埼工大深谷高校が男子卓球に優勝を果たした。

平成6年度は、男子バドミントン上尾高校が6年振り3回目の優勝。また、埼玉栄高校が女子陸上競技で前人未踏の10連覇を達成した。

平成7年度は、女子陸上競技埼玉栄高校は、夏の11連覇に加え冬の駅伝にも優勝を果たし2冠に輝いた。また男子バドミントン上尾高校も2連覇、男子体操の埼玉栄高校も優勝を飾った。

平成8年度は、埼玉栄勢大活躍の年であった。まず、常勝女子陸上競技においては、夏の学校対抗12連覇の偉業に加え、冬の駅伝も1時間06分26秒の高校最高記録で2連覇。夏冬2年連続2冠というまさに向かうところ敵なしの強さであった。また、女子バドミントンも2年連続優勝。男子体操競技も2年連続4回目の優勝。さらに水球部は、悲願の初優勝を飾った。

また、花咲徳栄高校ボクシング部も、各階級に得点を重ね、5年振り2回目の学校対抗優勝を果たし、この年は、埼玉県高体連始まって以来初の、団体6種目優勝を記録した。

平成9年度は、春の全国選抜大会に引き続き、バドミントンで男子上尾高校が2年振り5回目、女子埼玉栄高校は3連覇でアベック優勝を成し遂げた。また、女子ソフトボールにおいては、星野女子高校が5年振り2回目の優勝を果たした。さらに陸上競技では、夏の高校総体13連覇を逃した女子埼玉栄高校であるが、冬の駅伝においては、スタートから一度も先頭を譲らない圧倒的な強さで3連覇の偉業を達成した。

全国高校女子駅伝
埼玉栄高校3連覇

（3）創立50周年記念事業

平成9年度創立50周年を迎えるにあたり、平成8年4月の評議員会において、「記念事業」を行うことが承認された。そして、実行委員会を設立、4つの委員会を設け準備を進めた。

まず、総務委員会は、本事業に必要な予算の確保、記念品の作成。さらに、「学校総合体育大会」の優勝杯72個を作成し、平成9年5月の総合開会式において各専門部へ寄贈した。

表彰委員会は、「記念表彰」を担当。表彰の

基準作成、関係方面への候補者推薦依頼を経、512名・70団体の方々を表彰した。

式典委員会においては、記念式典・アトラクション・記念講演・祝賀会を担当した。

記念式典は、12月2日（火）浦和市文化センター大ホールにおいて、約1100名が参加し行われた。ご来賓には、副知事、県議会議長、全国高体連理事長に加え、歴代の会長にもお越しいただき盛大に挙行することができた。式典に引き続き行われたアトラクションにおいては、県内高校の吹奏楽部・合唱部によるすばらしい音楽が披露され、式典に彩りを添えていただいた。

また、記念講演は、浦和西高校出身でアトランタ五輪サッカー代表チーム監督の、西野朗氏による、「世界を目指せ日本サッカー」という演題で講演をいただき、参加した生徒達にも好評であった。

創立50周年記念式典（H.9.12.2）

編集委員会は、記念誌の編集にあたり、例年の「高体連会報」を創立50周年記念号とし、記念式典の様子、最近10年間の本連盟活動のまとめを掲載し、平成9年度末発刊された。

3　将来に向けて

戦後の50年間、高体連が体育・スポーツを通して、青少年の健全育成に果たした役割は大変大きなものがある。また、創立当初加盟校59校・12専門部であった組織も、加盟校249校・33専門部と大きな組織となった。

このような現状の中で、ここ数年の生徒急減期による収入や部員数の減少。生徒の意識変化による運動部加入率の低下現象。指導者の高齢化による活動意識の低下。2002年完全実施が予定される学校週5日制への対応等。高体連は、これまでにない大きな課題を抱えている。しかし、これらの課題に対し、51年目を迎えた高体連が、21世紀を担う青少年の育成を目指し、正面から向かい合い、検討・解決していくことが必要である。

四冠への挑戦

柿沼和恵

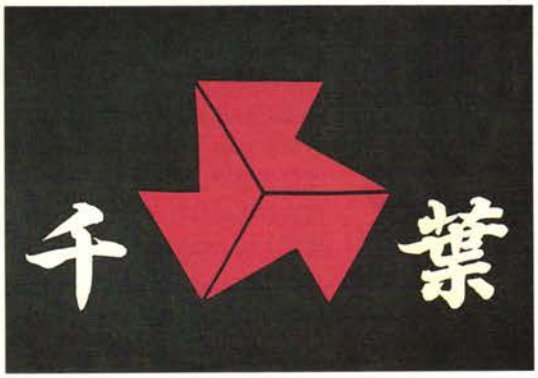
埼玉栄高校2年時全国高校総体
100m・200m 2冠
3年時短距離3冠達成
'92 200m日本記録樹立
世界ジュニア400m日本記録で
6位入賞'98 200m・400m
室内日本記録樹立
現在ミズノ㈱所属

走る楽しさを知らずにただ練習をしていた中学時代を過ごした私は、自分を試すために陸上で全国一の名門埼玉栄高校に入学を決めた。入学した当時、大森監督は“日本記録”を私に意識させていた。全国レベルで競うほどの能力など自分にはないし、強くなれるはずがないと思っていた。1年のインターハイは100mに出場し、9番目の記録で決勝にいけず、初めて泣いたレースでもあった。2走を務めたリレーは高校新で優勝することができた。これを機に私は、全国で一番になれるんだと意識し始めていた。2年の時は、100m・200mで優勝し、目標であった全国制覇を達成することができた。あのときの喜びは、とてもうれしくそれと同時に、次は日本記録という目標に切り換えていた。

そして、3年の時、新たに400mという種目を取り入れた。100m・200m・400m・リレーの四冠を達成という挑戦を目標につらい練習に耐え、絶対に負けるわけがないと強く自信を持っていた。インターハイの前に北関東大会の200mで日本記録を出していたが、記録より勝つことであり、四冠達成と心に決めていた。結局、短距離三冠と200mで日本記録を樹立したが、リレーは2位で負けてしまった。私の夢の四冠は達成することができなかったが、とてもすがすがしく心地よいインターハイであった。

勝つことの喜び、負けることの悔しさ、記録を出すことのうれしさ、感動を。また、走ることの楽しさを知ったからこそ、これからも走り続けたい。そして、今、私は世界を目指すという新たな挑戦が始まっている。

千　葉　県



《事務局》
〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台5-10-1
県立千葉女子高校内
TEL 043（252）1691
FAX 043（252）1842

創立年月日：昭和23年4月20日

加盟校数		208校
専門部数		31専門部
加盟部数		3,950部
部員数	男子	35,063名
	女子	22,893名
	合計	57,956名

年度	会長	理事長	記事
23	木内　清	西村　璞二	4月20日発会式
	（委員長）	松戸　節三	（県千葉高に事務局）
24	〃	（副委員長）	
25	安田　裕	松戸　節三	会長・部長・理事長制
26	〃	石野八百治	見舞金、表彰等の制度
27	山口　久太	〃	第1回定時制大会開催
28	諸川　芳雄	〃	県外大会派遣規定確立
29	〃	〃	競技会実施基準の確立
30	〃	〃	研修会・講習会の開催
31	〃	〃	機関誌「高体連」発刊
32	〃	〃	体育研究、定通が独立
33	林　信義	〃	関東高体連協議会開催
34	〃	〃	
35	〃	〃	同一会期で県総体開催 新人大会の開催
36	〃	〃	
37	〃	宮崎貞次郎	創設15周年記念 8ブロック制に編成
38	〃	〃	
39	〃	〃	
40	〃	〃	全国総体派遣費補助金
41	〃	〃	44総体準備委員会
42	〃	〃	県総体を5月に移行
43	〃	石川　宏	千葉東高に事務局移転
44	松戸　節三	〃	全国総体5種目開催
45	〃	〃	全国定通大会に補助金
46	石野八百治	篠崎　兵衛	事務局が千葉女子高へ
47	〃	〃	
48	〃	〃	千葉国体が開催される
49	〃	〃	
50	〃	〃	10ブロック制に再編

年度	会長	理事長	記事
51	鈴木　博	金子　佶	
52	〃	〃	30周年記念式典開催
53	〃	〃	「30年の歩み」発刊
54	〃	〃	傷害等見舞金規定施行 56総体準備委員会
55	〃	〃	12ブロック制に再編
56	羽山　孝二	〃	全国総体4種目開催
57	青柳　正吾	〃	安全技術講習会の開催
58	〃	梶原　義實	機関誌「年報」の発刊　年報編集 委員会設置16ブロック制に再編
59	〃	〃	
60	関本　克己	青木　克己	体育研究部発展的解消
61	〃	〃	
62	柏﨑　旭	上野　正裕	40周年記念特集号発刊 健康相談コーナー開設 研究部の新設
63	〃	〃	第1回研究大会の開催
元	〃	〃	県総体を6月に移行し 5月に関東予選を開催
2	和泉　英雄	〃	関東大会派遣費補助金
3	伊井　正美	〃	「役員懇談会」を開催
4	〃	青木　寛	副部長制の実施　便覧を「要覧」 に改称　加盟部員数ピークの年
5	荒川　昇	〃	海外研修事業の実施
6	〃	〃	第29回全国研究大会
7	〃	〃	平成17年度全国総体が 千葉に内定
8	〃	佐久間嘉宏	松戸節三杯表彰実施 栄光をめざしてを発刊
9	佐藤　玉和	〃	基本問題検討委員会
10	〃	〃	創設50周年記念式典

1 沿 革

創設期（昭和23年～24年）

本連盟が創設されたのは、千葉県体育協会が誕生した翌年の昭和23年である。木内清氏、西村璞二氏、松戸節三氏、石野八百治氏らが中心となって創設に尽力し、昭和23年4月20日に千葉高において発会式を行い、高校生の体育大会は高体連のもとで運営されることとなった。

加盟校は66校、陸上競技、軟式庭球、蹴球、バレーボール、体操、バスケットボール、卓球、ソフトボール、水泳、相撲の10専門部および14人の執行委員でスタートし、委員長（会長）には木内清氏が就任した。この創設は、直接高校体育を担当した諸先生方の自覚と使命達成への熱意による自主的努力の賜であった。

基盤形成期（昭和25年～32年）

昭和25年度には機構改革を行い、委員長・執行委員制から会長・理事制とし、会長には校長の代表を、また専門部に部長を設け校長を推戴することにより組織の強化を図った。

この間、優秀選手表彰、国体派遣選手激励金交付、定時制大会開催、研修会・講習会開催、機関誌「高体連」創刊、見舞金規定の決定等、現在の高体連組織の基盤整備がなされた。また、ボクシング、ハンドボール、山岳、柔道、バドミントン、ラグビー、剣道、体育研究、定時制が加わり19専門部となり組織が拡大した。

発展期（昭和33年～42年）

昭和35年度から県総合体育大会を同一会期での千葉市中心開催とし、本県スポーツ振興の布石になった。この年、新人体育大会も正式に開催されることになった。昭和38年度は、統一された第1回の「全国高校総体」が新潟県で開催され、ボクシングで市立習志野高が優勝、安房高柔道、安房水産高ヨットが準優勝を成し遂げ、全国高校総体で初の入賞チームとなった。

この間、加盟校増加に伴い8ブロックに再編し、弓道が専門部に加わった。

対応期（昭和43年～52年）

昭和44年度の群馬県を主会場とした44総体では、本県で軟式庭球、弓道、剣道、卓球、女子バレーボールの5種目を開催し、安房高男子剣道優勝をはじめ多大な成果を収めた。

この間、副理事長の職を設け3人体制とした事務局の人的機構強化と創設以来千葉高にあった事務局を千葉東高に、さらに現在の千葉女子高への移転を行い、空手道・庭球専門部も新設した。また昭和48年度には千葉国体が開催され、高体連関係者の活躍が天皇杯獲得の大きな原動力となった。昭和50年度には加盟校の急増により10ブロック制に再編した。

S 52年度「創設30周年記念式典」

また昭和52年度には、「創設30周年記念」として、第30回県高校総体総合開会式が5月13日に県総合運動場体育館で盛大に挙行され、創設以来の記録が「三十年の歩み」としてまとめられ発刊された。この年より、学校規模負担金、部負担金の2本立てとする現行の加盟校負担金制度がスタートした。

充実期（昭和53年～62年）

昭和56年度は、56総体が神奈川県を主会場として開催され、本県でも水泳、柔道、弓道、庭球の4種目を開催した。この間、傷害等見舞金制度、安全技術講習会の開催、「年報」の復活と年報編集委員会の設置、昭和62年度からは全国に先駆けスポーツ外傷や障害に対する「健康相談コーナー開設」が実現し、顧問や生徒から好評を博した。さらに、新設校急増により昭和55年度に12ブロック制、昭和58年度には現行の16ブロック制に再編した。

昭和61年度にアーチェリー、昭和62年度には体育研究部を発展的解消とし安全・普及・強化を柱に研究活動を行う「研究部」が専門部として新設され29専門部、加盟校が208校となった。

昭和62年度が創設40周年にあたることから、30周年記念式典以後の10年の歩みが「40周年記念特集号」として年報にまとめ発刊された。

2　10年の歩み

躍進期（昭和63年～平成９年）

昭和63年度は、全国高体連40周年の年であり柏﨑会長が全国高体連副会長として創立40周年式典の開会の辞を述べた。「第１回県高体連研究大会」を開催し、全体講演やシンポジウム・実態調査の発表、優秀選手（チーム）の顕彰等充実した大会となり研究活動が活発化した。この年ソウルオリンピックで、水泳の鈴木大地選手（市立船橋高卒）が金メダル獲得という感動的な場面を見せてくれた。また、全国高校総体では選手・監督用のユニフォームを一新して参加、市立船橋高サッカー部が62年度に続く二連覇、また千葉敬愛高男子ソフトボール部が春の選抜大会に続く春夏連覇というそれぞれ偉業を成し遂げた。

平成元年度は、県高校総体と全国総体の連携、３年生の活動期間の延長等を趣旨として県総体を６月に移行、全国総体選考会を廃止し新たに関東大会県予選会（５月）を開催した。これにより、部活動の活性化や競技レベルの向上を図ることができた。12月京都での第１回女子全国高校駅伝大会で市立船橋高が初代の優勝を果たし、輝かしい歴史の１ページを飾った。この年は本県高校生の生徒数ピークの年であり、その後の生徒数急減期に備えての財源確保、大会運営、組織改革などの検討が始められた。

平成２年度、第12代会長に和泉英雄氏が就任した。生徒数減少が始まり、これに伴う予算減対策ため「年報」に広告協賛を募った。また、県教委より関東大会派遣費補助金が交付された。この年から、役員表・加盟校一覧・規約や内規・各種申請書等をまとめた「便覧」を新年度早々に発刊し加盟校への周知を図った。

平成３年度、第13代会長に伊井正美氏が就任した。高体連本部役員・部長・委員長をはじめ体育協会や小・中学校体育連盟、県教委等関係者が一堂に会し情報交換を図ることを目的に「高体連役員懇談会」を開催し、併せて退任者に感謝状を贈呈した。以後例年４月中旬に開催している。また、県体育協会より競技力向上事業の委託を受け、各専門部で強化練習が可能となった。スキーが新設され30専門部となった。

平成４年度は、バルセロナオリンピックで本県出身の監督・コーチ・選手24名が活躍した。

また、専門部長を補佐する副部長制を敷き専門部の組織充実を図るとともに、大会日程・年間行事や規約等の高体連資料を掲載した「便覧」をより充実させ「要覧」と改めた。大会では市立船橋高女子駅伝チームが２回目の全国優勝、部員数が76,000人を越えピークの年となった。

平成５年度、荒川昇氏が第14代会長に就任し、懸案であった運動部活動顧問の視野を広げ識見を高めることを目的とした「指導者海外研修事業」が実現し、10名が大韓民国ソウル市にて第１回研修を行った。

平成６年度は、全国高校総体に学校教育法第１条校以外の学校の参加が認められ、県総体に２校参加した。２月には、「高校スポーツ部活動の大いなる未来をめざして」のテーマのもと「第29回全国高体連研究大会」を千葉市で開催し、県内及び全国各地から660余名の参加を得て成功裏に終了した。

H6年度第29回全国研究大会

この年、生徒数激減のため傷害等見舞金の利息からの借入金による予算執行を行い、翌７年度も同様とした。また、従来事務局より各報道機関へ送付していた県総体記録を専門部から直接送付することとした。

平成７年度は、全国高体連理事会において平成17年の全国高校総体開催が本県に内定した。

大会では、本県サッカーの活躍した年であり関東大会（市立船橋高）、全国高校総体（市立習志野高）、全国高校定通制大会（千葉商高と県船橋高の決勝対決）、全国中学総体（千葉市立高洲一中）、全国少年サッカー（日立ＦＣ柏レイソルユース）、福島国体（少年の部）、全国教職員大会（千葉教員）に優勝を果たした。

平成８年度は、アトランタオリンピックで、本県高体連出身者12名が９種目に日本代表として参加し活躍した。また、17総体に向けて「栄光をめざして」を発刊、「松戸節三杯」表彰を新設した。さらに、平成10年度を創設50周

年と位置付け、準備委員会が発足し記念事業に向けて準備を始めた。大会では陸上で市立船橋高が男子学校対抗優勝、テニスで渋谷幕張高が団体・ダブルス・シングルス優勝の3冠達成、全国高校サッカー選手権では市立船橋高が2回目の全国制覇を達成、千葉敬愛高男子ソフトボールが春の選抜大会に優勝した。

平成9年度、第15代会長に佐藤玉和氏が就任した。翌年に控えた50周年記念事業に向けて実行委員会を組織し、「記念式典」「県総体拡大開催」「記念誌発刊」の3事業の準備を進めている。また、高体連の運営や基本方針、諸問題の審議・立案を目的に「基本問題検討委員会」を設置した。大会では、昨年の市立船橋高に続き成田高陸上部が男子学校対抗で優勝を飾り、また、なぎなたが加わり31専門部となった。

3　将来に向けて

21世紀を目前にし変化の激しい社会の諸情勢の中、教育界においてもさまざまな改革の論議が活発になされている。

本連盟では「生徒数の減少」それに伴う「財源確保」「顧問の高齢化」「専門的指導者の不足」等の諸問題、完全実施が明示されている学校週5日制に伴う「将来的な運動部活動の在り方」、一方、平成17年の全国高校総体、平成22年の二巡目国民体育大会と、21世紀初頭に本県開催が予定されている全国的規模の総合体育大会に向けての体制づくり等、当面する、また中・長期的な課題を認識している。

昭和23年に加盟66校、10専門部でスタートして以来、現在では208校、31専門部を統括し、これまで団体で50を数える全国制覇を成し遂げるなど、本県高校スポーツの普及・発展に努めてきた本連盟は、平成10年4月17日に「創設50周年記念式典」を挙行した。また、記念事業として「県総体の拡大開催」「50周年記念誌発刊」に向けての準備を進めているところである。

今後、本県高校スポーツの一層の振興と、21世紀を担う青少年の育成を目指したゆまぬ努力を積み重ねていくとともに、社会から本連盟に期待を寄せられることを誇りに思い、運動部活動を高等学校文化としてますます発展させ、更なる躍進を誓うものである。

人生を変えた大会

太　田　慎　二

千葉敬愛高校時代、平成3年度静岡インターハイのバドミントン競技にて、ダブルス優勝・シングルス準優勝。
法政大学を経て現在はＮＴＴ東京に勤務。
平成9年度全日本総合選手権大会にてシングルス・ダブルスに優勝。シドニーオリンピックを目指し奮闘中。

私の高校時代の思い出は、やはり平成3年度の静岡インターハイである。

この年は、我々千葉敬愛高校バドミントン部の顧問である大熊喜章先生が着任１０年目の年であり、何とか良い成績をあげようと一丸になって試合に臨んだ。

静岡インターハイは、私が経験した中で最も暑い夏で、窓を締め切った体育館は４０度近くの気温となり、暑さとの戦いでもあった。

試合は順当にシングルス・ダブルス共にベスト4まで勝ち上がり、最終日を迎えた。シングルス・ダブルス両方に残っているのは私だけで、優勝するためには4試合戦わなければならず、後半は体力勝負でもあった。幸いに両方とも決勝戦に進出できた。

体力が限界に近づいているのが自分でもわかったが、とにかくシングルス・ダブルスどちらかには優勝したかった。「この日のために3年間つらい練習を積んできたのだ」と自分に言い聞かせ、パートナーのいるダブルスに勝負をかけ決勝戦に臨み、タイトルを手にすることができた。シングルスは痙攣しながらもフルセットに持ち込んだが、限界が来て準優勝であった。

私は、高校3年間インターハイに出場することができたが、この静岡インターハイが私の人生を変えた。高校時代は無我夢中でバドミントンに打ち込み、ほとんど休みもなく大変苦しい時期であったが、今振り返ると御指導いただいた大熊先生に大変感謝している。

現在は全日本代表として世界に臨み、シドニーオリンピックを目指し、奮闘中である。

東　京　都

《事務局》
〒100-0014 東京都千代田区永田町２－16－２
星陵会館内
TEL 03（3581）5095
FAX 03（3581）6452

創立年月日：昭和23年９月23日

加盟校数		455校
専門部数		39専門部
加盟部数		6,423部
部員数	男子	55,033名
	女子	34,988名
	合計	90,021名

年度	会長	理事長	記事
23		細川潤一郎	都高体連設立　専門部14部設置
24		〃	都高体連規約設定
25		星　一雄	事務局を九段高におく
			バドミントン加盟
26		〃	柔道、相撲、剣道競技加盟
27		〃	自転車競技加盟
28		〃	関東高体連連絡協議会発足
29		〃	第1回日本体操祭参加　相撲加盟
30		〃	事務局を両国高におく
			弓道加盟
31	小松　直行	高崎　米吉	事務局を白鷗高におく
			第1回都総体開催
32	〃	〃	レスリング加盟
			10周年記念誌発刊
33	両角　英運	〃	
34	〃	〃	硬式庭球加盟　優秀選手表彰
35	〃	〃	ウエイト・登山・ボクシング
			加盟　体育優良生徒表彰
36	〃	〃	
37	岩下　富蔵	〃	
38	〃	〃	事務局を日比谷高にお
			く　ライフル射撃加盟
39	尾崎　剛毅	〃	
40	田中喜一郎	〃	
41	〃	〃	第1回高体連研究大会開催
42	〃	〃	定体連が都高体連定時
			制部会として発足
43	新井　迪之	藤崎　寛行	日韓高校スポーツ交歓
			競技会実施
44	〃	〃	
45	宮田豊太郎	湯野　正憲	

年度	会長	理事長	記事
46	宮田豊太郎	湯野　正憲	
47	岸田　文男	〃	
48	〃	〃	都立高加盟費は都が負担
49	〃	磨井　洋一	
50	井上　敬一	〃	全国高校総体開催
51	磨井　洋一	入倉　富夫	
52	〃	〃	
53	〃	〃	
54	風巻　磊蔵	鈴木　英久	
55	〃	〃	
56	入倉　富夫	〃	全国高校総体(ハンドボー
			ル・自転車競技・相撲)開催
57	〃	松原　久三	事務局を星陵会館に移転
58	大野慎一郎	〃	全国高体連研究大会開催
			都高体連会報発刊空手道加盟
59	〃	市川　三男	アーチェリー加盟
60	家弓　鐵矢	〃	
61	〃	〃	都高体連表彰規定設定　専門
			委員会設置　柔道女子の部設置
62	〃	〃	
63	福田　満雄	〃	傷病見舞金規定設定
元	〃	〃	
2	〃	〃	事務局長交代
3	〃	〃	
4	〃	磯部　賢次	
5	久野　猛	〃	なぎなた加盟
6	〃	〃	一条校以外の参加を認める
7	〃	〃	
8	〃	〃	
9	〃	〃	
10	河上　一雄	佐藤　幸夫	50周年記念式典挙行

1 沿 革

本連盟の歴史は、全国高体連とほぼ同じ軌跡をたどり現在に至っている。

発足当時の昭和22年、理事長二階源市氏、事務局府立六中とある。

昭和23年の学制改革により、東京都高等学校体育連盟に改称され、事務局は麻布高校に移り、細川潤一郎氏が初代理事長に就任されている。また、東京都高等学校体育連盟規約を設定し、陸上競技・体操・バスケットボール・バレーボール・庭球・ソフトボール・スキー・スケート・卓球・軟式野球・ラグビー・蹴球・ハンドボール・タッチフットボールの14部を置く。

昭和24年には国体が開催され、本連盟も参加した。昭和23・24年頃は、本連盟が中心となり、全国的な専門部の設置、インターハイの種目別協会との共催などについて対応していた。この時期はまた、物資が極度に不足した時代で、スポーツ用具の調達が大きな仕事で随分とご苦労があった（本連盟の組織の中に正式に配給部が置かれていた）。

昭和25年に、事務局が九段高校、両国高校と移転した。昭和29年に第1回日本体操祭（朝日体操祭）が明治神宮外苑競技場で開催され、本連盟もこれを協賛、8校、1500名の生徒が参加した。昭和31年には、東京都教育委員会と共催して、第1回東京都高等学校総合体育大会が開催され、現在もこれを継承している。

昭和32年には、本連盟も創立10周年を迎え記念誌を発刊する。この間の本連盟の発展はめざましく、特に各専門部の活動は各種大会において、常に全国の上位を占め、運営についても各部が主体性をもって対応していることが示されている。

昭和38年に、日比谷高校に事務局が移転される。翌年にはオリンピックを控え、本連盟でもスポーツに対する機運はますます高まり、この世界的なイベントに積極的に協力していくことが話し合われている。同時に、本連盟は全国高等学校総合体育大会の開催に向けても、その実現に努力を惜しまず、積極的に取り組むことが確認されていた。

昭和40年代は、学生運動や部活動の在り方について等、またその指導の方法についても種々意見が出され、多難、多様の時代であったと思われる。反面、高度経済成長の時代でもあり、本連盟のスポーツも一層盛んになった。

昭和50年には、東京を中心会場として、埼玉・山梨・茨城の各県にまたがり、全国高校総体を開催した。この大会は首都圏での開催であり特に、宿泊・輸送・プログラム・警備の問題など、幾多の難関があった。その都度実行委員会のご努力で解決され、無事終了した。

また、総合開会式は国立競技場で開催され、炎暑や光化学スモッグなどの東京の特殊な事情を考慮して、あえて薄暮という時間帯を選び実施した。また、大会運営や総合開会式についても簡素化したものとした。

昭和56年には、神奈川県を主会場とした1都7県で全国高校総体が開催され、東京では自転車競技・ハンドボール・相撲の3競技をお引き受けした。

昭和57年に、事務局を星陵会館に移し現在に至る。

昭和58年には、全国高等学校体育連盟研究大会を東京で開催する。全国より、500余名の先生方の参集を得て大成功裡に終了することができた。また、この年調査研究委員会（編集委員会）の先生方の大変なご尽力により、本連盟の会報を22年振りに発行することができた。この機会を得て、バックナンバーを記念して1号と刻んだ。

昭和61年には、本連盟も専門委員会を設置しスポーツの多様化と、種々問題の解決を計るべく、委員会を中心として業務を推進している。

2　10年の歩み

昭和から平成に変わった元年度は、本連盟発足40周年の年でもあった。記念式典・会報記念号の発刊など多忙を極めた1年であった。

全国的には、学習指導要領の改訂が行われ、本年度より試行期間として施行された。学校体育スポーツと生涯スポーツ、さらに競技スポーツにおいて、適切な振興策が論じられた年でもあった。

平成2年度は、本連盟にとって大きな転換期であった。まず、事務局長の交代、さらに事務局員の退職という文字通りゼロからのスタートとなった。幸い、大杉事務局長の精力的な努力によって、この難局を乗り切ることができた。また、この年度より、スポーツ振興基金が創設され、競技水準向上のための援助が開始された。加えて、朝鮮高級学校の加盟に関する問題などその対応に心をくだいた一年でもあった。

平成3年度は、21世紀に向けての高体連の課題が明らかになってきた年であった。

生徒の減少による財政面の問題、部活動加入者低落の歯止め策など、深刻な問題が語られ始めた。

平成4年度は、本連盟市川理事長の退任、磯部理事長の着任があった。

社会情勢の変化が、否応なしに高等学校教育の現場にも、本連盟の諸活動にも影響してきていた。生徒減少期・情報開示・生涯学習。学校週5日制などの報道が新聞紙面を賑わした。

平成5年度は、本連盟福田会長の退任、久野新会長の着任があった。

本年度の加盟校数は、延べ6,792校で、前年度に次ぐ多さであった。また、全国高体連の決定を受けて、来年度から一条校以外の学校の参加も、インターハイに限って可能になり、大会に花を添えることになる。

平成6年度は、なんと言っても、インターハイ予選に、一条校以外の高等学校の参加が認められたことである。ボクシングで朝鮮中高級学校の6選手が、東京都代表としてインターハイで活躍したことは大変印象に残った。

また、千葉県にて開催された全国高体連研究大会で、本連盟調査研究委員会が、部活動を指導している顧問の実態や意識について発表を行い、注目を集めた。

平成7年度は、全国高校総体への出場選手・役員の結団式が都庁内で挙行できたことが特筆すべきことである。都教委のご努力で、しかも、副知事の臨席もいただいた。

次に、本連盟事務局が拡張され、膨大な資料の整理や打ち合わせ会などが便利になった。

さらに、調査研究委員会で、生徒1万名に対し、スポーツに対する実態や意識の調査が行われた。

平成8年度は、昨年と同様に全国高校総体の結団式が都庁内で挙行された。また、全国高体連の決定を受けて、加盟校以外の選抜大会への参加、ならびに外国人留学生の参加制限などの規定が着々と整備された。

また、本連盟創立50周年を迎えるための実行委員会が結成された。

平成9年度は、加盟校数の減少が続いてきており、全体の登録数が前年度に比べて87校減となった。

さらに、部活動に対する批判や再検討がすすめられ、本連盟でも時代の要請に合う部活動の模索が大きな課題となった。

このような中でも、東京都選手団のめざましい活躍があった。全国高校総体の優勝校を次に紹介する。

藤村女子高校体操女子団体
世田谷学園高校柔道男子団体
高輪学院高校剣道男子団体
日大豊山高校水泳男子競泳団体
東亜学園高校フェンシング男子学校対抗
国学院久我山高校ラグビー
修徳高校スケート男子フィギュア学校対抗

以上、10年の歩みをまとめた。

また、本連盟創立50周年記念事業実行委員会の活動が具体化し、記念式典は平成11年3月13日（土）に挙行することが決定。次の10周年に向けてのさらなる発展を祈念する。

3　将来に向けて

「今後の課題や将来展望」を考える時、次にあげる要因が大きく影響してくると思われる。まず第1に、生徒の減少である。これは、

全国的な傾向であるが、本連盟でもこの状況は避けられない。加盟状況の推移を見ても、この10年間で、平成４年度の6,841校（部）をピークに減少期に入っている。この傾向は今後も続き各学校でチームとして成立せず、公式戦に参加できない部が増えると思われる。

第２に、それにともなう財政困難である。

生徒減は部活動の減少であり、加盟校数の減少となりそれが補助金の減額となって表れるからである。本連盟としては、経常費用の削減が緊急の課題であり、対策である。

第３に、時代の要請に合う、部活動の在り方の模索である。

中でも、週休２日制実施にともなう部活動の運営方法、特に公式戦をどうするかが大きな課題である。

この問題には、東京都独自の事情が関係している。

つまり、私学が公立より多くの学校数を持ちそれぞれが多様な対応をとっている実情があり、また、長い間、学校体育として位置付けられ、発展してきた部活動を社会体育へ移行したらどうかという意見や、その指導者の問題など、課題は多岐に渡っている。

このような要因を念頭に起きながら、将来への展望を述べてみる。

まず、生徒減から生ずる問題に対しては、統廃合などには、合同チームの推進、社会体育指導者や民間コーチの積極的な活用、その学校の特徴を生かした部活動の精選、つまり、学校による重点種目制の徹底などである。

財政難には、後援会組織など、その地域からのバックアップの工夫が必要である。

時代の要請に合う部活動については、完全週休２日制をにらんで、土曜日中心の公式戦としたらよいのではないかと思う。日曜日は、週休２日の趣旨に合わせて休養日として確保する。部活動の社会体育への移行は、地域社会に施設も指導者も不足している現状では無理である。そこで、重点種目の学校に、他校の生徒を集めた練習や、午後３時以降は、指導者に別の手当てを出すなど、現状を一歩前進させた工夫が必要である。

高校時代を振り返って

山尾朱子

平成５年藤村女子高等学校卒業。９年東京女子体育大学体育学部卒業。10年より同校の非常勤講師と新体操のコーチになる。８年アトランタオリンピック出場。

私は小学生から新体操を始め、高校を選ぶ時も新体操部があるところが良いと思っていました。やるからには精神面も身体面も、もちろん技術的にも上達し、それまでの環境から自立することを目標としました。ほとんど新体操中心の生活でしたが、高校生になってもまったく環境は変わりませんでした。今までのように同じ先生の下で同じ練習内容をこなしながら、格別には変化のない生活を送っていたのです。好きだった事が、大変苦痛になってきたあの時期がスランプだったのかも知れません。その時の唯一の楽しみが学校生活。他愛もない友達との会話でした。今でも良い思い出として覚えています。皆といる時こそ、私の「日常生活」から離れる事ができるとともに少しの刺激と、大きな安らぎを与えてくれたのです。

やがてスランプから抜け出すきっかけがありました。それは高校３年生のインターハイの時です。この時の優勝も良い思い出の一つですがそれよりも、開催中のバルセロナオリンピックの放送をまさしくその夜に見た時の事です。先輩の川本ゆかりさんが、大舞台で演技をしている画像を目のあたりにしたのでした。世界を意識した事はなかったのに、憧れと羨ましさが湧いてきて「出場してみたい」という気持ちが募りました。この何とも言えない感情が、少しずつですが、自分の新体操観を変えたと思います。大学で世界大会を経験し、さらにアトランタオリンピックに出場できるまでに上り詰められたのは、後にも先にも、高校生の時のスランプ脱出があったからこそと思っています。

周りの先生方や友達に迷惑をかけながら、普通の高校生では経験できない事を、本当に良いかたちで勉強させてもらいました。今はコーチとして新体操に携わってますが、これからも自分のすべての経験を生かし、コーチ業に役立てて行こうと思います。

神　奈　川　県

《事務局》
〒221-0855 横浜市神奈川区三ツ沢西町3-1
県立スポーツ会館内
TEL 045（311）8817～8
FAX 045（313）2669

創立年月日：昭和24年6月

加盟校数		306校
専門部数		37専門部
加盟部数		5,600部
部員数	男子	39,670名
	女子	26,187名
	合計	65,857名

年度	会長	理事長	記事
22			神奈川県体育指導者連盟として発足、事務局を県教育庁体育課（現スポーツ課）に置く
24	保坂　周助	秋山　春吾	神奈川県高等学校体育連盟として発足。全国高体連に加盟、本連盟規約を制定施行
25	佐藤　秀三	萬代　鹿三	
28	〃	〃	全国高校陸上競技大会を三ツ沢競技場で開催
29	〃	〃	本連盟「創刊号」発刊
32	〃	〃	優秀選手表彰式を挙行
34	荒井　惟俊	〃	
35	香川　幹一	〃	
38	〃	〃	創立15周年式典を挙行 第1回県高校総体総合開会式を挙行
41	小林房次郎	〃	第1回県高校スポーツ強化促進協議会を開催
42	鈴木　清	〃	
43	〃	〃	創立20周年式典を挙行
44	〃	又木誠八郎	故萬代鹿三前理事長の高体連葬を挙行　本連盟の要覧発刊　全国総体夏季大会開催（ヨット、漕艇、ホッケー、相撲）創立20周年記念号発刊　県定時制体育部会加盟 6地区高体連発足 対外試合規定を制定
47	落合　涉	又木誠八郎	大会開催基準要項制定
48	落合　涉	又木誠八郎	赤十字救急員資格取得講習会の開催
49	千田　敬三	〃	
51	〃	〃	傷病見舞金規定を制定
52	高橋　亨	小池　一正	
53	〃	〃	創立30周年式典を挙行
55	井谷　正氣	〃	全国総体中央委員会を開催
56	〃	〃	全国高校総体総合開会式を挙行（横浜三ツ沢陸上競技場）7種目を開催
57	〃	笹生　登	
58	矢橋　恵一	〃	
61	田中　恵一	鈴木　洋一	第20回全国高体連研究大会を開催
62	落合　寿	〃	
63	〃	〃	創立40周年式典を挙行
元	渡辺　栄一	〃	
3	野畑　仁	〃	
4	〃	下内　義光	ダンス部加盟（33）
5	進藤　隆博	〃	少林寺部加盟（34） 生徒加盟金、学校負担金の値上げ
6	〃	〃	県大会参加料の値上げ
7	実方　正	〃	カヌー、なぎなた部加盟（36）
8	〃	城所　富夫	地区大会参加料の値上げ　加盟306校
9	斎藤　幸雄	〃	スポーツ会館改修工事の為県庁分庁舎に移転複数校（合同チーム）による大会参加可能となる
10	〃	〃	創立50周年式典

1 沿 革

昭和20年代

昭和22年（1947）、神奈川県体育指導者連盟として発足、昭和24年6月神奈川県体育指導者連盟を発展的に解消し、神奈川県高等学校体育連盟として発足。戦後の混乱した世相の中にあっても、学校体育を志す人々の体育を思う信念に基づき、スポーツ活動を通じて体力、気力に満ちた青少年の育成を念願として「生徒のためのスポーツ団体創設」に踏切り、諸々の障壁を克服しつつ県高体連の結成を成し遂げた。

昭和30年代

以来、目的を達成するために種々の事業を実施してきたが、昭和30年（1955）より「高体連創刊号」発刊、現在の「高体連会報」として本連盟の事業の発展、選手の記録等つぶさに見ることができる。

県高校総体総合開会式

昭和38年（1963）10月19日、県営藤沢陸上競技場（現県立藤沢体育センター陸上競技場）で第1回県高等学校総合体育大会開会式が行われた。当時の会報によると、この開会式の特色としては、加盟校の生徒会代表2名計約140名が代表旗を大小ひるがえして、行進をしたことである。「高校生による鼓笛隊を先頭に新たに作られた24専門部旗をかざす選手団の入場行進は、一大圧巻であったが折からの風に交えた小雨をついて、堂々志気を挙げての開会式であった」と記されている。

昭和63年（1988）、26回を迎える総合開会式では、193校、約1万4000人が参加、30競技に約4万7000人の選手が競技会に参加し、名実ともに伝統ある県下最大のスポーツ行事に成長し、また学校教育活動としても定着し、その期待されるべく成果をあげてきた。

昭和40年代

昭和43年（1968）5月、県高体連20周年記念式典を挙行。この年本連盟創設・運営にご尽力いただいた萬代鹿三先生の高体連葬（追悼式）を行う。

昭和44年（1969）、高校スポーツ強化指導普及部会（現強化普及委員会）を発足、競技力向上を目指した委員会事業として、各大会への選手強化、また、普及事業としてスポーツ活動におけるリーダーを養うことを目的とした高校スポーツ強化普及振興協議会を実施、積極的な委員会活動を展開し、現在に至っている。同じく、高体連の重要な諸事業の一つとして、昭和46年（1971）12月に研究部会（現調査研究委員会）を設け、本県高校体育・スポーツの実態の把握とその振興対策についてより向上を目指した調査研究を組織的に進め、毎年全国大会で発表してきた。

昭和50年代

昭和53年（1977）5月、県高体連30周年記念式典を挙行する。7月には、「神奈川グラフ」を発刊し、大会における本県高校スポーツの歴史・活躍を振り返るとともに残す。

昭和54年（1978）より安全指導普及講習会（現安全対策委員会）が発足、学校スポーツ活動時の安全対策として水上安全講習会、赤十字救急員資格取得講習会等の開催。指導者に対する運動時の安全対策の啓蒙と意識事業として毎年実施してきた。

昭和53年（1977）10月、全国高体連中央委員会の席上、秋田県高体連より全国高校総体開催不可能の申し出があり、全国高体連より開催要請を受け関東1都7県審議の結果、関東開催を受諾。その後、本県が主会場となり陸上競技を始めとする7種目を開催することで決定。昭和56年（1980）8月、「はばたけ青春　広げよう友情」をスローガンに全国高等学校総合体育大会総合開会式を横浜市三ツ沢公園陸上競技場で挙行する。全国各地より精鋭を迎え若い力と不屈の闘志、鍛え上げられたハイレベルの競技が展開され、本県高校スポーツの振興充実に益するところ大であった。

昭和60年代

昭和61年（1985）1月には、第20回全国高体連研究大会が「豊かでたくましい人間性を培うための体育・スポーツ活動を目ざして」を大会主題として県内外より500余名の参加を得、本県にて開催する。

昭和62年（1986）、加盟304校、加盟生徒約34万人、部員数9万1千人、設置部数5,200部に達し、全国的にも大規模な高体連となる。

2　10年の歩み

昭和50年代に入り、県立高校100校計画により加盟校が急増し、若い指導者の増加と同時に生徒の部活動への積極的な動きが見られ、各専門部（34）は大会運営等にうれしい悲鳴となった。

昭和63年(1986)、加盟304校、加盟生徒約35万人、部員数9万5千人、設置部数5,300部に達した。内訳は、全日制254校（33万人）、定時制36校（1万人）、通信制7校（1万人）盲聾養7校（500人）である。県立高校100校計画も達成され部活動への積極的な動きが見られ、各専門部の規模も膨れ上がり運営に盛り上がりが見られた。そのような中で5月、県高体連40周年記念式典を挙行、本連盟を支えて下さった功労者を表彰し記念号を発刊する。

県高校総体総合開会式

昭和38年にスタートした総合開会式は、新設校の学校創設エネルギーとして積極的な参加で200余校、1万5千人を超える行進参加者が一同に会し壮大な開会式であった。また、地元ＴＶＫテレビの協力で開会式の全模様を放送するという企画で大いに盛り上がりを見せた。しかし、残念なことに昭和61年より準備の甲斐なく荒天により3年連続中止を余儀なくされた。

その後、参加校の減少が見え始める。そこには、大会の過密により開会式を待たずに敗退した学校内の式典に対する意義、とらえ方、また、引率に関わる問題等現れ始め、まさしく30数回を数える総合開会式のもち方の再構築を迫られている。ここ数年課題を抱える中、日程、内容、いろいろな形での呼びかけ等々試みてはいるものの大変革が必要のようである。

平成2年度　第28回県高校総体　開会式
（参加　183校・12,554名）

平成に入ると、ボウリング、ゴルフ、少林寺拳法、ダンス、カヌーといった競技の本連盟加盟について動きが出てきた。

平成4年(1992)を契機に少子化、価値観の多様化と言った言葉が使われ始め、指導者の高齢化も伴い学校部活動の抱える諸問題が紛糾し始めた。中でも長年に渡り実施されてきた総合開会式に対するとらえ方が多様化し、参加校の減少が現れ始めたことも一つである。

時を同じくして、規約等検討委員会において、近い将来生徒数の減少が見られ各事業への影響が出てくることを予想し、財源確保から生徒加盟金、学校負担金の値上げについて検討が始められた。平成4年理事会において慎重に審議を繰り返してきた財源確保の為の生徒加盟金、学校負担金値上げという議題も評議員会では見送られる厳しい状況となった。異例の臨時評議員会を開催成立、平成5年度より実施する方向となった。

平成5年(1993)、生徒加盟金、学校負担金の値上げを手掛け、各方面に精力的に働いて下さった野畑仁先生（前会長）が突然体調をこわされ闘病生活の末12月に逝去された。

安全対策委員会では部活動顧問を対象に実施してきた日赤救急員資格取得講習会を主管とする傍ら、各競技種目の特性として練習時に発生しやすい障害、またその対策も練習方法等を各専門部毎にまとめた「安全対策マニュアル」を作成し、加盟校、関係機関に配布した。

平成7年(1995)、平成4年のダンス部、平成5年の少林寺拳法部に続き、カヌー、なぎなた両部が新加盟。36専門部となった。

平成9年(1997)加盟306校、加盟生徒25万人、部員数7万1千人、部設置数5,100部に達した。内訳は、全日制254校（23万5千人）、定時制、通信制45校（1万4千人）、盲聾養7校（500人）である。部員数の減少にともない専門部によっては20年前の規模に戻ってしまった。部活動の存在が危ぶまれ数人で細々と活動、もしくは、休部、廃部へと追い込まれる状況。発表の場である競技会にも参加することができないといった状況が現れ始めた。このような実態の解決策として、複数校合同チームによる大会

参加を可能とし、各専門部では、普及を目的とした練習会、大会運営の動きが出始めた。

3　将来に向けて

53国体「かながわ　ゆめ国体」の平成10年開催にともない、本県競技力向上対策を目的とした「スポーツ振興会議」が設立。同様に本連盟強化事業に関する見直しが求められ、協会・連盟とタイアップ、専門部強化委員を始め多くの先生方が競技力向上を目指し強化事業を開催、校務の傍ら東奔西走の日々である。

現在、強化普及・安全対策両委員会の連携による競技力向上対策事業とした「医科学サポート事業」が行われ選手への医科学からのアプローチを実施している。ドクター、ＰＴ、トレーナー等の一貫したシステムにより選手を管理・育成というまさしく今、スポーツに求められている事業に取り組んでいるところである。

また、調査研究委員会では、部活動に関する種々の調査が継続的に行われ、部活動に対する生徒・顧問・保護者を対象とした意識調査、部員減少傾向に関する調査、用具・施設調査、障害実態調査、中学校部活動指導者に対する調査、また競技力を目指した体力測定と効果的運動処方等々膨大であり、なおかつ実態と理想、競技力向上と普及等、これからの問題提起ともなりまとめなければと考える。

高体連50年、多くの方々に支えられ、そして受け継がれ今、一方で現状のままでよいのか、まさしく社会、学校教育の変化を無視することは出来まい。また、財政の縮小にともない、当然の如く事業の見直しが必要となってくる。しかし、学校教育において担っている「高体連」という大きな役割が薄れていくことには問題があるのでは。

発足当時の「おもい」を再度考えてみたい。

各種委員会の活動

高校総体を振り返って

加　藤　貴　子

県立富岡高校卒業（平成２年３月）
Ｓ63年度　関東・全国総体女子バスケットボール大会優勝現在シャンソン化粧品勤務アトランタオリンピック女子バスケットボール全日本代表

“全国制覇”私の中の一つの目標でした。しかし、上位はいつも私学が独占、わが県立高校がいかにして食い込むかをテーマに毎日練習を積み重ねてきました。顧問の星沢先生は、常に「１＋１＝２ではなく、３にも４にも出来るんだ」と言われ、頭を使ったバスケットを求めていました。そして、いろいろな状況におかれてもすぐに対応・反応できるような反復練習が行われました。一番思うことは、工夫することです。私はひねくれ者？なので、人と同じことは嫌いで、最初は真似から入っても自分流に変えていったり、いろいろと相手の状況を想定しプレーのバリエーションを増やしたり、チームにおける自分の役割を把握・意識しながら、上手になりたい一心で毎日自主練習をしてきました。

そして、高校２年の夏、神戸インターハイの決勝戦、相手は名門校の名短附。前評判では相手チームが優勢。しかし、一進一退のゲーム展開、私はシュートが決まるたび、そしてあたかもナンバープレーと思わせるようなナイスプレーが続き、得点が入るたび鳥肌を立てていました。ディフェンスをしていても「さアーどこからでも向かってこい！」と思えたのです。皆がリラックスしてゲームを楽しんでいました。試合終了のブザーがなり“勝ったのです”。

涙がボロボロ溢れ、「これが全国優勝・これが全国制覇だ」皆で抱き合い感激を存分に味あわせてもらいました。もし、チームの中の誰か１人でも低い意識の中で練習をしていたらきっと頂点の座を得ることが出来なかったと思いますし、チームがひとつ、そして、一体となることによって、さらなる力が生まれたのだと思います。高校時代の最高の思い出。今でもずっと心の中に焼きついています。

＝最後に私がボールを投げ上げた瞬間を＝

山　梨　県

山梨県高等学校体育連盟

《事務局》
〒400-0001 山梨県甲府市和田町2564
県スポーツ会館内
TEL 0552（53）1846
FAX 0552（53）1823

創立年月日：昭和23年3月9日

加盟校数		49校
専門部数		35専門部
加盟部数		891部
部員数	男子	8,827名
	女子	5,465名
	合計	14,292名

年度	会長	理事長	記事
22	近藤　兵庫	安藤　星州	県中等体連盟結成
23	〃	〃	高体連に改称
24	〃	〃	第1回県総体開催
25	〃	〃	表彰制度制定
26	〃	〃	
27	伊藤　泰司	岩崎鋭一郎	
28	〃	〃	関東協議会結成
29	古屋　一雄	〃	剣道・弓道加盟
30	〃	〃	
31	〃	加藤　正雄	
32	〃	〃	連盟会報第1号発刊
33	〃	〃	創立10周年記念式典
34	〃	〃	
35	〃	〃	県総体冬季大会実施
36	〃	〃	
37	田口　政義	野口竹次郎	事務所、甲府一高
38	〃	〃	部長、委員長制採用
39	広瀬　勝雄	〃	
40	高遠　啓一	花輪　民夫	事務所、甲府二高
41	佐野　緑郎	〃	
42	〃	〃	創立20周年記念式典
43	〃	〃	
44	平塚　武	〃	
45	〃	三枝　浩	県総体基準要項策定
45	〃	〃	新人大会統一で実施
46	〃	〃	
47	〃	〃	
48	〃（小田切勝）	〃	
49	小林　勝意	〃	
50	〃	〃	全国総体（6種目）開催

年度	会長	理事長	記事
51	小林　勝意	三枝　浩	
52	〃	〃	創立30周年記念式典
53	花輪　民夫	根岸　昭	30周年記念総体開催
54	〃	〃	
55	〃	〃	定通制が専門部加盟
56	〃	〃	全国総体（2種目）開催
57	〃	増村　栄治	
58	野田　秀豊	〃	レスリング・ヨット・なぎなた・ホッケーが加盟、強化指定制導入
59	〃	〃	白根高、甲府昭和加盟
60	飯塚　猛夫	〃	41回冬季国体開催
61	望月　正廣	〃	41回夏季、秋季国体開催
62	〃	堀内　和弘	創立40周年記念式典
63	中村　位	〃	銃剣道加盟
元	根岸　昭	大澤　徹	平8総体開催協議
2	〃	〃	平2全国総体スケート競技開催
3	上野　敦男	〃	ろう学校加盟
4	跡部　義幸	〃	会費700円に値上げ
5	坂本　久男	〃	県総体、小瀬主会場
6	岡　保和	〃	平8競技力向上対策委員会
7	宇野　耕二	〃	平8～10強化指定校内定
8	〃	〃	平8全国総体夏季大会（27種目）開催　山梨県選手団933名
9	〃	田草川光男	創立50周年記念式典
10	小笠原正人	保坂　重機	

1　沿　革

1　昭和23年度（創立）～昭和62年度

国が「スポーツの振興」に積極的に取り組み戦後社会の建て直しを図ろうとする中で、国民のスポーツ熱が高まり、県内においても各競技団体や地域社会においてスポーツ大会が開催され、スポーツの急速な普及・振興の先駆けとなった。

このためには、学校体育関係者も積極的に参加・協力し、大きな役割を担ってきたが、学校教育における児童生徒のスポーツ活動を組織的に推薦する必要もあるとして、体育関係教師が中心になり、県学務部の指導を受けながら中等学校の生徒を対象とする体育団体創立に向け、関係競技団体等の調整が粘り強く行なわれた。その結果、昭和23年（1948）3月9日山梨県中等学校体育連盟（現・山梨県高体連）が創立された。

同年4月、山梨県高等学校体育連盟に改称、加盟校26校、加盟専門部13部であった。

陸上競技における静岡県との交流が、第17回山静高校体育大会として、7種目により身延一中を会場に開催された。

昭和24年、第1回山梨県高等学校総合体育大会を男子11種目、女子9種目で開催、男子は甲府第一高校、女子は山梨高校が総合優勝した。

昭和25年、表彰規定を制定し、26年2月24名の優秀選手を表彰した。

昭和29年、柔道、剣道、弓道の格技が専門部に加盟した。

昭和30年第23回大会を最後に、山静高校体育大会が終了した。本連盟が主管した初めての関東大会となった、第7回関東バレーボール女子選手権大会を新設の和田町総合グランドコートで開催した。

昭和31年、第8回県高校総体に盲学校が加盟し、柔道種目に出場し健闘した。

昭和32年「会報1号・31年版」を本連盟創刊号として、連盟の歩みと専門部の記録を内容に発刊した。

昭和33年、第10回県高校総体を連盟創立10周年記念大会として開催、功労のあった個人11氏と23団体に表彰状及び感謝状を贈呈した。

昭和36年、第23回県高校総体より、スキーとスケートを加え、冬季大会として実施した。

昭和37年、連盟創立以来甲府工業高校に置いた事務所を、甲府第一高校に移転した。

昭和40年、調査研究委員会を設置し、連盟として組織的研究活動を開始し、全国研究大会で発表した。

昭和43年、創立20周年記念式典を県民会館でおこない、122名に感謝状を贈呈した。

昭和44年1月、50年2月、56年1月に全国高校総体冬季大会スケート競技会を富士急ハイランド、富士スバルランドで開催した。

昭和45年、県高校総体開催基準要項設定、23回大会より採点方法を現行の参加校数による得点制を採用した。

昭和50年、全国高校総体夏季大会の、バレーボール男子・ハンドボール・サッカー・ソフトボール・登山・ウェイトリフティングの各競技を開催した。

昭和53年、創立30周年式典を行い、功績があった35名、9校、7運動部、32団体を表彰した。また、同年、県教育委員会・県競技力向上対策本部の助成を得て、高校運動部強化指定制度を「かいじ国体」の61年までを3期に分けて導入し、高校運動部の競技力向上を図った。

尚、この制度は62年以降も上記の目的に加え特色ある学校づくり推進のために継続され、本県高校運動部の活性化に大きく貢献している。

昭和55年、定時制通信制高校が高体連に専門部として位置づけられた。

昭和56年、全国高校総体夏季大会の、剣道・ボクシングの2種目を開催した。

昭和58年、レスリング・なぎなた・ヨット・ホッケーが加盟し、32専門部となる。また、1年生大会の開催が決定された。

昭和59年、新設校の白根高校・甲府昭和高校が加盟した。（加盟校47校）

昭和61年、第41回国体「かいじ国体」冬季・夏季・秋季大会が開催され、本県は史上最高得点で天皇杯を獲得、皇后杯でも優勝した。

この大会において、高体連が取り組んだ少年の選手強化が優勝に大きく貢献した。

昭和63年、創立40周年記念式を行い、功績のあった67名、17校、11運動部、6団体に表彰状及び感謝状を贈呈した。

同年3月、連盟事務所を山梨県スポーツ会館内に移転した。

2　10年の歩み

1　昭和63年度～平成9年度

・昭和63年度、「かいじ国体」少年の部で活躍した銃剣道部が専門部として全国で初めて加盟承認された。

同年開催の第40回県高校総体を創立40周年記念大会として、主会場を初めて小瀬スポーツ公園に移し開催、優勝者に記念メダルを贈呈。

この年、韓国のソウルで開催されたオリンピック大会に、中込恵子選手（甲府一高・3年）がアーチェリー競技、滝川一夫（北富士工・教諭）が自転車競技に日本代表として出場、連盟として激励会を開催。

剣道、ハンドボール、女子バレーボール、庭球の各種目関東大会開催。

・平成元年度、前年度第6回理事会で了承された会費が、従来の300円から200円増額され500円となる。

平成8年度に開催が予定されている全国高校総体夏季大会準備のため、全国総体開催準備委員会（専門委員長）が設置された。

同年9月、平成2年～4年度の強化指定運動部の原案を審議し、142部を内定。

サッカー、バドミントン、相撲、体操、新体操、駅伝の各種目関東大会開催。

・平成2年、県立ろう学校の連盟加盟を協議

2年度全国高校総体スケート競技会、山梨県実行委員会設立、同大会が3年1月、富士吉田市・河口湖町・長野県南牧村を会場に、スピード・アイスホッケー・フィギュア競技を開催、この大会に、30都道府県・236校・1592名の選手・役員が参加した。

「第11回アジア競技大会」が北京で開催され体操の小澤梨恵（甲府西高）と水泳の中込恵美子（東海甲府高）が出場した。

空手道、柔道、陸上競技の各種目関東大会開催。

・平成3年度、県立ろう学校正式加盟

同年の石和高等学校ライフル射撃部は、関東大会、全国大会ともに団体優勝を果たした。

平成8年度全国高校総体の開催に向け、県当局、県教委、県議会の力強い理解のもと、準備推進体制が大きく前進し、平成8年度全国高校総合体育大会夏季大会の開催申請書を全国高体連に提出。

ボクシング、女子バスケットボール、アーチェリーの各種目関東大会開催。

・平成4年度、生徒減と平成8年全国総体準備のため、次年度より会費を200円増額することについて審議承認。

高校運動部指定強化（平成5～7）について選定作業実施し、136部を内定した。

平成8年度全国高校総合体育大会夏季大会の本県開催が全国高体連秋季理事会で正式に決定された。

男子バレーボール、レスリング、ソフトボールの各種目関東大会開催。

・平成5年度、平成6年度以降も県高校総体の主会場を小瀬スポーツ公園とすることを決定。

平成8年度全国高校総体準備委員会設立（6月22日）された。

平成8年度全国総体競技力向上対策委員会（6月29日設置）について、組織及び規約が承認された。

全国高体連理事会において、会場市町村が承認された。

高体連会費が本年度より生徒一人700円徴収開始。

自転車、弓道、卓球、ソフトテニス、ホッケーの各種目関東大会開催。

・平成6年度、平成8年度全国高校総体に向けて県高校推進委員会を設立（6月5日）し、大会運営を側面から支えるため、県下高校を6地区に分け、地区推進委員会による「高校生一人一役」運動など活動がスタートした。また、推進委員会の代表生徒が富山総体視察。

平成8年度総体特別強化事業による重点強化運動部制度を導入、28種目、26校、49運動部を指定し、関東大会、全国総体、国民体育大会等で好成績を修めるための競技力向上特別強化を開始。

全国高体連理事会において、8年度全国総体大会スローガン「かけぬけろ夏　風をきれ山梨で」と、シンボルマークが承認された。

・平成7年度、平成8年度から3ヶ年の高校運動部強化指定について、46校、37種目、136部（男女34部、男子・60部、女子・42部）の指定を内定した。

平成8年度全国総体県準備委員会を改組し、県実行委員会を設立した。全国総体推進室員が増員され、専任職員が延べ23名。

バスケットボール男子、ハンドボール、相

撲、ウエイトリフティング、フェンシング、テニスの各種目関東大会開催。

・平成８年度

平成8年度全国高等学校総合体育大会夏季大会を「かけぬけろ夏　風をきれ山梨で」のスローガンのもと、8月1日から24まで、県下24市町村で開催した。

開催した種目は、27種目、山梨県からは役員10名、監督167名、選手756名、総勢933名が出場した。

成績は、ウエイトリフティングの日川高校団体等、6種目の優勝を含む89種目に入賞した。

アーチェリー、バレーボール女子、剣道の各種目関東大会開催。

・平成９年度

研究部に強化対策、運動部活動推進、障害防止対策の各委員会を設置した。

創立50周年記念事業準備委員会（5月20日）、同実行委員会（10年1月14日）を設置し、平成10年2月21日、記念式典及び祝賀会をアピオに於て開催した。

記念式典に於て、153名、31校、26運動部が表彰され、23の団体等に感謝状が贈呈された。式典参加者は363名。

サッカー、体操・新体操、なぎなたの各種目関東大会開催。

3　将来にむけて

50年を振り返ると、本連盟に関わられた先人達のご苦労により、スポーツの世界への貢献はもとより、高校教育に果した役割は誠に大きく、昭和61年「第41かいじ国体」、平成8年「全国高校総体夏季大会」が大きな成果をあげ、成功裡に終了したのも、高体連が長年貯えた力を結集した賜でもあった。

さて、高校生を取り巻く環境は、高齢化、少子化に加え、多くの情報の渦中にあり、健全な人格形成に向け、学校教育だけでなく全ての教育環境の整備が必要な時期である。

そのような中で、高等学校運動部活動の健全な発展のため、各専門部では常に先端的指導法の研修を進め、生徒が進んで部活動に取り組み知的行動力と幅広い人間性の育成が期待できる運動部活動の推進に向け、学校体育団体はその使命をはたさなければならない。

世界大会を経験して

甲府商業高校バレーボール部
内藤　香菜子

第５回バレーボール女子ユース世界選手権大会出場

4月に、タイで行なわれたアジアユース大会そこで優勝し、世界大会の出場権を手にいれた。今回の遠征、大会は、世界選手権とインターハイが同時期に開催されるというアクシデントがおこり、アジア大会の時と違ったメンバーでスタートした。

私もチームのみんなとインターハイに出場したいという気持が強かったが、周りの多くの人達やチームのみんなが応援してくれたので、世界大会で頑張ってこようと決めました。

けれど、初めて顔を合わせるメンバーもいてこれからの長い遠征を前に、少しの不安もあった。しかし、初めてのヨーロッパへの期待も大きく日本を出発した。

7月11日、ロンドン到着。ここでは、ワールドユース大会へ出場したり、市街の見学をしたりと有意義に過ごした。次に、ギリシャへ入った。ここでは、世界大会へ向けての厳しい練習となった。そして、7月30日、世界大会が開催されるタイへ入った。第1戦、第2戦と、完成されたチームとの差は隠せず、惜しくも敗退した。予選落ちが決定した中で迎えた最後のキューバ戦。皆で、絶対勝とうと、心に決めて試合に臨んだ。会場での日本への声援はいつにも増して大きく、私達は会場と一体になった。そして、セットカウント3－1で快勝した。今までで一番大きな感動を味わった。

今回は、良い結果を出すことができなかったが、世界のいろいろな国を見せていただき、多くの人と接し、ふれあうことができた。また、慣れない土地での練習は、辛く、厳しく、多忙なスケジュールを消化していく中での試合、時差との戦い、そして自分との戦い等、これらの体験をとおして、多くを学ぶことができた。

最後に、このような機会を与えてくださった方々、1年近く応援し、支えてくれた人達に感謝したい。

新　潟　県

《事務局》
〒951-8127 新潟県新潟市関屋下川原町2-635
県立新潟高校内
TEL 025（266）2658
FAX 025（266）2658

創立年月日：昭和23年4月1日

加盟校数		116校
専門部数		31専門部
加盟部数		2,284部
部員数	男子	19,280名
	女子	11,489名
	合計	30,769名

年度	会長	理事長	記事
23	礒　幸次郎	小笠原　厚	新潟県高体連創設
24	〃	外川右兵衛	
25	〃	〃	
26	〃	〃	
27	〃	〃	
28	〃	〃	
29	太田　浩	近藤　圓	4月、新潟高校火災で類焼
30	〃	〃	「県高体連年報」創刊。8月、全国高校体操競技大会開催
31	〃	〃	
32	〃	〃	県高体連創立10周年記念総合体育大会開催
33	〃	〃	8月、全国バドミントン大会開催 2月、全国高校スキー大会開催
34	〃	〃	
35	〃	〃	8月、全国高校レスリング大会開催
36	〃	〃	8月、全国高校全日本軟式庭球大会開催 2月、全国高校スキー大会開催
37	〃	〃	
38	阿部　藤策	〃	8月、第1回全国高校総体開催（陸上競技・バスケットボール・ボクシング・自転車・漕艇・ヨット）
39	丸亀　金作	〃	6月、第19回国民体育大会開催
40	〃	〃	
41	小野塚忠義	〃	渡辺会長は41年11月～
42	渡辺　芳雄	山田　文威	8月、全国高校総体開催（体操・剣道） 2月、全国高校総体スキー大会開催
43	〃	〃	
44	〃	〃	
45	菅原　久夫	〃	
46	菅原　久夫	山田　文威	
47	〃	〃	
48	高柳　顕之	〃	
49	〃	〃	
50	塩崎巳太郎	〃	
51	〃	〃	8月、全国高校総体開催（レスリング・サッカー・庭球）
52	藤田　久喜	〃	
53	本間　忍	〃	
54	〃	〃	2月、全国高校総体スキー大会開催
55	〃	〃	
56	〃	田中栄三郎	
57	〃	〃	
58	鈴木　昭二	〃	
59	〃	〃	
60	〃	〃	
61	〃	〃	
62	宮地　正樹	〃	
63	〃	小泉　正	
元	〃	〃	2月、全国高校総体スキー大会開催
2	滝沢　強一	〃	
3	〃	〃	
4	〃	〃	
5	〃	山中　直樹	
6	〃	〃	
7	〃	〃	
8	佐藤　義雄	〃	
9	〃	成田　守	県高体連創立50周年記念総合体育大会開催
10	青木　一男	〃	1月、全国高体連研究大会開催

1 沿 革

新潟県高等学校体育連盟の前身というべきものがすでにあった。県中等学校体育連盟がそれであり、当時その会長には県の学務部長があたり、事務局も学務部にありその仕事をしていた。しかし、軍政部の指示により、県庁から離れ自主的運営を行うことになり、組織を改め新しい気持ちで再出発することになったのがその始まりである。当時の儀幸次郎新潟高校長が会長に選ばれ、事務局も学校に移し、県庁より小笠原孝氏を迎えて新潟県高等学校体育連盟の礎が出来上がり、昭和23年4月1日にその第1歩が踏み出された。9月には、4専門部が県高校体育大会を開催している。食糧事情も極めて悪く、運動用品の入手も困難な時代であったが、熱気溢れる競技が繰り広げられ、以来本県スポーツの強力な推進力となっている。昭和24年、初の全国大会優勝者が誕生した。陸上100m長岡高校の石田英郎選手。県下の高校生にとって忘れ難い出来事である。同年、外川右兵衛氏が事務局長に就任する。昭和29年4月4日、新潟高校に火災。ようやく整備されつつあった高体連の資料は焼失。同年2代会長として、新潟商業高校太田浩校長が就任、事務局も同校へ移転。事務局長として近藤圓氏が就任。昭和30年、火災での苦い経験を生かし、資料・記録を一本にまとめるべく「高体連年報」が発刊された。県内体育関係者にとって、貴重な資料となっている。同年8月全国高校体操競技大会を新潟市で開催。昭和32年9月、県高体連創立10周年記念総合体育大会を開催。昭和33年、全国高校バドミントン大会を新潟市で、全国高校スキー大会（昭和34年2月）を新井市で開催。昭和34年、北信越高体連の規約が制定され、この規約によって北信越体育大会が正式に発足する。昭和35年8月、全国高校レスリング大会が新潟明訓高校を会場として開催。新潟商業が優勝、新潟明訓が2位となる。昭和36年、全日本高校軟式庭球大会が新潟市で、全国高校スキー大会（昭和37年2月）を小千谷市で開催。昭和38年、3代会長に阿部藤策新潟高校長が就任。事務局も新潟高校へ移転。高体連の加盟校数91校、会員数8万余を数えるにいたり、力強い組織に発展し、いよいよ第1回の全国高校総体を迎えることになった。陸上競技を新潟市、バスケットボールを三条市、自転車競技は弥彦村、ボクシングを新津市、漕艇・ヨットは両津市で、計6種目、全国各地から計6千名の選手が集い、第1回全国高校総体を開催。総合開会式は全国高校総体の前途の発展を語るかのような素晴らしいものであった。多種目同一県内開催の是非、国体の「リハーサル」、それぞれの立場からの意見や批判、議論百出する中での開幕であったが幾多の成果と限りない感激を残して終了。

昭和38年度 第1回全国高等学校総合体育大会

新潟県選手団の入場

開会式全景

昭和39年、4代会長に丸亀金作新潟高校長が就任。この年は新潟国体の開催。開催地の天皇杯・皇后杯の獲得の火付け役となる。そして、6月の新潟地震。全国各地からの激励や支援によって高体連も徐々に危機から立ち直ってきた。昭和41年、5代会長に小野塚忠義新潟高校長が就任されたが、同年11月に県教育長に栄転され、6代会長として、渡辺芳雄新潟高校長が就任した。昭和42年、4代事務局長に山田文威氏就任。同年、全国高校総体4種目開催。体操を新潟市、剣道は三条市、ホッケーは巻町、スキーは高田市・妙高高原町で開催され、大成功を収めた。スキーでは高田北辰、バドミントンは新潟青陵、同年の埼玉国体では新潟工業がラグビーで優勝した。なお、県高校総体は秋季行事としてきたが、本年より6月に実施し、県高等学校総合体育大会兼全国高等学校総合体育大会県予選会となり、秋季の県総体はなくなった。昭和45年、7代会長に菅原久夫新潟高校長が就任。本年度より参加料を徴収。県高校総体参加選手1人90円。昭和46年、よりよい高体連を目指し、特別委員会を設置。分担金、参加料、学校体育と社会体育との関係、運動部活動の新しい方向づけ等種々協議を重ねた年と記録にある。昭和47年、全国高校総体参加者に県から補助金が支給される。選手派遣費の片道学割運賃。昭和48年、8代会長に高柳顕之新潟高校長が就任。全国高校総体スキー大会で六日町が女子総合優勝。昭和49年、全国高校総体参加者に県から片道急行料が支給される。昭和50年、9代会長に塩崎巳太郎新潟高校長が就任。昭和51年、全国高校総体を3種目開催。サッカー・レスリングを新潟市、庭球を柿崎町で開催した。雨天続きで庭球の大会運営に苦慮した。昭和52年、県高体連創立30周年の年である。本県高体連はこれを記念として、県下加盟校に「ブロンズトロフィー」を寄贈し

た。10代会長に藤田久喜新潟高校長が就任。昭和53年、11代会長に本間忍新潟南高校長が就任。県高体連創立30周年を記念して、「高体連年報」を30周年記念特集号として発刊。昭和55年2月、全国高校総体スキー大会を妙高高原町で開催。土石流災害で甚大な被害を受けたが、町を挙げての協力で成功裡に終了。昭和55年、5代事務局長に田中栄三郎氏就任。昭和58年、12代会長に鈴木昭二新潟高校長が就任。本連盟が関係する諸大会のバイブルというべき「新潟県高等学校体育連盟関係大会開催基準要綱集」の作成に取り掛かる。昭和61年、「同基準要綱集」が完成。加盟校等へ配布。今後の県高体連のあるべき姿が明確に指し示された。昭和62年、13代会長に宮地正樹新潟高校長が就任。全国高校総体第39回全国高校スキー大会の準備にかかる。(全国高体連40年史より抜粋)

2　10年の歩み

昭和63年、6代事務局長に小泉正氏就任。平成元年、「魚沼に　輝く連山　光る君」を大会スローガンに開催された「第39回全国高等学校スキー大会」は、新潟県当局をはじめ、関係諸機関・団体のご指導、ご援助のもと素晴らしい大会となり、県選手団の成績も大会始まって以来の好成績を残した。

第39回全国高等学校スキー大会開会式

平成2年、14代会長に滝沢強一新潟高校長が就任。少林寺拳法部が加盟となり、専門部数は29となる。また、なぎなたについては、準加盟として大会を共催することになる。この年は第46回冬季国体スキー競技会が本県で開催され高校生と本連盟諸先輩の大活躍により、男女総合優勝の天皇杯を獲得する快挙を成し遂げる。平成3年、冬季インターハイのスキー大会で県勢として久しぶりに新井高校が女子の部で総合優勝を果たす。滝沢会長は、「本連盟は、県スポーツ界の牽引車として大きな貢献を果たしてきた。また、明るく豊かで、創造性のある高校生の育成のため、スポーツ活動の果たす役割について県民の期待は大きい。そして”強い新潟”を目指し、本連盟の一層の競技力向上を図ることは、県民に明るい話題を提供するとともに高校生に夢と希望を与え、活力に満ちた高校生活を実現するための課題でもあり、そのために、各校、各専門部の先生方に創意工夫と一層のご努力を願う。」と年報の挨拶に書かれ、高体連活動の基本を見失わないようお願いした年である。平成4年、9月から導入された月1回学校週5日制は学校現場はもとよりあらゆる分野に様々な影響をもたらした。県高体連としても、今後の部活動の在り方、大会実施、指導体制等、派生する多くの課題を抱えることが予想され、頭の痛い思いがすると小泉事務局長は述べられている。全国高校総体では、ボクシングの仁多見史隆君（興農館）が高校三冠。スキーでは、3名が優勝。平成5年、7代事務局長に山中直樹氏が就任。全国高体連研究大会（福岡）に万歳憲重先生（当時高志高校教諭）が新潟商業高校勤務時の剣道部顧問の経験から「名門復活をめざして」という表題で実践発表をする。平成6年、全国高校総体に、学校教育法の1条校以外の学校の生徒の参加が認められ、本県でも3校が8種目に全国高校総体県予選会に参加する。陸上競技で渡部信人君（津川）が110mHで全国高校総体と国体で優勝。スキーのインターハイでは、六日町が女子総合優勝を果たす。平成7年、今年度より分担金・参加料とも値上げをし、分担金1名350円、参加料は春・秋季地区大会、県総体とも1名450円を徴収する。学校に隔週5日制が導入された年でもある。3月に滝沢会長が退任。その挨拶の中に「高体連の本来の目的は、心身ともに健全な高等学校生徒の育成を十分に踏まえ、生徒に『成就感と感動』を、見る者に『夢と希望』を与えられる素晴らしい指導」を引き続きお願いされている。平成8年、15代会長に佐藤義雄新潟高校長が就任。水泳競技の中村真衣選手（帝京長岡）がアトランタオリンピックに出場し、100m背泳ぎで4位に入賞する。よりよい運動部活動を目指し、県教育委員会が運動部活動検討委員会を設置する。平成9年、8代事務局長に成田守氏が就任。県高体連創立50周年の年であり、県高校総体を創立50周年記念大会として開催する。また、これまでご支援、ご協力をいただいた関係団体に感謝状を贈呈する。平成10年度に開催される第33回全国高体連研究大会に向けて諸準備に入る。今後の県高体連の諸事業に全国高体連をはじめ、各都道府県高体連の皆様のご協力、ご指導をお

願いし、新潟県高等学校体育連盟の「10年の歩み」とし、また、50年の沿革概要とする。

3　将来に向けて

新潟県高体連マークはN．K．T．R（新潟県高等学校体育連盟のローマ字の頭文字）を図案化し組み合わせたものと同時に、ひらがなで「たいいく」の頭文字「た」を意味し、且つ人体が躍動している感じを表象したものである。高等学校の体育並びにスポーツの健全な発展を使命とする県高体連はこののもと、今日まで50年間、幾多の困難な条件を克服して、その時々の各方面の多くの関係者のご尽力、ご協力を得て時代に即応しながら着実に歩み続け、また、多数の優れた実績を挙げて今日の隆盛発展をみることができたわけであるが、近年の急激な生徒数の減少やそれに伴う教員数の減少、指導者の高齢化、また生徒の価値観の多様化等は指導者や部員不足を招き運動部活動に大きな影響を与えている。このことから今後、県高体連が抱える課題をあげるとしたら、

(1) 生徒数の減少に伴う運営費の確保。(2) 生徒の価値観の多様化による運動部離れの対策。(3) 部活動指導者の高齢化と後進の指導者育成問題。(4) 少子化に伴う採用教員数の減少による競技役員不足からくる大会運営対策。(5) 完全学校週5日制の導入に伴うこれからの運動部活動の在り方について。(6) 学校の運動部活動と競技団体の各種大会やスポーツクラブとの関わりについて。(7) 競技力向上を目指した組織づくりと未普及種目を充実させる方策の検討。

などが考えられる。このような課題を関係者や関係機関等と緊密な連携をとり、ご支援・ご指導を賜り、将来を見据えた県高体連を考え、その解決に向けて鋭意努力するとともに、今後一層積極的な取り組みを展開していくことが必要であると考えられる。

4　おわりに

一口に50年というが、ひとつの組織にとっては、去る人あり、来る人あり、数え切れない数多くの感動があり、壮大なドラマを観る思いがする。この間、ご逝去された方々のご冥福をお祈りし、全県生徒を対象とする体育・スポーツ活動の活発化と明朗旺盛な気力など精神面の育成を期待し、今後の発展を誓いたい。なお、紙面の都合で立派な成績を収めながら記載し得なかった方々・学校に対してお詫びして終わりとしたい。

競技生活を通じて

中　村　真　衣
中央大学（帝京長岡高校出身）

平成8年　アトランタ五輪
100m背泳ぎ　4位入賞
平成9年　パンパシフィック
100m・200m背泳ぎ優勝
平成10年　世界水泳選手権
100m背泳ぎ　銀メダル
200m背泳ぎ　銅メダル

私は4歳の頃から水泳を習い始め、もう15年にもなる。水泳中心の生活であったといえるが、この水泳経験の中で、実に多くの貴重な、また素晴らしい体験をすることができた。

この1月の世界選手権では、世界のトップに立つことはできなかったが、リレーを合わせて3種目でメダルを獲得して表彰台に立つことができた。努力の結果として今回の成績には満足しているが、まだまだ上を目指していきたいと思っている。今回このような成績が残せたのはアトランタオリンピックの時の経験が生かせたからだと思う。アトランタの時の調整ミスの反省を生かすことができたし、竹村コーチと合宿から大会まで一緒に過ごすことができたことが良かったと思う。中学3年の時に初めて世界選手権に出場してから何度も国際大会の舞台を経験してきたことが精神的な余裕につながっていたと思う。

ついこの前まで全世界が注目した長野オリンピックでも見られたが、プレッシャーに負けてしまったり、逆に克服して勝者になったりと様々な場面が見られた。それはオリンピックにいる「魔物」のせいなのだろうか。そんなものは外側の人々が好んで使う形容詞であって、すべては自分が作り出したものでしかないのだ。経験した者として、このプレッシャーをどう克服するかということが、競技生活を続けていく上で永遠のテーマであると思う。その意味で今回の世界選手権では自分なりにうまく自分の精神状態をコントロールできたし、調整も完全ではないが良かったといえる。

あと何年水泳を続けていくかわからないが、とりあえず目の前の大会に向かって一歩ずつあせらずに努力していきたい。

富　山　県

《事務局》
〒930-0097 富山県富山市芝園町3丁目1－26
県立富山中部高校内
TEL 0764（42）0721
FAX 0764（42）0721

創立年月日：昭和23年6月20日

加盟校数		73校
専門部数		32専門部
加盟部数		1,008部
部員数	男子	8,925名
	女子	5,674名
	合計	14,599名

年度	会長	理事長	記事
23	桝田　秀郎	藤原　平蔵	
24	〃	〃	
25	〃	〃	
26	亀谷　観静	広田　良平	
27	〃	〃	
28	酒井　健作	〃	
29	〃	〃	
30	〃	〃	
31	〃	〃	
32	〃	〃	全国高校陸上、レスリング選手権大会開催
33	島木　喬一	〃	第13回国体(夏季・秋季)開催
34	〃	〃	全国高校ホッケー選手権大会開催
35	〃	〃	全国高校ウェイトリフティング選手権大会開催
36	羽鳥　岩雄	嶋田　重春	全国高校ハンドボール選手権大会開催
37	〃	〃	全国高校バドミントン選手権大会開催
38	〃	〃	
39	〃	〃	全国高校自転車競技選手権大会開催
40	木本　喜一	〃	定通専門部発足
41	〃	〃	サッカー専門部発足
42	村上元之輔	〃	全国総体4種目開催（卓球、弓道、柔道、登山）
43	〃	〃	
43	金子　富雄		
44	屋敷　平州	〃	
45	野田　親治	〃	
46	二川　卯吉	〃	漕艇専門部発足
47	〃	中川　周三	
48	〃	〃	フェンシング、登山、ヨット専門部発足
49	八十島喜助	中川　周三	自転車専門部発足
50	〃	〃	
51	〃	〃	全国総体3種目開催(ハンドボール、卓球ホッケー)国体冬季スキー競技会開催
52	屋敷　平州	〃	
53	竹長　敏夫	〃	30年のあゆみ　創刊 総体時登山遭難事故
54	〃	〃	
55	山川志津雄	〃	全国総体冬季スキー競技会開催
56	蓮沢　淳雄	山本　欣一	
57	〃	〃	
58	高松　信雄	〃	高校スポーツ記録創刊
59	〃	〃	ボクシング専門部発足日中友好親善高校スポーツ交流、女子日韓交流高校ホッケー国際親善試合
60	木下　周一	〃	日中友好親善高校スポーツ交流（遼寧省）
61	〃	〃	
62	松儀　薫	〃	
63	青塚　与市	高木　義則	平成6年度全国総体富山県誘致委員会設立
元	〃	〃	全国総体本県開催内定
2	福田　正義	〃	富山県準備委員会設立
3	大島　哲夫	〃	全国総体本県開催承認
4	〃	〃	
5	並木　孝	〃	
6	〃	〃	全国総体開催(夏季、冬季大会)28競技
7	〃	武田　孝志	
8	守田　平	〃	
9	高邑　吉房	〃	
10	〃	貫江　和夫	50周年記念事業実施

1 沿 革

昭和21年12月に本連盟の母体となる中学校体育連盟が結成された。翌22年の学制改革で中学校が高等学校と改称されたため、昭和23年6月に体育主任会議で中学校体育連盟を発展的解消させ、新しく会則、役員、競技専門部など重要事項を審議決定し正式に富山県高等学校体育連盟が発足した。

昭和28年12月5日に高体連表彰規定を定め、全国大会の上位入賞者には特別高体連賞、各学校における部活動に尽くした生徒には高体連賞を与える。さらに、従来全国高校総体県予選会の期日がまちまちであったものを集約統一し、昭和48年6月1日に実施した。

以後、富山県高等学校総合体育大会と呼称することになり各学校においては全生徒が高校総体を応援見学することができるようになった。

昭和51年4月に年々増加しつつあるスポーツによる事故を防止すべく、事故発生時の傷害見舞金制度を制定した。

競技力という点から、本県高体連の歴史を全国大会（全国総体、国体）の上位入賞（1～3位）を多くだしている競技、チームで見ると、昭和33年の富山国体が大きな契機となっている。

石動高校女子ホッケー部は、同年に創部され翌年には、全国総体で3位、36年には全国制覇を成し遂げた。国体でも昭和35～37年と3年連続優勝の偉業を達成した。また昭和36年と51年には、全国総体ホッケー競技を開催し、地域（小矢部市）に根づいた競技として定着していった。現在も上位入賞を続け、世界大会へも選手を派遣している。

ハンドボールについても昭和32年の全日本総合、33年の国体、36年の全国総体と大きな大会が氷見市を中心に行われ、競技力の向上、技術のレベルアップ、後継者の養成に大きな力となった。昭和33年には、氷見高校は全国総体で3位、国体で優勝する。ＯＢの中には、世界選手権大会やソウルオリンピックに出場する選手も出ており、その名が全国的に知られるようになった。

地域に根づき全国的に大活躍している競技には八尾高校の漕艇部がある。富山国体には間に合わなかったものの、校風の刷新の一助として漕艇部が提案され、昭和44年に創部された。

監督が運転するマイクロバスで、学校から10kmも離れた練習場のダム湖まで通い練習が繰り返された。昭和52年の全国総体で3位に入賞して以来、毎年のように上位入賞を続け、昭和57年からは国体で連続8連勝の偉業を成し遂げた。昭和59年には富山市内の大手コンピューター企業が実業団チームを創り、選手に一層の励みになっている。

バトミントン競技においては、男子では富山商業対高岡商業、女子では藤園女子対高岡女子と県の「東と西」の競い合いにより競技レベルを高めていった。昭和39年富山商業が全国総体で団体優勝。40年には推薦出場の富山商業と高岡商業が共に全国大会に出場した。両校とも勝ち進み決勝戦で宿命の対決となった。団体戦だけでなく、個人戦においても決勝戦まで進んだ。結果は富山商業が2年連続団体優勝を遂げ、ダブルスにおいても優勝を果たした。43年には高岡商業が奮起し、団体戦で悲願の優勝を果たした。一方女子でも高岡女子が昭和35年に全国総体の個人戦ダブルスで優勝、シングルスでも2位となり、同年の国体では優勝を飾った。昭和50年第二期黄金期を迎え、総体、選抜、国体に上位入賞が続く。昭和42年には郷土の選手を中心にした男子の実業団高岡市役所チームが、続いて昭和59年には女子の三協アルミが結成され、日本リーグで活躍することになり現役選手の良い目標になっている。ＯＢやＯＧには、世界選手権へ出場や監督として活躍している者も多い。

水泳については、戦後の県内高校にはプールの新設は皆無、既存のものは漏水や老朽化で閉鎖されるプールが多く出た。そのため練習する場所もなく、部の登録が減り部員の登録総数も100名を割る状態が続いた。その中で民間のクラブや社会体育のプールで育てられた生徒の活躍が目立っている。昭和47年にはオリンピック選手、昭和62年のアジア大会での優勝、昭和63年には日本記録の樹立者が出るなど競技人口の割には上級の選手が育成されてきた。

レスリング競技での普及は終戦間もない頃より日本を代表する一流選手の招待や親善試合、大学の合宿等を積極的に設けることによってその基礎をつくった。指導を受けた滑川高校

ＯＢ達が大学を卒業し教員となり高岡商業、小杉高校等に部を創っていった。洗練された練習法、工夫されたトレーニング法により昭和31年には滑川高校が全国総体で団体2位に入賞した。その中からローマ、東京、メキシコオリンピック等で入賞するものが出るなど、水泳同様少ない競技人口の割りには多くの全国大会での活躍がきわだっている。

以上が特色ある専門部の戦績であるが、他の競技や各学校においても全国大会出場、そしてその上位入賞を目指してたゆまぬ努力をしてきた。

昭和53年に21世紀への挑戦として「日本一のスポーツ県」をめざす県総合計画が提起され高体連の活動にも大きな刺激を与えた。強化費でみると、53年の140万、58年の430万、63年の850万と飛躍的に増加している。総事業費も53年の1，100万円から63年には3，700万円に拡大している。各専門部の遠征試合、合宿など競技力向上に活用された。特に平成２年には、ほぼ全高校に第2体育館が建設され、冬季や雨天時の活動の場が確保された。またトレーニング器具の充実、トレーニング専用室を持つ学校が増え、基礎体力の向上や科学的トレーニングが定着した。また視聴覚機器特にビデオによる技術分析や指導もしだいに日常化してきている。

昭和58年には懸案の「富山県高校スポーツ記録」が創刊された。1年間の血と汗の結晶、青春の熱闘譜として、また後に続く者にとっては挑戦すべき目標となっている。5号からは、カラー写真も加わりページ数も150～320ページと大幅に増えた。発行部数は500冊から1，700冊に増え、多くの生徒や父兄にも行き渡るようになった。

現在の高校生活の中では、限られた時間内でのより効果的な活動が求められているが、そのためには施設の一層の充実や良き指導者の存在が不可欠である。しかし、直接指導にあたっている顧問の高齢化が目立ち、また若い先生の部活動離れや、運動嫌いなど問題も多い。今後有能な指導者の出現を期待したい。

本県高体連は、昭和56年豪雪の中、全国総体スキー競技を無事成し遂げた。また60年の石川で開かれた全国総体へ各専門部から積極的に運営役員、審判員を派遣したことにより、9年後に迫った全国総体富山大会運営の貴重な体験となった。

2　10年の歩み

昭和63年からの10年間の活動の中心は、平成6年に本県で開催された全国高校総体に向けてのものであった。

昭和63年に「平6総体」に向け、専任2名（理事長兼務）で準備業務を具体的に始動し、同6月30日には「平6全国総体富山県誘致委員会」が設立され、翌年の平成元年には富山県開催が正式に内定した。平成2年6月に「富山県準備委員会」が設立され、大会開催基本方針を策定した。また、第1回常任委員会では、実施種目や会場地選定基本方針等も決議され、平成3年5月の全国高体連理事会において本県開催が正式に承認された。またこの年、空手道とアーチェリーの2専門部が加盟し、30専門部となり、「平6総体」本県開催28専門部が勢ぞろいした。

平成4年には、それまでの準備委員会も実行委員会へと改組され、スローガン、シンボルマーク等も決定し、高等学校推進委員会も設立された。

平成5年には、北信越高校体育大会に「平6総体」運営の体勢で臨み、本県で18競技開催し役員及び審判員の養成や運営面での万全をはかった。また、各専門部では会場地市町村の実行委員会へ専門委員を週3日派遣し、十分連携をとりながら具体的諸準備の取組みをする。

総合開会式についても、県を始めとする多くの関係者の献身的な努力により着々と準備が進められた。一方、大会を側面から支援する高校生の「一人一役運動」も生徒一人一人がその意義を十分理解して、各分野で地道な活動が展開された。

選手強化の面では「富山県選手強化計画」の第二期（育成期）で、平成3年より高校生対象事業の合宿、遠征、優秀チーム招聘事業が大幅に実施された。平成4年より「強化指定運動部」事業が推進され、平成5年には指定運動部56部から102部へ増加された。選手強化策の推進によって、本大会での成果が期待された。

平成6年「立山に　えがけ大きく　君の青春」のスローガンのもとに開催された全国高等

学校総合体育大会は、深い感動と多くの成果を残し成功裡に終了した。総合開会式でのすばらしい集団演技、補助役員として大会を支えた全県下の高校生、同じく丹誠を込めて咲かせ各会場｜を飾った花々など、「一人一役」の言葉が見事に実を結んだ。本県選手団もまた28競技に258名が出場し、9種目の優勝を含め60種目に入賞を果たすなど、本連盟発足以来最高の成績を収めた。

3　将来に向けて

全国高校総体富山大会で得た数々の教訓と体験を生かし、「2000年富山国体」に向けて優秀選手の育成に努めると共にこれからの高校生の体育スポーツの振興に努力し、21世紀に向けてさらなる高体連の発展に努力する。

10年間の全国大会での入賞種目及び入賞者数

年度	全国総体		国　体		選抜・ジュニア	
	入賞種目	延人数	入賞種目	延人数	入賞種目	延人数
63	15	87	20	55	4	9
1	14	57	19	44	6	12
2	13	53	23	75	23	75
3	14	55	20	75	23	67
4	20	59	18	53	14	37
5	14	78	18	50	38	114
6	59	244	23	50	44	129
7	24	50	25	70	28	92
8	14	39	22	71	27	84
9	28	78	33	73	32	65
10						

桜井高校男女チーム
優勝杯を手にアベック優勝を喜ぶ

インターハイの思い出

佐々木　麗奈

出身校　龍谷富山高等学校
成　績
全国高校総体陸上競技：400m・800m優勝、
日本Jr選手権800m優勝、
国民体育大会400mH・800m優勝

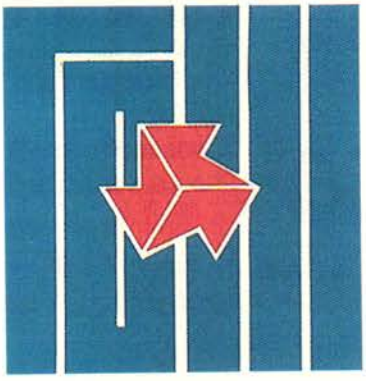
今年度、京都で行われたインターハイは私にとって、高校生最後の大会であり思い入れのある大切な大会だった。

前年の山梨インターハイではまったく成果を出せず、トップテンの中に入りながらも決勝に進出できなかった。今まで何のために辛い練習を続けたのか分からなくなり、ふがいなさ、悔しさ、情けなさ、屈辱感が私の心を重く沈めた。

学校へ帰っても気力がわかず、練習にすら出なくなった。心は、陸上競技から離れたいと思うことで一杯だった。まわりを見る余裕も無く、一人で自分の殻に閉じこもり自分はもう走らないと思った。心配したチームメイトが、「顧問の井上先生『お前たちの負けは先生自身の負けだ。』といって辛そうだったよ。」と話してくれた。私はその言葉を聞いて自分の甘さ、身勝手さに初めて気づいた。「自分一人が苦しんでいるのではないチームメイトや先生も私と同じように苦しんでいるのだ。自分は一人ではなく、まわりのみんなに支えられていたんだ。」そして、この思いが「また走ろう。」「走りたい。」「今度こそ頂点に立ちたい。」という気力となって私に新しい力をくれた。部訓の「感謝・感激」という言葉が、「自分は一人ではないチームメイトのみんなに支えられて走っているんだ。走らせてもらっているんだ。それに感謝し、それを良い結果にして感激に変えよう」と決意させた。「インターハイの借りは、インターハイで返せ」という叱咤激励に、京都大会を目指して毎日毎日走った。

大会では、心が妙に落ち着いていた。焦りも力みもなかった。400mと800mの二種目で、ベストを尽くそう。私の心は、支えられている感謝と出場できた感激で満たされていた。勝った。二冠を達成した。多くの人達の支えのおかげで、私は、3年目の夏を熱く終えた。

石　　川　　県



《事務局》
〒920-0818 石川県金沢市大樋町16番1号
県立金沢桜丘高校内
TEL 076（252）4273
FAX 076（252）4273

創立年月日：昭和23年5月14日

加盟校数		69校
専門部数		35専門部
加盟部数		1,159部
部員数	男子	10,016名
	女子	6,852名
	合計	16,868名

年度	会長	理事長	記事
23	大河　良一	神田　一	県高体連発足
24	明石　与作	作本　秀雄	北陸地区高体連結成
25	森　義雄	中田　周三	東西対抗陸上競技大会開催
26	〃	〃	全国高校陸上選手権大会
27	〃	〃	県定通体育大会開催
28	〃	〃	
29	〃	〃	バドミントン全日本高校選手権大会開催
30	〃	〃	
31	〃	〃	第1回県体操祭開催
32	〃	〃	
33	〃	〃	高体連10周年記念式典
34	〃	〃	北信越高体連再発足
35	〃	〃	
36	〃	〃	日本高校水上競技大会
37	深見　政一	〃	
38	菊地　計一	大橋　敏夫	高体連通報発刊
39	〃	〃	高体連年鑑第1号発刊
40	金子　信一	〃	学校別表彰制度実施
41	〃	〃	高体連年鑑第2号発刊 県高体連旗制定
42	藤井　澄文	〃	全国高校総体(3種目開催)
43	〃	西尾他嘉志	高体連年鑑第3号発刊 高体連20周年記念式典
44	〃	〃	
45	〃	〃	
46	〃	〃	
47	〃	〃	第1回県高校総体開催
48	香村　忠	〃	
49	香村　忠	西尾他嘉志	県体育大会第二部(高校男女)廃止
50	〃	〃	
51	安宅・彰亮	〃	全国高校総体(2種目開催)
52	〃	中川　毅	北陸三県高体連解散
53	鍋岡　利明	〃	高体連30周年記念式典
54	〃	〃	第1回県高体連研究発表会
55	〃	〃	
56	〃	〃	
57	〃	〃	
58	棒田　實	山野　明	60全国高校総体推進委員会設立
59	〃	〃	
60	〃	〃	全国高校総体開催
61	南　典二	〃	
62	〃	〃	
63	齋藤　謙一	濱　徹朗	高体連40周年記念式典
元	〃	〃	
2	長柄　勝美	〃	
3	〃	〃	第46回国民体育大会「石川国体」開催
4	〃	山本　政一	
5	畑野　禎	〃	
6	〃	〃	県高校総体表彰規定改定(敢闘賞設置)
7	安田　俊彦	西村　昭夫	
8	〃	〃	
9	中谷　一男	〃	
10	〃	〃	高体連50周年記念式典

1 沿 革

昭和23年、新制高校の発足に伴い、従来の中学校体育連盟を石川県高等学校体育連盟(以下県高体連と略す)と改め、新しい一歩を踏みだした。当初専門部14、加盟校28、加盟生徒数18,000、総予算16万円でスタートした。発足当時、大会開催に当たり何かと課題が多くあったが、14の専門部は一斉に活動を始め、23年下旬に第1回石川県高等学校体育大会を開催した。一方、北信越高体連の結成に伴い、ブロック大会も8月上旬開催され、県高体連も参加した。また、県高体連としては、23年2月に発足した県体育協会への加盟、更には10月全国高体連への加盟により関係諸団体と連携がなされるようになり、活動は次第に活発化した。この20年代は県高体連の発足と組織の確立の時期であったといえる。

昭和30年代からの県高体連はいろいろな面で内容の充実期とみてよい。役員の改選、専門部の増設、規約改正等組織体制が整備された。また、県高体連の一層の発展には経費面の充実が必要との観点にたち、県・県教委に対して青少年体育が教育上極めて大切であることを力説し、補助金の大幅増額を得るにいたった。県高体連の組織が活発になると同時に優秀な選手も次々と誕生した。数多くのオリンピック選手を輩出した水泳競技、全国高校選手権で4連勝した体操競技、バド王国石川の名を欲しいままにしたバドミントン競技等、これらの栄光は指導者の熱意と選手の意気込みから生まれたものである。

昭和40年代前半から昭和50年代前半までの期間は、県高体連にとって前例のない試練の時期であり、また同時に学校教育における児童・生徒のスポーツ活動の在り方をめぐって、重要な意味をもった時代でもあった。昭和43年、年間の大会数を4回と規定した。また、昭和45・46年の二度にわたり、県・県教委に対して県内高校の体育施設の整備と指導者の確保について要望書を提出し、学校体育・スポーツ振興の発展につとめた。昭和47年6月第1回県高校総合体育大会(以下県高校総体)が開催され、現在にいたっている。県高校総体は学校教育活動の一環として実施され、大会期間4日間を高校スポーツデーとして設定し、各学校では選手の応援等を含め特別時間割を作成するなど創意工夫しながら大会を盛り上げている。

昭和50年代後半から昭和60年代前半の県高体連は県下高校生のスポーツの振興と同時に県高体連近代化を目指し、幾多の改革が試みられ、大きな成果をあげた時期であった。対外体育行事冊子の発刊、県高校総体優秀校の得点基準の改正、県高校総体優勝旗・カップの新調、全国高校総体県選手団結団壮行式の実施、専門部の新設、全国高校総体開会式出場選手団のユニフォームの新調、全国高校総体生徒視察団派遣等々である。

さらに県高体連の夢であった全国高校総体一県単独開催が昭和56年5月27日全国高体連理事会でついに内定した。そして昭和57年6月28日全国高体連会長より「昭和60年度全国高校総体の石川県開催」の決定通知をうけた。この間、全国高体連事務局をはじめ北信越高体連、県教委、各競技団体、専門部、市町村関係者のご指導、ご支援をいただきながら開催のため精力的に事務処理にあたった。昭和58年会長、理事長に事務局長を加え、県高体連の組織をより一層強化し、「60全国高校総体」の準備を進めた。

昭和60年8月1日「石川の大地に流せ　君の汗」のスローガンのもと、「一人一役　われらが主役」を合い言葉に、県下の全高校生、教職員の総力を結集して60全国高校総体が一県単独で開催され、大きな成果をおさめて無事終了した。この60全国高校総体へのあゆみと活躍の記録は、県高体連50年の歴史に輝かしい一ページを飾った。そして60年全国高校総体での努力と成果が、本県高校教育の活性化と、県高校スポーツの向上と振興に大きく貢献したことはいうまでもない。

石川県選手団の入場行進(60全国高校総体)

2　10年の歩み

昭和60年8月「石川の大地に流せ　君の汗」のスローガンのもと、「一人一役　われらが主役」を合い言葉に60全国高校総体は一県単独開催で大成功のうちに終了した。この大会で培った成果を基礎に、平成3年10月開催の「石川国体」へ、スポーツ界のみならず石川県全体がエネルギッシュに加速していった。県内はもとより、国内からも石川に注目が集まった。この10年を顧みると前半は石川のスポーツの絶頂期であった。しかし、いずれの県も同様にポスト国体をどう乗り切るか、課題は多い。

高体連もこの石川のスポーツ界の流れのなかで、学校教育の一環との立場を厳守しつつ、非常に充実した時代を経て、量的にも、質的にも転換を迫られる時代を迎えている。この10年を簡単に振り返ってみたが、一年一年の取り組みを少し詳しく振り返りたい。

昭和から平成へ、時代が大きく移り動こうとしている昭和63年、県高体連は創立40周年を迎えた。県高体連も記念行事を行い、40周年を一区切りとして、新たな目標に向かって踏み出した。この年、なぎなた専門部が高体連に加盟し、32専門部での活動となった。

平成へと年号が改まり、新しい目標に向かって歩みだした平成元年。生徒数増によって加盟生徒数も増え、新生の意気高いアーチェリー・カヌー・ボウリングの3専門部が新たに加盟し、35専門部での活動となった。石川国体を目指しての競技力向上に拍車がかかり、それに応じて全国大会での優勝・入賞の数も大きく増加した。すべてにわたり昇り坂を実感できた年であった。

石川国体を翌年にひかえた平成2年、石川のユニフォームを着た高校生が全国を駆けめぐった。県高体連も、学校教育の一環と競技力の向上に適切に対処し、生徒の体力・気力・競技力の向上に努めた。とりわけ、優勝を目指した活動の過程で活力・気力・忍耐力を培うという全人教育を関係者にお願いした。

半世紀に一度という地元開催の第46回国民体育大会「石川国体」が平成3年10月12日開催され、総合優勝という大目標を達成し、無事終了した。県高体連は「石川国体総合優勝に向けた競技力の向上」、「国体総合優勝」という目標を前面に掲げ、懸命に努力した。しかし、「国体総合優勝」に少年の部の高体連が貢献すると

軟式庭球　国体制覇を遂げた少年女子チーム

いうことは、口で言うのはたやすいことだが、学校教育の一環の中で競技力の向上に努めることは並大抵のことではない。部活動指導は、毎年が新しい選手の育成と新しいチームづくりの連続であり、しかも限られた時間の中の強化であり、そうした学校単独チームについてもさまざまな悩みを伴うものだが、殊に選抜型、補強型での強化の苦労は思いを越えたものがあったと推察できる。選手諸君の素晴らしい活躍と、数多くの名場面を作り上げた監督・各専門部の役員・関係各位の皆様に感謝している。

ポスト国体の平成4年、石川国体で培われた競技力は全国高校総体団体15種目、個人24種目入賞という形で引き継がれた。平成4年9月導入された月1回の学校週5日制や、平成6年度から実施の新指導要領、生徒減から派生する諸問題など、これら課題に県高体連として一つ一つ対処した。また、新たに12名の専門委員長を迎え国体終了後の組織の新陳代謝がなされた。

平成5年は国際化に伴う外国人選手の扱い、高等専門学校等からの加盟要請等、全国高体連・県高体連としても早急に対策を講じなければならない問題が表面化した。

平成6年隣県富山県で全国高校総体が開催された。おりしも暑い夏、水不足の夏で60全国高校総体の熱気が思い起こされた。また、県高校総体総合優秀校表彰規定の一部が改正され、小規模校（12学級以下及び生徒数500名以下）の中で男女総合得点が最も上位の学校に敢闘賞を与え表彰することとし、生徒数減少で苦慮している学校の励みとした。

平成7年教育界では「新しい学力観」が話題となり、「心の豊かさ」を培うこと、「体力向上」「生涯スポーツ」の基礎作りが重要課題として

取り上げられ、県高体連としても指導者、選手に優れた「技術」だけでなく、「高校生らしいマナー」を身につけるよう要望した。

高校再編が各方面で話題となった平成8年、「生涯スポーツ」の観点からも、「競技力向上」の観点からも、スポーツに親しむ高校生を増やし、県高体連の裾野を広くしようと取り組まれた。

平成9年県高体連として、競技技術の向上だけでなく、安全面・健康面での組織作りに力を注いだ。医師会・養護教諭部会等に対する協力要請を行なった。研究部の設置、従来団体戦のみで争った県高校総体総合優秀校に、個人戦の結果も加える方向を検討した。

3　将来にむけて

社会の変化が加速化するにつれて、学校を取り巻く環境も変わっていく。先般の、運動部活動の在り方についての保健体育審議会の答申では、運動部活動に学校教育活動の一環としての位置付けと教育的価値の高さを認めている。高校生の真剣に競技する姿、指導者と一体となった姿、競技をはなれて接するすがすがしいマナー。高校スポーツが我々に与えてくれる感動を疑うものは誰もいない。

しかし、生徒減少から派生する諸問題、部員数・教員数の減少、部活動の活性化、顧問・指導者の高齢化、大会運営、各学校における部活動の在り方等々、好むと好まざるとにかかわらず直面しなければならない問題が山積している。今こそ原点に立ち返って、お互いが知恵を出し合い、将来の展望を持ってこれらの問題を解決していかなければならない。

県高体連は、未来に描く夢を持つ本県の高校生の育成に、スポーツを通して貢献できるようこれからも努力していかなければならない。関係各位のご指導、ご支援をお願いしたい。

全国高校総体の思い出

舛田圭太
金市工高－日体大（2年）

レギュラーとして活躍
高校3年間全国高校総体出場、2・3年生時個人シングルス連続優勝。
平成10年ナショナルチーム。

小学校一年生から何気なく始めたバドミントン。小学校を卒業する頃には、競技のとりこになって全日本選手を夢見るようになった。高校での練習は中学生のときとは全く違い、厳しく内容の濃いものだった。練習は1週間に必ず1日は休みがあり、練習時間もそう長くはないが、練習内容で“日本一”を目指そうとするものだった。一球一球真剣に、そして集中してプレーする中から競技力が高まり、次第に全国が身近になるのを感じるようになった。

真夏に開催されるインターハイは暑さとの戦いでもある。競技の特性で戸を締め切った状態の会場は蒸し風呂のようで、試合は想像以上に体力を消耗し、苦しかったことを覚えている。

インターハイにおける最大目標は“団体制覇”伝統を守るため全員一丸となって臨んだ。特に3年生時の'96総体では、部の主将であることに加え、総合開会式石川県選手団の旗手という栄誉にあずかり、何としても勝ちたかった。しかし、三度目も決勝進出はならなかった。

気持ちを切り換えての個人戦、2年生時の'95総体が僕の大きな転機となった。この大会から留学生の出場が認められ、シングルス準決勝で優勝候補の評判高い中国からの留学生選手と対戦した。案の定、不利な形勢だったが相手の足の負傷によって思いがけない棄権勝ち、その勢いで決勝でも勝利を収めた。余勢をかって全日本ジュニアも制し、更に全日本総合選手権でも準優勝となった。翌年のインターハイでは故障に悩みながらも、この種目2連覇を達成できた。そして、多くの国際試合にも出場することができ、ヨーロッパジュニア交流競技会では、単複優勝というすばらしい栄冠を得ることができた。

インターハイがあって成長できた僕、今後は更に精進し、シドニー五輪出場という大きな夢を追いかけていきたい。

福　井　県

《事務局》
〒910-0021 福井県福井市乾徳4丁目8－19
県立福井商業高校内
TEL 0776（22）1047
FAX 0776（22）1047

創立年月日：昭和23年6月28日

加盟校数		37校
専門部数		36専門部
加盟部数		638部
部員数	男子	6,426名
	女子	4,368名
	合計	10,794名

年度	会長	理事長	記事
23	加藤　佐助	酒井　実	福井県高体連設立
24	〃	〃	（6月28日）
25	〃	〃	
26	〃	〃	高体連旗制定
27	〃	〃	全国高校卓球選手権大会開催
28	〃	〃	
29	福田　蔵	山下　尚	
30	〃	〃	
31	〃	〃	北信越高体連結成
32	山口　秀雄	〃	
33	〃	〃	
34	片山　一夫	〃	
35	〃	〃	全国高校バスケットボール選手権大会開催
36	〃	酒井　実	
37	〃	〃	全国高校男子9人制バレーボール大会開催
38	〃	〃	全国高校女子6人制バレーボール大会開催
39	〃	〃	全国総体弓道・体操・開催・年報第1号刊行
40	〃	〃	要覧初刊発行
41	西島　銀蔵	〃	
42	〃	〃	全国総体（陸上他11競技開催）主会場県
43	〃	三浦　国尚	第23回夏秋季国体開催
44	大森　陽	塚崎　恭一	
45	〃	〃	全国総体ホッケー競技開催
46	〃	〃	
47	〃	山下　尚	
48	〃	〃	
49	大森　陽	山下　尚	
50	小林　郁夫	〃	
51	〃	志田　省吾	全国総体（剣道・相撲）開催
52	西谷　寿道	〃	
53	〃	久谷　清矩	県高体連創立30周年記念式典
54	〃	〃	創立30周年史編纂　県高体連旗新調　県高体連表彰規定制定
55	〃	〃	
56	野坂　忠善	川上　啓治	
57	橋本　亮二	〃	県高体連救急員養成講習会開設
58	〃	〃	
59	〃	大島　哲夫	
60	本田　周作	〃	全国選抜アーチェリー大会開催・県高体連研究委員会設置
61	〃	〃	
62	川端　一男	〃	基礎体力養成講座開設
63	〃	〃	40周年記念年報発行
元	東　哲郎	松下幸三郎	第24回全国研究大会開催
2	竹村　光雄	〃	
3	〃	〃	
4	村田　嘉孝	〃	
5	〃	天谷　直樹	
6	宇佐美賢樹	〃	
7	〃	〃	
8	大野　勉	筧　尚夫	福井南高校加盟
9	〃	〃	北信越高体連研究部担当者会議開催
10	矢尾正次郎	〃	県高体連創立50周年記念式典（11月27日）創立50周年史編纂　新人大会用優勝旗新調

1 沿 革

《福井県高体連創立》

昭和23年4月中等学校から高等学校への学制改革により、当時の第一高等学校（現藤島高等学校）加藤佐助校長が、体育主任の酒井実氏に新潟県と富山県における体育連盟設立についての調査をするよう命ぜられた。

この調査報告と全国の動きなどについて、加藤佐助校長を中心に酒井実氏、第一高等学校体育主任の清水隆乗氏が集まり状況分析の結果、本県も早急に連盟を設立するための本格的準備を進めることになった。関係団体の協力を得て、結成の機運の熟した6月28日、福井第一高等学校に於て、県下高等学校体育主任会議を開催した。加藤佐助校長からスポーツの全国的傾向と学校体育のあり方に関連しての高等学校体育連盟結成の必要性について趣旨説明があり、また、酒井実氏より準備経過報告がなされた。

学校体育・スポーツが他の団体のために利用されたり、無秩序に計画運営される危険性があると危惧されていたことから、この危惧に対する防止策として、満場一致で連盟結成に同意を得たのである。即時創立総会に切り替えられ、会則の審議、役員の決定、専門部の設置、事務局の承認事項等重要事項について慎重審議の結果、昭和23年6月28日午後4時福井県高等学校体育連盟がめでたく誕生し発足した。この日は図らずも全国高等学校体育連盟の創立の日でもあった。発足間もない午後5時未曾有の大地震にあい、福井市および坂井郡は壊滅的打撃をうけた。書類は校舎の下敷きとなり、その上大洪水にみまわれたので事務局を開設することが出来ず、幸い被害のなかった武生高等学校に書類等を預けた。10月下旬福井第一高等学校の仮校舎が出来るとともに事務局も正式に開設する運びとなった。

○創立当時の加盟校‥福井第一・三国・丸岡・大野・勝山精華・勝山・福井第二・北陸・鯖江丹生・武生・敦賀・福井市立福井・小浜の14校
○設立当時の専門部‥陸上・体操・バレーボール・水泳・バスケットボール・ソフトボール・卓球・軟式庭球・相撲・スキー・野球の11部

県高体連の創設が戦後の戦後の混乱期また福井大震災の壊滅状況の中であったことを関係者は忘れることはないであろう。

また、この年新潟県高体連の呼びかけで、北信越の高体連代表者会議が新潟高等学校に於て開催され、各県に於ける諸問題を討議する事となった。この会議で体育協会や各競技団体への加盟の方法、加盟金および各関係団体への高体連の派遣役員等に関する基本的事項について審議し合意を得たことは、発足間もない本県高体連にとっては非常に大きな力となった。

昭和24年度になって学区制が制定されたことによって校名の改称、学校の県移管等がおこなわれた。また、昭和28年頃より総合制高等学校より実業課程が分離して独立校となり、その上高等学校への進学者も逐年増加してきた。これに伴う高等学校の新設により高体連への加盟校も増加し、組織の強化と内容の充実が図られた。

○加盟校および専門部の推移は次の通りである。・昭和28年福井農林、坂井農業、小浜水産加盟、サッカー、柔道専門部設置・昭和29年登山専門部設置・昭和31年福井工業加盟、北信越高体連結成・昭和32年剣道、定通専門部設置・昭和33年若狭農林加盟・バドミントン専門部設置・昭和34年武生工業加盟、弓道、ラグビー専門部設置・昭和35年福井実業加盟、ヨット専門部設置・昭和36年ハンドボール、自転車、レスリング専門部設置・昭和37年敦賀工業、仁愛女子、福井女子加盟、漕艇、ウエイトリフティング専門部設置・昭和38年羽水、春江工業加盟、フェンシング専門部設置・昭和39年庭球、ボクシング、ホッケー専門部設置・昭和40年武生商業、大野工業、嶺北加盟、軟式野球、馬術専門部設置・昭和44年美方加盟、射撃専門部設置・昭和46年道守加盟・昭和48年科学技術加盟・昭和50年昭英加盟・昭和51年足羽加盟・昭和58年金津加盟・昭和59年アーチェリー専門部設置・昭和61年気比加盟・昭和62年武生東加盟、空手道専門部設置

55年総体優勝美方高校クルー・監督野村忠之

2　10年の歩み

決勝・佐古選手

《県高体連創立40周年記念》

昭和63年兵庫総体での活躍はめざましく、北陸高校男子バスケットボール部の全国初制覇は、高体連関係者はもとより県民に大きな感動と明るい希望を与えた。

また、この年は本連盟創立40周年にあたり年報を記念号として、各競技の10年間の主な大会記録を収録した。記念式典や年誌の発行は行なわず役員5名と優秀指導者の7名の方々を特別表彰し、12月7日の理事会の席上表彰式と被表彰者を囲んでの懇親会もった。

特別功労者‥中野実典・志田省吾・久谷清矩
藤塚定雄・水上　猛

特別優秀指導者
野村忠之・竹沢義忠・小竹登美子・森三樹夫
瀬谷　博・津田洋道・朝日高範

《第24回全国高体連研究大会》

平成元年度、県高体連主管の最大行事であった第24回全国高体連研究大会は『明るくたくましい人間を育てる体育･スポーツを目指して』の大会主題のもと、全国各地より予想を越えた530名の熱心な参加者を迎えて、平成2年2月1日･2日の両日芦原グランディア芳泉を会場にして盛大に開催された。

初日の開会式で、福田全国高体連会長から「生涯学習・レクリエーションスポーツが重要視される今日、高校のスポーツ活動が多様な形で影響してくる。各校の情報を交換して、観念的な討議でなく足場をみつめ活発な大会となるよう協議を深めて欲しい」という挨拶があった。野村忠之県高体連研究部長より経過報告がなされ、最後に我々の後輩である志田省吾先生より「高体連の進むべき道」と題して提言があった。現場と行政に深く関係されておられた経験と高い識見から、参加者に対して熱意あふれた口調で的確な示唆を与えていただいた。

《当時の会長東　哲郎氏回顧より》

また、当時の理事長松下幸三郎氏･副理事長天谷直樹氏は『新任の役員ばかりの者には緊急の重い課題がありました。それは、全国研究大会をぜひとも成功させることでした。最初の作業は実行委員のメンバー選びでした。会長はじめ全員新任ですから、昨年までの流れがわからず理事長に一任してスタートしました。運営部は竹野秀輝・総務を天谷直樹・発表研究部に赤星哲志各氏を配し、来賓関係に酒井和生・宿泊担当に横山幹夫・総合司会に斎藤惇・総務の黒田継一各氏を中心にした最終的なシナリオが出来上がってのは11月でした。研究大会が終了し、玄関先で見送りをしていた時、「本当の研究大会に参加した。」と言う声を耳にした時、本県体育教員の底力を見せた大会であったと自負すると共に、先生方の惜しまぬ努力に感謝する気持ちでいっぱいでした。』と述べられている。

H8年山梨総体体操競技団体優勝北陸高校
(左より奥野直美・井上あい子・尤　純静)

《県高体連創立50周年記念事業》

実行委員会委員長八尾正次郎・副委員長斎藤邦夫、高橋正樹・行事部長谷口善生・財務部長黒田継一・年誌編纂部長佐々木茂各氏を配し、各事業を推し進める。

①記念式典‥平成10年11月27日福井商工会議所
②財務‥県補助金・高体連積立金・寄付金等
③50周年記念誌発行（A4版・470頁）
　グラビア　・第1章高体連のあゆみ
　　・第2章専門部のあゆみ
④記念事業‥新人大会優勝旗新調（69本）
⑤その他‥PR用ポスター公募　(38点応募)

3　将来に向けて

1.《医科学サポートの重要性》

平成9年度の実績を分析すると、体操、ホッケー、漕艇などからはジュニアからの指導の必要性と指導者同士の結束。また、ハンドボール、サッカー、陸上、射撃、自転車には指導者の厳しい勝利への情熱や工夫を感じた。しかし、共通していえることは、医･科学面からの

サポートを受けた種目も少なくないということである。一人一人の選手を過去の障害・内科・整形外科・栄養・心理など多方面からチェックして、専門家から指導・助言を受け実績を上げた。特に県指定の拠点強化種目においてはその効果はおおきい。全国トップは勿論世界的な選手の育成には、もはや指導者一人だけで全てをこなす時代ではなくなった。医・科学面からのサポートはより重要さを増すことは間違いない。福井県体育協会の医科学委員会・福井運動公園指導普及課の一層のサポートを切に願うものである。

Ⅱ.《部活動は学校活性化の中核》

生徒数の減少に伴い活動加入生徒数の減少も明らかである。生徒自身の興味・趣味の多様化時間的な束縛・辛いことからの逃避・アルバイト等理由は様々である。

いうまでもなく部活動への真剣な取り組みは自己形成に大きな意味をもち、活動後の達成感、仲間との協調性や我慢することの大切さ、目標に向けての努力と工夫、など今の時代には最も必要なものといえる。

運動部、文化部を問わず部活動に熱心な指導者、生徒が多いことは校風にも活気をもたらすものであり、それぞれの学校の特徴に応じ、日本教育の文化として育った部活動の更なる必要性について再考する時期でもある。

Ⅲ.《中体連との連携の必要性》

部活動離れの現象は高校のみならず中学校でも同様である。部活曜日・時間の制限、社会体育への転換意識等、様々な面から制約を受けるようになってきており、深刻な問題としてあげられてきている。このような中で高体連としてはぜひ中体連との連携を密にして現在の問題解決に努力し、つぎには土俵を変えて活躍してくれる多くの生徒に期待したい。

（H９年報の回顧より　理事長筧　尚夫）

H９年京都総体福井県選手団（写真提供・福井新聞社）

私の大切な思いで

新谷真智子

H９全国高校総体漕艇競技
ダブルスカル準優勝
H10福井県立若狭高校卒
H10中部電力入社・漕艇部

高校時代、仲間と共に一生懸命ボートに取り組んでいたころの姿が私の頭の中を駆け巡ります。私は、高校一年の春，ダブルスカルに景子と取り組み始めました。私たちは一つの夢がありました。それは全国総体に出場することでした。しかし、その頃の私たちにとってみれば、総体出場など夢のまた夢でしかありませんでした。夏の合宿・冬の体力つくりのためのトレーニングは本当に辛いものでした。でも、常に全国総体に出場したいという思いのほうが勝っていたように思えます。結果は思うほどうまくいかず、大会に何回も出てはその都度何回も何回も悩みました。漕ぎで分からないことがあれば先輩に質問し、二人で悪い部分を指摘し合って勝つための努力をしました。その努力が実ったのかついに３年生の時に夢が叶いました。

全国高校総体では予選から自分たちの力以上のものを発揮することができ、おもしろいように勝ち進み決勝まで残ることができました。

ついに決勝戦、コースは波が高く荒れていましたが、でもなぜか恐さはまったく感じず、逆にこれはいけるとさえ感じ、気負いもなく懸命に漕ぎ続け、気がつくと準優勝することができました。『嬉しかった。ボートをしててよかった。有り難う先生。有り難う一緒に汗をながしてきた仲間達。有り難う景子。あなたは私のベストパートナー。』これからも私はボートを続けます。これからの、辛いことにも高校時代の景子との思いでを心の支えとして‥‥。今は亡き友の分まで‥‥。

京都総体準優勝の在りし日の新谷・大西選手

（H10冬・早朝練習中交通事故で亡くなった大西景子さんとの思いで）

長　野　県

《事務局》
〒380-8515 長野県長野市上松1－16－12
県立長野高校内
TEL 026（234）1205
FAX 026（234）1205

創立年月日：昭和24年4月1日

加盟校数		106校
専門部数		34専門部
加盟部数		2,185部
部員数	男子	20,367名
	女子	12,880名
	合計	33,247名

年度	会長	理事長	記事
24	西村　文雄	刈間今朝雄	長野県高等学校体育連盟結成
25	〃	〃	
26	〃	〃	第1回全国高等学校スケート選手権大会開催
27	〃	〃	第5回全国高等学校陸上大会開催
28	〃	〃	
29	〃	〃	第4回全国高等学校スケート選手権大会開催
30	田中　実	〃	
31	西村　文雄	〃	第6回全国高等学校スキー大会開催
32	塚田　隆雄	〃	
33	〃	〃	
34	更級　勉	丸山　保彦	第9回全国高等学校スケート選手権大会開催
35	〃	〃	第10回全国高等学校スケート選手権大会開催
36	新田　稔	〃	
37	〃	〃	
38	久保田文雄	〃	
39	〃	〃	全国高校総体ソフト、ハンドボール大会開催第14回全国高校総体スキー、スケート大会開催
40	宮下　清計	三村　成美	
41	山田　石男	〃	
42	〃	〃	全国高校総体バレーボール、テニス大会開催
43	〃	〃	
44	〃	〃	第19回全国高校総体スキー、スケート大会開催
45	山田　石男	三村　成美	
46	中村　博二	北沢　生吉	
47	〃	〃	
48	〃	〃	
49	佐藤　穂次	湯本　宣政	
50	〃	〃	
51	〃	〃	全国高校総体開催
52	丸山　保彦	〃	
53	栗田　寛	〃	第25回全国高校総体スケート選手権大会開催
54	藤森　慎	伊藤　昭治	
55	〃	〃	
56	〃	〃	
57	市村順太郎	〃	
58	平松　剛	渡邊　伊八	
59	〃	〃	
60	〃	〃	第35回全国高校総体スキー大会開催
61	〃	〃	
62	高橋　重造	〃	
63	小林　仁	両角　千明	第38回全国高校総体スケート選手権大会開催
元	〃	〃	
2	〃	〃	
3	竹内　長生	小島　功	
4	藤澤　愛僖	山浦　正孝	第42回全国高校総体スキー大会開催
5	〃	〃	
6	〃	〃	
7	〃	〃	
8	海沼　清美	布施　紀彦	
9	本山　綱規	〃	
10	〃	〃	第48回全国高校総体スケート選手権大会開催

1　沿　革

全国高体連設立後、長野県高体連を結成すべく県内4地区にすでに組織化されていた地区高体連は、それらを基盤に連合体としての県組織をつくる方向でまとめた。そして県庁のお膝下の長野工業高校に事務局を置き、同校校長の西村文雄を会長に刈間理事長他の役員体制で、昭和24年6月4日長野県高等学校体育連盟が発足したのである。

創立当初は次のような基本方針で進められた。

①4地区高体連は独立体とする。
②県高体連は地区高体連の連合体とし役員は合議により選出する。
③各種目別団体との円滑な連絡を計る為に高体連理事を運営の議に参加させる。
④高校生の種目別団体への加入は一括加入し、大会出場資格をあたえる。
⑤高校生の大会は、国体及び全国高校選手権大会の2回を原則とする。

上記の大部分は現在も引き継がれている。

競技成績面を中心に昭和の時代を見てみたいと思う。

20年代は50年に及ぶ長野県高体連歴史の中で比類のない輝かしいものである。現在では至難の業となった全国優勝（学校対抗団体）を実に男子4校が延べ5回、女子3校が延べ5回成し遂げた。内訳を見るとスキー男子2校、スケート男子2校の4回、女子2校の3回、球技4種目（軟式庭球女子、ソフトボール女子、バスケットボール女子、バレーボール男子）であった。

30年代になって、県大会も種目別大会から、総合大会へと形を変え、長野県総合体育大会として開催された。

第1回大会プロ表紙

30年代の成績（団体）についてみると、数ある種目の中で全国優勝はスピードスケートだけであった。その活躍たるや、他種目を補って余りあるすばらしいものであった。南佐久実業高校（現小海高校）は30年に本県の諏訪二葉高校の3連勝を阻んで初優勝して以来39年に諏訪二葉に敗れるまで実に9年連続して総合優勝。また男子では30年に岡谷工業高校（3連勝）、31年は野沢北高校が優勝し県のチームがアベック優勝を4年連続果たした。種目別あるいは学校対抗でも上位を県勢が独占しスケート王国の名を全国に轟かせた。全国大会開催地も自然条件との関係から34年（蓼科湖）、35年（軽井沢）、39年（茅野城ノ平）と3回の長野県開催となった。

40年代には第15回全国高校スキー大会で、同市内にある飯山北と飯山南高校がアベック優勝という全国高校大会始まって以来初の記録を樹立した。またこの花輪（秋田）大会から47年十和田大会まで女子の飯山南は7連勝しおそらく不滅の記録になるであろう偉業を達成した。このことにより冬季スポーツ長野の名を更に強く全国に印象づけた。47年には51全国高校総合体育大会が長野県を主会場に開催が内定し、全県あげて取り組みが始まった。

49年には、新たな種目としてウエイトリフティング、フェンシング、ヨット、ホッケー、自転車の5種目が専門部として仲間入りをした。

50年代に入り、51高校総体は県下で14種目を開催した。「自然と友情と躍進と」のテーマでさわやかな大会を目指して「生徒が主役」を合い言葉に成功のうちに終了することができた。

成績は優勝こそ少なかったものの、1～16位の上位入賞は39と選手強化、競技力の向上が実った。その後総体でのスケートは53年、55年と岡谷南高校が今村、宮坂コンビで総合優勝、宮坂はその年全日本選手権で史上2人目の高校生チャンピオンに輝いた。53長野国体でもスケートは完全優勝の大活躍をした。61年大村（小海高）はジュニア世界選手権で総合優勝するなどスケート界は南佐久実業の9連勝以来の華々しい時代を築いた。スキーでは52年飯山南高校女子が4年ぶり9回目、59年に10回目の優勝、60年白馬高校の2回目優勝と女子勢の活躍が目を引いた。男子は優勝がなく準優勝が57、58年の中野実にあるだけの不振時代であった。夏季総体での優秀成績についてみると52年の弓道女子学校対抗で飯田女子高校が初優勝を飾り、57年には山岳女子で長野西高校が優秀校になった。また、50年代で忘れてならないのは望月高校女子卓球が53年、54年の2年連続準優勝、55年3位、56年準優勝と実績を挙げ、その秋の滋賀国体少年女子では念願の優勝を果たした。

2　10年のあゆみ

（1）高体連活動の概要

前述のように長野県高体連の組織と運営は全国でも数少ない方式で行なっている。県内を4ブロックに分け、北、東、中、南地区にそれぞれ独立した高体連があり独自の活動もしている。その地区高体連の連合体として県高体連は40年間県庁所在地の長野市と中信の松本市に事務局を置き運営されてきた。**60年代**に入り、地区振興、交通網の整備などもあり、2期4年の事務局輪番制が決定した。63年度初めて南信地区の諏訪二葉高校に移転、その後東信の上田高校、北信の長野高校（現在）と回ってきている。

平成年代に入り県大会の開催基準の見直しがなされ大会日数増、球技種目中心に参加チーム枠が16チーム以内から32チーム以内に拡大された。**平成2年**の春季総合大会参加選手は8700人に及び、前年より1700人増で高体連発足以来のピークを迎えた。

平成3年には、平成10年の冬季五輪長野開催決定により、県民のスポーツ熱は一段と高まった。スキー、スケートの世界ジュニア選手権大会への参加者7人をはじめ国際大会にも参加が次第に増加した。県教委、体協は63国体

スケート学校対抗 三連覇 佐久長聖高校

秋季大会の惨敗から競技力の深刻なレベル低下という状況で五輪開催を受け、ジュニア競技力向上問題を取り上げ対策に取り組むことになった。高体連も中体連とともに選手育成と強化、中高連携の問題、地域スポーツ団体との協力等の取り組みをはじめた。

平成4年、事務局が東信地区に移転（上田高校）し県内4地区を一巡した。この年の9月より土曜日休日実施にあたり、大会は出来るだけ避けるよう県教委から通達もあった。ゆとりのある時間であるべき休日も、実際にはスポーツ過熱化、顧問の労働過重等問題を含みながらスタートをした。

平成6年には高校教育の多様化や、国際化時代への対応に迫られ、朝鮮学校、専修学校が高校総体へ出場可能となった。長野工業高等専門学校からも陸上などに8名の出場があった。

平成7年は生徒の急減が始まって5年目に入り高校生の数も全県で多いとき（平成3年）より1万5千人減少し、部加入者数も3千人近くの減少傾向が現われた。他方競技種目数は元年にボクシング、4年にアーチェリー専門部が発足し増加となった。財政面では学校分担金、参加料、選手負担金等の自主財源が減少し地区高体連とともに運営に支障を来すことになり、**平成8年**に分担金の値上げをした。

50年の高体連事業の中で以上に記さなかった点をまとめてみる。昭和43年研究調査部が発足し、部活動関係のアンケート調査などを毎年実施し紀要の発刊、全国研究大会への参加および発表と活動をしてきている。昭和47年に『高体連会報』を発刊、以後55年には専門部となり毎年発刊している。62年には「表彰規定」を設け連盟の向上、発展に尽力し功績のあった教職員、優秀選手もしくはチーム、その指導者を対象に毎年表彰をしている。63年には創設以来のあゆみをまとめた『長野県高体連史』を発刊し、平成10年には「50周年記念事業」を実施し、その一環として続高体連史となる『50周年記念誌』を発刊した。

（2）総体競技成績の概要

夏季大会での活躍は平成2年の弓道団体女子で飯田女子高校の2回目の優勝がある。伊那北高校女子フェンシング、岡谷南高校のボート、文大長野高校の体操の活躍も平成前半の特徴であった。後半では上田西高校のレスリング、松本第一高校の柔道と私立高校の活躍が目立った。そんな中でこの10年を通して全国で常に上位で活躍をする県立の岡谷工業高校のバレーボールは見事である。15年連続全国大会出場、平成2年準優勝、4～6年はベスト8に入り平成9年にも準優勝の活躍をしてきた。9年度の選抜優勝大会では念願の全国制覇を果たした。

冬季大会は63年に全国スケート大会を開催した。10年ぶり8回目の県内開催で軽井沢では2回目の大会となったが2種目だけの優勝に

終った。平成5年には佐久高校が初優勝し、実に昭和53年岡谷工業高校以来13年ぶりであった。入賞者数も25人と長野オリンピックに向けて特別強化策の成果が出たといえる。佐久高校は、平成6年から3年連続優勝を達成した。8年には、5種目優勝、11種目全部に3位以内に入る活躍であった。同年東海大第三高校女子は31年ぶりの総合優勝を果たした。

スキーは昭和60年に続き63年、平成元年と白馬高校女子が連続優勝した。4年の栂池総体では長野県が大活躍。特に距離男子で、堀米（中野実）は15kmクラシカルに3連覇をし中野実業高校は2年連続優勝した。飯山南、白馬、下高井農林高校も上位入賞した。中野実は5年にも優勝し3連覇となった。6年に体育科新設3年目の飯山南が男子初の総合優勝に輝き、8年にも再度優勝した。

スキー学校対抗 三連覇 中野実業高校

3 将来に向けて

まず生徒であるが、少子化の上に部活動離れということで、私立高校と一部の推薦入学のある学校に優秀選手が集まり県の上位で活躍しているものの、他の学校では運動部員数は下降気味である。その打開策として、大会の持ち方や研究や県立の普通高校においても運動部員推薦入学制度を導入することも一つの方法である。

つぎに指導者については、やはり本県も高齢化が問題になってきている。体育科以外の教師による指導、学校外からのコーチの招聘などについて時間的、経済的保障を中心に道を探っていく必要がある。また社会体育サイドでの高校生の受け皿とそこへの指導者としての教師のかかわりの問題もでてくると思われる。

最後に高体連の組織についてであるが、事務局を高校持ち回りでなく固定化できないかと言う問題、そしていわゆる財政改革の問題、研究部門や競技力向上部門の強化などの問題等多岐にわたっており早期対処が必要である。

全国高校総体を振り返って

野 明 弘 幸

プロフィール
岡谷南高校スケート部出身
現在長野県体育協会専門主事
長野オリンピック1,500m
7位入賞
1,500m日本記録保持者
（1998年3月現在）

高校生にとって全国高校総体は憧れであり、大きな目標だろう。私もそんな高校生の一人だった。

私自身全国高校総体スケート選手権大会に良き指導者、良き仲間に恵まれて3回出場する事が出来た。中でも一番の思い出は、高校2年生の時に栃木県日光市で開催されたときの事である。この年は、アルベールビルオリンピックの年であり、中・長距離に二人の高校生が出場することになった。日程が重なり、二人の選手が出場できなくなったこともあり、私は優勝候補に上げられていた。

しかし、成績は1,500・5,000mとも2位に終わってしまった。この時全国高校総体の厳しさを知った。レースの前のウォーミングアップの時にいろいろな思いが頭の中をめぐっていた。その中で自分自身に大きなプレッシャーをかけていたのである。そのプレッシャーなどに勝つ事ができなければ、自分自身の力を十分に発揮できずに終わってしまう。私はその時、身をもって体験した。それは、その時の私にとって大きな敗北感だった。

あれから6年。私は多くの国際大会に出場し、今年は最大の目標だった長野オリンピックにも出場することができた。今まで、悔しい思いやうれしい思いなど多くの経験を積んできたつもりだ。今振り返るとあの時かけたプレッシャーは、今の自分ならばはね除けられたのかもしれない。しかし、あの時の自分にとっては大変大きな事だった。それが私の高校総体の苦い思い出である。

岐　阜　県

《事務局》
〒502-0931 岐阜市則武清水 1841-11
県立岐阜北高校内
TEL 058（231）7032
FAX 058（294）7990

創立年月日：昭和22年8月

加盟校数		115校
専門部数		33専門部
加盟部数		1,710部
部員数	男子	17,841名
	女子	11,764名
	合計	29,605名

年度	会長	理事長	記事
23	伊藤　喜一	石坂　栄之 柴田　時秋	名称変更し高体連が発足
24	〃	柴田　時秋	高体連規約を制定
25	〃	〃	
26	〃	〃	
27	〃	〃	
28	〃	〃	第1回県高校総体開催
29	〃	〃	県総体開会式にマスゲームを実施
30	熊谷　誠三	〃	
31	〃	〃	研究調査部の設置、高体連体操の策定
32	〃	〃	高体連誌創刊
33	馬渕　克巳	〃	
34	〃	〃	
35	〃	〃	第20回岐阜国体開催内定
36	米谷　暎一	〃	
37	〃	〃	
38	永井　孝	〃	
39	〃	〃	東京オリンピック（小川・佐藤出場）
40	〃	森島　茂	第20回岐阜国体開催
41	〃	〃	
42	大当　宏	和田　弘	
43	〃	〃	
44	〃	〃	競技役員へ旅費支給
45	〃	〃	
46	〃	〃	
47	石坂　栄之	青木　茂	
48	戸部　秀済	〃	東海ブロックで1H、岐阜3種目開催
49	戸部　秀済	青木　茂	広報部の新設
50	小山　勝	〃	
51	〃	田中　登	スポーツテストを高体連で実施
52	野村　健二	〃	第25回IHスキー競技を流葉で開催
53	〃	〃	高体連の「方針と重点」を策定
54	〃	〃	
55	中島　鉦次	〃	岐阜女子商業高ホッケー三冠王達成
56	〃	〃	
57	河村　武彦	〃	
58	〃	〃	岐阜女子商業高ホッケー三冠王達成
59	河合　敏緒	〃	
60	〃	杉山　道昭	岐阜女子商業高ホッケー三冠王達成
61	野々村干城	〃	
62	近藤　普潤	〃	
63	〃	浅野　三郎	
元	田中　猛	〃	水泳糸井(県岐商高)三大大会制覇
2	〃	〃	高体連「12総体」開催誘致を決議
3	水崎　明	〃	新装なった長良川競技場で総合開会式
4	〃	福島　寛司	県高校総体検討委員会を設置
5	高橋　伸郎	〃	体力優秀校の表彰
6	渡辺　重彦	〃	「ハイスクールスポーツ」発刊
7	宮崎　満彦	武藤　哲夫	すずらん国体開催
8	〃	〃	「12総体」全国高体連で開催決定
9	本田　修也	今村　和正	
10	荒井　強平	〃	

1 沿 革

昭和23年、伊藤喜一氏（岐中校長）を初代会長に推挙し、早速第1回の大会が開催された。

当時の専門部は、陸上・サッカー・バスケットボール・卓球・軟式庭球・バレーボール・相撲・水泳・体操等があった。

昭和24年には、高体連規約が制定され、教育活動として一層の実を上げる路線が確立された。

昭和28年に19種目、39校が参加して第1回県高校総合体育大会が開催された。この大会は、参加生徒が感動し、友情を深める場として意義深いものであった。また、昭和29年には、県高校総体を盛り上げるため、マスゲームを実施するようになった。大会開催に力を注いできた高体連は、新しい高体連への脱皮のため、昭和31年に調査研究部の設置や「高体連体操」の策定を行なった。

昭和32年には「高体連誌」が創刊され、年度内の関係競技会の記録等を網羅するもので、高体連の軌跡をたどる格好のものとなった。競技面では、昭和32年に長良高が全国高校陸上で女子総合優勝を果たしたのをはじめ、全国制覇の数も増加し活況を呈してきた。また、初めて県定通制体育大会が5種目にわたって実施された。

昭和35年に第20回国民体育大会の岐阜県開催が内定し、選手団の中心は高校選手であるとして、各学校にも強化委員会が設置され、着々と選手強化が進められた。

昭和39年は東京オリンピックの年であったが、県では目前に迫った岐阜国体のため、最後の仕上げに総力が注がれた。年々力を付けてきた高校選手が一段と飛躍し、陸上では小川・佐藤（長良高）がオリンピックに出場し健闘したのは正に快挙であった。

昭和40年代に入り、岐阜国体の前哨戦ともいえるこの年のI・Hで団体優勝1種目、個人優勝4種目、団体2位6種目、個人2位6種目、団体3位が1種目、また、東海総体では団体優勝11種目、団体2位12種目と好成績をあげた。

第20回国民体育大会では、市内の高校生3200名が見事な集団演技を披露し絶賛を浴びた。また、各種目での高校生の活躍は目覚ましく、団体優勝8種目、個人優勝3種目をはじめ数多くの入賞を果した。県民挙げての岐阜国体は、施設・設備の遺産のみならず、スポーツに対する県民意識の高揚や生徒の部活動に対する姿勢が積極的になり、士気を高めるのに大いに役立った。

この時期は、「高体連活動はいかにあるべきか」という基本的な課題が討議され、事業についても多角的に検討されるなど、高体連の運営も多様化・複雑化してきた時代である。

昭和41年には、高体連活動も運動部選手のものだけにとどまらず、県下高校生全体の組織へ脱皮の第一歩として、スポーツテストを実施するようになった。また、49年には、研究調査部の改組や広報部の新設によって、各高等学校の部活動の実態調査や高体連誌編集等の広報活動を行なうなど、新しい分野への発展が期待されるようになった。

昭和50年代は高体連活動の内容を充実するための条件整備が進んだ時期である。昭和51年に待望の第25回全国高校総体スキー競技が神岡町流葉スキー場で開催され、飛騨地区高校生の積極的な奉仕活動や関係者の援助の下に大成功を収め、全国大会開催に自信を深めた。

I・Hホッケー女子優勝の岐阜女子商高

昭和55年には、ホッケー女子の岐阜女子商業高は、全国選抜、I・H、国体の三大大会を制して、ホッケー史上初の三冠王となる偉業を達成し、58年にも二度目の三冠王となった。

さらに、駅伝での中京商業高の2年連続の全国優勝は、本県陸上界の快挙といえる。

昭和60年代に入り、県立岐阜商業高が全国高校軟式野球選手権大会で優勝し、本県に2度目の優勝旗を持ち帰った。今や向かうところ敵なしの岐阜女子商業高ホッケー部は、昭和60年に3度目の三冠王に輝き、日本ホッケー界の歴史に残る偉業を達成した。

2　10年の歩み

平成時代の幕開けの元年、平成12年度全国高校総体岐阜県誘致の動きは、気運が盛り上がる中、東海高体連で承認され新しい段階に入った。

本年から始まった県高校駅伝女子の部において、関商工高が初代チャンピオンに輝いた。

全国大会では、水泳の糸井統（県岐阜商高）がⅠ・H、日本選手権、国体の200M背泳ぎで優勝する偉業を成し遂げ、日本代表として米国遠征するなど、日本水泳界のホープとなった。また、Ⅰ・Hスキーのスラロームで野々尻和幸（岐阜第一高）が県高校史上初の2位入賞を果したこと、Ⅰ・Hヨットで海津高がスナイプ級での男女アベック優勝は特筆される。

平成2年には、県高体連評議員会で平成12年全国高校総体の開催誘致を満場一致で決議した。

その他、9年間据え置きになっていた高体連分担金を、物価上昇、交通費の値上がりや消費税等のほか、高校生の減少が見込まれることなど運営が困難になる状況を踏まえ値上げすることになった。

平成3年は、県高校総体総合開会式を改装なった岐阜メモリアルセンター長良川競技場で開催し、岐阜地区の高校生約2万人がスタンドを埋め尽くす中盛大に挙行された。

本県のⅠ・H選手団は、この年の静岡大会から揃いのユニホームで参加することができた。

この年のⅠ・H女子走高跳で優勝した坂野尚美（大垣商高）は、東京で開催された世界陸上選手権大会の最終炬火ランナーに抜擢された。

平成4年度を一つの区切りとして新しい高校総体の在り方を目指し、副会長を委員長とする「県高校総体に関わる検討委員会」を発足させ、①東海高校総体や全国高校総体の予選を兼ねること。②生徒の思い出となる大会にするため1～3年生全員が参加できること③県下の高校生の最高の大会とするため、厳粛な総合開会式を実施すること。④8月に開催していた大会を5月に開催すること。以上の結論を得て、平成5年度から実施することとした。

また、12総体の誘致・準備委員会では、競技・強化・式典・総務の4部局を設け、先催県の視察や資料調査等を精力的にこなしていった。

「高体連新聞」は昭和53年に創刊して以来29号となったが、30号からは一層親しみやすく読みやすいものにするため、B4版・カラー印刷の「ハイスクールスポーツ」として新しく生まれ変わった。

新生の「ハイスクールスポーツ」30号

この年のⅠ・Hでは、水泳競技自由形50Mで末次大介（岐阜高）が優勝したのをはじめ、多くの種目で活躍した。女子ソフトボールに初出場の多治見西高が見事準優勝に輝き注目を集めた。また、高体連の新しい加盟校として県立岐阜聾学校が仲間入りをし、陸上競技の大会に初参加した。

平成7年5月に全国高体連は、定期評議員会において本県が提出した「12総体誘致申請」を審議し、満場一致で開催を内定した。

スキー岐阜すずらん国体へ向けての選手強化の努力が実を結び、少年の部すべての競技で得点をあげ、天皇杯5位、皇后杯2位という本県過去最高の成績をあげた。

全国大会で顕著な成績をあげると、羽島北高フェンシング部の長良将司選手がフルーレ、サーブルで優勝し、史上初の二冠を達成したことや岐南工高がⅠ・H自転車競技4㎞パーシュート、ロードレースに優勝するなど、優勝7、2位7、3位7種目と素晴らしい活躍であった。海外遠征には、レスリングの上林浩二・坂井敏行（岐阜工高）加納篤（岐阜西工高）が米国へ、バレーボールの上村進也（岐南工高）と監督の平田宗興（県岐阜商高）が中国遠征に参加した。また、ホッケー女子ユース代表として岐女子商高から6名が選ばれた。

平成7年度の全国高体連研究大会が静岡市で開催され、岐阜県も「運動部活動における障害の実態と防止について」と題して2ケ年にわたる研究成果を発表し好評を博した。

平成8年5月に、全国高体連理事会において念願の平成12年度全国高校総体岐阜県開催が決定した。思えば、平成元年4月に県高体連が「12総体」誘致開催を表明して以来、長年に

わたる多くの関係者のご尽力の賜によるものであり心から感謝申し上げたい。

12総体は、愛知県開催のヨット競技を除く27種目が岐阜県で開催される。県教育委員会に全国スポレク祭・全国高校総体推進室が15名体制で設置され準備業務が開始された。

一方、12総体に向けた競技力向上を図るため、県教育委員会内に「平成12年度全国高等学校総合体育大会岐阜県選手強化対策本部」が設置された。

この年、I・H岐阜県選手団のユニフォームを一新した。ファッション岐阜のイメージを全国にアピールし、選手が身につけることを誇りとするものを作成するため、デザイン関係学科で学ぶ生徒からデザイン画を募集し、新しいユニフォームを作成した。本県はもとより各県選手団の関心も高く、大変好評であった。

全国大会での成績をみると、I・Hの優勝は自転車競技で岐南工高、羽島北高のフェンシングと昨年に比べて減少したが、ベスト8以内の種目が12種目あった。その他、全国高校射撃競技選手権大会でビームライフルにおける中濃高の団体優勝と全国高校軟式野球選手権大会で県へ4度目の優勝旗をもたらした中京商高の活躍目覚ましく、特に、エース古川投手は4試合で72三振を奪う大会記録を樹立した。

平成9年度の優勝は、全国優勝の常連校となった岐南工高の自転車部と八百津高の漕艇部の2部であった。ベスト8入賞校数も12と、平成8年度と同数であった。12総体を目指してベスト8の壁を破り、上位入賞するチームが多くあらわれることを期待したい。

3　将来に向けて

当面の課題は、平成12年度岐阜開催の「2000年岐阜総体」を成功に導くことである。それには、①岐阜県が好成績をあげること。②「高校生一人一役」運動を充実させ、生徒のボランティア活動で盛り上げること。③総合開会式を質素でも暖かさを感じてもらえるものにすること。と考え関係者が全員協力して大会を成功させたい。2000年岐阜総体が終了してからも、大会運営の経験と作り上げた組織を充実し、これまで以上の好成績をあげることと、県下の高校生が充実した高体連活動が出来るよう努力をしていきたい。

国体優勝の思い出

竹川あゆみ

岐阜県立岐阜女子商業高卒
ホッケー部
平成9年国民体育大会優勝
現在　立命館大学在学中

私たちは“優勝”を勝ち取るために3年間頑張ってきました。選抜大会、インターハイともに優勝を逃しているだけに、この国体では絶対に勝ち取るためにチームが一丸となって猛練習し、試合に臨みました。

国体での試合はどれも心に残っていますが、その中でも決勝戦を思い出すと胸がいっぱいになります。決勝戦は開催地の広島と対戦しました。前半早々5分位に先制点を許しましたが、私たちは冷静さと平常心を失うことなく、前半に一点を取り返し、後半には、待望の決勝点をあげることができました。ついに「優勝」という3年間の目標を果たすことができたのです。

本当に日本一を達成したという実感がわいてきたのは、うれし涙を流しながら監督を胴上げし、仲間と抱き合った瞬間でした。そしてこの瞬間、3年間ホッケーをやってきてよかったという思いがわきあがってきました。優勝できたのは、プレーしていた私たちだけでなく、先生や両親をはじめ、回りの方々の支援で勝ち取れたものだと思っています。

決勝では、相手が地元広島であったにもかかわらず、民宿のおじさん・おばさんには、私たちのチームを家族総出で応援していただき本当嬉しく感じました。地元の方々と交流できたことは、優勝できたことと同時に、忘れることのできない一生の思い出となりました。

そして、私はこの国体を通じて、自分の将来を考えることもできました。ホッケーの面白さを知ってもらいたい、そして、優勝する喜びを多くの人に経験してもらいたいという思いで、

今、私は教員になるために頑張っています。

これからもホッケーを通じて多くの思い出をつくっていきたいと思います。

静　岡　県

《事務局》
〒420-8608 静岡県静岡市長谷町66
県立静岡高校内
TEL 054（248）7448
FAX 054（248）7071

創立年月日：昭和23年1月21日

加盟校数		152校
専門部数		31専門部
加盟部数		2,442部
部員数	男子	27,524名
	女子	15,800名
	合計	43,324名

年度	会長	理事長	記事
23	間処　武夫	宮林　武雄	1月21日静岡県高等学
		重田　一	校体育連盟創立
24	小宮　一夫	重田　一	
25	〃	〃	
26	鈴木　清一	石坂　均	
27	〃	〃	
28	鈴木　清一	〃	
	山本　松一		
29	山本　松一	大橋　専一	
30	〃	〃	
31	〃	〃	
32	〃	〃	
33	大井　宗一	〃	創立10周年式典挙行
34	諏訪　卓三	〃	日本高校水泳開催
35	〃	〃	全日本高校女子バレー
			ボール選手権大会開催
36	〃	〃	第14回全国高校陸上競
			技選手権大会開催
37	〃	山本　武	
38	鈴木　誠志	〃	
39	〃	〃	全国高校男女バスケッ
			ト、剣道大会開催
40	〃	〃	
41	望月庄次郎	〃	
42	〃	〃	創立20周年式典挙行
43	相佐　明一	〃	
44	〃	高杉　隆三	県下一斉スポーツテス
			ト大会始まる
45	〃	〃	全国総体レスリング開催
46	〃	〃	
47	芹沢　晴夫	久保田俊影	

年度	会長	理事長	記事
48	芹沢　晴夫	久保田俊影	全国総体（体操、自転車
	三浦　朝治		競技）開催
49	三浦　朝治	〃	
50	〃	〃	
51	〃	塩澤　伸介	
52	渡邉福太郎	〃	創立30周年式典挙行
53	〃	〃	
54	〃	〃	
55	〃	〃	
56	竹田　昌平	〃	
57	〃	野島　譲	
58	〃	〃	全国総体（庭球、男子バ
			レー、弓道）開催
59	梶原　亨	〃	
60	〃	〃	66全国総体静岡県誘致決定
61	伊村才次郎	白井　三郎	
62	田口　一男	〃	66（平3）全国総体静岡県
			開催決定　創立40周年
			式典挙行
63	望月　正	山﨑　博昭	
元	〃	〃	
2	戸本　隆雄	〃	
3	〃	〃	全国高校総体開催
4	〃	山口　一三	
5	織田　元泰	〃	
6	〃	〃	
7	〃	〃	全国高体連研究大会開
			催（静岡市）
8	永田　實治	〃	
9	安達　忠勝	松浦　博實	創立50周年式典挙行
10	〃	〃	

1 沿 革

◎昭和 20 ～ 30 年代

昭和 22 年度 昭和 23 年 1 月 21 日、静岡県高等学校体育連盟創立。

昭和 24 年度 陸上競技・水上競技・バスケットボール・バレーボール・軟式庭球・卓球・送球・蹴球・ラグビー・ソフトボール・体操・相撲・山岳・漕艇・野球の計 16 専門部でスタート。加盟校は全日制 81 校（34,352 名）、定時制 12 校（995 名）、分担金は全日制 20 円、定時制 10 円、全予算 70 万円の船出となった。

昭和 26 年度 柔道部・バドミントン部が新設された。高体連機関誌「高校の体育」（創刊号）を発行。

昭和 27 年度 定通制県大会が、第 1 回大会としてスタートした。

昭和 28 年度 県高校総体の第 1 回大会 18 種目が 4 市 19 会場で開催された。

昭和 29 年度 剣道部・弓道部が新設され加盟専門部数は計 20 となる。

昭和 31 年度 第 3 回東海高校総体を静岡・清水・島田の 3 市で開催した。

昭和 32 年度 第 12 回国民体育大会が本県で開催された。「オレンジ旋風」を巻き起こすとともに、高校生 4 千余名の補助役員が陰の力となって活躍した。

昭和 33 年度 8 月 15 日に創立 10 周年記念式典を挙行（於県立静岡工業高校講堂）。

昭和 34 年度 第 27 回日本高校選手権水上競技大会を開催（浜松市元城プール）。ウェイトリフティング部の新設。

昭和 35 年度 全日本九人制バレーボール高校女子選手権大会（浜松市）の開催。

昭和 36 年度 第 14 回秩父宮賜杯全国高校陸上競技選手権大会（草薙陸上競技場）、第 2 回全日本ヨット選手権大会（熱海市）を開催。

昭和 39 年度 全国高校体育大会男女バスケットボール選手権大会（静岡市駿府会館）を開催。

◎昭和 40 ～ 50 年代

昭和 40 年度 フェンシング部・レスリング部・自転車競技場・ヨット部・ホッケー部が新設され計 26 専門部となる。

昭和 41 年度 ボクシング部が新設される。

昭和 42 年度 昭和 43 年 1 月 21 日に創立 20 周年記念式典を挙行（於県立静岡高校同窓会館）、アーチェリー部の新設。

昭和 44 年度 「県内高等学校における学校体育の健全な発達を図る」ことを目的に県下高校生を対象に第 1 回スポーツテスト大会を実施する。参加数は全日制 110 校、98,263 名、定通制 30 校 6,315 名。

昭和 45 年度 全国高校総体レスリング競技を開催（焼津市）。スケート部の新設。

昭和 48 年度 全国高校総体体操競技（草薙体育館、静岡市民体育館）、自転車競技（静岡競技場）を開催。

昭和 49 年度 「みんなの高体連」をスローガンに、校内体育行事奨励のための副賞として各学校の希望するメダル・カップ・トロフィーを学校規模に応じて配布することになった。

昭和 52 年度 53 年 1 月 21 日に創立 30 周年記念式典を挙行（於県立静岡高校体育館・同窓会館）

昭和 53 年度 創立 30 周年記念第 10 回スポーツテスト大会を行い、昭和 54 年 3 月「スポーツテスト 10 年のまとめ」を発行した。

昭和 55 年度 58 総体（主催地は愛知県）の本県開催種目（庭球、弓道、男子バレー）が決定する。空手道部が新設され計 30 専門部となる。

昭和 58 年度 全国高校総体の庭球（草薙庭球場）・弓道（静岡市民体育館弓道場）・男子バレーボール（草薙体育館、静岡市商高体育館、静岡農高体育館）競技を開催する。スポーツテスト大会は第 15 回目を迎え、参加校 166 校（参加率 98.2%）、1 ～ 3 級合格者は全日制男子 70%、女子 60%で、それぞれ全国平均男子 50.7%、女子 51.5%を大きく上回った。59 年 3 月には「スポーツテスト 15 年のまとめ」を発行した。

◎昭和 60 年代

昭和 60 年度 8 月に県高体連として 66 全国高校総体誘致を表明。9 月県議会において県知事が 66 全国高校総体（66 総体のち平 3 総体）の静岡県誘致を表明した。

昭和 61 年度 62 年 3 月 25 日に昭和 66 年全国高等学校総合体育大会静岡県開催申請書を全国高体連に提出した。

昭和 62 年度 5 月 28 日の全国高体連理事会にて 66 全国高校総体の静岡県開催が正式に決定した。63 年 1 月 23 日に創立 40 周年記念式典を挙行（たちばな会館）。

2　10年の歩み

昭和63年度

4月に教育委員会体育保健課内に全国高校総体準備室を設置し、全国総体開催に向けて本格的な作業に入る。スローガン、シンボルマークの募集、審査会を開始する。

第20回スポーツテスト大会を実施し、「スポーツテスト大会20年のまとめ」を発行する。

高体連機関誌「高校の体育」第38号（40周年記念号）を発行し、元会長など関係者による「四十周年を迎えて」と題する座談会を特集した。

平成元年度

5月に全国総体高校推進委員会設立総会を開催する。7月、総合ポスター・大会賛歌（詞）の募集、審査会を開催する。競技開催地となる各市町の準備委員会設立総会が開催され、また総合開会式の式典部会も着々と準備を進める。

平成2年度

4月、体育保健課内の全国高校総体準備室を全国高校総体推進室（単独室）として設置する。

この年の県高体連加盟校生徒数は、全日制で16万4千人、定時制6千5百人となり史上最多となる。そして、この年を境に以後年々減少傾向が続くことになる。

5月21日、全国総体の県実行委員会設立総会を開催する。また、競技開催地各市町の実行委員会の設立総会も開催され、1年後の大会開催に向けて順調に準備が進められる。さらに、各地区の高校推進委員会も活発な活動を展開する。

ファンファーレ曲、参加章・入賞メダルの図案募集並びに審査が行われる。また、総合開会式の公開演技（ダンス・体操・人間絵画・マーチングドリル）の合同練習会が開始される。

平成3年度

6年の歳月を費やして準備してきた「平3総体」が“感動はいっしょうけんめいの熱い風”のスローガンのもと、8月1日の総合開会式（山岳競技は7月31日開会式）で幕を開けた。当日は午前9時で既に30度を超える酷暑となったが、計画どおりに式典が挙行され、さらに全国から参加した選手たちが、史上最多といわれる9千人の静岡県内の高校生が繰り広げる公開演技を見学した。これは後に「静岡方式」と呼ばれ、以後の開催県の取り入れるところとなった。8月2日から陸上競技を始めとする各競技の熱戦が続き、8月20日の水泳競技閉会式をもって全国総体夏季大会を終了した。

競技成績を振り返ってみると、サッカーの県勢同士の決勝、水泳のメダルラッシュなど金22、銀16、銅26、ベスト8進出者129人と目標を大きく上回る結果となった。

「平3総体」総合ポスター

一方、「一人ひと役運動」の合言葉のもと「我々高校生の大会を我々の手で成功させよう」と高校推進委員会の活動が高校生延べ28万人によって展開された。

この年、全国総体開催に向け各専門部の活動をより充実したものにすることを目的に「顧問校長」制度を設けた。

平成4年度

前年度に分担金の値上げを実施し、全日制生徒1人350円、定通制生徒1人250円となり、この年度の総予算は1億円を超した。

元本連盟会長の故伊村才次郎先生のご遺族からの寄付を基金として「伊村賞」を制定し、男女それぞれの優秀校を表彰することにした。

平成5年度

4年度より継続して進められた「高校生の部活動に関する意識調査」がまとまり、報告書を発行した。スポーツテスト大会は25回目を迎え、「スポーツテスト25年間のまとめ」を発行した。

平成6年度

なぎなた部が新設され合計31専門部となった。

平成7年度

専門部規定を改訂し「顧問校長」を「専門部長」、「部長」を「委員長」に名称を変更した。

「21世紀へむけての高校スポーツの在り方」

をテーマに第30回全国高体連研究大会（於静岡市民文化会館）を8年1月25、26日の2日間にわたって開催した。参加者は全国から400名、県内から250名であった。

平成8年度

山梨県で開催された全国高校総体では、7種目の優勝はあったものの8位までの入賞は58にとどまった。

平成9年度

昭和23年に創立された県高体連がこの年50周年を迎えた。記念式典及び祝賀会は、来賓並びに関係者400名の出席を得て10年2月6日（金）に挙行された（於ホテルアソシア静岡ターミナル）。

県高体連創立50周年記念式典

また、「高体連創立50周年記念誌」を発刊した。「平3総体の思い出」と題して行われた座談会や全日制31、定通制11の「専門部のあゆみ」、加盟152校の「加盟校のあゆみ」を中心に事務局関係の「資料」も加えてB5版400頁となった。

3　将来に向けて

先に記した「創立50周年記念誌」の巻頭で県高体連の安達会長は部活動の意義について述べている。「今、心の教育の大切さが強調され、個性が尊ばれているが、部活動こそ、心身のバランスのとれた高校生を育成するうえで有効な教育活動ではないかと思う」。

学校や青少年を取り巻く環境は大きく変化しており、今後、学校週5日制への対応や、家庭・地域社会との連携等も含めた21世紀に向けての長期的展望が求められている。

創立50周年の節目にあたり、『スポーツ王国静岡』を支えてさらなる飛躍を期するとともに『みんなの高体連』として充実、発展を目指すものである。

挑　戦

岩　崎　恭　子

昭和53年7月21日生
日大三島高校卒・現日大
バルセロナオリンピック
200M平泳ぎ金メダル

私は、日大三島高校に進学して本当に良かったと思っています。中学時代は、全国大会に出場しても、いつも一人でした。その頃の私は、いつもチームメイトと一緒だった高校生の姉をうらやましく思っていました。それは、練習や試合の時に、自分の周りに友人がいるということでした。高校に入学してからは、お互いに励まし合い応援し合う仲間ができました。中学時代に無かったことなので、とても心強く思いました。

高校三年生の時にアトランタ・オリンピックがありました。その前年に、パンパシフィックという国際試合がありました。会場はオリンピックと同じアトランタでした。どうしても次の年に開催されるオリンピックのことを考えてしまう試合でもありました。その時、同じ試合に出場していた友人たちに、今私はとても感謝しています。それは、私に「もう一度やってみよう」と気付かせてくれたことです。友人たちは「オリンピックに出場したい」という気持ちを、私よりもはるかに大きく持っていたからです。その時私は、こんないい加減な気持ちではとてもオリンピックには出場できないと気付きました。

それからの私は、それまでにない練習をし、目標に向かって一直線でした。そして、念願のオリンピックに出場することができました。本番のアトランタでは良い結果は残せなく、悔しい思いもしました。しかし、今までの自分の力をすべて出し切れたし、泳ぎ終わった後は満足感でいっぱいでした。

私がこのようにとてもすばらしい環境で水泳ができたのも、家族や友人、そして多くの方と巡り逢い、みんなに応援していただいたお陰です。これからも私を支えてくれる人たちに感謝の気持ちを忘れず、挑戦していきたいと思います。

愛　知　県

《事務局》
〒460-0007 愛知県名古屋市中区新栄一丁目49番10号
県教育会館内
TEL 052（251）8115
FAX 052（251）8169

創立年月日：昭和23年

加盟校数		282校
専門部数		37専門部
加盟部数		4,981部
部員数	男子	58,636名
	女子	38,420名
	合計	97,056名

年度	会長	理事長	記事
23	堀　勝治郎		第1回全国高校陸上競
	秋山　善次		技対抗選手権大会開催
24	小川　卓爾	高橋正五郎	
25	芝村　義邦	〃	第5回国民体育大会開催
26	〃	〃	全国高校卓球選手権大会開催
27	〃	梅村　清明	
28	〃	〃	
29	〃	〃	第1回東海高校総合体
			育大会開催
30	〃	〃	
31	〃	〃	
32	〃	〃	
33	〃	戸田甚兵衛	
34	〃	〃	
35	藤野　源次	〃	
36	〃	〃	体力テスト顕彰制度開始
37	〃	〃	
38	〃	〃	
39	〃	河堅太喜造	全国高校体育大会総合
			開会式、バレーボール、
			ホッケー、フェンシン
			グ、庭球の4競技開催
40	〃	〃	
41	〃	〃	
42	〃	〃	
43	〃	〃	
44	〃	〃	
45	〃	〃	全国高校総体卓球、バドミ
			ントン、ヨットの3競技開催
46	河堅太喜造	谷口　鈴正	
47	谷口　鈴正	伊藤　政一	

年度	会長	理事長	記事
48	伊藤　政一	上島　三夫	全国高校総体軟式庭球
			フェンシングの2競技開催
49	〃	〃	
50	上島　三夫	竹内　實	
51	〃	鶴見　浅次	全国高校総体ヨット競
			技開催
52	〃	〃	
53	鶴見　浅次	蛭川　博	
54	〃	〃	
55	〃	〃	
56	蛭川　博	山本　八郎	
57	生沼　好之	〃	運動部会長制開始
58	〃	〃	全国高校総体開催19競技
59	竹内　實	豊田　昌弘	定通制運動部設置11種目
60	〃	〃	
61	杉田　荘治	木下　匡弘	第21回全国高体連研究
			大会開催
62	佐藤　敬治	〃	研究部設置
63	高井　龍三	浦野　誠	
元	〃	〃	
2	白井　正巳	飯田　幸彦	事務局長制開始
3	〃	〃	
4	〃	舘　肇	高体連ニュース創刊
			（年2回）
5	吉田　武	〃	
6	〃	〃	
7	織田　晃	〃	
8	〃	浅井　溢夫	
9	小野田章二	〃	県高体連創立50周年記
			念事業
10	〃	都築　義之	

1 沿 革

昭和23年 愛知県高等学校体育連盟は、新学校制度の発足に対応して愛知県高等学校体育連盟と愛知県中小学校体育連盟とに分離、組織がえして新発足した愛知県高等学校体育連盟は、事務局を愛知県教育委員会体育課内に置き、県下高等学校体育の振興を図るとともに、種々の体育的諸活動を開始した。とくに昭和25年に本県で開催の第5回国民体育大会に向け、選手強化策をすすめるとともに、秩父宮賜杯第1回全国高校陸上競技対校選手権大会を名古屋市の瑞穂運動場で開催した。

昭和24年 愛知県スポーツ会館の竣工を機に、県体育協会、県中小学校体育連盟等とともに事務局を当会館に移転した。

昭和25年 本県で第5回国民体育大会が開催され、県高体連の組織を挙げて応援し、これを契機として、各高校における運動部の活動が盛んになり、本県高校生が全国において活躍する基盤を確立することができた。

昭和26年 全国高等学校卓球選手権大会を本県で開催した。

昭和30年 待望の愛知県スポーツ会館が竣工し、本連盟も事務局を移転して活動に入った。

昭和39年 全国各地で開催されていた高等学校選手権大会を一同にまとめ総合体育大会とする機運がたかまり、その初の全国高校総合体育大会が中地区で開催されることになり、本県では、総合開会式、バレーボール、ホッケー、フェンシング、庭球の4競技を担当し、今日の全国高等学校総合体育大会（インターハイ）の礎を築いた。

昭和45年 全国高校総体が和歌山県を中心に近畿地区で開催され、当年開催されていた万国博覧会の影響を受けて、卓球、バドミントン、ヨットの3競技を本県で開催した。

昭和47年 高体連活動を活発にするため、大幅な自己資金の増額計画を実施し、高体連主催の年間3回の大会（県高校総体、新人大会、その他の大会）の参加料を徴収することになった。またこの年、新愛知県スポーツ会館が完成したので事務局を移転した。更に、この年から事務局幹事制を導入し、事務の円滑を図った。

昭和48年 全国高等学校総合体育大会が三重県を中心に東海地区で開催され、本県では軟式庭球、フェンシングの2競技を担当した。

昭和51年 全国高校総体が長野県を中心に北信越地区で開催されたが、石川県の都合でヨット競技を急遽本県で開催した。

昭和53年 57全国高校総体を本県で開催する輪番になっていたが、鹿児島県からの依頼により本県は58年に開催することになった。

昭和54年 県高体連は臨時評議員会を開催し、58全国高校総体の本県誘致を決議するとともに、東海4県連絡調整委員会を設置した。

昭和55年 県教育委員会保健体育課内に58全国高校総体準備委員会が設置された。

昭和56年 58全国高校総体の選手強化策のため、新たに1年生体育大会を開催した。

昭和57年 58全国高校総体を成功させるため、高体連組織を一部強化のため運動部会長制度を発足させた。58全国高校総体準備委員会は実行委員会に発展改組された。選手強化策のため、1・2年生体育大会を開催した。また全国高校総体の認識を高めるため、選手以外の一般生徒を、56、57年の全国高校総体総合開会式を中心に視察員として神奈川県と鹿児島県に派遣した。

愛知県　選手団入場

昭和58年 「走れ跳べ競え東海の空」のスローガンのもと昭和58年度全国高等学校総合体育大会を開催し、総合開会式を始め19競技を本県で担当、東海の他の3県で7競技を実施し、十分な成果を収めて終了することができた。58全国高校総体終了後、本連盟は、規約等の改正作業に着手、定・通制課程部を独立。11競技をもって定・通制運動部を設置した。

昭和59年 58全国高校総体の成果を基に第49回愛知国体の開催誘致が決定し、事実上内定を見ることになった。

昭和61年 第21回全国高校体育連盟研究大会を本県で開催し、成功のうちに終了した。全国総体への一般生徒視察員の派遣を復活させた。

昭和62年 前年の全国高校体育連盟研究大

会の成果を基に研究部を発足させた。この年、愛知県教育会館が竣工し、県体協、県中小体連とともに事務局を移転した。

本県高体連ではこの10年間、インターハイ等での競技力向上という結果だけでなく、県下高校生全体を対象とした活動を継続させている。その一つに全国高校総体視察員派遣がある。この事業は、本県を中心に開催された58総体のためにその2年前から始められたもので、58総体後昭和61年度より再開され現在に至っている。総合開会式を始め、各競技の応援など3泊4日の視察期間を通して、選手たちが勝利を目指し必死に競技する姿をみたり、地元高校生の心温まる対応に触れたりすることで、日頃とは違った見識を広めている。毎年30名の視察員を各支部より募集し、視察後の感想文の中からもこの事業の成果をうかがい知ることができる。

○派遣生徒視察員の感想文より（一部抜粋）

自分のプレーで人を感動させることは容易ではない。技術が高ければ感動させられるというものではない。僕は目の前で勝負にかける不屈の闘志を見せられた。最後まで勝利を信じて戦う姿やベンチの応援。どれをとっても素晴らしいものでした。（平成7年度）

また、このインターハイでの活躍の様子を県下の高校全教室に掲示するという意味合いで、平成4年度より年2回、高体連NEWSを発刊している。このNEWSは活字を中心としたものではなく、カラー写真を中心に見て伝えるを配慮して編集にあたっており、部活動への興味関心を高める目的を担っている。インターハイ等での活躍の様子だけでなく、各校の部活動を紹介するコーナーもあり、高校生の間ではいつ自分の部活動がとりあげてもらえるのか話題になっているのが現状である。

ラグビー西陵商　悲願の日本一
平成8年度　高体連NEWS 11号より

2　10年のあゆみ（S63～H9）

本県の10年の歩みは、平成6年度に開催された「わかしゃち国体」がその中核となっている。選手強化7か年計画を基にし、昭和63年度より少年の部の競技力の向上を図ってきた。その結果、それまでの国体史上最高の高得点で天皇杯・皇后杯を獲得し、ほとんどの少年の種別で8位以内の入賞を果たすことができた。国体開催を契機に本県高校生の競技力が益々安定し、現在に至っており、飛躍的発展の礎となった。

インターハイ　優勝者一覧（S63～H9）

S63 (兵庫)	男子4×400mR[中京大中京]、男子ハンマー投・保谷志郎[名古屋学院]、女子走幅跳・遠井知佐[市邨学園]、レスリング67kg級・川島健二[星城]、卓球男子ダブルス・高田，上月[桜丘]
H1 (高知)	女子バスケット[名短大付]、女子ハンド[名短大付]、女子3000m・大　由美[愛知淑徳]、女子200m平泳・平田恵美香[蟹江]
H2 (宮城)	女子バスケット[名短大付]、女子円盤投・桑原鈴代[中京大附]、男子卓球シングル・今枝一郎[愛工大名電]、競泳女子400mR[愛知淑徳]、
H3 (静岡)	男子三段跳・都築晃[名古屋学院]、女子100・200m自由形・今枝慶子[愛知淑徳]、競泳女子400mR・400mRメドレーR[愛知淑徳]男子卓球シングル・今枝一郎[愛工大名電]
H4 (宮崎)	女子バスケット[名短大付]、女子ハンド[名短大付]、男子卓球シングル・岡本倫之[桜丘]、男子ヨットFJ級・S級[碧南工]、女子ヨットS級[碧南]
H5 (栃木)	女子ハンド[名短大付]、男子弓道団体[御津]、男子卓球シングル・周晅[桜丘]・女子走高跳・今井美希[瑞陵]、女子走幅跳・安田紀子[市邨学園]、女子100mバタフライ・塚嶋洋子[愛知淑徳]
H6 (富山)	女子バスケット[名短大付]、女子弓道・　村章子[御津]、女子ヨットFJ級ソロ[蒲郡東]
H7 (鳥取)	女子バスケット[名短大付]、男子フェンシング団体[愛工大名電]、男子卓球団体[愛工大名電]、男子4×400mR[中京大中京]、女子4×100mR[市邨学園]、男子走高跳・佐野功幸[愛工大名電]男子400m伊藤拓馬[中京大中京]、女子100m島崎亜弓[市邨学園]女子200m・鈴木智実[市邨学園]、女子走高跳・岩切麻衣湖[中京女子大附]、男子ウェイトリフティング59kg級・上野修[愛工大名電]
H8 (山梨)	女子バスケット[名短大付]、男子アーチェリー団体[愛産大三河]、女子4×100mR[市邨学園]、男子1500m鈴木健太郎[豊川工]、女子100mH加藤友里[安城東]、卓球男子ダブルス・真田，金氏[愛工大名電]、ラグビー[西陵商]
H9 (京都)	女子ハンドボール[名短大付]、男子弓道・植田宏和[御津]、女子100，200m・鈴木智実[市邨学園]、男子3000mSC岩水嘉孝[豊川]、女子体操床，跳馬・得能香織[椙山女学園]、男子カヌー200mカヤックシングル・田島弘之[三好]、200mカヤックペア・田島弘之，江口貴彦[三好]、500mカヤックシングル・鈴木一生[東郷]、500mカヤックペア・鈴木一生，大城良介[東郷]

全国定通制体育大会においても本県陸上競技は圧倒的な実力を誇示し、この10年連続で

名古屋短期大学付属高校バスケット
3年連続8度目の優勝

男女総合優勝の快挙を為し遂げている。

この他にも女子バレーボール誠和高校、女子ソフトテニス誠信高校などが連続優勝を達成している。このように本県高校生のこの10年の活躍には目を見張るものがあり、各学校の指導者の方々の情熱と努力には心から感謝をしている。

本県高体連では、昭和62年に本県で開催された全国高体連研究大会以降研究部組織を発足し、毎年県大会を開催するようになった。昨年度で10回目の大会となり、10年のあゆみとともに盛況のうちに活動を続けている。全国大会同様、3つのテーマの分科会が開かれ、どの分科会も研究熱心な先生方の発表が行われており、この研究部の活動は、東海ブロックにおいてはリーダー的な存在となって今日に至っている。

このように本県高体連この10年のあゆみは、主役となる生徒のみならず、指導にあたっている先生方においても実りある10年であったように思われる。

3　将来に向けて

本県高体連の発足した昭和23年から半世紀が経過した今日、社会は当時と比べ大きく変化し、高校生の運動部活動を取り巻く状況もまた大きく変わっている。たとえば、部員数や教員数の減少、教員の高齢化や勝利至上主義的な一部の行き過ぎた活動や指導など問題は一層深刻である。また、その反面で国際競技力の向上を期待されていることもあり高体連のおかれている立場もより複雑になっていることは事実である。こうしたことからも本県としての運動部活動の在り方についてもう一度原点に帰って考えていく必要がある。更なる飛躍のために生徒、教師、保護者をはじめ関係者の一層の力添えが必要であり、本県高体連も柔軟な考え方で対応し、主役である高校生が生き生きとした活動が今後もできるよう諸条件の整備にあたっていかなければならない。

獲った“優勝”

今井美希

プロフィール
愛知県立瑞陵高校陸上部
種目　走高跳
静岡インターハイ　2位
宮崎インターハイ　2位
栃木インターハイ　優勝
平成10年3月　中京女子大学卒業

高校3年、夏、8月3日、宇都宮陸上競技場、その日は台風の影響で、朝から雨だった。私の出場する走高跳の競技は午前から始まり、全国から集まった66名の選手達が参加していた。競技が始まって、今までにあった辛いこと、それでも人に励まされて頑張ってきたことが頭に浮かんだ。

全日中で、周りから絶対優勝と言われながら2位に終わり、悔しい思いを残して高校へ進学した。インターハイでは必ず優勝してみせると、走高跳の練習にいっそう真剣に打ち込んだ。しかし、静岡インターハイ・宮崎インターハイの両方とも2位で終わってしまった。それからの私には「万年2位」というレッテルが貼られるようになってしまった。悔しい思いより自分の力を疑ったりし、自信をなくしかけていた。

自分に嫌気がさしていた2年の冬、肺炎で入院、さらに足首捻挫のため2週間のギブス生活を体験した。これで私の頭からインターハイ優勝という文字は完全に消された。が、太田先生や友達に励まされ、ここまで来ることができた。

いっそう強くなった雨の中で決勝は始まった。1m68cmから跳び始め、1m71cmは2回バーを落としてしまった。3回目も落とすと、「本当の万年2位」、跳べば念願の優勝という状況だった。私は頭の中を無にし、3回目にいどんだ。気がついた時にはすごい歓声の渦の中で私は初めての優勝を獲得していた。その2文字は、私に自信と勇気を与えてくれたのである。

今は自分の力を信じ、シドニーオリンピックに向け日々練習に打ち込み、自分の夢を叶えるために努力をしている。

三　　重　　県

《事務局》
〒510-8562 三重県四日市市日永字岡山4917
県立四日市南高校内
TEL 0593（46）2718
FAX 0593（46）2718

創立年月日：昭和23年

加盟校数		83校
専門部数		33専門部
加盟部数		1,440部
部員数	男子	14,633名
	女子	7,232名
	合計	21,865名

年度	会長	理事長	記事
25	佐々木仁三郎	高根沢武男	事務局四日市商業高校
26	〃	〃	軟式野球、バドミントン加盟第1回県高校総体を15種目で開催
27	一見　義隆	〃	柔道加盟
28	〃	〃	
29	伊藤　義教	〃	剣道加盟
30	〃	〃	
31	一見　義隆	〃	
32	一見　義隆	〃	第4回東海高校総体を本県で開催
33	〃	〃	弓道加盟
34	〃	〃	
35	〃	〃	
36	〃	〃	
37	乾　　正治	〃	
38	〃	〃	
39	〃	〃	硬式庭球加盟
40	〃	〃	
41	中村新十郎	池田　　稔	高根沢理事長死去
42	〃	直田　直人	
43	〃	〃	
44	〃	〃	
45	小竹　　惟	〃	事務局津高校に移転、自転車、ウエイトリフティング加盟
46	飯田　勝之	〃	事務局白子高校に移転 ホッケー、漕艇、フェンシング、ヨット加盟
47	山鹿　静夫	〃	事務局四日市高校に移転
48	〃	〃	ボクシング加盟　全国高校総体を伊勢市中心20種目開催
49	近藤　　寿	西川　　郁	事務局宇治山田商業高校に移転
50	宮村　栄郎	西川　　郁	第30回国民体育大会を伊勢市中心30種目開催
51	〃	〃	
52	〃	〃	
53	〃	〃	
54	〃	〃	
55	前島　俊皐	〃	
56	〃	〃	
57	〃	工門　智生	
58	小野十美生	〃	
59	〃	〃	
60	〃	〃	学校スポーツ充実事業開始
61	〃	〃	
62	〃	〃	
63	古山　博典	笠井　裕教	事務局四日市南高校に移転
元	〃	〃	空手道加盟
2	岩下紀久雄	〃	学校スポーツ特色作り事業開始全国・ブロック大会の派遣費補助事業開始
3	〃	〃	
4	橋本　　久	〃	分担金・入会金値上げ
5	〃	〃	
6	城　　秀一	溝口　宏憲	
7	〃	〃	なぎなた加盟スキー、アーチェリー、カヌー準加盟一条校以外の生徒の大会参加承認 学校スポーツ躍進事業開始
8	近藤　和也	〃	
9	〃	〃	分担金・入会金値上げ三重県高体連創立50周年記念式典挙行
10	畦地　耕司	〃	ボウリング準加盟

1　沿　革

三重県高等学校体育連盟は、全国高体連と同年の昭和23年に発足したものの、組織等検討するなかで、昭和25年初代会長に佐々木仁三郎校長、理事長に高根沢武男教諭が就任される。事務局を県立四日市商業高校に置き、14種目の専門部のもとスタートした。創設初期は戦後の混乱期であり、食糧難・物質不足等や大会運営には施設確保・用具調達等で大変な苦労があったなか、昭和26年に三重県高等学校総合体育大会を津市において15種目により開催した。また、昭和29年に東海高等学校総合体育大会が名古屋市において開催され以後各県持回りとなる。

そして、これまで種目別大会であった全国高等学校選手権大会が、昭和38年に全国高等学校総合体育大会として新潟県を中心に開催され、以後各県持回りとなる。本県においても昭和38年に軟式庭球、昭和39年に卓球と柔道、昭和45年に軟式庭球と自転車、昭和58年に軟式庭球と相撲をそして、昭和48年の三重インターハイを開催することができた。

当時は、学生生活の中にスポーツを実践することで、スポーツを通じて健康な身体、強靭な精神を養い、互いの連帯感を深めあって、生きがいのある生活づくりに役立てようという気運のなかで県教育委員会、各競技団体のご理解、ご協力があって、全国高校総体を誘致する運動が盛り上がり、時同じくして国民体育大会の誘致活動にも力を注ぎ、高校総体と国体の一本化路線が打ち出された。更に、昭和44年全国高体連理事会において、昭和48年全国高校総体の本県での開催が決定される。昭和45年高校総体実行委員会の結成準備と併せて、県教育委員会に「国体等準備室」を新設し事務局としての第一歩を踏み出した。式典・宿泊輸送・競技施設等の担当の専従化により準備が進められたのである。昭和46年に日体協全国会議において昭和50年第30回国民体育大会の本県での開催が決定された。また、この年に「選手強化対策本部」が設置され、その強化基本方針として、①指導者の養成。②選手の発掘と養成。③練習会場の設置。④強化費の財源確保。⑤指導者の環境整備が打出された。なかでも当時本連盟に未加盟及び活動があまりされていなかったヨット、ホッケー、漕艇、フェンシング、ボクシング等の組織の育成強化が急務であった。

そして、開催にあたり県教育委員会、市町村教育委員会、競技団体、中体連等関係団体のご理解、ご協力を得て、昭和48年度全国高等学校総合体育大会を「燃えよ若人」の大会スローガンのもと伊勢市を中心に県下各地で20種目を盛大に開催できることとなった。成績についても団体2種目、個人10種目の優勝を獲得することができた。

さらに、昭和50年第30回国民体育大会が伊勢市を中心に20市町村で30競技（夏季3競技、秋季27競技）を開催することができ、また、高校生の活躍もあり天皇・皇后両杯を獲得する最高の結果を納めることができた。

しかし、三重国体以降の本県のスポーツの動向は、スポーツ人口の増大は進められてきたが競技力の面では低迷傾向がみられた。

そこで、この状況に対応するために、県教育委員会のご努力とご理解のもと、健康で活力あふれる県土を構築するために次代をになう児童生徒にスポーツ活動を通じてたくましい身体と強靭な意志を培うことが肝要であり、昭和60年に学校スポーツ充実事業（三重の若人・パワーアップ作戦）が魅力ある学校づくりの一環として、学校スポーツを活性化し地域に根ざしたスポーツを振興し、運動部活動を中心として力強い競技力の育成や小中高一貫した指導力の養成等を行い、青少年の個性を伸長するために学校スポーツの充実を図る趣旨のもと5年計画で発足した。

事業内容は、①強化推進事業（実績のある運動部を対象に部活動強化と選手強化を実施し、より一層の競技力向上を図る）②育成推進事業（運動部において、未成熟かつ育成の効果が期待される部を指定し、強化・育成を図る）③特別強化対策事業（全国大会等で、上位入賞が期待できる運動部の特別強化を図る）④指導力強化対策事業（運動部活動における競技力の向上や底辺の拡大を図るため指導力の強化、充実を図る）⑤全国・ブロック大会出場者激励事業（派遣費の一部を補助するとともに全国大会出場者を激励する）の5本の柱からなり、県教育委員会より県高体連が委託（一部除く）を受けて実施する。この事業により、運動部の位置づけが明確となり、運動部活動が益々、活発となっていった。

2　10年の歩み

昭和63年に小野十美生会長、工門智生理事長が御勇退され、新しく古山博典会長（四日市南）、笠井裕教理事長（四日市南）が就任されて事務局を県立宇治山田商業高校から県立四日市南高校へ移転する。

そして、5年計画で発足した、学校スポーツ充実事業（三重の若人・パワーアップ作戦）が平成元年度で終了し、新しく平成2年度より学校スポーツ特色づくり事業（三重のスポーツグレードアップ作戦）（5年計画）、平成7年度より学校スポーツ躍進事業（三重のユースアドバンス作戦）（6年計画）と名称を変えて、継続している。

事業内容は、①指導者、生徒育成事業（地域指導力育成事業）②運動部振興事業（運動部活動振興事業・運動部活動指導者派遣事業）③組織強化・備品充実事業（スポーツ推進委員会、中高連絡協議会を設置し、スポーツの振興充実を図る。備品、器具購入に係る援助）④派遣・顕彰・激励事業（全国、ブロック大会派遣費補助事業・優秀選手顕彰事業・全国大会激励事業）の4本の柱によって実施している。なかでも全国大会（全額）、ブロック大会（半額）の補助を行う派遣費補助事業は、他県に例をみない特出した事業である。

近年、本県の生徒数は平成3年度に75,160名を最高に平成4年度より急激な生徒数の減少がみられ、それに伴い本連盟の運営等にも支障を来すことから、分担金・入会金の値上げについて申請を行い、県教育委員会、校長会、事務長会、高P連、組合等関係機関のご理解、ご協力を得て、平成4年度より生徒1人につき全日制分担金200円増の400円、入会金100円増の200円とし、また、定通制はそれぞれの半額にして5年間据え置くことで値上げを実施した。

また、同年に高体連出張手当を学校出張手当と同額にして、高体連の処遇改善をはかった。

しかしながら、生徒減に拍車が進み、再び平成9年度に前回同様、関係各機関のご理解を得て、全日制分担金500円、入会金250円、定通制分担金250円、入会金150円となり5年間は据え置くことで値上げを実施した。

平成5年度全国高体連理事会において、学校教育法第1条校以外（高等専門学校、朝鮮高級学校、各種専門学校等）の高校生と同じ年代の生徒の全国高校総体への参加が、平成6年度より認められたが、本県においては、高等専門学校が該当するが、この学校は高体連に加盟できる学校との判断により、見解の相違から平成6年10月に全国高体連の指導を仰ぎ、臨時評議員会を該当校の参加を得て開催した。

そこで、大会参加については負担金（加盟校生徒の入会金・分担金をたした額）を徴収し、役員については専門部より要請はしないことを条件に大会への参加を承認した。なお、同会議において平成7年度より、「なぎなた競技」の加盟、「カヌー競技」、「アーチェリー競技」、「スキー競技」の準加盟を承認される。

また、施設等についても平成6年に伊勢市で開催された世界まつり博覧会のメイン会場を、平成7年度より県営サンアリーナとしてオープンし、メインアリーナ（バレーボール4面）、サブアリーナ（バレーボール2面）と全国大会にも対応できる施設ができ、室内競技のメッカとなるよう利用についても県教育委員会のご支援を賜り、平成8年度よりユース・スポーツ・フランチャイズ事業と名付け施設利用促進にご努力をいただいている。

そして、平成9年7月には県営鈴鹿スポーツガーデンに室内プール（メインプール、サブプール、飛込みプール）と、テニスコート21面（センターコート1面、シェルターコート4面、屋外コート16面）が完成し、どちらも国際試合にも対応できる本格的な施設である。これらのように本県のスポーツ施設はこの10年間で充実してきたが、この施設を幅広く有効活用することで、より一層の競技力向上を期待するところである。

平成9年度は東海高等学校各大会を本県で開催したが、特に東海高校総体第1日目の6月20日は、この時期には珍しく台風が直撃したため陸上競技が順延となり、宿舎や競技役員の確保等奔走し、6月23日の運営に目処がたち安堵したが、残念ながら漕艇競技については、会場となる宮川ダム湖が台風による増水、放水と流木の流入により、コースロープが流出し競技不可能となり、已むなく中止となった。なお、陸上競技が中止となったのは、東海高校総体始まって以来のことであった。

三重県高体連は、昭和23年度に発足し、平

成9年度で創立50周年を迎えることができたが、これまで周年行事を開催されずにきたが、平成10年2月10日に県女性センターにおいて三重県高等学校体育連盟創立50周年記念行事を開催することができ、記念式典には田川敏夫県教育長を始め、県市町村教育委員会、県体育協会、中体連等から来賓28名、学校代表者、専門部代表者、各競技団体、高体連ＯＢの方々等、総勢286名の参加を得て、盛大に開催することができた。表彰式においては、歴代の役員（会長、副会長、理事長、副理事長、専門部委員長、事務局員等）162名に表彰状を、専門部に功績のあった個人28名と団体30競技の部活に功労賞を、高体連に対しご協力を頂いた協賛企業8社に感謝状の授与をそれぞれに行った。記念講演は、県総合文化センター総長の田畑彦右衛門氏（県立上野高校出身）に「新しい時代の体育」と題して講演をいただいた。また、会費制による記念祝賀会を開催したところ昭和48年本県開催の全国総体、昭和50年の三重国体において、中心となってご活躍された大先輩、懐かしい諸先輩の方々を含めて164名の参加を頂き、昔話しに花を咲かせ和気靄々としたなか盛会に終了することができた。

なお、記念誌の発刊についても、平成10年末を予定している。

3　将来にむけて

今後の課題として、生徒の減少や指導者不足により、学校の部活動種目が限定されたり、単一校での部活動の成立が難しくなると予想されるなかで、学校週5日制の導入や、生涯スポーツの素地づくり等、21世紀を目前に幾多の課題が山積しており、高体連の活動も多様化が必要となってきている。

50周年という節目の年を迎え、本連盟は高等学校体育・スポーツの向上発展、高校生の健全な育成を目指し、学校間の連携をより密接にして、生徒の多様なニーズに対応しながら、人間形成に寄与できるスポーツ振興に一層の前進を期して行く所存である。

陸上競技と私

竹　内　智　子
三重県立宇治山田商業高等学校
出身
平成2年度全国高等学校総合体育大会陸上競技女子砲丸投優勝
三重県立四日市工業高等学校教諭

砲丸投という競技に取り組んで、今年で11年目になる。4kgの鉄の塊を踊ったり、パスしたりするわけでもなくひたすら1cmでも遠くへ投げようとし続けてである。自分のことながら本当に驚いてしまう。恩師の「3年間で日本一になれる」という言葉にひかれながらも、ぐずぐずと宇治山田商業高校の門をくぐったあの頃には考えられないことである。

高校時代の思い出は、勝ったことでも負けたことでもなく、やっぱり友達のことである。今思うと毎日よく笑っていたと思う。暑い夏の日の練習中、水をホースでかけあったこととか、バツゲームでこわい顧問の先生のところへ「あいさつ」をしにいったことなど、日常の小さなことである。不思議なくらい試合の思い出というのは少ない。唯一はっきり思い出せるのは、高校3年生の夏に行われた宮城インターハイのファイナルゲームだ。あのゲームで感じた「勝つのを知っている」という強い気持ちは、今でも覚えている。暮れかけた灰色の空に翻る母校の部旗。私が高校3年間で目標をひとつ達成した瞬間だった。

高校時代の部活の先生は、本当に忘れ難い。これは卒業後に気付いたことだが、あれから何年も経つのに私は時々スタンド席を確かめる。高校生の時、先生をこっそりさがしていた癖だこんな何気ないことからも、私は陸上競技からたくさんのものを得たのだなぁと感じる。

たくさんの人の力をかりて、この競技を続けているそんな自分を幸せに思いながら、まだもう少し4kgの鉄の塊を1cmでも遠くへ投げようとし続けてみたいと思う。

滋　賀　県

《事務局》
〒520-8577 滋賀県大津市京町四丁目1番1号
県教育委員会事務局保健体育課内
TEL 077（528）4614
FAX 077（528）4955

創立年月日：昭和24年4月1日

加盟校数		66校
専門部数		35専門部
加盟部数		1,173部
部員数	男子	13,053名
	女子	7,608名
	合計	20,661名

年度	会長	理事長	記事
23			県高体連設立準備委員会設置
24	林　浩	浜田　宗男	滋賀県高等学校体育連盟発足
25	〃	〃	第1回大津・彦根間高校駅伝大会開催
26	〃	〃	全日本高校選手権大会(自転車)開催
27	〃	前川　勲	
28	〃	〃	第1回全日本高校選手権大会(漕艇)開催
29	〃	〃	全日本高校選手権大会(漕艇)開催
30	〃	〃	
31	〃	〃	全日本高校選手権大会(漕艇)開催
32	〃	〃	
33	〃	〃	第1回春・秋季県高校総合体育大会開催
34	〃	〃	
35	〃	〃	専門部長を置く
36	〃	〃	滋賀県高体連15周年記念誌発刊
37	〃	〃	全日本高校選手権大会(漕艇・自転車)開催
38	橋本　順治	谷口　秀雄	県高体連誌第2号発刊
39	〃	〃	
40	〃	〃	定通専門部を設立
41	〃	〃	
42	中川　哲夫	文室　常男	全国高校総体(ヨット)開催
43	林　正弐	〃	
44	山田　清一	岩井　克美	
45	〃	〃	全国高校総体(ソフトボール、ハンドボール)開催
46	岩崎　武	〃	競技委員会、選手強化委員会設置
47		〃	〃
48	〃	脇坂　徳夫	54全国高校総体誘致を表明
49	〃	〃	
50	〃	〃	54全国高校総体開催について県議会で決議
51	〃	〃	54全国高校総体推進委員会設立
52	小梶幸三郎	脇坂　徳夫	総務委員会設置
53	〃	〃	県民体育大会高校の部一時中断
54	〃	〃	全国高校総体を本県を中心に近畿2府4県で開催　「30年のあゆみ」発刊
55	〃	小西　實	滋賀県高体連年報発刊
56	文室　常男	〃	「びわこ国体」開催
57	〃	〃	県民体育大会高校の部再開
58	完甘　彰	玉垣　三郎	調査研究委員会設置
59	〃	〃	63全国高校総体開催種目(漕艇、水球)内定、事務局を県立スポーツ会館内に設置
60	〃	土井　美明	63全国高校総体企画推進委員会設置
61	〃	〃	
62	太田　邦夫	田村　耕造	63全国高校総体地区推進委員会設立
63	〃	〃	全国高校総体水泳競技、漕艇競技開催、滋賀県高体連創立40周年記念号発刊
元	〃	寺村　新悦	
2	橘　高章	〃	
3	川端　弘	東　勝祐	
4	〃	〃	滋賀県高等学校体育連盟表彰規定設置、滋賀県高等学校体育連盟功労者表彰規定設置、事務局を県教委保健体育課内に設置
5	清水與八郎	〃	広域通信制高等学校2校が初加盟
6	〃	〃	
7	〃	西本　良三	全国高校総体結団式を実施　専門部委員長会議開催
8	福井　貢	〃	加盟会費値上げ
9	〃	〃	50周年記念座談会開催
10	疋田　充穂	〃	創立50周年記念式典　「五十年のあゆみ」発刊

1 沿 革

昭和23年（1948）に、滋賀県高等学校体育連盟設立準備会を設置した。そして、翌年の昭和24年（1949）4月1日に滋賀県高等学校体育連盟として正式に発足する運びとなった。当時の加盟校は、県立全日制9校、定時制2校、私立1校の計12校、加盟専門部は、以下の12専門部である。

陸上競技・水泳・野球・軟式庭球・バレーボール・バスケットボール・相撲・卓球・体操・サッカー・ソフトボール・漕艇

昭和27年度（1952）には、学制改革による高等学校再編で学校数が増加し、加盟校は以下の29校となった。

全日制加盟校：膳所（大津東）・大津（大津西）・堅田・瀬田工業・彦根東・彦根西・彦根工業・長浜北・長浜農業・長浜商工・八幡商業・八日市・草津・野洲・水口（甲賀）・甲南・日野・愛知・虎姫・伊香・高島・比叡山・近江兄弟社

定通制加盟校：大津中央（大津西・大津）・瀬田（瀬田工業）・彦根東・彦根工業・長浜商工・鐘紡長浜

昭和28年度には、八幡高等学校並びにバドミントン・ハンドボール・タッチフットボール・スキー・柔道の5専門部が設立加盟するところとなり、この年から春季・秋季大会を各競技毎に開催することになった。

昭和29年度（1954）には、剣道・ヨット・ラグビー、30年度には、弓道・山岳の各専門部が設立され、加盟した。

昭和33年度からは、大会期間を決め総合的に春・秋大会を開催し総合優勝制を採用した。

昭和41年度には、ウエイトリフティング部が加盟した。また、県定時制高校体育大会を高体連主催で開催した。

昭和42年度には、自転車部、44年度には、アーチェリー部が弓道から独立し、加盟した。

昭和50年度には、庭球・レスリング・馬術・ホッケー部が加盟した。

昭和52年度には、フェンシング部・ボクシング部が加盟した。

昭和53年度には、空手道部が加盟した。全国理事会で54総体開催が正式決定され、県民体育大会参加を一時中断した。

昭和54年度には、「競おう技　高めよう友情」のスローガンのもと「54年度全国高校総体」を本県を中心に開催した。また、「30年のあゆみ」を記念事業として発刊した。

54全国高校総体　選手入場

昭和55年度から、「滋賀県高体連年報」を発刊することとなった。

昭和59年度には、「びわこ国体」が開催された。この年、湖南農業高校が加盟した。

昭和57年度には、理事長の身分が学校籍となり、県教育委員会より県高体連へ出向（教員身分）は事務局長のみとなった。この年から県民体育大会高校の部が5年ぶりに再会された。

昭和58年度には、事務局が県教委保健体育課内に移転され、特別委員会として調査研究委員会を設置した。また、「第19回近畿高等学校定時制通信制課程体育大会」が大津市において開催された。この年、河瀬、玉川、守山北、甲西、伊吹の各高校が加盟した。

昭和59年度には、北大津高校、八日市女子高校が加盟、この年から春季、秋季総体のポスターをつくることになった。事務局が県立スポーツ会館に移転、事務局長の身分が嘱託となった。

昭和60年度には、「63総体」について、漕艇と水球の本県開催が決定されたのを受け、「63高校総体企画推進委員会」を設置した。

昭和62年度には、63総体の「県準備委員会」が「県実行委員会」に改組された。加盟校では、国際情報高校が加盟、鐘紡長浜高校（62年度末廃校）が脱会した。

2　10年の歩み

昭和63年度（1988）には、私立光泉高校、並びに少林寺拳法の加盟で、62校、34専門部の組織となった。

「光る汗　かがやく瞳　いま青春」のスローガンのもと、7月31日から8月20日まで、兵庫県を中心に開催された「63全国高校総体」では、本県において、漕艇競技を8月2日から5日まで県立琵琶湖漕艇場（大津市）で、水球競技を8月17日から20日まで長浜市民プールで開催し、関係各位の尽力と高校生の活躍により、多大の成果をあげ終了した。

また、第24回近畿高校定通制体育大会が大津市で開催された。なお、県高体連設立40周年の節目の年であり、過去10年の歩みや役員名簿を特集掲載した年報、「創立40周年記念号」を発刊した。

元号が改められた、平成元年度の全国高校総体、はまなす国体、全国高校選抜大会においては、本県としては近年になく優秀な成績を上げた。

平成3年度には、高島綾羽高等学校、草津綾羽高等学校が綾羽高等学校に統合され、加盟校が61校となった。

平成4年度（1992）には、大津清陵高校が加盟し、加盟校は62校となった。高体連事務局が県教育委員会保健体育課内へ移転し、運動部活動の密接な連携が図れるようになった。高体連表彰規程の一部改正、新たに、高体連功労者表彰規程及びその内規が施行され、功労者表彰と優秀選手表彰を毎年行なうことになった。また全国高体連研究大会で調査研究委員会が研究発表を行った。

平成5年度には、懸案となっていた、広域通信制専門学校の加盟が承認され、次年度より加盟の運びとなった。

平成6年度には、水口女子専門学校と彦根高等技芸専門学校の加盟により、64校となった。また、高体連功労者表彰規程の内規が一部改正された。

平成7年度（1995）には、大津中央高等学校、膳所高等学校通信制、湖南高等学校の廃校、清陵高等学校の昼間部、通信制、馬場分校の分散加盟、並びに大津文化ビジネス専門学校の加盟に伴い、加盟校は64校、専門部は、なぎなたの加盟により、35専門部となった。また、新たに選手の志気を高め好成績を期待すべく、全国高校総体出場選手団結団式を、高体連事業に加えた。理事会・評議員会を年4回から3回に減じ、専門部委員長会議を新たに開催した。この年、近畿高校定通制体育大会を大津市で、近畿高校駅伝が各府県3年単位の持ち回りになったことに伴い、土山町で開催された。

平成8年度には、新設された県立石部高等学校の加盟により65校となったが、財源不足により12年ぶりに各校の加盟会費を値上げし、全日制450円、定時制300円、通信制200円に生徒数を乗じた額とした。また、規約の改正を行ない理事を半数減じた。なおこの年、全国高体連研究大会に調査研究委員会が研究発表を行った。

平成9年度には、加盟校は、司学館松下高等学校の加盟により66校となった。カヌー競技の専門部加盟が承認され、次年度より加盟の運びとなった。

また、本県高体連創立50周年を迎えるにあたり、創立記念式典並びに記念講演を平成10年7月10日に開催することと「50周年記念誌」の発行を決定し、総務委員会を増員し編集にあたることとした。記念誌の特集として、前年度にあたるこの年、昭和55年以降の歴代会長・理事長の出席を得て、「50周年記念座談会」を開催し、高体連の歩みについての回想と今後の展望について建設的な意見がとりかわされた。

「50周年記念座談会」において

3　将来に向けて

県高体連はこの50年間、全国高体連マークに象徴されるように、スポーツを愛する多くの高校生に力強い躍動と歓喜の機会を与え、友好と連帯の場を提供し、健康で明朗な精神の育成に努めてきた。このことは関係機関のみなら

ず、父兄や地域からも高い評価を得るところであり、一部の過熱気味の運動部活動は別にして、一般的には、運動部活動に大きな意義を認め、高い評価がなされているところである。しかし、昨今の学校が抱えている諸問題の一つとして、運動部活動のあり方が学校や関係機関だけでなく、各界の識者や多くの人々を交えて論議されており、少子化現象をはじめとした社会状況の著しい変化の中で、多くの改善と工夫が求められている。

国レベルにおいては、中央教育審議会答申に始まり、「中学・高校生のスポーツ活動に関する調査」結果や保健体育審議会答申、教育課程審議会中間まとめなどが順次提示されたところであり、特に平成9年12月に中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議がまとめた「運動部活動のあり方に関する調査研究報告書」は、これからの運動部活動の指針となるものと考えるところである。

今後、指導者の高齢化や生徒のニーズの多様化などがますます進むことが予想されるとともに、学校週五日制の完全実施など、従来の部活に対して持っていたような固定観念だけでは、対応が不可能になりつつある。したがって、その具体的対応策を先に国レベルから示された諸内容を参考にし考えてみる。

現在実施していることで将来にわたり継続する必要のあるものとしては、指導者の資質向上のための講習会や研修会の開催、また現在取り組みをさらに進める必要があるものとしては、教員以外の地域指導者の活用、またこれらの関連事項として、指導手引き書の作成や人材バンクの強化も必要であると考えられる。そして今後着手する必要のあるものとしては、複数校による部活動や地域スポーツクラブとの連携などがあげられる。更に高体連サイドにおいて、研究を深める必要のあるものとして、教員以外の大会引率の検討並びに大会開催基準の見直し、いわゆる回数・時期・規模の適正化などがあげられる。

ややもすれば、知識偏重になりがちな昨今の教育事情の中にあって、人間性の大きな成長が期待できる、我が国特有の部活動に深くかかわる組織として、高体連の果たさなければならない重大な責務を、節目の年にあたり再認識するところである。

高体連と私

黄瀬春奈

プロフィール
昭和56年2月2日生まれ。
中学校時よりボートを始め、平成9年のインターハイ、女子ダブルスカルで全国制覇。平成十年、全日本選手権女子ダブルスカル3位。世界ジュニア選手権の日本代表。

平成九年夏、私はインターハイ優勝という、何にもかえがたい喜びを手にすることができました。私にとっての、インターハイ優勝は夢であり、この夢をかなえるために毎日のように練習を積み重ねてきました。したがって、決勝で一番にゴールしたとき、本当にうれしくて思わず涙があふれてしまいました。そして、出場した誰もがそうであるように、大会が終わって振り返ってみると、この大会によって技術的にも精神的にも大きく向上したことを実感できました。また、インターハイでは、同じ目標を持つ同世代人達と交流でき、多くの友人と、自分の視野が広がったことも実感できました。

私はこうした経験から、高体連が高校生をたくましく育ててくれる組織であり、自分自身が多くの方々に支えられていることと、感謝の気持ちを覚え、さらには我慢することを学びました。これらのことは、私達がよりよく生きるために一番大切なことだと確信しています。

当然のことながら、高校を卒業してしまえば選手として、いうなれば「育てられる側」として、高体連に関わることはできなくなってしまいます。しかし、今後は、私自身が「サポーター」として、後輩達がすばらしい感動とたくましい成長をとげるよう、お手伝いできればと考えています。

高体連関係者の皆様には、本当にすばらしい経験をさせていただき、感謝の気持ちが尽きません。これからも、高校生に「夢と感動」を与えてくれる存在として、発展を続けられますようお願いいたします。

京　　都　　府

《事務局》
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入薮ノ内町
府教育庁指導部保健体育課内
TEL 075（414）5862
FAX 075（414）5863

創立年月日：昭和23年4月1日

加盟校数		99校
専門部数		36専門部
加盟部数		1,637部
部員数	男子	18,414名
	女子	10,829名
	合計	29,243名

年度	会長	理事長	記事
23	幸村　法輪	遊津　孟	京都府高体連発足　同規約制定　京都府高校総体開催
24	〃	〃	幸村氏全国高体連副会長に就任
25	〃	〃	
26	奥谷　久彦	中垣内勝久	
27	〃	〃	
28	〃	〃	
29	〃	〃	
30	〃	〃	
31	倉知　栄雄	〃	
32	〃	〃	発足10周年記念事業　高体連の歌制定
33	〃	〃	
34	〃	平井　新司	
35	〃	〃	
36	〃	〃	高体連誌第1号発刊
37	〃	〃	
38	〃	〃	
39	〃	〃	
40	高屋　定由	〃	
41	〃	〃	全国高校駅伝開催（以後毎年開催）
42	〃	〃	
43	田中　実雄	坪倉　勇	発足20周年記念事業
44	〃	〃	
45	三浦総一郎	山岸　敏男	全国高校総体フェンシング・剣道開催
46	〃	大島　要	
47	平井　新司	〃	
48	〃	〃	
49	〃	〃	

年度	会長	理事長	記事
50	深井　隆三	桝岡　義明	
51	〃	〃	
52	〃	〃	高体連規約一部改正
53	〃	〃	高体連新聞創刊号発行
54	栢分　次郎	川北　智世	全国高校総体フェンシング・ホッケー開催
55	〃	〃	
56	長澤　克己	〃	
57	〃	〃	
58	〃	竹谷　憙	発足35周年記念事業　高体連必携発刊
59	〃	〃	高体連規約一部改正
60	城戸　秀夫	橋詰　澄雄	
61	〃	〃	
62	〃	岡本　忠行	発足40周年記念事業
63	〃	〃	全国高校総体相撲開催　「京都国体」開催
元	増田　潔	前田　勉	女子第1回全国高校駅伝開催（以後毎年開催）
2	〃	〃	
3	吉本　勉	〃	
4	〃	〃	全国研究大会開催
5	〃	芦田　紀男 岡本　忠行	
6	〃	山本世志男	
7	〃	〃	
8	村上　知生	〃	府高体連研究大会開催（以後毎年開催）
9	〃	〃	全国高校総体開催　発足50周年記念事業
10	〃	〃 澤田　安之	

1 沿 革

京都府高等学校体育連盟は、戦後の混乱の中から、昭和23年4月の新学校教育制度の発足と同時に、旧制中学校体育連盟の組織を改組し、全国に先がけて創設されました。

初代会長幸村法輪氏（全国高体連初代副会長）同理事長遊津孟氏が、いち早く京都府高体連マークを考案されました。

15専門部と企画研究部（のちに総務部と名称変更）で出発した本連盟は、高校生の体育・スポーツの振興、体力・競技力の向上、そしてスポーツ精神の涵養を目的とし、各時代に即した諸事業の推進が図られました。

その間、発足以来毎年5月に開催している京都府高等学校総合体育大会は、選手だけでなく応援生徒も含めて全ての高校生が参加する形態で行われる一大スポーツイベントとして定着しています。また、高体連の歌制定、高体連誌や高体連新聞の発行、各種講習会の実施、一般生徒対象事業（スポーツの集い）など幅広い活動を行ってきました。

創立年度から昭和62年度までの本連盟の足跡について簡単に紹介します。

【全国高校総体での競技成績】

昭和20年代 光華高校が陸上競技で第1回大会から3年連続優勝。バスケットボール男子の山城高校、卓球女子の華頂女子高校、水球の鴨沂高校等が全国制覇を果たしました。

昭和30年代 20年代の後半から鴨沂高校の水球部が7回の優勝。光華高校陸上競技部、山城高校バスケットボール部、華頂女子高校卓球部も20年代に続く優勝。新しく東山高校卓球部が台頭してきました。

昭和40年代 東山高校卓球部が2回の優勝を果たしたものの団体種目としては9種目の優勝にとどまり、全体的に京都の高校生が低迷した時期でありました。

昭和50年代 洛南高校体操部が3回の優勝。更に、55年度には成安女子高校バレーボール部が、全国高校選抜大会、国民体育大会と合わせて3冠王に輝きました。また、同年度ラグビーで、伏見工業高校が初優勝を果たし全国的にラグビーブームを巻き起こしました。他にも全国選抜大会や国民体育大会で全国制覇を成し遂げた種目もあり、復調の兆しがあらわれてきました。

昭和60年代 63年度に開催の「京都国体」を控えて、高校生の競技力は大幅に向上、本大会では大活躍をし、京都府の総合優勝の原動力となりました。全国総体では、陸上競技をはじめ多くの種目で優勝又は上位入賞が増加しました。

中でも、東山高校卓球部が38回連続全国高校総体に出場を果たし、その間、団体で6回優勝、3位以内21回の実績をあげているのは特筆できます。

【特色ある高体連の活動】

（1） 京都府高等学校総合体育大会

昭和23年、本連盟発足を記念して先ず取り組まれたのが本大会の開催です。

「できるだけ多数の選手が参加できる大会」、「見るのもスポーツ」等の創始者の努力が今日まで引き継がれ、この京都府高校総体は各学校の年間行事計画の中に位置づけられ毎年5月第3土曜日と翌日の日曜日を中心に行われています。（定通制は9月に実施）

大会は、学年別（または上級、下級別）、ブロック別に実施しているため特に1年生にとっては、高校入学後の登竜門として位置づけられています。

（2） 総務部活動

全国的にもユニークな組織であり、諸案の検討を行っています。調査・研究、競技力向上事業をはじめ、普及事業として運動部に属さない生徒に対して、キャンプ講習会、体力養成講習会、サイクリング講習会、リレーカーニバル、スキー・スケート教室、ボウリング大会、ソフトボール大会、バスケットボール3 on 3大会、ビッグゲーム観戦、フィッシング大会等の事業を実施し、現在も継続しているものも多数あります。また、広報事業として、昭和36年度に高体連発足15周年を記念して「高体連誌」が創刊され、現在37号を数えています。また、昭和53年度からは高体連新聞を年3～4回発行し、高校生の活躍状況を掲載し、各学校の教室に掲示しています。

府研究大会（調査・研究事業として平成8年度から実施）

2　10年の歩み

昭和63年度から平成9年度までの10年間は、京都府高体連にとって、まさに激動の10年間でありました。

昭和63年度は「京都国体」が開催された年であり、高校生がどの様に係わるかについてはいろいろと議論がありましたが、「国民体育大会は高校教育の一環である。従って学校行事として全高校生が競技者、演技者、補助員、見学者等、何らかの役割を担って参加する。」という画期的な対応ができ、国体を盛り上げ、成功の一役を担うことができました。更に、競技成績に関しても高校生が大活躍をし、京都府の総合優勝に大きく貢献しました。

また、この年は、兵庫県を主会場として開催された全国高校総体の相撲競技を本府が担当し、京都府高体連総務部の全面的な支援による準備や、全ての専門部の先生方の協力による競技運営、補助員として多数の高校生の協力を得てすばらしい大会が開催できました。

平成元年度には、女子第1回全国高校駅伝が開催され男女同日開催が実現し、今日でも地元京都だけでなく全国的に冬の人気スポーツイベントの一つとなっています。

平成2年度は、「平成4年度第27回全国高体連研究大会」の京都府開催が決定し、更に、「平成9年度全国高校総体」の京都府開催誘致表明をし、それぞれの大会の成功に向けて準備が始まった年でした。

平成3年度には、「平成9年度全国高校総体」の誘致申請書を提出するとともに、第10回アーチェリー選抜大会を開催。また、専門学校等の学校の大会参加を認め、京都府高校総体に京都朝鮮高級学校から8種目に合計118名、京都韓国高校からはバスケットボール（男女）に18名の生徒が参加し共に持てる力を存分に発揮しました。

平成4年度の冬、粉雪の舞う国立京都国際会館において「第27回（平成4年度）全国高等学校体育連盟研究大会」が開催されました。当時では、研究大会史上最多の650余名の参加者があり、更に、全都道府県からもれなく参加されたというのも大会初でありました。

大会は、21世紀に向けてわが国が活力ある社会を築いていくために、国民の健康・体力の増進を図ることが重要であり、生涯スポーツやスポーツの生活化を推進する観点から高校体育の在り方が注目を浴びていることを踏まえて「高校スポーツ21世紀への提言」をメインテーマに設定し、「生涯スポーツ」・「競技スポーツ」・「健康管理」の3分科会を設けました。それぞれの分科会とも詳細な研究発表に基づき、活発な質疑応答が交され内容の深い充実した時間が持てました。加えて、現ラグビー日本代表監督の平尾誠二氏の「ラグビーにおけるチームワーク」と題しての講演、また、当時の覚性律庵庵主光永澄道師から「千日回峰行」の講話をいただき参加者全員感動と共感に満ちた時間を過ごしました。研究大会が大成功に終わり息つく間もなく「平成9年度全国高校総体」の京都府開催が内定し、**平成5年度**には、新しくなぎなたを含む28種目の開催が決定し、本格的な準備が始まりました。

平成6年度に入り、「平成9年度全国高校総体（京都総体）」競技会場地市町村が決定する中で「京都総体プロジェクト委員会」を発足させ、成功に向けて種々の課題について検討を始めました。翌**7年度**には高校生の競技力の向上のため、まず指導者の資質の向上をめざし、開催28種目の各専門部からの強化担当者で構成した「プロジェクト委員会強化部会」を設立、また中学校との連携も考え、「中高連携部活動指導者研修会」を開催しました。この研修会については現在でも好評であり継続中であります。こういった努力が後に述べる本番での好成績につながったと自負しています。また、この年には、大会テーマ「京都総体」、大会スローガン「風にのれ　君の声援　君の汗」、大会シンボルマークが承認され、大会日程、競技会場、大会賛歌が次々と決定していく中で、大会600日前行事を実施することによって徐々に京都府民にも関心が持たれ始めました。

平成8年度は、全国高校総体開催の前年ということで着々と準備が進む中で、300日前行事として府内の高校生が一人一羽の「折鶴」を折り、それぞれの学校の最寄りの実行委員会へ贈呈しました。贈呈の翌日には、式典・パレードに専門部の生徒が参加し、行事を盛り上げました。また、平成9年1月にはナホトカ号タンカー流出油事故に係わる支援のため、募金等を各加盟校及び専門部に呼びかけました。その結果総計765万円余りの募金が寄せられ、支援物資

とともに関係機関へ送付、更に、両丹支部の高校生を中心に重油回収作業にボランティアで参加しました。

平成９年度は、特別なビッグイベントを３つ開催しました。

１つ目は、４月に京都府高校総体の総合開会式を、第50回を記念するとともに「京都総体推進100日前行事」として例年より規模を拡大して実施しました。京都市部では西京極陸上競技場に入場行進参加約5,000名、スタンドでの観覧者約13,500名、演技者、補助員合わせて、約840名、合計19,000名余りの生徒が参加して実施、また、両丹支部では舞鶴市民会館に合計820名余りの生徒が参加しそれぞれ盛大に開会式を開催しました。

２つ目は、８月の全国高校総体「京都総体」の開催です。開催が決定してから４年余り、周到な準備とあらゆる方面の方々のご支援、ご協力により成功裏に終了しました。

平成9年度全国高校総体「京都総体」総合開会式　京都府選手団の入場行進

とりわけ、団体優勝３、個人優勝14、団体個人合わせて122の入賞数をみせた競技力は、選手はもちろんのこと指導者の地道な努力の賜物と感謝するとともに、今後の本府の高校体育・スポーツの発展の礎にしていかねばならないと思います。

３つ目は、11月の京都府高等学校体育連盟50周年記念式典・記念祝賀会の開催です。功労者表彰74名をはじめ、関係者251名の出席により盛大に50周年を祝うとともに50周年記念誌を刊行いたしました。

３　将来に向けて

「京都総体」の成功を弾みとし、50年の歩みを振り返りつつ、高体連設立の原点である「府内の高等学校生徒の体育・スポーツ及びレクレーション活動を振興して、体力の向上とスポーツ精神を育成する」を大切にしながら、21世紀の高校体育・スポーツの発展の筋道を、過去の足跡を踏まえながら明らかにしていく必要があると考えます。

インターハイの思い出

早狩実紀

1991年世界陸上東京大会日本代表。宇治市立槙島中学校から陸上競技をはじめ、府立南八幡高校－同志社大学と進み、現在三和銀行勤務。
主な競技成績は、高校２年生で国体優勝、３年生でI.H、国体共に優勝。また、インカレ優勝多数、日本選手権でも優勝。

この度は、全国高等学校体育連盟創立50周年おめでとうございます。

私が高校時代を過ごした、昭和63年からの３年間を振り返ると、女子中長距離界全体が飛躍的に向上していった時期だったように思います。

身体的にも精神的にも伸び盛りの頃に、そのような環境にもまれ、私自身も大きく成長することができました。

３年生（平成２年）の時に仙台で行われた全国インターハイでは、３千メートルに出場し、当時の高校新記録で優勝しました。今でも私にとって、とても印象深いレースのひとつです。

大会直前、とにかく心細かったことを覚えています。いろんなことが不安な反面、何故か本番になれば走れるような気もしていました。今までに感じたことのないプレッシャーを感じていたのだと思います。

真夏の猛暑の中でのレースは嫌いで、それにも増して真夏のトレーニングは嫌でした。暑さにバテて走れなくなったり、貧血になったりと、夏は苦手な季節でした。それでも、小さな調子の波はあっても、大きなつまづきなく目標を達成できたことは、自信になったと同時に、高校生活のよい思い出となりました。

周りの環境にも恵まれ、人にも恵まれ、助けて頂きながら競技を続けてこられたことを幸せに思います。感謝の念と、これまで経験してきた全てのことを糧に、これからも可能性を信じて頑張っていきたいと思います。

大　　阪　　府

《事務局》
〒540-0008 大阪市中央区大手前二丁目
府教育委員会保健体育課内
TEL 06（941）3430
FAX 06（941）4815

創立年月日：昭和23年4月1日

加盟校数		350校
専門部数		32専門部
加盟部数		5,422部
部員数	男子	43,675名
	女子	28,020名
	合計	71,695名

年度	会長	理事長	記事
23		春日　弘	第2回府民体育祭開催
24		〃	
25		〃	
26		清水　次郎	柔道専門部発足
27		〃	ウェイト専門部発足
28		〃	剣道･弓道専門部発足
29		〃	
30	西　由己	岩野　次郎	
31	〃	〃	
32	〃	乾　正人	
33	〃	〃	
34	志賀　平	〃	ホッケー専門部発足
35	〃	〃	ボクシング専門部発足
36	佐藤　一男	〃	
37	山川　信夫	〃	
38	〃	岩井　邦利	専門部規約制定
39	〃	〃	
40	田中喜久三	館野　進	なぎなた専門部発足
41	〃	〃	第1回体育の日行事
42	坪井　明	〃	高体連のあり方研究
43	〃	〃	
44	竹谷　新	〃	フェンシング専門部発足
45	〃	〃	総体3種目開催
46	竹谷　新	高塚泰次郎	
47	鈴木　康一	〃	
		松岡満次郎	
48	根津　哲夫	高塚泰次郎	全国高校サッカー開催
49	〃	長野　元泰	
		松岡満次郎	

年度	会長	理事長	記事
50	根津　哲夫	長野　元泰	第30回大阪総体開催
51	〃	〃	
		松岡満次郎	
52	明石　立身	長野　元泰	
53	田口　達造	冨浪　良夫	
		松岡満次郎	
54	〃	白銀　茂夫	54総体2種目開催
55	〃	〃	生徒の対外競技検討
		松岡満次郎	
56	吉田　道雄	白銀　茂夫	
57	小山田成夫	〃	
		松岡満次郎	
58	〃	白銀　茂夫	
59	〃	〃	空手道部専門部発足
		松岡満次郎	
60	〃	高橋　實	63総体開催地決定
61	松下　邦夫	〃	少林寺拳法専門部発足
62	〃	〃	63総体実行委員会
63	白銀　茂夫	小久保昇治	
元	林田　昭喜	橋爪　静夫	第1回ボクシング大会
2	〃	〃	大阪朝高大阪総体参加
3	〃	〃	
4	小久保昇治	神内　隆司	
5	〃	〃	
6	梶本　照夫	神内　隆司	全国少林寺大会開催
7	渡邊　文一	石黒　典男	第50回大阪総体開催
8	〃	前田　嘉昭	
9	〃	〃	連合チーム参加承認
10	神内　隆司	上田　俊次	

1 沿 革

「大阪高等学校体育連盟の設立」

昭和18年7月、学徒体育大会中止令によって学校スポーツは混迷期に入った。
昭和22年3月、学校教育法の交付によって学制改革が実施され、現在の高等学校、6・3・3・3・4学校制度として新設された。
翌昭和23年4月より新制高校が発足し、同年6月28日には「全国高等学校体育連盟「が創設された。
大阪府では、当時の府教育委員会保健体育課の岩野次郎氏、乾正人氏や校長会役員などを中心に、それまでの旧制中等学校体育連盟組織を改組する準備が進められた。
昭和23年4月、新制高校の発足と同時に「大阪高等学校体育連盟」として創設。
当時、大阪体育連盟の会長をされていた春日弘氏を初代理事長に、力強く歩みはじめたのである。

「連盟組織の確立」

昭和30年には、高校への進学率が全国水準で初めて50%をこえ、高校生が昭和33年度から急激に増加しはじめた。
昭和30年代後半に入り、高体連は組織として確立してきた。それぞれの種目が共通の理念のもとで、教育活動としてのスポーツを推進していこうという努力が始まったからである。
大阪高体連では、専門部が次第に大きくなり、昭和38年6月、高体連の運営を円滑にしていくため、「専門部規約」を作成した。

「小委員会の発足」

大阪高体連では昭和42年12月、専門委員長会を開き、校長会の依頼事項を検討した結果、専門委員長会の専門機関として「特別小委員会」を発足させることにした。
同年12月、第1回の特別小委員会を開いた。高体連を法人化するかについて暫定措置とし、国の動きを見ながら法人化を考慮していくことをまとめた。

「六者会談開催」

昭和40年代から学校教育界を襲った近代化は、高校スポーツ界にも大きな影響を与えた。
昭和43年7月、校長協会・高体連・生活指導研究会・体育研究会・府教育委員会の各代表が集まった。今後の高校運動部のあり方、大阪高体連の運営について協議し意見の交換が行われた。

「創立30周年記念式典開催」
創設30年を語る座談会

昭和49年7月16日、大阪高体連理事会、専門委員長会合同会議で30周年記念事業の提案がされ、実施することが決定した。
30周年記念事業の一つとして、大阪高校総体の「第30回記念大会」を行い、加盟校運動部のうち、多年にわたり優秀な成績を挙げてきた男女運動部135部を表彰した。
また昭和52年12月3日、「大阪高体連」創設30周年記念の会（功労者表彰・祝賀会）が、大阪キャッスルホテルで行われた。

「国際交流の活発化」

昭和55年11月、大阪府は中国上海市と友好姉妹都市関係を締結し、翌年より両都市間で具体的な交流が実施されることになった。
種々の条件のもとにサッカー、体操、柔道、テニス、陸上競技、バレーボール、ソフトボール、ハンドボール、バスケットボールという順番に相互交流を行ってきた。
専門部の発展につなげる為にも、大阪のスポーツレベルを伸長させることが重要となった。

「大阪高体連40周年記念式典開催」

大阪高体連は昭和62年12月、40周年記念行事として優秀な成績をおさめてきた運動部を表彰し、専門部に高体連旗を作成した。
記念式典は大阪工大記念館で開かれ、大阪高体連40周年記念誌を発刊した。

2　10年の歩み

昭和63年
8月　総体、空手道・ホッケー・登山を大阪で開催
12月　大阪高体連研究協議会開催
8月　第8回大阪府・上海市友好交流事業
柔道・庭球チーム派遣
発表　水泳・バレーボール・相撲

平成8年度全国高等学校総合体育大会総合開会式における大阪府選手団の入場

12月　大阪高体連研究協議会開催

平成1年
8月　第1回全国高等学校ボクシング選抜大会開催
8月　第9回大阪府・上海市友好交流事業
陸上競技チーム招聘
12月　大阪高体連研究協議会開催
発表　体操・卓球・柔道

平成2年
8月　第10回大阪府・上海市友好交流事業
陸上競技チーム派遣
12月　大阪高体連研究協議会開催
発表　剣道・軟式庭球・アーチェリー

この年より、大阪高校総体に大阪朝鮮高級学校が参加

平成3年
8月　第11回大阪府・上海市友好交流事業
バレーボールチーム招聘
12月　大阪高体連研究協議会開催
発表　レスリング・スキー
ハンドボール

平成4年
8月　第12回大阪府・上海市友好交流事業
バレーボールチーム派遣
12月　大阪高体連研究協議会開催
発表漕艇・サッカー・ボクシング

平成5年
8月　第13回大阪府・上海市友好交流事業
ソフトボールチーム招聘
発表　弓道・ラグビー・フェンシング

平成6年
8月　第14回大阪府・上海市友好交流事業
ソフトボールチーム派遣
12月　大阪高体連研究協議会開催
発表　登山・バドミントン・空手道

平成7年
8月　第15回大阪府・上海市友好交流事業
ハンドボールチーム招聘
12月　大阪高体連研究協議会開催
発表　自転車競技・ソフトボール
少林寺拳法

平成8年
8月　第16回大阪府・上海市友好交流事業
ハンドボールチーム派遣
12月　大阪高体連研究協議会開催
発表　ウェイトリフティング
アメリカンフットボール
なぎなた

平成9年
8月　第17回大阪府・上海市友好交流事業
バスケットボールチーム派遣
12月　大阪高体連研究協議会開催
発表　ヨット・テニス・相撲

3　将来に向けて

朝鮮高級学校の全国大会参加承認

平成２年、朝鮮高級学校が「大阪高体連の大会に出場したい」と、大阪バレーボール専門部に意向を伝えたことに端を発したのがきっかけとなり、大阪朝鮮高級学校の大会参加及び高体連加盟が問題となった。

大阪高体連は、平成３年全国大会につながらない大阪だけの大会（大阪高校総体）出場を、全国で初めて承認した。

平成５年、全国高体連基本問題検討小委員会は協議し、朝鮮高級学校を含む、各種学校や専修学校のインターハイ参加について、平成６年度から出場が承認されたが、選抜大会は各競技団体と全国高体連の共催であり、各競技団体が中心となって開催してきた経緯があることから、今後の課題とし、関係団体と協議していくことになった。

少年の健全な心身の育成に大きな役割を果たすスポーツの普及、振興という観点に立てば、ほとんどの高校生の大会参加が承認されることが望ましい。

運動部活動の現状

近年高等学校では、生徒数の減少に伴う部員数の減少により、チームの編成が出来ない運動部がみられたり、指導者等の高齢化により、円滑な活動が維持できないなど、顕著ではないが、休廃部にいたる運動部がでてきている。

大阪高体連では、運動部活動がもつ教育的意義を踏まえ、その活性化を図るべく、対応策について検討を進めている。

団体総合　輝く三連覇！

池　谷　幸　雄

昭和45年　9月26日生
平成元年３月清風高校卒業
同年４月日体大入学
平成５年３月日体大卒業
現在　タレント

昭和63年度　全国高校総合体育大会（兵庫県）

団体総合　男子優勝　清風高等学校

個人総合　男子優勝　池谷　幸雄

種目別　男子

床	優勝	池谷　幸雄
あん馬	２位	池谷　幸雄
吊　輪	優勝	池谷　幸雄
跳　馬	優勝	池谷　幸雄
平行棒	２位	池谷　幸雄
鉄　棒	優勝	池谷　幸雄

昭和63年度全国高等学校総合体育大会において、男子体操競技では、清風高等学校団体チームが３年連続団体総合優勝と輝かしい成績をおさめた。また、個人総合においても、上位３位（優勝池谷君、２位西川君、３位荒牧君）まで独占し、大阪高体連体操部のレベルの高さを全国に示した。なかでも池谷君はチームの中でも常に安定した成績をおさめリーダー的役割を果たした。

またその年のソウルオリンピックの代表にも高校生として初めての日本代表選手に選ばれたが、めざましい活躍ぶりで団体総合３位の原動力になったことは記憶に新しいところである。

兵　庫　県

兵庫県高等学校体育連盟

《事務局》
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10-1
県教育委員会事務局体育保健課内
TEL 078（362）3787
FAX 078（362）3959

創立年月日：昭和23年5月31日

加盟校数		246校
専門部数		32専門部
加盟部数		3,924部
部員数	男子	37,723名
	女子	26,142名
	合計	63,865名

年度	会長	理事長	記事
23	賀須井　千	堀　公平	県高体連発足(5月)(16専門部)
24	〃	〃	漕艇部設置
25	〃	〃	
26	春日　重樹	〃	
27	〃	〃	柔道部・バドミントン部設置
28	〃	〃	剣道部設置
29	〃	〃	ボクシング部設置
30	〃	〃	レスリング部・軟式野球部設置
31	永松　忠雄	〃	
32	〃	〃	第1回県総体開催
33	梶　和三郎	常松　喬	馬術部・自転車競技部・アメリカンフットボール部設置
34	〃	〃	ウエイトリフティング部設置
35	〃	〃	
36	〃	〃	ヨット部設置
37	高山　忠雄	〃	
38	〃	〃	
39	〃	〃	県定通制委員会設置
40	植杉英之助	〃	県定通制体育大会開催
41	〃	〃	県総体総合優勝制導入
42	津田　叶次	〃	
43	〃	兼吉　太郎	
44	〃	〃	
45	三浦　欣一	〃	45全国総体3競技開催(登山・テニス・男子ソフトボール)なぎなた部設置
46	〃	〃	
47	〃	西村　昌治	
48	竹崎　敏夫	〃	
49	〃	横　義雄	空手道部設置
50	〃	〃	
51	竹崎　敏夫	石井　一	
52	〃	〃	
53	西村　昌治	福井　裕	県高体連30周年誌発刊
54	〃	〃	54全国総体2競技開催(ハンドボール・ウエイトリフティング)アーチェリー部設置
55	横　義雄	三宅　醇二	県総体開会式を学校別の行進参加に変更
56	福井　裕	〃	
57	〃	小島　正男	
58	〃	〃	
59	石井　一	桂　廣保	63全国総体開催決定
60	小島　正男	〃	同上準備委員会発足
61	〃	〃	同上実行委員会発足
62	大西　邦夫	〃	少林寺拳法部設置
63	桂　廣保	谷口啓二郎	63全国総体開催(19競技を14市4町で実施)
元	〃	〃	
2	〃	藤本　幸男	広東省とスポーツ交流(バレーボール・卓球を派遣)
3	〃	中谷　元紀	同上受入
4	〃	河野修一郎	
5	〃	吉井宏一郎	
6	伊藤　正廣	石嶺　正一	阪神・淡路大震災(未曾有の大災害)(7.1.17)
7	〃	阪本　勝彦	
8	中谷　元紀	〃	
9	〃	〃	県総体開会式を検討
10	〃	折戸　善信	県総体開会式を種目別参加とし体育館で開催　県高体連50周年記念式典(11.3.6.予定)

1 沿 革

兵庫県高等学校体育連盟の発足

兵庫県高等学校体育連盟は、昭和23年5月31日に発足、7支部・16専門部でスタートした。本県には、以前から神戸、阪神、東播磨、西播磨、丹有、但馬、淡路の7地区の組織があり、旧制中学校時代から各地区で学校対抗の試合や大会が実施されていた。昭和23年の学制改革による新制高等学校の誕生とともに、7地区の代議員による準備委員会が設置され、本連盟を発足させた。

初代会長は長田高校の賀須井千校長、副会長には明石南高校の木村伊勢栄校長と高校体育教師を代表して滝川高校の福島誠徳先生、理事長には県教委体育課の堀公平課長が就任した。

事務局は県教委体育課内に置かれ、学校体育係長を中心に学校体育係が本連盟の事務を担当した。以来、今日まで50年間にわたって、事務局は県教委体育保健課に置かれている。

当初設置した専門部は、陸上競技、体操、水泳、バレーボール、バスケットボール、ハンドボール、サッカー、ラグビー、卓球、テニス、軟式庭球、ソフトボール、相撲、弓道、山岳、スキーの16専門部であった。その後、運動部活動の充実・発展とともに専門部数も順次増加し、昭和62年度に少林寺拳法部を設置、現在の32専門部が確立した。

兵庫県高等学校総合体育大会の開催

昭和23年3月の文部省通達「学徒の対外試合について」により「学徒の参加する競技会は教育関係団体が主催し、その責任において適正な運営を期する。」とされ、本連盟の発足と同時に本連盟が各種の競技会を主催するようになった。しかし、各競技種目団体の意向や歴史的な背景もあり、大会として日程の統一は容易にはできず、各専門部ごとにそれぞれ開催されていたのが実情である。

そのような中、競技大会は学校教育活動の一環として重要な位置を占めるものであることから、関係競技種目団体の理解を得、昭和32年6月、本連盟と県教育委員会との共催で第1回兵庫県高等学校総合体育大会を開催した。以来、本大会は県下高等学校体育・スポーツの振興・発展に大いに寄与し、学校教育活動の一環としてその役割を果たすとともに、意義ある大会として多くの成果を上げている。

昭和41年度第10回大会からは、総合優勝制度を導入、男女総合成績1位の学校に優勝旗を授与、1位から6位までの学校に表彰状及び県高体連杯を授与し今日に至っている。また、この年度から総合開会式を実施、各専門部ごとによる入場行進を行うようになった。

昭和55年度第24回大会からは、学校単位による入場行進に変更、各支部ごと支部長、支部旗を先頭に各学校20名の選手が学校代表として行進、3千5百名を越える選手が入場行進に参加するようになった。同時に、総合開会式の見学校も10数校にのぼり、更に昭和63年の全国高等学校総合体育大会、いわゆる『63全国高校総体』の開催へ向けて、昭和61年度第30回大会からは、神戸地区の高等学校が計画的に見学し、明石での開催時には、明石地区の高等学校が全面的に見学するようになった。そして、吹奏楽やバトントワリングなどの演奏・演技と相まって華やかで盛り上がった開会式が演出されるようになった。

兵庫県高等学校定通制体育大会の開催

定通制高等学校は本連盟に加盟しているものの、多くの場合、全日制と同一歩調をとることには各種の制約があった。したがって、自然発生的に定通制の学校が各地区ごとにささやかな大会を開いていたのが実情である。

そのような中、昭和33年に軟式野球、35年に陸上競技、37年にバレーボールの県大会が実施され、その影響を受け、他の種目でも県下で凌ぎを削り合いたいとの盛り上がりがあり、昭和39年に9種目の県大会が実施された。

同時にその頃、定通制高等学校の体育の発展に寄与するため、定通制の組織の強化・確立を図る機運が盛り上がり、同年、専門委員会としての定通制委員会を設置した。そして、翌年の昭和40年度から兵庫県高等学校定時制通信制課程総合体育大会、いわゆる『定通制体育大会』が正式にスタートした。軟式野球、陸上競技、バレーボール、水泳、バスケットボール、軟式庭球、卓球、柔道、剣道、ソフトボールの10種目であった。その後、水泳、ソフトボールが廃止、サッカー、バドミントンが加わり現在に至っている。

2　10年のあゆみ

63全国高校総体の開催

昭和63年7月31日「光る汗　かがやく瞳　いま青春」の大会スローガンのもと、昭和63年度全国高等学校総合体育大会のオープニングを飾る総合開会式が神戸ユニバー記念競技場で開幕した。全国から厳しい予選を勝ち抜いて参加した選手たちのうち、9千人の精鋭が堂々の入場行進を行い、スタンドを埋めた3万8千人の観衆にさわやかな印象を与えた。また、大会史上最多の編成による迫力ある吹奏楽・合唱団、フィールド一杯に繰り広げられた公開演技などに拍手の波が沸き上がり、演技を終えた高校生と観衆がともに感動を分かち合う姿が、強く印象に残る開会式であった。

翌日からは、県内14市4町で19競技大会を開催、日頃鍛えた力と技と心を大いに発揮し熱戦が展開された。中でも、本県選手の活躍は目を見張るものがあり、優勝14種目、2位14種目、3位33種目、5位50種目と入賞数111種目にのぼる好成績を上げ、成功裏に大会が終了した。この大会の成功の陰には「一人一役」を合言葉に、会場を飾る草花づくりに、或いは、場内整理や誘導補助員として、また、記録の収集、案内接待、救護活動、清掃、駐車場など多種多様なところで活躍した高校生の姿があった。この献身的な高校生の活躍が全国の選手たちに共感を呼び、さまざまな場で友情の輪が広がり、高校生による一人一役運動は多くの方々から高い評価を受け、まさに「高校生による高校生の大会」そのものであった。

全国高校駅伝大会における本県勢の活躍

都大路に繰り広げられる高校駅伝は、今や国民的行事となり、師走の風物詩として定着しているが、近年、この大会における県立西脇工業高校と報徳学園高校の両校の活躍は、目を見張る素晴らしいものがある。この10年間で、西脇工業が5回の優勝、報徳が2回の優勝を果たし、実に本県勢が7回の優勝を数え、加えて現在4年連続優勝中である。まさに「駅伝王国兵庫」の名を全国に高めたのである。

また、両校によって高校駅伝史を飾る名場面も展開されている。元年度はアンカー勝負となり、最後までデッドヒートを演じ、報徳が優勝、僅か1秒差で西脇工業が2位となり、本県勢が上位を独占した。6年度は西脇工業は県大会で2位に甘んじたものの記念大会の恩恵で復活、2時間3分21秒の日本高校最高記録で見事優勝した。更に9年度も西脇工業は実力を見せつけ堂々優勝、2時間3分18秒の驚異的な記録で自己の持つ日本高校最高記録を更新した。

このように、高校駅伝は全国で本県が大きくリードしているが、この現象は、昭和56年度の大会から不動のものとなった。56年報徳、57年西脇工業が優勝、58年から報徳が3連勝し、本県勢が5連覇をなし遂げたのである。今、西脇工業VS報徳の争いは「宿命の対決」と言われているが、これは「兵庫を制するものは全国を制する。」という近年の本県勢の大いなる活躍ぶりを示している。

阪神・淡路大震災の発生

平成7年1月17日未明、轟音とともに兵庫県南部に大地震は起こった。マグニチュード7.2、震度7の激震であった。阪神・淡路大震災の発生である。ビルやマンションが崩壊、新幹線を含む鉄路、高速道路等が損壊、都市機能は壊滅し、電気、ガス、水道などのライフラインにも壊滅的な打撃を与えた。住宅の密集した地域においては、大規模な倒壊、大火災が多発した。被災・避難住民は30万人余にのぼり、犠牲者は6千名を越える未曾有の大惨事となった。

多くの学校は休校を余儀なくされ、各種の学校行事は中止、体育館、グランドなどは避難所として被災住民を受け入れた。当然、運動部活動の実施は困難となり大きな制約を受けた。この年度の各行事も順調に推移していたが、1月下旬から予定されていたサッカー、バスケットボールなど5種目の県大会が開催不可能となった。更に7年度に本県で開催予定の近畿大会のうち、数種目が急遽他府県に会場の変更をお願いした。快く引き受けてくれた近畿高体連の関係者の皆様並びに多大なご支援を賜った全国高体連をはじめ関係機関や団体の皆様に心から深く感謝しお礼申し上げる次第である。

県高校総体総合開会式の規模の適正化

兵庫県高等学校総合体育大会の総合開会式については、前述したように、63全国高校総体

の開催を契機として、華やかな総合開会式を繰り広げてきたが、平成9年度に今後の在り方について検討に入った。

近い将来導入される学校週5日制の完全実施を見据え、それに対応できるようにするとともに、交通の便など参加しにくい学校への配慮及び授業時数の確保の観点などを重視し、学校教育活動の一環として実施する高等学校の体育大会としての規模の適正化を図るためである。そして、平成10年度から学校単位の入場行進を改め、各専門部ごと20名の参加を基本とし、長年にわたって伝統的に実施してきた陸上競技場から体育館に会場を変更するとともに、見学については、学校の判断にゆだねることなどを決定したのである。

3　将来に向けて

これからの課題と取り組み

本連盟は、10年前に63全国高校総体を開催したが、それを契機とし、高い競技水準、強化策、施設設備の充実、スポーツに対する盛り上がりなど、多くの成果を得て今日に至っている。また、本連盟が主催する各種の大会等は、県下の高等学校体育・スポーツの振興・発展に大いに寄与し、学校教育活動の一環として、その役割を果たしてきた。このような成果を踏まえ、高等学校の特色ある教育活動としての運動部活動を、これからも大切にし、一層活性化させるとともに発展させなければならない。

特に、これからの学校教育には「生きる力」を育成することが求められており、自ら課題を見い出し、自ら学び、主体的に判断できる能力と豊かな人間性や個性を育てることが重要である。そのためには、自発的・自主的な活動を重視した体験的活動そのものである運動部活動の果たす役割は極めて大きいものがある。

生徒数の大幅な減少による部員数や顧問数の減少、顧問の高齢化、学校週5日制の完全実施への対応、外部指導者の活用、地域スポーツとの連携、複数校による合同活動と大会への参加などさまざまな課題があるが、生涯スポーツの観点を重視し、多様な個性と能力を持ったすべての生徒のニーズをかなえることができる運動部活動を目指し、一層の充実を図るとともに、新しい展開を創造していく必要がある。

走幅跳決勝の思い出

朝　原　宣　治

平成3年、兵庫県立夢野台高等学校卒業、同志社大から大阪ガス入社、現在ドイツ留学中。100m10秒08の日本記録保持者。ソフトで気さく、自炊のできる26歳。

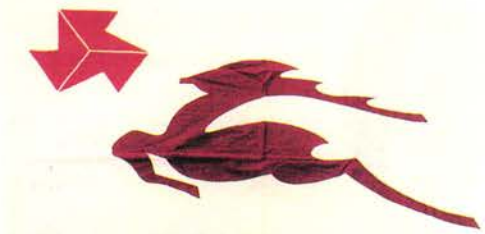
平成2年夏、私は男子走幅跳において優勝を狙うべく助走路にたった。その日、1回目の試技で7m60cmを跳び先頭に立ち、2回目にそのときの優勝記録である7m61cmを跳んだが、その後の試技は記録を伸ばして迫ってくるライバルたちの襲撃を気にしながらのものであった。2回目の試技で自己タイ記録を跳んだのが幸いしたのか、それとも徐々に記録を伸ばしながらの展開で試合が進んでいったなら、もっと良い記録がでていたのかどうかは分からない。とにかく、たった3 cmの差で優勝したのだ。

技術的にも精神的にも不安定な高校生が全国から集まって勝者を決めるのだから、勿論実力は必要だけれども、そのときの運も大きな勝つ要素の一つである。特に高校生だった私は技術的にも安定せず、ただ助走のスピードを踏切板にぶつけるといった、いわゆる「あらけずり」な選手だったため、顧問の先生をはじめ応援にきてくれた両親などをかなりハラハラドキドキさせてしまった。今でもそうなのだが…。

あのときの2回目以降の伸び悩む跳躍について、今なら試合中に冷静に分析できるかもしれない。ところがあのときは前に跳ぶことで頭がいっぱいで、結局偶然にそのまま逃げきることができたのである。あの接戦の中もしライバルがピッタリの踏切でもう少し着地の足がのびていたなら、結果が違っていたかもしれない。

すべての大会でもそうだと思うが、特にインターハイという大会は、その選手が持っている競技力以外の何かが作用すると思う。それは例えば運であったり、勝利にかける意気込みであったり、自分に対する自信であったりなどであろう。インターハイは私にとって通過点と位置づける大会であるが、今のこれからの私にとって、あのときの勝利は貴重で重要な意味を持っている。

奈　良　県



《事務局》
〒630-8113 奈良市法蓮町757県法蓮庁舎4 F
県教育委員会保健体育課内
TEL 0742（22）1101
FAX 0742（22）3995

創立年月日：昭和23年5月15日

加盟校数		75校
専門部数		33専門部
加盟部数		989部
部員数	男子	8,494名
	女子	5,695名
	合計	14,189名

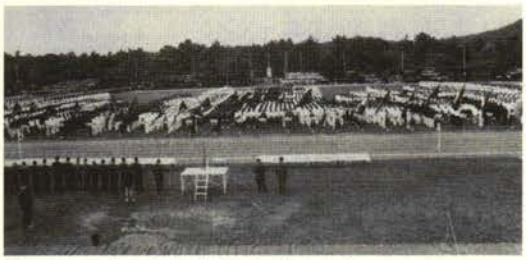
年度	会長	理事長	記事
23	福西英三郎	川本　斜	5月15日高体連結成　16学区16校　私学4の計20校　10月13·14県総体開催　8競技(10専門部)
24	〃	〃	
25	〃	〃	ハンドボール加盟
26	〃	〃	サッカー·山岳·柔道スキー·バドミントン加盟
27	〃	〃	
28	池田　与一	浦　好治	
29	〃	〃	
30	〃	〃	
31	〃	〃	
32	井上　清治	〃	1回全国高校登山大会山岳部を登山部に改名
33	〃	〃	高体連記録集発刊1号
34	〃	〃	高体連体操考案
35	佐藤　順治	〃	
36	〃	石原　寛三	
37	〃	〃	
38	〃	〃	
39	的場　義三	〃	8回全国高校登山大会　第1回県定通大会開催　10種目に16校参加
40	〃	〃	
41	田中　良夫	〃	
42	〃	〃	高体連創立20周年36校マスゲームの実施
43	〃	森田　正	
44	飯田　一夫	〃	
45	東谷　秋夫	北吉　正一	
46	〃	〃	
47	西岡　淑雄	〃	
48	岩田　渾一	玉井　勝	

年度	会長	理事長	記事
49	岩田　渾一	玉井　勝	
50	〃	〃	
51	〃	〃	
52	〃	〃	高体連30周年45校参加「友情の輪を広げよう総体で」
53	大島　寛	〃	第1回高校総体結団式
54	〃	〃	ホッケー加盟19種目
55	松尾　勝清	高橋　俊二	テニス·レスリング加盟
56	〃	〃	自転車·ウエイト·フェンシング·アーチェリー·なぎなた加盟
57	〃	〃	高体連会費の値上げ
58	〃	〃	
59	植田　俊治	〃	わかくさ国体開催·ライフル·ヨット·ボクシング·空手道·漕艇加盟　31専門部となる
60	太田　順康	〃	
61	奥田　悦夫	西機　茂郎	
62	〃	〃	高体連創立40周年
63	〃	〃	全国高校総体ボクシング競技開催王寺工優勝
元	〃	北村　忠生	
2	吉田　公也	〃	
3	岡本　均	〃	
4	〃	〃	
5	岡本　皓	〃	一条校以外の参加
6	吉井　弘侑	山本　勝	加盟金の値上げ
7	上野　博美	〃	50周年実行委員会設立
8	〃	〃	スローガン募集「力の限り明日への軌跡50周年」第1回栄賞授与式
9	〃	〃	高体連50周年記念式典61校5,000名参加　記念誌発行
10	〃	西岡　英明	

1 沿 革

昭和23年4月新しい学制に伴い県立高等学校は16学区・16高等学校に統一され、私学4高等学校を加えて20高等学校となった。県高体連の組織準備は、昭和23年1月9日に中学校の諸先生方により進められ、5月15日畝傍高校に於いて奈良県高等学校体育連盟を結成、初代会長に福西英三郎（畝傍高等学校長）、理事長に川本　紲（郡山高等学校教諭）の両氏が就任した。また、10月13・14の両日、橿原公苑を会場に第1回県高等学校総合体育大会を開催、陸上・体操・卓球・バスケットボール・バレーボール・軟式庭球・相撲・ソフトボールの8種目が行なわれ、20校が参加した。又、水泳・ラグビーも各々大会を持ち県高体連結成の年に10専門部が活動していた。昭和25年にハンドボールが高体連に加盟、昭和26年にサッカー・スキー・山岳・柔道・バドミントンが加盟し、第4回県高校総体は参加人数の増加に伴なって橿原公苑・畝傍高校・奈良学芸大学の3会場で12種目を開催。昭和27年、剣道が復活、ただちに加盟、昭和28年、弓道部初代委員長に昆布富明氏が就任、加盟した。昭和32年8月、第1回全国高等学校登山大会が大峰山・大台ケ原山で開催され、360名が大会に出場した。又専門部名を「登山部」に改めたのもこの年である。昭和33年には、県高体連の記録集の第1号が発刊された。これは第10代会長岩田渾一氏、第2代理事長浦好治氏との苦心の賜物である。同年、県高体連体操が考案され、昭和34年県高校総体開会式で県下高校生により演技が披露された。昭和39年8月、第8回全国高校登山大会を大峰・北山の会場で開催、約800名の参加者を得た。昭和40年には、第1回県高校定通制体育大会を橿原公苑で開催。陸上・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・卓球・剣道・柔道・相撲・軟式庭球・ソフトボールの10種目の競技が行なわれた。この時の参加校は、中心校・分校合わせて16校であった。現在は10校と減少はしたが、開催日を毎年9月の第2日曜日に定め続けている。昭和42年、奈良県高等学校体育連盟創立20周年記念総体を橿原公苑で開催し県下36校の全高校生を陸上競技場に集め、開会式後、郡山高校・桜井高校・田原本高校による集団演技を公開した。

昭和52年9月25日、奈良県高等学校総合体育大会第30回記念大会に県下より45校が集



第20回奈良県高等学校総合体育大会

い、橿原公苑を中心に18種目の競技を開催。この年初めて大会テーマ・ポスターを募集し「友情の輪を広げよう総体で」に決定。昭和53年7月に第1回の全国高校総体奈良県選手結団式が橿原会館で行われた。昭和54年は、全国高校総体弓道大会を奈良市鴻ノ池弓道場で開催。この年ホッケーが加盟し、19種目となる。昭和55年には、専門部新設ラッシュが始まり、競技力向上指定校制度が発足された。テニス・レスリングが加盟し、21種目となる。昭和56年、わかくさ国体に向けて高体連加盟各校及び各専門部で選手強化が本格化し、高体連理事長が県教育委員会事務局保健体育課内で執務することになった。「わかくさ国体」の選手強化もあって、自転車競技・ウェイトリフティング・フェンシング・アーチェリー・なぎなたの5種目が加盟し、26種目となる。また、ヨット・ライフル・ボクシングの3種目が準加盟となった。橿原公苑の大改修で陸上競技場が待望の全天候型になりテニスコート多目的広場等各施設が新設された。昭和57年、高体連会費を値上げ。全日制1人200円、定通制1人120円。　昭和59年には、「わかくさ国体」が奈良市を中心に県下各市町村で開催され高校生が大活躍をした。ライフル・ヨット・ボクシング・空手道・漕艇が加盟し、これで県高体連は、31専門部となる。昭和62年は、奈良県が100年を迎えた年で、県高体連にとっても創立40周年という記念すべき年であった。橿原競技場に上田知事、中本教育長を迎え、第15代奥田悦夫会長の挨拶、第8代西機茂郎理事長の競技開始宣言、続いて、添上高校の組立体操、天理教校附属高校のマーチングバンド、バトントワリング連盟の演技、ボクシングのスパーリング等が行われた。

2　10年の歩み

昭和63年には全国高校総体ボクシング競技が橿原公苑体育館で開催され、これには全県下の高校から集まった競技役員の他に、地元畝傍・高田・橿原・耳成・高取・王寺工の各高校生が補助員を務め、大会を成功させた。平成4年には、全国高校総体に朝鮮高級学校の参加が認められた。平成5年度には、学校教育法第一条校以外（高等専修学校等）の学校の生徒参加が認められた。平成6年4月総会にて、加盟金が全日制生徒1人400円、定通制生徒1人200円に値上げになった。また、11月に桜井高校で高体連50周年記念事業準備委員会を発足させた。これは、平成7年6月に解散し、新たに実行委員会として発足した。第1回実行委員会は郡山南部公民館で開催された。平成8年9月に高文連との連携を柱にスローガン募集を行い、育英西高校の島川美加さんの「力の限り　明日への軌跡　50周年」を最優秀賞に決定した。また、12月高体連50周年記念ポスターを募集し、橿原学院高校の岡本由美さんが最優秀賞に輝いた。平成9年2月、第1回高体連栄賞授与式天根俊治教育長、嶋田良文保健体育課長を迎え、奈良県社会福祉総合センターで開き、会長賞（団体8、個人8人）奨励賞（団体10、個人41人）として、14競技、15校、67人を表彰し、記念品を贈った。平成9年度5月総会にて、各校に記念ポスターを配布し50周年記念事業を盛りあげる。9月10日橿原陸上競技場で、柿本善也奈良県知事、天根俊治教育長や歴代会長をはじめ、多数の来賓のご臨席のもと、加盟校61校、約5,000人が参加し、井阪雅宥副会長の開会宣言で、50周年記念総合開会式が始まった。

第50回奈良県高等学校総合体育大会

開会式の後、奈良工業「和太鼓」添上高校「組立体操」天理教校「マーチングドリル」郡山高校「集団演武」バトン連盟「バドントワリング」の協力を得て、公開演技を盛大に行った。さらに、高体連50周年記念事業の一環として、32専門部の優勝カップを新調し、記念誌を発刊した。

＜高校総体の栄光＞

昭和63年以降、年を追って、その足跡を振り返ってみた。団体・個人ともに年度別に、1位のみにし、記録は割愛した。

昭和63年度、ボクシング団体初優勝（王寺工）、個人でフライ級・本川昭久（王寺工）ウエルター級・和田元善（王寺工）ミドル級・渓和也（王寺工）が優勝。ソフトテニス男子個人優勝、博村・長手（高田商）

平成元年度、柔道男子団体優勝12回目（天理）。

平成2年度、ラグビー優勝5回目（天理）、ソフトテニス男子個人優勝南森・村中（高田商）ホッケー男子優勝4回目（天理）、陸上競技男子総合優勝2回目（添上）

平成3年度、陸上女子個人円盤投優勝三浦靖子（添上）、ソフトテニス男子団体優勝7回目（高田商）、ソフトテニス男子個人優勝山本・村中（高田商）、柔道男子団体優勝13回目（天理）

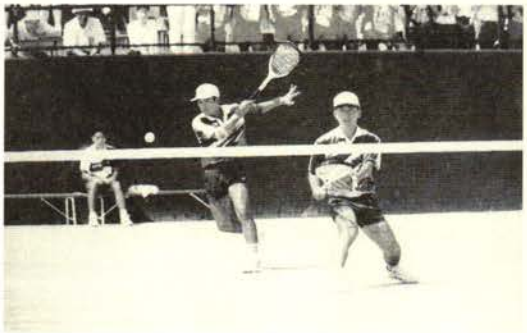
平成4年度、陸上男子400m優勝安井勇治（添上）、弓道男子団体初優勝（西の京）、ホッケー女子初優勝（天理）、ボクシング個人ライトフライ級優勝辻本和正（奈良工）

平成5年度、陸上競技男子総合優勝3回目（添上）、陸上男子400m優勝安井勇治（添上）、男子4×400mR優勝（添上）、女子円盤投優勝高間真理（添上）、ソフトテニス男子団体優勝8回目（高田商）

平成6年度、陸上競技男子総合2連覇通算4回目の優勝「優勝得点更新76点。」（添上）、陸上男子100m優勝高橋和裕（添上）、200m優勝高橋和裕（添上）、400m優勝島木常道（添上）、男子4×100mR優勝（添上）、男子4×400mR優勝（添上）、男子8種競技で6005点の高校新記録で優勝安井亨（奈良）、「高橋和裕が200mで20秒57の日本新記録を樹立。また、全国高校総体で、4種目制覇は史上初である。」ソフトテニス男子団体2連覇、通算9回目の優勝（高田商）、柔道男子個人「重量級」優勝村元辰寛（天理）

平成8年、ソフトテニス男子団体優勝10回目（高田商）、男子個人優勝東・渡邊（高田商）、

陸上競技男子三段跳越智宏行（添上）、フェンシング・エペ女子個人優勝池端志津香（帝塚山）　平成９年京都総体、陸上競技女子総合初優勝（添上）、女子トラック優勝（添上）、女子４×100ｍＲ優勝（添上）、ソフトテニス男子団体２連覇、通算１１回目の優勝（高田商）。平成９年８月24日までの成績とする。



ソフトテニス男子（高田商業）２連覇の瞬間

３　将来にむけて

奈良県高体連50年の確かなあゆみは、選手諸君の弛まぬ努力は勿論、熱意をもって指導された先生方と高体連を支えて頂いた多くの関係者の歴史であると言える。

21世紀を目前にし、激動する社会情勢の中、逞しく生きる若人を育成することが我々に課せられた責務であると言える。逞しく生きるためには、健康と体力が不可欠の要因であり、心の教育と体の教育のバランスをとる必要がある。体で実感し体験を通して自己を育み、自己の能力を開花させることにより、他人と連帯することが出来ると言える。その意味でも生徒の心身の健全な発達、生涯にわたるスポーツ活動の基礎、基盤づくりとなる高体連の諸活動は、重要かつ意義深いものである。

今日生徒数の減少に伴い、部員数・大会参加校の減少等の問題があり、今後学校における部活動のあり方、実態に応じた大会規程、高体連行事・組織の見直し等、検討すべき課題は多い。このような諸問題について、県高体連としてよりよい方向性を見いだすため、慎重に検討をしていきたい。今まで先人が築かれた輝かしい歴史と伝統を継承し、更なる高体連の発展充実のため関係者が心を一にして努力を積み重ねる所存である。

インターハイの思い出

高　橋　和　裕

早稲田大学　３年

平成６年、富山インターハイにおいて100ｍ・200ｍ・４×100ｍ・４×400ｍで４冠達成添上高校男子総合２連覇（通算４回目）の原動力となる。また、この年200ｍにおいて20″57の日本新記録を樹立する。

創立50周年、おめでとうございます。

私のインターハイの優勝というのは、高校１年生の入学当時の目標でありました。しかし、入学当初は、インターハイの入賞までもほど遠いような平凡な選手だったと思います。しかし、私自身、陸上競技を愛する心と、“絶対”目標達成してやるという気持ちだけは、誰にも負けていなかったように思います。

体の小さい私には、人並以上のトレーニングと、強い精神力を持たなければならないという事が目標達成の必須条件である事を教えてくださったのが、澤田先生（現、奈良商業高校教頭）と、北森先生（円盤投げ日本記録保持者、現、桜井高校教員）でした。私は、この２人の恩師との出合いにとても感謝しています。その出合いと指導、トレーニングのおかげで、高校３年生の時、猛暑の中行われた富山インターハイで、100ｍ、200ｍ、４×100ｍ、４×400ｍの４種目に優勝、史上初の４冠をなしとげることができました。

そんな私は、早稲田大学に入学し、陸上部員として、日々トレーニングに励んでいますが、この２年半、環境の変化やケガなどで、歯車がうまくかみ合わない日々のくり返しで精神的につらいことも多々ありました。でも私はそれを克服しなければならないと思いますし、克服できると思います。

最近は調子も上がってきて、だんだんと歯車が合ってきたように思いますが、“復活”はしません。リニューアルされた高橋和裕を作りたいと思っています。

2000年のシドニーオリンピックを“夢”ではなく、“目標”にして…。

和　歌　山　県

《事務局》
〒640-8464 和歌山県和歌山市市小路388
県立和歌山北高校内
TEL 0734（53）3657
FAX 0734（53）3657

創立年月日：昭和23年4月1日

加盟校数		62校
専門部数		33専門部
加盟部数		897部
部員数	男子	6,627名
	女子	4,209名
	合計	10,836名

年度	会長	理事長	記事
23	萩野　俊夫	辻井　忠治	発足、事務所県教委内
24	〃	〃	事務所桐蔭高校に移転
25	〃	〃	
26	〃	野田聖太郎	柔道、バドミントン加盟
27	〃	〃	
28	内藤　俊彦	〃	剣道加盟
29	〃	〃	高体連誌創刊号発刊
30	〃	〃	
31	〃	〃	
32	〃	〃	
33	〃	〃	弓道加盟
34	〃	〃	
35	〃	〃	
36	小林　貞雄	〃	
37	〃	〃	
38	〃	〃	
39	〃	〃	
40	福井　栄一	〃	県下全高校が加盟登録
41	〃	岩西　宏純	
42	衣笠　一二	砂子　寿弘	全国高校総体ハンドボール開催、研究部設置　レスリング、ホッケー、漕艇、ウエイトリフティング加盟
43	〃	〃	
44	〃	〃	フェンシング加盟
45	〃	〃	全国高校総体10種目開催
46	〃	〃	
47	〃	〃	
48	九鬼　貴男	砂子　寿弘	規約改正
49	〃	〃	ヨット加盟
50	〃	慈幸　嘉一	
51	〃	〃	研究部報第1号発刊
52	〃	〃	高体連誌30年記念号発刊
53	〃	〃	
54	〃	〃	全国高校総体レスリング開催
55	〃	〃	研究部県教育研究奨励賞受賞
56	〃	古谷　多市	全国高体連研究大会開催
57	〃	〃	
58	〃	〃	
59	〃	〃	
60	〃	〃	空手道加盟
61	〃	〃	研究部報10周年記念誌発刊、なぎなた加盟
62	〃	〃	
63	菅谷　茂	笠原悌二朗	
元	〃	〃	自転車競技加盟
2	岡本　勝	〃	
3	〃	〃	アーチェリー準加盟
4	阿部　健男	〃	ボクシング準加盟
5	〃	〃	
6	前田　良蔵	〃	カヌー加盟
7	古谷　多市	中　公之	
8	〃	〃	
9	〃	山本　良和	
10	〃	〃	

1 沿 革

昭和23年5月10日、会長萩野俊夫光風工業高校長、副会長佐藤要三粉河高校長・山田喜三郎田辺高校長、理事長辻井忠治桐蔭高校教諭の陣容で、県教育庁指導課内に事務所を置き、高等学校係小池順逸氏の協力を得、種目別専門部13部（陸上、体操、水泳、相撲、卓球、バレーボール、バスケットボール、ハンドボール、サッカー、ラグビー、硬式野球、軟式野球、ソフトボール）で発足する。

昭和24年度、高体連は、高等学校の自主性により運営すべきとの立場から、事務所を理事長在任校・桐蔭高校に移転。種目別専門部に庭球、軟式庭球、登山、ダンスの4部を加え、17部となる。

昭和26年度、種目別専門部に柔道、バドミントンの2部を加え19部となる。

昭和28年度、種目別専門部に剣道を加え20部となる

昭和29年度、昭和30年3月15日、高体連誌創刊号を発刊する。

昭和33年度、種目別専門部に弓道を加え21部となる。

昭和40年度、全県定時制が一括加盟。また近畿大学附属高校の加盟により、県下公立・私立および定時制・通信制の県下全高校が加盟。

昭和42年度、全国高校総合体育大会高松宮杯第18回全日本高校ハンドボール選手権大会を紀三井寺運動公園陸上競技場および桐蔭高校グランドを会場として開催。種目別専門部の中に研究部を位置づけるとともに、レスリング、ウエイトリフティング、ホッケー、漕艇の4部を加え26部となる。

昭和43年度、県高体連臨時総会（10月29日開催）において、昭和45年度全国高校総合体育大会総合開会式および、陸上競技、水泳競技（競泳・飛込）体操競技、バスケットボール、バレーボール（女子）相撲、柔道、弓道、ウエイトリフティング、サッカーの10種目開催を決定。

全国高体連秋季理事会（11月22日開催）において、昭和45年度全国総合体育大会を和歌山県中心に開催することが内定される。

昭和44年度、種目別専門部にフェンシングを加え27部となる。

全国高体連春季理事会（6月3日開催）において、昭和45年度全国高校総合体育大会を和歌山県中心に開催することが正式決定される。

昭和45年度、全国高校総合体育大会を8月2日～22日、4市1町で開催。

45インターハイ

昭和46年度、第26回国民体育大会（黒潮国体）が県内各地で開催される。

昭和48年度、4月24日定期総会において、連盟規約の一部改正。抜本的な組織改革を実施。

事務局規程を制定、事務局に、総務、広報、競技、研究、および定通・分校の5部を設置する。研究部はダンス部を含めて独立、競技部に属する種目別専門部は25部となる。

事務局を和歌山北高校に移転する。

昭和49年度、種目別専門部にヨットを加え26部となる。

昭和51年度、研究部報第1号を発刊する。

昭和52年度、創立30周年を記念して、高体連誌30周年記念号を発刊。歴代理事長による「高体連30年を振り返って」座談会を開く。

昭和54年度、全国高校総合体育大会レスリングが和歌山市で開催される。

昭和55年度、研究部活動の実績が評価され、和歌山県教育研究奨励賞（団体）を受ける。

昭和56年度、昭和57年2月17～18日、第16回全国高体連研究協議会が、初めて東京を離れ和歌山市で開かれる。

昭和60年度、種目別専門部に空手道を加え27部となる。

昭和61年度、種目別専門部になぎなたを加え28部となる。

研究部発足20周年、部報発行10号を記念して、研究活動集録「いのち輝け」を発行する。

昭和62年度、15年に渡り会長職に就いた九鬼

貴男（S48～62）が本年を持って退職により職を離れる。

2　10年の歩み

昭和63年度、加盟高等学校分担金の金額を、全日制高校生徒一人当たり年額160円を350円に値上げする。

種目別専門部に少林寺拳法を加え29部となる。

全国高校総合体育大会フェンシングが和歌山市で開催される。

和歌山県高体連見舞金規程作られる。生徒の公式試合参加時における、事故・災害に対して県高体連として見舞金を給付する。基金5百万円、死亡時30万円を限度額とする。

平成元年度、種目別専門部に自転車競技を加え30部となる。

平成3年度、種目別専門部にアーチェリーが準加盟し、正加盟30部準加盟1部となる。

総会において、県高体連50年誌の発行方針決定。

県高体連連盟旗新装デザインを募集。

応募者総数81名

最優秀賞　市立和歌山商業高校3年
川　崎　道　子

デザイン趣旨

「地色は、明日へ伸びゆく若さを象徴するもえぎ色。この緑色は自然豊かな紀州木の国をも表す。テーマは、高校生のエネルギーを誇るように、Wの文字を躍動的にデフォルメしたもの。テーマカラーは蜜柑の里、和歌山にちなみ黄橙色とした」となっている。

他に優秀賞　6点が選ばれる

7月19日、平成3年度全国高等学校総合体育大会和歌山県選手団結団壮行式、並びに県高体連連盟旗発表会

平成3年度全国高等学校総合体育大会和歌山県選手団結団壮行式

平成4年度、種目別専門部にボクシングが準加盟し、正加盟30部準加盟2部となる。

平成5年度、加盟高等学校分担金の金額を、全日制高校生徒一人当たり年額350円を480円に値上げする。

平成6年度、種目別専門部にカヌーを加え31部　となる。

平成8年度、第1回県下高等学校運動部キャプテンを対象に、キャプテン研修会を紀北地区と紀南地区に分け開催。

講　演

紀北地区

三屋裕子　バレーボール
ロサンゼルスオリンピック出場

紀南地区

小坂忠弘　陸上競歩（本県出身）
アトランタオリンピック出場

平成9年度、第2回県下高等学校運動部キャプテン研修会開催。

講　演

紀北地区

松下和幹　アーチェリー（本県出身）
モスクワ・ロサンゼルス（4位入賞）
ソウル・アトランタオリンピック出場

紀南地区

出口一也　レスリング（本県出身）
ソウルオリンピック出場
グレコローマン130kg級6位入賞

全国高体連研究協議会において「キャプテン研修会」について発表。

平成10年度、規約を一部改正。

新事業として、高校スポーツ活動写真コンクール（高文連と共催）の開催を進める。

3　将来に向けて

本県の高校スポーツの将来を考えるとき、日本におけるスポーツの変化を考えねばならない。

現在の日本に第3の大きな変化の波が押し寄せている。第1の江戸から明治への文明開化の波。第2の、敗戦によりすべてを失い復興への波。そして今、経済の低迷、政治の混乱、官民の汚職、企業・金融の倒産、ビッグバンそして教育の荒廃などなど、解決への方向性を模索している大きな変化の時期であります。

スポーツにおいても同様に、大きな変化の

時代を向かえています。

（1）スポーツのプロ化

オリンピック等へのプロ選手の参加やプロとアマの境界線が定かでなくなり、アマチュアという言葉が死語になりつつある。日本においても、従来のプロスポーツ以外にサッカーのJリーグをはじめ他の種目にも、プロ化　が進められている。

（2）スポーツの商業化、金銭化

スポーツイベントは儲かる商売となり、オリンピックはもとより、今世界を湧せているワールドカップサッカーをはじめ、すべてのスポーツイベントが放映権料、入場料、広告料、賞金、関連グッズなど、今後ますます進む傾向にあり、巨額の放映権料やスポンサー料が大会運営を左右するようになってきた。

（3）ニュースポーツの増加

誰もが楽しめるというニュースポーツが市民権を得るようになり、各地で人の輪ができ、オリンピックなどにも採用されてきた。

（4）「見る」スポーツと「する」スポーツの分化

スポーツをドラマとして見て楽しむ者と自分が競技者としてやる者との、二極分化が進んでいる。また「するスポーツ」でも、記録を競う競技スポーツと楽しみを主体とする生涯スポーツとの分化も急速に進んでいる。

（5）学校スポーツの変化

日本のスポーツは、まず学校に入り発展した。このことはスポーツの精神主義や型にはまった指導となり、教育的な視点が強調された。

今、日本のスポーツ全体がが大きく変わろうとする中、学校でのスポーツも幅広く検討せねばならない時期にきている。

（ア）学校教育活動としての高校スポーツのあり方はいかにあるべきか。その限度は。
（イ）学校対抗の大会のあり方でよいのか。
（ウ）高校スポーツと経費はどうあるべきか。
（エ）大会の経費はどうあるべきか。
（オ）地域スポーツと学校スポーツの関係はどうあるべきか。
（カ）学校の部活動が選手強化にどうかかわればよいのか。

今後、高体連がどのように考え、どのような方向づけをし、どう進むべきか、早急に解決せねばならないであろう。

私とインターハイ

森　山　幹　弘

和歌山北高等学校卒業
中央大学商学部卒業
平成4年度全国高校総体
フェンシング競技
男子フルーレ個人優勝

今から8年前、私は高校に入学しフェンシングを始めた。フェンシングは、経験者も少なくみんなスタートは同じだった。毎日の練習は厳しく、ヘトヘトになって帰宅した。

初めて試合を見たのは、1年生の5月、近畿大会であった。先輩達は、個人、団体共に優勝もしくは上位入賞と好成績を収めた、応援していた私達はその熱気と成績に感動し、これから自分達も頑張らねばと思った。

それから2年、私達は厳しい練習、試合を積み重ね、私は、夢にまで見たインターハイに個人で2種目と団体に出場することができた。

インターハイの開会式が始まり、試合もいよいよ明日からという雰囲気が私達のまわりを冷たくあるいは心地よく包んだ。

試合が始まり、みんな緊張していたが、私は、今までの練習量と自分を信じ、あまり緊張はしていなかった。それもあって、1位で二回戦に進出できた。私はこの時とても満足感があった。そのせいで気がゆるんだのか二回戦では1敗してしまった。しかしどうにか三回戦に駒を進めた。ここでは、全国の層の厚さを知った。みんな強かった。「自分ができる事は、精一杯自分の力を出す事だ」と思った。後悔する試合はしたくない。その時上位入賞の目標を捨て、「自分のフェンシングをする」が目標に変わった。

何とか決勝トーナメントに進み、無欲のまま自分のフェンシングをしていると、いつの間にか決勝戦まできていた。ここでも、負けてもいいから精一杯自分のフェンシングをやろうと思った。先生のアドバイス、それと相手が緊張気味なこともあって、落ち着いていた私は優勝することができた。夢にまで見たインターハイに出場し、その上優勝までした私はとても幸せである。それまで私を支えてくれた両親、先輩や友人、厳しくご指導下さった先生に心から感謝しています。

鳥　　取　　県

《事務局》
〒690-8528 鳥取市布勢146-1
布勢陸上競技場内
TEL 0857（28）4991
FAX 0857（28）4991

創立年月日：昭和23年4月1日

加盟校数		36校
専門部数		35専門部
加盟部数		743部
部員数	男子	6,389名
	女子	3,778名
	合計	10,167名

年度	会長	理事長	記事
22	金田　重雄	竹中　勇	鳥取県高体連発足
23	〃	〃	
24	〃	〃	
25	〃	〃	
26	福田　邦雄	明石　太郎	
27	〃	〃	
28	〃	大久保秀蔵	
29	〃	〃	
30	〃	大西　正之	
31	有福　友好	〃	第9回全国高校バスケットボール大会開催
32	〃	〃	
33	〃	〃	
34	西村　実義	大久保秀蔵	県高体連誌増刊号発刊
35	〃	〃	全国高校漕艇選手権大会開催
36	〃	大西　正之	第10回全国高校柔道選手権大会開催
37	〃	〃	
38	〃	大久保秀蔵	
39	佐々木勘一	〃	
40	山本　嘉将	〃	県高体連事務局設置
41	〃	〃	第1回県高校総体開催
42	〃	〃	
43	〃	〃	第12回全国高校登山大会開催
44	西本　真一	大西　正之	県高体連20年誌発刊
45	〃	〃	高体連旗制定使用 各専門部長は校長
46	〃	宮脇　通明	総体派遣費県より助成
47	〃	〃	大山スキー国体開催

年度	会長	理事長	記事
48	前田　忠雄	宮脇　通明	
49	〃	〃	
50	亀屋　重愛	寺坂　茂治	
51	〃	〃	通信制新規加入
52	内田　義行	〃	全国総体3種目開催
53	加藤　潔	〃	高体連誌20号発刊·(特集)歴代役員等
54	〃	〃	ホッケー専門部加入
55	〃	〃	強化種目の学校指定
56	〃	西垣　正美	アーチェリー専門部昇格
57	〃	〃	
58	武信　弘	伊藤　寛重	高体連事務局移転
59	〃	〃	全国総体実行委設立
60	〃	〃	「わかとり国体」開催
61	岩本　温親	高浜　穆史	全国総体3種目開催
62	小谷　英一	宮部妃佐雄	空手道専門部加盟
63	〃	〃	
元	松田　信穂	〃	
2	〃	〃	
3	山田　廉	〃	第41回全国高校スキー大会開催
4	〃	〃	
5	〃	〃	なぎなた専門部加盟
6	足立　猛	佐々木政顕	
7	〃	〃	全国高校総体が鳥取県を主会場として中国5県で開催
8	〃	〃	
9	田中　昭文	前田　達雄	高体連事務局を布勢総合運動公園内に設置
10	〃	〃	

1 沿 革

昭和20年、戦後まもなく、本県は全国トップを切って大会を開催し、22年の学制改革によって、新制高等学校体育連盟が発足、同年、初代金田会長のもと鳥取県高等学校体育連盟を発足させる。以来50年の間、幾多の困難を克服し、主体性の確立に努め、本県体育スポーツ界の核的存在に成長している。

昭和24年には鳥取地区で、26年には鳥取・倉吉・米子の3地区で、それぞれの地区に応じた種目によって地区高校総体の形で、全県下の高校生が参加し三地区大会が開催された。その後43年に至り諸般の情勢によって中止、もしくは変則的開催、45年に中止の止むなきに至った。三地区大会が、なごやかに開催され安定しはじめた29年頃より、新人戦が開催され始めている。その後新人戦は、高体連・競技団体共催の形で開催されるようになり、現在に至っている。

昭和31年、本県としては始めての全国大会である第9回全国高校バスケットボール選手権大会が鳥取市において開催される。

発足より10余年を経た34年、高体連誌発刊の機運が盛り上がり、翌35年念願の機関紙「鳥取県高体連」創刊号が90ページの内容で発刊された。現在では、約500ページにも及ぶ第38号まで発刊し、本連盟の歩みを知る貴重な資料となっている。またこの年、米子市において、全国高校漕艇選手権大会を開催し、翌36年には、第10回全国高校柔道大会を鳥取市で開催している。昭和38年、自転車・体操・ボート・スキー等、県選手の活躍が目立った年であった。また、この年、全国高体連は、開催地・開催期日等を統制し全国高校総体を開催した。本県においても、昭和41年、全国や中国から遅れはしたが、第一回鳥取県高校総体を鳥取地区で開催した。以後、東部、中部、西部地区の順に持ち回り開催とし、平成10年度は第33回を迎えている。

昭和43年、国立公園大山において第12回全国高校登山大会が開催される。

昭和44年、県高体連発足当時の様子がわかる県高体連20年誌が、関係者の努力により発刊される。

昭和45年、新高体連旗が作成される。

昭和46年、県高体連の運営も順調に進む中、レスリング、庭球が専門部に昇格、小県にして26の専門部をかかえる高体連組織となる。

昭和47年、第27回冬季国体が、国立公園大山で開催され、県民のスポーツに対する関心も一段と高まり、秋季国体誘致の動きが始まり、高体連の果たす使命も重大なものとなってくる。

昭和50年代に入り、定時制が27番目の専門部として新加入し、51年には県高校総体にヨット、自転車が初参加、参加選手も4,000人を越えた。さらに、鳥取西高、米子東高の通信制が加盟し、本県代表として、全国大会に初参加する。

昭和52年、岡山県を主会場とする全国高校総体のうち、卓球・バレーボール（女子）・ボートの3種目が本県で開催され、成功裡に終了する。また、この年専任の書記を設ける。

昭和53年、歴代役員の受賞者を特集した「高体連20号」を発刊。この年、ウエイトリフティング・自転車が専門部に昇格した。この頃より、第40回国体「わかとり国体」に向けて、国体準備室の設置、県民総スポーツ運動推進委員会の発足、また、高体連にも新しく強化事業補助金が県より交付され、全県一丸となった国体ムードが高まりをみせてくる。また、56年には、県教育委員会内に選手強化対策本部が設けられ、引き続き強化コーチ・選手の指名等、国体に向けて動きが激しくなる一方、県高体連も、選手強化や未普及競技の普及発展に努力する中、54年にホッケーが、56年にアーチェリーが専門部として新加入する。

昭和60年待望の「わかとり国体」では、成年に劣らず高校生の活躍も素晴らしく、天皇杯、皇后杯の獲得に大きく貢献し、「やればできる」という自信を全県民に与えることとなる。

総合開会式で選手宣誓中山三枝選手（空手道）

国体の大事業に引き続いて、山口県を主会場として開催された61全国高校総体において、本県は、新体操、ソフトボール（男子）、漕艇の3種目を開催し、新体操で智頭農林高と鳥取

西高が見事団体アベック優勝を遂げている。

昭和62年、空手道が新加入し33専門部となる。またこの年、昭和70年（平成7年）全国高校総体の鳥取県開催が内定され、全国高校総体へ向けての胎動が始まる。

2　10年の歩み

平成3年度

平成3年度第41回全国高校スキー大会を鳥取県大山町大山スキー場で開催し、多大の成果を収め無事終了する。

平成7年度全国高校総体開催準備のため県教育委員会体育保健課内に2名の体育主事を配置する。

静岡総体において水泳高飛込で宮本基一郎選手（米子高校）がインターハイ2連覇を達成する。

平成4年度

「平7高校総体」準備のため5名の体育主事を体育保健課内に配置する。

宮崎総体において陸上競技の中原大輔選手（由良育英高校）が1500m・5000mで優勝、富田学選手（由良育英高校）が110Hで優勝し、由良育英高校男子が3回目の総合優勝、さらにウエイトリフティング67.5kgで升田友也選手（鳥取西工業高校）が総合優勝、宮本基一郎選手（米子高校）が水泳飛込で優勝するなど、大活躍をした。

また、京都での全国高校駅伝において、由良育英高校が準優勝に輝いた。

平成5年度

県教育委員会事務局内に全国高校総体推進室を設置する。

「なぎなた専門部」が加入し35専門部になる。栃木総体において陸上競技の石波清志選手（鳥取西高校）がやり投優勝、相撲個人で田宮啓司選手（鳥取城北高校）が優勝する。

平成6年度

全国高体連理事会において、「平7高校総体」の日程・競技会場・宿泊・総合開会式等の要項、競技別実施要項が承認される。また、全国高校なぎなた選手権大会の鳥取県岸本町開催が承認された。

富山総体において陸上競技の石波清志選手（鳥取西高校）がやり投で2連覇達成、水泳の高飛込で宮本幸太郎選手（米子西高校）が優勝、弓道男子団体で倉吉西高校が優勝する。

平成7年度

高体連事務局が全国高校総体終了時まで、高校総体推進室に移転する。

「集え若人はばたけ未来へ」のスローガンのもと、鳥取県を主会場として中国5県共同開催で平成7年度全国高校総体が実施される。

総合開会式において、大韓民国清州女子商業高校による集団演技を披露し好評を得る。

総合開会式で披露された清州女子商高の演技

「一人一役運動」が、本県においては「一人三役運動」を目標に、生徒諸君の奮闘により、全国より集う高校生を暖かく迎え入れる。

宿泊施設不足の本県において、不安ばかりで迎えた全国総体であったが、県下10地区温泉旅館組合・民宿施設等の協力により、県実行委員会には一件の苦情もなく無事大会を成功裡に終了する。

選手諸君の活躍も、地元開催のプレッシャーのなか、母校の名誉と自己の栄光のため、勝利を目指し青春の夢をかけて、炎天下の中、力と技を競い大会を盛り上げ、その結果、登山男子鳥取東高校優勝、相撲鳥取城北高校・新体操智頭農林高校の準優勝をはじめ、団体で10種目の入賞、また、個人では、陸上競技岡村亜希選手（由良育英高校）のやり投優勝、水泳宮本幸太郎選手（米子西高校）飛板飛込・高飛込両種別優勝、レスリング小竹宏明選手（倉吉工業高校）46kg級優勝など9種目の入賞を果たす。

やり投で優勝した岡村亜希選手（由良育英高校）

「わかとり国体」10年後の記念事業として、平成7年度全国高校総体誘致を決議し、平成3年に鳥取開催が正式に決定してから、人口わずか約61万の本県にとって、大事業であったが、全国高体連の久野猛会長をはじめ、多くの関係各位の暖かいご

指導ご援助をあおぎ、競技運営・国際交流・宿泊輸送等、一歩一歩ハードルを乗り越え、無事大会を成功裡に終了できたことは、本県高体連はもちろんのこと、鳥取県民にとって、大きな自信と財産を得ることとなった。

平成８年度

春季全国理事会において「平成16年度全国高校総体」が島根県を中心として中国５県共同開催で内定する。

全国総体のリハーサルを兼ねて行なっていた県総体総合開会式を、陸上競技部を中心に布勢総合運動公園陸上競技場で通常年にかえし実施する。

山梨総体では、全国総体実施の翌年でもあり成績を心配したが、優勝はなかったものの、13種目で入賞し例年以上の入賞を果たす。

「平成16年度全国高校総合体育大会調整準備委員会」が山口市において開催される。

平成９年度

高体連事務局を鳥取西高校から、布勢総合運動公園陸上競技場２階に移転する。

田中昭文会長（倉吉東高校）以下、事務局全員新スタッフでスタートする。

「平成16年度全国高校総合体育大会開催種目調整委員会（一次～四次）」が、松江市において開催される。

京都総体において、弓道女子個人で吉田洋子選手（倉吉西高校）の優勝をはじめ、７競技10種目に入賞を果たす。

３　将来に向けて

「平成16年度全国高等学校総合体育大会」の開催に向けて、現在、開催種目調整委員会で各県での開催種目を調整中であるが、本県での開催種目（原則３種目開催）の準備のため、主管課等と十分協議の上、「平７高校総体」の経験をふまえ鋭意準備を進めている。

また、全国的な少子化現象は本県にも及び、平成13年度より高等学校の統廃合が始まり、加盟校の減少、加盟生徒数の減少は避けることはできない。今後、予算、大会運営など、いろいろな点で問題が生じてくるが、本県高体連としては、心身共に健全な青少年の育成を、部活動をとおして図るよう、ますます創意工夫し、今後の高体連の発展につながるよう決意している。

《写真提供》新日本海新聞社　山陰中央新報社

高校総体という目標を目指して

升田友也

昭和50年２月生まれ。平成２年、鳥取県立鳥取西工業高校入学と同時にウエイトリフティング競技を始める。高３で高校総体、選抜大会、国体の３冠を達成。早稲田大学に進学後全日本学生個人戦で準優勝、全日本大学対抗戦で３位の成績を収める。現在、鳥取県体育協会体育指導員としてウエイトリフティング競技の普及発展に努める。

高校総体というのは、高校生にとって特別なものである。全国の高校生が共通の目標を持つことにより、あるものは泣き、あるものは笑う。高校生活で最も大きな大会である高校総体に出場するために、日々トレーニングを繰り返し、一つの事を続ける大切さを部活を通して知る。目標を達成することの難しさ、達成した後の達成感、様々な思いが高校総体という舞台に飛び交う。

高校総体は、私にいろいろな経験をさせてくれた。自分を信じること、人を信じること、感動、挫折…。生きる上で大切なことを教えられた。社会の波にもまれても、このような経験があるから乗り越えられるのだと今になって感じている。

とにかく高校時代はがむしゃらにトレーニングをした。「己に克つ」ことを目標にし、以前の自己記録より少しでも上回ろうと、一生懸命だった。成績が良い、悪いというのは気にしない。ただ心残りのないよう、試合に全力を尽くすだけ。どんなに努力しても３回しか出場できない中で、どれだけ悔いの残らない試合ができるかが高校総体の魅力の一つであろう。

３年生の時、私と合わせ７人の部員がいた。皆が揃って県高校総体において標準記録を突破することが最大の目標だった。誰一人あきらめることなく全力を尽くした結果、７人全員が全国高校総体に出場することができた。３年間苦楽を共にした同級生と一緒に出場できたことが嬉しく、個人競技であるウエイトリフティングだが、７人の気持ちが一つになった大会であったと思う。この大会で全員が一丸となり、試合に全力を尽くすことの大切さを学んだ。

今、学校でさまざまな問題がクローズアップされている。その中でスポーツは、一筋の光ではないだろうか。この高校総体を目標にすることにより、明るく、楽しく、意義のある高校生活を送ってほしいと思う。

島　　根　　県

《事務局》
〒690-8528 松江市古志原4丁目1番10号
県立松江工業高校内
TEL 0852（26）3842
FAX 0852（26）3695

創立年月日：昭和24年2月10日

加盟校数		58校
専門部数		37専門部
加盟部数		781部
部員数	男子	8,764名
	女子	5,455名
	合計	14,219名

年度	会長	理事長	記事
23	松本　博	永井　康宏	県高体連創立
24	吉田　正男	〃	第1回代議員会開催
25	〃	森脇　勤	
26	鎌田　武	藤井　勇	全国高校選手権(男子バレー)開催
27	吉田　正男	早田伊勢松	
28	吉田　元吉	小沢　卓	
29	〃	〃	
30	松浦　俊明	藤井　勇	会長、県体協副会長に就任
31	〃	〃	
32	〃	〃	全国高校選手権(女子バレー・バド)開催
33	〃	〃	
34	志岐　実翁	早田伊勢松	
35	木島俊太郎	〃	
36	辻原　弘一	目次　国雄	
37	〃	〃	
38	〃	〃	第1回県高校総体及び総合開会式開催
39	〃	〃	「高体連誌」創刊号発行
40	高橋恵三郎	成相　定義	ハンドボール専門部設置
41	〃	〃	
42	〃	〃	ヨット専門部設置
43	〃	〃	
44	飯塚　一雄	藤井　勇	
45	〃	〃	フェンシング・自転車・硬式庭球・ウェイトリフティング専門部
46	瀬尾　正三	林　正雄	副読本「高校体育」発刊
47	〃	〃	
48	〃	〃	定通制加盟
49	〃	〃	県総体3地区分散開催、総合開会式中止
50	高橋　忠	〃	
51	仲佐　菊夫	高尾　茂	
52	〃	〃	全国総体3種目開催、ダンス専門部設置
53	仲佐　菊夫	高尾　茂	ラグビー専門部設置
54	〃	〃	ホッケー専門部設置
55	今岡　登	実重　清次	
56	〃	〃	カヌー専門部設置、県総体前後期分散開催
57	三浦　富登	〃	「くにびき国体」開催
58	畑　栄	飯塚　孝	
59	〃	〃	
60	〃	〃	
61	花田　要	〃	全国総体3種目開催
	飯田　光	〃	
62	〃	〃	
63	〃	〃	
元	稲村　榮一	井山　充弘	空手道専門部設置、県高体連創立40周年、「高体連40年の歩み」発刊
2	佐々木季治	〃	
3	高橋　肇	小西　益之	中・高指導者研修会開始
4	〃	〃	中・高合同合宿開始
5	岩成　秀彦	〃	ボクシング専門部設置、県総体一期開催
6	〃	〃	
7	〃	〃	全国総体7種目開催、松江高専加盟、記念文集「はばたけ若人」発刊
8	〃	〃	H16全国総体(島根県主会場)開催順位決定、会費値上げ
9	森脇　健臣	荊尾　俊	アーチェリー・ライフル射撃専門部設置、松江養護加盟、中国高体連事務局(H10迄)
10	〃	〃	H16全国総体開催種目決定(中国5県)、県高体連創立50周年、記念総合開会式、メモリアル展、記念パーティー、「50周年記念誌」発刊、県総体学校対抗A・Bグループ方式となる　加盟校58校、専門部37部、会員2万9千

1 沿 革

昭和23年6月全国高等学校体育連盟が結成されたが、当時の県体育課長上田精一、体育担当主事山根弘義は、県高等学校体育連盟設立を提唱し、これを受けて、松江一高校（現松江北高校）校長松本 博、松江商高校長山本龍一及び中島正元、永井康宏他松江市内高校体育教官らが中心となり、慎重に協議を重ねた。その結果、昭和24年2月10日松江市立高校において、設立準備委員会が結成され、県下高校生のスポーツの向上発展を願って、県高体連の誕生を見た。その後、高校生の競技人口・指導者のかかわり等の実績から、昭和30年、時の会長松浦俊明（松江工業高校長）が、県体協副会長に選任され、県高校体育の振興に向かって前進して行った。

昭和38年度は、県高体連として記念すべき年であった。それは、一人前に成長した県高体連が、島根県独自の主体性をもって、県高校総体を開催したことである。この年、念願の機関誌「高体連」創刊号が発行された。その中で、初代理事長永井康宏（元島根大学教授）が述べているごとく、（1）体育の運営管理指導を合理的、科学的に（2）クラブ活動の正常化（3）体育の一般化などの理念と構想の下に誕生した県高体連が、スポーツを一般化する方途としての県高校総体を開催した意義は大きい。

昭和38年第1回島根県高等学校総合体育大会開会式（松江市営陸上競技場）

昭和38年6月、松江市営陸上競技場に、市内高校生全員1万数千人を集めて、華々しく総合開会式を行った。以来、年毎に参加数が増加し、第6回大会は初の石見地区開催となった。第8回・第11回大会も石見地区開催となったが、昭和40年には参加チームが増加してきたため、同一地区同時開催は困難となり、第12回大会より各種目を各地区毎年ローテーションにて開催することとし、現在に至っている。ちなみに、第13回大会は第1回大会の2倍の参加者6616名にも及んでいる。

この間、オリンピック東京大会の影響もあろうが、各種目とも活気を帯びて、高校代表選手の活躍は目覚ましいものがあった。全国水準に達した種目、それ以上のレベルを保持する種目が増えてきたことは、まことに喜ばしいことであった。また、高体連のトップレベルの向上に努力すると同時に、高校生のスポーツ人口の増加を図ることや、これらクラブ選手以外の大多数の生徒の体育「高校スポーツの普遍化」について、更に今後研究を重ねて行かねばならない。このように、県高体連が着実な前進と発展を続ける中で、54年島根国体を目標として、昭和48年中国高体連理事会で、バスケットボール（松江）、弓道（大田）、相撲（掛合）の3種目の本県開催が決定し、昭和52年に関係者の多大な協力を得て実施された。

一方、昭和57年第37回「くにびき国体」を開催、「燃えよ総合優勝へ力の限り」のスローガンのもと、念願の天皇・皇后両杯を獲得して幕を閉じた。少年の部では、夏季大会の水泳・カヌーをはじめ、秋季大会の体操・軟式野球 ・馬術・ライフル射撃・山岳・銃剣道の1位をはじめ、少年男子は24、少年女子は12の競技に入賞して、本県得点の50%を占め、その責を果たすことができた。

昭和55年5月中国理事会において、昭和61年度全国高校総体の中国ブロック開催を決定し、昭和57年10月本県では、体操（浜田）・自転車（大田）・水泳（松江・江津）の3種目開催が決定した。その後、各開催市教育委員会等の協議により、開催市の実行委員会事務局を高校に設置することとなり、昭和60年2月県実行委員会設立総会が開催され、開催年の昭和61年は、立派な大会運営と多くの業績を残して無事終了した。

2　10年の歩み

昭和62年4月、県高体連代議員会において、「70全国高校総体」誘致を決議したが、鳥 取県と競合し、同年11月中国高体連理事会において、主会場県は鳥取県に決定した。

国体を先に開催した島根県が当然全国総体の主会場県となることを確信していたが、諸般の事情から、鳥取県が先となり、また、元号変更により「平成7年全国総体」となったこの大会は、平成2年7月に島根県開催7種目が決定することとなった。

平成元年度は、事務局が松江商業高校から松江南高校に移り、この年、県高体連は創立40周年を迎えた。記念事業として、「40年のあゆみ」が初めて発刊され、後々の貴重な資料となった。また、平成元年～2年にかけて、「7総体」強化策として、いち早く高体連独自の長期計画に取り組み、平成3年度～7年度までの5か年間、特別会費（一人200円）を充て、7種目を中心としての全種目1回戦突破を目標とする「選手育成強化総合5か年計画」によって大きな目標ができたことは、県下高校生に夢と活力を与え、ムードを盛り上げる絶好の機会となった。

平成5年度から、県高校総体は、隔週で週5日制になったこと・学校現場からの要望等を考慮して、長年にわたる前後期制を改め、6月第1週で全種目を開催する一期開催とした。

一方、行政面では、平成5年4月、県教委保健体育課に7総体専任職員が2名配置された。

そして、7月のバレーボールを皮切りに、7種目の全国高体連専門部長の会場地視察が始まり、全国と会場地を結ぶ準備組織が本格的に動き始めた。

しかしながら、年毎に開催経費が上昇して地元負担が重くなり、会場地実行委員会事務局がなかなか決定しなかった。再三協議の結果、地元負担軽減の為、前例のない県・市町各2分の1負担により会場地市町に事務局を設置することとなった。

このように、7総体の準備がすすむ一方で、早くも平成6年1月、「16総体開催誘致申請書」を県に、2月には中国高体連に提出した。

平成6年4月、7総体県実行委員会設立総会が開催され、いよいよ大会気運が盛り上がってきた。平成6年度より組織された県下5地区の「地区推進委員会」は、県下高校生2万5千余名が「ひとり一役」を合言葉に、選手はもとより、競技補助員・花づくり・清掃活動・記念品づくり・総体ニュース作成等々それぞれの立場で島根らしさの活動が積極的に展開され、県内外の関係者から高い評価を受けた。又、長期計画に基づく選手強化が実り、3種目優勝・22種目入賞など輝かしい成績を収めた。

平成8年5月、全国高体連春季理事会において、念願の平成16年全国総体（島根主会場）の開催順位が決定した。平成16年は、57年くにびき国体以来、実に22年ぶりの全国規模のスポーツの祭典となる。

平成16年総体の決定に至るまでには、未開催県である九州4県と島根の激しい競合があり難航したが、九州各県の理解と中国4県の絶大なる協力があったが故に円満解決するに至った。7総体も終了し、今度は、平成16年という新たな目標が生まれたが、一方で、生徒減・物価上昇等による財政難に直面し、9年間据え置いてきた会費の値上げに迫られることになった。これは、現行の1.7倍という思い切った値上げとなったが、概ね10年は値上げしないこと、増収分は50周年記念事業や16総体準備のために生きた運用とする等の基本方針が打ち出された。

一方、平成9・10年度の2か年、中国高体連事務局が島根の当番となり、平常業務以外に平成16年全国総体開催準備のリーダーシップを取ることとなった。

「16総体開催種目調整委員会」を中国高体連会長（島根）が座長となり、平成10年10月、中国高体連秋季理事会において中国各県開催種目が決定された。

創立50周年記念平成10年度島根県高等学校総合体育大会総合開会式（松江市総合体育館）

3　将来に向けて

「16全国高校総体を迎えるに当たって」

少子化、高齢化の進む島根県において、青少年の体育・スポーツ活動の推進は、県民の活力醸成に不可欠であるという共通認識から、本大会開催誘致は長年の懸案であった。

特に、前述の「平成7年全国高校総体は、県高体連と県教委が一体となり誘致に取り組んできたが、中国高体連理事会で鳥取県開催の決議がなされ、無念の涙をのんだ。しかし、その後も積極的に誘致運動が展開され、平成8年5月、全国高体連春季理事会で「平成16年度全国高校総体」の島根主会場中国ブロック開催が承認され、現在各県開催種目の調整を急いでいるところである。

さて、平成16年を迎えるに当たっては、昭和57年の島根国体以来、県高体連が久しく念願してきた「夢の祭典」であり、難題を乗り越えなければならないが、最も大きな課題について触れてみたい。

まず、（1）経済基盤の低下――バブルの崩壊で経済不況が訪れ、県市町村財政や学校教育も影響を受け、深刻化していく傾向にある。

このことは、施設整備・運営準備にも影響必至である。

（2）生徒数の減少――少子化の影響は全国的な傾向とはいえ、平成7年から16年までに、約7000人の減少が予測される。このことは、部員数の減少、指導者不足を生み出している。

（3）競技力の低下――平成16年を迎えるに当たっては、競技力のレベルアップを図り、上位で戦える力をつけなければならない。

舞台づくり、運営、地元選手の活躍が一体となってこそ開催の意義があることは、周知のとおりである。

しかし、指導者不足と指導者の高齢化が、競技力の低下を生んでいることも事実であり、更に人事異動ルールのもとで指導者の定着が図られず、伝統校が姿を消す傾向もみられる。

以上、厳しい状況の中で、平成16年全国高校総体開催業務を推進していかなければならないが、将来を見据えた部活動の改革と定着を急ぎ、平成16年全国高校総体を契機に島根の活力を再生しなければならない。

陸上競技と私

土　江　寛　裕

プロフィール（富士通勤務）
1974年、島根県平田市生れ、島根県立出雲高等学校出身、1996年アトランタオリンピック100m・400mR代表、1997年世界陸上アテネ大会100m、400mR代表、400mR38"31日本記録保持者

今の私と陸上競技は、切っても切り離せない身分証明書のようなものと言ってよい。

現在は、早稲田大学大学院で、バイオメカニクスを中心に短距離走の動きについて研究しながら、富士通陸上競技部で競技を続け、2度目のオリンピック、2000年のシドニーを目指して練習に励んでいる。このような陸上づけの生活をし、100mのレースはもう何本走ったか数え切れない。その中で2本だけ、同じような心境になって心に残っているレースがある。一つは1996年6月オリンピック出場を決めた日本選手権決勝、もう一つは1992年3位に入ったインターハイ決勝である。いつもレース前はナーバスになり、「もっと練習しておけばよかった」など消極的になり、レース中も頭が真っ白になって、いつの間にか周りが前にいるという負けパターンであったが、両方のレースとも、走る前異常な程自信があった。とてもリラックスしていて、緻密にレースパターンを計算できた。

そして、この二つにもう一つの大きな共通点があった。それは、その後の人生をがらっと変える岐路になったということである。インターハイでは、その後早稲田に進んで、スポーツ科学を学び、その成果を競技に生かすということを決心した。日本選手権では、オリンピックという、私が22年間目指し続けた目標を手にすることができたこと、その後も実業団で陸上を続けること、また、一生陸上競技に関わって行こうという決心をした。そのような私の人生にとって非常に大きな分かれ道になった2つのレースで、冷静で自分の実力を十分発揮できたということは、奇跡であり、陸上競技に深い縁と絆を感じてしまう。今後は、更に上を目指して努力し、一生陸上競技に携わりたいと思う。最後に、私にこのすばらしい陸上競技を与え、教えてくれた両親や先生方に感謝したいと思う。

岡　　山　　県

《事務局》
〒703-8278 岡山県岡山市古京町２-２-21
県立岡山朝日高校内
TEL 086（271）0264
FAX 086（271）0264

創立年月日：昭和24年３月11日

加盟校数		111校
専門部数		33専門部
加盟部数		1,584部
部員数	男子	13,269名
	女子	8,410名
	合計	21,679名

年度	会長	理事長	記事
23			11月創立結成の準備
24	高畑浅次郎	福井　行雄	３月創立、専門部16部
		山本寿喜太	12月から理事長代理
25	〃	〃	重量挙げ･山岳部加盟
26	〃	〃	柔道部加盟
27	尾坂　鶴夫	村山　　寛	調査研究部設置
28	〃	〃	三地区総体開始
29	〃	〃	しない(剣道)部加盟
30	〃	〃	弓道部加盟
31	尾野作次郎	〃	事務局を学校へ移転
32	〃	〃	駅伝部が独立
33	〃	〃	テニス･レスリング部加盟
34	〃	〃	「十年のあゆみ」刊行
35	内藤　一人	〃	副理事長制採用
36	〃	〃	４部加盟し29部
37	〃	〃	国体山陽高校総体開催
38	〃	〃	第１回県総体開催
39	〃	〃	
40	〃	〃	体力づくりへの取組み
41	篠井　孝夫	西谷　　英	
42	〃	〃	同研究指定校発表開始
43	後藤　　亘	〃	
44	〃	〃	
45	江川　清臣	三宅　悦次	ホッケー部消滅
46	〃	〃	ダンス部加盟
47	〃	赤沢　敏雄	山陽総体を第１回県総体とすることに決定
48	戸川　大六	〃	52全国総体誘致表明
49	〃	〃	52全国総体準委結成、ダンス部を女子部と改称
50	〃	〃	県高校スポーツ充実強化推進委員会

年度	会長	理事長	記事
51	大原　利貞	赤沢　敏雄	52全国総体実行委結成
52	〃	〃	全国総体開催
53	岡田　政敏	〃	全国総体記念碑建立
54	〃	〃	創立30周年記念誌発行記念式典
55	〃	長塩　健吾	
56	〃	〃	20県総体記念大会開催
57	〃	〃	規約改正、女子部改め女子体育研究指導部と改称し専門部から独立
58	森安　静雄	〃	調研集録30周年記念号
59	〃	則武　虎政	なぎなた部加盟
60	〃	〃	61全国総体実行委結成
61	槇野　昭輝	〃	全国総体４種目開催
62	中山　重義	猪原　　昭	
63	吉田　五平	大西　富男	
元	〃	〃	
2	〃	中野　靖英	少林寺拳法部加盟
3	柾木　繁男	〃	中国高体連事務局当番高教研との分離検討
4	〃	〃	県高体連表彰式開始、調研集録改め「翔」発行
5	〃	〃	ホッケー･アーチェリー部加盟
6	古市　誠祠	古河　正道	H7全国総体実委結成、高校推進委員会設立
7	馬場　克彦	〃	全国総体３種目開催、県学体連事務局当番
8	〃	森下　弘志	37全国学体研準委結成、長期競技指定強化事業
9	平田　賢治	〃	50年誌編纂開始
10	〃	屯倉　紀正	37全国学体研開催、県高体連50年誌発刊･式典

1 沿 革

昭和23年 全国高等学校体育連盟が結成され、本県にも加盟要請があり、同年11月中旬、当時県教育委員会体育課長であった福井行雄氏により創立結成の準備が開始された。

昭和24年 3月11日設立総会である最初の評議会を岡山操山高校で開き、満場一致で岡山高等学校体育連盟が誕生した。

初代会長には、高畑浅次郎氏（当時岡山第一高校長）。理事長に福井行雄氏（県教育委員会体育課長）、事務所を岡山県教育委員会体育課内においた。6月県教委体育課が廃止となり、福井氏が理事長を辞任、12月に山本氏が理事長代理となる。

昭和27年 山本氏が理事長代理を辞任し、村山寛氏倉敷青陵高校教諭が理事長となる。調査研究部を設置、機関誌として「調査研究誌」が発行され、以来年1回現在も刊行されている。県教委に保健体育課復活

昭和31年 高体連事務局を県教委から倉敷青陵高校事務室に移転する。

昭和34年 県高体連創立10周年にあたり、記念誌「岡山県高体連十年のあゆみ」を発刊し、岡山県高体連誕生前夜から、創立の経緯、予算の問題、対外試合のありかた等、創立前後の高等学校スポーツのあり方を模索した時代から、昭和37年の岡山国体開催をひかえた県高体連発展期までの記録が収集された。

昭和36年 ヨット、フェンシング、ホッケーの3専門部が加盟し29部となる。

昭和37年 第17回岡山国体の開催を記念して、山陽新聞社のご支援により、高等学校の各種競技大会を岡山市内、またはその近辺にまとめて行うことになり、名称を山陽高等学校総合体育大会として開催した。

昭和38年 前年、山陽高校総体がスタートしたが、岡山県教育委員会からの援助と協力が得られ、この年より名称を改め、第1回岡山県高等学校総合体育大会として開催されるようになり、今日に至っている。（昭和47年に、昭和37年開催の山陽高等学校総合体育大会を第1回とするよう改定された。）

昭和40年 高等学校における「体力づくり」への取り組みが始まり「体力づくり研究指定校」の制度が開始され、42年度から発表開始。

昭和46年 女子のダンス研究を主体とする会の中から、高等学校体育女子教師を組織化する機運が高まり、ダンス部が誕生した。（昭和49年女子部と改称）このことにより、初めて高体連役員の中に女子体育教師が参加し、その内容も一段と強化された。

昭和49年 2年前から昭和52年全国高校総体主会場を岡山県に誘致するための取り組みを展開、内定を取り付け、「52全国高校総体準備委員会」を結成し、同事務局を県教委保健体育課内に設置した。

昭和50年 52全国高校総体が本県を中心に開催するにあたり、これを好機として、県下高校生の心身の健全な育成を目的に、岡山県高等学校スポーツ充実推進委員会を発足させ、遠征、合宿練習、1・2年生大会等を計画し、選手の精神面の充実、基礎体力の向上、並びに技術の向上をはかった。

昭和52年 52全国高校総体が開催された。開会式は好天に恵まれ、岡山県陸上競技場にて行われた。また、大会史上初の演出であった部旗集団の行進も会場を圧巻し、大好評であった。

昭和53年 岡山県総合グラウンドに「友よ清く　仲よく　たくましく」と刻まれた、昭和52年度全国高校総体記念碑が建立された。

＝52総体記念碑＝

昭和54年 岡山県高体連が発足し以来30年が経過。また、記念誌「高体連三十年」を刊行し、昭和37年10月岡山県で開催された国民体育大会への参加、昭和52年全国高校総体の開催、各専門部の大会記録などを中心に220ページにわたり記載されている。

昭和58年 機関誌「調査研究誌」発行30年の節目にあたることを記念し、「調査研究集録」＝30周年記念号＝を発刊。

昭和60年　山口県を主会場として開催が決定されている、61全国高校総体の岡山県実行委員会が結成された。4種目の開催市町の実行委員会も順次結成され、準備が進められてきた。

昭和61年　61全国高校総体、「燃えろ　かがやけ　たくましく」を大会スローガンに、バスケットボール（岡山市）、庭球（倉敷市・岡山市）、バレーボール女子（津山市）、レスリング（鴨方町）の4種目が岡山県で開催された。折しも、「燃えろ岡山」県民運動を展開中で、選手はもちろん、役員、補助員ともに準備、歓迎、会場整備、試合運営に全力を投入し、各種目成功裡に大会を終えることができた。

昭和62年　61総体の積立金を負担金に含め、負担金増をはかり、大会費等各専門部への支給を増額した。柔道・駅伝に女子部を発足する。70（平7）総体は鳥取県を主会場とする中国五県で開催することに決定。

2　10年の歩み

昭和63年　「備蓄費」（生徒急減期対策等積立金）積立を開始する。

平成元年　平7総体についての種目調整委員会を発足し各県開催種目の調整を行う。

岡山県学校体育研究連合会事務局を平成元年度から2年ごとの持ち回りで高体連・中体連・小体連が事務局を担当する。小体連の反対はあったが県保健体育課提案で決定した。

平成2年　平7総体（鳥取中心県）の種目調整に関して各方面で審議、行政が強い決定権を持つ。岡山県開催種目ハンドボール・空手道・ボクシングにほぼ決定した。

最優秀選手受賞者の表彰式を実施することについて検討が始まる。

＝岡山県高等学校体育連盟表彰式＝

平成4年　これまで最優秀選手の表彰については、賞状・メダルを各支部の役員を通じて渡し、特別に行っていなかったが、検討の結果この年から岡山県高等学校体育連盟表彰式として役員功労賞、優秀監督への特別功労賞、全国大会優勝者の表彰等と併せて行うこととした。

平成5年　ホッケー・アーチェリーの加盟を承認する。それまでの加盟条件、3校3チーム以上の活動実績があることの条件に、「全国高等学校総合体育大会の開催種目については、この限りとしない。」を追加することを承認し、全国高校総体で実施している競技については参加手続き等の関係で規制を外し加盟を認めることとなった。全国総体等派遣費補助金が増額。

平成6年　平7全国高校総体3種目開催を控え県内全高校に総体推進委員会を設置し、体制作りを行なった。岡山県内の標語の部では、和気閑谷高校川江勝則君の「燃やせ青春、つなげ友情のかけ橋」が決まった。さらにこの年から負担金を増額し、平7全国高校総体への対応を行った。

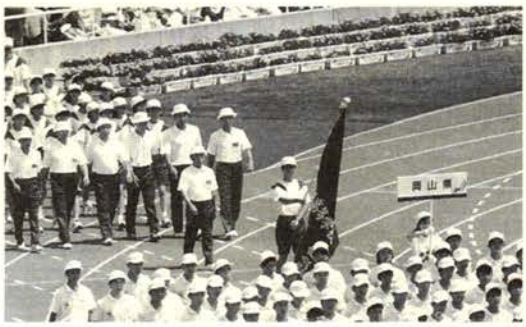
平成7年　鳥取を中心会場とする全国高等学校総合体育大会が開催され、岡山県においても岡山市でボクシング、倉敷市でハンドボール、津山市では空手道の3種目が開催された。県高体連としても高等学校推進委員会の活動で、広報活動、花いっぱい運動、激励・歓迎の懸垂幕、役員補助員の動員等陰の応援で大成功のうちに終えることができた。特に成績面でも空手道で学校対抗男女アベック優勝など輝かしい成果を納めた。更に全国高校総体後は第37回全国学体研岡山大会の準備会事務局などの仕事を行った。

平成8年　全国大会等派遣費の県補助金が増額され、更に本年から新たな強化事業として長期競技指定強化事業が3年間の継続事業として、球技関係チーム競技の7種目に実施されることとなった。これまでなかなか強化費の配分が十分でなかったチーム競技への見直しで成果が上がってくれることを望みたい。

全国高校総体の服装統一について本年が新しいデザインに変更する年に当たり選手の服装を一新しTシャツ・ハーフパンツとし、帽子もハットからキャップへ変更した。色も瀬戸内海の海の色、晴の国岡山の青い空をイメージした青を

基調として腕にマスカットのマークを配した。

平成７年度から県学校体育研究連合会の事



＝全国高校総体開会式ユニホーム一新＝

務局が高体連に移ったが、この年、平成10年度に開催される第37回全国学校体育研究大会の準備委員会が発足し、高体連本来の仕事に加えその準備に追われる日々が続いた。

平成９年　岡山県高校総体県補助金が20年振りに倍増され、各専門部の持ち出し経費や本部費など生徒急減期で負担金額が少なくなりつつあるなか大変に助かった。更にこの年から、平成11年３月の岡山県高体連創立50周年を控え、記念誌編集委員会を発足させ記念誌の編纂に取りかかった。大会記録は30年誌以後の20年を記載するが30年誌に歴史的な記載が少ないことから、歴史的なものを年表形式で記載することに重点をおいて編集することとした。また記念式典を行うことも決定した。

事務局の事務処理面で、大会費・総体費・強化費・全国大会等派遣費の専門部への支払いを総て銀行振込とした。これにより事務局の女性書記が大金を所持する危険性もなくなった。

３　将来に向けて

最後に、岡山県においては、平成16年度の全国高校総体開催、翌平成17年の第60回国体に向けて、選手強化や競技会場整備など多くの課題が残っている。高体連としては何といっても選手強化が第一の課題であるが、中でも未普及種目の新設や増強を、高体連のレベルで如何に取り組んで行くべきかなど問題も多い。

半世紀50年を振り返るとき、創設当時の意欲に満ちた先輩諸氏の熱気を少しでも汲み取り、次の時代に大いなる遺産を残すよう頑張りたい。

めざせ日本一の桃太郎

滝　本　洋　三

昭和38年、京都教育大学特修体育学科入学、空手の道を歩き始める。昭和53年に現在の山陽高校に勤務、全国大会、国際大会で33種目に優勝させている。公認七段。

「どうやったら勝てるのだろうー？」と苦悩していた時に卒業生から横11m・縦1.5mのとてつもない大きな応援旗をもらった。当時の原田雄次校長によって書かれた「めざせ日本一の桃太郎」の文字、なぜかいやがらせの様に思えた昭和58年の春であった。何とかしなくてはと、あせって見たものの、いい策はない。いっそ全国でトップの学校に合宿をお願いし、その中で勉強させてもらおう。年末に高知の明徳高校へ行き、正月には東京の目黒高校に来て頂いた。当時、毎年全国大会には出場していたが、ほとんど一回戦止まり、目黒、明徳と言えば雲の上の存在で、本来相手にしてもらえないところだが、気持ちよく応えてくれた。この２つの合宿を通して、私も生徒も、勝つとは「己に克つ」事を学び、部活動のあり方・保護者との関わり方等、全てが新鮮に感動した合宿だった。

そしてこの年、昭和59年３月、日本武道館で行われた第３回全国選抜大会で女子団体組手で優勝、男子団体組手は決勝で目黒に負けたが準優勝、そして男子個人組手、形ともに優勝し、まるで夢でも見ているような珍事が起こった。閉会式の時に日本武道館の窓から差し込む西日がまるでスポットライトの様に我が大応援旗を照らしていたのを、この間の様に思い出す。

現在のこの応援旗の周囲に大小の桃のアップリケが付けられてる。それらは国際大会、全国大会で優勝する度に付けたもので、33箇にもなった。その一つ一つにドラマがあり、その時々の歓喜が聞こえてくる。平成７年地元津山での全国総体では史上初の学校対抗男女総合アベック優勝した。その桃はまた格別の味であった。

本校の中庭に芸術院会員の松田尚之先生製作の空手の銅像（私の大学時代にモデル）がある。銅像の台座に栄光の記録が刻まれている。この像を見る度、この道一筋、多くの人に出会い、多くの事を教えられた空手道に感謝したい。

広　　島　　県

《事務局》
〒730-0011 広島市中区基町4-1
県立総合体育館内
TEL 082（223）7677
FAX 082（223）2022

創立年月日：昭和21年4月20日

加盟校数		174校
専門部数		34専門部
加盟部数		1,495部
部員数	男子	23,908名
	女子	14,030名
	合計	37,938名

年度	会長	理事長	記事
21	数田　猛雄	林　弘	広島県中等学校スポーツ連盟結成15種目
			事務所を県庁学務課(後に体育課)内に置く
22	〃	〃	
23	〃	〃	広島県新制高等学校スポーツ連盟と改称
			第1回広島県高等学校総合体育大会開催
24	宮川　造六	〃	広島県高等学校体育連盟と改称14専門部事務所を皆実高校に移転
25	〃	〃	
26	有馬政一郎	〃	廣島国体開催
27	〃	〃	
28	数田　猛雄	数田　猛雄	組織改革高体連新発足　15専門部　中途、野球部脱退
29	〃	〃	女子部・剣道部専門部昇格
30	〃	〃	定時制・駅伝・山岳スキー・漕艇・ヨット専門部昇格
			第1回広島県定時制高等学校総合体育大会開催
31	〃	〃	
32	戒能　録	木村　二郎	事務所を広島工業高校に移転
33	〃	〃	
34	金子　彪	〃	
35	〃	〃	弓道部専門部昇格
36	〃	〃	
37	木村　二郎	加藤　正照	レスリング専門部昇格
38	井上三喜夫	〃	ボクシング専門部昇格
39	〃	〃	
40	間下恭次郎	〃	研究部専門部昇格
41	〃	〃	バドミントン専門部昇格
42	〃	笠岡二三登	フェンシング・ウェイトリフティング・
			自転車競技・ホッケー部専門部昇格
43	森田　晴夫	〃	全国高校総体24種目開催
44	〃	〃	「高校保健学習」発刊、ホッケー専門部廃部
45	〃	宇都宮　満	陸上競技部と駅伝部合併し陸上駅伝部となる　定時制部
			が定時制・通信制部となる　弓道部が弓道部・アーチェ
			リー部、山岳スキー部が登山部・スキー部に分離独立

年度	会長	理事長	記事
46	宇都宮　満	山田　正明	
47	加藤　朗一	荒川　大	
48	〃	谷口　五郎	事務局広島工業高校より県立体育館に移転
49	西本　篤武	〃	
50	〃	〃	ホッケー専門部を臨時設置
51	〃	〃	
52	廣川　義信	〃	52全国高校総体2種目開催
53	〃	〃	
54	〃	伊藤　秀樹	空手道専門部昇格
55	合田　学	〃	
56	〃	〃	
57	〃	〃	
58	磯本　泰三	〃	
59	梶村　徹哉	〃	
60	〃	〃	
61	〃	〃	61全国高校総体4種目開催
62	種村　重明	吉田　善紀	
63	〃	〃	少林寺拳法専門部昇格
元	〃	〃	
2	〃	〃	事務局県税別館に移転　第25
			回全国高体連研究大会開催
3	岡田　孝章	東　昌弘	
4	松尾　俊之	〃	事務局県営グランド野球場に移転
5	脇　康治	田平　一眹	
6	〃	〃	事務局県立総合体育館に移転　盲・ろう・
			養護学校加盟　広島朝鮮高級学校準加盟
7	松田　義成	〃	平7全国高校総体1種目開
			催　なぎなた専門部昇格
8	〃	万治　功	ひろしま国体開催
9	村瀬　俊之	〃	ホッケー専門部昇格
10	〃	〃	

1 沿 革

(1) 発足から改組まで

70年間生物の生存はできないであろうといわれた原爆投下（昭和20年8月6日），戦争直後の混乱期の中から，早くも昭和21年2月10日広島市付近の中等学校体育関係者が集まり，学校体育研究検討会を開いた。そして，学徒の対外競技の弊害から生徒達を守るためには，学校関係者によって管理運営されることが望ましいと広島県中等学校スポーツ連盟を設立しようということになった。わずかの準備期間を経て，昭和21年4月20日ついに設立をみた。昭和23年4月の学制改革により，5月広島県新制高等学校スポーツ連盟と改称，再発足することになった。その翌年昭和24年5月県下高等学校は，男女共学制・総合制・学区制のもと再編成された。また，前年6月に結成された全国高等学校体育連盟と名実ともに一環制をとるため，名称を広島県高等学校体育連盟とした。昭和23年に始まった総合体育大会もこれを契機に全種目・同一日に開催されることとなった。また24年度には中国5県に結成が完了したのを契機として，中国高等学校体育連盟連合が新発足した。これは昭和28年12月13日中国5県高体連結成まで，中国各県の連絡調整の機能を果たした。

昭和28年組織改革は，・組織機構の上に一貫性を具現する，・事業内容の拡充，・運営面について，・経費について，・出場規定についてを要点としてなされ，これが現在の高体連の原型ともいわれる。その後も高体連規約，細則の改正が，行われながら時代の要求に沿った形ですすめられてきた。

(2) 全国高校総体広島大会について

(ア) 昭和43年度全国高校総体

登山以外の24種目を実施，広島大会として特色を存分に発揮し，無事盛会裡に終了する。

(イ) 昭和52年度全国高校総体

岡山県が主会場。広島県では，登山を芸北町・戸河内町・吉和町，ホッケーを広島市で開催された。

(ウ) 昭和61年度全国高校総体

山口県が主会場。広島県では，軟式庭球，フェンシングを福山市，女子ソフトボールを竹原市，ボクシングを広島市で開催された。

(エ) 平成7年度全国高校総体鳥取県が主会場。平成6年広島アジア大会，平成8年ひろしま国体にはさまれたため広島県では，アーチェリー競技の1種目のみを実施することとなり，広島市の広島広域公園第一球技場で開催された。

昭和61年度全国高校総体ボクシング開会式

(3) 会費・部会費の変遷

	会費		部会費
	生徒1人につき		
	全日制	定時制	
昭23	3円		
昭28	20円	8円	1部2,000円
昭38	30円	15円	1部2,500円 2部3,500円
昭40	40円	20円	1部2,500円 単位毎1,000円
昭42		40円	
昭47	通信制1校当たり3,000円		
昭50	115円	80円	1部2,500円
	通信制1校当たり3,000円		単位毎1,000円
昭54	180円	120円	複6,000円
	通信制1校当たり3,000円		単4,000円 単々2,000円
昭57	210円	130円	複8,000円
	通信制1校当たり4,000円		単5,000円 単々3,000円
平6	350円	220円	複10,000円
	通信制1校当たり6,000円		単6,000円
	盲・養・ろう学校1校当たり6,000円		単々4,000円 定通部3,000円 朝鮮高級学校は男女参加は10,000円 男子または女子のみは6,000円

2　10年の歩み

昭和63年度

40年誌が10月1日発刊された。630頁にもなるものとなり，編集委員の大変な努力によって完成された。

広島朝鮮高級学校の本連盟への加盟希望を受けて，関係専門部と連携をはかり，当面サッカー・バレーボールの練習試合等で交流を深めた。

平成元年度

アジア大会・国体開催を控え，高校生の競技力向上を望む声が強くなる。本年度，7種目11チームの短期強化と4種目4チームの長期強化，及び指導者養成として3名を県外に派遣した。

また多くの専門部から練習場所の不足について，各施設の使用料の減額，施設の増設等要望が相次ぐ。体育館・プール・テニスコート等の公式競技場の改修が多く，大会の開催すら困難な状況があった。

平成2年度

第25回全国高等学校体育連盟研究大会が「みのり多きスポーツ活動を目指して」を主題に，平成3年1月31日・2月1日に広島国際会議場で開催した。今回初めて全都道府県からの参加があり，盛会の内に終了した。

平成3年度

強化指定クラブ事業が新設され，約2,500万円が予算化，20種目30チームの強化事業が実施されることとなった。平成6年のアジア大会，平成7年のインターハイ（中国ブロック），平成8年の国民体育大会と大きな大会をひかえ，県民のスポーツに対する関心は高まり，中でも中学・高校生を中心としたジュニア層の競技力向上が望まれる。

平成4年度

強化指定クラブ事業が，27種目45チームに拡大され実施されることとなった。強化事業の一層の拡大と，種目・チームの現状を把握したよりきめの細かい取り組みが必要となる。また，学校体育の基本となる生涯スポーツとの関連において強化・普及及び指導者の育成についてどのような形で進めて行くか，検討する。

平成5年度

平成8年度に開催される「ひろしま国体」に向けての競技力向上対策事業（強化指定クラブ）が成果を表し，事業規模も大幅に拡大された。本年度から中国高体連事務局の当番県，また平成7年度全国高校総体（アーチェリー競技）の準備委員会を設置等事務処理量が激増した。また，一条校以外の学校の大会参加についての取り組みがなされた。

平成6年度

アジア競技大会広島大会が開催される。本連盟の先生方，生徒も大会役員，補助員及びマスゲーム等に参加し，成功に貢献した。

平成7年度全国高校総体（アーチェリー競技）の実行委員会を設置する。

強化指定クラブの対象が32種目100チームとなり，総額5,000万円に増額された。広島朝鮮高級学校が準加盟となる。一条校以外の学校が全国高校総体への参加が認められ，これにつながる県大会に広島朝鮮高級学校や広島商船高等専門学校が参加した。

平成7年度

平成7年度全国高校総体（アーチェリー競技）を開催し成功裡に終わる。

「ひろしま国体」開催前年となり，強化クラブの対象を33種目80チームに絞り，総額4,060万円となる。派遣費補助は，760万円の増額となり，総額1,950万円となる。県内にスポーツに対する追い風が強く吹いた。なぎなたが専門部に昇格し，競技専門部が30となった。

競技風景

平成8年度

「ひろしま国体」が開催され，本連盟の先生方や生徒は，選手としてまた大会役員，補助員，マスゲーム等に活躍し，総合優勝及び大会

成功に大きく貢献をした。生徒数の減少に伴う収入源や，諸物価の値上がりによる支出増に対する財源の確保を考慮する時期に来ている。

平成９年度

「ひろしま国体」による体育・スポーツ界への追い風が吹き止んだ年であったが，強化事業にかわり，リーダーの養成，全国大会で活躍できる選手の育成及びこれらに必要な調査･研究を行うことを目的として，「学校スポーツ活動ステップアップ事業」として2,380万円の県補助を受けた。これにより各専門部の活動が活性化した。

ホッケーが専門部に昇格し，競技専門部が31となった。

平成10年度

昨年度に引き続き，「学校スポーツ活動ステップアップ事業」の県補助金がつき，継続して実施する。各専門部の主体性において，リーダー研修会，合同練習会，指導者の育成等に取り組む。特に中体連と連携した事業を展開し，中･高一貫指導のあり方を模索する。また財源確保のため会費･部会費の増額が決議され，平成11年度から実施することとしている。さらに，平成16年度全国高校総体の中国各県開催種目についての取り組みがなされる。

３　将来に向けて

国体，全国高校総体等の全国規模大会を開催するまでは，追い風に乗り全て順調に物事が運ぶが，真価を問われるのは開催翌年からの事業展開である。ややもすれば，事業の減少や消滅に伴う大会成績低下を辿りがちであるが，蓄積されたノウハウを最大限に発揮しつつ，県のスポーツ界総ぐるみとなった事業費の確保を計る必要がある。

高体連としては，生徒の減少に伴う収入減，運動部（特にチームゲーム）の存続，指導者の減少及び高齢化，学校の統廃合等々の課題があげられる。これらに対応するためには，外部指導者のさらなる導入，複数校による合同チームの承認等々が必要となり，関係機関と連携をとりながら新しい枠組みを考慮しなければならない時期となりつつある。

出雲の青い空

石　川　聡　子

平成５年広島女子商業高校入学。１年次よりレギュラー選手として出場し，夏のインターハイ，春の選抜と５回連続の全国制覇に大貢献。個人戦でも富山インターハイやＪＯＣ杯を制す。卒業後はすぐに皇后杯も獲得。現在，日本のトッププレイヤー。

私の高校時代を振り返ると，'95出雲インターハイが行われた山陰の雲一つない真っ青な空が思い出されます。

私たち３年生部員にとっては高校最後の，このインターハイで，個人戦･団体戦共に決勝へ進むことができたのです。個人戦は，同校決勝となり，私たち石川聡子･八谷ペアは，２年生の石川和美･砂本ペアに負けてしまいました。ミスを恐れず強気に向かってくる後輩に押されてしまったのです。一番負けたくない相手だったので残念でしたが，翌日は団体戦です。気持ちを切り替え，集中力を発揮して，自分のテニスをしたいと思いました。

団体戦は部員が一つになる競技です。もう私の心には団体優勝しかありません。大将ペアとして出場させていただいたのに，私は準決勝で香川短大附の入野･谷口ペアの前にペースを崩し，団体戦初の黒星をつけてしまっていたから，このままで終わるわけにはいかなかったのです。団体戦決勝の相手は中村学園です。まず，新見･木本ペアが，相手の大将の天野･江崎ペアを④－１で破り，いよいよ私たちの出番です。対するのは中川･南原ペアです。準決勝戦で負けた私をコートに立てない仲間がマッサージしてくれ，背中を押してくれました。その，みんなの顔を見て，勝っても負けても悔いの残らないようにやろういう勇気がわいてきました。幸せなことに，１ゲーム目から思いきり打てました。④－０で優勝が決まった瞬間，八谷さんと抱きあい，青空の下で泣いてしまいました。

卒業式の日，渡部先生から，「いつまでもさりげない努力を！」という言葉をいただきました。今も心に刻んでいます。

山　口　県

《事務局》
〒753-0851 山口県山口市黒川2580-1
県立西京高校内
TEL 0839（23）8582
FAX 0839（21）0341

創立年月日：昭和24年4月

加盟校数		91校
専門部数		34専門部
加盟部数		760部
部員数	男子	7,523名
	女子	4,559名
	合計	12,082名

年度	会長	理事長	記事
24	村田　房一	松岡千代二	第1回大会男10、女7種目
			会費1人当たり10円
25	〃	〃	
26	〃	〃	
27	〃	〃	事務局焼失　年報1号発行
28	〃	〃	中国高体連結成　18専門部
29	〃	〃	加盟65校、会費1人15円
30	館林　寛吾	〃	重量挙全国大会開催
31	〃	〃	
32	石神　正	〃	弓道全国大会開催
33	〃	〃	陸上、バレーボール
			全国大会開催
34	〃	〃	
35	〃	〃	体操全国大会開催
36	〃	〃	5専門部新設　フェン
			シング、レスリング全
			国大会開催
37	山本　重治	藤本　正三	水泳、バスケット、軟
			庭、ボクシング、ホッ
			ケー全国大会開催
38	〃	〃	第18回国体開催
39	〃	〃	
40	〃	〃	高体連20年のあゆみ
			(上)発行
41	〃	〃	同上(下)発行
42	〃	〃	
43	〃	〃	県定時制部会結成
44	吉村　宮男	刀祢弥太郎	
45	〃	〃	加盟75校、会費1人55円
46	白上　正二	〃	
47	〃	〃	

年度	会長	理事長	記事
48	大田　恭二	光永　教之	
49	〃	〃	定時制部会高体連　加
			入14校
50	〃	〃	功績賞、慶弔規定制定
51	〃	〃	
52	〃	〃	全国総体4種目開催
53	〃	〃	
54	田中　邦芳	〃	
55	〃	〃	加盟82校、会費1人200円
56	〃	〃	
57	為近　千速	〃	
58	〃	岡村　義昭	
59	徳丸　泰弘	〃	3専門部新設、33専門部
60	〃	〃	加盟82校、会費1人350円
61	〃	〃	61全国高校総体開催
62	白松　寿人	〃	県高校選手権大会新設
63	〃	〃	
元	前田　勇四	竹内　之保	
2	〃	〃	
3	今橋　靖刀	〃	山口県・慶尚南道ス
			ポーツ交流事業開始
4	〃	〃	1条校以外の学校の大
			会参加を認める
5	〃	〃	
6	島津　宗隆	〃	安全対策マニュアル発行
7	〃	〃	全国高校総体3種目開催
			加盟91校、会費1人700円
8	〃	〃	
9	濱村　悦巳	〃	
10	〃	〃	高体連規定集発行(全国、
	山下　浩		中国、山口)

1 沿 革

〈昭和24年度〉

山口県中等学校体育連盟を発展的に解消し、「山口県高等学校体育連盟」と改名し、新たに規約を定めて発足した。この年県内高校数111校、生徒数約32,000名、12専門部。

〈昭和25年度〉

高体連体育功労賞を制定。

〈昭和27年度〉

高体連事務局焼失設置校の火災によりすべての資料が灰じんに帰した。高体連年報第1号の発刊。3専門部新設、14専門部になる。

〈昭和29年度〉

加盟65校、生徒数約5万人、会費1人あたり15円。

〈昭和30年度〉

全国大会の開催ウエイトリフティング(下関市)

〈昭和31年度〉

組織の強化と確立を図る。各支部長を学校長とし副会長を兼務すること。専門部委員を各支部毎に置き、互選により委員長を選ぶ。委員長の所属する学校の長を専門部長とする。なお、委員は体育科教員に限らず広く人材を求める。専門委員会を開催し、これに必要な予算措置をとる。(これによって現在の高体連組織とほぼ同じ形ができあがった)

〈昭和32年度〉

加盟74校、生徒数約39,700名、会費1人あたり20円。山岳、スキー専門部新設。

〈昭和33年度〉

全国大会の開催陸上競技(下関市)、バレーボール男子(山口市)

〈昭和34年度〉

庭球専門部新設

〈昭和35年度〉

全国大会の開催体操(山口市)。加盟68校、生徒数約52,000名。県内大会開催基準要項の制定。

〈昭和36年度〉

全国大会の開催フェンシング(和木村)、レスリング(田布施町)。専門部新設自転車、

漕艇、ホッケー、レスリング、ボクシング。会費1人あたり30円。

〈昭和37年度〉

全国大会の開催水泳、バスケットボール(宇部市)、軟式庭球(下関市)、ボクシング(岩国市)、ホッケー(小郡町)。

専門部新設(フェンシング、ヨット)専門部離脱(軟式野球)。優秀選手賞制定

〈昭和38年度〉

国民体育大会の開催　専門部新設(馬術)。会費1人あたり50円。記念誌の発行。年報の再発刊。

〈昭和39年度〉

山岳スキー専門部を山岳とスキーに分離。

〈昭和40年〉

加盟74校、生徒数約85,000名、会費1人あたり40円。「県高体連20年のあゆみ」(上)発刊。

〈昭和41年度〉

県定時制体育連盟発足(加盟校15校生徒数5,300名)。「県高体連20年のあゆみ」(下)発刊。

〈昭和43年度〉

定時制部会の発足。

〈昭和45年度〉

加盟75校、生徒数約63,735名、会費1人あたり55円。

〈昭和49年度〉

定時制部会が県高体連に加入、14校1,380人。

専門部新設(定時制、調査研究部)

〈昭和50年度〉

表彰規定、慶弔規定を定める。加盟76校、生徒数約62,000名、会費1人あたり150円。

〈昭和52年度〉

全国高校総体の開催(岡山県中心)、本県はヨット(光市)、ハンドボール(山口市)、庭球(宇部市)、レスリング(徳山市)

〈昭和55年度〉

加盟82校、生徒数約61,000名、会費1人あたり200円。

〈昭和58年度〉

61全国高校総体11月18日全国高体連理事会において、山口県中心開催を決定。

〈昭和59年度〉

高等学校春季体育大会(全国総体予選)を「山口県高等学校総合体育大会」と大会の名称を変更する。61全国高校総体事務局開設。全国総体特別協力金として生徒1人当たり100円を3ヶ年負担する。競技力向上を目的として1年生大会を開催、強化校の指定。専門部新設(アーチェリー、空手道、小林寺拳法)33専門部。

〈昭和60年度〉

61全国総体推進委員会を結成、発足。加盟85校、生徒数約66,000名、会費1人あたり350円。

61全国総体ポスター

〈昭和61年度〉

61全国高校総体山口大会の開催、陸上、卓球、サッカー、登山、剣道、ヨット、柔道、ハンドボール、ホッケー、バレーボール男子、弓道、ウエイトリフティング、バドミントン、相撲の14種目を開催し成功裡に終了。

61全国総体総合開会式

〈昭和62年度〉

「第1回山口県高等学校選手権大会」を設置（毎年9月に開催）。

2　10年の歩み

〈昭和63年度〉

加盟87校、生徒数約68,000名、会費1人あたり450円。

〈平成3年度〉

第1回「韓国慶尚南道高校生スポーツ交流事業」を実施。山口県と慶尚南道の高校生がお互いのスポーツ活動を通じて、相互理解と信頼、国際感覚を備えたスポーツマンになることができることを目的で開催された。山口県が慶尚南道に遠征（サッカー、バレー）。

〈平成4年度〉

「山東省青少年交流大会」の開催。山口県と中国・山東省の友好協定締結十周年を記念し開催（サッカー）。

〈平成5年度〉

平成7年度全国高校総体「山口県準備委員会開設。第2回「韓国慶尚南道高校生スポーツ交流事業」を実施。山口県が慶尚南道に遠征（ハンドボール、バスケットボール）。

〈平成6年度〉

「山口県高体連安全対策委員会」発足。

〈平成7年度〉

全国高校総体の開催（鳥取県中心）。本県は、バレーボール女子、アーチェリー、弓道。なぎなた専門部加盟。「山口県高体連安全対策マニュアル」の発刊。加盟87校、生徒数約58,000名、会費1人あたり700円。

山口県開催種目ポスター

〈平成8年度〉

ボクシング専門部休部。

〈平成9年度〉

「平成11年度全国高体連研究大会準備委員会」設置。第3回「韓国慶尚南道高校生スポーツ交流事業」を実施。慶尚南道が来県（バスケットボール）。

3　将来に向けて

わが国の高校体育・スポーツや運動部活動は、学校スリム化や少子化減少の影響を受けて、方向性について議論を余儀なくされている。山口県でも同様に、生徒数減少に伴う部の統廃合や経費の減少、部活動のあり方や競技力

向上の為の諸問題（指導者の育成、経費等）等の多くの課題を抱えている。

生徒数の減少については、10年前の昭和63年度の約68,000名から平成9年度は、52,230名と約16,000名の減少である。その為、当然のことながら会費の減少に伴う経費不足が問題になっている。事務費など経費節減には努めている。しかし、事業費は最低限度に切り詰めてはいるが、諸物価高騰の折、各専門部にご苦労をおかけしている。打開策として本県では、山口県高等学校選手権大会に協賛をお願いしている。今後の課題としては、その枠をどこまで広げることができるかである。

部活動のあり方については、「中学校及び高等学校における運動部活動について」（平成10年1月20日付け文体体第297号文部省体育局長通知）や中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究会議の「運動部活動のあり方に関する調査研究報告書の概要」等を参考にさせていただき、山口県の実情にあうよう調査研究していき、その方向性をさぐっていきたい。

競技力の向上を図る上で最も重要なことは、熱意ある指導者の養成・確保とジュニア層（中学生）からの一貫した指導体制の確立である。このためには、山口県中学校体育連盟と連絡を密に取りながら、レベルの高い競技種目を精選し、重点的な強化を考えなければならないと考えている。これらを実行する為の計画も今後の課題である。

山口県教育委員会は、1998年3月に「山口県教育ビジョン」を発表し、「夢と知恵を育む教育の推進」を本県教育の基本目標としてして揚げ、3つの力（学ぶ力、創る力、生き抜く力）と3つの心（広い心、温かい心、燃える心）の育成を視点とし、目標実現のための具体的な施策の方向を示している。その基本計画の中にも「楽しさと喜びにあふれるスポーツの振興」と題し、1. 生涯スポーツの推進2. 競技スポーツの推進3. スポーツ施設の整備充実4. スポーツ医・科学体制の整備を掲げている。

山口県高等学校体育連盟としても、この教育ビジョンに基づき、本連盟規約の目的である、「高等学校における体育の普及振興を図り、高等学校生徒の心身の健全な発達に寄与する」ことに、最大限の努力精進をしていかなければならない。

すばらしい仲間

吉村かおり

平成6年度全国総体（富山）
陸上競技・女子800m優勝
平成7年度全国総体（鳥取）
陸上競技・女子3000m2位
平成8年度全国総体（山梨）
陸上競技・女子3000m8位
現在、積水化学陸上競技部

高校に入学するまでの私にとって、「高校総体」は憧れとか夢とかでなくて、いくら手をのばしても届かない大舞台だと思っていた。そんな小心者の私が、全国高校総体女子800mで優勝したのは、山口県立西京高等学校に入学したその年のことである。

県下では女子長距離が特に有名な高校だったが、私はそういった事より、顧問の平野先生の「陸上を通した我々部の仲間意識は強い」というような言葉に魅かれて入学した。その先生の言葉の通り、私は素晴らしい先輩方や友人に囲まれて練習することができた。自宅を離れて寮での厳しい生活だったが、チームメイトとの仲を深め、苦しみを分かち合うことができたし、励まし合うこともできた。又、そんな生活により練習に集中することもできたのである。

そういった恵まれた環境の中で日々の練習を積み重ねた結果、県総体を順調に勝ち進む事ができた。しかし中国地区大会では3位に終わった。勝とうと思った事はなかったが、負けるつもりもなかったので、とても悔しい思いをしたのを覚えている。しかしこの経験が全国総体で大いに役立つことになった。8月始めに行われた平成6年度全国高校総体女子800m決勝は、異例の11人レースで行われた。他の選手にポケットされたり、ラストスパートを満足にできなかったりした中国地区大会の苦い経験をイメージしながら、私はこの大人数のレースに臨んだ。その結果失敗を繰り返すことなく、最後の最後で先頭に立った。こうして初優勝を果たすことができた。

これは素晴らしい環境と、仲間達に恵まれたお陰であり、自分の力だと思ったことは一度もない。応援してくださった方々に心から感謝している。

徳　　島　　県

《事務局》
〒770-0853 徳島県徳島市中徳島町１－５
県立城東高校内
TEL 0886（25）8060
FAX 0886（56）2080

創立年月日：昭和23年５月１日

加盟校数		44校
専門部数		25専門部
加盟部数		745部
部員数	男子	5,540名
	女子	3,253名
	合計	8,793名

年度	会長	理事長	記事
23	亀田　啓二	河野　真一	学制改革により名称変
	石川重一郎		更全国高体連加盟
24	三木　康至	〃	県内高校再編成
25	〃	〃	高体連マーク制定
26	〃	〃	四国高体連結成し加盟
27	〃	〃	
28	沖田　武雄	〃	第8回国体を四国四県で開催
29	〃	〃	
30	〃	〃	
31	永井　洸	〃	
32	〃	木文　吾高	体連の歌制定
33	〃	〃	研究調査部発足
34	岡　淳	〃	
35	〃	〃	
36	〃	〃	第１回県総体開催
37	〃	谷　栄	
38	高原　武雄	〃	県総体種目別優勝旗が
			寄贈される
39	〃	〃	
40	久木　武夫	〃	
41	〃	〃	
42	大崎　中男	中西　由之	アメリカンスクールとバスケッ
			ト･レスリングの対抗戦を実施
43	〃	〃	県高体連旗制定
44	行成　正春	〃	
45	〃	鈴江　敏則	
46	〃	〃	46全国総体本県を主会
			場に開催
47	箕浦　善隆	山本　彰一	県総体を鳴門運動公園
			で開催

年度	会長	理事長	記事
48	村沢　隆一	山本　彰一	
49	〃	〃	専門委員会発足、第１
			回総体写真コンクール
50	福富　忠行	〃	日米レスリング大会開
			催
51	〃	〃	
52	上原　秋男	〃	
53	〃	下泉　芳文	30周年記念誌発刊
54	〃	〃	
55	竹原　茂雄	〃	55全国総体６種目開催
56	大賀　清	〃	
57	〃	〃	
58	江西　利夫	〃	
59	〃	〃	
60	宮　信之	森　勝	「高校保健体育研究総
			覧」発刊
61	久保駿一郎	〃	県総体写真図録発刊
62	〃	〃	
63	須見　敬二	〃	
元	〃	津田　一弘	元年全国総体６種目開催
2	平尾　隆信	〃	
3	筒井　豊祐	〃	
4	〃	〃	
5	〃	〃	第48回国体を香川県と
			共催
6	〃	原田　久	阿南高専総体初参加
7	居上　雅美	〃	
8	大津　靖弘	〃	
9	加藤　千明	松田　弘	
10	中西　知	〃	10年全国総体４種目
			開催

1 沿 革

昭23年 ○ 学制改革により高等学校体育連盟と改称する。
○ 年会費20円とする。
○ 全国高体連結成に参加し、加盟する。
昭24年 ○ 県内高校再編成が行われる。
昭26年 ○ 四国高体連を結成し、加盟する。
昭27年 ○ 年会費30円とする。
昭28年 ○ 第8回国民体育大会が四国四県で開催される。
昭29年 ○ 全国高校男子バレーボール選手権大会を小松島市で開催する。
○ 第1回全国高校重量挙選手権大会を徳島市で開催する。
昭32年 ○ 高体連の歌を制定。
昭33年 ○ 第27回全国高校卓球選手権大会を徳島市民会館で開催する。
○ 第11回全国高校東西対抗陸上競技大会を西の丸競技場で開催する。
○ 高体連10周年記念誌発刊。
○ 年会費を50円とする。
○ 調査研究部を発足する。
昭35年 ○ 全国軟式庭球選手権大会を徳島市蔵本運動公園で開催する。
昭36年 ○ 全国高校女子バレーボール選手権大会を徳島市蔵本運動公園で開催する。
○ 第1回県高校総体を西の丸を中心に開催。
昭38年 ○ 第10回全国高校ウエイトリフティング選手権大会を徳島市民会館で開催する。
○ 第9回全国フェンシング選手権大会を徳島市民会館で開催する。
○ 年会費を60円とする。
○ 県総体種目別優勝旗の寄贈を受ける。
昭42年 ○ アメリカンスクールとバスケットボール・レスリングの対抗戦を鳴門市体育館で開催する。
昭43年 ○ 昭和46年度全国総体四国開催の気運が高まり、誘致の結果主会場は本県に決定する。
○ 徳島県高体連旗制定（発足20年を記念して）。
○ 年会費を80円とする。
○ 高体連発足20周年記念誌発刊。
昭44年 ○ 四国高体連評議員会で46総体四国開催基本方針徳島案採用される。
○ 46総体スローガン決定（至純・探求・躍動）
○ 四国高体連研究発表大会開催。
昭45年 ○ 46総体県下各会場完成する。
昭46年 ○ 46全国高校総体、本県を主会場に四国四県で開催。
昭47年 ○ 高体連事務局を城東高校から徳島工業高校に移す。
昭48年 ○ 年会費を100円とする。
昭49年 ○ 高体連事務局、徳島工高から城東高へ移転。
○ 高体連専門委員会発足。
○ 第1回県総体写真コンクール実施。
○ 年会費を150円とする。
昭50年 ○ 県公立高校総合選抜制を採用。
昭52年 ○ 55全国総体を愛媛県を中心に四国四県で共同開催することを四国高体連で決定。
○ 年会費を200円とする。
○ 四国高体連研究発表大会開催。
昭53年 ○ 高体連発足30周年記念誌発刊。
昭55年 ○ 55全国高校総体バスケットボール・水泳・柔道・弓道・ホッケー・レスリングの6種目を開催。
昭56年 ○ 日米高校親善レスリング大会を開催。
昭57年 ○ 年会費を300円とする。
昭58年 ○ 日米高校親善レスリング大会開催。
○ 四国高体連理事会で64全国総体の主会場を高知県に決定。
昭60年 ○ 本県高校体育教員の研究物（昭33年～昭59年）「高校保健体育研究総覧」発刊。
昭61年 ○ 四国高体連研究発表大会開催。
○ 県総体写真コンクール（第1回～第13回）優秀作品集「県総体写真図録」を発刊。
○ 年会費を350円とする。
○ 全国理事会64総体競技種目別会場予定地を承認。本県開催はバレーボール女子、ソフトボール女子、体操競技、レスリング、ウエイトリフティングの5種目。

昭62年 ○ 64総体特別会費として新入生から800円徴収。
○ 64総体県準備室開設。

2　10年の歩み

○昭和63年度
高体連創立40周年誌発刊。
県総体は45校11,600名の参加のもとに開催された。総合開会式は、選手団の輸送に伴う道路事情等を考慮し、蔵本球場から鳴門陸上競技場に変更した。

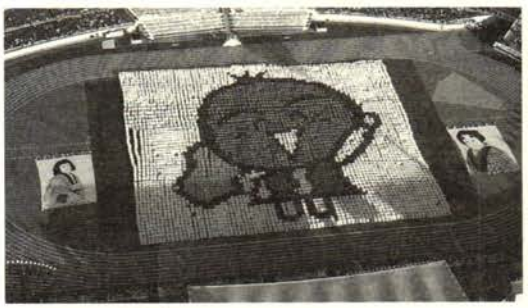
○平成元年度
高知県を中心として四国ブロックとしては9年ぶりに全国高校総体を開催する。本県においては、女子バレーボール・女子ソフトボール・体操競技（以上徳島市）、ウェイトリフティング（上板町）、レスリング（池田町）の5種目を開催、本県高体連の総力を結集して、成功に導く。

○平成2年度
県総体は6月2日より4日間にわたり、46校、12,600余名の参加のもと、本年度よりライフル射撃専門部と7種目の準専門部の発足があり、32競技種目と最大規模の大会となった。

○平成3年度
県総体は6月1日より4日間にわたり、32競技に12,300余名の参加のもとに開催された。総合開会式は東四国国体準備に伴う鳴門陸上競技場改修工事のため、3年ぶりに鳴門野球場を使用した。

○平成4年度
県総体は6月6日より4日間にわたり、32競技種目に49校、12,500余名の参加のもとに開催された。総合開会式は鳴門運動公園野球場で行われた。
四国高体連理事会で平成10年度全国総体を香川県を主会場として四国4県での開催を確認。

○平成5年度
本年度の目玉は何といっても東四国国体であった。夏季大会が9月5日より8日まで、秋季大会が10月24日より29日までの延べ10日間にわたり、徳島・香川両県の各会場にて熱戦が繰り広げられた。
県総体は6月5日より8日まで4日間にわたり、協賛あわせた32競技種目に49校12,171名の参加のもと県下各会場で開催された。総合開会式は3年ぶりに新装なった鳴門陸上競技場で行われた。
全国高体連全国高校総体中央委員会で四国4県開催を了承。


東四国国体開会式

○平成6年度
県総体の改革について検討を重ねてきた結果、総合得点争いを廃止し、総合閉会式も取りやめることとした。
改革された県総体は6月4日より7日まで実施され、参加校拡大による阿南高専の参加で、過去最高の50校11,700名の選手が出場した。全国高校総体中央委員会で四国4県の開催種目配分案を決定。本県は、体操・相撲・ハンドボール・ホッケーの4種目の開催。四国高体連役員会で「10年全国総体四国対策委員会」が発足。

○平成7年度
県総体は6月3日より4日間にわたり、48校延べ32競技種目、10,800余名の参加のもとに開催された。総合開会式は突然の降雨のため、16年ぶりに屋外での開催が中止になり、鳴門県民体育館で行われた。
今年度から生徒数減少の影響があらわれ、参加校や参加者が初めて前年度を下回った。

○平成8年度
県総体は6月1日より4日間にわたり、32競技種目47校、10,700余名の参加のもとに開催された。昨年度から始まった生徒数減少の影響が少しずつあらわれ、競技よっては参加校数

や参加者が減少し、危機感が募る専門部も出てきた。運動部活動の重要性について再認識し、今以上に部員数増加、競技底辺の拡大に真剣に取り組まなければならない状況になってきた。

○平成9年度

県総体は5月31日より4日間開催され、本年度は30競技種目9,200名の選手が出場した。

平成10年度全国総体四国大会を控え、各種準備委員会が進められた。

3　将来に向けて

近年、社会情勢の変化が高校スポーツに影響を及ぼすようになった。高校教育の多様化、生徒数減少、学校週5日制への移行等の情勢の変化に伴い、国レベルでも運動部活動について議論が高まっている。第15期中央教育審議会や文部省の研究報告書の中でも、運動部活動の教育的意義の重要性が強調されている。反面、週5日制への対応、生徒数減少と指導者不足、過度の練習による弊害やスポーツ障害など、いくつかの改善点の指摘もされている。本県高体連としても解決しなければならない難問がある。生徒や部員の減少、それに伴う予算の減額、補助金や強化費、人的スタッフの不足、さらには強化のための諸条件の不備等なかなか解決できていないことがある。さらに活動中の事故に対する責任問題、休日勤務の代休・手当等、問題は山積みされている。部活動指導者の情熱と熱意だけに頼る方法には限界がある。各々の問題について、スポーツにかかわるすべての人が前向きに意見を出し合い、一歩一歩解決しなければならない。運動部活動はこれまで学校教育の中で大きな役割を果たしてきた。高体連としても地道に築き上げてきたものであり、指摘を受けている改善点については、しっかり受け止め、よりよい運動部活動の在り方について考えていく必要がある。

東四国国体閉会式

高校時代を振り返って

畠田好章

鳴門高校－日本体育大学－日本体育大学講師
○92オリンピックバルセロナ大会団体3位
○96オリンピックアトランタ大会あん馬5位

私にとってのインターハイは、とても思い出深い。特に高校2年のインターハイは、地元徳島での開催だった。地元開催ということもあり周りの期待や、プレッシャーは、いつもの大会以上であった。

その年の冬頃から、インターハイ強化の為に一人のコーチの先生が指導に加わった。そのコーチは、大学時代まで体操を続けられ、かなりの成績を残し、卒業後私たちが練習していた鳴門体操クラブに指導者として招かれた。

私にとってそのコーチとの出会いは、大変重要なことだった。現在、自分が日本を代表してオリンピックなどの国際大会に出場し、成果を残してこれたのも、そのコーチとの出会いがあったからこそだと今でも思っている。そのコーチがきてから、自分の体操が成長したと思う。その結果が、地元でのインターハイで、個人総合優勝、団体でも3位であった。また翌年のインターハイでも、個人総合優勝をすることができた。その頃から、試合で自分に自信を持てるようになり、その後大学に行ってから現在に至るまで、自信を持ち体操を頑張ってこれたんだと思える。

そういう意味でも、この高校3年間は私にとって、とても大切な3年間であり、体操人生を左右した時期でもあった。

最近、自分がここまでこれたのも、いろんな人と出会い、いろんな人に迷惑をかけ、いろんな人の協力があったからだとつくづく感じる。

これからも人との出会いを大切にして、残り少ない体操人生を頑張っていこうと思っている。

香　川　県

《事務局》
〒760-0017 高松市番町三丁目1－1
県立高松高校内
TEL 087（862）6908
FAX 087（833）8070

創立年月日：昭和34年4月1日

加盟校数		46校
専門部数		33専門部
加盟部数		877部
部員数	男子	7,357名
	女子	4,833名
	合計	12,190名

年度	会長	理事長	記事
21	赤羽　廣志		学徒体育会(小·中·高
～	(学徒体育会会長)		の合同体)発足
26	〃		四国高体連発足，本県
～			は学徒体育会高校部会
28	〃		として参画
～	(学校体育会会長)		学校体育会に改称
31	〃		
32	久保　隆美		
33	〃	三好　啓資	高体連が組織化され，
34	〃	〃	事務局は高松高校内
35	〃	〃	第1回保健体育研究発
			表会を開催
36	〃	〃	第1回県高等学校総合
			体育大会を開催，総合
38	〃	〃	得点制実施
39	〃	尾崎　信幸	
40	二田　松司	〃	
41	水野　秀夫	〃	
43	〃	〃	
44	菅　重義	八代　博之	
45	〃	〃	フェンシング，自転車
			専門部設置
46	松岡　巌	〃	全国高校総体開催（6
			種目)庭球，ラグビー
47	〃	〃	専門部設置
48	大島　久俊	冨田　横男	なぎなた専門部設置
49	〃	〃	ボクシング専門部廃止
50	〃	〃	県高校総体総合開会式·
			総合得点制中止

年度	会長	理事長	記事
51	大島　久俊	冨田　横男	調査研究部発足
52	三好　清	〃	
53	光藤　芳夫	〃	総合開会式復活
54	〃	〃	
55	〃	〃	全国高校総体開催(4種
			目)
56	岩本　三夫	鈴木　章夫	
57	〃	〃	
58	田中　清春	〃	
59	〃	〃	
60	〃	〃	県高校総体総合得点制
61	〃	〃	復活
62	山口　寮弐	堤　仁	
63	〃	〃	空手道専門部設置
元	〃	〃	全国高校総体開催（8
			種目)
2	杉岡　保之	〃	
3	〃	〃	ウエイトリフティング
			アーチェリー，レスリ
			ング，ホッケー，カヌー
			専門部設置
4	益田　勉	〃	
5	〃	〃	東四国国体開催
6	〃	山下　正敏	ボクシング専門部復活
7	松橋　伙秋	〃	新設，桜井高校が加盟
8	〃	〃	新設，三木高校が加盟
9	関　博徳	〃	
10	〃	〃	四国'98総体開催(17種
			目)

1 沿 革

香川県高等学校体育連盟の前身は，「香川県学徒体育会」であった。学徒体育会は，戦後，民主的体育団体組織化の一環として，県下学校体育の振興を図るために再建され，昭和21年に県教育委員会保健体育課内に事務局を置き，発足した。

その後，昭和28年には，「香川県学校体育会」という名称に改められた。その組織は，県下小・中・高等学校部会の全児童・生徒・教職員で構成された連合体であり，各部会から選出された理事・評議員によって，予算や重要案件が審議されるしくみになっていた。その主な活動は，学校体育に関する指導研究，調査，資料収集，機関誌の発行，競技会・講習会の開催などがあり，これらの諸事業を通しての功績は，極めて大きいものがあった。その後，学校体育会は，小・中・高等学校一体の合同組織である利点を生かしながらも，それぞれの部会で，それぞれの立場にたった運営も行われるようになった。

四国高体連が昭和27年1月に結成されたが，当時，他の3県においては，すでに高体連が組織されていたのに対し，香川県は，学校体育会の高等学校部会としての参画であった。このような状態のなか，ようやく昭和34年香川県高体連が組織化され，事務局を高松高校内に置いた。

しかし，これは組織上他県に形をそろえる必要があったための処置であり，高体連に関する事務及び予算は，学校体育会内で処理されていた。そして，その組織自体は，実質的に機能するものではなかった。しかし，これを契機に，高等学校部会では，四国高体連・全国高体連の加盟団体として，他県並みの高体連にしたいという要望が高まってきた。そして，学校体育会から独立することについて，部内で検討がなされたが，学校体育会として小・中・高等学校を一体とする合同体としての組織は，全国的にもまれであり，利点もあるので，この組織は残して，小・中・高等学校相互の了解のもとに，それぞれを独立させようという結論に達した。

その後，昭和43年に，昭和46年度全国高校総体が四国4県で開催されることになった。全国大会開催となると，組織の強化充実とともに，財政規模の拡充が急務となった。しかし，学校体育会の高等学校部会としての高体連では，財源も少なく，組織も貧弱なものであったため，開催準備に着手するには，多くの問題点があった。さらに，その準備が進められるにつれて，高等学校部会という枠の中では，活動できない状態になった。

そのため，高体連では特別措置として，全国高校総体の開催準備のための特別対策委員会を設け，組織の強化と財政措置の拡大を図り，これに対処した。しかし，高体連自体も独自性と主体性の確立の必要性を痛感した。昭和46年2月，学校体育会の定例理事会において，当時の高体連菅会長より高体連独自の提案がなされ，昭和46年4月に，菅会長より引き継いだ松岡会長は，高体連独立の申し送りを受け，46全国総体を終えると間もなく，この件について話し合いを着実に進めていった。

話し合いの要点としては，

（1）合同体である現在の建前のままで，高体連の主張を生かせる立場をとるか。

（2）小・中・高体連をそれぞれ独立させ，連合体の形で学校体育会を残す立場をとるか。

の問題について慎重に審議した結果，当分は合同体の組織のままで大幅に規約の改正をして，高体連の主張を認め，更にもう一度検討し直すという結論に到達した。

昭和47年の規約の改正により，高体連は長い間の要望が達成され，ようやく他県並みの運営がなされるようになった。

その一方，学校体育会の運営は，諸物価の高騰に対し，会費の値上げがうまくいかず，財政は窮迫し，事務局職員の給与が圧迫されるようになった。

昭和48年以降，事務局職員が得られないまま，更に将来の見通しが立たたない状態になり，事務処理に支障を来すようになった。そのため，昭和48年10月，小・中・高等学校部会の事務を各部会ごとの事務局に移して処理するという特別措置で切り抜けることとした。

ここに初めて，小・中・高等学校それぞれの体育連盟が実質的に独立して運営されることになった。

一方，46全国高校総体開催を機会に新設の専門部を年々設置していった。

【昭和50年】県高校総体を県教委より委託を受け，実行委員会を設け，総合開会式，総合得点制を中止し，種目毎に開閉会式を行った。

【昭和51年】長年の懸案であった研究部が設けられ，教科研究会との調整をはかりながら，独自の運営がなされた。
【昭和52年】55全国総体の四国4県の種目配分が決定し，県高体連の準備として県高体連対策委員会を発足させ，開催市町の決定，運営準備，競技力向上計画等を進めていった。
【昭和53年】4年ぶりに県立体育館で総合開会式が挙行され，55全国総体に向かって各競技も始動した。
【昭和54年】55全国総体の県実行委員会が発足され，県高体連対策委員会とともに準備を進めていった。
【昭和55年】2度目の全国高校総体が，四国4県で開催された。
【昭和56年】四国高体連30周年誌の発行，記念式典が行われた。
【昭和59年】県立聾学校が男子ソフトボールで県総体史上初の全国総体代表権を獲得した。
【昭和60年】県高校スポーツの活性化を目指して，県高校総体に総合得点制を11年ぶりに復活させた。総合開会式では，高松市内7校の女子生徒による集団演技が花を添えた。(110名)
【昭和61年】64全国総体県準備委員会が発足した。
【昭和62年】県高校総体に男子の水球，女子の柔道が初登場となった。

2　10年の歩み

【昭和63年】空手道専門部の新設により，県高校総体に空手道が登場した。
【平成元年】四国で3度目の全国高校総体が開催された。
【平成2年】県高校総体の参加は年々増加し，男子41校23競技，女子40校20競技に8,463名の過去最大の参加となった。総合成績では，高松商業高校が初の男女アベック優勝で閉幕した。全国総体陸上競技の女子走高跳で貞広千波選手（明善高）が2年連続優勝した。
【平成3年】県高校総体は東四国国体等を考慮して新設された男子のウエイトリフティング，レスリング，アーチェリー，ホッケー，カヌーの5競技，女子のアーチェリー，ホッケー，カヌーの3競技が加わり，男子43校28競技，女子40校23競技に8,790名の前年度を上回る過去最大の参加となった。
【平成4年】四国高校選手権大会を東四国国体のリハーサル大会として，9種目実施した。四国高体連理事会で10年総体を香川県を主会場として四国4県での開催を確認した。
【平成5年】県高校総体で，高松商業高校が男女アベック優勝4連覇を成し遂げた。「東四国国体」（徳島県と共同開催）が開催され，香川県が天皇杯・皇后杯を獲得した。全国高体連へ10年総体の「誘致申請書」を提出し，開催が内定された。
【平成6年】ポスト東四国国体の期待を担う精鋭等により「わかしゃち国体」では，高校生の活躍も素晴らしく，天皇杯13位，皇后杯11位に大きく貢献した。全国高体連へ10年総体の「開催申請書」を提出した。全国高体連理事会において，四国4県の開催競技種目が決定された。（香川は17種目）
【平成7年】新設校高松桜井高校が加盟した。「10年総体香川県準備委員会」が設立された。「ふくしま国体」では，高校生の活躍もめざましく，昨年の成績を上回る天皇杯11位，皇后杯8位に大きく貢献することができた。このことは，東四国国体時に，成年や教員で活躍した全国のトップレベルの選手が，指導者として技術的にも年齢的にも円熟さを増してきて，普及や競技力の向上に多大の役割を果たした。全国高体連理事会において，四国4県競技種目別会場地が決定された。
【平成8年】新設校三木高校が加盟した。県高校総体総合開会式のマスゲームに昨年までの高松地区11校に，中・西讃地区7校の女子生徒と高松東高の男子生徒が参加し，720名による集団演技が展開された。県教委に10年総体準備室が設置されるとともに，県高校推進委員会が設立され，準備に万全を期した。全国理事会で「テーマ，スローガン，シンボルマーク等」が承認された。
【平成9年】県高校総体で過去最多の48校の参加となった。総合開会式は，来年から「四国'98総体」の主会場となる丸亀競技場で開催の予定で，屋島陸上競技場での開会式は最後となった。また，学校対抗総合成績は，高松商業高が女子で初の8年連続8回目の優勝に輝いた。「10年総体香川県実行委員会」が設立され，全国高体連理事会で「総合ポスター図案」等が決定された。

3　全国大会開催事業

（1）46全国高校総体

「至純・探求・躍動」の大会スローガンのもと，徳島県を主会場に四国4県で開催された。本県では，皇太子御夫妻，高松宮御夫妻をお迎えし，8月1日より9日間にわたり，6種目の熱戦が繰り広げられた。また，台風襲来を受けたものの，大会関係者の奮闘や市民の協力により，大事もなく大会を終えることができた。

（2）55全国高校総体

「四国路を駆けろ若人・意気と熱」の大会スローガンを掲げ，愛媛県を主会場に四国4県の各地で開催された。本県では，8月1日より6日間にわたり4種目が行われた。讃岐路を舞台に，若人の意気と熱が駆けめぐり，無事終了することができた。

（3）元年全国総体

四国で3度目の全国総体が，高知県を主会場に開催された。大会スローガン「競え技・結べ友情さわやかに」を合い言葉に全国の高校生を迎え，県下3市1町で8種目の熱戦が繰り広げられ，充実したさわやかな大会となった。

（4）四国'98総体

10年度開催の「四国'98総体」では，「輝こう今この時を　君たちと」のスローガンのもと，香川県を主会場に四国4県で28競技が展開される運びとなっており，全国の高校生が香川の地で十分活躍され，大きな成果と数々の感動を残されるよう期待している。

平成9年度「京都総体」総合開会式

さらなる挑戦を

貞　廣　千　波

昭和47年8月17日生
香川県明善高等学校から、中京女子大学卒業、(株) デンソー入社現在に至る。アジア大会4位、ユニバーシアード5位入賞。

陸上競技を始めて16年になった。

小学5年生の時、足が速く背が高い子というだけで、郡大会の選手に選ばれた。「高く跳ぶのが得意そうだから走り高跳びをしなさい。」と綾弘文先生、高丸勝嗣先生に言われたのが私の走り高跳びを始めたきっかけであった。先生の毎日の指導に訳も分からず跳んだのが懐かしい。郡大会3位であった。小学6年生で、再び選手に選ばれて、県大会準優勝。中学に入り石井孝規先生（棒高跳び、元高校記録保持者）に巡り会った。陸上部に入り、毎日陸上に浸かっていた。1年生・149cm、2年生・155cm、3年生・170cm、（全国通信陸上競技大会優勝）。この中学時代は高さが高くなるほど恐く、跳べなくなって時間切れ敗退の経験があり、「跳ばないならもうやめろ。」と石井先生に言われ、次の日からトレーニングをやり直し、少しずつ跳ぶ恐怖から抜けていった。

中学卒業時、「記録に挑戦したい」と思い、迷わず陸上の名門香川県明善高等学校に入学を決めた。「日本一になること」を目標に真部卓一先生の厳しい指導を受けた。指導者を信じ友と助け合い緊張のある充実した毎日だった。寮生活で自己管理の大切さを知らされた。油断するとウエイト・オーバーで怪我をしては真部先生に「喝」を入れられた。妥協を許さず納得いくまでの練習は試合の成績に好影響を与えた。1年生・171cm、2年生・180cm、3年生・181cmと怪我を克服しながら伸びていった。大学進学は、中京女子大学に決めて阪本孝男先生（走り高跳び元日本記録保持者）の指導を受けた。4年間のベスト記録は190cmである。卒業後の現在は(株) デンソーで陸上競技部に所属し、平成9年のベスト記録は190cm。世界に目を向けて自分の高跳びを再考・再構築している最中だ。

愛　　媛　　県

《事務局》
〒790-0846 愛媛県松山市道後北代3－3
TEL 089（925）1634
FAX 089（925）1634

創立年月日：昭和26年5月17日

加盟校数		68校
専門部数		27専門部
加盟部数		1,154部
部員数	男子	11,747名
	女子	7,961名
	合計	19,708名

年度	会長	理事長	記事
26	仙波　光三	二神伝三郎	昭和26年5月17日県高体連結成、規約・役員決定
27	二神伝三郎	石川　恭作	
28	〃	〃	
29	〃	田辺　義治	昭和29年県高校総体16種目に5千人参加、盛大になる
30	〃	〃	
31	〃	石川　恭作	
32	〃	〃	
33	〃	〃	
34	〃	〃	
35	〃	〃	昭和35年8月25日県高体連10周年記念式典
36	清水　次夫	桧垣　長慶	
37	〃	〃	
38	〃	〃	
39	〃	〃	
40	〃	〃	昭和40年副会長3人制（私立高校長1）となる
41	黒田　定雄	中川　武	
42	〃	〃	
43	山本　寅雄	〃	
44	渡辺菊太郎	〃	
45	〃	〃	
46	高市　純徳	〃	昭和46年20周年記念式典
47	〃	〃	
48	〃	〃	
49	高市　格	向井　敏夫	
50	〃	〃	

年度	会長	理事長	記事
51	門多　寿道	向井　敏夫	
52	〃	井手　上旭	
53	〃	〃	
54	〃	〃	
55	〃	〃	昭和55年55全国高校総体（主会場愛媛）四国4県開催
56	佐々木寅義	田中　國雄	昭和56年30周年記念式典
57	〃	〃	
58	〃	〃	
59	小野　憲一	〃	
60	〃	〃	
61	〃	〃	
62	大澤　哲	〃	
63	〃	〃	
元	石丸　博	田中　國雄	平成元年全国高校総体開催（主会場高知）
2	〃	〃	
3	〃	〃	平成3年40周年記念式典
4	國田　利明	〃	
5	〃	井手　盛章	
6	〃	〃	
7	野澤　善浩	〃	
8	〃	〃	平成8年全高連研究大会開催
9	近藤　雅美	〃	
10	〃	〃	平成10年全国高校総体開催（主会場香川）

1 沿 革

55総体

昭和26年 ・5月17日に愛媛県高等学校体育連盟が結成された。
・第5回愛媛県高等学校総合体育大会が、14種目2,400人が参加して開催された。

昭和27年 ・高体連評議員会開催。
・第1回定時制総合体育大会が7種目にて開催された。

昭和28年 ・高体連会報の発行を決定。
・定時制創立5周年記念行事を兼ね第2回定時制総合体育大会が開催された。

昭和29年 ・5千人が集まり、16種目14会場2日間にわたる第8回県下高校総合体育大会が開催された。

昭和30年 ・剣道、弓道専門部が新設された。

昭和31年 ・県下高校体育主任会が開催された
・高体連主管で西条市において全国高校バレーボール選手権大会が開催された。

昭和32年 ・四国高体連理事会が開催された。
・第8回全国高校ハンドボール選手権大会が松山北高校を中心に開催された。
・定通10周年記念総合体育大会が開催された。

昭和33年 ・第1回四国高校対抗駅伝競走大会が徳島県で開催された。

昭和34年 ・高体連主管で全国高校登山大会が石鎚山系を中心として開催された。

昭和35年 ・10周年記念式典及び記念行事が開催された。
・四国高体連創立10周年記念式典が開催された。

昭和36年 ・高体連制定の体育功労賞を配布した。

昭和39年 ・四国高体連保健体育研究発表大会が松山市で開催された。

昭和41年 ・県総合体育大会において、地区予選を8種目に限り実施した。
・第20回愛媛県総合体育大会が、地区予選の参加制限により72校6,049人で開催された。

昭和43年 ・46総体四国開催を正式決定した

昭和44年 ・46総体実行委員会が発足した。

昭和46年 ・"至純　探求　躍動"をスローガンにした「46年度全国高校総合体育大会」が四国4県で25種目に若い力がつどい、技と情熱を競った。本県でも、ハンドボール、柔道、庭球、ボクシング、バレーボール女子、漕艇の6種目が行われた。
・県高体連20周年記念式典が開催された。

昭和50年 ・昭和50年全国定通制大会が、東京都において開催され、本県から6種目、85名が参加し、活躍した。

昭和52年 ・愛媛県を主会場として、55全国高校総体が四国4県で開催されることが決定した。

昭和53年 ・ウエイトリフティング専門部が新設された。
・55総体県準備委員会が設立された。

昭和55年 ・愛媛県を主会場として、55全国高校総体が四国4県で開催された。

昭和56年 ・県高体連30周年記念式典を開催した。

昭和58年 ・高体連調査研究部が設置される。

昭和59年 ・64総体検討委員会を、四国高体連役員会にて開催した。

昭和60年 ・64総体開催種目が発表された。
本県では、バスケットボール、ボクシング、テニス、ホッケー、漕艇、登山の6種目が開催されることに決定した。

昭和62年 ・64総体準備委員会設立総会が開催された。

2　10年の歩み

元年総体

昭和63年
- 64総体実行委員会総会が開催された。
- ホッケー専門部が新加盟した。
- 64総体四国4県事務担当者連絡会が開催された。
- 西条市実行委員会設立総会が開催された。（登山競技）
- 新居浜市実行委員会設立総会が開催された。（登山競技）
- 64総体実行委員会常任委員会が開催された。本県開催種目は6種目である。
- 元年総体四国打合せ会が高知県で開催された。
- 女子柔道競技が正式競技として承認された。

平成元年
- 県内報道者連絡協議会が松山市で開催された。
- 全国高校総体抽選会（ホッケー・テニス）が松山市で開催された。
- 全国高等学校総合体育大会が四国4県（高知主会場）で開催された。本県においても、バスケットボール、庭球、ボクシング、ホッケー、登山、漕艇の6種目を開催した。
- 元年全国高校総体常任理事会が開催された。

平成2年
- 高体連評議員会において、元年度の行事報告、会費問題が審議された。
- 第19回四国高体連研究発表大会が、松山市で開催された。

平成3年
- 第45回県高校総合体育大会が、26種目68校、7,567名の選手の参加により開催された。
- 第40回定通制高校総合体育大会が、県下18校566名が参加し開催された。
- 県高体連40周年記念誌編集委員会が開催された。
- 愛媛県高体連40周年記念式典が220名の参加により、松山市で開催された。

平成4年
- 第46回県高校総合体育大会が、26種目68校、7,644名の選手の参加により開催された。
- 第41回定通制高校総合体育大会が、県下18校526名が参加し開催された。
- 四国高等学校体育連盟理事会において、平成10年度全国高校総体が四国4県で開催されることが、確認された。

平成5年
- 第47回県高校総合体育大会から、愛媛県総合運動公園陸上競技場において、総合開会式が実施された。26種目68校、7,926名の選手が参加した。
- 第42回定通制高校総合体育大会が、県下18校498名が参加し開催された。
- 誘致申請書を、全国高等学校体育連盟理事会に提出した。

平成6年
- 第48回県高校総合体育大会が、26種目72校、7,917名の選手が参加した。一条校以外の学校が、4校参加した。
- 第43回定通制高校総合体育大会が、県下18校470名が参加し開催された。
- 四国高等学校体育連盟理事会において、四国4県の開催種目配分を決定した。
- 全国高等学校体育連盟理事会において、四国4県の開催種目が決定した。

平成7年
- 第49回県高校総合体育大会が、26種目71校、7,982名の選手が参加した。
- 第44回定通制高校総合体育大会

が、県下18校442名が参加し開催された。

平成7年　・全国高等学校体育連盟理事会において、4県種目別の会場地が承認された。

平成8年　・第50回県高校総合体育大会が、26種目70校、7,944名の選手が参加した。
・第45回定通制高校総合体育大会が、県下18校477名が参加し開催された。
・平成10年度全国高等学校総合体育大会愛媛県準備委員会設立総会が開催された。
・全国高等学校体育連盟理事会において、平成10年度全国高校総体競技日程・競技会場が審議された。
・全国高等学校体育連盟理事会において、大会テーマ・スローガン・シンボルマークが決定された。

平成9年　・第51回県高校総合体育大会が、26種目72校、7,960名の選手が参加した。
・第46回定通制高校総合体育大会が、県下17校466名が参加し開催された。
・平成10年度全国高等学校総合体育大会愛媛県実行委員会設立総会が、開催された。
・愛媛県実行委員会が、作成した「全国高校総体ニュース」第1号が発行された。
・県内4種目統一ポスターが決定した。

3　将来に向けて

財源確保の困難さ、部員数の減少、指導者の不足等々、本県の抱える問題は多い。全国高体連の審議事項の中にも「財団法人化」「全・定・通信制との合同チーム、及び複数校の合同チームによる大会参加」「外部指導者の監督・コーチ」「企業協賛」があげられ、検討が進んでいる。また運動部活動そのもののあり方や、社会体育との関係を見直す時期であるとの指摘もある。高体連の存在意義が問われる中、教育活動の一環としての運動部活動をいかに活性化させるか、種目協会・連盟との連携をいかに保つかということが課題となっている。

世界を目指して

村　上　幸　史

今治明徳高校2・3年生でインターハイやり投げ2連覇。3年生では、円盤投げとの2冠達成。やり投げ日本高校記録保持者。愛媛陸上界を代表するアスリート

私が陸上競技を始めたきっかけは、中学時代の恩師から陸上競技の名門今治明徳高校への進学を奨められてからです。そして「やり投げ」という競技に出会い、私は全国高校総体と国民体育大会の2大大会において高校2・3年と共に2連覇を達成することができ、更に長い間目標にしていた高校新記録を樹立し、高校3年間を最高の形で終えることができました。

その自信を胸に秘め日本大学に進学しましたが、その自信に大きな落とし穴がありました。それは、一般の選手つまり自分より強い選手と競技していかなければならないという事です。

正直私は高校時代には「負ける」という気持ちにはまずなりませんでした。ところが、大学生になってからは自分の試合ができなくなりました。これは大学での試合を高校時代と同じような考え方で臨んでいたからです。高校時代は信頼のできる指導者が常に側にいて下さいましたが、大学では自分で考えて競技しなければならいという事です。

しかし、そのような悩みはすぐに消えました。それは受け身になっていた「自分」をもっと前向きな「自分」に変えなければならないという精神的な事、つまり「挑戦する」という事に気付いたからです。それから良い意味での「欲」を持って試合に向って気持を高めていく事ができるようになりました。

これからは、この気持ちを忘れずに結果の出せる選手になって世界を目指したいと思います。最後に、私に競技の出来る環境を与えてくれている両親、祖父母、親戚の方々、高校時代貴重な時間を使って毎日私を指導して下さった今治明徳高校の浜元先生、青野先生、また日本大学での競技生活を支えて下さっている澤村先生、小山先生、諸先生方に深く感謝いたしますと共に今後もご指導をよろしくお願いします。

高　　知　　県

《事務局》
〒780-0850 高知県高知市丸ノ内2丁目2番40号
県立高知丸の内高校内
TEL 0888（72）0865
FAX 0888（72）2629

創立年月日：昭和23年11月

加盟校数		52校
専門部数		23専門部
加盟部数		877部
部員数	男子	12,744名
	女子	13,499名
	合計	26,243名

年度	会長	理事長	記事
23	大島　光次	酒井　青喜	高知県高体連発足　加盟校31校、専門部11種目
24	〃	〃	第1回高校選抜相撲大会開催
25	〃	〃	高知県高体連旗作成
26	〃	〃	四国高体連結成
27	〃	〃	
28	〃	〃	
29	〃	〃	
30	〃	〃	
31	〃	〃	第9回秩父宮賜全国高校陸上競技選手権開催
32	楠瀬　洋吉	土居　武夫	
33	〃	〃	第26回日本高等学校選手権水泳競技大会開催
34	〃	〃	
35	〃	〃	第7回全国高校剣道大会開催
36	西村　正男	〃	
37	〃	〃	第11回全国高校体操選手権水泳競技大会開催
38	〃	〃	
39	〃	〃	高知県定通高体連発足
40	〃	〃	
41	曽我部清澄	〃	
42	森沢　栄晴	〃	第2回全国高校男子ソフトボール大会開催
43	〃	〃	
44	塩田　保美	〃	
45	井上源兵衛	田原　敏雄	県下5支部組織完了　四国高体連20周年記念式典
46	井上源兵衛	田原　敏雄	46全国高校総体開催
47	吉永　五郎	〃	高校総体視察生徒派遣
48	〃	〃	
49	〃	〃	
50	山本　馨	〃	
51	〃	〃	
52	〃	〃	
53	〃	〃	
54	〃	〃	
55	〃	〃	55全国高校総体開催
56	文野　栄喜	前田　多聞	
57	〃	〃	
58	〃	〃	
59	〃	〃	
60	〃	〃	
61	山岡　友重	前田　多聞	
62	〃	冲野　吉克	第22回全国高体連研究大会開催
63	〃	〃	
元	〃	〃	元年全国高校総体開催
2	〃	〃	
3	〃	〃	
4	秦泉　寺明	〃	
5	〃	清岡　栄一	
6	中平　勝也	〃	第21回四国高体連研究大会開催
7	〃	〃	
8	〃	〃	
9	眞鍋叡一郎	〃	
10	〃	〃	98全国高校総体開催予定

1 沿 革

創設年度より62年まで

○第1回高知県高等学校体育大会(23.9.17～19)
種目 陸上競技、バスケットボール、バレーボール、軟式庭球、卓球、相撲、水泳、野球、参加人数選手約500人、男子19校、女子10校であった。

○第1回高知県高等学校冬季体育大会を開催する。(24.2.13～14)
種目 ラグビー、サッカー、ハンドボール

◎高知県高等学校体育連盟発足(23.11)
加盟校31校専門部11種目会費生徒1人年額60円、教職員年額10円

○第1回全国高校選抜相撲大会(24.9.9)
以後毎年高知において開催している。

○高体連指定研究発表会(24.11.17)
以後毎年高体連指定において保健体育研究大会を実施、昭和44年4月、5支部組織完了にともない、以後毎年支部単位で実施している

○国民体育大会視察団派遣(25.10～)
加盟校生徒代表、引率教員を派遣、以後現在も高校総体視察団派遣を継続中である。

○四国高体連結成(27.1.19)
専門部11種目各県負担金20,000円事務局2年ごと輪番制であった。

○第8回国民体育大会四国4県で開催(28.9)
高知県開催種目水泳(夏季)、相撲(秋季)

○第26回日本高等学校選手権水泳競技大会を開催する。(33.8.22～24)
地元選手の活躍により、陸上競技につづく本県2度目の全国高校選手権大会は大成功裡に終了した。

○第7回全国高校剣道大会(35.8)
高知県民ホールに全国より高校剣士を集め盛大に開催された。

○第11回全国高校体操選手権大会(37.8)
本県で4種目の全国高校種目別選手権大会を高知県民ホールで開催する。

○高知県学校体育保健研究連合会発足(37.12)
学体研が小・中・高一貫保健体育を目指して発足した。

○高知県定通高体連発足(39.4)
定通高校の体育振興の目的で高知県定通高体連が発足する。

○第2回全国高校男子ソフトボール大会(42.8)
第1回優勝県として大会を誘致開催。
結果は、上位を独占し男子ソフトボール王国を確立した。

○昭和46年度全国高校総合体育大会を開催する。(46.8.1～11)
昭和43年11月全国高体連理事会において46全国高校総体を四国4県で開催することが正式に決定。昭和44年4月、大会スローガンを「至純・探求・躍動」と決定。昭和46年4月、高知県実行委員会事務局開設、従来夏季休暇中に実施していた四国大会を全国総体リハーサルとして6月19日・20日にそれぞれ開催地で実施する。
高知県においては、相撲、弓道、ソフトボール(女子)、体操、水泳を受けもち、関係各位の協力、援助により高知県高体連にとつて最初の一大イベントは好評のうちに終了した。

昭和46年度 全国高等学校総合体育大会
(相撲競技・表彰式)

○四国高体連20周年記念式典(46.5.1)
高知市丸の内会館において記念式典および祝賀会を盛大に挙行する。

○第10回四国高等学校保健体育研究会(46.11.27)
特別講師「ヨーロッパのスポーツ事情」として東京教育大学、成田十次郎氏を招聘した。

○昭和55年度全国高等学校総合体育大会(55.8.1～11)
昭和55年4月、四国高体連理事会において、全国高校総体開催、主会場愛媛県、種目競技4県で分担を決議、県内種目団体との競技をもとにして、昭和52年9月対策会で愛媛10、香川4、徳島6、高知7の種目配分案を決定。
昭和53年7月、大会スローガン「四国路を駆けろ若人意気と熱」決定。
昭和54年4月、55総体高知県実行委員会事務局を高知県教育センターに開設。

高知県において、相撲、卓球、剣道、ソフトボール（男）、バレーボール（男）、自転車、登山の7種目を開催、意義ある55総体であった。

○高知県高体連30周年記念史発刊（56.4.15）

○第1回高知県高等学校体育連盟運動能力テスト大会実施（56.4.7～）

40校、6,392名参加、生徒の体力を増進させ県民の体力づくりに資することを目的に実施現在も継続中である。

○高知県高体連規約の改正（58.4.20）

昭和56年度より取り組んだ、大々的な規約の改正が代議員会で承認された。

○高知県立岡豊高校が新加盟し49校となる。（59.4.18）

○60年石川県総体に視察員派遣（60.8.1）

64総体に備え総合開会式関係者5名、競技関係者10名を派遣する。

○64総体強化指定校の決定（62.1.20）

26校を強化指定校に指定し、64総体に備え競技力の向上を図った。

○高知県高体連なぎなた専門部設置（62.4.18）

○高知県立高知南高校、土佐塾高校が新加盟し51校となる。（62.4.18）

2　10年の歩み

63年から平成9年まで

○第22回全国高等学校体育連盟研究大会を高知県で開催する。（63.1.28～29）

「明朗で快活な人間育成に役立つ体育、スポーツ活動を目指して」の大会主題のもとに、高知県民文化ホールで全国各地より400名を越える先生方の参加をいただき開催する。

○高知県高体連漕艇専門部設置（63.4.17）

○63年兵庫県総体視察員派遣（63.8.1）

64年総体の開催に備え、高知県高等学校推進委員会より高体連加盟51各校から生徒代表1名、特殊務視察生徒6名、計157名の生徒を派遣する。

○高知県高等学校保健体育研究発表会を開催する。（元.2.10）

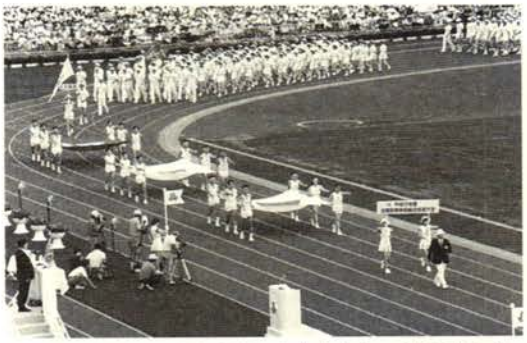
テーマ「楽しく意欲的に取り組む体育学習」以後現在に至っている。

○第42回高知県高等学校体育大会開催（元.5.19～）

54校、7,542名が参加。総合開会式は3年連続雨となり中止。

○平成元年度全国高等学校総合体育大会を開催する。（元.8.1～15）

高知県を主会場にして四国4県で開催される。高知県開催種目11種目、陸上競技、水泳、ハンドボール、柔道、卓球、バドミントン、自転車競技、サッカー、相撲、ソフトボール（男）、高知県選手団、団長森実啓祐、旗手近藤貴弘（高知農）、監督91名、選手516名。



平成元年度 全国高等学校総合体育大会・総合開会式

○高知県高体連ウエイトリフティング専門部設置（2.4.16）

○種目専門部、庭球部をテニス部に名称変更する。（2.4.16）

○平成2年度四国高等学校体育連盟研究発表会を愛媛県で開催する。（2.11、22）

テーマ「保健体育及び部活動の諸問題」

○平成2年度宮城県総体の視察員として加盟校5校より生徒代表を派遣する。（3.8.1～）

○高知県高体連記念史発刊（3.9.30）

10月4日高知会館で発刊祝賀パーティーを開催した。全国都道府県高体連及び加盟各専門部、関係機関に配布する。

○高知県高体連会費の値上げ（3.11.29）

平成4年度より、一人年間300を450円に値上げすることを決定する。

○四国高体連創立40周年記念式典開催（3.4.24）

○第20回四国高等学校体育連盟研究大会を香川県で開催する。（4.12.8）

○昭和61年より6年間高体連会長をつとめた山岡友重氏の退任にともない秦泉寺明会長が就任する。（5.4.16）

○第1回四国高等学校新人バスケットボール大会を高知県で開催する。（5.12.）

○第1回四国高等学校新人バレーボールを高知

県で開催する。(6.11.)
○第21回四国高等学校体育連盟研究大会を徳島県で開催する。(6.11.22)
テーマ「保健体育及び部活動の諸問題」
○四国高等学校選手権大会の参加料を6年度より値上げする。
○平成4年より2年間高体連会長をつとめられた秦泉寺明氏が退任、中平勝也会長が就任する。(6.4.15)
○平成8年度県選手強化費が13,000,000円から15,000,000円に増額される。(8.4.18)
○平成6年より3年間高体連会長をつとめられた中平勝也先生の退任にともない眞鍋叡一郎会長が就任された。(9.4.17)
○高知海洋高校が新加盟し52校となる。(9.4.17)
○第50回高知県高等学校体育大会開催(9.5.15)
本年度よりオープン競技として、フェンシング・カヌーが参加する。

3　将来に向けて

近年、わが国の社会情勢は大きく変化し、国際化や情報化がますます進み学校体育をとりまく社会環境も刻々と移り変わっています、また、生涯教育、生涯スポーツの推進が求められ学校における体育、スポーツのあり方がより重要視されてくる中で高校生の体力、競技力等についてきびしく指摘されているところであり、こうした認識の上に立っての懸命な取り組みが必要であり本県高体連としてもハード面もさることながら、生徒の体力向上、指導者の資質向上、競技力の向上等ソフト面での充実、向上が当面の重要課題として受け止め、関係者が一体となった継続的な取り組みが急務であることを痛感しています。

本県高体連としても今年度の全国高校総体、14年の高知国体の開催等にむけた多くの課題を持ちながら前向きの姿勢で積極的に取り組んでいきたいと考えています。そういう意味からも各校、各専門部並びに関係機関の共通理解、共通認識の上に立ち、一丸となった協力体制を保つことにより、本県体育、スポーツの振興と高体連の大いなる飛躍を祈念しています。

人生を変えた「平成元年高校総体」

濱　村　善　美

平成元年全国高校総体空手の部において団体準優勝・個人3位
現在高知県立小津高等学校教諭

小学校三年生から習い始めた空手道。始めてすぐに目標は「地元で開催する総体での全国優勝」となっていった。

泣き虫だった私を強くさせたいと願っていた父と、毎日厳しいトレーニングを積み、全てをかけた戦いだった。結果は団体戦準優勝、個人戦3位入賞。思いも寄らない好成績が私の今の生活を全て支えてくれている。

この大会に望むまでに2つの大きな収穫があった。1つは友情である。私は高校進学も空手道部のある所を選び、元年総体に向けて必死だった。でも他の部員は高校から空手道を始めた者ばかりで、同じ気持ちにはなれないだろうと思っていた。しかし、いつも励まし合って皆で1つの目的に向かう喜びを仲間たちは心から私に教えてくれた。

もう1つは自信である。遠征や強化練習、強化合宿と総体を控えた前年頃から毎週のように行なわれていた。その中で全国レベルの選手との競い合い。勝つことの難しさと勝てた時の喜びは言葉では言い表すことができない。経験したものこそが持てる自信。この2つの収穫が全国へとつながっていったように思う。

この大会が終わった後すぐに、「これからも空手を続けていきたい」と思い、現在に至っている。私が経験できた様々なことを生徒に何か伝えたい、と思ったからである。昨年、その夢は早くも現実のものとなり、監督として全国総体に選手を連れていくことができた。選手としてではなく、監督としてコートに立つプレッシャーは今までに経験したことのないものであった。時代は変わっても、変わることのない大切なことを生徒たちに少しでも教えて行ければと思う。

福　岡　県

《事務局》
〒816-0052 福岡市博多区東平尾公園２-１-４
県立スポーツ科学情報センター内
TEL 092（621）9394
FAX 092（621）9431

創立年月日：昭和23年6月10日

加盟校数		182校
専門部数		30専門部
加盟部数		5,460部
部員数	男子	32,496名
	女子	18,059名
	合計	50,555名

年度	会長	理事長	記事
23	大内覚之助	江崎　忠	福岡県高等学校体育連盟創立
25	井上孝太郎	〃	（6月10日）
28	山田　茂	橘　顕二	
32	有吉　正勝	〃	
33	伊勢田雪男	石丸　三郎	西日本水泳（末広杯）大会開催　全国高校柔道大会開催　全国高校弓道福岡大会開催
36	大塚　茂太	〃	全国高校バドミントン福岡大会開催
37	長敬　一郎	伊之坂盛孝	全国高校ハンドボール福岡大会開催　第1回全国高校総体開催
39	敷島　太郎	〃	高体連創立20周年記念事業実施
43	福沢　秀利	石丸　三郎	全国高校総体福岡大会開催の決定
45	中村　義信	〃	
49	〃	〃	高校総体準備委員会設立
47	中村喜代志	中西　敬一	
51	古谷　悟	野口　嘉代	高体連創立30周年記念事業実施　高体連会報創刊
56	主静　雄	門田　久人	福岡県高校総体第1回総合開会式開催
58	各務　章	門田　久人	高校生バレーボール交歓親善試合　ハワイ派遣
59	〃	〃	高校生バレーボール交歓親善試合　ハワイより来県
60	〃	〃	高校生バスケットボール親善交流試合　ハワイ州より来県
61	田畑　淳二	花田　年弘	
62	〃	〃	福岡県・ハワイ州高等学校　バスケット交歓交流試合ハワイへ派遣
63	永吉　博義	〃	高体連創立40周年事業実施
元	〃	〃	
2	合原　正登	〃	
4	吉田　秀男	梅野　哲雄	
5	船津　正明	〃	第28回全国高体連研究大会開催
6	〃	〃	加盟校以外の大会特例参加開始
7	〃	〃	事務局県立スポーツ科学情報センターへ固定
8	原野　雅	城戸　英敏	
10	隈本　豊	〃	高体連創立50周年記念事業実施

1 沿 革

昭和23年2月21日、福岡県教育部長名で高体連設立に関する予備打ち合せ会が召集された。

その後、数回の準備会を経て、前回の参加者に、各学校代表者を加えた総勢108名の出席のもと、昭和23年6月10日に福岡県高等学校体育連盟が誕生した。この時の基本方針は次の通りである。

(1) 加盟校全生徒からの負担金徴集
(2) 競技会開催と授業への配慮
(3) 支部、専門部の設置
(4) 各競技団体との協調
(5) その他

これらの基本方針は現在の高体連に引き継がれている。

混乱していた世相も落ち着くにつれて高体連も充実・発展し、49総体の成功を収めることになるのである。この総体がもたらした成果として指導者・審判員・役員の養成がある。このことが、その後の本連盟の発展の原動力になったと言っても過言ではない。

昭和51年（1976）

事務局が福岡高校から福岡中央高校へと移転し、本連盟の内容充実施策の決定、規約検討委員会設置、本連盟創立30周年記念事業の準備等を行った。

昭和52年（1977）

表彰規定、弔慰見舞金規定、対外試合規定大会開催基準要項等の制定を行った。

昭和53年（1978）

加盟校176校、生徒数16万人を越える膨大な組織となった。

特に49年総体成功からその後の全国高校総体、国体等における高校生の活躍は、多くの県民から高い評価をうけている。

昭和54年（1979）

会報編集のための委員会を設置した。

昭和55年（1980）

この年には高体連会報第1号が編集委員長ほか6名の編集委員の汗の結晶として7月に発行された。

昭和56年（1981）事務局が福岡中央高校から筑紫丘高校へと移転し、第1回の県高校総体総合開会式が行なわれた。

昭和57年（1982）

第2回県高校総体総合開会式が開催された。

平和台陸上競技場は中部支部の学校から参加した生徒でいっぱいになった。

昭和58年（1983）

この年の8月12日に、45国体に備えて県競技力向上対策本部が設置され"国体は自前の選手で臨む"を合い言葉に高体連・中体連での選手育成に力を注ぐことになった。

昭和59年（1984）

この年にはロス五輪が開催され、スポーツに対して関心が高まっていた。

「高校生バレーボール親善交流試合」のためハワイ州より選手団が来県し、本県高校生と親善を深めた。

昭和60年（1985）

ハワイ州との交流試合がバスケットボールになり、ハワイ州より男女チームが来県し、四支部で交流試合が行なわれた。

昭和61年（1986）

4月には、事務局が筑紫丘高校から、福岡中央高校へ移転した。

45国体に向けての県競技力向上対策本部の活動も7ケ年計画の3年目を迎え、指導者・審判員養成、ジュニア選手強化対策、施設の整備等が進んだ。

昭和62年（1987）

ハワイ州との交流試合は、「福岡県ハワイ州高等学校バスケットボール交歓交流試合」と銘打って8.12日～18日まで、役員・監督7名、選手22名が派遣されホノルル市とヒロ市で交流試合と交歓会が行われた。

福岡県高体連創立50周年記念事業
（平成10年5月30日　福岡リーセントホール）

2　10年の歩み

昭和63年（1988）

創立40周年を迎え、記念総合開会式と記念式典が6月4日（土）に開催された。

この日、総合開会式がある平和台陸上競技場のスタンドは、中部支部の学校から参加した21校7,626名の生徒で一杯になった。

博多、筑紫丘、修猷館、博多女子、福岡中央の5校200名の吹奏楽団による演奏の中を、選手団が堂々と入場行進した。

開会式の後には、中部支部の5つの学校より選ばれた男子1,160名による県民体操、女子は15校より選ばれた450名によるメインポールダンス、そして最後には4つの学校から95名のバトントワラーの演技が行なわれ、40周年記念行事にふさわしい華やかなものになった。

午後からは、大手門会館において記念式典と祝賀会が行なわれた。記念式典では県教育委員会より本連盟の役員に感謝状が贈呈された。

また、本連盟側からは、これまで本連盟を支援してくれた県教育委員会の関係者4名に感謝状が贈呈された。そして、これまでに功績があった理事、専門部役員、全国高校総体優勝監督にも感謝状が贈呈された。

平成元年（1989）

45国体の前年に当たり、県内各地でリハーサル大会が開催され、県民の体育・スポーツに対する関心は一段と高まってきた。このような時に文部省は学習指導要領の改訂を告示した。この中で、運動は人間の健康の保持増進、体力向上にとどまらず、人生をより豊かに充実して生きるために重要な文化財であるとし、すべての生徒が生涯にわたって文化に親しむ体育・スポーツが必要になってくると説いている。

平成2年（1990）

45国体の本番である。

この年の宮城インターハイには監督・選手総勢900名余の選手団を送り込み、多くの体験と感動、そして自信を携えて、その後の45国体に臨むことが出来た。高体連に所属する少年の部の選手達は、本県選手団の中核となり、県民の宿願である総合優勝に向かって大きく貢献することが出来た。

このように競技で活躍した高校生の他に、大会運営の裏方として多くの高校生が活躍した。ミスが許されない競技部門の補助員として、或いは、式典音楽・公開演技担当として、夏休みも返上して研修や練習を重ね、その責任を見事に果たしたのである。このことに対して、県内外の関係者から高い評価を受けた。

そして、生徒達も多くの感動と満足感をもって終了したのである。

平成3年（1991）

12月には、全国高等学校駅伝競走大会において本県代表の男子の大牟田高校と女子の筑紫女学園高校がアベック優勝した。この大会はテレビやラジオで実況放送され、県民の多くの人々に大きな喜びと深い感銘を与えてくれたものである。

なお、この年度当初よりアーチェリー競技となぎなた競技が専門部に昇格している。

平成4年（1992）

事務局が福岡中央高校から修猷館高校へ移転した。そして、「強い高体連、品格のある高体連、愛される高体連」を目指した。

平成5年（1993）

第28回全国高体連研究大会を本県で開催した。この大会は県内をはじめ、全国各地から約600名が福岡市民会館に集い、平成6年1月27・28日の2日間盛大に開催された。

1日目は開会行事に引続き、3つの分科会で研究発表と討議が行われた。2日目は文部省体育局体育課教科調査官鈴木漠氏による全体講評と、「指導者」と言う演題で旭化成陸上競技部監督の宗茂氏が講演した。

平成6年（1994）

各種学校の大会参加を特例で認め、九州朝鮮高級学校と北九州工業高等専門学校が北部支部大会に、有明工業高等専門学校が南部支部大会に初めて参加した。

平成7年（1995）

本連盟にとって画期的な出来事があった。

それは、本連盟の事務局が固定化したことである。

県立スポーツ科学情報センターの建設が進む中で、県教育委員会のご理解・ご支援により、永年の懸案が実現したのである。

久留米工業高等専門学校が特例での大会参加が認められ、南部支部大会に初めて参加する

ことになった。

平成８年（1996）

事務局の固定化も安定し、新たな会長、理事長でスタート、規約改正で役員の任期が３年となる。

この年に開催されたアトランタオリンピックに水泳の宮崎義伸選手（直方高校３年）が100M平泳ぎの日本代表選手として出場した。

平成９年（1997）

近年の小子化に伴い負担金等による財源確保が困難になることが予想されるなか、高体連の組織再編に取り組み、各種会議の整理統合をした。

この年の全国総体では、多くの優勝を勝ち取り、盛大な表彰式が実施された。特筆すべき実績として、柳川高校のテニス部の全国総体20回目の優勝、東福岡高校サッカー部の３冠達成が上げられる。

福岡県高体連創立50周年記念事業
（平成10年５月30日　福岡県立スポーツ科学情報センター）

3　将来に向けて

本連盟創立当時は、バランス良く配置されていた各支部間の加盟校数に大きな差が生じ、早急な改善が求められている。

また、加盟生徒数の減少に伴う負担金の減収は、解決しなければならない課題となっている。

しかし、生涯体育・スポーツへの関心の高まり、学校週５日制の導入とともに、体育・スポーツに親しむ生徒は増加していくと考えられる。

これらの生徒たちが充実した学校生活を送るために本連盟の担う役割は極めて重要である。

そのためには、本連盟を支えてきた先輩方の献身的な活動が更に引き継がれていくことを期待するものである。

スイミングキャップのお守り

宮崎義伸

・全国高校総合体育大会
平成3、7、8年度水泳競技100m
平泳ぎ　優勝
・平成８年
アトランタオリンピック出場

高校２年の３月。僕は１ヵ月後に行われる、アトランタオリンピック選考会をまえにして、かなりの緊張と、プレッシャーを感じていた。学校の先生方の期待、友達の応援に応える為になんとしてもオリンピックに出場したい。

そんな思いが僕を押し潰そうとする。そんな時、水泳部のキャプテンが、白いスイミングキャップを買ってきた。一体何をするつもりなんだろうと思って見ていると、みんなでそのスイミングキャップに寄せ書きを始めた。

「夢を叶えろ」「男なら一発勝負」「エースは必ず勝て」「目指せアトランタ」いろいろな寄せ書きで埋まったスイミングキャップを「みんなで応援してるからな」と手渡された時、僕は「アトランタへは絶対いける」と確信した。

そして迎えた選考会。僕は不思議に落ち着いていた。「僕は一人で泳ぐんじゃない。みんなに背中を押してもらって泳ぐんだ。スイミングキャプのお守りがついているんだ。」そう思うと不思議と力が湧いてくる。結果は100m平泳ぎでオリンピック標準記録を突破。僕の高校生活最大の目標であったアトランタオリンピック出場を決めた。今思うと、福岡県立直方高校に進学していなかったら、そして、こんなに素晴しい先生方や友達とめぐり逢えていなかったら、このオリンピック出場はなかったかもしれない。高校時代の友達は一生の友達だ。

シドニーオリンピックに向けての厳しい練習で福岡へはなかなか帰れないのでみんなとは会えないけれど、スイミングキャプのお守りを大切にしてシドニーまで頑張り続けたい。

佐　賀　県

《事務局》
〒840-0016 佐賀市南佐賀3－11－15
県立佐賀東高校内
TEL 0952（24）0303
FAX 0952（24）0224

創立年月日：昭和23年4月1日

加盟校数		55校
専門部数		29専門部
加盟部数		740部
部員数	男子	7,584名
	女子	4,655名
	合計	12,239名

年度	会長	理事長	記事
23		松岡　勝己	県高体連発足
24	宮田　虎雄	大久保祐次	県高体連規約制定
25	〃	〃	
26	〃	〃	
27	〃	〃	
28	〃	〃	全国バスケットボール大会佐賀高校初優勝
29	〃	〃	
30	〃	富石　豊松	
31	〃	〃	
32	〃	〃	
33	〃	〃	
34	西村　芳雄	〃	
35	〃	〃	
36	〃	〃	
37	〃	〃	
38	〃	原田　治	第1回県総体開催
39	森　一郎	〃	
40	〃	〃	全国総体剣道競技開催 全国剣道大会佐賀北高校初優勝
41	元村　光明	〃	
42	永井　茂雄	江崎　保	事務局輪番制を決定
43	高添　泰巌	〃	
44	坂田　力三	田中　謙一	
45	〃	〃	
46	東島　亨	松尾　斉昭	
47	〃	〃	
48	納富　行雄	岩瀬　陽二	
49	〃	〃	全国総体6競技開催
50	納富　行雄	中溝　善治	全九州総体を開催
51	〃	〃	第31回若楠国体に協力 全国ヨット大会唐津西高校初優勝
52	花島　廣次	木下　好通	高体連報第1号を発刊
53	〃	〃	
54	釈　憲正	〃	
55	境　正美	宮原　敏	全国ヨット大会唐津東高校初優勝
56	〃	〃	ろう学校が加盟
57	田原　碩孔	〃	武雄青陵高校が加盟
58	江頭　一水	北川　長生	
59	〃	〃	
60	〃	〃	
61	大坪　晃	大久保義高	
62	田中　邦秀	〃	第1回女子駅伝開催　全国ヨット大会唐津工業高校初優勝　全国自転車大会(ロード)龍谷高校初優勝
63	〃	〃	致遠館、弘学館、東明館高校の3校が加盟
元	三浦　英夫	相浦　實	全国新体操大会佐賀女子高校初優勝
2	畠山　忠郎	〃	全国バドミントン大会　佐賀女子高校初優勝　なぎなた競技加盟
3	〃	〃	第1回県研究大会開催
4	荒巻甲子郎	木原　昇	県総体第30回を迎える
5	宮原　照明	〃	アーチェリー競技加盟
6	〃	〃	体協より強化費交付
7	山田　満男	簇﨑　正允	
8	宮原　都明	〃	
9	〃	〃	
10	相良　哲朗	北御門哲男	

1 沿 革

昭和23年　佐賀県高等学校体育連盟発足、事務局を県庁内に置く。
昭和24年　県高体連規約制定。事務局を県立佐賀高校に移転。
昭和28年　九州高等学校体育連盟事務局を県立佐賀高校に置く（28、29年度）。
第6回全国バスケットボール大会（男子）佐賀高校初優勝（新潟市開催）。
昭和38年　事務局を県立佐賀西高校に置く。種目ごとに開催していた競技会の期日を統一し、第1回佐賀県高等学校総合体育大会を開催。
昭和40年　全国高校総体剣道競技を佐賀県体育館で開催。全国高校総体第12回剣道大会（男子団体）佐賀北高校初優勝（佐賀市開催）。
昭和42年　事務局輪番制（1期2年）を採用し、県立佐賀北高校に事務局を移転。
九州高体連事務局を県立佐賀北高校に置く（42、43年度）。
昭和44年　事務局を県立佐賀商業高校に移転。加盟金全日制一人60円を100円に、定時制一人30円を50円に、通信制一括3千円を5千円に値上げ。
昭和46年　事務局を県立佐賀工業高校に移転。
昭和48年　事務局を県立佐賀東高校に移転。
昭和49年　加盟金全日制一人100円を180円、定時制一人50円を70円に値上げ、通信制は一括5千円据え置き。全国高校総体サッカー、軟式庭球（女子）、漕艇、ホッケー、自転車、バドミントンの6競技大会を開催。
昭和50年　次期事務局予定の県立佐賀西高校全面改築中の為、引続き県立佐賀東高校に事務局を置く。副会長に3人制をとる。
佐賀県にて全九州高等学校総合体育大会を開催。
昭和51年　佐賀県で開催の第31回国民体育大会に県高体連の総力をあげ協力。
全国高校総体第17回ヨット大会（女子スナイプ級）唐津西高校初優勝（蒲郡市開催）。
昭和52年　事務局を県立佐賀西高校に移転、輪番制が1期3年になる。
佐賀県高等学校体育連盟結成30周年記念講演会開催。（12月6日佐賀市医師会看護学校講堂講師中島茂氏）30周年を記念し高体連報第1号を発刊。
昭和53年　12月理事会にて54年度より加盟金を全日制一人180円を300円に、定時制一人70円を150円に、通信制一括5千円を1万5千円に値上げ。
昭和55年　事務局を県立佐賀北高校に移転。全国高校総体第21回ヨット大会（男子FJ級）唐津東高校初優勝（高松市開催）。
昭和56年　九州高体連の事務局を県立佐賀北高校に置く（56、57年度）。
県立ろう学校が加盟。
全国高校総体第22回ヨット大会（男子スナイプ級）唐津東高校初優勝（藤沢市開催）。
昭和57年　境正美氏全国高体連より表彰。
県立武雄青陵高校が加盟。
県高校総体が第20回を迎え、アトラクションとして佐賀清和高校マーチングバンド出演。全国高校総体第23回ヨット大会（女子スナイプ級）唐津西高校6年ぶり2回目優勝（鹿児島市開催）。
昭和58年　事務局を県立佐賀商業高校に移転。田原碩孔氏全国高体連より表彰。
全国高校総体第24回ヨット大会（女子スナイプ級）唐津西高校2年連続3回目優勝（蒲郡市開催）。
昭和59年　加盟金を全日制一人300円を450円に、ろう・定時制一人150円を250円に、通信制一括1万5千円を2万5千円に値上げ。全国高校総体第25回ヨット大会（女子スナイプ級）唐津東高校初優勝（本荘市開催）。
昭和60年　全国高校総体第26回ヨット大会（女子スナイプ級）唐津東高校2年連続2回目優勝（穴水市開催）。
昭和61年　事務局を県立佐賀工業高校に移転。江頭一水氏、北川長生氏全国高体連より表彰。
昭和62年　大坪晃氏全国高体連より表彰。
第1回県高校女子駅伝競走大会開催。
全国高校総体第28回ヨット大会（男子FJ級）唐津工業高校初優勝、（女子スナイプ級）唐津東高校2年ぶり3回目優勝、（女子FJ級）唐津東高校初優勝（江差町開催）、第32回自転車大会（ロード）龍谷高校初優勝（函

館市開催)。
昭和63年　県立致遠館高校、私立弘学館高校、私立東明館高校が加盟。

2　10年の歩み

平成元年　事務局を県立佐賀東高校に移転。
田中邦秀氏、大久保義高氏全国高体連より表彰。
県高校総体に柔道女子個人競技新設。県高校総体開催費県費補助金180万円交付。
九州大会　バドミントン、庭球、自転車、新人陸上の4競技を開催し補助金56万円交付。
全国高校総体新体操大会(女子団体)佐賀女子高校初優勝(香川県坂出市開催)。全国総体派遣費補助金965万円交付。
(財)鍋島報效会より50万円を助成。
平成2年　三浦英夫氏全国高体連より表彰。
バドミントン競技専門部に昇格。なぎなた競技が高体連に加盟し準専門部となる。
県高校総体に柔道女子団体新設。なぎなた競技のオープン参加。県高校総体開催費県費補助金180万円交付。
九州大会　飛込、ラグビーフットボール、男子駅伝、女子駅伝の4競技を開催し補助金56万円交付。
全国高校総体新体操大会(女子団体)佐賀女子高校2年連続2回目優勝(仙台市開催)第42回バドミントン大会(女子団体)佐賀女子高校初優勝(宮城県松島町開催)。全国総体派遣費補助金965万円交付。
(財)鍋島報效会より50万円を助成。
12月の理事会に於て応募作品53首の中より平成3年度以降県高校総体スローガンを決定。「精一杯　青春の汗　さわやかに」森憲一君(神埼高校3年)
平成3年　県高校総体開催費県費補助金180万円交付。県高校総体になぎなた競技新設。
九州大会　バレーボール、バドミントン、ホッケーの3競技を開催し補助金42万円交付。
全国高校総体新体操大会(女子団体)佐賀女子高校3年連続3回目優勝(静岡市開催)、第32回ヨット大会(女子スナイプ級)唐津西高校8年ぶり4回目優勝(静岡県三ヶ日町開催)。全国総体派遣費補助金965万円交付。(財)鍋島報效会より50万円を助成。
第1回県高校体育連盟調査研究大会開催。(12月6日県スポーツ会館講師長崎県立国見高校サッカー部監督小嶺忠敏氏)
平成4年　事務局を県立佐賀西高校に移転。
畠山忠郎氏、相浦實氏全国高体連より表彰。
佐賀県高等学校総合体育大会第30回を迎え、アトラクションとして佐賀清和高校マーチングバンド出演。県高校総体開催費県費補助金180円交付。ポスターを募集し131作品の中より福田美津子さん(佐賀北高校3年)の作品が最優秀賞に選ばれた。
北九州陸上競技を開催し補助金14万円交付。
全国高校総体新体操大会(女子団体)佐賀女子高校4年連続4回目優勝(宮崎市開催)。
全国総体派遣費補助金965万円交付。
(財)鍋島報效会より50万円を助成。
平成5年　荒巻甲子郎氏全国高体連より表彰。アーチェリー競技が高体連に加盟し準専門部となる。
県高校総体開催費県費補助金180万円交付。
県高校総体にアーチェリー競技新設。
九州大会　体操、競泳、飛込、ウエイトリフティングの4競技を開催し補助金56万円交付。
全国高校総体新体操大会(女子団体)佐賀女子高校5年連続5回目優勝(栃木県氏家町開催)。全国総体派遣費補助金953万円交付。
加盟金を全日制一人450円を750円に、ろう・定時制一人250円を450円に、通信制一括2万5千円を4万5千円に値上げ。(6年度より実施)
(財)県体育協会より選手強化事業費(競技力向上推進費)の委託を受ける。
3月の理事会において国立唐津海員学校の県高校総体への参加が認められる。(6年度より)
(財)鍋島報效会より50万円を助成。
平成6年　県高校総体開催費県費補助金180万円交付。
九州大会　ヨット、卓球、水球、登山、ソフトテニスの5競技を開催し補助金70万円交付。
全国高校総体新体操大会(女子団体)佐賀女子高校6年連続6回目優勝(富山県新湊市開催)全国総体派遣費補助金1,100万円交付。
(財)鍋島報效会より30万円を助成。

（財）県体育協会より選手強化費660万円交付。県高体連強化指定校指定証交付式を行う。（2月10日はがくれ荘）

平成7年　事務局を県立致遠館高校に移転。九州高体連事務局を県立致遠館高校に置く。（7、8年度）

宮原照明氏、木原昇氏全国高体連より表彰。県高校総体開催費県費補助金180万円交付。

九州大会　弓道、バドミントン、相撲、柔道、自転車の5競技を開催し補助金70万円交付。

全国高校総体新体操大会（女子団体）佐賀女子高校7年連続7回目優勝（鳥取市開催）、第36回ヨット大会（男子FJ級デュエット）唐津西高校初優勝（鳥取県境港市開催）。全国総体派遣費補助金1,100万円交付。

（財）鍋島報效会より15万円を助成。

（財）県体育協会より選手強化費800万円交付。

平成8年　山田満男氏全国高体連より表彰。県高校総体開催費県費補助金180万円交付。

九州大会　サッカー、バスケットボール、ハンドボールの3競技及び北九州陸上を開催し補助金56万円交付。

全国高校総体新体操大会（女子団体）佐賀女子高校8年連続8回目優勝（甲府市開催）、第37回ヨット大会（男子FJ級デュエット）唐津西高校2年連続2回目優勝（山梨県山中湖村開催）。全国総体派遣費補助金1,100万円交付。

平成19年度全国高校総体佐賀大会開催誘致を知事、県議会議長及び県教育長に要請し、了承を得る。

平成10年度より当分の間、事務局を県立佐賀東高校に置くことを理事会で決定する。

（財）鍋島報效会より15万円を助成。

（財）県体育協会より選手強化費800万円交付。

平成9年　県高校総体開催費県費補助金180万円交付。

九州大会　漕艇、ラグビーフットボール、テニス、飛込、新人陸上の5競技を開催し補助金70万円交付。

全国高校総体第38回ヨット大会（女子FJ級デュエット）唐津西高校初優勝（京都府宮津市開催）。全国総体派遣費補助金1,100万円交付。

（財）鍋島報效会より15万円を助成。

（財）県体育協会より選手強化費860万円交付。

頂点をめざして

杉山智基

有田工業高校陸上競技部
平9　京都総体5000m 2位
大阪国体5000m 1位
（13分58秒86）

平成8年6月、県総体（14'39"）で優勝した後右足に激痛が走った。手当をしながらの練習でどうにか北九州大会で6位になり全国への切符を手にしたが、疲労骨折と診断され4週間の練習禁止となった。顧問の蒲地先生に「よし、そうしたら心肺機能が少しでも落ちないようにする事と、しっかりウエイトトレーニングを積んで次に備えよう。」と言われ、重い気持ちだったのが次への希望へと変わることができた。

山梨総体では予選9位（14'53"）。決勝には残れなかったものの故障を考えればよい出来と思い、来年こそはという気持ちを強くした。

8月は久住、四国の太洲とつらい合宿ではあったが、1日1日を大切にし練習を積んだ結果、広島国体（14'13"）で7位、初めて全国大会入賞ができた。9年6月の県総体では、冬のトレーニングを試すつもりで最初から積極的に走り14'03"と自己新を出すことができた。この調子で全国大会もと思い練習したが、北九州大会直前にサッカーボールが当たって転倒し、腰に怪我をしてしまった。しかし、これで挫けてはいけないと頑張り大会新で優勝することができた。

8月4日、待ちに待った全国総体5000mの決勝。昨年の悔しさを晴らすためにかなり気合いが入っていた。今年こそは先頭について行こうと思ったが、前にはドウングという強敵がいた。スタート直後はトップで並んだものの最初の1000mが2'40"と非常に早く、その後徐々に離されたが14'04"と自己新に近いタイムで2位になり、表彰台に立った時は思わず「やった」と思った。憧れのインターハイで2位になれてとても幸せだった。こんな気分を味わえたのも熱心に指導をして下さった先生方、一緒に練習をしたみんなのお陰で本当に感謝しています。これからも常に自分の目標に向かって頑張って行こうと思っています。

長　崎　県

《事務局》
〒852-8014 長崎市竹の久保町12－9
県立長崎西高校内
TEL 095（862）8231
FAX 095（862）8255

創立年月日：昭和24年4月1日

加盟校数		101校
専門部数		30専門部
加盟部数		1,570部
部員数	男子	18,485名
	女子	10,698名
	合計	29,183名

年度	会長	理事長	記事
24	小谷巨三郎	小谷巨三郎	第1回長崎県高等学校体育大会開催(7競技)
25	梅田　倫平	国田廣次郎	第1回九州地区高体連連絡会議開催　高体連マーク制定　県高校体育大会(11競技)
26	小谷巨三郎	白石　俊馬	県高校体育大会(12競技)
27	〃	〃	県高校体育大会(13競技)
28	〃	〃	県高校体育大会(13競技)
29	〃	〃	県高等学校総合体育大会として実施　総合開会式実施
30	梅田　倫平	横田　亮二	県高校体育大会(14競技)
31	斉藤　進	〃	県高校体育大会(15競技)
32	〃	〃	県高校体育大会(15競技)
33	〃	〃	県高校体育大会(15競技)
34	清田金三郎	白石　俊馬	九州高体連事務局担
35	〃	〃	〃
36	佐々木良親	室田　正晴	県高校体育大会(17競技)
37	〃	〃	県総体を全国・九州の予選大会として実施
38	俵　重秋	横田　亮二	県高校体育大会(16競技)
39	〃	〃	県高校体育大会(17競技)
40	金谷　林作	大平　兼男	県高校体育大会(26競技)
41	〃	〃	県高校体育大会(29競技)
42	古川憲介	〃	県高校体育大会(29競技)
43	〃	〃	全九州高等学校総合体育大会開催
44	〃	岩切　明	長崎国体開催
45	〃	〃	県高校体育大会(32競技)
46	金谷　林作	谷川　博	県民体育大会と同時
47	柴江豊三郎	谷川　博	開催(～48年まで)
48	別当　俊	〃	県高校体育大会(28競技)
49	〃	〃	県高総体単独開催
50	〃	長尾一雄県	高校体育大会(26競技)
51	〃	〃	県高校体育大会(26競技)
52	林田　光晴	松添　俊一	県高校体育大会(26競技)
53	〃	〃	県高総体ＮＨＫ放映
54	〃	〃	県高校体育大会(27競技)
55	〃	〃	県高校体育大会(27競技)
56	竹下　哲	〃	新人戦参加料徴収
57	〃	本多　守	
58	高口　一成	〃	
59	〃	〃	女子駅伝オープン大会
60	〃	〃	新人駅伝大会実施
61	〃	〃	第1回女子駅伝実施
62	田中　重正	〃	
63	〃	野田　憲佑	県高体連表彰実施
元	松尾　修三	〃	駅伝大会同日・同期日に開催
2	〃	〃	柔道女子開始
3	〃	竹山　廣	普賢岳噴火により駅伝大会を諫早で実施
4	大河内邦昭	〃	ソフトテニス名称変更
5	〃	〃	アーチェリー・カヌー競技開始
6	〃	〃	総合開会式を前日開催で実施　高等専門学校・海員学校が参加
7	長池　良昭	松本　剛	全国総体開催の表明
8	〃	〃	
9	小山　曙美	小野　良介	県高総体のポスターを作成
10	〃	〃	全国総体開催の内定

1 沿 革

＜昭和23年＞・長崎県高等学校体育連盟の結成に向けての準備が始まった。
＜昭和24年＞・４月１日に，県高体連が創設された。第１回長崎県高等学校体育大会として，７競技の実施から始まった。（陸上，バレーボール，バスケットボール，体操，ラグビー，ソフトボール，水泳）
・県高総体開催費補助金を県より交付。
＜昭和25年＞・県高校体育大会４競技増える（卓球，相撲，駅伝，サッカー）
＜昭和27年＞・全九州高等学校体育大会を始めて開催する。
・柔道が正式種目となる。
＜昭和29年＞・第６回大会より，県高等学校総合体育大会として，開催。総合開会式を始めて実施。
＜昭和30年＞・県高体連規約改正。
・剣道男子が正式種目となる。
＜昭和31年＞・弓道男子が正式種目となる。
＜昭和34年＞・九州高体連事務局担当（２年）
・新体操男女が正式種目となる。
＜昭和35年＞・バドミントン女子が正式種目となる。
＜昭和36年＞・バドミントン男子が正式種目となる。
＜昭和37年＞・第１４回県高総体より，全国九州大会の予選を兼ねる。期日も，６月開催とする。
＜昭和39年＞・雨天のため体育館で開会式を実施。
＜昭和40年＞・第17回大会で26競技実施94校、10,424人の参加。県大会まじまって最大規模の大会となる。
＜昭和41年＞・県高総体に，３競技増え29競技で実施。（水球，漕艇，ライフル射撃）
＜昭和43年＞・県高等学校新人大会の実施時期をまとめて実施。
・全九州高等学校総合体育大会を開催。21競技。
・全九州高校駅伝大会の実施。
・県高総体地区予選会の実施。
＜昭和44年＞・第24回国民体育大会の開催
・県高総体と県民体育大会を合同開催する。
＜昭和47年＞・九州，全国大会選手派遣費補助金を県より交付。
・雨天のため，開会式中止。
＜昭和49年＞・県高総体単独開催に戻す。
＜昭和50年＞・県高総体の中心会場を，県内３地区持ち回りとする。
・県高総体出場の離島選手に対して派遣費補助金を県より交付。
・県内開催の九州大会に対して開催費補助金を県より交付。
＜昭和51年＞・第28回県高総体の，総合開会式をテレビで放映。
＜昭和53年＞・県高体連30周年記念。
・第30回県高総体より，総合開会式をＮＨＫで放映。
・全国定通大会へ選手派遣。
＜昭和54年＞・定通専門部の設置。
＜昭和57年＞・県新人大会に出場する離島選手に対して派遣費補助金を県より交付。
＜昭和59年＞・女子駅伝大会をオープン大会として実施。
・県高体連「年報」第１号の発刊。
・全国総体開会式県選手団のＴシャツ作成。
＜昭和60年＞・駅伝新人大会を開催。（男子）
＜昭和61年＞・県高総体開会式に県教育長のあいさつを復活。
・第１回女子駅伝大会を実施。
・県高総体で空手道女子団体，柔道女子団体を実施。
＜昭和62年＞・九州高体連事務局担当（２年）
・調査研究部の設置。
・県高体表彰規定の制定。

昭和53年度第30回長崎県総合体育大会 総合開会式

2 10年の歩み

この10年は，昭和63年の40周年記念，昭和64年を迎えた1月7日早朝の昭和天皇崩御に伴う8日開催の新人駅伝大会の対応に始まり，平成3年6月の普賢岳の噴火，平成15年全国高校総体の長崎県への誘致など長崎県高体連においては激動の時期であった。

平成元年から，別期日・別会場で実施されていた県駅伝競走大会が男女同日・同会場で開始され，これまでよりなお一層充実した大会として実施された。ここまで至るには，駅伝専門部は元より，関係各機関の方々の御苦労は大変なものであったと思います。改めてその御苦労に敬意を表します。また，ライフル射撃ＢＲ競技もこの年から競技が開始された。

平成2年は，県高総体で柔道競技女子団体が8チームの参加を得て競技が開始され，高総体に新たな1ページが加えられた。

県高体連の組織の中にも，新たに総務委員会が組織され，理事会の諮問機関として位置付けられた。

平成3年は，長崎県にとって忘れることのできない大惨事が発生した。

県高総体期間中の6月3日に発生した，雲仙普賢岳の大噴火である。数十名の尊い生命を奪われ，選手の中にも被害を受け多ところも多かった。県高総体期間中であり，被害を受けた地域の高校での対応は想像を絶するものであった。この影響で，雲仙小浜で実施していた県高校駅伝大会も開催場所を変更し，九州高校駅伝大会は，県内に新たにコースを作り実施した。

一方では，県当局に長崎県競技力向上対策本部が設立され，ジュニア層の強化対策，予算措置もなされ，高校生の競技力向上にとっても喜ばし限りであった。

平成4年は，長崎県競技力向上対策事業の一環として，ジュニアスポーツ振興事業が施行され，26校36クラブが強化指定校として指定を受け，助成金を交付していただいた。

軟式庭球がソフトテニスに名称変更になったのもこの年であった。

平成5年は，長崎県の長年の夢であった全国高校総体の本県開催を九州高体連に対して要請した記念すべき年である。これは，昭和57年に平成4年開催に向けて誘致に乗り出して以来のことであった。

県内では，県高総体に，アーチェリー・カヌー競技が加わり競技が開始され，専門部にも準専門部として加入し，活動を開始した。高体連は，この年から専門部強化事業費を予算化し，全専門部の1／3に当たる専門部に，強化費を補助し，専門部の強化，競技力の向上を目的として事業を開始した。

また、この年，昭和29年から実施されてきた総合開会式の前日開催が検討された。

平成6年は，県高校総体総合開会式を前日開催で実施した。

前日の金曜日15：00～17：00まで実施，よく土曜日から競技を開始した。

実施に至っては，各学校への調査，交通機関の問題，時間設定等，様々な問題があったが，関係者の努力，各学校の協力によって，スムーズに運営することができた。

総体の参加資格の特例を加筆し，一条項以外の高校の参加が開始されたのも，この年からであった。

平成7年度は，県総体に，単位制高校・養護学校の初参加があり話題を呼んだ。

全国総体・国民体育大会での高校生の活躍があり，年ごとに高校生スポーツに対して長崎県民の関心が高まり，選手・指導者の意識もそれにつれて高まってきている。地元新聞・放送局の高校生のスポーツ報道も年ごとに大きくなってきた。

平成8年は，平成5年に九州高体連に要請した全国総体の誘致が内諾され，14年目にして念願の夢が実現した年であった。

これまで，全国総体開催実現に努力されてきた関係者の皆様方の喜びは計り知れないものと思います。

この年は，これを受けて，新聞でも大きく取り上げられ，各方面から力強い言葉をいただき，県高体連関係者も，心新たにした年であった。平成9年は，県高体連にとっても，一つの契機となった年である。

それは，前年度に内諾を得た，平成15年全国総体の本県開催，そして，平成10年に迎える県高体連50周年記念である。

県高体連として，50周年記念事業の準備を開始し，全県下で取り組むことを確認した。

また一方では，高体連の組織の見直し，専門

部の組織の見直し・中体連との連携・高文連との連携・競技力向上の対策・学校現場への浸透など課題を設定し，記念事業の実施だけでなく今後のことも見据えてスタートした。

特に，この年から，高文連の協力を得て，県下生徒からポスター図案，スローガンを募集し，県高校総体のポスターを作成した。

50周年記念事業も，県下3地区で準備委員会を組織し，各地区で準備が開始された。

3　将来に向けて

今年度迎える県高体連の50周年，平成15年全国高校総体の長崎県開催（昭和44年の国体以来の全国規模の大会）が内定した年ともなり，長崎県高体連にとっては，将来に向けて，いろんな面で良い時期（転換期）を迎えています。これまで，県高体連をここまで発展して下さった先輩達の残してくれたものを踏まえながら，この節目の時期に，将来を見据えて高体連の運営はどうあるべきか考えていこうとしています。始めに当然のことですが，運営の面では各加盟校の学校現場と常に密着した運営を行うことです。そのために，高体連の組織は現状とあっているのか（見直し），県下生徒に対する広報活動の在り方，高文連との連携，小子化に伴う部活動の在り方，予算の問題等を高体連の諸機関で積極的に取り組んでいかなければならないと考えます。一方競技の面では，各競技専門部の組織の見直し，中体連との連携等の取組を行っています。高体連の置かれている立場，各学校における運動部の現状厳しい状況にあるが，これまで，高体連のために奮闘されてきた先輩の方々，運動を愛する生徒達のためにも，高体連に携わっている我々が，心新たにして奮起しなければならないと痛感します。

平成10年度長崎県高等学校総合体育大会50周年記念大会 総合開会式における、中地生徒1,200名による郷土芸能踊り

藤　永　佳　子

佐々町立佐々中学校出身
県立諫早高校2年
県中体連・県駅伝出場長崎県立諫早高校
9・9　九州新人大会（2位）
9・12　全国高校駅伝（2区）
10・2千葉クロスカントリー大会優勝
10・3福岡クロスカントリー大会準優勝
世界クロスカントリー大会
10・5ゴールデンゲームスin延岡
10・6県高総体

私にとって陸上は、自分を試すことのできるすばらしい競技だと思います。今、私が考えていることは今しかできないことを精一杯楽しむこと。

今年の三月、世界クロスカントリー大会に参加させてもらいました。初めての夢だった世界大会。不安半分、楽しみ半分で胸を膨らませながら参加しました。世界のすごさに驚き、レースでは平常心を忘れてしまい、いつもの自分の力を100%出せず、自分にとって満足のいく走りができませんでしたが、この大会で、たくさんのことを学び得ることができました。広い視野で世界を知ることができたこと、間近で、力強く軽やかで気持ちよさそうな走りを見ることができたこと、外国人のアップの仕方など。世界の人と戦うことができたことは自分にとってもよい思い出になりました。また日本のトップの人ともしゃべる機会があり、他の学校の練習方法など聞くことができました。この大会で一つ、いや二つぐらいは大きくなれたと思います。「挑戦」、「粘り」は、第一に「根性」。この大会で学んだことを忘れず、今年のレースにつなげていきたいと思います。

また五月末には、延岡で今年の大きな大きな目標の一つだった高校記録を作ることができました。この時は実業団のトップの人たちと走り、ものすごい応援のかけ声が私のパワーとなり、楽しんで気持ち良く走ることができました。この時の喜びは私にとって一生の宝物になりそうです。私はどんな時でも、希望を忘れず、常に笑顔を絶やさず、楽しみながら、前向きに、目標に向かって一歩一歩前進していきたい。謙虚さ、感謝の気持ちを持ちつづけることが大切。私がいつも走ることができるのは、周りの人が支えてくれているから、今の自分があるのは周りの人の力があるからだと思っています。

熊　本　県

《事務局》
〒860-0877 熊本県熊本市清水町楡木327番地
県立熊本北高校内
TEL 096（339）7224
FAX 096（339）7266

創立年月日：昭和23年4月1日

加盟校数		87校
専門部数		36専門部
加盟部数		1,563部
部員数	男子	15,853名
	女子	8,699名
	合計	24,552名

年度	会長	理事長	記事
23	大西　嘉幸	川端　保	4月1日熊本県高体連発足14専門部を設置
24	〃	〃	
25	〃	〃	全国高体連マークを制定
26	吉田　浩	田中　康清	
27	〃	〃	
28	下條　靖	石黒　寅次	
29	〃	〃	全国高校陸上開催
30	〃	〃	全国高校女子バレーボール選手権大会開催
31	〃	〃	
32	小島嘉七郎	兼子　志賀	美高体連の歌制定
33	〃	〃	
34	〃	〃	全国大会3競技開催ボクシング·剣道·バスケット
35	〃	〃	国民体育大会本県開催
36	河添　正	田中　康清	
37	〃	〃	
38	〃	〃	全国高校登山大会開催
39	上村　正敏	川越　宝輔	東京オリンピック開催
40	〃	〃	全国総体3種目開催ハンドボール·バドミントン·柔道
41	〃	〃	
42	〃	〃	
43	牧野　毅	栗田　秋生	
44	〃	〃	
45	〃	〃	
46	高山　静也	富永　勝美	国高体連理事会で承認
47	〃	〃	
48	〃	〃	第1回熊本県高校総体を開催
49	高山　静也	富永　勝美	
50	宇野　幸吉	〃	
51	谷口　秀人	赤星　秀年	
52	〃	〃	
53	〃	〃	30周年記念事業実施
54	〃	〃	
55	〃	〃	
56	江藤　恵治	〃	
57	〃	〃	
58	宮崎　重信	〃	
59	〃	〃	全国高体連研究大会を本県で開催
60	前田　精二	中村　昭男	
61	佐竹　和之	〃	
62	〃	〃	
63	〃	〃	
元	後藤　良勝	白土　長幹	
2	〃	〃	
3	〃	〃	
4	星子　孝之	池松　典彦	
5	〃	〃	
6	〃	〃	県総体に高専初参加
7	工木　武雄	〃	平成13年全国総体開催請願を県議会採択
8	〃	高木　三朗	九州高体連がH13全国総体本県開催誘致を承認
9	〃	〃	H13全国総体本県開催を全国高体連理事会で承認 50周年記念事業実施
10	城本　和博	〃	H13全国総体本県開催を全国高体連理事会で正式決定

1 沿 革

(1) 熊本県高等学校体育連盟の発足と当時の情勢

昭和23年4月に「6・3・3・4」年制の新しい学制が施行されて新制高等学校が発足し、すでに活動をしていた中等学校体育連盟を発展的に解消し高等学校体育連盟が産声をあげた。初代会長は大西嘉幸氏、理事長は川越保氏が就任、事務局は熊本高等学校に置かれた。専門部は、陸上・駅伝・バレーボール・バスケットボール・ラグビーフットボール・軟式庭球・サッカー・卓球・相撲・水泳・ソフトボール・体操・ダンス・ハンドボールの14競技種目を設置した。

(2) スポーツ県熊本を大いにアピールした各種全国大会

6.26水害により断腸の思いで昭和28年第6回全国高校陸上競技大会開催を断念した本県は、この天災にくじけることなく各方面からの支援を得て、第7回大会開催を開催誘致し昭和29年7月31日・8月1日の両日、見事成功させた。以後、昭和40年大分インターハイまで下記のとおり数々の全国大会を開催し、大いに県民の高等学校体育・スポーツへの理解と気運を盛り上げた。

● 全国高等学校陸上競技選手権大会（昭和29年7月31日～8月1日）
● 全国高等学校女子バレーボール選手権大会（昭和30年8月4日～8月7日）
● 昭和35年度第15回国民体育大会熊本県大会リハーサル大会
・全国高等学校ボクシング選手権大会（昭和34年7月31日～8月2日）
・全国高等学校剣道選手権大会　（昭和34年8月6日～8月7日）
・全国高等学校バスケットボール選手権大会（昭和34年8月11日～8月16日）
● 全国高等学校登山大会（昭和38年7月26日～7月30日）
● 全国高等学校総合体育大会（大分インターハイ昭和40年8月2日～8月7日）
・本県開催競技種目（柔道・バレーボール・バドミントン）

(3) 第1回熊本県高等学校総合体育大会開催

記念すべき第1回熊本県高等学校総合体育大会は、昭和48年熊本市を中心に6月8日～6月10日までの3日間開催された。総合開会式は水前寺競技場に13,000人の観覧者が参集、吹奏楽隊の入場、バトン鼓隊の先導による標旗の入場、国旗・県旗の入場に引き続き県北部から79校9,900人の堂々の入場行進にスタンドが湧いた。大会開催に向けて正に精力的奔走された富永理事長が高らかに開会宣言、主催者を代表して挨拶する高山会長の姿が光り輝いた。予定された時刻どおり進められた開会式の様子はＮＨＫ熊本放送局の絶大なる協力のもと10時30分から11時55分までテレビで実況放送され、学校教育の一環としてのスポーツ活動のすばらしさを大いに県民にアピールした。

(4) 全国高体連研究大会開催

高等学校指導者が当面する諸問題と研究成果を話し合う第19回全国高体連研究大会は昭和60年1月31日～2月1日の2日間、本県高体連が主管して熊本市で開催された。全国から430名に及ぶ高等学校体育指導者が参加、本県の調査研究部による「運動部指導者に関する実態調査」と題した研究発表の後、「競技力向上への対策」「スポーツ障害と安全対策」「スポーツ活動の底辺拡大」の3つの分科会に分かれて、それぞれの現場の悩み、実践体験などの発表をもとに協議し、指導助言者を交えて解決法を話し合った。最終日は、森重隆新日鐵釜石ラグビー部監督が「ラグビーから思うこと」と題して講演、スポーツ活動のエネルギーの源はスポーツを好きであることと熱弁を振るわれ、参加者の共感と感動を呼び、大いに本県高体連のみならず全国の指導者の志気を高めた。

昭和59年度第19回全国高体連研究大会全体会風景

2　10年の歩み

(1)近年の競技成績の向上と加盟生徒数等の推移

本連盟は、創立50周年を迎えた平成9年度、加盟校87校、加盟生徒数69,040名、専門部数36（準専門部3部含む）を数えた。しかしながら全国的な少子化の波は本連盟にも押し寄せ、加盟生徒数に限っては昭和41年の85,777名をピークに減少傾向にある。専門部においては、平成11年開催予定の「くまもと未来国体」や平成13年開催予定の全国高等学校総合体育大会への対応や、競技力向上への期待の高まり等もあって年々増加し現在に至っている。

競技成績の面では、県の施策や関係者の努力によって全国のトップクラスにランクされるまでになった。近年（過去10年間）の全国総体における優勝数は実に63を数え、3位内入賞数は207にものぼる。特執すべきは、いわいる熊本のお家芸といわれてきたボクシング·剣道は過去10年間すべてに3以内入賞を果たし、バドミントン・柔道においては10年間の中で9回の3以内入賞を成し遂げている。また、前述の「くまもと未来国体」等における強化策が実を結びレスリング・なぎなた・フェンシング·アーチェリーなどの健闘にも目を見張るものがある。

(2)全国高等学校総合体育大会本県開催誘致経過

本県では、県民一人一人が多様な価値観を実現できる社会の創造を目指し、熊本県総合計画「豊かさ多彩生活創造くまもと」を推進し、新しい教育制度の指針である「生涯学習社会の実現」に向け諸施策の充実を図っており、全国高等学校総合体育大会の開催は、青少年の体育·スポーツ活動の推進、競技力向上をはじめ県民の生涯学習·生涯スポーツの振興を図る絶好の機会であるとの共通認識から本大会開催誘致は、長年の懸案事項であり、関係者の願望であった。

今後、九州ブロックの開催が予定される年は平成13年·15年·19年·21年·22年となっており最後の22年が全国を一巡する年である。本県は国体開催後のなるべく早い時期に本大会を誘致したいとの意向から、九州高体連あてに平成15年開催を希望していたが、長崎県も同年開催を強く希望していたこともあり、両県の間で調整を必要としていた。平成13年開催については、沖縄県での開催が予定されていたが、沖縄県が諸般の事情により開催返上することとなり、平成8年2月沖縄県から本県に開催地の引き受け依頼があった。

早速、本県高体連·九州高体連·行政関係で慎重に審議·検討し、種々の手続きを経て平成9年度には全国高体連に開催申請書を提出、春季理事会において満場一致で承認を受け正式内定に至った。

平成9年度　京都総体熊本県選手団

(3)創立50周年記念事業

平成9年度に創立50周年を迎えた本県高体連は、半世紀にわたる輝かしい歴史の大きな節目として創立50周年記念事業を下記のとおり実施した。

ア　創立50周年記念大会（県総体）開催
イ　創立50周年記念講演開催
ウ　創立50周年記念式典·祝賀会開催
エ　創立50周年記念誌発刊

記念式典は、高木理事長の開会にはじまり、工木会長のあいさつ、つづいて久野全国高体連会長·県教育長·県議会副議長の祝辞をいただき、高体連の歌大合唱で式典を締めくくった。

祝賀会では、いよいよ秒読み段階となった「くまもと未来国体」や平成13年度開催「熊本インターハイ」に向けた熱い思い、懐かしい先輩諸氏の苦労談が飛び交い杯を酌み交わし、本県高体連の一層の充実·発展を祈念した。

なお、記念式典前開催した記念講演会には、400余名が出席。講師は、秋田県立能代工業高等学校長（前同校バスケットボール部監督）の加藤廣志氏を招聘。1時間30分にわたり、常に生徒に真剣に向き合い愛情を注がれる教育者

としての生き方や、バスケットボールや生徒達へのひたむきな思いを情熱的に語られた。聴衆した参加者は加藤先生から感動と涙・沢山のエネルギー得て、改めて、可能性を多く秘めた生徒達に体育・スポーツをとおして係わっていける幸福感・充実感を実感した。

3　将来に向けて

顧みると、我が熊本県高等学校体育連盟は、昭和23年4月に産声をあげ、加盟校52校、加盟生徒数1万9千余名、14専門部をもってスタートした。以後、今日に至るまで16名の会長、11名の理事長をはじめ、各地区を代表する理事、専門部部長・委員長の先生方がけん引役となって、現在、87校6万9千余名、準専門部3部を含め36専門部が充実した活動を行っている。発足当初から今日に至るまで、学校教育の一環として各種競技大会・研究大会の企画・運営に多くの実践を積み重ねてきた。

また、この50年の歴史の中で本県の体育・スポーツの一翼を担い、全国高等学校総合体育大会や国民体育大会、さらには各種国際競技大会に優秀な選手を輩出してきた。このことは選手諸君のたゆまぬ努力と、昼夜を問わず指導にあたられた先生方の情熱や保護者のご理解とともに関係機関のご支援の賜である。

かくのごとく、本連盟は、この半世紀、様々な課題を解決しつつ順風な軌跡を描いてきたが、時代は「国際化」「情報化」「多様化」に象徴されますように大きな変化のときである。今、この変化にいかに対応していくかが私たちに課せられた課題であり今後、学校体育と社会体育の接点をいかにとらえていくか、また、一段と進む少子化への対応として、体育・スポーツ活動の魅力を生徒諸君が肌で実感できる部活動のあり方を工夫することがさらに求められる。

21世紀を目前にして、本県ではスポーツのビッグイベントが次々に開催される。体育・スポーツ活動の意義をさらに認識し、各種事業の推進に全力を尽くすことが、次代に向けた高体連の使命であろう。

夢、そして決意

清　本　大　介

H2水俣高校卒
S63インターハイ個人4位
同年国体3位
H元インターハイ個人5位
福岡大学卒業後H6から水俣高校勤務。

全国高等学校体育連盟創立50周年記念誌の発刊にあたり心からお慶び申し上げます。このたび、私のような若輩者が寄稿することになりましたことは、誠に光栄に思います。

さて、私と新体操の出会いは、中学校と同時に当時の指導者であった本田邦生先生に勧められたことから始まりました。入部してからというものは新体操中心の生活となり、時間のある限り転回練習や手具を握り締めていました。家の中で蛍光灯を割ったり、庭の芝を枯らしたりということが今では懐かしい思いでとなっています。

高校進学は、常に全国大会で上位に名を連ねる伝統校である水俣高校に進学し、更なる技術の錬磨を目標に新体操部に入部しました。当初やっていけるか不安でしたが、現在も監督をされている森勝弘先生との出会いにより、不安は払拭されました。新体操や教育に対する森先生の情熱には圧倒されるものがありました。もちろん指導に関しては、鬼のようにきびしく決して妥協を許されませんでしたが、生徒に対する愛情も人一倍深く、私が教師を目指したのはこの頃です。現在、水俣高校の体育館には「一技千回」という垂れ幕が掲げてありますが、この言葉こそ部の信念であり、どんな技であろうと千回は繰り返さないと自分のものにならないと言う意味を持っています。また、「感動を与える演技」を目標に日々練習に打ち込んできました。

大学卒業後は、森先生のご配慮もあり、夢であった教職に就くことができ、母校である水俣高校で指導できる喜びを感じています。今は、コーチとして全国大会連勝中の後輩部員の指導に燃えています。教師としての厳しさを実感することも多々ありますが、いつかは森先生の後を受け継げる指導者になれるよう決意を新たに精進していきます。

大　　分　　県

《事務局》
〒870-0938 大分市今津留 1-19-1
県立大分舞鶴高校内
TEL 097（553）5382
FAX 097（553）5392

創立年月日：昭和 23 年 4 月 1 日

加盟校数		85 校
専門部数		32専門部
加盟部数		1,059 部
部員数	男子	8,581 名
	女子	5,059 名
	合計	13,640 名

年度	会長	理事長	記事
23	秦　泰彦	安部　正士	事務局を大分第一に
24	〃	〃	
25	〃	〃	
26	〃	〃	事務局を大分上野丘に
			九州高体連事務局兼任
27	〃	〃	九州高体連事務局兼任
28	橋本　喬木	河野　太	事務局を大分商業に
29	〃	〃	
30	〃	〃	
31	〃	〃	
32	大神　和好	〃	
33	〃	〃	
34	中西　俊雄	堀部　岩雄	事務局を大分上野丘に
35	〃	〃	
36	池田　利明	敷嶋　唯雄	事務局を大分工業に
37	安達　一郎	長谷川哲郎	事務局を大分舞鶴に
38	田村　守隆	永松　国雄	事務局を大分商業に
39	〃	〃	
40	〃	〃	九州高体連事務局兼任
41	高木　来	〃	九州高体連事務局兼任
42	大石　俊之	船石　一雄	事務局を大分上野丘に
43	〃	〃	
44	津野　任	渡辺喜代人	事務局を大分工業に
45	〃	〃	
46	山本　峯生	永松　国雄	事務局を大分女子に
47	〃	〃	
48	布施　順生	〃	
49	楠本　達男	〃	
50	大江　博	〃	
51	上田健太郎	平山浩一郎	事務局を大分舞鶴に
52	〃	〃	
53	藤原　正教	石橋　干城	事務局を大分雄城台に
54	岸野　晋一	幸重　和治	九州高体連事務局兼任
55	〃	〃	九州高体連事務局兼任
56	〃	〃	
57	安部　孝一	栗林　正幸	事務局を大分商業に
58	吉川　敏	〃	
59	〃	〃	
60	小野伊三郎	安藤　隆	事務局を大分工業に
61	〃	〃	
62	志賀　清己	〃	
63	古賀　文敏	横島　幹郎	事務局を大分上野丘に
元	池邊　明文	〃	
2	山本　清次	〃	
3	〃	〃	
4	岩田　満之	濱本　俊夫	事務局を大分女子に
5	糸永　隆章	〃	九州高体連事務局兼任
6	〃	〃	九州高体連事務局兼任
7	〃	田中　和彦	
8	〃	〃	
9	福山　一夫	〃	
10	秦　美正	〃	事務局を大分舞鶴に

1　沿　革

昭和 23 年・大分県中等学校体育連盟を発展的に解消、大分県高等学校体育連盟を結成
・加盟校 23、専門部 13 部設置

昭和 24 年・専門部 2 部設置
自転車、ソフトボール

昭和 25 年・野球部が分離独立

昭和 26 年・専門部 3 部設置
軟式野球、バドミントン、柔道

・新規加盟大分舞鶴高校（新設）
昭和27年・支部長を評議員とする等の規約改正
昭和28年・専門部1部設置しない競技
・新規加盟大分桜丘高校（新設）
・第1回大分県高等学校体育大会を開催（8／29～30）
・スポーツ特別表彰規定を制定
・高体連主催大会の回数を年3回
昭和29年・専門部2部設置　剣道、弓道
・専門部4部廃止　バドミントン、送球、自転車、しない競技
昭和30年・新規加盟を承認
高田高校田原分校、中津玉沢高校国東高校安岐分校、臼杵高校定時制、竹田商業高校、日田商業高校
・第4回全国高校柔道大会開催(大分市)
昭和31年・会費一人60円
・新規加盟別府商業高校（新設）
昭和32年・県高体連創立10周年記念特別表彰個人22名、学校16校
昭和33年・規約改正　役員の任期は2年。会長当番校は臨番制とする。
昭和34年・副会長に私立高校校長代表を加え、4名（規約改正）
・全国高校女子バレーボール選手権大会開催（大分市）
昭和35年・支部長を評議員会、理事会の構成員（規約一部改正）
昭和36年・高体連主催大会は年3回を確認
昭和37年・専門部1部設置ハンドボール
・会費全日制70円、定時制35円
・新規加盟大分女子高校（新設）
・全国高校総体を39年度に誘致決議
・第15回全国高校陸上競技大会開催(大分市)
昭和38年・未普及競技専門部10部設置
・全国理事会にて、昭和40年度全国高校総体の大分県開催を決定
・学校新設、独立による新規加盟
中津工業、双国、緒方工業
昭和39年・全国高校総体事務局設置、実行委員会設立総会開催
・学校新設による新規加盟　別府青山、日田三隈商業、大分工業高等専門学校、四日市農業高校麻生分校
昭和40年・全国高校総体開催（15種目）
・大分市営陸上競技場にて総合開会式実施（7月31日）
・専門部設置馬術
・新規加盟竹田南高校
昭和41年・会費全日制100円、定時制70円
・第21回国民体育大会開催
・第5回日米高校レスリング親善試合開催（佐伯市）
昭和42年・会費全日制100円、定通盲聾50円
・第1回大分県高等学校定時制通信制体育大会を開催
・新規加盟県立盲学校
・県高体連創立20周年記念特別表彰個人12名、学校18校
昭和43年・学校新設、独立による新規加盟
碩信高校、大分電波高校

開会式にて―高校県体種目別優勝旗

昭和44年・高校県体開会式の応援交換会実施
昭和45年・新規加盟明星高校
昭和46年・定通体育大会運営費県補助金交付・給特法施行に伴う高体連主催大会、会議の回数は、年3回
昭和47年・支部大会のあり方について通知
・会費全日制130円、定通盲聾65円
昭和48年・新規加盟大分雄城台高校（新設）・全国高校総体参加旅費、スポーツクラブ振興費の県補助金交付
・高体連主催大会を、高校県体、全国・九州大会予選、新人大会に統一
昭和49年・会費全日制160円、定通盲聾80円
昭和50年・会費全日制200円、定通盲聾100円
・主催大会の参加料を徴収
個人100円、団体1000円
・新規加盟向陽台高校(富士紡大分学園)
昭和51年・県高体連主催大会を年2回に減
昭和52年・県高体連創立30周年記念特別表彰個人49名、学校18校
昭和53年・高校県体参加旅費の県補助金交付

昭和54年 ・会費全日制300円、定通盲聾150円
昭和57年 ・会費全日制330円、定通盲聾165円
・専門部1部設置調査研究部
・高体連主催大会を年3回
昭和58年 ・学校新設による新規加盟
別府羽室台高校、大分南高校
昭和59年 ・会費全日制450円、定通盲聾200円
・軟式野球部が高野連に移籍
昭和60年 ・専門部に部長制（校長）を導入
専門部細則を定める。
昭和61年 ・新規加盟大分豊府高校（新設）
昭和62年 ・全国高校総体出場監督、主将会議を開催する。

2　10年の歩み

昭和63年 ・新規加盟情報科学高校（新設）
平成元年 ・役員組織の改正について
学識経験者理事若干名を新設
・県高体連創立40周年記念特別表彰
個人44名、学校20校
・県高体連創立50周年記念事業第1回準備委員会開催（12／13）
平成2年 ・全国高校総体、全国定通大会参加選手激励壮行会実施
・県高体連創立50周年記念史編集委員会発足（11／8）
平成3年 ・会費を全日制一人700円、定通盲聾350円とする。
・専門部4部設置　カヌー、なぎなた、アーチェリー、空手道
・役員組織の改正について
競技部長、専門委員長代表理事各4名を5名に増員
・高体連研修事業がスタート
平成4年 ・第25回オリンピックバルセロナ大会水泳競技に林享（大分鶴崎）選手が出場
平成5年 ・県高体連慶弔規程を制定
・高校県体開会式での応援交換会自主参加とし、高体連の調整は止める。
・大分工業高等専門学校の高体連主催大会への参加を承認
・全国理事会において、全国高校総体の参加枠を拡大し、各種学校・専修学校等の参加を94年度から認める。
・創立50周年記念事業財務委員会設置
平成6年 ・創立50周年記念史編集室を㈱佐伯印刷所内に設置
平成7年 ・全九州体育大会として本年度より、フェンシング・アーチェリー・なぎなたが正式競技となる。
・九州高体連理事会で、全国総体の開催順序を決定
・創立50周年記念事業として記念グッズ（8・9年）、カレンダー（7・8年）等の販売を計画
平成8年 ・校名変更（大分桜丘→楊志館へ）
全国高校総体正式競技になぎなた
・第7回大分県スポーツの翼（日華親善交流大会）に役員10名、選手58名参加（11／20～23台北）
平成9年 ・創立50周年記念事業推進実行委員会発足（3回開催）
・創立50周年記念式典及び祝賀会開催
日時　平成9年12月2日（火）
会場　大分東洋ホテル
・大分県高体連50年史発刊
部数　3000部
・創立50周年記念講演会
日時　平成10年2月12日（木）
会場　大分県総合社会福祉会館
講師　渡辺公二（西脇工業高校）

大分県高等学校体育連盟組織図
加盟校数及び生徒数は平成9年5月1日現在

加盟校85校（全日77、定通8）
加盟生徒数49,096人（全日48,267、定通829）

支部加盟校数

県南	豊肥	久大	大分	別杵	県北	定通
10校	9校	7校	23校	14校	14校	8校

専　門　部（32部）
陸上競技　体操　水泳　バスケット　バレー　卓球　ソフトテニス　ハンドボール　サッカー　ラグビー　ソフトボール　相撲　柔道　剣道　弓道　登山　バドミントン　漕艇　レスリング　テニス　自転車　ボクシング　ホッケー　ウェイト　ヨット　フェンシング　馬術　カヌー　なぎなた　アーチェリー　空手道　調査研究

事　業	各種大会の開催　調査研究活動 研修事業　50周年記念事業

3　将来に向けて

大分県高体連は、戦後の荒廃がまだ続く昭和23年に加盟校23校・13の専門部で、学校体育・スポーツの健全な発展を目的に結成され、平成9年度に創立50年という意義ある輝かしい節目の年を迎える事ができました。

これまで長年にわたり、血の滲むような努力と研鑽を積まれ、本連盟発展に大きく寄与された歴代の役員の方々や指導者の先生方をはじめ関係各位に深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

創立50周年記念講演会（H10.2.12）

大分県高体連も先輩方の熱心な指導の下、スポーツ振興意識が目覚め、スポーツで汗と涙を流し青春を謳歌した若者が大きく成長し、九州ブロック初の開催となった全国高校総体を成功裏に開催するとともに、翌年開催の第21回の大分国体では、本連盟を支えた指導者と高校生が一体となって総合優勝の原動力となるなど、スポーツ大分を大きく躍進させ、我が国を代表して世界の檜舞台で活躍する選手や国内外の社会で活躍する有意な人材を輩出してきました。

我が大分県も、日韓共同開催となった2002年ワールドカップサッカーの開催県として、また2008年第63回国民体育大会の開催など、ビッグなスポーツイベントの開催成功に向け、本連盟挙げてその主役づくりや支援者づくりにも取り組んで行かなければならないと考えております。これからは、50年の財産を糧に、21世紀に向け、本連盟の抱える課題として、生徒減少期の部員確保や財政基盤の確立、学校五日制完全実施のもとでの各種大会の開催や部活動の推進など、多くの課題が山積しておりますが、学校体育・スポーツの健全な発展を基本に、これら一つひとつを解決し、生徒が生涯にわたって豊かなスポーツライフをデザインできるよう、次なる60周年、70周年、100周年へと、スポーツ文化の創造を目指して邁進する所存であります。

高校生活を振り返って

高　いづみ

'98年3月別府商業高等学校卒業
（株）大分バス勤務
平成9年度全国高校総体
フェンシング競技女子
個人フルーレ・エペ優勝
第52回国体団体優勝
'97世界カデット選手権日本代表

別府商業高校に入学後、中学時代にしていたバスケットボールからフェンシング競技に転向先生の「お前なら世界へ行ける」という言葉を信じて、苦しい練習に耐え、高校2年生の4月に厳しい国内予選を突破し、スペインで開催された世界カデット選手権大会に日本代表として出場しました。初めての国際試合ということで緊張と不安も大きく、技術的にもまだまだ未熟でフルーレ個人27位、エペ50位という不本意な成績で終わりました。この時、世界の選手に負けたことがとても悔しく日本に帰国してもハイレベルな技術を習得するための練習に日夜取り組みました。この結果、3年の高校総体では、個人フルーレ・エペの2種目に優勝、団体ではライバルの熊本・氷川高校と対戦しましたがほしくも敗れ3位に終わりました。この高校総体での負けた悔しさをバネに、敷根先生の指導のもと、部員一同一致団結し次の大会である国体での全国制覇に向けて練習に励みました。

そして、国体での準々決勝で氷川高校と対戦し見事雪辱を果たし、その後夢にまで見た全国制覇を達成できました。これは、毎日の厳しい練習にいつも一緒に頑張ってきたチームメートの松藤・川畑選手そして指導者の敷根先生、みんなで勝ち取った全国制覇であり、個人優勝とは異なる喜びとなりました。平成10年の世界ジュニア選手権にも日本代表として出場、前回よりも順位を挙げることができ、団体戦では8位入賞とジュニアでは世界に通用する力を示せたのが大変うれしかった。このように、高校時代は多くの人達のアドバイスと数多くの試合を経験することにより、技術的にも精神的にも人間的にも大きく成長することができたと思っています。これからも、世界に通用する力の習得を目指した練習を心がけ、ここ大分から世界に羽ばたいて行きたいと思っている毎日です。

宮　　崎　　県

《事務局》
〒880-0926 宮崎市月見ケ丘5丁目2番1号
県立宮崎南高校内
TEL 0985（51）4109
FAX 0985（51）4298

創立年月日：昭和23年4月1日

加盟校数		66校
専門部数		27専門部
加盟部数		1,071部
部員数	男子	10,549名
	女子	6,558名
	合計	17,107名

年度	会長	理事長	記事
23	野村憲一郎	馬渡　勝美	加盟校14校で発足
24	〃	〃	ソフト、ラグビー、体操専門部新設
25	野崎　親	〃	野崎会長が就任
26	伊東　祐重	綾部　豊	全九州高校大会4種目開催
27	泉　清	谷口　毅	県高体連規約草案
28	〃	〃	全九州大会2種目開催
29	野口逸三郎	武内健一郎	剣道専門部新設
30	〃	〃	九州高校大会2種目開催
31	伊集院龍雄	谷口　毅	九州大会2種目開催
32	小高　秀二	〃	軟式野球高野連移行
33	〃	〃	登山専門部新設
34	〃	〃	全国高校弓道大会開催
35	青　敏夫	豊丸　秀夫	県高体連規約一部改正
36	小高　秀二	谷口　毅	九州大会3種目開催
37	〃	〃	スポーツ賞規程草案
38	〃	〃	スポーツテスト実施
39	〃	〃	九州大会3種目開催
40	〃	〃	ソフトボール部新設
41	〃	〃	ウエイト、レスリング自転車専門部新設
42	平松　輝夫	上山　徳福	県高体連規約、スポーツ賞表彰規程一部改訂
43	石川　侃	〃	スポーツテスト部、夜間部設置
44	〃	〃	県高体連20周年記念誌発行
45	日高　雅顕	井原　次夫	庭球、バドミントン専門部新設
46	太田　俊雄	内之倉忠男	高体連運営委員会制定
47	服部　七郎	内之倉忠男	新人大会開催要項制定
48	〃	〃	県総体実行委会則制定
49	〃	〃	第1回県高校総体開催
50	〃	〃	昭和53年度全九州高校総体本県開催内定
51	〃	〃	県総体で集団演技公開
52	濱田　宣弘	〃	第1回一年生大会開催
53	〃	〃	全九州高校総体開催
54	〃	〃	第34回国体本県開催
55	〃	〃	小林工新体操全国優勝
56	有馬　一男	大岐　義之	小林工Ｖ２、宮崎工陸上男子全国総体優勝
57	〃	〃	九州大会3種目開催
58	高山　義孝	坂本　平	県高校総体10周年記念
59	〃	〃	全国高体連研究協議会で発表
60	〃	〃	県総体集団演技検討委員会発足
61	〃	〃	県総体で新集団演技公開
62	〃	〃	67総体申請書提出
63	松田　義信	松井　利一	67総体本県開催決定
元	〃	〃	県高体連40周年式典
2	〃	〃	中・高合同合宿開始
3	飛松　義久	〃	５専門部を増設
4	〃	〃	４全国総体本県開催
5	〃	内山　孝徳	九州大会3競技開催
6	山口　賢一	〃	九州大会2競技開催
7	〃	〃	日章学園ボクシング全国総体優勝
8	中田　忠	後藤　敏郎	県総体開会式ＴＶ放映
9	〃	〃	県高体連50周年記念式典、祝賀会開催
10	山下　兼紀	後藤　憲一	

1 沿 革

昭和23年、学制改革のもと新制高等学校になると共に県高等学校体育連盟を結成、加盟校14校、9専門部で活動を開始する。昭和24年、ソフトボール、ラグビー、体操の3専門部が増設され、12専門部となる。この年、全国高校陸上大会で児玉一夫選手（大宮）が走幅跳びで優勝する。昭和25年、会長が県教育長に転出のため後任校長の野崎親氏が事務取扱責任者となる。この年、高鍋高校が全国高校駅伝で3位入賞した。昭和26年県高校大会でハンドボール競技を実施する。昭和27年に加盟校20校となり県高体連規約の草案を提出する。柔道専門部を新設する。昭和28年第6回県下高校総合競技大会を6～7月に戻して開催する。昭和29年剣道専門部を増設し、15専門部となる。昭和30年全国高校駅伝で小林高校が3位に入賞する。昭和31年には加盟校22校となる。全国高校陸上大会で矢野龍男選手（日南）が走幅跳び、弓道で松田幸子選手（大宮）が其々優勝する。昭和32年軟式野球を高野連に移し、14専門部となる。全国高校陸上競技大会において宮崎大宮高校が男子トラックの部で、又、全国高校駅伝で小林高校が其々優勝する。昭和33年加盟校23校となる。第1回県高校保健体育研究協議会を開催する。昭和34年全国高校弓道競技大会を本県で開催する。全国高校陸上競技大会1,500mで岩下察男選手（高鍋農）が優勝する。昭和35年夜間部の加盟を承認する。小林高校が全国高校駅伝で2回目の優勝をする。昭和36年加盟校47校となる。全国高校駅伝で小林高校が2年連続3回目の優勝をする。昭和37年九州高体連事務局を置く。県高体連スポーツ賞表彰を草案する。昭和38年スポーツテストを高体連行事として実施する。昭和39年県高体連スポーツ賞表彰規程を施行する。昭和40年ハンドボール専門部を増設する。全国総体陸上競技で村田広光選手（延岡工）が100m、200m、400mの短距離3種目制覇を達成した。昭和41年に3専門部増設し、20競技専門部となる。昭和42年県高体連規約、スポーツ賞表彰規程を一部改訂する。昭和43年加盟48校となる。小林高校が全国高校駅伝で4回目の優勝をする。昭和44年県高体連20周年記念誌「20年のあゆみ」を発行する。昭和45年バドミントン、庭球の2専門部が増設され、22専門部となる。昭和46年全国高校総体登山競技において、都城泉ケ丘高校が優秀校となる。県高体連年報の発刊を開始する。昭和47年県高校スポーツ水準向上事業が県教育委員会の委託事業となる。昭和48年全国高校駅伝で小林高校が5回目の優勝をする。昭和49年県高体連関係者の永年の念願であった第1回県高校総合体育大会、高体連調査研究発表大会を開催する。

第1回宮崎県高等学校総合体育大会
総合開会式選手入場写真（昭和49年6月8日（土）

昭和50年九州高体連事務局を設置し、加盟校62校となる。昭和51年県総体開会式に集団演技をを初公開する。昭和52年第1回一年生大会を19競技で開催する。空手道専門部を増設する。全国高校駅伝で小林高校が6回目の優勝、全国高校選抜で小林高校女子バスケット、都城商業高校男子軟式庭球、同女子卓球が優勝する。昭和53年第34回宮崎国体のリハーサルを兼ねて全九州高校総体を開催する。この年小林高校が全国高校駅伝で7回目の優勝をする。県高体連30周年記念事業を開催する。昭和54年県民待望の第34回日本のふるさと宮崎国体が開催され、高校生選手の活躍は天皇杯、皇后杯獲得に大きく貢献、多くの高校生が補助員として大会を支えた。昭和55年全国高校総体新体操で小林工業高校が団体優勝、陸上競技で宮崎工業高校が優勝する。昭和56年全国高校総体新体操で小林工業高校が2年連続の優勝をする。昭和57年全国高校選抜空手道大会で御手洗智子選手（延岡工）が組手で優勝する。昭和58年全国高校総体ボクシング競技で山元和義選手（宮崎実）が優勝する。昭和59年第19回全国高体連調査研究発表大会（熊本）で高校生の運動部活動に関し発表する。昭和60年に昭和67年全国総体開催誘致について全国高体連会長に誘致申請書を提出する。昭和61年には67総体本県開催請願書を県議会提出、決議される。全国高校総体で高千穂高校剣道部が男女団体優勝する。昭和62年には67総体開催申請書を全国高体連会長に提出する。全国総体で日章学園がボクシングで団体優勝する。

2　10年の歩み

昭和63年は、会長に松田義信校長、理事長に松井利一先生を迎え新しい体制のもと事務局がスタートした。この年の秋季全国高体連理事会において「昭和67年全国高校総体」の本県開催の決定をみた。九州内では、大分、福岡、鹿児島に続いて4県目の開催であった。これまでの3県は隣県との共同開催であったが、本県は26競技全てを県内で実施する一県単独開催であった。ここに至るまでには、服部会長、内之倉理事長の時に誘致運動が始まり、高山会長、坂本理事長の時に具体的な活動へと進展させ、その間色々な問題・課題を乗り越えての誘致であったこの年、佐土原高校が加盟し、加盟校67となる競技力では、全国高校総体で空手道女子組手個人で、山口美千代選手（宮崎第一）、新体操女子個人で石三香織選手（日章学園）が優勝する。平成元年、九州高体連事務局を本県が担当（平成 元年～2年）する。12月に4全国総体宮崎県高 等学校推進委員会を設立し、4全国総体へ向けて推進活動が始まる。平成2年2月15日県高体連40周年記念事業を挙行する。競技力では、全国高校総体空手道女子団体で宮崎第一高校が初優勝する。個人では空手道女子組手でも山口美千代選手、陸上110mハードルで関圭一郎選手（宮崎工）が優勝する。平成2年、4全国総体の強化事業として、中・高合同合宿、特別強化校指定事業が高校総体推進室で予算化される。本事業は全国総体終了後も県教育委員会委託事業として中・高合同合宿、強化指定校遠征試合事業の形で継続することになった。競技面では、全国総体で、レスリング58kg級で長友一美選手（宮崎第一）、柔道軽中量級で岩川武久選手（都 城商）、陸上5,000mで鶴里初選手（小林）が優勝 する。平成3年、松田会長の退職に伴い、飛松会長を迎える。4全国総体に向け、準専門部の漕艇、フェンシング、ヨット、自転車、ボクシングを専門部に昇格し、組織の充実を図る。又馬術を準専門部として設置する。全国高校総体剣道競技男子団体で高千穂高校優勝、個人競技ではボクシングモスキート級で図師安徳選手（日章）が優勝する。この年、宮崎東高校定時制（単位制）が加盟し、加盟校68校となる。平成4 年「夢きらめいて宮崎の空の下」のスローガンのもと全国高校総体が宮崎県下19市町で26競技が開催された。総合開会式は、秋篠宮殿下、同妃殿下をお迎えし、8月1日県総合運動公園陸上競技場で行われ、参加選手、役員53,000人の内宮崎市、佐土原町で競技する7,600人が参加、本県選手団は、旗手武井選手を先頭に240人が 堂々の入場行進をし、スタンドから一際大きな拍手が送られた。8月2日より、県下の関係者、高校生が一丸となり大会の運営、競技に取り組んだ。期間中、予期せぬ二つの台風の襲来を受けたが大成功のうちに終了した。本県からは、26種目のすべてに参加し、830人の選手が上位 入賞を目指して頑張った。団体では、登山男子で都城泉ケ丘高校、女子で高鍋高校、空手道団体組手で宮崎第一高校、水球で宮崎工業高校が県民の期待に応え、見事に優勝する。個人で、剣道男子で本間彰人選手（宮崎北）、レスリング50kg級で杉尾和雄選手（宮崎日大）、柔道軽中量級で繁昌久哲選手（都城商業）が優勝するなど県選手団の活躍は県民にスポーツを通して爽やかな感動を与えた。

平成4年度全国高等学校総合体育大会　宮崎県選手団入場（平成4年8月1日）

平成5年、松井理事長の転出で、内山理事長を迎える。4全国高校総体を終え、以後の安定した競技力づくりに取り組む。全国高校総体では、陸上競技砲丸投げで秋本純男選手（宮崎工業）、レスリング50kg級長尾勇気選手（同）が優勝する。この年、高千穂・五ケ瀬分校、高鍋農業・川南校舎、小林・野尻分校が廃校となり本連盟を脱会し、加盟校65校となる。平成6年、飛松会長の退職により、山口会長を迎える。この年、五ケ瀬高校が加盟し、加盟校66校となる平成7年、愛知国体の天皇杯成績で最下位となり、全県挙げての競技力向上に取り組み、県体育協会の5ケ年計画に基づき本連盟も、国体少年の部の強化に取り組みを始める。又、同時に競技委員会での競技力の分析、指導者の適正配置等の資料を整え、県教育委員会に要望する。全国高校総体では、ボウクシング競技で日章学園高校が団体優勝する。個人では、同競技ミド

ル級で長嶺秀昭選手（同）、弓道競技で古江加代子選手（福島）、柔道軽量級で石井一行選手（宮崎日大）がそれぞれ優勝する。平成８年、山口会長の退職、内山理事長の転出に伴い中田会長後藤理事長を迎える。第23回県高校総体総合開会式のテレビ中継を実施し、高校スポーツの祭典を広く県民にアピールする。この年は、本県スポーツ界に競技力向上が大きいうねりのように押し寄せ、その即応を迫られた年であった。県議会でも「健康・スポーツ振興調査特別委員会」が設置され、広く関係者の意見を聴取した又、運動部活動に一定の実績のある高校を指定し、必要な支援を行うことにより、当該校を核として部活動の一層の活性化を図り、本県における高校のスポーツ水準の安定的な維持と競技力の向上に資することを目的として年度末に県競技力強化推進校の選定を行った。平成９年、加盟校66校28専門部を組織し、県高体連創立50周年を迎える。記念誌を平成10年１月末に発刊２月10日に多数の来賓、関係者の参加を得て記念式典、祝賀会を挙行する。この50年の節目を礎とし、21世紀に向け、県高体連活動の益々の発展・充実に邁進することを誓う。この年、これまで高体連で管轄してきた県高等学校教育研究会・保健体育部会を高体連より分離する。全国高校総体では、剣道女子団体で高千穂高校が昨年の覇者阿蘇高校（熊本）を決勝戦で破り、見事優勝する。個人では、陸上400m障害で押川聡史選手（宮崎北）、ウエイトリフティング91kg級で佐藤彰紘選手（鵬翔）、ボクシングフライ級で大西祥司選手（日章）がそれぞれ優勝する。

3　将来に向けて

高体連の関係する運動部活動は学校において計画する教育活動で、体力の向上、健康増進、生徒の個性の伸長、望ましい態度の育成などの面から極めて有意義な活動であり、これらの教育効果を見据えた活動とともに、スポーツ活動を通じて「心の教育」も重要である。近年、本県のスポーツ競技力は他県に比べて低調であるが、中・長期的な競技力向上を図る上で高体連関係者の取り組みは本県の競技力を左右する重要な鍵であり、要である。県教育委員会、県体育協会、中体連等の関係団体と連携を満つにした再建策を構築しなければならない時期であることを認識しなければならない。

私とレスリング

長友一美

宮崎県田野町出身
宮崎第一高校～自衛隊体育学校、
平成２年度全国総体
58kg級優勝

私とレスリングとの出会いは、中学３年の秋、福岡先生の訪問を受けた時である。当時は柔道をしていたが成績は思わしくなく、又、運動神経はには自信があったことから、高校では他のスポーツを、と思っていた私にとって、その誘いは魅力的なものに思えた。しかし、レスリングには馴染みが薄かったし、試合着も恥ずかしいように思え、あまり気が乗らなかった。そんな私を福岡先生は何度も熱心に訪ねて下さった。私はその情熱に感動し、福岡先生についていこうと決心した。この自分の決意を告げた時の福岡先生の顔を私は今でもはっきりと思い出すことができる。こうして私のレスリング生活が始まった。自分が上級生になり、後輩を指導する立場になって、改めて先輩方の偉大さを認識した。技術を教えるだけなら簡単だが、自信をつけさせたり、精神面の支えになってやることは難しいものと思えた。レスリングは個人競技の様に見えるけれども個人の力だけでは決して試合に勝てない。皆で励まし合い、全員でチームの雰囲気を盛り上げげていくことが必要だ。自分のことだけ考えていたのでは強くなれない。私は毎日の練習の中で、他人を思いやる気持ち、優しさを学んだように思う。数多い試合の中で一番印象に残っているのは、優勝した全国高校総体の決勝戦である。前半１対１、後半３対３、このままでは判定で負けてしまう。どうしてもポイントが欲しいラスト５秒、夢中でタックルした。するとそれがポイントになり勝利につながった。苦しい試合だっただけに感激も一杯だった。あの土壇場であれだけの力が出せたのは、人一倍練習したという自信があったからだと思う。そう振返った時、人との出会いの不思議さ、素晴らしさを思わずにはいられない。今頑張っている高校生も、私と同じ様に色々な思い出を一杯創ってくれることを信じている。

鹿　児　島　県

《事務局》
〒891-0116 鹿児島市上福元町5255
県立鹿児島南高校内
TEL 099（268）8391
FAX 099（268）0234

創立年月日：昭和43年4月1日

加盟校数		109校
専門部数		30専門部
加盟部数		1860部
部員数	男子	16,557名
	女子	12,028名
	合計	28,585名

年度	会長	理事長	記事
43	甲斐不二男	中村麒児郎	県高体連盟規約制定
44	〃	〃	会長7月で交代
	嘉野　長夫	〃	支部・専門部の制定 10支部・17専門部 会費見直し
45	染川　光三	安田　義富	事務局を県立鹿児島南高等学校に移転
46	〃	〃	九州高体連事務局
47	〃	〃	〃
48	〃	松清　康則	事務局を県立甲南高等学校に移転 県高体連規約一部修正
49	城之下初夫	〃	21専門部
50	宮原　正巳	〃	県高体連規約一部修正
51	〃	床次　忠義	
52	東　　良一	〃	
53	〃	〃	27専門部会費見直し
54	〃	〃	全国理事会において昭和57年度全国総体鹿児島県開催が決定される
55	小斉平松蔵	松清　康則	事務局を県立鹿児島南高等学校に移転
56	〃	〃	規約を一部修正し，専門部長制が置かれる
57	岩元　俊一	〃	全国高校総体を鹿児島県で開催される 県高体連専門部の規約を制定 28専門部
58	〃	田之上市雄	調査研究委員会を設置
59	今村　博美	〃	全国研究大会で発表
60	今村　博美	田之上市雄	県高体連規約改正 九州高体連事務局
61	〃	〃	〃
62	〃	〃	県高体連20周年記念誌発行 全国研究大会で発表 29専門部（ダンス専門部昇格）
63	瀬口　紀穂	竹之内　宏	
元	〃	〃	
2	〃	〃	
3	松山　良弘	〃	
4	〃	〃	全国研究大会で発表 30専門部（アーチェリー専門部
5	堀之北重孝	〃	会費見直し 調査研究部を研究部に名称変更
6	〃	西川　達也	国立鹿児島工業高等専門学校が県総体へ参加 県高等学校新人体育大会を高体連主催で開催 全国研究大会で発表
7	會田　　彰	〃	研究部が県学校体育研究発表会で発表
8	〃	〃	
9	中川　征人	〃	国立鹿児島工専が県新人体育大会へ参加 研究部により「青春の軌跡」発行
10	〃	新留　泰典	

1 沿 革

昭和42年度

県学校体育連盟として，昭和23年4月1日に発足した組織母体を発展的に解体し，小・中・高別の体育連盟として，各学校種別にふさわしい組織づくりがすすめられる。

昭和43年度

鹿児島県高等学校体育連盟として発足し，事務局を県立甲南高等学校に置く。

県高体連規約が制定される。

会費　全日制50円　定時制30円

昭和44年度

県高体連規約が一部修正される。

(10支部・17専門部の制定)

県高体連内規が制定される。

会費　全日制60円　定時制30円

昭和45年度

事務局を県立鹿児島南高等学校に移転する。

昭和46年度

九州高体連事務局の当番県（2年間）となる

太陽国体リハーサル大会として，九州地区高校総体の26競技を県内17地区，26会場で1県単独開催する。

昭和48年度

事務局を県立甲南高等学校に再び移転する。

規約を一部修正し，理事の人数を8人にする。

昭和49年度

庭球・ボクシング・漕艇・レスリングを認可する。(21専門部)

会費　全日制120円　定時制60円

昭和50年度

規約を一部修正し，理事の数を15人に増員する。

昭和52年度

県高体連理事会・評議員会において，太陽国体10周年を記念して，昭和57年度全国高校総体を本県に誘致することが決議される。

フェンシングを認可する。(22専門部)

昭和53年度

ホッケー・ヨット・ウェイトリフティング・空手道・なぎなたを認可する。(27専門部)

会費　全日制240円　定時制120円

県議会本会議において，昭和57年度全国総体の本県開催誘致陳情が採択される。

昭和54年度

全国高体連理事会において，昭和57年度全国高校総体の鹿児島開催が決定する。

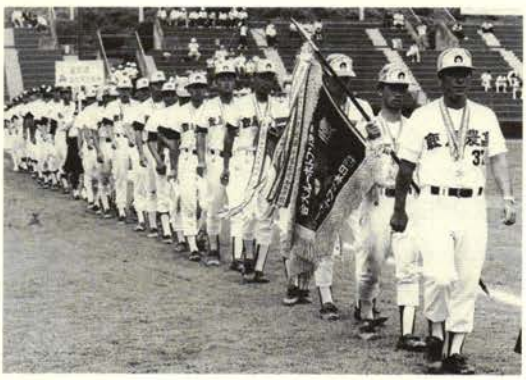
昭和56年度

規約を一部修正し，専門部長制が置かれる。

全国高校総体リハーサル大会として14競技の九州大会を実施する。

昭和57年度

全国高校総体の全競技を全国初の試みとして本県で一県単独開催する。



I・Hソフトボール初優勝

県高体連競技専門部の規約を制定する。

自転車を専門部として認可する。(28専門部)

昭和58年度

県高体連調査研究委員会を設置する。

昭和59年度

調査研究委員会により，県内各高等学校運動部活動に関する実態調査並びに部活動に関する「高校生」の意識調査を実施する。

全国高体連研究大会（熊本）で発表する。

会費　全日制440円　定時制220円

昭和60年度

九州高体連事務局の当番県（2年間）

県高体連規約を全面的に改正する。

県下高等学校運動部活動に関する「部顧問」の意識調査を実施する。

昭和61年度

20周年記念誌の資料収集をする。

昭和62年度

県高体連20周年記念誌を発行する。

県下高等学校運動部活動に関する「保護者」の意識調査を実施する。

全国高体連研究大会（高知）で発表する。

ダンスを認可する。(29専門部)

2　10年の歩み

昭和63年度

運動部活動「中途退部者」に関する調査を実施する。

九州地区大会本県開催競技（5競技）

新人陸上・バレーボール・卓球・ホッケー・漕艇

平成1年度

県下高等学校運動部活動に関する意識調査と運動部活動に関する実態調査（5年間）の集約を行い発表する。

九州地区大会本県開催競技（4競技）

バスケットボール・ソフトボール・剣道・駅伝

平成2年度

運動部活動中におけるスポーツ障害に関する調査を実施する。

九州地区大会本県開催競技（4競技）

サッカー・弓道・ハンドボール・自転車

平成3年度

スポーツ障害に関する調査研究～部活動等におけるスポーツ障害について～を実施する。

九州地区大会本県開催競技（4競技）

南九州陸上・ラグビー・バドミントン・飛込

新ユニフォームで健闘を誓う選手団

平成4年度

スポーツ障害に関する調査研究～部活動等におけるスポーツ障害について～を発行する。

全国高体連研究大会（京都）で発表する。

運動部活動に関する基礎調査を実施する。

アーチェリーを専門部として認可する。(30専門部)

九州地区大会本県開催競技（1競技）登山

平成5年度

九州・全国大会等出場者に関する実態調査を実施する。

調査研究部を研究部に名称変更する。

会費　全日制640円　定時制320円

(大島地区)　全日制420円　定時制210円

九州地区大会本県開催競技（4競技）

相撲・テニス・ヨット・空手道

平成6年度

学校教育法第82条の2，83条の学校の県総体への参加を認める。

国立鹿児島工業高等専門学校（3年生以下）が県総体へ参加する。

県高校新人体育大会を県高体連主催で開催する。(23競技)

競技力向上の方策を求めて～運動部活動に関する基礎調査と九州・全国大会出場者に関する実態調査～との比較・検討をし，全国高体連研究大会（千葉）で発表する。

九州・全国大会出場選手を育てた監督の調査を実施する。

九州地区大会本県開催競技（4競技）

ホッケー・柔道・競泳・レスリング

平成7年度

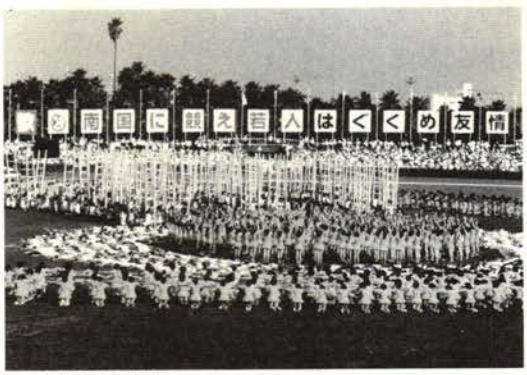
「競技力向上の方策を求めて」のテーマで研究部が県学校体育研究発表会で発表する。

九州地区大会本県開催競技（5競技）

ボクシング・南九州陸上・体操・水球・ウェイトリフティング

平成8年度

全国高校総体本県選手団ユニフォームを変更する。



57総体集団演技

研究部による「青春の軌跡」を編集する。
九州地区大会本県開催競技（4競技）
卓球・剣道・ソフトテニス・新人陸上

平成9年度

学校教育法第82条の2，83条の学校の県高校新人体育大会への参加を認める。
国立鹿児島工業高等専門学校（2年生以下県高校新人体育大会へ参加する。
研究部による「青春の軌跡」を発行する。
九州地区大会本県開催競技（4競技）
バスケットボール・ソフトボール・駅伝・フェンシング

3　将来に向けて

高等学校教育の多様化，少子化による生徒数の激減，学校週5日制へ移行等の変化にともなう，部活動の地盤沈下傾向は，本県高等学校においても深刻な問題となっている。

このようなとき，県高等学校体育の健全な発展を図るという本連盟の目的を達成する為に，現在まで取り組んできた「指導者の資質向上」「競技力の向上」「安全指導の徹底」「部活動の活性化」について，具体的な効果が期待できるようなテーマを設定するなど，更に積極的な取り組みをしてまいりたいと考えている。

H10　I・H鹿児島南高校フェンシング優勝

くやしさをバネに！

宮　路　由　久

平成3年全国高校総体優勝
平成6·7·9年
全日本選手権優勝
平成8年
アトランタオリンピック10位

高校を卒業して6年が経過したが，現在もウェイトリフテェング競技を続けている。次期シドニー五輪に目標を掲げ日々のトレーニングに精進しているところである。

私にとって初めての全国高校総体出場は，平成元年の四国総体であった。当時私は，高校一年生で緊張のあまり，6回試技全てを失敗し，記録・順位共に“無し”という最悪の結果で終わってしまった。その悔しさをバネに2年後の3年生の時，千葉県で開催された全国高校総体では，おおいに奮起した。

試合当日の朝，試合直前にトイレへ行って，鏡の前に立ち，写し出されたもう一人の自分に「今日はやるゾォ！絶対やるゾォ！何が何でもやるゾォ！」と自己暗示をかけたことを今でもよく覚えている。

また，ウォーミングアップの途中で大阪の大学で同じウェイトリフティングをやっていた兄が，わざわざかけつけて来てくれ，色々と細かなアドバイスをして私を勇気づけてくれた。またさらに，両親と従兄，そして高校の時任校長先生までもが応援にかけつけてくれて，私は一層勇気づけられた。

試合中は，バーベルを挙げること以外，余計な事は一切考えずにがんばれた。その結果，6回全てを失敗した2年前の屈辱をはらすかのように，試技6回全て成功という素晴らしい成績を収める事が出来た。また，それは日本高校新記録という偉業を達成する結果となった。

このことは，私自身の力だけでなく，周りの方々の温かい，そして力強い支援があったおかげだと感謝している。この気持ちは，オリンピック選手になった今でも全く変わることはない。

沖　　縄　　県

《事務局》
〒900-0026 沖縄県那覇市奥武山町45番地
奥武山陸上競技場2F
TEL 098（858）4835
FAX 098（859）1537

創立年月日：昭和28年5月30日

加盟校数		67校
専門部数		28専門部
加盟部数		1,094部
部員数	男子	10,347名
	女子	7,500名
	合計	17,847名

年度	会長	理事長	記事
28	阿波根直成	志村　暁市	「沖縄高等学校体育連盟」を結成。
30	〃	〃	沖縄高等学校野球連盟設立。 専門正副部長制を採用。
35	〃	〃	常任理事会を設ける。
37	仲田　豊順	〃	創立10周年記念第1回米琉親善駅伝大会開催。
40	〃	〃	ボクシング競技外6専門部新設。
42	新屋敷文太郎	〃	創立15周年記念九州各県対抗高校陸上競技大会開催。
43	〃	吉田　正善	名称を「沖縄県高等学校体育連盟」とする。
45	〃	〃	九州高体連へ加盟。
46	〃	〃	ラグビー専門部設置。
47	池村　恵興	〃	定通制支部と庭球専門部設置。
49	藏當　稔	宇地原徳淳	空手道専門部設置。 第1回研究発表会開催。
51	世嘉良　榮	〃	総合開会式開催。
54	〃	〃	レスリング専門部設置
55	新城　久雄	〃	
57	〃	古謝　貢	
58	〃	〃	なぎなた専門部設置 第1回女子駅伝開催
59	〃	〃	県総体に優勝杯新設 知事杯ー男女総合、教育長杯ー男子総合、教育委員長杯ー女子総合

年度	会長	理事長	記事
60	新城　久雄	古謝　貢	アーチェリー、自転車の専門部設置。
61	照屋　寛哲	仲村　春憲	県高体連主催大会での国旗掲揚を決定
62	〃	〃	第42回国体開催
63	〃	〃	鏡が丘養護学校の加盟承認
元	平良　親徳	〃	球陽高校の加盟承認 平成13年全国総体本県誘致を承認
2	金城　昭七	〃	カヌー専門部を設置
3	〃	〃	ヨット準専門部設置
4	〃	〃	全九州高校総合体育大会復帰20周年記念総合開会式実施（台風襲来一部競技を残し終了） 新人体育大会総合開会式を廃止
5	嘉手川繁二	〃	創立40周年記念式典・祝賀会実施
6	與那嶺良栄	〃	向陽高校の加盟承認 漕艇競技の専門部設置
7	〃	南　正二	フェンシング専門部設置
8	金城　永真	〃	
9	〃	〃	沖縄ろう学校脱会承認 14年全国研究大会本県誘致開催承認
10	玻名城英介	知念　正勝	那覇国際高校加盟承認

1 沿 革

第二次世界大戦後の混乱した状況がまだ落ち着かない沖縄の高校教育の中で、体育行事を持つにも困難を極めていた、そんな折、当時の琉球政府文教局に各高等学校の校長、体育主任が集まり、高校体育スポーツの普及発展を図る目的で昭和28年5月「沖縄高等学校体育連盟」が19校でもって結成された。6月には第1回の評議員会が開かれ陸上競技、排球、籠球、卓球、軟式庭球、柔道、しない、相撲、水泳、野球、体操の11専門部で発足し、それぞれの専門委員長、理事12名が選出された。7月には第1回球技大会を開催（種目は排球、籠球、軟式庭球、野球）それぞれ地区予選を経て実施し、勝ち抜いた男女各1チームが参加して中央大会が行われた。対外試合に飢えていた各チームの意気込みは相当なものがあった。7月には全国高体連と日本バレーボール協会の両方から全国高校体育大会への参加要請があり、いち早いスポーツの日本復帰と喜んだ。しかし翌年には、バレーボール、バスケットボール、高校野球等派遣決定はするものの各学校とも派遣費の捻出には大変な苦労をした。その後本土チームを招聘しての親善試合を行うなどして活動が活発になるにつれ、全国大会出場を希望する種目が大幅に増え、増大する派遣費の捻出に苦慮した為に、昭和33年には全国高校体育大会派遣種目の隔年毎派遣にするという苦肉の決定をした。このような変則的な派遣制度は、（昭和37年は10周年を記念して全種目派遣）昭和42年の評議員会で全種目派遣決定するまで続いた。離島故に抱える問題である。昭和40年にはサッカー、バドミントン、ソフトボール、ボクシング、弓道、ウェトリフティング、ハンドボールの専門部設置が承認され、専門部数も17になり、沖縄高体連専門部の活動が一応の形を整えたと言ってよい。この軌道に乗った活動ができるまでの関係者の苦労は言葉には尽くせないものがあった。特に、九州や全国大会に選手を派遣する学校の経済面での苦労は大変なものがあった。

昭和31年には沖縄高校野球連盟が創設され野球専門部は発展的に解消する。昭和38年1月に創立10周年記念として本土から7校、沖縄側から9校、米人高校1校、オープン1の計18チームで那覇マラソンコースで駅伝競技が実施され、沖縄の高校生の競技力向上に多大の貢献をし、昭和40年1月の第3回大会まで続き役目を終え終了する。この大会に本土から招聘したチームは17に及ぶが、その実現の陰には、沖縄の駅伝競技に対する本土側関係者の熱い思いや大きな努力があったことを忘れてはならない。

昭和43年には、本連盟は「沖縄県高等学校体育連盟」に改名、全国高体連の会議等へも正式に参加するようになる。同時に分担金も納入するようになる。全国大会への参加は昭和28年の加盟の年から行われているがプラカードの表示を従来の「沖縄」から「沖縄県」への変更が承認され、昭和44年の群馬県大会から要望通り名実とも本土各県の仲間入りをする。

敗戦の混乱から十分立ち直ってない時期に創立した高体連は高校生の体育・スポーツの向上と、混乱期の挫折感に力と勇気を与えるのに必死になっていた会長以下役員は、それまでなしえなかった記録の整理を15周年を契機として本連盟創立から15年の全記録を収録した会報「高体連」の創刊号を発刊した。それ以後系統的に記録整理がなされ充実したものとなった。

昭和45年に九州高等学校体育連盟へ正式加盟が承認される。全国高体連への加盟や全国大会への参加等に比較して九州高体連への加盟や全九州体育大会へ参加が要項通り2チーム派遣する様になるまでにはかなり時間を要した。原因はひとつ離島県なるがゆえに経済的負担の大きさであった。

昭和49年第1回研究発表大会を実施し、専門部の指導実践、研究報告、調査研究等の発表の機会をつくりさらなる飛躍を期待した。この研究発表大会は昭和61年開邦国体前年を除き毎年開催され、特別講師を招聘して講演を実施し年を重ねる度に充実したものになっている。

昭和46年にラグビーフットボール、47年にテニス、49年に空手道、54年にレスリング、58年になぎなた、60年にアーチェリーと自転車専門部がつぎつぎに新設され合計24専門部になり第42回国民体育大会に向けて活動が充実した時期に入ったと言える。昭和56年全九州体育大会でボクシング競技が9階級制覇し、その余勢で同年の全国高校総体でも6階級制覇をするなどめざましい成果をあげた。これらの雰囲気が海邦国体へと引き継がれて行くことになる。名実とも充実した沖縄県高体連になったと言える。

2　10年の歩み

63年に県立鏡が丘養護学校が本連盟に加盟、平成元年に県立球陽高校が設立加盟、6年に県立向陽高校が設立加盟、10年に県立那覇国際高校が設立本連盟に加盟する。加盟校数も67校になった。生徒数全日制課程52,782名、定通制課程2,538名、合計55,320名となった。正式加盟ではないが国立沖縄会員学校、大育高等専修学校の大会参加が認められるなど、発展を続けて新たな時期を迎える。一方競技専門部も平成2年にカヌー競技、平成6年には漕艇競技が専門部設置が承認され、平成7年にはフェンシング競技が新たに専門部に加わった。専門部数は27競技、準専門部のヨットを加えて28競技になった。加盟校数が増え、専門部数が増えれば部活動が活発になるかと思えば必ずしもストレートにはそうならない。メジャーな競技は別としても、未普及競技の顧問は部員獲得に奔走し、競技会運営するのに専門委員長は参加校を募るのに奔走するなど想像以上の目に見えない苦労も多い。昭和62年の第42回国民体育大会は本連盟においても数々の成果を残して終了することができた。男女少年種目別の優勝は8種目にも及んでいる。これまで醸成してきた競技力や指導体制、強化策等どのように維持していくか、又予算措置を今後どうするか大きな課題として残った。県の競技力向上対策室では京都国体（昭和63年）での上位入賞を果たす為に県総体の優勝校（チーム）を運動部指定したいという方針を理事会に提案してきた。本連盟の基本方針からしても一部の学校（チーム）を強化指定するわけにはいかないとする理事会と激しく対立するが今年度に限りという条件付きで認めたものの、組織内部にジレンマは残った。

海邦国体の成功が物語る様にイベントを実施することで組織は強化され競技力は向上する。常任理事会で2001年全国高校総合体育大会を本県に誘致について検討し、関係機関へ精力的に働きかけを行う一方、全国総体開催に先駆け、昭和62年2月の九州高体連理事会で全九州高等学校体育大会は総合大会方式で1992年（平成4年）復帰後20年の節目の行事として沖縄で開催することの承認を得たのである。昭和63年3月に、「平成4年度全九州高等学校総合体育大会開催要項」（案）が理事会で承認された。大会は「風を切る飛翔の翼熱き鼓動」のスローガンのもと三期に分けて開催された。前期は6月20、21、22日に（8競技）同月の27日（中期）には万余の観衆をあつめて総合開会式を開催、集団演技も行ない、競技は28、29、30日と15競技が持たれた。折しも台風3号が襲来し、個人戦や団体戦の準決勝、決勝戦等を未消化のまま終了し、後期は水泳と陸上競技と無事終了、復帰20周年記念の行事は台風襲来と言う思いもよらぬ事態で終った。

全九州総合体育大会の集団演技

全国高校総体2001年本県開催は昭和62年度の海邦国体終了時点からの本連盟の悲願である。平成2年度からは組織として誘致活動を開始している。評議委員会で開催のための調査研究を進める決議がなされ、九州高体連へ誘致についての要請（平成5年に開催承認）県の高校長協会に要望書提出、県議会議長へ誘致開催要望書を提出等、あらゆる手法、手段で誘致開催に努力専念したが、平成8年3月に全国総体沖縄開催は諸般の事情により断念が決定された。これまで九州は一つとして沖縄開催に努力した九州各県の高体連はじめ九州高体連の役員の方々、全国高体連の役員の労苦を思うときに沖縄県高体連の責任を痛感し、その努力に報いる事ができなかったことをおわびしなければならないと考える。今回を教訓として後学の礎にしたい。

3　将来に向けて

平成14年度、全国高体連研究大会に向けては、平成9年度に規程の見直しを実施し、組織を強化した。研究委員会内での細かな基本計画、推進計画の策定や事務分担が急がれるところだ。事業推進計画、予算措置等、短時間に実施しなければならない作業は沢山あり、沖縄県高体連初の全国大会の行事である、その成功に

向け研究委員会を軸に活動を活発に展開することが当面の課題と考える。

生徒数の減少による各学校における部員数の減少や部活動の不活発さの問題は本県においても深刻な問題に発展しそうである。中学校までは活発に活動していた生徒達が入学後は部活動をやりたがらないのである。このことは、単に生徒だけの問題ではないようにも思える。部活動指導者の減少も要因の一つにあげられるのではないか。熱意をもって生徒をリードする指導者が少なくなった。学校においては部顧問の割り振りに係の先生がかなり苦労しているとのことをよく耳にする。専門的な知識、技能を必要とし、多少の危険が予想されるような種目はよけい深刻である。学校段階、高体連専門部、あるいは本連盟だけの取り組みに終わらず部活動の在り方や部員の確保についての議論や活動を幅広く拡大していく必要があると感じる。

高体連の組織としての専門部でも、大会運営にも支障がでるほど専門部員の先生の減少が生じている。県内大会はまだ運営できても全九州大会規模になると深刻にならざるをえないと言う。これらの問題を抱えている専門委員長は多い。全国高等学校総合体育大会本県開催も視野に入れて専門的な指導者の確保も課題だ。

本連盟の抱えている大きな課題の一つに未普及競技の育成の問題がある。活動場所の制約、予算不足、専門指導者の不足等他の種目並に普及するまでには越えなければならないハードルがあまりにも多すぎる。高体連としてどのような方策が取れるのか検討委員会を設置し対策が急がれるところだ。

平成10年度より「高校生のアジアスポーツ交流事業」として、県教育委員会の企画で実施されることになった。この事業は、スポーツを通して高校生の相互理解を深める事により、競技力の向上及び国際的な資質や能力を備えた人材の育成を図る目的で、沖縄県と中国福建省の高校生が交互に相手国を訪問する。平成10年度は沖縄県が福建省を訪問、平成11年度は福建省の高校生が沖縄県を訪問する。それぞれ交流内容は、競技交流、合同練習、交流会、視察見学など交流競技種目については双方で協議して決定するとし、人員については、50人以内としている。国際的な視野をもつ競技者の育成として本連盟としても積極的に事業を推進したい。

夢へのステップアップ

豊見城　あずさ（浦添高卒）

第11回全国高校空手道選抜大会
(個人型・団体型優勝)
第19回全国高校総体空手道競技
(個人型・優勝)

私と空手道との出会いは、県立浦添高校空手道部に入部してからである。入部の動機は、兄や島の先輩方が高校時代空手をしていたこともあって一度は本格的に練習してみたいと思っていた。当時、浦添高校空手道部は顧問の佐久本嗣男先生（世界空手道選手権７連覇）の下に60名余の部員が「全国制覇」を目標に精力的に稽古に取り組んでいた。入部と同時に、早朝稽古や放課後に先輩方の指導を受けながら多くの良きライバルと練習に励んだ。練習内容は毎日が基本、型、組手等であった。足の裏は剥けあざだらけの毎日が続く中、あっと言う間に１年が過ぎた。２年には女子のキャプテンを務めることになった。この時期に佐久本先生が１年余の海外留学をすることになり私は不安と責任の重さを痛感した。しかし、私はキャプテンとしてチームが初志の目標である「全国制覇」を目指し空手道部ＯＢの指導も仰ぎ、これまでの伝統を守り部員全員が一丸となって前向きに頑張った。そして、日本武道館で開催された「第11回全国高校空手道選抜大会」女子個人型競技と団体型競技に初の２種目制覇を達成した。優勝の瞬間、これまで暖かく指導していただいたＯＢの先輩や応援して下さった父母や部員に対し感謝の気持ちと嬉しさで、緊張の糸が切れ涙が溢れみんなで抱き合い喜んだ。この大会が自信となり、宮崎県で開催された「第19回全国高校総体」においても個人型で優勝することができた。

空手道を通して、継続することの大切さや、努力することの素晴らしさを実感した。現在は佐久本先生のもとで再度「日本１」を目標に日夜練習に励んでいる。

平成９年は全九州空手道選手権個人型に優勝、全日本実業団準優勝と幸先良いスタートをきった。高校日本一の誇りとやればできるという固い信念のもと「初心に返り」自分自身どこまでやれるか「限界への挑戦」をして行きたい。

専門部の歩み

《事務局》
〒192-0354 東京都八王子市松が谷1772
都立松が谷高校内
TEL 0426（76）1231
FAX 0426（75）1237

創　立：昭和23年12月17日

加盟校数		8,191校
部員数	男子	65,416名
	女子	35,999名
	合計	10,1415名

年度	部長	記事
23		第1回インターハイ開催
24	高田　通	高体連陸上競技部発足
25	〃	男子全国駅伝大阪開催
26	〃	LH 都道府県対抗得点制
27	〃	男子駅伝7区間42.195km
28	〃	LH 熊本大洪水で神奈川
29	〃	高校陸上年鑑1号発刊
30	〃	男子200mﾊｰﾄﾞﾙ加わる
31	〃	LH は暑い定説が誕生
32	〃	優秀選手20名沖縄遠征
33	〃	開催期日を3日間拡大
34	〃	男子駅伝10周年記念大会
35	〃	強化講習会開催
36	〃	第1回指導者協議会開催
37	〃	男·女5種競技新設
38	尾崎　剛毅	高体連主導総体に移行
39	〃	LH 日本陸連主催に復活
40	田中喜一郎	陸連､協力　団体五者協定
41	〃	全国駅伝開催地京都府
42	栗原伝次郎	全国選抜強化合宿開始
43	〃	日韓親善陸上大会開催
44	〃	第2回日韓陸上駒沢開催
45	〃	LH 男走高背面跳が入る
46	〃	LH 男女併せて32種目
47	石野八百治	LH 三冠女王誕生
48	〃	高体連陸上部規約制定
49	〃	日韓親善､事件で中止
50	〃	競技力向上委員会発足
51	入倉　富夫	日韓親善大会発展的解消
52	〃	日米ジュニア大会開催

年度	部長	記事
53	入倉　富夫	規模適正化で混成を削減
54	〃	混成競技大会岐阜開催
55	〃	五輪選手の肩書でI·H出場
56	〃	I·H女子400m2人が日本新
57	町田　好二	長距離競走大会新設
58	小田島哲哉	男3000m 障害に変更
59	〃	ロス五輪高校生2名出場
60	〃	女3000m を新設
61	〃	男やり投新規格に変更
62	〃	ﾗｸﾋﾞｰから転向者中道人気
63	森　茂	女子クロカン駅伝新設
元	〃	第1回女子駅伝京都開催
2	〃	LH会場広告問題検討
3	山本　明	混成大会検討委員会設立
4	〃	混成大会総体へ統合申請
5	〃	女子駅伝補欠1名追加
6	坂本　清治	外国人選手出場基準制定
7	〃	混成､総体会場鳥取開催
8	阿久津　巌	LH 女総合優勝12連勝
9	〃	全国三大会京都府で開催
10	水谷　弘	混成大会総体へ統合決定

副部長　大田博邦、吉住普策、下嶋長夫、角田二郎、生駒定文、立石晃義、定田　章、松本利雄、市野春弘、杉沢光男、井實崇人、依田良春、渡辺勇夫、兼本哲也、内田　勇、阿部　智、貞島瑞穂、浜崎征史、根本俊臣。

事務局長　原田隣造、竹村博之、渡辺勇夫、内田　勇、根本俊臣、大門正男。

1 沿 革

大正7年（1918）にスタートした中等陸上競技・全国大会は戦後の学制改革によって第28回大会で一応の終止符を打ち、翌・昭和23年全国高等学校体育連盟発足と同時に新制高校大会として、名称をインターハイ（全国高等学校陸上競技対校選手権大会）に替えて主催者も日本学生陸上競技連合、日本陸上競技連盟、全国高体連陸上競技部に変わって、名古屋瑞穂競技場で愛知陸協、東海学連主管のもとで新出発した。

第1回高松宮殿下から賜杯を受ける女子優勝校の光華（京都）

東海学連主管のもとで新出発した全国大会は豪雨の中で行われた。この大会は今日のような予選形式ではなく、出場したい者は誰でも出場できる自由参加方法で、男女25種目に全国37の県から2000人を超える参加者となり東海地区だけで約半数をしめ高校生のエネルギーはインターハイの盛運の未来を約束しているようであった。この年には第1回東西対抗もあわせて開始されている。このインターハイも中等大会以来今日までを継承すると78回の多きを数えることのできる大会となっている。

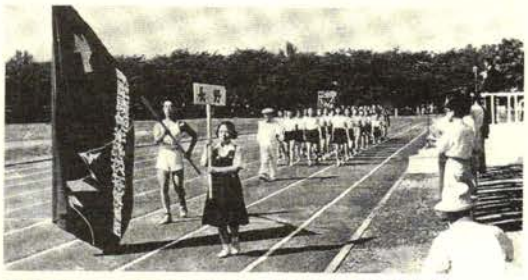
陸上競技部の発足は、インターハイ予選制度が導入された第2回大会（昭和24年）第1日の競技が終わった7月30日夕刻、選手を引率して全国からつどうた高校陸上のリーダーたちは大阪・中モズ競技場のバックスタンドに集まり、「全国高等学校体育連盟陸上競技部設立第1回準備委員会」が開かれた。全国高体連に陸上が先頭を切って専門部を設立しょうと35都道府県から74名が出席し、インターハイをはじめ高校生の強化につながる諸事業・規約を積極的に話し合われた。この年の11月2日、東京の麻布高校で開かれた第2回準備委員会を経て、12月17日「全国高等学校体育連盟陸上競技部」は正式に発足した。

予選地域と種目の変遷

第1回インターハイで主催団体に入っていた日本学生陸上競技連合は、第2回大会からその立場を離れた。戦前は学生連合側がインターミドルを育成するために、大会の運営に力を貸すのが当然のような風潮があったが、新しく高体連という組織が確立し、競技団体としての日本陸連が主催に入れば「それでよし」とする理由からであった。

全国高校対校選手権大会の正式発足から採用された都道府県予選のブロック制度は、当初、予選大会は10ブロックに分かれて行われた。北海道、東北、関東、北信越、東海、近畿、中国、四国、北九州、南九州であり、現在とことなっているのは関東が南北に分割されておらず8都県で1ブロックを構成していた点である。この中には加盟校数、登録競技者数でも全国一多い東京都が含まれている。東京都を含む8都県から1種目6人しか全国大会に送れないのでは、関東はいかにも他のブロックにくらべて厳しすぎるとの声がすぐに起こった。もっともなこといであり、翌年は東京都を関東ブロックから独立させた。これで東京都は各種目から6人、他の7県から6人が全国大会のヒノキ舞台を踏むことになりました。しかし、それにもまだ抵抗感が多くあり、東京都はたしかに加盟・登録競技者が多く、競技水準も高い激戦地とはいえ、東京都予選大会でベストシックスに入ればそのままブロック大会を経ずに全国大会に進めることに納得しかねる声が多く聞かれた。

一方では、東京都以外の7県にとって、東京都が抜けて門戸が広がった関東予選大会とはいえ、まだまだ他のブロックにくらべれば厳しい関門であった。



第5回松本大会開会式地元長野県勢の入場行進

そのうえ、第3回宇都宮大会では、北信越ブ

ロックが北陸と信越に分割され、北陸3県（富山、石川、福井）と信越2県（長野、新潟）2ブロックからそれぞれ6人ずつ全国大会に出場できる状況であり東京都予選以上に甘い予選ブロックとなっていた状態を含めて全国は12ブロック制度となって、そのままの制度で第6回神奈川大会まで継続されていった。

しかし、第7回大会で関東ブロックはもう一度検討され、南北関東に分割されることになった。この改正で東京都も千葉、神奈川、山梨の3県とともに南関東ブロックに編入された。

「東京の選手もブロック大会の洗礼を受けるべきである」という意向が全国高体連陸上競技部で大勢を占めていた結果である。

北陸と信越のブロック割りについては改正されないままに第14回大会までつづいていった。従来のブロック制度に戻ったのは大分で開かれた第15回大会からで、以来現行の11ブロック、1種目66人が定着した。少しでも公平なブロック制度を確立するために、試行錯誤を繰り返したのだった。

もう一つの重要な全国高校駅伝大会は昭和23年度に自由参加を、翌年度には通信競技形式の全国大会を挙行した。もともとこの駅伝は、大正9年にその端を発し、当時の報知新聞社主催による「第1回東京府下中学校対抗駅伝競走大会」が東京－横浜往復6区間、42マイル（68Km）のコースで行われ、これが高校駅伝の発祥である。大正13年第5回大会に「全国中学校駅伝競走大会」と改称したが、参加は関東一円に限られていた。関東に遅れること5年、大正14年関西でも関西大学連合主催、大阪毎日新聞社後援の「関西中学校駅伝競走大会」が行われた。コースは大阪堂島－宝塚間を往復する6区間、36マイル（58km）であった。この東西二つの中学校駅伝大会が、今日の高校駅伝の先駆となったのである。

第2回全国高校駅伝大会スタート直後のトップ・ランナー

昭和24年1月5日、コースは大阪毎日前－大阪府下池田往復、6区間（37.4km）と決めて、関東から九州まで44校が参加、旗揚げしたのである。

そして高体連が発足した昭和24年12月7日に第1回大会を開催する気運を高めその準備に入り、昭和25年12月27日、日本陸連、高体連、毎日新聞社3団体共催による大会が、毎日新聞社大阪本社前をスタート、ゴール、堺市石津川間の6区間（16 km）を往復するコースで開催された。

沖縄、山梨県を除く45都道府県代表が大阪に集まった。この大会の予選会参加校は、811校であった。昭和27年第3回大会で、7区間42.195kmの距離となり、翌年の第4回大会で沖縄が初参加、都道府県代表旗もつくられて今日の行われている大会の全容ができあがった。

この大会も道路競技という事情から幾多のコースの変更を重ねながら実施されてきたが、大阪府自体の車両増加により道路事情悪化に伴い実施困難になり、昭和41年第17回大会から京都市西京極陸上競技付設マラソンコースに移っている。 男子の高校駅伝とともに京都で開催されている都道府県女子駅伝大会での高校生活躍の影響から、女子高校駅伝の開催要望が、年々強くなり関係機関の協力と支援に支えられて平成元年女子第1回高校駅伝大会が京都西京極ハーフマラソンコース（21.0975km）で開催された。

現在、駅伝競走大会は、毎年京都で12月下旬に47都道府県の代表を送って、盛大に開催され、本年は女子第10回の記念大会を迎えることになっている。

インターハイの種目の変遷もいろいろあった。当初は男子16種目、女子9種目で始まった大会は現行男子19種目、女子12種目に変わり、また、男子6区間で始まった駅伝も女子が加わるなど変遷があり、その過程をたどってみると。

第1回瑞穂（23年）

▼男子　100m.200m.400m.800m.1500m.5000m.200mハードル.4x100mリレー.4x400mリレー.走高跳.走幅跳.棒高跳.三段跳.砲丸投.円盤投.やり投.

▼女子　100m.200m.80mハードル.4x100mリレー.走高跳.走幅跳.砲丸投.円盤投.やり投.第1回東西対抗（東京都・中大練馬）第2回中モズ（24年）

▼男子　200mハードル.を廃止し、110mミドルハードルを新設　4x100mリレー.4x400mリレーを廃止し、4x100mリレーを新設
第2回東西対抗（山形県・山形市）
第3回宇都宮（25年）
▼男子　ハンマー投を新設
第3回東西対抗（石川県・金沢市）
第1回高校駅伝開催（大阪毎日新聞本社前－石津川）16㎞往復6区間
第4回金沢（26年）
都道府県対抗得点を参考にする
第4回東西対抗（宮城県・仙台市）
第5回長野（27年）
第5回東西対抗中止
第3回高校駅伝　42.195㎞7区間
第6回三ツ沢（28年）
熊本が大洪水のため会場を神奈川県に変更
6回東西対抗（大阪府・中モズ）
第7回水前寺（29年）
▼男子　110mミドルハードルを廃止し、110mジュニアハードルを新設
男子200mハードルを復活
第7回東西対抗（北海道・小樽市）
第5回高校駅伝(大阪毎日新聞社前－高石)コース変更
第8回酒田（30年）
第8回東西対抗（東京都・神宮）
第9回高知（31年）
第9回東西対抗（大阪府・中モズ）
第10回高知（32年）
第10回東西対抗（埼玉県・大宮）
第11回下関（33年）
第11回東西対抗（徳島県・西の丸）
第12回国立（34年）
第12回東西対抗（大阪府・大阪市）
第13回王子（35年）
第13回東西対抗（埼玉県・青木公園）
第11回高校駅伝（大阪・浜寺－岸和田）コース変更
第14回草薙（36年）
第14回東西対抗（山口県・下関市）
第15回大分（37年）
▼男子　1500m障害　　五種競技を新設
▼女子　800m　　五種競技を新設
第15回東西対抗（東京都・立川市）
第16回新潟（38年）
第16回東西対抗（大阪府・服部）
第14回高校駅伝(大阪·堺－上山)コースに変更
第17回長居（39年）
東西対抗はオリンピック大会開催を機会に発展的解消
第15回高校駅伝(大阪·長居－東坂田)コースに変更
第18回大分（40年）
▼男子　4×200mリレーを廃止し、4×100mリレーと4×400mリレーを復活
第16回高校駅伝大阪長居陸上競技場併設長距離競走路コースに変更
第19回大分（41年）
第17回高校駅伝京都府西京極陸上競技場併設マラソンコースに変更
全国定時制大会開催
第22回前橋（44年）
▼女子80mハードルを廃止し、100mハードルを新設
第24回鳴門（46年）
▼男子200mハードルを廃止し、400mハードルを新設
▼女子400mを新設

第24回鳴門大会400m決勝

第32回皇子山　（54年）
▼男子五種競技廃止
▼女子五種競技廃止
混成競技大会別途開催（岐阜）
第35回鴻池　（57年）
長距離大会開催
第36回瑞穂　（58年）
▼男子110mジュニアハードルを110mハイハードルに変更
▼男子1500m障害を廃止し、3000m障害を新設
▼男子ハンマー投の重量を5,443kgをから6,351kgに変更
第38回石川　（60年）
▼女子3000mを新設

第39回山口　(61年)
▼男子やり投の規格を新規格に変更
▼女子400mハードル新設
第42回高知　(平元年)
　女子第1回高校駅伝開催京都西京極陸上競技場併設ハーフマラソンコース(21.0975km)5区間開催
　男女競歩競技大会開催
第44回静岡　(平3年)
▼女子　やり投の規格を新規格に変更

2　10年の歩み

女子長距離種目の新設とともに準備を進めてきた女子全国駅伝大会は幾多の苦難の道をたどりながら、平成元年12月24日、全国予選参加1,187校のなから47都道府県代表校が京都西京極陸上競技場に集まり、待望の第1回大会を誕生することができた。

第1回女子高校駅伝大会

この駅伝は従来から続いてきた男子駅伝に華を添えるかたちとなり、都道府県予選参加校数も男女とも年をます毎に増加しつづけ長距離競技の記録の向上・進歩に輝かしい成果をあげできた。

一方では新たな問題も派生してきた。大会の頂点を目指して激しい選手強化策のなかでの外国人留学生の取り扱いが大きな問題となって浮上してきた。あたかも、時を同じくして全国高体連では朝鮮高校生の高校総体参加問題が討議されており、この問題ともに各専門部も外国人留学生基準について検討することとなり波紋は更に大きくなっていった。一躍、陸上部の対処が注目の的となった。この問題も二年の協議経過をへて駅伝とインターハイの参加規定がつくられいった。また、高校駅伝から発生した日本高校記録の取扱についても関係者より対応を求める声がきかれた。外国人留学生が樹立する日本高校記録は日本記録を大きく上回り、日本人高校生が今後記録を書き換えていくことが困難な記録であり、国際記録として別途扱いを要望する意見も多く聞かれたが、現在、同じ高校生として学びクラブ活動として誕生する記録に分け隔たりをしないとする考えを基本に取り扱われている。

秩父宮賜杯　全国高校大会は、高校総体の規模適正問題の枠規制から、混成競技は別途開催の道を取らざるを得ない状況となっていった。新たに第32回混成成競技大会として、岐阜で開催された。この大会も回を重ねる毎に大会の格差から生じる数多く問題が浮上し、混成競技特別小委員会を設置検討された。高校陸上界唯一の選手権への統合という答申が出され、これを受け関係各機関への対応に入る。先ず、インターハイ会場と同一会場での開催という願いが、分離後17年目の鳥取大会で現実のものとなった。

I.Hと同一会場開催となった混成競技鳥取大会女子3000W

長い道のりを経て、平成14年度茨城大会での統合へと解決の光を見いだすことができた。

3　将来に向けて

今日、世界の陸上競技界は次代をになう競技者の育成に目が注がれてきている。国際陸上競技連盟は、1999年世界ユース選手権大会の開催を決定、この大会は高校生競技者16・17歳が主体となる大会であり、従来からの世界ジュニア選手権・アジアジュニア選手権、東アジア選手権、日中韓交流大会等と高校生競技者が国際舞台に出場できるチャンスが多くめぐってくる。これから国際大会において十分に戦える力を養っていくためにも、競技種目の充実が必然になってきている。特に女子の種目の増設は目を見張るものがあり、三段跳、棒高跳をはじめ、男女の格差是正の影響を受け男子のすべて

の種目が導入されてきている現状にどのように対処していったらよいか、また、この国際競技大会の開催期間が夏季に集中していることによる選手選考、派遣等の新しい問題も起こってこようとしている。このように国際大会が増えていくなか競技力の向上を目標に新人登竜門となる全国新人大会新設も重要な課題となっている。

長い歴史と伝統のなかに築きあげられてきた秩父宮賜杯　全国高等学校陸上競技対校選手権大会の趣旨を守り、多くの高校生競技者を世界のヒノキ舞台に出場できる道をつくりながら、なお、一層の大会充実が21世紀の高校陸上競技部の重要な責務となってきている。

心に残る平成10年間の高校陸上界の出来事

平成元年

第1回全国高校女子駅伝　第1区 雨のなか激走

平成2年

宮田 英明（東農大二）
100m10秒27の日本新記録福岡国体で誕生

平成3年

全国高校駅伝大会　福岡県アベック優勝
男子大牟田優勝

平成３年

全国高校駅伝大会　福岡県アベック優勝
女子筑紫女子学園優勝

平成４年

柿沼 和恵（埼玉栄）インターハイ 200m で 23 秒 82
日本新記録　３冠と２種目２連勝

平成５年

伊藤佳奈恵（恵庭北）東アジア大会 100m で 11 秒 62
日本新記録を樹立 IH 記録も 15 年ぶりに消した

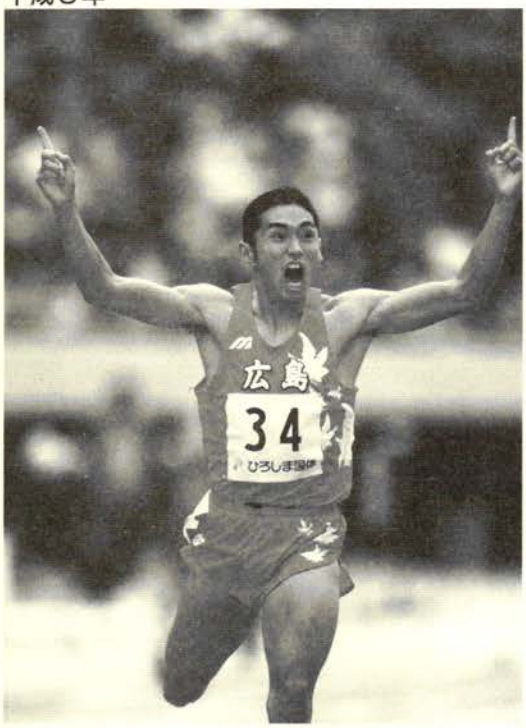
平成６年

インターハイ史上初の４冠を達成　高橋 和弘
100m・200m リレー２種目

平成７年

鈴木 智（仙台工）が棒高跳で 5m22 の高校新記録
（福島国体）

平成８年



広島国体で為末 大（広島皆実）400m45 秒 94
400H49 秒 09 の二種目に高校新記録

平成９年

鈴木 智実（市邨学園）がインターハイ 200m 3 連勝
達成史上 17 人目

平成10年

澤野 大地（成田）棒高跳 5m40
超高校新記録　ジュニア日本新記録

《事務局》

〒543-0034 大阪府大阪市天王寺区石ケ辻町12-16
清風高校内
TEL 06（6771）5757
FAX 06（6773）3615

創　　立：昭和26年

加盟校数	体操競技男子	586校
	体操競技女子	646校
	新体操男子	69校
	新体操女子	527校
部員数	男　子	4,152名
	女　子	8,153名
	合　計	12,305名

年度	部　長	理事長	記　事
26	野沢　要助	相場　　宏	
27	〃	〃	
28	〃	〃	
29	〃	〃	
30	〃	〃	
31	〃	〃	
32	〃	〃	
33	〃	〃	
34	〃	〃	
35	〃	〃	
36	〃	〃	
37	〃	〃	高校適用ルール制定
38	〃	〃	
39	〃	〃	
40	小林　武治	佐々木孝平	事務局東京都国学院高校に置いた
41	渡辺　芳雄	栗山　英二	事務局新潟県立新潟南高校に置いた
42	〃	〃	
43	〃	〃	団体徒手体操を「新体操」と改称
44	〃	〃	
45	小嶋　　渡	〃	
46	佐藤　敏行	〃	
47	〃	〃	
48	〃	〃	
49	〃	〃	
50	平岡　宕峯	新井　澄夫	事務局埼玉県立浦和高校に置いた
51	〃	〃	
52	〃	〃	

年度	部　長	理事長	記　事
53	平岡　宕峯	新井　澄夫	
54	〃	〃	
55	〃	〃	
56	〃	〃	
57	〃	〃	
58	〃	〃	
59	〃	〃	
60	〃	〃	
61	〃	〃	
62	〃	〃	
63	〃	〃	
元	〃	田口　四郎	事務局群馬県立桐生高校に置いた
2	〃	〃	
3	〃	〃	
4	〃	〃	
5	〃	中田　徹二	事務局千葉県立安房農業高校に置いた
6	〃	〃	
7	平岡　英信	〃	
8	〃	〃	事務局静岡県立金谷高校に置いた
9	〃	中野　浩二	
10	〃	山口　彦則	事務局大阪清風高校に置いた

1 沿 革

昭和26年度この年から、全国高等学校体育連盟が共催団体に、同体操部が主管団体となった。

昭和27年度京都府で開催した。これを実質的な第1回高校選手権大会とする考え方もある。

昭和28年度埼玉県で開催された。

体操競技男子に、つり輪が正式種目に加えられ、5種目となった。また、女子では、平行棒が段違いに改められた。

昭和29年度大阪府で開催された。

昭和30年度新潟県で開催された。

男子体操競技が6種目となった。

昭和31年度大阪府で開催された。

直列日程で実施した。

昭和32年度秋田県で開催された。

鉄棒に「車輪」を入れるか否かで激論が交わされた。

昭和33年度長崎県で開催された。

昭和34年度山形県で開催された。

昭和35年度山口県で開催された。

昭和36年度神奈川県で開催された。

昭和37年度高知県で開催された。

高校生大会適用ルール制定の最初であった。昭和38年度青森県で開催された。

この年、専門部会議で、専門部規定が制定された。

昭和39年度福井県で開催された。

昭和40年度宮崎県で開催された。

小林武治氏（国学院高校長）が部長に就任し、佐々木孝平氏（東京）が委員長に選任された。事務局を、東京都国学院高等学校に置いた。昭和41年度岩手県で開催された。

渡辺芳雄氏（新潟）が部長に就任し、栗山英二氏（新潟）が委員長に選任された。

事務局を、新潟南高校に置いた。

昭和42年度全国高等学校総合体育大会第1回大会として、新潟県で開催された。

昭和43年度広島県で開催された。

日本体操協会は、国際体操連盟が新たにリズミック・スポーツ・ジムナスティックス（女子のみ）の競技会を開催することから、国内における従来の団体徒手体操を、とりあえず「新体操」と改称して実施することになった。

昭和44年度群馬県で開催された。

昭和45年度和歌山県で開催された。

小島渡氏（和歌山県立向陽高校長）が部長に就任した。

昭和46年度高知県で開催された。

佐藤敏行氏（東京中延学園高校長）が部長に就任した。

都道府県男女各2名の代表委員制を廃止して代表は1名とし、そのほかに、体操競技男子、同女子、新体操男子、同女子の4種別についてブロック（9）代表の技術部会を構成し、技術的なことについて審議・立案しうるよう規約を改正した。

昭和47年度山形県で開催された。

昭和48年度静岡県で開催された。

新体操個人を実施した。

昭和49年度福岡県で開催された。

昭和50年度群馬県で開催された。

平岡宕峯氏（清風高校長）が部長に就任し、新井澄夫氏（埼玉浦和高校）が委員長に選任された。

事務局を埼玉県立浦和高校に置いた。

昭和51年度長野県で開催された。

この年、「競技順序決定方法に関する規定」「器械器具等推薦規定」が制定された。

昭和52年度岡山県で開催された。

昭和53年度福島県で開催された。

この大会には、皇太子殿下・美智子妃殿下がおなりになりました。

昭和54年度滋賀県で開催された。

この大会で、成績記録集計のために、初めてコンピュータが使用された。

昭和55年度愛媛県で開催された。

昭和56年度神奈川県で開催された。

昭和57年度鹿児島県で開催された。

この年、高校選抜大会の検討委員会を構成し協議を重ねた。

昭和58年度愛知県で開催された。

昭和59年度秋田県で開催された。

「会場地・会場・器具等に関する規定」をまとめ、新たに制定した。

昭和60年度石川県で開催された。

昭和61年度島根県で開催された。

昭和62年度北海道で開催された。

委員長の勤務校の移転にともない、事務局を埼玉県立大宮中央高校に置くことにした。

2　10年の歩み

昭和63年度

体操競技は兵庫県立総合体育館で、新体操は西宮市立中央体育館で開催された。

体操競技の開会式では、ソウル・オリンピックに参加が決定した高校生男女選手を激励した。オリンピックでは、男子代表の池谷・西川両選手が大活躍し、日本チームに銅メダルをもたらし、個人種目別でも好成績を残した。

前年までの、副部長森畑務氏（鳥取）、監事原益男氏（埼玉）、監事笹生登氏（神奈川）、常任委員井上寛治氏（岡山）に、功労賞を授与した。

日本体操協会は、第5回全国高校体操競技選抜大会を奈良中央体育館で、第4回高校新体操選抜大会を神奈川県大和体育館で、それぞれ開催した。

平成元年度

田口四郎氏（群馬）が委員長に選任された。事務局を群馬県桐生高校に置くことにした。体操競技は徳島県徳島市立体育館で、新体操は香川県坂出市立体育館で開催された。

競技風景

前年までの幹事中村カズ子氏（埼玉）、幹事小川貴氏（埼玉）、常任委員村井正憲氏（三重）に、功労賞を授与した。

40周年記念事業実行委員会を構成し、事業計画が提案され、「40周年史」を発刊すること記念式典・祝賀会を開催することが承認された。

日本体操協会は、第6回全国高校体操競技選抜大会並びに第5回高校新体操選抜大会を岐阜県岐阜メモリアルホールで開催した。

平成2年度

この年の大会は、宮城県仙台市、宮城スポーツセンターで開催された。北海道大会に次いで同一会場による開催であった。

この大会より、体操競技は男女各4名（プラス2名）、新体操は男女各2名（プラス1名）まで参加できることになった。

前年までの新体操技術部副部長石井澄子氏（北海道）、体操競技技術部副部長小竹登美子氏（福井）に、功労賞を授与した。

日本体操協会は、第7回全国高校体操競技選抜大会を神奈川県大和スポーツセンターで、第6回高校新体操選抜大会を代々木第二体育館で、それぞれ開催した。

「40周年史」の発刊、記念式典ならびに祝賀会を開催した。

平成3年度

この年の大会は、静岡県静岡市、草薙運動公園体育館で開催された。同一会場による開催であった。初めて会場にエアコンがレンタルで設置され快適なコンデションのもとで競技された。

前年までの、常任委員米田賢一氏（秋田）、常任委員渡辺恭一氏（熊本）に、功労賞を授与した。

日本体操協会は、第8回全国高校体操競技選抜大会を福井県鯖江総合体育館で、第7回高校新体操選抜大会を岐阜県岐阜メモリアルで、それぞれ開催した。

平成4年度

この年の大会は、宮崎県宮崎市、宮崎県体育館で40周年記念大会として開催された。同一会場による開催であった。新体操の開催中に台風に直撃され競技終了が夜おそくににになり閉会式をとりやめた。

前年までの体操競技技術部副部長永田喜子氏（長崎）に功労賞を授与した。

第9回全国高校体操競技選抜大会を・第8回高校新体操選抜大会を千葉県千葉ポートアリーナで開催した。主管が日本体操協会から高体連になった最初の大会である。

平成5年度

中田徹二氏（千葉）が委員長に選任された。事務局を千葉県安房農業高校に置くことにした。

体操競技は栃木県宇都宮市、栃木県体育館で、新体操は氏家町体育館で開催された。

前年までの副部長新井澄夫氏（埼玉）、幹事黒川寿之氏（群馬）、幹事相沢繁光氏（群馬）、常任委員小櫻孝司氏（大阪）、体操競技女子技術部長柳谷和子氏（秋田）、新体操女子技術部部長関沼志免子氏（群馬）、岩手県委員長日向幸氏、長野県委員長湯沢勉氏に、功労賞を授与した。

第10回全国高校体操競技選抜大会を・第9回高校新体操選抜大会を兵庫県尼崎記念総合体育館で開催した。

表彰者は平岡宕峯先生

平成6年度

部長の平岡宕峯氏が逝去され、功労賞を霊前に授与した。

体操競技は富山県富山市、富山総合体育館で、新体操は新湊市体育館で開催された。

前年までの常任委員堀尾雅明氏（愛知）、常任委員青木誠氏（島根）、新体操男子技術部員副部長丸山博氏（熊本）に、功労賞を授与した。第11回全国高校体操競技選抜大会を・第10回高校新体操選抜大会を愛知県名古屋レインボーホールで開催した。

平成7年度

平岡英信氏（清風高校長）が部長に就任した。体操競技は鳥取県米子市産業体育館で、新体操は鳥取市民体育館で開催された。

四国（香川）新体操男子技術部員の山地紀明氏が逝去され、功労賞を霊前に授与した。

前年までの副部長久保貴裕氏（和歌山）、常任委員木原勝之氏（富山）、常任委員後藤憲一氏（宮崎）に、功労賞を授与した。

第12回全国高校体操競技選抜大会を・第11回高校新体操選抜大会を群馬県桐生市民体育で開催した。

平成8年度

中田委員長が病気のため、副委員長の中野浩二氏（静岡）が委員長代行となった。

事務局を静岡県金谷高校に置くことにした。この年の大会は、山梨県甲府市、緑が丘体育館で開催された。同一会場による開催であった。前年までの県委員長森下弘志氏（岡山）に、功労賞を授与した。

第13回全国高校体操競技選抜大会を・第12回高校新体操選抜大会を静岡県浜松アリーナで開催した。

平成9年度

中野浩二氏が委員長に選任された。

この年の大会は、京都府向日市民体育館で開催された。同一会場による開催であった。前年度までの専門部副部長田中武彦氏（大阪）、副部長田口四郎氏（群馬）、体操競技女子技術部長長井恵美子氏（群馬）、常任委員大前潔氏（鳥取）、新体操女子池田邦子氏（福井）、幹事大野和義氏（千葉）、県委員長坪山正二氏（栃木）に、それぞれ功労賞を授与した。

第14回全国高校体操競技選抜大会を・第13回高校新体操選抜大会を新潟県新潟市鳥屋野総合体育館で開催した。

新潟選抜開会式選手宣誓

3　将来に向けて

現在の体操競技は、極限への挑戦である。新技を成功させた時の喜びは、何とも言いようのない満足感で一杯である。その喜びと満足感を味わうためにも、より一層体力をつけ、筋力と柔軟性を養い、個性豊かな演技ができるよう努力が必要である。

新体操男子は、未実施県への働きかけ、登録チーム・選手への増加の呼びかけ、また、魅力ある競技内容の模索など考えなくてはならない。同女子は、手具の操作や、技のみにはしることなく、あくまでも自然に、そしてリズミカルな動きと美しさを追求していくことをねらいとし、その方向性を誤ることのないよう努力しなくてはいけない。

ここ数年、体操競技・新体操ともに高校生の競技人口の減少が著しく、地域によってはチームを組めない学校が出ている。少子化現象のなか、体操部の前途は多難である。今後どのような方向で普及、発展させていくか、体操に携わる我々の課題である。

日本の体操文化を、高等学校教育の一貫として位置付けて50周年を迎えた高体連体操部が、今後とも関係各位の温かいご理解とご協力で益々発展していくことを祈念したいと思います。

《事務局》
〒192-0950 八王子市明神町4丁目20番地1号
都立南多摩高校内
TEL 0426（42）2431
FAX 0426（42）2195

創　　立：昭和23年

加盟校数	男　子	2,273校
	女　子	2,133校
部員数	男　子	20,845名
	女　子	21,106名
	合　計	41,951名

年度	部　長	記　事
23		水泳専門部発足。湯野正憲氏代表となる。
24		バタフライを加える。
25	星　一雄	自由形800m→1500mへ。
26	〃	バタフライ中止。
27	〃	ヘルシンキオリンピックに男子3名女子5名が出場。
28	〃	平泳ぎ50m→200mへ。
29	〃	
30	〃	バタフライ復活。 女子メドレーリレー400mに。
31	小野　軍操	メルボルンオリンピックに男子3名女子3名が出場。
32	〃	女子3種目追加2種目廃止。
33	〃	
34	〃	
35	長島　泰明	ローマオリンピックに女子2名が出場。
36	〃	男子400m リレー追加。
37	〃	400m個人メドレー追加。
38	〃	全種目標準記録を設定。
39	〃	東京オリンピックに男子3名女子5名が出場。200m個人メドレー追加。
40	〃	標準記録を大幅に改定
41	浅島　武雄	標準記録を引き下げる
42	〃	
43	〃	地域を8→9に変更。
44	〃	都府県大会の記録で全国大会出場は認めない。
45	〃	
46	野原　隆治	
47	〃	ミュンヘンオリンピックに男子1名女子5名が出場。
48	〃	標準記録を一部改定。
49	〃	
50	〃	
51	〃	モントリオールオリンピックに男子1名女子5名が出場。
52	〃	
53	菊池　章	
54	〃	
55	〃	規模適正化を図る。
56	〃	標準記録を大幅に改定。
57	〃	周年大会で功労者表彰。
58	栗原　安雄	
59	〃	ロサンゼルスオリンピックに男子2名女子8名出場。
60	〃	水泳20チームに増加。
61	〃	表彰を6位までとする。
62	長野　昭夫	全国大会特別措置追加。
63	〃	
元	〃	1週間早めて実施。
2	〃	表彰を6位→8位に。
3	〃	参加者資格を改定。
4	川端　理功	台風のため1日短縮。
5	〃	
6	〃	突風・雷雨で競技中断。
7	〃	
8	〃	表彰について一部改定
9	〃	
10	植田　和行	規約・細則を改訂。

1 沿 革

昭和23年［第16回大会・愛知・振甫］出場資格を地域予選優勝校と各種目3位。
昭和24年［第17回大会・兵庫・甲子園］男子にバタフライ種目を加える。
昭和25年［第18回大会・広島・呉］水球競技で慶應義塾（神奈川）が2連勝。
昭和26年［第19回大会・東京・神宮］バタフライ中止。400m平泳ぎを100mに。
昭和27年［第20回大会・奈良・天理］女子競泳で（奈良）が3連勝。
昭和28年［第21回大会・愛知・振甫］50m背泳ぎを200mに変更。
昭和29年［第22回大会・東京・神宮］競泳では五条（奈良）が男女とも優勝。女子は5連勝。
昭和30年［第23回大会・東京・神宮］飛込女子で松蔭女子（京都）が2連勝。
昭和31年［第24回大会・東京・神宮］男子に400m個人メドレーを追加。
昭和32年［第25回大会・東京・神宮］水球慶應義塾（神奈川）2回目の2連勝競泳男子佐伯鶴城（大分）が2連勝
昭和33年［第26回大会・高知・高知］女子競泳で五条（奈良）が9連勝。
昭和34年［第27回大会・静岡・浜松］女子競泳で五条（奈良）が10連勝。水球で鴨折（京都）が2回目の2連勝。
昭和35年［第28回大会・東京・神宮］飛込男子で天理（奈良）が2連勝。
昭和36年［第29回大会・石川・金沢］水球で済々学（熊本）が2連勝。
昭和37年［第30回大会・山口・宇部、下松］女子競泳で五条（奈良）が13連勝。飛込男子で天理（奈良）が4連勝。
昭和38年［第31回大会・大阪・大阪］出場資格が決勝3位までと標準記録突破者となる。飛込男子で天理（奈良）が5連勝。
昭和39年［第32回大会・群馬・前橋］男女とも200m個人メドレーを追加し現在の種目構成と同様になる。
昭和40年［第33回大会・大分・別府］参加選手競泳1199名、飛込46名、水球16チーム。
昭和41年［第34回大会・青森・青森、宮城・仙台］飛込女子松蔭女子（兵庫）2回目の3連勝。参加選手合計1183名。
昭和42年［第35回大会・福井・福井、三秀］参加選手合計1126名。標準記録突破を各都道府県大会でも認める。
昭和43年［第36回大会・広島・呉］地域を8→9地域に拡大。参加制限を地域1位としたため、参加選手数が830名に大幅減となる。
昭和44年［第37回大会・群馬・前橋］標準記録を地域大会に限定。参加選手数を地域2位までに拡大。前年より906名増加。
昭和45年［第38回大会・和歌山・秋葉、大阪・堺］参加選手、競泳727名、飛込63名、水球204名、合計1143名
昭和46年［第39回大会・高知・高知］参加選手、競泳887名、飛込73名、水球183名、合計1143名競泳男子で尾道（広島）が4連勝。
昭和47年［第40回大会・山形・鶴岡、茨城・水戸］参加選手、競泳850名、飛込81名、水球209名、合計1140名飛込女子松蔭女子（兵庫）3回目の2連勝。水球川内（大阪）が2連勝。
昭和48年［第41回大会・三重・四日市］参加選手、競泳872名、飛込67名、水球185名、合計1124名競泳男子の広工附（広島）が2連勝。標準記録を、7種目改訂。
昭和49年［第42回大会・福岡・福岡］参加選手、競泳978名、飛込69名、水球184名、合計1231名
昭和50年［第43回大会・埼玉・川口］参加選手、競泳1011名、飛込62名、水球198名、合計1271名
昭和51年［第44回大会・長野・長野］参加選手、競泳1181名、飛込60名、水球205名、合計1146名
昭和52年［第45回大会・岡山・岡山］参加選手、競泳1222名、飛込59名、水球200名、合計1481名飛込男子で天理（奈良）が4連勝。競泳では尾道・筑紫ともに4連勝。
昭和53年［第46回大会・福島・会津若松、白

河］参加選手、競泳1333名、飛込54名、水球208名、合計1595名飛込女子で松蔭女子（兵庫）が8連勝。競泳男子で尾道（広島）が5連勝。

昭和54年［第47回大会・滋賀・彦根・長浜］参加選手、競泳1211名、飛込54名、水球197名合計1462名

昭和55年［第48回大会・徳島・徳島、蔵本］参加選手、競泳1208名、飛込54名、水球203名、合計1465名松蔭女子10連勝。明大中野4連勝。

昭和56年［第49回大会・千葉・千葉］参加選手、競泳1437名、飛込60名、水球198名、合計1704名

昭和57年［第50回大会・鹿児島・鴨地］参加選手、競泳1065名、飛込60名、水球206名、合計1334名松蔭女子（兵庫）12連勝。

昭和58年［第51回大会・愛知・瑞穂］参加選手、競泳1221名、飛込70名、水球205名、合計1496名競泳女子の近大附（大阪）が4連勝

昭和59年［第52回大会・秋田・秋田、福島・会津若松］参加選手、競泳1434名、飛込69名、水球201名、合計1704名競泳女子で近大附（大阪）が5連勝。

昭和60年［第53回大会・石川・金沢］参加選手、競泳1332名、飛込71名、水球251名、合計1654名水球の参加校数を16チームから20チームに増やした。

昭和61年［第54回大会・島根・松江］参加選手、競泳1532名、飛込73名、水球251名、合計1856名競泳は、男女とも近大附（大阪）が優勝。

昭和62年［第55回大会・北海道・函館］参加選手、競泳1540名、飛込74名、水球252名、合計1766名競泳男子の近大附（大阪）が5連勝。

2　10年のあゆみ

昭和63年［第56回大会・兵庫・神戸］参加人数、競泳1432名、飛込78名、水球257名、合計1767名大会新記録男子21、女子19、〈第24回オリンピック・ソウル大会〉に加藤真志（近大附）藤本隆宏（西日本短付）佐々木香織（品川女）細田朋美（横浜共立）北野高代（愛知淑徳）原田裕代（夙川）浅田雅子（小松市立）が出場した。

平成元年［第57回大会・高知・高知］参加人数、競泳1756名、飛込75名、水球252名、合計2083名大会新記録男子10、女子0、台風の特異日と重なるため、開催期間を1週間繰り上げて実施した。市内では、「よさこい祭」が催され大変な賑わいであった。競泳女子で品川女（東京）が初優勝

平成2年［第58回大会・宮城・仙台］参加人数、競泳2030名、飛込77名、水球253名、合計2355名大会新記録男子11、女子15、競泳では近大附（大阪）が男女アベック優勝。水球は福岡工（福岡）が初優勝。

平成3年［第59回大会・静岡・静岡］参加人数、競泳1743名、飛込76名、水球253名、合計2072名大会新記録男子21、女子7、男女とも50m自由形が新設された。個人の表彰を6位→8位までに広げた。これにともない8位までを得点化し、リレー種目は個人の2倍の得点を与えることとした。水球の金沢市工（石川）が初優勝。

平成4年［第60回大会・宮崎・宮崎］参加人数、競泳1563名、飛込83名、水球252名、合計1898名大会新記録男子7、女子12、第9代部長に川端理功氏就任。〈第25回オリンピック・バルセロナ大会〉に林　亮（鶴崎）衣笠竜也（法政二）倉澤利彰（世田谷）千葉すず（近大附）肥川葉子（九州女子）鳥飼淳子（近大附）粕谷恭子（狭山ヶ丘）漢人陽子（浜松商）が出場した。台風の接近により風雨が強くなったが、初日の競技は無事終了した。18日正午に宮崎市に上陸との警報により2日目の競技を中止し、残りの競技を2日間に振り分け、全ての競技をタイムレース決勝の方式で実施した。

平成5年［第61回大会・栃木・宇都宮］参加

人数、競泳1753名、飛込82名、水球253名、合計2088名大会新記録男子7、女子14、専門委員会の表彰に、前年度総体開催県委員長を追加することにした。雷雨の接近により、飛込競技を一時中断した。飛込男子の尽誠学園（香川）が初優勝。

平成6年　［第62回大会・富山・高岡］参加人数、競泳1645名、飛込71名、水球255名、合計1971名大会新記録男子9、女子11、①引率責任者は教員であること。②配宿以外の宿舎の利用は出場停止。上記2点について再度の徹底を図った。競泳では近大附（大阪）が男女とも3年連続アベック優勝。

平成7年　［第63回大会・鳥取・米子］参加人数、競泳1805名、飛込72名、水球254名、合計2131名大会新記録男子3、女子14、スパイラルテープ・鼻孔拡張テープの使用が禁止となった。競泳女子の武蔵野（東京）・飛込男子の輿誠（静岡）・水球の鳥羽（京都）がそれぞれ初優勝。

平成8年　［第64回大会・山梨・甲府］参加人数、競泳1648名、飛込68名、水球255名、合計1971名大会新記録男子8、女子8、｛第26回オリンピック・アトランタ大会｝に宮崎義伸（直方）山本貴司（近大附）近内圭太郎（湘南工大附）源純夏（城南）山野井絵里（鹿島学園）三宅愛子（加古川南）中尾美樹（近大附）中村真衣（帝京長岡）田中雅美（八王子）岩崎恭子（日大三島）鹿島瞳（東京立正）春名美佳（加古川南）寺内健（比花学園）が出場した。フロッピーによるエントリーを初めて実施した。ドーピング検査が高校の大会では初めて実施された。O-157（食中毒）の関係で、食事には細心の注意が払われた。競泳男子で湘南工大附（神奈川）が初優勝。

平成9年　［第65回大会・京都・宇治］参加人数、競泳1710名、飛込67名、水球256名、合計2033名大会新記録男子1、女子9、ルールの改正、ではなく、大会ごとの特別ルールとしてスタートを1回で行った。水球は、①レフリーの判定が笛とハンドシグナル②タイムアウトが2回取れる③7mラインの新設等のルール改正があがった。

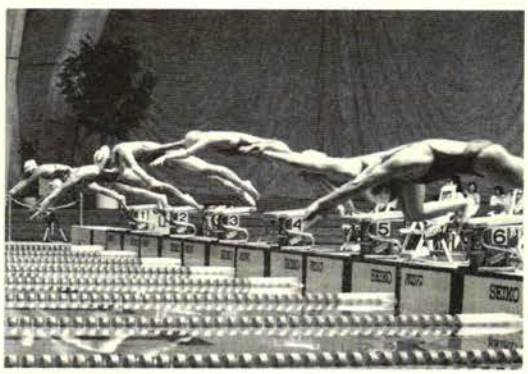
3　将来に向けて

水泳専門部が抱えている問題点としては、

① 少子化による競技者人口の減少。
② ドーピングコントロールの結果への対応。
③ 手書きによる申し込み方式からフロッピーによる申し込みへの、完全な移行。
④ 平成11年度より実施される競技者登録のコンピュータ入力方式への対応。

等々が上げられる。

これらのどの一項目をとってみても、一朝一夕に解決できると言うような項目は一つも見あたらないが、歴代の部長同様、関係の団体と緊密な連携を計るとともに、各県の委員長の協力を得て、着実に解決して行くつもりである。水泳専門部は、競泳・水球・飛込の3競技を統括しているが、幸いなことに水球・飛込は高校の教員が中心となって運営されている上、競泳においては、委員長経験者が各県の理事長・競技委員長の要職に就いている場合が多く、日本水泳連盟・各県水泳連盟との関係は良好な状態にある。今後ともこの関係を維持拡大し、全国大会に参加する生徒が、その実力を遺憾なく発揮し、心に残るような大会が運営できるよう、努力して行きたいと考えている。



《事務局》
〒112-8629 東京都文京区大塚1-5-9
跡見学園高校内
TEL 03（3941）8161
FAX 03（3941）8685

創　立：昭和23年

加盟校数		8,430校
部員数	男子	4,152名
	女子	8,153名
	合計	12,305名

年度	部長	副部長	記事
23	遊津　孟	鈴木　正三	日本バスケットボール
24	〃	大木　行徳	協会に高等学校体育連
25	〃	平田　一夫	盟加盟。初代部長に遊
26	〃		津氏就任。三副部長制
27	〃		を採り、鈴木、大木、
28	〃		平田の各氏が就任する
29	〃		
30	〃		
31	〃		
32	石平　俊徳		石平氏が部長に就任。
33	〃	高橋　政利	高橋、手島氏副部長に
34	〃	手嶋　昇	就任。
35	〃	大木　行徳	
36	新井　廸之		新井氏部長に就任。
38	〃		
39	〃		
40	〃		
41	成田　喜澄		成田氏部長に就任。
42	〃		
43	〃	高橋　政利	野口氏副部長に就任。
44	〃	野口　政勝	
		大木　行徳	
45	〃	坂上　季男	坂上氏副部長に就任。
46	〃	野口　政勝	
47	〃	大木　行徳	
48	〃		
49	〃		
50	浜本　清海		浜本氏部長に就任。
51	〃		

年度	部長	副部長	記事
52	浜本　清海		
53	大木　行徳	坂上　季男	大木氏部長代行として
		野口　政勝	就任
54	宇田川博光	坂上　季男	宇田川氏部長に就任。
55	〃	金子　久男	
		大木　行徳	
56	〃	坂上　季男	徳永氏副部長に就任。
57	〃	金子　久男	
58	〃	徳永　一芳	
59	〃	坂上　季男	副部長4人制となり、
60	〃	金子　久男	阿部氏副部長に就任。
61	〃	徳永　一芳	
62	〃	阿部　昭二	
63	石井　弘司		石井氏部長に就任。
元	〃		
2	〃	金子　久男	阿部克三、町口氏副部
3	〃	阿部　昭二	長に就任。
		阿部　克三	
		町口　俊一	
4	金森　久	平井　毅	金森氏部長に、平井、
5	〃	阿部　克三	天江氏副部長に就任。
6	北村　透	町口　俊一	北村氏部長に就任。
7	〃	天江　輝夫	
8	〃		
9	荒井　正賢	平井　毅	荒井氏部長に、鹿間氏
		阿部　克三	副部長に就任。
		町口　俊一	
		鹿間　孝	
10	〃		石突氏副部長に就任。

1　沿　革

(1)草創期

昭和23年～26年

23年には全国高等学校体育連盟バスケットボール部が発足、日本バスケットボール協会に加盟する。第1回全国高等学校バスケットボール選手権大会が国民体育大会の高校の部として福岡市で開催される。出場男子48校女子46校。

25年には第3回全国高校選手権大会が国民体育大会より分離、名古屋にて独自に開催されるようになる。全国高等学校体育連盟に加盟し、バスケットボール専門部となる。

(2)定着期

昭和27年～37年

23年に発足して以来ようやく連盟の運営も軌道に乗り、全国高校選手権大会代表出場校も年々数を増していった。この時期の初期は男子では北越商業、三条高校など新潟県勢の活躍が、また後期では武蔵・中大杉並（中大付属）の活躍が目立った。女子では草創期より活躍の目立った浦和一女を始め、栃木女子、宇都宮女子商業など関東勢一色の様相を呈した。

(3)発展期

昭和38年～53年

試合内容が向上するとともに、審判技術の向上も要求されるようになり、全国高校選手権大会と平行して審判研修会も実施されるようになった。（現在も継続）また大会名称も「全国高等学校総合体育大会」に改まり、その規模も拡大した。（出場校数も最大男子65, 女子68校）

一方高校生の競技力向上は東京オリンピックにも刺激され、その活躍の場を海外にも求めるようになった。43年第1回日韓高校スポーツ交歓競技会参加。44年第1回アジアユース大会（ソウル）参加。48年第1回日米高校定期戦（ハワイ）開催、等国際色も豊になった。

国内においても45年に第1回全国高等学校バスケットボール選抜優勝大会が開催され（出場校男女とも16校49年に男女とも24校に拡大）国内外に高校生の活躍の場が広がった。

また、組織運営面でも48年に専門部規約を改正し、組織の充実と運営の円滑化を図った。

この時期活躍の目立ったチームは、男子では中大付属、明大付属中野、京北等の東京勢や松江工業、能代工業等の地方勢である。一方女子では、栃木女子、宇都宮女子、名古屋女子商業、大妻、樟蔭東等の活躍が目を引いた。

(4)充実期

昭和54年～62年

全国高校総体は年々その規模を拡大し、宿舎や会場施設の確保に無理を生じるようになった。そのため昭和54年規模適正化を図り実施することになったのである。バスケットボールは参加枠を男女とも59校に制限することとし、エントリーも選手15名から12名と縮小した。また同年バスケットボール競技力の向上が、日本バスケットボール協会を中心に唱えられ、技術クリニック・強化合宿が日本協会の主催でブロック別に開かれるようになり、昭和61年まで続いたのである。また、この時期は前の「発展期」に始まった海外への進出がますます盛んになり、57年には日米高校バスケットボール親善試合（男子）が隔年来日、隔年遠征の形態で実施されるようになったのである。また、日本体育協会の主催による日中・日韓ジュニア交流試合も開催されるようになった。45年以降隔年に開催されてきたアジアユース大会はアジアジュニア選手権に名称をかえ開催されるようになり、日本ジュニアチームは常に上位の成績を残せるようになってきている。全国高校総体で活躍したチームは男子の能代工業の七連覇、福大附属大濠、九産大九州といった九州勢が目を引いた。女子では東京成徳短大附、名古屋短大附属などの活躍が会場をわかせた。

京都インターハイの熱戦から

2　10年の歩み

(1)昭和63年

ア　全国高等学校総合体育大会　神戸市
　男子優勝北陸　2位能代工業
　女子優勝富岡　2位名古屋短大付
イ　全国高等学校選抜優勝大会　東京都
　男子優勝能代工業　2位北陸
　女子優勝名古屋短大附　2位明星学園
ウ　ブロック別強化合宿　全国各地
エ　日中ジュニア交流競技会　金沢市

オ 日韓ジュニア交流競技会　韓国
カ 第10回ABCジュニア選手権大会参加
キ 全国審判研修会の開催　神戸市
ク 石井氏部長に就任

(2)平成元年

ア 全国高等学校総合体育大会　松山市
　男子優勝能代工業　2位愛工大名電
　女子優勝名古屋短大附　2位樟蔭東
イ 全国高等学校選抜優勝大会　東京都
　男子優勝愛工大名電　2位能代工業
　女子優勝名古屋短大附　2位富岡
ウ 平成元年度ブロック別強化合宿　全国各地
エ 日中ジュニア交流競技会　上海市
オ 日韓ジュニア交流競技会　金沢市
カ 男女ジュニアチーム台湾遠征
キ 全国審判研修会の開催

(3)平成2年度

ア 全国高等学校総合体育大会仙台市
　男子優勝洛南　2位能代工業
　女子優勝名古屋短大附　2位東亜学園
イ 全国高等学校選抜優勝大会　東京都
　男子優勝能代工業　2位土浦日大
　女子優勝名古屋短大附　2位中村学園女子
ウ 平成2年度ブロック別強化合宿　全国各地
エ 日中ジュニア交流競技会　岡崎市
オ 日韓ジュニア交流競技会　韓国
カ 第5回日米高校親善試合
キ 全日本女子ジュニア台湾遠征
ク 全国審判研修会の開催
ケ 組織の見直しを実施、4人の副部長をそれぞれ総務、競技企画、強化普及、規則審判の4部会の担当責任者とし、業務を能率よく捌けるようにした。

(4)平成3年度

ア 全国高等学校総合体育大会　浜松市
　男子優勝能代工業　2位初芝
　女子優勝鶴鳴女子　2位名古屋短大附
イ 全国高等学校選抜優勝大会　東京都
　男子優勝能代工業　2位初芝
　女子優勝中村学園女子　2位名古屋短大附
ウ 日韓ジュニア交流競技会　名古屋市
エ 日中ジュニア交流競技会　中国
オ 第6回日米高校親善試合　ロスアンゼルス
カ アジアジュニア・シティカップ　台北
キ 全日本ジュニア韓国遠征韓国　ソウル
ク ジュニア強化合宿実施
ケ 全国審判研修会の開催　浜松市
コ 阿部克三、町口俊一両氏副部長に就任

(5)平成4年度

ア 全国高等学校総合体育大会延岡・日向市
　男子優勝土浦日大　2位愛工大名電
　女子優勝名古屋短大附　2位新居浜商業
イ 全国高等学校選抜優勝大会　東京都
　男子優勝愛工大名電　2位土浦日大
　女子優勝名古屋短大附　2位東亜学園
ウ 日韓ジュニア交流競技会　韓国光州直轄市
エ 第12回男女アジアジュニア選手権大会
オ 第38回カナダトレビューン大会
カ 女子ジュニア台湾遠征
キ ジュニア強化合宿実施
ク 全国若手指導者技術講習会
　全国各ブロックより男女1名推薦された指導者を対象として実施
ケ 部長に金森久氏、副部長に天江輝夫、平井毅両氏就任

(6)平成5年度

ア 全国高等学校総合体育大会小山市・石橋町
　男子優勝能代工業　2位福大附大濠
　女子優勝中村学園女子　2位名古屋短大附
イ 全国高等学校選抜優勝大会　東京都
　男子優勝福大附大濠　2位土浦日大
　女子優勝名古屋短大附　2位三田尻女子
ウ 女子ジュニア世界選手権大会　ソウル
エ 日韓中ジュニア交流競技会　郡山市
　＊この年から三国対抗競技会に変更
オ 米高校親善試合ロスアンゼルスで開催
カ 女子ジュニア台湾遠征台湾・台北市開催
キ 日米高校親善試合北信越、東海、近畿地区にて開催参加は各県選抜チーム
ク 第2回台湾交流競技会千葉・神奈川県
ケ 全国ブロック別強化合宿実施全国各地
コ ジュニア強化合宿実施
サ 第35回全国審判研修会の開催小山市

(7)平成6年度

ア 全国高等学校総合体育大会　富山市
　男子優勝能代工業　2位北中城
　女子優勝名古屋短大附　2位聖和学園
イ 全国高等学校選抜優勝大会　東京都
　男子優勝大商学園　2位國學院久我山
　女子優勝名古屋短大附　2位純心女子
ウ 日韓中ジュニア交流競技会　韓国済州島
エ 日台韓三国国際親善大会　台湾台北市

オ　第12回アジアジュニア選手権大会
カ　第3回台湾交流競技会徳島県・愛媛県
キ　全国ブロック別強化合宿実施全国各地
ク　ジュニア強化合宿実施
ケ　全国審判研修会の開催
コ　北村透氏部長に就任

(8)平成7年度

ア　全国高等学校総合体育大会鳥取市
　　男子優勝能代工業2位福岡商業
　　女子優勝名古屋短大附2位中村学園女子
イ　全国高等学校選抜優勝大会東京都
　　男子優勝能代工業2位仙台
　　女子優勝中村学園女子2位樟蔭東
ウ　日韓中ジュニア交流競技会中国唐山市
エ　日米高校親善試合開催
オ　日米交流親善大会ロスアンゼルス
カ　女子ジュニアカナダ遠征バンクーバ
キ　日台豪三国交流大会台北市
ク　第13回アジアジュニア選手権大会
ケ　日台交流親善大会東海4県で開催
コ　全国ブロック別強化合宿実施全国各地
サ　ジュニア強化合宿実施
シ　全国審判研修会の開催鳥取市

(9)平成8年度

ア　全国高等学校総合体育大会富士吉田市
　　男子優勝能代工業2位洛南
　　女子優勝名古屋短大附2位鶴鳴女子
イ　全国高等学校選抜優勝大会東京都
　　男子優勝能代工業2位福島工業
　　女子優勝名古屋短大附2位甲子園学院
ウ　日中韓ジュニア交流競技会長崎市
エ　第14回アジアジュニア選手権大会参加
オ　男子ジュニア海外遠征開催地韓国
カ　女子ジュニア海外遠征開催地カナダ
キ　第1回スペイン国際大会アルバセテ市
ク　第4回女子ジュニア世界選手権
ケ　全国ブロック別強化合宿実施全国各地
コ　ジュニア強化合宿の実施
サ　全国審判研修会の開催富士吉田市

(10)平成9年度

ア　全国高等学校総合体育大会京都市
　　男子優勝能代工業2位洛南
　　女子優勝聖和学園2位明星学園
イ　全国高等学校選抜優勝大会東京都
　　男子優勝能代工業2位山形南
　　女子優勝名古屋短大附2位明星学園
ウ　日韓中ジュニア交流競技会韓国
エ　全国ブロック別強化合宿実施
オ　男子ジュニア海外遠征オランダ
カ　女子ジュニア海外遠征韓国
キ　世界ジュニア（17歳以下）選手権大会
ク　ジュニア強化合宿実施
ケ　日米高校親善試合ロスアンゼルス
コ　荒井正賢氏部長に就任

京都インターハイの熱戦から

3　将来に向けて

近年日本の国際化が進むにつれ、高校生の海外との交流も盛んになった。これは単に異国の文化に触れ、見聞を広めるという効果だけでなく、競技力の向上という面からも大いに期待が持てるところである。しかし現在日本の経済はバブルの崩壊後低迷し続け、いつ活性を取り戻すのか見通しすらつかない。今後このような状況の中で、いかにして資金を得て幅広い活躍の場を高校生たちに提供できるかが本専門部に与えられた課題となろう。

（文中の写真提供：月刊バスケットボール社）

《事務局》
〒545-0011 大阪市阿倍野区昭和町3-1-64
桃山学院高校内
TEL 06（621）1181
FAX 06（629）6111

創　　立：昭和25年

加盟校数		8,134校
部員数	男子	58,103名
	女子	78,056名
	合計	136,159名

年度	部長	副部長	記事
23	専門部の設置を目指して三氏が委嘱される（坂上・池田光・池田久）		第1回インターハイ開催(西宮)
24			専門部創立を図る。
25	坂上　光男	宇梶　公平	専門部設立10月31日(月)
26	〃	(S25～39)	
27	〃	池田　光政	インターハイをJVAと
		(S25～41)	共同主催
			都道府県代表と前年度優勝チームの出場
28	〃		毎年2月に全国委員総会を開催
29	〃		敗者復活戦を採用
30	〃		
31	〃		皮張りボール使用、参加チームの多い府県2代表（東京・北海道）
32	〃		大阪2代表
33	〃		愛知・福岡2代表
34	〃		インターハイ参加チーム数男子1,824女子1,889試合総数4,167
35	〃		
36	〃		全国委員総会で6人制採用問題検討兵庫・静岡2代表
37	〃		国体6人制採用高校選抜男女強化合宿
38	〃		全国高校総体始動インターハイ6人制採用ネットの高さ男子2,25m女子2,05m
39	〃		部長東京オリンピック男子監督（銅メダル）第1回アジアユース大会
40	〃		ブロッキングのオーバーネットが許される
41	下村　平八	稲山　壬子	
42	〃	(S41～43)	
43	〃	高馬　治	日韓高校交流、競技・審
		(S42～45)	判・指導普及委員会発足
44	〃	竹田　芳文	9ブロック合宿実施第
		(S44～45)	1回全国高校選抜優勝
		猪飼光三郎	大会の開催
		(S46～47)	

年度	部長	副部長	記事
46	下村　平八	外山賢四郎	ボールを12枚張りを18
		(S46～50)	枚張りに改正
47	〃		
48	〃	叉木誠八郎	全日本高校選抜中国遠
		(S46～55)	征、審判新ハンドシグ
		勝矢　進	ナル制実施
49	〃	(S48～51)	第1回環太平洋高校選手権大会参加、第1回高校強化合宿
50	〃		
51	〃		
52	〃	花川　忠彦	アンテナはサイドライン
		(S52～55)	上に。ブロックボールは4回までプレーが可能。
53	〃	吉岡　鶴義	
54	〃	(S53～60)	ネットの高さ男子2,40m女子2,20m
55	〃		
56	〃	上原　敬	専門部30周年祝典
57	叉木誠八郎	(S56～59)	選手勧誘の秩序正常化
58	〃	今久保　昇	企業等の施設利用の届
59	〃	(S56～59)	出義務
60	〃	粥川　昌	海外からの留学生の
61	〃	(S60～61)	参加資格
		南　嘉栄	高パ連問題
		(S60～H4)	
62	粥川　昌	小笠原正己	
63	〃	(S62～H2)	第20回全国高校選抜
		阿久津正之	会都道府県代表制
		(S62～H2)	
元	〃	立石　厳	ネットの高さ男子2,43
		(S62～63)	m女子2,24m
2	〃	甲斐　二郎	
3	〃	(H3～6)	
4	〃	池田　長広	
5	〃	(H5～10)	
6	〃	坂上　敦志	
7	〃	(H5～10)	広報委員会発足
8	〃	杉浦　章郎	
9	〃	(H5～8)	リベロ制採用、50周年記
10	〃	秋山　隆	念行事実施
		(H9～10)	

沿　革

戦後の日本高校バレーの歴史は昭和21年に西宮で開催された第1回国民体育大会でスタートするが、日本高校選手権はそれより遅れること2年、昭和23年に開催されている。

男子選手権は22校の参加で8月24日・25日甲子園クラブテニスコートで開催された。後援は毎日新聞社。入場料は20円。女子選手権は朝日新聞社の後援で8月26日・27日の両日、西宮体育館で開催されている。参加校は22校。

次に組織的なスタートとして記さねばならないのは高体連専門部として誕生した日である。その歴史的な日は昭和25年10月27日。第5回国体開催中に岡崎市綿業会館で開催された会議で「高体連バレーボール専門部」の設置が決定された。その時の会議の出席者は全国高体連会長星一雄、全国高体連専門委員坂上光男、池田光政日本バレーボール協会常任理事、桜井芳朗及び31府県よりの代表者38名。そして専門部の発足と共に、昭和27年の神奈川大会より日本高校選手権は日本協会と高体連専門部の共催の形となる。

インターハイは毎年全国持ち回りで開催され各県の競技力発展に寄与している（48年の岐阜インターハイ）

組織が確立して、競技愛好者が増えれば躍進あるのみ。その後、参加チームも徐々に増え、昭和26年～30年までは府県代表チームと前年度優勝チーム、それに開催地代表チームを加えた規模で実施していた。そして昭和31年より、予選参加チームの多い府県より2代表を認めることになり、その年は北海道・東京。32年には大阪、33年に愛知・福岡、36年兵庫・静岡が複数代表になって、男女とも56チーム参加の大会規模となっていった。その間、昭和29年からは会期を1日延長して「敗者復活戦」を採用したりして競技力向上を図ったりもしている。

その後の大きな変化は専門部会での大激論の末の「6人制」採用であろう。従来からの9人制から6人制に移行するには大変なエネルギーが必要となったが、国体の部では昭和37年度、インターハイでは38年度の男子丸亀・女子福井大会より実施している。

しかし、何んといっても日本高校バレーの歴史の分水嶺は「春高バレー」の愛称で親しまれている「全国高等学校選抜優勝大会」の創設である。昭和39年の東京オリンピックの女子金メダル、男子銅メダルを起爆剤にまき起ったバレーブームの波が高校の場にも押し寄せた。当時の日本協会の首脳前田豊、松平康隆氏らの主導による「高校生に感激を与える華やかな大会」の創設である。その夢をかなえてくれたのは、「テレビ放送」と、国立代々木体育館及び東京体育館という「一流のステージ」だった。昭和45年3月24日～29日、全国高体連・日本バレーボール協会・サンケイ新聞・フジテレビ共催で第1回全国高校選抜優勝大会が華やかに開催された。その後の春高は全日本選手の登竜門としての位置づけをもって、高校生バレー選手達の「夢舞台」となって、インターハイ・国体とは全く異なる存在感を持つに至っている。また参加チーム数も当初はブロック代表制であったが、平成元年の第20回記念大会より県単位の代表制になり、増々隆盛を見るようになった。ただ今日ではテレビ視聴率の低下やファンのバレー離れで、大会そのものの存続に点滅信号がともっている看過できない実態もある。ただ、このバレー人気の陰りを少しでも払拭しようと、専門部は関東及び東京高体連の力を借りて自助努力を開始、第29回春高決勝戦が久しぶりに超満員の観客の中で華やかに行われたのは、前途に一すじの光明を見る思いだった。

春高、インターハイ、国体の三大大会のうちでも最も華やかなのが春高バレー
（第19回大会より）

組織について

組織の中心はいうまでもなく「部長」。この部長は現在の粥川部長で4代を数えるだけ。いずれも長期政権で安定した専門部運営をしてきた。

初代部長は東京オリンピック男子銅メダル監督の坂上光男でオリンピックの翌年の40年までその任務についている。温厚な人柄で組織を上昇気流に乗せている。

2代目は岡崎の下村平八。女子バレーの先駆者ともいえる氏は、高い人望とバレーへの卓越した情熱で象徴的な君臨の仕方をして昭和55年までその職務を続けた。

3代目は前任の下村平八氏を事務局長として補佐してきた叉木誠八郎氏。鋭い弁舌、強烈なリーダーシップで昭和56年から61年まで「天皇」の異名で君臨し、高体連専門部組織を盤石なものとした。

現在の4代目部長粥川昌は審判部出身で温厚な人柄は敵も少なく「平和時のリーダー」として見事な手腕を発揮「専門部創立50年」というメモリアルイヤーを「式典と記念誌発行」という二大事業で完結させている。

機構の面に触れると、バレー専門部はながい間、競技委員会・審判委員会・強化指導普及委員会の3つの専門委員会で運営されてきたが、平成7年より、時代の要請ともいうべき「広報委員会」を発足させ、新しい専門部をアピールしている。

競技委員会は毎年、歴代競技委員長がインターハイ開催地と密接に連絡調整を図り、大会成功の立役者になってきたが、特に苦労しているのは抽選方法。近年はより強いチームの決勝トーナメント進出、地元第1代表の予選グループ戦免除など、様々な工夫をしている。中でも主な改正の変遷は

①昭和63年グループ戦において、シードチームは同一グループにしない。開催地上位チームも同じ扱いにする。

②平成3年度静岡大会より、同一都道府県並びに同一ブロックチームは同一グループにしない。（グループ戦において）

③平成7年度男子島根・女子山口大会より、第1・第2・第3シード及び開催上位チームは予選グループ戦から除く。

などをたどっている。

強化指導普及委員会は、インターハイで毎年東西に分けて選出してる優秀選手選考の任にあたって、優秀な人材の発掘に貢献している。

審判委員会は全国の優秀な審判員を統括し、コートの選手達の活躍を陰でサポートしてきた。日本協会の審判員の多くが高体連出身者である事実からも、同委員会の存在感が浮き彫りにされる。

広報委員会の存在意義と活躍ぶりは後述するとして、ここでは同委員会を設立させた粥川部長のけい眼に敬意を表するにとどめおく。

競技成績

まず男子。昭和23年より37年までの9人制時代に光るのは昭和23年・24年・25年3連覇の韮山（静岡）、33年・34年2連覇の坂出商（香川）で、後年、高校男子指導者の偶像となった稲葉の率いる崇徳高（広島）と、スパルタ指導の鬼中村四郎の中大附属高（東京）の台頭はその後半から。

昭和38年の6人制の採用から、中大附属高と崇徳の「2強時代」が本格化。その中大附属は「春高バレー」の愛称で親しまれている全国高校選抜優勝大会が設立された昭和45年に、初代チャンピオンになると共に、インターハイ、国体と勝ち続け、初の「三冠王」に輝くなど、一時代を築いた。負けていないのは崇徳高。監督稲葉の名コーチ吉川渉を従えてのカリスマ的存在感で、全国制覇を重ねていく。監督が吉川になっても名門の地位を維持続けたのも特筆に値する。

この2強に肉迫し、遂に追い抜いたのが上

野尚志の大商大附属高。万年3位に泣いていたチームが昭和46年丸亀のインターハイで頂点に立つと、鬱積されていたエネルギーが爆発したようにインターハイ3連覇を飾ると共に、昭和46年、48年に2度も三冠王に輝くなど、圧倒的強さを見せた。

しかし、この「御三家」による覇権独占も長くは続かなかった。選手の入学難で中大附属高がその輪の中から脱落していくと、地方の新興勢力が台頭する。昭和49年初優勝した数学教師石田時郎が率いる東海大四高（北海道）は地元インターハイの年の62年、三冠に輝くなど「地方の時代」を演出する。そして、その地方の時代の一方の雄が春藤英徳の弘前工高（青森）だった。弘前工も名手三橋を擁して地元青森国体の年の昭和52年、三冠王に輝いている。この両チームのほかに、御三家時代を経て到来した「群雄割拠の時代」を彩ったのが、春高の三連覇を含む5回も制覇した「まむしの黒田」の藤沢商高（現藤沢翔陵高）、平成3年・4年インターハイを連覇した馬橋の東亜学園（東京）、平成5年、三冠達成の釜利谷高（神奈川）、平成7年、8年インターハイ連覇の鎮西（熊本）、ダンディ馬場のコンスタントな法政大二高（神奈川）、野人新藤の率いる宇部商（山口）、智将茂木の深谷（埼玉）など。

更にこれらのチームの存在をより鮮やかに浮き彫りにしたチームとして、29回春高で宿願の全国制覇をした壬生の岡谷工高（長野）、斉藤の石川県工高（石川）、佐々木の東北高（宮城）などがあげられる。

一方、女子に目を転じると、昭和23年から25年の渡辺の率いる中村高（東京）の三連覇が飛び込んでくる。そして鬼才鈴木紋吉の豊橋東高（愛知）、小島、佐藤と名監督でつないだ四天王寺高（大阪）、それに稲山の久喜（埼玉）と合わせて「高校女子バレー界の四天王」と称せられた。中でも昭和42年、埼玉国体決勝で見せた豊橋東の地元久喜高に対する奇跡の逆転劇は、後世まで語り草になるほど、勝負師達のあやなす名勝負の数々は、今でも多くのバレーファンに語り継がれている。

この4強も現在生き残って存在感を示しているのは、平成10年春現在、四冠中の四天王寺高だけ。

「4強」のその後の時代をつくったのが、三屋・大林など名選手を輩出した菊間の率いる八王子実践高（東京）だ。昭和48年には女子バレー界初の「3冠」に輝いている。その後女子バレーの三冠は、南元の成安女高（京都）が55年に、62年には中津南でも全国制覇している魔術師大木が率いる扇城高（現東九州龍谷高）、平成9年に四天王寺高が達成しているが、情報化時代を反映して優勝旗の動きも一定していない。時には、宇都宮女高（栃木）、高見の氷上（兵庫）、高木の就実（岡山）、徳丸の博多女高（福岡）、国分の古川商に移動したり、時には共栄学園（東京）、国学院栃木（栃木）、九州文化学園（長崎）、帝国女子（現国際滝井→大阪）と、各地を転々としている。中でも第16回・17回の春高の連覇を含む全国大会四回優勝の古川商の活躍のイメージが強烈な残像として人々の脳裏に焼きついている。

強化

強化の面での節目は

昭和37年ＮＨＫ杯全日本選抜優勝大会に高校選抜チームが参加

昭和39年第1回アジアユース大会（ソウル）で男女優勝

昭和43年日本協会主催の日韓高校交流競技

昭和48年全日本高校選抜チームの中国遠征

昭和49年第1回全国高校強化合宿
第1回環太平洋高校選手権

これらの行事及び大会を経て競技力向上を図ってきたが、環太平洋高校選手権は第9回まで続いて高校生の目標になっていた。また現在も継続して開催されている春高後の全国強化合宿は、毎年行われている全日本高校選抜チームの編成に重要なかかわりをもち、世界的視野をもった優秀選手の育成に寄与している。それに加えて、各ブロック単位で毎年実施している長身者合宿も埋もれた人材発掘に大きく寄与していることも書き記さねばならない。

なお、平成元年より隔年で開催されている世界ユース大会においては、平成9年までに5

回の大会を数え、男子・銀メダル（第3回）、銅メダル（第4回、5回）、女子・金メダル（第4回）、銀メダル（第3回）の成績を収めているが、第4回大会の女子金メダルは特筆に値する。

ルール

ルールの歴史の編成は

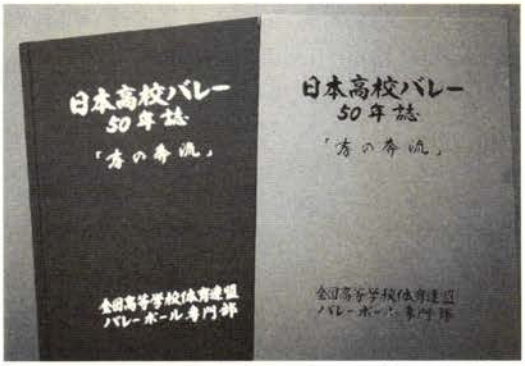
①9人制より6人制への移行（昭和38年）
②ネットの高さ
　男子2m25cm→2m30cm（34年）→2m40cm（54年）
　女子2m05cm→2m15cm（34年）→2m20cm（54年）
③昭和40年ブロッキングのオーバーネットが許される。
④昭和52年アンテナはサイドバンド上に。ブロックボールは4回までプレーが可能に。
⑤平成10年度より（春高は第29回大会より）
　低身者のバレー離れを防ぐためと、長身者の育成のための意味をこめた「リベロ制」を採用

このように様々な工夫がなされて競技が発展している。

そして今‥‥これから‥‥

近年のバレー専門部の大きな特徴は広報活動の充実であろう。平成7年度より広報委員会を正式に発足させ、初代委員長にバレー界の異端児岐阜の水野繁昭を粥川部長が登用した。初仕事は広報紙「春の詩」の発刊である。創刊号は平成8年1月、全国登録チーム約8000校に配布され1万部の印刷をみた。現在まで第6号を数え、バレーニュースを独創的な視点でとらえた文章タッチは大好評。時には地方専門部の規約改正の契機になったりもしたし、リベロ制導入も広報紙でとりあげた低身長の叫びがその採用の動機になるほどである。

そして広報委員会の集大成は、日本高校バレー50周年誌「春の奔流」の発刊である。各都道府県専門部の50年の歴史や、歴史の名将たちの生き様・哲学・教育理念を書き記した内容と重量感は圧巻で、「バレーボールのバイブル」ともいうべき出来映えとなった。平成10年3月22日東京で行われた、これまでの全国高体連専門部発展に寄与した役員、指導者を集めた記念式典の参会者に記念品としても贈呈され、関係者に大いに喜ばれた。なおこの記念誌は全国各高校にも5200余冊予約発売され、人気低迷がささやかれている日本バレー界にあって、人気回復のためのカンフル剤として期待されている。



創立50周年記念事業として出版された「春の奔流」は600ページにもの大著
「バレーボールのバイブル」ともいうべき記念誌になった

今後のバレー専門部がかかえる問題点、課題といえば、競技人口の減少、とりわけ、中学校男子のバレー離れの現状を考える時、それと連動する男子の見通しは厳しいものがある。

もう1つは、バレー人気の「最後の砦」ともいうべき「春高バレーの存続問題」である。第30回までの見通しは立っているが、それ以後どうなるか、どうするか「自助努力という名の素手」で企業戦略と視聴率という魔物と戦わねばならない専門部の苦悩は深い。第30回以降は思い切ったスタイル変更でこの難関に立ち向かうしかないのでないか。専門部スタッフは勿論のこと、日本高校バレー関係者の一致団結が望まれている。

（文責　広報委員長 水野 繁昭）

日本高校バレーボール界戦後50年を彩った名将たち

（全国優勝5回以上、全国大会出場回数50回以上など）

男子指導の部

石田　時郎
（東海大四高＝北海道）

春藤　英徳
（弘前工高＝青森）

中村　四郎
（中大附属高＝東京）

黒田　裕
（藤沢商高＝神奈川）

馬場　信親
（法政大二高＝神奈川）

柳川　賢
（藤嶺藤沢高＝神奈川）

上野　尚志
（大商大附高（現大商大高）＝大阪）

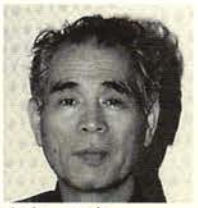
稲葉　正文
（崇徳高＝広島）

吉川　渉
（崇徳高＝広島）

新藤　精二
（宇部商＝山口）

茂木　進一
（深谷高＝埼玉）

女子指導の部



大木　正彦
（中津南高・扇城高（現東九州龍谷高）＝大分）

徳丸　順庶
（博多女商高＝福岡）

高木　直紀
（就実高＝岡山）

高見　諭
（氷上高＝兵庫）

小島　孝治
（四天王寺高＝大阪）

佐藤　忠明
（四天王寺高＝大阪）

南元　昭治
（成安＝京都）

鈴木　紋吉
（豊橋東高＝愛知）

菊間　崇祠
（八王子実践高＝東京）

渡辺　泰行
（中村高＝東京）

稲山　壬子
（久喜高＝埼玉）

国分　秀男
（古川商高＝宮城）

《事務局》

〒464-8540 愛知県名古屋市千種区若水3-2-12
愛工大名電高校内
TEL 052（712）0481
FAX 052（712）0481

創　　立：昭和25年8月

加盟校数	男　子	4,016校
	女　子	3,404校
	合　計	7,420校
部員数	男　子	44,937名
	女　子	23,114名
	合　計	68,051名

年度	部　長	副部長	記　事
25	後藤　鉀二	茂木　義男	第1回専門部会議
			個人戦始まる
26	〃	〃	
27	〃	〃	個人戦中止
28	〃	〃	シングルス復活
29	〃	〃	ダブルス復活
30	〃	〃	
31	〃	土屋　重徳	
32	〃	〃	
33	〃	〃	スポンジ･マジックラバー禁止
34	〃	〃	
35	〃	〃	渋谷浩三冠王に
36	〃	〃	山中道子三冠王に
37	〃	〃	梨本甫三冠王に
38	高屋　定由	〃	後藤鉀二氏名誉会長
39	後藤　鉀二	安藤　朗市	
40	〃	〃	団体戦試合形式変更
41	〃	後藤　淳	
42	〃	〃	男子スエースリング方式
			女子コービロン方式
43	〃	安藤　朗市	女子のみ一部変更
			内藤良司三冠王に
44	〃	〃	渡辺道子三冠王に
45	〃	〃	金沢光彦三冠王に
46	〃	〃	団体戦1複6単に
			第一回訪中
47	〃	〃	後藤鉀二氏逝去
			後藤淳部長代行
48	後藤　淳	〃	

年度	部　長	副部長	記　事
49	後藤　淳	安藤　朗市	松井慎二三冠王に
50	〃	〃	ルール改正促進制定
			専門部促進ルール制定
51	〃	〃	
52	〃	〃	
53	〃	〃	
54	〃	〃	渡辺武弘三冠王に
55	〃	市川　三男	訪中再開報告書発刊
56	〃	〃	斉藤清三冠王に
57	〃	〃	
58	〃	〃	
59	〃	吉成　照夫	団体戦1複4単変更
			渋谷浩三冠王に
60	〃	〃	渋谷浩三冠王に
61	〃	松本　章二	専門部年報発刊
62	〃	〃	
63	〃	〃	佐藤利香三冠王に
			欧州遠征始まる
元	〃	〃	団体戦日本式復活
			訪中団一時中断
2	〃	〃	
3	〃	〃	訪中再開
4	〃	〃	
5	〃	〃	村上裕和三冠王に
6	〃	〃	遊澤亮三冠王に
7	吉崎　久治	〃	
8	〃	〃	
9	松本　章二	植松　克己	武田明子三冠王に
			武田明子･川越真由3年連続ダブルス優勝
10	〃	〃	

1 沿 革

◎ 高校選手権

高校選手権の前身は、昭和3年に行われた東郷旗争奪戦に始まっている。

主催は全国卓球連盟で、全国学生生徒卓球選手権大会とし、第一部が大学・専門学校、第二部が中等学校男子、第三部が高等女学校で各部の優勝チームに持ち回りの東郷平八郎元帥揮毫による優勝旗が授与された。

東郷平八郎元帥揮毫による優勝旗

試合形式も3人7シングルス戦で、エースは3回、他の2人は2回出場し、4点先取で行われた。オーダーによっては当然の事ながら同じ対戦が随所にみられたようである。

昭和13年にハンガリーのサドバスとケレンが来日し、一枚ラバーが紹介され、ヨーロッパ式の卓球の威力が認識され、ルール改正もあって翌年から団体戦の形式が1複4単のコービロン形式に変更された。

太平洋戦争が始まると「卓球は敵国の競技」のレッテルを貼られ禁止された。昭和20年8月敗戦のショックで国民の殆どが呆然自失の状態であったとき、「いつまでも滅入った状態では発展がない。せめてスポーツだけでも楽しく」と後藤鉀二等の推奨で卓球選手権大会が復活された。終戦の翌年、昭和21年に東京王子（現北区）の日本フェルト株式会社の体育館で実現した。

昭和22年にルール改正があり、1複4単は変わりないが、3番の複は1・2番に出る者で組んではならず、前半の者と後半の者とで組むか、後半の2人で組むか、もしくは複だけに出る者で組む日本式団体戦が確立した。

昭和23年には学制改革があり新制高校ができると、旧制中学6年生ができた。

メンバーにも残った者もおり、学制改革に伴って大会そのものの見直しが考えられるようになった。昭和25年8月、京都の同志社大学体育館で行われた第19回大会の折、後藤鉀二・石田義男・茂木義男等が中心となって、全国高体連卓球専門部の結成の話し合いが持たれた。その年に関東・関西の有志が名古屋電気高等学校に集まり、いよいよ卓球専門部の結成が実現した。

専門部結成に尽力された
故後藤鉀二先生

◎ 真の高校選手権大会の実現

卓球専門部の結成に伴って高校生だけの大会を実現すべきであるとの要求があり、記念すべき第1回の大会が、年末の12月25日～27日に東京城北体育館で開催された。既に団体戦は行われていたので、この大会は個人戦だけであった。

卓球専門部の発足もスムーズに行われたかに見えたが、翌26年に学校対抗戦を7月に名古屋の金山体育館で、個人戦を12月に神戸市王子体育館で行ったが、文部次官通達により「高校生の全国大会出場は年1回とする」との厳命があって、翌27年の個人戦を断念せざるをえなかった。翌28年は、団体戦とシングルスを同一大会として試みに行ってみたが実現でき、文部次官通達をクリアーできた。

惜しむらくは、26年の女子シングルスで1年生ながら優勝した楢原静世選手は、28年にも優勝しており、27年の個人戦が実施されていたら、前人未踏の3年連続優勝の金字塔が打ち立てられたであろうと思われ、本人はもちろんのこと、関係者も残念に思ったであろう。

昭和39年に、可能な限り全種目を1都道府県で開催する方針となり、高校総体となった。総体になったことで、当然の事ながら規模縮小の問題が浮上し、卓球専門部でも高体連の方針に従わざるをえず、今日のような出場数の制限が余儀なくさせられた。

◎　試合形式と用具の変遷

前述の如く、初期の団体戦は3人で7シングルスを戦うので、同じ対戦になるケースが随所にみられたり、ラケットの制限もなくほとんどがコルクを貼ったラケットであったが、昭和13年に来日したサドバスやケレンによって紹介された一枚ラバーの威力は大変なものであった。それを機に国際方式の試合形式に変更した。即ち、3番にダブルスをおき、1・2の前半と4・5の後半をシングルスとして、ダブルスには誰が出ても良く、最強メンバーを組むなら1・2番にエース格をおいて、エース格でダブルスを組んで対戦する事もできた。

次いで、終戦間もない昭和22年にはダブルスに出る者は1・2番で組んではいけなくなり、前半の1人と後半の1人とで組むか、後半に出る者で組むか、或いはダブルス専門に出る者で組むかの選択制にした。

昭和33年までは用具の制限がなく、どの様なラケットでも良し、またラバーを貼っても良

烽ｱでも良く、10mmのスポンジラバーや生ゴムのマジックラバー等も使われていたが、日本選手が世界選手権に勝ったことから、「日本の選手はスポンジラバー等の用具で勝った」との批判を浴び、スポンジやマジックのラバーが禁止された。それに代わって現在多くの選手が使っている表ソフトや裏ソフトラバーが世界的に流行していった。しかし、ラバーの厚さに制限が加えられ、スポンジとラバーのそれぞれの厚さが2 mm以下で合計の厚さも4 mm以下に制限された。

昭和42年には、一時期世界のトップにあった日本の卓球が低迷したことを憂い、真に強い選手を養成する為には少数精鋭が望ましいとして男子は3人で編成し9シングルスを戦ういわゆるスウェースリング方式を、女子は2人～4人で戦うコービロン方式を採用して、高校生からの選手強化策がとられた。

スウェースリング方式は、ＡＢＣチームとＸＹＺチームとし、対戦順序はA：X，B：Y，C：Z、B：X，A：Z，C：Y、B：Z，C：X，A：Yとなる。コービロン方式は1複4単は変わらないが、1・2番をオーダーし、結果が出たところでダブルスのメンバーを示す。また、4・5番のシングルスの選手をオーダーする、というものである。

従って、コービロン方式では強い選手が2人いれば勝てることになるので、各校では2人の選手を育てれば良いわけだから効率の良い選手育成と考えられた。

しかし、これらの方式は学校対抗にはふさわしくないとの批判が相次ぎ、特に女子に批判が集中した事から、翌年には変更せざるをえなかった。若干の手直しであったが、4人で編成する形になった。すなわちA：X，B：Y、AC：WY、D：X，B：Zという対戦順序に改められた。

男子のスウェースリング方式も高校生の学校対抗戦には無理があるとの見地から批判が出て昭和46年には男女共団体戦形式が見直された。

編成は5～8人で1番にダブルスをおき2～7番をシングルスとして、ダブルスに出る者は2～6番のシングルスにも重複して出場でき、7番に出る者も2～6番のシングルスに重複して出場できる形である。

卓球は1点を取るのに時間が掛かりすぎるとの批判があり、特にラリーによる時間よりも、インターバルの時間が長い。ラリーによるものでは昭和8年の青森中学と青森商業との決勝戦で宮川顕次郎：今孝の対戦で延々5時間の熱戦が有名であるが、翌年には時間制限が設けられ1試合1時間以内で打ち切りとなり、その時点で得点の多い方を勝ちとするというルール改正があったが、近年の卓球はインターバルに長く時間が掛かっている。これを是正するために昭和52年に、ジュースを除いて1セットを15分以内で勝負をつかせる促進ルールが設けられた。これはサーバーがサービスを出してからレシーバーが13本のリターンに成功する迄に得点しなければレシーバーの得点になるもので、これにより相当の時間短縮が実現し、スポーツらしい時間的スピード感がみられるようになった。もちろん途中の失策は失策した者の失点となる。

◎　戦後の日本の卓球界

戦前の卓球もかなり高い技術があったようであるが、太平洋戦争そして敗戦という痛手から戦後の日本の卓球界はそれほど高い評価はなかった。それが昭和27（1952）年のボンベイ大会で佐藤博治が男子で初めて世界チャンピオン

となり、次いで荻村伊智朗・田中利明・長谷川信彦・伊藤繁雄・河野満そして1979年の平壌大会での小野誠治の優勝まで、世界チャンピオンが7人おり、女子も1956年の東京大会で大川とみが初めて優勝して以来、江口富士江・松崎キミ代・深津尚子・小和田敏子の5人の世界チャンピオンが誕生している。

ダブルスでも男子では藤井則和・林忠明組、荻村伊智朗・富田芳雄組、荻村伊智朗・村上輝夫組、星野展弥・木村興治組がおり、女子では西村登美江・楢原静世組、難波多慧子・山泉和子組、松崎キミ代・関正子組、森沢幸子・広田佐枝子組、ルーマニアのアレキサンドルと組んだ浜田美穂、高橋省子等がいる。

混合ダブルスでも荻村伊智朗と組んだ江口富士江と松崎キミ代、木村興治・関正子組、長谷川信彦と組んだ山中教子と今野安子等がいる。

しかし、1979年平壌での小野誠治以来メダルがなくなり二流・三流のレッテルを貼られた。以来18年を経過して平成9年マンチェスターにおいて、渋谷浩・松下浩二組が3位に入り、やっとメダルを獲得した。

このような惨めな時代が、高体連の規模縮小の時期と相まっているように思われるのは僻目であろうか？

◎　日本卓球界における高校生の活躍

世界の中において、かつての面影が無くなった日本の卓球界にあって、高校の指導者は多くの憂いを持って選手の指導に当たっていた。専門部でも現状の打開策を常に検討していたが、環境が許す限り選手強化を実施する事が急務との結論に達し、とりあえず有望選手を中国に派遣し、世界で通用する技術の習得と練習の方法を学ばせる事から始まった。また、指導者の養成も大切なものとして、心ある教員を機会ある毎に中国に派遣した。このような事は受け入れる中国にとっては大変迷惑なことであろうが、「故後藤鉀二先生の恩に報いる」との中国卓球協会のご好意に甘んじて実現した。

その成果もあったと思われるが、国内で最も権威のある全日本卓球選手権大会での女子シングルスで群馬県前橋東高等学校の星野美香選手が高校生ながら、昭和58・59年と連続して一般の強豪を抑えて優勝したことや、平成4年には女子ダブルスで白鵬女子の大柿柴保・河野文江組が仙台育英学園の益田誌保・米倉知子組を破って初優勝し、更に平成5年には益田誌保・米倉知子組と大柿柴保・河野文江組が再び決勝まで進み、益田誌保・米倉知子組が雪辱をはたし、2年連続で高校生チャンピオンが誕生するという輝かしい記録を打ち立てた。

このような活躍も低迷する日本卓球界にあっては一つの朗報である。これも一重に本人達の努力と各学校の指導者の努力の結晶であろうが、一つには卓球専門部の強化方針と指導者養成の成果の現れであろう。しかし、全体的に弱くなった日本の卓球界でのでき事であるので手放しでは喜べない。が、これをバネにして世界にはばたいて欲しいものである。

強化対策の一環として、昭和63年度より日本卓球協会からの派遣で欧州遠征が実現した。欧州各国は早くからジュニアオープンを実施し、世界各国から大会参加を受け入れて、若年層の強化を図っていた。遅ればせながら日本もこの大会に参加できるようになり、毎年好成績を残し、高校生の強化として大いに評価できる。これによって大いに自信をつけた事であろう。

平成2年6月　ハンガリー・カポスバルにて
男子優勝の左から鬼頭・今枝、後ろは田村監督

昭和63年に始まった訪欧は、確かに選手への影響は大きかった。欧州での成果が大きかっただけに、中国での惨めな負け方に目を逸らせ、専門部の目は欧州へと向けられ、訪中を一時見合わせた。しかしやはり中国の技術は見逃せず、中国卓球協会へお願いして再開させていただいたのが平成3年である。これも「故後藤鉀二先生」のお陰であろうと思われる。

訪中にさきだち、その年に島原の雲仙岳爆発に伴う長崎県への義援金募集と共に、中国においても大洪水が発生したとの報道を受け、併せ

て義援金を募集したところ、40数万円の募金が集まり、再開された訪中団に託し中国卓球協会に寄託したところ、その事が中国スポーツ新聞に掲載された。ここに全文を載せて報告する。

日本高中生乒乓球代表团来华访问

为灾区捐款40余万日元

本报讯 日本高中生乒乓球代表团一行14人8月14日到达北京。当晚，国家体委副主任、中国乒协主席徐寅生会见了代表团全体人员。

日本高中生乒乓球代表团是受亚乒联盟主席日本高中体联乒乓球部部长后藤淳的派遣来华访问的。日本乒乓球界对中国人民充满着友好之情。在今年7月份举行的日本高中生乒乓球锦标赛和日本高中教师乒乓球锦标赛期间，参赛人员从日本报纸上得到中国南方部分地区发生严重水灾的消息，他们自发进行募捐，参赛的教师、高中生和观众纷纷响应，共集得捐款43万2千日元，这次由代表团团长松本章二转交给国家体委。徐寅生代表国家体委感谢日本乒乓球界对中国人民的友好之情。（王亦君）

〔訳〕「日本高校卓球訪中代表団

被災地区に40万円余の義援金を寄せる

日本高校卓球代表団一行14人は8月14日北京を訪問し、当夜、国家体育委員会副主任で中国卓球協会主席の徐寅生氏と代表団全員が会見した。日本高校卓球代表団は、アジア卓球連盟主席・日本高体連卓球専門部部長の後藤淳氏の派遣により訪中したものである。

日本卓球界は中国人民に対して溢れんばかりの友好の情を抱いている。今年7月（8月の誤り）に開催した全国高校卓球選手権大会と全国教職員卓球選手権大会の期間中に、中国南部において大水害が起こったというニュースを新聞紙上で知るや、関係者は自発的に募金活動を行った。両大会に参加した選手役員・観衆がこれに呼応し併せて43万2千円の募金を得た。そして、今回、松本章二団長によってこの募金が、国家体育委員会に手渡された。

これに対して、徐寅生氏が国家体育委員会を代表して、日本卓球界の中国人民への友誼の情に対して感謝の言葉を述べた。」

平成3年訪中団一行

（文責　全国高体連卓球専門部参与 和田正男）

2　卓球専門部が目指すもの

◎　卓球専門部を取り巻く環境

近年の国内情勢としては、競技人口の減少傾向、指導者の意欲喪失、社会体育と学校体育の融合（接点）と共存、などが挙げられよう。

これらに対して日本卓球協会は、1998年6月に強化対策本部と普及対策本部を設置した。強化対策本部は特に秀でた高校選手数名を各種国際大会に参加させ、その経験を生かして次期世界選手権大会やオリンピックの上位進出を目指すためのものである。また、普及対策本部は小学5年より高校3年までの優秀選手に対する長期的企画に基づく指導を実施し、5年～10年後の日本卓球界を代表する選手の育成を目指すとともに、選手養成に意欲と能力のある数少ない指導者に、研修や講習の機会を与えて、その資質の向上と情熱を蘇らせることを目指したものである。

一方、国際情勢としては、世界選手権大会やオリンピックに対する考え方の検討が求められる中で、日本においても高体連が国際競争力を持つ選手の育成、すなわち各種競技団体の強化対策事業の一翼を積極的に担ってきていると言えよう。

また、中国・韓国及び欧州各国選手に顕著であるが、卓球競技の国際大会における若年化の傾向はますます進んでいる。諸外国の選手の育成状況を見るに、学校体育（インターカレッジ・インターハイ・全国中学校大会）で育てるのではなく、クラブチームもしくはプロ選手の中での育成が図られている。あるいは社会主義国家での国策の一環として、潤沢な国家予算による育成が行われている。

◎　日本スポーツ界の歩むべき道

まずスポーツ体育行政の機構の有機化、一元化すなわち文部省・体育協会・オリンピック委員会の縦割り機構を改善する必要があろう。

また、サッカー籤による新しい財源の活用目的について、諸外国の例等を参考にして、生涯スポーツ事業と強化対策事業とに予算配分を明確化すべきであろう。

さらに各種競技団体（社会体育）、全国高体連各専門部（学校体育）、日本中体連各専門部（学校体育）が個々に事業目的を持つのではなく、一体となって選手減少の傾向に普及対策で歯止めをかけ、併せて国際競争力の増進を強化対策で進める必要があろう。

◎　卓球専門部の歩むべき道

1　文部省が規制緩和の一環として文部次官通達廃止を打ち出したことに、いかに対応するかが問われている。全国高体連の立場を見失うことなく、前向きに進むことを望んでいる。新たな権利に対して、規制ではない新たな義務が伴うものと理解している。

2　日本卓球協会が指導的立場に立ち、日本卓球リーグ（実業団）・日本学生卓球連盟・全国高体連卓球専門部そして日本中体連卓球専門部がそれぞれの殻を破り一体となって、強化対策本部と普及対策本部の新事業に深く参画することが求められている。高体連が各対策本部や委員会に参画することにより、グローバルな視野に立って適切な専門部の運営が可能になるであろう。

3　近年、女子選手の減少が特に激しい。普及事業と広報活動を積極的に進めなければならない。また、事業内容（試合方式・大会運営等）の検討も実施しなければならない。特に国際ルールの改正に伴う試合方式の改正は急務と思われる。

4　本専門部の機構を改め、21世紀に向かって大きくステップできる体制をつくりたい。

5　選手育成事業の充実については、日本卓球協会の協力を得て、上位８名以内に留めて実施していた強化合宿等の事業に、上位16名及び各ブロックの埋もれた優秀選手を加えることが望ましいと考える。もちろん選手の戦型・用具等を考慮に入れる必要もある。

また、日本体育協会・日本卓球協会主催の各種国際大会、強化事業へ積極的に参加したい。

6　指導者養成事業については、従来強化委員会中心で実施してきたものを、元世界チャンピオンや国外の優秀な指導者（中国協会等のＮＴコーチ）等の協力を得て、技術面のみならず精神面の指導に関する講習も行い、内容を充実させたい。なお戦型・戦術・戦略等の各研修会を実施して、その効果を挙げることにも配慮したい。

さらに国際大会に指導者を派遣し、応援を兼ねた研修を実施することも、効果は少なくない。

7　上記５・６の経費については、主として全国高体連からの新たな財源を充て、不足分は日本卓球協会および各都道府県卓球協会（連盟）の補助金に依存することを希望する。

（文責　全国高体連卓球専門部部長　松本章二）

《事務局》
〒206-0025 東京都多摩市永山5-22
都立永山高校内
TEL 042（374）9891
FAX 042（371）5615

創　　立：昭和25年5月

加盟校数		3,696校
部員数	男子	42,805名
	女子	51,977名
	合計	94,782名

年度	部長	副部長	記事
25	安藤 星洲	林 岩雄	部の結成・規約作成
	（25～29）	長谷川 孝	
26	〃	〃	選手権大会に学校対抗導入・文部大臣旗作成、選手権者には伊勢神宮旗を授与
28	〃	〃	東西対抗戦を実施
30	林 勘二	〃	参加組数の6組化（一部8組、従来は8組）
	（30～31）		
31	〃	〃	顧問制度の導入
32	松平 登	林 岩雄	東・西選手権大会廃止
	（32～42）	西川 弘之	天皇・皇后杯に初参加
34	〃	〃	高校教員による審判の実施
			創設10周年記念式典
			全国大会に国庫補助金の初支出
37	〃	〃	出場組数の10組化（一部12組）
39	〃	〃	全国高校総合体育大会としての初実施
40	〃	〃	日韓高校親善競技会の実施
			皇太子・同妃殿下の高校総体軟庭競技ご観戦
43	林 岩雄	小川 寧治	日韓高校スポーツ交歓
	（43～47）	西川 弘之	競技会に参加
44	〃	〃	出場組数の8組化（一部10組） 創設20周年記念式典
46	〃	小川 寧治	皇太子・同妃殿下の高
		桂 哲	校総体軟庭競技ご観戦
47	小川 寧治	〃	日韓交歓会に女子参加
	（47～52）		
48	〃	小沢洋太郎	幹事の設置
		桂 哲	
50	〃	〃	日本軟式庭球連盟の財団法人化
			全日本高校団体選抜大会の初実施
51	〃	〃	日韓交歓会の終了
52	〃	〃	皇太子・同妃殿下の高校総体軟庭競技ご観戦
53	小沢洋太郎	松井 章	出場組数の6組化（一
	（53～58）	桂 哲	部8組）
			敗者審判制の導入
			日韓米高校大会の開催
54	〃	〃	創設30周年記念式典
55	〃	〃	全国大会優勝旗を新調日本・中華民国親善試合（男子）を主管
56	〃	〃	日韓ジュニア親善競技会に参加
59	桂 哲	松井 章	団体選抜大会の名古屋
	（59～60）	金重 操	開催の恒常化
	松井 章	網中 正昭	
	（60～61）	伊野 二彦	
元	網中 正昭	西塔 克美	創設40周年記念式典
	（62～平元）	伊野 二彦	
3	西塔 克美	清水 敏男	ユニホームのカラー化
	（2～3）	伊野 二彦	とゼッケンの背中着用
4	伊野 二彦	堀田 壽一	専門部名をソフトテニ
	（4～6）	大木 弘寿	ス部に変更
5		田島 正夫	第1回日韓中ジュニア
		大木 弘寿	交流競技会に参加
6		〃	国際ルールに移行
8	堀田 壽一	〃	日韓中ジュニア交流競
	（7～8）		技会の長崎開催
9	田島 正夫	大木 弘寿	登録制度の導入検討
	（9～）	二宮 金吾	
10	〃	〃	

1 沿革概要（昭和 25 ～ 62 年度）

昭和 24 年の東京国体後に組織結成の協議が行われ、我が全国高体連ソフトテニス（平成 3 年度までは軟式庭球）部は、昭和25年度から活動を始めた。既に日本軟式庭球連盟（以下「日連」という。）によって、全日本高等学校（当初は中等学校）軟式庭球選手権大会が終戦の翌年（昭 21）から実施されていた。パイオニア的な先生方がその運営に参加し、次第に中心的役割を担うようになる中で、教員による全国規模の組織結成の必要性が痛感された結果であろう。

昭和 54 年刊行の当専門部「創設 30 周年記念誌」で、組織発足当初から役員として活躍されてきた小沢洋太郎部長は「全国高体連軟式庭球部 30 年の歴史は、概略 10 年ごとに分けて、第 1 期は基礎確立期、第 2 期は主体性確立期、第 3 期は反省・再検討期と言うことができるのではないでしょうか」と記されている。

第 3 期の定義づけに関しては、高校総体自体の規模拡大の中で、当専門部は規模適正化を強く求められ、断腸の思いで出場組数を削減（各都道府県とも 2 組減）せざるを得なかったこと、白一色に統一されていたテニスウエアーのカラー化という新しい事態への対応、応援の集団化と教員以外のコーチの指導、選手のマナーの変化などの諸問題が生じてきたからであろう。

国際化の動きとしては、昭和 40 年度に韓国から男子 5 組・女子 7 組の選手団が来日し、5 か所で親善試合が行われたのが、記録に残る最初のものである。昭和 43 年度からは、日韓高校スポーツ交歓競技会に高校総体団体戦優勝校が参加することになった。この競技会が昭和 51 年度で終了すると、日連主催等で韓国、台湾、ハワイ等の高校生との交流が実施されたが、昭和 56 年度以降は日韓ジュニア親善競技会に参加することになった。

団体選抜大会は昭和 57 年度から実施され、第 10 回大会まで会場は一定しなかったが、昭和 61 度から名古屋開催に落ち着いた。

高校総体については、小沢部長時代に当専門部と開催地の連携による大会運営が定着し、現在に至っている。また、この時期には、部長と副部長を管理職とする申し合わせも行われた。

創設 30 周年頃までは、各ブロック代表の常任委員は、同一人物がかなり長期間勤めていたが、その後はブロック内のローテーションで 2 ～ 3 期で交代するようになった。各都道府県の専門委員長の在職期間も短縮化傾向となり、より多くの先生方が組織運営に関わるようになった。また、創設 30 周年以降の約 10 年間は生徒急増期と重なり、部員数の増加にも著しいものがあった。従って、小沢部長以降の約 10 年間は、拡大充実期と命名することができよう。

＜松本大会（昭和 52 年）をご観戦される皇太子殿下と同妃殿下（当時）＞

次に、昭和62年度頃までに活躍した選手・学校の一部を記しておく。（数字は年度）

◎個人選で 2 連勝した選手

＜男子＞

鳥井久充（三重・木ノ本中）22 ～ 23　藤田康夫（兵庫・龍野高）26 ～ 27

＜女子＞

右近美沙子（広島・広島女高）32 ～ 33　影山洋子（同上）34 ～ 35　文違菊代（千葉・成田高）52 ～ 53　稲田増美（福岡・中村学園）62 ～ 63

◎団体戦の連続優勝記録

＜男子＞

4 年連続　石田学園山陽高校（広島）36 ～ 39　明星高（大阪）41 ～ 44　3 年連続高田商業（奈良）58 ～ 61　2 年連続　石田学園山陽高校（広島）33 ～ 34　鹿児島商業（鹿児島）47 ～ 48

＜女子＞

6 年連続　広島女子商業（広島）30 ～ 35　3 年連続　成田高（千葉）51 ～ 53　2 年連続　淑徳高（愛知）27 ～ 28　富士見丘高（東京）36 ～ 37　広島女子商業（広島）42 ～ 43　淀之水高（大阪）55 ～ 56、58 ～ 59

（文責田島正夫）

2　10年の歩み

＜昭和63年度＞

第1回常任委員会（7・8岸記念体育館）
全国委員会（7·31神戸市勤労会館）

- アジアソフトテニス連盟設立に伴う維持会費50万円を本部3万円、各都道府県1万円の負担で納入することを承認した。
- 部創設40周年事業（式典・表彰・顧問招待、記念誌発行）の来年度実施を決定した。
- 来年度から全日本総合選手権大会に男女各8組の参加が認められたことが報告された。（従来は4組）第2回常任委員会（12·7新宿区立教育センター）
- 創設40周年事業の細案を検討した。
- 部長、副部長の高校総体における役職を変更した（部長＝副会長→大会委員長）
- 日本軟式庭球連盟（以下「日連」という）への高体連選出理事が、2名から1名になるとの報告が行われた。

＜平成元年度＞

第1回常任委員会（7・10高松市役所）
全国委員会（8・1同上）

- 国際大会協力金として、高校生も全国大会出場者は1人200円を負担することが承認された。
- 役員改選について、各ブロックで話し合いを行ったうえで、12月1日に推薦委員会を開いて決定することになった。

創設40周年記念式典の挙行（8・1同上）
第2回常任委員会（12·1群馬県伊香保町「福一旅館」）

- 国際大会協力金の支部分担金として高体連は15万円を負担すること、団体選抜大会出場校への日連からの補助金2万円が来年度から打ち切られることが報告された。
- 創設45周年記念行事に向けて、基金の積立て（毎年5万円）を行うことを検討した。
- 国際大会協力金を個人戦1組400円、団体戦1校1,200円に修正するとともに、支部分担金支払いのため、都道府県協力金を5千円増額することを検討した。
- 役員推薦委員会から提案された平成2～3年度本部役員案を承認した。

＜平成2年度＞

第1回常任委員会（7·10ホテルリッチ仙台）
全国委員会（7·30三井アーバンホテル仙台）

- 都道府県協力金の値上げ、国際大会協力金の修正、団体選抜大会出場校への補助金削除、参加料等について確認した。
- 団体選抜大会会場地等について、大会を恒常的に発展させていくという観点に立って、今後も検討することを確認した。
- ユニホームのカラー化と背中のゼッケン着用（胸マークの廃止）を承認した。

第2回常任委員会（11·30五反田「ゆうぽうと」）

- 全国高体連が高校総体への協賛団体導入を検討していることが報告された。
- ハイスクールジャパンカップの問題点及び日韓ジュニア交流競技会の選手選考につい検討した。
- 平成4～5年の役員改選について検討した。

＜平成3年度＞

第1回常任委員会（7·9富士宮グランドホテル）
全国委員会（8・1同上）

- 団体戦10年以上連続出場校に対して、毎年表彰額を贈ることに表彰細則を改正した。
- 高校総体申込みにおける学校名の略称について、申し合わせを行った。
- 日連の事業方針について、詳細な説明が行われた。
- 平成4～5年の役員を選出した。

第2回常任委員会（12·6「ゆうぽうと」）

- 高校総体への協賛団体の状況が報告された。
- 日連の名称変更（平成4年度から「日本ソフトテニス連盟」）についての報告があり、高体連としての対応を検討した。
- ハイスクールジャパンカップの問題点について検討した。
- ベンチコーチと監督のゼッケン着用について検討した。
- 個人戦において、引率者がベンチに入ってコーチをしてもよいことを承認した。

＜平成4年度＞

第1回常任委員会（7·8宮崎県砂土原町役場）
全国委員会（8・1同上）

- 日連の臨時評議員会におけるソフトテニス5ヶ年キャンペーン等について説明があり了解された。
- 団体選抜大会の長浜ドーム誘致については、今後色々な方面から検討を加えて結

論を出すことになった。
・新ルールに関して日連の状況を更に検討し、対応していくことを確認した。
・都道府県協力金（現行は2万5千円と2万円）を、4万円と3万円に増額することが承認された。
・全国高体連理事会で、当専門部の名称をソフトテニス部とすることが承認されたとの報告が行われた。

第2回常任委員会（12・4「ゆうぼうと」）
・高校総体の協賛団体がコカコーラに決定したとの報告が行われた。
・日連の西村専務理事から新ルール（国際ルール、平成5年1月1日から発効）について説明が行われ、平成6年度から高校も実施する方向で常任委員が努力することを申し合わせた。また、来年3月に臨時常任委員会を名古屋で開催すること、それ以前に新ルール対応委員会を設置して検討することになった。
・団体選抜大会の会場、参加校数等について平成5年度までは現行どおりで実施すること、平成6年度以降は検討委員会を設置して検討することになった。

新ルール対応委員会
（12・27名古屋市「伏見モンブランホテル」）
・平成6年度から新ルールを本格実施するため、平成5年度の団体選抜大会を新ルールで実施することを確認した。
・上記方針実現のため、平成5年2月に臨時全国委員会をもつことを決定した。臨時全国委員会（2・21愛知県立明和高校）
・日連から西村専務理事と小原審判委員会委員長が出席して説明が行われた。厳しい反対意見もあったが、慎重審議の結果、採決することなく、全国委員会として来年度の団体選抜大会から新ルールを導入すること、平成5年度の日韓中ジュニア交流競技会も新ルールで実施すること、シングルは当面見合わせることが承認された。

＜平成5年度＞

第1回常任委員会（7・8黒磯市「原崎公民館」）
全国委員会（7・31黒磯市「ブライダルパレス石山」）
・地区大会補助金の廃止が承認された。
・本年度から「日韓中ジュニア交流競技会」が実施されること、シングルスも行われることが報告され、選手は高校総体1～2位の組と3位同志による代表決定戦勝者とすること等が承認された。
・団体選抜大会出場校数の8校増（24校から32校となる）とそのブロック割りが承認された。
・海外支援のため、各都道府県がラケット10本、ボール5ダース以上を拠出することが決定された。
・高校総体及び団体選抜大会第5位に当専門部長名の賞状を授与することが決まった。

第2回常任委員会（12・4「ゆうぼうと」）
・日連主催の新規大会である全日本ジュニア選手権大会と全日本シングルス選手権大会への高校生の参加について検討した。
・国際発展のためのテニス用具の国際支援は、日連が担当することになったとの報告が行われた。
・個人登録制の導入についての提案がなされたが、継続審議事項となった。
・役員改選手続きの欠落とその対応措置について検討した。
・ルール改正に伴う問題点等について、意見交換を行った。

＜平成9年度　男子開会式＞

＜平成6年度＞

第1回常任委員会（7・8高岡市「富士観ホテル」）
全国委員会（7・30同上）
・創設45周年記念表彰を行った。
・高校総体の引率責任者は当該校の教員とすることが承認され、監督は校長が認めた教職員とすることは継続審議になった。
・海外支援は、日連の方向転換で中断することになったとの報告が行われた。

・学校教育法第１条校以外の団体選抜大会への参加は本年度は認めないが、今後の対応については検討していくことになった。
・団体選抜大会の長浜誘致については、今後も検討することになった。
・団体選抜大会の代表旗の扱いについては、第２回常任委員会で結論を出すことが承認された。
・日韓中ジュニア交流競技会の選手選考について、様々な問題はあるが、従来どおりの方法で行うことが承認された。
・平成７年度からの役員に関し、副部長１名の選考を第２回常任委員会に一任することになった。

第２回常任委員会（12・２「ゆうぽうと」）
・団体選抜大会の参加料を徴収してよいことになったとの報告が行われた。
・団体選抜大会の北海道代表について、南北の２ブロックに分けて１校ずつ選考することとした。
・団体選抜大会の代表旗を新たに作ることはせず、現在あるものの扱いは各ブロックに一任することとした。
・平成７年度から学校法１条校以外の学校の団体選抜大会への参加を認めることとした。
・日韓中ジュニア交流競技会の選手選考方法について検討した。

＜平成７年度＞

第１回常任委員会（７・７出雲市民会館）
全国委員会（８・１同上）
・高校総体への外国人留学生の参加制限について、個人・団体戦ともエントリー数の２０％前後とすることが承認された。
・高校総体の引率責任者は当該校の教員（実習助手を含む）、監督は校長が認めた教職員とすることが確認された。
・規模適正化に関し、平成12年度頃を目途に縮少せざるを得ないとの報告が行われた。
・平成９年度大会から、高校総体個人戦出場者に２級審判員資格の取得を義務づけ、大会実施要項にその旨を明記することが提案され、承認された。
・ゼッケンの適正化について、強い姿勢で臨むことを確認した。

第２回常任委員会（12・１「ゆうぽうと」）
・団体選抜大会において、タイムズアップ等の注意喚起にイエローカードを、警告にはレッドカードを使用することを了解した。
・２級審判員資格の有無のチェックについて検討した。

＜平成9年度　女子開会式　手前のプランターは、福知山市の小・中学生が作ったもの＞

＜平成８年度＞

第1回常任委員会(7･5山梨県石和町スコレーセンター)
全国委員会（７・31同上）
・平成９年度高校総体から、参加料が個人戦2,000円、団体戦18,000円となることが報告された。
・京都総体の２会場方式、個人戦第１日目の４回戦までの消化が承認された。
・団体選抜大会の長浜ドーム開催要望に対し、名古屋での継続開催が承認された。
・審判に対する異議申立てや監督のマナーの在り方に関して、部長から「硬式の審判のようなマナーを身につけさせたい」との要請が行われ、了解された。
・日連からの「中学校・高等学校におけるソフトテニスに関する調査」の依頼があった。
・部長の任期途中での定年退職に伴う役員の補充が行われた。

第２回常任委員会（11・29「ゆうぽうと」）
・高校総体個人戦出場者に２級審判員資格の取得を義務づけ大会実施要項にその旨を明記することは、全国高体連理事会等で不承認となったことが報告された。しかし、当専門部の内部事項として実施していくことを確認した。
・外国人留学生の参加制限について「団体戦６～８名のうち２名まで、個人戦は制限しない」とし、平成10年度から実施することの申請を行うこととした。

＜平成９年度＞

第１回常任委員会（７・４福知山市民会館）

全国委員会（８・１福知山市三段池体育館）

・全国高体連創立50周年記念式典が平成10年11月14日に開催されること、その経費負担、統廃合対象校への特別措置、高校総体への２種目出場、部活動のＴＶ出演制限などについて報告が行われた。

・日連が「ソフトテニス指導要領」を発行したこと、普及教材を配布すること、平成10年度に高校生指導者研修会を開催すること、競技者登録制度検討委員会が設置されたことなどが報告された。

・来年度の高知総体において、競技会場が新たに造成されることになったとの報告が行われた。

・ハーフパンツでの試合出場について、日連から望ましくないとの見解が示されているので、高体連としては認めないこととすることになった。

・創設50周年記念事業として、記念式典、式典への顧問招待、表彰（今回に限り既表彰者も可）、祝賀会の実施、記念誌発行（平成11年12月刊行予定）が了承された。

・平成10年～11年度の役員が選出された

第２回常任委員会（12・５ゆうぽうと）

・全日本ジュニア選手権大会が、来年度からダブルス16組、シングルス32名で実施されることになったことが報告された。

・団体選抜大会の宿泊費を9,000円とすることが承認された。

・日連のユニホーム基準の改訂により、ハーフパンツの使用禁止は本年度限りとすることが了解された。

・競技者登録制度について説明が行われ、日連の西村専務理事をまじえて、質疑と意見交換を行った。

臨時常任委員会（10・3・30名古屋市総合体育館）

・副部長の退職に伴う後任人事について検討し、平成10年７月の第１回常任委員会で決定し、４月に遡って就任してもらうことになった。

・競技者登録制度と高校生指導者研修会について、意見交換を行った。

３　将来に向けて

平成元年度をピークとする生徒急増が終わり、急激な生徒減少の波が押し寄せるとともに、生徒の興味や関心の多様化も加わり、部員数が急減してきている。平成２年度には14万人（男子63,203、女子76,897）を超した部員数が９万５千人弱と32.3%も減少している。従って、部員の確保と普及活動や中高連携の在り方が、今後の重要課題となろう。

次に、ソフトテニスの国際化が進み、オリンピックへの参加運動も行われ始めている中で、他国の競技力の向上が著しく、我が国の高校生の強化が要請されている。特に国際大会では必ずシングルスが行われるため、平成５年の臨時全国委員会でシングルスの導入は当分見合わせるとはしたものの、やがてはその対応を迫られることになろう。当然、高校総体における規模適正化とのからみが出てくる。

第３の問題として、平成８年度の日連の評議員会で導入の方向が確認された「競技者登録制度」への対応がある。本年度その具体案が検討されるが、ソフトテニスの普及発展やマスコミ対応等のために受益者負担は止むを得ないとするのか、学校教育活動における保護者負担の軽減を重視するのか、登録料とその徴収方法や還元の仕方など、今後、共通理解を図らねばならない。

当専門部は来年度、創設50周年となる。今までも様々な問題に直面してきたが、諸先輩のソフトテニスと部活動に対する愛情と奉仕の精神に支えられて、充実発展してきた。我々は微力ではあるが、衆知を結集して、日本で誕生して110年の歴史を持ち、生涯スポーツとしても最適なソフトテニスを通じて、高校生の健全育成のためにできる限り尽力していきたい、と考えている。（文責田島正夫）

＜平成10年度、大会会場　高知市のご尽力で大会直前に完成した人工芝の新しいコート＞

《事務局》
〒214-0038 神奈川県川崎市多摩区生田4-32-1
県立生田東高校内
TEL 044（932）1211
FAX 044（934）4648

創　　立：昭和24年（1949）

加盟校数	男　子	1,365校
	女　子	1,016校
	合　計	2,381校
部員数	男　子	22,055名
	女　子	19,304名
	合　計	41,359名

年度	部　長	副部長	記　事
24	河島武四郎	徳永　陸繁·馬場　太郎	専門部創設
25	〃	〃	全国高校選手権始まる
26	〃	〃	
27	〃	〃	
28	〃	〃	
29	〃	〃	
30	〃	〃	
31	〃	〃	
32	〃	〃	女子7人制になる
33	菅是　敬	〃	
34	〃	〃	創立10周年記念大会
35	〃	〃	
36	〃	〃	
37	〃	〃	日韓親善大会始まる
38	〃	〃	男女7人制になる
39	児玉　九十	〃	創立15周年記念大会
40	〃	徳永　陸繁·村山　寛·山田　計	沖縄女子　初参加
41	〃	〃	
42	〃	〃	
43	〃	徳永陸繁·嶋田新太郎·小袋是朗	
44	〃	〃	創立20周年記念大会
45	徳永　陸繁	嶋田新太郎·小袋是朗·清水　正	
46	〃	〃	
47	〃	〃	
48	〃	〃	全都道府県男女出場
49	〃	〃	
50	〃	〃	
51	〃	〃	
52	〃	嶋田新太郎·清水　正·中西敬一	全国高校選抜大会始まる
53	〃	〃	

年度	部　長	副部長・委員長	記　事
54	嶋田新太郎	清水　正·中西敬一·伊藤和夫	創立30周年記念大会
55	〃	〃	
56	〃	〃	
57	〃	〃	
58	清水　正	中西 敬一·伊藤 和夫·三浦　公	皇太子殿下御台覧
59	〃	〃	創立35周年記念大会
60	中西　敬一	伊藤　和夫·三浦　公·日野　博	皇太子殿下御台覧
61	〃	〃	選抜10周年記念大会
62	佐野　和夫	〃	皇太子殿下御台覧
63	〃	三浦　公·金原　至·平田　幸男	
元	〃	遠藤 健次·金原　至·平田 幸男	創立40周年記念大会
2	須藤　健児	遠藤　健次·金原　至·岡村　久	
3	〃	〃	
4	〃	〃	
5	佐分　正典	住尾　勉·北岡　大覚·岡村　久	日韓中交流競技開始
6	〃	住尾　勉·北岡　大覚·佐藤喜一	創立40周年記念大会
7	高田日呂美	委員長:住尾　勉 副委員長:大川洋司·北岡大覚 佐藤喜一	副部長を委員長制に
8	〃	〃	
9	千野　恒夫	委員長:北岡大覚 副委員長:大川洋司·高橋精一 佐藤喜一	
10	〃	〃	

1 沿 革

ハンドボールの創設

○昭和23年（1948）新学制により高等学校が発足。それに伴い全国高等学校体育連盟が結成。

○昭和24年全国高等学校体育連盟ハンドボール部は、部長に河島武四郎氏（世田谷工校長）副部長に徳永陸繁氏（東京）、馬場太郎氏（大阪）が就任し創設。全国高体連ハンドボール部会則を制定し、事務局を都立世田谷工業高校内に置き発足した。

○昭和25年全国高体連に11専門部が設置され、その組織下で「高等学校におけるハンドボールの健全な発達を図ること」を目標に本格的な活動に入り今日に至っている。
第1回全日本高校選手権大会を大阪·藤井寺競技場で開催。
全国高体連ハンドボール部マークを制定した。（デザイン・副部長徳永陸繁氏）

○昭和26年第2回全日本高校選手権大会を東京·駒沢で開催。以後、奇数回を大阪、偶数回を東京で開催と決める。
全国高体連専門部優勝旗を作成した。
（デザイン・秋保正三氏）
この年の加盟は36県、加盟校は男子280校、女子120校であった。

○昭和30年全国大会開催基準要項を制定する。

○昭和32年第8回大会松山（愛媛）から地方で開催することとなる。女子の公式試合は全て7人制となる。全国高体連の歌制定される。

○昭和33年河島武四郎部長退任。菅是敬（世田谷工校長）部長就任。第9回大会函館（北海道）参加校男子35校、女子32校。

○昭和34年第10回大会仙台（宮城）
創立10周年記念式典、記念誌の発行と功労者表彰。感謝状13氏、表彰状74氏、表彰校2校。

○昭和35年第11回大会倉敷（岡山）

○昭和36年第12回大会氷見（富山）
全国大会の全種目文部省の後援となる。

○昭和37年第13回大会小倉（福岡）
第1回日韓高校親善試合を開催。全日本高校選抜男子チームを派遣。

（第1回日韓高校親善試合。全日本高校選抜男子チームを派遣）

○昭和38年第14回大会富士吉田（山梨）
公式試合は全種別7人制となる。全国総合体育大会発足。第2回日韓高校親善試合。東京、茨城、名古屋、神戸、大阪、小倉で開催。

○昭和39年部長菅是敬退任。部長に児玉九十（明星高校長）就任。
第15回大会上田（長野）。創設15周年記念式典、記念誌発刊。感謝状7社表彰77氏，表彰校男子6校、女子12校、加盟都道府県40、男子418校、女子247校、計665校。

○昭和40年第16回大会熊本（熊本）
沖縄代表（女子）初参加。男女各1チームを指導者普及のために沖縄へ派遣。
副部長馬場太郎退任。村山寛（岡山）山田計（大阪）就任。

○昭和41年第17回大会盛岡（岩手）
男女選抜チームを沖縄へ派遣。

○昭和42年第18回大会和歌山（和歌山）
副部長村山寛、山田計退任。

○昭和43年第19回大会廿日市（広島）
第1回日韓スポーツ交歓競技会（韓国）。
副部長嶋田新太郎（富山）小袋是朗（福岡）就任。

○昭和44年第20回大会富岡（群馬）
創立20周年記念式典、記念誌発刊。感謝状

7社、表彰85氏、表彰校男子11校、女子5校。加盟都道府県47となる。加盟校男子680校、女子434校、合計1,114校。
第2回日韓スポーツ交歓競技会（駒沢）日本代表と地元代表と韓国代表対戦。

○昭和45年部長児玉九十退任。部長徳永陸繁（都立世田谷工高）副部長清水正（山梨）就任。第21回大会彦根（滋賀）
第3回日韓スポーツ交歓競技会が韓国ソウル開催、日韓隔年開催とする。

○昭和46年第22回大会松山（香川）

○昭和47年第23回大会東根（山形）

○昭和48年第24回大会四日市（三重）
この年女子鳥取県の参加で全都道府県の参加。第6回日韓スポーツ交歓競技会（駒沢）、女子の部初参加。男女日本代表校と地元代表校（東京）と韓国代表校と対戦。沖縄の日本復帰により九州ブッロクに入る。加盟校男子800校、女子531校、合計1､331校。

○昭和49年第25回大会北九州（福岡）
創立25周年記念式典、記念誌発刊。感謝状2社、表彰50氏、表彰校男子5校、女子8校。第7回日韓スポーツ交歓競技会は韓国の都合で中止。

○昭和50年第26回大会塩山（山梨）
第7回日韓スポーツ交歓競技会（韓国ソウル）開催。

○昭和51年第27回大会氷見（富山）
副部長小袋是朗退任。

○昭和52年第28回大会山口（山口）
第11回日韓高校親善大会より日本協会の単独交流行事となり、韓国ソウルに派遣。
第1回全国高校選抜大会を名古屋で開催、参加校男女各10校。
副部長中西敬一（福岡）就任。

（第1回全国高校選抜大会を名古屋で開催、男子優勝校岩国工業高の監督胴上げ）

○昭和53年第29回大会郡山（福島）
大会規模適正化のため男女共48校に固定する。

○昭和54年第30回大会神戸（兵庫）
創立30周年記念式典、記念誌発刊。感謝状6社、表彰70氏、特別表彰16氏，表彰校男子12校、女子10校。加盟校男子1,077校、女子764校、合計1､841校。第3回全国高校選抜大会山口県徳山市で開催、参加校男女各10校。部長徳永陸繁（東京）退任。嶋田新太郎（富山）部長、伊藤和夫（愛知）副部長就任。

○昭和55年第31回大会宇和島（愛媛）
第4回全国高校選抜大会を名古屋で開催，以後開催地を名古屋市に固定。参加男女各16校。

○昭和56年第32回大会八王子（東京）
第5回全国高校選抜大会、参加校男女各24校。

○昭和57年第33回大会隼人（鹿児島）
第16回日韓高校親善大会（再び日体協主催の日韓ジュニア交歓競技会と改称される）韓国ソウルで開催。日本代表に男子愛知高、女子市邨学園高を派遣。
第6回全国高校選抜大会参加校男女各25校。

○昭和58年第34回大会豊田（愛知）
皇太子殿下，同妃殿下御台覧。
第2回日韓ジュニア交歓競技会を東京･府中で開催。韓国･男子東亜高、女子貞信女高来日。部長嶋田新太郎退任、清水正（山梨）就任。副部長三浦公（神奈川）就任。

○昭和59年第35回大会湯沢（秋田）
創立35周年記念式典、記念誌発刊。感謝状5社、表彰60氏、特別表彰18氏，表彰校男子8校、女子10校。加盟校男子1,318校、女子975校、合計2,326校。
12月に35周年記念して、男子三国対抗国際親善大会を開催（大阪）中国上海選抜、韓国東亜高、全国高校選抜、此花学院高が対戦。

○昭和60年第36回大会小松（石川）
皇太子殿下，同妃殿下、紀宮殿下御台覧。
部長清水正退任、中西敬一（福岡）就任。
副部長日野博氏（福岡）就任。

○昭和61年第37回大会徳山（山口）
全国高校選抜大会（第10回記念大会）参加校男女各30校。
全国高校選抜大会10周年記念式典挙行。感謝状6社・4氏、表彰20名、表彰校男子10校、女子11校、計21校。加盟校男子1,388校、女子1,046校、合計2,434校。

○昭和62年第38回大会札幌（北海道）
皇太子殿下，同妃殿下、紀宮殿下御台覧。
部長中西敬一退任、佐野和夫（東京）就任。
第11回全国高校選抜大会参加校男女各26校。

2　10年の歩み

○昭和63年第39回大会加古川（兵庫）
・第7回日韓ジュニア交歓競技会（第22回日韓高校親善大会）韓国慶州・浦項で開催。日本代表男子横浜商工高、女子昭和学院高を派遣。
・副部長日野博、伊藤和夫退任、平田幸男（広島）、金原至（富山）就任。審判長を常任委員の中から推挙し北岡大覚（大阪）就任。・第12回選抜大会参加校男女各26校。
・加盟校男子1,439校、女子1,070校、合計2,509校。
○平成元年第40回大会高知（高知）
・創立40周年記念式典、記念誌発刊。感謝状5社、表彰51氏、特別表彰21氏、10回以上出場表彰校男子10校、女子7校、20回以上出場表彰校男子12校、女子12校、計41校。
・日本協会と当専門部の強化担当の共同作業として、世界に通用する可能性を秘めた選手の発掘育成事業を開始。
・第8回日韓ジュニア交歓競技会（石川・金沢）韓国代表男子東亜高、女子井邑女商高。・副部長三浦公退任、遠藤健次（埼玉）就任。・第13回選抜大会、参加校男女各26校。
・加盟校男子1,464校、女子1,070校、合計2,534校。

○平成2年第41回大会仙台（宮城）
・第9回日韓ジュニア交歓競技会（韓国・春川）日本代表男子横浜商工高、女子宣真高派遣。
・部長佐野和夫退任、須藤健児（東京）就任。副部長平田幸男退任、岡村久（山口）就任。・第14回選抜大会、参加校男女各26校。
・加盟校男子1,472校、女子1,070校、合計2,542校。

○平成3年第42回大会清水（静岡）
・第10回日韓ジュニア交歓競技会（愛知・名古屋）韓国代表男子東亜高、女子仁川女高。・第15回選抜大会（記念大会）参加校男女各30校。全国高校選抜大会15周年記念式典を挙行。感謝状2社・6氏、表彰10氏、表彰校男子19校、女子20校。
・加盟校男子1,481校、女子1,069校、合計2,550校。

○平成4年第43回大会高城（宮崎）
・第11回日韓ジュニア交歓競技会（韓国・光州）日本代表男子浦和学院高、女子四天王寺高を派遣。この大会を最後に26回続いた日韓交歓競技会を発展的に解消、次年度から中国を含めた日韓中ジュニア交歓競技会を日体協主導で行う。
・第16回選抜大会、参加校男女各26校。
・加盟校男子1,466校、女子1,070校、合計2,536校。

○平成5年第44回大会栃木（栃木）
・第1回日韓中ジュニア交歓競技会（福島）。韓国代表男子静石航空工高、女子徽慶女高と対戦、中国代表は不参加。
・部長須藤健児退任、佐分正典（神奈川）就任。副部長金原至、遠藤健次退任、住尾勉（茨城）北岡大覚（大阪）就任。

・第17回選抜大会、参加校男女各26校。
・加盟校男子1,478校、女子1,085校、合計2,563校。

○平成6年第45回大会氷見（富山）
・本大会での優秀選手男女各15名の表彰を始める。
・創立45周年記念式典、記念誌発刊。感謝状5社、表彰45氏、特別表彰20氏、10回以上出場表彰校男子6校、女子14校、20回以上出場表彰校男子2校、女子6校、30回以上出場表彰校男子3校、女子4校、計35校。（今回から30回以上出場校の表彰を始める）・副部長岡村久退任、佐藤喜一（大分）就任。・第2回日韓中ジュニア交歓競技会（韓国・済州）前年度選抜大会優勝校の男子熊本市商高、女子名短大付女高を派遣。
・18回選抜大会を徳山市で開催、参加校男女各32校。
・部長、副部長制から部長・委員長・副委員長制に変える会則に改正。
・加盟校男子1,478校、女子1,085校、合計2,563校。

○平成7年第46回大会倉敷（岡山）
・部長佐分正典退任、高田日呂美（東京）就任。初代委員長に住尾勉（茨城）。副委員長に北岡大覚（大阪）、佐藤喜一（大分）、大川洋司（茨城）就任。
・第3回日韓中ジュニア交歓競技会（中国唐山市）前年度選抜大会優勝校の男子香川中央高、女子熊本女商高を派遣。
・平成7年度選抜大会（第19回）名古屋再開催、参加校男女各32校。
・加盟校男子1,435校、女子1,068校、合計2,503校（前年比60校減）

○平成8年第47回大会塩山（山梨）
第4回日韓中ジュニア交歓競技会（長崎）で日本代表横浜商工高と長崎代表が対戦。
第20回選抜大会（第20回記念大会）を開催、参加校男女各36校。
選抜大会20周年記念式典、感謝状2社・6氏、表彰10氏、表彰校男子19校、女子20校に行う。加盟校男子1,428校、女子1,050校、合計2,478校（前年比25校減）。

○平成9年第48回大会八幡・京田辺2市共同開催（京都）
・部長高田日呂美退任（全国高体連理事長専任のため）千野恒夫（山梨）就任。委員長住尾勉退任、北岡大覚（大阪）就任。副委員長高橋精一（大阪）就任。
・第21回選抜大会参加校男女各32校。
・平成10年度から全国高校選抜大会の開催地は、日本協会の指導のもとに基本的に関東、東海、近畿ブロックの方向で持ち回り開催を検討中、22回～23回大会は大阪で開催する。加盟校男子1,365校、女子1,016校、合計2,381校（前年比97校減）
・平成10年第49回大会徳島（徳島）
・第22回全国高校選抜大会を大阪で開催、参加校男女各36校で実施する。参加校数増加について全国高体連総会で承認手続き申請。
・国際ハンドボール規則変更に伴い、競技時間等の変更があったが、競技時間についてのみ、平成10年度は特別措置を日本協会に了承を求め従来の競技時間で行う。
・平成11年度第50回全日本高校選手権大会盛岡（岩手）開催時に創立50周年記念式典挙行予定。第23回全国高校選抜大会を大阪で行い、平成12年以降3年間を氷見（富山）で開催することが、平成9年度の（財）日本ハンドボール協会理事会で承認された。

（平成9年度全国高等学校総合体育大会名短大付＆宣真女子決勝戦スナップ）

3 「将来に向けて」

（1）平成7年度の加盟校男子1,494校、女子1,198校、合計2,550校は、加盟校数の創立以来最多加盟校数であった。しかし、昨今、少子化や高学歴志向に伴なう社会の流れの変化の中で、休部・廃部をしていく学校が全国各地でも現れ始めた。当然、高等学校の改革の波の中で統廃合のための自然減少もあろうが、指導者の人事異動に伴なっての廃部は、特に寂しさを感じる。少子化に伴ない、教員の採用も控え気味になり、スポーツ経験のない数少ない先生方の採用が多くみられる現状の中で、ハンドボールはメジャースポーツになれないのは、指導者が整わなければ部活動ができないという理論に結び付かれるおそれを危惧する。

ハンドボールをこよなく愛する先生方、是非とも、普及（ハンドボールの素人顧問を夢中にさせること）と強化の両面を自校という器の中でなく、各都道府県単位で至急に考えて欲しい。また、既に現役を退いた往年のハンドボーラーの先生方にも普及活動のお力添えに参加していただけたら有り難い。老齢化社会の中で生涯スポーツ活動の一環として、往年の指導者としての力を、孫世代の子供だちへの指導にお貸しいただきたい。交流は世代の交流と世代を越えた生きがいづくりに繋がるのではないだろうか。各都道府県毎に指導が可能な方々の人材バンクリストを作成し活用出来れば嬉しい限りである。

（2）地球規模で物事を考える時代の流れの中で、平成7年広島でのアジア大会や熊本でのJAPANCUP'97、平成9年5月熊本県での男子世界選手権大会が実施されたが、その波及効果は予想外に大きかった。

世界のトッププレヤーの素晴らしい技術や戦術、それに闘争心。日本チームの世界選手権にかける、血の滲むほどのトレーニングを積み努力した様子が報道され、日本チームが一戦一戦を精一杯に戦い善戦したその姿が実に素晴らしく印象的であった。世界の水準を知った高校生にとってこの上もない励みになった教材であった。

会場を沸かす好プレーを、連日超満員の会場で、また全国ネットのテレビの画像を通しながら観戦した全国の生徒諸君の感動は、直ぐにも同じようなプレーをしてみたいという意欲へと変わっていった。その後に行われた、名古屋での選抜大会でのゲームの中にも明らかに現れていた。それは、指導者である教師の研究心が年々旺盛になり、世界のトッププレヤーの素晴らしい技術や戦術を生徒と共に研究しながら、自校のチームにマッチさせたものを考案し、プレーの中に用いている様子が伺えた。この様に一流のプレーは素晴らしい運動文化であり、定期的に観戦できる機会があればと思うところである。観戦ばかりでなく、地元の高校生諸君が大会への協力を、セレモニーへの参加、環境整備や交通整理等のボランティヤ活動での参加によって、良い勤労体験学習の場にもなったと関係者から伺った。

企画や運営する（財）日本ハンドボール協会や自治体の財政的な援助を、サッカーくじの配分金等を上手に利用出来るように、（財）日本体育協会や文部省等からの一層積極的な協力を行って欲しい。

（3）男子は平成元年、女子は平成5年から日本協会との連携を取り行っている、ジュニア活動の基本方針は、世界に通じる可能性を秘めた選手の発掘し「ナショナルチームの一員」ということを意識させ、技術面の強化並びに生活姿勢の転換等、精神面の転換を計るとし、世界ジュニア選手権大会への出場に夢をかけている。

高校生の世代で、選手として参加ができることは、近い将来高校生のナショナルプレーヤーが多数誕生も夢ではないと思っている。アジア大会や世界のイベントへの高校生の積極的な参加が望まれる。

現状の（財）日本体育協会の主導の日・中・韓のジュニア大会をより発展して実施していただけたら、ジュニアU19の活躍の場も増えていくのではないかと考える。

既に、各都道府県の中には、国際的視野での交流を姉妹国、姉妹都市ということで、韓国や中国、遠くはヨーロッパ諸国にまで行っている所もあるが、底辺拡充と世界に通じる力を涵養するには絶好な機会でもあるので、継続をしていって欲しい。

《事務局》
〒154-0002 東京都世田谷区下馬4-1-5
学芸大学附属高校内
TEL 03（3421）5151
FAX 03（3421）5152

創　　立：昭和25年10月

加盟校数　4,171校
部 員 数　163,513名

年度	部　長	副部長	副部長	加盟校数
25	岩野　次郎（大阪）	飯村　進（関東）		
26	〃	〃		
27	〃	〃	毛利　博三（関西）	585
28	〃	〃	〃	
29	〃	松浦　利夫（関東）	〃	
30	〃	〃	〃	631
31	〃	〃	〃	
32	〃	〃	〃	
33	〃	〃	安達　義明（関西）	
34	〃	〃	〃	
35	〃	〃	〃	740
36	〃	〃	〃	
37	〃	〃	〃	
38	藤野　源次	〃	〃	911
39	（愛知）	〃	〃	
40	〃	〃	〃	1189
41	〃	〃	吉岡　一真（関西）	1276
42	〃	〃	〃	
43	〃	〃	〃	1648
44	〃	〃	〃	1750
45	〃	〃	〃	2057
46	松浦　利夫（東京）	宮川　博（関東）	中田　貞三（関西）	2228
47	〃	〃	〃	2358
48	〃	〃	〃	2517
49	〃	〃	〃	2676

年度	部　長	副部長	副部長	加盟校数
50	松浦　利夫	宮川　博	中田　貞三	2741
51	〃	〃	〃	2861
52	〃	川口　玲雄（関東）	〃	2951
53	川口　玲雄（東京）	加藤　三郎（関東）	井上　国三（中国）	3024
54	〃	〃	〃	3136
55	〃	〃	〃	3239
56	〃	〃	〃	3311
57	加藤　三郎（東京）	鈴木　勇作（関東）	〃	3338
58	〃	〃	〃	3450
59	〃	〃	〃	3579
60	〃	〃	〃	3680
61	〃	〃	〃	3745
62	〃	〃	〃	3818
63	〃	〃	馬越　敏行（関西）	3877
元	〃	〃	〃	3928
2	鈴木　勇作（東京）	高田　久行（関東）	〃	3934
3	〃	〃	〃	3973
4	〃	〃	〃	3995
5	〃	〃	〃	4019
6	高田　久行（東京）	上野二三一（関東）	山成　宣彦（中国）	4051
7	〃	〃	〃	4114
8	〃	〃	〃	4159
9	〃	〃	〃	4171
10	上野二三（東京）	平山　隆造（関東）	天久　弘（中国）	

1 沿 革

①ー昭和20年代ー

昭和25年10月28日に全国高体連蹴球部（サッカー部）の規約が承認された。蹴球部の課題は蹴球協会と密接な連絡をとりながら、高校の大会は高体連で自主的に運営できる体制をつくることであった。また、加盟校の増加にともなう各種大会の運営や組織づくりに苦労した時代であった。昭和28年に故松浦利夫先生が副部長に就任し、審判員の育成、技術研究及び講習会の開催等、事業の拡張と充実をはかることを最大の目標として活動されたようである。この意味で20年代は蹴球部の発足と組織づくりに終始した時代であった。

②ー昭和30年代ー

年々増加する加盟校に対応する審判員の確保や専門部独自で会議、研修会を開く機会も費用もなかった。したがって審判員は、国体開催時に研修を受けるとか、受けた指導者を中心に各都道府県で講習会を開いて拡充をはかるようにした。国体開催時の審判研修は意義があり、各都道府県協会や高体連専門部からの派遣者が多かった。一方、技術の指導者研修の機会はなかった。昭和33年日本協会は、アジアサッカー連盟会長のラーマン首相（マレーシア）の提案で開催されたアジアユース大会に高校選手の派遣を決定した。このときの協会と高体連蹴球部との折衝をしたのが松浦先生であった。先生は問題点を指摘しながらも、若い人たちを派遣し技術委員会の基礎をつくるのにはまたとない機会であると判断され、高体連側は団長と主務、協会側は監督とコーチのポストで遠征することでこれを受諾した。昭和34年から46年までの13年間続けた行事であった。また、昭和28年から国体に教員の部が併設され、指導者の拡充の上から非常に効果があった。このように、30年代は指導者組織の充実をはかった時代であった。

③ー昭和40年代ー

39年の東京オリンピックを契機にスポーツへの関心が高まるなか、高体連サッカー部も変化の激しい時であった。第1は41年の高校総体への参加であった。大正7年から続いた選手権大会から毎日新聞社が手を引くことになり、文部省の次官通達と経済的な問題もあり42年1月の大会は16チームとなった。（推薦出場）第2はアジアユース大会の参加中止にともない、48年から高校選抜チームの海外遠征が実施されたことである。選手団の編成は生涯・報道を除いては高体連関係者であった。この遠征は指導者及び選手の大きな励みとなり、組織の確立に重要な役割を果たした。また、43年から日韓ジュニア交流競技会（現在は日韓中）45年から国体少年の部の選抜制、41年からの総体でのＮＨＫのテレビ放映、46年から選手権大会の民放テレビ（日本テレビを中心とする）の放映等、高体連サッカー部にとって充実と活気のある時代であった。

④ー昭和50年代ー

この時代の最大の変革は高校選手権大会の首都圏開催であった。松浦先生を中心とする全国高体連サッカー部の役員の努力により様々な問題を解決しながら、52年正月に51年度第55回全国高校選手権大会を首都圏で開催した。この結果、観客動員数が大幅に伸び全試合をテレビ放映することとあいまって大きな盛り上がりをみせた。また、53年2月20日、年度の総体・国体・選手権大会の記録をはじめ、海外遠征、地域大会の記録、技術・審判・医事等の研究報告等を掲載した高校サッカー年鑑を発刊した。57年の選手権大会は60回の記念大会として参加校を各都道府県各1チーム、加盟校の多い東京の1チームを加えて48チームで開催した。翌年の61回大会は32チームに戻したが、全国の委員長から1県1代表の強い要望があり、会場の確保、テレビ放映等の問題も解決できたので59年正月の大会より48チームで開催することとした。このように50年代は高校サッカーが大いに進展した時代であった。

（以上、全国高体連40年史より抜粋）

2　10年の歩み

①ー昭和63年度ー

加盟校が3877校となり、高校サッカーが益々盛り上がりをみせた年であった。選手権大会が昭和天皇崩御のため2日間順延となり、1月9日に準決勝、10日に決勝をおこなった。昭和から平成にまたがる印象に残る大会であった。また、1月中旬には選手・指導者のレベルアップをはかるために、高校選抜チームの海外遠征でお世話になっているベリンツオーナ国際ユース大会の優勝チーム（2位のセルチック・グラスゴー）を招待し、「東京カップ」（後にニューイヤー・ユース・サッカーとなる）を開催した。この大会はその後も毎年開催され現在まで続いている。

②ー平成元年度ー

平成2年度より開催する全日本ユースサッカー選手権大会の試行大会が実施された。この大会は高体連加盟チーム以外の高校年代のチーム（クラブ）との交流を通してレベルアップをはかり、真のユースチヤンピオンを決定する大会として開催される。高校の大会日程との関係で開催時期等、様々な問題はあったが、クラブチームも年々増加しており、来年度より公式大会として実施されることになった。この大会は平成9年度第8回大会まで全て高校チームが優勝しているが近年クラブのレベルも高くなり好ゲームが展開されている。

③ー平成2年度ー

選手権大会がアジアユース予選との関係で日本協会推薦4チーム（代表選手が選ばれているチーム）を加え52チームで開催する異例の大会となった。（詳細は91高校サッカー年鑑に記載）決勝戦は九州勢の対決となり、国見高校が優勝した。昨年の南宇和高校の優勝を考えると東高西低であったサッカー地図も変わりつつあり、地域差がなくなってきたようである。

④ー平成3年度ー

平成4年よりJリーグの発足が決定した。これに伴い、高体連登録選手のJリーグとの契約クラブと高校間の選手の移籍等の問題が生じてきた。高体連サッカー部としての原案を鈴木勇作部長より委員長会議に提案し、この案を日本協会に提案することとした。アマチュアとプロとの関係で今後も様々な問題に対応する必要性を強く認識した年であった。

⑤ー平成4年度ー

サッカー界はJリーグの発足間近、2002年ワールドカップ招致活動などで年々盛り上がってきた。これと平行して、高校サッカーにもいくつかの変化が見られるようになった。今まで各都道府県の強豪チームに集中していた選手の分散化傾向がでてきたこと、外国人留学生を出場させるチーム、外国人コーチの招聘、強豪チームの海外遠征等、高校日本一をめざして新たな選手育成方法が様々な形で行われるようになった。大会の運営面においても、現場の指導者から種々の改革案がだされた。総体のエントリー数の増加、休養日の増加、主務のエントリーの要望があったが全国高体連の規模適正の方針により全てが解決できなかった。

⑥ー平成5年度ー

加盟校が初めて4000校を突破し4019校となった。今年度は5月にJリーグのリーグ戦が開始、10月にはワールドカップ予選とサッカーが国民的関心事となった。こうした中で高体連サッカー部に重大な問題が投げかけられた。第1は高体連加盟校以外の学校の総体への参加である。サッカー部では全国高体連の諮問を受けて、以下のような案を提示した。

（ア）朝鮮高級学校の総体参加を特例として認める。

（イ）高等専門学校、専修学校、各種学校の参加は保留する。以上を全国高体連への回答としたが、高体連では（ア）（イ）の両方とも認めることを決定した。この件について日本協会の資格委員会に鈴木部長より提案をし、種々の経緯はあったが特例として参加を認めることで了解をとり、理事会で承認された。この結果、7年度鳥取総体より参加を認めることとなった。

第2は日本協会医事委員会より、選手の健康管理とよりよいゲームを行うために、総体の日程変更を指示された。総体の日程延長を全国高体連に要望するとともに、参加チーム（55校）削減し休養日を増やす事を提案したが、後者については全委員長が反対を表明し、以下の案で承認を得た。

（ア）試合開始時刻は日中の暑い時間を避ける。

（イ）会場を8会場とし1会場1日3試合とする。また、選手権大会も同様の観点から休養日を増やすために年末からの開催を検討すること

とした。高校の全国大会が長期休業中の開催を義務づけられている中で、よりよいチームや選手を育成するための検討課題が山積してきた年であった。

⑦ー平成6年度ー

前年度からの検討課題であった総体の試合時間を35分ハーフ、延長なし、ＰＫとすること（決勝戦のみ20分延長、同点の場合は両校優勝）に決定した。また、今年度の選手権大会の日程を12月30日から1月8日までとし休養日を3日間とすることとした。将来を担う選手の健康管理とよりよいゲームのために効果的であった。7年度総体から加盟校以外の学校の参加を認めたことは前述したが、今年度新たに選抜大会（選手権大会）への参加を認める方向で専門部及び競技団体で検討して欲しいとの要望が全国高体連よりあった。委員長会議で様々な問題点が指摘されたが、総体と同じ条件で認めることとし、日本協会の資格委員会に提案することとした。総体と異なり日本協会がイニシアチブをとっている大会のため、委員会で承認されるかはなはだ不安であった。もう一つの課題であった外国人留学生の人数制限に関しては、高体連の2割程度という基準をふまえ、4人登録、2人出場とすることを決定した。なお、この規定は地域大会、選手権大会も同様とすることとした。

⑧ー平成7年度ー

前年度からの検討事項であった加盟校以外の学校の選手権大会への参加は、日本協会理事会で承認され、総体と同様の基準で平成8年度より認めることになった。この年、サッカー界はU－20、U－17代表チームの世界選手権での活躍、女子のアトランタオリンピックへの出場決定と盛り上がりのある年であった。こうした雰囲気の中で、高校生以下の年代のレベルアップをはかるために多くの変化が出始めた。8年度より天皇杯の方式が抜本的に改正され、2種登録（高校年代）チームの参加がみとめられることになった。また、高校選抜チームのメンバー決定にあたり、Ｊリーグ所属選手の選考に関して調整が必要になってきた。

⑨ー平成8年度ー

Ｊリーグの発足以来、高校サッカーを取り巻く環境も大きく変化した。高体連サッカー部も多くの課題を審議してきたが、今年度は比較的平穏であった。しかし、高校サッカー年鑑の発刊について永年お世話になっている講談社より発刊中止にしたいという話がでた。この件について講談社との折衝とともに、委員長会議への提案等、継続出版に向けての内部的な意思統一を行わざるを得ない状況になった。かく都道府県高体連サッカー部を通じて組織販売の増加、新たな販売方法、年鑑担当者の組織づくりに各委員長の絶大な理解と協力を得て、発刊継続の目途がたったことは大変ありがたかった。

⑩ー平成9年度ー

日本サッカー界にとって悲願のワールドカップ出場が決定し、全国的なサッカーブームが再び訪れた。2002年日韓共催大会とあわせて若い年代のプレーヤーはもとより一般のファンにも大きな夢がもたらされた。この盛り上がりの中で総体、高校選手大会は好ゲームが多数あり高校サッカーが更にレベルアップしていることを強く感じた。首都圏開催になって初めて、雨天のためスタンドでの開会式に始まり、決勝戦は大雪のなかで東福岡高校と帝京高校のハイレベルな熱戦が展開されたことが印象に残っている。

3　将来に向けて

高校サッカーの発展が日本のサッカーを発展させる基盤であると考えている。この10年間の歴史の中で、大会運営、指導者、審判員等の組織が日本協会の指導の基に整備されてきた。以下、それぞれについてふれてみたい。

(1) 高体連サッカー部の組織

本部役員：部長、副部長 (2) 総務委員長
審判委員長、技術委員長、総務庶務。

常任委員会：本部役員、9地域からの選出委員。(原案の作成)

全国委員長会議：本部役員、各都道府県委員長（議決機関)

毎年、総体開催時と選手権開催時に開催。

(2) 大会の運営

全国総体：開催都道府県の高体連、サッカー協会、高校生の補助役員で運営。

全国選手権：東京、埼玉、千葉、神奈川の高体連、協会、高校生の補助役員で運営。

組織的な運営がどの大会でも定着している

(3) 審判委員会

各種別の全国大会は日本協会審判委員会で審判員を割り当てる制度となっている。このため、高体連審判委員長が協会の委員長とともに担当試合の割り当てを行っている。指名審判員のほかに各都道府県から2名までの研修希望者(2級審判員）を招集し大会の前半に研修会を実施している。

高校教員には国際審判員をはじめ1級審判員が多数おり、総体、選手権とも日本の最高レベルの審判員で試合がおこなわれている。

(4) 技術委員会

国体を含め各大会には全国9地域から推薦された技術委員が全期間ゲームを観戦し、選評、テクニカルレポートの作成、大会優秀選手の選考を行い、サッカー年鑑に掲載している。全国の高校サッカーの指導者の中には日本体育協会及び日本サッカー協会認定のＳ級・Ａ級・Ｂ級・Ｃ級コーチの資格取得者が多数おり、チームの指導や技術委員の仕事に携わっている。この力が最近の高校サッカーの競技力を向上させている最大の要因である。

最近の高校教育を取り巻く環境の変化に対応しながら、高校スポーツを益々発展させるために指導者の役割は極めて重要である。高体連サッカー部も平成10年度をきして、組織の若返りをはかり、日本協会との連携のもとにスポーツの発展に努力して行きたいと思っている。

「全国高等学校体育連盟サッカー部規約」

第１章　名称及び事務所

第１条　本会を全国高等学校体育連盟（以下、高体連）サッカー部と称する。

第２条　本会の事務所を東京に置く。

第２章　目　的

第３条　本会は、全国高体連の規約に基づき、サッカーの健全なる発達を図ることを以て目的とする。

第４条　本会は第３条の目的達成のため、下記の事業を行う。

1. 全国大会開催に関する事項の審議並びに執行。
2. サッカー技術の講習。
3. 体育団体との緊密な連絡。特に財団法人日本サッカー協会とは常に連絡を行う。
4. その他、本会の目的達成に必要な事項。

第４章　組織及び性格

第５条　本会は全国高体連規約第６条によって組織する。

第６条　本会は全国都道府県の高体連サッカー部を以て組織する。なお、都道府県高体連サッカー部は、地域ごとに連合体を組織することができる。その地域は、財団法人日本サッカー協会の統括する地域協会地と合致することを原則とする。

第７条　本会は日本サッカー協会高等学校部会の性格を兼ねる。

第５章　役　員

第８条　本会に下記の役員を置く。

1. 部長に１名、2.副部長２名、3.総務担当、審判担当、技術担当各１名
4. 常任委員９名、5.委員　各都道府県専門部委員、6.顧問

第９条　部長及び副部長は本会の委員より選出し全国高体連理事会の承認を経て会長これを委嘱する。総務、審判、技

術の各委員は、常任委員会の推薦を経て、委員会において承認する。
部長は本会を代表し、会務を統括する。副部長は部長を補佐し、部長事故ある時は職務を代行する。
総務、審判、技術の各委員は、本会のそれぞれの担当分野の責任者として連絡、調整にあたる。

第10条　委員は各都道府県高体連サッカー部より1名選出する。

第11条　常任委員は、かく地域の委員の互選により1名選出する。
常任委員は、部長、副部長、総務、審判、技術担当の委員とともに常任委員会を構成し、会務の処理にあたる。

第12条　顧問は、重要事項に関して委員会の諮問に応ずる。

第13条　役員の任期は2か年とする。ただし重任は妨げない。補欠によって就任した役員の任期は残任期間とする。

第14条　委員会は部長之を招集し、重要事項を審議する。

第15条　緊急事項は常任委員会において審議し、決定事項は次の委員会に報告する。

第16条　委員会及び常任委員会は総員の2分の1以上（委任状を含む）の出席がなければ開くことができない。

第7章　会　計

第17条　本会の経費は全国高体連の規定により本部よりの補助金、寄付金を以てあて、都道府県より分担金などを徴収することはできない。

第18条　本会加盟校は、全国高体連の承認した大会以外には出場できない。

第19条　本規約は、委員会の議決なく変更できない。

第20条　すべての場合における議決は、出席者の半数以上の賛成があれば成立する。ただし、賛否同数の時は、議長に一任する。

第21条　本規約は、昭和25年10月28日より実施する。
昭和53年8月1日改訂。

《事務局》
〒571-0038 大阪府門真市柳田町29－1
府立門真西高校内
TEL 06（909）0318
FAX 06（909）0798

創　　立：昭和25年

加盟校数　　1,416校
部員数　　男　子　33,145名

年度	部長	記事
25	高崎　米吉	12月専門部発足
26	〃	第1回全国委員会
27	〃	
28	〃	
29	〃	
30	〃	専門部正式役員決定
31	〃	
32	〃	
33	〃	
34	〃	
35	〃	
36	〃	
37	〃	
38	〃	6枚革ボール正式使用
39	〃	保善高校韓国遠征
40	〃	
41	〃	
42	〃	
43	〃	
44	〃	
45	〃	選抜チームカナダ遠征
46	〃	51回大会高校総体加入
47	〃	
48	〃	
49	〃	
50	〃	高校日本代表英国遠征
51	〃	
		創部25周年記念式典
52	〃	指導者研修会始まる
53	〃	
54	泉　悌二	普及指導講習会始まる

年度	部長	記事
55	泉　悌二	
56	〃	
57	〃	
58	鷹木　立雄	
59	〃	
60	土岐　一郎	創部35周年記念式典
61	〃	
62	松下　邦夫	全国大会50チーム参加
63	堤　治美	
元	林田　昭喜	
2	〃	
3	〃	近鉄花園ラグビー場改修
4	角田　進	
5	荒井　昭雄	
6	〃	
7	〃	
8	〃	
9	〃	
10	〃	

○副部長
《昭和30年以前》
高桑栄一（関東）
丸岡隆一（関西）

《昭和30年以降》
【関東】
高桑栄一（S30～46）
鷹木立雄（S47～57）
堤治美（S58～62）
角田進（S63～H3）
石田毅（H4～6）
石丸克己（H6～9）

【関西】
中島直巳（S30～36）
吉田恒二（S37～39）
林田昭喜（S40～47）
土岐一郎（S48～59）
野々村博（S60～61）
荒井昭雄（S62～H4）
井上哲夫（H4～）
【九州】
井上輝生（S30～40）
門田久人（S41～47）
淵本武揚（S48～49）
小澤直道（S50～H3）
三野紀雄（H4～）

1　沿　革

昭和25年　全国高体連ラグビー専門部発足

全国高等学校体育連盟ラグビー専門部の発足は昭和25年、だが当初は各都道府県の組織も未整備であり、東京の責任者であった高崎米吉先生の奔走で全国ラグビー専門部の会合が持たれたのは、昭和25年12月30日、大阪毎日新聞社の会議室であった。以降、各都道府県の委員会も整備され、昭和27年、毎日新聞社隣の堂島ホテルで、全国高体連ラグビー部規約原案が提案され、その後昭和30年の全国委員会で正式役員が決定された。

昭和31年　体協脱退と国体出場

第11回兵庫国体に(財)日本ラグビーフットボール協会は、(財)日本体育協会のアマチュアリズムの考えの甘さを指摘して(競輪の補助金で国体開催)国体に参加しないと決議し日体協を脱退した。しかし、高校側としては、協会の趣旨には賛成だが、生徒指導上マイナスであるとして専門部の総力を結集し協会に申し入れをした。その熱意に協会も折れ、特別配慮で国体に参加できた。

昭和38年　6枚革ボール正式使用

当時、ボール1個2,000円もするので、少し小型であるが6枚革のボールを研究考案し、半額の1,000円で業者に作らせ、すぐ関東高校大会で使用できるように努力されたのが高崎先生であった。その後、このボールは約20年間定着し、高校ラグビーの普及発展に大きな役割を果たした。

昭和39年　保善高校韓国遠征

この年の11月に、高崎先生が自ら引率し保善高校のラグビーチームを韓国に遠征したのが、高校生の海外交流の始まりである。これを契機に韓国、台湾、カナダからも来日が続いた。

昭和46年　カナダ遠征

第50回全国高校ラグビー大会を記念して、ベスト8チームから選抜したチームで、カナダに初遠征した。

昭和47年　全国高校総体加入

全国高等学校総合体育大会への加入は、全国高等学校ラグビーフットボール大会の40回も続いた伝統と加入条件との間に大きな壁があったが、専門部が一丸となって総力を結集し、協会や毎日新聞社との折衝を重ね、この年の第51回大会からようやく総体加入に踏み切ることができた。

昭和51年　高校日本代表英国遠征

専門部の大きな夢であった、ラグビーの母国イングランド遠征がこの年の3月実現した。

高崎部長を団長として、役員5名、全国大会で優勝した久我山を始め準優勝の目黒、秋田工業などの強豪から選抜された選手25名の編成で、戦績は7戦全敗であったが、英国選抜に37-7と善戦した。以来毎年遠征が続き、高校日本代表の選手が日本を代表するプレヤーに成長していくようになり、日本ラグビーの発展に大きく貢献することになる。

昭和51年　創部25周年記念式典

創部25周年記念行事の祝賀会が、協会関係者を始め、毎日新聞社、近畿日本鉄道、報道関係の参加のもと、12月30日大阪で開催された。高体連ラグビーの四半世紀の区切りと、新たな時代への前進を確かめる式典であった。記念誌は林田先生のご努力により翌年完成し、貴重な記録として残っている。

昭和60年　創部35周年記念式典

12月27日に、大阪で35周年記念式典が行われた。この10年、協会と高体連が高校委員会を通じて強い絆で結ばれ、高校生の普及・強化が日本ラグビーの向上に大きな役割を果たしていることが確認された。

昭和62年　全国大会50チーム参加

第50回及び第60回に記念大会として全国大会が50チームで開催された実績から、この年の第67回大会から、山形、島根の出場で50チームで開催されることになり、全国の願い出ある全都道府県からの大会参加は香川、高知を残すのみとなった。

全国高校ラグビー大会　大優勝旗「飛球の旗」
－日本宣伝美術会長 大高 猛－
※第40回を記念して制定。第75回大会より新調された。

2　10年の歩み

(1)　全国高校ラグビー大会

全国高等学校ラグビーフットボール大会は、平成9年に第77回を数え、歴史を重ねるとともに、冬の高校生スポーツのビッグイベントとして定着し、高校ラガーの憧れの的である近鉄花園ラグビー場では、毎年、涙と感動のドラマが繰り広げられている。大会の発展とともに、各都道府県の予選参加校数も増加し、ラグビー競技の向上と高校ラグビーの普及に大きな役割を果たしてきた。しかし、平成3年をピークに、予選参加校数が減少の兆しを見せ、ラグビー関係者の危惧するところとなっている。各都道府県の専門部では、7人制や10人制の大会を導入し、なんとか部員減少に歯止めをかけようと努力している。これまで、全国の高校にラグビーを芽生えさせ、発展させる役割を果たしてきたこの大会が、新たな時代を切り開く大会となるよう願っているところである。

【全国大会10年の歩み】

◆昭和63年～64年（第68回）

・昭和天皇崩御のため決勝戦は中止され、茗渓学園高校と大阪工業大学高校の両者優勝となった。

◆平成元年～2年（第69回）

・文部大臣楯が杯に新調され、新たに賞状が授与されることになった。また、全国高体連の会長杯も新調され、今大会から授与されることになった。

◆平成2年～3年（第70回）

・70回の記念大会のため、これまで最多の54校の出場校によって開催された。また、12月26日に、大阪上本町「なにわ会館」に関係者が集い盛大に大会の古希を祝った。また、これまで大会の登録人数は22名であったが、この大会から安全管理面の配慮から、25名となった。

◆平成3年～4年（第71回）

・近鉄花園ラグビー場が改修され、スタンドは、3万人収容の大スタンドとなり、これまで入場制限をするなど運営に苦労してきた役員の悩みが一挙に解消された。

・この大会から、高知、香川県が単独出場することができることになり、全都道府県の出場が実現した。

◆平成4年～5年（第72回）

・メインスタンドの70%が傘下に収まる大鉄傘、第2グラウンドの洋芝改修、第3グラウンドのスタンド設置、「ラグビー資料館」の新設など、昨年に引き続き、ラグビー場の改修が行われた。

・71回大会は1,490校のこれまで最高の予選参加校数であったが、今大会は29校減の1,461校にとどまった。

◆平成5年～6年（第73回）

・前年からの予選参加校数の減少傾向が続き、34校減の1,427校となり、ラグビー関係者の間に危機感が高まってきた。

◆平成6年～7年（第74回）

・全国的に実力のあるチームが育ってきたこともあり、これまでシード校を二つにランクをつけてきたが、大きな力の差が見られず、今大会では初めてシード校にランクをつけなかった。

◆平成7年～8年（第75回）

・この大会の優勝旗である「飛球の旗」は、第二次世界大戦の戦禍に没したが、第40回（昭和36年）大会を記念して新たに制定された。しかし、30数年の歳月を経て、痛みが目立ち第75回を記念して新調された。また、この大会から、すべての試合を30分ハーフで実施することとなった。

◆平成8年～平成9年（第76回）

・第3グラウンドに記録席用ブースの設置やトランシーバー、携帯電話の導入によって、寒風の中での記録作業や人力による各グラウンド間の連絡が解消されるなど、効率的な大会運営が行われるようになった。

◆平成9年～平成10年（第77回）

・かつて高校時代に花園を目指したラガーメンであった、町村文部大臣が開会式で、ご自身の体験を踏まえたご祝辞を述べられ、大会1回戦を観戦された。

第77回全国高校ラグビー大会決勝戦

（2） 海外遠征

昭和51年の英国遠征以来、高校全日本の海外遠征は毎年継続されており、この遠征を通して選手の発掘育成や指導者の養成などの体制が全国に整備され、今では、高校ラグビーのみならず、日本ラグビーの発展の大きな基盤となっている。

全国の高校チームも海外遠征を行い、また、海外からも数多くのチームが来日するようになり、高い水準の技術を学ぶ機会となっている。

【高校全日本海外遠征の１０年】

○昭和63年　英　役員4名　選手25名
　団長　川勝主一郎（京都花園高）4勝1敗
○平成元年　ＮＺ　役員4名　選手25名
　団長　徳増浩司（茨城茗渓学園）3勝2敗
○平成2年　ｽｺｯﾄﾗﾝﾄﾞ　役員5名　選手25名
　団長　荒井昭雄（大阪大手前高）5勝1敗
○平成3年　ｳｪｰﾙｽﾞ　役員5名　選手25名
　団長　小澤直道（福岡筑紫中央高）3勝2敗
○平成4年　カナダ　役員5名　選手25名
　団長　野々村博（大阪経済大学）5勝0敗
○平成5年　英　役員5名　選手25名
　団長　角田進（東京専修大附属高）4勝1敗
○平成6年　ＮＺ　役員5名　選手25名
　団長　石田　毅（東京豊島学院高）3勝2敗
○平成7年　ｳｪｰﾙｽﾞ　役員5名　選手25名
　団長　荒川博司（大阪工業大高）　2勝3敗
○平成8年　英　　役員5名　選手25名
　団長　石丸克己（東京城北高）　2勝4敗
○平成9年　ｽｺｯﾄﾗﾝﾄﾞ　役員6名　選手25名
　団長　信清邦夫（北海道網走南が丘高)5勝0敗

（3） 普及指導講習会

普及指導講習会は、昭和55年1月の高校委員会（名古屋）で強化以外の普及講習会開催の提案がなされ、その年の3月に関東（宇都宮）、九州（長崎）、中国（広島）、北陸（福井）の4ブロックで開催されたのが始まりで、昭和58年からは、全国9ブロックで開催されるようになり、現在に至っている。各ブロックでは、講習内容の検討を行っているが、ここ数年、抜本的な見直しをという声もあがっている。発足から、まもなく20年になろうとしているが、競技人口減少の今こそ、より一層の充実を図るための検討が必要になっている。

（4） 指導者研修会

日本選手権の前座試合の高校選抜東西対抗の応援に上京する先生方に、日本協会の役員、コーチから指導を受けてはどうかという高崎部長の提案から、指導者研修会が始まった。昭和52年から、東、中、西のブロックから、毎年様々な実践や研究発表が行われ、研究冊子としてまとめられている。技能の向上から運動部活動の運営、教材としての指導法など、幅広い発表がなされ、全国にラグビーを普及させるための貴重な資料となるなど大きな成果をあげている。運動部活動を取り巻く環境が大きく変化する状況の中、この研修会に大きな期待が寄せられている。

3　将来に向けて

専門部ではこの10年、ラグビー協会と密接な連携を図りながら高校ラグビーの在り方について検討を加えてきた。

国際化が進展する中、留学生等の外国人の大会参加や、海外との交流について検討を加え、国際化に対応した高校ラグビーの海外交流について一定基準を設けた。

一方、事故防止の観点から国内特別ルール、大会運営や競技方法などについても検討し、より安全なラグビーを目指してきた。

さらに、専門部はもとより、日本ラグビーの最も大きな課題である、競技人口減少に対する対応策についても、様々な論議が行われ、協会の支援による学校部活動に対する指導者の派遣など、新たな事業も展開しつつある。

今後もこれら課題に対し、専門部として積極的な取組みを進めていくことはもとより、一層協会との連携を密接にし、課題解決を図っていくことが不可欠であると考える。

この記念誌を編集するにあたり、全国の高校にラグビーを芽生えさせ、発展させてきたものは、多くの諸先輩のご努力とともに、全国のラグビー指導者一人々の熱意あふれる指導であったと改めて痛感しているところである。学校部活動を取り巻く環境が大きく変化している状況の中、新たな時代の高校ラグビーを築いていくため、全国の指導者の熱い情熱に期待しているところである。

《事務局》
〒400-0502 山梨県南巨摩郡増穂町最勝寺1372
県立増穂商業高校内
TEL 0556（22）3185
FAX 0556（22）3161

創　　立：昭和25年度

加盟校数		5,994校
部員数	男子	35,105名
	女子	53,059名
	合計	88,164名

年度	部長	副部長	記事
25		伊沢　三郎	第一回全日本高校大会横浜市で開催
			高松宮・同妃賜杯下賜
26	柳　一夫	伊沢三郎　森正三	全国高体連加盟
		佐藤実一	
27	〃	伊沢三郎　安楽末夫	
28	〃	〃	
29	森　義雄	〃	全国高等学校大会と改まる
30	〃	〃	個人戦が新設され、現在と同じ形式になる
31	〃	〃	
32	〃	〃	
33	〃	〃	
34	〃	〃	10周年記念式典
35	〃	〃	
36	〃	〃	
37	〃	〃	
38	〃	〃	全国高等学校総合体育大会となる
39	〃	〃	
40	〃	伊沢三郎　安楽末夫　谷　亮	
41	〃	〃　〃	
42	小林　茂	伊沢三郎　谷亮	
43	〃	〃	
44	〃	〃	皇太子ご夫妻行啓
			20周年記念式典
45	〃	遠井稔男　山本博	
46	川田　勇	〃	

年度	部長	副部長	記事
47	川田　勇	遠井稔男　山本博	全国選抜大会始まる。
48	〃	〃	
49	遠井　稔男	山本　博	
50	〃	〃	
51	〃	〃	
52	〃	〃	
53	〃	〃	
54	〃	〃	日本バドミントン協会加盟　30周年記念式典
55	〃	〃	
56	〃	大世古吉弘　鈴木祐司　森田精一	
57	〃	〃　〃　〃	
58	〃	〃　〃　〃	
59	〃	〃　〃　〃	
60	〃	〃　〃　〃	
61	〃	〃　〃　〃	
62	〃	〃　〃　〃	
63	〃	〃　〃　〃	
元	〃	大世古吉弘　鈴木祐司	40周年記念式典
			皇太子殿下行啓
2	〃	〃	
3	〃	〃	皇太子殿下行啓
4	〃	〃	
5	〃	〃	
6	〃	〃	皇太子殿下ご夫妻行啓
7	〃	大世古吉弘　鈴木祐司　保坂和也	
8	大世古吉弘	鈴木祐司　保坂和也	
9	保坂　和也	鈴木祐司　成田光生	鈴木副部長11月他界
10	〃	成田　光生	

1　沿　革

1.発足から40年

(1)年表

昭和25年度（1950）　全国高体連バドミントン専門部創設　全日本高校大会開催決定
高松宮、同妃賜杯下賜
第1回全日本高等学校バドミントン選手権大会開催（横浜市）
男女学校対抗（フリー出場）

昭和29年度　第5回全国高等学校バドミントン選手権大会と改まる（金沢市）

昭和30年度　第6回全国大会（神戸市）都道府県より学校対抗男女各々1チーム代表、個人戦を新設

昭和31年度　第7回全国大会（仙台市）より北海道は南・北各々からの代表となる。

昭和34年度　第10回全国大会（会津若松）にて10周年記念式典を行う

昭和38年度　全国高等学校総合体育大会として各種目統一される（記載省略）

昭和44年度　第20回全国大会（桐生市）
皇太子ご夫妻ご観覧
20周年記念式典及び祝賀会

昭和47年度　第1回全国高等学校選抜バドミントン選手権大会（真岡市）開催
個人戦のみ行われる

昭和49年度　第3回全国選抜大会（足利市）
団体戦（都道府県対抗）導入

昭和54年度　日本バドミントン協会加盟（全国大会に優勝旗を寄贈される）
第30回全国大会（大津市）
30周年記念式・祝賀会及び記念誌発刊学校対抗2複1単となる
第8回全国選抜大会（真岡市）
団体戦が学校対抗となる

昭和62年度　第38回全国大会（登別市）学校対抗2複3単と改まる

(2)専門部のあゆみ

昭和25年（1950）日本バドミントン協会広田兼敏副会長、伊沢三郎常務理事を中心とした方々のご努力により、高松宮、同妃賜杯を下賜され第1回全日本高校選手権大会が横浜市のフライヤージム（進駐軍専用体育館）で、昭和26年1月に開催されたが、当時はまだ組織もできない都道府県が多くあり実態もつかめなかったためにフリー参加とし、翌年からは8月開催とした。参加数は男子1都1道16県42校356名、女子1都1道13県30校102名で、学校対抗男子2ダブルス3シングルス、女子1ダブルス2シングルスで行われた。第6回大会で女子も男子と同様になると同時に個人戦も実施され、翌年地域性から北海道が南北に別れての代表となった。昭和54年に日本バドミントン協会に加盟、協会より優勝旗を寄贈される。学校対抗が2ダブルス1シングルスとなり、昭和62年に再度2ダブルス3シングルスとなった。昭和40年の第16回大会より沖縄も参加となり男女とも学校対抗49チーム、個人戦ダブルス96組、シングルス96名となり、毎年800～900名の参加選手数となった。

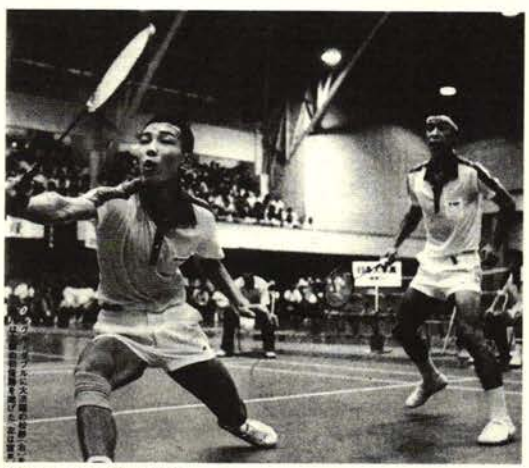
また、予選参加数も第38回登別大会では、チーム数が4,663チーム、個人戦ダブルスは、14,202組シングルスは21,523名に達し、その普及は素晴らしいものであった。

大会経費では第1回大会約205,000円であったものが、大会規模の増大や社会情勢の関係もあるが第36回大会では約2,4000,000円と120倍近く増大している。

大会名称も昭和38年に各種目が統一され、全国高等学校総合体育大会　高松宮・同妃賜杯
全国高等学校バドミントン選手権大会となった。

一方昭和47年に個人戦としてスタートした全国選抜バドミントン選手権大会も、第3回大会から団体戦が都道府県対抗として導入され、第8回大会では学校対抗に変更され、全国9ブロック代表で争われている。

（高体連40周年記念誌より抜粋、一部追加）



昭和56年全国総体

2　10年の歩み

(1)沿革概要(昭和63年度～平成9年度)

昭和63年度　第39回全国高校大会（宝塚市）
第17回全国選抜大会（宇都宮市）
平成元年度　第40回全国高校大会（高知市）
40周年記念式・祝賀会
皇太子殿下ご観覧
第18回全国選抜大会（葛飾区）
平成2年度　第41回全国高校大会
（塩竈市･松島町）
第19回全国選抜大会（高岡市）
平成3年度　第42回全国高校大会（富士市）
皇太子殿下ご観覧
第20回全国選抜大会（宇都宮市）
記念大会（各都道府県学校対抗）
平成4年度　第43回全国高校大会
（高鍋市・西都市）
第21回全国選抜大会（新潟市）
平成5年度　第44回全国高校大会（宇都宮市）
第22回全国選抜大会（大府市）
平成6年度　第45回全国高校大会（高岡市）
皇太子殿下・同妃殿下ご観覧
第23回全国選抜大会（上尾市）
平成7年度　第46回全国高校大会（松江市）
第24回全国選抜大会（札幌市）
平成8年度　第47回全国高校大会
（甲府市・竜王町）
第25回全国選抜大会（長岡京市）
記念大会（各都道府県学校対抗）
初めて公開抽選を行う
平成9年度　第48回全国高校大会（長岡京市）
第26回全国選抜大会（世田谷区）

(2)国際大会等への選手派遣

昭和63年度
☆日韓ジュニア交流競技会（韓国慶州市）
男子　対韓国A　0勝5敗
対韓国B　2勝3敗
女子　対韓国A 2勝3敗
対韓国B　2勝3敗
☆ヨーロッパジュニア選手権大会
（オランダ・ハーレム市）
男子　ダブルスベスト8佐藤嘉伸･郷路一郎組
女子　シングルス優勝宮村愛子
2位水井妃佐子
ダブルス　2位宮村愛子･水井妃佐子組
ベスト8　松田治子･坂田美佐組
☆日中ジュニア交流競技会
男子　対中国0勝3敗
☆ピマンタラワールド　ジユニア
バドミントン　インビテーション
（インドネシア･ジャカルタ市）
女子　シングルスベスト8宮村愛子
平成元年度
☆日・韓ジュニア交流競技会
（石川県松任市）
男子　対韓国1勝4敗
女子　対韓国0勝5敗
☆第5回世界ジュニア競技大会
（インドネシア･ジャカルタ市）
女子　ダブルスベスト8
阪本雅子･渡邉真由美組
☆西ドイツインターナショナルジュニア大会
（西ドイツ　デュッセルドルフ市）
男子　シングルスベスト8寺尾隆司
男子　ダブルス　優勝本田和裕･岡部英朗組
2位太田慎二･尾藤伸治組
ベスト8柴崎直樹･寺尾隆司組
斎藤一裕・大山宏司組
女子　シングルス優勝井田貴子
3位阪本雅子
ベスト8水井泰子･寺尾美紀
橋本淳子
女子　ダブルス　優勝阪本雅子･渡邉真由美組
2位寺尾美紀・篠原久子組
3位橋本淳子･井田貴子組
☆オランダ国際ジュニア大会
（オランダ　ダンウイック市）
男子　ダブルスベスト8斎藤一裕･大山宏司組
女子　シングルス3位井田貴子
女子　ダブルス優勝阪本雅子･渡邉真由美組
平成2年度
☆日韓ジュニア交流競技会
第1戦
男子・女子ともに0勝5敗
第2戦
男子0勝5敗
女子2勝3敗
☆第5回世界ジュニア競技大会
（インドネシア　ジャカルタ市）
ベスト16止まり
平成3年度
☆日韓ジュニア交流競技会

（愛知県大府市）
第１戦
男子・女子ともに０勝５敗
第２戦
男子・女子ともに０勝５敗
☆ヨーロッパジュニア交流競技会
（オランダ　ハーレム市）
男子ダブルス　　３位有田浩史・斎藤俊組
☆ドイツ国際ジュニア大会
（ドイツ　グッタスロー市）
男子　シングルスベスト８有田浩史
男子　ダブルス３位片岡直茂・成島瑞穂組
☆日中ジュニア交流競技会
第１戦・第２戦とも
男子　対中国０勝５敗
女子　対中国０勝５敗
☆世界ジュニア選手権大会
（インドネシア　ジャカルタ市）
女子ダブルス　３位増茂孝枝・中山智香子組

平成４年度
☆日韓ジュニア交流競技会
（韓国　光州直轄市）
第１戦
男子・女子ともに対韓国Ａ０勝５敗
第２戦
男子　対韓国Ｂ１勝４敗
女子　対韓国Ｂ　２勝３敗
☆日中ジュニア交流競技会
（中国　アモイ市）
第１戦・第２戦とも
男子対中国４勝１敗
女子対中国２勝３敗
☆オランダ国際ジュニア大会
☆ヨーロッパジュニア選手権大会
女子　シングルス３位水井泰子
女子　ダブルス２位中山智賀子・増茂孝枝組
３位貴田 泉・伊藤さおり組
☆世界ジュニア選手権大会
（インドネシア　ジャカルタ市）
女子　シングルスベスト８水井泰子

平成５年度
☆日韓ジュニア交流競技会
（福島県　郡山市）
男子　対韓国　　０勝５敗
女子　対韓国　　３勝２敗
韓国に十数年振りに勝利する
☆ヨーロッパジュニア交流競技会
（オランダ　ハーレム市）
女子　シングルス２位田中美保
女子　ダブルス2位田中美保・M.RASMUSSEN組

平成６年度
☆日中韓ジュニア交流競技会
（韓国西帰浦市）
男子　対中国　　１勝４敗
対韓国Ａ　０勝５敗
対韓国Ｂ　２勝３敗
女子　２勝１敗
対中国　　３勝２敗
対韓国Ａ　２勝３敗
対韓国Ｂ　４勝１敗
☆ヨーロッパジュニア交流競技会
（オランダ　ハーレム市）

平成７年度
☆オランダ国際ジュニア大会
男子ダブルスベスト８　舛田圭太・大東忠司組
女子シングルスベスト８　吉岡知香
ダブルス３位　　松本里衣・森かおり組
☆第３回日中韓ジュニア交流競技会
（中国　唐山市）
男子　対韓国　　０勝５敗
女子　対韓国　　１勝４敗
男子　対マレーシア０勝５敗
女子　対マレーシア４勝１敗
男子　対中国　　０勝５敗
女子　対中国　　４勝１敗
☆ヨーロッパジュニア交流競技会
（オランダ　ハーレム市　）
☆プリンスアジアジュニア選手権大会
（香港　沙田市）
国別団体戦
予選リーグ
対マレーシア３勝２敗
対香港　　３勝２敗
対タイ　　０勝５敗
決勝トーナメント
準決勝　対中国　０勝５敗
３位決定戦対インドネシア０勝５敗

平成８年度
☆第４回日中韓ジュニア交流競技会
（長崎県　長崎市）
男子　対韓国　３勝２敗
対中国　５勝０敗

女子　対韓国　1勝4敗
　　対中国　3勝2敗
☆ジャカルタオープン選手権大会
（インドネシア　ジャカルタ市）
男子　シングルスベスト8　舛田圭太
男子　ダブルス3位　山口博之·小吹公彦組
　　ベスト8　舛田圭太·大東忠司組
女子　シングルス優勝　三宅直子
女子　ダブルスベスト8　三宅直子·森かおり組
　　永峰弘子·井川里美組
☆バンコク国際競技大会
（タイ　バンコク市）
女子　シングルス3位　三宅直子
☆オランダジュニア国際大会
男子　シングルス優勝　舛田圭太
女子　シングルス準優勝　森かおり
男子　ダブルス優勝舛田圭太・大東忠司
女子　ダブルス準優勝井川里美・永峰弘子
　　3位森かおり・安城美香
☆ドイツジュニアオープン大会
男子　シングルス準優勝　舛田圭太
男子　ダブルス優勝舛田圭太・大東忠司
女子　ダブルス3位森かおり・安城美香
☆世界ジュニアバドミントン選手権大会
（デンマーク　シルキボルグ市）
コンソレーション　トーナメント
男子　シングルス優勝清水　裕
　　3位大東忠司
女子　シングルス優勝三宅直子
平成9年度
☆日中韓ジュニア交流競技会
（韓国　清州市　）
男子　対韓国　1勝4敗
　　対中国　4勝1敗
女子　対韓国　2勝3敗
　　対中国　1勝4敗
☆プリンス・アジアジュニア選手権
（フィリッピン　マニラ市）
男子18歳以下シングルス優勝中西洋介
男子17歳以下シングルス3位橋村竜彦
女子16歳以下シングルス3位後藤あゆみ
女子18歳以下シングルス3位岩脇　史
☆ヨーロッパジュニア交流競技会

国際大会をみると参加国にもよるが、平成1年・2年、平成8年・9年の活躍が特筆される。特に平成8年・9年の選手を中心に、21世紀で世界の頂点を目指して大きく羽ばたいてもらいたいものである。

(3)全国総体・全国選抜大会

過去10年間を振り返ってみると各大会も大きな変動もなく経過した中で、国際化の波が押し寄せ、外国人留学生の沈逸文（サンイーリン）（尚志）闇敏娜（ヤンミンナ）（高岡西）・張薇薇（チャンウェイウェイ）（尚志）等が高校総体に参加し活躍したのも今までになかった事である。

外国人留学生に対しては、参加制限が設けられ学校対抗では5～7名の中に2名のエントリーが認められ、1対抗戦の出場はその出場人数に関わらず、1試合とし、個人戦は各都道府県シングルス1名・ダブルス1組とした。平成7年に参加が認められて以来男子1名、女子3名が全国総体にエントリーした。

競技会場も平成元年の高知大会以後体育館ばかりではなく多目的ホール・産業センター・メッセ等を使用しての大会運営をおこなう開催県が増し、その関連からコートマットを多用するようになった。

また、種目開会式も文化ホールや会館等で行うようになり、試合を控えた選手が椅子に座りゆったりとした中で開会式が行われ、翌日の試合への影響が緩和されるようになった。

皇太子殿下のバドミントン競技への行啓が平成元年高知市、平成3年富士市、平成6年高岡市（皇太子殿下・妃殿下）と3度にわたったことは特筆すべきことであり、選手への大きな励みになっている。

この10年間の全国総体の成績をみてみると、学校対抗において男子は、上尾（埼玉）が4回・常総学院（茨城）3回、女子は四條畷学園4回・埼玉栄2回優勝。そのうち男子の常総学院がH2～H4年3連覇、上尾がH6～7年2連覇、女子において四條畷学園S62～平成元年3連覇、埼玉栄H8～9年2連覇を成し遂げている。シングルスにおいて男子は舛田圭太（金沢市立工業）H7・8年、女子の水井妃佐子（四條畷学園）S63・H1年、水井泰子（四條畷学園）H3・4年闇敏娜（高岡西）H8・9年が2連覇を果たしている。尚、選手は違うが此花学園H2・3年連覇し、ダブルスにおいても、男子の常総学園がH5～7年と3連覇、女子の熊本中央女子がS60～H1年まで5連覇、聖ウルスラ学院H3・4年と2連覇している。

全国選抜大会では、学校対抗で男子常総学院が5回優勝のうち、H4～7年と4連覇、熊本商大付属S63・H1年と2連覇し、上尾も2回優勝している。女子熊本中央女子S62・63年、常総学院H2・3年と2連覇し、熊本信愛女学院が2回優勝している。

シングルスでは、女子の宮村愛子（熊本中央女子）がS62・H1年と、山田潤子（高岡女子）がH5・6年と連覇、選手が変わるが女子ダブルスで熊本中央女子がS62・63年と連覇している。

この結果から考えると伝統校が、実力を発揮させ成果を上げている事が解る。これらの伝統校が21世紀に同じような活躍をするためには指導者の引き継ぎがスムーズにでき、地域や学校のバックアップを得ることが大切である。また、伝統校を打破し活躍する指導者が生まれ、新たな伝統育ててくれることを期待している。

(4)役　員

専門部役員でみると昭和49年から22年間全国専門部部長として、専門部に寄与された遠井稔男先生が平成8年3月、16年間副部長として部長を支えて来た大世古吉弘先生が平成9年3月に部長を最後にご退職なされた。

また副部長として17年間部長を補佐してこられ、病気をおして京都総体にも競技委員長として最後まで、ご活躍された鈴木祐司先生が平成9年11月に現職のままご他界なされたことは私たちにとって大きな衝撃であった。

その他長期間に渡って本専門部を指導し、発展させてきた多くの先生方がこの10年間で現職を離れて行き、またご他界なされ大きな転機を迎えようとしている。

3　将来に向けて

諸先輩が50年間に渡り作り上げ、発展して来た本専門部を21世紀に大きく羽ばたかせることが我々に課せられた義務であり、諸先輩のご苦労に報いる唯一の方法である。

年々少子化や多様化が進み部活動に積極的に参加する生徒が減少する中、都道府県の専門部を中心に、技術講習会や指導者研修会などを計画し、部員の確保や普及が大切となっている。

また、ジュニア（小学生）から中学生、高校生へのつながりを大切にして、ジュニアが終わるとバドミントンと離れ他の競技へ移動したり、部活動をしなくなってしまう生徒を少なくしていかなければならない。バドミントン競技を通して青少年の心身ともに健全なる発達を促進させ、「生きる力」や「豊かな心」を育て、生涯を通じてバドミントン活動を実践していく上での基礎づくりや競技力の向上など活動をどのように展開していくか検討が必要になってきている。

このような状況の中でトマス杯やユーバー杯・オリンピックなど世界の大会で活躍し、バドミントンが他のスポーツに負けないメジャースポーツになり、一人でも多くの青少年がバドミントンを通じて立派な社会人となってくれることを期待している。

（文責　部長 保坂和也）

皇太子殿下行啓（富士市）

平成2年全国総体

《事務局》
〒410-0033 沼津市杉崎町11-20
県立沼津中央高校内
TEL 0559（21）0346
FAX 0559（24）7158

創　　立：昭和25年10月

加盟校数		2,472校
部員数	男　子	7,035名
	女　子	32,168名
	合　計	39,203名

年度	部　長	副部長	記　事
25	松岡　敬之		第1回高校総体女子西宮市開催参加10校
26	〃		
27	〃		第3回より前年度優勝推薦出場開始
28	〃		安田女子2年連続優勝
29	〃		
30	〃		47都道府県参加
31	〃		
32	〃		
33	〃		
34	〃		
35	〃		今治明徳2年連続優勝
36	〃		
37	〃		
38	〃		
39	山田　基男		全国3ブロックで輪番開催となる
40	〃		
41	〃		第1回男子開催
42	〃		女子48都道府県参加
43	〃		宇都宮女子・大分2校優勝
44	〃		
45	〃		
46	〃		宇都宮女子・熊本女子2校優勝
47	加藤　正雄		
48	〃		
49	〃		
50	〃		

年度	部　長	副部長	記　事
51	加藤　正雄		
52	宍倉　博		
53	〃		男女前年度推薦廃止に代わって開催地推薦
54	〃		
55	〃		
56	〃		
57	〃		
58	〃		全国男子・女子選抜大会開催
59	〃		男子高知学芸2年連続優勝
60	〃		
61	竹内　吉治	恒成・増田・梶原	部長、副部長選任の明確化
62	〃	〃	
63	〃	〃	
元	〃	〃	
2	大黒　賢時	〃	常任委員会を年3回開催
3	〃	〃	夙川学院5年連続優勝
4	〃	恒成・山本・梶原	
5	〃	出口・高橋・深澤	第45回記念女子高校選手権大会
6	〃	〃	総体男女優秀選手表彰
7	高橋　清生	出口・飯塚・深澤	第30回記念男子高校選手権大会
8	深澤　隆徳	出口・飯塚・渡邊	
9	〃	〃	男子多度津工業2年連続優勝
10	〃	佐藤・飯塚・渡邊	第50回記念女子高校選手権大会

1 沿 革

ソフトボール専門部は、昭和25年10月、第5回国民体育大会ソフトボール競技高校女子の部が行われた愛知県安城市において協議決定された。当時、都立台東商業高等学校教諭松岡敬之氏が中心となって組織し、高等学校女子のソフトボール競技の普及振興に尽力された。

第1回大会は、兵庫県西宮市において、1府8県9校が参加し、記念すべき大会に地元兵庫県芦屋女子高等学校が優勝を飾った。

第2回大会は、2府8県10校が参加、兵庫高等学校が優勝した。

第3回大会からは、前年度優勝校が推薦出場することになり、第6回大会には、1都2府38県42校が参加し、大阪府代表阿倍野高等学校が優勝した。

第10回大会は1都1道2府42県47校が参加し、大会は盛会になった。当初開催地は第6回大会以外は第13回大会まで兵庫県西宮市で開催された。第16回大会は、長野県伊那市で行われたが、この大会から東・中・西のﾌﾞﾛｯｸで順次開催されるようになり、開催地が移ることから、全国的なソフトボール競技の普及振興に大いに貢献することになった。

第19回大会（昭和42年・福井県勝山市開催）から、沖縄県代表読谷高等学校が参加し、1都1道2府43県48校が参加することになり、以来、今日まで盛況を見るようになった。

高等学校男子の大会は、ソフトボール専門部部長山田基男・加藤正雄両専門部長の開催への献身的な努力が、山上政則（香川県）先生をはじめ、多くの関係者とともに進められた。

昭和41年、オープン参加として大阪府富田林市において、第1回大会が開かれ、1府7県14校が出場し高知県代表窪川高等学校が初優勝を遂げた。

第2回大会は高知県高知市で開催され、1府7県13校が参加、高知県代表土佐清水が優勝した。第3回大会は、山梨県富士吉田市で開催され、1府10県20校が参加徳島工業優勝、第4回大会は1府9県17校参加し新島学園が優勝、第5回大会は1府12県23校が参加し松山商業が優勝した。

この間、関係者の努力が結実し、全国高等学校総合体育大会、参加種目として承認され、第6回大会香川県坂出市開催より、正式種目として実施されるようになった。

現在では、大会参加規模適正制度により、41都道府県代表42校が参加している。

高校選抜大会は、高校ソフトボール関係者の要望に検討されてきたが昭和57年度から男子は神奈川県横浜市、女子は東京都において連続して開催され、男女共9年度で16回大会となった。このように高等学校のソフトボール競技の全国大会が、関係者のご努力で夏と春に行われていることから、めまぐるしい発展を遂げ、毎年全国大会が盛大になり競技力は益々向上し、特に都道府県の地域による力の差が少なくなり全国大会に出場する学校の競技レベルは非常に高くなった。

平成6年度男子優勝沼津学園・監督井伊

平成8年度男子優勝多度津工業2年連続優勝

2　10年の歩み

この10年間の専門部活動は、全国高等学校ソフトボール専門部の組織強化の時代であった。

創世期～昭和62年

昭和62年までの、全国ソフトボール専門部の活動は、おもに全国高校総体ソフトボール競技を、スムーズに運営出来るための活動が中心であった。

このため次のような問題点が話し合われた。

1、専門部規約や専門部長の選任規定もなく、専門部長は何時何処で選任するかも曖昧であった。
2、専門部はどちらかとゆうと専門部長一人とゆう感じで、専門部常任委員会はその役割を十分果たすことができなかった。
3、全国高等学校体育連盟ソフトボール専門部が、財政的・組織的に機能していない。

昭和61年～平成元年

竹内吉治部長は、即断即決型のテキパキとした先生でした。

先生はとりあえず、全国高体連ソフトボール専門部規約にとりかかり、専門部の部長は新任期の前年に選任し、副部長は3人制（東・中・西各ブロック1名）で、任期は2年で、再任可の申し合わせ事項を規定してスタートし、全国高等学校ソフトボール専門部、組織の基礎を築いた。

平成2年～6年

大黒賢時部長は生徒のために意欲的に組織を大切にし、良いと思われることは実行できるよう最大限努力する、又会議で決めたことは必ず実行する。

1、高校生がソフトボールをして良かったと思える専門部にしたい。
イ、高校生のスコアラーのベンチ入り
ロ、全国高等学校総合体育大会ソフトボール専門部優秀選手表彰制度
ハ、記念大会の導入
ニ、全国高校総体組み合わせ抽選会に常任委員の立ち会い
2、全国ソフトボール専門部の規約等を整理しガラス張り化した組織として確立する。

3、常任委員会を指導機関として高めるため機関会議を年間3回ほど開催する。
イ、部長・副部長会議
ロ、常任委員会複数回開催

4、全国ソフトボール専門部の財政基盤を確立。
イ、専門部協力金の徴収。
ロ、専門部予算の策定と執行。

5、監督・顧問の研修活動推進。
イ、学校顧問の公認指導者資格取得問題の解決。
ロ、全国高等学校ソフトボール専門部主催指導者技術講習会の開催

6、全国ソフトボール専門部50周年誌編纂の推進。

このように専門部活動の中心は「高校生のため」をすえたこと及びその運営を「個人商店から株式会社方式へ」の転換を明確に示して、専門部内組織をフル稼働させた。

その中で全国9ブロックからの代表による、常任委員会会議は、大阪府江坂のサニーストーンホテルで行れた。

九州（宮崎）河野、中国（広島）出口、四国（香川）岡本、近畿（京都）吉田、東海（岐阜）高橋、関東（茨城）近藤、東北（宮城）伊藤、北海道・深澤、各氏方が改革意欲にも燃えて、常任委員会に出席した。

このように全国ソフトボール専門部の10年間は組織強化を目指した活動の時期であった。

また全国高校総体会場視察に専門部長とブロック常任委員を加えて行うなど専門部の活性化をもたらした。

このように全国高等学校ソフトボール専門部はその飛躍を目指して大きく転換し今日にいたっている。

文責山本善昭（元常任委員・石川県）

3　将来に向けて

全国的に、高等学校の部活動が成り立たないという問題が大きく指摘されている時、ソフトボール専門部も例外でなく、ここ数年登録数の減少が見られる。

個性化の時代、と言われ束縛されることを嫌う現在の高校生が、先輩、後輩の関係が厳しく、統率のもとに優勝を追求する運動部の活動を敬遠する傾向になっている。部活動が多彩で活発なものとなり、家庭や地域の人々の理解をより深めることに全力を投じたい。今年７月に行われた第９回世界女子ソフトボール選手権で第３位となりシドニーオリンピックの出場権を勝ち得たのを期に、国際化に対応した競技力の向上と、楽しみながら、活動しやすい底辺拡充の二面性を考えてソフトボール専門部の活動を考えていきたい。

平成８年度女子優勝白鳳大学足利高校

平成７年30回記念男子優勝岡豊高校

平成３年度尻川学院５年連続優勝

平成７年選手宣誓
宇部女子高校
佐古恵香選手

《事務局》
〒037-0093 青森県北津軽郡金木町字芦野200
県立金木高校内
TEL 0173（53）2079
FAX 0173（52）3739

創　　立：昭和26年

加盟校数	268校
部員数	1,889名

年度	部長	事務局長	記事
26	万代　鹿三	万代　鹿三（兼務）	相撲専門部発足
31	〃	〃	第1回高校相撲ハワイ遠征。
35	〃	〃	相撲専門部10周年記念式典、大阪府立体育館で行われる。
39	〃	〃	東京オリンピックで高校生も参加し相撲のデモンストレーションを行なう。
41	〃	〃	全国高校相撲選手権大会が地方持回りとなる。
43	土井　武夫	小田島武夫	
48	〃	〃	第2回高校相撲ハワイ遠征。
50	井谷　正気	三島　邦夫	
51	〃	〃	第3回高校相撲ハワイ遠征。
52	〃	〃	高知の新人大会が高体連主催となり名称も全国高等学校相撲（新人）選手権大会となる。
54	井谷　正気	三島　邦夫	第1回高校相撲ブラジル遠征。
56	友部　利平	〃	
57	友部　利平	三島　邦夫	第60回大会を記念して優勝旗を更新する。
60	高松松之介	〃	
61	〃	佐藤　功	
元	竹内　英男	鈴木　洋祐	
3	越智　柾友	〃	
5	村岡　満蔵	一戸　隆男	
7	大竹不二男	〃	第1回日米高校相撲選手権大会・ハワイ大会開催。
8	〃	〃	第2回日米高校相撲選手権大会・ハワイ大会開催。全国高校相撲選手権大会の団体・個人決勝トーナメントにフリー抽選制度を導入
9	〃	〃	第3回日米高校相撲選手権大会・ハワイ大会開催。
10	〃	〃	

（現部長・大竹不二男）

1　沿　革

全国高等学校相撲選手権大会は大正８年、大阪府堺市大浜において第１回全国中学校選手権大会という名称で毎日新聞主催のもとで開催されたものである。以来、平成９年度京都大会は第75回を迎えるにいたった。その間、第２次世界大戦が勃発したため昭和17年より昭和20年まで中止の止むなきにいたった。昭和21年戦後の動乱の中大阪毎日新聞社の献身的なご努力の結果、堺市大浜において復活の運びとなった。

その後、幾多の変遷を経て昭和26年10月に全国高等学校体育連盟相撲専門部が発足することになった。初代部長の万代鹿三先生は、高体連相撲専門部の顔であり専門部創設の功労者であった。万代先生を無くして全国高体連相撲専門部を語ることは出来ないのである。

全国高体連相撲専門部を顧みると昭和31年に高校相撲として始めてハワイ遠征が実施され以後、何回かの遠征が繰り返され選手の相撲にたいする意欲を高めハワイとの国際交流に貢献することとなった。

昭和39年東京オリンピック大会において日本武道館を会場として一大デモンストレーションを展開し国際的に相撲をアピールしたのである。

昭和41年には全国高等学校総合体育大会の一環として地方持回り大会として最初の大会が青森県十和田市において開催された。各地域に高校相撲を紹介する機会として関係者に多くの期待を持たせることとなった。

高知市で開催されていた新人大会が昭和52年から全国高体連の主催大会として公認され各都道府県代表が出場し全国高等学校相撲新人選手権大会の名称のもと盛大に開催されるにいたった。

昭和57年には、大阪毎日新聞社のご厚意により優勝旗が更新され今日にいたっている。この優勝旗を明大中野高校が昭和57年より昭和60年まで４年連続で獲得した偉業は長く歴史に刻まれることになった。

2　10年の歩み

竹内部長の時代（平成元年～２年）は、高校相撲はあくまでも教育の一貫である。したがって相撲競技は礼に始まり礼に終わることを重点とし勝負のみをすべてととする行動は、これを改めることになった。

越智部長の時代（平成３年～４年）は、高校相撲発展のために立ち会いの正常化を第一の施策として取り入れた。正常の立会いとは、相手の立場を尊重し、互いに呼吸を合わせ「阿うん」の呼吸で立つ、自分勝手な勝負を挑む姿勢こそ立会いの乱れの源泉であるとした。

第二の施策として、高体連相撲専門部競技審判団の創設であった。過去40年来、競技審判は開催県相撲連盟役員と高体連相撲専門委員とで構成されていた。しかし、相撲専門委員は各地域で２～３年で交替し、審判経験の乏しい先生が全国大会で審判を努めるケースもみられ、これを改め審判団を構成することとなった。このことは審判技術の向上はむろんのこと審判の権威を高め大会運営もより円滑になった。この二つのことは、高校相撲に大きな発展をもたらす結果となった。

村岡部長時代（平成５～６年）

村岡部長は自分が高校・大学時代に相撲選手として体験したことを高校生に懇切丁寧に指導をし、大会の運営・高校相撲の発展に人一倍情熱をもっていました。その村岡部長は、平成６年12月27日に突然御逝去され、その後を私が引継ぐことになったのである。第１に引継がなければならなかったのは、平成７年度の全国高校相撲選手権大会の開催のことであった。大会運営に関し会場地との連絡や専門部の管理体制の確立や部長としての責務の遂行など問題は山積していたのである。第２に、高校相撲の国際化と発展のため懸案とされてきた日米高校相撲選手権大会の開催でした。ハワイ・ホノルルフェステバルの一環として、この大会を実現させるため努力してきた故村岡部長の遺志を継ぎ一戸事務局長や関係者の努力により、第１回目の大会が実施され20名の選手と10名の役員が

参加することとなり大会は盛会裡に終える事ができたのである。 平成8年度全国高校相撲選手権大会からは、団体・個人決勝トーナメントをフリー抽選として大会運営をより迅速にし、抽選の妙が試合に反映し醍醐味が増す一因ともなったのである。

3　将来に向けて

高校相撲の今後の課題として相撲人口の減少をどの様にして食い止め拡大を計るかにある。その為には、①指導者の育成。②インターハイへの体重別制の導入などが考えられる。相撲人口の減少を食い止め増加させるもう一つの思索として相撲の授業を実施してみてはどうか。

ここで『相撲授業の現状と課題』について考察してみたいと思う。

＜武道の学校体育導入の変遷＞

昭和22年に学校体育指導要綱が戦後初めて制定された際、驚くことに「相撲」が陸上競技の種目の一つとして取り上げられている。昭和26年に試案として学習指導要領が示され、男子の中心教材として「相撲」が取り上げられた。昭和35年に「格技」という運動領域が設けられ、「相撲」「柔道」「剣道」が取り上げられた。昭和45年の改定で「柔道」「剣道」は、必修選択科目と決められたが「相撲」は選択制となったのである。平成元年に「格技」が「武道」と改称されても「相撲」という歴史ある競技は、今日にいたっても授業として実施されていないのである。それでは、なぜ相撲が授業として実施されないのか少し考えてみたい。

＜場所の問題＞

現在、高校体育の授業平均生徒数は約40名。そこで、体育の授業を行っていく場合、いかに一度により多くの生徒を能率よく動かすかが問題であ。「柔道」「剣道」は、学内の施設（柔・剣道場）で、その人数を賄うことが充分に可能である。「相撲」は、土俵を中心とした狭い場所で授業を行わなければならないので創意工夫が必要である。さらに現在、土俵および道場を常備している学校が非常に少い。また、相撲マットを使用した授業も考えられるが体育館等で使用しなければならなく他の種目との兼ね合いもあり困難な点も生じると思われる。

＜指導者の問題＞

教諭において、相撲専門の指導者および相撲競技経験者の数が著しく不足しているのが現状である。武道教育を徹底して行うのであれば、武道教諭および経験者の採用を推進するよう行政にお願いしたい。「柔道」「剣道」は、必修選択科目であり比較的採用も多いように思われる。「相撲」は選択科目である分、困難な面が多々あるのでしょうが。

＜生徒の現状とまわし着用の問題＞

現在の高校生は、清潔を良しとし、スタイルを気にする。そこで問題となるのが「まわし」の着用である。授業において裸でのまわしの着用は、現代っ子の気質からも無理である。そこでまわしはジャージの上から着用させ、慣れてきたらなるべく裸につけさせるよう指導してはどうか。また、現在の生徒たちは、大相撲にはテレビ等で接することもあろうがアマチュア相撲に接する機会が少いのが事実である。そこでビデオ等でアマチュア相撲を学習させ理解を深めることも必要であろう。

＜指導の方法＞

授業として取り上げる場合、多くの人数の生徒をいかに無駄なく、全員を相撲に取り組ませ学習効果をあげるかである。まず最初に、相撲の基本動作（塵浄水の動作・蹲踞・中腰の構え仕切りの動作・すり足・立ち会いの動作など）の指導。つぎに身体鍛練学習（四股・鉄砲・ぶつかり稽古・腰割等の柔軟体操など）の指導。そして対人技能（押し・寄り・投げ技など）の指導。最後に試合形式の授業を展開する。

具体的にはまず、参加生徒を10名程度のグループに分けることから始める。このグループ分けは体重別に分けることを基本とし行う。授業の展開が進に連れ体格差を考慮しながら能力別によるグループ編成と移行する。基本動作・身体鍛錬学習では、生徒の能力に応じた授業内容で興味、関心を持たせ相撲を楽しむことができるような指導を心掛けることが必要である。

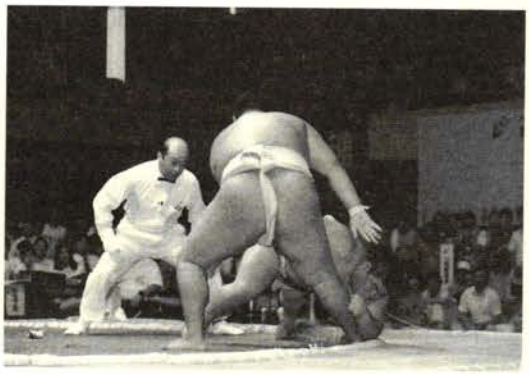
対人技能学習では、用具（例えば、ラグビーのタックルマシーンなど）を用いて、仕切りと立ち会いの練習を行い、その後二人一組になり相撲の基本である押しの練習を行いまた、前さばきの練習を取り入れるなどし基本技術の向上に努める。このように実施してきた学習の最終目標は、試合形式による相撲の実践学習であり

相撲の学習をとおし、日本古来のスポーツに親しみ、規則を守り、礼法を身につけ、相手を尊重し、健全で健康な人間形成を行なうものである。相撲の授業を展開することは、生徒の体力向上と人間形成に役立ち、合わせて高校相撲、アマチュア相撲の人口増加につながるものと確信する。国技相撲道の発展のために関係各位のご尽力を賜らんことをお願いする次第である。

＜高体連相撲専門部　大竹不二男・奥野皓祥＞

昭和46年度全国高等学校総合体育大会
第49回全国高等学校相撲選手権大会
開会式（高知県高知市）

昭和48年度　全国高等学校総合体育大会
第51回全国高等学校相撲選手権大会
団体戦　決勝トーナメント準々決勝（三重県鳥羽市）



平成9年度　全国高等学校総合体育大会
第75回全国高等学校相撲選手権大会
個人戦　準決勝　熱戦の一番（京都市）

平成10年度全国高等学校総合体育大会
第76回全国高等学校相撲選手権大会
開会式（徳島県石井町）

《事務局》
〒203-0052 東京都東久留米市幸町5-8-46
都立久留米高校内
TEL 0424（71）2510
FAX 0424（75）8400

創　　立：昭和26年6月23日

加盟校数（男子）全日制　3,662校
定時制　211校
（女子）全日制　1,970校

部員数　男子　36,109名
女子　9,230名
合計　45,339名

年度	部長	副部長	記事
26	細川　熊蔵	羽川　五郎	全国高体連柔道部発足
28	〃	古曳　保正	全国高校総体3年連続出場校の表彰を定める
29	〃	〃	初の審判講習会開催
38	〃	〃	文部省指導要領が改訂
39	〃	〃	全国高校総体の個人戦が3階級となる
41	〃	〃	柔道部設置15周年記念誌発行
42	〃	〃	第1回日米親善試合開催
43	藤原豊三郎	工藤　信雄	
44	〃	〃	全国高校総体個人戦減点法改正
46	〃	〃	高体連柔道部20年史発刊日独高校柔道親善大会開催
48	工藤　信雄	和村　公男	「高校生の柔道」の改訂
51	〃	松岡　徹	全国高体連柔道部25周年特集号発刊
		杉谷　輝雄	
52	〃	堤　俊	第1回教員柔道大会開催
53	〃	加藤　秀雄	全国高校総体個人戦4階級となる
54	〃	〃	第1回全国高校柔道選手権大会開催
55	和村　公男	加藤　秀雄	
56	〃	小倉　末男	全国高体連柔道部30年記念誌発行
		松岡　徹	
59	加藤　秀雄	今井　孝造	
60	加藤　秀雄	樋口　正三	国際スポーツフェアの一環として第1回国際高校柔道選手権大会開催
		伊藤　剛	
		西川　廣	
61	〃	石光　孝彦	全国高体連柔道部35周年記念特集号発行
62	〃	〃	高校選手権大会で女子の個人戦5階級になる
63	〃	〃	全国高校総体男子個人戦5階級となる高校選手権大会に男子個人戦が増設女子7階級となる
2	〃	〃	全国高校総体女子団体戦が開催される
3	西川　廣	伊藤　剛	国体で少年女子が実施
		石光　孝彦	全国高体連柔道部40周年記念誌が発行される
		吉田　忠征	
4	〃	橘川　謙三	高校選手権大会が国際審判規定で実施日米高校柔道国際交流25年史を刊行
5	〃	〃	日本・ハワイ高校柔道国際交流を実施
6	〃	〃	「高校生の柔道」の改訂版刊行
7	〃	〃	イタリアジュニア国際柔道大会に選手派遣
9	〃	〃	高校選手権大会の20回の軌跡として記念誌発行
10	〃	〃	

1 沿 革

(創立年度～)

全国高等学校体育連盟柔道部は、戦後直ちに進駐してきたＧＨＱが各方面にわたって指令した中に、柔道・剣道を主とする武道の禁止が含まれていて、昭和25年にＧＨＱが解散されるまでその禁止が解除されないで、全国高等学校体育連盟が組織されたときには一緒にスタートすることができず、3年程遅れてスタートをする。

すなわち昭和26年6月23日、岸記念体育館に18都道府県の代表が集まって確認しあい、この日をもって全国高体連柔道部が発足したのである。それは昭和25年10月23日の文部次官通達から8ヶ月後のことであり、満5ヶ年の禁止解除を待ち望んだ先輩諸氏の汗と涙の結晶であるともいえる。

昭和25年10月23日、学校柔道の禁止が解除される。

昭和26年1月24日文部省主催の学校柔道指導者講習会が開催され、同年4月、全国高体連理事会で専門部を設置することが決定される。そして同年6月、全国高体連柔道専門部が設置される。

昭和27年調査研究が専門部の中に位置づけられ、運動選手に関する調査、柔道に関する調査、大会における決まり技の種類等の調査研究が行われる。

昭和28年全国高校総体3年連続出場校の表彰を定める。

昭和29年初の審判講習会が開催される。昭和32年第6回全国高等学校柔道大会に沖縄県代表が初参加し、記念すべき大会となり、そのうえ、試合場を50畳に決定される。

昭和34年文部省より補助金が出される。また、研究調査報告書を作成することになる。

昭和36年第10回全国高等学校柔道大会より団体戦に加え、個人戦がもうけられ、前年度優勝校の次年度参加が承認される。10周年記念誌が発行される。

昭和38年文部省指導要領の改定があり、柔道に1～2単位をくわえ充当できることとなる。

昭和39年第13回全国高等学校柔道大会の個人戦が3階級（軽量級、中量級、重量級）となる。

昭和40年審判法を中心とする指導者講習会が開かれる。

名称変更（大会名）があり、全国高校総体の一環となったが、第○回全国高等学校柔道大会の名称は継承されることになり、「選手諸君に望む」の心得が出されたりして、高校柔道が大いに飛躍した1年でもあった。

昭和41年柔道部設置15周年記念誌を発行する。

昭和42年第1回日米高校親善試合が行われる。全国高体連柔道部発足当初より部長をつとめられていた細川先生が、8期の任期を終えて勇退され、藤原豊三郎先生が2代目の部長として就任される。また、退任に当たり個人戦各階級に細川賞として優勝楯を寄贈される。

昭和43年第9回研究調査報告書を作成し、発刊する。

昭和44年全国高等学校柔道大会の個人戦減点法で引き分けが多く、引き分け戦法を防止するため引き分け点数を、－2.0から－2.5に改正される。

昭和45年米国選手団を日本に初めて迎えて、和歌山・京都・岡山・福岡・名古屋・金沢・宇都宮・東京で親善試合が行われる。また「高校生の柔道」の英文も発刊されるにいたる。一方、定時制・通信制大会が別に開催され、12月には沖縄本土復帰を願い、16校による沖縄選抜大会が開催される。

昭和46年多くの先生方の努力により、全国高体連柔道部20周年誌が発刊され好評を得る。また、初の日独高校柔道親善大会として11名の選手団を西ドイツに派遣する。このように年々国際交流が盛んとなり、活気に満ちた高校柔道界になっている。

昭和48年「高校生の柔道」の改訂が行われる。

2代目部長の藤原先生が3期の任期をおえて勇退され、工藤信雄先生が3代目部長として就任される。

昭和49年研究調査報告書代の賃上げ（100円を250円に）、立ち姿勢からの身を捨ててとる腕固めの禁止、反則は厳しくとるなど確認される。

昭和51年第17回研究調査報告を、全国高体連柔道部25周年特集号とする。

昭和52年東京講道館に於いて第1回教員柔道大会が開催され、全国各地から代表の先生方が集まって熱戦をくりひろげる。

昭和53年第27回全国高等学校柔道大会から個人戦に軽重量級（86kg以下）が加わり、今

までの3階級から4階級となる。

昭和54年4月1日、日本武道館に於いて第1回全国高校柔道選手権が開催され、天理高校が記念すべき優勝の栄誉に輝く。また、今まで行っていた米国との国際交流としての日米高校親善試合の形を変えて行うこととなる。

全国9ブロックより52校の代表チームが出場

昭和54年4月1日記念すべき第1回大会が日本武道館にて開催された

昭和55年3代目の工藤先生が3期の任期をおえて勇退され、かわって和村公男先生が4代目部長として就任される。

昭和56年全国高体連柔道部30年記念誌が、多くの先生方の努力と協力によって発行される。

昭和57年従来より提案されている全国高校女子柔道大会について、とりあえず実態調査をして前向きに検討することになる。

昭和59年4代目部長の和村先生が3期の任期で勇退され、かわって加藤秀雄氏が5代目部長として就任される。

昭和60年国際スポーツフェアの一環として第1回国際高校柔道選手権大会が開催され、大いに盛り上がりをみせる。

昭和61年全国高校柔道選手権大会に初めて高校女子の全国大会が加わり、個人戦4階級(50kg以下・55kg以下・60kg以下・60kg超)で熱戦が繰り広げられる。全国高体連柔道部35周年記念として特集号が発行される。

昭和62年第36回全国高等学校柔道大会から、都道府県加盟実施校数の増加により、東京都・大阪府が各1校増数され参加校数が51校となる。第2回全国高校女子柔道体重別選手権大会が個人戦4階級から5階級に変更して実施される。

2　10年の歩み

昭和63年8月1日～3日兵庫県立文化体育館に於いて第37回全国高等学校柔道大会が開催される。この大会より男子個人戦が1階級増設され5階級となる。

春の全国高等学校柔道選手権大会が10回目を迎えて記念大会として大々的に実施される。〔男子個人戦（無差別）増設、女子5階級から7階級に増設〕国際交流については、韓国との交流が本年度実施される。

平成元年8月2～4日高知県春野総合運動公園体育館において第38回全国高等学校柔道大会が開催される。永年の念願であった女子団体戦が来年度全国大会より実施の報告となる。また、平成3年8月静岡大会で全国高体連40周年記念事業を実施することが決定される。

平成2年8月1～4日宮城県角田市総合体育館に於いて第39回全国高等学校柔道大会、女子柔道第1回大会が開催される。念願の女子団体戦が新設されて記念すべき大会で大変に盛り上がりをみせる。8月の全国委員会で40周年記念シンボルマークを応募者132点の中から岡山県岡山工業高校教諭檜原靖先生の作品が最優秀として選ばれて採用されることになる。

全国大会の女子新設にともない全国高体連会長杯、文部大臣杯、全日本柔道連盟優勝旗（持ち回り）が授与されることになる。

平成2年度から新設された女子柔道団体戦

平成3年8月7日～10日静岡市中央体育館に於いて第40回記念全国高等学校柔道大会が盛大に開催される。

8月7日全国高体連柔道部40周年記念式典が静岡ターミナルホテルに於いて嘉納行光全柔連会長、福田満雄全国高体連会長、日米交流の功労者、ジョージ・ウィルソン、ジョージ・ウチダ、マイケルマツモト先生はじめ多数の来賓ならびに各都道府県柔道部長の出席をいただき厳粛で立派な式典が挙行される。

この年の石川国体より少年女子が実施されることになる。しかし現行規模の総枠の関係か

ら成年男子47チーム、少年男子26チーム、成年女子16チーム、少年女子16チームとなる。

全国高体連柔道部40周年記念の一環として40年誌が10月に発行される。

平成4年8月8日～11日宮崎県延岡市民体育館に於いて第41回全国高等学校柔道大会女子柔道第3回大会が開催される。秋篠宮殿下、同妃殿下のご臨席を仰ぎ、会場は白熱した雰囲気につつまれる。第15回全国高校柔道選手権大会より、従来の審判規定から国際審判規定で実施される。

国際交流も多くの国と行われ、特に日米高校柔道の交流は25年を迎え、「日米高校柔道国際交流の25年史」が刊行される。

5代目部長の加藤先生が5期の任期をおえて勇退され、かわって西川廣先生が6代目部長に就任される。

平成5年8月8日～11日栃木県宇都宮市体育館に於いて第42回全国高等学校柔道大会が開催される。全国高校柔道選手権大会中に行われた委員会で団体戦の出場枠の検討委員会を設置することが決定される。

国際交流では講道館、全日本柔道連盟のご理解とご支援をいただき、多くの国と交流を続け、新たに日本・ハワイ高校柔道国際交流を実施する。

平成6年8月1日～4日富山県小杉町総合体育センターで記録的な猛暑の中、第43回全国高等学校柔道大会が盛大に開催される。1年間を通しての問題点として、監督の在り方について全国委員会で検討される。

国際交流では、例年通り日米高校柔道の国際交流が行われる。第30回の全国高体連研究大会が静岡県に於いて盛大に開催され、高体連柔道部からの研究発表が行われる。

「高校生の柔道」の改訂版が刊行される。

平成7年8月8日～11日島根県立体育館に於いて第44回全国高等学校柔道大会が開催される。また、全国高校柔道選手権では、昨年度大会決勝に進出した都道府県に出場枠1校を加えて実施される。

国際交流では、日米高校柔道の国際交流や日本・ハワイ高校柔道交流が例年通りに行われたほか、全日本柔道連盟の選手強化の一環として、イタリアジュニア国際柔道大会に高校強化選手を派遣する。

平成8年8月8日～8月12日山梨県小瀬スポーツ公園武道館に於いて第45回全国高等学校柔道大会が盛大に開催される。5月に行われた総体検討委員会、理事会で、男子個人戦の2階級増設が決定される。

国際交流としては第40回日米高校柔道の交流など、多くの国際交流が行われる。「第4回日本・ハワイ高校柔道交流」では、米国柔道連盟の強い要望で南・北カルフォルニア地区にも足を伸ばし、文化交流が図られる。

「高校生の柔道」の海外版の作成の要望がある。

平成9年8月7日～8月10日京都府城陽市民体育館に於いて第46回全国高等学校柔道大会が開催される。来年度から総体の男子の個人戦が7階級（60・66・73・81・90・100・100超）となることが決定し、大会期間は現行の4日間で実施することが条件となっており、従来の減点法・トーナメント併用の試合方法から、トーナメント法にかえて実施することになる。また、各階級7本の優勝旗が、全国都道府県高体連のご協力のもとに新設された。

3月の全国高校柔道選手権大会は第20回という記念大会で、過去の実績、予選参加校の多数の県など、柔道の活性化を図るよう検討し、参加校枠を8校増やし60校として、盛大に開催される。また「20回の軌跡」として記念誌が発行されることになる。

国際交流は、日米高校柔道の国際交流や、日本・ハワイ高校柔道交流など例年通りに行われる。

3　将来に向けて

近年、高校柔道の選手人口が減少している。それは柔道に限らずスポーツ全般にいえることであるが、生徒数の減少からくるものである。日本の柔道、高校の柔道の今後の発展を考えると一抹の不安を憶えるが、現在の全国高体連の先生方の努力と向上心はそういった不安を吹き飛ばすものがある。

例えば、全国大会での女子柔道の増設（全国高等学校柔道大会・団体戦、全国高校柔道選手権大会・個人戦7階級）や全国高等学校柔道大

会での男子個人戦の増設、各大会での参加校の増設、国際交流の活発化など、柔道の発展に大変意欲的に取り組んでいるのである。

さらによりよい指導、安全でかつ効率のよい指導方法など、独自の学習や研究を重ねその内容を毎年研究調査報告として全国の指導者に発行している。そういった諸先生方の努力のかい合って、国内における高校生の柔道レベルは年々上がってきている。

今後、更なる飛躍の一歩として、高校生の個人戦の体重区分をオリンピックや世界選手権などＩＪＦの階級と同じような形で実施される方向に向かっている。それ故に、都道府県の高体連柔道部では、大会すべてを国際柔道審判規定で行うことを検討しているところもでてきている。これは高校生が国内だけではなく世界に出て通用する選手に育つことを期待してである。

今日の当柔道部の隆盛は、創設に尽力された関係各位の努力によるものであり、またそれを継承された多くの先輩諸氏に心より謝意を申し上げ、各都道府県の高体連柔道専門部の先生方には新たなる柔道部の歴史を創りあげるよう祈念する次第である。

全国高校柔道選手権大会開会式

平成９年度を最後に姿を消す優勝旗と細川楯

古賀

田村

吉田

正木

中村

阿武

井上

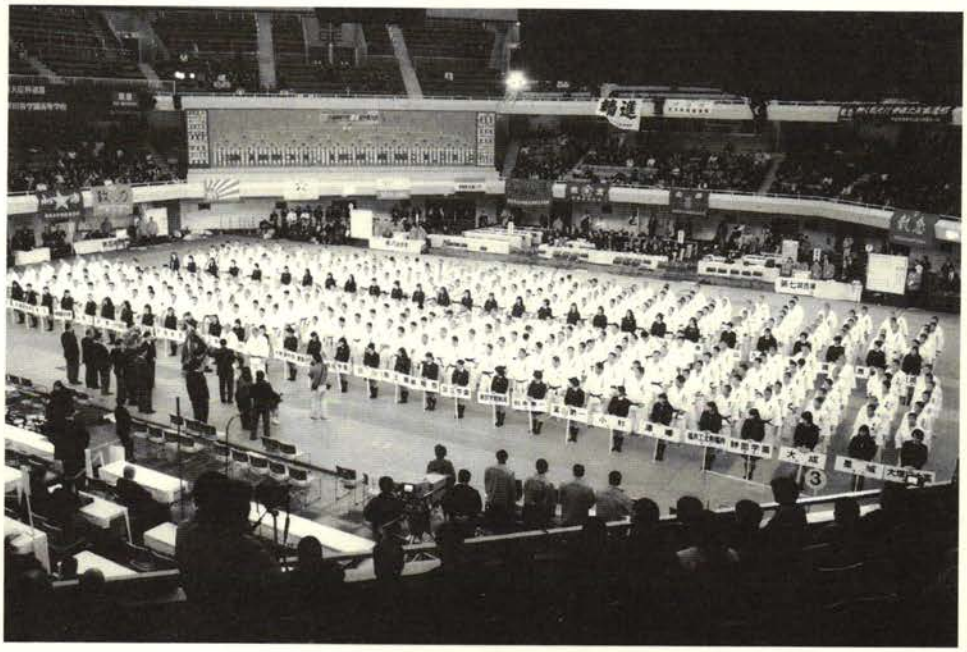
全国高等学校柔道選手権大会

思い出

世界の舞台で活躍する大会OB

テレビ朝日賞

朝日新聞賞



《事務局》
〒062-0935 北海道札幌市豊平区平岸5条18丁目
北海道札幌平岸高校内
TEL 011（812）2010
FAX 011（812）2049

創立年月日：昭和26年

加盟校数		818校
部員数	男子	4,913名
	女子	1,623名
	合計	6,536名

年度	部長	委員長	記事
26	色部 正長		事務所(山形県教委)第1回全国高校スキー大会開催群馬県水上
27	加治千三郎		第2回 青森県 大鰐
28	〃		第3回 福島県 猪苗代
29	〃		第4回 秋田県 湯沢
30	〃		第5回 山形県 米沢
31	〃		第6回 長野県 飯山
32	〃		第7回 宮城県 鳴子
33	津坂 武		第8回 新潟県 新井
34	〃		第9回 北海道 小樽
35	〃		第10回 秋田県 花輪
36	〃		第11回 新潟県 小千谷
37	〃	松岡 敬之	事務局(台東商業高校)
			第12回 青森県 大鰐
38	〃		第13回 福島県 猪苗代
39	平松 義尚		第14回 長野県 志賀高原
40	〃		第15回 秋田県 花輪
41	〃		第16回 北海道 小樽
42	高橋 周一	村山 一郎	事務局(高田工業高校)
			第17回 新潟県 高田妙高
43	〃	〃	第18回 群馬県 水上
44	〃	〃	第19回 長野県 飯山
45	原岡 賢吉	〃	第20回 山形県 米沢
46	〃	〃	第21回 兵庫県 神鍋
			雪不足のため中止
47	〃	〃	第22回 秋田県 大湯
48	〃	古屋 勤	第23回 青森県 大鰐
49	〃	〃	第24回 北海道 名寄
50	〃	〃	第25回 岐阜県 流葉
51	〃	佐々木 昊	事務局(乙訓高校)
			第26回 岩手県 田山網張

年度	部長	委員長	記事
52	原岡 賢吉	佐々木 昊	事務局(小樽桜陽高校)
			第27回 北海道 小樽
53	〃	〃	第28回 秋田県 鹿角
54	〃	〃	第29回 新潟県 妙高高原
55	〃	〃	第30回 富山県 おおやま
56	〃	〃	第31回 群馬県 草津
57	〃	〃	第32回 山形県 蔵王
58	石川 光明	佐々木 昊	事務局(大館鳳鳴高校)
			第33回 宮城県 鳴子
59	〃	〃	第34回 福島県 猪苗代
60	清水 国通	飯沼 惇	事務局(小樽桜陽高校)
			第35回 長野県 白馬
61	〃	〃	第36回 岩手県 安代
62	〃	〃	第37回 北海道 旭川
63	松沢 徳雄	〃	第38回 青森県 大鰐
			第1回全国高校選抜スキー大会開催(アルペン)長野栂池高原
元	石塚 達也	〃	第39回 新潟県 六日町
2	渡辺 誠三	〃	第40回 山形県 蔵王
3	笹岡 道夫	林 孟彦	事務局(白馬高校)
			第41回 鳥取県 大山
4	〃	〃	第42回 長野県 栂池高原
5	〃	〃	第43回 群馬県 片品
			ノルデック全国高校選抜大会開催岐阜鈴蘭
6	芝崎 正之	林 清	事務局(前橋西高校)
			第44回 富山県 おおやま
7	〃	〃	第45回 秋田県 鹿角
8	川島 正彬	近藤 建治	事務局(札幌平岸高校)
			第46回 岩手県 安代
9	〃	〃	第47回 北海道 札幌
10	高橋 洋介	〃	

1 沿 革

26.2 全国スキー専門部創設（高田市）
事務所を山形県教育委員会に置く
初代部長に色部正長（米沢東高校）を選出

26. 全国高体連加盟

27. 第1回全国高校スキー大会開催
（群馬県水上）
参加都道府県16県参加校53校
参加選手355名役員120名
2,400ｍの大滑降競技の実施

28.2 第2回大会（青森県大鰐）
滑降競技の廃止

29.2 第3回大会（福島県猪苗代）
複合競技の実施

30.12 高校スキー年間創刊号出版

35.2 第9回大会が初めて北海道で開催
（北海道小樽）
都道府県予選会の原則的義務付け
男子都道府県出場枠の制定
Aブロック．Bブロックの制定

44.2 第18回大会（群馬県水上）
女子都道府県出場枠の制定

44.12 スキー年鑑15記念号発刊

47.2 第21回大会雪不足のため中止
（兵庫県神鍋）

53.7 全国高校スキー大会の開催地は5年周期の5ブロック制で実施することを原則とする（北海道1回.東北2回.関東北信越1回.その他1回）ことを代議員会で決定

56.2 第30回大会（富山大山）
参加都道府県30参加校293校
男子644名女子381名計1045名
監督390名
AブロックBブロックの廃止
出場制限規程の改正

56.2 全国高等学校スキー専門部30周年記念功労者表彰

56.11 スキー年鑑27号（30周年記念）発刊

59.2 女子リレー4名を3名に変更
（第34回猪苗代大会から）

60.7 全国高等学校スキー部会の名称をスキー専門委員会と改め各種役員名を以下のように改める
理事→常任委員代議委員→委員
理事長→委員長理事会→常任委員会
代議委員会→委員会

61.2 女子クロスカントリ5Ｋｍ種目を新設
（第37回旭川大会から）

62.8 全国高等学校体育連盟スキー部功労者表彰（第1回～第36回）93名

平成

元.3 第1回全国高等学校選抜スキー大会の開催（長野県小谷村栂池高原）
30都道府県選手男女151名の参加

3.2 全国高等学校スキー専門部40周年記念式典開催功労者表彰14名

3.2 第40回大会（山形蔵王）
種目内容の変更
男子クロスカントリーは15㎞クラシカルとフリーの2種目実施
コンバインドクロスカントリーはグンダーセン方式で実施
リレー男子1.2走クラシカル3.4走フリーで実施
女子1走クラシカル2.3走フリーで実施
参加都道府県42参加校354校
選手1,188名監督444名マネージャー141名その他139名総計1,912名

6.2 ノルデック全国高校選抜スキー大会の開催（岐阜県朝日村鈴蘭高原）

7.2 第44回富山大会（出場制限1校1種目2名を3名に改正）
北海道を南北に分離

8.2 全国高等学校スキー専門部45周年記念功労者表彰（第37回～45回）59名

2　10年の歩み

昭和27年第1回全国高等学校スキー大会が（群馬県水上）開催されてから今年第47回大会（北海道札幌）を開催するまで数々の変化を繰り返しながら発展してきましたが、特にこの10年間を振り返ってみますと、平成元年2月第38回大会(青森県大鰐)からＳＡＪ（全日本スキー連盟）のルール変更により女子5kmが追加

第40回大会(山形県蔵王）から男子15kmフリー走法が加わりクロスカントリ競技は男女とも走法がフリーとクラシカルの2種目となり、コンバインドクロスカントリーがグンダーセン方式となり現在に至っております。第44回大会（富山県大山）から男女とも1種目1校3名の出場が認められ、このことにともない北海道は1校3名になった場合にはアルペン競技の予選会参加選手が多いため物理的に開催不可能となるため北海道を南北の2ブロックに分割することが認められた。平成8年度にはスキー専門部に新たに奈良．三重．熊本の3県が加盟し過去最高の36都道府県の加盟となる。

この10年間の全国大会の開催地の決定についての多くは国民体育大会の前年の国体のリハーサル大会として国体がらみで誘致され、運営面でも県や自治体の全面的なバックアップ体制がひかれ、競技会場はもちろん、開会式輸送そして歓迎等あらゆる面において素晴しい大会へと発展してきたが、この10年間の後半はバブルの崩壊とともに開催地の決定においてもかなりの困難な状況に陥った。47回大会は当初国体の前年として北海道小樽が開催誘致を始めたがいろいろな事情から開催困難となり札幌が代替開催となる。

48回大会については平成9年（大会前々年）まで開催地が決まらず一時は大会中止をせざるをえない状況になったが青森県．山形県の関係各位の深いご理解が得られ初の分離開催としてノルディック（青森県大鰐）アルペン（山形蔵王）となった。

48回大会（北海道札幌）は従来の運営とは異なり大会実行委員会を含め全てが高等学校が主体となり、スリム化、質素、倹約を基本に高校大会の原点にたった大会となり、今後の見本大会となるであろう。

第47回大会 開会式

会場 札幌中島
スポーツセンター

全国高校選抜スキー大会は、平成元年第1回大会が関係各位の献身的な努力によって長野県小谷村栂池高原で30都道府県151名の選手の参加によりアルペン種目のみ開催され以後第2回大会が日程の関係上やむなく中止になったが第6回大会（平成6年）には初めて、ノルデック種目も岐阜県朝日村鈴蘭高原で選抜スキー大会を開催第7回大会（平成7年）からはアルペンの大会についてはＦＩＳ（国際スキー連盟）の公認大会となり、平成10年には節目となる第10回大会を栂池高原．鈴蘭高原で開催。

この10年の間全国高校スキー大会．全国高校選抜スキー大会は幾多の障害を乗り越え、多くの素晴らしい指導者、素晴らしい選手をスキー界に送りだしてきた、そして、長野オリンピックでの素晴らしい活躍はスキー専門部にとっても大変喜ばしいことであった。

3　将来に向けて

最大のポイントは全国高等学校スキー大会の在り方であると思われる、長年の歴史はあるもののやはり財政的な面から考えなければならない。現在の社会情勢から考え、今までの国体リハーサル大会から基本的には完全脱皮し、開催地ローテーションを確立（平成9年確立）し高体連主体を基本に、質素、倹約、スリム化を実行、各都道府県から積極的に誘致されるような大会を目指して、多くの人々から信頼され、期待される全国高校スキー大会に育てていくために斬新的な考えのもと関係者は全力で努力していかなければならない。

第45回全国高等学校スキー大会

第46回 全国高等学校スキー大会

第47回 全国高等学校スキー大会

全国高等学校体育連盟 久野 猛会長のあいさつ
（写真：スポーツフォトネットワーク提供）

札幌厚別高等学校生徒会長 常本将之君
（写真：スポーツフォトネットワーク提供）

選手誓宣 札幌第一高等学校 松本大誠君
（写真：スポーツフォトネットワーク提供）

《事務局》
〒394-0033 長野県岡谷市南宮2-1-17
県立岡谷東高校内
TEL 0266（23）3161
FAX 0266（21）1016

創　　立：昭和31年

加盟校数			296校
部員数	男　子	154校	1,582名
	女　子	142校	397名
	合　計		1,979名

年度	部長	委員長	記事
26			全国学生氷上大会並びに第1回高校大会開催
27			決勝にセパレートレースが組み入れられた
28			
29			
30			女子長距離種目の変更
31	西村　文雄		
32	〃		
33	塚田　隆雄		
34	更級　勉		
35	〃		
36	〃	強化委員長	スピード競技の競技方法及び出場
		工藤　祐信	制限について11回大会要項から
37	新田　稔	副委員長	
38	〃	井出　宗雄	第1回大会より続いた女子1600mRが2000mRに改正された
39	小山　敏夫		
40	加藤　駿二		
41	田口　豊州	S山本隆弥	ヘルメット着用義務
42	〃	（S43～45）	
43	佐野　録郎	F本村増太	スピード競技参加申込みについて変更
		（S43～55まで）	
44	高橋　是武	H三原　清	
45	〃	（S43～45）	Sバッジテスト制導入
46	〃	S井出宗雄	S全種目オープンタイムレースで行われた
		（S46～56まで）	
		H田中　正	
47	〃	（S46～59まで）	
48	〃	〃	マウスピース着用義務
49	若林（代行）	〃	
50	若林　繁	〃	

年度	部長	委員長	記事
51	若林　繁	〃	3部門分離開催
52	〃	〃	3部門分離開催
53	〃	〃	
54	〃	〃	H高校選抜ソ連遠征
55	〃	〃	
56	〃	F富田隆祐	
	〃	（S56～H1まで）	
57	〃	S沼舘健二	Hフェースマスク着用の義務
		（S57～62まで）	
58	〃	〃	
59	〃	〃	
60	太田　昌光	H松原正三	
61	〃	（S60～H1）	
62	〃	〃	
63	工藤　鉄彌	S牛山雅弘	
		（S63～）	
元	〃	〃	Fのグループ分け変更
			男子1000mが加わる
2	町田　正義	F三木睦郎	長距離種目ポイント制の導入
		（H2～）	
	（H2～5まで）	H益子芳久	2000mR予選の廃止
3	〃	〃	
4	泉　為人	〃	
5	〃	〃	
6	岩見　秋夫	H高橋芳興	
7	山崎　猛	（H6～8まで）	決勝進出16名を24名に1500mポイント制導入長距離カルテット導入
8	〃	〃	Hの参加ブロック代表
9	松崎　徹	H今井拓美	3部門分離開催
10	赤地　憲一	（H9～）	IH史上初の室内リンク長野市Mウエーブで大会が開催された

1　沿　革

創設～昭和62年

昭和26年度

第1回高校大会は、第23回の学生氷上競技連盟が主催で大会運営がなされた。

参加選手は、大学が11校150名、高校は36校（女子6校）男子263名・女子28名であった。藪科湖吹雪のなか開会式が挙行されたが、競技は2日間延期され男子1500m・10,000m女子1000m・5000mは中止された。

男女3種目が次代を担う高校生によって熱戦が展開された。総合はスピード男子が苫小牧東、女子は岡谷東が初優勝を飾り、ホッケーは苫小牧東、フィギュアが男子早大工、女子は日大工が優勝した。

昭和27年度

・第2回大会では、選手強化の観点から男子500m・1500mの2種目をセパレートレースで行った。その他オープンタイムレース。

昭和30年度

・全日本女子種目の変更に合わせ、これまでの500m・1500m・3000m・5000mを5000mにかえて1000mを新たに加え現在の競技種目に変更された。

昭和36年度

・第11回大会スピード競技要項（抜粋）
・ホッケー競技は1チーム20名以内を登録する。また、前年度1位、2位校をシードし地区を考慮する。
・フィギュア競技は1校3名まで、補欠1名
・スピード競技種目及び競技方法
男子500m 1500m 2000mRはセパレート、5000mオープン10,000mセパレート、女子は500mセパレート、その外はオープンであった。

■出場制限　1500m出場者は、500m上位40名
・5000m出場者で1500m出場希望者中、上位10位までの50名とする。なお、参加料は1人100円・ホッケーは1チーム1000円であった。
10,000m出場者は、5000m出場者で10,000m出場希望者中の上位20位までとしていた。
なお、早くから選手強化に併せて競技方法の研究が進められ強化委員長に工藤祐信氏、副委員長に井出宗雄氏がその任にあたった。

昭和38年度

・本年より女子1600mRが2000mRに改正される。

昭和41年度　　ヘルメット着用義務

昭和43年度

・1学校1距離2名の出場であるが、前回大会の各距離に18位までに入賞した学校は、その距離に限り3名の出場を認める申し込みをこの年度より削除される。

昭和45年度

・日本スケート連盟バッジテスト資格取得の規定が加わる。

昭和46年度

・第21回日光大会は降雨のため競技は2日間延期され、全種目がオープンタイムレースで行われた。

昭和48年度

・マウスピース・ヒールガード着用が義務づけられる。
昭和50年に国体年齢別の参加規定ができ、男女とも18歳以下を少年に改められた。

昭和51・52年度

3部門分離開催をした。

2　10年の歩み

昭和63年～平成9年

平成1年度

・男子1000m種目が加わる。
・フィギュア競技のグループを改正し、男子A・B　女子A・B・Cに分けられた。

平成2年度

・スピード競技3000m以上の種目におけるポイント制が導入された。
・男女2000mRの予選は出場チームの減少とシングルレースの危険性を考慮し廃止した。
・トラックの区分をスノーラインからブロックが使用されるようになった。
・今年度からコンパルソリーが廃止された。

平成7年度

・1500mポイント制が導入される。
・3000m以上の種目にカルテットスタート法が導入され、決勝は16名が24名となった。

平成8年度

・ホッケーの参加がブロック代表となった。

平成9年度

・3部門分離開催となった。

平成10年度

・長野市オリンピック記念アリーナMウエーブを会場として史上初の室内リンクで開催。

10年のあゆみ (S.63～H.9)

全国高体連スケート専門部
部長　赤地憲一

昭和63年度以降の10年間を回想するに当たり各県から開催年度毎に出されていた報告書を参考にさせていただいたが、これが非常によくまとめられており、関係者各位のご労苦に改めて敬意を表したい。この10年間を振り返ると、スピードにおいては、平成3年（1991年）に長野オリンピックの開催が決定されて以来全日本及び全日本ジュニアレベルでの強化策が図られた。次に各都道府県レベルでも、競技力を支える高校生を中心として、冬季のみの競技であったスケートに、2シーズン制の考えが取り入れられ、夏季氷上合宿の取り組みが行われるようになった。その結果一層のレベル向上が見られた10年間であったと思われる。

また、スケート界の大きな流れとしてスラップスケートの出現も見逃すことができない。

1996-1997より、オランダで考案されたかかとが離れるスケートが旋風を巻き起こし、1998年2月の長野オリンピックではこのスケートの威力を見せつけられた。この流れは世界のトップレベルにとどまることなく高校スケート界にも波及し、平成8年度の釧路インターハイまでは皆無だったのが、平成9年度の郡山インターハイでは決勝進出者の9割以上がスラップスケートを使用するような状況にあり、スケート界の大きな変革がなされた。

平成10年度のスピードスケートはオリンピックが開かれたエムウェーブでの開催で、インターハイ史上初の屋内400mリンクで行われる。新しいスケートと屋内リンクでの開催で、新たな半世紀の出発の年に当たり、より一層の記録の向上が期待されるところである。

アイスホッケー競技は依然として北海道勢の壁は厚いが、他県においても今後一層の努力を期待したいものである。フィギュアスケートにおいては、多くのスポーツ人口の減少のなかで参加人数も多く、年々技術の向上も目覚ましくまさに高校生のチャンピオンをきめるにふさわしい大会になっている。

若林繁部長を偲ぶ

元スケート部
スピード委員長　沼館健二

全国高体連スケート部を通じての若林先生とは、長野県蓼科湖で開催された第1回全国高校スケート大会より始まる。当時、青森県スピードスケートの一般選手として籍をおいていた私は、高校時代の恩師である先生と共に、青森県選手団として高校生を含め長野合宿を計画。高校選手は蓼科で正月を迎えそのまゝ大会に臨んだと記憶している。

その後、教員としての道へ進み、先生と共に高体連スケート部としてスケート人生を歩んだ。

昭和39年から10年間全国高体連スケート部委員長を努められ、更に昭和50年百石高校長から59年八戸商業高校長を勇退されるまでの10ケ年間全国高体連スケート部長として、まさに高体連スケートの誕生と共に歩んでこられた。委員長当時発刊された「高校スケート年鑑」は先生の発案で高校選手にとり唯一の思いでのスケート誌であり選手の活躍の記録、入賞選手の感想、スケートの情報交換、スケート場の紹介等幅広く、大変価値のあるものとしてスケート関係者から高く評価された。また、国内におけるスケート競技会では、インターハイ、国体はもとより、全日本選手権・1963年軽井沢世界スピードスケート選手権大会や1972年札幌オリンピック等での競技通告は絶妙で「スケートの若林節」が聞かれないと、スケート大会が来た感じがしないと大会記者に定評があった。更にまた当時のインターハイは、例年行われる国体の前にその開催地で実施するのが恒例であったが、昭和50年部長に推された先生は全国高体連スケート代表委員会で「高体連もこの辺で一本立ちして全国大会を運営してみよう」との案を出され、全員で取り組むことゝなった。部長としてインターハイの会場決定には大変な責任と苦労があったが、日本スケート連盟理事の役職にあり全国スケート関係者との親交も厚く、東奔西走された姿は涙ぐましく大変なご苦労があった。

昭和60年定年退職して間もなく体調を崩され家庭養療に盡されたが、平成10年2月2日心待ちにいていた長野オリンピックの開幕を目前にご逝去された。高体連50年を顧みるとき、若林先生の存在を抜きに語ることはできない。全国高体連はもとより、多くのスケート愛好者と心からなる哀悼の意を捧げるとともに、安らかなご冥福をお祈り申し上げたい。

アイスホッケー競技は参加チーム数の地域割りについての検討が継続されている。

最後に、年表の内容は、現・元委員長の調査を主としたものであるが、現時点で不明な部分は今後の再調査を待つことにしておきたい。

全国高体連スケート専門部
事務局　降旗教彦

■編集後記

スケート競技は、昭和40年を境にして人工リンクの普及により、記録の更新に目覚ましい発展が見られた。

また、スケート界では、長野オリンピックにむけての強化策が高校生にも向けられて競技力が大幅に向上し、合わせて、近年はスラップスケートの普及により大きな変革がなされた。

課題は、開催地の決定であるが、費用の増大が、開催地の負担となってきている。

また、選手の参加状況をみると、スピード競技では女子選手が減少しているため予選の廃止を考える必要が生じている。

平成5年度
第43回全国高等学校スケート競技選手権大会
スピード男子優勝　佐久高等学校チーム
（福島県郡山スケート場）

平成9年度第47回全国高等学校スケート大会
アイスホッケー優勝駒沢大学苫小牧高校チーム（青森県八戸市にて）

《事務局》
〒332-0001 埼玉県川口市朝日5－9－18
市立川口高校内
TEL 048（224）2211
FAX 048（224）0508

創　立：昭和28年度

加盟校数		274校
部員数	男子	2,623名
	女子	1,541名
	合計	4,164名

年度	部長	副部長	記事
28	林　浩	岡田亀太郎	
		安藤　松寿	
		山本　実	
38	安藤　松寿	山本　実	常任委員新設
		小野　尚	全国8地区代表選出
45	山本　実	小野　尚	審判部新設
		獅子堂正隆	部長　作佐部　忠
		塩野谷　等	
49	獅子堂正隆		審判部長　脇本秀吉
		小野　尚	
		竹内　隆	
		塩野谷　等	
52	〃	〃	審判部長　安藤満洲穂
			強化部新設
			強化部長　佐々木康郎
53	〃	〃	強化部長　徳差敏行
54	佐々木康郎	脇本　秀吉	
		竹内　隆	
		塩野谷　等	
57	柳　健治	脇本　秀吉	強化部長　坂下五郎
		竹内　隆	
		塩野谷　等	
59	〃	〃	審判部長　遠藤辰治
			競技部新設
			競技部長　佐藤恒雄
60	柳　健治	佐藤　恒雄	
		竹内　隆	
		塩野谷　等	
61	〃	〃	強化部長　小川洋一

年度	部長	副部長	記事
63	柳　健治	斉藤　克也	審判委員長　三崎竹司
		行司　伸吾	強化委員長　小川洋一
		塩野谷　等	競技委員長　斉藤克也
			事務局長　長谷川優
			強化委員長　山崎元和
元	〃	退職塩野谷等	
		交代小川洋一	委員長制度取り入れ
2	小川　洋一	斉藤　克也	審判委員長　三崎竹司
		行司　伸吾	強化〃　山崎元和
		古茂田知之	競技〃　北畑悌次郎
			事務局長　長谷川優
			審判委員長　三崎竹司
4	〃	斉藤　克也	強化〃　山崎元和
		行司　伸吾	競技〃　北畑悌次郎
		河野　幸栄	事務局長　長谷川優
			審判委員長　三崎竹司
6	行司　伸吾	斉藤　克也	強化〃　山崎元和
		葛本　一彦	競技〃　北畑悌次郎
		小坂　申弥	事務局長　長谷川優
			審判委員長　三崎竹司
8	〃	〃	強化〃　山崎元和
		〃	競技〃　北畑悌次郎
		〃	事務局長　長谷川優
			審判委員長　三崎竹司
10	〃	〃	強化〃　山崎元和
		〃	競技〃　北畑悌次郎
		〃	事務局長　長谷川優

1 沿 革

昭和28年　第1回全日本高等学校選手権大会（8月15日～17日・滋賀県瀬田川）開催。種目は男子フィックス、男子ナックルフォア、女子ナックルフォア。距離は男子1000m、女子800m。国体は男子のフィックスとナックルフォアのみ。

昭和29年　第2回大会（8月1日～2日・滋賀県瀬田川）開催。次年度から東西交互に開催することを決定。

昭和30年　第3回大会（8月13日～14日・福島県荻野）開催。福島県知事より男子ナックルフォアの、喜多方市長より女子ナックルフォアの優勝旗寄贈。

昭和31年　第4回大会（8月18日～19日・滋賀県琵琶湖大津石場浜）開催。

昭和32年　第5回大会（8月10日～11日・福島県荻野）開催。国体種目に女子ナックルフォア新設。

昭和33年　第6回大会（8月9日～10日・愛知県勘八峡）開催。

昭和34年　第7回大会（8月7日～9日・福島県荻野）開催。本年度より会期を1日延長し3日間となる。

昭和35年　第8回大会（8月5日～7日・鳥取県錦海）開催。漕艇部会報創刊。1部50円にて頒布。

昭和36年　第9回大会（8月4日～6日・神奈川県相模湖）開催。

昭和37年　第10回大会（8月4日～6日・滋賀県琵琶湖尾花川コース）開催。

昭和38年　第11回大会（8月2日～4日・新潟県加茂湖）開催。宿泊料1泊3食700円（1人1日につき米6合持参）。

昭和39年　第12回大会（8月5日～7日・岐阜県恵那峡）開催。東京オリンピック開催。

昭和40年　第13回大会（8月5日～8日・大分県夜明）開催。台風のため1日延長。

昭和41年　第14回大会（8月2日～4日・青森県大湊湾）開催。全国高等学校総合体育大会へ参加。

昭和42年　第15回大会（8月6日～8日・福井県久々子湖）開催。

昭和43年　第16回大会（7月28日～30日・広島県宮島口）開催。

昭和44年　第17回大会（8月4日～6日・神奈川県相模湖）開催。

昭和45年　第18回大会（8月3日～5日・大阪府浜寺）開催。女子の競漕距離を800mから1000mに改定。

昭和46年　第19回大会（8月3日～6日・愛媛県鹿野川湖）開催。男子シングルスカルを新設。

昭和47年　第20回大会（8月2日～5日・福島県荻野）開催。ＦＩＳＡ世界ジュニア大会参加。

昭和48年　第21回大会（8月3日～5日・三重県奥伊勢湖）開催。この年でフィックスを廃止。

昭和49年　第22回大会（8月7日～9日・佐賀県松浦川）開催。舵手付きフォアを新設。船舶振興会より向こう10年間に舵手付きフォア10艇、ダブルスカル10艇、シングルスカル10艇が配付される。

昭和50年　第23回大会（8月3日～5日・埼玉県戸田）開催。戸田市長より舵手付きフォアの優勝旗寄贈。

昭和51年　第24回大会（8月5日～6日・石川県津幡）開催。

昭和52年　第25回大会（8月5日～7日・鳥取県錦海）開催。本年度より漕艇実技講習会を東部・中部・西部輪番で開催。

昭和53年　第26回大会（8月2日～4日・福島県荻野）開催。強化部を新設。

昭和54年　第27回大会（8月2日～4日・滋賀県琵琶湖）開催。大津市長より男子シングルスカルの優勝旗寄贈。強化部が毎年12月に実技講習会を開催。

昭和55年　第28回大会（8月2日～5日・愛媛県鹿野川湖）開催。全日本新人選手権大会に高体連より選抜3クルー出場。（10月23日・戸田漕艇場）

昭和56年　第29回大会（8月2日～4日・茨城県潮来町）開催。女子シングルスカル新設、潮来町長より優勝旗寄贈。全日本選手権大会8種目に選抜クルーがフルエントリー、3種目で優勝。強化合宿を実施。（第1次：8月19日～30日於荻野・戸田、第2次：12月24日～29日於戸田、第3次：3月26日～30日於下諏訪）

昭和57年　第30回大会（8月8日～10日・鹿児島県大隅湖）開催。全日本選手権大会フル

エントリー。強化合宿を実施。（第1次：8月18日～29日於荻野・戸田）

昭和58年　第31回大会（8月2日～4日・愛知県愛知池）開催。参加費団体11000円、個人1200円。強化合宿を実施（第1次：中止、第2次：3月25日～29日於愛媛県鹿野川湖）。実技講習会実施（1月6日於戸田）。

昭和59年　第32回大会（8月2日～5日・秋田県大潟）開催。競技部新設。強化合宿を実施（第2次：3月25日～28日於岐阜県川辺）。実技講習会実施（12月23日～28日於戸田）。

昭和60年　第33回大会（8月8日～10日・石川県津幡）開催。参加費団体13000円、個人1400円、宿泊費1泊3食6000円。第2次強化合宿を3地区に分けて実施。実技講習会実施（1月22日於戸田）。

昭和61年　第34回大会（8月9日～11日・鳥取県錦海）開催。強化合宿を潮来・勘八峡・鹿野川湖で実施。

昭和62年　第35回大会（8月2日～4日・北海道網走湖）開催。宿泊費1泊3食6500円。この年からＦＲＰ艇を採用。

2　10年の歩み

昭和63年第36回大会（8月2日～5日・滋賀県琵琶湖）開催。女子舵手付きフォア新設。大津市長より優勝旗・優勝杯寄贈。

平成元年　第37回大会（8月2日～6日・滋媛県鹿野川湖）開催。ジュニア世界選手権へ男子4×、1×、女子2×、1×で参加。

平成2年　第38回大会（8月2日～5日・宮城県長沼）開催。この年で男女ナックルフォアを廃止。第1回全国高等学校選抜競漕大会（以下選抜大会）開催。（3月30日於静岡県天竜）種目は男女共舵手付きフォア、ダブルスカル、シングルスカル全6種目。いずれも1500m。

平成3年　第39回大会（8月1日～5日・静岡県天竜）開催。男女ダブルスカル新設。天竜市長より優勝旗・優勝杯寄贈。宿泊費1泊3食6900円。第2回選抜大会開催。（3月23日～24日於静岡県天竜）。第1回アジアジュニア選手権大会（於中国・上海）男女2×を派遣。

平成4年　第40回大会（8月5日～9日・宮崎県富田浜）開催。宿泊料1泊3食7400円。台風の影響でレース短縮。第3回選抜大会開催。（3月28日～29日於静岡県天竜）。第2回アジアジュニア選手権大会（於中国・成都）男女2×を派遣。

平成5年　第41回大会（8月4日～8日・埼玉県戸田）開催。宿泊料1泊3食7600円。第4回選抜大会開催。（3月27日～28日於静岡県天竜）。

平成6年　第42回大会（8月6日～10日・富山県）開催。宿泊料1泊3食8100円。第5回選抜大会兼ＪＯＣジュニアオリンピックカップ開催（3月28日～29日於。第3回アジアジュニア選手権大会（於インド・チャンディガル）男女1×を派遣。

平成7年　第43回大会（8月3日～7日・鳥取県錦海）開催。宿泊料1泊3食8300円。第6回選抜大会兼ＪＯＣジュニアオリンピックカップ開催。（3月25日～26日於）大雨によりレース距離を1000mに変更。平成15年まで同会場で開催決定。

平成8年　第44回大会（8月6日～10日・山梨県河口湖）開催。宿泊料1泊3食8800円。水不足のためレース距離を1000mから900mに短縮。第7回選抜大会兼ＪＯＣジュニアオリンピックカップ開催（3月30日～31日）。第4回アジアジュニア選手権大会（於パキスタン・イスラマバード）男女1×・1×を派遣。

平成9年　第45回大会（8月1日～5日・京都府舞鶴特設）開催。宿泊料1泊3食9000円。第8回選抜大会兼ＪＯＣジュニアオリンピックカップ開催（3月22日～23日）。レース距離1000m。

※世界選手権への道

少年の世界選手権は昭和45年にギリシャのロアンニアで行われた第1回ＦＩＳＡ世界ジュニア大会に始まる（男子のみ）。日本はユーゴスラビア・ブレドで開催された第2回大会から参加した。なお女子種目は昭和59年の第10回大会から増設され、日本はその翌年昭和60年の第11回大会から参加した。以下はその成績である。

昭和45年　ギリシャ・ロアンニア
不参加
昭和46年　ユーゴスラビア・ブレド
M1　×青山豊（山田）　敗復落ち
昭和47年　イタリア・ミラノ

M１× 三浦義男（鹿屋工） 敗復落ち
昭和48年 イギリス・ノッチンガム
M２× 波間昭司（本郷）
桶田英俊（洛陽工） 敗復落ち
M１× 永沼洋介（石巻工） 敗復落ち
昭和49年 西ドイツ・ラツエブルク
M２× 井手勝敏（今治西）
青田英司（加茂） 敗復落ち
M１× 小嶋克人（諏訪清陵）敗復落ち
昭和50年 カナダ・モントリオール
M２× 若宮節夫（八百津）
野口和彦（大村園芸）敗復落ち
M１× 井手勝敏（今治西） 敗復落ち
昭和51年 オーストリア・ビラハ
M２× 井手勝敏（筑波大）
松田昌弘（瀬田工） 敗復落ち
M１× 新田光信（西和賀） 敗復落ち
昭和52年 フィンランド・タンベレ
M２× 三浦浩己（江津工）
中西雄一（法政二）
萬宮善彦（瀬田工） 敗復落ち
M１× 松崎 論（喜多方商）敗復落ち
昭和53年 ユーゴスラビア・ベオグラード
M２× 橋谷田清光（耶麻農）
高橋隆志（西和賀） 敗復落ち
M１× 杉浦 彰（江津工） 敗復落ち
M１× 三浦英一（喜多方商）敗復落ち
昭和54年 ソ連・モスクワ
M２× 渡辺博也（喜多方商）
田部洋一（喜多方商）敗復落ち
M１× 羽入哲也（喜多方商）
F１× 佐藤あや子（喜多方女）敗復落ち
昭和55年 ベルギー・ハツエウインケル
M２× 肥田 厚（大垣共銀）
粂川 誠（八百津） 敗復落ち
M１× 田部洋一（喜多方商）敗復落ち
F１× 四ノ宮美知子（潮来） 敗復落ち
昭和56年 ブルガリア・ソフィア
M２× 小林広法（岡谷南）
花見牧雄（喜多方商）敗復落ち
M１× 工藤晴三（津久井） 敗復落ち
F１× 鶴見尚子（大津） 敗復落ち
昭和57年 イタリア・テ
M２× 小木加州彦（立教）
細渕直希（立教） 敗復落ち
M１× 内川淳一（喜多方） 敗復落ち
F１× 安部真由美（湖南） 敗復落ち
昭和58年 フランス・ヴィシー
M２× 金子匡仲（法政二） 敗復落ち
奈良 収（津久井）
M１× 清水晋治（中部電力）敗復落ち
F１× 永林美和子（八尾） 敗復落ち
昭和59年 ノルウェー・ヨンコピン
M４＋ 吉田康介（南陵）
佐藤 豊（〃）
田辺保典（〃）
古沢功樹（〃）
涌島 稔（〃）
松本正志（〃） 敗復落ち
M１× 丹野文広（東北） 敗復落ち
F１× 瀬戸真由美（八尾） 敗復落ち
昭和60年 東ドイツ・ブランデンブルク
M４＋ 亀山桂児（八百津）
大脇高秀（〃）
永田昭尋（〃）
川合正樹（〃）
高谷 健（〃）
後藤浩二（〃） 敗復落ち
M１× 丹野文広（東レ滋賀）敗復落ち
F１× 渡辺清美（八尾） 敗復落ち
昭和61年 チェコスロバキア・ロードニス
M４＋ 榊間寛人（恵那）
児玉佳隆（〃）
大山晃治（〃）
鳥居孝志（〃）
丸山恭生（〃） 13／13位
M１× 岩見則保（猿投農林）20／20位
F１× 福留睦美（鹿屋農） 9／11位
昭和62年 西ドイツ・ケルン
M４＋ 押谷明成（瀬田工業）
近藤貴士（〃）
西村泰明（〃）
杉森勇吾（〃）
北条弘之（〃） 13／13位
M１× 北川 忠（八尾） 17／17位
F１× 横江由希子（八尾） 11／21位
昭和63年イタリア・ミラノ
M４＋ 市川 勉（江戸川学園取手）
市川将光（〃）
水谷達也（〃）
大山晃治（〃）
鳥居孝志（〃）

丸山恭生（〃）　12／12位
M1×　岩見則保（猿投農林）13／13位
F1×　福留睦美（鹿屋農）　12／13位
平成元年　ハンガリー・ゼゲド
M4×　山添覚司（中部電力）
大竹　正（美濃加茂）
箕輪一幸（潮来）
永治文紀（恵那）　12／12位
M1×　藤井基晴（宇和島東）16／16位
F2×　三崎麻里子（彦根東）
小川晶子（恵那）　12／12位
日田美保（熊本商大附）
平成2年　フランス・エギュベレット
M4×　伊藤博行（伏見工）
西田孝啓（八尾）
増子智洋（美濃加茂）
山口和男（津久井）　19／19位
M1×　藤井基晴（宇和島東）16／16位
F2×　三崎麻里子（彦根東）
渋田紀子（田名部）　15／15位
F1×　日田美保（日本体大）13／13位
平成3年　スペイン・バニョラス
M4×　小川昭彦（宇和島東）
水野博之（恵那）
長谷　等（津幡）
常磐　聡（新田）　17／17位
M1×　西田孝啓（八尾）　12／13位
F2×　狩野順子（津久井）
斉藤理恵（膳所）　8／8位
F1×　三崎麻里子（鹿屋体大）12／12位
平成4年　カナダ・モントリオール
M2×　今村洋亮（伏見工）
兼松由充（美濃加茂）14／14位
M1×　西田孝啓（富山国際大）6／15位
F4×　力石文子（津久井）
三品のり子（中部電力）
野中理恵（熊本商大附）
浅野あい子（膳所）　8／9位
F2×　内山佳保里（二俣）
青山優子（東濃実業）7／8位
平成5年　ノルウェー・オールンゲン
M2×　山竹孝治（中央大）
徳岡　剛（宇和島東）15／24位
M1×　小川隆之（恵那）　23／24位
F4×　仲西直美（中部電力）
内山佳保里（二俣）
青山優子（東濃実業）
今堀こずえ（八幡商）　7／10位
平成6年　ドイツ・ミュンヘン
M2×　徳岡　剛（宇和島東）
山内　悟（宇和島水）15／29位
M1×　太田森平（浜松西）　17／36位
F4×　高井栄美子（津久井）
吉田理子（大湊）
室崎亜樹（網走向陽）
豊田千佳（大津商）　13／16位
平成7年　ポーランド・ボスナン
M2×　溝口健太（中央大）
久保武大（高松）　10／30位
M1×　中野公之（津久井）　24／29位
F4×　深川由理（熊本商大附）
清水待子（八尾）
川元寛美（福山）
松島加奈（二俣）　13／16位
F1×　小西千恵（中部電力）14／20位
平成8年　イギリス・ストラスクライド
M2×　久保武大（高松）
藪ノ内慎和（美方）　20／29位
M1×　有馬功二（宇和島東）22／23位
F4×　川元寛美（福山）
熊沢貴郁（日本体大）
岩本亜希子（岡谷南）
辻野知里（坂出商）　9／12位
F1×　古関香里（熊本商大附）16／16位
平成9年　ベルギー・ハゼウィンケル
M2×　藪ノ内慎和（美方）
久保達生（小浜水）　20／29位

全国高体連漕艇部長

行司伸吾

昭和28年に創設された全国高体連漕艇専門部の足跡は、35年を経て全国高体連50年記念誌に参加出来ることを光栄に思います。

我々の諸先輩や関係者・先生方・生徒諸君に感謝いたします。今日高等学校における体育・スポーツ活動に係わる環境は、人間教育からかけ離れた知育偏重の場や、学校体育から社会体育への移行にかかわるひずみ等々まことに不安定化してきています。しかし平成8年の中・高校制のスポーツ活動に関する文部省の調査結果によりますと、運動部活動は、生徒・保護者・教員の3者が共通して90パーセント以上現在の高校生活にとって、又将来のためにも必要であると答えています。

彼・彼女達は、河川・内湾・湖沼など限られた水域を活動場所として、四季折々の、又一日の中の時々の変化を体感しつつ、大自然の恵みを享受する。一方、クルー編成や日々の練習、競漕会への参加を通じて人間と自然とのかかわり方や協調性、社会性をおぎないながら自己研鑽に努めています。教育の一環としてこの漕艇は、21世紀の社会を担うに価する誠に意義深い活動であると確信し、その発展を心より願うものです。

さて、高体連として久しく、健康面、クルー編成上の合理化などからスカル化をとの声があがっていましたが、世界漕艇界の傾向から日本漕艇界も、スカル化をとの議論を登場させました。又、高体連漕艇部の活動現場では、生徒数の減少や指導者不足など課題は山積しております。しかし、45年の貴重な漕跡に支えられながら、中・高・シニアそして生涯スポーツとしての漕艇活動の一貫した発展のために、全国高体連漕艇部は勇往邁進する所存です。これまでご支援いただきました、全国高等学校体育連盟、各都道府県高等学校体育連盟、日本漕艇協会、各都道府県漕艇協会をはじめとする関係各機関、各位に対しまして深く感謝の意を表しますとともに、今後とも変わらぬ御指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げまして発刊のご挨拶といたします。

平成9年4月

男子舵手付フオアー

男子ダブルス

男子シングルスカル

《事務局》
〒130-0022 東京都墨田区江東橋 1-7-14
都立両国高校内
TEL 03（3631）1815
FAX 03（3846）6682

創　　立：昭和 28 年度 10 月 4 日

加盟校数		4,041 校
部員数	男　子	33,672 名
	女　子	20,867 名
	合　計	54,539 名

年度	部　長	委員長	記　事
29	星　一雄	湯野　正憲	しない競技大会開催
30	〃	〃	
31	〃	〃	国体に剣道男子団体戦設置
	両角　英運		
32	〃	〃	
33	村田　純一	〃	
34	〃	〃	しない競技の部を廃止し剣道の部のみとする
35	〃	〃	
36	〃	〃	
37	〃	〃	
38	小川　定胆	〃	女子個人戦設置(オープン参加)
39	〃	〃	
40	〃	〃	
41	〃	〃	
42	湯野　正憲		
43	〃		
44	〃		女子個人戦オープン参加を廃止し男子と同様各県２名とする
45	〃		女子団体戦（３人制）を開設する。
46	〃		
47	〃	岡　憲次郎	
48	〃	〃	
49	〃	〃	
50	〃	〃	
51	〃	〃	
52	棚橋勝太郎	〃	木村･湯野杯授与開始
53	棚橋　嘉勝	〃	男女団体は48チーム個人は96名に固定

年度	部　長	委員長	記　事
54	棚橋　嘉勝	岡　憲次郎	余勢場外の採用女子団体５人となる
55	〃	〃	
56	〃	〃	
57	富永　廣徳	岡村　忠典	
58	宮澤　嘉夫	〃	30周年記念誌発行
59	〃	〃	
60	加藤　淳二	〃	
61	〃	〃	地区役員を正式に名簿登載、女子補欠１名増が認められる
62	〃	〃	
63	太田　實	岡村　忠典	
元	〃	〃	
2	山崎　興一	〃	審判服装を全剣連方式に改める。
3	〃	〃	
4	〃	〃	第１回全国高校剣道選抜大会開催(3/27,28)剣道部努力目標を制定
5	岡村　忠典	〃	インターハイの補欠が男女とも２名となる。剣道部40周年記念事業
6	〃	〃	全国選抜大会で女子審判２名を起用する。
7	〃	〃	
8	〃	増田　三郎	全国選抜大会を全剣連新規則で運営する。
9	〃	〃	
10	増田　三郎	〃	岡村忠典氏名誉部長に承認される。(平成10年度１年間)

1　沿　革　創設～昭和62年

昭和27年7月

・「全国高体連しない競技連盟」の組織化を図り、初代部長に都立九段高校校長の星一雄氏を迎え、初代委員長には都立九段高校教諭の湯野正憲氏が就任する。湯野正憲氏はその後昭和41年まで専門委員長を勤め、さらに全国部長を昭和51年まで勤めてこられた。この間における氏の努力は特に偉大なものであったと記録にとどめておきたい。

昭和28年10月

・「全国高校剣道・しない競技部」が結成され全国高体連に加盟する。

昭和29年8月

・「全国高校剣道・しない競技大会」を日光において開催する。（8月4、5日）

昭和31年10月

・第11回国民大会（兵庫県）から高校男子剣道団体の部が設けられる。

昭和34年8月

・「しない競技」の部を廃し「剣道」の部のみとする。

・個人の部を設け、各都道府県2名とする。

昭和38年8月

・女子剣道の発展がめざましいのをうけて、又10周年記念大会行事として女子個人戦をオープン参加の形式で開設する。62名の参加を得る。

昭和44年8月

・昭和38年の記念大会以降オープン参加だった「女子個人戦を」この年から男子と同様にする。

昭和45年8月

・女子団戦をメンバー3人補欠1名で開設する

昭和52年8月

・男女団体の優勝校に、木村篤太郎氏の木村杯湯野正憲氏の湯野杯が授与されることになる

昭和53年8月

・この年より、今まで認められていた前年度優勝校の優先出場が認められなくなった。従って、団体は男女とも48チーム、個人は96名と固定した。

昭和54年1月

・4月1日施行で全剣連の試合・審判規則が改正される。それに関し高体連内部で大きな問題となり、勝浦研修の一部を臨時専門委員会

創設以来献身的努力を払われた故湯野正憲先生

として激論を交わす。その結果不備があれば修正するということで全面実施と決まる。「余勢場外」が生まれ「線審」が廃止される

昭和54年8月

・女子団体戦（昭和45年開設）のメンバー3人（補欠1）を5人とすることが高体連で認められた。しかし規模拡大制限の規制により男子の補欠を1名、女子補欠なしでスタートする。女子の稽古着・袴を白色に統一する。

昭和58年5月

・この年より各都道府県の加盟費として1万円を集め、組織の財政に加える。

昭和58年8月

・第30回大会を記念大会とした。同時に「記念誌30周年のあゆみ」を発行する。

・男子優勝旗を新調する。

昭和61年5月

・全日本剣道連盟試合規則にある「試合場」に高校生の特性を生かす為「開始線」を置いた

・女子のそんきょを高体連方式（片膝折敷き）から全剣連方式（男子と同じ方式）にする。

・本部役員に加えて地区役員を正式に決め名簿登載をする。

昭和61年8月

・「女子団体」の補欠1名増が認められる。これにより、選手数は男女とも同数となった。男女団体戦は参加チーム48、1チームのメンバーは選手5名、補欠1名、個人戦は96名となる。

昭和62年5月

・4月10日付けで全剣連の「試合規則・審判規則」が改正された。それをうけて高体連では「開始線」を置くことは従来通りとし、他は新規則に則って大会運営することに決めた。

2　10年の歩み

昭和63年～平成9年

平成2年5月4日

・インターハイの審判服装を全剣連方式に改める。(但し、ノーネクタイ、白靴下)

・女子の大会服装は上下とも白で統一されていたが、「男女とも白又は紺(黒)の稽古着・袴とする」と変更する。

・副部長を5人とする。「従来の大区分性は生かし、特に必要と認めた場合はそれ以外に部長が指名できる。」とし、九州地区より副部長1名を加える。

平成3年5月4日

・インターハイの審判服装を、半袖Yシャツ、エンジのネクタイ着用(白靴下)と決定。

・全剣連の試合規則一部改正にともない、不正竹刀使用は個人責任とし、チームの連帯責任にしないことを確認する。

平成4年3月27、28日

・念願の全国高校剣道選抜大会が愛知県春日井市総合体育館において開催される。

平成4年4月

・全国総体における剣道団体の補欠を1名増加することが全国高体連の会議で認められ、平成5年度(第40回栃木大会)より男女とも補欠2名で行うこととなった。

平成4年5月4日

・申し合わせ事項の「監督の服装」に「選抜大会では、背広・ネクタイ・または稽古着・袴とする。」を加える。

・審判の服装は、全剣連方式通り靴下も紺色とする。

・試合中における女子の転倒は即刻「止め」をかけず、男子と同様に「次の攻防を一呼吸見る」ことに措置を変更する。

・先細竹刀の危険性が問題提起され、大会の竹刀検量に、専用ケージでのチェックが加えられる。

・選抜大会でも「申し合わせ事項」の通り、開始線を置くことを専門委員会で確認する。

・全国教育系大学の「剣道人口減少問題」に関する研究(全剣連援助)に協力する。

・40周年記念事業として以下のことを決定する
記念誌の編纂。表彰。

平成4年8月1日

・岡村専門委員長名で5月25日付けに通知された「高体連剣道部努力目標」を、全国高体連剣道部の努力目標とする。内容は毎年専門委員会で見直すこととする。

・40周年記念事業の一環として女子優勝旗の新調を決定する。

平成5年5月4日

・岡村忠典新部長就任(委員長兼任)

・女子優勝旗を新調するにあたり、旧優勝旗を前年度優勝校の左沢高校(山形県)へ寄贈することを決定。

・40周年記念事業の表彰者、表彰団体を決定。

平成5年8月1日

・第40回大会を40周年記念大会とした。同時に記念誌『40年のあゆみ』を発行した。

・インターハイ監督主将会議終了後に感謝状、表彰状授与式を行う。

平成6年3月27、28日

・第3回全国高校剣道選抜大会より女子審判2名(5段以上)を起用する。

平成6年4月

・女性指導者の育成と実態把握のため「全国高体連剣道部内女子指導者調査」を開始する。

平成6年5月4日

・インターハイの試合運営を一部変更する。競技時間短縮のため試合順序を、団体→個人とする。

・富山大会より5段以上の女子審判員を2～4名起用することを専門委員会で承認する。

平成6年7月31日

・努力目標の審判員留意事項の中に「危険な突きは反則とする。(有効打突とする意思のない危険な突きなど)」を加え、富山大会より適用する。

・富山大会において女子審判員2名を起用する

平成7年1月24日

・阪神淡路大震災の被害を受けた兵庫県高体連剣道部に対して、全国高体連剣道部と各都道府県高体連剣道部で「激励・復活基金」として100万円を送る。

平成7年3月27日

・阪神淡路大震災の影響で開催が危ぶまれた第4回全国高校剣道選抜大会が予定通り実施される。開会式に先立ち、亡くなられた方々のご冥福を祈って黙祷を捧げる。女子審判を4名起用する。

平成7年5月4日

・全日本剣道連盟「剣道試合・審判規則」が4月1日付けで改正され、7月1日施行となった。それをうけて専門委員会では、平成7年8月の鳥取インターハイでは旧規則で、平成8年3月の選抜大会では新規則で大会を運営することに決定する。
・選抜大会における「一条校以外の参加」を、インターハイ同様承認する。
・長期外国人留学生の大会出場について、以下の通り決定する。「団体戦は登録選手7名中2名まで認める。個人戦においては制限なし。」

平成7年8月2日
・鳥取大会より女子審判員4名を起用する。

平成8年2月15日
・小森園正雄先生講話録『合気の剣道』発行。

平成8年3月27、28日
・全国高校剣道選抜大会の5回開催を記念して愛知県指定無形民俗文化財「小木田棒の手」を地元保存会に披露していただく。
・全剣連の新規則で選抜大会を運営する。
・努力目標に「鍔競り合いの膠着状態」の項目を加える。

平成8年5月4日
・九州選出副部長の特例を廃止し、東・中・西の各地区より2名ずつの選出と部長指名1名の副部長制とする。8月1日の会議で新副部長を決定する。
・全剣連の新規則に開始線が採用されたので、申し合わせ事項の開始線の項目を削除する。
・各都道府県の加盟費を2万円とする。

平成9年5月4日
・全国大会の引率責任者、監督について申し合わせ事項に加える。
・全国大会でのオーダーミスに対する措置を決める。

3　大会規模の推移　63～H9（　）内は補欠

全国高校剣道大会	63～H4	H5～H9
大会回数	35～39	40～44
男子団体	48	48
同選手数	5（1）	5（2）
男子個人	96	96
女子個人	96	96
女子団体 同選手数	48 5（1）	48 5（2）

全国高校剣道選抜大会	H3～H9
大会回数	1～7
男子団体	48
同選手数	7
女子団体	48
同選手数	7

選手7名登録、試合は5人戦とする。試合ごとにオーダ変更可。

4　大会審判長・優秀選手選考委員長63～H9

全国高校剣道大会

大会	年度	審判長	優秀選手選考委員長
35	63	石田　承玉	丸山　鐵男
36	H1	岡村　忠典	小森園正雄
37	H2	岡村　忠典	岡　憲次郎
38	H3	村上　済	岡　憲次郎
39	H4	矢嶋　章司	岡　憲次郎
40	H5	村上　済	原田　源次
41	H6	村上　済	原田　源次
42	H7	村上　済	岡　憲次郎
43	H8	村上　済	岡　憲次郎
44	H9	笹月　繁	矢嶋　章司

全国高校剣道選抜大会

大会	年度	審判長	優秀選手選考委員長
1	H3	岡　憲次郎	小沼　宏至
2	H4	深川　辰磨	松永　政美
3	H5	土居　安夫	村山　慶佑
4	H6	橋本　明雄	岡　憲次郎
5	H7	福本　修二	矢嶋　章司
6	H8	岩立　三郎	矢嶋　章司
7	H9	矢野　博志	矢嶋　章司

5　研究発表の記録

（1）日本武道学会に発表したもの

第27回（H6年9月）「高等学校における人口減少の実態と問題点」発表者岡村忠典

（2）その他

「全国高体連剣道部の実態調査」「小森園正雄先生講演録『合気の剣道』編集」

6　高校剣道人口の推移(63～H9)

年度	合　計	男　子	女　子
63	86,865	52,996	33,869
H1	84,731	51,080	33,651
H2	83,495	50,943	32,552
H3	81,674	50,510	31,164
H4	78,728	48,760	29,968
H5	74,315	45,719	28,596
H6	68,382	41,723	26,659
H7	63,584	39,084	24,500
H8	58,862	36,262	22,600
H9	54,539	33,672	20,867

7　研修会の記録

昭和53年1月5,6,7日に第一回研修会を千葉県勝浦市にある日本武道館研修センターにおいて実施した。翌年からは1月4,5,6日の日程に変更し昭和56年には文部省後援となり、昭和61年からは日本中体連剣道部をも含めて実施している。

昭和61年から、主催は全国高体連剣道部、日本中体連剣道部、日本武道館、全日本剣道連盟となる。この研修会は平成10年1月の開催で第21回を数え、参加者数は講師・助講師も含めると延べ3,000名もの多きにのぼっている。以下に昭和63年から平成10年までの特別講師、講師の先生方を記載する。

＜特別講師＞(　)は昭和53年からの延べ回数
小森園正雄 (6) 山崎興一 (3) 太田實 (2) 大島功 (2) 加藤淳二 (1) 柳生延春 (1) 武安義光 (1) 魚住孝至 (1) 土田國保 (1) 近藤利雄 (1)

＜講師＞(　)は昭和53年からの延べ回数
小森園正雄(12) 原田　源次(21) 岡村　忠典(20)
岡憲　次郎(19) 土居　安夫(19) 滝口　正義(18)
丸山　鐵男(14) 佐藤　成明(13) 矢野　博志(13)
増田　三郎(13) 田島　行男(11) 脇本三千雄(10)
村上　　済(10) 橋本　明雄(9) 平林　忠夫(9)
野尻　忠克(6) 遠藤　勝雄(5) 鵜狩　賢省(5)
上村　隆昭(5) 目黒　大作(4) 川口　正人(3)
小林　武夫(2) 藤原　崇郎(2) 岩立　三郎(1)
茂田　敏夫(1) 西田　照夫(1) 朝内　賢光(1)
安部　孝司(1)

8　全国高体連申し合わせ事項(抜粋)

(平成9年5月4日一部改正)

(1) 選手心得

・選手は気品のある態度で全力をあげて試合する。

・選手の服装は、紺（黒）または白の剣道着・袴とする。(その他省略)

(2) 引率責任者、監督の資格について

・引率責任者は出場校の教諭とし、監督は出場校の教職員または校長が特に認めた者とするただし監督が出場校の教諭である場合は、原則として引率者を兼ねる。(その他省略)

(3) 監督心得

・監督の服装は以下の通りとする。
全国総体では、白シャツ、白ズボンまたは剣道着・袴（色は紺黒白のいずれか）とする。
選抜大会では、背広、ネクタイまたは剣道着袴（色は紺黒白のいずれか）とする。

(その他省略)

(4) 規則の運用および、大会運営について

・試合はすべて一刀(一本の竹刀)にて行うものとする。二刀にての試合は認めない。

・個人戦の時、自分の都道府県の選手が出た時は審判は交代する。また関係のあるチームの審判も行わないことが望ましい。

・予選リーグにおける引き分けの際は、その都度勝負を決定せずにそのリーグ終了後下記の順で勝敗をきめ、また代表者戦を行う。
①チームの勝ち点による。(勝1、分0.5)
②勝者数による。
③取得本数による。(その他省略)

(5) 事故の処理（省略)

(6) 大会参加資格について（省略)

(7) 試合放棄に対する措置について（省略)

9　全国高体連剣道部努力目標(抜粋)

(平成4年8月1日制定、平成9年5月4日一部改正)

(1) 指導方針

剣道の理念をより深く認識し、心気力一致の剣道を目指す。

◎正しい心で練習も試合もするよう指導する。

①望ましい指導者のあり方について研鑽を積む

②真の有効打突を求め、その指導に徹する。

③正しい鍔競り合いからの打突の指導に特に努力する。

④安全に留意した練習、試合を行うよう指導を強める。

（2）審判員留意事項

◎正しい剣道が継承され、正しく豊かな心が育つよう、公正かつ厳正に審判する。

①有効打突の判定を誤らないようにする。

②鍔競り合いにおける「反則」を見逃さないようにする。

③鍔競り合いのこう着状態を正確に見極める。

④一時中止要請に対しての処理を適切に行う。

⑤場外反則のとりかたを正確にできるように努力する。

⑥危険な突きは反則とする。

第44回（平成9年度）京都インターハイ

10　将来に向けて

わが国の伝統文化である剣道は，戦後の一時期中断のやむなきに至った。その影響で本専門部は他の専門部から5年遅れて発足した。したがって，全国高体連創立50周年の中にあって本専門部は今年で45周年を迎えることになる。

昭和28年の発足以来，本専門部は年度を追って充実・発展を重ねてきた。当初は，まず男子剣道の興隆・拡充が注目された。やがて38年頃から女子剣道の興隆・発展がめざましくなり，59年には全国高校における剣道部員数が95,071（男子＝56,533，女子＝38,518）名に達した。

しかしながら，昭和60年代になると，剣道部員数は徐々に減少しはじめ，平成9年度の剣道人口はピーク時の60パーセントまでに落ち込んでいる。小・中学時代に剣道をしていた生徒達が高校でやらなくなるという，いわゆる剣道離れ現象が続いており，どこで歯止めがかかるか判断できない状況にある。

このような深刻な事態を踏まえ，将来に向けて重点的に取り組まなければならない本専門部の課題は次の事項である。

1．指導者の資質向上

本専門部は，毎年正月の4・5・6日，千葉県勝浦市において，各都道府県から2名参加の指導者講習会を実施している。この講習会は今年で21回続いており，剣道指導者の資質向上と剣道指導法の各都道府県への伝達に多大な成果をあげており，今後も積み重ねていきたい。

2．指導法の研究と実践

高等学校における剣道人口減の原因に，生徒数の自然現象が考えられるが，必ずしもそればかりとは言い切れない調査結果が出ている。つまり，小・中学校時代に剣道を続けていたが，高校でやめてしまった生徒対象の調査に，「剣道そのものが嫌いになった」，「剣道以外に魅力あるものがある」などの意識が示されている今までの剣道指導法は，とかく指導者の修行経験に基づく一方的な伝授に終始しがちであった。剣道の魅力を享受出来る指導法とその実践が強く望まれる。

3．強化と普及活動の推進

各都道府県の剣道専門部にあっては，全国総体，全国選抜大会，国民体育大会等に出場する選手を高めるための強化活動に力を入れてきたこれからは，選手強化に並行して，剣道指導者がいない学校対象の講習会や合同稽古会等の普及活動を推進する必要がある。ちなみに，東京都高体連専門部では運営部門の中に「普及部」「広報部」を設置し，成果をあげている。

本専門部は，平成4年に，「高体連剣道部努力目標」を揚げ，剣道を日本の伝統文化として正しく継承し，伝承すべく努力を積み重ねてきている。これからも，生涯体育としての剣道の基礎づくりを本剣道部が果たすべく，日々の剣道指導に，立派な大会運営に，指導者の資質向上に，剣道に関する調査・研究に，剣道の普及活動に邁進する覚悟である。そして，それらが剣道を通しての生徒を育てる教育活動そのものであるという自覚を持ち，ひとつの願行として正念相続してまいりたいと思う。

《事務局》
〒107-0052 東京都港区赤坂4-1-26
日本工業大学付属東京工業高校内
TEL 03（3589）1171
FAX 03（3589）1139

創　　立：昭和28年4月1日

加盟校数　　367校
部 員 数　　2,750名

年度	部　長	理事長	記　事
28	太田　浩		第1回全国選抜大会
29	〃		第1回全国高校大会
30	〃		全国選抜大会と全国大会を開催(以後継続)
31	〃		
32	〃		
33	〃		
34	〃		
35	〃		第1回米国遠征実施
36	〃		
37	上野　幸一		第1回米国チーム来日(以後継続)
38	〃		全国選抜強化合宿実施(以後継続)
39	〃		
40	〃		
41	〃		
42	〃		正課体育に認定される
43	〃		
44	〃		ジュニア世界選手権大会出場(米国)
45	〃		
46	〃		ジュニア世界選手権大会出場(日本)
47	〃		
48	〃		第1回カナダ遠征
49	〃		
50	〃		
51	〃		
52	〃		
53	〃		

年度	部　長	理事長	記　事
54	上野　幸一		
55	〃		日米親善20周年記念大会(千葉県佐倉市)
56	〃		選抜に米国・韓国参加
57	〃	小林　正好	専門部規約一部改正
58	〃	〃	
59	〃	野村　弘道	ジュニア世界選手権出場(米国)
60	〃	鈴木　武男	日米親善20周年記念大会(東京) 第1回全国グレコ大会
61	〃	〃	高体連ルール採用ジュニア世界選手権大会出場(ドイツ)
62	加藤　昭	〃	
63			日米交流同意書作成
元	〃	〃	
2	〃	〃	日米親善30周年記念大会(千葉県佐倉市)
3	〃	森田　武雄	
4	〃	〃	選手手帳採用 ジュニア世界選手権大会出場(コロンビア) 第1回韓国遠征合宿
5	馬塲　利宗	〃	全国大会40周年記念大会(栃木県足利市)
6	〃	〃	
7	家島　啓二	〃	
8	〃	〃	第1回ベラルーシ遠征合宿
9	永島　武	〃	
10	〃	〃	

〈はじめに〉

50年誌に関する寄稿を依頼されたが、当専門部では過去の資料保存が不十分なため満足な内容にならないことをお断りいたします。

レスリング関係者には別の機会に、より詳しく紹介できるように努力したいと思います。

（平成10年6月理事長森田武雄）

1　沿　革

昭和25年度

○第1回全国高等学校レスリング選手権大会が新潟市において三笠宮・同妃殿下をお迎えし、参加校13校による団体戦が行われた。

○国民体育大会に高校の部が団体戦を導入。

昭和26年度

○第2回全国大会千葉県船橋市団体24校。

昭和27年度

○第3回全国大会宮城県仙台市22校より120名の参加。

昭和28年度(1953年)

○第1回全国高等学校選抜レスリング大会新潟市で以降開催される。団体戦及び個人戦を実施。団体8校参加。

優勝校：新潟明訓高校

昭和29年度

○第2回全国選抜大会団体8校参加。

優勝校：新潟明訓高校

○第1回全日本高校レスリング選手権大会が、群馬県館林市で全国高体連主催により、三笠宮・同妃殿下をお迎えし、個人戦を実施する。

出場49校200名であった。

昭和30年度

○第3回全国選抜大会団体8校参加。

団体・個人戦が行われる。

優勝校：新潟県立新潟商業高校

○第2回全国大会東京都青山レスリング会館58校から400名が参加。

昭和31年度

○第4回全国選抜大会団体12校参加

優勝校：新潟明訓高校

○第3回全国大会北海道名寄高校

昭和32年度

○第5回全国選抜大会団体12校参加

優勝校：北越商業高校

○第4回全国大会富山県滑川市団体32校。

昭和33年度

○第5回全国選抜大会団体12校参加。

優勝校：新潟県立新潟商業高校

○第5回全国大会東京都立体育館団体33校。

昭和34年度

○第7回全国選抜大会団体12校参加。

優勝校：新潟県立新潟商業高校

○第6回全国大会秋田県五城目町団体12校

○オリンピック候補選手と共に千葉県館山にて年末年始の強化合宿に入る。

昭和35年度

○第8回全国選抜大会団体12校参加。

優勝校：新潟明訓高校

○第7回全国大会新潟県新潟市団体34校。

○第1回全国選抜レスリング渡米選手団が年末から3月中旬まで遠征。

昭和36年度

○第9回全国選抜大会団体12校参加。

優勝校：新潟県立新潟商業高校

○第8回全国大会山口県田布施町団体34校。

○第2回米国遠征年末から2月初旬まで。

昭和37年度

○第10回全国選抜大会団体12校参加。

優勝校：新潟県立新潟商業高校

○第9回全国大会広島県広島市団体39校。

○第1回日米高校レスリング大会が実施され、7月に2州が来日し各地を転戦する。

○高体連加盟校が104校になる。

昭和38年度

○第11回全国選抜大会個人戦実施。15校参加

優勝校：新潟県立新潟高校

○第10回全国大会大阪府団体41校
○第2回日米高校レスリング大会1州来日
○第4回米国遠征1ヶ月転戦。
○全国選抜強化合宿埼玉県朝霞町3月下旬
昭和39年度
○第12回全国選抜大会団体9校参加。
優勝校：新潟県立新潟商業高校
○第11全国大会兵庫県西宮市団体44校。
○第3回日米高校レスリング大会1州来日
○第5回米国遠征1ヶ月転戦。
○高体連加盟校が140校になる。
昭和40年度
○全国選抜大会一時中断。
○第12回全国大会大分県佐伯市団体47校。
○第4回日米高校レスリング大会2州来日
○全国選抜強化合宿静岡県伊豆長岡市
8月中旬に実施、グレコローマンを指導する。
○第6回米国遠征2チーム遠征。
昭和41年度
○第13回全国大会青森県八戸市団体51校
○第5回日米高校レスリング大会2州来日
○全国選抜強化合宿岩手県宮古市8月中旬
○第7回米国遠征3月中旬
昭和42年度
○第14回全国大会福井県金津市団体41校
○第6回日米高校レスリング大会2州来日
○第8回米国遠征1月に実施。
○全国選抜強化合宿静岡県伊豆長岡市において
年末年始に行う。参加数300名。
○正課体育として導入が認められる。
○競技人口調査結果。164校2886名。
昭和43年度
○第4回全国大会広島県府中町団体46校
○第7回日米高校レスリング大会2州来日
○第9回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿
東京代々木において年末から年始まで行う。
○日本アマチュアレスリング協会段位制導入。
昭和44年度
○第16回全国大会群馬県館林市団体47校
○第8回日米高校レスリング大会1州来日。
○第1回日加高校レスリング大会8月来日。
○第1回ジュニア世界選手権大会
米国コロラド州にて、7月中旬に行われる。
○第10回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿東京・和歌山で行う。
○国民体育大会少年の部にグレコローマンスタイルが採用される。階級の変更もあった。
昭和45年度
○第17回全国大会静岡県焼津市団体49校
○第9回日米高校レスリング大会2州来日。
○第11回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿青森・群馬・和歌山・鹿児島で実施した。
○第13回全国選抜大会再開する。団体12校。
優勝校：青森県立八戸工業高校
昭和46年度
○第14回全国選抜大会団体13校参加。優勝校：青森県立八戸工業高校
○第2回ジュニア世界選手権大会14ヶ国参加
東京代々木体育館において5月に行われる。
○第18回全国大会徳島県池田町団体50校
○第10回日米高校レスリング大会2州来日
○第12回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿東京・和歌山12月下旬。
○ルール改正により、円形マットに変わる。
昭和47年度
○第15回全国選抜大会団体16校参加。
優勝校：青森県立八戸工業高校
○第19回全国大会山形県上山市団体43校本大会より1県1校の参加となる。
○第11回日米高校レスリング大会2州来日。
○第13回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿東京代々木270名参加
昭和48年度
○第16回全国選抜大会団体16校参加。優勝校：仙台育英学園高校
○第20回全国大会三重県桑名市団体42校。
○第12回日米高校レスリング大会
参加国：カナダ・オレゴン州
○第14回米国遠征カナダ・オレゴン1月実施
○全国選抜強化合宿東京代々木280名。
昭和49年度
○第17回全国選抜大会団体16校参加
大会期間が2日間になる。
優勝校：新潟県立新潟東工業高校
○第21回全国大会福岡県大牟田市団体42校
○第13回日米高校レスリング大会2州来日。
○第15回米国遠征1月実施。
昭和50年度
○第18全国選抜大会団体16校参加。
優勝校：土浦日本大学高校

○第22回全国大会東京都日大講堂団体41校
○第14回日米高校レスリング大会2州来日
○第16回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿東京代々木269名。
○ルール改正により1mの消極ゾーンが出来る
昭和51年度
○第19回全国選抜大会団体19校参加。
優勝校：鹿児島商工高校
○第23回全国大会新潟県新潟市団体43校
○第15回日米高校レスリング大会2州来日
○第17回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市
昭和52年度
○第20回全国選抜大会団体16校参加。
優勝校：青森県立八戸工業高校
○第24回全国大会山口県徳山市団体43校
○第16回日米高校レスリング大会2州来日
○第18回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市
昭和53年度
○第21回全国選抜大会団体23校参加。
優勝校：鹿児島商工高校
○第25全国大会福島県田島町団体42校参加
○第17回日米高校レスリング大会2州来日
○第19回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿東京代々木185名
昭和54年度
○第23全国選抜大会団体25校参加。
優勝校：光星学院高校
○第26回全国大会和歌山県和歌山市団体43校
○第18回日米高校レスリング大会2州来日
○第20回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市300名
昭和55年度
○第23回全国選抜大会団体28校参加。
優勝校：全羅北道体育高校米・韓参加。
○第27回全国大会徳島県池田町団体43校
○日米高校親善20周年記念大会千葉県佐倉市
参加国：米国（3）・カナダ・中国・日本
○第21回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市410名。
昭和56年度
○第24回全国選抜大会団体31校参加。
優勝校：光星学院高校米・韓参加。
○第28回全国大会茨城県水戸市団体45校
2回戦終了後、再抽選を行う。（団体戦）
○第20回日米高校レスリング大会2州来日
○第22回米国遠征1月実施。
○第1回アジアジュニア・フリースタイル選手権大会参加。10月にインドで行われる。
○全国選抜強化合宿日本·韓国合同合宿茨城県高萩市435名参加。
昭和57年度
○第25回全国選抜大会団体30校参加。
優勝校：光星学院高校
○第29回全国大会鹿児島県大口市団体45校
2回戦終了後、団体戦の再抽選を行う。
○第21回日米高校レスリング大会2州来日
○第23回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市486名。
昭和58年度
○第26回全国選抜大会団体33校。4月実施。
優勝校：光星学院高校
○第30回全国大会岐阜県岐阜市団体46校
○第22回日米高校レスリング大会2州来日。
○第24回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市
○第27回全国選抜大会3月実施。団体31校
優勝校：光星学院高校
昭和59年度
○第31回全国大会秋田県五城目町団体46校
○第23回日米高校レスリング大会2州来日
○第25回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市
○1984年ジュニア世界選手権大会出場。
米国ワシントンDCにて7月に行われる。
○第28回全国選抜大会3月実施団体32校。
優勝校：光星学院高校
昭和60年度
○第32回全国大会石川県志賀町団体45校
○第1回汎太平洋高校レスリング優勝大会
＝日・米親善25周年記念大会＝
6月に東京で団体・個人戦が行われた。
参加国：米国（4）・カナダ・韓国・日本
○アジアジュニア選手権大会8月・代々木
参加国：インド・イラン・パキスタン・北朝鮮・韓国・中華台北・日本
○第1回全国高校生グレコローマンスタイル選手権大会東京代々木
日本レスリング協会主催のもとに実施。大会終了後講習会を実施。
○第26回米国遠征1月実施。

○全国選抜強化合宿茨城県高萩市
○第29回全国選抜大会団体32校参加。
優勝校：埼玉栄高校
本大会より、高体連ルールを採用する。
昭和61年度
○第33回全国大会岡山県鴨方市団体46校
○1986年ジュニア世界選手権大会7月ドイツ
○第25回日米高校レスリング大会2州来日
○第2回全国高校生グレコローマンスタイル選手権大会東京代々木148名参加。
○全国選抜グレコ合宿茨城県高萩市149名
○第27回米国遠征1月実施。
○第30回全国選抜大会団体33校参加。
優勝校：霞ヶ浦高校
30周年記念祝賀会を行う。
昭和62年度
○第34回全国大会北海道旭川市団体45校
○第26回日米高校レスリング大会2州来日
○第3回全国高校生グレコ選手権大会東京
○第28回米国遠征1月実施。
○全国選抜グレコ合宿茨城県高萩市152名
○第31回全国選抜大会団体32校参加。
優勝校：霞ヶ浦高校

2　10年の歩み

昭和63年度
○1988年ジュニア世界選手権大会
オーストリアで7月に行われる。
○第35回全国大会兵庫県三田市団体45校
○第27回日米高校レスリング大会2州来日
○日米高校同意書を10月に東京で作成。
○第4回全国高校生グレコ選手権大会駒沢
○第29回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市・広島県
○第32回全国選抜大会団体32校参加。
優勝校：霞ヶ浦高校
平成1年度
○第36回全国大会徳島県池田町団体47校
○第28回日米高校レスリング大会2州来日
○第5回全国高校生グレコ選手権大会
東京駒沢体育館
○第30回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市・広島県
○ハワイ国際ジュニア大会1月に行われる。
○第33回全国選抜大会団体33校参加。
優勝校：霞ヶ浦高校
平成2年度
○第37回全国大会宮城県名取市団体47校
○日米親善30周年記念レスリング大会
6月に千葉県佐倉市において団体戦及び個人戦を行う。（米国:4州参加）
○1990年世界ジュニアグレコ選手権大会
スペイン：バルセロナ7月
○第6回全国高校生グレコ選手権大会駒沢
○第31回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市・広島県
○第34回全国選抜大会団体32校参加。
優勝校：霞ヶ浦高校
平成3年度
○第38回全国大会静岡県焼津市団体47校
○第30回日米高校レスリング大会2州来日
○第7回全国高校生グレコ選手権大会
大阪府堺市
○第32回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市・広島県
○第35回全国選抜大会48校参加。
大会期間が、3日間となる。
優勝校：霞ヶ浦高校
平成4年度
○選手手帳を採用。
○1992年ジュニア世界選手権大会
コロンビア：カリ6月
○第39回全国大会宮崎県日南市団体46校
○第31回日米高校レスリング大会2州来日
○第8回全国高校生グレコ選手権大会徳島県
○第33回米国遠征1月実施。
○第1回全日本ジュニア韓国遠征合宿
○第36回全国選抜大会団体48校参加。
優勝校：霞ヶ浦高校
平成5年度
○第40回全国大会栃木県足利市団体56校
寛仁親王殿下のご臨席を賜り、40周年記念式典を開催。
○第1回ジュニア女子世界選手権大会
オーストリア12ヶ国参加。
○平成5年8月5日より高体連ルールを廃止。
国際レスリング連盟ルールとする。
○第32回日米高校レスリング大会2州来日
○全国ジュニア強化合宿を全国総体終了後、足利工大体育館にて実施する。
○第2回韓国遠征合宿8月下旬からソウルにて
○第34回米国遠征1月実施。

○第37回全国選抜大会団体48校参加。
優勝校：北海道岩見沢農業高校
○第9回全国高校生グレコ選手権大会
大阪府堺市
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市・広島県
平成6年度
○第41回全国大会富山県滑川市団体47校
○第33回日米高校レスリング大会2州来日
○第10回全国高校生グレコ選手権大会
東京駒沢体育館
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市・広島県
○第3回韓国遠征合宿8月下旬からソウルにて
○第35回米国遠征1月実施。
○1994年ジュニア世界選手権大会
フリー：ハンガリー
○第38回全国選抜大会団体49校参加。
優勝校：霞ヶ浦高校
平成7年度
○第42回全国大会鳥取県赤碕町団体47校
○第34回日米高校レスリング大会2州来日
○第11回全国高校生グレコ選手権大会
栃木県足利市
○第4回韓国遠征合宿韓国ソウルにて実施。
○第36回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市・広島県
○第39回全国選抜大会団体47校参加。
優勝校：霞ヶ浦高校
○第3回イラン国際ジュニア大会4月・イラン
平成8年度
○第43回全国大会山梨県甲府市団体48校
○第35回日米高校レスリング大会2州来日
○第12回全国高校生グレコ選手権大会
大阪府茨木市
○第5回韓国遠征強化合宿ソウル
○第37回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市・広島県
○第40回全国選抜記念大会団体56校参加。
優勝校：霞ヶ浦高校
○第4回イラン国際ジュニア大会4月
○1996年ジュニア世界選手権大会8月
フリー：モスクワグレコ：ポーランド
○第1回ベラルーシ遠征合宿
ベラルーシ共和国：ミンスク12月実施
平成9年度
○第44回全国大会京都府網野町団体48校
○第5回イラン国際ジュニア大会4月
○第36回日米高校レスリング大会2州来日
○第13回全国高校生グレコ選手権大会新潟市
○第6回韓国遠征強化合宿ソウル
○第38回米国遠征1月実施。
○全国選抜強化合宿茨城県高萩市・広島県
○第41回全国選抜大会団体48校参加。
優勝校：霞ヶ浦高校
○第2回ベラルーシ遠征合宿
○1997年カッデト世界選手権大会
フリー：インドグレコ：スロベニア

3　将来に向けて

昭和の初期にアメリカより導入されたレスリングは、苦難の道を経ながらも日本人に適した種目として受け入れられた。

1952年のヘルシンキオリンピックでは、日本選手団唯一の金メダルを石井庄八が獲得し、他の選手も全員入賞という輝かしい成績を残した。シニアの活躍により若い選手層が厚くなり東京、メキシコ、ミュンヘン、モントリオールと確実に金メダルを量産した。

しかし、現状は厳しい状況にある。高体連にも同じことがいえる。50年間の初期は八田一朗会長の指導のもとに基盤ができ強化、普及のためのあらゆる施策が講じられた。我々は、その意志を引き継ぎ高体連専門部の組織の確立と活性化、審判・国際・総務・財務・強化の担当者が今成すべき策を考え、連綿と続いている行事の内容も検討しているところである。

特に、強化策として国際交流と強化合宿を充実すべく、従来の日米交流大会のほかに、イラン国際大会、日韓交流合宿、ベラルーシ交流合宿等を計画し実施している。

ところで、昨今では、青少年のスポーツ参加動向に大きな変化が見られる。「女子レスリング」や「ちびっ子レスリング」の隆盛ぶりには目を見張るものがる。「少年少女」を対象とするレスリングクラブは全国で200を数える。

その一方で、高校生の格闘技離れが進み競技人口の減少傾向が見られる。我々はその歯止め策として、小学生・中学生・高校生の一貫指導と、課題である女子レスリングの方向性の検討も考えながら競技の望ましい発展の為に、専門部一丸となって普及・強化を計っている。

《事務局》
〒350-0036 埼玉県川越市小仙波町5-14
県立川越総合高校内
TEL 0492（22）4148
FAX 0492（29）1050

創　　立：昭和31年

加盟校数		2,018校
部員数	男　子	25,831名
	女　子	32,001名
	合　計	57,832名

年度	部　長	記　事
31	高崎　米吉	弓道専門部発足。第1回全国大会実施。
32	〃	今年より国民体育大会に出場。
33	〃	競技規則草案決定。
34	〃	新競技規則で大会実施。
35	〃	指導者講習会を大会の際実施。
36	〃	
37	〃	
38	〃	今大会よりプログラムに「全国高等学校総合体育大会」の名称を入れ、NHKも後援。
39	〃	
40	〃	
41	〃	
42	〃	
43	〃	
44	〃	第4回～14回大会まで団体戦のみ実施。
45	〃	今大会より団体戦は5人とし、個人戦も再開。
46	〃	
47	〃	
48	〃	
49	〃	
50	〃	創立20周年記念式典を実施（秩父）。「弓道二十年」を発行。
51	〃	皇太子ご夫妻ご台臨。
52	〃	推薦出場枠は今年まで。
53	高崎　米吉	
54	林　初男	
55	〃	
56	〃	
57	〃	全国選抜大会はじまる。
58	〃	
59	山本　彰一	
60	〃	創立30周年記念式典を実施（金沢）。「弓道三十年」を発行。
61	齋藤　克	
62	山下　真	冷夏の北海道大会。
63	〃	NHKで競技を放送。
元	〃	今大会より女子個人戦予選通過的中を2中から3中にした。
2	斉藤　節朗	体育館内仮設練習会場にプラスチックフォームあずちを使用。
3	〃	体育館内特設会場で大会を実施。
4	須田　三郎	台風のため日程を変更し実施。団体予選は坐射から立射に変えた。
5	〃	全国委員長研修会を大会期間中に実施。
6	〃	
7	〃	創立40周年記念式典を実施（山口）。
8	〃	「弓道四十年」を発行。
9	〃	国際交流で10名の高校生を中国に派遣。
10	〃	

1　沿　革

昭和31年・秋の全国高体連理事会で弓道専門部設置が承認される。

昭和31年・この年8月、全国大会前日の全国委員長会議で本専門部の正式な設置を決定。
第1回全国高校弓道大会が8月11、12日、中央大学弓道場で開催。参加校数は32都道府県から、94校（男子68，女子26）、選手は542名。団体戦、個人戦とも実施。
この年より第14回（成田大会）まで団体戦のみ実施し、個人戦は中断。技能優秀校（者）の表彰は第1回より第14回まで続いた。

昭和32年・この年より国民体育大会に出場。今回は第12回静岡大会で（弓道は三島市の大社弓道場）男子25チームが参加。次回から男・女共に参加する。

昭和34年・前回（第3回）の大宮大会で競技規則の草案が出され、今回の宮崎大会から制定された新しい競技規則で実施された。競技方法もこの大会から総射数法より、トーナメント方式に変わった。

昭和35年・第5回横手大会より、指導者講習会を大会の際実施。その後文部省の後援、共催を得て現在に至る。

昭和36年・今回より遠的競技を実施することが前年の横手大会の常任委員会で決定したが諸々の事情で中止となる。

昭和38年・この大会よりプログラムに「全国高等学校総合体育大会」の文字が入り、ＮＨＫも後援となる。

昭和45年・第15回大会（田辺市）より各都道府県より団体男女各1チーム（監督1，選手5，補欠2）、個人は男女各2名となった。なお、その後団体チームの補欠は適正規模から1名となる。この大会から弓道衣、袴着用が認められた。昭和59年までは弓道衣とズボン、スカートの両方であったが昭和60年の第30回大会より弓道衣、袴以外は認められなくなる。

昭和50年・第20回大会（秩父）で創立20年となり、永年出場校（10回以上）表彰、大会開催地功労者の表彰、全国功労者の感謝状贈呈を行う。「弓道二十年」を発行。

第20回大会（秩父）

昭和51年・第21回大会（長野市）で皇太子ご夫妻のご台臨を戴いた。
その後、60年金沢大会、63年明石大会にも弓道のご観戦を戴く。

昭和52年・第22回大会（島根大会）で前年度優勝校の次年度推薦出場枠がなくなった。適正規模からである。

昭和57年・第1回全国選抜弓道大会が全日本弓道連盟の主催で始まった。会場は明治神宮至誠館弓道場（東京）。出場校は全国より選抜された男女各16校。（大会期間は昭和58年3月25、26日）

昭和60年・創立30周年記念の第30回金沢大会で、全国大会10回以上出場表彰と全国大会開催地功労者表彰及び永年功労者に感謝状贈呈。
「弓道三十年」を発行。

昭和62年・第32回大会（北海道）。冷夏のため控室の体育館に暖房機設置。
この大会で女子個人の予選4射2中以上準決勝進出者が続出し、競技の進行が遅れた。このため、次回の兵庫大会で女子も男子同様4射3中以上の予選通過を決定。第34回の香川大会より実施となった。
競技の合間に行っていたセレモニー的な演武は今回が最後となる。

2　10年の歩み

昭和63年　第33回の兵庫県明石大会より競技中心の大会を心がけた。
競技合間の演武は今大会より中止。また、仮設練習会場の充実を図った。ＮＨＫ放送。

平成元年　琴平高校弓道場で開催。琴平町は観光地のため宿泊能力は大であった。大会期間中の雨でグランドに仮設した練習会場は泥田に化す。

第34回大会（琴平）

平成2年　第35回大会は宮城県仙台市の泉総合運動場泉弓道場。大会のスリム化をスローガンに、立順抽選会の予備抽選形式の廃止。「プラスチックフォームあずち」を本会場近くの屋内練習場に初めて設置。

第35回大会（仙台）

平成3年　今大会の会場は沼津市民体育館特設弓道場である。屋内特設弓道場、プラスチックフォームあずち使用、5人立4射場及び体育館内全体を特設空調機で冷房するという過去にあまり例のない大会。
なお、本会場練習は例年、1回のみの練習であったが公開練習会場として開放し、自由に練習ができた。

第36回大会（沼津）

平成4年　台風10号の来襲で大幅に競技日程、方法を変更した。団体戦の午前中に全国委員長会議を召集。午後1時から団体男子予選開始。この時点で台風の吹き戻しの風があった。女子予選は夜間照明を使用する中で実施。坐射から立射に変更し時間の短縮を図った。

平成5年　第38回大会は鹿沼高校弓道場で実施。生徒が前面に立って一人一役運動を展開。また、大会マニュアルの整備等もすすんだ。大会時の全国委員長会議後の研修会もこの大会より設けた。今回の講師は、山形県の弓削（ゆげ）師、岡崎廣志先生。

第38回大会（鹿沼）

平成6年　第39回大会は富山県大島町。選手控室は超大型テント。仮設練習場

を２ヶ所に設置。富山県で全種目開催のため宿舎が遠く宇奈月まで１時間以上かかった。配宿の問題は年々大きな課題となる。

平成７年　第40回大会は記念大会で山口県営弓道場で実施。創立40周年記念式典が盛大に行われた。全国大会10回以上出場表彰と全国大会開催地功労者表彰及び永年功労者に感謝状を贈呈。

第40回大会（山口）

平成８年　第41回大会は山梨県甲府市。交通の便が悪いため、市内及び近郊にある高校、大学弓道場間を無料で循環バスを運転する。O157の発生が心配されたので今大会は冷蔵（一部冷凍）の弁当を配食。
今大会より、団体技能優秀校選考内規を決定し、実施。第１回目の受賞校は女子で鹿沼高校が選ばれた（男子は該当校なし）。

平成９年　第42回大会は京都府綾部市。市内に宿泊施設が足りないため兵庫県にも配宿した。大会をスリムにするため仮設練習場の縮小、廃止が課題であるが今大会は市内に既存の弓道場がないため、大きな仮設弓道場を設置した。
本専門部創立40周年記念事業の一環として国際交流を始めた。第１回目として中国・天津体育学院に代表を海外派遣した。11月３日～８日の日程で本部役員３、男女監督各１・各ブロック代表選手10の計15名編成である。

２　将来に向けて

本専門部では、新しい世紀にふさわしい活動のあり方を考えるため、かねてから高校生による海外派遣事業を計画していたが、第１回目を平成９年度に実施した。中国・天津体育学院との交流を実現し、ときあたかも日中国交正常化25周年の記念の年にあたり、両国の友好に華を添えた。また、「武道」という、民族の精神的伝統を基盤にした文化を中国をはじめ、欧米に理解してもらうために、海外派遣事業を今後も継続していく予定である。

ところで、最近の高校生の体力の低下は想像以上のものがある。例えば、平成８年度全国高校総体は山梨県で開催されたが、弓道競技開会式会場の県立武道館内のアリーナで、貧血による卒倒者が続出した。健全なる精神は健全なる肉体に宿るということからも体力増強も大きな課題である。わが弓道専門部も、これらの問題解決のために指導者用テキストの発刊等今後検討していきたい。

全国高校総体そのものでも改善点が種々ある。大きくなりすぎた大会をいかにスリム化できるか。競技を中心とした大会をめざし、開会式などの式典、仮設弓道練習会場の縮小、廃止。競技規則の改正、運営マニュアルの整備。これらの課題を一つひとつ解決していく必要があろう。

《事務局》
〒791-3102 愛媛県伊予郡松前町大字北黒田119-2
県立伊予高校内
TEL 089（984）9311
FAX 089（985）0622

創　　立：昭和32年4月1日

加盟校数		5,613校
部員数	男　子	53,997名
	女　子	48,112名
	合　計	102,109名

年度	部長	記事
明41		全国中学校(旧制)庭球選手権大会が軟式ボールで始まる
44		新聞社の優勝旗が出る
大13		準硬式ボールが使用球になる
昭7		テニス化(硬式ボール使用)する
9		第1回中等学校選抜対抗庭球大会(学校対抗の前身)始まる
12		会場が浜寺から中舌鳥コートに変わる
18～20		第2次世界大戦のため中止
21		全国中等学校庭球選手権大会復活
22		団体戦2D, 3Sの5ポイントで行う
23		学制改革により、全国高等学校庭球選手権大会に改称する
	長谷川　寛治	全国高等学校庭球連盟結成する
26	〃	男女の団体戦、個人戦が同一会場開催となる
28	〃	全国高体連加盟申請
31	〃	全国高体連に庭球部加盟する
33	〃	全国9地区にて地方予選開催し、現行の組織できる。
36	〃	団体戦5ポイントから現行のD1, S2の3ポイント6名登録になる
37	〃	大会会場が中モズから全国持ち回りになる
38	長谷川　寛治	個人戦男女とも現行のS128, D64のドローで行う
52	太田　満	
54	友末　弘三	第1回全国選抜高校庭球大会を福岡久山で開催する
		高校総体団体戦6名登録から規模縮小で5名登録になる
60	古川　博	全国選抜大会優秀選手海外遠征を開始する
		全国高等学校庭球選手権大会記録集(昭23～62)発刊する
63	古賀　通生	
元	〃	選抜大会会場を久山から北九州へ変更する
2	〃	専門部名称を「庭球」から「テニス」へ変更する
		全国高等学校テニス選手権大会の80回記念パーティを行う
9	〃	高校総体団体戦48校から51校参加に変更する
		選抜大会40校から48校の参加に変更する
10	〃	選抜大会D2, S3の5ポイントを単複重複兼ねて出場できない方式に変更する

＜歴代部長＞

長谷川寛治（大阪・北野）　昭和23～51年
太田　満（愛知・椙女学園）昭和52～53年
友末　弘三（広島・安田女子）昭和54～59年
古川　博（東京・石神井）　昭和60～62年
古賀　通生（福岡・柳川）　昭和63年～

1 沿 革

全国高等学校体育連盟「テニス部」の歩み

全国高体連　故初代部長　長谷川　寛治
3代部長　友　末　弘三

平成10年で第88回を迎える全国高等学校テニス選手権大会は我国で最も古い競技大会である。その前身は全国中学校（旧制）庭球選手権大会であり、軟式のボールで始まった。第1回大会の参加校は24校で、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県からの出場であり、他からの参加は優勝した岡崎中学（愛知県）ただ1校である。第2回は関西各中学校連合庭球大会と改称されて、明治42年7月25日より参加校25校で挙行された。新しく畝傍、上野中学（奈良県）和歌山師範が参加している。第4回大会（明治44年）では参加校31校で、この大会から新聞社の優勝旗が出された。第6回大会（大正2年）から全国中学校大会と発展的に改称されるようになり、参加校も40余校と増した。第10回（大正6年）大会では参加校を64校に制限し、前記参加県の他に、岡山、広島、山口、香川、愛媛、福岡、長崎、三重、岐阜、神奈川、東京の各地から出場している。

大正2年（1913年）2月1日、慶大がテニス化を宣言し、大正5年1月に熊谷一弥氏がマニラでの東洋テニス選手権大会に優勝し、この年5月渡米した熊谷氏は全米順位の単5位にランクされた。大正8年秋から東都大学のテニス化が行われ、大正10年には日本デ杯チームが豪州を破って米国に挑戦し、翌11年3月、日本庭球協会が誕生した。しかしボール代は高く中等学校のテニス化は困難であった。

そこで準公式ボールが考案されて第17回浜寺大会の使用球になったのが大正13年である。これを記念して浜寺公園に米国のファレストヒルズ庭球場を模して、東洋一の鉄傘のある大スタンド付テニスコート二面が新設された。収容人員5，000人、建設費用4万円であった。浜寺の準公式大会の最後は昭和6年で、昭和7年（1932年）の第25回浜寺大会からテニス化（現在の硬式ボールを使用した）へと大転換し、7月24日から全国中等学校庭球選手権大会が開催された。参加校は132校であった。

昭和9年全日本学生庭球連盟主催の第1回全国中等学校選抜対抗庭球大会が西宮市の甲子園テニスコートで行われたのが現在の学校対抗の前身である。

浜寺大会は昭和12年、第30回大会より堺市中百舌鳥町の新設コートに変わった。昭和16年すべての全国大会は7月に突然中止された。その年の12月8日に真珠湾攻撃が始まった。この大会が他に中止されたのは第5回の明治45年、諒闇のため中止になった。第二次世界大戦中、最後の大会になったのは昭和17年8月12日から14日まで開かれ単複とも64校が参加、全部1セットであった。18年から20年までは中断されていた。

戦後、ボールは勿論、食べ物もない時代に本大会を復活させるのは大変であったが、戦前から世話をしていた筆者（長谷川寛治）が働きかけ、大阪毎日新聞社主催、南海電鉄会社後援で中モズ総合運動場等、関係各位の協力を得て、昭和21年8月25日より4日間堺市中モズコート（21面）で戦後第1回の全国中等学校庭球選手権大会（男子のみ）を開催した。団体戦も朝日新聞社の紙上後援で復活させた。

こうして復活された中等学校の全国大会も昭和22年の大会で学制改革によりその名を変え、昭和23年からは全国高等学校庭球選手権大会になったが、その時、米国占領から新聞社が生徒の参加する各種のスポーツ大会を主催することを中止せよとの命令が出された。その命令に最も関係があったのが朝日新聞社主催の野球と、毎日新聞社が主催していた野球、庭球、相撲、ラクビー・フットボール、サッカー等であった折衝された結果、夏の朝日新聞社主催の全国野球大会と、春の毎日新聞社主催の選抜野球大会とが例外として開催することを許可された。そこで戦前から毎日新聞社が長年主催してきた本大会も日本庭球協会が新しく主催するようになった。

次いで全国高等学校体育連盟が新設されて、高校の各種全国大会を主催するようになってきた。ところが全国的にみて普及度が低い種目はその連盟への加盟が認められない状態であった。当時、北海道、東北地方の裏日本にはテニスをプレーしている高校は殆んどなかったが、プレーしている高校の在る都府県だけで本大会に参加する学校に連絡して一応、全国的な高校テニスの組織として全国高等学校庭球連盟を結

成、関東、東海（太田満）、関西（長谷川寛治）、中国（内藤四郎）、四国（徳永重孝）、九州（小川一）の各ブロックに分けた。

関東地区には学校の先生で中心になる人がなかった。これが関東地区の高校テニスの組織結成を遅らせた大きな理由である。後に矢橋恵一（鎌倉高校）が組織づくりを進めた。中国では三代目部長（全国高体連庭球部）の友末弘三（安田女子）が新たに選出された。六地区とはいえ、関東、東海、関西が主で、中国は広島県、四国は愛媛県、九州は福岡県だけであった。

昭和27年より本大会を全国高等学校庭球連盟が主催事務局を筆者（長谷川寛治）の勤務する大阪府立北野高校に置いた。したがって大会の諸準備、運営には赤坂繁幸（池田高校）、河野陽之助（泉尾工）、水口光雄（大阪成蹊女）他、大阪の先生方に大変苦労をかけた。一方では全国高体連へ加盟できるよう努力を続けたが、地方の普及が遅々として進まず困難をきわめた。大新聞を後援にすれば普及が早いと助言を受け、考えてもみたが、やはり全国高体連への加盟を主に考え、昭和28年には、当時全国高体連副理事長、岩野次郎氏にも強く要請したが、もう少し組織作りを進めてから認めようということになり、昭和30年から全国高体連が本大会の後援となり、次いで昭和31年の全国高体連理事会で当時の西由己副会長（大阪府立清水谷高校校長）の御尽力により、12月11日満場一致で庭球部の加盟が認められたのである。

高校テニスと言えば「中モズ」（大阪）と答えるほどで昭和12年から36年まで高校テニスのメッカとして親しまれ、ここから戦後の日本の代表選手が巣立った。しかし、諸般の事情によりこのコートが閉鎖され、昭和37年の岡山大会から大会会場が全国回り持ちで行われるようになって、現在に至っている。

昭和25年に初めて男、女そろって団体戦が始まったが、参加校を見てみると、男子が14校、女子は6校しかなかった。

昭和31年に全国高体連加盟が認められ（正式には32年4月1日）参加校が増えてきた。昭和33年から北海道、東北、関東、東海、北信越、近畿、中国、四国、九州の9地区に分けて地方予選を行い、参加者を選出するようになった。

昭和34年の49回大会では団体男子16校、女子8校、個人戦男子S128、D68組、女子S80、D41組が出場している。この間28年と31年にはフィリピンの選手が参加し28年は単複優勝、31年には単準優勝、複に優勝したことが印象深い思い出として残っている。

40周年史より初代、3代両部長が執筆された文章より抜粋、まとめさせていただきました。当初、高校テニスの普及と発展を支えて下さった毎日、朝日両新聞社、中モズ、南海電鉄の関係者等々、現在は、日本テニス協会をはじめ選抜大会を主催していただいている読売新聞、スポンサーとして協賛していただいているダンロップ、ブリジストン両スポーツ各社の皆様方に感謝する次第であります。

現在、高校テニスの隆盛は、初代部長長谷川寛治先生（昭和60年6月逝去）に負うところ大である。先生は本大会の産みの親であり、戦前はもとより、昭和21年の復興期から51年迄、実に30年間の長きにわたり、全国高体連庭球部部長の要職に就かれ、この大会を育てて下さったことに対して、深い感謝の念を表したい。2代目部長大田満先生（昭和53年6月逝去）には、戦後の苦難の時期から長谷川先生の片腕となって殆どの業務を遂行していただいた高体連庭球部の功労者である。

高体連庭球部の基礎を作って下さった初代、2代目部長の後を継ぎ、高校テニスの底辺を広げた3代目部長友末弘三先生（安田女子）記録集作成等に尽力をつくされた4代目部長古川溥先生（石神井）の両氏も功労者である。

全国選抜高校大会を定着させた5代目現部長古賀通生先生（柳川）、古賀先生を副部長兼事務局として支えた山本宗五郎（浜松湖東高退職）先生が高校テニスを発展させた功労者である。高校テニスの発展はこれらの部長、副部長の先生方の他、各地域代表の常任委員の先生方、各都道府県の専門委員長、監督の先生方の熱心な支援と努力の賜物である。

2　10年の歩み

底辺は拡がり、テニスは盛んになったが、実力の方は、まだまだであった昭和60年代である。5代目現部長古賀先生が世界に目をむけ、羽ばたく選手の育成を掲げ、専門部で海外派遣を行うようになった。昭和60年に選抜大会における優秀選手をつれ、ヨーロッパ遠征が最初で、その後遠征先は米国、オーストラリア、米国と変更しながら、現在まで続いている。この遠征メンバーの中から、伊達公子達が育ってきている。

また、山本副部長が中心になり、専門部の名称も「庭球」から世界に通用する「テニス」に平成2年変更した。

インターハイと全国選抜大会の二つの全国大会を充実させ、選手の育成・技術の向上を図った。インターハイでは、加盟校数が、170校を上回る県が東京、大阪、神奈川と3県になり、長年の要望が理事会で承認され、平成9年より3県は2校参加が認められ、男女、それぞれ、48校の参加が51校の参加になった。

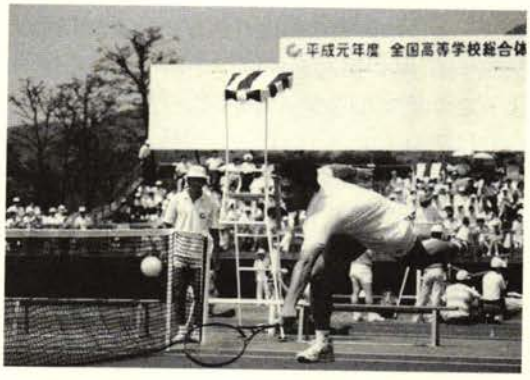
選抜大会では、平成9年より、40校から48校の参加になり、平成10年3月の大会で第20回大会をむかえ、増々充実した大会に成長した。第20回大会より、試合方式を複2・単3の選手は単・複兼ねて出場できない方式にし、インターハイと選抜大会の特徴を出した。

最低7人の選手の出場する選抜大会とし、最低4人の選手の出場するインターハイとの違いを出した。少子化で生徒数が減少し、部の統廃合がいわれる今日、テニスの指導者の力量が問われる時代である。部員の確保、選手の育成の面で指導者の奮起を7人の選抜大会で期待したい。

高体連テニス部は、昭和39年（この年より加盟校の記録が残されている）には、男子258校、女子221校しかなかった。63年度は男子2188校、女子2155校となり、その後の10年間で、平成9年度は男子2804校女子2809校と現在も増えつづけている。また、登録人数も平成9年度男子53，997人、女子48，112人、合計102，109人になっている。高体連加盟状況はテニス男子7位、テニス女子10位に入り、男女合計では、バスケ、サッカー、バレー、陸上に次ぎ5位の加盟人数となっている。

他の競技人口が減少している中で、テニスは増加している現状で、高校テニスの指導者は大健闘していることが考えられる。また、技術面でも、伊達、沢松、杉山、平木等、世界で活躍している女子の進歩は目ざましい。また、少々遅れていた男子も、松岡を筆頭に、最近、デ杯で活躍している本村、鈴木、岩渕、金子等、若手が伸びてきている。インターハイ、選抜大会で活躍した選手、海外遠征に派遣した選手の中から、世界へ羽ばたこうとしている選手が育ってきている。今後の高体連の先生方の増々の活躍を期待し、また、厚く感謝し健闘を祈りたい。

（文責全国高体連テニス部副部長宮浦典善）



3　50周年を迎えて

全国高体連テニス部
部長　古賀通生

部長　古賀通生

私の人生は高体連テニス部と共に歩いてきたと言っても過言ではない。

私は昭和32年に東京で初めて高校の教員をした。その時学生が体育館で卓球をしている姿を見て一緒に遊んだのが高体連との関係の第一歩であろう。その後、その学校の学生の要望により一年程卓球部の部長をした。それから故郷の九州へ帰り、高校の教員をした。その頃の私は高体連などという団体は知らなかった。高野連は知っていても高体連などという組織があることすら知らなかった。

私が子供の頃は世の中が貧しく、小・中・高を通して私は一回もクラブ活動に入ったことがなかった。無味な学生時代だったかもしれないが、友人達が色々な部活動をやっていることを眺めては、それが高体連という組織の中で活動しているということは知らなかった。試合に出ていっても、甲子園の高校野球ほど活発ではなく、我々みたいなノンポリな一学生には夏休みの全国大会などどこでやっているのかも知る由もなかった。音質の悪いラジオで聞く甲子園の高校野球は、それはそれなりに美化され、食糧難な時代にどうして甲子園に出てきたのか、マスメディアは大変な美化の仕方であったような気がする。私の出た高校は甲子園などに行けるような学校ではなかったが、私の友人達はそれなりに他のスポーツ部員として部活動の道に励む傍ら、試合に出ていった。ノンポリな学生の私は試合の結果を「どうだった」と聞くしかなかったし、知る術もなかった。

あれから50年近い年月が私の頭上を通り過ぎていった。今ここにスポーツ音痴だった私が高体連50周年記念誌の文を書こうとは思いもしなかったことである。

高体連テニス部の部長として5期10年になる。考えてみれば40年前、郷里九州で教師をした私は、学生との触れ合いの場としてテニス部を作った。別にテニスでなくてもスポーツであればどんなスポーツでもよかった。どうせスポーツ音痴な私のこと、というより部活動音痴な私のこと、といったほうがあってるかもしれない。体育の評価は小学校から高校まで必ず5で、スポーツ神経は発達している方ではあったが、専門的にスポーツをした経験は皆無であった。

学校の状態からして、テニスコート一面を工面してもらうのが精一杯で、何もなかった当時の日本の事情と似ていた。東京オリンピックを2、3年後に控えていた頃の話である。技術的にも、テニスなんて相手が打ってくるボールを一球多く打ち返せば勝てるぐらいにしか私は考える術もなかった。（或る意味では今でもそうとしか思っていないかもしれない。）

昭和42年、長野県松本市で行われたインターハイで初優勝した時は、本当に学生も私もこの上なく優勝の美酒に酔いしれ、一般の人からもらう美辞麗句に幸せを感じた。あれ程までに幸福感を感じたことは自分の人生になかったかもしれない。そこに辿り着くまでの苦しさと毎日の練習の楽しさ、学生と教師との間の、教師ならではの素晴らしさ人生観、そうしたものがこまごまと私の脳裏を通過していった。

それから向う14年間、全くの無敗の記録、負けを知らない生活が続くと共に、私の生活にも変化がでてきた。全国高体連のテニス部の役員として、又部長として、日本テニス協会の役員として、全くスポーツ音痴だった私がスポーツの中核を担うようになった時、スポーツに対して、又社会構造的組織に対して、高体連や協会という人間社会に不思議さを感じずには居られなくなった。今まで一高校のテニス部の部長として、監督として、目の前にいる学生の事しか考えず、明けても暮れても学生の幸せだけをみつめてきた私が、高体連という馬鹿デカイ組織の中で一体何ができるのであろうか。

高野連と高体連とは何が違うのであろうか。高校生という畑は同じであっても、野球をやる学生と他のスポーツをやる学生との違いはどこにあるのか。マスメディアの取扱い一つをとっても、一般社会の人々の目にしても、高体連と高野連とは全く違う。一体、高体連とは本当に必要なのであろうか・・・全く違ったスポーツが何十も集って、おのずと違ったルールと組織の中でどこかに接点を求めて折り合ったところで、それは所詮無理な話であろう。

スポーツは外国から入ってきたスポーツと、日本古来の国技的要素を追求するスポーツとに別れると思われる。テニスはその代表的スポーツであり、百年以上前に英国から入ってきたスポーツを国内向けに噛み砕いて育てたのが今のソフトテニスであろうし、英国から入ってきたそのままを育て上げていったのが今のテニスであろう。だが私の観点から見れば、柔道や剣道の事を論ぜよと言われても、全く知る術もないし、論じる気すらない。

そうした型と内容の異なった種類のスポーツが集って高体連を作り、毎年日比谷高校に本部を置いて論じ合っても可哀想なのは日比谷の校長先生であろうし、地方の高体連の本部にしても同様であろう。インターハイを毎年各地でやっても、やる側の行政も大変だろうが、それを取り扱う本部も熱が入らないであろう。私はインターハイに40年近く出たが、未だかつて日比谷高校の学生を色々な種目のなかで見たことがない。

所詮学校の教員は、基本は学生にある。行政屋ではないし大会屋でもない。熱が入った大会をやり、甲子園の高校野球に劣らぬような大会を開くためには、何よりもそこには自分が育てた学生がいるのが基本ではないだろうか。色々な考え方もあるだろうが、私は高体連に加味し様々な会議なり大会なりに出席してみて、これでは上手くいく訳がないと考えている。すなわち、種目別にもっと権限を与えた方が素晴らしい大会へ発展するような気がする。種目の違った、内容的にも異質な種目が集って、参加人数だけが膨れ上がった大会を全国の都市に持ち歩いてみたところで、所詮参加する側の学生の健康の問題一つ取り上げても大変なものである。私はテニス部の部長として5期10年間この問題に携わってきたが、大会の開かれる地方の行政に出向き、一番に説明に困難を来すのは、テニスとソフトテニスの問題であろう。テニスとソフトテニスは前述の如く、全く違った種目であり、ルールも又大会の内容も全く違った種目である。野球と軟式野球の違いより、もっと違っている。しかし、いつもテニスコートの取り合いで問題が起きる。また、ソフトテニスとテニスを併用して行えるコートを作るために、どちらかといえば軟かめのコートを作る。そうなると国際的には硬くて球足が早いコートが主流なのだから、行政が二つの種目を同じ場所で同時に行うために、国際ルールに反したコートで試合をするしかない。どこの大会に入っても不思議に思うのは、国際的に認められていないテニスコートがいつも出来上がっている。これでは日本のジュニアの強化と育成にはインターハイが何の役にも立たず、夏が来たからインターハイをやります、唯それだけである。新しいことを行えば他の競技団体につぶされるし、全国高体連という大きな組織の下では何も変わらない。我々の力で、行政にまで手を出すことはできない。そしてどうしても全種目を同じ場所で行う高体連のあり方に疑問と学生への思いやり不足を感じずにはいられない。

私は部長をしながら、いつも自分の手で学生を育てることを考えてきた。学生無くして自分の地位は無いと思っているからである。学生にどうしてやれば彼等が満足し、自分達の青春を謳歌でき、今ここにある自分の姿に満足感を覚えることができるのかいつも悩むところである。甲子園の高校球児が一時的にも青春を謳歌出来るということは、他の種目の我々も大会のあり方に十分検討する必要があるということではなかろうか。40年間高体連のテニス部に携わり、全国大会で45回、九州地区大会で49回優勝を経験した。全くビッグな大会で94回という優勝の経験を自分の手で作り通してきた。その一方で私自身、今考えてみれば私の一生とは一体何であったのか。高体連と共に生きた自分の教員生活40年間、無意味だったのか、充実していたのか、その生活の中味はわからない。卒業していった学生達との繋がりは結局普通の教師と同じであったのかもしれない。ただ高体連に対する満たされない思いが残るばかりである。

《事務局》

〒420-0839 静岡市鷹匠2丁目4 -18
静岡精華高校内（H10年度まで）
TEL 054（254）7334
FAX 054（255）2287

創　　立：昭和32年度

加盟校数		1,460校
部員数	男子	10,380名
	女子	3,557名
	合計	13,937名

年度	部長	事務局長	記事
32	土屋　憲三	浅野　達三	第1回大会実施
33	〃	〃	3県増で29府県が参加
34	〃	〃	日本山岳協会設立
35	〃	〃	講師に村井米子氏等
36	〃	〃	初めて東日本で大会
37	〃	〃	国体で高校コース独立
38	中山　勝治	〃	NHKが放送権料支出
39	〃	〃	中央総務の制度確立
40	〃	〃	全国高校総体の名称で
41	武内　安治	〃	日山協が主催名義に
42	〃	〃	文部省登山研修所発足
43	〃	〃	高校生の登山遭難多し
44	〃	〃	研究発表の掲載始まる
45	〃	〃	酷暑炎暑の大会となる
46	〃	〃	登山技術講習会盛大
47	舘野　進	〃	荒天対策に多大な出費
48	〃	〃	成績評価実施要領
49	〃	〃	学習を登山に取入れる
50	〃	〃	高度で最高の大会
51	〃	〃	20回記念大会を白馬で
52	〃	〃	基礎的登山行動を点検
53	〃	〃	秘境にふれる大会
54	代行浅野達三	浮舟　恢弘	海外遠征が活発となる
55	浅野　達三	〃	Cコース種目男子縦走
56	〃	〃	日山協月報に大会記事
57	畑　喜一	重田　保志	事務局が神奈川へ
58	〃	〃	感謝状贈呈内規で表彰
59	河野　真	〃	30周年記念事業の提案
60	〃	〃	写真でたどる30周年
61	斎木　直治	〃	30周年記念誌の発行

年度	部長	事務局長	記事
62	片岡　匡三	中野　成治	事務局京都に移転
63	〃	〃	33号の付録(8p)あり
元	〃	〃	会長杯大臣杯の授与
2	〃	〃	成績基準等の改訂
3	〃	〃	大会初のリタイアなし
4	山口　強	〃	アミカケ部分のカット
5	永田　實治	金子　昌彦	事務局が静岡に移る
6	〃	〃	登山部報特別会計に
7	〃	〃	問題検討小委員会設置
8	〃	〃	創立40周年記念諸事業
9	齋藤團次郎	〃	全国50周年の原稿作成
10	〃	〃	常任委で諸問題トーク

1 沿 革

大阪の呼びかけにより全国高体連登山専門部が結成されたのは、昭和31年10月28日。18府県が参加し、大阪なにわ会館で総会を開き、規約を制定した。

同32年8月16日、第1回大会を大台・大峰山系で開催するに際し、吉野山東南院で第1回の委員会をもった。『登山部報』の1号が刊行されたのも、当年度である。

以下、昭和62年度までの大会開催地を中心に略述する。

第1回（奈良）大会　昭和32年8月17～20日
参加396名。3コースで実施。

第2回（石川）大会　昭和33年8月17～20日
33府県より代表として選出された545名（内女子53名）。登山行動総人員は698名。

第3回（愛媛）大会　昭和34年8月10～14日
38府県より選出された504名（内女子92名）が参加。

第4回（岡山）大会　昭和35年8月15～19日
大会講評が、A・B・C・Dのコースごとに行われた。

第5回（山形）大会　昭和36年7月26～30日
1パーティ4名／各都府県3パーティ・北海道は5パーティまでとする。

第6回（群馬）大会　昭和37年7月26～30日
魔の山谷川岳を会場として。

第7回（熊本）大会　昭和38年7月26～30日
大会運営は、以後のモデルとなる。

第8回（奈良）大会　昭和39年8月5～9日
各都道府県3パーティまでとし、内1パーティは女子であることが望ましい——と規定。

第9回（大分）大会　昭和40年8月5～9日
優秀校表彰規定の原案作成の作業開始。役員の表彰内規の完成。

第10回（岩手）大会　昭和41年8月2～6日
女子のDコース参加は39チーム。『登山部報』に、全国高校登山大会成績評価基準を発表。

第11回（富山）大会　昭和42年8月18～22日
隊の名称に、鳥名・山岳名等を付ける。

第12回（鳥取）大会　昭和43年8月18～22日
日山協慎有恒会長が登山行動を共にする。

第13回（群馬）大会　昭和44年8月12～16日
創立以来の副部長青木泰三氏が退任。

第14回（兵庫）大会　昭和45年8月4～7日
リタイアチームが多かった。

第15回（徳島）大会　昭和46年8月7～11日
本年度に限り各都道府県男子1・女子1校。長野県が加入して、全都道府県がそろう。

第16回（山形）大会　昭和47年8月2～6日
『登山部報』に、全国高校登山大会成績評価実施要領採点表の様式を発表。

第17回（三重）大会　昭和48年8月5～9日
大会研究テーマを設定—体力・バランス・雨対策について特に配慮。各コースとも健脚向。

第18回（福岡）大会　昭和49年8月4～8日
南国九州であるため暑さについての工夫を十分にしておくこと——連絡事項。

第19回（山梨）大会　昭和50年8月4～8日
男子4隊・女子2隊の編成。コースの希望申し込みをとる。

第20回（長野）大会　昭和51年8月4～8日
悪天候のため停滞、計画の大幅変更あり。大会前に、関係者による20周年記念集会をもつ。

第21回（広島）大会　昭和52年8月4～8日
男子3・女子1コースの他に、総監督・コース視察員に1コースを設ける。

第22回（福島）大会　昭和53年8月2～6日
開会に先立ち、市中パレードを行う。

第23回（滋賀）大会　昭和54年8月4～8日
団体男子Aコース・団体女子Bコース・縦走男子Cコース（23パーティ）とし、A・Bは4、Cは3パーティを優秀校とする。

第24回（高知）大会　昭和55年8月1～5日
降雨多い。参加料は1パーティ6,000円。

第25回（栃木）大会　昭和56年8月19～23日
洗剤は設営地で用意する……と記載。

第26回（鹿児島）大会　昭和57年8月3～7日
選手・監督・役員・補助員など1,300余名の、屋久島での大会。

第27回（岐阜）大会　昭和58年8月19～23日
機関誌の表題が『登山部報』となる。

第28回（秋田）大会　昭和59年8月1～5日
加盟校数が1,570となる。（最高）

第29回（石川）大会　昭和60年8月4～8日
大会参加料13,000円・宿泊料金6,000円。

第30回（山口）大会　昭和61年8月7～11日
A隊4・B隊11・C隊3パーティがリタイア。

第31回（北海道）大会　昭和62年8月2～6日
寒気と濃霧の悪天候。最終日は行程一部短縮。

2　10年の歩み

第32回大阪大会　S63. 8．4～8
「光る汗　かがやく瞳　いま青春」
登山隊長：浮舟恢弘
コース隊長：服部義親・村川春水
村田　実・田中眞康
大会コースに沢登りを取り入れた。

第33回愛媛大会　H 1．8．2～5
「競え技、結べ友情、さわやかに」
登山隊長：片山文彦
コース隊長：西田六助・安藤哲次
渡部孔三・梶原勇機
台風12号の影響で2日目は設営地での停滞となる。

第34回宮城大会　H 2．8．1～4
「華ひらけ　無限の力　宮城の夏に」
登山隊長：岡部慎一
コース隊長：茂林憲童・山田定道
畑中多賀男・鈴木　修
開会式から登山行動の前半にかけて暑熱―汗のしたたる大会となった。

第35回静岡大会　H 3．7．31～8．4
「感動は“いっしょうけんめい”の熱い風」
登山隊長：戸嶋美喜広
コース隊長：木村　正・金子昌彦
大塚純二・角田雅敬
エスケープルートのない大会であったが、リタイアパーティなしであった。

第36回宮崎大会　H 4．8．5～8
「夢きらめいて、宮崎の空の下」
登山隊長：久永博之
コース隊長：石橋　功・楠本正洋
落合克己・温水武男
台風9号が過ぎて開会式。大型台風10号は8月7日襲来、最寄りの学校に避難。最終日の行程を中止し、講話と交流会を実施。
閉会式の前日は、延岡市150軒に民泊。

第37回栃木大会　H 5．8．1～5
「輝いて見せて下さい、青春の汗in栃木」
登山隊長：蓮實淳夫
コース隊長：渡辺雄二・石澤好文
神島仁誓・茂呂貞夫
すし詰めの奥日光での宿泊は、想い出となった。

第38回富山大会　H 6．8．20～24
「立山に　えがけ大きく　君の青春」
登山隊長：辻　　斉
コース隊長：越　誠一・山本勝博
中島雅夫・大角　隆
春の雪崩により大日平山荘半壊のため、C隊のコースを一部変更して実施。

第39回鳥取大会　H 7．8．5～8
「集え若人　はばたけ未来へ」
登山隊長：熊田　洋
コース隊長：山下俊一・牧田誠太郎
森　　悟・岩田武彦
参加資格の（7）に、＜参加資格の特例＞が加えられた。

第40回山梨大会　H 8．8．20～24
「かけぬけろ夏　風をきれ山梨で」
登山隊長：望月重臣
コース隊長：小俣　岳・古河道也
五味一仁・二宮寛美
3,000m峰を中心とした高山での大会。

第41回京都大会　H 9．8．4～8
「風にのれ　君の声援・君の汗」
登山隊長：田中健一
コース隊長：花嶋弘哉・長谷川庸作
西脇　終・森　一郎
低山ではあったが、京都北山の情緒を満喫することができた。

全国高体連登山専門部創立40周年記念事業

昭和31年に全国高体連登山専門部が結成されてから40年。平成8年度に創立40周年記念の諸事業を企画・実施した。詳細は、『登山部報』第40号・別冊＜創立40周年記念誌＞を参照ください。
・記念事業計画の提案
・実行委員会の組織
・予算（案）の作成

・協賛金の募集
・記念誌資料の収集
・記念集会会場地の選定――前年度までに。
当該年度の諸事業は、およそ以下の通り。
○『登山部報』第1号の復刻
○記念集会……長野県北安曇郡白馬村
・記念展：諸資料の展示
・分科会：1～4および特別の5分科会
・記念登山：五竜遠見・八方池・栂池
・記念講演：降籏義道氏
“白馬村からアンデス＆ヒマラヤへ”
・レセプションおよび懇親会
・全体会：祝辞・挨拶・分科会報告・
基調報告・集会宣言
○記念誌……『登山部報』第40号・別冊
・巻頭言
・祝　辞
第1部：登山専門部の歩み
◇登山専門部小史（創立より30年まで）
◇30年から40年まで（京都・静岡事務局）
◇寄稿：あの頃・あの時
◇記念特集：10周年・20周年・30周年・
40周年、そして……
◇『登山部報』40年
第2部：創立40周年記念事業
◇記念集会
◇寄稿：あゝ40年
◇記念誌：登山部報40・別冊
◇実行委員会日誌
第3部・諸資料
◇所収事項総覧
巻頭挨拶／諸会議／役員名簿／
加盟校および登録人員の推移／
顧問／全国大会開催地／全国大会
案内と報告／行事参加感想／
出場校・優秀校／技術委員＆審査員
／登山技術講習会／研究発表／
アンケート／D隊シンポジウム／
海外登山／回想・研究・主張など／
各地区の動静そして郷土の山／
常任委員会等／決算・予算／
登山専門部表彰／感謝状／寄贈図書
／協力企業および団体／事務局
◇編集後記

ユートピアに憩うB隊
（第39回鳥取大会）

北岳山頂を目指すC隊
（第40回山梨大会）

3　将来に向けて

昭和54～62年に亙るなだらかな高原状の加盟校数を経て、近年は登録部員数とともに確実に減少傾向を示している。中高年を中心とした登山人口、多様化しつつある野外活動への参加者と対比する時、抱える問題は大きい。

3Kだからというだけでなく、ダイナミズムに欠ける青少年に対し、自然から学ぶ・山から学ぶことの重要さを再認識させたい。

良き指導者である顧問の高齢化と、新しい顧問の登山技術および知識をどう育成するかも、大きな課題であろう。

登山は、本質的に競技ではない。全国高体連に加盟しているが、他の専門部と異質である。大会のあり方は今のままでいいのか、常に自戒し研究していく必要があろう。

部活動として実績が挙げにくく、また学校の中で邪魔者扱いされ兼ねない現状があり、それぞれ校内で・地区のグループで・全国的なスケールの中で存在をアピールできるような活動内容を構築しなければならないのではないか。研究テーマを設定し、地道に取り組んでいくことが必要であろう。

高校総体と国体とのダブルスタンダードに苦悩する現状を克服するために、クライミングは別途の競技として割り切ることが、近い将来に求められるのではないか。

予算規模の縮小・審査の客観化へのジレンマ・役員任期の短縮化現象・出費旅費の削減など、外的にも内的にも、さまざまな課題を抱えていることは事実である。

大いに議論をして、更なる発展を期待したい。最も教育的なスポーツは野外活動であり、その中で身体を鍛え心を磨く場として最高の舞台が登山活動だからである。

《事務局》
〒615-8102 京都市西京区川島松ノ木本町27
京都府立桂高校内
TEL 075（391）2151
FAX 075（391）2153

創　　立：昭和25年

加盟校数		257校
部員数	男　子	2,208名
	女　子	24名
	合　計	2,232名

年度	部　長	副部長	記　事
27	高崎　米吉		第1回全国大会開催
28	〃		
29	〃		
30	〃		
31	〃		第1回道路競争大会開催
32	〃		全国高体連自転車競技部発足
33	〃		
34	〃		
35	〃		第17回オリンピック大会に高校生初出場
36	〃		
37	〃	大場　淡路・津森　泰恵・田丸　一	第1回指導者研修会全国高体連自転車競技部再組織
38	〃	〃	
39	〃	大場　淡路・津森　泰恵・久米五百枝	事務局だより創刊
40	〃	〃	全国高校自転車競技年鑑創刊
41	〃	〃	加盟校名簿創刊総合優勝制導入
42	〃	〃	日ア車連全員登録開始
43	〃	〃	
44	〃	〃	
45	〃	〃	
46	〃	〃	全都道府県競技部加盟
47	〃	〃	
48	〃	〃	
49	〃	大場　淡路・守友　清・大島　正夫	
50	〃	〃	選手海外初派遣
51	大庭　淡路	守友　清・大島　正夫	第1回全国合宿開催
52	〃	〃	
53	〃	〃	第1回選抜大会開催

年度	部　長	副部長	記　事
54	大庭　淡路	守友　清	
55	〃	〃	
56	〃	守友　清	総体参加人数制限開始
57	〃	伊東　光二・中原　素樹・奥　栄二	
58	〃	伊東　光二・中原　素樹・武田　正雄・山岡　通夫	
59	〃	伊東　光二・山岡　通夫・村井　武治	
60	野口　幸男	〃	
61	〃	〃	
62	土屋　益夫	伊東　光二・山岡　通夫	
63	〃	伊東　光二・山岡　通夫・植山　一晴	
元	氷田　正男	山岡　通夫　40周年式典挙行	
		植山　一晴・小林　智明	
2	鳥居　彦之	小林　智明・菅野　一・村井　武治	ファニーバイク許可
			個抜4ｋｍ→3ｋｍへ
3	〃	小林　智明・菅野　一・佐藤　克巳	チームロードレース3名→4名へ
4	〃	小林　智明・山口　清孝・鈴木　正須	
5	増田　英二	小林　智明・山口　清孝	3種目名称変更　軽量ヘルメット全種目使用化
6	〃	山口　清孝・森　清一・角田　康夫	
7	〃	〃	
8	〃	高野　晃・山口　清孝・増田　利夫	ロードレースギヤ比制限導入
9	〃	〃	カウントダウン導入
10	三觜　宏孝	増田　利夫・狩野　哲男・久和　正孝	エルミネーション実施
			標準タイム導入

1 沿 革

25年4月4日、日本自転車競技連盟は加盟団体は「主催する競技会ごとに必ず高校種目を設け、高校当局に対し生徒の参加要請の案内をすることとし、高校競技のスポーツ的高揚を図るよう努力する。特に高校当局教職員の理解と協力を求めるよう努力を必要とする。」といった方策を決定した。次いで第5回国民体育大会において高校府県対抗競技会が行われることとなったので、日車連中央および地方組織内に「高校委員会」を設け指導運営していくこととなった。

25年8月には、「秩父宮杯第1回全国高等学校対抗自転車競技大会」が13都県31校60余名を迎えて開催され、法政高校が最初の優勝旗を手にし、31年8月には、「第1回全国高等学校自転車道路競走大会（神奈川県）」が27県27校の参加で開催され、盛岡一高校が初優勝を遂げた。

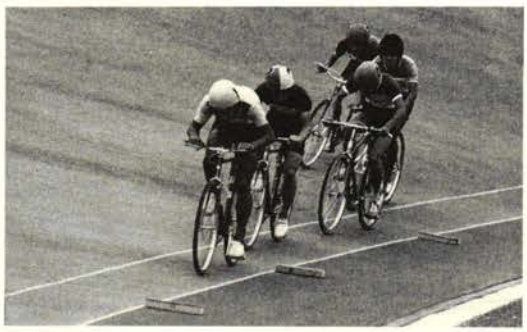
32年には、ようやく「全国高体連自転車競技部」が発足し、大会の主催も全国高等学校体育連盟に変わった。この年に開催された「第2回全国高等学校自転車道路競走大会（岩手県）」に寄せられた大会会長、高石真五郎日車連会長の激励のなかの「・・・アマチュア自転車競技はこれを愛好するためにのみ行われるものであって、他から強要されることなく、自ら好むが故に行うのがその本義であります。・・・自転車競技を愛するわれわれは、自転車競技を通じて友好精神を高揚し、強い精神と肉体を養うことに努めたいと思います。・・・全国各地から母校の名誉を担って参加された高校ライダー諸君が、この大会を愉快なる思い出として永久に交友を深め、自転車競技の双輪の下に結集し、アマチュア自転車競技の楽園を創造してゆくことに、お互いに努めたいと思います。」という言葉は、まさに高体連自転車競技部の指針であり、後の活動の礎となった。

35年の第17回オリンピック大会（ローマ）には、高校生として初めて久保村寛（前橋商高校）が出場し、これにより我が国を代表すべき競技者の育成強化を期して創設された高体連自転車競技部の揺籃期が終わり、充実発展期へと移っていった。

37年に「全国高校自転車競技部」は日車連から独立し、他の種目と同様に事務局をおき、高校の先生方の手で大会運営をすることとなった。独立後の最初の大会が、38年の「初めての高校総体（新潟県）」となり、高体連にとっても自転車競技部にとっても記念すべき年となった。

新しい事務局は組織の整備や関係諸団体との調整に取り組み、40年には、各加盟校とのコミュニケーションを図ることを目的とした、「全国高校自転車競技年鑑」を創刊し、また国際自転車競技連盟（ＵＣＩ）の規則を丹念に研究し、高校生競技者の安全を重点にした「全国高体連団体道路競走特別規則」を制定した。

46年初めて47都道府県が全国高体連自転車競技部に登録し、46総体には43県121校613名が参加し、都道府県高体連にも25県が加盟を承認されるに至った。



全国高体連自転車競技部では、常々海外の大きな大会に選手を派遣したいと考えていたが、50年ジュニア世界選手権大会（スイス国）に初めて選手を派遣した。この海外派遣で大会運営や競技力に関して、その後の大きな糧となった。

51年静岡県修善寺町の日本サイクルスポーツセンターと日本競輪学校で第1回の高校自転車競技全国合宿が開催された。全国合宿は「わが国の自転車競技界の基盤をなしている高校自転車競技選手の競技力を一段と強化して、わが国自転車競技界の一層の充実を図る」ことを趣旨として行われ、自転車競技専門部の活動の一翼を担っている。

53年には兵庫県明石市で第1回全国高校選抜自転車競技大会が開催された。選抜大会は従来の大会にとらわれない、野球のようなチーム対抗の競技会をという考えから、1チームのチーム編成によるチーム対抗戦となった。

（『全国高校自転車競技40年史』より）

2　10年の歩み

昭和63年度明石インターハイを実施した。イタリアン・チーム・レースは、とかく交代の仕方が問題になっていたが、ＵＣＩ国内コミッセールの講習会で高校の先生方が多数資格を取得したことにより、ルールの解釈が明解になった。

平成元年度高知でインターハイを実施した。関係者の多大な努力により全国高校選抜自転車道路競走大会を、インターハイのリハーサル大会として宮城県気仙沼市で開催された。

平成２年度の宮城インターハイからタイムレースに限り軽量ヘルメット及びファニーバイクが許可された。4㎞個人追抜がジュニア世界戦と同じく３㎞となった。インターハイの出場選手がブロックから選考される事になった。

平成３年度の静岡インターハイから、チームロードレースの選手数が、それまでの３名から４名となった。これは、高知での全国理事会で会議時間の大幅な延長の末の成果である。

平成４年度宮崎インターハイから、チームロードレースにおいてスピードメータが許可された。台風のためポイントレースの決勝を実施できなかった。

平成５年度栃木インターハイから、1000ｍが１㎞に、個人追抜競走がインディヴィデュアル・パーシュートに、イタリアン・チーム・レースがイタリアン・パーシュート・レースに、団体追抜競走がチーム・パーシュートにそれぞれ名称変更した。

軽量ヘルメットの使用がすべての種目で認められた。またハンドルの規定が追加された。

平成６年度富山インターハイから、チームロードレースのコース選定マニュアルが制定された。また、チームロードレースが完全シード制で実施された。

平成７年度鳥取インターハイから、１㎞タイムトライアルの時差発走が、ホーム・バックからの同時スタートとなった。

スプリントの予選において１ｍルールが廃止された。また、１／16決勝が廃止され１／８決勝からとなった。ポイントレースで中間の倍得点がなくなった。チームロードレースにおいて20秒のタイムペナルティが導入された。

チームロードレースで初めて２チームに１台の審判車を配置し、シードチームは１分間隔の時差スタートとなった。

福島国体から成年はケイリン、少年はエリミネイションレースが始まった。

平成８年度から審判委員会が技術・審判委員会に名称変更した。第１回ジュニア全日本選手権ロードレースが始まり、ジュニア世界選手権ロードレース大会の代表選手選考会として明確に位置づけられた。

山梨インターハイからポイントレースの予選が20㎞から16㎞、決勝は30㎞から24㎞に変更された。ロードレースにおいてギア比の上限が設定された。チームロードレースで初めてスタート台を使用した。

いままで全国選抜大会は、昭和59年度を最後にロードレースだけであったが、トラックレースを実施することになった。

男子は１㎞ T.T、３㎞ I.P、スプリント、ポイント・レース、ケイリン、エリミネイション、個人ロードレース（40㎞）の７種目で、女子は500ｍ T.T、２㎞ I.P、個人ロードレース（20㎞）の３種目である。１㎞ T.T と３㎞ I.P は参加制限を設けた。またロード・レースも１校３名以内県単位として４名まで出場できるとした。総合優勝は各種目の得点の合計とした。

平成９年５月、機材の大幅な変更があった。スピナッチハンドルはトラックにおいて使用禁止。ハンドルバーの先端はB.Bから８０㎝以内。イタリアンのハンドルはノーマルハンドルのみとなった。

平成９年度京都インターハイから、タイムレースのスタートにカウントダウンが採用された。パーシュートレースの順位決定戦を廃止し、１／２決勝、決勝を実施した。また初めて全チームにチームカーを配置した完全な形での

チームロードレースを行った。

全国選抜大会を初めて沖縄県で実施した。ロードは名護市屋我地島で行った。

平成10年度の香川インターハイから、新種目としてエリミネイションレースを、実施することに決定した。インターハイの出場資格として1㎞T.Tと3㎞I.Pに標準タイムが導入された。

平成11年度岩手インターハイからイタリアン・パーシュート・レースが、オリンピック・スプリントに変更となった。

平成13年度の熊本インターハイからチームロードレースを廃止し、ワンディロードレース（各県4名）とインディヴィデュアルタイムトライアルロードレース（各県1名）となる。

（技術・審判委員会中村雅章）

3　将来に向けて

自転車競技は一時期、一部の地域が強くインターハイ・全国選抜大会等で優勝する地区が限られていた。しかし、現在全国的に力が均一化され、格差がなくなりどの学校でも優勝するチャンスが生まれてきた。これにより専門部では、世界に通用する人材の発掘を願い、全国合宿（地域）ジュニアⅠ合宿、さらにジュニアⅢ合宿とピラミット型に強豪選手を見つけだし指定選手を決めて来た。トラックの部はオーストラリア、ロードの部はフランスへ外国遠征し各国のナショナルチームとの合同合宿を実施し、国際的レベルの選手を養成している。

またトラック、ロードの全国大会も増え充実してきた。

今後選手強化には、次のような対応が望まれる。

①練習場所の確保

ロード練習においては、日本全国どこへ行っても現在車社会であるため、安心して走れる道路の確保が望まれる。

トラック練習においては、競技場・競輪場を安価で借用でき、余裕のある練習時間の確保が望まれる。

②新機材への対応

科学技術の進展に対応し軽くて堅実な新機材による競技用自転車、ホイールが生まれてきた。また2000年より前後輪同径のファニバイクが必要となりそれに対応する予算処置も大変である。

③人材の育成

良い資質をもった選手の発掘や高校生でオリンピックに出場できる選手、プロ・大学・実業団等あらゆる分野で活躍できる人材の養成に努めなければならない。また指導者も特殊なスポーツということもあってか、なかなか育たないのも悩みの種である。今後、もっと選手層に厚みをもたせることによって、多くの後継者が育ってくれることを望む。

④トレーニング法の開発

基礎体力の向上を目標にした、トレーニング手法の研修をしなければならない。無酸素・有酸素トレーニングの組み合わせであるインターバルトレーニング、科学的トレーニング及び複合トレーニングの開発、水準以上の向上を図るエキセントリックトレーニング、心のトレーニングであるメンタルトレーニングやインテレクチェアルトレーニング等各種方法を取り入れ、少しでも記録の向上に繋がるよう努力してゆきたい。

（強化委員会山崎好弘）

《事務局》
〒 329-2712 栃木県那須郡西那須野町下永田
6丁目4番地
県立那須清峰高校内
TEL 0287（36）1155
FAX 0287（37）2458

創　　立：昭和33年
加盟校数　331校
部 員 数　合計 3,839名

年度	部　長	委員長	記　事
62	一ノ瀬　博	後藤　文夫	札幌工高生手作りの電光得点板登用。
63	〃	〃	東独ナショナルコーチ、マルチンネーフによる講習会。名簿「こぶし」を創刊。
元	〃	〃	第一回全国選抜大会が浪速高校で開催。高校総体の出場選手が400人を超える。
2	〃	〃	
3	〃	〃	高校総体出場校が198校となる。高校総体に全都道府県から出場なる。全国選抜大会のブロック別代表に東京都が関東から別枠になる。高校総体と選手権大会の分離に関する特別小委員会設置。
4	〃	〃	専門部40年史発行。規模適正化で日連と意見交換。
5	〃	〃	ボクシングに関する実態調査。日連「未熟者の出場停止」と「競技の形態」見直し要求。専門部委員会を5部門に拡大。
6	〃	石井　義晃	富山総体から非一条校選手が出場。常任委員の複数制。 一ノ瀬部長が死去。
7	水澤　研一	〃	岡山総体からＬＨ級Ｈ級の2階級を廃止。 セコンド枠が新設。 監督セコンドは教職員であることの通達。 山口県が専門部休止
8	〃	関　桂一郎	
9	市野川　實	〃	岩手選抜大会より選抜大会の高体連役員は日連から指名制となる。 岩手選抜大会より女子マネジャー許可。
10	本部　哲廣	望月　宏昭	

Ⅰ．まえがき

40年史作成の時点で、当専門部発足以来の流れは述べたので、今回は、昭和62年以降について述べるにとどめる。昭和62年以降の約10年間は、ボクシング専門部が、その歴史の上で最も輝かしい光を放った時期であったと言えよう。それは、歴代の部長の中でも類まれな気力・体力・知力を兼ね備えられていた、故“一ノ瀬”部長が、企画力・行動力に恵まれた多士済々の常任委員・全国委員を擁していたからである。勿論、この体制はこれらの人々を担ぎ出し、支えた全国の高校ボクシング関係者の熱意と支援があったればこそであり、これらの人々が、ボクシング専門部を育んだ母体そのものであり、同時にその母体もボクシング専門部の歴史の中で培われて、この時期に華ひらいたものである。この燦然たる時を特徴づけるものは下

記の如くである。

Ⅱ．活性化の取り組み

(1)大会運営の在り方

全国高等学校総合体育大会（以下、高校総体と略記）を、我々（現場の高校の先生達）の手で運営したいという、当然すぎる動きが表面化した。高校総体は高校生の大会であるから、当然のことであるが、この大会は同時に、全国高等学校ボクシング選手権大会（以下、選手権大会と略記）を兼ねてきた歴史が厳然と存在し、過去非力であった高校現場を日本アマチュアボクシング連盟（以下、日連と略記）がカバーし大会を運営してきたという事実があった。しかしながら、この件に関しては日連の理解・協力の下に現場の高校の先生方の希望に沿う形で、高校総体は運営されるようになった。ここに至る過程の中で、高校総体と選手権大会の分離が検討されたこともあったが、経費・労力・時期・会場その他の問題が余りにも多く、結論が出るに至っていない。

(2)全国高等学校選抜大会の新設

昭和50～60年頃にかけて、高校総体の上位入賞選手を集めて、断続的に日連により東西対抗が実施されてきたが、選手の構成などについていろいろと意見が分かれて、恒常的に開催されるには至らなかった。他の競技の如く全国的規模での選抜大会の実施を求める現場の先生の声を活かすべく、日連・全国高体連の承認を経て、日連との共催の形で、この大会が開催された。ただ、この大会は、高校総体とは趣旨・目的・制度等の上で性格が異なる。日連からの百万円の援助金以外の経費をどう調達するかの問題を抱えながらも、平成2年3月26日～29日にわたり、記念すべき第一回の選抜大会は部長校の浪速高校体育館で開催された。経費のこともあり、この大会は高校の先生方の手で、既存の施設（高校の体育館等）設備を利用し“質素にして稔りのある大会に”をスローガンにして出発した。だがこのスローガンの一部も、第二回大会から脆くも崩れてしまい、以後回を重ねるごとに日連主導型に変質・移行してしまった。しかし、この大会が新設されるまでの先生方の熱意・意気込みは一方ならぬものであった。例えば、入賞者用のメダルの図案は、全国の高校生から公募され、100点を超す応募があった。第一回大会から現在に至るまで、金・銀・銅メダルとなり、栄ある章として選手の胸に輝くことになった。

(3)専門部組織の改革

ボクシング専門部の活性化のためのもう一つの取り組みは、組織運営をプロ化させないことにあった。つまり、現場の高校の先生がいつでもどの係にでも大会運営の戦力となりうる組織づくりである。換言すれば、組織活動の浸透化である。世代の交替が進む中で、教師の自主性・積極性がともすれば薄れる情勢の中で、それに備えるための取り組みであったとも言える。具体的には

ア．部長の停年制の導入（10年までとする）
イ．副部長の増員（北・中・南から各1名）
ウ．常任委員の複数制（ブロック2名まで）
エ．委員会活動の拡大
オ．自主財源づくり

などである。しかし、問題が、ウ．にあった。これは、専門部の活動が一部の常任委員に任せきりに（常任委員のプロ化）なるのを防止することと、常任委員の交替時における業務の引き継ぎを円滑にし、戦力低下を未然に防ごうとするものであった。勿論、最大の狙いは、複数化することにより、常任委員の活動内容の各ブロック内でのより一層の伝達を図る、また各ブロックの意見を吸い上げて、全国の高校現場の先生方の理解・協力を得、先生方の力の結集を実現し組織の活性化を図ることにあった。しかしながら、この志とは異なり、このブロック常任委員の複数化は、経費の関係などもあってブロック内でのローテーション化を生じた。二人の内の最低一人が会議・大会時に参加し、その内容をブロックに伝え、また地方の意見を集約するということには至らなかった。つまり二年毎の交替という結果は、常任委員がその業務に精通する以前に交替することになり、常任委員間の意志の疎通も不充分であったりして、周知徹底を欠くとともに責任の所在が不明確になるなど思いもかけぬ結果を生じさせた。各ブロックが共通の認識の下、その隔差を克服する努力が求められるべきである。エ．は、ウ．との関わりで、業務が一部の人に集中するのを防ぎ、活動を分担し振興するための試みであった。初めは、総務・審判・強化であったが、専門部の活動が活発になるにつれて、平成5年から・総

務・広報・普及・審判・強化の五部門に分れた。**(総務)** は高校総体・選抜大会の企画や運営を総括し専門部活動の円滑化を担当する。総務委員会が果たした仕事で特筆すべきことは、機関誌“こぶし”の発行と、高校総体などの大会の準備・運営マニュアルともいうべき“業務必携”の作成である。現在のような係別の業務必携は、昭和53年の高校総体（岡山県総社市）でその原本が作成され、年々改善されて、平成5年頃に現在のような、ほぼ完全なものが出来上がり、これによって大会運営は極めて円滑になされるようになった。もう一つは、“全国高体連ボクシング専門部40年史”の作成である。全国高体連の40年史が作成発行された年に専門部の40年史の作成も着手された。40年をどこから起算するかについては、全国高体連に専門部が加盟した年とするか、全国中学校ボクシング選手権大会の発足した年が良いかなど、いろいろ意見はあったが、年々資料が散逸し、関係者が亡くなり、現存する人の記憶も薄れていく中で、ともかく資料の集成を目的に着手された。**(審判)** は、高校選手の大会に、他競技の如く高校の先生方の審判の登用のために、先生方の上級審判資格の取得を働きかけてきた。日連の理解協力が得られて高校総体時の“サブジャッジ制”により、先生方の審判技術の指導がなされ、また数年にわたりA級審判員試験も実施されるようになった。しかし、日連の好意ある取り組みにもかかわらず、先生方の参加が尻すぼみになり、予定の受験者枠に達しない年が続き、まもなくこの制度が立ち消えになったのは高校側の意欲の問題である。**(強化)** は、高校選手の競技力向上を図るとともに、高校生を指導する先生方の指導力向上を担当する部門である。日連の指導の下、中央で指導者講習会が計画実施されたが、参加者が少なく、これまた尻すぼみになっている。授業や経費の関係もあって参加しにくい面もあろうが、コーチやトレーナーの資格を取得することが即高校選手の競技力向上につながる面があるのである。事前にしっかり調査・立案して先生方の参加がしやすい研修会の実施が望まれる。

(4) 機関誌の発行

昭和62年、専門部の活性化を求める声の中で「我々高校現場の教師は何をすべきか、何をしているか」を、全国高校の現場の先生に知らせ、新たな提案を寄せていただくことを目的として、機関誌“こぶし”は号を重ねることになった。初めは、全く素人の手製の機関誌であった。当時はパソコンは勿論ワープロも高嶺の花の頃であり、タイプライターで一字一字打ち、輪転機にかけ、ホッチキスでとめて500部を作るのは大変な努力を要し、かつそれが無料配付であった。昭和63年から有料化され、隔年千円が二千円となった。平成9年末で50号を数えるまでに至った。当初は常任委員会の議事録も掲載されており、全国の動きが現場まで手に取るように届いたが、この数年は大会成績のみに止まり、これまた本来の姿を見失っているようで誠に残念である。担当者の努力が反映される環境が必要である。孤立した集団は何一つ力が発揮できぬことは歴史の示すとおりであり、繰り返されている思いがする。また各都道府県の部長・委員長・顧問などボクシング関係者の名簿を是非との、強い要望の声に後押しされて、名簿“こぶし”も毎年作成されることになった。

Ⅲ. 外国籍選手の全国大会参加の実現

外国籍をもつ高校生の全国大会への参加は、国民体育大会への参加を皮切りに、学校教育法第一条に定める高校の生徒については高校総体などへも参加が認められていた。この一条に該当しない非一条校（例えば、民族学校）在籍の生徒にも門戸を開いて欲しいとの要望が、東京・大阪・兵庫・広島などの地方から出された。国際化が各分野で叫ばれ、反対もあったが、スポーツの世界は、学問の世界と同様オープンであってもよいではないかとの一ノ瀬部長の持論が実って、ボクシング専門部も当然のことながらその方向に進んだ。平成5年度高校総体（富山県高岡市開催）から一条校以外の学校生徒の出場が実現し、朝鮮高級学校などから12人が出場し大会は盛り上がった。以後も、何人かが数県から参加して好成績をあげている。次いで高校総体に遅れること2年、平成7年度からは、選抜大会（北海道札幌市開催）にも一条校以外の学校生徒が出場し活躍することになった。

Ⅳ. 次の世代への課題

(1) 底辺の拡大に伴う問題

高校総体への出場は高校生の憧れである。ボクシング競技の場合も例外ではない。ボクシ

ング競技の活性化を求める動きの中で“全国47都道府県に高体連ボクシング専門部の設置を！”“全国47都道府県から高校総体に出場を！”の声は、趨勢のおもむくところであった。ボクシング競技人口の増加・拡大は、その頂点を押しあげ、世界に通じるボクサーの誕生を可能にする道につながることは論を待たないところである。ボクシング競技に限っていえば、昭和52年以降高校総体の出場選手数は増加してきたものの、同時に看過できない問題点が生じてきた。中でも

ア．出場選手間の力量の差の表面化

イ．重大事故の発生

ウ．試合数の増加

など、この競技の存在の根幹にかかわる問題である。ア．は競技の特殊性であり、大会に出場すればよしとする事柄とは異なる。全国大会ともなれば、ある程度以上の技量が要求されるのは当然であり、その意味からは出場の可否をめぐって関係者間で早急に基準が設けられるべきである。このことに関わり、平成7年からは実施階級のＬＨ・Ｈｅ級が削除され、Ｍｏ級からM級までの10階級になった。イ．は、競技会・平素の練習中を問わず選手の健康管理や競技力未熟者の見極めが不充分であったり、選手の成長段階に応じた指導方法の是非など、各種の原因から不幸にも発生したものであろう。度重なる注意・警告が通達される中で重大事故が発生することは、こと高校生の一生にかかわる事柄であるが故に、誠に遺憾であるとともに許されるべきことではなく、関係者の責任は重大であり、今後とも細心の配慮と注意義務が求められる。ウ．は、試合数の増加に伴う試合時間の延長により、選手・役員・地元関係者・補助役員の負担の増加をきたしたことである。午前8時の検診・計量にはじまり、10時からの競技は大会前半では夕方6時・7時に及ぶ。また競技会場と宿舎が距離的に相当離れている年度には、午前8時の検診・計量に遅れぬ為に午前6時には宿舎を出発せねばならず、これによる地元開催市町村の被る負担は多大である。このことは大会規模の適正化よりも、選手・役員関係者の疲労を軽減するうえから会場設定時に関係者に充分理解・協力をお願いせねばならぬ点である。

(2)競技形態について

数年後には、大幅に高校生の人口が減少する時代が到来する。この絶対数の大幅な減少に加えて、昨今のスポーツ系クラブ活動への参加人口が特定種目を除いて減少している事態は、これまでの高校スポーツのあり方を根本的に見直すとともに、その活性化のために発想を180度転換せねばならぬ時期に至っていることを意味している。戦後、柔道や空手道が競技の在り方を見直し女子の参加を認める方向に進むことによって隆盛を来したように、ボクシング競技も女子の参加を可能にするような競技形態の大胆な拡大・導入（例えば、空手道の型のような）が望まれる。

(3)大会運営の簡素化について

大会運営費が膨大になりすぎ、規模・経費の適正化がはかられるべき時期にきているのではなかろうか。今一度、全国高体連が出発した時点の初一念に立ち戻る必要がある。

(4)高校総体の開催期日について

競技の性質上、早朝の検診・計量などで、遠隔地の宿泊はどうしても選手のコンデションづくりに無理が生ずる。従って、他の競技との同時期に開催せずとも、重ならぬような「さみだれ方式」でもよく、交通・宿舎の便利な所を準備すべきだろう。

(5)指導者の養成

この競技の指導者の養成は一朝一夕で進まない。少子化に加え、生徒の部活動離れが部の衰退を招いていることや、ボクシング未経験者からの登用が非常に難しい。大学での競技経験者のごく一部が教職に就き、指導者となっているのが現状である。

Ⅴ．終りに

現在のような専門部活動は、50年に亘る先人達の営々たる努力の結果であり、「最初から保証され与えられていたものではない」ことを肝に銘ずるべきである。更なる発展のために“何をなすべきか”“何を目的とすべきか”を明確にして歩むべきである。目先のことにとらわれず、将来を見据えて一歩ずつ前進するのみである。

《事務局》
〒369-1623 埼玉県秩父郡皆野町大渕19-1
県立皆野高校内
TEL 0494（62）2076
FAX 0494（63）1001

創　　立：昭和33年4月1日

加盟校数		225校
部員数	男　子	2,465名
	女　子	1,893名
	合　計	4,358名

年度	部　長	記　　事
33		中央委員会で加盟認可
34	小野　時男	富山県石動町にて加盟後の第1回大会実施(女子は第1回大会)
35	〃	A・Bブロックに分けて試合を行った。
36	〃	
37	〃	
38	〃	
39	〃	
40	〃	
41	〃	
42	〃	
43	〃	
44	鈴木　義雄	
45	〃	1県2校の出場制限
46	小野　時男	
47	〃	
48	〃	
49	〃	
50	〃	
51	〃	1県1校の出場制限
52	〃	
53	〃	全国高体連規模適正委員会より提案、大会規模縮小案の主旨賛同
54	〃	現行チーム数が決定
55	〃	
56	〃	
57	〃	
58	今井　義久	事務局皆野高校に移転
59	高山　晃	
60	〃	

年度	部　長	記　　事
61	井上信太郎	大会史上初のナイターにての開会式
62	〃	大会史上初の完全総体として行なわれる
63	〃	大会史上初のナイターにおける公開模範試合
元	〃	四面すべて天然芝のI・H
2	成田　昌幸	I・H会場が2町に分かれて行なわれた
3	田村　一成	
4	〃	I・H、総合開会式と種目別開会式が一緒に行なわれた
5	〃	雨天の中でI・H
6	〃	皇太子ご夫妻ご観戦
7	田中　孝夫	
8	〃	I・H屋内での開会式
9	〃	豪雨の中での準決勝、人工芝グランド故に行なわれたI・H
10	〃	気温37℃以上でのI・H

1 沿 革

戦前の高校総体は、昭和4年に第三高等学校（京都）の優勝に始まり、昭和23年の成城高等学校の優勝で終わるまで15回開催された。翌昭和24年には、旧制高等学校の制度が廃止された。

戦前の全国中学校選手権大会は、昭和7年に東京都で第一回大会が開催されてから昭和22年の金沢市で開催された第10回大会で、学制改革となり、翌昭和23年の第11回大会から全国高等学校選手権と改称された。これが今日の高校総体である。

ホッケー競技の普及は、高等学校を初めとして国体開催県の進行に従って、急な増加を示したのである。

昭和31年頃から高等学校のホッケー競技が隆盛を期すためには、全国高体連に加盟して全国高校総体の実施種目に入ることが先決でり、当時の東京小野学園の小野時男校長が全国高体連加盟申請の資料収集等、精力的な努力によって昭和33年の中央委員会で加盟が認可され、翌昭和34年の高校総体、富山県石動町（現小矢部市）大会で初めてホッケー競技が高校総体種目として認められたのである。このことは、全国高体連の専門部として、晴れて参加したことになる。これが、今日の高等学校ホッケー選手権大会である。また、この大会が女子の第1回という記念すべき大会である。

この年から約10年間、未普及県に対する指導に力を入れ、大会もセレクトなしのフリー参加で高校総体が開催されていたのである。

当時の組み合わせ抽選は、同県チームが初戦から対戦しないようにA・Bブロックに分け、少なくとも準決勝まで対戦しないように配慮して、競技の普及活動の推進、随分と心を砕いていたようである。

その後、昭和45年の高校総体から1県2校の制限が加えられ、さらに昭和51年にはさらに制限が厳しくなって、1県1校となったのである。このことにより、より充実した大会へと変貌をとげたのである。

昭和53年の高校総体・福島大会において、全国高体連規模適正委員会より提案のあった、大会規模縮小案の主旨に賛同し、男子28校・女子20校の今日の大会規模が決まり、翌昭和54年の高校総体より実施されたのである。

近年の高校総体をいくつか取り上げて見ると昭和59年の秋田県男鹿市で開催された大会は、ローンコート2面・クレーコート2面であった。連日30年ぶりの猛暑の中で選手は熱戦を繰り広げ、「東北の緑に染まれ君の青春」のスローガンにふさわしい大会であった。

入場行進

昭和61年の徳山市で行われた大会は、開会式が総体史上初のナイターで行われた。ファンファレを合図に花火が打ち上げられ、ブラスバンドのリズムに合わせて入場した選手は、6基の照明灯にカラフルなユニホームが一段と鮮やかに彩られていた。徳山大会のスローガンは、「燃えろかがやけたくましく」である。

ナイターの照明と選手の真剣な勝負が妙にスローガンと一致しているよに思えるのである。

昭和62年の北海道江別市の大会は、北海道開催が、史上初の完全総体として開催した大会である。

競技期間中北海道全域に雨天が続き、異常低温がさらに、追い打ちをかける大会であった。が、「はばたけ若人北の大地」をスローガンに選手は燃え、女子は、伊吹高校（滋賀）が初優勝を飾った。男子は、今市高校が二連覇を達成した大会でもあった。

発足から駆け足で見ても、各大会には思いで多きものがあり、いろんなハプニングがあり、選手ひとりひとりの成長に大きな影響を与えていることがわかる。それぞれの大会運営を陰日向で支えてくれた人に感謝に耐えない。

以上が発足から昭和62年までの沿革である。

2　10年の歩み

高体連に加盟して着実に成長し、充実してきた結果を見るのには、この10年の高校総体を見るのが早いと思う。以下簡単にまとめる。

昭和63年大阪大会は、競技に先立ち、ナイターによる公開模範試合が行われた。大阪長居球技場の人工芝グランドは、夜間照明に映え、開会式もナイターであった。最終試合、男子の準決勝の前半終了直前に、突然の雷雨が襲い、40分間試合が中断したが、設備と役員の力で無事に最後まで行われた大会であった。

平成元年愛媛大会は、当初64総体と呼ばれ準備してきたが、元号が途中で変わり平成元年総体と名前の変更があった大会であった。試合会場4面とも天然芝グランドであった。女子は常勝の岐阜女子商業高校（岐阜）を今市高校（栃木）が破り、男子は伊吹高校（滋賀）が初優勝した。

平成2年宮城大会は、この年の3月10日に東北新幹線が開業した。選手には思いでの残る大会にもなった。男子は築舘町、女子は若柳町と男女が別れた会場で行った大会であった。

平成3年静岡大会は、大会初日から雨天により1会場が午前中使用できない大会となった。試合時間・会場変更等ハプニング続きの大会でもある。がこの時ほど一致団結し、協力しあって無事に大会を乗り切った大会でもある。男子は、横田高校（島根）が初優勝し、準優勝には、初出場の不来方高校（岩手）であった。

平成4年宮崎大会は、総合開会式と種目別開会式が一緒の大会である。秋篠宮ご夫妻をお迎えしての総合開会式であった。この大会は、天然芝グランド4面を隣接した試合会場が一カ所にまとまっていて、男女チームが同じ場所で競技できた大会でもある。練習も天然芝で行えたが、いくつかのチームの宿泊が遠距離になってしまった。が、男子は白根高校（山梨）女子は天理高校（奈良）ともに初優勝した。

平成5年栃木大会は、雨天の中で行われた大会でもある。人工芝1面、天然芝2面、クレー1面である。この大会も会場がまとまっており、男女同じ会場で行われた大会でもある。しかし、雨天の中の大会であり、役員・補助員等雨と寒さの中で運営しなければならず、頭の下がるおもいである。が、選手もぬかるみの中で競技をした思いで多き大会でもあった。決勝戦は、土砂降りの雨の中行れた。さすがに人工芝グランドは雨にも強い。

一人一役雨天後コート整備

平成6年富山大会、小矢部市・福岡町で行われた大会は、皇太子ご夫妻をお迎えしての大会でもある。初めてご観戦された皇太子ご夫妻に当時の専門部長田村がホッケー競技の解説をされた。競技は女子2回戦、地元石動高校（富山）対伊万里商業高校（佐賀）の試合である。この地は、全国高体連に加盟して、初めての大会を行ったところであり、長年ホッケー競技の普及に力を入れてこられた先生方には感無量といった大会でもあった。今大会では、男子の白根高校（山梨）が3連覇をし、女子は、不来方高校（岩手）が初優勝した。

平成7年島根大会は、二多町・横田町の両町を跨って、「集え若人はばたけ未来へ」のスローガンの下行れた。アベック優勝をねらった地元横田高校の前に男子は沼宮内高校（岩手）が立ちはだかった。決勝戦で勝つことはできなかった。女子は準決勝で常勝の岐阜女子商業高校（岐阜）を破り、余勢をかって、決勝では、伊万里商業高校（佐賀）と2対2の同点。ペナルティ・ストローク戦で地元横田高校が初優勝し、優勝旗を手に入れた。この大会では、地元の町を挙げての応援が特に印象に残った。あの狭いグランド周辺に2千人の観客が集まったと地元の山陰中央新聞は伝えている。（1995・8・7）

平成8年山梨大会は「かけぬけろ夏風をきれ山梨で」をスローガンに行われた。

通常開会式は野外で行われるところ、猛暑を避けるため、空調設備の整った白根桃源郷文化会館の音楽ホールで盛大に行われた。地元高

校生の奏でる巨大なパイプオルガンの演奏に選手たちも酔い、ちょっと異なった雰囲気の開会式となった。

豪雨の中での準決勝

平成9年京都大会は、台風と言っても過言ではない豪雨の中での準決勝は、改めて人工芝グランドの強さを見せつけてくれた。高校総体の種目で、この日の屋外競技はすべて行れず、競技を行ったのは、室内競技だけだったと聞く。テニス等は、臨時に体育館内で行ったとも聞いているが、唯一行ったホッケー競技も途中競技が中断したものの予定の日程通り行った。選手も一生の思いでの残った大会になったと思う。

3　将来に向けて

インドやパキスタンとはいかずともヨーロッパ程度の知名度が欲しいものである。いずれは、オリンピックにて金メダルを獲れるように普及したいものであるが、現実には大きな課題が2つある。

1つは、ホッケー競技人口が増加することである。どの競技も同じだと思うが、西暦2000年のシドニーオリンピックを目指している中、各大会や強化が進んでいると思うが、少子化や部活動離れと言った問題が立ちはだかっている。特に屋外スポーツは、「汚れる、きつい、汗くさい」の三拍子が揃っている。

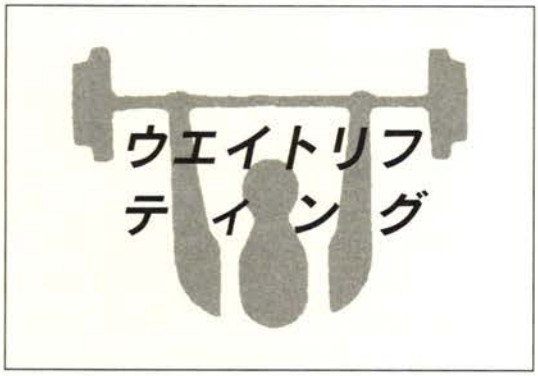
故に、11人の選手を揃えることさえ困難になってきているチームが出始めた。

6人制ホッケーも考えてはどうかと言う意見さえ出てきた。ホッケーの歴史は古く紀元前500年頃から始まっている。我が国に入ってきたのも古く、明治39年11月23日に英国ウィリアム・T・グレー氏が慶応義塾にホッケーを教えた日を日本ホッケーの始まりとしているからかなりの歴史がある。ホッケーと言うとアイスホッケーを連想する人が多く、陸上ホッケーの普及にこれからも力を入れていかなければホッケー競技人口は増えない。故に、「見てわかりやすいホッケー、見て面白いホッケー」を目標に競技規則（ルール）を改正してきた。主なものを揚げてみると、1. ブリーおよびロールインの廃止と再開プレー、2. オフサイドの廃止、3. ペナルティコナーおよびペナルティストロークの改正、4. 危険防止対策の強化、5. 選手交代制度の採用、6. 警告制度の設置などである。

高校総体は、普及に大きな影響を与える。例えば、平成7年度の高校総体、島根大会では約2千人の応援者があった。町をあげての応援である。大会終了後の山陰中央新聞（1995. 8. 7）の記事を一部抜粋してみる「札幌五輪のアイスホッケーと混同し、夏の暑い日にどうやって氷を張るのかを本気で心配した人がいた。ほどの見普及競技だったが五十年代初め、各小学校にホッケースポーツ少年団を結成、さらに二多、横田両中学校にホッケー部を創立するなどし、選手強化が底辺から始まる。」その結果、開催した地元の横田高校が、女子優勝、男子準優勝と言う栄冠に輝いた。競技普及がいかに大きな影響があるか伺える。

2つ目の課題は、人工芝グランドの設置である。選手の健康管理等試合の日程を延期できない。屋外スポーツにとって天気とのにらみ合いは、選手の精神面にも大きな問題である。その点人工芝グランドは、天気を気にすることなく試合を行える。このことは平成9年度の高校総体、京都大会で実証された。大会4日目の準決勝は豪雨の中で行れた。途中スコールと言っていいほどの雨で中断されたが、無事に男女2試合を予定通り行った。この日の屋外競技はすべて、中止となった中、唯一、人工芝グランドで行った。ホッケー競技だけが競技が行えた背景には、競技関係者の努力はもとより、人工芝グランドのお陰である。人工芝のホッケーは、クレーコートと異なり、戦術、戦法等全くと言っていいほど違う。なにより、ボールを止める技術習得の時間が違う。こんなとこにも普及の鍵が残されているかもしれない。

公認コーチ等指導者不足も大きな課題である。



《事務局》
〒286-0841 千葉県佐倉市西志津263
県立佐倉西高校内
TEL 043（489）5881
FAX 043（462）0641

創　　立：昭和33年

加盟校数		250校
部員数	男子	1,956名
	女子	168名
	合計	2,142名

年度	部長	事務局長	記事
33			再度、専門部の加盟申請を提出し12月2日に承認される。
34	井尾　武雄	見目　武雄	全国高校総合体育大会の1競技として実施。
35	〃	〃	高松宮殿下より優勝旗を賜る。
36	〃	〃	福田弘(城西高校)世界選手権6位入賞。
37	〃	〃	秋田短大附高2連勝。
38	〃	〃	徳島県で2回目の全国大会を開催。
39	〃	〃	第1試技の重量設定。
40	〃	〃	フライ級～ミドルヘビー級の7階級を実施。
41	〃	〃	各都道府県の参加者数を最大10名に制限。
42	清水　正男	〃	1試技の時間を30秒に制限。
43	〃	〃	部会功労者の表彰を実施。
44	〃	〃	
45	梅田　嵩	平川　義美	優秀選手の表彰開始。
46	〃	〃	検量開始時間が競技開始1時間15分前となる
47	〃	〃	新記録樹立後の再検量不必要となる。
48	佐々木勘次郎	〃	プレス種目廃止。20回大会記念式典実施。
49	〃	〃	
50	〃	〃	国体の選出方法が変更となる。

年度	部長	事務局長	記事
51	野中　乾	平川　義美	抽選の実施。
52	〃	〃	階級呼称がkg級となる
53	〃	〃	創設20周年記念誌発刊
54	〃	〃	日韓ユース大会始まる
55	〃	〃	52kg級～100kg級の8階級を実施。
56	〃	〃	
57	大野慎一郎	〃	
58	〃	〃	
59	〃	〃	
	村中　駿博		
60	〃	〃	第1回選抜大会開催。
61	〃	篠宮　稔	採点制競技会始まる。
62	西村　文男	〃	IHに全都道府県参加
63	〃	〃	52kg級～+100kg級の9階級を実施。
元	〃	〃	多人数の階級をAB2グループで実施。
2	小川　一郎	〃	得点対象者を5名までとする。第1試技の重量を変更する。
3	〃	〃	選抜に女子を新設。
4	濱名　言實	〃	入賞を団体･個人ともに8位までに変更。
5	石平　快三	〃	40回大会記念式典挙行 階級区分変更。
6	〃	〃	高松宮賜旗の新調決定
7	〃	〃	得点を世界選手権方式に変更。
8	野牧　一雄	〃	
9	〃	〃	IHの在り方の検討。
10	〃	〃	階級区分変更。

1　沿　革

本競技の歴史は、昭和７年の第２回全朝鮮力道大会に３選手が招待され、正式種目を行ったのが始まりである。

その後、昭和９年に嘉納治五郎ＩＯＣ委員によってオーストリアから、国際規格のバーベルが購入されたのをきっかけとして、文部省体育研究所で競技の研究が進められた。

昭和11年に全日本体操連盟の主催で第１回全日本選手権大会を開催し、翌昭和12年に全日本ＷＬ連盟が結成され、本格的にスタートした。

高校への導入は、昭和28年に日本協会の働きかけにより、高校の組織化のための動きが始まった。

昭和29年に、記念すべき第１回の全国高校選手権大会を第14回全日本選手権大会と兼ねて、徳島県で日本協会の主催で開催した。翌30年からは、学校対抗選手権として単独開催した。

昭和33年、全国高体連に再度の加盟申請を出した。再三の審議の後、12月２日に加盟が承認され、部会創立準備委員会を発足させ諸準備にあたった。

昭和34年、全国高校総体の１競技として、全国高体連主催での競技会のスタートとなった。実施要項の概要は次のとおり。種目：プレス、スナッチ、ジャークの３種目。階級：フライ、バンタム、フェザー、ライト、ミドル、ライトヘビーの６階級。出場制限：１校６名以内。得点対象は、１階級１名。

昭和35年、富山県関係者から優勝旗寄贈の申し出があり、関係者の御尽力とお取り計らいにより、高松宮殿下賜旗が誕生した。

昭和36年、ＩＨ３連覇の偉業を達成した城西高校の福田弘は、世界選手権大会で６位入賞し高校生が世界的水準にまで達する活躍をした。

昭和39年、東京オリンピック大会が開催され三宅義信選手等の活躍により、競技熱が大いに高まり、同時に普及が一段と進んだ。この年より、スタート重量を設定した。

昭和40年、競技人口の増加と重量級育成として、ミドルヘビーを設置し７階級とした。スタート重量を増加したが、参加選手増により大会運営に苦慮した大会であった。

昭和41年、各都道府県とも学校対抗を１校４名、個人選手権を６名以内とし参加制限を加えた。フライ級の今村実（鎮西高）は、ジャーク種目でジュニア世界新記録を樹立した。

昭和42年より、試技に許される時間を30秒に制限した。

昭和43年にも、バンタム級の安藤謙吉（土岐高）がプレス種目でジュニア世界新記録を樹立した。この頃より、ブロック大会が各地域で始まりだした。部会功労者の表彰を始めた。

昭和45年より、優秀選手の表彰を開始した。

昭和47年のミュンヘンオリンピック大会の総会において、プレス種目の廃止が決定された。昭和48年より、２種目時代に入り、ＩＨも４日間開催となった。このことから、団体選手の基準記録を撤廃した。20回大会を記念し式典を挙行した。

昭和51年より、検量順及び試技順決定の資料とするための抽選が実施されるようになった。

昭和52年より、階級の呼称が何kg級となり、52・56・60・67.5・75・82.5・90kg級に変更した。

昭和53年、部会創設20周年・25回大会を記念し、祝賀会の開催並びに記念誌の発刊をした。

昭和54年、念願であった高校生の国際交流が日本協会の尽力により、韓国との交換競技会という形でスタートした。第１回大会にＩＨ優勝者を派遣したが僅差で敗退した。砂岡良治（小山高）は、ジュニア世界選手権大会に日本代表として派遣された。

昭和55年、重量級選手の増加とその育成の視点から100kg級を新設した。また、90kg級までの７階級を得点対象階級とした。

昭和60年、検討を重ねる中、第１回全国高校選抜大会を神奈川県で開催した。普及面も考慮し、38都道府県・64校より88名を指名選抜しての大会となった。

昭和61年、国際的に若年化の傾向が顕著となり、日本協会は、中学生対策の一環として採点制競技会を設定し高校生にも義務化された。

昭和62年、部会創設29年にして、準加盟も含め全都道府県が加盟し、全国高校総体にも全都道府県から136校432名が参加した記念すべき年となった。競技を経験した指導者も年々増加してきた。また、この年、全国女子選手権大会並びに全国中学生選手権大会が開催された。女子の大会では、高校生の活躍が目を引いた。中学生大会は、北海道の選手が５階級を制し、今後の高校での成長が楽しみである。

2　10年の歩み

昭和63年度第2回全国女子選手権大会は、参加者の約半数を高校生が占め、3階級に優勝する活躍をした。

全国高校総体は、+100kg級を新設し合計9階級で実施した。体重の如何により参加できないという弊害を取り除くことができた。

ソウルオリンピック大会において、ドーピング検査の結果、利尿剤及びアナボリックステロイドホルモンの使用が発覚し、ブルガリアとハンガリーの選手が失格処分を受けた。以降ドーピングとの関係でルール改正が行われることとなる。

平成元年度全国高校総体の要項を大幅に変更した。第1試技の重量については、採点制競技の合格点の挙上重量及び52kg級～+100kg級までの9階級全ての選手を得点対象としたこと並びに重量増加方法が全て2.5kg以上になった点から、重量級では20kg前後のアップとした。しかし、参加選手数は、スタート重量を引き上げた割りには減少せず、競技水準の向上をみることができた。また、得点対象人数については今までの4名から5名に増員した。40人以上が出場する階級は、ＡＢの2グループに予選記録で分けて競技を実施した。

全日本ジュニア選手権大会で準優勝した納富俊行（舞子高）は、ジュニア世界選手権大会の代表に選考された。

平成2年度全日本ジュニア選手権大会67.5kg級で高校新記録を樹立し優勝した小山高校の堀越典昭は、サラエボで開催の世界ジュニア選手権大会でもＳ・Ｃ＆Ｊ・Ｔともに高校新記録で9位と健闘した。

全国高校総体は、親子選手（堀越・佐野）の活躍が目を引いた。両選手とも高校新記録を樹立する中で優勝した。中学生から競技を開始した選手の活躍が顕著になってきた。

全国女子選手権で活躍した高校女子選手は、国際大会でもパワーを発揮した。世界女子選手権大会では、44kg級の斉藤さと美（京都・城南高）が銀メダル、56kg級の阿部真美（埼玉・埼玉栄高）が第6位に入賞した。北京で開催された第11回アジア競技大会においても、斉藤が銀メダル、阿部が銅メダルを、また、48kg級の馬場佐知子（京都・城南高）も第6位に入賞する素晴らしい成果を収めた。

北京アジア大会日本初のメダル獲得の斉藤

平成3年度全国中学生選手権大会がスタートして5年目になり、全国高校総体においても中学からの競技経験者が活躍し、4名が優勝するという結果を残し、中学生対策の必要性を痛感した。

前年度の女子の活躍があったことから、全国高校選抜大会に女子の部を新設した。5府県から7校15名の選手を選抜した。

平成4年度全国高校総体のスタート重量を変更した。ＳとＣ＆Ｊのバランスを世界記録、日本記録、過去の高校20傑を参考に調整した。試技時間については、高校新記録に挑戦の場合には、日本協会ルールで実施することとした。また、入賞については、団体・個人ともに8位までに変更した。

佐土原町で開催のＩＨは、台風10号の直撃により大会第2日が1階級しか実施できず、3・4日目の日程を早めて行い全日程を消化した。階級をＡＢグループに分けていたことがスムースに展開できた要因である。

平成5年度昨年のＩＷＦ総会において、階級区分が変更された。また、過去の階級の記録は参考とはせず、全て新しくする方法がとられた。これは、過去の記録がドーピングによって樹立されたことと認めたと同様の処置である。

階級変更に伴い、ＩＨの第1試技の重量をスライドする形で変更した。全国高校選手権大会が40回を迎えたことからそれを記念して、式典を開催し部会発展に尽力された228名を表彰した。また、全国の専門部の協力を得て、40年記念史を発刊した。

全国女子選手権大会では、高校を卒業した選手が大学で頑張っていることから、高校生が優勝することが難しくなってきた。しかし、アジア女子選手権大会には、4名の高校生が派遣され活躍した。

男子も、二世選手である三宅敏博（埼玉栄）と大谷広幸（小山園芸）がともにジュニア日本新記録を樹立する活躍をした。

平成6年度4月に開催のＪＯＣジュニアオリンピックカップ全日本ジュニア選手権大会において、76kg級の鈴木和美（沖縄・南部工業）が優勝、91kg級の平良一悦（沖縄・糸満）が準優勝（ともに高校新記録）しジュニア世界選手権大会の代表選手に選考された。世界において12位・15位と健闘した。両選手は、ＩＨでも高校新記録を樹立し優勝した。国体においても両選手は、高校新記録を樹立し他を圧倒した。

全国委員会において、高松宮賜旗の新調を決定し、以後その準備に入った。

平成7年度女子の活躍でスタートした。久しぶりに高校生が全国女子選手権大会で優勝した。46kg級の二柳かおり（埼玉栄）は、アジア選手権大会でも全国女子大会に引き続き高校新記録を樹立した。

ＩＨの得点方式を世界選手権大会と同様の形に変更した。Ｓ・Ｃ＆Ｊ・Ｔともに得点対象とした。一方の種目を得意とする選手が実際にいることから歓迎された。また、学校対抗の順位が多くの学校まで与えられることになった。併せて、得点可能人数枠を撤廃した。その結果、60位くらいまで学校順位が決定した。

平成8年度アトランタオリンピック大会が開催され、9階級で世界新記録が樹立された。

11月に開催のＩＯＣ理事会において、シドニーオリンピック大会より女子競技が正式種目と決定した。このことに伴い、ＩＷＦは、プロジェクトチームを編成し、男女の階級について検討を重ね翌年に男子8階級・女子7階級が決定した。

全日本ジュニア選手権大会の会期が3月となったことから、高校3年生が活躍し4選手が大学生を破り優勝し、中條桂良（前橋育英）が最優秀選手に輝いた。なお、同選手は中学生大会のチャンピオンであり、若年化対策の必要性を改めて痛感した。

この年より、部会競技委員会を中心に女子のＩＨ導入方法について検討を始めた。全国高校選抜大会でも、女子の育成対策として女子の人数枠を拡大し普及と選手強化を推進することとした。

平成9年度昨年度より検討を重ねた女子のＩＨの導入について、競技委員会・常任委員会で検討し、全国委員会にはかった。内容は、男子の競技力を低下させないで女子を導入する方法としてブロック大会を実施し、男子の人数を都道府県単位で制限するのではなく地区で8割に絞り、2割分の人数を女子の総人数にするというものである。この原案が、全国委員会で承認された。次いで、これを全国高等学校体育連連盟に申請したが、総体検討委員会にて、女子の普及度（支部高体連の正式実施）の関係から否決され、上部組織での検討を見ずに実現には至らなかった。

競技会では、世界ジュニア女子選手権大会に出場した野村依可（兵庫・須磨友が丘）は、高校新記録を樹立する中で堂々の第2位に入賞する健闘をした。

新階級は、5月のＩＷＦ総会にて男子8階級女子7階級が構築された。日本協会は、軽量級の育成を期し、男子は53・56・62・69・77・85・94・105・+105kg級の9階級を設定した。女子は、ＩＷＦと同様の48・53・58・63・69・75・＋75kg級の7階級となった。

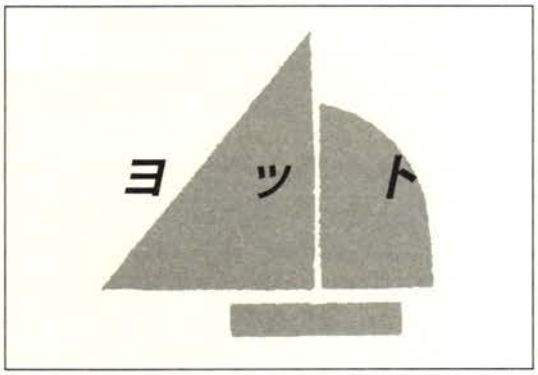
3月に開催の全国高校選抜大会から新階級で実施した。

3　将来に向けて

生徒数減少と部加入率の低下が、本競技にも深刻な影響を与えている。また、指導者をみても、若手の採用が少なく高齢化が進んでいる。これらを打開するには並大抵のことではないと認識しているが、何とか至急に具体的方策を打ち出したい。

また、女子については、シドニーオリンピック大会より正式種目となったことから若干ではあるが競技人口が増えてきている。日本ＷＬ協会と連携をより深め選手強化に普及振興に努めたい。

本競技は、高体連が支えているという自負のもと、過去の実績を上回る活躍ができるよう、一丸となって取り組むつもりである。



《事務局》
〒249-8510 神奈川県逗子市新宿2丁目5番1号
逗子開成高校内
TEL 0468（71）2062
FAX 0468（73）8459

創　　立：昭和34年

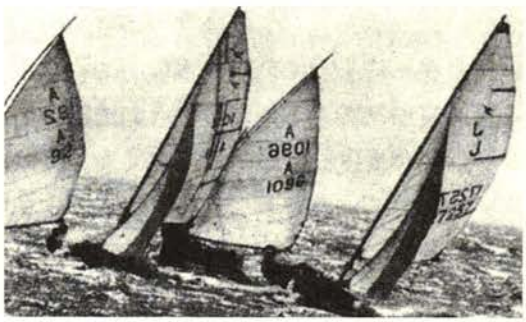
加盟校数		135校
部員数	男子	909名
	女子	516名
	合計	1,425名

年度	部長	事務局長	記事
34	荒井　惟俊	澄田　秀夫	10月全国高体連理事会で加盟承認される
35	〃	〃	第1回大会が宮城県塩釜港で開催される、参加32校、艇種はA級とスナイプ級
36	〃	〃	第2回大会熱海市、女子A級始まる
37	〃	〃	第3回大会高松市
38	〃	〃	第4回大会両津市、女子スナイプ級始まる
39	澤井　測	〃	第5回大会鹿児島市
40	〃	〃	第6回大会鹿児島市
41	〃	〃	第7回大会石巻市、A級に代えてＦＪ級の採用を決定
42	〃	〃	第8回大会彦根市
43	〃	〃	第9回大会広島市、ＦＪ級一部使用開始
44	〃	〃	第10回大会藤沢市
45	〃	〃	第11回大会蒲郡市
46	〃	〃	第12回大会高松市、艇種はｽﾅｲﾌﾟ級とＦＪ級になる、A級は廃止
47	〃	〃	第13回大会藤沢市、台風のため1レースのみ実施
48	〃	〃	第14回大会津市
49	〃	〃	第15回大会福岡市
50	〃	〃	第16回大会土浦市
51	川本　保	〃	第17回大会蒲郡市
52	川本　保	澄田　秀夫	第18回大会光市
53	〃	〃	第19回大会宮城県七ヶ浜町
54	〃	〃	第20回大会大津市
55	〃	〃	第21回大会高松市
56	〃	〃	第22回大会藤沢市
57	〃	〃	第23回大会鹿児島市
58	〃	〃	第24回大会蒲郡市
59	澄田　秀夫	斉藤　友一	第25回大会本庄市
60	〃	〃	第26回大会石川県穴水町
61	〃	〃	第27回大会光市
62	〃	〃	第28回大会北海道江差町
63	〃	〃	第29回大会芦屋市
元	〃	〃	第30回大会高松市
2	〃	〃	第31回大会宮城県七ヶ浜町、スナイプ級廃止、ＦＪ級に一本化し、デュエット競技とソロ競技を行うことを決定
3	〃	〃	第32回大会静岡県三ヶ日町
4	〃	〃	第33回大会日南市
5	〃	〃	第34回大会土浦市、スナイプ級廃止、デュエット、ソロ競技開始
6	〃	〃	第35回大会新湊市
7	〃	〃	第36回大会境港市
8	斉藤　友一	〃	第37回大会山中湖村
9	〃	〃	第38回大会宮津市
10	〃	〃	

1　沿　革

昭和34年10月の全国高体連理事会でヨット部の加盟が承認された。前年33年9月、横浜ヨットハーバーで開催された東京国体の際、参加した各水域の高校顧問教師が発起人会議を開き、東北地区から提案があった。専門部長と事務局は神奈川県の逗子開成高校が引き受けることとなった。

既にヨット競技の先進水域では、地区の高校選手権大会は行われていた。関東では10回を数え、東北では宮城県がヨットに精通している教育関係者に恵まれ、高体連ヨット部の発足後指導的役割を果たすことになった。



第1回大会　A級(1枚帆)とスナイプ級

第1回大会は昭和35年8月10日から13日の4日間、宮城県七ヶ浜町花淵沖海面で開催された。参加は32校、A級ディンギー30チーム、スナイプ級30チームで、艇は地元が準備した。貸与艇は10隻のため、予選を3グループに分けて各3回戦を行い、選ばれた10チームにより決勝3回戦としたが、台風のため決勝3回戦目は中止となった。コースは現在のようなオリンピックコースではなく、数字旗を揚げたマークボートを海面のあちこちに配置し、風向の変化を予想したマーク廻航表を渡した。廻航方法もアンチクロック（左廻り）だけでなく、クロック（右廻り）も混ざっていた。波の荒い海域で、台風まで襲来したため厳しいレースであった。当時は今日ほど安全問題に神経質でなく、かなりの強風でもレースは行われた。ライフジャケットも強制着用ではなかった。宿舎は塩釜市内で、選手役員共に船でレース海面まで通ったものである。大会は有名なチリ津波の2か月半後に行われ、塩釜市内は大きな被害を受け、電車道には大きな漁船が打ち上げられたままだった。幸いにもヨットには被害がなかったので開催できたが、開催役員の苦労は察するに余りあるものがあった。

第2回熱海大会は、旅館街が見下ろす熱海湾で行われ、ハーバー施設はない。強風、荒波に見舞われ、運営側も選手も大奮闘であった。女子A級も始まった。

第3回は高松ヨットハーバーで開かれた。高松はヨットの先進地で、その後も9年毎に大会を開催していただいた。但し、レース海面は難しく、瀬戸内海の微風と強い潮流に悩まされた。

この大会までは、部会の発起人達で開催を決めてあったが、第4回、第5回はヨット部会本部で開催地を探さねばならなかった。

第4回は次年度国体のリハーサルとして佐渡島の両津市で引き受けてくれた。この大会から女子スナイプ級が始まった。

全国高校総体は第6回の鹿児島大会から始まり、開催地はヨット部単独で探さなくてもよくなった。第5回大会の開催地についても、本部役員が鹿児島市に窮状を訴えたところ、快諾していただいた。このことは感激で忘れ得ない。

桜島の噴煙を前に、微風と激しい潮流の中でレースが行われた。この回から予選決勝方式でなく、3グループに分け計4回戦出場することになった。予選落ちはなくなり、男女合わせて計10レースが行われた。以後、開催地で貸与艇を多数準備していただいて、この方式が定着することになった。大会の名称は、全国高等学校総合体育大会ヨット競技兼全日本高等学校ヨット選手権大会となった。

古いタイプのA級に代わる艇として幾つかの艇種を候補として、数年間検討した結果、第7回石巻大会において、第9回広島大会からFJ級を採用することを決定し、FJ級ヨットを初めて公開した。試作を重ねて、二人乗りプレーニング（滑走）艇、軽く、転覆しても再帆走可能な、スピンネーカー（追手専用の帆）を使用する先進的なヨットであった。高体連のFJ採用決定は、少年ヨットの新しい方向を定め、日本ヨット協会に大きな影響を与えた。

第8回の彦根大会では、強風のため女子に転覆艇が続出し、借用艇を破損した。女子でも再帆走可能な、しかも自艇によるレース参加（自艇主義）の方向に進むきっかけとなった。

第9回広島大会からFJ級の登場となった。移行措置として、A・FJ級共用でレースを行

い、2回戦ずつ4回戦を行った。スナイプ級も4回戦実施した。この方式は、第10回江ノ島大会、第11回蒲郡大会と続き、女子も蒲郡大会からA・FJ級共用で始まった。第12回高松大会からは男女とも完全にFJ級となり、スナイプ級との2種目の時代が平成4年まで22年間続くことになる。

第13回江ノ島大会は、代理開催のため貸与艇を準備することができず、全艇自艇参加となった。連日強風で男女とも1レースだけの実施であった。

第14回津大会から第33回日南大会までほぼ同じ競技方式で開催された。全艇一斉スタート5回戦方式である。スナイプ級は全艇貸与とし、FJ級は第17回蒲郡大会以後は自艇使用とした。そして、インターハイの開催は、国体と連動して近代的ヨットハーバーの建設を促すこととなった。FJ級の建造が順調に進み、国体でも、昭和58年以降少年の部でFJ級が使用され今日まで続いている。

第19回宮城県七ヶ浜大会から全国総体の規模適正化により、男子は23チーム、女子は15チームとなった。

この頃から昭和末まで大会開催や高体連の運営は非常に安定した時期が続く。

2　10年の歩み

昭和62年に鳥取県境港市において、日本で初めて国際FJ級世界選手権大会が開催された。FJ級は日本ではほとんど高校生だけが乗っている艇種であるが、ヨーロッパやアメリカでは子供から年寄りまで幅広く愛されているインターナショナルクラスなのである。2年前の前回世界選手権ベルギー大会では境港のチームが入賞していた。主催した日本FJ協会は高体連ヨット部会の役員が兼務しており、世界大会の成功は日本の高校ヨット界に大きな誇りと自信をもたらした。

この頃国際FJ協会では、インターナショナルクラスの他艇種に対抗するため、より速い高性能な艇を目指して、トラピーズ（艇のバランスをとる装置）やより大きなスピンネーカー（追風用の帆）の採用、帆走性能を向上させる若干の規則変更を行っていた。日本でもその流れに対応するために、高体連本部では技術指導用のパンフレットを全国のヨット部に配布した。

FJ級が国体に採用された頃から船価上昇の傾向が現れていた。FJ級のクラス規則は比較的緩やかで、新素材や高性能な艤装品の取り付けが許されているので、国体強化のために、各県ヨット連盟はまず艇に資金をつぎ込んだのである。FJ級の製造はライセンス不要なので、国内にはFJ級の造船所は5、6カ所ある。購買側の要求が膨らみ、各造船所への注文数は競技実績により偏りがちである。高校総体のためだけなら価格上昇は少なかったと思われる。価格を抑えるために、高体連とFJ協会は何らかの歯止めを模索することになった。

第29回芦屋大会は、神戸港という特定港湾内の限られた水面を確保して行われた。レース委員会は、バージ船の行き来や、レース艇が帆走区域外に出ないように気を配った。都会での開催は宿舎の確保が難しい。特にヨットはセールなどの競技備品を運搬する必要から自動車の利用が多いので、駐車場確保や渋滞で選手・監督の苦労も大変であった。都会型大会の典型として成功裡に終了することができた。

第30回大会は高松ヨットハーバーで4度目の開催となった。この数年前から大会の改革の必要性が話題になっていた。女子の参加校数増加にともなう大会出場枠の拡大要望、レース回数やコース設定を見直し、より充実した全国大会の開催、船価高騰に対する対策、国体におけるスナイプ級に代わる艇種採用の動きなどである。特に、スナイプ級が国体艇種からはずされることは大問題であった。多くの県では国体の強化対策として艇を建造し高校ヨット部はその恩恵を受けていた。それがなくなることは高価な艇の建造を各校独自で負担することとなり、多くの高校では難しいことであった。そこで高体連としてもスナイプ級に代わる、より安価でシンプルな艇種を選定する必要が出てきた。しかし、永続性があり、艇の仕様について高体連の意向が反映できるような艇種はなく、A級からFJ級に切り替えた時のような時間的余裕もなかった。国体の少年艇種からスナイプ級がなくなるのは平成6年度からの予定であった。懸案をまとめて解決するための発想の転換が必要であった。FJ級に一本化する案が浮上し、平成元年度末に臨時のヨット部常任委員会を開き検討した。

第31回大会は3度目の七ヶ浜町での開催と

なった。今回は松島湾内でなく、仙台新港への航路を横断して太平洋に乗り出した。大きなうねりと格闘する広大な海面でのヨット競技はまさに海洋スポーツと呼ぶにふさわしく、その醍醐味を満喫した大会であった。

例年、ヨット部委員会は、男子23校、女子15校の総枠数を巡って紛糾していた。各水域の大会出場枠は、予選参加数の実績を基にヨット部委員会で協議され、3年ごとに見直されていた。次の出場枠は2年後の平成4年度第33回日南大会で決定することになっていた。改革案の決定が遅れれば混乱を深めることになる。そこで、FJ級一本化案が大会前に各水域委員（全国9水域の代表）に文書で提示され、この大会中のヨット部委員会で正式に提案された。移行措置や競技種目の決定など、詳細を残してFJ級一本化が決定した。全水域に改革案の趣旨説明が送付され、それに対する意見が求められた。

高校総体でのスナイプ級の廃止決定は、結果として、日本ヨット協会が国体少年種目からスナイプ級を廃止する決定に半年先行したため、ヨット界内での反発や県高体連ヨット部に若干動揺が起きていた。平成2年末に本部の逗子開成高校で拡大常任委員会を開いて、改革案の詳細を検討すると共に、今回の改革に対する全国各学校ヨット部の理解を求めることになった。この改革に対しては反対もあったが、財政難や部員数不足に悩む高校からは、一本化で負担が軽くなって助かります、という声が本部に寄せられていたのである。

第32回静岡県三ヶ日町大会は浜名湖で実施された。スナイプ級廃止は決定していたが、静岡県でも大会用の借用艇をそろえていただいた。浜名湖特有の風の中、男子スナイプ級とFJ級、女子スナイプ級とFJ級の4種目が湖面を快走した。

この大会中の委員会で、改革案は平成5年度から実施すること、参加艇数を男子63艇、女子41艇（現行　男子46艇、女子30艇）とすること、登録選手数は1艇につき4名（現行　スナイプ級6名、FJ級5名）までとすること、男女別に、艇別選手権（ソロ競技）とチーム別選手権（デュエット競技）を行なうこと、1校あたりの出場艇数は男女各3艇(現行　スナイプ級1艇、FJ級1艇の2艇）までとすること、及び、競技運営方法を改善することを決定した。さらに出場枠数の水域への配分は、3年毎に予選参加校数を基に比例配分することとした。これにより、ヨット競技の選手総数は418名から416名に減るので高校総体の規模適正化にも添い、スナイプ級借用艇を準備していただくという開催県への負担を軽減することにもなった。

具体的な大会実施方法、移行方法については、さらに継続的に冬季の常任委員会で審議することとした。デュエット競技とソロ競技の考え方と実施方法について詳細に検討・討議したが、この後もデュエット競技のあり方を巡っては様々な意見がある。

第33回大会　スナイプ級最後の大会

第33回宮崎大会は日南市で開催され、第1回大会から続いたスナイプ級の最後のレースとなった。惜別の念もだし難く、日南市大堂津の海にその勇姿を心に刻むこととなった。しかし、無情にも台風の接近により最終日のレースは中止となったのである。

この大会中の委員会で次年度からの各水域予選の方法を決定した。新しい大会の具体的運営方法については、常任委員会の検討案を基にして、第34回土浦大会主催の茨城県高体連に委ねられることになった。

霞ヶ浦の土浦市での開催は2回目である。総体主会場は栃木県であったが、茨城県には全国的強豪校が集まっており、競技運営に精通していただけでなく、何より改革への想いに共感していただき、最初の困難な大会を引き受けてもらった。感謝に堪えない。寒い夏の大会であったが、選手控え所をテントでなくプレハブにしていただいたり、運営側の様々な配慮で成功裡に改革第一回大会は終了した。

FJ級の風上への帆走

なおこの大会において、高体連ヨット部会の体制を強化するために、常任委員を4人から9人に増やして各水域に配置し、2名の副部長を置くこととした。慣例として全国大会の審判団には常任委員が加わることになっていたので、この体制により、より高体連色の強い、高校生のレースとしての継続性一貫性を持たせた大会の運営強化と、今回の改革の徹底に寄与することとなった。

この大会はジュニアヨットクラブ出身の選手が活躍したのであるが、昭和50年代後半から高校ヨット部にヨットの経験者が入部するようになっていた。それまでは、ヨット競技の日本での普及状態から高校入学以前にヨットに乗ったことがある生徒はまれであった。江ノ島などヨットの先進的な水域の他にはジュニアヨットクラブは存在しなかった。徐々に全国各地にジュニアヨットクラブができたおかげで、ヨット経験者が高校ヨット部に入部するようになったのである。高校総体でもジュニア出身者が上位に顔を出すようになり、その指導をどのようにするかが問題になっていた。問題点は、ヨット部内での融和が難しいこと、学業との両立を図ること、有力校への単身国内留学などである。当初は、ジュニア出身者の横柄な態度が目に付き、指導が心配されたのであるが、増えてくるに連れてその勝利至上主義が問題となった。社会体育と学校体育の関わりの中で、教育的視点からどのように対処すべきか、あるいは対処の必要はないのか、継続して考えてきた問題である。

第35回富山大会は新湊市で開催された。改革案本来の7レースが実施される予定であったが、新潟沖に鮫が数頭出現したとの情報で最終レースは中止となった。この年は鮫の被害を避けるため、西日本の水域ではヨットの練習を制限していたほどであった。富山県としては国体の開催を控えて、初めての大規模な全国大会であった。新しく高校ヨット部を創設するなど熱心な運営には頭の下がる思いであった。

第36回大会は鳥取県境港市で開催された。美保湾の広い海面、よい風に恵まれ、初めて全7レースを堪能した。FJ級世界大会の時のように、FJ級は軽量の選手しか勝てないという通説を吹き飛ばすが如く、美保湾では本当によい風が吹く。日本の夏は全国的に風が弱いために、微風に強い選手が有利と思われるようになった。インターハイで勝つために軽量な選手を求める傾向が出てきた。しかし、それでは世界的に通用する選手が育ちにくいし、ヨット競技を普及拡大させるさまたげになる。

この年の委員会も、FJ級の改革を求める意見などで真夜中過ぎまで続いた。

第37回大会　山中湖で白熱した競技

第37回山梨大会は山中湖を会場とした。大会中ほとんど毎日富士山を見て帆走することができ、爽快なレースであった。湖でのレースは特有の風に悩まされるものであるが、FJ級に一本化したため、風向に合わせたマーク移動が容易になり、より公平なレースが展開できた。また、7レースを実施しその内ベスト6レースの得点で競うので、運ではなく実力相応の成績を残すことができた。上位のチームは必ずしも軽量の選手ではなく、技術と体力の優れたものがよく走るということを見せてくれた。

平成6年から国体では、スナイプ級に代えて、少年男女の艇種として、一人乗り（シング

ルハンド)のシーホッパー級ＳＲを採用していた。このため、高校総体でもシングルハンド(日本ではシーホッパー級とレーザー級が普及している)を採用してほしいという意見が大きくなっている。シングルハンドを要望する意見は国体採用前からあったが、高体連としては以前より否定的な見解を持っている。一人乗りは、団体戦としての高校ヨット部のコンセプトに合わない、ということが根底にある。さらに、国内で一つの造船所しか建造できないということは、永続的な艇の供給が保証できないということである。艇種は数年単位で変更できるものではない。また、大会での艇数が増えることから、競技運営にも多くの問題を抱えることになる。しかし、国体に採用されたという現実は、多くの高校ヨット部に高体連でもシングルハンドの採用を求める声となっている。

第38回京都大会は天橋立を目の前にして宮津市で開催された。運営側が心配したとおり、微風に悩まされた大会だった。微風にも関わらず、レース海面をヨットハーバーを出てすぐのところに設定するなど、レース運営に熟練した適切な対応のおかげで、成功裡に終了した。

シングルハンド艇採用を希望する声はこの年のヨット部委員会でも上がり、臨時の委員会を年末に本部で開くことになった。全国の高校ヨット部の現状を把握することなしに見解をまとめることは適切でない、ということで、全国の高校ヨット部を対象に詳細なアンケート調査を実施することとなった。そして、11月のアンケート調査を基に委員会を開いた結果、必ずしもシングルハンドを要望する意見が多数ではない、ということで、シングルハンドの採用については今後も継続的に研究を続けることとなった。

この平成9年度のアンケート調査によれば各学校ヨット部にとって最大の悩みは、「部員数の不足」と「顧問不足」という大会発足時以来の難問である。艇の調達、活動場所の確保という資金的問題もある。問題解決の方向は、ヨット部経営の安定化であり、個別顧問への依存型からの脱却である。その一つの道は学校外顧問の導入など社会体育との結びつきを深めることであるが、県ヨット連盟においては高校の顧問が中心的に活動している水域も多く、そのような県では逆に、社会体育から育成指導を期待されている。各県毎に大きく事情が異なっているが、顧問不足と、今までのように艇建造の資金調達が進まないことは共通している。

平成9年度末には再び国体の艇種を変更する方向が決まりつつある。高体連としては新たな対応を迫られることになる。

今までも国体の動きに左右されないように、どのように各校ヨット部の負担を少なくし、ヨットの普及を図るか、つまり、どのようにヨットの魅力を宣伝し、部員を増やすか、を模索し続けてきた。そして、高校生徒数が減少する中、部員数は斬増しているし、学校数もこの20年間では増えている。各校ヨット部の努力、各水域ヨット関係者の協力と高体連独自の持続的改革がうまくかみ合っているのである。

第38回大会宮津湾微風のレース展開

3　将来に向けて

21世紀を迎えて進む教育改革の中で、体験活動は重要な役割を担っている。ヨットは、学校体育の中で自然体験ができる数少ない貴重なアウトドアスポーツである。球技や格技のように人を相手にするよりも、一個の人間として自然に立ち向かうことから始まるスポーツである。だからこそ、欧米では、ヨットは人間の究極のスポーツであると見なされている。このヨット競技をより普及させたいと願っている。

ヨットという道具を使う競技でありながら、「物より、人の体力と技術の競い合い」を目指して、ともすれば勝利至上主義に陥りがちな部活動の傾向を克服し、「マリンスポーツを通じての自然体験活動」としての高校ヨットの発展を期したい。

フェンシング

《事務局》
〒404-8540 名古屋市千種区若水三丁目2-12
愛知工業大学名電高校内
TEL 052（721）0311
FAX 052（722）8302

創　　立：昭和37年4月1日

加盟校数		325校
部員数	男子	1,155名
	女子	1,287名
	合計	2,442名

年度	部長	副部長	記事
37	後藤　鉀二	川村　等	全国高体連への加盟
39	〃	〃	電気武器の使用始める
			選手権メダルの授与
40	川村　等	長尾　正男	男子個人エペ・サーブルの実施
		大沢　貞雄	
			後藤鉀二先生名誉部長に推挙
47	〃	〃	後藤淳先生名誉部長に推挙
48	〃	〃	日韓交流試合開催
49	長尾　正男	蜂谷　留吉	〃
		大沢　貞雄	
51	〃	〃	第1回全国高校選抜大会の開催（個人フルーレのみ）
53	〃	蜂谷　留吉	
		鈴木　省三	
54	〃	倉本　一男	専門部報創刊
		鈴木　省三	
55	〃	村上　謹司	
		鈴木　省三	
57	〃	〃	日本協会ルールブック発行
59	〃	〃	全国選抜男女各24チームによる団体戦に変更
62	〃	村上　謹司	
		三井　朋文	
2	〃	〃	個人対抗戦エリミナション混合方式導入
3	大澤　文男	稲村　隆郎	
		小久保敦央	

年度	部長	副部長	記事
5	佐部　成男	山川　靖仁	
		奥田　明	
6	〃	〃	インターハイ優勝旗・トロフィーの新調
			試合管理規定の作成
7	〃	〃	女子個人エペの実施
			個人登録制はじまる（日本協会）
8	〃	〃	電気サーブルの実施
			全国選抜出場校男女32チームに増やす
9	山川　靖仁	半田　幸三	指導者講習会の実施
		奥田　明	日本協会ルールブック改訂版発行
10	〃	〃	

平成9年度 全国総体フェンシング競技 開会式

1 沿 革

高等学校におけるフェンシング競技のはじまりについては、記録がなく、明らかではないが、昭和26年（1951）第6回国民体育大会より、高校団体・高校個人の種目が設けられており、フェンシングの国体参加が高等学校におけるフェンシング競技の普及に一役を担ったことが窺える。

高等学校の全国規模の大会は翌昭和27年に仙台市で開催されているが、当時は全日本フェンシング選手権の一部門として男子学校対抗戦と男子フルーレ個人対抗戦のみが行われた。分離独立し、第1回全国高等学校フェンシング選権大会が開催されたのは昭和30年（1955）である。記念すべき第1回大会も仙台市で開かれており、この大会から女子学校対抗戦と女子フルーレ個人対抗戦が加わっている。

昭和36年（1961）の第7回大会までは仙台・新潟・名古屋・松山・京都・札幌・山口県和木の順に開催されたが、開催地の決定、経費の捻出、運営には市町村をはじめ地元の企業や篤志家の多大な支援を得て行われていた。そのような状況下で、しだいに、全国高体連加盟への気運が高まり、和木大会の期間中に参加校指導者による話し合いと意思統一が図られた。大会後、早速規約を整備し、加盟申請を提出した。その結果、昭和37年4月1日に正式に加盟が認められ、全国高体連フェンシング専門部が創立したのである。この間、当時名古屋電気学園理事長・愛知工業大学学長・日本フェンシング協会副会長の故後藤鉀二先生の物心両面での尽力は筆舌し難いほどであった。

記念すべき全国高体連加盟後最初の大会は岡山県新見市で開催された。この大会から男女学校対抗戦の優勝旗と個人対抗戦の優勝盾が新調され、その調製も、また、後藤先生によるものであった。初代専門部長となられた先生は、各地に指導者を派遣されるなど、高等学校のフェンシング競技普及にも努力された。

昭和38年の徳島大会では電気審判器の導入が検討され、翌年の名古屋大会から採用された。しかし、多額の予算を必要とする電気武器用具の購入は、各高等学校や開催地では難しく、当初は、名古屋電気学園が貸し出し、運営を行っていた。一方、この大会から、3位までの入賞者に井上太郎画伯（一水会会員）に原型を彫っていただいた金銀銅のメダルが授与されるようになり、現在も、選手権章として続けられている。なお、全種目統一のメダルが授与されるようになったのは昭和44年からである。

各都道府県の参加チーム数・選手数を大幅に制限する最初の規制が行われた昭和39年の大会は別府で開催された。

昭和40年（1965）の秋田大会からは男子個人対抗にエペとサーブル種目が加えられた。

昭和41年福井、42年福山、43年高崎、44年京都、45年高松、46年仙台、48年名古屋、49年福岡県篠栗、50年東京、51年長野県箕輪、52年新見で全国高校総体兼全国高校選手権大会は順次開催されている。その間、国際ルールの変更や高体連独自の判断から女子の5本勝負の導入や個人戦におけるプールやトーナメントの組み合わせなど競技方法にいくらかの変更もあったが、特に大きな問題もなく大会運営がなされた。

昭和52年（1977）は専門部にとって特別重要な年になった。40年代の終わり頃から関係者の間で開催が求められていた全国高等学校フェンシング選抜大会の第1回大会が、日本フェンシング協会、愛知県フェンシング協会、名古屋電気工業高校等のご協力とご援助により、3月、名古屋において開かれたのである。当初は各都道府県から選抜された男女各1名によるフルーレの個人戦のみを実施した。男女各24チームによる団体戦が行われるようになるのは、昭和60年の第9回大会からである。会場もご厚意から第10回大会まで名古屋電気工業高校の体育館を使用させていただいていた。全国選抜大会が現在のように地方を回るようになったのは第11回の京都大会からである。国体やインターハイのリハーサルの一つとして、また、地方の支部協会や市町村のご厚意により今日まで中断することなく開催されている。

全国高校総体は昭和53年以降、昭和62年までの間に、寒河江、京都、高松、水戸、指宿、尾張旭、秋田県二ツ井、松任、福山、苫小牧で開催された。その間には、副部長として大会運営にご尽力いただいた大沢（千葉）、蜂谷（京都）、倉本（山口）諸先生が定年で勇退されるとともに60年には副部長の鈴木省三先生が地元秋田県二ツ井町での第30回大会を見事に成功させた後、急逝なされた。

平成９年度全国総体開会式（京都府大山崎）

２　１０年の歩み

①全国高校総体・全国委員会・常任委員会

専門部の最高決議機関である全国委員会と業務の執行に関する事項を審議する常任委員会は昭和37年に専門部の規約が定められて以来、毎年全国高校総体の期間中に開催されている。また、常任委員会は毎年２回以上部長が招集することになっているが２回目の委員会は２月末か３月のはじめに招集されている。

昭和63年（1988）の全国高校総体は和歌山で開催された。この大会から要項に図解した武器用具留意事項を入れるようになった。武器用具の検査は、選手の安全を守り、公正でスムースな試合進行を行うために、大会運営上欠くことのできない業務になっているが、点検項目を増やし、安全性を確保し、相手の選手に不利益になるような用具を厳重にチェックするようになったのは、60年に神戸で開催されたユニバーシアード大会の影響が大きい。なお、高体連では平成８年よりそれまで使用してきた武器検査という名称を用具検査に変更した。

平成元年（1989）は昭和46年と55年の２度大会を引き受けられた香川県高松市で３度目の大会が開かれた。平成２年は、かつて日本フェンシング協会の理事長をなされていた千葉卓朗氏が町長をなされている宮城県本吉町で、３年は高体連専門部で創立期から常任委員をなされてきた長尾富雄先生の地元、沼津市での大会開催であった。

３年の沼津大会期間中に開かれた全国委員会では、長年本専門部の部長を務められた愛工大名電高校の長尾正男先生が勇退され、新たに同校の大澤文男先生が選出された。同時に副部長の大阪清風高校の村上謹司先生、札幌山の手高校の三井朋文先生も勇退され、仙台育英高校の稲村隆郎先生、大東文化大第一高校の小久保敦央先生が選出された。

４年は宮崎県国富町、５年は栃木市での開催であった。

５年の栃木大会の期間中に専門部の役員改選が行われ、部長には福井県立羽水高校の佐部成男先生が、副部長には岡山県立玉野光南高校の山川靖仁、愛工大名電高校の奥田明先生が選出され新執行部が成立した。また、全国委員会では、常任委員会で２年間、検討・審議されてきた専門部規約の全面的な改定が承認された。

６年（1994）は富山県婦負町で大会が開かれたが、この大会から、製作以来30年余りの年月に老朽化が進んでいた持ち回りの優勝旗やトロフィー類を新調し、授与するようになった。

試合管理規定の作成や全国高校総体の審判に高校の先生を積極的に採用するなど長い間懸案になっていた問題解決に一歩踏み出したのも婦負大会からである。

７年の島根県安来市での大会からは、女子個人エペが競技種目に加えられ、種目の上では国際大会並みの大会になった。大会期間中に平成８年度からのサーブルの電気化や新ルールの適用などが決められ、日本フェンシング協会の個人登録制度の導入も専門部としての了承が得られた。

８年は甲府市で大会が開催されたがこの大会から学校対抗戦の３、４位決定戦は行わず、３位校を２校にするようになった。また、新ルールの導入により、個人対抗戦のエルミナシオン・ディレクトは15本勝負が行われるようになった。サーブルの電気化に伴い、故障等に備え、用具を貸与する制度も設けた。

その他にも、甲府大会での全国委員会では、役員改選の時期について、規約に基づく常任委員会での部長・副部長の推薦については、年度末の常任委員会で行うことが了承された。

９年２月の常任委員会では次期部長として副部長の山川靖仁が、また副部長として新たに札幌光星高校の半田幸三先生が推薦され、８月の京都府大山崎での大会期間中に開催された全国委員会で承認された。同時に規約の改正も認められ、役員改選年度には全国委員会を３月にも開催できることになった。ブロック代表の常任委員の選出についても東京ブロックを削除し、11ブロックから10ブロックになった。

長い間の懸案事項であった専門委員会の設置も了承され、委員会規定を決め、早速、総務委

平成９年度全国総体表彰式（男子学校対抗）

員会、競技委員会、強化・普及委員会の３委員会が発足した。

強化・普及委員会では、11月、神戸市で、同志社大学の田淵和彦、藤澤義彦両教授を講師に、二泊三日の指導者講習会を実施した。競技委員会も10年１月に鳥羽市で委員会を開催し、全国大会の競技運営やルール上の問題などを検討した。総務委員会では特に広報活動を重視し、部報の定期的発行と内容の充実に力を入れている。

②全国高校選抜大会

第11回大会から開催地が全国各地を巡回するようになった全国高校選抜大会は、12回（昭和63）大会が東京で開催された。同大会の優勝校は男女共に秋田県の合川高校であった。13回大会以降については、13回（平成元）開催地岩国市、優勝男子合川高校・女子美萩野女子高校、14回（平成２）開催地宮城県本吉町、優勝男子羽島北高校・女子美萩野女子高校、15回（平成３）開催地沼津市、優勝男子羽島北高校・女子甲府湯田高校、16回（平成４）開催地別府市、優勝男子羽島北高校・女子甲府湯田高校、17回（平成５）開催地千葉市、優勝男子米沢東高校・女子甲府湯田高校、18回（平成６）開催地青森県今別町、優勝男子富山西高校・女子岐阜女子商業高校、19回（平成７）開催地和歌山市、優勝男子愛工大名電高校・女子美萩野女子高校、20回（平成８）開催地長野県箕輪町、優勝男子和歌山東高校・女子美萩野女子高校、21回（平成９）開催地栃木市、優勝男子粕屋高校・女子氷川高校、22回（平成10）開催地札幌市、優勝男子大垣南高校・女子鹿児島南高校であった。

第９回大会に団体戦になって以来、１回戦は全国９ブロックで選抜された男女各24校を３校ずつ８つのグループに分けプール方式（リーグ戦）で試合を行い、２回戦以降は各グループの上位２校、計16校によるトーナメント戦によって順位を決定してきた。しかし、第21回大会からは出場校を32校にすることが認められ、１回戦は４校によるプール方式で試合が行われるようになった。また、３、４位決定戦を行わず、３位校を２校にしたのも21回大会からである。

3　将来に向けて

本専門部加盟校・登録人数は平成10年２月現在、325校、2,442名である。平成元年頃には加盟校が360校、登録人数が3,700名余りであったことを思うと、この10年間に加盟校はそれほど減少していないものの登録人数は大幅に減少しフェンシング競技そのものの存続すら危ぶまれる状況である。少子化に伴う高校生の減少や高校生のスポーツ離れなど、その原因はいろいろと考えられるが、専門部としての最大の課題は加盟校を増やすと共に競技人口を増やすことにある。

現在１県１校の県が４県、県高体連未加盟の県が３県あり、当面これらの県において積極的に普及活動を行い、少なくとも全国高校総体の学校対抗戦には47都道府県全てから出場校があるようにしなければならないと考えている。

専門部の飛躍にとってもう一つの課題は、海外の選手・指導者との交流や国際的な試合への参加である。昭和48年頃韓国との交流試合を行っていたが、資金不足もあり短期間で途絶えてしまった。フェンシング先進国であるヨーロッパの国々は勿論、近隣の国々とも定期的な交流がもてれば競技力の向上に役立つばかりでなく、選手の励みになり、専門部の活性化にも大きく寄与するものである。国際化の波に乗り遅れることがないよう努力する必要がある。これらの課題を解決するにはまだまだ大きな壁が立ちふさがっているが、専門部の発展のためにも、21世紀に向け是非とも解決しなければならないことである。

平成９年度全国総体女子個人フルーレの熱戦

《事務局》
〒152-0023 東京都目黒区八雲 2-14-1
八雲学園高校内
TEL 03（3717）9062
FAX 03（3717）9063

創　　立：昭和49年

加盟校数		1,236校
部員数	男子	10,720名
	女子	4,004名
	合計	14,724名

年度	部長	委員長	記事
49	中里　一郎	秋野　治夫	第一回全国大会開催(東京)安全具開発·使用
50	〃	〃	
51	〃	〃	第三回全国大会を熊本県で実施
52	〃	〃	
53	〃	〃	
54	〃	〃	宮崎国体で空手道競技がデモンストレーション種目となる
55	〃	〃	
56	〃	〃	第一回国際親善遠征試合実施(中華民国) 滋賀国体より空手道競技が正式種目となる
57	〃	〃	第一回選抜大会開催(大阪)
58	〃	〃	全国高体連加盟承認 第二回国際親善遠征試合実施(ヨーロッパ)
59	〃	〃	
60	〃	〃	
61	〃	〃	アメリカ合衆国とホームステイ形式の交流が始まる
62	〃	〃	
63	〃	〃	第十五回全国大会開催(大阪) ジュニア空手道チームオーストラリア招待遠征試合行なわれる

年度	部長	委員長	記事
元	金井　秀一	秋野　治夫	第一回アジア環太平洋ジュニア空手道選手権大会開催(福岡県)
2	〃	〃	第二回アジア環太平洋ジュニア空手道選手権大会開催(インドネシア)
3	〃	〃	第三回アジア環太平洋ジュニア空手道選手権大会開催(中華民国)
4	〃	〃	第一回アジアジュニア空手道選手権大会参加(マレーシア)
5	谷澤　一雄	〃	20年連続出場校表彰
6	〃	〃	第十三回全国高等学校選抜大会の主管が関東高体連空手道部に移行 第二回アジアジュニア空手道選手権大会参加(ベトナム) 世界ジュニア空手道選手権大会参加(オーストラリア) 空手道部20年誌発刊
7	〃	〃	事務局校変更
8	猪俣　史郎	大門　伝	第二回アジアジュニア空手道選手権大会参加(中華民国)
9	〃	朝野　文夫	国際親善遠征試合参加(フィリピン)
10	〃	〃	空手道選抜大会開催が地区持ち回りとなる

1 沿 革

昭和48年11月

（財）全日本空手道連盟主催による全日本空手道選手権大会の種目の中に高校男子団体形試合（3人制）が導入されたことを契機に全国組織結成の気運が高まり、準備委員会が発足。

準備委員会に中里一郎氏（当時、群馬県立富岡工高校校長）が選任される。

昭和49年1月

（財）全日本空手道連盟のお世話で全国高等学校空手道連盟を設立し、ただちに（財）全日本空手道連盟の職域団体（現在加盟競技団体改称）として加盟が承認される。

初代会長に中里一郎氏が就任。

同月同日、第1回全国高等学校空手道選手権大会の準備委員会発足。

昭和49年5月

全国統一の審判講習会の実施（東京）と大会種目が検討される。

昭和49年8月

第1回全国高等学校空手道選手権大会開催（東京・駒沢総合運動公園屋内競技場）参加県21校、参加校64校、参加人員445名、大会種目6種目（男子団体形5人制・男子団体組手5人制・男子団体防具組手5人制・男子個人形・男子個人組手・女子個人形）女子の空手道人口は少なく1種目のみ。競技規則の不慣れ、審判技術の不統一のため組手の試合は上段攻撃の禁止、安全第一の観点からビニールメンホー、拳サポーターグローイングカップ、ボディプロテクターの安全具を開発し使用。

昭和50年8月

第2代会長、齋藤義蔵氏（東京・日本大学鶴ヶ丘高校校長）就任。

昭和51年8月

全国高校空手道選手権大会、各地区各県持ち回りで実施。

第3回大会を熊本県で実施。

昭和52年8月

第3代会長、中里一郎氏（群馬県立伊勢崎商業高校校長）就任。

昭和54年8月

宮崎夏季国民体育大会より空手道競技がデモストレーション種目となる。

少年は地区代表の団体戦実施。

昭和56年4月

第4代会長、金井秀一（群馬県立伊勢崎商業高校校長）就任。以来平成6年3月まで12年間在任。

昭和56年8月

第1回国際親善遠征試合（中華民国・台北市）実施。以降国際交流試合が盛んになる。

昭和56年10月

滋賀県国民体育大会より空手道競技が正式種目になる。少年男子個人組手、少年女子個人形が高校生の参加種目。

昭和57年3月

第1回全国高等学校空手道選抜大会開催（大阪府・東淀川体育館）

昭和58年4月

全国高等学校体育連盟正式加盟承認される。予算計上は5年間据え置き。

昭和58年8月

ヨーロッパ5カ国（西ドイツ、オーストリヤ、スイス、イタリー、フランス）国際親善遠征試合実施。

昭和61年7月

日本とアメリカ合衆国の間で隔年、ホームスティ形式で国際交流が開始される。

2 10年の歩み

昭和63年8月

- 第15回全国高等学校空手道選手権大会（大阪府）より予算処置がなされる。
- オーストラリア建国200年祭、ジュニア・空手道チーム招待遠征試合（ブリスベーン）実施。

平成１年８月
・第1回アジア環太平洋ジュニア空手道選手権大会日本国開催（福岡県）
アジア環太平洋空手道連盟主催、福岡県空手道連盟、福岡県高体連空手道部主管。
各国選手団、福岡市内ホームスティをして大会参加、成功裡のうちに終了。
平成２年７月
・第2回アジア環太平洋ジュニア空手道選手権大会参加（インドネシヤ･ジャカルタ）
平成３年８月
・第3回アジア環太平洋ジュニア空手道選手権大会参加（中華民国･台北市）

アジアジュニア空手道選手権大会
日本選手団（中華民国 台中市）平成３年８月24日

平成４年８月
・第1回アジアジュニア空手道選手権大会参加（マレーシア･クアラルンプール）
オセニア地区（オーストラリア、ニュージーランド）を除いてアジア地区のみ大会となる。
平成５年３月
・金井秀一氏、12年間の部長定年退職の為、退任。
平成５年４月
・第5代部長谷澤一雄氏（北海道・上之国高校校長）就任。
平成５年８月
・全国高等学校20年連続出場校表彰（3校）表彰校栃木県・宇都宮商業高校
兵庫県・神戸野村工業高校
兵庫県・夢野台高校
平成６年３月
・平成５年度第13回全国高等学校空手道選抜大会より、主催（財）全日本空手道連盟全国高等学校体育連盟は従来通りで、主管が関東高等学校体育連盟空手道部に移行し開催地東京都高体連空手道部と千葉県、埼玉県、神奈川県の協力を得て大会を開催。
平成６年６月
・第２回アジア･ジュニア空手道選手権大会参加（ベトナム･ハノイ）。
平成６年８月
・世界ジュニア空手道選手権大会参加（オーストラリヤ･パース）世界空手道連合共催オーストラリヤ空手道連盟主管。

第１回世界ジュニア空手道選手権大会選手団
オーストラリア・パース平成６年８月

平成６年８月
・全国高等学校体育連盟空手道部20周年記念誌発刊
平成７年５月
・全国高等学校体育連盟空手道部事務局移動創立当初より平成7年3月迄の東京私立目黒高等学校より東京･私立八雲学園高等学校に移動。

ニュージーランド
国際体験
日本選手団

平成８年３月
・谷澤一雄氏（北海道・北広島高校校長）定年退職の為部長職退任、及び当専門部創立以来委員長職で組織の推進者で活躍された秋野治夫氏（東京・成立高校）が定年の為退任。
平成８年４月
・第６代部長猪俣史郎氏（神奈川県・山手学院高校校長）就任。
・新委員長大門伝氏（熊本・東稜高校）就任
平成８年８月
・第３回アジア・ジュニア空手道選手権大会（中華民国・台中市）参加。
平成９年３月
・大門伝氏（熊本・東稜高校）定年の為委員長退任。
平成９年４月
・新委員長朝野文夫氏（北海道・札幌新川高校）就任。
平成９年８月
・フィリピン（マニラ）国際親善遠征試合実施。
平成10年３月
・15年間紆余曲折の後、関東（東京）で実施してきた全国選抜大会を地区活性化と選手育成の意味から全国６地区（北海道東北地区・関東地区・東海北信越地区・近畿地区・中国四国地区・九州地区）に編成、地区輪番制で開催となり、第1回目（第17回）大会を九州地区福岡県で実施。

3　将来に向けて

当部発足時は全国各都道府県の組織の基盤づくりと全国各地に点在する空手道を愛好する高校生たちを一堂に会する機会を与えることに日夜奔走し、徐々にであるが各都道府県における連盟の設立及び高体連加盟が実現していき、参加県、参加校、競技人口も増加してきた。

現在では県を代表して全国大会に出場することが至難な状況となり、一方、大会出場は熾烈な激戦で高校生の部活動もそれに応じて活発になってきた。高校空手道の競技力もここ10年間で急速に成長が見られ、大学への進学率も高くなると同時に日本の空手界の中心的な存在にたっている。

永年の懸案である空手道を高校体育の正課として導入すべく、指導書の作成、学習指導要領の作成、教科書づくり、ＶＴＲの製作を手がけ準備段階が終わったところで文部省の学習指導要領の改訂があり、その他の武道の中で体育の正課の中に組み入れて授業ができるようになったが、しかし現場では、指導者不足と学校全体のカリキュラム等の問題もあり、すぐには取りかかれない現実である。これらを一つ一つ解決していく事が今後の高校空手道の課題である。今現在高校生が参加できる国際大会の最大級の大会は隔年おきに実施されているアジア・ジュニヤ空手道選手権大会である。世界では130カ国に及ぶ国々に空手道愛好する同士がおり個々には交流があってもひとつにまとまっての大会が開催されない現状では国際化時代に乗り遅れている感がある。

世界ジュニヤ空手道選手権大会が然るべき組織団体のもとで、早くひとつの輪になって開催されるように努力することも、21世紀を担う高校生のために実現しなくてはならない目標の一つである。

《事務局》
〒330-0804 埼玉県大宮市堀之内1-615
大宮開成高校内
TEL 0748（641）7161
FAX 0748（647）8881

創　　立：昭和43年

加盟校数		289校
部員数	男子	2,591名
	女子	1,745名
	合計	4,336名

年度	部長	委員長	記事
31			日本アーチェリー協会設立
37			近畿総合体育大会開催
43			第1回全国高校アーチェリー競技会開催(大阪府布施市、現東大阪市)
45			競技会の名称を「全国高等学校アーチェリー選手権大会」に改称
46			全日本アーチェリー連盟高校部発足
49			選手権優勝碑「ダイアナ」作成
51	木村　好治		
52	〃		選手権大会個人参加枠新設
53	〃	〃	大会開催基準見直し
54	〃	中田　昇	部長理事長制導入
			全国高体連加盟に向け活動開始
			全国大会記録集創刊
55	〃	〃	全国高体連加盟申請
			総務、競技、強化、事務局設置
57	小笠原朋憲	〃	
58	〃	〃	全国高体連正式加盟への手順決定
			第1回全国高校選抜大会開催(愛知県)

年度	部長	委員長	記事
59	小笠原朋憲	中田　昇	組織拡充に着手　全米選手権選手派遣事業、ジュニア選手強化開始
61	〃	清元　修	学校登録番号指定
			ランキング制度開始
			会報の発行開始
62	〃	〃	加盟に向け各都道府県へ協力要請行う
63	里見　勝人	〃	全国高体連加盟承認
			新組織による常任理事会開催　審判委員会設置
			専門部規約原案決定
			中込恵子(甲府第一、山梨)オリンピック出場
元	松崎　洋右	〃	
3	〃	藪内　徹	第Ⅰ回Jr世界大会(ノルウェー)へ選手派遣
5	〃	〃	全国高校総体参加
6	〃	〃	全国高校選抜大会長浜ドーム(滋賀県)で開催
9	〃	田中　康彦	ホームページ開設
			インターネットによる全国大会速報開始
10	〃	〃	

1 沿 革

全国高等学校体育連盟アーチェリー専門部としての歴史はまだ10年を経ておらず、全国高等学校総合体育大会（インターハイ）に正式参加してからも４回の大会を経験したに過ぎない。しかし、高校アーチェリーの歴史は古く、戦後のスタートは1950年代に遡ることができる。

1950年代後半、静岡県浜松市の日本楽器（現在のヤマハ）の射場で高校生の愛好者が個人的な活動を開始したのが高校アーチェリーの始まりであろう。この個人的な活動が、地元高校のの学校活動に発展するまでには、さほど時間はかからなかった。

初の高校生独自の競技会は昭和37年に関係諸兄の近畿高体連への働きかけにより行われた近畿総合体育大会である。当時は世界アーチェリー連盟（FITA）の加盟権を日本弓道連盟が有していたこともあり、競技方法も和弓の競技方式を取り入れたものであったが、高体連の主催により競技が行われたことは後の高校アーチェリー界に大きな影響を与えた。その後競技方法がアーチェリーの形式に変更され、全国大会実施へと向かってゆくことになる。

第１回大会プログラム

昭和43年８月10日には第１回全国高等学校アーチェリー競技会が布施市（現在の東大阪市）で地元関西地区の高等学校に静岡県の高等学校を加え開催され、翌年は静岡県営草薙運動場に場所を移し第２回大会が開催された。

第３回大会より競技会の名称が「全国高等学校アーチェリー選手権大会」と改称され、高校総体に加入した現在もこの名称が使用されている。翌第４回大会からは選手権参加枠が各都道府県２校以内と前年度優勝校に制限され、全国大会としての重みが与えられた。そして昭和49年の第７回大会からは各都道府県の代表校制となり、各都道府県男女各１校と前年度優勝校の参加という規定となり、前年度優勝校の参加規定以外は現在とほぼ同じ形となり、競技会としての完成を見ることとなるのである。

組織としては昭和46年に全日本アーチェリー連盟内に高校部が設置されたが、高校アーチェリー界にとって最大の目標は全国高等学校体育連盟（以下、全国高体連）に正式加盟することであった。

第８回大会プログラム

全国高体連に加盟するためには高体連に加盟している都道府県が30以上なければならなかったが、昭和52年の第10回大会では全国22都道府県から189名の参加であった。

昭和51年木村好治氏（元青森県名久井農業高校校長、現全高ア専顧問）を初代の高校部長に選出し、とかく全日ア連主導になりがちの運営を、高校独自のものにするための基礎が作られた。昭和55年、中田昇氏（元大阪女子商業高校）をニ代目高校部長に選出するとともに、全国高体連へ加盟申請が行われた。

昭和58年には東京都アーチェリー協会の高校部が東京都高体連に加盟。これに刺激されたかのように北海道、福岡、愛知、埼玉などが次々と高体連に加盟していったのである。

昭和57年小笠原朋慈氏（現全高ア専顧問）を三代目高校部長に選出し、高体連への加盟申請も継続された。そして翌昭和58年、高体連への準加盟が決定。組織拡充と事業実施内容等の統一化に向けて運動が強化され、全国高体連加盟に向け懸命の努力が続いた。昭和61年には専門部会報第１号及びランキング表が発刊され現在に至っている。

過去の全国高校選手権の優勝者には、三連覇を達成しオリンピックでも活躍している山本博選手（横浜高校）、高校生として初めてソウルオリンピックの代表となった中込恵子選手

(甲府一高)。大学生・社会人を押しのけて高校生が全日本選手権を制覇した松阪裕美選手(横浜学園高校)。高校生ながら広島で開催されたアジア大会の代表となった今福織江選手(大分東明高校)など大きな活躍が続いている。そして、高校生2人目のオリンピック選手として小出美沙都選手(大分明星高校)が、アトランタで活躍したのは記憶に新しい。

2　10年の歩み

(1)昭和63年度(1988)

5月は高校アーチェリー界にとって、記念すべき年であった。昭和55年(1980)から、全国高体連に加盟申請して以来、8年目に加盟が承認された。加盟にあたって、専門部設置県の増加を目指し、全国各地で運動を広げた。各都道府県の加盟取り扱い基準と今後の見通し、クリアすべき条件などの把握に取りかかったものの、肝心の未加盟県の反応は今一つで、地域活動発展論をもってメリットを説く加盟県に対し、県協会依存からの脱却に不安を募らせる未加盟県があり、今後の競技会備品、独自資金の確保等々で難色を示す向きがあり、全体が加盟の方向に進むには予想以上の時間がかかった。

加盟への本格的な動きは国体正式参加(昭和55年)がきっかけだが、各県の捉えかたは、競技者数の増加を受けて専門部の設置を図る立場と、国体の開催順を迎える地元の思い入れから設置を図る立場があり、双方が絡み合って今日を迎えた訳だが、全国高体連加盟の背景には国体参加が大きく幸いした。

昭和62年10月末での各都道府県への加盟は、23県になった。加盟の条件は、「おおむね30都道府県で高体連加盟または、40都道府県に於いて、実質的な活動が審議の対象」であったので、後者でやっと条件を満たしての加盟であった。

当初(昭54)、加盟数は19都道府県であった。この間「国体のリハーサル大会」として国体開催県に依存しながら高校選手権大会は、第13回大会から第25回大会までの13回を開催県と相互依存の関係で実施してきた。加盟してから同時開催までに更に5年の年月を要したからである。

これまでは、準加盟の競技種目の扱いで、名義共催の禁止・全国高校総体開催期間中の同時開催禁止などの措置があって、生徒共々残念な思いで大会を実施していたことを思い出す。

この年、全国高体連への加盟承認をうけて、新組織による常任委員会を設立し、「伊豆下田会議」を開催し、全国高体連アーチェリー専門部(以下、全高ア専)の夜明けは、下田から始まった。今までの組織である総務・競技・強化の各委員会に事務局を加えた4部門に新たに審判委員会を設置した。また、全高ア専規約を審議し、原案を決定したのもこの会議であった。

初代専門委員長に清本修(広島・可部高)を、初代専門部部長に里見勝人(東京・淑徳高校長)、副部長に松崎洋右(埼玉・大宮開成高校長)と猪飼彰(愛知・愛工大名電高校長)を選出し、全高ア専の新組織は誕生した。

また、全国高体連加盟を祝福するにふさわしく、中辻恵子(山梨・甲府第一高)が高校生初のオリンピック選手に選ばれ、ソウルオリンピックに出場した。

また、アーチェリーの全国大会は昭和43年(1968)8月10日大阪の東大阪グランドで第1回全国高等学校アーチェリー選手権大会を開催して以来、21回目を数え、この年は北海道旭川市で開催された。

第21回大会開会式(北海道・旭川)

(2)平成元年度(1989)

4月、第2代専門部部長に松崎洋右(埼玉・大宮開成高校長)を選出。後任は空席。

高校選手権大会で団体女子の折尾高(福岡)が2年連続優勝をはたす。

ジュニアチーム海外派遣が始まり、8月に、男子2名、於久直人(滋賀・北大津高)、大橋亨(東京・東京工業高)・女子3名、井上鹿代子(静岡・富士見高)、池田裕紀子(兵庫・甲南女子高)、長見みどり(広島・山陽女子高)の計5人が高校生としてはじめて、朝倉基夫(北海道・札幌啓北

高）コーチの引率のもと、第105回全米アーチェリー選手権大会（アメリカ·オハイオ州）に派遣される。

(3)平成2年度(1990)

清本修（広島·可部高）専門委員長退任により、4月より薮内徹（滋賀·伊吹高）が、専門委員長を代行する。空席の副部長に越田稜（東京·学習院高）を選出。

ジュニアチーム海外派遣は、8月に男子2名、親泊竜也（沖縄·宜野湾高）、赤井雅宏（滋賀·北大津高）·女子1名、湯浅久美子（群馬·安中実業高）が、朝倉基夫（北海道·札幌啓北高）コーチの引率のもと、第106回全米選手権大会（アメリカ·オハイオ州）に派遣される。

高校選手権大会で団体男子の伯稜高（福岡）が2年連続優勝をはたす。

(4)平成3年度(1991年)

4月、薮内徹（滋賀·伊吹高）を、第2代専門委員長に選出。

7月、第1回ジュニア世界選手権大会が始まり、ノルウェーのサンデフィヨルドで開催され、選手派遣が始まる。これまでは全米選手権のジュニア部門に派遣していたが、ジュニアの世界大会が始まり、世界のアーチェリー界にとっても、大きな躍進であった。日本チーム監督に全日本アーチェリー連盟（以下、全日ア連）の關政敏、男子コーチに立入彰修（滋賀·北大津高）、選手は厚海善栄（福島·田村高）、上野貴裕（滋賀·北大津高）、平尾彰浩（静岡·浜松北高）、松村庫司（滋賀·大津商業高）の4名。女子コーチは五百蔵正雄（兵庫·甲南女子高）、選手は小橋川眞裕美（沖縄·宜野湾高）、谷岡和子（兵庫·甲南女子高）、下田眞弓（青森·三本木農業高）、吉田しのぶ（埼玉·所沢中央高）の4名。男子団体は14位、個人男子でも平尾が41位。女子団体は4位と健闘し、個人で小橋川が13位。男子は惨憺たる結果に終わったことを、立入は次の4つの原因をあげて今後の反省としている。「体力とパワーの差」「外国人に対するコンプレックスや日本と外国の差による精神疲労」「高価な弓に頼りすぎていて、弓を使いこなせていない」「日本国内の指導者側の統一見解のなさ」。特に「技術指導者·弓具のメカニシャン·心理学見地からみた指導者など、それぞれのエキスパートがそれぞれの立場で活躍し、選手の力を100%引き出せる技術スタッフ及び、全国の指導者を対象としたそれぞれのエキスパートによる研究発表や研修会が必要だ」と、的を得た忠言を述べている。これらは、現在では盛んに色々な機会を設けて実施している事柄である。

(5)平成4年度(1992)

ジュニア海外派遣は第108回全米選手権大会（アメリカ·オハイオ州）であった。5名がインターミディエイトビジター部門に参加。ジュニア世界選手権が2年に1回開催されることから、開催されない年は毎年開催の全米選手権に派遣している。監督は水上英彦（静岡·富士見高）、男子コーチは立入彰修（滋賀·北大津高）、女子コーチは穂苅美奈子（東京·国際基督教大学高）であった。選手は、松山義一（東京·東京工業高）、相蘇義章（北海道·旭川北高）、岡野善恵（兵庫·甲南女子高）、角田義美（滋賀·虎姫高）、坂口絵理（福岡·伯稜高）であった。女子個人で角田が2位、松山は3位に入賞。穂苅は「選手としての独立心を持つことが今後は大事だ」と言っている。また「自分で判断し、決断していく機会が少ないせいか、依頼心が強く、そのことがアーチェリー競技のような個人スポーツをやる上でマイナスに働いている場合が多い」とも言っている。

「会報」には、専門的な分野から広瀬明氏（全日ア連強化部）に「基本射形の考え方と注意点」としての特別寄稿を依頼し、全国の高校生のために基礎的な分野からの啓蒙をはかった。

また、全国高体連加盟に伴い、服装規定も改定した。

(6)平成5年度(1993)

4月、鵜飼泰勇（愛知·愛知高校長）を副部長に選出。

8月、全国高等学校総合体育大会（以下、高校総体）が栃木で開催され、アーチェリー専門部として初めて参加。加盟承認されて5年目であり、この時の関係者の感激はひとしおのものがあった。初めての大会の競技方法は、引き続き50·30 mの当時で言うハーフの考え方と、世界に会わせ、シングルで記録の比較をとの考えがあった。全国高体連中央委員会は、競技会の運営施設面や日常活動と校内練習場問題などか

ら、長距離の実施は否定し、ハーフの続行が加盟承認の条件とした。しかし、公式競技論とともに熊本国体の実施要綱変更などもあり、3年間の準備期間を経て、山梨大会からシングル化への変更承認が得られた。同時に、陸上競技場の広さで競技の実施が開催承認条件としてうたわれた。また、競技方法も、世界はマッチプレーの方向に進んでいたが、全高ア専は、見て楽しく選手自身の緊迫感を考慮した。すなわち、各ゾーンごと4チームから2チーム勝ち上がるという予選方法を取り入れた。栃木・富山と同方法で進める中で、大会を見に来ていた他国の関係者から、「この方法は面白い。初めから敗者復活戦が組み込まれていて、むしろオリンピックの形式より良いのではないか。」という評も得た。

8月、第2回ジュニア世界選手権大会（フランス・モリエッツ）に高校生を派遣。日本チーム総務に關政敏（全日ア連）、男子コーチに立入彰修（滋賀・北大津高）、女子コーチは五百蔵正雄（兵庫・甲南女子高）であった。選手は男子は、木村正純（神奈川・横浜高）、阿久津義和（栃木・馬頭高）、宮子祐輔（石川・桜丘高）丹治慶和（福島・福島）の4名で、団体は1回戦敗退で11位。個人でも木村の33位が最高に終わった。女子は、後藤和美（埼玉・大宮開成高）、山岡麗子（神奈川・横浜学園高）、橋場美由紀（青森・三本木農高）、岩崎友加（兵庫・甲南女子高）の4名で、団体は5位で、2回戦敗退だった。

(7)平成6年度(1994)

4月、桑ヶ谷森男（国際基督教大学高校長）を副部長に選出。

8月、第3回ジュニア世界選手権大会（イタリア・ロンチェグノ）に派遣。チームキャプテンは立入彰修（滋賀・草津東高）、男子コーチに池田幸一（神奈川・横浜高）、女子コーチは五百蔵正雄（兵庫・甲南女子高）であった。男子は、園田孝史（神奈川・横浜高）、桜井隼（東京・東京工業高）、角野良太（神奈川・横浜高）、吉田慶二（奈良・奈良高）の4名で団体5位。女子は、横田知子（大分・大分東明高）、今福織江（大分・大分東明高）、八木かおり（京都・兎道高）、西端摩耶（兵庫・甲南女子高）の4名で決勝ラウンド1回戦敗退。

「会報」には、「ＪＯＣチームドクターから見たアーチェリー」として特別寄稿してもらい、河野一郎氏（ＪＯＣチームドクター）から医学的な面からの指導法、注意点などを指摘、またメンタルな面の重要さなどの内容について享受した。

3月全国高等学校アーチェリー選抜大会（以下、高校選抜大会）をインドア大会に変更する。高校選抜大会は、昭和58年（1983）第1回を愛知県で行い、現在（平成10年3月）で16回を終えている。アウトドアの大会を1回から11回まで実施し、この年から3年間、「長浜ドーム」での開催であった。15回からはもとのアウトドア大会に戻った。選抜大会の時期が3月下旬ということで、天候に左右されやすく大会開催地が容易ではないこともあって、全天候形開催をはかってのインドア開催であった。しかし、3年実施してみて、開催地の固定化が地元の負担増となり、正式記録として認められないこともあり、アウトドアに戻った。

(8)平成7年度(1995)

4月吉田悠記（愛知・愛知高校長）を副部長に選出。

8月、第111回全米アーチェリー選手権大会（アメリカ・オハイオ州）に高校生を派遣。チームリーダーは立入彰修（滋賀・草津東高）、男子コーチに池田幸一（神奈川・横浜高）、女子コーチは五百蔵正雄（兵庫・甲南女子高）であった。男子は、村越永人（福島・田村高）、霜村隆史（神奈川・横浜高）、女子は、小出美沙都（大分・明星高）冨島優（兵庫・甲南女子高）の計4名であった。

インターハイの夜を利用して、「技術セミナー」を開催しているが、今回は金亨鐸氏（台湾国立体育専門大学監督・元韓国女子アーチェリーナショナルチーム監督）の「24年間のコーチ生活を通して」という題で講義してもらい、「会報」には「講義ノート」を掲載した。インターハイに参加できなかった全国の顧問・高校生に是非知ってもらいたい内容である。

(9)平成8年度(1996)

8月、高校選手権大会の競技形式が新しくなった。長距離（90・70、70・60m）と今までの短距離（50・30m）各18射で予選ラウンドを行い、24チームを残して、決勝ラウンドは70m、トーナメント方式でおこなう。オリンピックに準じた改定であり、国体や大学選手権ではまだ取り入れてない方法で、全高ア専が柔軟に世界に対

応しようとする前向きな姿勢の表れである。

7月、第4回世界ジュニア選手権大会（アメリカ·カリフォルニア州）に選手6名を派遣する。世界ジュニアは2年に1回行われる若人の祭典である。チームリーダーは水上英彦（静岡·富士見高）、チームコーチは穂苅美奈子（国際基督教大学高）であった。選手は、男子、土井隆嗣（兵庫·滝川高）、高松大輔（三重·三重高）、山縣朝太郎（静岡·富士見高）女子は、田原雅代（愛知·岡崎東高）、川内紗代子（福岡·折尾高）、上原絵里奈（京都·兎道高）であった。女子団体は4位、男子は予選落ち。個人では高松の47位が最高で、女子は川内の11位が最高だった。

数年続けている「会報」の技術セミナーは、高柳富士丸氏（愛知医科大学運動療育センター講師·日本体育協会スポーツドクター）の「アーチェリー競技の運動学」を掲載。また、戸田敦大氏（広島県立総合体育館）の「基礎トレーニングの必要性について」も掲載。ますます充実してきた。

3月、高校選抜大会を長浜ドームから、茨城の波崎に会場を移す。

4月、「アーチェリーハンドブック」発行開始。「ハンドブック」の配布対象は登録高校生で、主な内容は、年度内に行われる競技日程、アーチェリールール、アーチェリー用語解説、服装規定、練習カレンダー、日本記録·高校記録·国体記録など。初心者の為の必携ハンドブックとして編集してあり、無料配布である。

(10)平成9年度(1997)

4月、田中康彦（愛知·愛知高）を第3代専門委員長に選出。

全高ア専でインターネット上にホームページを開設。全国の高校生アーチャーや顧問の先生方と双方向のコミュニケーションを目指すのが目的である。

（http://www.asahi-net.or.jp/~si7o-sk/ ）

本年度のジュニアの強化育成事業の海外遠征は、第2回韓国国際競技大会に4名を派遣。日本ジュニアチームコーチに水上英彦（静岡·富士見高）があたる。選手は、原口航（熊本·東海大第二高）、牧山雅文（佐賀·厳木高）、坪内美沙（兵庫·甲南女子高）、板井那奈（大分·大分東明高）の4名。

「会報」の「技術セミナー」は、第6回全国高校指導者研修会より「トップを継続していくための秘訣は何か」と題して、松下和幹氏（自衛隊）に講演頂いたものを、文字化して掲載した。

「ランキング表」は昭和61年（1986）に発行を開始し現在12集まで発行済み。「記録収集·保存は組織の歴史であり、同時に将来的な発展の最も大きな原動力となるべきものである」という趣旨のもと、2種別12種目について競技者のランキングを作成し、毎年度末に発行している。有料。

「会報」は、昭和62年（1987）から総務委員会が編集、全高ア専が発行し、現在12号を発行済み。内容は、要覧的な部分では沿革、専門部役員名簿、ブロック役員名簿、専門部部長名簿、専門部委員名簿、登録学校一覧、登録数一覧、栄光の歩み（選手権·選抜優勝校、氏名）、各種記録、専門部規約と、記録的な部分である海外派遣報告、インターハイ優勝校のページ、学校·部紹介のページ、技術セミナー、広報などで構成されている。

3　将来に向けて

現在の全高ア専は組織化も方向性もほぼ確立した。残された問題は、如何に競技力と選手·指導者の資質向上に精力を集結するかということと、小子化の影響による競技人口·部員の減少を如何にして回復させるかにある。競技力向上には各都道府県において47方式の強化策があるはずで、これを一つに集結し強化マニアルとし、我々の組織で育った過去のメダリストや日本代表選手といった先生方の力を借り、全体を牽引し全体の力をまとめて強化すれば、かなりの成果を上げられる。したがって、優秀な選手·指導者の人材育成方策、現場指導に即応した科学研究の放出、諸外国の動向や最新情報の公開などを通し、それぞれを統括して組織全体がパワーを発揮する一貫した体系への変革が急務であると痛感する。

韓国の朴氏や金氏は「全高ア専は恐ろしく強い組織力を持っている」と言っている。競技人口の減少に関しては難しい点もあるが、スポーツの必要性という点から、生命力を高め生きる力を伸ばし与えることが昔も今も時代の要請であり、私たちのかかわるアーチェリーは見かけはソフトだが、「あたま·からだ·こころ」を練ったり鍛えたりするに望ましい種目であると思う。

《事務局》
〒468-0014 名古屋市天白区中平2-901
東海女子高校内
TEL 052（803）7432
FAX 052（804）0647

創　　立：平成5年

加盟校数	312校
部員数	2,184名

〈沿革概要〉

なぎなたという呼び方は、852年ほど前の「本朝世紀」という書に、源経光が「兵伏として所持していたものを奈木奈多と号す」とあり、この頃から世にあらわれたと推察されるのである。が、一般になぎなたの出現は、天慶の乱の頃に武器として使用されていたようで、その頃は「長刀」という文字がつかわれ、その後「人馬を薙ぎ払う」という意味から「薙刀」の文字を用いるようになったのである。

従来、合戦の武器として主に男子が使用していたが、鉄砲の伝来などで戦闘の様式がかわり、僧兵や医師、婦女子などの専用する武器に移行してきたのである。

その後、江戸時代からは身を護る「たしなみ」として特に武家の子女は必ず修練したものである。そのことがつづき、明治28年来「武術が武道」として改められたときも人間形成の目的で女子には学ぶところが多かったのである。

しかし武道は有史以来二度ほど廃絶の厳しい局面に立たされ、その一つが第二次世界大戦の敗北による「武道禁止令」の施行の時であり、昭和20年（1945年）11月6日付の文部省通達により、学校で学ぶことが一切できなくなったのである。

しかし、斯道を愛好し、伝統文化としての継承を強く熱望する人々の英知と努力によって危機を克服し、多くの困難をのりこえて、昭和28年（1953年）以来、従来の薙刀をスポーツとしての性格と内容をもったものに研究しなおし「新しいなぎなた」ができたのである。

そして、昭和30年（1955年）5月4日に「全日本なぎなた連盟」が発足し、初代会長に元侯爵山内禎子氏が就任、6月には連盟の名簿が作成されたのである。

昭和31年（1956年）には19回にわたり研究討議された「学校なぎなた」が、指導教材として完成し、これを「女子体育教材」として採用されるよう文部省に提出陳情したのである。長い時間と多くのエネルギーを費やしたその努力がみのり、文部省は昭和34年（1959年）12月24日、中学校以上の学校のクラブ活動として、又、昭和42年（1967年）3月29日高校以上の正課教材として採用してもよいと通達を出し、現在までしっかりと学ばれてきたのである。

その間には昭和35年（1960年）7月に文部省共催による「第1回なぎなた指導者講習会」を仙台にて開催し、その後も毎年指導者の養成に努力し、昭和57年（1982年）8月の講習会からは「学校体育なぎなた指導者講習会」として実施し、教職員の指導者の養成にあたり、「学校なぎなた」の正しい養成に尽力したのである。

なお、昭和39年（1964年）10月3日の理事会にて「薙刀」を「なぎなた」という文字にかえて用いることが決定し、現在にいたっているのである。

又、昭和53年（1978年）6月に「全日本なぎなた連盟」は、アマチュアスポーツの競技団体として「日本体育協会」に加盟し、国体参加にむけて国体推進委員会を設置し、今後の対策にとりくんだのである。そして、昭和57年（1982年）島根県にて開催された「くにびき国体」に公開競技として参加でき、翌、58年（1983年）群馬県下で開催された「あかぎ国体」より正式種目としてみとめられ、高松宮殿下をおむかえし、新町住民体育館にて開催されたのである。このとき国体初参加種目の「なぎなた」が記念切手として発売され、初参加にふさわしい記念品ができ、その上、新町住民体育館玄関脇には、「国体のなぎなた競技はここから始まった」という記念碑が、新町商工会議所の方々によって建てられたのである。

〈全国大会のあゆみ〉

全日本なぎなた連盟が昭和30年に発足した翌年、昭和31年（1956年）4月29日に「第1回全日本なぎなた選手権大会」が宮城県球場特設道場にて開催されて以来、毎年開催県をかえ本年第43回をむかえるが、この大会の参加者は高校生や大学生ではなく、一般の人たちだったのである。が、「学校なぎなたの正しい普及」を目的に、全日本なぎなた連盟主催の「第1回全国学生なぎなた大会」が、昭和37年（1962年）8月20日香川県琴平高校体育館にて開催され、累年今日に及ぶのである。

当時は大学の部、高校の部を同時期、同会場で実施していたが、昭和43年（1968年）の第7回より「全国高等学校なぎなた選手権大会」と名称をかえ、今年で第37回をむかえるのである。又、なぎなたを正しく普及、発展させることを目的として、昭和46年（1971年）7月26日より「第1回なぎなた演技大会」が加わったのである。その後「形」作成委員会が何度かもたれ、昭和52年5月23日「全日本なぎなた連盟の形八本」が完成したのである。

そして高校生は八本のうち、一本目から五本目までの形より三本をその年によりきめられ、大会にのぞみ現在大会は、団体の部、個人の部、演技の部と3つの部門にて高校生たちが、あつい戦いをくりひろげているのである。

この間、高体連加盟にご尽力くださった今はなき小西静子前理事長が、昭和50年（1975年）11月21日、多年にわたるなぎなた界の功績により、藍綬褒賞を受けられ、その後も物心両面において、なぎなたに対して熱い情熱を注がれ、数々の業績を残されたが、平成3年（1991年）9月20日ご逝去という非常に悲しい事実に遭遇したのである。

生前、前理事長は高体連加盟が執念でその実現のため「全国高等学校なぎなた選手権大会」を文部省や高体連本部の方々のご理解をいただこうと昭和54年（1979年）より開催会場を東京の「日本武道館」で毎年行うことを決定したのである。

〈組織の推移〉

昭和60年（1985年）8月の第24回全国高等学校なぎなた選手権大会の折、故・小西静子（財）全日本なぎなた連盟前理事長より「今後の組織運営は、教員の皆さんにおまかせしたいので長を人選してほしい」と申し入れがあり、又「競技団体での自主運営が全国高体連加盟の必要条件」との全国高体連よりの助言の中、部長を棚田直彦先生（元、都立東高校校長）におねがいし委員長は奈良県高体連なぎなた専門部委員長藤川重夫先生（元、桜井女子高校教諭）が副委員長に大阪府高体連なぎなた専門部委員長の伊東道純先生（元、東大谷高校教諭）が承引され、両先生を中心とする執行部のご尽力で、（財）全日本なぎなた連盟内に事務局をおく、「全国高等学校なぎなた部」が発足し最初の一歩をふみ出したのである。

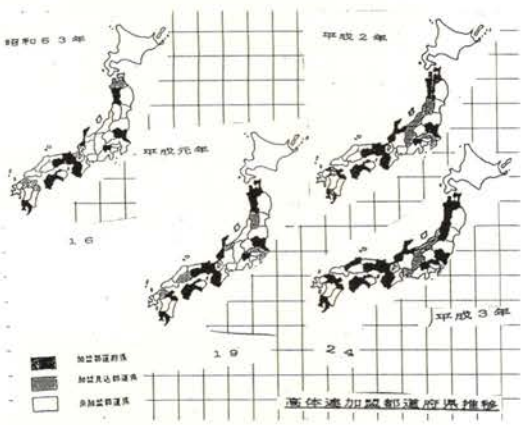
組織はほとんど藤川先生の発案のもとに確立され全国を全国高等学校体育連盟と同様の九ブロックに分け、それぞれに地域の委員を選出し、又その中で常任委員を選出するという形を採用し、初期の動きは誠に円滑に進んだのである。

だが、この時点で各都道府県の高体連への加盟数は「12府県」、全国高体連への仲間入りの条件「30」の半分にも満たない状況で前途多難だったのである。

しかし、故・前理事長より加盟についての熱意を何度となくお聞きし、なぎなた部の執行部の間にも加盟を是非実現したいとの意気ごみが湧き、翌昭和61年（1986年）8月10日には全国高等学校なぎなた部規約をつくり、各都道府県へ高体連加盟を熱心に働きかけ

昭和61年には茨城・和歌山が…14

昭和62年高知…15
昭和63年石川…16
平成元年青森・福井・大分…19
平成2年富山・福岡…21
平成3年山形・埼玉・島根…24



と、つぎつぎと加盟県をふやしたのである。そのかげには、昭和63年（1988年）（財）全日本なぎなた連盟普及委員会の招集がかかり、高校なぎなた部の運営とともに両輪の輪のごとく普及の戦略を練ることになり、特に普及委員会のメンバー故・福原アヤ子、飯国京子両先生の組織作りにかける情熱は本当に素晴らしく常々刺激をうけながら指導をあおいだのである。

飯国先生は地元で一校であるにも関わらずテレビ局に働きかけ、なぎなたを放映してもらったりて教育委員会の何度も足を運び交渉されたことは執行部一同脱帽させられたのである。

そして平成3年の「なぎなた部総会」にて来年度より自主運営を大前提に、競技役員については、なぎなた部役員、主管地の教職員、並びに主管地のブロック内の教職員を中心に構成し、審判員はなぎなた連盟より推せんしていただくということに決定したのである。

その間には、前理事長の高体連加盟への執念をうけつがれ平成3年（1991年）9月29日に就任された現・河盛敬子理事長が「高校の先生方の自主運営を」とあたたかく見守っていただき、多大なご協力と励ましのなかで会場を13年間続いた「日本武道館」から「大阪府立体育会館」に移し、平成4年（1992年）7月30、31日「第31回全国高等学校なぎなた選手権大会」を高等学校の教職員の手で開催したのである。

そしてついに、

平成4年愛知・岐阜・三重・徳島・熊本・佐賀と加盟を承認していただきその数「30」としたのである。そのかげには、委員長伊東道純先生（元東大谷高校教諭）が平成2年度より、東海ブロックへ何度となく足を運ばれ、各県の高体連加盟早期実現にむけての意見交換をされ、該当県の高体連への働きかけをしてくださった功績を忘れてはならないのである。

〈全国高体連加盟への働き〉

加盟数「30」に到達した平成4年（1992年）9月24日書類を整え神田護会長（元小岩高校校長）伊東道純委員長（元大谷高校教諭）、徳地昌代常任委員（現都立第五商業高校）の3名で全国高体連事務局へ加盟申請を提出に。

この時全日本なぎなた連盟常任理事大井幸枝先生も同道してくださり、お口添えいただくと共に文部省へのご挨拶にもごいっしょしていただき心強いものがありました。そして、この年の11月6日の全国高体連理事会の席上にて加盟を承認していただき、平成5年度より正式加盟が認められここに、「全国高等学校体育連盟なぎなた専門部」が誕生し、事務局を全日本なぎなた連盟内から部長の所在校府立豊中高校においたのである。

思えば、加盟への道程は長く険しいものでしたが毎年のように全国高体連加盟申請の資料を作成し、4月当初に事務局まで足を運んでくださった伊東委員長をはじめ竹下裕伸（元鹿児島純心高校教諭）徳地昌代（現都立第五商業高校教諭）、三浦利枝子（現和歌山信愛女子高校教諭）、佐藤知尚（現文化短大杉並高校教諭）の3名の常任委員のご尽力は忘れてはならないものである。そして平成5年7月に第1回専門委員長会議が全国33都府県（その後、東京・鳥取・新潟が加盟）の専門委員長の参加のもと大阪府立体育会館の会議室にて開催され冒頭から加盟を果たした喜びの言葉で始まったのである。

又、この年の全国高体連理事会の席で、平成9年度の全国高等学校総合体育大会の正式種目として参加決定という、うれしいニュースがはいったのである。

9年度までの3年間は会場を大阪府立体育会館、鳥取県岸本町立体育館、大阪・堺市体育館とかえ高等学校の教職員の手で企画運営をして初参加の京都総体にむけての準備にあたったのである。

特に審判員はなぎなた連盟からの推薦制だったのを、なぎなた専門部各ブロックからの推薦制とし、常任委員会で21名を決定，研修会や講習会を年3回実施しその養成にあたったのである。誰もが待ちにまった平成9年度京都総体があと1カ月とせまったとき、なぎなた会場に「皇太子殿下同妃殿下の行啓」との情報が入りなぎなたにとっては第1回大会が記念すべき大会になる喜びと共に緊張感ただよう1カ月だったのである。

初参加の京都総体は、木津町の木津中央体育館にて平成9年8月2日、行進のファンファーレによって幕があがり、選手達の行進を感無量のおもいで見守っていたのは常任委員はもちろんのこと、おまねきした歴代の部長、副部長そして委員長の方々だったことはいうまでもないのである。

三日間の競技は、けが人もなく心配されたハプニングもなくスムーズな運営のもと8月4日（月）午後4時幕がおりたのである。

その上、皇太子殿下同妃殿下行啓という大変な名誉をいただき、30分間という決められた時間の中、熱心に選手達の試合をご覧いただきおかえりの際雅子妃殿下におかれましては競技役員や補助生達にねぎらいのお言葉をかけてくださり、緊張感ただよう会場になごやかな、ほっとした空気が流れ会場内の全員が最高の気持ちでお見送りでき、まさに初参加にふさわしい記念となったのである。

又、NHKテレビが1時間にわたり“なぎなた競技”を生中継で全国の茶の間に準決勝、決勝戦の戦いぶりを三浦常任委員の解説をまじえ、わかりやすく放映してくださったことは、なぎなたの普及に「効果、大」との喜びの声があがったのである。

京都総体終了後、ただちに反省会をもった常任委員たちは「運営組織の一層の強化」を課題に香川総体にむけて再び動きだしたのである。

〈あたらしい目標〉

京都総体を無事終え、長年の悲願が果たせたことを率直に喜びたい反面、全国47都道府県全部が大会の参加できず45都府県にとどまったことが気がかりである。北海道と長崎県がいまだ高体連に未加盟で本年度準加盟で全国総体に参加することもほど遠い現状の中、執行部では北海道、長崎県の2つを準加盟にもっていけるよう働きかけることと、正式にブロック大会がもてない東北・北信越ブロックをブロックの高体連加盟までもっていけるよう努力することを目標に努力したいのである。

そして、「なぎなた」が単なる競技に終始することなく「なぎなた」という武道のもつ本来の精神・理念である「人間形成」を目標として全国高体連なぎなた専門部は活動していくつもりである。

参考資料

・財団法人
全日本なぎなた連盟30年史
・なぎなた専門部広報

回	会　場　名	期　日	団体優勝校	個人優勝者	演技優勝組
1	香川県琴平高校A	S37.8.20	琴平高校A	和田真由美 (桜塚高校)	
2	東京都新宿区立体育館	S38.8.8	大阪チーム	加藤　静子 (東海女子高校)	
3	京都市岡崎公会堂	S39.8.9	鎌倉高校	池田　圭子 (鎌倉高校)	
4	福岡市九電記念体育館	S40.7.29	京都精華女子高校	水野　友代 (富田林高校)	
5	横浜市文化体育館	S41.7.31	富田林高校	左座美恵子 (都立深川高校)	
6	香川県立体育会	S42.8.1	鳴尾高校	左座美恵子 (都立深川高校)	
7	愛知県体育館	S43.8.4	初芝高校	松本都志美 (初芝高校)	
8	宮城県スポーツセンター	S44.8.5	聖カタリナ女子高校	高村二三四 (初芝高校)	
9	神戸市立中央体育館	S45.7.26	鹿児島県純心女子高校	脇田　順子 (聖カタリナ女子高校)	
10	鹿児島県体育館	S46.7.25	八代第一高校	桑原みどり (伊集院高校)	
11	栃木県体育館	S47.7.30	鹿児島純心女子高校	福徳郁代 (純心女子高校)	
12	大阪市立中央体育館	S48.7.29	國學院大學栃木高校 八代第一高校	宮田カズノ (近大付属豊岡女子高校)	川崎洋子・西谷久美子
13	島根県立武道館	S49.8.4 ～5	鹿児島女子高校	成田登代子 (近大付属豊岡女子高校)	新谷京子・前岡弘子 (初芝高校)
14	神戸市立中央体育館	S50.8.2 ～3	八代第一高校	早川未美 (八代第一高校)	山中美智子・川島淳子 (初芝高校)
15	秋田県立体育館	S51.8.1 ～2	松山東雲高校	坂巻幸子 (國學院大學栃木高校)	山中美智子・川島淳子 (初芝高校)
16	鹿児島県体育館	S52.8.7 ～8	初芝高校	宮崎恵美子 (八代第一高校)	吉田奈保子・山中美智子 (初芝高校)
17	静岡市民体育館	S53.8.6 ～7	秋田和洋女子高校	川辺浩美 (秋田和洋女子高校)	古川徳子・岡崎まさ子 (中村学園女子高校)
18	日本武道館	S54.8.17 ～18	鹿児島純心女子高校 秋田和洋女子高校	佐村美穂子 (中村学園女子高校)	野呂和香子・三木元美
19	日本武道館	S55.8.12	松山東雲高校	高橋智子 (愛知県立五条高校)	戸田　泉・中村幸子 (伊丹市立伊丹高校)
20	日本武道館	S56.8.11	松山東雲高校	内村喜久代 (鹿児島純心女子高校)	中村清美・三船美香 (中村学園女子高校)
21	日本武道館	S57.8.10	鹿児島純心女子高校	岡　美幸 (香川県立農業経営高校)	阿比留美香・三船美香 (中村学園女子高校)
22	日本武道館	S58.8.9	東大谷高校	湯浦道世 (鹿児島純心女子高校)	八尋鈴江・三船美香 (中村学園女子高校)
23	日本武道館	S59.8.13	岡山県立勝間田高校	重平明美 (岡山県立林野高校)	寒川秀美・中川優子 (千葉経済高校)

回	会場名	期日	団体優勝校	個人優勝者	演技優勝組
24	日本武道館	S60.8.12	初芝高校	知念一美 (沖縄県立知念高校)	知念一美・城間真弓 (沖縄県立知念高校)
25	日本武道館	S61.8.11	沖縄県立知念高校	福永ひろみ (鹿児島純心女子高校)	伊藤貴代美・土橋祐子 (山梨県立身延高校)
26	日本武道館	S62.8.10	沖縄県立知念高校	土橋祐子 (山梨県立身延高校)	伊藤貴代美・土橋祐子 (山梨県立身延高校)
27	日本武道館	S63.7.25	岡山県立勝間田高校	吉原美由紀 (中村学園女子高校)	森原芳子・初鹿野多恵 (鳥取県立鳥取西高校)
28	日本武道館	H1.7.25	岡山県立勝間田高校	野間はるか (愛媛県立北条高校)	松尾直美・三輪美紀子 (香川県立琴平高校)
29	日本武道館	H2.8.13	石川県立金沢女子高校	杤元陽子 (鹿児島純心女子高校)	許斐陽子・上野美紀 (中村学園女子高校)
30	日本武道館	H3.8.12	岡山県立勝間田高校	比嘉里美 (沖縄県立知念高校)	柳沢恵子・草山圭子 (清教学園高校)
31	大阪府立体育会館	H4.7.30 ～31	清教学園高校	服部雅子 (鹿児島純心女子高校)	三輪悦子・福屋訓子 (香川県立琴平高校)
32	大阪府立体育会館	H5.7.29 ～30	香川県立琴平高校	三輪悦子 (香川県立琴平高校)	三輪悦子・福屋訓子 (香川県立琴平高校)
33	大阪府立体育会館	H6.7.28 ～29	岡山県立勝間田高校	竹宮慶子 (愛媛県立北条高校)	勝男英恵・夾嶋浩子 (中村学園女子高校)
34	鳥取県岸本町民体育館	H7.8.8 ～10	岡山県立勝間田高校	本田優子 (愛媛県立北条高校)	中平由美・前田富子 (伊丹市立伊丹高校)
35	堺市立大浜体育館	H8.7.26 ～28	清教学園高校	堀田涼子 (香川県立琴平高校)	知念孝子・糸数珠江 (沖縄県立知念高校)
36	木津町中央体育館	H9.8.2 ～4	清教学園高校	林田直子 (熊本県立熊本西高校)	中島加詠・貴島政英 (伊丹市立伊丹高校)

研　　究　　部

《事務局》
〒331-0061 大宮市西遊馬1601
県立大宮武蔵野高校内
TEL 048（622）0181
FAX 048（620）1903

年度	部　長	委員長	記　事（事務局）
58	松原　久三		理事長兼任
59	〃		〃
60	藤川　侃三		理事長兼任
61	〃		〃
62	〃		〃
63	京増　敏朗	木曽　滋	千葉県
元	〃	〃	〃
2	〃	〃	〃
3	深澤　孟雄	深沢　五男	山梨県
4	跡部　義幸	〃	〃
5	菅野　清	江原　隆起	群馬県
6	〃	〃	〃
7	小林　惺	福田　富夫	栃木県
8	〃	〃	〃
9	松本　泰昌	古川　修	埼玉県
10	栗島　裕	〃	〃

1　沿　革

高体連の組織として研究部門の充実が叫ばれ、昭和42年（1966年）2月17日に東京の薬業会館で第1回全国高等学校体育連盟研究発表会が開催された。この研究大会の発展とともに研究部発足の機の熟したのが昭和58年であった。昭和57年2月に初めて東京を離れ、和歌山で第16回大会が2日間の日程で開催され一つの転機を迎えた。2日間開催、開催地の全国持ち回り等、規模が大きくなるに従って研究部の独立の気運が高まってきて「全国高等学校体育連盟研究大会開催基準要項」を作成し、「研究部規約」が施行されたのが昭和58年（1983年）であった。昭和63年には、全国高体連理事長が兼任していた部長を新たに選出し、また研究部の事務局も部長とともに移り、名実ともに独立した。

（詳しくは「全国高体連40年史」”全国高体連研究大会概要”を参照ください。）

2　10年の歩み

研究部が実質的に発足したのはこの10年間といえる。研究大会の充実発展に伴い、研究部の組織運営も充実してきた。実質的な初代部長京増敏朗の努力で基礎固めが行われた。事務局と部長は関東高体連の事務局とともに持ち回りとなり、研究大会は開催県の実行委員会が中心となって運営を行っている。各都道府県研究部委員長会議が年1回、研究大会の前日に開催されている。全国8ブロックの代表が集まる全国高体連研究部常任委員会も組織されている。

研究部の10年間の歩みは、そのまま研究大会の歩みと重なり充実してきたといえる。研究部の独立及び組織作りに尽力された元研究部長、京増敏朗（千葉）が第25回広島研究大会（H. 2年度）の折り基調報告で次のように述べている。研究部及び研究大会の問題点課題等、将来に向けた提言がなされ、一つの区切りとし、進むべき方向となったので、多少長くなるが要旨を紹介し、10年間のまとめとしたい。

『高体連の発展のために、研究部は何を目的とすべきか。そしてこの研究大会をどのようにすべきか。研究部の目的は規約第3条「高等学校教育活動の一環として、全国高等学校体育連盟の目的を達成するため高等学校の部活動に関する調査ならびに科学的研究を行い、高等学校体育・スポーツの発展に寄与することを目的」としている。要するに、部活動に関する調査、研究です。したがってこの大会も部活動の研究発表というものが主となっています。運動部の存在と同時に課題も存在しています。部活動を推進しようとすると同時に課題も解決しなければなりません。そのために研究大会の果たす役割は大きいものがあります。主題となる部活動の研究については三つの面から迫っていこうとしています。一つは普及と振興、次に安全、もう一つは競技力の向上の三つです。分科会での発表数は競技力の向上が一番多く安全が少ないのが現状です。

運動部活動の効用は何か。おおざっぱにいって一つは高い水準に挑戦することができる。次にスポーツの楽しさや喜びというものを味わうことができる。そして三つめには好ましい人間関係を育成することが期待できる。以上

の三つのことが基本的には教育的効果があるといわれています。このような効果を期待し、豊かな学校生活を経験させることのできる教育的意義を我々部活動関係者だけでなく、社会的にも自他共に認めて、各学校で進めてまいったわけです。

しかし最近、特に問題になっていることがあります。運動部に所属する生徒の減少という点です。いろんな研究発表を見ましても解決をしたという発表はありません。この問題には決め手はないように思います。ただ、発表の結論、まとめ等を見ていると共通しているものがあります。それは生徒の側から見ると、気持ちよく部活動をやりたい、やらせてもらえれば良いという意識です。このあたりに指導者との間に価値観の差が見られると言う発表が多いようです。価値観の差、多様化といったものに対応するために、楽しみの部を作ればよいかというとそうでもない。トップを狙う選手層の他に、スポーツを楽しむという生徒たちが共存できるシステムというものがあれば大変に良いと思いますし、それに対しての具体的な指導法というものがありましたら、これは高体連にとって大変新しい分野を見いだしたことになると思います。我々高校の指導者は日本のスポーツ全体を眺めて、学校体育は何をするのがよろしいか、部活動は何を目指すのかもう少し広い目で見ることが現在では必要ではないかと思います。

運動部活動は学校教育、学校体育の範疇であり、その目的も学校体育の目的と同様です。生涯スポーツと体力の向上の観点が重視されています。我が国のスポーツ水準の向上に大きく貢献している点については異論のないところですが、これからは競技力の向上はもとより生涯スポーツの基礎を培う役割に大きな期待が寄せられています。

いろいろな課題が古くからありますが、簡単に解決はできていません。根本的解決は「高校教育の一環である」という大切な筋を通すこと以外に基本的にはないかと思います。少しずつ理想には向かっていますが、解決しましたという問題はありません。それを解決するというのは現在においては大事な筋を通すことしかないのではないかと思います。

最後に研究部の課題についていくつか申し上げます。一つは組織作りです。各県の研究部が内容のある組織にしていただきたい。いわゆる兼任のところが半分くらいあるようです。組織を独立して、しかも別の人間が部長、委員長、事務局長というようなふつうの形にしていただきたい。もう一つは各運動部の顧問は体育の先生ばかりではないわけですから、高体連と授業の保健体育の研究会のようなものとを分けて考えていただきたい。したがって研究部の委員の中には、体育以外の教科の先生が入って当然です。高体連の組織であるということを位置づけませんと本当の発展にはつながっていきません。「高体連＝体育の先生」という考えはもう通用しません。これが意外に発展を阻害しております。いわゆる高体連というのは高校生全員、そこに指導する先生方全員です。

二つ注文させていただきました。よろしくお願いしたいと思います。部活動の振興に一生懸命とにかく尽くそうじゃありませんか。』

（原文は「第25回研究大会報告書」を参照ください）

全国高体連研究大会概要一覧

年度	回	開催県	発表数	講演者
昭41～55	1～15	東京		
56	16	和歌山	14	山口　良治
57	17	東京	12	小野　三嗣
58	18	大阪	14	監物　永三
59	19	熊本	24	森　重隆
60	20	神奈川	17	山下　泰裕
61	21	愛知	22	室伏　重信
62	22	高知	19	蔦　文也
63	23	岩手	21	加藤　廣志
平元	24	福井	15	前島　孝
2	25	広島	19	松本　育夫
3	26	北海道	19	三浦雄一郎
4	27	京都	14	平尾　誠二 岩永　澄道
5	28	福岡	17	宗　茂
6	29	千葉	18	奥寺　康彦
7	30	静岡	18	室伏　重信
8	31	愛媛	21	山本　巌
9	32	秋田	20	福島　幸雄 加藤　廣志

研　究　部　規　約

第一章　名称及び事務局

第１条　本部は、全国高等学校体育連盟研究部と称する。

第２条　本部の事務局を関東高等学校体育連盟事務局当番県におく。

第二章　目　　的

第３条　本部は高等学校教育活動の一環として、全国高等学校体育連盟の目的を達成するため、高等学校の部活動に関する調査ならびに科学的研究を行い、高等学校体育・スポーツの発展に寄与することを目的とする。

第三章　事　　業

第４条　本部は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

１）全国研究大会の主管
２）各種審議会の開催
３）調査研究の指導、奨励
４）その他本部の目的達成に必要な事項

第四章　組　　織

第５条　本部は都道府県高等学校体育連盟研究部を以て組織する。

なお、都道府県高等学校体育連盟研究部は、地域毎に連合体を組織することができる。

第五章　委　　員

第６条　委員は都道府県高等学校体育連盟の研究部長及び同委員長をあてる。

第六章　役　　員

第７条　本部に下記の役員をおく。

１）部長１名
２）副部長若干名
３）常任委員９名
４）監事２名

第８条　部長及び副部長は、本部の委員の中より選出する。部長は本部を代表し会務を統括する。副部長は部長を補佐し、部長事故あるときはその職務を代行する。

第９条　常任委員は、委員の中より各ブロック１名ずつ選出する。

第10条監事は委員会において推薦し、部長はこれを委嘱する。監事は会計を監査し委員会に報告する。

第11条　役員の任期は２カ年とし、再任を妨げない。補欠によって就任した役員の任期は残任期間とする。

第七章　会　　議

第12条　委員会は委員をもって構成し、年１回全国研究大会開催時に部長が招集し必要事項を審議決定する。

第13条　常任委員会は役員をもって構成する。常任委員会は部長が招集し、必要事項を審議する。

第14条　委員会及び常任委員会は、総数の２分の１以上（委任状を含む）の出席をもって成立する。審議については出席者の過半数をもって議決する。

第八章　会　　計

第15条　本部の経費は、負担金、寄附金等の収入によってこれにあてる。

第16条　本部の会計は毎年４月１日にはじまり、翌３月31日におわる。

附　　則

第17条　本規約は、委員会の過半数の議決を得なければ変更することができない。

第18条　本部の役員の選出は、全国高等学校体育連盟研究部規約内規による。

第19条　本規約は、昭和58年11月18日より施行する。

昭和62年11月11日第１次改訂
平成６年10月25日第２次改訂

全国高等学校体育連盟研究部規約内規

１．部　　長　関東高等学校体育連盟事務局当番県より選出する。

２．副 部 長　全国高等学校体育連盟研究大会開催地（前年度・本年度・来年度）より選出する。

３．監　　事　関東高等学校体育連盟事務局当番県の次期及びその次の県の委員があたる。

４．常任委員　各ブロック代表者があたる。

５．欠員の部分については補充を行う。

研究大会紀要　10年

第23回（昭和63年度）岩手県

第24回（平成元年度）福井県

第25回（平成2年度）広島県

第26回（平成3年度）北海道

第27回（平成4年度）京都府

第28回（平成5年度）福岡県

第29回（平成6年度）千葉県

第30回（平成7年度）静岡県

第31回（平成8年度）愛媛県

第32回（平成9年度）秋田県

定　　通　　制

1 沿 革

《事務局》
〒144-0051 大田区西蒲田2-2-1
都立大森高校内
TEL 03（3753）3161
FAX 03（3754）0978

＜歴代定時制通信制部部長＞

年　　度	部　長
昭和41年	石　章二郎
昭和42年～昭和43年	細井　秀虎
昭和44年	川島　　勝
昭和45年～昭和47年	若林　元典
昭和48年～昭和50年	小沢　諦寿
昭和51年～昭和52年	大野　倭一
昭和53年～昭和54年	菊野　和夫
昭和55年～昭和57年	大河原三郎
昭和58年～昭和61年	四柳　　昇
昭和62年	市川　重尚
昭和63年～平成元年	元　　和臣
平成2年～平成3年	鈴木　淑雄
平成4年～平成5年	岡本　裕之
平成6年～平成7年	池永　武昭
平成8年～	田中　正造

昭和41年　第1回陸上競技大会及び自転車競技大会が、（財）全国高等学校定時制通信制教育振興会の補助事業として、決定される。陸上競技大会は、11月13日に国立競技場にて開催。主催、（財）全国高等学校定時制通信制教育振興会、（財）日本陸上競技連盟。後援、全国高等学校長会、全国高等学校主事協会、東京都定体連、日刊スポーツ新聞社。17都道府県より205校、383名が参加。自転車競技大会は14校の参加にて、11月20日京王閣競輪場にて開催。この年、定時制体育連盟は、全国高体連に加盟合併。

昭和42年　全国高校定通教育20周年の記念大会として、第2回陸上競技大会が駒沢オリンピック公園陸上競技場にて開催。自転車競技大会は、16校の参加にて開催。この年より、全国高体連、東京都教育委員会が主催団体となり、文部省の後援行事として承認を得る。

昭和43年　第3回陸上競技大会を、8月16日～18日国立競技場で開催。自転車競技大会は11月17日西武園競輪場にて開催。この年、卓球大会・軟式庭球大会（ソフトテニス大会）が、日本自転車振興会の補助事業にて開催の運びとなる。卓球大会は、26都道府県の参加にて国立代々木第二体育館で44年1月18日～19日に開催。軟式庭球大会は東京体育館を使用し17都道府県で同日開催された。

昭和44年　第2回卓球大会を、東京体育館にて開催。軟式庭球大会は、日比谷公園テニスコートにて開催。第4回陸上競技大会は、8月22日～24日、国立競技場にて開催。第4回自転車競技大会を8月28日に後楽園競輪場で、開催。この年よりＮＨＫが後援団体として参画。

昭和45年　第1回柔道大会及び剣道大会が8月21日、日本武道館にて開催。第5回陸上競技大会、自転車競技大会開催。第3回卓球大会、軟式庭球大会開催。

昭和46年　第6回陸上競技大会、自転車競技大会、第4回卓球大会、軟式庭球大会、第2回柔道大会、剣道大会が開催される。

昭和47年　第3回剣道大会が代々木第二体育館に場所を移して、また、柔道大会は講道館

にて開催。第5回卓球、軟式庭球大会、第7回陸上競技、自転車競技大会開催。

昭和48年　第6回卓球、軟式庭球大会。第4回柔道、剣道大会。第8回陸上競技、自転車競技大会。自転車競技にロードの部設置。

昭和49年　第1回バレーボール大会を8月11日～14日東京体育館他にて開催。第7回卓球、軟式庭球大会。第5回柔道。剣道大会。第9回陸上競技、自転車競技大会。

昭和50年　第8回卓球、軟式庭球大会。第6回柔道。剣道大会は女子個人戦開始。第2回バレーボール大会。陸上競技、自転車競技大会は第10回の記念大会を迎える。

昭和51年　第9回卓球、軟式庭球大会。第7回柔道、剣道大会。第3回バレーボール大会。第11回陸上競技、自転車競技大会。

昭和52年　定通教育30周年記念大会として各大会を開催。卓球、軟式庭球大会は第10回の記念大会。

昭和53年　8種目の大会を開催。昭和54年柔道及び剣道大会は第10回の記念大会。陸上競技大会は国立競技場走路改修の為駒沢陸上競技場にて開催。

昭和55年　陸上競技、自転車競技は第15回の記念大会。バレーボール大会に労働大臣杯が寄贈される。

昭和56年　8種目の大会を開催。昭和57年8種目の大会を開催。昭和58年第10回記念大会としてバレーボール大会開催。軟式庭球大会は、天候不順の為団体戦のみを実施。

昭和59年　8種目の大会を開催。昭和60年陸上競技、自転車競技は第20回の記念大会。昭和61年自転車競技、柔道、剣道、軟式野球大会に労働大臣杯が寄贈される。

昭和62年　定通教育40周年記念として各大会開催。卓球、軟式庭球大会は、第20回の記念大会。労働大臣杯が、卓球、軟式庭球、陸上競技大会に寄贈される。

2　10年の歩み

昭和63年、第23回の陸上競技大会を国立競技場にて、42都道府県512校、1,166人の参加で8月12日（金）～14日（日）に開催。自転車競技大会は、8月16日（火）～17日（水）に10都道府県、128人の参加を得て、サイクルスポーツセンターにて開催。第21回卓球大会及びソフトテニス大会を開催。卓球大会は、代々木第二体育館にて47都道府県640人、ソフトテニス大会は、有明テニスの森コートにて37都道府県538人の参加を得た。第19回柔道大会が、8月7日（日）に講道館で、第19回剣道大会が日本武道館にて8月10日（水）に開催。第15回のバレーボール大会が記念大会として、駒沢体育館、同室内球技場及び北区滝野川体育館の3会場にて開催。功労者表彰を行い、記念誌を発刊する。

平成1年、第20回を迎えた柔道大会を講道館で開催する。功労者表彰を行い、記念誌を発刊する。同じく第20回の剣道大会は、8月13日（日）に日本武道館にて開催し、功労者表彰を行い、記念誌を発刊する。第22回の卓球大会を、8月8日（火）～10日（木）47都道府県641人の参加で、第22回ソフトテニス大会を37都道府県571人の参加で開催。第24回陸上競技大会、自転車競技大会開催。陸上競技は42都道府県、1,241人、自転車競技大会は11都道府県が参加をする。

平成2年　第25回陸上競技大会を駒沢オリンピック公園競技場にて42都道府県1,227人の参加にて8月10日（金）～12日（日）開催し、功労者表彰と記念誌の発刊を行う。第25回の自転車競技大会も同様に功労者表彰及び記念誌の発刊を行い、8月14日（火）～15日（水）に開催された。第23回卓球大会は、8月6日（月）～9日（木）ソフトテニス大会は、8月9日（木）～12日（日）に

開催。第21回柔道大会、剣道大会開催。柔道大会はこの年より女子個人戦を実施する。第17回のバレーボール大会は8月7日（火）～10日（金）の開催。

平成3年　この年より、日本自転車振興会の補助事業として、新たにバスケットボール大会とサッカー大会が開催される。第1回のバスケットボール大会は、8月2日（金）～5日（月）に、夢の島体育館、目黒区総合体育館、武蔵野市体育館の3会場にて男子44校、女子35校計771人の参加にて開催された。サッカー大会は8月10日（土）～13日（火）に清水市の協力を得て、清水市営グラウンド、日本平運動公園、長崎新田運動広場の3会場にて開催された。第18回のバレーボール大会は、場所を東京武道館、夢の島体育館、駒沢体育館にて8月7日（水）～10（土）に開催。第26回陸上競技大会、自転車競技大会、第22回卓球大会、ソフトテニス大会開催。第18回柔道大会、剣道大会が例年通り開催された。

平成4年　定通教育45周年記念大会として、各大会が実施され、卓球大会とソフトテニス大会は25周年の記念大会を迎える。

それぞれ功労者表彰と記念誌の発刊を行う。卓球大会は8月4日（火）～7日（金）まで47都道府県650人の参加で、ソフトテニス大会は8月9日（日）～12日（水）まで37都道府県531人の参加で有明テニスの森コートで行われた。第19回のバレーボール大会は新たに東京体育館を会場に加え8月7日（金）～10（月）に開催。第23回柔道大会は8月23日（日）、剣道大会は8月13日（木）に、第2回のバスケットボール大会は、8月4日（火）～7日（金）に、サッカー大会も8月8日（土）～11日（火）に昨年同様に開催された。第27回の陸上競技大会は42都道府県、1,227人の参加を得て、8月7日（金）～9日（日）まで国立競技場に場所を戻し開催。自転車競技大会は8月11日（火）～12日（水）に10都道府県の参加で開催された。

平成5年　バレーボール大会が20回の記念大会を迎え、8月7日（土）～10日（火）に東京武道館、駒沢室内球技場、東京体育館の3会場にて開催され、功労者表彰及び記念誌の発刊を行う。第3回のバスケットボール大会は、会場に新たに東京体育館を加え、駒沢室内球技場、武蔵野市体育館の3会場で男子47校、女子41校計878人の参加で開催。サッカー大会は8月7日（金）～10日（火）まで清水市で開催。第28回の陸上競技大会は40都道府県1,132人が参加し、8月13日（金）～15日（日）まで国立競技場にて、自転車競技大会は7都道府県103人の参加で開催される。第26回の卓球大会、ソフトテニス大会、第24回柔道、剣道大会も例年通り開催される。

平成6年　柔道大会及び剣道大会が25回の記念大会を迎え、それぞれ功労者表彰と記念誌の発刊を行う。柔道大会は8月21日（日）に講道館で、剣道大会は8月12日（金）に日本武道館で大会を開催。第29回の自転車競技大会は、ピストの部を日本競輪学校ピスト場に移し、7都道府県87人の参加で、8月3日（水）、4日（木）に行われた。第29回の陸上競技大会は例年通り国立競技場にて39都道府県1,089名の参加を得て8月12日（金）～14日（日）に開催。第27回卓球

大会は8月4日（木）～7日（日）代々木第二体育館で、ソフトテニス大会は8月9日（火）～11日（木）有明で、第4回バスケットボール大会は8月4日（木）～7日（日）、サッカー大会は8月5日（金）～8日（月）に、第27回バレーボール大会は8月6日（土）～9日（火）まで例年通り開催された。

平成7年　第30回記念大会の陸上競技大会は8月11日（金）～13日（日）まで、40都道府県1,106人の参加で国立競技場にて開催。合わせて功労者の表彰及び記念誌の発刊を行う。同じく30回の自転車競技大会も功労者の表彰及び記念誌を発刊し、8月3日（木）～4日（金）に8都道府県78人が参加して開催された。この年からバレーボール大会とバスケットボール大会の会場が、東京都教育委員会の尽力により現在と同じ東京体育館と駒沢体育館に会場が定着する。バレーボール大会は8月7日（月）～10日（月）に開催。第5回の記念大会を迎えたバスケットボール大会は8月3日（木）～6日（日）に男子49校、女子39校計880人にて開催。功労者表彰を行い、記念誌の発刊をする。同じく第5回のサッカー大会は、7月26日（水）～30日（日）に清水市で開催し、功労者の表彰を行う。第28回卓球大会、ソフトテニス大会、第26回柔道大会、剣道大会開催。

平成8年　第23回バレーボール大会は8月8日（木）～11日（日）に東京体育館、駒沢体育館で開催。第29回の卓球大会は46都道府県、648人で8月5日（月）～8日（木）に、ソフトテニス大会は8月9日（金）～11日（日）37都道府県、516人の参加で開催。第27回柔道大会は8月18日（日）、剣道大会は8月21日（水）に第6回バスケットボール大会は8月5日（月）～8日（木）、サッカー大会は8月14日（水）～18日（日）にそれぞれ例年通り開催された。第31回陸上競技大会は、8月9日（金）～11日（日）に40都道府県1,1115人で、自転車競技大会も8月3日（土）～4日（日）に8都道府県の参加で開催された。

平成9年　定通教育50周年記念大会として各種目が例年通り開催される。卓球大会及びソフトテニス大会は、この記念すべき年に、第30回の記念大会を迎え、功労者の表彰と記念誌の発刊を行う。それぞれの参加数は、卓球大会が46都道府県638人、ソフトテニス大会が37都道府県537人であった。第28回の柔道大会は8月17日（日）に、またこの年剣道大会は女子団体戦を初めて実施し、8月17日（日）に日本武道館にて開催をする。第32回陸上競技大会、自転車競技大会、第24回バレーボール大会、第7回バスケットボール大会及びサッカー大会が例年通り実施される。

3　将来に向けて

現在、定時制通信制教育を取り巻く環境は、少子化や統廃合などの問題で、大きく変化をしている。このような現状のなかで、参加資格や開催時期等の様々な問題を1つ1つ解決しながら現在行なわれている10種目の競技の、より一層の充実をはかることにより、全国に学ぶ定時制通信制生徒の心身共に健全な高校生の育成と、相互交流に寄与していきたいと考える。

また、来年度からはバドミントン大会が開催される。関係の方々の益々のご協力をお願いする次第である。

全国高校総体優勝者一覧

（昭和63年度～平成９年度）

陸　上　競　技

秩父賜杯

全国高等学校陸上競技対校選手権大会

□男　子

			県	点
41.	昭63	洛　南	(京都)	18
42.	平元	浜松商	(静岡)	22
43.	2	添　上	(奈良)	39
44.	3	土浦日大	(茨城)	34.5
45.	4	由良育英	(鳥取)	29
46.	5	添　上	(奈良)	49
47.	6	添　上	(奈良)	76
48.	7	浜松商	(静岡)	39
49.	8	市立船橋	(千葉)	29
50.	9	成　田	(千葉)	40.83

□女　子

			県	点
41.	昭63	埼玉栄	(埼玉)	37
42.	平元	埼玉栄	(埼玉)	34.5
43.	2	埼玉栄	(埼玉)	59
44.	3	埼玉栄	(埼玉)	74
45.	4	埼玉栄	(埼玉)	70
46.	5	埼玉栄	(埼玉)	73
47.	6	埼玉栄	(埼玉)	47
48.	7	埼玉栄	(埼玉)	42
49.	8	埼玉栄	(埼玉)	52
50.	9	添　上	(奈良)	38

全国高等学校駅伝競走大会

□男　子

			県	記　録
39.	昭63	大牟田	(福岡)	2° 05'53"
40.	平元	報徳学園	(兵庫)	2° 04'49"
41.	2	西脇工	(兵庫)	2° 05'44"
42.	3	大牟田	(福岡)	2° 06'47"
43.	4	西脇工	(兵庫)	2° 05'12"
44.	5	仙台育英	(宮城)	2° 05'25"
45.	6	西脇工	(兵庫)	2° 03'21"
46.	7	西脇工	(兵庫)	2° 05'20"
47.	8	報徳学園	(兵庫)	2° 05'08"
48.	9	西脇工	(兵庫)	2° 03'18"

□女　子

			県	記　録
1.	平元	市船橋	(千葉)	1° 09'48"
2.	2	群馬女短大付	(群馬)	1° 08'51"
3.	3	筑紫女学園	(福岡)	1° 08'28"
4.	4	市船橋	(千葉)	1° 08'26"
5.	5	仙台育英	(宮城)	1° 07'32"
6.	6	仙台育英	(宮城)	1° 07'54"
7.	7	埼玉栄	(埼玉)	1° 08'13"
8.	8	埼玉栄	(埼玉)	1° 06'26"
9.	9	埼玉栄	(埼玉)	1° 07'00"

秩父賜杯

全国高等学校陸上競技対校選手権大会

□男子

◆100m

41.	昭63	杉本	龍勇(静岡·浜松北)	10"37
42.	平元	井上	悟(大阪·清風)	10"66
43.	2	宮田	英明(群馬·東農大二)	10"49
44.	3	荒川	岳士(栃木·宇都宮東)	10"30
45.	4	中井	義人(大阪·大阪)	10"33
46.	5	海老沢雅人	(茨城·日立商)	10"45
47.	6	高橋	和裕(奈良·添上)	10"24
48.	7	西川	康秀(北海道·函大有斗)	10"50
49.	8	川畑	伸吾(鹿児島·鹿児島城西)	10"59
50.	9	宮田	貴志(福島·郡山)	10"59

◆200m

41.	昭63	杉本	龍勇(静岡·浜松北)	21"06
42.	平元	井上	悟(大阪·清風)	21"27
43.	2	宮田	英明(群馬·東農大二)	21"05
44.	3	荒川	岳士(栃木·宇都宮東)	21"68
45.	4	清原	克己(東京·東京)	21"44
46.	5	海老沢雅人	(茨城·日立商)	21"15
47.	6	高橋	和裕(奈良·添上)	20"90
48.	7	新田	幸一(千葉·市船橋)	21"23
49.	8	高橋	弘樹(福島·小高工)	21"50
50.	9	上村	貴彦(大阪·清風)	21"45

◆400m

41.	昭63	渡辺	高博(愛媛·新居浜東)	46"37
42.	平元	簡	優好(千葉·船橋北)	48"17
43.	2	小高	剛(埼玉·鳩山)	47"23
44.	3	稲垣	誠司(広島·西条農)	46"91
45.	4	安井	勇治(奈良·添上)	47"73
46.	5	安井	勇治(奈良·添上)	46"87

47. 6 島木 常道(奈良·添上) 47"18
48. 7 高橋 弘樹(福島·小高工) 47"91
49. 8 為末 大(広島·皆実) 46"27
50. 9 上村 貴彦(大阪·清風) 46"66

◆800m

41. 昭63 真保 学(新潟·三条) 1'50"79
42. 平元 木村 吉継(滋賀·高島) 1'51"55
43. 2 小野 友誠(静岡·浜松商) 1'51"39
44. 3 小野 友誠(静岡·浜松商) 1'51"55
45. 4 山崎 浩二(埼玉·八潮) 1'53"22
46. 5 小原 基幸(奈良·玉野光南) 1'51"68
47. 6 郷原 剛(島根·出雲) 1'52"03
48. 7 藤田真之介(岐阜·中京商) 1'50"94
49. 8 橋本 真英(栃木·小山西) 1'52"95
50. 9 足立原和彦(神奈川·光明相模原) 1'51"95

◆1,500m

41. 昭63 浜矢 将直(兵庫·西脇工) 3'45"46
42. 平元 武井 隆次(東京·国大久我山) 3'53"35
43. 2 小林 正幹(埼玉·松山) 3'51"02
44. 3 渡辺 康幸(千葉·市船橋) 3'51"24
45. 4 中原 大輔(鳥取·由良育英) 3'49"34
46. 5 ダニエル·ジェンガ(宮城·仙台育英) 3'47"50
47. 6 ダニエル·ジェンガ(宮城·仙台育英) 3'43"43
48. 7 宮崎 秀規(福岡·九国大附) 3'49"82
49. 8 鈴木健太郎(愛知·豊川工) 3'50"16
50. 9 佐藤 清治(長野·佐久長聖) 3'49"98

◆5,000m

41. 昭63 熊谷 勝仁(岩手·専大北上) 14'15"33
42. 平元 武井 隆次(東京·国大久我山) 14'13"73
43. 2 鶴里 初(宮崎·小林) 14'37"43
44. 3 渡辺 康幸(千葉·市船橋) 14'18"08
45. 4 中原 大輔(鳥取·由良育英) 14'23"09
46. 5 ジョン·マイタイ(宮城·仙台育英) 14'14"33
47. 6 ジョン·マイタイ(宮城·仙台育英) 14'12"62
48. 7 シュリアス·キビタ(宮城·仙台育英) 13'37"28
49. 8 ジェームス·ドゥング(宮城·仙台育英) 14'13"58
50. 9 ジェームス·ドゥング(宮城·仙台育英) 14'15"33

◆110m H

41. 昭63 井口 聡(京都·洛南) 14"79
42. 平元 関 圭一郎(宮崎·宮崎工) 14"33
43. 2 小苗 久信(大阪·市岡) 14"52
44. 3 市川 隆史(神奈川·市横須賀) 14"15
45. 4 富田 学(鳥取·由良育英) 14"66
46. 5 吉岡 康典(京都·網野) 14"36
47. 6 渡部 信人(新潟·津川) 14"56
48. 7 海老根恵太(千葉·東海大浦安) 14"28
49. 8 田野中 輔(千葉·東海大浦安) 14"47
50. 9 山田 真利(京都·洛南) 14"58

◆400m H

41. 昭63 山本 厚(奈良·添上) 50"67
42. 平元 斉藤 嘉彦(群馬·富岡) 51"66
43. 2 高岸 智宏(佐賀·多久工) 52"11
44. 3 今村 浩規(石川·金沢) 51"95
45. 4 市嶋 直人(兵庫·社) 52"01
46. 5 鈴木 伸幸(岐阜·各務原東) 52"28
47. 6 磯 弘和(神奈川·相洋) 52"20
48. 7 伊藤 拓馬(愛知·中京大中京) 51"47
49. 8 吉沢 賢(千葉·市立船橋) 50"51
50. 9 押川 聡史(宮崎·宮崎北) 51"57

◆3,000m障害

41. 昭63 村松 明彦(兵庫·報徳学園) 9'04"10
42. 平元 櫛部 静二(山口·宇部鴻城) 8'54"27
43. 2 道浦 誠(和歌山·和歌山北) 8'57"48
44. 3 山本 豪(静岡·伊豆中央) 8'57"02
45. 4 鎌田 充(秋田·秋田経法大附) 9'09"64
46. 5 ダニエル·ジェンガ(宮城·仙台育英) 8'41"46
47. 6 ダニエル·ジェンガ(宮城·仙台育英) 8'49"51
48. 7 榊枝 広光(福島·日大東北) 8'56"21
49. 8 榊枝 広光(福島·日大東北) 9'01"33
50. 9 岩水 嘉孝(愛知·豊川) 8'55"35

◆4×100mリレー

41. 昭63 中京 (愛知) 41"05
42. 平元 浜松商 (静岡) 40"86
43. 2 東農大二 (群馬) 40"92
44. 3 大阪 (大阪) 40"88
45. 4 清風 (大阪) 41"64
46. 5 大阪 (大阪) 41"06
47. 6 添上 (奈良) 40"43
48. 7 平田 (島根) 40"53
49. 8 清風 (大阪) 40"58
50. 9 八女工 (福岡) 40"59

◆4×400mリレー

41. 昭63 添上 (奈良) 3'15"79
42. 平元 浜松商 (静岡) 3'12"36

43.	2	市立船橋	(千葉)	3'13"16
44.	3	東海大浦安	(千葉)	3'15"15
45.	4	玉野光南	(岡山)	3'14"28
46.	5	添　上	(奈良)	3'11"39
47.	6	添　上	(奈良)	3'10"45
48.	7	中京大中京	(愛知)	3'13"04
49.	8	市立船橋	(千葉)	3'12"12
50.	9	清　風	(大阪)	3'12"17

◆走高跳

41.	昭63	内田	猛樹(東京·東京)	2.18
42.	平元	海鋒	佳輝(千葉·八千代松陰)	2.20
43.	2	君野	貴弘(東京·堀越)	2.18
44.	3	幸山	年宏(京都·洛南)	2.09
45.	4	伊藤	敦(千葉·八千代松陰)	2.09
46.	5	小林	俊一(千葉·八千代松陰)	2.12
47.	6	小林	俊一(千葉·八千代松陰)	2.15
48.	7	佐野	巧幸(愛知·愛工大名電)	2.09
49.	8	佐藤	琢磨(神奈川·厚木南通)	2.15
50.	9	黒田	幸司(静岡·下田北)	2.09

◆棒高跳

41.	昭63	高橋	利彰(香川·三豊工)	5.10
42.	平元	西尾	勇二(山形·北村山)	4.80
43.	2	大北	一成(岐阜·大垣日大)	5.00
44.	3	中森	徹(静岡·興誠)	5.10
45.	4	船津	哲史(大阪·羽曳野)	5.15
46.	5	安田	覚(三重·桑名西)	5.05
47.	6	菅谷	達矢(静岡·浜松商)	5.00
48.	7	小倉	数馬(京都·花園)	5.00
49.	8	菅野	卓弥(福島·郡山北工)	5.00
50.	9	沢野	大地(千葉·成田)	5.10

◆走幅跳

41.	昭63	森長	正樹(大阪·太成)	7.38
42.	平元	森長	正樹(大阪·太成)	7.63
43.	2	朝原	宣治(兵庫·夢野台)	7.61
44.	3	大橋	忠和(茨城·土浦日大)	7.69
45.	4	高松	真司(滋賀·守山北)	7.56
46.	5	杉林	孝法(石川·星稜)	7.56
47.	6	馬塚	貴弘(静岡·浜名)	7.63
48.	7	大山	高志(福岡·東福岡)	7.49
49.	8	東	克知(千葉·東海大望洋)	7.55
50.	9	寺野	伸一(大阪·清風)	7.68

◆三段跳

41.	昭63	藤沢	博之(石川·富来)	15.54
42.	平元	浜田	北斗(鹿児島·松陽)	15.34
43.	2	角田	健一(福岡·春日)	15.35
44.	3	都築	晃(愛知·名古屋学院)	15.20
45.	4	須藤	宣邦(静岡·富士宮北)	15.61
46.	5	谷津	逸人(栃木·作新学院)	15.34
47.	6	今井	睦(群馬·前橋)	15.56
48.	7	小栗	忠(静岡·浜松西)	15.68
49.	8	越智	宏行(奈良·添上)	15.68
50.	9	中嶋	博之(千葉·成田)	15.07

◆砲丸投

41.	昭63	榊原	英裕(静岡·浜松商)	17.48
42.	平元	田中	健次(茨城·結城一)	17.34
43.	2	榊原	英裕(静岡·浜松商)	17.39
44.	3	細川	恒(神奈川·逗葉)	17.57
45.	4	和田	智(千葉·拓殖大紅陵)	16.93
46.	5	秋本	純男(宮崎·宮崎工)	18.16
47.	6	野口	安忠(福岡·八幡西)	17.68
48.	7	駒澤	之也(千葉·成田)	18.14
49.	8	保田	豪(和歌山·耐久)	18.22
50.	9	米山	潤(千葉·東京学館総技)	17.82

◆円盤投

41.	昭63	川植	宗治(大阪·泉鳥取)	51.00
42.	平元	瀬上	健司(埼玉·伊奈総合)	54.02
43.	2	瀬上	健司(埼玉·伊奈総合)	57.00
44.	3	横山	亨利(福井·鯖江)	52.08
45.	4	田中	伸宣(富山·伏木)	55.24
46.	5	仲吉	義也(沖縄·久米島)	51.30
47.	6	畑山	茂雄(青森·黒石)	52.62
48.	7	清水	研自(広島·安佐北)	52.80
49.	8	市川	誠(北海道·北見柏陽)	52.02
50.	9	村上	幸史(愛媛·今治明徳)	53.28

◆ハンマー投

41.	昭63	保谷	志郎(愛知·名古屋学院)	57.64
42.	平元	関谷	弘樹(京都·洛南)	61.42
43.	2	八鍬	博紀(埼玉·行田)	59.58
44.	3	室伏	広治(千葉·成田)	64.78
45.	4	室伏	広治(千葉·成田)	71.78
46.	5	平尾	茂(徳島·富岡東)	61.48
47.	6	川下	智志(愛媛·今治明徳)	63.14
48.	7	碓井	崇(埼玉·春日部東)	59.90
49.	8	本田	浩誠(熊本·甲佐)	63.44

50. 9 鈴木 隼人(静岡・浜松工) 63.90

◆やり投

41. 昭63 森沢 公雄(鳥取・鳥取商) 68.30
42. 平元 有馬流太郎(京都・北嵯峨) 69.68
43. 2 梶原 清昭(兵庫・加古川南) 68.46
44. 3 土屋 忠之(福島・会津) 68.48
45. 4 植 徹(岡山・美作) 72.26
46. 5 石破 清志(鳥取・鳥取西) 65.64
47. 6 石破 清志(鳥取・鳥取西) 68.22
48. 7 田村美喜雄(京都・網野) 69.20
49. 8 村上 幸史(愛媛・今治明徳) 65.80
50. 9 村上 幸史(愛媛・今治明徳) 68.06

◆八種競技

41. 昭63 丹下 靖英(愛知・中村) 5553
42. 平元 松井 紀之(奈良・添上) 5862
43. 2 赤堀 弘晃(兵庫・加古川南) 5909
44. 3 井上 高宏(佐賀・白石) 5629
45. 4 樋口 利夫(神奈川・上郷) 5699
46. 5 吉岡 康典(京都・網野) 5704
47. 6 安井 亨(奈良・奈良) 6005
48. 7 野澤 保夫(茨城・土浦日大) 5794
49. 8 田野 中輔(神奈川・東海大望洋) 5802
50. 9 井上 昌己(福岡・筑陽学園) 5887

◆10000m

42. 平元 大地 泰弘(兵庫・西脇工) 30'22"90
43. 2 川内 勝弘(福岡・大牟田) 30'43"20
44. 3 鋼崎 真二(福岡・福岡大濠) 30'53"31
45. 4 小林 雅行(新潟・十日町) 30'25"20
46. 5 稲垣 竜治(愛知・中京) 30'43"21
47. 6 渡辺 共則(京都・宇治) 30'19"62
48. 7 大浜 洋平(島根・開星) 30'23"26
49. 8 奥田真一郎(兵庫・西脇工) 30'06"37
50. 9 田中 俊也(広島・世羅) 30'02"18

◆5,000m W

42. 平元 佐藤 徹(愛知・東海工) 22'38"85
43. 2 高根 英貴(長野・岩村田) 22'01"09
44. 3 藤井健太郎(岡山・倉敷) 21'44"92
45. 4 小堀 道夫(滋賀・比叡山) 21'37"07
46. 5 沖谷 卓弥(石川・寺井) 22'18"66
47. 6 唐沢 将実(長野・伊那北) 21'30"04
48. 7 松本 盛爾(千葉・成田) 21'51"55
49. 8 岡部 尊行(石川・尾山台) 22'11"32
50. 9 鈴木 剛史(大阪・生野) 22'30"26

□女 子

◆100m

41. 昭63 土屋 美緒(静岡・富士見) 11"79
42. 平元 三木まどか(兵庫・姫路商) 12"25
43. 2 三木まどか(兵庫・姫路商) 12"22
44. 3 柿沼 和恵(埼玉・埼玉栄) 11"96
45. 4 柿沼 和恵(埼玉・埼玉栄) 11"51
46. 5 伊藤佳奈恵(北海道・恵庭北) 11"72
47. 6 金子 朋未(埼玉・伊奈総合) 11"81
48. 7 島崎 亜弓(愛知・市邨学園) 11"81
49. 8 戸田恵美子(福岡・戸畑中央) 12"06
50. 9 鈴木 智実(愛知・市邨学園) 12"09

◆200m

41. 昭63 熊田 恭子(埼玉・埼玉栄) 24"23
42. 平元 熊田 恭子(埼玉・埼玉栄) 24"50
43. 2 熊田 恭子(埼玉・埼玉栄) 24"27
44. 3 柿沼 和恵(埼玉・埼玉栄) 24"40
45. 4 柿沼 和恵(埼玉・埼玉栄) 23"82
46. 5 伊藤佳奈恵(北海道・恵庭北) 23"98
47. 6 本山 恵子(埼玉・埼玉栄) 24"30
48. 7 鈴木 智美(愛知・市邨学園) 23"98
49. 8 鈴木 智美(愛知・市邨学園) 24"30
50. 9 鈴木 智実(愛知・市邨学園) 24"44

◆400m

41. 昭63 仲松 好美(沖縄・那覇) 54"86
42. 平元 久保田和恵(群馬・群馬女短大) 54"44
43. 2 久保田和恵(群馬・群馬女短大) 54"18
44. 3 徳田由美子(埼玉・埼玉栄) 54"46
45. 4 柿沼 和恵(埼玉・埼玉栄) 54"37
46. 5 長谷川雅子(群馬・群馬女短大) 54"57
47. 6 小林 美佳(兵庫・姫路商) 54"77
48. 7 飯田 祐子(千葉・成田) 55"44
49. 8 杉森 美保(埼玉・星野女) 54"76
50. 9 佐々木麗奈(富山・龍谷富山) 54"56

◆800m

41. 昭63 鳥居多香子(磐田北・静岡) 2'11"14
42. 平元 堤 文子(埼玉栄・埼玉) 2'06"17
43. 2 徳田由美子(埼玉栄・埼玉) 2'06"66
44. 3 徳田由美子(埼玉栄・埼玉) 2'07"33
45. 4 池田真理子(福岡南女・福岡) 2'09"66
46. 5 池田真理子(福岡南女・福岡) 2'07"18

47.	6	吉村かおり(山口·西京)	2'10"95
48.	7	山口　陽子(島根·大社)	2'09"61
49.	8	原口加奈子(福岡·筑紫女)	2'07"26
50.	9	佐々木麗奈(富山·龍谷富山)	2'07"93

◆3,000m

41.	昭63	桂　　知江(京都·宇治)	9'20"95
42.	平元	大嵜　由美(愛知·愛知淑徳)	9'21"65
43.	2	早狩　実紀(京都·南八幡)	9'09"43
44.	3	石井　千佳(大阪·大阪成蹊女)	9'09"32
45.	4	加藤　明子(京都·宇治)	9'07"77
46.	5	田中めぐみ(埼玉·埼玉栄)	9'18"23
47.	6	菅原　美和(宮城·仙台育英)	9'17"91
48.	7	岡本由美子(宮城·築館女)	9'15"36
49.	8	檜山久美子(埼玉·埼玉栄)	9'09"97
50.	9	田中　梨沙(埼玉·埼玉栄)	9'11"75

◆100m H

41.	昭63	茂木　陽子(埼玉栄·埼玉)	13"93
42.	平元	青木　利佳(中野西·長野)	14"48
43.	2	村上　貴子(宮城三女·宮城)	14"42
44.	3	松浦　真枝(松江南·島根)	14"07
45.	4	土屋　　恵(米沢女·山形)	13"67
46.	5	森本　明子(埼玉栄·埼玉)	13"61
47.	6	森本　明子(埼玉栄·埼玉)	13"58
48.	7	杉浦　絵里(埼玉栄·埼玉)	13"69
49.	8	加藤　友里(安城東·愛知)	13"60
50.	9	山本　絵里(新栄·神奈川)	14"58

◆4×100mリレー

41.	昭63	富山商	(富山)	48"09
42.	平元	埼玉栄	(埼玉)	46"47
43.	2	埼玉栄	(埼玉)	46"33
44.	3	日大山形	(山形)	46"37
45.	4	市立船橋	(千葉)	46"76
46.	5	埼玉栄	(埼玉)	46"33
47.	6	埼玉栄	(埼玉)	46"94
48.	7	市邨学園	(愛知)	46"87
49.	8	市邨学園	(愛知)	46"51
50.	9	添　上	(奈良)	46"62

◆走高跳

41.	昭63	谷野　美重(東京·駒場)	1.80
42.	平元	貞広　千波(香川·明香)	1.80
43.	2	貞広　千波(香川·明香)	1.80
44.	3	坂野　尚美(岐阜·大垣商)	1.77
45.	4	太田　陽子(湘南工大附·神奈川)	1.83
46.	5	今井　美希(瑞陵·愛知)	1.77
47.	6	川井　未央(龍谷富山·富山)	1.77
48.	7	岩切麻衣湖(中京女子大附·愛知)	1.77
49.	8	西原　綾子(小倉工·福岡)	1.75
50.	9	大橋　美佳(洛北·京都)	1.72

◆走幅跳

41.	昭63	逢井　知佐(愛知·市邨学園)	6.06
42.	平元	近藤　明美(福岡·八女工)	5.90
43.	2	高松　仁美(埼玉·春日部東)	6.15
44.	3	高松　仁美(埼玉·春日部東)	6.21
45.	4	高松　仁美(埼玉·春日部東)	6.24
46.	5	安田　紀子(愛知·市邨学園)	6.19
47.	6	花岡　麻帆(千葉·成田)	6.29
48.	7	井原　福代(香川·明善)	6.09
49.	8	村山　　梢(大阪·初芝)	6.13
50.	9	山本　絵里(神奈川·新栄)	6.11

◆砲丸投

41.	昭63	関　　千秋(埼玉·埼玉栄)	13.85
42.	平元	對島あゆみ(静岡·西遠女)	13.40
43.	2	竹内　智子(三重·宇治山田商)	13.91
44.	3	奥平　陽子(愛媛·今治明徳)	13.82
45.	4	中西美代子(埼玉·埼玉栄)	14.51
46.	5	高田　智子(栃木·氏家)	14.41
47.	6	豊永　陽子(徳島·城ノ内)	14.42
48.	7	豊永　陽子(徳島·城ノ内)	14.62
49.	8	市岡　寿実(三重·津商)	14.68
50.	9	市岡　寿実(三重·津商)	15.53

◆円盤投

41.	昭63	鍋倉　由紀(広島·鈴峯女)	43.68
42.	平元	坂元　裕美(大阪·泉北)	40.68
43.	2	桑原　鈴代(愛知·中京女子大附)	44.08
44.	3	三浦　靖子(奈良·添上)	41.50
45.	4	中西美代子(埼玉·埼玉栄)	48.28
46.	5	高間　麻里(奈良·添上)	45.92
47.	6	虎谷ちとせ(福岡·九州女)	45.84
48.	7	鈴木　智子(三重·津商)	44.40
49.	8	尾野　智子(大阪·成蹊女)	44.98
50.	9	岡本　潤子(京都·園部)	43.70

◆やり投

41.	昭63	岡野　利江(埼玉·埼玉栄)	49.52
42.	平元	青木　純子(山形·山形城北女)	48.32

43.	2	青島　友美(静岡·西遠女)	50.08
44.	3	青島　友美(静岡·西遠女)	49.34
45.	4	三宅　貴子(岡山·就実)	52.56
46.	5	岡村　節子(新潟·六日町)	52.64
47.	6	高橋　徳江(岩手·盛岡南)	51.16
48.	7	岡村　亜希(鳥取·由良育英)	48.32
49.	8	山口　直子(三重·津商)	48.62
50.	9	茂呂　綾子(栃木·佐野女)	48.22

◆七種競技

41.	昭63	本田美江子(栃木·国学院栃木)	4704
42.	平元	小谷　明子(埼玉·埼玉栄)	4504
43.	2	豊守クリヤ(福岡·小倉工)	4548
44.	3	豊守クリヤ(福岡·小倉工)	4984
45.	4	征矢　範子(東京·駒場)	4802
46.	5	長瀬　直子(広島·沼田)	4906
47.	6	岡部　幸恵(京都·西城陽)	4737
48.	7	若月　三佳(栃木·氏家)	4696
49.	8	山本　絵里(神奈川·新栄)	4968
50.	9	山本　絵里(神奈川·新栄)	4943

◆5,000m

42.	平元	大嵜　由美(愛知·愛知淑徳)	16'15"12
43.	2	鯉川なつえ(福岡·筑紫女学園)	16'00"86
44.	3	加藤　明子(京都·宇治)	16'06"20
45.	4	加藤　明子(京都·宇治)	16'01"57
46.	5	新田　愛子(福岡·筑紫女学園)	16'27"39
47.	6	森垣　敦子(京都·宇治)	16'30"54
48.	7	吉村かおり(山口·西京)	16'25"02
49.	8	渋井　陽子(栃木·那須拓陽)	16'15"25
50.	9	藤田　貴子(長崎·諫早)	16'14"50

◆3,000m W

42.	平元	小木曽史代(愛知·南陽)	14'56"94
43.	2	内田　智子(三重·四日市)	14'18"13
44.	3	板倉　美紀(石川·寺井)	13'43"00
45.	4	本田ひとみ(山梨·山梨学院大附)	14'13"58
46.	5	小川麻里子(富山·富山商)	14'19"93
47.	6	板倉　良子(大阪·大阪成蹊)	13'47"41
48.	7	照井　貴子(岩手·西和賀)	13'44"31
49.	8	根岸由紀子(埼玉·浦和実)	14'06"52
50.	9	笛木かおり(埼玉·鳩山)	14'14"26

◆400m H

42.	平元	佐藤　明美(愛知·五条)	60"41
43.	2	阿部真由美(北海道·東海大四)	60"02
44.	3	山形依希子(福井·敦賀)	60"54
45.	4	遠藤三重子(福島·若松女)	60"65
46.	5	西岡　京娘(京都·西城陽)	60"54
47.	6	寺下あゆみ(香川·香川明善)	62"06
48.	7	飯田　祐子(千葉·成田)	60"36
49.	8	石川　紀子(愛媛·川之江)	61"20
50.	9	佐々木麗奈(富山·龍谷富山)	59"95

体　　操

□男子

◆団体総合

昭63	清　風	(大阪)	350.35
平元	清　風	(大阪)	334.70
2	埼玉栄	(埼玉)	341.80
3	清　風	(大阪)	337.35
4	清　風	(大阪)	337.00
5	埼玉栄	(埼玉)	339.95
6	清　風	(大阪)	338.95
7	埼玉栄	(埼玉)	339.35
8	埼玉栄	(埼玉)	342.00
9	清　風	(大阪)	342.15

◆個人総合

昭63	池谷　幸雄(大阪·清風)	118.10
平元	畠田　好章(徳島·鳴門)	115.35
2	畠田　好章(徳島·鳴門)	115.70
3	武内　弘行(埼玉·埼玉栄)	114.10
4	武藤　勇(愛知·中京)	113.85
5	小林　正明(埼玉·埼玉栄)	114.20
	原田　睦巳(京都·洛南)	114.20
6	塚原　直也(東京·明大付中野)	113.25
7	塚原　直也(東京·明大付中野)	115.15
8	西村　圭一(埼玉·埼玉栄)	116.55
9	冨田　洋之(京都·洛南)	115.65

◆ゆか

昭63	池谷　幸雄(大阪·清風)	19.80
平元	田中　光(大阪·清風)	19.30
2	田中　光(大阪·清風)	19.40
3	目黒　稔(岡山·関西)	19.40
4	武藤　勇(愛知·中京)	19.10
5	小林　正明(埼玉·埼玉栄)	19.30
6	塚原　直也(東京·明大付中野)	19.05

7	平本	将人(神奈川·湘南工大)	19.20
	米田	功(大阪·清風)	19.20
8	西村	圭一(埼玉·埼玉栄)	19.30
9	柳浩	二郎(大阪·清風)	19.10

◆あん馬

昭63	西川	大輔(大阪·清風)	19.85
平元	各務	渡(愛知·中京)	19.25
2	田中	光(大阪·清風)	19.55
3	山田	英喜(京都·洛南)	19.35
4	佐藤	勇(愛知·中京)	19.45
5	原田	睦巳(京都·洛南)	19.40
6	今木	重行(大阪·清風)	19.40
7	塚原	直也(東京·明大付中野)	19.55
8	鹿島	丈博(大阪·清風)	19.60
9	鹿島	丈博(大阪·清風)	19.70

◆つり輪

昭63	池谷	幸雄(大阪·清風)	19.55
平元	長野	功(群馬·高崎工)	19.65
2	田中	光(大阪·清風)	19.50
3	村上	仁(大阪·清風)	19.25
4	内山	隆(大阪·清風)	19.35
5	山田	辰也(群馬·高崎工)	19.35
6	小島	正憲(大阪·清風)	19.40
7	佐藤	大輔(岡山·関西)	19.20
8	西村	圭一(埼玉·埼玉栄)	19.65
9	冨田	洋之(京都·洛南)	19.55

◆跳馬

昭63	池谷	幸雄(大阪·清風)	19.75
平元	佐伯	聡史(兵庫·尼崎産業)	19.15
2	畠田	好章(徳島·鳴門)	19.10
	藤原	信行(埼玉·埼玉栄)	19.10
3	目黒	稔(岡山·関西)	19.15
4	原田	睦巳(京都·洛南)	19.00
5	原田	睦巳(京都·洛南)	18.90
6	宮本	暁也(埼玉·埼玉栄)	18.85
7	室井	聖史(千葉·市立船橋)	18.85
8	長澤	俊之(群馬·桐生工)	19.10
9	勝田	充(京都·洛南)	18.85

◆平行棒

昭63	西川	大輔(大阪·清風)	19.70
平元	田中	光(大阪·清風)	19.55
	畠田	好章(徳島·鳴門)	19.55
2	畠田	好章(徳島·鳴門)	19.60
3	武内	弘行(埼玉·埼玉栄)	19.40
4	林	弘策(大阪·清風)	19.10
5	小林	正明(埼玉·埼玉栄)	19.10
6	小島	正憲(大阪·清風)	19.35
7	平本	将人(神奈川·湘南工大)	19.70
8	西村	圭一(埼玉·埼玉栄)	19.70
9	柳浩	二郎(大阪·清風)	19.45

◆鉄棒

昭63	池谷	幸雄(大阪·清風)	19.70
平元	畠田	好章(徳島·鳴門)	19.15
2	田中	光(大阪·清風)	19.30
3	武内	弘行(埼玉·埼玉栄)	19.30
4	佐藤	勇(愛知·中京)	19.30
5	斎藤	良宏(埼玉·埼玉栄)	19.40
6	谷田	治樹(福井·福井工大附)	19.40
7	西村	圭一(埼玉·埼玉栄)	19.40
8	西村	圭一(埼玉·埼玉栄)	19.80
9	柳浩	二郎(大阪·清風)	19.55

□女　子

◆団体総合

昭63	日女体大附二階堂	(東京)	232.80
平元	日女体大附二階堂	(東京)	229.10
2	西　山	(京都)	222.20
3	藤村　女子	(東京)	224.90
4	西山	(京都)	222.25
5	藤村　女子	(東京)	222.15
6	藤村　女子	(東京)	225.800
7	藤村　女子	(東京)	223.780
8	北　陸	(福井)	223.600
9	藤村　女子	(東京)	222.950

◆個人総合

昭63	瀬尾	京子(東京·二階堂)	77.20
	信田	美帆(東京·二階堂)	77.20
平元	信田	美帆(東京·二階堂)	76.35
2	三浦	華子(東京·藤村女子)	76.00
3	小菅	麻里(東京·藤村女子)	78.30
4	江頭美奈子(佐賀·鳥栖)		75.55
5	小菅	麻里(東京·藤村女子)	75.55
6	菅原	リサ(埼玉·戸田)	76.100
7	大川	真澄(東京·藤村女子)	75.030
8	井上あい子(福井·北陸)		75.150
9	北村	彩子(東京·藤村女子)	74.975

◆跳馬

昭63	真田マキ子	(東京·二階堂)	19.65
平元	真田マキ子	(東京·二階堂)	19.55
2	金谷麻里子	(北海道·札幌藻岩)	18.90
3	小菅　麻里	(東京·藤村女子)	19.65
4	江頭美奈子	(佐賀·鳥栖)	19.35
5	菅原　リサ	(埼玉·戸田)	19.00
6	大川　真澄	(東京·藤村女子)	18.90
7	小堀　由貴	(北海道·札幌北斗)	18.725
8	堀江　貴子	(北海道·小樽双葉)	19.175
9	得能　香織	(愛知·椙山女学園)	18.850

◆段違い平行棒

昭63	瀬尾　京子	(東京·二階堂)	19.80
平元	中川　久代	(京都·西山)	19.15
2	三浦　華子	(東京·二階堂)	18.95
	中川　久代	(京都·西山)	18.95
3	小菅　麻里	(東京·藤村女子)	19.50
4	江頭美奈子	(佐賀·鳥栖)	19.45
5	小菅　麻里	(東京·藤村女子)	19.50
6	江頭美奈子	(佐賀·鳥栖)	19.450
7	岩田　香織	(東京·藤村女子)	19.125
8	井上あい子	(福井·北陸)	19.200
9	北村　彩子	(東京·藤村女子)	18.625

◆平均台

昭63	真田マキ子	(東京·二階堂)	19.25
平元	信田　美帆	(東京·二階堂)	19.15
2	三浦　華子	(東京·藤村女子)	19.15
3	小菅　麻里	(東京·藤村女子)	19.40
4	板橋　明子	(群馬·群馬女短附)	18.50
5	小幡さつき	(埼玉·戸田)	18.85
6	橋口　美穂	(愛知·椙山女学園)	19.000
7	大川　真澄	(東京·藤村女子)	18.675
8	星山　菜穂	(東京·藤村女子)	18.750
9	中江　亜希	(大阪·東大阪)	18.925

◆ゆか

昭63	信田　美帆	(東京·二階堂)	19.65
平元	真田マキ子	(東京·二階堂)	19.30
	信田　美帆	(東京·二階堂)	19.30
2	三浦　華子	(東京·藤村女子)	19.45
3	小菅　麻里	(東京·藤村女子)	19.75
4	江頭美奈子	(佐賀·鳥栖)	19.35
5	小菅　麻里	(東京·藤村女子)	19.15
6	菅原　リサ	(埼玉·戸田)	19.500
7	菅原　リサ	(埼玉·戸田)	19.075
	大川　真澄	(東京·藤村女子)	19.075
8	大川　真澄	(東京·藤村女子)	18.950
9	得能　香織	(愛知·椙山女学園)	19.200

新　体　操

□男　子

◆団体総合

昭63	青森山田	(青森)
平元	坂出工	(香川)
2	青森山田	(青森)
3	青森山田	(青森)
4	青森山田	(青森)
5	坂出工	(香川)
6	青森山田	(青森)
7	青森山田	(青森)
8	水俣	(熊本)
9	水俣	(熊本)

◆個人総合

昭63	熊尾　裕樹	(奈良·平城)
平元	田村　孝幸	(青森·青森山田)
2	荒川　栄	(青森·青森山田)
3	小柴　智和	(青森·青森山田)
4	東山　弘典	(埼玉·埼玉栄)
5	松岡　寛敏	(香川·坂出工)
6	城野　直也	(佐賀·神埼農)
7	勝目　勲	(熊本·水俣)
8	西川　隆剛	(佐賀·神埼清明)
9	森下　拓海	(鹿児島·鹿児島実)

□女　子

◆団体総合

昭63	藤村女子	(東京)
平元	佐賀女子	(佐賀)
2	佐賀女子	(佐賀)
3	佐賀女子	(佐賀)
4	佐賀女子	(佐賀)
5	佐賀女子	(佐賀)
6	佐賀女子	(佐賀)
7	佐賀女子	(佐賀)
8	佐賀女子	(佐賀)
9	藤村女子	(東京)

◆個人総合

昭63	石三　香織	(宮崎·日章学園)
平元	藤野　朱美	(京都·光華)
2	山田　海峰	(東京·日女体附)
3	竹内　　忍	(埼玉·与野)
4	山尾　朱子	(東京·藤村女子)
5	宍戸　愛子	(東京·藤村女子)
6	宍戸　愛子	(東京·藤村女子)
7	田原　睦子	(埼玉·県陽)
8	松永里絵子	(東京·桐朋女子)
9	松永里絵子	(東京·桐朋女子

水　　泳

≪競　泳≫

□男　子

◆団体総合

		点
昭63	近畿大学附属（大阪）	52
平元	近畿大学附属（大阪）	52
2	近畿大学附属（大阪）	81
3	近畿大学附属（大阪）	107
4	近畿大学附属（大阪）	134
5	近畿大学附属（大阪）	108
6	近畿大学附属（大阪）	102
7	近畿大学附属（大阪）	93
8	湘南工大付属（神奈川）	94
9	日本大学豊山（東京）	77

◆50m 自由形

昭63	未実施		
平元	未実施		
2	未実施		
3	近藤	正和(大阪·近畿大附)	23.85
4	濱野	広輔(千葉·千葉商大附)	24.45
5	末次	大介(岐阜·岐阜)	24.36
6	山野井智広	(茨城·常総学院)	24.02
7	山野井智広	(茨城·常総学院)	23.59
8	水間	源(東京·本郷)	24.20
9	大高	靖弘(埼玉·春日部共栄)	24.16

◆100m 自由形

昭63	宇佐見正勝	(千葉·千葉商大附)	53.40
平元	矢澤	克宏(新潟·長岡大手)	53.15
2	遠藤	牧夫(神奈川·日大高)	53.67
3	近藤	正和(大阪·近畿大附)	52.39
4	福田	浩士(東京·日大豊山)	53.17
5	福田	浩士(東京·日大豊山)	52.63
6	伊藤	俊介(兵庫·市川)	53.12
7	石田	徳秀(兵庫·市川)	52.53
8	大高	靖弘(埼玉·春日部共栄)	52.65
9	大高	靖弘(埼玉·春日部共栄)	52.50

◆200m 自由形

昭63	猪狩	朋正(大阪·桃山学院)	1:57.99
平元	猪狩	朋正(大阪·桃山学院)	1:55.50
2	梶谷	智志(京都·洛星)	1:55.45
3	藍川	康二(静岡·日大三島)	1:55.12
4	倉澤	利彰(東京·世田谷学園)	1:54.41
5	福田	浩士(東京·日大豊山)	1:53.74
6	伊藤	俊介(兵庫·市川)	1:54.37
7	清水	一洋(大阪·近畿大附)	1:54.80
8	市川	洋介(静岡·沼津学園)	1:53.75
9	小池	尚徳(東京·世田谷学園)	1:55.99

◆400m 自由形

昭63	梅月	大輔(大阪·近畿大附)	4:07.35
平元	猪狩	朋正(大阪·桃山学院)	4:02.45
2	前田	泰平(大阪·近畿大附)	4:02.55
3	疋田	和哲(静岡·沼津学園)	3:59.02
4	疋田	和哲(静岡·沼津学園)	4:01.44
5	安井	久登(大阪·近畿大附)	4:00.27
6	安井	久登(大阪·近畿大附)	3:58.34
7	市川	洋介(静岡·沼津学園)	4:01.60
8	市川	洋介(静岡·沼津学園)	3:58.99
9	田北	誠(大阪·大体大浪商)	4:02.71

◆1500m 自由形

昭63	梅月	大輔(大阪·近畿大附)	16:15.99
平元	藤本	雅之(大阪·近畿大附)	16:04.20
2	山本	雅志(大阪·堺西)	15:50.74
3	疋田	和哲(静岡·沼津学園)	15:45.21
4	疋田	和哲(静岡·沼津学園)	15:56.19
5	平野	雅人(神奈川·日大高)	15:37.60
6	安井	久登(大阪·近畿大附)	15:45.48
7	須藤	哲史(東京·本郷)	15:52.59
8	田北	誠(大阪·大体大浪商)	15:46.86
9	荒瀬	洋太(富山·水橋)	16:05.83

◆100m背泳ぎ

昭63	空岡	京太(埼玉·春日部共栄)	58.78
平元	糸井	統(岐阜·県立岐阜商)	58.93
2	宮川	智光(栃木·宇都宮)	59.49
3	小嶺	英司(大阪·大成)	57.66
4	堀井利有司	(大阪·近畿大附)	57.95
5	西村	弘(大阪·近畿大附)	58.68
6	近内圭太郎	(神奈川·湘南工大)	57.86
7	近内圭太郎	(神奈川·湘南工大)	57.98
8	近内圭太郎	(神奈川·湘南工大)	56.85
9	久保	雄志(山梨·山梨学院)	58.56

◆200m背泳ぎ

昭63	空岡	京太(埼玉·春日部共栄)	2:06.72
平元	糸井	統(岐阜·県立岐阜商)	2:06.38
2	宮川	智光(栃木·宇都宮)	2:07.18
3	宮川	智光(栃木·宇都宮)	2:05.25
4	堀井利有司	(大阪·近畿大附)	2:02.80
5	堀井利有司	(大阪·近畿大附)	2:05.12
6	西村	弘(大阪·近畿大附)	2:06.04
7	近内圭太郎	(神奈川·湘南工大)	2:05.98
8	近内圭太郎	(神奈川·湘南工大)	2:02.91
9	久保	雄志(山梨·山梨学院)	2:05.32

◆100m平泳ぎ

昭63	山内	弘也(大阪·上宮)	1:04.51
平元	平山	周一(福岡·直方)	1:05.60
2	平山	周一(福岡·直方)	1:05.30
3	小原	武史(大阪·近畿大附)	1:04.42
4	林	享(大分·大分舞鶴)	1:02.88
5	今井	亮介(福岡·東福岡)	1:05.31
6	宮崎	義伸(福岡·直方)	1:04.26
7	宮崎	義伸(福岡·直方)	1:03.44
8	宮崎	義伸(福岡·直方)	1:04.05
9	須藤	秀之(群馬·前橋南)	1:04.45

◆200m平泳ぎ

昭63	山内	弘也(大阪·上宮)	2:20.65
平元	平山	周一(福岡·直方)	2:20.66
2	藤枝	宏(大阪·近畿大附)	2:18.69
3	鈴木	淳矢(静岡·浜松商業)	2:21.36
4	林	享(大分·大分舞鶴)	2:18.12
5	今村	一彦(京都·東山)	2:22.10
6	宮崎	義伸(福岡·直方)	2:17.36
7	宮崎	義伸(福岡·直方)	2:18.56
8	沖田	祥章(佐賀·佐賀学園)	2:18.20
9	金子	明(兵庫·東播磨)	2:23.39

◆100mバタフライ

昭63	杉本	邦男(大阪·近畿大附)	56.16
平元	渡辺	諭(東京·日大豊山)	57.20
2	野村	英司(東京·日大豊山)	56.40
3	小杉	久人(新潟·長岡大手)	56.61
4	橋本	信将(大阪·近畿大附)	56.94
5	橋本	信将(大阪·近畿大附)	56.35
6	山本	貴司(大阪·近畿大附)	55.82
7	山本	貴司(大阪·近畿大附)	54.99
8	山本	貴司(大阪·近畿大附)	53.85
9	高安	亮(神奈川·法政第二)	56.06

◆200mバタフライ

昭63	杉本	邦男(大阪·近畿大附)	2:01.87
平元	中谷	弘幸(静岡·日大三島)	2:03.48
2	野村	英司(東京·日大豊山)	2:02.12
3	松下	幸広(兵庫·市川)	2:03.48
4	古屋	明史(山梨·駿台甲府)	2:04.78
5	橋本	信将(大阪·近畿大附)	2:03.34
6	高山	健(埼玉·武南)	2:01.18
7	山本	貴司(大阪·近畿大附)	2:01.89
8	山本	貴司(大阪·近畿大附)	2:00.96
9	草野吾希男	(埼玉·春日部共栄)	2:03.71

◆200m個人メドレー

昭63	佐々木利和	(東京·本郷)	2:08.62
平元	山田裕一郎	(大阪·初芝)	2:11.01
2	衣笠	竜也(神奈川·法政第二)	2:09.95
3	川端	健司(兵庫·市川)	2:09.07
4	衣笠	竜也(神奈川·法政第二)	2:06.89
5	倉澤	利彰(東京·世田谷学園)	2:08.87
6	倉澤	利彰(東京·世田谷学園)	2:05.80
7	笈川	博志(神奈川·湘南工大)	2:06.60
8	笈川	博志(神奈川·湘南工大)	2:05.53
9	森	隆弘(東京·日大豊山)	2:06.82

◆400m個人メドレー

昭63	佐々木利和	(東京·本郷)	4:33.06
平元	井上	貴晶(大阪·北陽)	4:37.91
2	武舎	知弘(神奈川·日大高)	4:37.30
3	衣笠	竜也(神奈川·法政第二)	4:28.19
4	衣笠	竜也(神奈川·法政第二)	4:31.58
5	園田	俊介(千葉·千葉商大附)	4:33.75
6	倉澤	利彰(東京·世田谷学園)	4:28.57

7 森　隆弘(東京・日大豊山)4:32.96
8 森　隆弘(東京・日大豊山)4:27.50
9 森　隆弘(東京・日大豊山)4:26.44

◆400mリレー

昭63	日本大学豊山（東京）	3：37.71
平元	日本大学豊山（東京）	3：36.16
2	日本大学豊山（東京）	3：38.72
3	日本大学豊山（東京）	3：37.18
4	日本大学豊山（東京）	3：35.29
5	日本大学豊山（東京）	3：33.75
6	市　　川（兵庫）	3：32.52
7	日本大学豊山（東京）	3：32.70
8	湘南工大附属（神奈川）	3：33.81
9	日本大学豊山（東京）	3：35.53

◆800mリレー

昭63	近畿大学附属（大阪）	7：54.51
平元	日本大学豊山（東京）	7：54.49
2	近畿大学附属（大阪）	7：47.55
3	市　　川（兵庫）	7：48.67
4	日本大学豊山（東京）	7：50.98
5	日本大学豊山（東京）	7：44.41
6	近畿大学附属（大阪）	7：43.89
7	近畿大学附属（大阪）	7：46.02
8	沼津学園（静岡）	7：43.06
9	市　　川（兵庫）	7：50.05

◆400mメドレーリレー

昭63	県立岐阜商業（岐阜）	3：57.75
平元	近畿大学附属（大阪）	3：58.51
2	近畿大学附属（大阪）	3：55.42
3	近畿大学附属（大阪）	3：52.19
4	近畿大学附属（大阪）	3：54.29
5	近畿大学附属（大阪）	3：53.56
6	日本大学豊山（東京）	3：53.07
7	近畿大学附属（大阪）	3：53.51
8	近畿大学附属（大阪）	3：50.95
9	春日部共栄（埼玉）	3：54.41

□女　子

◆団体総合

昭63	近畿大学附属（大阪）	52点
平元	品川女子学院（東京）	30点
2	近畿大学附属（大阪）	48点
3	愛知椙徳（愛知）	82点
4	近畿大学附属（大阪）	105点
5	近畿大学附属（大阪）	119点
6	近畿大学附属（大阪）	98点
7	武蔵野（東京）	69点
8	近畿大学附属（大阪）	86点
9	近畿大学附属（大阪）	119点

◆50m自由形

昭63	未実施	
平元	未実施	
2	未実施	
3	山下満由美(埼玉・埼玉玉栄)	27.16
4	兎澤　雪奈(埼玉・武南)	26.64
5	井本直歩子(大阪・近畿大附)	26.97
6	大和　真幸(徳島・徳島市立)	26.92
7	源　純夏(徳島・県立城南)	26.42
8	源　純夏(徳島・県立城南)	26.13
9	源　純夏(徳島・県立城南)	26.22

◆100m自由形

昭63	門田　規希(兵庫・武庫川)	58.94
平元	松戸　思奈(宮城・常磐木学)	58.99
2	中野亜弥子(神奈川・神奈川学)	57.62
3	今枝　慶子(愛知・愛知椙徳)	58.15
4	井本直歩子(大阪・近畿大附)	58.17
5	井本直歩子(大阪・近畿大附)	57.74
6	井本直歩子(大阪・近畿大附)	57.45
7	源　純夏(徳島・県立城南)	57.31
8	源　純夏(徳島・県立城南)	56.97
9	源　純夏(徳島・県立城南)	56.87

◆200m自由形

昭63	若穂囲美貴(大阪・近畿大附)	2:04.95
平元	平中　秀子(東京・品川女子)	2:06.03
2	肥川　葉子(福岡・九女大附)	2:04.86
3	今枝　慶子(愛知・愛知椙徳)	2:04.32
4	千葉　すず(大阪・近畿大附)	2:04.81
5	千葉　すず(大阪・近畿大附)	2:01.93
6	山野井絵里(茨城・鹿島学園)	2:01.22
7	山野井絵里(茨城・鹿島学園)	2:02.30
8	山野井絵里(茨城・鹿島学園)	2:03.79
9	岡田　恵実(大阪・近畿大附)	2:03.72

◆400m自由形

昭63	若穂囲美貴(大阪・近畿大附)	4:19.62
平元	平中　秀子(東京・品川女子)	4:24.41

2 川島　政江(東京·武蔵野)　4:20.32
3 斉藤　綾子(東京·東京成徳)4:24.26
4 木原　珠子(東京·品川女子)4:19.13
5 千葉　すず(大阪·近畿大附)4:15.77
6 高橋　麻美(北海道·札幌静修) 4:17.88
7 小松はるみ(神奈川·県立川崎) 4:19.65
8 山野井絵里(茨城·鹿島学園)4:15.87
9 岡田　恵美(大阪·近畿大附)4:16.89

◆800m 自由形

昭63 井上まゆみ(兵庫·姫路西)　9:14.70
平元 横田　紀子(兵庫·兵庫川)　9:16.28
2 川島　政江(東京·武蔵野)　8:52.08
3 笹村　奈穂(大阪·近畿大附)8:55.60
4 川島　政江(東京·武蔵野)　8:51.98
5 宮地　祥子(大阪·近畿大附)8:47.59
6 三宅　愛子(兵庫·加古川南)8:52.95
7 小松はるみ(神奈川·県立川崎)　8:48.08
8 小松はるみ(神奈川·県立川崎)　8:46.66
9 岩田　玲奈(神奈川県·洗足学園)　8:52.11

◆100m 背泳ぎ

昭63 小野　郁(富山·富山女子)1:05.26
平元 青柳美由季(福岡·九女大附)1:06.13
2 中村　衣里(大阪·近畿大附)1:06.05
3 落合　真弓(静岡·静岡女子商)　1:05.38
4 肥川　葉子(福岡·九女大附)1:03.21
5 重田　恵(大阪·近畿大附)1:04.18
6 稲田　法子(千葉·市立船橋)1:03.49
7 稲田　法子(千葉·市立船橋)1:02.55
8 中村　真衣(新潟·帝京長岡)1:02.46
9 中村　真衣(新潟·帝京長岡)1:02.37

◆200m 背泳ぎ

昭63 小栗　聡美(東京·東京成徳)2:17.48
平元 小栗　聡美(東京·東京成徳)2:21.54
2 大杉　典子(大阪·近畿大附)2:18.60
3 鳥飼　淳子(大阪·近畿大附)2:17.97
4 肥川　葉子(福岡·九女大附)2:16.62
5 重田　恵(大阪·近畿大附)2:17.34
6 高瀬千香子(東京·東京立正)2:16.25
7 中尾　美樹(大阪·近畿大附)2:14.23
8 萩原　智子(山梨·山梨学院)2:12.34
9 萩原　智子(山梨·山梨学院)2:14.59

◆100 m平泳ぎ

昭63 山家　千文(東京·武蔵野)　1:12.64
平元 能美友季子(東京·鷺宮)　1:14.49
2 池田真由美(東京·日大鶴丘)1:14.22
3 岩崎　敬子(静岡·日大三島)1:14.24
4 粕谷　恭子(埼玉·狭山ヶ丘)1:12.50
5 粕谷　恭子(埼玉·狭山ヶ丘)1:11.51
6 石橋加預子(福岡·柳川)　1:11.24
7 石橋加預子(福岡·柳川)　1:10.92
8 田中　雅美(東京·八王子)　1:09.55
9 磯田　順子(東京·東京立正)1:10.65

◆200 m平泳ぎ

昭63 能美友季子(東京·鷺宮)　2:37.56
平元 平田恵美香(愛知·蟹江)　2:38.73
2 平林　英美(東京·品川女子)2:37.26
3 岩崎　敬子(静岡·日大三島)2:33.74
4 西岡　由恵(大阪·樟蔭)　2:33.60
5 粕谷　恭子(埼玉·狭山ヶ丘)2:32.39
6 岩崎　恭子(静岡·日大三島)2:31.52
7 田中　雅美(東京·八王子)　2:30.06
8 田中　雅美(東京·八王子)　2:28.42
9 磯田　順子(東京立正)　2:31.60

◆100m バタフライ

昭63 松宮　由香(大阪·近畿大附)1:02.80
平元 中込恵美子(山梨·東海大甲府) 1:03.07
2 司東　理恵(埼玉·春日部共栄)　1:02.03
3 大西　順子(兵庫·高砂)　1:03.24
4 漢人　陽子(静岡·浜松商業)1:02.69
5 塚嶋　洋子(愛知·愛知淑徳)1:02.60
6 春名　美佳(兵庫·加古川南)1:01.39
7 鹿島　瞳(東京·東京立正)1:01.44
8 鹿島　瞳(東京·東京立正)1:00.55
9 青山　綾里(大阪·近畿大附)　59.63

◆200m バタフライ

昭63 森川　理乃(大阪·近畿大附)2:14.26
平元 中込恵美子(山梨·東海大甲府)　2:15.71
2 司東　理恵(埼玉·春日部共栄)　2:13.30
3 中込恵美子(山梨·東海大甲府)　2:14.89
4 小林　千香(東京·藤村)　2:14.18
5 黒鳥　文絵(千葉·県薬園台)2:13.09
6 春名　美佳(兵庫·加古川南)2:12.27
7 春名　美佳(兵庫·加古川南)2:11.90
8 春名　美佳(兵庫·加古川南)2:12.23

9 鹿島　瞳(東京・東京立正)2:10.55

◆200m個人メドレー

昭63 佐藤　織絵(東京・文京学園)2:24.32
平元 赤石みゆき(東京・品川女子)2:24.53
2 木村　衣里(東京・東京成徳)2:20.97
3 平中　秀子(東京・品川女子)2:19.62
4 黒鳥　文絵(千葉・県薬園台)2:18.97
5 前原　仁美(東京・武蔵野)　2:18.28
6 山岸　朋子(東京・品川女子)2:19.80
7 前原　仁美(東京・武蔵野)　2:17.75
8 安田　由生(広島・沼田)　2:19.42
9 田島　寧子(東京・東京立正)2:17.96

◆400m個人メドレー

昭63 佐野　ゆき(東京・目白学園)5:02.14
平元 藤井　亜樹(東京・昇華学園)5:04.69
2 木村　衣里(東京・東京成徳)4:50.63
3 平中　秀子(東京・品川女子)4:54.13
4 黒鳥　文絵(千葉・県薬園台)4:47.45
5 黒鳥　文絵(千葉・県薬園台)4:45.34
6 高橋　麻美(北海道・札幌静修)4:50.30
7 前原　仁美(東京・武蔵野)　4:47.13
8 岩田　玲奈(神奈川県・洗足学園)4:56.08
9 田島　寧子(東京・東京立生)4:48.32

◆400mリレー

昭63　近畿大学付属（大阪）　4：01.92
平元　武　庫　川（兵庫）　4：02.39
2　愛知淑徳（愛知）　3：59.52
3　愛知淑徳（愛知）　3：58.51
4　近畿大学付属（大阪）　3：56.12
5　近畿大学付属（大阪）　3：53.84
6　近畿大学付属（大阪）　3：56.19
7　武　蔵　野（東京）　3：57.05
8　近畿大学付属（大阪）　3：54.77
9　近畿大学付属（大阪）　3：51.73

◆400mメドレーリレー

昭63　春日部共栄（埼玉）　4：24.75
平元　近畿大学付属（大阪）　4：27.44
2　東京成徳（東京）　4：25.76
3　愛知淑徳（愛知）　4：24.72
4　近畿大学付属（大阪）　4：21.75
5　近畿大学付属（大阪）　4：19.28
6　近畿大学付属（大阪）　4：18.72
7　近畿大学付属（大阪）　4：19.76
8　近畿大学付属（大阪）　4：17.37
9　近畿大学付属（大阪）　4：13.82

《飛び込み》

□男　子

◆団体総合

昭63	市立川口	(埼玉)	14点
平元	土浦日大	(茨城)	17点
2	寺　井	(石川)	12点
3	米　子	(鳥取)	15点
4	米　子	(鳥取)	15点
5	尽誠学園	(香川)	16点
6	米子西	(鳥取)	14点
7	興　誠	(静岡)	20点
8	此花学院	(大阪)	16点
9	此花学院	(大阪)	16点

◆高飛び込み

昭63 内藤　英樹(埼玉・市立川口) 463.26
平元 坂田　芳寛(茨城・土浦日大) 560.88
2 宮本基一郎(鳥取・米子)　481.38
3 宮本基一郎(鳥取・米子)　495.69
4 坂井　祐史(石川・小松明峰) 450.38
5 屠　　斌(香川・尽誠学園) 570.72
6 宮本幸太郎(鳥取・米子西)　527.28
7 宮本幸太郎(鳥取・米子西)　594.63
8 寺内　健(大阪・此花学園) 699.51
9 寺内　健(大阪・此花学園) 673.98

◆飛び板飛び込み

昭63 内藤　英樹(埼玉・市立川口) 533.89
平元 坂田　芳寛(茨城・土浦日大) 530.22
2 浅野　宗一(石川・寺井)　522.75
3 坂井　祐史(石川・小松明峰) 523.05
4 宮本基一郎(鳥取・米子)　502.98
5 屠　　斌(香川・尽誠学園) 570.72
6 吉田　理知(鳥取・松江南)　445.83
7 宮本幸太郎(鳥取・米子西)　586.92
8 寺内　健(大阪・此花学園) 673.62
9 寺内　健(大阪・此花学園) 657.57

□女　子

◆団体総合

昭63	松　　陰	(兵庫)	13点
平元	埼　玉　栄	(埼玉)	12点

2	光	華（京都）	15点
3	福井女子	（福井）	16点
4	小松市立女子	（石川）	16点
5	埼玉	栄（埼玉）	20点
6	小松市立女子	（石川）	22点
7	小松市立女子	（石川）	29点
8	小松市立女子	（石川）	30点
9	清陵情報	（福島）	15点

◆高飛び込み

昭63	笠井里栄子	（京都・桂）	456.66
平元	米倉	薫（兵庫・須磨女子）	394.80
2	甘	志敏（福井・福井女子）	332.97
3	甘	志敏（福井・福井女子）	465.54
4	宇野	聖子（石川・小松市立女）	356.16
5	石川めぐみ	（埼玉・埼玉栄）	346.65
6	石川めぐみ	（埼玉・埼玉栄）	372.36
7	樋口まゆみ	（石川・小松市立女）	417.21
8	樋口まゆみ	（石川・小松市立女）	477.15
9	神田加奈子	（福島・清陵情報）	386.97

◆飛び板飛び込み

昭63	入江	優紀（兵庫・松陰）	390.12
平元	山野井里奈	（埼玉・埼玉栄）	318.30
2	甘	志敏（福井・福井女子）	410.13
3	甘	志敏（福井・福井女子）	364.23
4	宇野	聖子（石川・小松市立女）	422.19
5	向井	智子（静岡・信愛学園）	455.64
6	樋口まゆみ	（石川・小松市立女）	455.71
7	樋口まゆみ	（石川・小松市立女）	463.77
8	樋口まゆみ	（石川・小松市立女）	518.79
9	吉原	真紀（茨城・水城）	381.99

《水球》

昭63	前橋商業	（群馬）
平元	前橋商業	（群馬）
2	福井工業	（福井）
3	金沢市立工業	（石川）
4	宮崎工業	（宮崎）
5	福井工業	（福井）
6	明治大学中野	（東京）
7	鳥	羽（京都）
8	埼玉	栄（埼玉）
9	明治大学中野	（東京）

バスケットボール

□男　子

41.	昭63	北陸	（福井）
42.	平元	能代工	（秋田）
43.	2	洛南	（京都）
44.	3	能代工	（秋田）
45.	4	土浦日大	（茨城）
46.	5	能代工	（秋田）
47.	6	能代工	（秋田）
48.	7	能代工	（秋田）
49.	8	能代工	（秋田）
50.	9	能代工	（秋田）

□女　子

41.	昭63	富岡	（神奈川）
42.	平元	名古屋短大付	（愛知）
43.	2	名古屋短大付	（愛知）
44.	3	鶴鳴女子	（長崎）
45.	4	名古屋短大付	（愛知）
46.	5	中村学園女子	（福岡）
47.	6	名古屋短大付	（愛知）
48.	7	名古屋短大付	（愛知）
49.	8	名古屋短大付	（愛知）
50.	9	聖和学園	（宮城）

バレーボール

□男　子

41.	昭63	崇徳	（広島）
42.	平元	大商大附	（大阪）
43.	2	上宮	（大阪）
44	3	東亜学園	（東京）
45.	4	東亜学園	（東京）
46.	5	釜利谷	（神奈川）
47.	6	東海大四	（北海道）
48.	7	鎮西	（熊本）
49.	8	鎮西	（熊本）
50.	9	釜利谷	（神奈川）

□女　子

41.	昭63	氷上	（兵庫）
42.	平元	九州文化学園	（長崎）

43.	2	古川商	(宮城)
44.	3	帝国女子	(大阪)
45.	4	氷上	(兵庫)
46.	5	国学院栃木	(栃木)
47.	6	共栄学園	(東京)
48.	7	就実	(岡山)
49.	8	扇城	(大分)
50.	9	四天王寺	(大阪)

卓球

□男子

◆学校対抗

57.	昭63	熊谷商	(埼玉)
58.	平元	埼工大深谷	(埼玉)
59.	2	埼工大深谷	(埼玉)
60.	3	愛工大名電	(愛知)
61.	4	愛工大名電	(愛知)
62.	5	埼工大深谷	(埼玉)
63.	6	上宮	(大阪)
64.	7	愛工大名電	(愛知)
65.	8	東山	(京都)
66.	9	青森山田	(青森)

◆シングルス

□男子

57.	昭63	平　亮太	(埼玉・熊谷商)
58.	平元	森本　洋治	(大阪・上宮)
59.	2	今枝　一郎	(愛知・愛工大名電)
60.	3	今枝　一郎	(愛知・愛工大名電)
61.	4	岡本　倫之	(愛知・桜丘)
62.	5	周　晅	(愛知・桜丘)
63.	6	遊澤　亮	(大阪・上宮)
64.	7	王　海軍	(青森・青森山田)
65.	8	木方慎之介	(東京・実践学園)
66.	9	宋　海偉	(青森・青森山田)

◆ダブルス

□男子

57.	昭63	高田　学 上月　智之	(愛知・桜丘)
58.	平元	入山　浩治 小畑　幸生	(埼玉・埼工大深谷)
59.	2	中田　幸信 窪　久司	(埼玉・埼工大深谷)
60.	3	坂巻　雄一 窪　久司	(埼玉・埼工大深谷)
61.	4	田崎　俊雄 渡辺　敬文	(埼玉・埼工大深谷)
62.	5	村上　裕和 竹谷　康一	(埼玉・埼工大深谷)
63.	6	遊澤　亮 辻本　真也	(大阪・上宮)
64.	7	高橋　卓斗 若林　努	(高知・明徳義塾)
65.	8	真田　浩二 金氏　祐一	(愛知・愛工大名電)
66.	9	熊田　智幸 宮下　渉	(京都・東山)

□女子

◆学校対抗

57.	昭63	白鵬女子	(神奈川)
58.	平元	白鵬女子	(神奈川)
59.	2	白鵬女子	(神奈川)
60.	3	白鵬女子	(神奈川)
61.	4	仙台育英学園	(宮城)
62.	5	白鵬女子	(神奈川)
63.	6	仙台育英学園	(宮城)
64.	7	四天王寺	(大阪)
65.	8	四天王寺	(大阪)
66.	9	四天王寺	(大阪)

◆シングルス

□女子

57.	昭63	佐藤　利香	(神奈川・白鵬女子)
58.	平元	大野　知子	(東京・武蔵野)
59.	2	大野　知子	(東京・武蔵野)
60.	3	坂田　倫子	(熊本・熊本信愛女子)
61.	4	陳　媛	(岐阜・中京商業)
62.	5	朱　芳	(香川・香川西)
63.	6	陳　媛	(岐阜・中京商業)
64.	7	馬　佳	(徳島・明徳義塾)
65.	8	馬　佳	(徳島・明徳義塾)
66.	9	武田　明子	(大阪・四天王寺)

◆ダブルス

□女　子

57.	昭63	松本　雪乃	(神奈川·白鵬女子)
		佐藤　利香	
58.	平元	佐藤　利香	(神奈川·白鵬女子)
		河合　雅世	
59.	2	河合　雅世	(神奈川·白鵬女子)
		青池　優美	
60.	3	平井由規子	(神奈川·白鵬女子)
		福田　正美	
61.	4	松岡　りか	(大阪·四天王寺)
		大槻　洋子	
62.	5	河村　朋枝	(宮城·仙台育英学園)
		塩見亜矢子	
63.	6	益田　誌保	(宮城·仙台育英学園)
		米倉　知子	
64.	7	川越　真由	(大阪·四天王寺)
		武田　明子	
65.	8	川越　真由	(大阪·四天王寺)
		武田　明子	
66.	9	川越　真由	(大阪·四天王寺)
		武田　明子	

ソフトテニス

□男　子

◆団体

昭63	九州工	(福岡)
平元	鶴　嶺	(神奈川)
2	香川西	(香川)
3	高田商	(奈良)
4	三　重	(三重)
5	高田商	(奈良)
6	高田商	(奈良)
7	三　重	(三重)
8	高田商	(奈良)
9	三　重	(三重)

◆個人

昭63　博村貴夫·長手裕介 (奈良·高田商)
平元　山城和裕·岡本圭司 (広島·広島山陽)
2　南森直人·村中弘明 (奈良·高田商)
3　山本晃伸·村中弘明 (奈良·高田商)
4　渡部史亘·石岡雅也 (北海道·北海道工)
5　北村日出秋·峯田敬也 (京都·鳥羽)
6　中村雅司·中村雅己 (石川·小松工)
7　橋本雅巳·川又浩司 (香川·香川西)
8　東　　司·渡邊彦継 (奈良·高田商)
9　花田直弥·岩瀬峰尊 (三重·三重)

□女　子

◆団体

昭63	熊本中央女	(熊本)
平元	中村学園	(福岡)
2	熊本中央女	(熊本)
3	清水ヶ丘	(広島)
4	群馬女短附	(群馬)
5	広島女子商	(広島)
6	広島女子商	(広島)
7	広島女子商	(広島)
8	広島女子商	(広島)
9	中村学園	(福岡)

◆個人

昭63　稲田増美·保田智子 (福岡·中村学園)
平元　鈴木久子·本橋尚子 (群馬·群馬女短附)
2　後藤由紀·足羽美穂子 (大阪·淀之水)
3　益田真喜·八谷千晶 (広島·広島女商)
4　大杉瑞穂·宮地雄子 (福岡·中村学園)
5　大杉瑞穂·宮地雄子 (福岡·中村学園)
6　東　尚子·石川聡子 (広島·広島女商)
7　石川和美·砂本佐知子 (広島·広島女商)
8　油井久美·高岡由美香 (大阪·淀之水)
9　坂下真知子·田中美里 (福岡·中村学園)

ハンドボール

全国高等学校総合体育大会

□男　子

39.	昭63	小　　禄	(沖縄)
40.	平元	浦 和 実	(埼玉)
41.	2	下 松 工	(山口)
42.	3	熊本市商	(熊本)
43.	4	下 松 工	(山口)
44.	5	富　　岡	(群馬)
45.	6	香川中央	(香川)
46.	7	横浜商工	(神奈川)
47.	8	横浜商工	(神奈川)

49. 9 北　陸 （福井）

□女　子

39. 昭63 浦和実 （埼玉）
40. 平元 名短大付 （愛知）
41. 2 聖和学園 （宮城）
42. 3 宣　真 （大阪）
43. 4 名短大付 （愛知）
44. 5 名短大付 （愛知）
45. 6 洛　北 （京都）
46. 7 福井商 （福井）
47. 8 四天王寺 （大阪）
48. 9 名短大付 （愛知）

サ　ッ　カ　ー

昭63 国　見 （長崎）
平元 清水市商 （静岡）
2 清水市商 （静岡）
3 清水東 （静岡）
4 徳島市立 （徳島）
5 国　見 （長崎）
6 清水市商 （静岡）
7 習志野 （千葉）
8 清水市商 （静岡）
9 東福岡 （福岡）

ラ　グ　ビ　ー

68.	昭63	茗溪学園高（茨城）		決勝戦中止
		大阪工大高（大阪）		両者優勝
69.	平元	天理高（奈良）	14- 4	啓光学園高
70.	2	熊谷工高（埼玉）	19- 9	天理高
71.	3	啓光学園高（大阪）	28- 8	國學院大学久我山高
72.	4	伏見工高（京都）	15-10	啓光学園高
73.	5	相模台工高（神奈川）	19- 6	東京農大第二高
74.	6	相模台工高（神奈川）	27-12	長崎北陽台高
75.	7	大阪工大高（大阪）	50-10	秋田工高
76.	8	西陵商（愛知）	26-25	啓光学園高
77.	9	國學院大学久我山高（東京）	33-29	伏見工高

バ　ド　ミ　ン　ト　ン

□男　子

◆学校対抗

昭63 上　尾 （埼玉）
平元 熊本商科大付属 （熊本）
2 常総学院 （茨城）
3 常総学院 （茨城）
4 常総学院 （茨城）
5 高松商業 （香川）
6 上　尾 （埼玉）
7 上　尾 （埼玉）
8 八代東 （熊本）
9 上　尾 （埼玉）

◆シングルス

昭63 須賀　隆弘 （埼玉・上尾）
平元 磯部　和弘 （茨城・常総学院）
2 岸田　明宏 （大阪・此花学院）
3 片岡詔市郎 （大阪・此花学院）
4 西田　渉 （南北海道・札幌第一）
5 中村　祐樹 （神奈川・法政大学第二）
6 山田　英孝 （埼玉・上尾）
7 舛田　圭太 （石川・金沢市立工業）
8 舛田　圭太 （石川・金沢市立工業）
9 中西　洋介 （埼玉・上尾）

◆ダブルス

昭63 中橋一晃・平井　肇
（滋賀・延暦寺学園比叡山）
平元 佐藤嘉伸・郷路一郎
（南北海道・札幌第一）
2 斉藤一裕・大山宏司
（茨城・常総学院）
3 太田慎二・石橋秀法
（千葉・千葉敬愛）
4 加賀谷洋・箭内将人
（埼玉・上尾）
5 樋渡順也・矢部正博
（茨城・常総学院）
6 下鳥洋樹・高嶋　進
（茨城・常総学院）
7 青木孝徳・山田浩史
（茨城・常総学院）
8 大東忠司・木下伸介
（熊本・八代東）

9　坂本修一·小島祐造
（茨城·常総学院）

□女　子

◆学校対抗

昭63　四條畷学園　（大阪）
平元　四條畷学園　（大阪）
2　佐賀女子　（佐賀）
3　熊本中央女子　（熊本）
4　四條畷学園　（大阪）
5　四條畷学園　（大阪）
6　四天王寺　（大阪）
7　高岡女子　（富山）
8　埼玉栄　（埼玉）
9　埼玉栄　（埼玉）

◆シングルス

昭63　水井妃佐子　（大阪·四條畷学園）
平元　水井妃佐子　（大阪·四條畷学園）
2　井田　貴子　（埼玉·埼玉栄）
3　水井　泰子　（大阪·四條畷学園）
4　水井　泰子　（大阪·四條畷学園）
5　中山智香子　（北北海道·旭川実業）
6　山田　潤子　（富山·高岡女子）
7　関本　祥子　（埼玉·埼玉栄）
8　閤　敏娜　（富山·高岡女子）
9　閤　敏娜　（富山·高岡西）

◆ダブルス

昭63　中原敬子·甲斐美和
（熊本·熊本中央女子）
平元　宮村愛子·松田治子
（熊本·熊本中央女子）
2　阪本雅子·渡邊真由美
（熊本·熊本信愛女学院）
3　橋本淳子·山田裕美
（宮城·聖ウルスラ学院）
4　山田裕美·貴田　泉
（宮城·聖ウルスラ学院）
5　増茂孝枝·中山智香子
（北北海道·旭川実業）
6　市橋美紀·鬼頭加代
（大阪·四條畷学園）
7　中島珠美·片糸由希子
（石川·金沢向陽）
8　杉浦美幸·永峰弘子
（熊本·熊本信愛女学院）
9　田井美幸·舛田　恵
（石川·金沢向陽）

ソフトボール

□女　子

40.　昭63　夙川学院高　（兵庫）
41.　平元　夙川学院高　（兵庫）
42.　2　夙川学院高　（兵庫）
43.　3　夙川学院高　（兵庫）
44.　4　星野女子高　（埼玉）
45.　5　夙川学院高　（兵庫）
46.　6　厚木商業高　（神奈川）
47.　7　大田原女子高　（栃木）
48.　8　白鴎大足利高　（栃木）
49.　9　星野女子高　（埼玉）

□男　子

23.　昭63　千葉敬愛高　（千葉）
24.　平元　岡豊高　（高知）
25.　2　関東学園大高　（群馬）
26.　3　鹿屋農業高　（鹿児島）
27.　4　新島学園高　（群馬）
28.　5　野々市明倫　（石川）
29.　6　沼津学園高　（静岡）
30.　7　岡豊高　（高知）
31.　8　多度津工業高　（香川）
32.　9　多度津工業高　（香川）

相撲

◆団体

66.　昭63　明大中野　（東京）
67.　平元　金沢市立工　（石川）
68.　2　明大中野　（東京）
69.　3　鰺ケ沢　（青森）
70.　4　埼玉栄　（埼玉）
71.　5　弘前実　（青森）
72.　6　報徳学園　（兵庫）
73.　7　熊本農　（熊本）

74. 8 三本木農 (青森)
75. 9 明徳義塾 (高知)

◆個人
66. 昭63 田代 勝寿 (秋田・金足農業)
67. 平元 尾曽 武人 (茨城・水戸農)
68. 2 加藤 耕一 (東京・目黒)
69. 3 出島 武春 (石川・金沢市立工)
70. 4 岡本 篤 (埼玉・埼玉栄)
71. 5 田宮 啓司 (鳥取・鳥取城北)
72. 6 志賀 太祐 (東京・明大中野)
73. 7 矢島 健一 (東京・目黒)
74. 8 小笠原史男 (青森・三本木農)
75. 9 三好 正人 (大阪・長尾谷)

柔　　道

◆団体
□男　子
昭63 東海大第五 (福岡)
平元 天　　理 (奈良)
2 東海大相模 (神奈川)
3 天　　理 (奈良)
4 世田谷学園 (東京)
5 東海大相模 (神奈川)
6 東海大相模 (神奈川)
7 国 士 舘 (東京)
8 桐蔭学園 (神奈川)
9 世田谷学園 (東京)

□女　子
平成2 夙川学院 (兵庫)
3 夙川学院 (兵庫)
4 柳　　川 (福岡)
5 柳　　川 (福岡)
6 夙川学院 (兵庫)
7 福岡工大 (福岡)
8 土浦日大 (茨城)
9 柳　　川 (福岡)

◆軽量級
昭63 小田垣公三 (京都・洛南)
平元 隈部 佳克 (熊本・嘉穂)
2 園田 隆二 (福岡・柳川)
3 井川 清隆 (静岡・静岡学園)
4 佐藤 敏裕 (福岡・南筑)
5 増永 光俊 (熊本・鎮西)
6 堤時 貞 (東京・国士舘)
7 石井 一行 (宮崎・宮崎日大)
8 内柴 正人 (東京・国士舘)
9 小川 武志 (神奈川・日大藤沢)

◆軽中量級
昭63 赤坂 哲生 (熊本・九州学院)
平元 赤坂 哲生 (熊本・九州学院)
2 岩川 武久 (宮崎・都城商)
3 中村 兼三 (福岡・東海大第五)
4 斉藤 健 (茨城・土浦日大)
5 浅見 重紀 (兵庫・高砂)
6 橋本 克美 (島根・開星)
7 植山 亮 (福岡・東海大第五)
8 斎藤 順道 (北海道・北海)
9 西野 公章 (群馬・前橋育英)

◆中量級
昭63 本田 勝義 (福岡・東海大第五)
平元 荒木 伸知 (熊本・東海大第二)
2 武田 雅也 (広島・近大福山)
3 大村 恭一 (静岡・東海大第一)
4 瀧本 誠 (東京・世田谷学園)
5 窪田 和則 (東京・国士舘)
6 安達 元貴 (宮城・東北)
7 斎藤 制剛 (北海道・北海)
8 齋藤 純平 (山形・山形工業)
9 筒井 友和 (埼玉・埼玉栄)

◆軽重量級
昭63 中村 佳央 (福岡・東海大五)
平元 田辺 勝 (東京・世田谷学園)
2 松本 勇治 (神奈川・東海大相模)
3 福田 隆文 (熊本・東海大第二)
4 繁昌 久哲 (宮崎・都城商業)
5 中野 尚信 (埼玉・埼玉栄)
6 中野 尚信 (埼玉・埼玉栄)
7 飛塚 雅俊 (山形・山形工業)
8 岡本 栄治 (富山・小杉)
9 竹下 忠良 (東京・世田谷学園)

◆重量級
昭63 山田 利彦 (神奈川・東海大相模)

平元	岩田　桂司	（神奈川·東海大相模）
2	真喜志慶治	（沖縄·沖縄尚学）
3	窪田　　茂	（神奈川·東海大相模）
4	久保田義久	（熊本·九州学院）
5	石崎　眞之	（愛媛·新田）
6	村元　辰寛	（奈良·天理）
7	井上　康生	（神奈川·東海大相模）
8	本郷　至道	（東京·世田谷学園）
9	上杉　昭文	（福岡·東海大第五）

ス　　キ　　ー

□男　子

◆団体総合

38.	昭63	東奥義塾	（青森）
39.	平元	東海大四	（北海道）
40.	2	東奥義塾	（青森）
41.	3	中野実業	（長野）
42.	4	中野実業	（長野）
43.	5	中野実業	（長野）
44.	6	飯山南	（長野）
45.	7	東奥義塾	（青森）
46.	8	飯山南	（長野）
47.	9	北　照	（南北海道）

◆ジャイアントスラローム

38.	昭63	木村　公宣	（青森.東奥義塾）
39.	平元	石岡　拓也	（青森.東奥義塾）
40.	2	川口　城二	（北海道.東海大四）
41.	3	川口　城二	（北海道.東海大四）
42.	4	坂田　　誠	（北海道.遠軽）
43.	5	坂田　　誠	（北北海道.遠軽）
44.	6	山田　慎一	（富山.富山第一）
45.	7	白土　晶一	（南北海道.札幌商）
46.	8	島田　大輔	（南北海道.札幌商）
47.	9	吉岡　大輔	（南北海道.北照）

◆スラローム

38.	昭63	木村　公宣	（青森.東奥義塾）
39.	平元	石岡　拓也	（青森.東奥義塾）
40.	2	伊藤　　薫	（青森.東奥義塾）
41.	3	伊藤　　薫	（青森.東奥義塾）
42.	4	竹田　征吾	（新潟.関根学園）
43.	5	三浦　義人	（南北海道.東海大四）
44.	6	工藤　昌己	（青森.東奥義塾）
45.	7	皆川賢太郎	（南北海道.北照）
46.	8	吉岡　大輔	（南北海道.北照）
47.	9	加藤　卓哉	（新潟.関根学園）

◆スペシャルジャンプ

38.	昭63	岡部　孝信	（北海道.駒大岩見沢）
39.	平元	東　　輝	（北海道.駒大岩見沢）
40.	2	笠間　法孝	（北海道.札幌日大）
41.	3	杉山　恵亮	（長野.飯山北）
42.	4	佐藤　昌幸	（北海道.余市）
43.	5	佐藤　昌幸	（北北海道.余市）
44.	6	宮崎　　優	（長野.飯山北）
45.	7	斎藤慎一郎	（南北海道.北照）
46.	8	仲村　和博	（南北海道.北照）
47.	9	仲村　和博	（南北海道.北照）

◆コンバインド

38.	昭63	古川　純一	（青森.東奥義塾）
39.	平元	森　　敏	（長野.飯山北）
40.	2	富井　　彦	（長野.下高井農林）
41.	3	富井　　彦	（長野.下高井農林）
42.	4	大竹　太志	（新潟.堀之内）
43.	5	中村　幸志	（長野.白馬）
44.	6	佐藤　武留	（長野.東部）
45.	7	宮尾　憲典	（長野.白馬）
46.	8	山崎　慎一	（長野.飯山南）
47.	9	畠山　陽輔	（秋田.花輪）

◆クロスカントリー15km

38.	昭63	松浦　　元	（北海道.旭大高）
39.	平元	望月　幸男	（新潟.関根学園）

◆クロスカントリー10km クラシカル

40.	2	堀米　光男	（長野.中野実業）
41.	3	堀米　光男	（長野.中野実業）
42.	4	堀米　光男	（長野.中野実業）
43.	5	島田　敏充	（新潟.十日町）
44.	6	島田　武彦	（新潟.飯山南）
45.	7	池田　泰之	（新潟.新井）
46.	8	清水目義尚	（青森.野辺地）
47.	9	山岸　　修	（長野.中野実業）

◆クロスカントリー15km フリー

40.	2	奥山　清人	（山形.北村山）
41.	3	神津　正昭	（長野.中野実業）

42.	4	神津　正昭	(長野.中野実業)
43.	5	高橋幸一郎	(長野.飯山南)
44.	6	島田　武彦	(長野.飯山南)
45.	7	蛯沢　大輔	(青森.東奥義塾)
46.	8	蛯沢　大輔	(青森.東奥義塾)
47.	9	高口　嘉樹	(北北海道.旭大高)

◆リレー

38.	昭63	金　山	(山形)
39.	平元	北村山	(山形)
40.	2	北村山	(山形)
41.	3	中野実業	(長野)
42.	4	中野実業	(長野)
43.	5	中野実業	(長野)
44.	6	飯山南	(長野)
45.	7	野辺地	(青森)
46.	8	飯山南	(長野)
47.	9	飯山南	(長野)

□女　子

◆団体総合

38.	昭63	白　馬	(長野)
39.	平元	白　馬	(長野)
40.	2	野辺地	(青森)
41.	3	新　井	(新潟)
42.	4	旭川大	(北海道)
43.	5	松　代	(新潟)
44.	6	六日町	(新潟)
45.	7	花　輪	(秋田)
46.	8	花　輪	(秋田)
47.	9	大　鰐	(青森)

◆ジャイアントスラローム

38.	昭63	岡崎　若華	(山形.山形日大)
39.	平元	森下　亜子	(新潟.六日町)
40.	2	切久保深雪	(長野.白馬)
41.	3	佐藤　友美	(北海道.小樽双葉)
42.	4	佐藤　友美	(北海道.小樽双葉)
43.	5	佐藤　友美	(南北海道.小樽双葉)
44.	6	村山　裕美	(南北海道.札幌第一)
45.	7	竹田　未央	(新潟.関根学園)
46.	8	斎藤　由美	(北北海道.歌志内)
47.	9	斎藤　由美	(北北海道.歌志内)

◆スラローム

38.	昭63	丸山　有紀	(長野.白馬)
39.	平元	切久保深雪	(長野.白馬)
40.	2	切久保深雪	(長野.白馬)
41.	3	切久保深雪	(長野.白馬)
42.	4	山川　純子	(新潟.関根学園)
43.	5	広井　法代	(新潟.湯沢)
44.	6	村山　裕美	(南北海道.札幌第一)
45.	7	野木　真美	(南北海道.札幌第一)
46.	8	村山　裕美	(南北海道.札幌第一)
47.	9	阿部真理子	(南北海道.東海大四)

◆クロスカントリー5km クラシカル

38.	昭63	平沼さやか	(北海道.旭大高)
39.	平元	佐藤恵美子	(長野.中野実業)
40.	2	五十嵐陽子	(青森.野辺地)
41.	3	竹田　優子	(新潟.新井)
42.	4	大高　友美	(北海道.旭大高)
43.	5	後藤　鹿子	(新潟.松代)
44.	6	若井　涼子	(新潟.六日町)
45.	7	夏見　　円	(北北海道.旭大高)
46.	8	村木真紀子	(秋田.花輪)
47.	9	石田　正子	(北海道.旭大高)

◆クロスカントリー10km フリー

38.	昭63	三ケ田紀子	(秋田.花輪)
39.	平元	太田裕里子	(青森.大鰐)
40.	2	五十嵐陽子	(青森.野辺地)
41.	3	横山寿美子	(新潟.新井)
42.	4	大高　友美	(北海道.旭大高)
43.	5	大高　友美	(北北海道.旭大高)
44.	6	若井　涼子	(新潟.六日町)
45.	7	大口奈津美	(長野.中野実業)
46.	8	若井　涼子	(新潟.六日町)
47.	9	久保　美幸	(青森.大鰐)

◆リレー

38.	昭63	新　井	(新潟)
39.	平元	新　井	(新潟)
40.	2	野辺地	(青森)
41.	3	新　井	(新潟)
42.	4	飯山北	(長野)
43.	5	中野実業	(長野)
44.	6	中野実業	(長野)
45.	7	花　輪	(秋田)
46.	8	花　輪	(秋田)
47.	9	大　鰐	(青森)

スケート

◆スピード

□男子

◆500m

38.	昭63	堀井　学	(北海道・白樺学園)	38.74
39.	平元	堀井　学	(北海道・白樺学園)	38.21
40.	2	武田豊樹	(北海道・釧路緑ヶ岡)	38.53
		新保堅進	(群馬・榛名)	38.53
41.	3	清水宏保	(北海道・白樺学園)	37.68
42.	4	高橋　進	(北海道・釧路商業)	38.45
43.	5	佐々木浩司	(北海道・釧路商業)	38.40
44.	6	今井裕介	(長野・佐久)	38.27
45.	7	西岡和哉	(北海道・池田)	37.94
46.	8	井出真博	(長野・野沢北)	39.08
47.	9	川田和範	(北海道・帯広南商業)	37.83

◆1000m

38.	昭63	競技なし		
39.	平元	鈴木幸太郎	(北海道・白樺学園)	1.18.73
40.	2	清水宏保	(北海道・白樺学園)	1.19.86
41.	3	武田豊樹	(北海道・釧路緑ヶ岡)	1.17.02
42.	4	石岡　守	(北海道・池田)	1.19.16
43.	5	宮川洋平	(長野・佐久)	1.18.21
44.	6	山本豪己	(東京・駒場学園)	1.17.66
45.	7	今井裕介	(長野・佐久)	1.14.98
46.	8	井出良直	(長野・佐久長聖)	1.20.24
47.	9	野本　繁	(長野・小海)	1.18.44

◆1500m

38.	昭63	小原　聡	(北海道・北海道工業)	2.04.65
39.	平元	小田智樹	(岩手・龍沢)	2.03.62
40.	2	清水宏保	(北海道・白樺学園)	2.02.55
41.	3	中村賢治	(北海道・北海道工業)	1.58.96
42.	4	石岡　守	(北海道・池田)	2.01.27
43.	5	高橋壮一	(北海道・釧路緑ヶ岡)	2.02.43
44.	6	今井裕介	(長野・佐久)	1.59.93
45.	7	今井裕介	(長野・佐久)	1.56.74
46.	8	幅田洋司	(北海道・白樺学園)	2.03.21
47.	9	小林正暢	(北海道・白樺学園)	1.59.95

◆5000m

38.	昭63	小竹直喜	(北海道・白樺学園)	7.17.89
39.	平元	白幡圭史	(北海道・釧路商業)	7.21.79
40.	2	糸川敏彦	(北海道・白樺学園)	7.11.50
41.	3	大槻　嘉	(北海道・苫小牧南)	7.22.67
42.	4	糸川敏彦	(北海道・白樺学園)	7.08.54
43.	5	高橋一郎	(北海道・釧路緑ヶ岡)	7.17.54
44.	6	渡辺　充	(北海道・白樺学園)	7.31.68
45.	7	渡辺　充	(北海道・白樺学園)	7.03.70
46.	8	徳村光晃	(北海道・北海道工業)	7.24.38
47.	9	半崎泰生	(北海道・白樺学園)	7.15.17

◆10000m

38.	昭63	小竹直喜	(北海道・白樺学園)	15.10.08
39.	平元	白幡圭史	(北海道・釧路商業)	15.08.48
40.	2	糸川敏彦	(北海道・白樺学園)	15.01.99
41.	3	野崎貴裕	(北海道・本別)	15.04.34
42.	4	糸川敏彦	(北海道・白樺学園)	14.40.27
42.	5	高橋一郎	(北海道・釧路緑ヶ岡)	15.35.11
43.	6	根本茂一	(北海道・釧路緑ヶ岡)	15.12.45
44.	7	渡辺　充	(北海道・白樺学園)	14.38.81
45.	8	伊勢俊一	(青森・百石)	15.42.09
46.	9	徳村光晃	(北海道・北海道工業)	14.44.45

◆2000mリレー

38.	昭63	白樺学園	(北海道) 2.36.55
39.	平元	白樺学園	(北海道) 2.38.02
40.	2	白樺学園	(北海道) 2.36.97
41.	3	白樺学園	(北海道) 2.32.43
42.	4	白樺学園	(北海道) 2.35.10
43.	5	白樺学園	(北海道) 2.34.65
44.	6	池　田	(北海道) 2.34.93
45.	7	白樺学園	(北海道) 2.32.49
46.	8	白樺学園	(北海道) 2.34.38
47.	9	佐久長聖	(長野) 2.35.20

□女子

◆500m

38.	昭63	島崎京子	(北海道・白樺学園)	42.31
39.	平元	島崎京子	(北海道・白樺学園)	42.68
40.	2	梶里恵子	(北海道・池田)	41.88
41.	3	大竹口綾	(北海道・駒大苫小牧)	41.83
42.	4	香川真由美	(北海道・駒大苫小牧)	43.10
43.	5	大竹口綾	(北海道・駒大苫小牧)	42.83
44.	6	土屋深雪	(群馬・嬬恋)	43.19
45.	7	新谷志保美	(長野・伊那北)	41.41
46.	8	新谷志保美	(長野・伊那北)	43.08
47.	9	大菅小百合	(北海道・白樺学園)	41.14

◆1000m

38.	昭63	上原三枝	(長野・諏訪清陵)	1.28.55

39. 平元 島崎京子(北海道・白樺学園) 1.28.63
40. 2 増地美穂(北海道・池田) 1.28.72
41. 3 三宮恵利子(北海道・釧路星園) 1.24.44
42. 4 香川真由美(北海道・駒大苫小牧) 1.28.22
43. 5 土屋和花子(長野・野沢北) 1.27.19
44. 6 土屋深雪(群馬・嬬恋) 1.26.61
45. 7 外ノ池亜希(長野・東海大三) 1.25.09
46. 8 外ノ池亜希(長野・東海大三) 1.28.03
47. 9 大菅小百合(北海道・白樺学園) 1.26.28

◆1500m

38. 昭63 堀内佳子(長野・諏訪二葉) 2.16.38
39. 平元 鐵田貴子(北海道・駒大苫小牧) 2.15.03
40. 2 清水美映(長野・松本深志) 2.12.94
41. 3 根本奈美(北海道・白樺学園) 2.09.42
42. 4 清水美映(長野・松本深志) 2.13.31
43. 5 虎口貴子(北海道・桜丘) 2.13.86
44. 6 外ノ池亜希(長野・東海大三) 2.16.77
45. 7 外ノ池亜希(長野・東海大三) 2.07.88
46. 8 安田有希(長野・東海大三) 2.15.57
47. 9 宮下笑美(北海道・帯広南商業) 2.15.59

◆3000m

38. 昭63 山本宏美(北海道・駒大苫小牧) 4.51.93
39. 平元 鐵田貴子(北海道・駒大苫小牧) 4.42.71
40. 2 清水美映(長野・松本深志) 4.56.17
41. 3 小笠原みき(北海道・釧路星園) 4.40.40
42. 4 清水美映(長野・松本深志) 4.44.19
43. 5 堀川友里(北海道・池田) 4.44.91
44. 6 堀川友里(北海道・池田) 4.41.59
45. 7 土橋貴子(長野・佐久長聖) 4.38.85
46. 8 妹尾栄里子(北海道・白樺学園) 4.53.25
47. 9 宮崎聡子(群馬・嬬恋) 4.41.80

◆2000mリレー

38. 昭63 白樺学園(北海道) 2.52.33
39. 平元 駒大苫小牧(北海道) 2.52.35
40. 2 池田(北海道) 2.51.95
41. 3 駒大苫小牧(北海道) 2.49.79
42. 4 駒大苫小牧(北海道) 2.53.44
43. 5 池田(北海道) 2.53.05
44. 6 白樺学園(北海道) 2.56.30
45. 7 池田(北海道) 2.48.69
46. 8 駒大苫小牧(北海道) 2.52.36
47. 9 帯広南商業(北海道) 2.50.68

◆フィギュア

□男子

38. 昭63 鍵山正和(愛知・愛工大名電)
39. 平元 及川史弘(宮城・東北学院)
40. 2 及川史弘(宮城・東北学院)
41. 3 相吉学(千葉・市立船橋)
42. 4 相吉学(千葉・市立船橋)
43. 5 重松直樹(埼玉・浦和学院)
44. 6 飯塚弘記(東京・暁星)
45. 7 田村岳斗(宮城・東北)
46. 8 本田武史(宮城・東北)
47. 9 上野貴史(福岡・香椎)

□女子

38. 昭63 八木沼純子(東京・品川)
39. 平元 須田敦子(東京・品川)
40. 2 今川知子(兵庫・甲南女子)
41. 3 小岩井久美子(愛知・東海女子)
42. 4 小岩井久美子(愛知・東海女子)
43. 5 横谷花絵(埼玉・淑徳与野)
44. 6 金澤由香(宮城・泉松陵)
45. 7 種田久美子(宮城・東北)
46. 8 金澤由香(宮城・泉松陵)
47. 9 村主章枝(神奈川・清泉女子学院)

◆アイスホッケー

38. 昭63 釧路工業(北海道) 5-3 釧路江南(北海道)
39. 平元 駒大苫小牧(北海道) 10-2 釧路短附(北海道)
40. 2 駒大苫小牧(北海道) 8-3 釧路短附(北海道)
41. 3 駒大苫小牧(北海道) 4-3 釧路江南(北海道)
42. 4 釧路江南(北海道) 3-2 駒大苫小牧(北海道)
43. 5 駒大苫小牧(北海道) 7-0 釧路江南(北海道)
44. 6 駒大苫小牧(北海道) 9-1 釧路江南(北海道)
45. 7 駒大苫小牧(北海道) 12-4 釧路江南(北海道)
46. 8 駒大苫小牧(北海道) 5-2 釧路工業(北海道)
47. 9 駒大苫小牧(北海道) 9-2 埼玉栄(埼玉)

漕艇

□男子

◆ナックル・フォア

昭63 膳所(滋賀)
平元 江戸川学園取手(茨城)

2　江戸川学園取手（茨城）

◆舵手付フォア

昭63	広島皆実	（広島）
平元	会津	（福島）
2	八尾	（富山）
3	八尾	（富山）
4	岡谷南	（長野）
5	柳学園	（兵庫）
6	美濃加茂	（岐阜）
7	済々黌	（熊本）
8	田名部	（青森）
9	関西	（岡山）

◆ダブル・スカル

平3	八尾	（富山）
4	富士河口湖	（山梨）
5	長浜農	（滋賀）
6	瀬田工	（滋賀）
7	八百津	（岐阜）
8	伏見工	（京都）
9	八百津	（岐阜）

◆シングル・スカル

昭63	木村満	（北海道・函館水産）
平元	牛渡順	（宮城・石巻工）
2	秦修治	（愛媛・今治北）
3	武田治和	（福井・美方）
4	下田友康	（富山・八尾）
5	春名真一	（岡山・備前）
6	赤丸裕樹	（富山・八尾）
7	町田拓郎	（静岡・新居）
8	小堀俊明	（福井・小浜水産）
9	木村昇	（宮城・佐沼）

□女　子

◆ナックル・フォア

昭63	大津	（滋賀）
平元	七尾	（石川）
2	八幡商	（滋賀）

◆舵手付フォア

昭63	山城	（京都）
平元	八尾	（富山）
2	青森中央	（青森）
3	八尾	（富山）
4	八尾	（富山）
5	八幡商	（滋賀）
6	八幡商	（滋賀）
7	柳学園	（兵庫）
8	二俣	（静岡）
9	八尾	（富山）

◆ダブル・スカル

平3	熊商大附	（熊本）
4	二俣	（静岡）
5	小松	（石川）
6	済々黌	（熊本）
7	二俣	（静岡）
8	宮川	（三重）
9	膳所	（滋賀）

◆シングル・スカル

昭63	曽根ひとみ	（山梨・富士河口湖）
平元	石原昭子	（富山・八尾）
2	斎藤理恵	（滋賀・膳所）
3	田村妙子	（滋賀・大津）
4	佐藤亜紀	（山形・酒田西）
5	風祭さち子	（埼玉・南稜）
6	滝本待子	（富山・八尾）
7	熊沢妃郁	（岐阜・加茂）
8	小林徐子	（広島・盈進）
9	木澤由佳子	（滋賀・長浜農業）

剣　道

□男　子

◆団体

35.	昭63	鹿児島商工	（鹿児島）
36.	平元	ＰＬ学園	（大阪）
37.	2	阿蘇	（熊本）
38.	3	高千穂	（宮崎）
39.	4	西大寺	（岡山）
40.	5	福岡大学附属大濠	（福岡）
41.	6	ＰＬ学園	（大阪）
42.	7	福岡大学附属大濠	（福岡）
43.	8	阿蘇	（熊本）
44.	9	高輪	（東京）

◆個人

35.	昭63	福井　賢次	(香川・琴平)
36.	平元	山下　忠典	(京都・宇治)
37.	2	佐藤　充伸	(宮城・小牛田農林)
38.	3	兼松　希考	(大阪・清風)
39.	4	本間　彰人	(宮崎・宮崎北)
40.	5	山田　薫	(秋田・秋田商業)
41.	6	曽根　将臣	(和歌山・和歌山東)
42.	7	平岡　右照	(茨城・水戸短大附属)
43.	8	糸山　仁和	(長崎・長崎南山)
44.	9	小津野貴謙	(岡山・西大寺)

□女子

◆団体

35.	昭63	ＰＬ学園	(大阪)
36.	平元	ＰＬ学園	(大阪)
37.	2	ＰＬ学園	(大阪)
38.	3	阿蘇	(熊本)
39.	4	左沢	(山形)
40.	5	阿蘇	(熊本)
41.	6	長崎西	(長崎)
42.	7	阿蘇	(熊本)
43.	8	阿蘇	(熊本)
44.	9	高千穂	(宮崎)

◆個人

35.	昭63	谷山百合香	(鹿児島・鹿児島)
36.	平元	矢野　幸恵	(千葉・一宮商業)
37.	2	高田　智子	(大阪・ＰＬ学園)
38.	3	大村　恵理	(岡山・西大寺)
39.	4	鍋山　玲子	(福岡・筑陽学園)
40.	5	有馬　佳代	(鹿児島・神村学園)
41.	6	岸本志津子	(岡山・西大寺)
42.	7	鎌田　暖代	(山形・左沢)
43.	8	興梠あゆみ	(熊本・阿蘇)
44.	9	福永　香織	(熊本・阿蘇)

レスリング

◆団体戦

昭63	霞ヶ浦	(茨城)
平元	鹿児島商工	(鹿児島)
2	霞ヶ浦	(茨城)
3	霞ヶ浦	(茨城)
4	霞ヶ浦	(茨城)
5	霞ヶ浦	(茨城)
6	霞ヶ浦	(茨城)
7	霞ヶ浦	(茨城)
8	霞ヶ浦	(茨城)
9	霞ヶ浦	(茨城)

◆46kg級

昭63	川田　征勝	(岐阜・岐阜工業)
平元	山口　譲司	(京都・宇治)
2	針谷　豊	(群馬・西邑楽)
3	本田　原明	(鹿児島・鹿児島商工)
4	戸井田昌教	(茨城・霞ヶ浦)
5	楳沢　智治	(栃木・足工大附属)
6	上林　浩二	(岐阜・岐阜工業)
7	小竹　宏明	(鳥取・倉吉工業)
8	吉沢　克洋	(長野・北佐久農業)
9	松永　共広	(静岡・沼津学園)

◆50kg級

昭63	松野　繁	(群馬・西邑楽)
平元	森　進一	(鹿児島・鹿児島商工)
2	勝目　力也	(静岡・沼津学園)
3	勝目　力也	(静岡・沼津学園)
4	杉尾　和雄	(宮崎・宮崎工業)
5	長尾　勇気	(北海道・岩見沢農業)
6	久米　貴幸	(北海道・岩見沢農業)
7	大泉エイロン	(茨城・霞ヶ浦)
8	高橋　利典	(長野・上田西)
9	清野　大輔	(京都・立命館宇治)

◆54kg級

昭63	坪井　勇	(茨城・霞ヶ浦)
平元	井上　威	(茨城・霞ヶ浦)
2	星　政宏	(岩手・宮古商業)
3	木沢　美幸	(茨城・霞ヶ浦)
4	田南部　力	(北海道・岩見沢農業)
5	田南部　力	(北海道・岩見沢農業)
6	井上　謙二	(京都・網野)
7	野口　勝	(鹿児島・鹿屋中央)
8	船越　聡	(栃木・足工大附属)
9	水口　貴之	(京都・立命館宇治)

◆58kg級

昭63	山野　誠	(群馬・西邑楽)
平元	浜田　広嗣	(福岡・築上西)
2	長友　一美	(宮崎・宮崎第一)

3	杉山　貴光	（静岡・清水工業）
4	粟田　弘明	（栃木・足工大附属）
5	山口　　純	（茨城・霞ヶ浦）
6	竹花　良二	（長野・上田西）
7	栗尾　直樹	（茨城・霞ヶ浦）
8	太田　亮介	（茨城・土浦日大）
9	森岡　寛至	（大阪・近大附属）

◆63kg級

昭63	川島　健二	（愛知・星城）
平元	宮本　健二	（徳島・穴吹）
2	森田　俊男	（茨城・霞ヶ浦）
3	相磯　武仁	（静岡・沼津学園）
4	谷山　祐治	（鹿児島・鹿児島商工）
5	伊東　克佳	（茨城・霞ヶ浦）
6	小椋　啓介	（北海道・岩見沢農業）
7	今村　吉亜	（群馬・関東学園大附）
8	筧田　幸宏	（茨城・霞ヶ浦）
9	飯塚　　匡	（静岡・沼津学園）

◆68kg級

昭63	赤石　光輝	（青森・東奥義塾）
平元	横山　秀和	（秋田・秋田経法大附）
2	平野　晴美	（茨城・霞ヶ浦）
3	山下　哲生	（和歌山・南部）
4	織山　昭仁	（秋田・秋田商業）
5	大橋　理秀	（大阪・吹田）
6	大橋　理秀	（大阪・吹田）
7	大原　春基	（秋田・秋田商業）
8	池田　秀治	（茨城・霞ヶ浦）
9	菅　　太一	（東京・京北）

◆74kg級

昭63	中島　智彦	（秋田・秋田商業）
平元	荻田　剛志	（静岡・沼津学園）
2	小野瀬哲也	（茨城・霞ヶ浦）
3	木村　洋介	（北海道・北海）
4	山口　幸信	（茨城・霞ヶ浦）
5	中谷　尚志	（徳島・徳島東工業）
6	土居　克也	（茨城・霞ヶ浦）
7	大橋　理秀	（大阪・吹田）
8	藤田　尚志	（茨城・霞ヶ浦）
9	小幡　邦彦	（茨城・霞ヶ浦）

◆74kg以上級

昭63	藤田　和之	（千葉・八千代松陰）
平元	千綿　辰也	（鹿児島・鹿児島商工）

◆115kg以上級

平成2	新明　嘉規	（千葉・八千代松陰）
3	滝口　　徹	（山形・東根工業）
4	室谷　正憲	（和歌山・和歌山東）
5	吉田清太郎	（秋田・秋田商業）
6	吉田清太郎	（秋田・秋田商業）
7	長島　康弘	（群馬・館林）
8	矢野　　通	（東京・京北）
9	藤田　尚志	（茨城・霞ヶ浦）

弓　　道

□男　子

◆団体

昭63	焼津中央	（静岡）
平元	足工大付属	（栃木）
2	多度津工	（香川）
3	加治木工	（鹿児島）
4	西の京	（奈良）
5	御　津	（愛知）
6	倉吉西	（鳥取）
7	加治木工	（鹿児島）
8	石岡商	（茨城）
9	八代第一	（熊本）

◆個人

昭63	吉原　秀道	（熊本・八代第一）
平元	鮎川　隆文	（鹿児島・出水工）
2	清川　裕志	（東京・早稲田実）
3	佐山　秀夫	（栃木・足工大付属）
4	立川　公一	（大分・大分工）
5	清野　克也	（新潟・新津工）
6	松落登志二	（熊本・八代第一）
7	山本　高史	（石川・金沢市立工）
8	小田　鎌太	（香川・観音寺第一）
9	植田　宏和	（愛知・御津）

□女　子

◆団体

昭63	本　　荘	（秋田）
平元	宇部中央	（山口）
2	加治木工	（鹿児島）
3	飯田女子	（長野）
4	宇部中央	（山口）

5	八代第一	(熊本)
6	情報科学	(大分)
7	大阪福島女	(大阪)
8	伊勢崎女	(群馬)
9	八代第一	(熊本)

◆個人

昭63	渡久地球美	(沖縄・小禄)
平元	伊藤　三枝	(長野・長野吉田)
2	土木　眞希	(広島・三原)
3	東山　佳矢	(高知・土佐女)
4	岡山　瑞枝	(山口・下関南)
5	河村　梨香	(熊本・八代第一)
6	辻村　章子	(愛知・御津)
7	古江加代子	(宮崎・福島)
8	浅野　弘美	(富山・富山商)
9	吉田　洋子	(鳥取・倉吉西)

テ　ニ　ス

□男　子

◆団体

昭63	堀　　越	(東京)
平元	相模工大附	(神奈川)
2	堀　　越	(東京)
3	清　　風	(大阪)
4	柳　　川	(福岡)
5	柳　　川	(福岡)
6	堀　　越	(東京)
7	柳　　川	(福岡)
8	渋谷教育幕張	(千葉)
9	柳　　川	(福岡)

◆ダブルス

昭63	菊水・徳原	(兵庫・仁川学院)
平元	谷澤・近藤	(神奈川・相模工大附)
2	小野・本村	(福岡・柳川)
3	梅田・今村	(福岡・柳川)
4	石川・尾崎	(福岡・柳川)
5	岩渕・寺内	(福岡・柳川)
6	鈴木・石井	(東京・堀越)
7	杉山・小野田	(福岡・柳川)
8	岩見・石神	(千葉・渋谷教育幕張)
9	陳　・加藤	(福岡・柳川)

◆シングルス

昭63	山本　育史	(東京・堀越)
平元	増田健太郎	(神奈川・相模工大附)
2	金子　英樹	(東京・堀越)
3	本村　剛一	(福岡・柳川)
4	鈴木　貴男	(東京・堀越)
5	岩渕　　聡	(東京・堀越)
6	鈴木　貴男	(東京・堀越)
7	石井　弥起	(東京・堀越)
8	岩見　　亮	(千葉・渋谷教育幕張)
9	寺地　貴弘	(千葉・渋谷教育幕張)

□女　子

◆団体

昭63	園田学園	(兵庫)
平元	夙川学院	(兵庫)
2	富士見丘	(東京)
3	富士見丘	(東京)
4	湘南工科大附	(神奈川)
5	富士見丘	(東京)
6	富士見丘	(東京)
7	浦　　添	(沖縄)
8	富士見丘	(東京)
9	湘南工科大附	(神奈川)

◆ダブルス

昭63	伊達・高木	(兵庫・園田学園)
平元	木　・　釣	(東京・共栄学園)
2	中村・石松	(兵庫・園田学園)
3	藤井・道城	(東京・堀越)
4	望月・田中	(東京・堀越)
5	堀田・鳥羽	(大阪・四天王寺)
6	窪田・占部	(東京・富士見丘)
7	井上・井上	(沖縄・浦添)
8	占部・小畑	(東京・富士見丘)
9	藤原・西田	(大阪・四天王寺)

◆シングルス

昭63	伊達　公子	(兵庫・園田学園)
平元	沢松奈生子	(兵庫・夙川学院)
2	川崎　綾子	(兵庫・夙川学院)
3	杉山　　愛	(神奈川・湘南工大附)
4	田中　由夏	(東京・富士見丘)
5	佐伯　美穂	(東京・藤村女)
6	浅越しのぶ	(兵庫・園田学園)
7	井上　青香	(沖縄・浦添)

8　小畑　沙織　（東京・富士見丘）
9　伊東千佐世　（静岡・静岡市立）

登　　山

昭63　A：神戸（兵庫）、幸田（愛知）
吉城（岐阜）、石山（滋賀）
○B：吉城（岐阜）、三島（愛媛）
旭川東栄（北海道）、三田尻女（山口）
C：防府（山口）、作手（愛知）
長野（大阪）
平元　A：高知学芸（高知）、吉田（愛媛）
幸田（愛知）、神戸（兵庫）
○B：秋田北（秋田）、勝山（福井）
富士宮西（静岡）、幸田（愛知）
C：長野（大阪）、八幡浜工（愛媛）
小樽工（北海道）
2　A：山形南（山形）、防府（山口）
広島学院（広島）、青森工（青森）
○B：三田尻女（山口）、白石女（宮城）
高陽（広島）、大館鳳鳴（秋田）
C：大館鳳鳴（秋田）、白石工（宮城）
福岡（福岡）
3　A：日大三島（静岡）、防府（山口）
神戸（兵庫）、宗像（福岡）
○B：三田尻女（山口）、新居浜西（愛媛）、盛岡二（岩手）、白石女（宮城）
C：静岡東（静岡）、盛岡工（岩手）
広島学院（広島）
4　A：長崎北陽台（長崎）、修道（広島）
山口（山口）、吉城（岐阜）
○B：防府（山口）、石山（滋賀）
高鍋（宮崎）、富士宮西（静岡）
C：防府（山口）、鳥栖（佐賀）
都城泉ヶ丘（宮崎）
5　A：安曇川（滋賀）、盛岡工（岩手）
大曲（秋田）、防府（山口）
○B：高陽（広島）、鹿沼東（栃木）
益田（島根）、三田尻女（山口）
C：日大三島（静岡）、長崎西（長崎）
平舘（岩手）
6　A：①広島学院（広島）
②武生工（福井）
③北野（大阪）角館（秋田）
⑤防府（山口）⑥膳所（滋賀）
○B：①桜井（富山）
②就実（岡山）
③高陽（広島）長崎西（長崎）
⑤大曲（秋田）三田尻女（山口）
C：①桜井（富山）
②韮崎（山梨）
③三条東（新潟）鳥栖工（佐賀）
⑤幸田（愛知）⑥九州国際大附属（福岡）
7　A：①鳥取東（鳥取）
②長崎西（長崎）
③安曇川（滋賀）盛岡工（岩手）
⑤船橋東（千葉）⑥竹田（大分）
○B：①三田尻女（山口）
②長崎北陽台（長崎）
③就実（岡山）船橋東（千葉）
⑤大迫（岩手）鳥取西（鳥取）
⑥新潟中央（新潟）
C：①長崎北陽台（長崎）
②平舘（岩手）
③水口東（滋賀）小松工（石川）
⑤修道（広島）静岡東（静岡）
⑥船津（岐阜）
8　A：①韮崎（山梨）
②防府（山口）
③加治木（鹿児島）水口東（滋賀）
⑤長崎北陽台（長崎）
⑥平舘（岩手）三条工（新潟）
○B：①韮崎（山梨）
②長崎北陽台（長崎）
③就実（岡山）高陽（広島）
⑤松山南（愛媛）⑥柏原（兵庫）
C：①大曲（秋田）
②都留（山梨）
③近大附（大阪）新南陽（山口）
⑤柏原（兵庫）⑥那須工（栃木）
9　A：①修道（広島）
②三条工（新潟）
③防府（山口）北野（大阪）
⑤岡山朝日（岡山）
⑥長崎北陽台（長崎）
○B：①大曲（秋田）
②高陽（広島）
③防府（山口）船橋東（千葉）
⑤水口東（滋賀）

⑥長崎北陽台（長崎）
C：①広島学院（広島）
②長崎西（長崎）
③韮崎（山梨）近大附（大阪）
⑤平舘（岩手）那須清峰（栃木）
○印は女子

自　転　車

◆総合体育大会

昭63	久工大附高	（福岡）
平元	作新学院高	（栃木）
2	九州学院高	（熊本）
3	内　灘　高	（石川）
4	前橋工高	（群馬）
5	岐南工高	（岐阜）
6	岐南工高	（岐阜）
7	学法石川高	（福島）
8	前橋工高	（群馬）
9	岐南工高	（岐阜）

◆秩父宮記念杯学校対抗選手権大会

昭63	久工大附高	（福岡）
平元	作新学院高	（栃木）
2	九州学院高	（熊本）
3	内　灘　高	（石川）
4	前橋工高	（群馬）
5	岐南工高	（岐阜）
6	岐南工高	（岐阜）
7	前橋工高	（群馬）
8	前橋工高	（群馬）
9	岐南工高	（岐阜）

◆道路競走中央大会

昭63	紫　波　高	（岩手）
平元	金　沢　高	（石川）
2	新庄工高	（山形）
3	新庄工高	（山形）
4	紫　波　高	（岩手）
5	和歌山北高	（和歌山）
6	山形電波工高	（山形）
7	岐南工高	（岐阜）
8	甲府工高	（山梨）
9	石　田　高	（香川）

◆1000ｍタイムトライアル分秒

39.	昭63	山本　真矢	(京都･花園高)	1.08.87
40.	平元	清水　敏一	(群馬･前橋育英高)	1.08.12
41.	2	稲村　成浩	(群馬･前橋工高)	1.07.61
42.	3	鈴木　雅也	(静岡･修善寺工高)	1.07.75
43.	4	手島　慶介	(群馬･前橋工高)	1.07.29
44.	5	十文字貴信	(茨城･取手一高)	1.07.46
45.	6	榊枝　輝文	(福島･学法石川高)	1.06.56
46.	7	西　　徹	(石川･内灘高)	1.07.731
47.	8	佐々木雄一	(福島･白河高)	1.06.240
48.	9	佐々木雄一	(福島･白河高)	1.06.425

◆スプリント

39.	昭63	高橋　隆晃	(京都･立命館高)	11.51
40.	平元	内村　　豪	(鹿児島･南大隅高)	11.48
41.	2	斉藤登志信	(山形･山形電波工高)	11.05
42.	3	中井　達郎	(静岡･修善寺工高)	11.45
43.	4	久保田　敦	(群馬･前橋工高)	11.09
44.	5	河部　勝史	(愛媛･松山聖陵高)	11.02
45.	6	小椋　竜二	(徳島･徳島商高)	11.12
46.	7	尾崎　和人	(群馬･前橋工高)	11.003
47.	8	梅原　卓志	(静岡･修善寺工高)	10.910
48.	9	藤原　憲征	(新潟･吉田商高)	11.260

◆4000ｍ速度競走

39.	昭63	森田　武士	(福岡･久工大附高)	5.09.36
40.	平元	幸田　光博	(栃木･作新学院高)	4.58.07
41.	2	笹川　滝治	(新潟･吉田商高)	5.01.45
42.	3	坂上　忠克	(石川･内灘高)	4.54.94
43.	4	浪岡　宜隆	(宮城･東北高)	4.59.49
44.	5	村本　大輔	(静岡･静岡北高)	5.14.41
45.	6	下松　　寛	(岡山･岡山理大附高)	4.52.13
46.	7	諸橋　　愛	(新潟･吉田商高)	4.57.530
47.	8	小嶋　　健	(神奈川･横浜高)	4.48.830
48.	9	佐藤　　修	(秋田･六郷高)	4.59.930

◆ポイントレース点

39.	昭63	大越　　太	(福島･学法石川高)	34
40.	平元	斑目真紀夫	(福島･白河高)	25
41.	2	木村　聖二	(熊本･九州学院高)	33
42.	3	狩野　智也	(群馬･前橋育英高)	30
43.	4	※台風10号のため決勝レース中止。決勝進出者24名全員を１位とする。		
44.	5	鳥生　知八	(愛媛･松山聖陵高)	55
45.	6	佐藤　琢磨	(東京･和光高)	38
46.	7	斉藤紳一朗	(青森･八戸工高)	15

47. 8 河原 貴史(群馬・前橋工高) 18
48. 9 白岩 大助(埼玉・久喜北陽高) 20

◆イタリアンチームレース

39. 昭63 作新学院高(栃木) 1.48.52
[幸田・森林・山本・渡辺]
40. 平元 作新学院高(栃木) 2.13.14
[野沢・中村・山本・幸田]
41. 2 前橋工高(群馬) 1.43.68
[稲村・金子・高橋・品田]
42. 3 修善寺工高(静岡) 1.44.86
[鈴内・山田・中井・大沼]
43. 4 前橋工高(群馬) 1.45.06
[手島・橋本・久保田・稲村]
44. 5 八工大一高(青森) 2.14.01
[成田・中村・小笠原・坂本]
45. 6 静岡北高(静岡) 1.27.41
[都甲・片寄・市川・望月]
46. 7 前橋工高(群馬) 1.28.208
[尾崎・飯塚・竹内・高田]
47. 8 作新学院高(栃木) 1.45.252
[鈴木・飯嶋・時田・能登]
48. 9 横浜高(神奈川) 1.45.736
[植木・小林・小嶋・北澤]

◆4000 m個人追抜競走

39. 昭63 若原 英伸(岐阜・岐南工高) 5.03.10
40. 平元 栗田 伸也(山形・新庄工高) 5.00.89

◆3000 m個人追抜競走

41.平成 2 松村 政治(熊本・九州学院高) 3.42.94
42. 3 片岡 信忠(石川・内灘高) 3.40.66
43. 4 児玉 利文(岐阜・岐南工高) 3.37.51
44. 5 柴田 誠(山形・新庄高) 3.38.72
45. 6 山本 貴士(石川・金沢高) 3.38.37
46. 7 重松 太郎(神奈川・横須賀学院高) 3.44.444
47. 8 久保田奉文(福井・春江工高) 3.37.447
48. 9 内田 慶(栃木・作新学院高) 3.42.746

◆4000 m団体追抜競走

39. 昭63 学法石川高(福島) 4.41.91
[大越・金古・前野・十文字]
40. 平元 岐南工高(岐阜) 4.35.41
[田中・若原・加藤・加藤]
41. 2 久工大附高(福岡) 4.38.64
[中野・神開・境・井上]
42. 3 内灘高(石川) 4.37.19
[辻・坂上・竹田・片岡]
43. 4 紫波高(岩手) 4.37.58
[高橋・桜沢・浦田・小泉]
44. 5 岐南工高(岐阜) 4.34.88
[高田・須藤・白木・橘内]
45. 6 岐南工高(岐阜) 4.31.06
[須藤・竹田・洞口・白木]
46. 7 岐南工高(岐阜) 4.33.564
[臼井・洞口・児島・白木]
47. 8 岐南工高(岐阜) 4.32.511
[加藤・木村・服部・松尾]
48. 9 岐南工高(岐阜) 4.33.110
[土岐・宝満・古澤・若園]

ボクシング

団体の部（学校対抗戦）

昭63 王寺工業（奈良）（36点）
平元 南京都（京都）（28点）
2 作新学院高等部（栃木）（33点）
3 東海大第二（熊本）（31点）
4 花咲徳栄（埼玉）（32点）
5 作新学院高等部（栃木）（38点）
6 作新学院高等部（栃木）（37点）
7 日章学園（宮崎）（28点）
8 花咲徳栄（埼玉）（33点）
9 南京都（京都）（38点）

◆個人の部

◆モスキート級

昭63 佐々木忠弘（新潟・巻農業）
平元 川井 嘉章（栃木・小山）
2 松下 尚行（福岡・東福岡）
3 図師 安徳（宮崎・日章学園）
4 柳川 荒士（広島・崇徳）
5 高宮 恵蔵（福岡・東福岡）
6 村橋 薫（栃木・作新学院）
7 古賀 大作（福岡・東福岡）
8 三角 英雄（埼玉・花咲徳栄）
9 飯野 潤（栃木・小山）

◆ライトフライ級

昭63 尾崎 敏久（埼玉・花咲徳栄）

平元	玉城　信一	（沖縄・興南）
2	篠原　宏和	（山形・酒田南）
3	山口　圭司	（南北海道・函大有斗）
4	辻本　和正	（奈良・奈良工業）
5	堀田　晋哉	（広島・崇徳）
6	矢代　家康	（埼玉・花咲徳栄）
7	鈴木　裕介	（愛媛・新田）
8	木村　雄治	（熊本・九州学院）
9	和才　隆一	（新潟・新潟向陽）

◆フライ級

昭63	本川　昭久	（奈良・王寺工業）
平元	橋本　尚樹	（京都・南京都）
2	岩本　悟	（栃木・作新学院）
3	阿波連本親	（沖縄・興南）
4	阿波連本親	（沖縄・興南）
5	岡　稔	（香川・高松工芸）
6	名護　明彦	（沖縄・興南）
7	熟山　竜一	（兵庫・市立西宮西）
8	鶴木　優	（新潟・新潟向陽）
9	大西　祥司	（宮崎・日章学園）

◆バンタム級

昭63	岩橋　徹也	（新潟・新潟南）
平元	渡辺　義大	（茨城・土浦日大）
2	高江　浩司	（福島・相馬農業）
3	横山　謙	（愛媛・新田）
4	牟田　真樹	（福岡・三池）
5	小山田裕二	（鹿児島・鹿児島工）
6	福原　卓司	（島根・益田）
7	飯田　育夫	（大分・鶴崎工業）
8	安達　淳	（新潟・興農館）
9	岩本　充裕	（京都・南京都）

◆フェザー級

昭63	三谷　大和	（岡山・山陽）
平元	有沢　和広	（埼玉・花咲徳栄）
2	藤村　征治	（千葉・松戸矢切）
3	佐藤　慎也	（大分・津久見）
4	金内　豪	（沖縄・興南）
5	栗田　繁	（広島・崇徳）
6	関口　幸生	（群馬・伊勢崎工）
7	清水頭広貴	（千葉・市立習志野）
8	高橋　貞	（群馬・板倉）
9	國武　直人	（熊本・九州学院）

◆ライト級

昭63	今岡　紀行	（広島・広陵）
平元	竹下　力	（沖縄・美里工業）
2	菊地　睦	（埼玉・花咲徳栄）
3	高橋　秀和	（宮城・仙台育英）
4	渡邊　大吾	（愛媛・新田）
5	熊谷　友也	（岩手・水沢農業）
6	大塚　和則	（千葉・流山）
7	山本　徹	（香川・高松工芸）
8	斎藤　信行	（栃木・作新学院）
9	吉村　憲二	（大阪・浪速）

◆ライトウェルター級

昭63	関　政明	（埼玉・秀明上尾）
平元	植村　浩一	（岡山・関西）
2	横田　哲典	（愛媛・新田）
3	八重樫　剛	（岩手・水沢農業）
4	仁多見史隆	（新潟・興農館）
5	青井　俊道	（岡山・岡山工業）
6	高橋　泰征	（愛媛・新田）
7	伊地知　崇	（沖縄・興南）
8	比嘉　大輔	（福岡・東福岡）
9	平田　廣一	（栃木・小山）

◆ウェルター級

昭63	和田　元喜	（奈良・王寺工業）
平元	富樫　修	（京都・南京都）
2	今岡　賢覚	（広島・皆実）
3	金山　俊治	（熊本・東海大第二）
4	今村　卓人	（埼玉・花咲徳栄）
5	今村　卓人	（埼玉・花咲徳栄）
6	三上　淳	（沖縄・興南）
7	梅下　悟	（香川・高松工芸）
8	松橋　拓二	（南北海道・恵庭南）
9	家後　明人	（新潟・興農館）

◆ライトミドル級

昭63	阿部　茂	（埼玉・秀明上尾）
平元	川上　雅史	（栃木・作新学院）
2	中村　勇誠	（熊本・東海大第二）
3	中村　勇誠	（熊本・東海大第二）
4	皿田　学	（福岡・田川）
5	岸本　憲明	（沖縄・興南）
6	長谷川智明	（秋田・秋田経法大附）
7	上原　通弘	（沖縄・興南）
8	須藤　芳献	（埼玉・花咲徳栄）

9　久保山直樹　（大分・津久見）

◆ミドル級

昭63　溪　和也　（奈良・王寺工業）
平元　山中　幸雄　（熊本・東海大第二）
2　前田　宏樹　（山形・酒田南）
3　上原　雄大　（鹿児島・城西）
4　渡辺　裕之　（埼玉・花咲徳栄）
5　鈴木　史　（山形・酒田南）
6　橋本　英樹　（京都・南京都）
7　長嶺　秀昭　（宮崎・日章学園）
8　飛沢　公平　（秋田・秋田経法大附）
9　磯野　友彦　（京都・南京都）

◆ライトヘビー級

昭63　峯田　栄一　（山形・日大山形）
平元　西山　一郎　（福岡・西田川）
2　大村　耕史　（熊本・東海大第二）
3　保住　直孝　（神奈川・横浜）
4　保住　直孝　（神奈川・横浜）
5　宮島　永守　（埼玉・花咲徳栄）
6　田村　誠　（栃木・作新学院）
（平成7年より選手の健康管理上、返上）

◆ヘビー級

昭63　野本　祥功　（山形・日大山形）
平元　福田　輝彦　（神奈川・鶴見工業）
2　福田　輝彦　（神奈川・鶴見工業）
3　渡辺　紀広　（千葉・流山）
4　池田　学　（福岡・豊国学園）
5　工藤　邦雄　（大分・鶴崎工業）
6　木村　岳司　（埼玉・花咲徳栄）
（平成7年より選手の健康管理上、返上）

ホッケー

□男子

50. 昭63　天　理　（奈良）
51. 平元　伊　吹　（滋賀）
52. 2　天　理　（奈良）
53. 3　横　田　（島根）
54. 4　白　根　（山梨）
55. 5　白　根　（山梨）
56. 6　白　根　（山梨）
57. 7　沼　宮　内　（岩手）
58. 8　沼　宮　内　（岩手）
59. 9　沼　宮　内　（岩手）

□女子

30. 昭63　岐阜女商　（岐阜）
31. 平元　今　市　（栃木）
32. 2　岐阜女商　（岐阜）
33. 3　岐阜女商　（岐阜）
34. 4　天　理　（奈良）
35. 5　伊　吹　（滋賀）
36. 6　不来方　（岩手）
37. 7　横　田　（島根）
38. 8　伊　吹　（滋賀）
39. 9　須　知　（京都）

ウエイトリフティング

◆52kg級

昭63	池畑	大	（鹿児島・鹿児島商工）	200.0
平元	納富	俊行	（兵庫・舞子）	202.5
2	伊森	和博	（沖縄・南部工業）	202.5
3	三浦	貴公	（宮城・宮城県農）	197.5
4	鈴木	和之	（宮城・宮城県農）	195.0

◆54kg級

平成5	石井	庸介	（兵庫・舞子）	205.0
6	小島	仁志	（宮城・村田）	202.5
7	鈴木	基樹	（東京・東亜学園）	197.5
8	菊妻	康司	（兵庫・相生産業）	210.0
9	山田	政晴	（群馬・前橋育英）	215.0

◆56kg級

昭63	村山	和晃	（新潟・三条工業）	210.0
平元	橘	典人	（北海道・士別）	215.0
2	古川	優	（青森・五所川原工）	207.5
3	岩佐	正広	（宮城・宮城県農）	222.5
4	上原	大介	（広島・広島電大付）	210.0

◆59kg級

平成5	富永	憲志	（徳島・鳴門工業）	225.0
6	崎村	公貴	（熊本・鎮西）	222.5
7	上野	修	（愛知・愛工大名電）	215.0
8	矢野	博志	（島根・出雲農林）	232.5
9	今村	俊雄	（山梨・日川）	222.5

◆60kg級

昭63	加藤	一成（千葉·八千代松陰）	225.0
平元	小松	博志（兵庫·津名）	227.5
2	鈴木	勝己（岡山·倉敷商業）	222.5
3	宮路	由久（鹿児島·鹿児島商工）	237.5
4	角谷	昌史（石川·珠洲実業）	225.0

◆64kg級

平成5	大谷	広幸（栃木·小山園芸）	247.5
6	浅井	雄路（石川·珠洲実業）	232.5
7	中條	桂良（群馬·前橋育英）	235.0
8	岩岡	怜（広島·海田）	247.5
9	堰川	康信（青森·八戸工大第一）	235.0

◆67.5kg級

昭63	藤井	龍明（兵庫·滝川第二）	250.0
平元	堀越	典昭（栃木·小山）	250.0
2	堀越	典昭（栃木·小山）	282.5
3	木下	章紀（兵庫·明石北）	240.0
4	升田	友也（鳥取·鳥取西工業）	242.5

◆70kg級

平5	三宅	敏博（埼玉·埼玉栄）	255.0
6	橋本	唯史（山梨·日大明誠）	242.5
7	渋谷	公二（京都·西宇治）	237.5
8	中條	桂良（群馬·前橋育英）	255.0
9	木曽川	章（山梨·日川）	255.0

◆75kg級

昭63	坂田	健吾（埼玉·埼玉栄）	255.0
平元	比嘉	敏彦（沖縄·興南）	265.0
2	佐野	衛（兵庫·明石南）	277.5
3	白井	和人（北海道·士別商業）	252.0
4	増井	敬治（徳島·徳島工業）	260.0

◆76kg級

平成5	米山	喜平（山梨·吉田）	262.5
6	鈴木	和美（沖縄·南部工業）	270.0
7	古谷	竜彦（山梨·吉田）	260.0
8	橋本	丈（埼玉·埼玉栄）	265.0
9	鳴川	武志（熊本·鎮西）	237.5

◆82.5kg級

昭63	江端	貴（石川·珠洲実業）	262.5
平元	野沢	征弘（栃木·小山）	260.0
2	稲垣	栄二（埼玉·埼玉栄）	262.5
3	安井	盾（大阪·大阪工大）	260.0
4	上野	栄介（兵庫·舞子）	255.0

◆83kg級

平成5	菅野	太作（栃木·小山）	265.0
6	青木	秀範（栃木·小山）	257.5
7	鈴木	励（福島·平工業）	257.5
8	新屋敷	亮（沖縄·沖縄尚学）	255.0
9	盛田	浩史（岩手·盛岡工業）	265.0

◆90kg級

昭63	内藤	誠一（島根·出雲農林）	260.0
平元	高嶺	直（沖縄·沖縄尚学）	270.0
2	岩井	弘和（福岡·筑紫工業）	255.0
3	本田剛四郎	（熊本·鎮西）	257.5
4	木村	芳広（北海道·士別商業）	265.0

◆91kg級

平成5	米増	雄二（沖縄·南部工業）	250.0
6	平良	一悦（沖縄·糸満）	290.0
7	青木	秀範（栃木·小山）	272.5
8	諏訪	忠（熊本·鎮西）	265.0
9	佐藤	彰紘（宮崎·鵬翔）	275.0

◆100kg級

昭63	安田	英樹（京都·西宇治）	280.0
平元	安田	英樹（京都·西宇治）	287.5
2	大嶋	学（秋田·秋田工業）	262.5
3	青木	延明（栃木·小山）	272.5
4	立花	信生（福岡·八幡中央）	267.5

◆99kg級

平成5	西村	博忠（岡山·水島工業）	267.5
6	遠山	哲也（栃木·小山）	272.5
7	日下	宗晃（徳島·板野）	280.0
8	中江	孝行（京都·加悦谷）	280.0
9	佐藤	純一（青森·八戸工大第一）	265.0

◆+100kg級

昭63	今井	晃功（山形·羽黒工業）	250.0
平元	白橋	和久（静岡·沼津学園）	265.0
2	橋本	隆芳（兵庫·明石北）	247.5
3	佐藤	秀志（秋田·秋田工業）	260.0
4	青木	延明（栃木·小山）	307.5

◆+99kg級

平成5	東江　博昭	(沖縄·南部工業)	292.5
6	今岡　和則	(島根·出雲農林)	285.0
7	鈴木　忍	(秋田·能代工業)	275.0
8	福田　行延	(埼玉·埼玉栄)	292.5
9	茂野　正城	(山梨·日大明誠)	282.5

ヨット

□男子

◆スナイプ級

29.	昭63	境	(鳥取)
30.	平元	海津	(岐阜)
31.	2	霞ヶ浦	(茨城)
32.	3	長崎総合科学大附属	(長崎)
33.	4	気仙沼	(宮城)

◆FJ級

29.	昭63	長崎水産	(長崎)
30.	平元	日本大学	(神奈川)
31.	2	宮古	(岩手)
32.	3	光	(山口)
33.	4	碧南工業	(愛知)

◆ソロ競技・FJ級

34.	平5	土浦日本大学	(茨城)
35.	6	日本大学	(神奈川)
36.	7	唐津西	(佐賀)
37.	8	吉田	(山梨)
38.	9	唐津西	(佐賀)

◆デュエット競技・FJ級

34.	平5	霞ヶ浦	(茨城)
35.	6	西南学院	(福岡)
36.	7	唐津西	(佐賀)
37.	8	唐津西	(佐賀)
38.	9	清風	(大阪)

□女子

◆スナイプ級

29.	昭63	光	(山口)
30.	平元	海津	(岐阜)
31.	2	宮古商業	(岩手)
32.	3	唐津西	(佐賀)
33.	4	海津	(岐阜)

◆FJ級

29.	昭63	光	(山口)
30.	平元	境	(鳥取)
31.	2	宮古商業	(岩手)
32.	3	磯辺	(千葉)
33.	4	博多女子	(福岡)

◆ソロ競技・FJ級

34.	平5	土浦日本大学	(茨城)
35.	6	蒲郡東	(愛知)
36.	7	博多女子	(福岡)
37.	8	鈴峯女子	(広島)
38.	9	博多女子	(福岡)

◆デュエット競技・FJ級

34.	平5	海津	(岐阜)
35.	6	博多女子	(福岡)
36.	7	博多女子	(福岡)
37.	8	博多女子	(福岡)
38.	9	唐津西	(佐賀)

フェンシング

□男子

◆団体

昭63	合川		(秋田)
平元	埼玉栄		(埼玉)
2	前橋育英		(群馬)
3	北陸		(福井)
4	羽島北		(岐阜)
5	米沢東		(山形)
6	富山西		(富山)
7	愛知工業大学名電		(愛知)
8	和歌山東		(和歌山)
9	東亜学園		(東京)

◆個人フルーレ

昭63	成宮　憲一	(滋賀·愛知)
平元	東　哲史	(和歌山·和歌山北)
2	稲田　政幸	(和歌山·和歌山東)
3	青木　雄介	(東京·日本学園)
4	森山　幹弘	(和歌山·和歌山北)

5　後藤　喜彦　（山　形・米沢東）
6　坂田　慎治　（富　山・富山西）
7　長良　将良　（岐　阜・羽島北）
8　柳　大公麿　（和歌山・和歌山北）
9　古谷　貴之　（東　京・東亜学園）

◆個人エペ

昭63　佐藤　壮一　（宮　城・気仙沼）
平元　西田　茂成　（千　葉・東葛飾）
2　安孫子重俊　（千　葉・東葛飾）
3　杉渕　公広　（秋　田・合川）
4　浅野　輝彦　（秋　田・合川）
5　永野　広輔　（茨　城・水城）
6　菊地　卓也　（福　島・福島商業）
7　本間　邦彦　（熊　本・氷川）
8　近藤　活正　（岐　阜・羽島北）
9　津根　明宏　（京　都・平安）

◆個人サーブル

昭63　宗像　秀憲　（北海道・札幌光星）
平元　中村　憲俊　（鹿児島・鹿児島南）
2　今井　修之　（神奈川・法政大学第二）
3　羽田　光二　（鹿児島・鹿児島南）
4　高橋　宏之　（宮　城・利府）
5　矢島　佳明　（埼　玉・埼玉栄）
6　岡村　悦男　（山形・米沢興譲館）
7　長良　将良　（岐　阜・羽島北）
8　田中　英将　（大分・市立別府商業）
9　石山　慎吾　（神奈川・法政大学第二）

□女　子

◆団体

昭63　木　津　（京　都）
平元　成徳学園　（東　京）
2　鼎　が　浦　（宮　城）
3　鼎　が　浦　（宮　城）
4　甲府湯田　（山　梨）
5　宇都宮中央女子　（栃　木）
6　甲府湯田　（山　梨）
7　水　橋　（富　山）
8　鼎　が　浦　（宮　城）
9　氷　川　（熊　本）

◆個人フルーレ

昭63　松本　祥子　（埼　玉・埼玉栄）
平元　塚本　繭深　（北海道・札幌大谷）
2　前中　愛　（和歌山・和歌山北）
3　宇野　千鶴　（岐阜・岐阜女子商業）
4　安原　雪子　（山　梨・甲府湯田）
5　日高麻衣子　（東　京・東亜学園）
6　塩嶋　幸代　（山　梨・甲府湯田）
7　秋島さゆり　（富　山・水橋）
8　内田　陽子　（福岡・美萩野女子）
9　高　いづみ　（大分・市立別府商業）

◆個人エペ

平7　水上　真帆　（富山・水橋）
8　池端志津香　（奈良・帝塚山女子）
9　高　いづみ　（大分・市立別府商業）

空　手　道

□男　子

◆総合

15.　昭63　柏　原　（大阪）
16.　平元　目　黒　（東京）
17.　2　東北工大電子工業　（宮城）
18.　3　水　城　（茨城）
19.　4　世田谷学園　（東京）
20.　5　世田谷学園　（東京）
21.　6　世田谷学園　（東京）
22.　7　岡山山陽　（岡山）
23.　8　世田谷学園　（東京）
24.　9　京　都　西　（京都）

◆団体組手

15.　昭63　柏　原　（大阪）
16.　平元　明徳義塾　（高知）
17.　2　東北工大電子工業　（宮城）
18.　3　柏　原　（大阪）
19.　4　世田谷学園　（東京）
20.　5　世田谷学園　（東京）
21.　6　世田谷学園　（東京）
22.　7　柏　原　（大阪）
23.　8　世田谷学園　（東京）
24.　9　京　都　西　（京都）

◆個人組手

15.　昭63　中村　典彦　（大阪・柏原）
16.　平元　柏原　竜二　（山口・山口鴻城）

17.	2	三好　恭統	(東京·目黒)
18.	3	松尾　一成	(長崎·瓊浦)
19.	4	筒井　慎吾	(東京·世田谷学園)
20.	5	阿部　貴幸	(宮城·東北大電子工業)
21.	6	嵩下　敏文	(長崎·長崎日本大学)
22.	7	土居　大介	(岡山·岡山山陽)
23.	8	杉山　俊輔	(神奈川·山手学院)
24.	9	足立　善也	(山形·東海大学山形)

◆個人形

15.	昭63	江里口　誠	(岡山·岡山山陽)
16.	平元	堀　邦久	(岡山·岡山山陽)
17.	2	鈴木　和也	(静岡·御殿場西)
18.	3	堀　正浩	(岡山·岡山山陽)
19.	4	今関　光治	(東京·目黒)
20.	5	高橋　晋史	(宮城·東北大電子工業)
21.	6	土屋　秀人	(群馬·前橋工業)
22.	7	崎山　清之	(沖縄·浦添)
23.	8	宮國　淳	(沖縄·宮古)
24.	9	栗原　一晃	(茨城·水城)

□女　子

◆総合

10.	昭63	宇都宮女商	(栃木)
11.	平元	宮崎第一	(宮崎)
12.	2	宇都宮女商	(栃木)
13.	3	東大阪	(大阪)
14.	4	宮崎第一	(宮崎)
15.	5	宇都宮女商	(栃木)
16.	6	宇都宮女商	(栃木)
17.	7	岡山山陽	(岡山)
18.	8	宇都宮文星女子	(栃木)
19.	9	御殿場西	(静岡)

◆団体組手

9.	昭63	宇都宮女商	(栃木)
10.	平元	宮崎第一	(宮崎)
11.	2	宇都宮女商	(栃木)
12.	3	東大阪	(大阪)
13.	4	宮崎第一	(宮崎)
14.	5	宇都宮女商	(栃木)
15.	6	宇都宮女商	(栃木)
16.	7	岡山山陽	(岡山)
17.	8	宇都宮文星女子	(栃木)
18.	9	御殿場西	(静岡)

◆個人形

15.	昭63	三村　由紀	(長野·松本深志)
16.	平元	瀬戸山美保	(群馬·高崎商科短大)
17.	2	安里　英美	(沖縄·小録)
18.	3	當間　勇子	(沖縄·小録)
19.	4	豊見城あずさ	(沖縄·浦添)
20.	5	森田　幸	(兵庫·夙川学院)
21.	6	駒山　恭子	(福岡·鞍手農業)
22.	7	湯田　匡江	(福島・田島)
23.	8	佐藤　志保	(栃木·宇都宮文星女子)
24.	9	佐藤　志保	(栃木·宇都宮文星女子)

◆個人組手

11.	昭63	山口美千代	(宮崎·宮崎第一)
12.	平元	山口美千代	(宮崎·宮崎第一)
13.	2	梯　優子	(大阪·東大阪)
14.	3	迫　祐子	(青森·光星学院)
15.	4	川口　智子	(兵庫·夢野台)
16.	5	福井　由夏	(栃木·宇都宮女)
17.	6	鍋城　泉	(栃木·宇都宮女)
18.	7	小笠原万記	(静岡·御殿場西)
19.	8	渋谷　朋美	(栃木·宇都宮文星女子)
20.	9	笹有　紀子	(栃木·宇都宮文星女子)

アーチェリー

□男子

◆団体点

21.	昭63	北大津	(滋賀)	1883
22.	平元	柏陵	(福岡)	1685
23.	2	柏陵	(福岡)	1917
24.	3	同志社	(京都)	1813
25.	4	横浜	(神奈川)	1880
26.	5	横浜	(神奈川)	234
27.	6	柏陵	(福岡)	244
28.	7	愛産第三河	(愛知)	221
29.	8	大分東明	(大分)	222
30.	9	東海大二	(熊本)	224

◆個人

21.	昭63	吉田　賢	(山梨·甲府第一)	657
22.	平元	山本　敦	(神奈川·永谷)	603
23.	2	宮永　雅史	(福岡·柏陵)	657
24.	3	藤原　悟	(広島·広島工)	630

25.	4	木村　正純(神奈川·横浜)	650
26.	5	木村　正純(神奈川·横浜)	656
27.	6	桜井　　隼(東京·東京工)	654
28.	7	村越　永人(福島·田村)	669
29.	8	山県朝太郎(静岡·富士見)	102
30.	9	藤原　真也(神奈川·横浜)	105

□女　子

◆団体

21.	昭63	折　尾	(福岡)	1881
22.	平元	旭川北	(北海道)	1802
23.	2	折　尾	(福岡)	1796
24.	3	折　尾	(福岡)	1681
25.	4	横浜学園	(神奈川)	1828
26.	5	大分東明	(大分)	205
27.	6	甲南女子	(兵庫)	218
28.	7	山陽女子	(広島)	207
29.	8	兎　道	(京都)	218
30.	9	氷　川	(熊本)	196

◆個人

21.	昭63	岩山　美保(福岡·折尾)	635
22.	平元	鈴木　知子(愛知·桜丘)	634
23.	2	森本　淳子(京都·同志社)	626
24.	3	岡野　善恵(兵庫·甲南女)	578
25.	4	川上祐佳里(福岡·柏陵)	639
26.	5	山岡　麗子(神奈川·横浜学園)	629
27.	6	河崎由加里(広島·山陽女)	639
28.	7	冨島　　優(兵庫·甲南女)	643
29.	8	大津留由香(大分·大分東明)	79
30.	9	勝俣比呂美(神奈川·小田原城内)	99

な　ぎ　な　た

平9

◆団体　清教学園　(大阪)

◆個人　林田　直子　(熊本·熊本西)

◆演技　中島　加詠　貴島　政英
(兵庫·市伊丹)

定　通　制

≪陸上競技≫

□男　子

◆100m

昭63	谷脇	隆 (大阪·向陽台)	11.14
平元	新井	一雄 (埼玉·所沢)	11.27
2	新井	一雄 (埼玉·所沢)	11.33
3	永見	和人 (富山·志貴野)	11.35
4	留奥	直晃 (大阪·藤井寺工)	11.60
5	荒川	崇 (東京·科技)	11.48
6	林	浩運 (香川·多度津工)	11.25
7	村上	貴司 (福井·敦賀)	11.42
8	村上	貴司 (福井·敦賀)	11.12
9	村上	貴司 (福井·敦賀)	11.60

◆200m

昭63	高宮	武 (東京·羽田工)	22.29
平元	三原屋勝昌	(神奈川·湘南通)	23.75
2	鶴井	智裕 (兵庫·西脇北)	23.34
3	磯村	武寛 (福岡·修猷館)	23.07
4	戸上	裕稔 (愛知·東海工)	23.01
5	吉田	匠 (愛知·三河)	23.35
6	佐藤	元重 (大阪·桃谷)	23.47
7	佐藤	元重 (大阪·桃谷)	23.54
8	村上	貴司 (福井·敦賀)	23.48
9	村上	貴司 (福井·敦賀)	23.78

◆400m

昭63	高宮	武(東京·羽田工)	50.11
平元	坂本	正和 (大阪·向陽台)	50.71
2	坂本	正和 (大阪·向陽台)	50.11
3	星田	真利 (京都·鴨沂)	50.59
4	森山	幸雄 (愛知·東海工)	51.91
5	清水	洋一 (兵庫·錦城工)	52.09
6	清水	洋一 (兵庫·錦城工)	51.34
7	蛯名	秦司 (青森·三沢)	53.65
8	中村	寛 (兵庫·御影工)	53.40
9	大和	隆薫 (大阪·八州)	53.51

◆800m

昭63	大東	譲 (愛知·東海工)	2.02.15
平元	坂本	正和 (大阪·向陽台)	2.02.00
2	坂本	正和 (大阪·向陽台)	2.00.06
3	星田	真利 (京都·鴨沂)	2.01.94
4	大和	礼志 (島根·松江北通)	2.02.10
5	古川	薫 (愛知·東海工)	2.01.54

6	桐村	浩市（静岡·福智浜松）	2.02.20
7	桐村	浩市（静岡·福智浜松）	1.59.37
8	井口	正和（静岡·浜松城南）	2.04.18
9	佐藤	勝彦（神奈川·湘南通）	2.01.97

◆1500m

昭63	観海	治（熊本·天草）	4.12.15
平元	河村	幹圭（神奈川·湘南通）	4.15.07
2	岡田	典久（山口·岩国商）	4.15.61
3	青木	和幸（静岡·福智浜松）	4.07.09
4	大和	礼志（島根·松江北通）	4.11.59
5	林	真一（東京·南）	4.09.18
6	林	真一（東京·南）	4.04.98
7	林	真一（東京·南）	4.01.89
8	渡辺	芳行（山梨·中央通）	4.11.97
9	大野	真人（宮城·白石七ヶ宿分）	4.12.54

◆5000m

昭63	観海	治（熊本·天草）	15.47.75
平元	佐藤	忠（愛知·東海工）	16.49.02
2	日下部	豊（埼玉·大宮中央通）	16.34.05
3	高橋	真純（愛知·東海工）	16.10.74
4	林	真一（東京·南）	15.59.59
5	林	真一（東京·南）	15.54.37
6	林	真一（東京·南）	15.43.40
7	林	真一（東京·南）	15.26.04
8	渡辺	芳行（山梨·中央通）	15.45.57
9	大野	真人（宮城·白石七ヶ宿分）	16.56.81

◆400mハードル

昭63	小松	政男（埼玉·鴻巣）	59.27
平元	小島	政男（埼玉·鴻巣）	58.04
2	黒田	語（埼玉·川越工）	59.84
3	黒田	語（埼玉·川越工）	59.05
4	黒田	語（埼玉·川越工）	56.88
5	山岡	講次（奈良·天理）	57.85
6	高山	博之（愛知·科技刈谷）	60.68
7	西村	右也（滋賀·綾羽）	59.26
8	伊藤	靖（静岡·福智浜松）	58.18
9	奈良	祐二（青森·弘前中央）	58.14

◆1500m

昭63	儀間	光彦（沖縄·北部農林）	4.32.94
平元	儀間	光彦（沖縄·北部農林）	4.35.77
2	岡田	典久（山口·岩国商）	4.35.84

◆2000m

平3	青木	和幸（静岡·福智浜松）	6.11.82
4	池田	和敏（神奈川·湘南通）	6.22.81
5	古賀	将一（愛知·東海工）	6.27.39
6	南沢	貢誉（愛知·東海工）	6.36.63
7	榊原	良和（愛知·東海工）	6.20.15
8	山口	剛志（静岡·福智浜松）	6.24.68
9	高橋賢太郎	（奈良·天理）	6.37.69

◆4×100m

昭63	東京	45.14
平元	愛知	44.81
2	兵庫	45.09
3	愛知	44.51
4	栃木	44.76
5	東京	44.41
6	大阪	45.82
7	東京	45.19
8	神奈川	45.51
9	埼玉	45.53

◆4×400m

昭63	神奈川	3.32.00
平元	神奈川	3.36.83
2	大阪	3.31.32
3	神奈川	3.34.12
4	愛知	3.33.99
5	愛知	3.33.03
6	愛知	3.39.06
7	静岡	3.37.17
8	静岡	3.36.56
9	神奈川	3.38.65

◆走高跳

昭63	川上	憲正（岡山·井原市）	1m90
平元	吉川	充洋（大阪·藤井寺工）	1m90
2	斉藤	正（神奈川·湘南通）	1m85
3	斉藤	正（神奈川·湘南通）	1m95
4	斉藤	正（神奈川·湘南通）	2m00
5	若島	宏康（兵庫·青雲）	1m93
6	若島	宏康（兵庫·青雲）	1m90
7	佐藤	琢磨（神奈川·厚木南通）	2m07
8	内田	克幸（岡山·南海）	1m90
9	山本	豊徳（埼玉·吉川）	1m90

◆走幅跳

昭63	広光	和光(高知·高知北)	6m42
平元	福島	一起(岡山·倉敷市精思)	6m68
2	高橋	紀章(山口·徳山)	6m81
3	石川	秀喜(宮城·矢本)	6m69
4	石川	秀喜(宮城·矢本)	6m89
5	横手	和男(埼玉·越谷)	6m77
6	林	浩運(香川·多度津工)	7m15
7	西山	宏(兵庫·青雲)	6m34
8	田中	正明(神奈川·相模台工)	6m42
9	川井田	誠(兵庫·御影工)	6m63

◆三段跳

昭63	吉川	充洋(大阪·藤井寺工)	13m02
平元	徳永	浩士(新潟·高田城南)	13m37
2	徳永	浩士(新潟·高田城南)	13m52
3	梶木屋雄二	(佐賀·佐賀西)	13m31
4	辻本	貴寛(大阪·大手前)	13m00
5	榎本	誠士(愛知·半田商)	13m26
6	早川	勇介(千葉·千葉東)	13m13
7	大高	宏典(東京·向丘)	13m22
8	齋藤	大輔(山形·新庄北)	12m73
9	田中	茂(岡山·真備陵南)	13m13

◆砲丸投

昭63	岩滝	正(福井·若狭)	13m33
平元	巻田	浩二(千葉·千葉東)	14m77
2	巻田	浩二(千葉·千葉東)	14m28
3	今井	邦幸(大阪·大手前)	13m94
4	森山	幸治(大分·日田)	13m45
5	若島	宏康(兵庫·青雲)	13m05
6	甲	大輔(新潟·明鏡)	13m33
7	甲	大輔(新潟·明鏡)	14m45
8	山田	憲一(滋賀·綾羽)	12m60
9	木村	敏明(山形·霞城学園通)	13m08

◆円盤投

昭63	清家	仁将(神奈川·向の岡工)	38m22
平元	稲福	恭信(沖縄·泊)	36m32
2	稲福	恭信(沖縄·泊)	41m06
3	森山	幸治(大分·日田)	36m58
4	森山	幸治(大分·日田)	36m94
5	森田	誠(栃木·鹿沼商工)	38m00
6	渡邉	純(愛知·豊橋工)	35m80
7	渡邉	純(愛知·豊橋工)	37m18
8	宮城	広輝(沖縄·北部農林)	37m64
9	末元	信一(愛知·熱田)	39m36

□女　子

◆100m

昭63	千種	美佐(愛知·瑞陵)	14.01
平元	岩田ますみ	(奈良·鳥羽)	13.98
2	皆川	深雪(神奈川·清心女)	13.55
3	皆川	深雪(神奈川·清心女)	13.34
4	越智かおり	(愛媛·今治西)	13.67
5	畠山	淑美(宮城·向陽台)	13.61
6	畠山	淑美(宮城·向陽台)	13.96
7	黒川	恵(京都·堀川)	13.79
8	黒川	恵(京都·堀川)	13.55
9	姉川	久代(京都·堀川)	14.44

◆200m

昭63	下田	芳美(愛知·半田)	28.43
平元	山崎	晃子(佐賀·有田工)	28.19
2	皆川	深雪(神奈川·清心女)	28.40
3	皆川	深雪(神奈川·清心女)	27.51
4	廣橋	鈴代(大阪·中央)	27.95
5	渡辺	理恵(群馬·中之条)	28.48
6	白根	恵美(宮城·向陽台)	28.69
7	圓山	千春(奈良·天理)	28.81
8	植田	真紀(埼玉·春日部)	28.08
9	小谷	真紀(岡山·真備陵南)	29.63

◆400m

昭63	石塚	千鶴(愛知·誠和)	65.87
平元	橋本	弥生(福岡·戸畑中央)	64.98
2	寺田	美紀(静岡·浜松城南)	64.90
3	藤本	路奈(京都·堀川)	64.02
4	廣橋	鈴代(大阪·中央)	63.09
5	渡辺	理恵(群馬·中之条)	64.52
6	佐藤	栄子(宮城·向陽台)	64.46
7	佐藤	栄子(宮城·向陽台)	65.08
8	佐藤	栄子(宮城·向陽台)	66.02
9	吉田由美子	(岡山·市玉島)	66.98

◆800m

昭63	和合	利江(奈良·天理女)	2.35.10
平元	橋本	弥生(福岡·戸畑中央)	2.30.30
2	岡河まき子	(大阪·市西二商)	2.32.42
3	小島ゆかり	(愛知·誠和)	2.32.32
4	村上	美貴(神奈川·市港)	2.32.04
5	山本	明美(富山·雄峰南砺)	2.32.14

6 南城いずみ(宮城·向陽台) 2.34.03
7 水上 彩子(神奈川·厚木南) 2.25.39
8 佐藤 栄子(宮城·向陽台) 2.35.97
9 竹内 望(愛知·愛産大三河) 2.39.04

◆3000m

昭63 亀山 雅子(奈良·天理女) 11.35.92
平元 藤原 久美(広島·誠之館) 11.01.88
2 岡河まき子(大阪·市西二商) 11.01.75
3 山本 明美(富山·雄峰南砺) 11.38.53
4 山本 明美(富山·雄峰南砺) 11.24.26
5 山本 明美(富山·雄峰南砺) 11.30.17
6 山本 明美(富山·雄峰南砺) 11.31.30
7 水上 彩子(神奈川·厚木南) 11.18.19
8 野々村美雪(島根·出雲) 11.18.46
9 杉浦 雪(愛知·愛産大三河) 11.53.19

◆100mハードル

昭63 江口さとみ(奈良·天理女) 17.68
平元 千種 美佐(愛知·瑞陵) 17.68
2 平野 智代(愛知·誠和) 17.20
3 越智かおり(愛媛·今治西) 17.00
4 越智かおり(愛媛·今治西) 16.60
5 横手由美子(埼玉·羽生) 16.24
6 横手由美子(埼玉·羽生) 16.78
7 小林万里子(天理·奈良) 17.23
8 山村 朝子(大阪·長尾谷) 18.48
9 姉川 久代(京都·堀川) 18.10

◆4×100m

昭63 愛知 54.27
平元 愛知 54.34
2 埼玉 54.94
3 埼玉 55.23
4 埼玉 54.90
5 埼玉 55.86
6 京都 55.26
7 奈良 55.99
8 京都 54.92
9 岡山 56.07

◆走高跳

昭63 水谷 敏絵(兵庫·岸和田市産) 1m40
平元 五十嵐清美(大阪·向陽台) 1m45
2 古関 和栄(岡山·倉敷市精思) 1m48
3 小島 美紀(群馬·館林) 1m45
4 小島 美紀(群馬·館林) 1m53
5 小林万里子(奈良·天理) 1m48
6 元野 恵(東京·中大) 1m45
7 小林万里子(奈良·天理) 1m45
8 大治 恵子(岡山·烏城) 1m40
9 大治 恵子(岡山·烏城) 1m48

◆走幅跳

昭63 北藤 美香(大阪·市二工芸) 4m95
平元 松村佳代子(京都·鴨沂) 4m60
2 松村佳代子(京都·鴨沂) 4m72
3 松村佳代子(京都·鴨沂) 4m85
4 九鬼 幸子(岩手·杜陵単) 4m92
5 黒川 恵(京都·堀川) 4m58
6 大久保ちか子(愛知·誠和) 4m63
7 黒川 恵(京都·堀川) 4m50
8 黒川 恵(京都·堀川) 4m67
9 三宅由希子(埼玉·越ヶ谷) 4m78

◆砲丸投

昭63 米盛 和美(沖縄·八重山商工) 10m34
平元 新井 知恵(群馬·館林) 9m53
2 新井 知恵(群馬·館林) 9m51
3 仲里 香(沖縄·那覇商) 9m23
4 南雲 洋美(新潟·小千谷) 9m26
5 南雲 洋美(新潟·小千谷) 9m85
6 坂田 真弓(茨城·土浦一) 9m59
7 坂田 真弓(茨城·土浦一) 9m59
8 長谷川順子(埼玉·春日部) 10m22
9 橋本 幸子(兵庫·尼崎南良元) 10m61

◆円盤投

昭63 米盛 和美(沖縄·八重山商工) 34m30
平元 山川 紀代(岡山·倉敷翠松) 28m46
2 遠藤 真琴(京都·網野間人分) 26m10
3 安藤さゆり(愛知·誠和) 25m40
4 岸川美津子(富山·志貴野) 29m00
5 岸川美津子(富山·志貴野) 27m42
6 池田 直子(愛知·向陽台東洋家政) 26m96
7 長谷川順子(埼玉·春日部) 28m94
8 井上あゆみ(滋賀·綾羽) 31m26
9 橋本 幸子(兵庫·尼崎南良元) 35m06

□男女総合

昭63 愛知県
平元 愛知県

2 愛知県
3 愛知県
4 愛知県
5 愛知県
6 愛知県
7 愛知県
8 愛知県
9 愛知県

□男子総合

昭63 愛知県
平元 神奈川県
2 愛知県
3 愛知県
4 愛知県
5 愛知県
6 愛知県
7 愛知県
8 愛知県
9 愛知県

□トラック

昭63 愛知県
平元 神奈川県
2 愛知県
3 愛知県
4 愛知県
5 愛知県
6 愛知県
7 愛知県
8 愛知県
9 愛知県

□フィールド

昭63 大阪府
平元 沖縄県
2 愛知県
3 大阪府
4 神奈川県
5 愛知県
6 愛知県
7 兵庫県
8 愛知県
9 愛知県

□女子総合

昭63 愛知県
平元 愛知県
2 愛知県
3 京都府
4 富山県
5 富山県
6 宮城県
7 京都府
8 京都府
9 岡山県

□トラック

昭63 愛知県
平元 愛知県
2 愛知県
3 愛知県
4 大阪府
5 大阪府
6 宮城県
7 奈良県
8 宮城県
9 岡山県

□フィールド

昭63 沖縄県
平元 群馬県
2 京都府
3 京都府
4 富山県
5 新潟県
6 大阪府
7 京都府
8 京都府
9 岡山県

≪自転車競技≫

□ピスト

◆1 Km タイムトライアル

昭63	北原	龍一(群馬・前橋工)	1.19.60
平元	北原	龍一(群馬・前橋工)	1.17.76
2	大木	竜二(東京・葛飾商)	1.18.87
3	石田	信吾(東京・八王子工)	1.18.16
4	桑原	勝治(福岡・福岡工)	1.18.95
5	斯波	貴介(静岡・藤枝東)	1.21.06
6	中嶋	圭介(群馬・前橋工)	1.20.50
7	神田	繁(埼玉・大宮工)	1.20.46
8	高橋	秀夫(群馬・前橋工)	1.23.56
9	鈴木	隆(東京・新宿山吹)	1.24.92

◆4000m 個人追抜競争

昭63	宮本雄一郎	(広島・広島工)	6.04.15
平元	大木	竜二(東京・葛飾商)	6.11.42
2	桑原	勝治(福岡・福岡工)	5.53.13
3	桑原	勝治(福岡・福岡工)	5.55.27
4	桑原	勝治(福岡・福岡工)	5.42.34

◆3Km インディヴィデュアルパーシュート

平成5	国松	裕之(埼玉・大宮工)	4.33.17
6	中嶋	圭介(群馬・前橋工)	4.21.80
7	木村	良信(東京・新宿山吹)	4.24.02
8	高橋	秀夫(群馬・前橋工)	4.42.02
9	鈴木	隆(東京・新宿山吹)	4.38.78

◆4Km(4000m)速度競争

昭63	大橋	清一(栃木・宇都宮商)
平元	楠	公一(徳島・徳島中央)
2	楠	公一(徳島・徳島中央)
3	楠	公一(徳島・徳島中央)
4	石田	信吾(東京・八王子工)
5	斯波	貴介(静岡・藤枝東)
6	神田	繁(埼玉・大宮工)
7	神田	繁(埼玉・大宮工)
8	平山	貴行(滋賀・綾羽)
9	大野	健一(高知・高知工)

◆イタリアンチームレース

昭63	宇都宮商(栃木)	1.34.52
平元	前橋工(群馬)	1.34.08
2	立川(東京)	1.36.54
3	八王子工(東京)	1.38.13
4	八王子工(東京)	1.35.75

◆イタリアンパーシュートレース

平成5	藤枝東(静岡)	1.38.46
6	大宮工(埼玉)	1.42.10
7	大宮工(埼玉)	1.41.27
8	前橋工(群馬)	1.44.88
9	高知工(高知)	1.44.90

□ロード

昭63	森永	典義(高知工)(20Kmﾚｰｽ)	43.40
平元	楠	公一(徳島・徳島中央)	1.08.05
2	楠	公一(徳島・徳島中央)	1.05.57
3	楠	公一(徳島・徳島中央)	1.06.52
4	稲垣	博(東京・王子工)	1.03.57

5 細谷　学(東京·八王子工) 1.06.36
6 宮崎　安造(埼玉·大宮工) 1.08.48
7 木村　良信(東京·新宿山吹) 1.05.30
8 拂山　裕一(静岡·静岡中央) 1.15.42
9 宮内　恒明(神奈川·平塚農初声分) 1.13.51

□ピスト総合
昭63 宇都宮商(栃木)
平元 前橋工(群馬)
2 立川(東京)
3 八王子工(東京)
4 八王子工(東京)
5 藤枝東(静岡)
6 大宮工(埼玉)
7 大宮工(埼玉)
8 高知工(高知)
9 高知工(高知)

□ロード総合
昭63 前橋工(群馬)
平元 国士館(群馬)
2 高知工(高知)
3 高知工(高知)
4 高知工(高知)
5 大宮工(埼玉)
6 大宮工(埼玉)
7 高知工(高知)
8 高知工(高知)
9 国士館(群馬)

≪卓　球≫
□団体
◆男子
昭63 豊島第二工業(大阪)
平元 桃谷·通(大阪)
2 豊島第二工業(大阪)
3 桃谷·通(大阪)
4 碩信·通(大分)
5 碩信·通(大分)
6 碩信·通(大分)
7 碩信·通(大分)
8 天理(奈良)
9 湘南·通(神奈川)

□個人
◆男子
昭63 安井　民雄(大阪·都島二工)
平元 鈴木富士久(神奈川·市立川崎)
2 安井　健一(大阪·都島二工)
3 吉田　実(大阪·桃谷通)
4 杉浦　富夫(愛知·刈谷東)
5 菊地　宏中(埼玉·大宮中央)
6 野口新一郎(大分·碩信通)
7 小竹　紀広(大分·碩信通)
8 小竹　紀広(大分·碩信通)
9 山本　純生(広島·福山誠之館)

◆女子
昭63 坂本　恵美(奈良·天理)
平元 坂本　恵美(奈良·天理)
2 木下　誠子(奈良·天理女子)
3 杉本　尚子(京都·朱雀)
4 柴田　尚美(大阪·桜塚)
5 杉本　尚子(京都·朱雀)
6 中野　栄子(奈良·天理)
7 高橋　恵子(青森·弘前)
8 服部マユミ(奈良·天理)
9 山本　寛子(奈良·天理)

◆女子
昭63 天理(奈良)
平元 天理(奈良)
2 天理女子学院(奈良)
3 桃谷·通(大阪)
4 天理(奈良)
5 天理(奈良)
6 天理(奈良)
7 碩信·通(大分)
8 天理(奈良)
9 天理(奈良)

≪ソフトテニス≫
□団体
◆男子
昭63 豊島第二工業(大阪)
平元 桃谷·通(大阪)
2 豊島第二工業(大阪)
3 桃谷·通(大阪)
4 碩信·通(大分)
5 碩信·通(大分)
6 碩信·通(大分)
7 碩信·通(大分)

8 天理 (奈良)
9 湘南·通 (神奈川)

◆女子

昭63 天理 (奈良)
平元 天理 (奈良)
2 天理女子学院 (奈良)
3 桃谷·通 (大阪)
4 天理 (奈良)
5 天理 (奈良)
6 天理 (奈良)
7 碩信·通 (大分)
8 天理 (奈良)
9 天理 (奈良)

□個人

◆男子

昭63 安井 民雄(大阪·都島二工)
平元 鈴木富士久(神奈川·市立川崎)
2 安井 健一(大阪·都島二工)
3 吉田 実(大阪·桃谷通)
4 杉浦 富夫(愛知·刈谷東)
5 菊地 宏中(埼玉·大宮中央)
6 野口新一郎(大分·碩信通)
7 小竹 紀広(大分·碩信通)
8 小竹 紀広(大分·碩信通)
9 山本 純生(広島·福山誠之館)

◆女子

昭63 坂本 恵美(奈良·天理)
平元 坂本 恵美(奈良·天理)
2 木下 誠子(奈良·天理女子)
3 杉本 尚子(京都·朱雀)
4 柴田 尚美(大阪·桜塚)
5 杉本 尚子(京都·朱雀)
6 中野 栄子(奈良·天理)
7 高橋 恵子(青森·弘前)
8 服部マユミ(奈良·天理)
9 山本 寛子(奈良·天理)

≪柔 道≫

□団体

◆男子

昭63 福 岡 県
平元 沖 縄 県
2 埼 玉 県
3 埼 玉 県
4 神奈川県
5 大 阪 府
6 大 阪 府
7 神奈川県
8 奈 良 県
9 神奈川県

□個人

◆男子・重量級

昭63 興座 直恒(沖縄·那覇工)
平元 興座 直恒(沖縄·那覇工)
2 新浦 智浩(埼玉·豊岡)
3 新浦 智浩(埼玉·豊岡)
4 田崎 学(東京·東海大望星)
5 高橋 一仁(秋田·秋田中央)
6 中田 智晴(秋田·秋田中央)
7 田中 達哉(神奈川·湘南通)
8 松田 潤(新潟·明鏡)
9 宇野 佳一(岐阜)

◆男子·中量級

昭63 羽生 浩行(鹿児島·鹿児島西)
平元 阿部 進一(秋田·本荘)
2 阿部 進一(秋田·本荘)
3 岡村 秀輝(長野·中野実業)
4 岡村 秀輝(長野·中野実業)
5 奥出 稔(石川·金沢市立工)
6 吉田 鉄兵(愛知·豊田西)
7 近藤 和也(奈良·天理)
8 近藤 和也(奈良·天理)
9 関 健三(神奈川)

◆男子・軽量級

昭63 夏目 芳宏(千葉·千葉商)
平元 平古場 潤(神奈川·横浜市港)
2 河口 暁(大阪)
3 橘 浩司(石川·金沢中央)
4 伊藤 嘉仙(宮崎·宮崎東)
5 小室 信行(東京·小石川)
6 本間 和頼(埼玉·熊谷)
7 柿沼 貴博(神奈川·湘南通)
8 富永 光一(東京·戸山)
9 佐藤 仁重(埼玉)

◆女子

平2　高柳　恵美(東京)
3　松原　咲子(奈良・天理)
4　松原　咲子(奈良・天理)
5　野並　真紀(奈良・天理)
6　長谷川順子(埼玉・春日部)
7　長谷川順子(埼玉・春日部)
8　長谷川順子(埼玉・春日部)
9　紀井かおり(岡山)

≪剣　道≫

□団体

◆男子

昭63　神奈川県
平元　愛 知 県
2　神奈川県
3　神奈川県
4　神奈川県
5　神奈川県
6　神奈川県
7　神奈川県
8　神奈川県
9　神奈川県

◆女子

平9　福 岡 県

□個人

◆男子

昭63　水田　克司(愛媛・松山商)
平元　松尾　貴俊(神奈川・湘南通)
2　福留真奈武(兵庫・楠)
3　黒木　　譲(宮崎・宮崎東)
4　中村　太亮(神奈川・湘南通)
5　中村　隆二(神奈川・湘南通)
6　塚本　一郎(兵庫・赤穂)
7　川島　英治(神奈川・湘南通)
8　田上雄一郎(熊本・湧心館)
9　宇野　佳一(岐阜)

◆女子

昭63　殿村　栄子(岐阜・郡上和良分)
平元　藤沢　恭子(岐阜・郡上和良分)
2　高村さちこ(宮城・白石)
3　岡田あき子(岐阜・郡上和良分)
4　高村さちこ(宮城・白石)
5　高村さちこ(宮城・白石)
6　松下　恵美(奈良・天理)
7　藤井　祥子(岐阜・麗澤瑞浪)
8　田中まりこ(広島・海田)
9　関　　健三(神奈川)

≪バレーボール≫

◆男子

昭63　長田工　(兵庫)
平元　松江北・通　(島根)
2　湘南・通　(神奈川)
3　天理　(奈良)
4　松江北・通　(島根)
5　湘南・通　(神奈川)
6　向陽台・岐阜　(岐阜)
7　向陽台・岐阜　(岐阜)
8　湘南・通　(神奈川)
9　湘南・通　(神奈川)

◆女子

昭63　向陽台　(大阪)
平元　誠和　(愛知)
2　誠和　(愛知)
3　誠和　(愛知)
4　誠和　(愛知)
5　向陽台　(大阪)
6　天理　(奈良)
7　泊　(沖縄)
8　別海　(北海道)
9　別海　(北海道)

≪バスケットボール≫

◆男子

平3　湘南・通　(神奈川)
4　天理　(奈良)
5　川越工　(埼玉)
6　八戸中央　(青森)
7　天理　(奈良)
8　上野・通　(東京)
9　湘南・通　(神奈川)

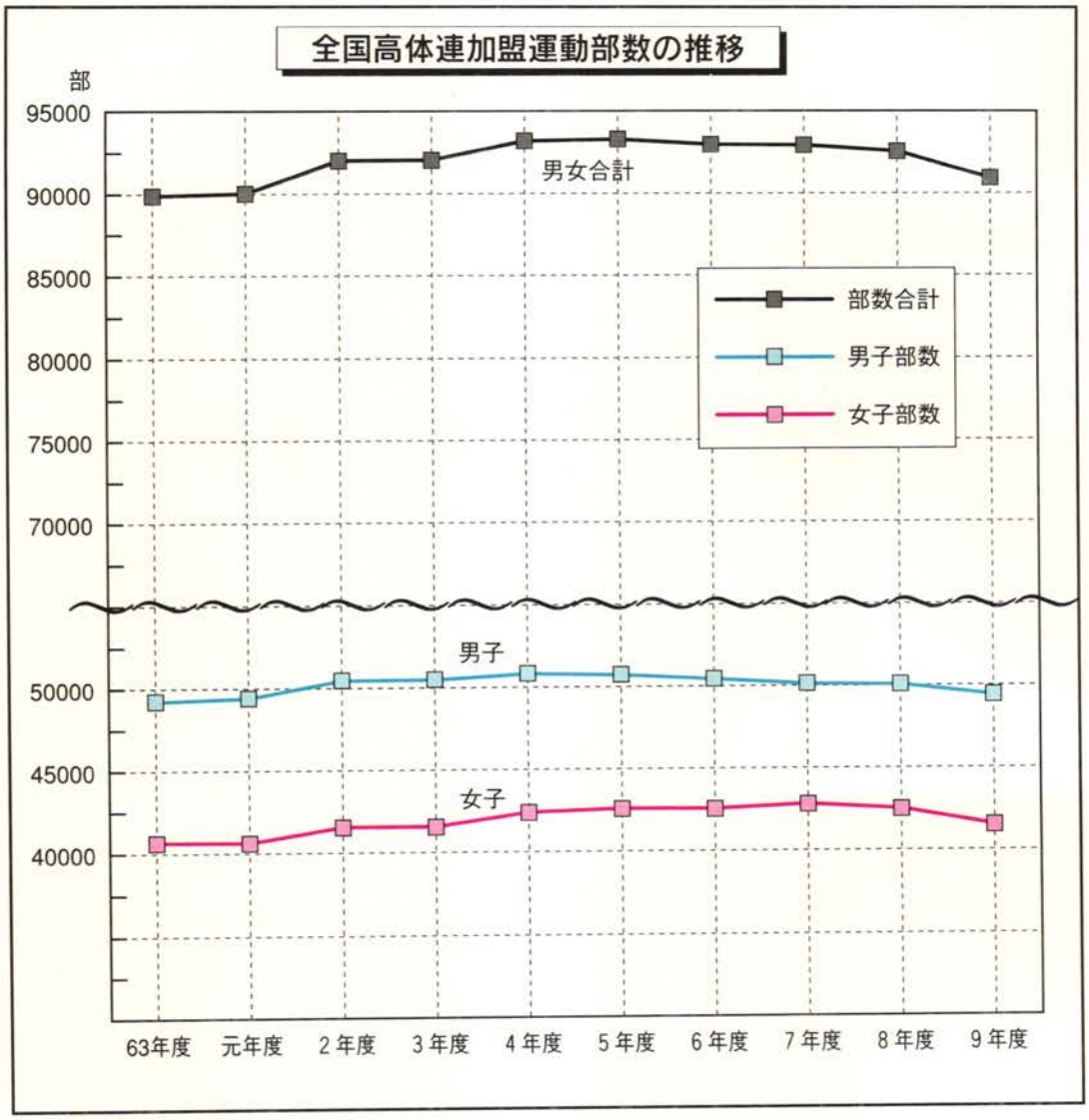
◆女子

平3　林学園誠信　(愛知)
4　天理　(奈良)
5　天理　(奈良)
6　水戸南・通　(茨城)

7 天理 （奈良）
8 天理 （奈良）
9 水戸南·通 （茨城）

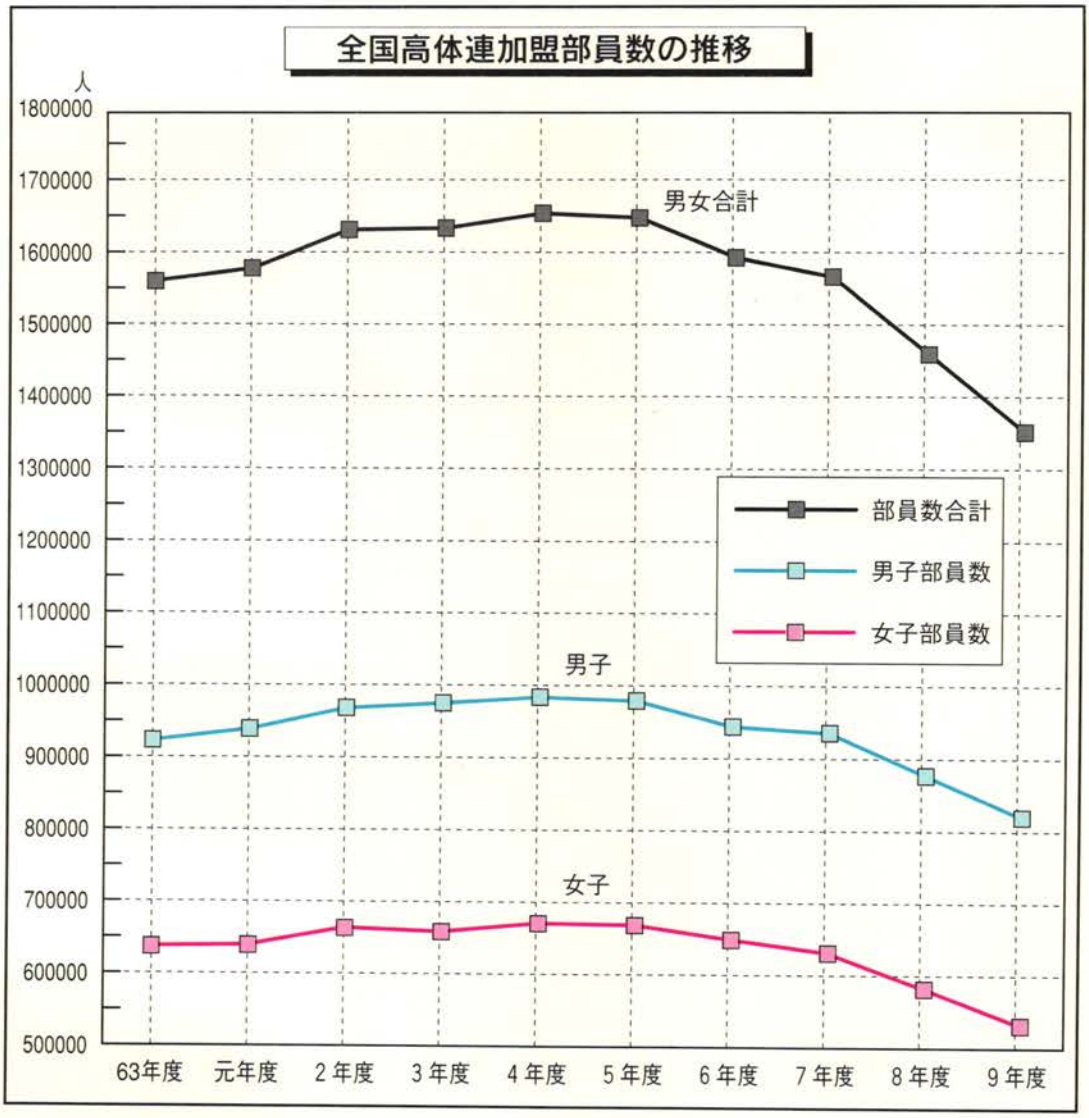
≪サッカー≫
平3 千葉商 （千葉）
4 久留米 （東京）
5 厚木南 （神奈川）
6 科技·刈谷 （愛知）
7 千葉商 （千葉）
8 福智·浜松 （静岡）
9 福智·東亜 （兵庫）

部員数・部数の推移



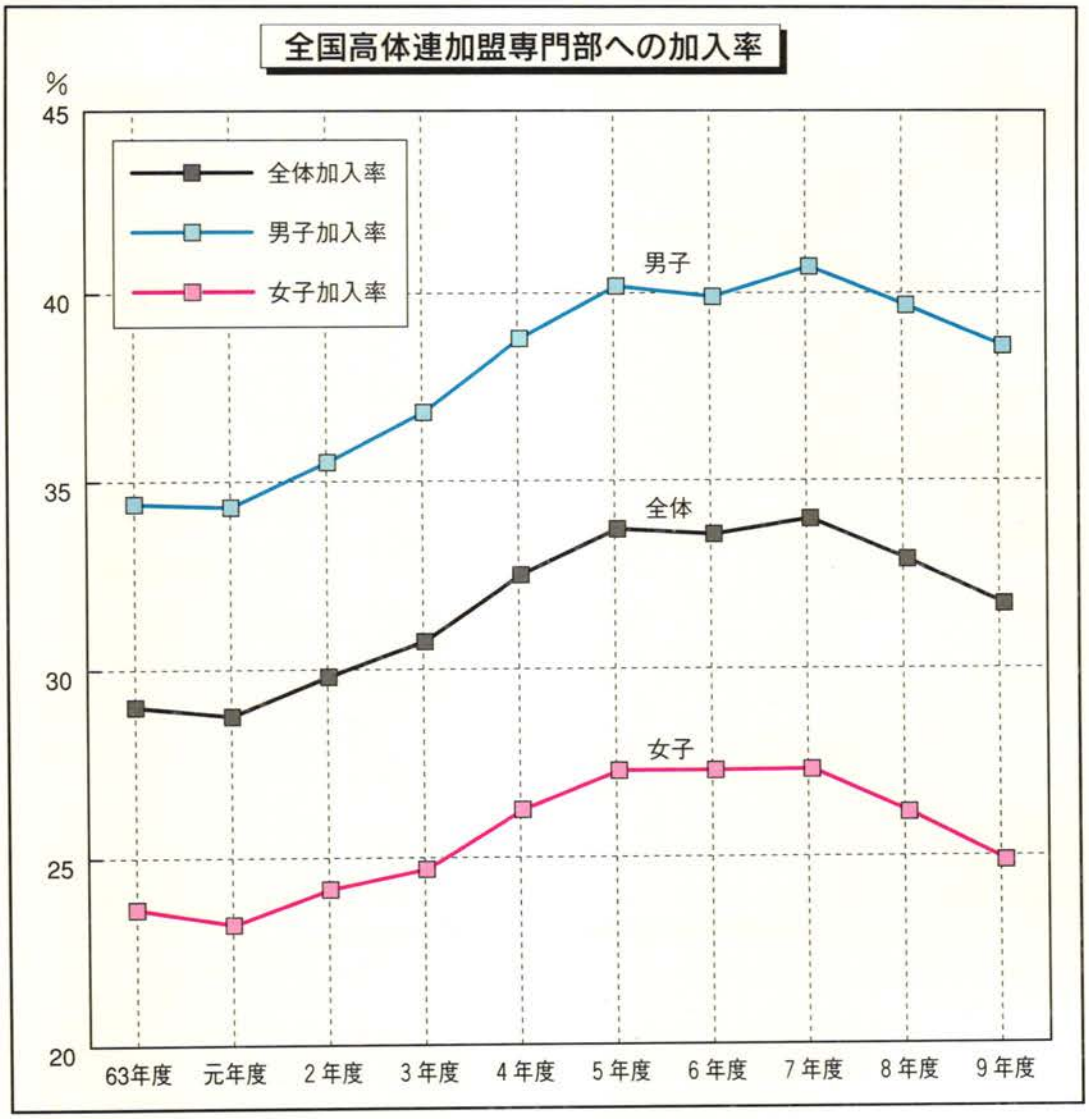
加盟運動部数の推移

		男子部数	女子部数	部数合計	備　　考
運動部数	63年度	49,244	40,640	89,884	
	元年度	49,421	40,606	90,027	
	2年度	50,477	41,532	92,009	アーチェリー加盟
	3年度	50,501	41,536	92,037	
	4年度	50,836	42,366	93,202	
	5年度	50,738	42,562	93,300	なぎなた加盟
	6年度	50,450	42,526	92,976	
	7年度	50,140	42,783	92,923	
	8年度	50,072	42,474	92,546	
	9年度	49,433	41,494	90,927	



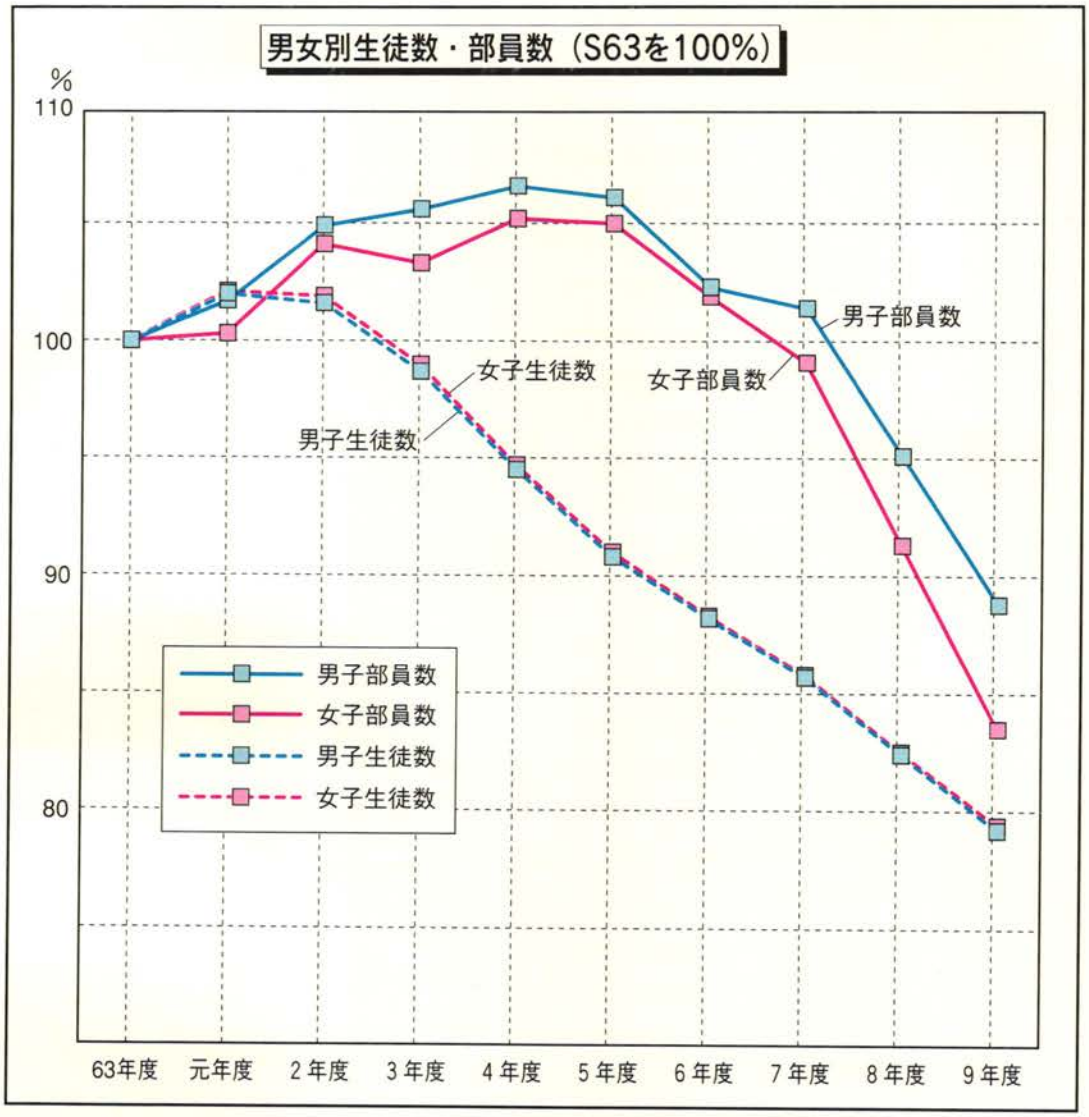
加盟運動部員数の推移

		男子部員数	女子部員数	部員数計	備考
部員数	63年度	922,953	636,779	1,559,732	
	元年度	938,990	638,773	1,577,763	
	2年度	967,892	662,928	1,630,820	アーチェリー加盟
	3年度	975,051	657,946	1,632,997	
	4年度	983,648	670,102	1,653,750	
	5年度	979,126	668,374	1,647,500	なぎなた加盟
	6年度	944,083	648,637	1,592,720	
	7年度	935,747	630,812	1,566,559	
	8年度	877,292	581,578	1,458,870	
	9年度	819,931	531,518	1,351,449	



加入率の推移

		男子加入率	女子加入率	全体加入率	備考
加入率	63年度	34.41%	23.64%	29.01%	
	元年度	34.32%	23.23%	28.76%	
	2年度	35.51%	24.16%	29.81%	アーチェリー加盟
	3年度	36.83%	24.69%	30.74%	
	4年度	38.80%	26.26%	32.51%	
	5年度	40.18%	27.28%	33.71%	なぎなた加盟
	6年度	39.90%	27.28%	33.57%	
	7年度	40.70%	27.30%	33.98%	
	8年度	39.67%	26.16%	32.90%	
	9年度	38.59%	24.87%	31.71%	



S63を100%とした場合の全国の生徒数・部員数の推移

		男子		女子	
		生徒数	部員数	生徒数	部員数
生徒数・部員数	63年度	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	元年度	102.0%	101.7%	102.1%	100.3%
	2年度	101.6%	104.9%	101.9%	104.1%
	3年度	98.7%	105.6%	99.0%	103.3%
	4年度	94.5%	106.6%	94.7%	105.2%
	5年度	90.8%	106.1%	91.0%	105.0%
	6年度	88.2%	102.3%	88.3%	101.9%
	7年度	85.7%	101.4%	85.8%	99.1%
	8年度	82.4%	95.1%	82.5%	91.3%
	9年度	79.2%	88.8%	79.4%	83.5%

全国高体連　専門部別加盟数の推移

		陸上競技		体　操		水　泳		バスケットボール	
		男	女	男	女	男	女	男	女
部員数	63年度	84,096	52,546	9,717	21,853	26,273	18,770	86,869	83,516
	元年度	84,205	55,494	10,377	21,309	27,476	22,204	86,582	82,171
	2年度	83,056	56,856	9,563	19,740	28,593	24,675	90,094	85,083
	3年度	81,842	57,340	8,650	18,175	28,296	25,097	98,779	86,192
	4年度	80,898	57,494	7,644	17,521	26,954	25,646	113,148	90,635
	5年度	78,967	57,286	6,870	15,928	27,008	26,887	126,639	96,033
	6年度	76,217	53,794	5,984	14,872	25,581	26,775	127,703	92,551
	7年度	73,383	50,932	4,917	13,140	24,343	25,986	130,196	90,385
	8年度	70,967	46,505	4,505	10,980	22,566	23,814	122,334	82,423
	9年度	67,793	41,950	4,859	9,740	20,845	21,106	114,047	74,306
部数	63年度	4,314	4,046	1,081	1,889	2,191	2,019	4,026	3,984
	元年度	4,325	4,108	1,117	1,856	2,193	2,013	4,015	3,986
	2年度	4,388	4,098	1,068	1,806	2,225	2,079	4,117	4,075
	3年度	4,383	4,159	1,016	1,770	2,253	2,091	4,127	4,001
	4年度	4,419	4,204	993	1,726	2,277	2,155	4,160	4,064
	5年度	4,402	4,192	917	1,638	2,268	2,153	4,191	4,103
	6年度	4,360	4,148	839	1,573	2,287	2,192	4,263	4,111
	7年度	4,320	4,140	769	1,485	2,288	2,228	4,304	4,087
	8年度	4,355	4,111	742	1,372	2,289	2,220	4,372	4,120
	9年度	4,368	4,042	735	1,305	2,272	2,133	4,396	4,096

		バレーボール		卓　球		ソフトテニス		ハンドボール	
		男	女	男	女	男	女	男	女
部員数	63年度	76,995	90,299	55,886	35,568	61,673	76,679	32,311	21,080
	元年度	79,501	88,776	54,377	30,585	62,845	75,896	33,418	20,106
	2年度	81,584	92,378	54,162	29,498	65,225	78,312	34,552	21,019
	3年度	82,259	91,384	52,918	26,934	62,065	75,280	33,510	20,788
	4年度	82,641	94,052	56,010	27,558	59,944	73,743	31,215	21,643
	5年度	77,443	91,359	52,763	26,621	56,342	71,061	32,359	22,048
	6年度	72,856	89,172	50,333	26,659	50,521	69,333	31,803	21,500
	7年度	69,339	88,119	49,423	26,709	49,771	64,006	30,204	20,520
	8年度	63,714	83,799	49,801	25,535	46,572	58,633	28,007	18,798
	9年度	58,103	78,056	46,739	23,081	43,578	52,473	25,600	16,824
部数	63年度	4,020	4,386	4,100	3,693	3,372	3,733	1,481	1,141
	元年度	3,977	4,349	4,026	3,454	3,252	3,650	1,493	1,147
	2年度	4,088	4,420	4,103	3,459	3,242	3,633	1,516	1,171
	3年度	4,062	4,400	4,076	3,326	3,147	3,499	1,504	1,127
	4年度	4,052	4,430	4,163	3,451	3,099	3,513	1,506	1,179
	5年度	4,009	4,391	4,063	3,351	3,027	3,485	1,502	1,193
	6年度	3,971	4,391	4,020	3,302	2,949	3,442	1,504	1,163
	7年度	3,920	4,396	3,992	3,372	2,833	3,390	1,494	1,198
	8年度	3,841	4,443	4,009	3,404	2,777	3,340	1,475	1,144
	9年度	3,764	4,370	3,937	3,237	2,748	3,262	1,441	1,119

		サッカー	ラグビー	バドミントン		ソフトボール		相　撲
		男	男	男	女	男	女	男
部員数	63年度	146,417	53,191	38,209	48,199	8,457	47,298	2,589
	元年度	146,517	55,103	41,158	49,618	9,096	48,221	2,499
	2年度	151,554	54,855	42,567	51,772	10,597	50,174	2,474
	3年度	153,615	57,156	43,240	53,137	10,189	46,384	2,410
	4年度	155,786	53,826	43,136	55,672	10,282	46,087	2,413
	5年度	161,391	50,347	43,373	56,735	9,709	43,843	2,513
	6年度	170,025	44,676	39,973	55,828	8,326	41,679	2,374
	7年度	184,546	42,366	40,190	59,517	8,004	39,443	2,159
	8年度	174,121	36,838	37,869	56,597	7,506	35,869	1,880
	9年度	163,513	33,145	35,105	53,059	7,035	32,168	1,645
部数	63年度	3,940	1,518	2,519	2,940	406	2,345	296
	元年度	3,944	1,532	2,531	2,934	417	2,330	286
	2年度	4,019	1,531	2,536	3,018	454	2,367	288
	3年度	4,051	1,553	2,708	3,151	461	2,338	276
	4年度	4,060	1,587	2,687	3,095	468	2,357	268
	5年度	4,095	1,559	2,720	3,131	460	2,294	275
	6年度	4,160	1,543	2,718	3,164	434	2,291	275
	7年度	4,183	1,501	2,756	3,229	415	2,218	266
	8年度	4,238	1,496	2,776	3,278	411	2,170	253
	9年度	4,259	1,416	2,717	3,277	392	2,080	246

		柔　道		ス　キ　ー		スケート	
		男	女	男	女	男	女
部員数	63年度	47,383	6,196	5,838	2,022	1,498	512
	元年度	49,742	6,886	6,244	2,211	1,699	560
	2年度	51,784	6,993	6,911	2,696	1,647	600
	3年度	53,557	7,617	6,705	3,021	1,749	519
	4年度	55,756	10,145	6,497	2,656	1,804	498
	5年度	55,518	11,869	6,557	2,794	1,917	480
	6年度	51,159	12,864	6,052	2,677	1,773	540
	7年度	46,403	12,368	6,149	2,461	1,646	430
	8年度	40,316	10,848	5,582	2,192	1,539	418
	9年度	36,830	9,362	4,649	1,955	1,582	397
部数	63年度	3,416	1,241	666	386	172	134
	元年度	3,620	1,339	630	401	168	136
	2年度	3,657	1,439	655	428	166	131
	3年度	3,587	1,505	688	424	151	131
	4年度	3,695	1,816	724	464	165	144
	5年度	3,716	1,993	718	477	165	142
	6年度	3,680	2,096	650	465	133	146
	7年度	3,654	2,169	662	470	152	146
	8年度	3,603	2,089	671	494	152	146
	9年度	3,499	1,976	680	461	154	142

		漕艇		剣道		レスリング	弓道	
		男	女	男	女	男	男	女
部員数	63年度	4,765	1,589	52,806	33,864	5,233	29,623	34,457
	元年度	4,561	1,691	51,182	33,949	5,266	30,433	34,581
	2年度	4,693	1,767	52,496	34,838	5,199	31,830	36,500
	3年度	4,431	1,737	51,311	33,250	5,088	31,181	37,152
	4年度	4,500	1,956	48,699	31,697	4,852	30,834	37,515
	5年度	4,246	2,048	45,808	29,668	4,700	30,508	37,768
	6年度	4,381	2,115	40,090	26,742	4,591	28,844	36,643
	7年度	3,782	1,944	39,489	25,998	4,081	27,649	36,034
	8年度	3,496	1,876	36,521	23,555	3,593	25,757	32,504
	9年度	3,037	1,842	33,586	21,693	3,349	24,539	30,825

部数	63年度	245	156	3,985	3,363	352	1,485	1,541
	元年度	246	161	3,864	3,427	361	1,576	1,591
	2年度	253	165	3,997	3,532	358	1,574	1,628
	3年度	245	173	3,966	3,549	361	1,606	1,692
	4年度	249	183	3,934	3,528	351	1,631	1,683
	5年度	241	178	3,971	3,480	356	1,650	1,749
	6年度	256	185	3,842	3,377	355	1,671	1,781
	7年度	248	188	3,872	3,456	341	1,688	1,828
	8年度	255	188	3,747	3,311	336	1,705	1,818
	9年度	244	195	3,671	3,172	322	1,709	1,813

		テニス		登山		自転車	ボクシング	ホッケー	
		男	女	男	女	男	男	男	女
部員数	63年度	49,372	49,378	15,445	5,326	3,323	3,503	2,162	1,372
	元年度	52,748	51,597	15,093	4,985	3,357	3,618	2,441	1,536
	2年度	57,268	54,166	14,852	5,141	3,201	3,726	2,524	1,607
	3年度	58,861	58,109	14,470	4,901	3,266	4,169	2,519	1,715
	4年度	60,265	59,251	14,181	5,057	3,104	4,305	2,518	1,845
	5年度	58,642	58,711	13,384	4,520	2,827	4,127	2,502	1,850
	6年度	57,890	57,425	12,716	4,316	2,737	3,915	2,568	1,971
	7年度	56,273	56,159	12,049	4,046	2,620	3,855	2,447	1,981
	8年度	55,567	51,273	11,576	3,973	2,383	3,621	2,549	1,967
	9年度	53,997	48,112	10,380	3,557	2,137	3,839	2,399	1,827

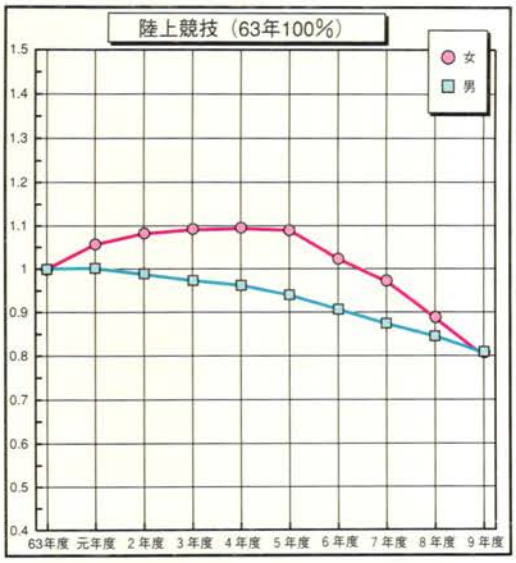
部数	63年度	2,075	2,020	1,481	826	297	274	99	66
	元年度	2,138	2,100	1,517	807	308	315	107	81
	2年度	2,273	2,226	1,505	808	320	298	108	81
	3年度	2,315	2,322	1,497	794	311	317	109	82
	4年度	2,371	2,411	1,479	783	298	318	115	87
	5年度	2,451	2,469	1,439	770	290	336	108	94
	6年度	2,528	2,520	1,413	766	298	352	111	89
	7年度	2,532	2,577	1,388	754	279	333	107	93
	8年度	2,604	2,606	1,351	719	284	332	116	100
	9年度	2,632	2,651	1,283	698	267	331	114	105

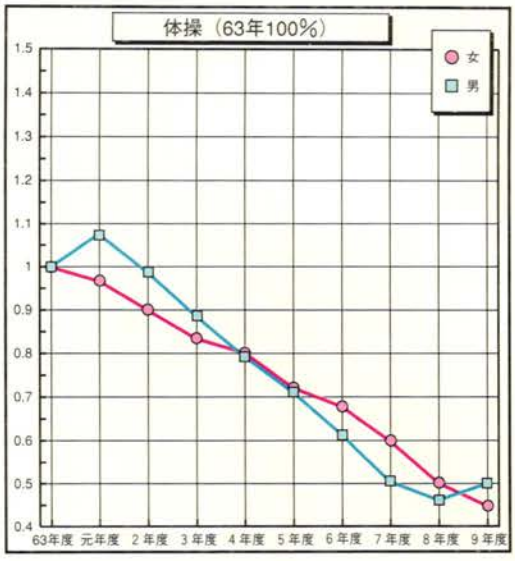
		ウエイトリフティング	ヨット		フェンシング		空手道	
		男	男	女	男	女	男	女
部員数	63年度	2,718	1,254	536	1,987	1,680	13,360	4,039
	元年度	2,774	1,381	464	1,914	1,642	13,383	4,291
	2年度	2,760	1,442	585	1,856	1,663	13,998	4,675
	3年度	2,780	1,400	585	1,831	1,648	13,822	4,707
	4年度	2,757	1,405	600	1,641	1,518	13,763	4,867
	5年度	2,710	1,279	506	1,566	1,492	14,080	4,769
	6年度	2,453	1,204	508	1,500	1,527	13,070	4,967
	7年度	2,336	1,142	580	1,320	1,552	12,839	4,584
	8年度	2,178	975	514	1,253	1,461	11,045	4,096
	9年度	1,956	948	486	1,165	1,300	10,899	4,017

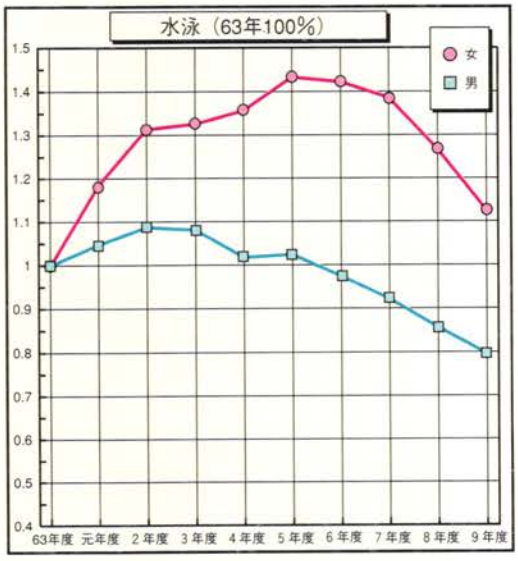
部数	63年度	224	119	69	170	154	920	508
	元年度	229	113	64	182	167	939	505
	2年度	257	114	72	179	168	995	542
	3年度	250	113	74	177	170	990	562
	4年度	240	130	72	172	167	1,013	647
	5年度	241	117	66	169	168	1,059	664
	6年度	242	119	71	170	183	1,086	678
	7年度	255	120	81	162	167	1,079	689
	8年度	259	112	76	163	176	1,113	698
	9年度	250	121	87	153	165	1,078	678

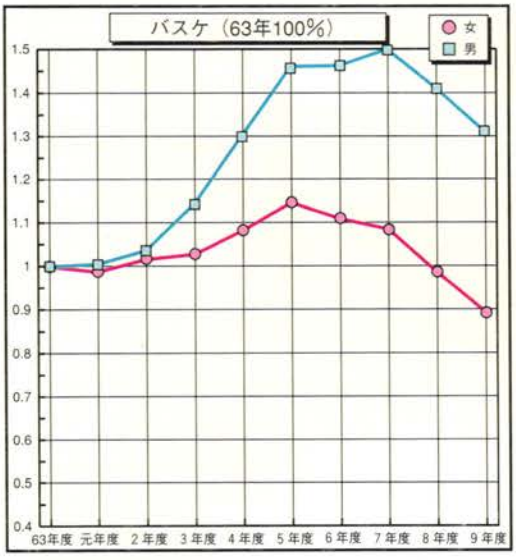
		アーチェリー		なぎなた				
		男	女	女		男計	女計	総計
部員数	63年度					922,953	636,779	1,559,732
	元年度					938,990	638,773	1,577,763
	2年度	2,829	2,190			967,892	662,928	1,630,820
	3年度	2,962	2,274			975,051	657,946	1,632,997
	4年度	3,050	2,446			983,648	670,102	1,653,750
	5年度	3,031	2,471	1,627		979,126	668,374	1,647,500
	6年度	2,768	2,411	1,768		944,083	648,637	1,592,720
	7年度	2,826	2,183	1,735		935,747	630,812	1,566,559
	8年度	2,661	2,214	1,734		877,292	581,578	1,458,870
	9年度	2,632	1,738	1,644		819,931	531,518	1,351,449

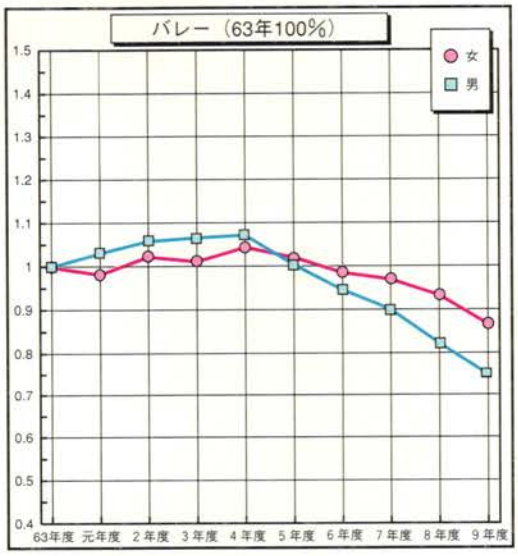
部数	63年度					49,244	40,640	89,884
	元年度					49,421	40,606	90,027
	2年度	193	186			50,477	41,532	92,009
	3年度	201	196			50,501	41,536	92,037
	4年度	212	207			50,836	42,366	93,202
	5年度	223	225	156		50,738	42,562	93,300
	6年度	221	223	169		50,450	42,526	92,976
	7年度	227	233	189		50,140	42,783	92,923
	8年度	235	247	204		50,072	42,474	92,546
	9年度	234	227	203		49,433	41,494	90,927

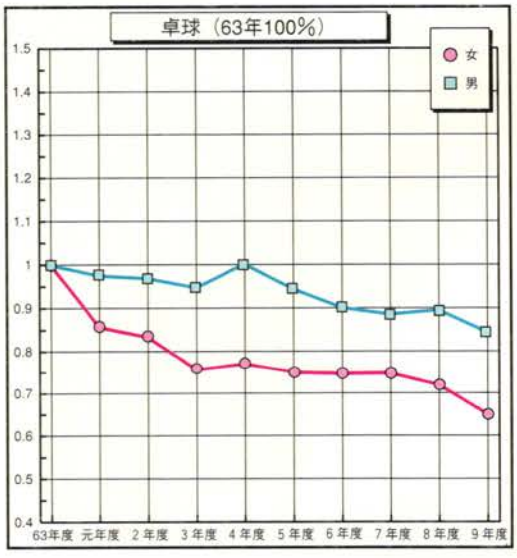

陸上競技（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

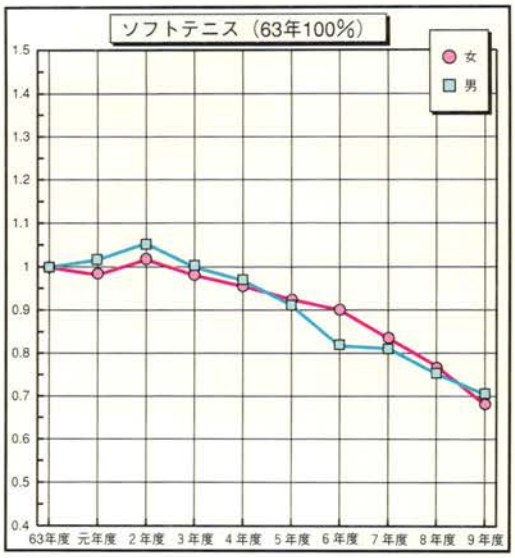

体操（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

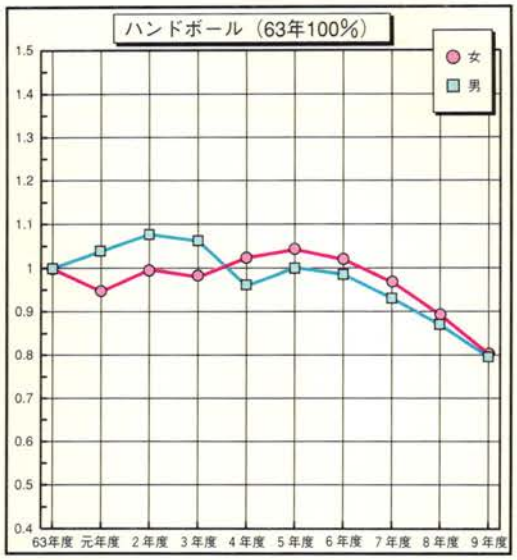

水泳（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

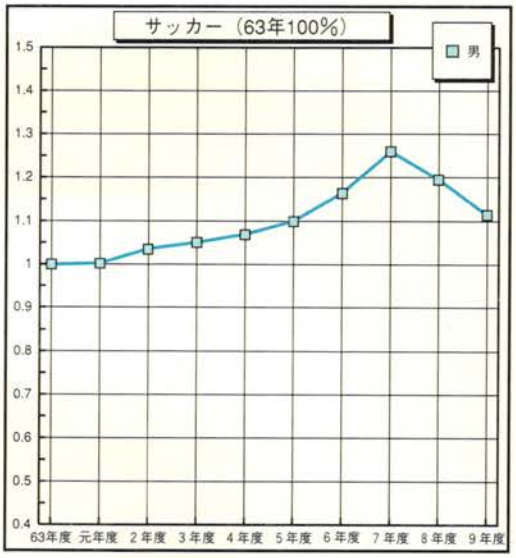

バスケ（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

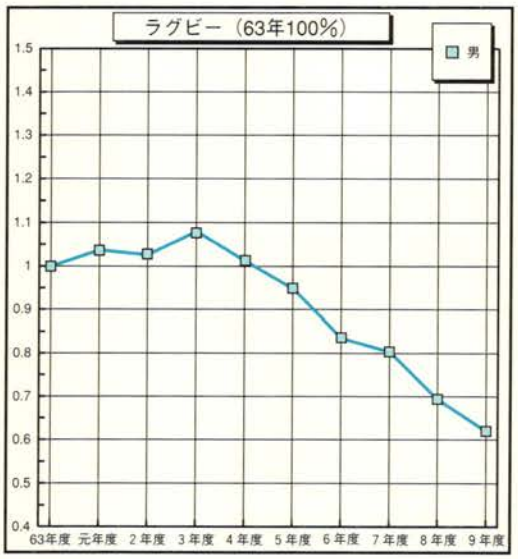

バレー（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

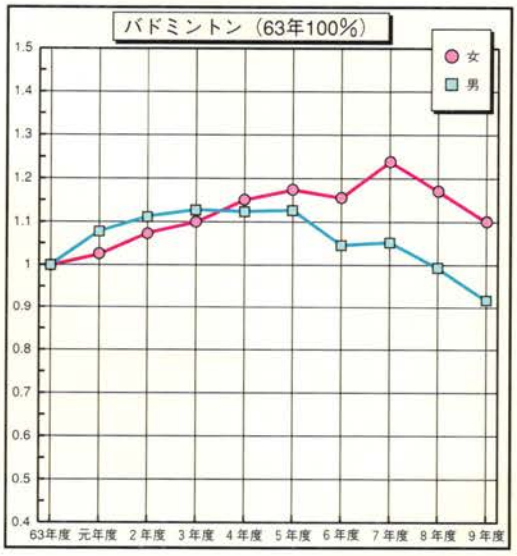

卓球（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

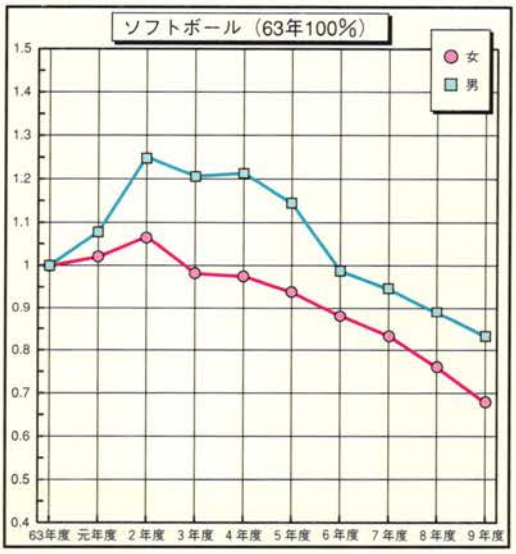

ソフトテニス（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

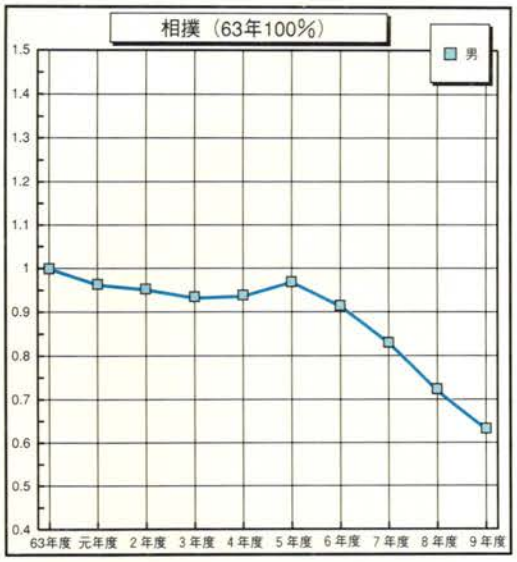

ハンドボール（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

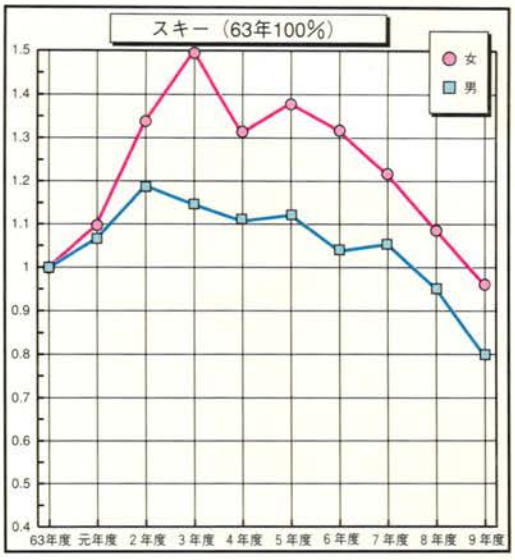

サッカー（63年100%）
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

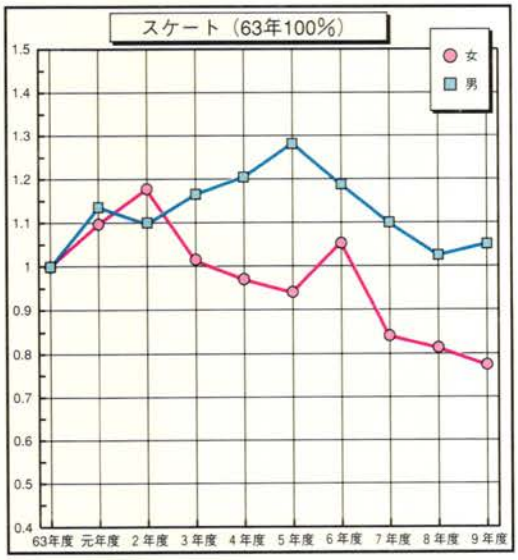

ラグビー（63年100%）
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

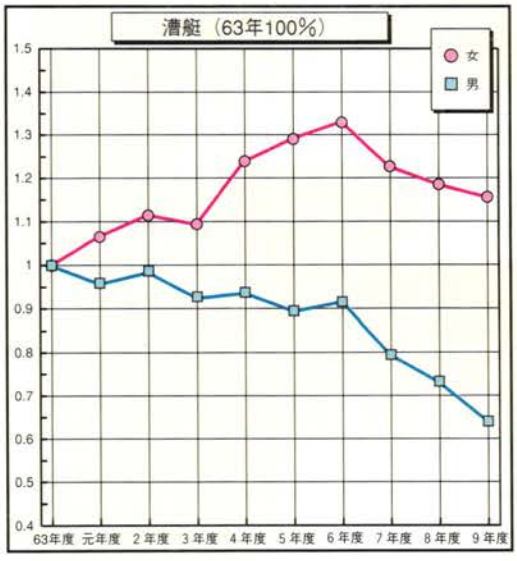

バドミントン（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

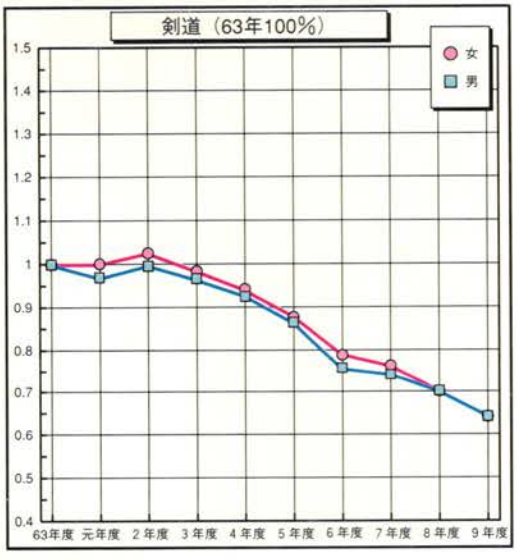

ソフトボール（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

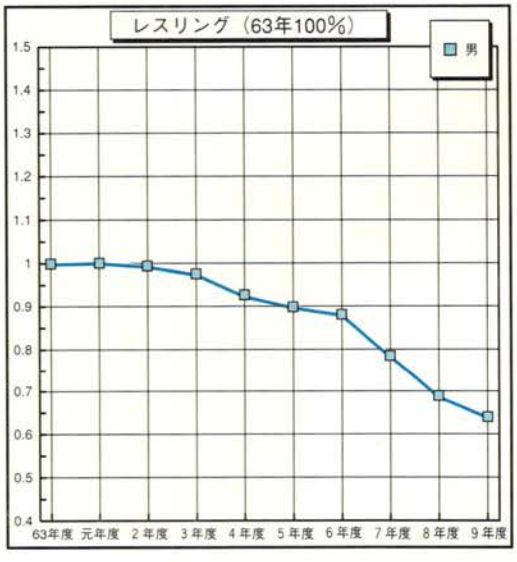

相撲（63年100%）
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

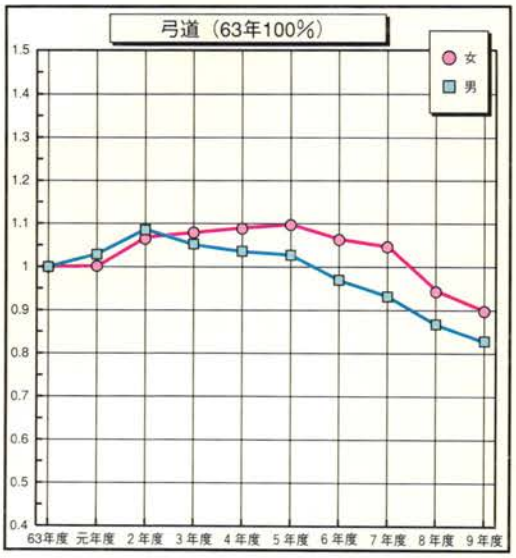

スキー（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

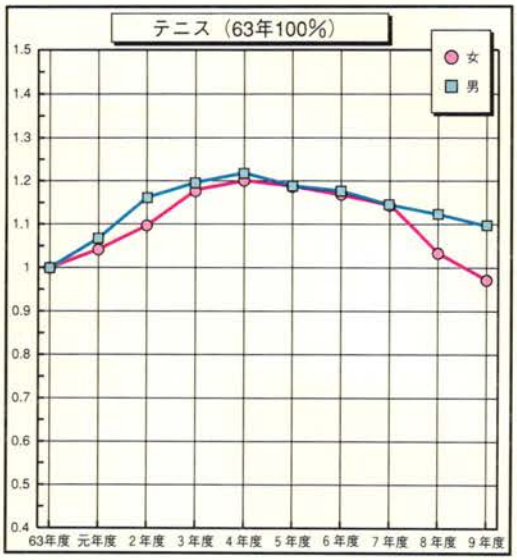

スケート（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

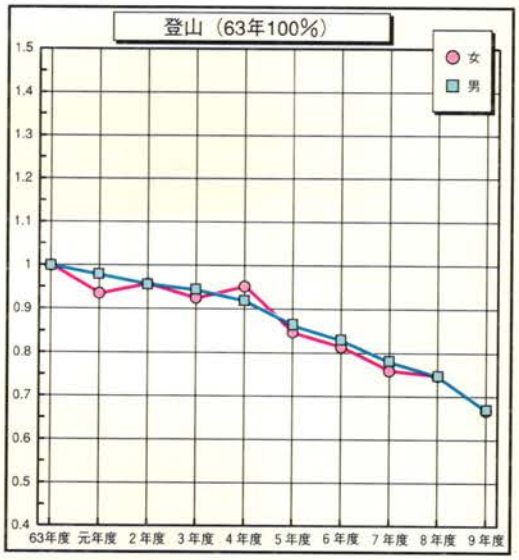

漕艇（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

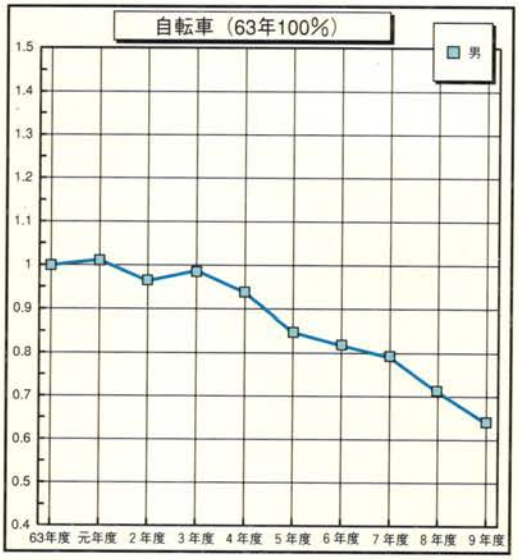

剣道（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

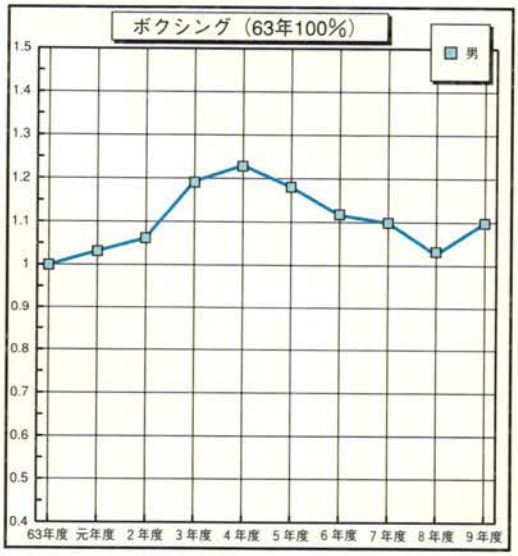

レスリング（63年100%）
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

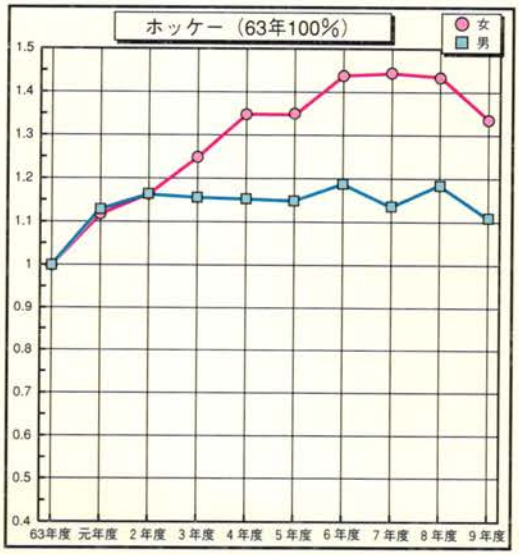

弓道（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

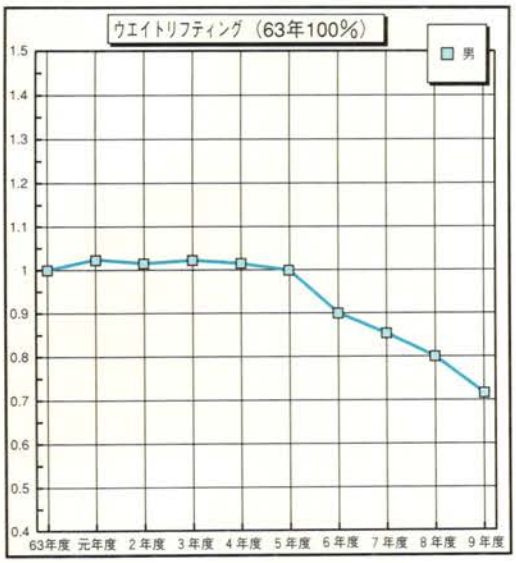

テニス（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

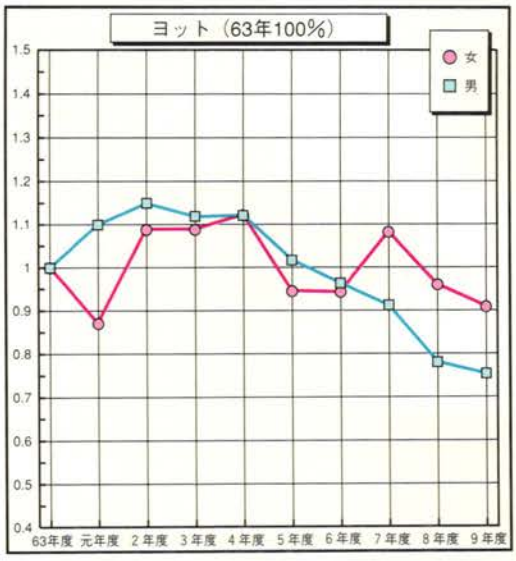

登山（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

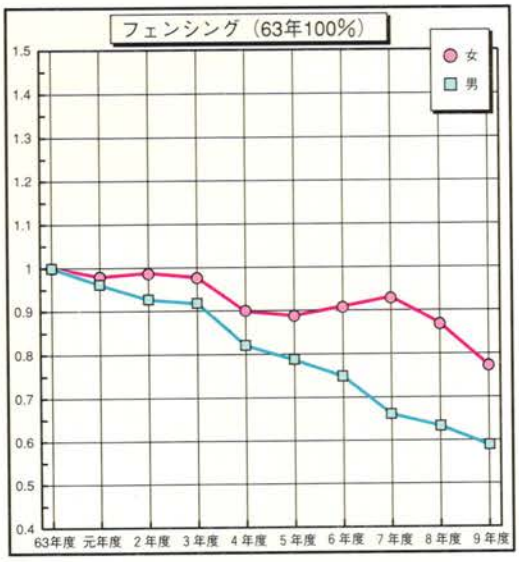

自転車（63年100%）
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

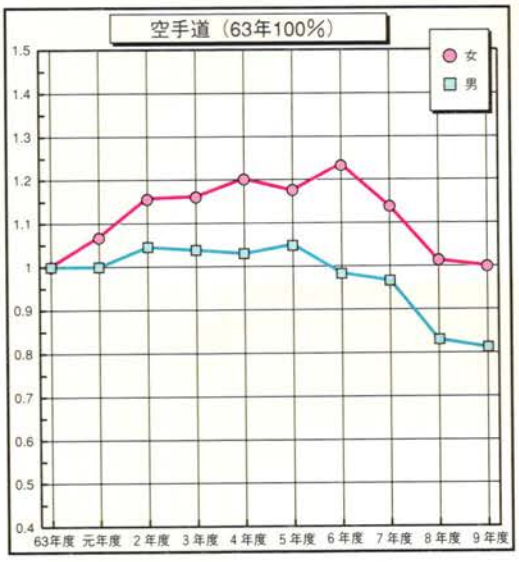

ボクシング（63年100%）
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

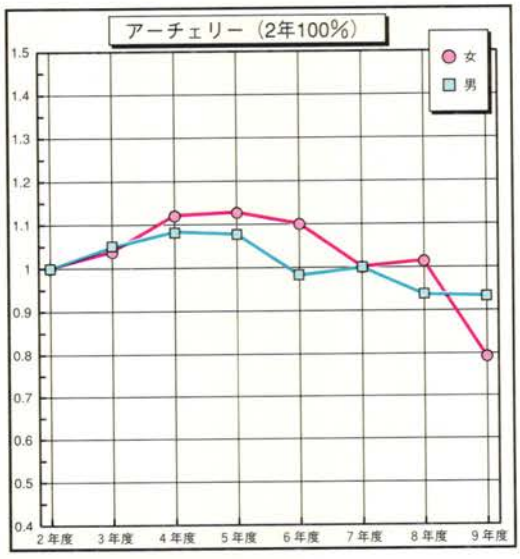

ホッケー（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

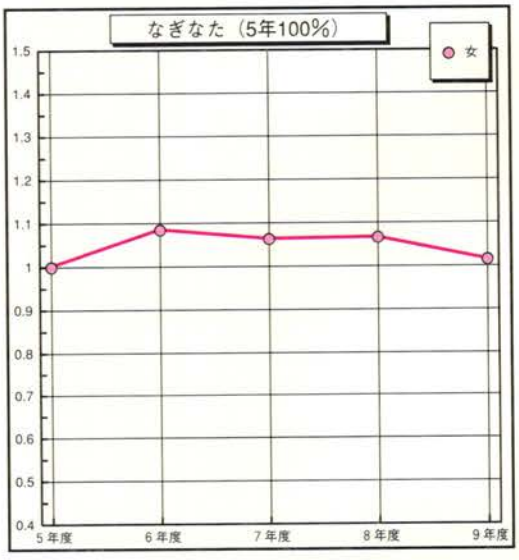

ウエイトリフティング（63年100%）
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度

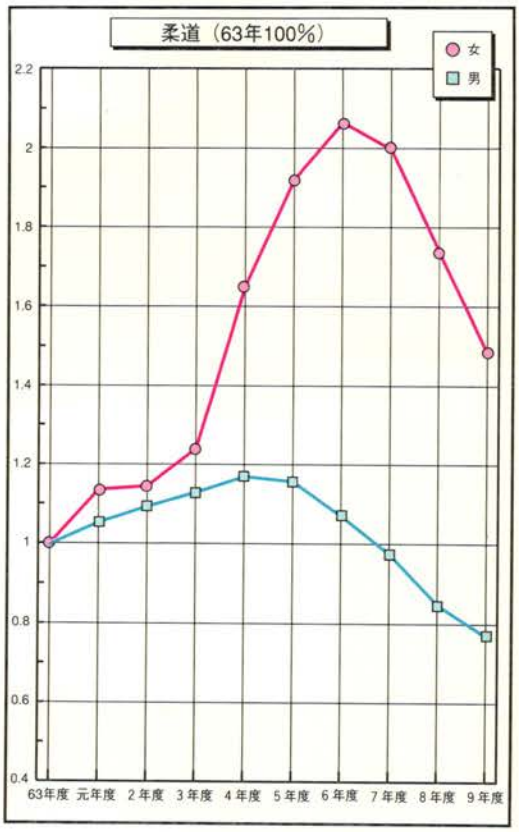

ヨット（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度


フェンシング（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度


空手道（63年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
63年度 元年度 2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度


アーチェリー（2年100%）
女
男
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
2年度 3年度 4年度 5年度 6年度 7年度 8年度 9年度


なぎなた（5年100%）
女
1.5
1.4
1.3
1.2
1.1
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
5年度 6年度 7年度 8年度 9年度



専門部別部員数の比較
（昭和63年を100%として比較）

■男　子

1	バスケットボール	131.29
2	サッカー	111.68
3	ホッケー	110.96
4	ボクシング	109.59
5	テニス	109.37
6	スケート	105.61
7	アーチェリー	93.04
8	バドミントン	91.88
9	卓球	83.63
10	ソフトボール	83.19
11	弓道	82.84
12	空手道	81.58
13	陸上競技	80.61
14	スキー	79.63
15	水泳	79.34
16	ハンドボール	79.23
17	柔道	77.73
18	ヨット	75.60
19	バレーボール	75.46
20	ウエイトリフティング	71.96
21	ソフトテニス	70.66
22	登山	67.21
23	自転車	64.31
24	レスリング	64.00
25	漕艇	63.74
26	剣道	63.60
27	相撲	63.54
28	ラグビー	62.31
29	フェンシング	58.63
30	体操	50.01

■女　子

1	柔道	151.10
2	ホッケー	133.16
3	漕艇	115.92
4	水泳	112.45
5	バドミントン	110.08
6	なぎなた	101.04
7	空手道	99.46
8	テニス	97.44
9	スキー	96.69
10	ヨット	90.67
11	弓道	89.46
12	バスケットボール	88.97
13	バレーボール	86.44
14	陸上競技	79.83
15	ハンドボール	79.81
16	アーチェリー	79.36
17	スケート	77.54
18	フェンシング	77.38
19	ソフトテニス	68.43
20	ソフトボール	68.01
21	登山	66.79
22	卓球	64.89
23	剣道	64.06
24	体操	44.57

※アーチェリーはH2年、なぎなたはH5年を100とした

50周年記念事業

式　　辞

全国高等学校体育連盟
会　長　**河上　一雄**

本日、ここに全国高等学校体育連盟が昭和23年（1948年）6月28日創設されて以来、50周年を迎え、その記念式典を開催するにあたり、皇太子殿下・皇太子妃殿下のご臨席のもと、文部大臣・有馬朗人様をはじめとして多くのご来賓のご列席をいただき、盛大に開催できますことに心より御礼申し上げます。

さて、全国高等学校体育連盟は戦後の学制改革による新制高等学校の発足とともに創設され、昭和25年（1950年）6月2日に制定されたシンボル・マークに象徴される、三つのK、ドイツ語でいうクラスト・クンスト・クラルハイト、つまり「力と技と明朗な精神」をモットーに、高等学校における体育・スポーツ活動の振興を通じて、青少年の健全育成に鋭意努めてまいりました。

戦後の混乱期、復興期そして経済の高度成長期を経るなか、それまでの高等学校選手権大会に代わり、昭和38年（1963年）に一定の時期に同じ地域内で開催される高校生のスポーツの祭典とでもいうべき全国高等学校総合体育大会、別称インターハイが開催されるに至りました。

ことに、経済の高度成長を契機に、高等学校進学率が大幅に上昇するなか、高校生のスポーツ活動はますます盛んとなり、総合体育大会も広く国民からも親しまれるものとなり、昭和41年（1966年）からは皇太子殿下・皇太子妃殿下の行啓を賜り、今日にいたっております。

そして、世界の高等学校教育のなかでも例をみない、教育とスポーツとの調和を図るとの視点のもとでの活動は、すぐれた実績をあげてきたところであります。

平成の時代を迎えてここ10年ほどのなか、高校生の競技能力は大きく向上し、各種競技大会での高校生の活躍には目覚ましいものがあります。

しかし一方で、汗を流して自らスポーツ活動に親しむとの姿勢が、価値観の多様化などが進むなか、ややもすればスポーツは見る方が楽しいとの傾向が生まれるなかで変化しつつあります。また、少子化の進行ともあいまち、部活動の一部において部員が減少するなど、高等学校におけるスポーツ活動が停滞し始めている問題が顕在化してきています。

そのうえ、教育とスポーツ活動との調和を図るとの視点からすると、勝利至上主義も一部に見られ、批判を招く事態にもなっています。こうした問題とともに、今、時代や社会は大きく変化し、情報化・国際化・高齢化ことに少子超高齢化社会の到来を目前にし、高等学校教育は大きな

変革をもとめられています。

こうしたなか、全国高等学校体育連盟も、時代や社会の変化に対応し、心豊かでたくましく未来を切り開く、心身ともに健全な高校生の育成を、体育・スポーツ活動の一層の充実と改善を図るなかで大きく進めることが必要と考えます。

ことに、これからの学校週5日制の2002年からの完全実施、2003年からの新教育課程の実施のなかで、学校と社会との連携が一層求められるなか、学校体育やスポーツ活動のあり方が大きく問われるといえます。

これまでの、わが国におけることに高等学校教育とスポーツ活動との関係を十分踏まえ、教育とスポーツ活動との調和を図るとの視点を失うことなく、全国高等学校体育連盟はさまざまな課題に積極的に対処して行くことが大切といえます。

この創立50周年をよい節目として、21世紀をたくましく担う青少年の育成をめざし、今日から、大きく未来へ力強く前進しようではありませんか。

終わりに、これまで全国高等学校体育連盟の活動を、ご支援・ご指導いただきました関係の皆様に深く感謝申し上げるとともに、これからもご指導・ご鞭撻いただけますようお願い申し上げ、はなはだ措辞ではありますが、式辞とさせていただきます。

祝　　辞

文部大臣
有　馬　朗　人

本日ここに、皇太子・同妃殿下の御臨席を仰ぎ全国高等学校体育連盟創立50周年記念式典が開催されるにあたり、一言お祝いを申し上げます。

全国高等学校体育連盟は、昭和23年6月に創立されて以来、高等学校における体育・スポーツの発展と、高校生の心身の健全育成に多大な貢献を重ねてこられました。創立50周年という輝かしい節目を迎えられましたことは、一重に関係各位の御熱意と御努力の賜であり深く敬意を表するところであります。

ところで、来る21世紀において我が国が活力ある国家として発展し、国民一人一人が明るく充実した生活を送るためには、子供達一人一人に生きる力を育むことが必要であります。学校における体育・スポーツ、とりわけ運動部活動は生涯にわたってスポーツに親しむ能力や態度を育て、体力の向上や健康の増進を図るのみならず、学校や学年を離れて生徒が主体的に活動を組織し展開することにより、生徒の自主性や協調性、責任感や達成感などを育成するものであり、このような子供達の生きる力の育成にとって大きな意義を果たしうるものであります。

本年、香川県で開催されました全国高校総体の開会式に私も出席させていただきましたが、入場行進で選手達が見せてくれた晴れやかな姿や地元高校生の真摯な歓迎の姿は、我が国の将来に確かな希望を感じさせてくれました。

近年、少子化の影響など運動部活動を取り巻く環境の変化も指摘されておりますが、全国高体連におかれましては、21世紀を生きる子供達のためにさらに御尽力を賜りますようお願い申しあげます。

終わりに、連盟を今日まで支えてこられた関係の皆様方に改めて敬意を表しますとともに、貴連盟の益々のご発展を祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

本日は誠におめでとうございます。

祝　　辞

日本放送協会
放送総局長　河　野　尚　行

全国高等学校体育連盟が創立50周年を迎えられ、今日こうして皇太子殿下、同妃殿下のご臨席を仰ぎ、盛大に記念式典を挙行されましたことに、心よりお祝い申し上げます。

今や、高体連は高等学校教育の重要な部分を担うと同時に、日本のスポーツ界にとって不可欠な存在に発展してきております。こうした現在の繁栄の基礎を築いてこられた関係者の皆さまのこの50年のご努力に対して、深く敬意を表します。

NHKは、現在の形の「全国高等学校総合体育大会」が開催された昭和38年から、高校生の若さあふれるその競技模様を放送を通して全国に伝えてまいりました。また、後援もさせてもらっています。これからもNHKは、高校スポーツの感動を全国の視聴者に伝えていきたいと存じます。

時代がどのように変わろうとも、高校教育におけるスポーツ活動は、青少年の心と体をたくましく鍛える上で極めて重要です。スポーツを通してお互いが競い合い、理解しあい、感動を共有して友情を深めることが期待されております。その意味からも、全国高等学校体育連盟に寄せられる期待はますます高まってきております。

この記念すべき創立50周年を契機に、輝かしい歴史と伝統を顧みながら将来を展望し、今後の体育・スポーツの普及振興に、一層のお力を発揮されますようお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせて頂きます。

祝　　辞

社団法人　日本体育協会
会　長　**安西　孝之**

全国高等学校体育連盟創立50周年おめでとうございます。これまでの半世紀にわたり、幾多の困難を乗り越えて、今日の隆盛を築いて来られました河上会長をはじめ、歴代会長様、関係各位に対し、深甚なる敬意を表する次第であります。

先程もご説明がありましたように、全国高等学校体育連盟（全国高体連）は、戦後の間もない、昭和23年6月に創立され、以来、今日までの半世紀の永きにわたり、高等学校の体育・スポーツの普及発展に多大な貢献をされて来られましたが、とりわけ昭和38年からは、これまで競技別に競技団体が主催して開催しておりました各大会を、関係者の熱意とご努力により総合体育大会の形式（インターハイ）として実施されるに至ったと伺っております。その後、大会開催基準要項が制定され、文部省、日本体育協会、NHKなども後援団体に加わり、大会内容が充実され、今では、国民体育大会とともに、体育・スポーツの大会としては他に例を見ない国民的行事の一つとなっておりますことは、誠にご同慶に堪えません。

一方、現在、我が国の国際化が進展する中において、スポーツは国際親善に大きな役割を果たして来ておりますが、特に高等学校生徒の国際競技会での活躍には目を見張るものがあります。

私共、日本体育協会も国際交流事業に力を入れておりますが、特に競技団体と全国高体連のご協力を得て、昭和43年から「日・韓高校スポーツ交歓競技会」を開催し、すでに数千名にのぼる高校生の参加をみて来ております。その後、平成5年度からは「日・韓・中ジュニア交流競技会」へと発展拡大させ、現在、インターハイで優勝したチーム又はは個人を中心に、9競技185名の選手団を編成し、毎年開催して、スポーツ交流を通じての近隣諸国の友好と親善に多大な成果を上げているところであります。スポーツを通じての国際交流は、大変意義深いものであり、これらジュニア層のスポーツ交流推進へのご協力に対しまして、改めて感謝の意を表したいと存じます。

日本体育協会といたしましても、貴連盟と更に協力関係を深め、青少年の健全育成とジュニア選手の育成・強化のため諸施策を推進していく所存であります。全国高等学校体育連盟におかれましては、2002年からの学校週5日制、また、近年は少子化による部活動への影響等に対する取り組みが行われていると聞いておりますが、この様な時期に、50周年を迎えられ大変ご苦労が多いと存じますが、これからの50年に向かって、体育・スポーツの振興に、さらに一層、力を入れられるよう期待いたしております。

おわりに、全国高等学校体育連盟が益々発展される事を祈念して、祝辞とさせていただきます。

全国高体連のあゆみ

全国高等学校体育連盟
理事長　**高田日呂美**

全国高等学校体育連盟が昭和23年に創立されてから50年、本日、ここに創立50周年の記念式典を迎えることができました。ここでは、主な動きを中心に、全国高体連、50年の「あゆみ」について、概要をご報告申し上げます。

昭和23年6月28日に全国高等学校体育連盟は誕生いたしました。

高等学校における体育大会は、種目によって違いはありますが、古い歴史がございます。それは、旧教育制度の時代から行われており、「全国中等学校選手権大会」という名称で、各地で行われて参りました。新しい教育制度のもとでは、「全国高等学校選手権大会」として、種目ごとに開催されるようになりました。新制高等学校として新たな出発をしたこの時に、新しい高等学校教育を創造していく上で、体育・スポーツ活動の果たす役割をいち早く認識し、体育の健全な発達を図ることによって、高校生に夢と希望を与え、豊かな高等学校教育の充実を図るための組織として全国高等学校体育連盟が創立されたのであります。

昭和25年には、皆様よく御存じの「高体連マーク」が制定されました。正面に掲げてございますが、これは、若人が、体育・スポーツを通して、力と技と明朗な精神を養うという三つのドイツ語の頭文字をデザイン化したものでございます。また、この年には陸上競技部ほか、11の専門部が設置されました。

昭和30年には、第一回加盟団体長会が開催されました。また、この年までに、設置された専門部は、21専門部となりました。この他に昭和30年代には、「高体連の歌」の制定や、文部省のご高配による国庫補助金の交付及び、全国大会のすべての種目に対しての後援をいただくことができるようになり、現在の総合体育大会の基盤となる学校教育活動としての位置づけと評価が、より確固なものとなりました。

昭和38年には、これまで各種目別選手権大会で開催されてきたものを一本化し、全国高等学校総合体育大会として装いも新たに開催されました。それまでも、関係行政機関及び競技団体等の暖かいご理解とご支援をいただいてきましたが、特に日本放送協会からは、放送を通して大会の普及や財政的なご援助をいただき現在に至っております。

昭和41年の高校総体は、青森県を中心にして開催されました。この総合開会式には、皇太子殿下・皇太子妃殿下のご臨席を仰ぎ、大会に寄せるお言葉を賜り、参加した選手・役員はもとより、開催県民及びその他大会関係者一同は、この上ない光栄に浴し、心から感謝いたしました。爾来、両殿下には、公務ご多端な中を毎年ご臨席をいただき、お言葉を賜っておりますことは、本大会発展のために努力している関係者に対し、大きな活力をお与えていただきました。ここに改めて衷心より感謝を申し上げます。

また、この年の大会から、大会スローガンが採用されました。このことを契機として、大会のシンボルマーク、ポスター、参加章、入賞メダルなどのデザインや大会賛歌、ファンファーレ曲などが、開催地の高校生の手によってつくられ、一人一役運動も加わり、文字どおり高校生の手による高校生の大会となりました。

さらに、第一回全国高体連研究大会が、この年開催され、以降、総体と同様に、都道府県持ち回りで、開催されるようになりました。

この他、昭和40年代には、加盟専門部の数が29種目への増加したこと、日本体育協会から全国高校総体への補助金の交付が開始されたこと、定時制通信制の全国大会が全国高体連主催として開催されるようになったことなど、組織及び活動の充実が図られました。

昭和50年代に入り、総体参加者の増加に伴い、大会運営の改善と大会規模の適正が検討されました。昭和54年に、文部省から高等学校の対外運動競技の基準が出されたこともありますが、基本問題検討委員会が設けられ、前年度優勝校の出場を取り止めたり、参加選手数を削減したり、年々肥大化傾向にある経費の軽減を図るなど、高体連の体質改善を含めた検討が行われました。また、全国高体連表彰制度や研究大会開催要項などが整備されました。

昭和60年代に入り、「高等学校競技者の在り方」が検討されました。文部省、日本体育協会、全国体育主管課長会等関係諸機関のご指導をいただきながら、高校生としての健全な競技者を育てるための指針が発表されました。また、高体連指導者の資質の向上を機能とする組織として、全国高体連研究部が新設されました。

昭和63年には、創立40周年を迎え、本日と同じ、この会場で記念式典が行われました。現在の天皇陛下、皇后陛下が皇太子殿下、皇太子妃殿下としてご臨席いただき、盛大に挙行されたことが昨日のように思いだされます。

平成の年代に入りましてからは、全国高校総体の協賛に関する特別委員会が設置され、協賛に関する規定が整備されました。また、いわゆる一条校以外の学校の高校総体への参加の問題と外国人留学生の参加の問題が検討され、平成6年度から、一条校以外の学校の全国高校総体への参加が認められ、外国人留学生の参加の基準が設けられました。

平成7年度には、財団法人化特別小委員会が設けられ、財団法人に向けての検討が始まりました。昨年の平成9年度には、生徒数の減少に伴う統廃合対象校の合同での参加についての、特別措置が取られるようになりました。

そして本年、創立50周年を迎え、記念事業として、創立50周年記念式典・祝賀会を開催するとともに、全国高体連50年史を発刊する予定でございます。

以上、全国高体連のあゆみについて、その概要を述べさせていただきました。意を尽くした報告とならず誠に申し訳ありません。50年のあゆみにつきましては、先程申し上げました全国高体連50年史に詳しく載せる予定でございますので、お許しいただくよう、お願い申し上げまして、全国高体連のあゆみの報告とさせていただきます。

全国高等学校体育連盟創立50周年記念式典

期　日　　平成10年11月14日（土）
　　午前10時～10時32分
会　場　　ホテルグランドパレス・3階
　　千代田区飯田橋1－1－1
　　03－3264－1111

順序	式次第	時刻		備考
		時刻	時間	
1	開式のことば	10：00	1	全国高等学校体育連盟副会長 細田　信良
2	国歌斉唱	10：01	2	
3	全国高等学校体育連盟のあゆみ	10：03	10	全国高等学校体育連盟理事長 高田　日呂美
4	式辞	10：13	4	全国高等学校体育連盟会長 河上　一雄
5	皇太子殿下のおことば	10：17	2	
6	あいさつ	10：19	9	文部大臣 有馬　朗人　殿 日本放送協会放送総局長 河野　尚行　殿 日本体育協会会長 安西　孝之　殿
7	全国高等学校体育連盟の歌　斉唱	10：28	3	
8	閉式のことば	10：31	1	全国高等学校体育連盟副会長 神内　隆司
	終了	10：32		

全国高等学校体育連盟創立50周年記念祝賀会

期　　日　　平成10年11月14日（土）
　　午前11時30分～13時30分
会　　場　　ホテルグランドパレス　ダイヤモンドルーム2F

順序	会次第	時刻		備考
		時刻	時間	
1	開会のことば	11：30	1	香川県高等学校体育連盟会長 関　博徳
2	あいさつ	11：31	3	全国高等学校体育連盟会長 河上　一雄
3	感謝状贈呈	11：34	3	協賛企業へ
4	乾　杯	11：37	2	文部省体育局長 遠藤　昭雄　殿
5	懇　談			
6	閉会のことば	13：30		岩手県高等学校体育連盟会長 長澤　佳彦

感謝状贈呈団体

日本コカ・コーラ株式会社
ヨネックス株式会社
ミズノ株式会社
明星ゴム工業株式会社
株式会社アシックス
近畿日本ツーリスト株式会社
セノー株式会社

「全国高体連50周年記念事業」準備経過について

日程	実行委員会	記念誌編集委員会	式典・祝賀会委員会	財務委員会
H8年度				
11月	●実行委員委嘱(11/15) 第1回委員会(12/16)			
12月	・全体構想の検討 ・各委員会構成検討			
3月	第2回委員会(3/17) ・全体構想の検討			
H9年度				
H9/ 5月	●理事会に概要報告(5/26)			
7月	第3回委員会(7/18) ・全体構想について	第1回委員会(7/18) ・全体構想の検討 ・企画方針の検討	第1回委員会(7/18) ・企画方針の検討 ・準備日程の検討	第1回委員会(7/18) ・予算について ・財源確保の検討
9月	第4回委員会(9/19)	第2回委員会(9/19) ・編集内容の決定 ・編集日程の決定	第2回委員会(9/19) ・ホテルとの打ち合わせ	第2回委員会(9/19)
10月		第3回委員会(10/16) ・原稿依頼準備		
11月	●理事会に概要報告(11/14)			
12月		第4回委員会(12/10) ●原稿依頼発送(12/10)		
H10/ 1月		●執筆担当報告受理(1/31)		
H10年度				
5月			第3回委員会(5/21) ・係役員の検討	
6月	●理事会に経過説明(6/2)	●原稿提出締め切り(6/30)		
7月		第5回委員会(7/15) ・原稿確認	第4回委員会(7/21) ・案内状発送準備 ●案内状発送(7/27)	
9月		第6回委員会(9/3) ・初稿受理・確認 ●初稿校正依頼送付(9/7)	第5回委員会(9/7) ・記念品、係役員の決定	
	第5回委員会(9/18)	第7回委員会(9/18) ●記念座談会の開催(9/27)	第6回委員会(9/18) ・役員、物品の確認 ●参加申込締切り(9/30)	第3回委員会(9/18)
10月	第6回委員会(10/20)	●初稿校正締め切り(10/9) 第8回委員会(10/20) ・各種資料の確認 ●二次原稿送付(10/26)	●宮内庁に書類提出(10/12) 第7回委員会(10/20) ・式典係分担確認	第4回委員会(10/20)
11月	●理事会に経過説明(11/13) 第7回委員会(11/13) ・式典前日準備 記念式典開催(11/14)	●二次校正締め切り(11/13) 第9回委員会(11/30) ・二次校正確認 ・式典関係写真等確認	●皇太子・同妃殿下行啓に係る事前調査会(11/2) 第8回委員会(11/13) ・式典前日準備 記念式典開催(11/14)	
12月		第10回委員会(12月) ●最終原稿提出	第9回委員会(12月) ・式典礼状等事後処理	
1月		第11回委員会(1月) ・最終校正		
2月		製本完成(上旬) 第12回委員会(2月) ・配布		
3月	第8回委員会(解散)	第13回委員会(解散)	第10回委員会(解散)	第5回委員会(解散)

創立50周年記念事業実行委員会委員一覧

実行委員会委員

委員長	高田日呂美（全国理事長）	
	大杉　一男（全国事務局長）	
	松本　邦夫（群馬県理事長）	
	横須賀正治（茨城県副理事長）	
	佐久間嘉宏（千葉県理事長）	
	城所　富夫（神奈川県理事長）	
	荒井　昭雄（ラグビー部長）	
	松浦　博實（静岡県理事長）	山口　一三（静岡県理事長）８年度
	水谷　　弘（陸上競技部長）	阿久津　巖（陸上競技部長）８・９年度

記念誌編集委員会委員

委員長	佐久間嘉宏（千葉県理事長）	
副委員長	城所　富夫（神奈川県理事長）	
	久保　正美（埼玉県理事長）	
	高橋　祐司（神奈川県広報委員長）	
	小久保敦央（東京都調査研究委員長）	
	深井　英吾（千葉県年報編集委員長）	由利　　聡（千葉県事務局長）９年度
	杉田季久雄（山梨県副理事長）	川崎　数馬（山梨県事務局長）８・９年度

式典・祝賀会委員会委員

委員長	松本　邦夫（群馬県理事長）	
副委員長	横須賀正治（茨城県副理事長）	
	岩崎慎一郎（埼玉県立浦和高校）	
	藤田　幸康（東京都副理事長）	
	林　　康宏（群馬県事務局長）	
	祖父江利久（東京都副理事長）	上野二三一（東京都副理事長）８・９年度
	飯田　道彦（栃木県高体連）	星野　　努（栃木県副理事長）８・９年度

財務委員会委員

委員長	荒井　昭雄（ラグビー部長）	
	大杉　一男（全国事務局長）	
	水谷　　弘（陸上競技部長）	阿久津　巖（陸上競技部長）８・９年度
	松浦　博實（静岡県理事長）	山口　一三（静岡県理事長）８年度

全国高等学校体育連盟創立50周年記念式典係員名簿

係名	氏名	所属	氏名	所属	氏名	所属
実行委員会会長	河上一雄	全国高体連				
実行委員会委員長	高田日呂美	全国高体連				
総務	松本邦夫	群馬県高体連	横須賀正治	茨城県高体連	大杉一男	全国高体連
(4)	河元雅人	パレスホテル				
庶務会計	水谷弘	陸上競技部長	松浦博寛	静岡県高体連	荒井昭雄	ラグビー部長
(4)	大杉一男	全国高体連				
受付	林康宏	群馬県高体連	吉田忠征	栃木県高体連	久保正美	埼玉県高体連
	岩崎慎一郎	浦和高校	飯田道彦	栃木県高体連	権田昭夫	東京都高体連
	草木繁生	東京都高体連	野間喜三夫	東京都高体連	田原正之	東京都高体連
(26)	月岡靖夫	東京都高体連	並木清三	東京都高体連	村岡保利	東京都高体連
	真野彰	東京都高体連	篠原活久	東京都高体連	嘉屋公明	東京都高体連
	藤生康雄	東京都高体連	平山隆造	東京都高体連	郡司正典	東京都高体連
	村田光央	東京都高体連	糟谷一	東京都高体連	小林正男	東京都高体連
	鈴木弘久	東京都高体連	矢島定章	東京都高体連	梶田茂	東京都高体連
	松野下健	東京都高体連	入住和良	全国高体連		
接待	佐藤幸夫	東京都高体連	小久保敦央	東京都高体連		パレスホテル
(4)		パレスホテル				
会場	藤田幸康	東京都高体連	斎藤徳也	東京都高体連	広瀬允人	東京都高体連
(6)	菅井博之	東京都高体連	永作誠一郎	東京都高体連	西塚春義	東京都高体連
進行(2)	山田あき	NHK	大杉一男	全国高体連		
案内	祖父江利久	東京都高体連	保坂重機	山梨県高体連	城所富夫	神奈川高体連
(6)	杉田季久雄	山梨県高体連	深井英吾	大多喜高校	高橋祐司	神奈川高体連
介添え(1)	杉山洋子	全国高体連				
音楽・ビデオ(2)	大杉一男	全国高体連	河元雅人	パレスホテル		
記録(2)	佐久間嘉宏	千葉県高体連		パレスホテル		
救護(1)	河元雅人	パレスホテル				
合唱(15)	国立音楽大学附属高等学校					

式典係分担内容

係　名	係員氏名（○主任）	業　務　内　容
総　務	○松本　邦夫 大杉　一男 横須賀正治 河元　雅人	1 記念式典・祝賀会の総括 2 各係の連絡・調整 3 その他、各係に属さない事項 4 案内状・礼状の発送
庶務会計	○水谷　弘 荒井　昭雄 松浦　博實 大杉　一男	1 記念式典・祝賀会の経理事務 2 祝賀会領収書の作成
受　付	○林　康宏 吉田　忠征 久保　正美 岩崎慎一郎 飯田　道彦 他21名	1 記念式典・祝賀会・祝電・祝金の受付 2 〃 の受付名簿の作成 3 〃 の胸章及び名簿（色別）準備 4 〃 の受付表示札作成 5 配布物の確認と袋詰め（次第·記念品・会場図） 6 祝賀会の会費徴収
接　待	○佐藤　幸夫 小久保敦央 他ホテル	1 控室の設営 2 記念式典・祝賀会の来賓等の接待 3 〃 の来賓等の会場への案内
会　場	○藤田　幸康 他5名 ホテル代表者	1 記念式典・祝賀会の会場レイアウト及び会場図作成 2 〃 の式典看板の作成 3 〃 の会場整備 4 〃 の案内表示の作成 5 ステージ生花 6 席札の準備 7 誘導係（整理・案内）
進　行	○NHK アナウンサー 大杉　一男	1 記念式典・祝賀会の進行 2 〃 の次第作成
案　内	○祖父江利久 保坂　重機 城所　富夫 杉田季久雄 深井　英吾 高橋　祐司	1 記念式典・祝賀会の参加者の会場案内 2 〃 の来賓の控室への案内 総合受付（2F）式典会場（3F）
介添え	○杉山　洋子	1 感謝状の確認及び保管と引き渡し （流れの打合せ）
音　楽 ビデオ係	○大杉　一男 河元　雅人	1 記念式典の使用曲目の選定及び演奏 2 '98四国総体のビデオ準備
記　録	佐久間嘉宏・山崎 ホテル代表者	1 記念式典・祝賀会の記録（写真・ビデオも含む） 2 記念誌における記念式典の編集スナップ写真 （佐久間）
救　護	河元　雅人	1 記念式典・祝賀会の救護

全国高等学校体育連盟
創立50周年記念祝賀会

全国高等学校体育連盟
創立50周年記念祝賀会

歴代役員一覧

全国高体連歴代役員一覧

(No.1)

役職・年度		S23・24	S25・26	S27・28	S29・30	S31・32	S33・34	S35・36	S37・38	S39・40	S41・42	S43・44	S45・46	S47・48
会長		細川潤一郎	星　一雄	→	→	小林　直行	両角　英運	→	岩下　富蔵	尾崎　剛毅・田中喜一郎	→	新井　廸之	宮田豊太郎	岸田　文男
副会長	北海道							小山田昌康	萩原　獅郎	山崎　吉松	吉村　忠幸・榎本不二男	上野　秋造	直木　通	斎藤　国夫
	東北							宇野　量介	→ ・江藤　丈夫	→ ・大竹　金弥	→	→	→	→
	関東							石平　俊徳	石田　壮吉	田中喜一郎・阿部　鎌	→	高野栄次郎	→ ・鈴木　満	落合　渉・石野八百治
	北信越							森　義雄	深美　政一・阿部　勝策	丸亀　金作・片山　一夫	西島　銀蔵	→	山田　石男・二川　卯吉	→ ・中村　博二
	東海							藤野　源治	→	→	→	→	→ ・河野太喜造	谷口　鈴正・伊藤　政一
	近畿							佐藤　一男	山川　信夫	→ ・田中喜久三	→ ・坪井　明	→	竹谷　新	根津　哲夫
	中国							内藤　一人	→ ・井上三喜夫	→ ・山本　重治	→ ・高橋恵三郎	→	西木　真一・江川　浦臣	→ ・加藤　節一
	四国							岡　淳	→ ・西村　正男	→ ・宇野　卓夫	黒田　定雄・水野　秀夫	→	行成　正春・井上源兵衛	吉永　五郎・高市　純徳
	九州							小高　秀二	→ ・長　敬一郎	敷島　太郎・田村　守隆	高木　来・永井　茂雄	高添　泰厳	牧野　毅・柴川　光三	→ ・別当　俊
	東京										高崎　米吉	→	→	→
												清水　正男	岸田　文男	松吉　利夫
	専門部													
理事長								高田　通	→ ・尾崎　剛毅	高崎　米吉・新井　廸之	→	藤崎　寛行	湯野　正憲	→
副理事長								乾　正人	岩井　邦利	→ ・館野　進	→	→	→ ・高塚泰次郎	→
								高崎　米吉	→	細川　熊蔵	→ ・湯野　正憲	→	松戸　節三・石野八百治	→
監事								木村　泰夫	→ ・鳥居　礼三	→ ・	米山　芳成	→	鈴木　弥門	伊藤太一郎・手塚　忠則
								倉知　榮雄	→	→ ・	井尾　武雄・田中　良夫	→	東谷　秋夫	西岡　淑雄・岩田　澤一
事務局長								飯村　健・星野　賢造	→ ・新美　飯村		・飯村　健	→	→	→
顧問								細川潤一郎	→	→	→	→	→	→
								小松　直行	→	→	→	→	→	→
								芝村　義邦	→	→	→	→	→	→
									両角　英運	→	→	→	石平　俊徳	→
									石平　俊徳	→	→	→	高田　通	→
									・高田　通	→	→	石田　壮吉	→	
										岩下　富蔵	→	→	田中喜一郎	→
										石田　壮吉	→	→	新井　廸之	→
										・尾崎　剛毅	→	→		宮田豊太郎
												田中喜一郎		

S34 年以前の会長以外の役員は不明

全国高体連歴代役員一覧

(No.2)

役職・年度		S49・50	S51・52	S53・54	S55・56	S57・58	S59・60	S61・62	S63・H 1	H 2・3	H 4・5	H 6・7	H 8・9	H 10
会長		岸田 文男・井上 敬一	榎津 哲夫・磨井 洋一	→ ・風巻 磊蔵	→ ・鈴木 英久	→	大野慎一郎・家弓 鐵矢	→	福田 満雄	→	→ ・久野 猛	→	→	河上 一雄
副会長	北海道	長浜 英作	→	→	赤塚 利国	仲川 翠	→ ・青木 弘	→	安井 友博・山下 克己	→ ・遠藤 隆	→ ・日野 嘉輝	日野 嘉輝	金子 盛夫	作田 昌明
	東北	庄司 豊義	→ ・高橋 章	→ ・阿部 茂	→	→ ・遠藤 敬一	→ ・小坂 泰一	→ ・斉藤 富二	→ ・高橋 力	沖田 岑夫・奥寺 栄二	→ ・松本 健	→ ・小関廣明	鈴木 寛・杉野 隆夫	高城 俊春
	関東	石野八百治・須田 政明	河内 巌一・石川 一正	→ ・中里 一郎	→ ・花輪 民夫	→ ・吉川 正就	小林 泰雄・田中 恵一	→ ・柏崎 旭	→ ・岩崎 貞夫	→ ・上野 敦男	跡部義幸・樽井 哲	→ ・荒川 伸夫	→ ・細田 信良	→
	北信越	佐藤 穂次	→ ・安宅 彰玉	鍋岡 利明・本間 忍	→ ・野坂 忠善	橋本 克二・高松 信雄	→ ・平松 剛	→ ・南 典二	斉藤 謙一・宮地 正樹	→ ・竹村 光雄	村田 嘉孝・並木 孝	→ ・藤澤 愛儁	海沼 清美・中谷 一男	→
	東海	伊藤 政一・上島 三夫	→	鶴見 浅次	→ ・姪川 博	生沼 好之	竹内 實	杉田 荘治・佐藤 敬治	高井 龍三	白井 正己	→ ・吉田 武史	→ ・織田 男	→ ・小野田章二	→
	近畿	根津 哲夫	・明石 立身	田口 達造	→ ・吉田 道雄	小山田成夫	→	松下 邦夫	白銀 茂夫・林田 昭喜	→	小久保昇治	梶本 照夫・渡邊 文一	渡邊 文一	神内 隆司
	中国	西本 篤武・大田 幸次	→ ・仲佐 菊夫	→ ・加藤 潔	→ ・岡田 政敏	→ ・磯本 泰三	梶村 徹哉・徳丸 泰弘	→ ・飯田 光	→ ・松田 信勝	→ ・柾木 繁男	→ ・脇 康治	→ ・島津 宗隆	→ ・森脇 健臣	→
	四国	高市 格・大島 久俊	→ ・上原 秋夫	→ ・山本 馨	→ ・佐々木寅義	→ ・田中 清春	→ ・宮 信之	久保駿一郎・山岡 友重	→ ・石丸 博	→ ・杉岡 保之	益田 健・簡井 豊佑	→ ・中平 勝也	→ ・近藤 雅美	→
	九州	別当 俊・服部 七郎	→ ・古谷 悟	→ ・岸野 晋一	→ ・境 正美	田原 視孔・宮崎 重信	→ ・今村 博美	→ ・田中 重正	→ ・松田 義信	→ ・合原 正登	吉田 秀男・糸永 隆章	→ ・山田 満雅	宮原 都明・工木 武雄	城本 和博
	東京	高崎 米吉	→	→	・大野慎一郎	→ ・								
		松吉 利夫・松元 俊雄	→	風巻 磊蔵・石渡 経夫	→	→	→							
	専門部											・達井 稔男	岡村 忠典	松本 章二
理事長		磨井 洋一	→ ・重田 一	→ ・鈴木 英久	→ ・松原 久三	→	→ ・藤川 侃二	→	内藤 隆	→	金原 達人	岡本 裕之	高田日呂美	→
副理事長		石川 一正	→ ・藤生 宣明	→ ・花輪 民夫	→ ・村越 五郎	吉川 正就・矢橋 恵一	→ ・関本 克己	→ ・橋本 義弘	→ ・根岸 昭	→ ・海老原洋三	樽井 哲・山野井 輝	→ ・渡邊修一郎	→ ・斉藤 幸雄	→
		長野 元泰	→	冨浪 良夫・白銀 茂夫	→	→	→ ・高橋 實	→	小久保昇治・橋爪 静夫	→	神内 隆司	→ ・石黒 典男	前田 嘉昭	上田 俊次
												遠井 稔男・岡村 忠典	粥川 昌	→
監事		手塚 忠則・近野 佑男	→	吉田 繁隆	→	岩本 光司	→ ・野村 久雄	→ ・小澤 新一	→	後藤 安孝	→	→	池田 敏郎	→
		岩田 渾一	→ ・深井 隆三	→ ・九鬼 貴男	→	石井 一	小島 正男・澤村 太郎	→ ・谷口啓二郎	藤本 幸男・桂 廣保	→	→	伊藤 正広	中谷 元紀	→
事務局長		飯村 健	→ ・林 良二	→	→	→					大杉 一男	→	→	→
顧問		細川潤一郎	小松 直行	→	小松 直行	→	→	→	→	→	岸田 文男			
		小松 直行	芝村 義邦	温野 正憲	高田 通	→	→	→	→	→	→ ・	井上 敬一	→	→
		芝村 義邦	高田 通	→	石田 壮吉	→	→	→	家弓 鐵矢	→	磨井 洋一	→	→	→
		石平 俊磨・	石田 壮吉	→	田中喜一郎	→	→	→	→	→ ・	風巻 磊蔵	→	→	→
		高田 通	田中喜一郎	→	宮田豊太郎		鈴木 英久	→	→	→	鈴木 英久	→	→	
		石田 壮吉	新井 廸之	→ ・磨井 洋一	岸田 文男	→	→	→	→	→	大野慎一郎	→	→	→
		田中喜一郎	宮田豊太郎	→	井上 敬一	→	→	→	→	→	家弓 鐵矢	→	→	→
		新井 廸之	岸田 文男	→	根津 哲夫	→	→	→	→ ・		内藤 隆	→	→	→
		宮田豊太郎	井上 敬一	→	温野 正憲・風巻 磊蔵	磨井 洋一	→	→	→	→	福田 満雄	→	→	→
		・岸田 文男	・根津 哲夫	→	磨井 洋一	風巻 磊蔵	→	→	→	→				久野 猛
							・大野慎一郎	→	→	→				

都道府県高体連歴代会長・理事長 （No.1）

上段⇒会長　下段⇒理事長

都道府県・年度	S23・24	S25・26	S27・28	S29・30	S31・32	S33・34	S35・36	S37・38	S39・40	S41・42	S43・44	S45・46	S47・48
北海道	北浦延次郎	山口　末一	→	→・藤田　節也	→	和田　藪雄	小山田昌康	萩原　獅郎	山崎　吉松	吉村忠幸・坂本不二男	上野　秋造	真木　通	斉藤　国夫
	北浦延次郎	山口末一・石黒英治	→	→・大谷　藤松	→	富田　友治	木村　季吉	二瓶　康典	石黒　英治	木村　季吉	鳴海　哲男	遠藤　忠	水口　寅雄
青森	鹿内　一胤	中村　勇	須郷佻太郎	→	→・中村　勇	→	→	→・小山　敏夫	→・小木　喬	→・菊池　正	→	→・辻村　正	→・丹内　正一
	川田正徳・小笠原源蔵	→	木村　良三	新岡　精弥	→	→	→	斉藤　正博	→	→・奈良　尹	→	渋谷　恭一	→
岩手	松岡修太郎・及川儀右衛門	小坏　洋	樋口　佐平	→	鈴木　長	桐野　薫	→・山口　善次	→・吉岡　格六	→	→	→	→・小野寺英長	→
	加藤　昌得	→	→・宮崎　正之	西村修一郎	→・舘沢　徳栄	→	戸嶋　正夫	→	→	→	→	→・矢羽々通夫	→
宮城	宮城音五郎	高山　政雄	→	→・山下　忠	勝又　朝頼	→	→・宇野　量介	→・江渡　丈夫	→・大竹　金彌	→	→	→	→
	常松　喬	→	→	→	→	一場　武之	→	→・佐藤　典古	→	→	→	→	遠藤　敬一
秋田	中川　秀松	高橋　一郎	→	→	村岡　一郎	→	→	→・鈴木健次郎	→	→・山本　一	→	菊地　俊一	→
	杉山　忠一	羽川　伍郎	杉山　忠一	吉井　忠亮	→	杉山　忠一	吉井　忠亮	→・岩谷　文雄	→	→	→	→	→
山形	木村芳三郎	→	→	→	→・居駒　永俊	→	→	東海林憲雄	佐々木俊光	→・庄司　善助	→	→	→
								・米田　満	→	→	河田　利夫	→	→
福島	幸野岩雄・稲村良之助	→	→	→・栗原　茂	→	鈴木　美雄	新谷　茂	佐藤　広治	→	新谷　茂・三本杉国雄	→	・玉川　春雄	→
	鈴木　勝枝	→	→	→・鈴木　武雄	→	鈴木善兵衛	→	→・佐々木英雄	→	松山　六郎	→	→・箱崎　和雄	→
茨城	西野　正吉	稲葉甲午郎	林　勘二	→	白土　栄一	→	儀間福次郎	→	→	→・高野惣太郎	→	→	橋本　一郎
	細谷　政一	大川　潤	→	→・細谷　政一	→	→	→	→	→	→・横須賀　英	→	→	→
栃木	山本　作郎	→	→	篠崎光太郎	→・黒田　邦博	→・阿部　鎌	→	→	→	→	→・藤田　三郎	→	佐藤　金作
	黒後　梅男	→	→	→	→	→・井田　福次	中岡　哲夫	→	→	→・遠藤三智男	→	→・半田　実	→
群馬	中村　武雄	大村　武男	→	→・野村吉之助	松岡重三郎	→	→	坂口健太郎	高野栄次郎	→	→	→・藤生　宣明	→
	茂木　正夫	→	→・正木徳次郎	→	→	→	→	→	→	竹田　芳文	→	野木村　浩	→
埼玉	五十里秋三	→	下山　懋	木村　泰夫	→	→	→	→	→・西川　好明	→	→	→・小関　一郎	→・矢代　登
	原田　隣造	栗原伝次郎	→	→	→・島村　政光	→	→	→	黒田　清次	→	→	→	→・宮川　博
千葉	（委員長）	安田　裕	山口久太・諸川芳雄	→	→	林　信義	→	→	→	→	林　信義・松戸節三	→・石野八百治	→
	木内　清	松戸節三・石野八百治	→	→	→	→	→	宮崎貞次郎	→	→	石川　宏	→・篠崎　兵衛	→
東京					小松　直行	両角　英運	→	岩下　富蔵	尾崎剛毅・田中喜一郎	→	新井　迪之	宮田豊太郎	岸田　文男
	細川潤一郎	星　一雄	→	→	高崎　米吉	→	→	→	→	→	藤崎　寛行	湯野　正憲	→
神奈川	・保坂　周助	佐藤　秀三	→	→	→	→・荒井　惟俊	香川　幹一	→	→	小林房次郎・鈴木　清	→	→	落合　渉
	・秋山　春吾	萬代　鹿三	→	→	→	→	→	→	→	→	→・又木誠八郎	→	→
山梨	近藤　兵庫	→	伊藤　泰司	古屋　一雄	→	→	→	田口　政義	広瀬勝雄・高遠啓一	佐野　緑郎	→・平塚　武	→	→・小田切　勝
	安藤　星州	→	岩崎鋭一郎	→	加藤　正雄	→	→	野口竹次郎	→・花輪　民夫	→	→	三枝　浩	→
新潟	磯　幸次郎	→	→	太田　浩	→	→	→	→・阿部　藤策	丸亀　金作	小野塚忠義・渡辺芳雄	→	菅原久夫・渡辺芳雄	→・高柳顕之
	小笠原　厚	→	→	近藤　圓	→	→	→	→	→	→・山田　文威	→	→	→

都道府県高体連歴代会長・理事長 (No.2)

上段⇒会長　下段⇒理事長

都道府県・年度	S23・24	S25・26	S27・28	S29・30	S31・32	S33・34	S35・36	S37・38	S39・40	S41・42	S43・44	S45・46	S47・48
富山	桝田 秀郎	→・亀谷 観静	→・酒井 健作	→	→	島木 喬一	→・羽鳥 岩雄	→	→・木本 喜一	→・村上元之輔	金子富雄・屋敷平洲	野田親治・二川卯吉	→
	藤原 平蔵	→・広田 良平	→	→	→	→	→・鳩田 重春	→	→	→	→	→	中川 周三
石川	大河良一・明石与作	森 義雄	→	→	→	→	→	深美政一・菊地計一	→・金子 信一	→・藤井 澄文	→	→	→・香村 忠
	神田 一・作本秀雄	中田 周三	→	→	→	→	→	→・大橋 敏夫	→	→	西尾他嘉志	→	→
福井	加藤 佐助	→	→	福田 蔵	→・山口 秀雄	→・片山 一夫	→	→	→	西島 銀蔵	→・大森 陽	→	→
	酒井 実	→	→	山下 尚	→	→	→・酒井 実	→	→	→	三浦国尚・塚崎恭一	→	山下 尚
長野	西村 文雄	→	→	→・田中 実	西村文雄・塚田隆雄	→・更級 勉	→・新田 稔	→・久保田文雄	→・宮下 清計	山田 石男	→	→・中村 博二	→
	刈間今朝雄	→	→	→	→	→・丸山 保彦	→	→	→・三村 成美	→	→	→・北沢 生吉	→
岐阜	伊藤 喜一	→	→	→・熊谷 誠三	→	馬渕 克巳	→・米谷 暎一	→・永井 孝	→	→・大富 宏	→	→	石坂栄之・戸部秀済
	柴田 時秋	→	→	→	→	→	→	→	→・森島 茂	→・和田 弘	→	→	青木 茂
静岡	間処武夫・小宮一夫	→・鈴木 清一	→・山本 松一	→	→	大井宗一・諏訪卓三	→	→・鈴木 誠志	→	望月庄次郎	相佐 明一	→	芹沢晴夫・三浦朝治
	宮林武雄・重田 一	→・石坂 均	→	大橋 専一	→	→	→	山本 武	→	→	→・高杉 隆三	→	久保田俊影
愛知	堀勝次郎・小川卓爾	芝村 義邦	→	→	→	→	藤野 源次	→	→	→	→	→・河堅太喜造	谷口鈴正・伊藤政一
	・高橋正五郎	→	梅村 清明	→	→	戸田甚兵衛	→	→	河堅太喜造	→	→	→・谷口 鈴正	伊藤政一・上島三夫
三重		佐々木仁三郎	一見 義隆	伊藤 義教	一見 義隆	→	→	乾 正治	→	中村新十郎	→	小竹 惟・飯田勝之	山鹿 静夫
		高根沢武男	→	→	→	→	→	→	→	池田 稔・直田直人	→	→	→
滋賀	・林 浩	→	→	→	→	→	→	→・橋本 順治	→	→・中川 哲夫	林 正武・山田清一	→・岩崎 武	→
	・浜田 宗男	→	前川 勲	→	→	→	→	→・谷口 秀雄	→	→・文室 常男	→・岩井 克美	→	→・脇坂 徳夫
京都	幸村 法輪	→・奥谷 久彦	→	→	倉知 栄雄	→	→	→	→・高屋 定由	→	田中 実雄	三浦総一郎	平井 新司
	遊津 孟	→・中垣内勝久	→	→	→	→・平井 新司	→	→	→	→	坪倉 勇	山岸敏男・大島 要	→
大阪	春日 弘	→・清水 次郎	→	→・西由 己	→	→・志賀 平	→・佐藤 一男	山川 信男	→・田中喜久三	→・坪井 明	→・竹谷 新	→	鈴木康一・根津哲夫
	二方義・田辺五兵衛	田辺五兵衛	→・西 由己	→・岩野 次郎	→・乾 正人	→	→	→・岩井 邦利	→・舘野 進	→	→	→・高塚泰次郎	→
兵庫	加須井 千	→・春日 重樹	→	→	永松 忠雄	梶 和三郎	→	高山 忠雄	→・植杉英之助	→・津田 叶次	→	三浦 欣一	→・竹崎 敏夫
	堀 公平	→	→	→	→	常松 喬	→	→	→	→	兼吉 太郎	→	西村 昌治
奈良	福西英三郎	→	→・池田 与一	→	→・井上 清治	→	佐藤 順治	→	的場 義三	田中 良夫	→・飯田 一夫	東谷 秋夫	西岡淑雄・岩田澤一
	川本 糾	→	・滝 好治	→	→	→	→・石原 寛三	→	→	→	森田 正	北吉 正一	→
和歌山	萩野 俊夫	→	→・内藤 俊彦	→	→	→	→・小林 貞雄	→	→・福井 栄一	→・衣笠 一二	→	→	→・九鬼 貴男
	辻井 忠治	→・野田聖太郎	→	→	→	→	→	→	→	岩西宏純・砂子寿弘	→	→	→
鳥取	金田 重雄	→・福田 邦雄	→	→	有福 友好	→・西村 実義	→	→	佐々木勘一・山本嘉将	→	→・西本 真一	→	前田 忠雄
	竹中 勇	→・明石 太郎	→・大久保秀蔵	→・大西 正之	→	→・大久保秀蔵	→・大西 正之	→・大久保秀蔵	→	→	→・大西 正之	→・宮脇 通明	→
島根	松本 博・吉田正男	→・鎌田 武	吉田正男・吉田元吉	→・松浦 俊明	→	→・志岐 実翁	木島俊太郎・辻原弘一	→	→・高橋恵三郎	→	→・飯塚 一雄	→・瀬尾 正蔵	→
	永井 康宏	森脇 勤・藤井 勇	早田伊勢松・小沢卓	→・藤井 勇	→	→・早田伊勢松	→・目次 国雄	→	→・成相 定義	→	→・藤井 勇	→・林 正雄	→

都道府県高体連歴代会長・理事長　(No.3)

上段⇒会長　　下段⇒理事長

都道府県・年度	S23・24	S25・26	S27・28	S29・30	S31・32	S33・34	S35・36	S37・38	S39・40	S41・42	S43・44	S45・46	S47・48
岡山	・高畑浅次郎	→	尾坂　鶴夫	→	尾野作次郎	→	・内藤　一人	→	→	篠井　孝夫	後藤　亘	江川　清臣	→ ・戸川大六
	・福井　行雄	→	村山　寛	→	→	→	→	→	→	西谷　英	→	巳宅　悦次	赤沢　敏雄
広島	数田猛雄・宮川造六	→ ・有馬政一郎	→ ・数田　猛雄	→	→ ・戒能　錄	→ ・金子　彪	→	木村二郎・井上三喜夫	→ ・間下恭次郎	→	森田　晴夫	→ ・宇都宮満	加藤　朗一
S21年発足	林　弘	→	→ ・数田　猛雄	→	→ ・木村　二郎	→	→	加藤　正照	→	→ ・笠岡二三登	→	宇都宮満・山田正明	荒川　大
山口	・村田　房一	→	→	→ ・館林　寛吾	→ ・石神　正	→	→	山本　重治	→	→	→ ・吉村　宮男	→ ・白上　正二	→ ・大田　恭二
	・松岡千代二	→	→	→	→	→	→	藤本　正三	→	→	→ ・刀祢弥太郎	→	→ ・光永　教之
徳島	亀田、石川・三木康至	→	→ ・沖田　武雄	→	永井　洸	→ ・岡　淳	→	→ ・高原　武雄	→ ・久木　武夫	→ ・大崎　中男	→ ・行成　正春	→	箕浦善隆・村沢隆一
	河野　真一	→	→	→	→ ・木文　吾高	→	→	谷　栄	→	→ ・中西　由之	→	鈴江　敏則	山本　彰一
香川	赤羽　廣志	→	→	→	→ ・久保　隆美	→	→	→	→ ・二田　松司	水野　秀夫	→ ・菅　重義	→ ・松岡　巌	→ ・大島　久俊
						・三好　啓資	→	→	尾崎　信幸		→ ・八代　博之	→	→ ・富田　楠男
愛媛		・仙波　光三	二神伝三郎	→	→	→	→ ・清水　次夫	→	→	黒田　定雄	山本實雄・渡辺策太郎	→ ・高市　純徳	→
		・二神伝三郎	石川　恭作	田辺義治・石川恭作	→	→	→ ・桧垣　長慶	→	→	中川　武	→	→	→
高知	大島　光次	→	→	→	→ ・楠瀬　洋吉	→	→ ・西村　正男	→	→	曽我部清澄・森沢栄晴	→ ・塩田　保美	井上源兵衛	吉永　五郎
	酒井　青喜	→	→	→	→ ・土居　武夫	→	→	→	→	→	→	田原　敏雄	→
福岡	大内覚之助	井上孝太郎	→ ・山田　茂	→	→ ・有吉　正勝	伊勢田雪男	→ ・大塚　茂太	長敬　一郎	敷島　太郎	→	福沢　秀利	中村　義信	中村喜代志
	瀧口　智・江崎　忠	→	→ ・橘　顕二	→	→	石丸　三郎	→	伊之坂盛孝	→	→	石丸　三郎	→	中西　敬一
佐賀	・宮田　虎雄	→	→	→	→	→ ・西村　芳雄	→	→	森　一郎	元村光明・永井茂雄	高添泰巌・坂田力三	→ ・東島　亨	→ ・納富　行雄
	・大久保祐次	→	→	→ ・富石　豊松	→	→	→	→ ・原田　治	→	→ ・江崎　保	→ ・田中　謙一	→ ・松尾　斉昭	→ ・岩瀬　陽二
長崎	・小谷巨三郎	梅田倫平・小谷巨三郎	→	→ ・梅田　倫平	斉藤　進	→ ・清田金三郎	→ ・佐々木良親	→ ・儀　重秋	→ ・金谷　林作	古川　憲介	→	→ ・金谷　林作	柴江豊三郎・別当俊
	・小谷巨三郎	国田廣次郎・白石俊馬	→	→ ・横田　亮二	→	→ ・白石　俊馬	→ ・室田　正晴	→ ・横田　亮二	→ ・大坪　兼男	→	岩切　明	→ ・谷川　博	→
熊本	大西　嘉幸	→ ・吉田　浩	→ ・下條　靖	→	→ ・小島嘉七郎	→	→ ・河添　正	→	上村　正敏	→	牧野　毅	→ ・高山　静也	→
	川端　保	→ ・田中　康清	→ ・石黒　實次	→	→ ・兼子志賀美	→	→ ・田中　康清	→	川越　宝輔	→	栗田　秋生	→ ・冨永　勝美	→
大分	秦　泰彦	→	→ ・橋本　喬木	→	→ ・大神　和好	→ ・中西　俊雄	→ ・池田　利明	安達一郎・田村守隆	→	高木　来・大石俊之	→ ・津野　任	→ ・山本　峯生	→ ・布施　順生
	安部　正士	→	→ ・河野　太	→	→	→ ・堀部　岩雄	→ ・敷島　唯雄	長谷川哲郎・永松国雄	→	→ ・船石　一雄	→ ・渡辺喜代人	→ ・永松　国雄	→
宮崎	野村憲一郎	→ ・伊藤　祐重	泉　清	野口逸三郎	伊集院篤雄・小高秀二	→	青　敏夫・小高秀二	→	→	→ ・平松　輝夫	石川　侃	日高雅顕・太田俊雄	服部　七郎
	馬渡　勝美	→ ・綾部　豊	谷口　毅	武内健一郎	谷口　毅	→	豊丸秀夫・谷口　毅	→	→	→ ・上山　徳福	→	井原次夫・内之倉忠男	→
鹿児島											甲斐不二男・嘉野長夫	染川　光三	→
											中村麒児郎	安田　義富	→ ・松清　康則
沖縄			・阿波根直成	→	→	→	→	仲田　豊順	→	→ ・新屋敷文太郎	→	→	池村　恵興
			・志村　暁市	→	→	→	→	→	→	→	吉田　正善	→	→

都道府県高体連歴代会長・理事長　(No.4)

上段⇒会長　　下段⇒理事長

都道府県・年度	S49・50	S51・52	S53・54	S55・56	S57・58	S59・60	S61・62	S63・H 1	H 2・3	H 4・5	H 6・7	H 8・9	H 10
北海道	長浜　英作	→	→	赤塚　利國	仲川　翠	→・青木　弘	→	安井友博・山下克己	→・遠藤　隆	→・日野　嘉輝	日野　嘉輝	金子　盛夫	作田　昌明
	鳴海　哲夫	→	→	梅津　幸敏	→	→	→	工藤　晃司	浅野　喜圀	→	→	→・西谷内隆夫	西谷内隆夫
青森	新岡　精弥	→	→	→	奈良　尹	→・工藤　亮衛	花田　陽悟	→・西村祐弘	西村祐弘・奥寺栄二	→・佐々木恒朗	→・下山　晃弘	→	小野　次郎
	渋谷　恭一	→	→	→・下山　晃弘	→	→	→・伊藤　龍一	→	→・宮崎　徹	→	→	→	工藤　徳美
岩手	小野寺英長	千田　玄	→	三浦　均	→	小原房之助	→	高橋　力	沖田　岑夫	山影　源吉	高橋　英雄	→・長澤佳彦	→
	佐藤　浩	→	→	津田　敬・藤枝照義	→	→	→・高橋　英雄	→	佐久間研次郎	藤原　英輔	佐藤　剛・松田郁夫	鈴木　浩	松尾　光則
宮城	庄司　豊義	→・高橋　章	→・阿部　茂	→	→・遠藤　敬一	→・小坂　泰一	→・斉藤　富二	→	小沼　照之	→・堀田壽一	→・栗生　守男	高橋　郁夫	→
	遠藤　敬一	→	→	→	→・佐々木善哉	→	→・佐藤記一郎	→	斉藤光次・鈴木通弘	→	→・川島　克	→・庄子　利也	→
秋田	菊地俊一・小田島邦夫	→	→	秋山　光雄	→	→・畑沢　潤一	→・榊田　清	室田　弘	→	有辻和郎・松本　健	→	小野寺清・高田屋敏夫	→
	岩谷　文雄	館岡昭之助	→	神田　勉	→	→・小林　誠悦	→	→・京極　敏	→	→・斉藤　紀明	細谷　義次	→	大塚　三男
山形	庄司善助・伊豆田忠悦	→	蜂屋・大竹・河田親二	→	河田　利夫	→・鈴木　静夫	→・国分　三昭	岩木信孝・吉江正夫	大内　正敏	加藤　稔	小関　廣明	鈴木　寛	鈴木　正浩
	河田　利夫	→・山上　一郎	→・黒木　武彦	→	→	→	→・五十嵐秀男	井上博・五十嵐秀男	→	→・佐藤　通隆	→	→	梶原　賢
福島	鈴木　勝枝	山本敬二郎	→	飯島　護	→	大槻　進	→・小松原　格	折原常弘・早川俊一	→・細野　勇	斉藤　久・砂子田敦博	→	→・杉原　陸夫	高城　俊春
	陸　勤	→	→・鈴木　正一	→	→	→・高橋　充雄	→	関川　正道	浅野　晃左	→	→	→	→
茨城	橋本一郎・須田政明	河内　義一	→	→・樫村　旭光	鈴木　勲・鷲松四郎	→・矢口　四郎	根本　義弘	→・岩崎　貞夫	→	本橋　利美	→・松廣　義坂	小澤　智	高野　惣一
	横須賀　英	雨海佐武郎	→	→	→	小田部光明・下山田栄	杉山昭一郎	→・菅又　政雄	→	大木弘寿・小祝仁晃	→・本　忠夫	→・中村　昌平	田口　弥
栃木	石川　一正	→	→・堀内　肖吉	→・増山　陽章	岡島　宣八	→	→・徳田　有基	→	池田　収	山野井　暉	→・荒川　伸夫	→・吉田　幸雄	神原　彰夫
	大島　道夫	→	→・大塚　敏男	→	→	→	→・鳥居　行雄	→	→	→	小堀　信夫	→・吉田　忠征	→
群馬	藤生　宣明	→	→・中里　一郎	→・日野　敬三	→	→	金井　秀一	→	海老原洋三	樽井　哲	→・栗原　貞夫	→・杉山　洋一	中山　傑
	野木村　浩	→・高橋　毅	→	→	→	佐藤　賢一	→	→・大須　賀正	→	→・海野　俊彦	→	松本　邦夫	→
埼玉	矢代　登	→・前田　耕平	→	村越　五郎	吉川　正就	小林　泰雄	長谷川肇志	→・鈴木　勲二	→・菅野達也	→	→・渡邊修一郎	→・細田信良	→
	宮川　博	→	→・倉持守三郎	→	→	森　正博	→	→・小野　東	→	→・小室駿一郎	→	久保　正美	→
千葉	石野八百治	鈴木　博	→	→・羽山　孝二	青柳　正吾	→・関本　克己	→・柏崎　旭	→	和泉英雄・伊井正美	→・荒川　昇	→	→・佐藤　玉和	→
	篠崎　兵衛	金子　佶	→	→	→・梶原　義實	→・青木　克己	→・上野　正裕	→	→	青木　寛	→	佐久間嘉宏	→
東京	岸田文男・井上敬一	磨井　洋一	→・風巻　憲蔵	→・入倉　富夫	→・大野慎一郎	→・家弓　鐵矢	→	福田　満雄	→	→・久野　猛	→	→	河上　一雄
	磨井　洋一	入倉　富夫	→・鈴木　英久	→	松原　久三	市川　三男	→	→	→	磯部　賢次	→	→	佐藤　幸夫
神奈川	千田　敬三	→・高橋　亨	→	井谷　正氣	→・矢橋　敬一	→	田中敬一・落合　寿	→・渡辺　栄一	→・野畑　仁	→・進藤　隆博	→・実方　正	→・斉藤　幸雄	→
	又木誠八郎	→・小池　一正	→	→	笹生　登	→	鈴木　洋一	→	→	下内　義光	→	城所　富夫	→
山梨	小林　勝意	→	花輪　民夫	→	→・野田　秀豊	→・飯塚　猛夫	望月　正廣	中村　位・根岸　昭	→・上野　勢男	跡部義幸・坂本久男	岡　保和・宇野耕二	→	小笠原正人
	三枝　浩	→	根岸　昭	→	増村　栄治	→	→・堀内　和弘	→・大澤　徹	→	→	→	→・田草川光男	保坂　重機
新潟	高柳顕之・塩崎巳太郎	→・藤田　久喜	本間　忍	→	→・鈴木　昭二	→	→・宮地　正樹	→	滝沢　強一	→	→	佐藤　義雄	青木　一男
	山田　文威	→	→	→・田中栄三郎	→	→	→	小泉　正	→	→・山中　直樹	→	→・成田　守	→

都道府県高体連歴代会長・理事長　(No.5)

上段⇒会長　　下段⇒理事長

都道府県・年度	S49・50	S51・52	S53・54	S55・56	S57・58	S59・60	S61・62	S63・H 1	H 2・3	H 4・5	H 6・7	H 8・9	H 10
富山	八十島喜助	→・屋敷 平洲	竹長 敏夫	山川志津雄・蓮沢淳雄	→・高松 信雄	→・木下 周一	→・松儀 薫	青塚 与市	福田正義・大島哲夫	→・並木 孝	→	守田 平・高邑吉房	→
	中川 周三	→	→	→・山本 欣一	→	→	→	高木 義則	→	→	→・武田 孝志	→	貫江 和夫
石川	香村 忠	安宅 彰亮	鍋岡 利明	→	→・椿田 實	→	南 典二	齋藤 謙一	長柄 勝美	→・畑野 禎	→・安田 俊彦	→・中谷 一男	→
	西尾他嘉志	→・中川 毅	→	→	→・山野 明	→	→	濱 徹朗	→	山本 政一	→・西村 昭夫	→	→
福井	大森 陽・小林郁夫	→・西谷 寿道	→	→・野坂忠善	橋本 亮二	→・本田 周作	→・川端 一男	→・東 哲郎	竹村 光雄	村田 嘉孝	宇佐美賢樹	大野 勉	矢尾正次郎
	山下 尚	志田 省吾	久谷 清矩	→・川上 啓治	→	大島 哲夫	→	→・松下幸三郎	→	→・天谷 直樹	→	篤 尚夫	→
長野	佐藤 穂次	→・丸山 保彦	栗田 實・藤森 愼	→	市村順太郎・平松剛	→	→・高橋 重造	小林 仁	→・竹内 長生	藤澤 愛僖	→	海沼清美・本山網規	→
	湯本 宣政	→	→・伊藤 昭治	→	→・渡辺 伊八	→	→	両角 千明	→・小島 功	山浦 正孝	→	布施 紀彦	→
岐阜	戸部秀済・小山 勝	→・野村 健二	→	中島 鉦次	河村 武彦	河合 敏緒	野々村千城・近藤普潤	→・田中 猛	→・水崎 明	→・高橋 伸郎	渡辺重彦・宮崎満彦	→・本田 修也	荒井 強平
	青木 茂	田中 登	→	→	→	→・杉山 道昭	→	浅野 三郎	→	福島 寛司	→・武藤 哲夫	→・今村 和正	→
静岡	三浦 朝治	→・渡邉福太郎	→	→・竹田 昌平	→	梶原 亨	伊村才次郎・田口一男	望月 正	戸本 隆雄	→・織田 元泰	→	永田實治・安達忠勝	→
	久保田俊影	塩澤 伸介	→	→	野島 譲	→	白井 三郎	山埼 博昭	→	山口 一三	→	→・松浦 博實	→
愛知	伊藤政一・上島三夫	→	鶴見 浅次	→・蛭川 博	生沼 好之	竹内 實	杉田荘治・佐藤敬治	高井 龍三	白井 正巳	→・吉田 武	→・織田 晃	→・小野田章二	→
	上島三夫・竹内 實	鶴見 浅次	蛭川 博	→・山本 八郎	→	豊田 昌弘	木下 匡弘	浦野 誠	飯田 幸彦	舘 肇	→	浅井 溢夫	都築 義之
三重	近藤 寿・宮村栄郎	→	→	前島 俊皋	→・小野十美生	→	→	古山 博典	岩下紀久雄	橋本 久	城 秀一	近藤 和也	畦地 耕司
	西川 郁	→	→	→	工門 智生	→	→	笠井 裕	→	→	溝口 宏憲	→	→
滋賀	岩崎 武	→・小梶幸三郎	→	→・文室 常男	→・完甘 彰	→	→・太田 邦夫	→	橋高 章・川端 弘	→・清水興八郎	→	福井 貢	疋田 充穂
	脇坂 徳夫	→	→	小西 實	→・玉垣 三郎	→・土井 美明	→・田村 耕三	→・寺村 新悦	→・東 勝祐	→	→・西本 良三	→	→
京都	平井新司・深井隆三	→	→・栢分 次郎	→・長澤 克己	→	→・城戸 秀夫	→	→・増田 潔	→・吉本 勉	→	→	村上 知生	→
	大島 要・桝岡義明	→	→・川北 智世	→	→・竹谷 憙	→・橋詰 澄雄	→・岡本 忠行	→・前田 勉	→	→・芦田 紀男	山本世志男	→	澤田 安之
大阪	根津 哲夫	→・明石 立身	田口 達造	→・吉田 道雄	小山田成夫	→	松下 邦夫	白銀茂夫・林田昭喜	→	小久保昇治	梶本照夫・渡邊文一	→	神内 隆司
	長野 元泰	→	富浪良夫・白銀茂夫	→	→	→・高橋 實	→	小久保昇治・横爪静夫	→	神内 隆司	→・石黒 典男	前田 嘉昭	上田 俊次
兵庫	竹崎 敏夫	→	西村 昌治	横 義雄・福井 裕	→	石井 一・小西正男	→・大西 邦夫	桂 廣保	→	→	伊藤 正廣	中谷 元紀	→
	槇 義雄	石井 一	福井 裕	三宅 醇二	小島 正男	桂 廣保	→	谷口啓二郎	藤本幸男・中谷元紀	河野修一郎・吉井宏一郎	石嶺正一・坂本勝彦	→	折戸 善信
奈良	岩田 渾一	→	大島 寛	松尾 勝清	→	植田俊治・太田順康	奥田 悦夫	→	吉田公也・岡本 均	→・岡本 皓	吉井弘侑・上野博美	→	→
	玉井 勝	→	→	高橋 俊二	→	→	西機 茂郎	→・北村 忠生	→	→	山本 勝	→	西岡 英明
和歌山	九鬼 貴男	→	→	→	→	→	→	菅谷 茂	岡本 勝	阿部 健男	前田良蔵・古谷多市	→	→
	砂子寿弘・慈幸嘉一	→	→	→・古谷 多市	→	→	→	笠原悌二郎	→	→	→・中 公之	→・山本良和	→
鳥取	前田忠雄・亀屋重愛	→・内田 義行	加藤 潔	→	→・武 信弘	→	岩本温親・小谷英一	→・松田 信徳	→・山田 廉	→	足立 猛	→・田中 昭文	→
	宮脇通明・寺坂茂治	→	→	→・西垣 正美	→・伊東 寛重	→	高浜穆史・宮部紀佐雄	→	→	→	佐々木政顕	→・前田 達雄	→
島根	瀬尾正三・高橋 忠	仲佐 菊夫	→	今岡 登	三浦富登・畑 栄	→	花田 要・飯田 光	→・稲村 榮一	佐々木季治・高橋肇	→・岩成 秀彦	→	→・森脇 健臣	→
	林 正雄	高尾 茂	→	実重 清次	飯塚 孝	→	→	→・井山 充弘	→・小西 益之	→	→	→・前尾 俊	→

都道府県高体連歴代会長・理事長　(No.6)

上段⇒会長　下段⇒理事長

都道府県・年度	S49・50	S51・52	S53・54	S55・56	S57・58	S59・60	S61・62	S63・H 1	H 2・3	H 4・5	H 6・7	H 8・9	H 10
岡山	戸川　大六	大原　利貞	岡田　政敏	→	→・森安　静雄	→	横野昭輝・中山重義	吉田　五平	→・柾木　繁男	→	古市誠祠・馬場克彦	→・平田　賢治	→
	赤沢　敏雄	→	→	長塩　健吾	→	則武　虎政	→・猪原　昭	大西　富男	中野　靖英	→	古河　正道	森下　弘志	屯倉　紀正
広島	西本　篤武	→・廣川　義信	→	合田　学	→・磯本　泰三	梶村　徹哉	→・種村　重明	→	→・岡田　孝章	松尾俊之・脇　康治	→・松田　義成	→・村瀬　俊之	→
	谷口　五郎	→	→・伊藤　秀樹	→	→	→	→・吉田　善紀	→	→・東　昌弘	→・田平　一晄	→	万治　功	→
山口	大田　恭二	→	→・田中　邦芳	→	為近　千速	徳丸　泰弘	→・白松　寿人	→	→・今橋　靖刀	→	島津　宗隆	→・濱村　悦巳	→
	光永　教之	→	→	→	→・岡村　義昭	→	→	→	→	→	→	→	→
徳島	村沢隆一・福富忠行	→・上原　秋男	→	竹原茂雄・大賀　清	→・江西　利夫	→・宮　信之	久保駿一郎	須見　敬二	平尾隆信・筒井豊祐	→	→・居上　雅美	大津靖弘・加藤千明	中西　知
	山本　彰一	→	下泉　芳文	→	→	→・森　勝	→	→・津田　一弘	→	→	原田　久	→・松田　弘	→
香川	大島　久俊	→・三好　清	光藤　芳夫	→・岩本　三夫	→・田中　清春	→	→・山口　寮芳	→	杉岡　保之	益田　勉	→・松橋　次秋	→・関博　徳	→
	富田　槙男	→	→	→・鈴木　章夫	→	→	→・堤　仁	→	→	→	→	→	→
愛媛	高市　格	門多　寿道	→	→・佐々木寅義	→	小野　憲一	→・大澤　哲	→・石丸　博	→	國田　利明	→・野澤　善浩	→・近藤　雅美	→
	向井　敏夫	→・井手上　旭	→	→・田中　国雄	→	→	→	→	→	→・井手　盛章	→	→	→
高知	吉永五郎・山本　馨	→	→	→・文野　栄喜	→	→	山岡　友重	→	→	秦泉　寺明	中平　勝也	→・眞鍋叡一郎	→
	田原　敏雄	→	→	→・前田　多聞	→	→	→・沖野　吉克	→	→	→・清岡　栄一	→	→	→
福岡	中村喜代志	古谷　悟	→	→・主静　雄	各務　章	→	田畑　淳二	永吉　博義	合原　正登	吉田秀男・船津正明	→	原野　雅	隅本　豊
	中西　敬一	野口　喜代	→	→・門田　久人	→	→	花田　年弘	→	→	梅野　哲雄	→	城戸　英敏	→
佐賀	納富　行雄	→・花島　廣次	→・釈　憲正	境　正美	田原禎孔・江頭一水	→	大坪　晃・田中邦秀	→・三浦　英夫	畠山　忠郎	荒巻甲子郎・宮原照明	→・山田　満男	宮原　都明	相良　哲朗
	岩瀬陽二・中溝善治	→・木下　好通	→	宮原　敏	→・北川長生	→	大久保義高	→・相浦　實	→	木原　昇	→・簇崎　正允	→	北御門哲男
長崎	別当　俊	→・林田　光晴	→	→・竹下　哲	→・高口　一成	→・田中　重正	→・松尾　修三	→	大河内邦昭	→・長池　良昭	→・小山　曜美	→	→
	谷川　博・長尾一雄	→・松添　俊一	→	→	本多　守	→	→	野田　憲佑	→・竹山　廣	→	→・松本　剛	→・小野　良介	→
熊本	高山静也・宇野幸吉	谷口　秀人	→	→・江藤　恵治	→・宮崎重信	→・前田　精二	佐竹和之	→・後藤良勝	→	星子　孝之	→・工木　武雄	→	城本　和博
	冨永　勝美	赤星　秀年	→	→	→	→・中村　昭男	→	→・白土　長幹	→	池松　典彦	→	高木　三朗	→
大分	楠本達男・大江　博	上田健太郎	藤原正教・岸野晋一	→	安部孝一・吉川　敏	→・小野伊三郎	→・志賀　清己	古賀文敏・池邊明文	山本　清次	岩田満之・糸永隆章	→	→・福山　一夫	秦美　正
	永松　国雄	平山浩一郎	石橋千城・幸重和治	→	栗林　正幸	→・安藤　隆	→	横島　幹郎	濱本　俊夫	→・田中　和彦	→	→	→
宮崎	服部　七郎	→・濵田　宣弘	→	→・有馬　一男	→・高山　義孝	→	→	松田　義信	→・飛松　義久	→	山口　賢一	中田　忠	山下　兼紀
	内之倉忠男	→	→	→・大岐　義之	→・坂本　平	→	→	松井　利一	→	→・内山　孝徳	→	後藤　敏郎	後藤　憲一
鹿児島	城/下初夫・宮原正己	→・東　良一	→	小斉平松蔵	岩元　俊一	今村　博美	→	瀬口　紀穂	→・松山　良弘	→・堀之北重孝	→・倉田　彰	→・中川　征人	→
	松清　康則	床次　忠義	→	松清　康則	→・田之上市雄	→	→	竹之内　宏	→	→	西川　達也	→	新留　泰典
沖縄	蔵当　稔	世嘉　良栄	→	新城　久雄	→	→	照屋　寛哲	→・平良　親徳	金城　昭七	→・嘉手川繁二	與那嶺良栄	金城　永真	玻名城英介
	宇地原徳順	→	→	→	→・古謝　貢	→	仲村　春憲	→	→	→	→・南　正二	→	知念　正勝

専門部歴代部長

専門部・年度	S23・24	S25・26	S27・28	S29・30	S31・32	S33・34	S35・36	S37・38	S39・40	S41・42	S43・44	S45・46	S47・48
陸上	・高田 通	→	→	→	→	→	→	→・尾崎 剛毅	→	→・栗原伝次郎	→	→	石野八百治
体操		・野沢 要助	→	→	→	→	→	→	→・小林 武治	渡辺 芳雄	→	小嶋 凌・佐藤 敏行	→
水泳		星 一雄	→	→	小野 軍操	→	長島 泰明	→	→	浅島 武雄	→	→・野原 隆治	→
バスケットボール	遊津 孟	→	→	→	→・石平 俊徳	→	→・新井 迪之	→	→	成田 喜澄	→	→	→
バレーボール		坂上 光男	→	→	→	→	→	→	→	下村 平八	→	→	→
卓球		後藤 鉀二	→	→	→	→	→	→	高屋 定由・後藤 鉀二	→	→	→	→
ソフトテニス		安藤 星洲	→	→・林 勘二	→・松平 登	→	→	→	→	→	林 岩雄	→	小川 寧治
ハンドボール	・河島武四郎	→	→	→	→	菅是 敬	→	→	児玉 九十	→	→	徳永 陸繁	→
サッカー		岩野 次郎	→	→	→	→	→	→・藤野 源次	→	→	→	→・松浦 利夫	→
ラグビー				・高崎 米吉	→	→	→	→	→	→	→	→	→
バドミントン		・柳 一夫	→	森 義雄	→	→	→	→	→	→・小林 茂	→	→・川田 勇	→
ソフトボール		松岡 敬之	→	→	→	→	→	→	山田 基男	→	→	→	→・加藤 正雄
相撲		・万代 鹿三	→	→	→	→	→	→	→	→	土井 武夫	→	→
柔道		細川 熊蔵	→	→	→	→	→	→	→	→	藤原豊三郎	→	→・工藤 信雄
スキー		・色部 正長	加治千三郎	→	→	津坂 武	→	→	平松 義尚	→・高橋 周一	→	原岡 賢吉	→
スケート					西村 文雄	塚田 隆雄・更級 勉	→	新田 稔	小山 敏夫・加藤 駿二	田口 豊州	→・高橋 是武	→	→
漕艇			・林 浩	→	→	→	→	→・安藤 松寿	→	→	→	山本 実	→
剣道				星 一雄	→・両角 英蓮	村田 純一	→	→・小川 定胆	→	→・湯野 正憲	→	→	→
レスリング			・太田 浩	→	→	→	→	上野 幸一	→	→	→	→	→
弓道					高崎 米吉	→	→	→	→	→	→	→	→
テニス	長谷川寛治	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
登山					・土屋 憲三	→	→	・中山 勝治		竹内 安治	→	→	舘野 進
自転車			高崎 米吉	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
ボクシング						山口 久太	→	→	→	船田 譲	→	→	→
ホッケー						・小野 時男	→	→	→		・鈴木 義雄	・小野 時男	
ウエイトリフティング						・井尾 武雄	→	→	→	・清水 正男		梅田 嵩	・佐々木勘次郎
ヨット						・荒井 惟俊	→	澤井 測	→	→	→	→	→
フェンシング								後藤 鉀二	→	→	川村 等	→	→
空手道													
アーチェリー													
なぎなた													
研究													
定通制										石 章二郎・細井 秀虎	・川島 勝	若林 元典	・小沢 論寿

専門部歴代部長

((No.2)

専門部・年度	S49・50	S51・52	S53・54	S55・56	S57・58	S59・60	S61・62	S63・H 1	H 2・3	H 4・5	H 6・7	H 8・9	H 10
陸上	石野八百治	入倉 富夫	→	→	町田 好二・小田島哲哉	→	→	森 茂	→・山本 明	→	坂本 清治	阿久津 巌	水谷 弘
体操	佐藤 敏行・平岡 宮峯	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→・平岡 英信	→	→
水泳	野原 隆治	→	菊地 章	→	→・栗原 安雄	→	→・長野 昭夫	→	→	川端 理功	→	→	植田 和行
バスケットボール	成田 喜澄・濱本 清海	→	大木 行徳・宇田川博光	→	→	→	→	石井 弘司	→	→・金森 久	→・北村 透	→	荒井 正賢
バレーボール	下村 平八	→	→	→	叉木誠八郎	→	→・粥川 昌	→	→	→	→	→	→
卓球	後藤 錞二・後藤 淳	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→・吉崎 久治	→・松本 章二	→
ソフトテニス	小川 寧治	→	小沢洋太郎	→	→	桂 哲・松井 章	→・網中 正昭	→	西塔 克美	伊野 二彦	→・堀田 壽一	→・田島 正夫	→
ハンドボール	徳永 陸繁	→	→・鳩田新太郎	→	→・清水 正	→・中西 敬	→・佐野 和夫	→	須藤 健児	→・佐分 正典	→・高田日呂美	→・千野 恒夫	→
サッカー	松浦 利夫	→	川口 玲雄	→	加藤 三郎	→	→	→	鈴木 勇作	→	高田 久行	→	上野 二三
ラグビー	高崎 米吉	→	→・泉 儀二	→	→・鷹木 立雄	→・土岐 一郎	→・松下 邦夫	堤 治美・林田 昭喜	→	角田 進・荒井 昭雄	→	→	→
バドミントン	遠井 稔男	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	大世古吉弘・保坂 和也	→
ソフトボール	加藤 正雄	→・宍倉 博	→	→	→	→	竹内 吉治	→	大黒 賢時	→	→・高橋 清生	深澤 隆徳	→
相撲	土井 武夫・井谷 正気	→	→	→・友部 利平	→	→・高松松之介	→	→・竹内 英男	→・越智 桂友	→・村岡 満蔵	→・大竹不二男	→	→
柔道	工藤 信雄	→	→	和村 公男	→	加藤 秀雄	→	→	→	→・西川 廣	→	→	→
スキー	原岡 賢吉	→	→	→	→・石川 光明	→・清水 国通	→	松沢 徳雄・石塚 達也	渡辺 誠三・笹岡 道夫	→	芝崎 正之	川島 正彬	高橋 洋介
スケート	高橋 是武・若林 繁	→	→	→	→	→・太田 昌光	→	工藤 哲彌	町田 正義	泉 為人	岩見 秋夫・山崎 猛	→・松崎 徹	赤地 憲一
漕艇	獅子堂正隆	→	→	佐々木康郎	柳 健治	→	→	→	小川 洋一	→	行司 伸吾	→	→
剣道	湯野 正憲	→・櫛橋勝太郎	棚橋 嘉勝	→	富永 廣徳・宮澤 嘉夫	→・加藤 淳二	→	太田 實	山崎 興一	→・岡村 忠典	→	→	増田 三郎
レスリング	上野 幸一	→	→	→	→	→	→・加藤 昭	→	→	→・馬場 利宗	→・家島 啓二	→・永島 武	→
弓道	高崎 米吉	→	→・林 初男	→	→	山本 彰一	齋藤 克・山下 真	→	斉藤 節朗	須田 三郎	→	→	→
テニス	長谷川寛治	→・太田 満	→・友末 弘三	→	→	→・古川 溝	→	古賀 通生	→	→	→	→	→
登山	舘野 進	→	→	浅野 達三	畑 喜一	河野 真	斎木 直治・片岡 匡三	→	→	山口 強・永田 實治	→	→・齋藤圖次郎	→
自転車	高崎 米吉	大庭 淡路	→	→	→	→・野口 幸男	→・土屋 益夫	→・氷田 正男	鳥居 彦之	→・増田 英二	→	→	三觜 宏孝
ボクシング	船田 譲・浅田 光男	→	→	近藤 辰春	→	→	→・一瀬 博	→	→	→	→・水澤 研一	→・市野川 實	本部 哲廣
ホッケー	小野 時男	→	→	→	→・今井 義久	高山 晃	井上信太郎	→	成田 昌幸・田村 一成	→	→・田中 孝夫	→	→
ウエイトリフティング	佐々木勘次郎	野中 乾	→	→	大野慎一郎	→・村中 駿博	→・西村 文男	→	小川 一郎	濱名 言實・石平 快三	→	野牧 一雄	→
ヨット	澤井 測	川本 保	→	→	→	澄田 秀夫	→	→	→	→	→	斉藤 友一	→
フェンシング	長尾 正男	→	鈴木 省三・倉本 一男	村上 謹司	→	→	→・三井 朋文	→	→・大澤 文男	佐部 成男	→	→・山川 靖仁	→
空手道	中里 一郎	→	→	→	→	→	→	→	→	→	谷澤 一雄	猪俣 史郎	→
アーチェリー		木村 好治	→	→	小笠原朋憲	→	→	里見 勝人・松崎 洋右	→	→	→	→	→
なぎなた												安尾宏一郎・田中 紘人	村上 致
研究					・松原 久三	→・藤川 侃三	→	京増 敏朗	→・深澤 孟雄	跡部 義幸・菅野 清	→・小林 愃	→・松本 泰昌	栗島 裕
定通制	小沢 諦寿	大野 倭一	菊野 和夫	大河原三郎	→・四柳 昇	→	→・市川 重尚	元 和臣	鈴木 淑雄	岡本 裕之	池永 武昭	田中 正造	→

平成10年度

全国高等学校体育連盟役員

役名	地区	氏名	勤務先	〒	勤務先住所	TEL
会長	東京	河上一雄	東京都立日比谷高校長	100-0014	東京都千代田区永田町2－16－1	03－3581－0808
副会長	北海道	作田昌明	北海道立札幌西陵高校長	063-0023	北海道札幌市西区平和3条4－2－1	011－663－7121
〃	東北	高城俊春	県立福島高校長	960-8002	福島市森合町5－72	0245－35－2391
〃	関東	細田信良	埼玉県立浦和高校長	335-0901	埼玉県浦和市領家5－3－3	048－886－3000
〃	北信越	中谷一男	石川県立金沢桜丘高校長	920-0818	石川県金沢市大樋町16－1	076－252－1225
〃	東海	小野田章二	愛知県立時習館高校長	441-8064	愛知県豊橋市富本町	0532－45－3171
〃	近畿	神内隆司	府立羽曳野高校長	583-0847	羽曳野市大黒776	0729－57－0001
〃	中国	森脇健臣	島根県立松江工業高校長	690-8528	島根県松江市古志原4－1－10	0852－26－3842
〃	四国	近藤雅美	愛媛県立松山北高校長	790-0826	愛媛県松山市文京町4－1	089－925－2161
〃	九州	城本和博	熊本県立熊本北高校長	860-0877	熊本県熊本市清水町楡木327	096－338－1110
〃	専門部	松本章二	愛知工業大学名電高校	464-8540	名古屋市千種区若水3－2－12	052－712－0481
理事長	東京	高田日呂美	東京都立駒場高校長	152-0041	東京都目黒区大橋2－18－1	03－3466－2481
副理事長	関東	斎藤幸雄	神奈川県立横須賀大津高校長	239-0808	横須賀市大津町4－1	0468－36－0281
〃	近畿	上田俊次	大阪府教育委員会保健体育課	540-0008	大阪市大手前2	06－941－0351
〃	専門部	粥川昌	桃山学院高校	545-0011	大阪市阿倍野区昭和町3－1－64	06－621－1181
監事	関東	池田敏郎	東京都立第二商業高校長	193-0931	東京都八王子市台町3－25－1	0426－22－6231
〃	近畿	中谷元紀	兵庫県立夢野台高校長	653-0801	兵庫県神戸市長田区房王寺町2－1	078－691－1546
事務局長	東京	大杉一男	高体連事務局	100-0014	東京都千代田区永田町2－16－2星陵会館内	03－3581－5094

全国高等学校体育連盟顧問

役　名	氏　名	役職期間	〒	住　所	TEL
顧　問	岸田文男	昭和47年～49年	190-0023	東京都立川市柴崎2－14－23	0425－22－6487
〃	井上敬一	昭和50年	166-0002	東京都杉並区高円寺北3－19－11	03－3339－4716
〃	磨井洋一	昭和52年～53年	167-0033	東京都杉並区清水3－13－15	03－3399－0459
〃	鈴木英久	昭和56年～58年	180-0003	東京都武蔵野市吉祥寺南町4－21－12	0422－43－2834
〃	家弓鐵矢	昭和60年～62年	350-1312	埼玉県狭山市堀兼2374－18　フラワーヒル32－2	0429－57－1957
〃	内藤隆	昭和63年～平成3年	184-0000	東京都小金井市梶野町3－14－4	0422－52－4922
〃	福田満雄	昭和63年～平成4年	259-1132	神奈川県伊勢原市桜台5－8－17	0463－93－0784
〃	久野猛	平成5年～9年	343-0047	埼玉県越谷市弥十郎51－6	0489－75－4603

各都道府県高体連会長及び理事

府県名	会長	理事	〒	事務局所在地	TEL	責任者
北海道	作田昌明 (道立札幌西陵高等学校長)	副会長 浅利徹 理事長 西谷内隆幸	007 0810	札幌市東区東苗穂10条1−2−21 道立札幌東陵高校内	011−792−2060	西谷内隆幸

東北高等学校体育連盟		会長 高城俊春 理事長 浅尾晃左	960 8002	福島市森合町5−72 福島県立福島高校内	024−531−3890	福島県高体連
青森	小野次郎 (県立青森西高等学校長)	副会長 成田清則 理事長 工藤徳美	038 0042	青森市新城字平岡266−20 青森県立青森西高校内	0177−88−0511	工藤 徳美
岩手	長澤佳彦 (県立盛岡第三高等学校長)	理事長 松尾光則 事務局長 鷹觜文昭	020 0114	盛岡市高松4−17−16 岩手県立盛岡第三高等学校内	019−661−8115	鷹觜 文昭
宮城	高橋郁夫 (県立泉高等学校長)	理事長 庄子利也 副理事長 岩槻芳夫	981 3132	仙台市泉区将監10−39−1 宮城県立泉高校内	022−374−6674	庄子 利也
秋田	高田屋敏夫 (県立秋田南高等学校長)	理事長 大塚三男 事務局長 千田典夫	010 0974	秋田市八橋運動公園1−5 秋田県立スポーツ会館内	0188−66−5999	大塚 三男
山形	鈴木正浩 (県立山形中央高等学校長)	理事長 梶原賢 事務局長 高橋正治	990 2492	山形市鉄砲町2−10−73 山形県立山形中央高校内	023−624−0929	高橋 正治
福島	高城俊春 (県立福島高等学校長)	理事長 浅尾晃左 事務局長 菅野一治	960 8002	福島市森合町5−72 福島県立福島高校内	024−531−3890	浅尾 晃左

関東高等学校体育連盟		会長 細田信良 理事長 久保正美	336 0007	浦和市仲町3−5−8 県立武道館内	048−822−6792	埼玉県高体連
茨城	高野惣一 (県立水戸第三高等学校長)	理事長 田口弥 副理事長 横須賀正治	310 0045	水戸市新原2−11−1 堀原運動公園内	029−254−0855	横須賀正治
栃木	神原彰夫 (県立宇都宮中央女子高等学校長)	理事長 吉田忠征 副理事長 諏佐収	320 0057	宇都宮市中戸祭1−6−3 スポーツ会館内	028−622−8660	吉田 忠征
群馬	中山傑 (県立前橋商業高等学校長)	理事長 松本邦夫 事務局長 林康宏	371 0805	前橋市南町4−35−1 群馬県立前橋商業高校内	027−224−5046	林 康宏
埼玉	細田信良 (県立浦和高等学校長)	理事長 久保正美 副理事長 関根弘之	336 0007	浦和市仲町3−5−8 県立武道館内	048−822−6792	久保 正美

府県名	会長	理事	〒	事務局所在地	TEL	責任者
千葉	佐藤玉和 (県立八千代高等学校長)	理事長 佐久間嘉宏 副理事長 山崎成夫	263 0043	千葉市稲毛区小仲台5−10−1 千葉県立千葉女子高校内	043−252−1691	佐久間嘉宏
東京	河上一雄 (都立日比谷高等学校長)	理事長 佐藤幸夫 事務局長 大杉一男	100 0014	千代田区永田町2−16−2 星陵会館内	03−3581−5094	大杉一男
神奈川	斎藤幸雄 (県立横須賀大津高等学校長)	理事長 城所富夫 副理事長 加山春喜	221 0855	横浜市神奈川区三ツ沢町3−1 神奈川県立スポーツ会館内	045−311−8817	城所富夫
山梨	小笠原正人 (県立巨摩高等学校長)	理事長 保坂重機 副理事長 杉田季久雄	400 0001	甲府市和田町2564 山梨県スポーツ会館内	0552−53−1846	保坂重機

北信越高等学校体育連盟		会長 中谷一男 理事長 西村昭夫	920 0818	金沢市大樋町16−1 石川県立金沢桜丘高校内	076−252−4273	石川県高体連
新潟	青木一男 (県立新潟高等学校長)	副会長 池田齊 理事長 成田守	951 8127	新潟市関屋下川原2−635 新潟県立新潟高校内	025−266−2658	成田守
富山	高邑吉房 (県立魚津高等学校長)	理事長 貫江和夫 副理事長 魚躬則夫	930 0097	富山市芝園町3−1−26 富山県立富山中部高校内	0764−42−0721	貫江和夫
石川	中谷一男 (県立金沢桜丘高等学校長)	理事長 西村昭夫 副理事長 太田信	920 0818	金沢市大樋町16−1 石川県立金沢桜丘高校内	076−252−4273	西村昭夫
福井	矢尾正次郎 (県立福井商業高等学校長)	理事長 筧尚夫 副理事長 赤星哲志	910 0021	福井市乾徳4−8−19 福井県立福井商業高校内	0776−22−1047	筧尚夫
長野	本山綱規 (県立長野高等学校長)	理事長 布施紀彦 副理事長 青木功	380 8515	長野市上松1−16−12 長野県立長野高校内	026−234−1205	布施紀彦

東海高等学校体育連盟		会長 小野田章二 理事長 都築義之	460 0007	名古屋市中区新栄1−49−10 愛知県教育会館内(3F)	052−251−8115	愛知県高体連
岐阜	荒井強平 (県立岐阜総合学園高等学校長)	副会長 市川忠男 理事長 今村和正	502 0931	岐阜市則武清水1841−11 岐阜県立岐阜北高校内	058−231−7032	今村和正
静岡	安達忠勝 (浜松市立高等学校長)	副会長 清水洋二 理事長 松浦博實	420 8606	静岡市長谷町66 静岡県立静岡高校内	054−248−7448	松浦博實
愛知	小野田章二 (県立時習館高等学校長)	副会長兼理事長 都築義之 事務局長 坂敬一郎	460 0007	名古屋市中区新栄1−49−10 愛知県教育会館内(3F)	052−251−8115	坂敬一郎
三重	畦地耕司 (県立伊勢高等学校長)	理事長 溝口宏憲 副理事長 服部匠悟	510 8562	四日市市大字日永字岡山4917 三重県立四日市南高校内	0593−46−2718	溝口宏憲

府県名	会長	理事	〒	事務局所在地	TEL	責任者
近畿高等学校体育連盟		会長 神内 隆司 理事長 上田 俊次	540 0008	大阪市中央区大手前2 大阪府教育委員会事務局保健体育課内	06－941－3430	大阪高体連
滋賀	疋田 充穂 (県立伊吹高等学校長)	理事長 西本 良三 副理事長 山本 敬三	520 8577	大津市京町4－1－1 滋賀県教育委員会保健体育課内	077－528－4614	上野 幹雄
京都	村上 知生 (府立鳥羽高等学校長)	副会長 池垣伊三郎 理事長 澤田 安之	602 8570	京都市上京区下立売通新町西入ル 京都府教育庁指導部保健体育課内	075－414－5862	浅野 賢一
大阪	神内 隆司 (府立羽曳野高等学校長)	理事長 上田 俊次 幹事長 平井 文徳	540 0008	大阪市中央区大手前2 大阪府教育委員会事務局保健体育課内	06－941－3430	宮村 誠一
兵庫	中谷 元紀 (県立夢野台高等学校長)	副会長 吉井宏一郎 理事長 折戸 善信	658 8567	神戸市中央区下山手通5－10－1 兵庫県教育委員会事務局体育保健課内	078－362－3787	吉井 和明
奈良	上野 博美 (県立添上高等学校長)	理事長 西岡 英明 副理事長 播磨 勝行	630 8113	奈良市法蓮町757奈良県法蓮庁舎 奈良県教育委員会保健体育課内	0742－22－1101	武村 純一
和歌山	古谷 多市 (県立和歌山北高等学校長)	理事長 山本 良和 副理事長 西瑞 秀高	640 8464	和歌山市市小路388 和歌山県立和歌山北高校内	0734－53－3657	山本 良和

中国高等学校体育連盟		会長 森脇 健臣 理事長 荊尾 俊	690 8528	松江市古志原町4－1－10 島根県立松江工業高校内	0852－26－3842	島根県高体連
鳥取	田中 昭文 (県立倉吉東高等学校長)	理事長 前田 達雄 事務局長 小倉 健一	680 0944	鳥取市布勢146－1 布勢陸上競技場2F	0857－28－4991	前田 達雄
島根	森脇 健臣 (県立松江工業高等学校長)	理事長 荊尾 俊 副理事長 園山 哲也	690 8528	松江市古志原町4－1－10 島根県立松江工業高校内	0852－26－3842	大西 和幸
岡山	平田 賢治 (県立岡山朝日高等学校長)	理事長 屯倉 紀正 副理事長 鎌木 孝二	703 8278	岡山市古京町2－2－21 岡山県立岡山朝日高校内	086－271－0264	屯倉 紀正
広島	村瀬 俊之 (県立海田高等学校長)	理事長 万治 功 事務局長 藤本 隆弘	730 0011	広島市中区基町4－1 広島県立総合体育館内	082－223－7677	万治 功
山口	山下 浩 (県立西京高等学校長)	理事長 竹内 之保 副理事長 岩本 和是	753 0851	山口市大字黒川2580－1 山口県立西京高校内	0839－23－8582	竹内 之保

府県名	会　　長	理　　事	〒	事務局所在地	TEL	責任者
四国高等学校体育連盟		会　長　近藤　雅美 理事長　井手　盛章	790 0846	松山市道後北代3－3	089－925－1634	愛媛県高体連
徳　島	中　西　　知 （県立鳴門第一高等学校長）	理事長　松田　　弘 事務局長　分木　秀樹	770 0853	徳島市中徳島町1－5 徳島県立城東高校内	0886－25－8060	松田　　弘
香　川	関　　博　徳 （県立丸亀高等学校長）	理事長　山下　正敏 事務局長　堀家　俊一	760 0017	高松市番町3－1－1 香川県立高松高校内	087－862－6908	山下　正敏
愛　媛	近　藤　雅　美 （県立松山北高等学校長）	理事長　井手　盛章 事務局長　白石　隆保	790 0846	松山市道後北代3－3	089－925－1634	白石　隆保
高　知	眞　鍋　叡一郎 （県立高知追手前高等学校長）	理事長　清岡　栄一 事務局長　谷岡　敏男	780 0850	高知市丸の内2－2－40 高知県立高知丸の内高校内	0888－72－0865	谷岡　敏男

九州高等学校体育連盟		会　長　城本　和博 理事長　高木　三朗	860 0877	熊本市清水町楡木327 熊本県立熊本北高校内	096－339－7224	熊本県高体連
福　岡	隅　本　　豊 （県立春日高等学校長）	理事長　城戸　英敏 副理事長　山口　悦朗	816 0052	福岡市博多区東平尾公園2－1－4 県立スポーツ科学情報センター内	092－621－9394	城戸　英敏
佐　賀	相　良　哲　朗 （県立佐賀東高等学校長）	理事長　北御門哲男	840 0016	佐賀市南佐賀３－ 11 － 15 佐賀県立佐賀東高校内	0952－24－0303	北御門哲男
長　崎	小　山　曙　美 （県立長崎西高等学校長）	理事長　小野　良介 副理事長　倉橋　　徹	852 8014	長崎市竹の久保町12－9 長崎県立長崎西高校内	095－862－8231	小野　良介
熊　本	城　本　和　博 （県立熊本北高等学校長）	理事長　高木　三朗	860 0877	熊本市清水町楡木327 熊本県立熊本北高校内	096－339－7224	高木　三朗
大　分	秦　　美正 （県立碩信高等学校長）	副会長　幸重　和治 理事長　田中　和彦	870 0938	大分市今津留1－19－1 大分県立大分舞鶴高校内	0975－53－5382	田中　和彦
宮　崎	山　下　兼　紀 （県立宮崎南高等学校長）	理事長　後藤　憲一	880 0926	宮崎市月見ヶ丘5－2－1 宮崎県立宮崎南高校内	0985－51－4109	後藤　憲一
鹿児島	中　川　征　人 （県立鹿児島南高等学校長）	理事長　新留　泰典	891 0116	鹿児島市上福元町5255 鹿児島県立鹿児島南高校内	099－268－8391	新留　泰典
沖　縄	玻名城　英　介 （県立豊見城高等学校長）	理事長　知念　正勝	900 0026	那覇市奥武山町45 奥武山陸上競技場2F	098－858－4835	知念　正勝

専門部長（理事）

部名	部長名	所属校及び所在地	TEL	連絡先		
陸上	水谷 弘	都立新宿高等学校長 〒151-0051 渋谷区千駄ケ谷6-2-1	03-3354-7411	都立松が谷高校 〒192-0354 八王子市松が谷1772	0426-76-1231	大門正男
体操	平岡英信	清風学園高等学校長 〒543-0031 大阪市天王寺区石ケ辻町12-16	06-771-5757	清風高等学校 〒543-0031 大阪市天王寺区石ケ辻町12-16	06-771-5973	山口彦則
水泳	植田和行	都立南多摩高等学校 〒192-0905 八王子市明神町4-20-1	0426-42-2431	都立南多摩高等学校 〒192-0905 八王子市明神町4-20-1	0426-42-2431	植田和行
バスケットボール	荒井 正賢	都立江北高等学校長 〒120-0014 足立区西綾瀬4-14-30	03-3880-3411	跡見学園高校 〒112-0012 文京区大塚1-5-9	03-3941-8161	平井 毅
バレーボール	粥川 昌	桃山学院高等学校 〒545-0011 大阪市阿倍野区昭和町3-1-64	06-621-1181	桃山学院高等学校 〒545-0011 大阪市阿倍野区昭和町3-1-64	06-621-1181	林 義治
卓球	松本章二	愛知工業大学名電高等学校 〒464-0071 名古屋市千種区若水3-2-12	052-712-0481	愛知工業大学名電高等学校 〒464-0071 名古屋市千種区若水3-2-12	052-721-0311	若尾輝夫
ソフトテニス	田島正夫	埼玉県立浦和西高等学校長 〒338-0802 浦和市木崎3-1-1	048-831-4847	都立永山高等学校 〒206-0025 多摩市永山5-22	0423-74-8460	上田敏夫
ハンドボール	千野恒夫	山梨県立谷村工業高等学校長 〒402-0053 山梨県都留市上谷5-7-1	0554-32-2101	神奈川県立生田東高等学校 〒214-0038 川崎市多摩区生田4-32-1	044-932-1211	本田眞吾
サッカー	上野二三一	都立小石川高等学校 〒113-0021 文京区本駒込2-29-29	03-3946-7171	学芸大学附属高等学校 〒154-0002 世田谷区下馬4-1-5	03-3421-5151	栗原鏡成
ラグビー	荒井昭雄	大阪府立門真西高等学校長 〒57-0038 大阪市門真市柳田町29-1	06-909-0318	大阪府立門真西高等学校 〒571-0038 大阪府門真市柳田町29-1	06-909-0318	荒井昭雄
バドミントン	保坂和也	山梨県立増穂商業高等学校 〒400-0502 山梨県南巨摩郡増穂町最勝寺1372	0556-22-3185	山梨県立増穂商業高等学校 〒400-0502 山梨県南巨摩郡増穂町最勝寺1372	0556-22-3185	保坂和也
ソフトボール	飯塚 斉	県立沼津中央高等学校 〒410-0033 沼津市杉崎町11-20	0559-21-0346	県立沼津中央高等学校 〒410-0033 沼津市杉崎町11-2010	0559-21-0346	飯塚 斉

部　名	部長名	所属校及び所在地	TEL	連　絡　先		
相　撲	大竹　不二男	札幌商業高等学校 〒062-0911 札幌市豊平区旭町4-1-42	011-841-1161	青森県立金木高等学校 〒037-0200 青森県北津軽郡金木町字芦野200	0173-53-2079	一戸　隆男
柔　道	西川　廣	都立久留米高等学校 〒203-0052 東久留米市幸町5-8-46	0424-71-2510	都立久留米高等学校 〒203-0052 東久留米市幸町5-8-46	0424-71-2510	西川　廣
スキー	高橋　洋介	北海道札幌平岸高等学校長 〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条18丁目	011-812-2010	北海道札幌平岸高等学校 〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条18丁目	011-812-2010	近藤　建治
スケート	赤地　憲一	長野県立軽井沢高等学校長 〒389-0100 長野県北佐久郡軽井沢町1323-43	0267-42-2390	長野県立岡谷東高等学校 〒394-0033 長野県岡谷市南宮2-1-17	0266-23-3161	降旗　教彦
漕　艇	行司　伸吾	静岡県立二俣高等学校 〒431-3314 天竜市二俣町二俣196-28	0539-26-1221	市立川口高等学校 〒332-0001 川口市朝日5-9-18	048-224-0508	長谷川　誠
剣　道	増田　三郎	都立北園高等学校長 〒173-0004 板橋区板橋4-14-1	03-3962-7885	都立両国高等学校 〒130-0022 墨田区江東橋1-7-14	03-3631-1815	磯部　直樹
レスリング	永島　武	群馬県立西邑楽高等学校長 〒370-0514 群馬県邑楽郡大泉町2-3-1	0276-63-5851	日本工業大学附属東京工業高等学校 〒107-0052 港区赤坂4-1-26	03-3589-1171	中根　和広
弓　道	須田　三郎	奈良県立北大和高等学校 〒630-0131 生駒市上町4600	0743-78-3081	埼玉県立川越総合高等学校 〒350-0036 埼玉県川越市小仙波町5-14	0492-22-4148	影山　一
テニス	古賀　通生	柳川高等学校長 〒832-0061 福岡県柳川市本城町125	0944-73-3333	愛媛県立伊予高等学校 〒791-3102 愛媛県伊予郡松前町大字北黒田119-2	089-984-9311	宮浦　典善
登　山	齋藤　團次郎	静岡県立静岡南高等学校長 〒422-8017 静岡市大谷5762	054-237-5781	静岡精華高等学校 〒420-0839 静岡市鷹匠2-4-18	054-254-7334	金子　昌彦
自転車	三觜　宏孝	京都府立佳高等学校長 〒615-8102 京都府西京区川島松ノ木本町27	075-391-2151	京都府立佳高等学校 〒615-8102 京都府西京区川島松ノ木本町27	075-391-2151	狩野　哲男
ボクシング	本部　廣哲	南京都高等学校長 〒619-0245 京都府相楽郡精華町下狛中垣内48	07749-3-0518	栃木県立那須清峰高等学校 〒329-2712 那須郡西那須野町下永田6-4	0287-36-1155	葭葉　功
ホッケー	田中　孝夫	埼玉県立皆野高等学校長 〒368-0000 埼玉県秩父郡皆野町大淵19-1	0494-62-2076	埼玉県立皆野高等学校 〒368-0000 埼玉県秩父郡皆野町大淵19-1	0494-62-2076	加納　博文

部　名	部長名	所属校及び所在地	TEL	連絡先		
ウエイトリフティング	野牧一雄	愛知工業大学名電高等学校長 〒464-0071 名古屋市千種区若水3-2-12	052-721-0311	千葉県立佐倉西高等学校 〒285-0841 千葉県佐倉市下志津263	043-489-5881	篠宮稔
ヨット	齋藤友一	逗子開成高等学校 〒249-8510 神奈川県逗子市新宿2-5-1	0468-71-2062	逗子開成高等学校 〒249-8510 神奈川県逗子市新宿2-5-1	0468-71-2062	齋藤友一
フェンシング	山川靖仁	岡山県立玉野光南高等学校 〒706-0226 岡山県玉野市東七区244	0863-51-2311	愛知工業大学名電高等学校 〒464-8540 名古屋市千種区若水3-2-12	052-721-0311	奥田明
空手道	猪俣史郎	山手学院高等学校長 〒247-0013 横浜市栄区上郷町460	045-891-2111	八雲学園高校 〒152-0023 目黒区八雲2-14-1	03-3717-9062	村上一也
アーチェリー	松崎洋右	大宮開成高等学校長 〒330-8567 埼玉県大宮市堀之内1-615	048-641-7161	大宮開成高等学校 〒330-8567 埼玉県大宮市堀ノ内1-615	048-641-7161	宮崎利帳
なぎなた	村上致	大阪府立豊中高等学校長 〒560-0011 大阪府豊中市上野西2-5-12	06-854-1207	東海女子高等学校 〒468-0014 名古屋市天白区中平2-901	052-803-8432	山谷美紀子

研究	栗島裕	埼玉県立入間高等学校長 〒358-0001 埼玉県入間市向陽台1-1-1	0429-64-3805	埼玉県立大宮武蔵野高等学校 〒331-0061 埼玉県大宮市西遊馬1601	048-622-0181	古川修
定通制	田中正造	都立大森高等学校長 〒144-0051 大田区西蒲田2-2-1	03-3753-3161	都立大森高等学校 〒144-0051 大田区西蒲田2-2-1	03-3753-3161	阿部正彦

常　務　理　事

No.	ブロック	氏　名	県　名	No.	ブロック	氏　名	県　名
1	会　長	河上　一雄	全国会長	14	中　国	森脇健臣	島根県会長
2	理事長	高田日呂美	全国理事長	15	〃	竹内之保	山口県理事長
3	北海道	西谷内隆幸	北海道理事長	16	四　国	山下正敏	香川県理事長
4	東　北	松尾光則	岩手県理事長	17	〃	井手盛章	愛媛県理事長
5	〃	梶原賢	山形県理事長	18	九　州	高木三朗	熊本県理事長
6	関　東	久保正美	埼玉県理事長	19	〃	小野良介	長崎県理事長
7	〃	城所富夫	神奈川県理事長	20	専門部	粥川昌	バレーボール部長
8	北信越	西村昭夫	石川県理事長	21	〃	増田三郎	剣道部長
9	〃	貫江和夫	富山県理事長	22	〃	平岡英信	体操部長
10	東　海	都築義之	愛知県理事長	23	〃	松崎洋右	アーチェリー部長
11	〃	松浦博實	静岡県理事長	24	〃	保坂和也	バドミントン部長
12	近　畿	村上知生	京都府会長				
13	〃	上野慱美	奈良県会長				

全国高等総体中央委員会委員（ブロック選出）

No.	ブロック	氏名	県名	No.	ブロック	氏名	県名
1	会長	河上一雄	全国会長	14	北信越	成田守	新潟県理事長
2	副会長	関博徳	香川県会長	15	〃	筧尚夫	福井県理事長
3	〃	長澤佳彦	岩手県会長	16	東海	溝口宏憲	三重県理事長
4	〃	荒井強平	岐阜県会長	17	〃	今村和正	岐阜県理事長
5	理事長	高田日呂美	全国理事長	18	近畿	西本良三	滋賀県会長
6	副理事長	斎藤幸雄	神奈川県会長	19	〃	山本良和	和歌山県会長
7	〃	上田俊次	大阪理事長	20	中国	荊尾俊	島根県理事長
8	〃	粥川昌	バレーボール部長	21	〃	竹内之保	山口県理事長
9	北海道	西谷内隆幸	北海道理事長	22	四国	山下正敏	香川県理事長
10	東北	大塚三男	秋田県理事長	23	〃	井手盛章	愛媛県理事長
11	〃	浅尾晃左	福島県理事長	24	九州	高木三朗	熊本県理事長
12	関東	吉田忠征	栃木県理事長	25	〃	新留泰典	鹿児島県理事長
13	〃	佐久間嘉宏	千葉県理事長				

全国高校総体中央委員会委員（専門部長）

No.	専門部	氏名	役名	No.	専門部	氏名	役名
1	陸上	水谷 弘	部長	16	スケート	赤地 憲一	部長
2	体操	平岡 英信	〃	17	漕艇	行司 伸吾	〃
3	水泳	植田 和行	〃	18	剣道	増田 三郎	〃
4	バスケットボール	荒井 正賢	〃	19	レスリング	永島 武	〃
5	バレーボール	粥川 昌	〃	20	弓道	須田 三郎	〃
6	卓球	松本 章二	〃	21	テニス	古賀 通生	〃
7	ソフトテニス	田島 正夫	〃	22	登山	齋藤 團二郎	〃
8	ハンドボール	千野 恒夫	〃	23	自転車	三觜 宏孝	〃
9	サッカー	上野 二三一	〃	24	ボクシング	本部 廣哲	〃
10	ラグビー	荒井 昭雄	〃	25	ホッケー	田中 孝夫	〃
11	バドミントン	保坂 和也	〃	26	ウェイトリフティング	野牧 一雄	〃
12	ソフトボール	深沢 隆徳	〃	27	ヨット	齋藤 友一	〃
13	相撲	大竹 不二男	〃	28	フェンシング	山川 靖仁	〃
14	柔道	西川 廣	〃	29	空手道	猪俣 史郎	〃
15	スキー	高橋 洋介	〃	30	アーチェリー	松崎 洋右	〃
				31	なぎなた	村上 致	〃

全国高校総体検討委員会委員

No.	ブロック	氏名	県名	No.	ブロック	氏名	県名
1	会長	河上一雄	全国会長	10	東海	松浦博實	静岡県理事長
2	理事長	高田日呂美	全国理事長	11	近畿	澤田安之	京都府理事長
3	副理事長	斎藤幸雄	神奈川県会長	12	中国	荊尾俊	島根県理事長
4	副理事長	上田俊次	大阪理事長	13	四国	井手盛章	愛媛県理事長
5	副理事長	粥川昌	バレーボール部長	14	九州	高木三朗	熊本県理事長
6	北海道	西谷内隆幸	北海道理事長	15	専門部	水谷弘	陸上部長
7	東北	工藤徳美	青森県理事長	16	〃	上野二三一	サッカー部長
8	関東	横須賀正治	茨城県副理事長	17	〃	古賀通生	テニス部長
9	北信越	布施紀彦	長野県理事長	18	〃	西川廣	柔道部長

全国高校総体検討小委員会委員

No.	氏名	県名	No.	氏名	県名
1	河上一雄	全国会長	4	松尾光則	岩手県理事長
2	高田日呂美	全国理事長	5	松浦博實	静岡県理事長
3	粥川昌	バレーボール部長	6	井手盛章	愛媛県理事長

基本問題検討委員会委員

No.	ブロック	氏名	県名	No.	ブロック	氏名	県名
1	会長	河上一雄	全国会長	10	東海	松浦博實	静岡県理事長
2	理事長	高田日呂美	全国理事長	11	中国	屯倉紀正	岡山県理事長
3	副理事長	斎藤幸雄	神奈川県会長	12	四国	井手盛章	愛媛県理事長
4	副理事長	上田俊次	大阪府理事長	13	九州	高木三朗	熊本県理事長
5	副理事長	粥川昌	バレーボール部長	14	専門部	植田和行	水泳部長
6	北海道	西谷内隆幸	北海道理事長	15	〃	山川靖仁	フェンシング部長
7	東北	庄子利也	宮城県理事長	16	〃	荒井昭雄	ラグビー部長
8	関東	松本邦夫	群馬県理事長	17	〃	松本章二	卓球部長
9	北信越	西村昭夫	石川県理事長				

表彰審査委員会委員

No.	ブロック	氏名	県名	No.	ブロック	氏名	県名
1	会長	河上一雄	全国会長	4	関東	佐久間嘉宏	千葉県理事長
2	理事長	高田日呂美	全国理事長	5	関東	松本邦夫	群馬県理事長
3	副理事長	粥川昌	バレーボール部長	6	東海	都築義之	愛知県理事長

全国高校総体検討小委員会委員

No.	ブロック	氏名	県名	No.	ブロック	氏名	県名
1	会長	河上一雄	全国会長	4	関東	松本邦夫	群馬県理事長
2	理事長	高田日呂美	全国理事長	5	〃	城所富夫	神奈川県理事長
3	保健給食課長	佐藤恭信	東京都教育庁体育部	6	〃	久保正美	埼玉県理事長

経　理　委　員　会　委　員

No.	ブロック	氏　名	県　名	No.	ブロック	氏　名	県　名
1	会　長	河上一雄	全国会長	4	関　東	城所富夫	神奈川県理事長
2	理事長	高田日呂美	全国理事長	5	〃	久保正美	埼玉県理事長
3	関　東	松本邦夫	群馬県理事長				

全国高校総体検討小委員会委員

No.	ブロック	氏　名	県　名	No.	ブロック	氏　名	県　名
1	会　長	河上一雄	全国会長	6	北信越	西村昭夫	石川県理事長
2	理事長	高田日呂美	全国理事長	7	東　海	松浦博實	静岡県理事長
3	副理事長	上田俊次	大阪府理事長	8	専門部	水谷　弘	陸上部長
4	副理事長	粥川　昌	バレーボール部長	9	〃	松本章二	卓球部長
5	関　東	城所富夫	神奈川県理事長				

被表彰者一覧

本部・都道府県関係（S63～H10年度）

専門部・年度	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10
本　部	家弓　鐵矢・藤川		小田　逸人		内藤　隆	福田　満雄	金原　達人		岡本　裕之・後藤　安孝		久野　猛
北海道	青木　弘・梅津　幸敏	安井　友博	工藤　晃司	山下　克己		遠藤　隆			日野　嘉輝	浅野　喜圀	金子　盛夫
青　森		花田　陽悟		西村　敏弘・伊藤　勲一		奥寺　榮二		佐々木恒朗			下山　晃弘・宮崎　徹
岩　手	小原房之助		高橋　力・高橋　英雄		沖田岑夫・佐久間研二郎		山影　源吉・藤原　英輔			高橋　英雄	鈴木　浩
宮　城			斉藤　富二・佐藤記一郎			小沼　照之		鈴木　通弘	栗生　守男	川島　克	
秋　田	榊田　清	小林　誠悦			室田　弘	有江　和郎・京極　省			松本　健	小野寺　清	細谷　義次
山　形	国分　三昭	岩木　信孝	吉江　正夫		大内　正敏	五十嵐秀男	加藤　稔		小関　廣明		鈴木寛・佐藤通隆
福　島	小松原　穐・高橋　克道	折笠　常弘	関川　正道	早川　俊一	紺野　勇	齋藤　久				砂子田敦博	
茨　城		根本　喜弘・杉山昭一郎			岩崎　貞夫・菅又　正道			本橋　利美・小塚仁晃	松　廣義	坂本　忠夫	小澤　智
栃　木			徳田　有基		池田　收		鳥居　行雄	山野井　暉	荒川　伸夫	小堀　信夫	吉田　幸雄
群　馬		佐藤　賢一			海老原洋三	大須賀正臣		梅井　哲	海野　俊彦	栗原　貞夫	杉山　洋一
埼　玉		長谷川肇志・森　正博		鈴木　勲二		小畔　東		菅野　達也	小室駿一郎	渡邊修一郎	
千　葉			柏崎　旭	和泉　英雄	上野　正裕	伊井　正美			青木　寛	荒川　昇	
東　京					市川　三男						磯部　健次
神奈川		落合　寿		渡辺　栄一	鈴木　洋一	野畑　仁		進藤　隆博	下内　義光	実方　正	
山　梨	望月　政廣	中村　位・堀内和弘		根岸　昭	上野　敦男	跡部　義幸	坂本　久男	岡　保和		大澤　徹	宇野　耕二
新　潟	田中栄三郎			宮地　正樹		小泉　正			滝沢　強一	山中直樹	佐藤　義雄
富　山	松儀　薫・山本　政一		青塚　与市	福田　正義		大島　哲夫		高木　義則	並木　孝	守田　平	武田　孝志
石　川	南　典二・山野　明		斉藤　譲一		濱　徹朗	長柄　勝美		畑野　禎・山本　政一		安田　俊彦	
福　井		川端　一男・大島　哲夫	東　哲郎		竹村　光雄	松下幸三郎	村田　嘉孝		宇佐美賢俊・天谷　直樹		大野　勉
長　野	高橋　重造・渡辺　伊八			小林　仁・高角　千明	竹内　長生				藤沢　愛儀・山浦　正孝	海沼　清美	
岐　阜	杉山　道昭	近藤　普潤		田中　猛	浅野　三郎	水崎　明	高橋　伸郎	渡辺　重彦・福島　實司		宮崎　満彦・武藤　哲夫	本田　修也
静　岡	田口　一男・白井　三郎		望月　正		山崎　博昭	戸本　隆雄				永田　實治・山口　一三	
愛　知	佐藤敬治・木下匡弘・豊田昌弘		高井　龍三・浦野　誠		飯田　幸彦	白井　正己		吉田　武	舘　肇	織田　晃・中野　百子	浅野　滋夫
三　重	小林十美生・工門智生		古山　博典		岩下紀久雄		橋本　久・笠井　裕敬		城　秀一		近藤　和也
滋　賀		田村　耕造	太田　邦夫	橋高　章・寺村　新悦		川端　弘		東　勝祐	清水與八郎		福井　貢
京　都		城戸　秀夫・岡本　忠行		増田　潔		前田　勉			吉本　勉		山本世志男
大　阪	松下　邦夫・高橋　實	白銀　茂夫			林田　昭喜・横瓜　静夫		小久保昇治	樫本　照夫・神内　隆司			渡邊　文一・前田　嘉昭
兵　庫	大西　邦夫		谷口啓二郎				桂　廣保		伊藤　正廣		阪本　勝彦
奈　良			奥田　悦夫	吉田　公也		岡本　均	岡本　皓・北村宗生	吉井　弘侑			山本　勝
和歌山	九鬼　貴男・古谷　多市		菅谷　茂		岡本　勝		阿部　健男	前田　良嚴・笠原修二朗		中　公之	
鳥　取		小谷　英一		松田　信穂			山田　廉・宮部紀佐雄			足立　猛・佐々木政圖	
島　根		飯田　光・飯塚　孝	稲村　榮一	佐々木季治・井山　克弘		高橋　肇				岩成　秀彦・小西　益之	
岡　山	中山　重義		大西　富男	吉田　五平			桜木　繁男・中野　靖英	古市　誠祠	古河　正道	馬場　克彦	森下　弘志
広　島	伊藤　秀樹			種村　重明・吉田　善紀	岡田　孝章	松尾　慎之・東　昌弘		脇　康治	田平　一晄	松田　義成	
山　口		白松　勇人・岡村　義昭		前田　勇四			今橋　靖刀			島津　宗隆	
徳　島	久保駿三郎	森　勝	須見　敬二	平尾　隆信			津田　一弘	筒井　豊祐	居上　雅美	大津　靖弘・原田　久	加藤　千明
香　川			山口　寮弋		杉岡　保之		堤　仁	益田　勉		松橋　佽秋	
愛　媛		大澤　哲			石丸　博	田中　國雄		國田　利明		野澤　善浩	
高　知	前田　多聞				山岡　友重	沖野　吉克	秦泉寺　明			中平　勝也	
福　岡	田畑　淳二		永吉　博義		合原　正登・花田　年弘	吉田　秀男			舩津　正明・梅野　哲雄		原野　雅
佐　賀		田中　邦秀・大久保義高	三浦　英夫		畠山　忠郎・相浦　實	荒巻甲子郎		宮原　照明・木原　昇	山田　満男		宮原　照明・猿崎　正光
長　崎	本多　守	田中　重正		野田　憲佑	松尾　修三			大河内邦昭・竹山　廣		長池　良昭・松本　剛	
熊　本		大竹　和之・中村　昭男			後藤　良陽・白土　長幹			星子　孝之	池松　典彦		工木　武雄
大　分	志賀　清己・安藤　隆	古賀　文敏	池邊　明文		山本　清次・横島　幹郎	岩田　満之		濱本　俊夫		糸永　隆章	福山　一夫
宮　崎	高山　義孝・坂本　平			松田　義信		松井　利一	飛松　義久		山口賢一・内山孝徳		中田　忠・後藤　敏郎
鹿児島	今村　博美・田之上市雄			瀬口　紀穂		松山　良弘	竹之内　宏	堀之北重孝		會田　彰	西川　達也
沖　縄		照屋　寛哲	平良　親徳			金城　昭七	嘉手川繁二	仲村　春憲	與那嶺良栄		金城永真・南　正二
小　計	42	34	28	28	37	34	26	34	32	39	37

専門部関係（S63～H10年度）

専門部・年度	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10
陸上	小田島哲哉・依田良春			森茂			山本明		坂本清治		阿久津巖
体操						新井澄夫	平岡宏峯	久保貴裕		田口四郎・田中武彦	
水泳		縄田研吾			長野昭夫					津田孝男	川端理功
バスケットボール	宇田川博光		徳永一芳・坂上季男		石井弘司・金子久男・阿部昭二		金森久			北村透	町口俊一
バレーボール				阿久津正之		南嘉栄		甲斐次郎・久長一善		大橋克巳・竹内定雄	
卓球			酒見泰介					後藤淳		吉崎久治	
ソフトテニス			網中正昭		西塔克美			伊野二彦	伊藤幸雄	堀田壽一	
ハンドボール	伊藤和夫・日野博	三浦公	佐野和夫			須藤健児・金原至	岡村久	佐分正典		住尾勉	
サッカー			加藤三郎			清水眞事	鈴木勇作		三澤好章		高田久行・松本好市
ラグビー		堤治美				角田進・小沢直道					石丸克巳
バドミントン		森田精一					南直治		遠井稔男	大世古吉弘	鈴木祐司
ソフトボール			竹内吉治		増田正史	伊藤達也・河野裕充・山本善昭		大黒賢時	高橋清生		
相撲		高松松之介		竹内英夫		越智柾友		村岡満蔵			
柔道						加藤秀雄					石光孝彦
スキー	清水國通	松澤徳雄	石塚達也	渡辺誠三			笹岡道夫・林孟彦・飯沼惇		芝崎正之・清水明佳・井之川将男	林清	川島正彬
スケート	太田昌光		工藤鉄弥	沼館健二	町田正義		泉為人	岩見秋夫		山崎猛	松崎徹
漕艇	佐藤恒雄・竹内隆	塩野谷等	柳健治					小川洋一			
剣道	加藤淳二		太田實			山崎興一				矢鳴章司	岡村忠典
レスリング						加藤昭		馬塲利宗		家島啓二	
弓道			山下真	斎藤節朗							
テニス	古川溥							山本宗五郎		関沢敏美・若菜伊奈緒	
登山	渡辺勝		国沢鎮雄		片岡匡三	山口強・津田昭二			足達敏則		
自転車		土屋益夫・伊東光二	氷田正男			鳥居彦之					増田英二
ボクシング							一ノ瀬博	佐藤貞二		水澤研一	市野川實
ホッケー		井上信太郎・佐野八郎		成田幸昌				田村一成	猪俣健	高橋修一	
ウエイトリフティング	平川義美・寺本繁次		西村文雄		小川一郎	濱名言實			石平快三		
ヨット									澄田秀夫		
フェンシング				長尾正男・村上謹司		大澤文男・稲村隆郎	小久保敦央			佐部成男	
空手道						金井秀一			谷澤一雄・秋野治夫		
アーチェリー			里見達人								
なぎなた								向窪督		安尾宏一郎・田中紘人	
研究				京増敏朗	深澤孟雄			菅野清		小林惺	松本泰昌
定通制	市川重尚		元和臣		鈴木淑雄				池永武昭	向原敬騎	
小計	15	11	17	10	11	20	11	16	15	23	14
合計	57	45	45	38	48	54	37	50	47	62	51

全国高等学校体育連盟
規　程　集

1998

全国高等学校体育連盟

全国高等学校体育連盟規約

第1章名称及び事務所

第1条　本連盟を全国高等学校体育連盟と称する。

第2条　本連盟の事務局を東京都千代田区永田町2－16－2
（星陵会館内）におく。

第2章目的

第3条本連盟は高等学校における体育の健全な発達を図ることを目的とする。

第3章事業

第4条　本連盟は第3条の目的達成のため次の事業を行う。

1．高等学校体育に関する審議会の開催

2．高等学校生徒の諸体育大会の開催

3．高等学校体育に関する調査研究

4．高等学校スポーツの国際交流

5．体育諸団体との連絡

6．その他本連盟の目的達成に必要な事項

第4章組織

第5条　本連盟は都道府県高等学校体育連盟をもって組織する。
なお、都道府県高等学校体育連盟は地域ごとにブロック高等学校体育連盟を組織することができる。

第6条　本連盟に次の競技の専門部をおく。その細則は別にこれを定める。
陸上、体操、水泳、バスケットボール、バレーボール、卓球、ソフトテニス
ハンドボール、サッカー、ラグビー、バドミントン、ソフトボール、相撲、
柔道、スキー、スケート、漕艇、剣道、レスリング、弓道、テニス、登山、
自転車、ボクシング、ホッケー、ウエイトリフティング、ヨット、フェンシング、
空手道、アーチェリー、なぎなた

第5章役員

第7条　本連盟に次の役員をおく。

1．会長1名　　2．副会長若干名　　3．理事長1名

4．副理事長若干名　　5．理事若干名　(内常務理事若干名)

6．監事2名　　7．顧問若干名　　8．専門部委員若干名

第8条　会長、副会長は理事会において推薦する。

会長は本会を代表し会務を総轄する。

副会長は会長を補佐し会長事故あるときは職務を代行する。

第9条　理事は各都道府県高等学校体育連盟より選出された3名及び本連盟専門部長をもってこれに当てる。なお会長は理事会の議を経て理事を委嘱することができる。理事は本連盟の会務の審議執行に当る。

第10条　理事長、副理事長は理事これを互選する。常務理事は理事会の議を経て会長これを委嘱する。但し、都道府県高等学校体育連盟の各地にわたることを要する。

理事長、副理事長、常務理事は会務の処理に当る。

第11条　監事は理事会において推薦し会長これを委嘱する。監事は会計を監査する。

第12条　顧問は理事会において推薦し会長これを委嘱する。顧問は重要事項に関し会長の諮問に応ずる。

第13条　専門部長は会長これを委嘱する。専門部長は当該部の事務を処理する。

第14条　役員の任期は2カ年とする。ただし重任を妨げない。

補欠によって就任した役員の任期は前任者の残任期間とする。

第6章会議

第15条　理事会は会長これを招集し、予算、決算、事業その他重要事項を審議決定する。

監事は理事会に出席し、意見を述べることが出来る。

第16条　理事会の招集を待てない緊急な事項が生じたときは、常務理事会が代行し、次の理事会に報告する。

常務理事会は会長これを招集する。

第17条　会長は会務の運営上必要に応じ、加盟する都道府県高等学校体育連盟会長及び専門部長を招集することができる。

第18条　理事会及び常務理事会は総員の2分の1以上の出席がなければ開くことが出来ない。ただし委任状は認める。会長は理事会の議長となり、また常務理事会の議長ともなる。

第7章会計

第19条　本連盟の経費は各都道府県高等学校体育連盟の負担金、寄附金その他の収入をもってこれに充てる。

第20条　本連盟の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第21条　予算は常務理事会これを編成し、理事会の承認を得る。決算は監事の監査を得て理事会の承認を得なければならない。

第8章事務局

第22条　本連盟に事務局をおく。事務局の規則はこれを別に定める。

第9章附則

第23条　本連盟加盟校は本連盟主催または後援する以外の全国大会には本連盟の承認を得なければ出場することが出来ない。

第24条　本規約は理事会の議決によらなければ変更することが出来ない。

昭和23年6月施行する。

昭和58年5月25日一部改正

昭和63年5月25日一部改正（アーチェリー部加盟）

平成元年5月26日一部改正

平成4年11月6日一部改正（なぎなた部加盟）

全国高等学校総合体育大会
中央委員会規程

第1章名称

第1条　この会は全国高等学校総合体育大会中央委員会（以下、委員会という）と称する。

第2章目的

第2条　この委員会は全国高等学校体育連盟（以下本連盟という）の事業のうち、全国高等学校総合体育大会の企画ならびに運営に関する事項を審議し、その事務を処理する。

第3章組織

第3条　この委員会は次の委員をもって構成する。但し、必要に応じ臨時委員をおくことができる。

1）本連盟専門部より各1名（部長または部長指名のもの）

2）本連盟9地域より各2名（地域推薦）

3）本連盟の会長、副会長（若干名）、理事長、副理事長

4）学識経験者（会長指名）

第4章役員

第4条　この委員会に次の役員を置く。

1）委員長1名

2）副委員長1名

3）常任委員若干名

第5条　委員長は本連盟会長がこれにあたる。

第6条　副委員長は会長の指名による。常任委員は委員会の互選による。第7条役員の職務は次の通りとする。

第7条　役員の職務は次の通りとする。

1）委員長はこの会を代表し、会務を統轄する。

2）副委員長は委員長を補佐し、委員長事故あるときはその職務を代行する。

3）常任委員は委員長の指示に従い、常務を執行する。

第8条　委員会の委員および役員の任期は1ヵ年とする。但し重任を妨げない。補欠によって就任した役員の任期は前任者の残任期間とする。

第5章会議

第9条　委員会は、委員長が招集して議長になる。

第10条　委員会は第2条の目的に従って重要項目を審議決定し、本連盟理事会の承認を受ける。

第11条　委員会は委員総数の過半数が出席しなければ開会することが出来ない。

第12条　緊急事項で委員会に附議することが出来ないときは常任委員会が代行し、次の委員会に報告し承認をうける。常任委員会は委員長が招集する。

昭和38年4月1日より施行する。

全国高等学校総合体育大会
検討委員会規定

（総　　則）

第１条　全国高等学校体育連盟規約第３条に基づいて、この委員会を設ける。第２条委員会は全国高等学校総合体育大会検討委員会と称する。（以下委員会と称する。）

（目　　的）

第３条　委員会は全国高等学校総合体育大会の基本方針にについて審議し、立案することを目的とする。

（構　　成）

第４条　委員会は全国高等学校体育連盟理事より選出された委員をもって構成する。
委員は各地域より１名、専門部より若干名、会長指名若干名とする。

（委員長及び委員）

第５条　委員会の委員は会長が委嘱し、理事会に報告する。

第６条　委員長は委員の互選による。委員長は委員会を統括し、委員会の会務を処理する。

第７条　委員長に事故あるときは、委員長の指名した委員がその職務を代行する。

（任　　期）

第８条　委員の任期は理事の任期に準ずるものとする。

（会　　議）

第９条　会議は委員長が招集し、その議長となる。委員会は随時開催するものとする。

第10条　委員会の決定事項は中央委員会及び理事会に報告する。

（本規定の変更）

第11条　本規程の変更は理事会の承認を得なければならない。

（附　　則）

第12条　本規定は昭和54年５月30日より発効する。

全国高等学校総合体育大会開催基準要項

1．総　　則

全国高等学校総合体育大会（以下「大会」という。）を開催し、運営するためにこの基準要項を定める。

2．目　　的

大会は、高等学校教育の一環として高等学校生徒に広くスポーツ実践の機会を与え、技能の向上とスポーツ精神の高揚を図り、心身ともに健全な高等学校生徒を育成するとともに、高等学校生徒の相互の親睦を図ろうとするものである。

3．主　　催

大会の主催は、全国高等学校体育連盟（以下「本連盟」という。）開催地都道府県・同教育委員会および関係競技種目別全国統轄団体とする。

各競技会については、会場地市町村・同教育委員会を含めたものとする。

4．後　　援

（1）大会の後援は、文部省・日本体育協会・日本放送協会とする。

（2）競技別大会の後援は、上記（1）の他に開催地都道府県体育協会及び開催会場地体育協会を加えることができる。

5．主　　管

競技種目別大会の主管は、本連盟競技専門部・開催地都道府県高等学校体育連盟及び関係の都道府県競技種目別団体とする。

6．協　　賛

大会に協賛する団体、企業等は別に定める本連盟の大会協賛に関する申し合せ事項に基づき大会協賛に加えることができる。

7．大会開催の順序と地域区分

（1）大会は毎年開催し、開催の順序は下記のとおりとする。

（2）大会は夏季・冬季の各季別に分けて開催する。

（3）夏季大会の開催は原則として本連盟の定める次の地域内とする。
ただし、冬季大会は二地域以上で開催することができる。

（4）大会は東、中及び西の地域内の順序で開催し、地域内においても小地域の輪番を原則とする。

（5）東、中及び西の地域並びにブロックの区分は、次表のとおりとする。ただし、冬季大会については適用しない。

地　域	ブロック	都道府県名
東	北海道	北海道
	東　北	青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島
	関　東	茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・山梨
中	北信越	新潟・富山・石川・福井・長野
	東　海	岐阜・静岡・愛知・三重
	近　畿	滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山
西	中　国	鳥取・島根・岡山・広島・山口
	四　国	徳島・香川・愛媛・高知
	九　州	福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄

8．大会開催申請書の提出について

（1）大会の開催を希望する都道府県高等学校体育連盟は、ブロック内の各都道府県高等学校体育連盟と緊密な連絡調整を図り、都道府県高等学校体育連盟と開催地都道府県教育委員会とが連署のうえ、本連盟あて申請書を提出する。

（2）開催申請書の提出は、夏季大会・冬季大会とも大会開催年度の4年前の4月1日から6月30日までの間とする。

（3）開催申請書の様式及び添付書類は、別に定める。

（4）開催申請書の提出方法について、上記（1）項によることができない場合は、本連盟として審議し対処する。

9．大会開催地の決定

（1）本連盟は、前項の申請などに基づいて全国高等学校総合体育大会中央委員会（以下「中央委員会」という。）で審査し、大会開催地を内定及び決定し本連盟理事会の承認を受ける。

（2）大会開催地並びに実施競技種目とその会場地の内定は、大会開催年度の4年前、決定は3年前の6月30日までとする。

（3）大会開催地を内定及び決定した都道府県が、不慮の災害などで開催不可能となった場合は、その都度中央委員会で審議決定し本連盟理事会の承認を得るものとする。

10. 大会の開催時期及び期間

（1）夏季大会は8月中、冬季大会は12月から2月までの間を原則とする。

（2）各競技種目別大会の期間は4日以内とする。ただし、トーナメント競技ならびに選手の健康管理上などの理由で、4日をこえる場合は、中央委員会の承認を得なければならない。

11. 大会の内容

（1）競技は次のとおりとする。

（ア）夏季大会（28競技）

陸上競技・体操・水泳・バスケットボール・バレーボール・卓球・ソフトテニス・ハンドボール・サッカー・バドミントン・ソフトボール・相撲・柔道・漕艇・剣道・レスリング・弓道・テニス・登山・自転車競技・ボクシング・ホッケー・ウエイトリフティング・ヨット・フェンシング・空手道・アーチェリー・なぎなた

（イ）冬季大会（4競技）

スキー・スケート・駅伝競走・ラグビー

（2）各競技種目は学校対抗戦を原則とするが、個人戦も実施することができる。

（3）各競技種目の参加人数は、大会期間中に競技が終了することを限度として中央委員会で決定する。

（4）大会期間中に各種研究集会、協議会、表彰式などを行う場合は中央委員会の承認を得なければならない。

12. 大会参加資格

（1）選手は、学校教育法第1条に規定する高等学校に在籍する生徒であること。

（2）選手は、都道府県高等学校体育連盟に加盟している生徒で、当該競技要項により全国大会参加の資格を得たものに限る。

（3）ア．年齢は大会開催年度の４月２日現在で、１９歳未満のものとする。
ただし、出場は同一競技３回までとし、同一学年での出場は１回限りとする。
イ．特例として、この第３号アに定める年齢制限について、中国残留日本人孤児及びその子女については撤廃する。

（4）チームの編成において全日制課程・定時制課程・通信制課程の生徒による混成は認めない。

（5）統廃合の対象となる学校については、当該校を含む合同チームによる大会参加を認める。

（6）転校後６ケ月未満のものは参加を認めない（外国人留学生もこれに準ずる）ただし、一家転住などやむを得ない場合は、各都道府県高等学校体育連盟会長の認可があればこの限りでない。

（7）出場する選手はあらかじめ健康診断を受け、在学する学校の校長及び所属する高体連会長の承認を必要とする。

（8）参加資格の特例
ア、上記(1)(2)に定める生徒以外で、当該競技要項により大会参加資格を満たすと判断され、都道府県高等学校体育連盟が推薦した生徒について、別途に定める規定に従い大会参加を認める。
イ、上記(3) アのただし書きについては、学年の区分を設けない課程に在籍する生徒の出場は、同一競技３回限りとする。

［大会参加資格の別途に定める規定］

１、学校教育法第８２条の２、８３条の学校に在籍し、都道府県高等学校体育連盟の大会に参加を認められた生徒であること。

２、以下の条件を具備すること。

（1）大会参加資格を認める条件
ア、全国高等学校体育連盟の目的及び永年にわたる活動を理解し、それを尊重すること。
イ、参加を希望する専修学校及び各種学校にあっては、学齢、修業年限ともに高等学校と一致していること。また、連携校の生徒による混成は認めない。
ウ、各学校にあっては、都道府県高等学校体育連盟の予選会から出場が認められ、全国大会への出場条件が満たされていること。

エ、各学校にあっては、部活動が教育活動の一環として、日常継続的に責任ある顧問教員の指導のもとに適切に行われており、活動時間等が高等学校に比べて著しく均衡を失していず、運営が適切であること。

（2）大会参加に際し守るべき条件

ア、全国高等学校総合体育大会開催基準要項を遵守し、競技種目大会申し合わせ事項等に従うとともに、大会の円滑な運営に協力すること。

イ、大会参加に際しては、責任ある教員が引率するとともに、万一の事故の発生に備えて傷害保険に加入しておくなど、万全の事故対策を講じておくこと。

ウ、大会開催に要する経費については、応分の負担をすること。

13. 大会役員

別に定める基準表による。

14. 大会標章

（1）大会の標章は、昭和２４年に制定された本連盟標章を使用するものとする。

（2）標章は、本連盟の許可なくしてみだりに商品、商業広告、宣伝等に利用してはならない。

（3）標章に関しては、「本連盟マーク使用規程」による。

15. 競技の運営

各競技の運営は、本連盟各競技専門部と各競技別全国統轄団体及び開催地実行委員会とが、密接な連絡をとりながらこれにあたる。

16. 実行委員会

（1）開催地都道府県は大会のために実行委員会を設置する。

（2）実行委員会の規程には、次の内容を明記する。

ア．名称イ．目的ウ．組織エ．役員オ．管掌内容カ．経理方法キ．その他必要な事項

（3）実行委員会は、事務局を設ける。

（4）実行委員会は、次の事項について中央委員会の承認を得なければならない。

ア．実行委員会規程と実行委員会役員

イ．大会運営の予算及び決算

ウ．競技施設の計画

エ．式典の方法

オ．宿泊料金

カ．参加章及びポスターの図案

キ．高体連マークの使用について

ク．報告書の作成

ケ．その他中央委員会で必要と認める事項

（5）会場地市町村の実行委員会は、開催地都道府県が必要と認める場合は設置することができる。

17. 各競技種目の実施要項

（1）大会で実施する競技種目については、本連盟各専門部と開催地実行委員会が協議し、実施要項案を作成し夏季・冬季大会とも、前年度の１０月までに中央委員会に提出する。

（2）各競技種目の実施要項に記載する内容は次のとおりとする。作成にあたっては、別に定める実施要項基準に定める。

ア．実施期日　イ．会場　ウ．競技規程と方法　エ．参加資格

オ．参加制限　カ．申込み方法　キ．参加料　ク．表彰

ケ．宿　泊　コ．その他必要な事項

（3）各競技種目の実施要項及び申込み用紙は夏季大会については、４月２０日冬季大会については、１０月１日までに開催地都道府県実行委員会より、各都道府県高等学校体育連盟事務局宛に送付する。

18. 参加申込み

（1）都道府県大会、または地域大会において選抜または選考されたものについて、都道府県高等学校体育連盟会長は当該校長と連署して所定の様式により定められた期限までに、開催地実行委員会宛に都道府県高等学校体育連盟会長の責任のもとに申込むものとする。上記以外の申込みは認めない。

（2）申込み期限は中央委員会で決めるが、原則として開催日の４週間前とする。

（3）申込みの詳細については、各競技種目の要項の記載に従う。

（4）上記の申込み期限を過ぎた場合は参加できない。

19. 大会参加料

（1）大会参加者は参加料を納入する。

（2）参加料の額は中央委員会で決定する。

（3）参加料は会場地実行委員会に納入する。

（4）参加料は大会の競技種目別大会運営費にあてる。

20. 大会参加章

（1）参加章は大会に参加した大会役員、競技役員、運営役員及び補助員と都道府県選手団本部役員、選手、監督、及び報道員並びに会場地実行委員会が必要と認めたものに支給する。

（2）参加章は大会参加を証するもので、総合開会式を除くすべての競技会場に入場することができる。ただし会場の都合により入場を制限されることがある。

（3）参加章の意匠は毎年新しくし、各競技同一とする。ただし、冬季競技についてはこの限りでない。

（4）参加章の意匠は中央委員会で決定し、開催地実行委員会が作成する。

21. 大会の式典

（1）夏季大会の総合開会式は原則として陸上競技場で行い、各競技種目の参加を原則とする。ただし、遠隔のため参加が困難と認められた場合は別にそれぞれの会場で各競技種目ごとに開会式を行うことができる。冬季大会の開会式は各会場で行う。

（2）夏季大会の総合開会式に参加した競技種目が、特に必要と認める場合は別に各競技種目ごとの開会式を行うことができる。

（3）閉会式は原則として、それぞれの各競技種目ごとの競技会場で行う。

22. 表　　彰

各競技とも、上位入賞者に大会々長より賞状及びメダルを授与する。団体優勝校には、本連盟会長杯及び文部大臣杯を授与する。各競技種目ごとの入賞数は、各競技別の実施要項に定める。

23. プログラム

（1）プログラムは競技種目別プログラムとする。

（2）各競技種目別大会プログラムには、商業広告を掲載することができる。掲載した広

告料の収入は会場地実行委員会が収受する。

（3）プログラムは有料で頒布することを原則とする。ただし、次については無料とする。

ア．競技別競技団体　（関係種目のみ）5部

イ．競技役員　（関係種目のみ）1部

ウ．都道府県選手団本部　（全競技種目 ）2部

エ．競技種目別都道府県代表総監督、監督　（関係種目のみ）1部

オ．参加校各校につき（団体）　（関係種目のみ）2部

カ．報道関係者申込み数の1/4部ただし単独競技取材社　（関係種目のみ）1部

キ．本連盟　（全競技種目 ）6部

24. 都道府県選手団本部役員編成

（1）都道府県選手団本部役員の編成は、各都道府県高等学校体育連盟が次の基準により編成する。

ア．夏季大会は団長、副団長、総監督、総務合わせて１０名以内

イ．冬季大会は団長、副団長、総監督、総務合わせて5　名以内

（2）都道府県選手団本部役員の参加申込みは、開催地実行委員会事務局に申込まなければならない。

25. 大会の経費

大会の準備ならびに運営のための経費は国庫補助金、開催地都道府県補助金、会場地市町村補助金、本連盟負担金、助成金、参加料、入場料、寄附金、協賛金等でまかなう。

26. 宿　　泊

（1）都道府県、本部役員、選手、監督及び大会役員、競技役員及び報道員の宿舎は、開催地実行委員会が準備し配宿する。

（2）競技種目別参加者の宿舎はなるべく実施会場に近い周辺に選定する。

（3）宿舎は旅館を原則とするが、寮、寺院、民家等を利用することができる。（4）1人の宿泊に要する広さは、少なくとも消防法の定める限度を下回ってはいけない。

（5）宿泊料金は開催地都道府県実行委員会が予め旅館組合と協定したものについて、大会開催の前年に中央委員会で決定する。

（6）宿泊の申込みについては、所定の様式により都道府県高等学校体育連盟会長の責任のもとに期日までに申込むこと。

（7）宿泊申込み人数については、エントリーした選手、監督以外の申込みをしてはならない。

27. 交　通

開催地都道府県実行委員会は、できる限り大会参加者の参集及び競技会場への必要な交通上の便宜を計るものとする。

28. 報　道

（1）報道員の範囲は新聞社、雑誌社、ラジオ、テレビ、ニュース映画社の所属社員で日本新聞協会、雑誌協会、写真記者協会、ニュース映画記者協会にそれぞれ加入しているもの及び主催者が許可したものに限る。

（2）報道員に開催地都道府県実行委員会で作成した腕章を貸与し、その腕章によって各会場に入場し取材することができる。各会場では指定された場所で取材しなければならない。

（3）放送に関しては日本放送協会との協定による。

全国高等学校総合体育大会大会役員編成基準表

	文部省	日本体育協会	全国高体連	開催県		県高体連	県体育協会	県競技別団体	開催地実行委員会	NHK
名誉会長		会長								
名誉副会長				知事						
会長			会長							
副会長			副会長			会長				
名誉顧問	文部大臣									会長
顧問	文部政務次官	副会長	顧問	県議会議長	教育委員長	顧問	会長	会長	市(町)長	放送総局長
	文部事務次官	理事	全国高校長協会会長	副知事	教育長	顧問			市(町)議会議長	放送事業局長
	初等中等教育局長	事務局長			出納長					報道局担当局長
	体育局長	各競技団体会長								
	体育局主任体育官	各競技団体理事長								
参与	高等学校課長	スポーツ振興部長	都道府県会長	関係部長	体育主管課長	副会長	副会長		市(町)教育委員長	事業部長
	体育課長	国体課長	監事	実行委員会事務局長					市(町)教育長	スポーツ報道センター部長
	生涯スポーツ課長									主開催地放送局長
	競技スポーツ課長									
	体育官									
大会委員長			理事長							
大会副委員長			副理事長			理事長				
委員			事務局長	実行委員会委員			専門部長	理事長	理事長	
			専門部長							
			中央委員会委員							
			都道府県理事長							

平成10年10月現在

全国高等学校総合体育大会大会役員編成基準表

	文部省	日本体育協会	全国高体連	開催県		県高体連	県体育協会	県競技別団体	開催地実行委員会	NHK
名誉会長		会長								
名誉副会長				知事						
会長			会長							
副会長			副会長			会長				
名誉顧問	文部大臣					会長				
顧問	文部政務次官	副会長	顧問	県議会議長	教育委員長	顧問	会長	会長	市（町）長	放送総局長
	文部事務次官	理事	全国高校長協会会長	副知事	教育長		顧問		市(町)議会議長	放送事業局長
	初等中等教育局長	事務局長		出納長						報道局担当局長
	体育局長	各競技団体会長								
	大臣官房審議官(体育局)	各競技団体理事長								
参与	高等学校課長	スポーツ振興部長	都道府県会長	関係部長	体育主管課長	副会長	副会長		市(町)教育委員長	放送事業局事業部長
	体育課長	国体課長	監事	実行委員会事務局長					市(町)教育長	スポーツ報道センター部長
	生涯スポーツ課長									主開催地放送局長
	競技スポーツ課長									
	体育官									
大会委員長			理事長							
大会副委員長			副理事長			理事長				
委員			事務局長	実行委員会委員		専門部長	理事長	理事長		
			専門部長							
			中央委員会委員							
			都道府県理事長							

全国高等学校体育連盟
基本問題検討委員会規定

（総　　則）

第１条　　全国高等学校体育連盟規約第３条に基づいて、この委員会を設ける。

第２条　　委員会は全国高等学校体育連盟基本問題検討委員会と称する。（以下委員会と称する。）

（目　　的）

第３条　　委員会は全国高等学校体育連盟（以下本連盟と称する）の運営について、その基本方針、その他重要事項を審議し、立案することを目的とする。

（構　　成）

第４条　　委員会は本連盟理事の中より選出された者をもって構成される。委員は各地域より１名、専門部より若干名、会長指名若干名とする。

（委員長及び委員）

第５条　　委員会の委員は会長が委嘱し、理事会に報告する。

第６条　　委員長は委員の互選による。委員長は委員会を統括し、委員会の会務を処理する。

第７条　　委員長に事故あるときは、委員長の指名した委員がその職務を代行する。

（任　　期）

第８条　　委員の任期は理事の任期に準ずるものとする。

（会　　議）

第９条　　会議は委員長が招集し、その議長となる。委員会は随時開催するものとする。

第10条　　委員会の決定事項は理事会に報告する。

（本規定の変更）

第11条　　本規定の変更は理事会の承認を得なければならない。

（附　　則）

第12条　　本規定は昭和５４年５月３０日より発効する。

全国高等学校体育連盟
基本問題検討小委員会規約

第1章　名称および事務局

第1条　本会は、全国高等学校体育連盟基本問題検討小委員会と称する。

第2条　本会事務局を、全国高等学校体育連盟事務局内におく。

第2章　目　　的

第3条　本会は、全国高等学校体育連盟基本問題検討委員会から委託された諸問題の整理、検討および諸資料の提供を目的とする。

第3章　組　　織

第4条　本会は、全国高等学校体育連盟会長が委嘱したものをもって組織する。

第4章　役　　員

第5条　本会に、次の役員をおく。

委員長1名

副委員長1名

委員若干名

第6条　委員長・副委員長は、全国高等学校体育連盟会長が委嘱する。委員長は本会を代表し、会務を総括する。

副委員長は委員長を補佐し、委員長に事故ある時はその職務を代行する。

第7条　役員の任期は1ケ年とし、重任を妨げない。

第5章　会　　議

第8条　本会は、必要に応じ随時召集し、開催する。

第9条　本会の検討事項は、次の基本問題検討委員会に報告する。

第10条　本会は、会長が召集する。

第6章　付　　則

第11条　この規約は、平成4年12月15日より施行する。

全国高等学校体育連盟表彰規定

第１条　全国高等学校体育連盟（以下「全国高体連」と称する。）では全国高等学校の体育・スポーツの普及振興に功績があった者等に対し表彰を行う。
表彰に関する規定は、下記の通りとし、その該当者を表彰する。

第２条　前条に定める表彰の候補者は、次の各号から推薦するものとする。
（１）全国高体連会長・理事長
（２）都道府県高体連会長・理事長
（３）全国高体連専門部長
（４）その他特に功績のあった者

第３条　表彰者の選考は表彰審査委員会が行い、常務理事会を経て、理事会の承認を得るものとする。

第４条　表彰は、理事会または全国高体連加盟団体長会において行なう。

第５条　本規定表彰候補者推薦のための内規は別に定める。

第６条　経費は全国高体連一般会計より支出する。

附　則　本規定は、昭和５６年４月１日より施行する。
昭和５９年１１月１６日一部改正する。
平成３年５月１０日一部改正する。

全国高等学校体育連盟表彰規定内規

本内規は、表彰規定第６条により定めるもので、推薦にあたる者は次の方法で選考し推薦するものとする。ただし、重複表彰はしない。

１、次に該当する役員が退任の際は表彰するものとする。

（１）全国高体連会長・理事長

（２）都道府県会長・理事長

（３）全国高体連専門部長

（４）その他特に功績のあった者

２、推薦者は各県高体連会長、専門部は各専門部長とする。

３、事務手続きは以下の通りとする。

（１）推薦書は毎年、４月中旬・１０月中旬までに全国高体連事務局宛て提出する。

（２）推薦書の様式は次の通りとする。

全国高等学校体育連盟表彰候補者推薦書

１、表彰候補者

氏　　名

生年月日　　年　　月　　日　（　　才）

現住所

ＴＥＬ　　（　　）

転退職後の勤務先

ＴＥＬ　　（　　）

２、推薦理由

役 職 名

役職期間　　年　　月 ～　　年　　月（　　年間）

理　　由

３、表彰該当理由

規定　第２条 ― （　　）

４、推薦者

氏　　名　　印

職　　名

勤 務 先

ＴＥＬ　　（　　）

５、記載責任者　　印

全国高体連表彰規定申し送り事項

○現職（在任中）は表彰しない。

○年度をさかのぼっての表彰はしない。

○県内役員は表彰しない。

○ふさわしくない行為のあった者は表彰申請があっても表彰しない。

○都道府県高体連理事長は１年間では表彰しない。

その他特に功績のあった者

１、全国役員を１０年以上を審査対象とする。（８年以上を目安とする）

２、役員の場合、統括の委員長、副部長で部長に近く功績のあった者。

３、統括の委員長歴、副部長歴に常任委員（ブロック代表）歴を加算することができる。

４、強化委員や普及指導員および専門部事務局長は除く。

平成５年１０月一部変更（２、３）

全国高等学校体育連盟傷病見舞金規程

（趣　　旨）

第１条　この規程は、全国高等学校総合体育大会開催の趣旨にもとづき、選手・引率責任者（監督・コーチ）・大会役員・競技役員の競技にかかわる傷病見舞金（以下「見舞金」という。）に関することを定める。

（事 務 局）

第２条　この見舞金を取り扱う事務局は、全国高等学校体育連盟事務局内におく。

（目　　的）

第３条　この見舞金は全国高等学校総合体育大会の大会期間中におきた傷病に対しておくるものとする。

（見 舞 金）

第４条　この見舞金の経費は、各都道府県負担金の収入をもってあてる。第５条見舞金の額は、第７条の規程による傷病見舞金審査会（以下「審査会」という。）において審査する。その基準は次の通りとする。

１．傷病見舞金

治療に３ケ月以上を要するもの６０万円以内

２．廃疾見舞金１００万円

３．死亡弔慰金１００万円

（請求手続）

第６条　見舞金を請求するときは、別紙様式による傷病等報告書に医師の診断書等を添え、全国高等学校体育連盟会長に提出しなければならない。

（審　　査）

第７条　傷病等報告書の内容の適否を審査し、見舞金額を査定するため、次の各号に定めるところにより審査会を設ける。

１）審査会の構成は次のとおりとする。

審査委員長１名

審査委員若干名（医師を含む）

２）審査委員長、委員は全国高等学校体育連盟会長が、委嘱し任期は１年とする。

３）審査委員長は審査会を代表し、審査会を招集し、議長となり会務を総轄する。

４）審査会の運営に必要な事項は別に定める。

(会　　計)

第8条　この見舞金の会計は、特別会計とする。

第9条　この見舞金の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第10条　この見舞金の会計は、全国高等学校体育連盟監事の監査を受け、理事会の承認を得るものとする。

(規程の変更)

第11条　この見舞金規程の変更には、全国高等学校体育連盟理事会の承認を必要とする。

附　則　1．この規程は昭和49年7月1日より施行する。

2．一部改正については、昭和55年7月1日より施行する。

全国高等学校体育連盟傷病見舞金審査会運営規程

第１条　この審査会は必要に応じ、委員長が招集し、議長となる。

２．委員長が事故あるときは、委員長の指名する委員がその職務を行う。

第２条　審査会は委員の半数以上の出席がなければ、審査会及び見舞金の決定をすることはできない。

第３条　審査会の議事については、会議録を作成しなければならない。

２．前項会議には、その都度、議長及び委員１名が署名しなければならない。

第４条　審査会の決定事項については、全国高等学校体育連盟（以下「全国高体連」という。）理事会に報告しなければならない。

第５条　審査会の費用は、全国高体連一般会計より支出する。

第６条　この規程に定めるもののほか、審査会に必要な事項は、委員会が全国高体連会長と協議して定める。

この規程は昭和４９年７月１日より施行する。

傷病見舞金審査基準に関する申し合わせ事項

平成３年３月６日審査会において内藤理事長提案を全委員で了承したものである。

１、あくまでも見舞金であることから、治療内容にこだわらないことにする。

２、見舞金の算定に当たっては

入院１日につき４，０００円（家族見舞金）

通院１日につき１，０００円（交通費）

を目安として算出し、上限は規定の範囲内とする。

３、見舞金の給付申請の中に入院日数及び通院日数を記入してもらうことにする。

４、治療が長期にわたるものであっても、見舞金であることから再度給付することはしない。

５、申請をし、審査の結果、見舞給付の対象にならないケースの場合でも診断書手数料などを支出していることを考慮し、１万円位の見舞金を給付する。

※平成３年３月６日より施行する。

全国高等学校体育連盟
弔慰規程

第１条　全国高等学校体育連盟（以下本連盟と称する）では、弔慰に関する規程を下記の通り定め、その該当者に対し弔慰を表する。

第２条　この規程は、本連盟の普及振興に功績のあった者が死亡した場合に贈る。

第３条　前条で定める該当者には、花輪代または弔慰金および弔電をおくる。

第４条　この規程に定める以外で、会長が特に必要と認めた場合は弔電の意を表することができる。この場合、事後理事会で報告する。

第５条　経費は本連盟一般会計より支出する。

附　則　本規程は、昭和５６年４月１日より施行する。

全国高等学校体育連盟
専門部規程

第1章　総　　則

第1条　この専門部規程は、全国高等学校体育連盟（以下本連盟という）規約第6条により、この規程を定める。

第2章　目　　的

第2条　この専門部は都道府県高等学校体育連盟専門部（以下各都道府県高体連という）を統轄し、関係競技団体と提携し、その健全な普及発展を図ることを目的とする。

第3章　事　　業

第3条　専門部は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1）競技の指導、奨励

2）競技会の主管

3）研修会の主管

4）その他専門部の目的達成に必要な事項

第4章　組　　織

第4条　この専門部は、各都道府県高体連をもって組織する。

第5章　役　　員

第5条　各専門部には、次の役員をおく。

1）部長

2）副部長若干名

3）その他、各専門部の必要に応じて役員をおくことができる。

2．役員については、学校教育法第50条第1項に規定する校長・教頭・教諭の職にあるものがあたる。

第6章　会　　議

第6条　各専門部は必要に応じて会議を開催し、専門部の運営に関することがらについて審議する。ただし、重要事項については、本連盟へ報告し、必要に応じて理事会の承認を得るものとする。

第7章　加　　盟

第7条　本連盟に加盟しようとする団体は、本連盟会長宛てに下記の書類を提出し、本連盟理事会の承認を得なければならない。

1）加盟申し込み書

2）規約

3）役員の名簿・活動人員・学校名簿

附　則

この規程は、昭和５５年１１月２１日発効する。

昭和６０年5月２９日第1次改訂

※申し送り事項

全国高体連へ加盟しようとする団体の目安は、都道府県高体連に専門部が３０県あって（加盟して）なお、実際に活動しているのが４０都道府県あるものとする。

全国高等学校体育連盟研究部規約

第一章　名称及び事務局

第１条　本部は、全国高等学校体育連盟研究部と称する。

第２条　本部の事務局を関東高等学校体育連盟事務局当番県におく。

第二章　目　　的

第３条　本部は高等学校教育活動の一環として、全国高等学校体育連盟の目的を達成するため、高等学校の部活動に関する調査ならびに科学的研究を行い、高等学校体育・スポーツの発展に寄与することを目的とする。

第三章　事　　業

第４条　本部は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

１）全国研究大会の主管

２）各種審議会の開催

３）調査研究の指導、奨励

４）その他本部の目的達成に必要な事項

第四章　組　　織

第５条　本部は都道府県高等学校体育連盟研究部を以って組織する。

なお、都道府県高等学校体育連盟研究部は、地域毎に連合体を組織することができる。

第五章　委　　員

第６条　委員は都道府県高等学校体育連盟の研究部長及び同委員長をあてる。

第六章　役　　員

第７条　本部に下記の役員をおく。

１）部長１名

２）副部長若干名

３）常任委員９名

４）監事２名

第８条　部長及び副部長は、本部の委員の中より選出する。部長は本部を代表し会務を総轄する。副部長は部長を補佐し、部長事故あるときはその職務を代行する。第９条常任委員は、委員の中より各ブロック１名ずつ選出する。

第10条　監事は委員会において推薦し、部長はこれを委嘱する。監事は会計を監査し委員会に報告する。

第11条　役員の任期は２カ年とし、再任を妨げない。補欠によって就任した役員の任期は残任期間とする。

第七章　会　　議

第12条　委員会は委員をもって構成し、年１回全国研究大会開催時に部長が招集し必要事項を審議決定する。

第13条　常任委員会は役員をもって構成する。常任委員会は部長が招集し、必要事項を審議する。なお緊急事項が生じた場合は常任委員会で審議決定し執行する。執行については、委員会に報告しなければならない。

第14条　委員会及び常任委員会は、総数の２分の１以上（委任状を含む）の出席をもって成立する。審議については出席者の過半数をもって議決する。

第八章　会　　計

第15条　本部の経費は、負担金、寄附金等の収入によってこれにあてる。

第16条　本部の会計は毎年４月１日にはじまり、翌年３月３１日におわる。

附　則

第17条　本規約は、委員会の過半数の議決を得なければ変更することができない。

第18条　本部の役員の選出は、全国高等学校体育連盟研究部規約内規による。

第19条　本規約は、昭和５８年１１月１８日より施行する。

昭和６２年１１月１１日第１次改訂

平成６年１０月２５日第２次改正

全国高等学校体育連盟研究部規約内規

1．部長関東高等学校体育連盟事務局当番県より選出する。

2．副部長全国高等学校体育連盟研究大会開催地（前年度・本年度・来年度）より選出する。

3．監事関東高等学校体育連盟事務局当番県の次期及びその次の県の委員があたる。

4．常任委員各ブロック代表者があたる。

5．欠員の部分については補充を行う。

全国高等学校体育連盟
研究大会開催基準要項

1．総　　則

全国高等学校体育連盟研究大会（以下「研究大会」という。）を開催し運営するためこの基準を定める。

2．目　　的

研究大会は、全国高等学校体育連盟に加盟する各都道府県高等学校体育・スポーツ指導者が日頃の研究の成果を発表する機会を設け、又当面する問題について情報交換の場と科学的研究を行い学校教育の一環として高等学校体育・スポーツの発展に寄与しようとするものである。

3．主　　催

研究大会の主催は全国高等学校体育連盟（以下「本連盟」という。）開催都道府県・同教育委員会とする。又会場地が市町村の場合は会場地市町村・同教育委員会を含めることができる。

4．後援及び主管

（1）研究大会の後援は文部省とする。

（2）研究大会の主管は全国高等学校体育連盟研究部及び開催都道府県高等学校体育連盟とする。

5．研究大会開催、地域区分と順序

（1）研究大会は、毎年開催し開催の順序は下記のとおりとする。

（2）研究大会は、東・中・西の地域内の順序で開催する。地域内においては小地域と連絡を十分にとり調整する。

（3）東・中及び西の地域並びにブロックの区分は、次表のとおりとする

区　分

地域	ブロック	都　道　府　県
	北海道	北海道
東	東　北	青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島
	関　東	茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・山梨
	北信越	新潟・富山・石川・福井・長野
中	東　海	岐阜・静岡・愛知・三重
	近　畿	滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山
	中　国	鳥取・島根・岡山・広島・山口
西	四　国	徳島・香川・愛媛・高知
	九　州	福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄

6．研究大会開催の申請

（1）研究大会の開催を希望する都道府県高等学校体育連盟は、同一地域内の都道府県高等学校体育連盟と緊密な連絡調整をはかり、都道府県高等学校体育連盟会長名で、本連盟あて申請する。

（2）申請書は、研究大会開催年度の2年前の春季理事会までに提出し、理事会において催地を決定する。

7．研究大会開催の期間

（1）研究大会は、毎年2月に開催する。但し開催県の事情により変更することもできる。その場合は、事前に理事会の承認をうけるものとする。

（2）研究大会の日数は2日をこえないことを原則とする。

8．大会の規模と内容

研究大会は全体会、分科会とする。その内容については、開催県で十分検討し理事会へ提案する。

但し研究主題については、別に定める。

9．研究大会の参加者

研究大会には、各都道府県高等学校体育連盟加盟校の教職員でクラブ、部活動、対外競技、体育的学校行事等の指導運営にあたるもので、当該都道府県高等学校体育連盟より推薦をうけたものとする。

10．研究大会参加料

（1）研究大会参加者は参加料を納入する。

（2）参加料の額については理事会で決める。

（3）参加料は研究大会の大会運営費にあてる。

11．参加申込み

研究大会参加申込みについては、都道府県高体連を通じて別紙様式によって参加料を添えて必ず申込むこと。

12．宿泊について

（1）宿泊の斡旋を希望するものは、別紙様式により都道府県単位で開催県へ申込むものとする。

（2）宿泊料金1人円

13．日　　程

2日間の中で全体会、分科会を開催する。

14．経　　費

研究大会の準備並びに運営のための経費については、開催都道府県補助金もしくは市町村補助金、全国高体連負担金、助成金、参加料寄附金をもってあてる。

15．附　　則

本要項は昭和58年度11月18日より発効する。

全国高等学校体育連盟研究大会
役員基準表

会　　長　全国高体連会長

副 会 長　全国高体連副会長開催都道府県高体連会長

名誉顧問　知事教育長開催地市長村長
　　開催都道府県教育長

顧　　問　開催都道府県教育委員長開催市町村教育委員長
　　開催都道府県体育協会会長

参　　与　全国高体連理事長都道府県高体連会長
　　開催都道府県教育委員会各課長
　　開催市町村教育委員会各課長
　　開催都道府県高体連副会長

委 員 長　全国高体連研究部長

副委員長　全国高体連副理事長全国高体連研究部副部長
　　全国高体連研究部事務局長開催都道府県高体連理事長

委　　員　全国高体連事務局長都道府県高体連理事長
　　全国高体連研究部常任委員開催都道府県高体連副理事長
　　開催都道府県高体連研究部委員長

高等学校競技者の在り方
全国高等学校体育連盟

高等学校における体育・スポーツ活動は、学校教育の一貫として実践されるものである。

したがって、その活動はアマチュア・スポーツマン精神に則り実践されなければならない。

全国高等学校体育連盟は、競技者の保護と健全な体育・スポーツ活動の推進を図るため、高等学校競技者の在り方を次のように定める。

1．高等学校生徒としての本文を守りフェアプレイの精神に徹する。
2．スポーツ活動をとおして自己研鑽に努める。
3．競技規則はもとより社会生活におけるルールを遵守する。
4．スポーツをとおしてお互いの友情を深めるとともに奉仕活動にも参加する。
5．スポーツを行うことによって物質的利益を受けない。
6．スポーツによって得た名声を利用しない。

特に上記の第5項、第6項については、次の事項を遵守すること。

1．大会参加により授与される賞金、高価な賞品を受領することはしない。
2．企業等から入社契約金若しくはこれに準ずるものの前渡し、その他金品の支給、貸与を受け又はその他の物質的利益を受けることはしない。
3．各種大会に参加するための旅費その他の経費を、当該校関係又は大会主催者以外から受領することはしない。
4．自分の氏名、写真、競技実績を広告等に使用することはしない。ただし、全国高等学校体育連盟が認めた場合を除く。

昭和63年5月25日より施行する。

全国高等学校体育連盟
「マーク」委員会規程

（目　　的）

第１条　この委員会は全国高等学校体育連盟「マーク」（以下「高体連マーク」と称する。）を管理するために設置する。

（業　　務）

第２条　この委員会は「高体連マーク」を管理するために次の業務を行う。

(1) 高体連マークを「全国高体連及び加盟専門部」「ブロック高体連及び加盟専門部」「都道府県高体連及び加盟専門部」が団体の標章および主管する大会の標章として使用されるよう指導を行う。

(2) 以外の使用について審議する。

(3) その他高体連マークに関すること。

（理事会の承認）

第３条　前項の業務を行うにさいし、あらかじめ理事会の承認を得なければならない。

（委員の選任）

第４条　この委員会の委員は会長が理事会にはかり、理事の中から指名する。

（委員の任期）

第５条　この委員の任期は２年とする。但し重任を妨げない。

（記　　録）

第６条　この委員会は「高体連マーク」の使用可否を審議した経緯を記録して保管する。

附　則　この規程は、昭和５５年１１月２１日より発効する。

全国高等学校体育連盟
「マーク」使用規程

（趣　　旨）

1．この規程は、全国高等学校体育連盟「マーク」（以下「高体連マーク」と称する。）委員会規程により、マークの使用に関し、必要事項を定めた規程とする。

（委　　託）

2．委員会規程第２条第１項についての使用は、それぞれの長の責任に於て施行するものとする。

（使用許可申請）

3．高体連マークの使用にあたっては、全国高体連会長に使用許可申請書（様式１）を提出し許可を受けるものとする。

ただし報道機関が報道を目的として使用する場合はこの限りでない。

（許可基準）

4．高体連マーク使用にあたっては下記の基準による。

(1) 高体連マークの使用にあたっては下記の基準による。

(2) 公序良俗に反して使用してはならない。

(3) 高体連マークの使用は良識を持って使用しなければならない。

（許可書の交付）

5．会長が第３項による使用許可申請書を受理したときは、委員会に於て審査し、適当と認めたものに対しては理事会にはかり、使用許可書（様式２）を交付する。

（仕様書等の提出）

6．申請者は許可書の交付を受けたとき、速やかにその使用内容を明記した仕様書・原稿・レイアウト等を会長あてに提出するものとする。

（許可条件の変更）

7．高体連マーク許可書の交付を受けた者が、許可条件を変更するときは、あらためて会長あて申請書を提出し、許可を受けるものとする。

（許可の取消）

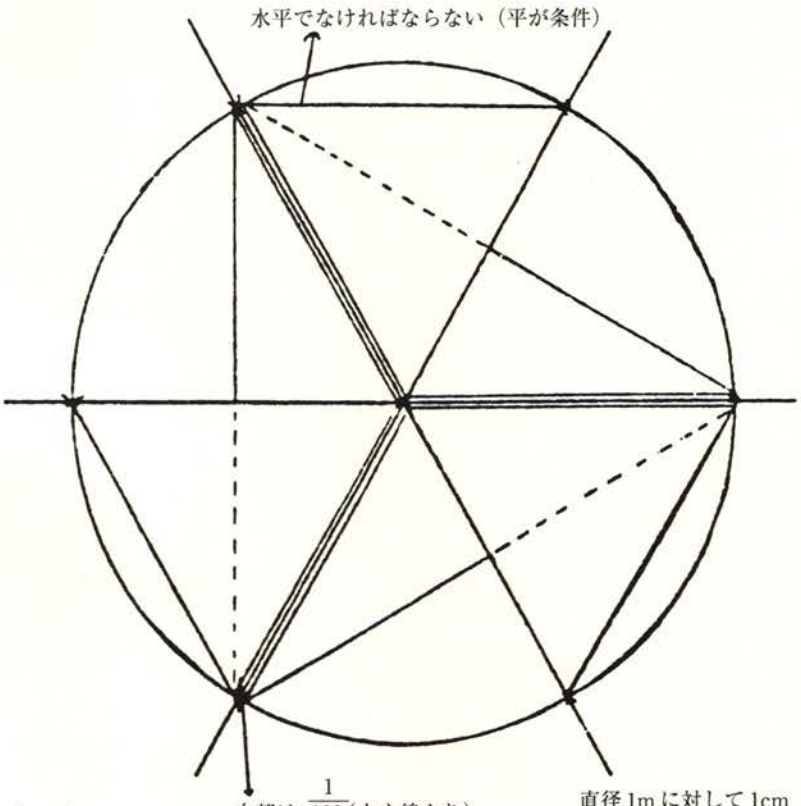
8．会長は申請者が高体連マーク使用許可条件に違反したと認められたときはその許可を取り消すことができる。

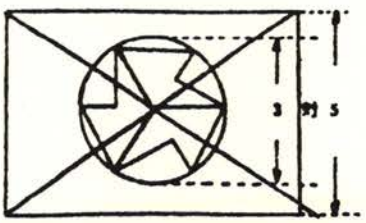
また無許可使用の場合は理事会にはかり、処理をする。

（その他）

9．この規程に定めるほか、高体連マーク使用の取り扱いについて、必要と認める場合は、会長が処理する。

図　　面





（様式１）

平成　　年　　月　　日

全国高等学校体育連盟
会長　　殿

住　所
申請者　名　称
代表者　　印

高体連マーク使用許可申請書

高体連マークを下記のように使用したいので許可下さるよう申請いたします。

記

１．使用対象物件
２．使用目的
３．使用方法
４．使用期間
５．業者名
６．その他

（様式２）

発　　番
平成　　年　　月　　日

殿

全国高等学校体育連盟
会長　　印

高体連マーク使用許可書

平成　年　月　日付で申請のあった高体連マークの使用について、下記条件　　で許可する。

記

１．使用対象物件
２．使用目的
３．使用方法
４．使用期間
５．その他
６．使用上守るべき事項

（様式３）

平成　　年　　月　　日

全国高等学校体育連盟
会長　　殿

住　所
申請者　名　称
代表者　　印

高体連マーク使用事項変更許可申請書

平成　　年　　月　　日付第　　号により許可された事項について、下記の　とおり変更したいので許可されたく申請致します。

記

１．変更事項

２．変更理由

（様式４）

発　　番
平成　　年　　月　　日

殿

全国高等学校体育連盟
会長　　印

高体連マーク使用事項変更許可書

平成　年　月　日付で申請のあった高体連マークの使用事項の変更について　下記の条件を付して許可します。

記

１．高体連マークの尊厳を傷つけないこと。
２．公序良俗に反して使用してはならない。
３．高体連マークの使用は良識をもって使用しなければならない。
４．その他の規定に違反してはならない。

広域通信制高等学校の高体連加盟登録についての申し合わせ

1. 高体連に加盟登録をしたいとする広域通信制高等学校（以下広域高校）は、所在地の都道府県高体連に加盟登録をする。

2. 高体連に加盟登録をした広域高校が、日常的、集団的に教育活動を連携して行っている教育施設（以下連携校）を、それぞれ単独で高体連に加盟させたい場合は、学校長は、連携校所在地の高体連会長あて連携校代表者との連盟で加盟を申請する。

   この場合、登録名称は、＊＊＊高校（広域高等学校名）○○○（地方名又は、連携校略名称）とする。

3. 都道府県高体連会長は、広域高校連携校を＊＊＊高校○○○として加盟認定後は、都道府県内の高体連活動において、連携校代表者を学校長の代理として扱うことができる。

4. 大会の引率者については、広域高校専任職員が当たることを原則とするが、連携校専任職員で、広域高校講師等の資格を有し、学校長より運動部顧問として認定された者が当たってもよい。

5. 大会に参加しようとする生徒は、当該大会の要項に定める参加資格の要件を満たしていなければならない。

6. 高体連登録に関する分担金等の額は、各都道府県高体連の定めによる。

7. 全国大会、ブロック大会等への生徒の参加は、すべて広域高校長の責任においてなされるものとする。

8. 生徒のユニフォーム等の校名の表記については、高校名を中心に表し、連携校名等の表記は、従的に表す。

9. 連携校に所属しない遠隔地の生徒については、本校所在地高体連に属するものとする。

新規加盟の基準

1. 都道府県高体連への加盟が30あり、40都道府県以上の活動がある。(昭和57年秋季理事会承認)

2. 上部団体組織がある。(協会・連盟)

3. 学校体育として適当であり、普及性がある。
   (クラブ活動として認められている)

4. 大会運営の規模(経費、参加人数等)

5. 大会の経過

全国高等学校総合体育大会協賛に関する規定

1、目　　的

全国高等学校総合体育大会（以下全国高校総体と言う）に協賛を申し出た企業又は団体は（以下団体と言う）から協賛を受け、全国高校総体（総合開会式及び開催各競技種目を含む）の開催に必要な経費の一部に充当し、大会運営の一層の充実を図るために活用する。

2、協賛団体の選定

全国高体連の設立の趣旨を十分に理解し、教育活動の一環として全国高校総体が開催されていることから、これを協賛するにふさわしい団体であることが要求される。

協賛を申し出た団体については、総体検討委員会において3社程度を選考し、中央委員会において選定する。

3、協賛の内容及び条件

(1) 協賛金等の額と支払方法

協賛金は、協賛する年度の全国高校総体に対して￥200,000,000とする。

支払方法は、契約時に協賛金の1／3を、開催年の9月に残額を支払う。

(2) 協賛のメリット

日本体育協会加盟の各競技団体の協定と、開催地の条例及び会場等の使用許可条件を尊重し、協賛メリットを与える。ここに示されていない事項については、全国高体連と協議してここに定める。

（ア）印刷物（広告掲載あるいは社名、製品名等の記載）

・総合開会式プログラム／入場券
・大会ポスター
・競技別プログラム（表紙裏、裏表紙・裏）
・大会ガイドブック
・総合案内パンフレット
・報道のしおり
・大会パンフレット
・テレフォンガイドブック

・大会告知ポスター

・テレフォンカードホルダー

・開催要項書

・競技別ポスター（新設）

・募集ポスター（スローガン、ポスター、シンボルマーク、大会関係作詞・作曲など）

・報告書

（イ）看板類（トレードマークあるいは社名等の掲示）

・開会式場内スタジアム看板及び入場ゲート看板

・開会式場内歓迎看板／歓迎塔看板／アーチ／案内看板

・開会式会場周辺案内看板

・競技別会場内看板／スタジアム看板

・競技場外看板／アーチ

・会場案内看板及び周辺案内の看板

・大会告知看板／横断幕／たれ幕

（ウ）制作物類（制作費は協賛社負担）

・うちわ

・チューリップハット

・のぼり

・ビニール製手提げ袋

・ビニール製着替え袋

・土産物用歓迎袋

・クッション

・Tシャツ等着衣類

（エ）土産物類（提供物は協賛社負担）

・地元名産品（非協賛社対象）

・製品

・観光ガイドブック（非協賛社対象）

・スクイズボトル（協賛団体別）

・名札

・シューズ入れ

（オ）製品無料提供（サンプリング）

協賛団体のものに限る。この場合、無料提供する製品に全国高校総体に協賛している旨の字句使用は許される。

（カ）製品優先販売権

売店許可条件の範囲で優先的に認められるが、地元産業との調整を図り、円満に業務が遂行できるように配慮する。

（キ）シンボルマークの優先使用権

所定の使用手続きを経て、優先しようが認められる。

（ク）新聞、テレビ等のマスメディアへの広告出稿

「私たちは平成○年全国高校総体を応援しています」

「平成○年全国高校総体を成功させよう」などの広告出稿は許される。

4、契　約

・協賛の契約

協賛団体との契約は、全国高体連会長と協賛団体との間で、契約書を取り交わして行う。契約は、開催年度の２年前の４月を目途とし、契約の期間は原則として２年間とし、再契約することができる。

5、協賛団体連絡会の設置

協賛に関する事業を、公平にかつ円滑に推進するために、協賛する団体の代表者と全国高体連事務局担当者とで連絡会を設置し、開催都道府県実行委員会との連携のもとで、協賛事業の連絡調整に当たる。

6、協賛金等の使途及び配分方法

協賛金については、その１０％を総合開会式に、６０％を各競技別運営費に、２０％を協賛団体に欠員を生じた際の備蓄財源に積み立て残り１０％を全国高体連の組織強化並びに協賛に関する事務経費等に充てる。

協賛金のうち、各競技別配分額については、総体検討委員会において、前年度の運営費や開催地の事情等も勘案した配分案を作成し、中央委員会の議を経て、理事会の承認を受ける。

また、全国高体連会長は、協賛団体との契約が成立した時点で、協賛金の配分予定額を当該実行委員会に通知し、開催年度の１０月に協賛金を送付する。

7、付　則

(1)　本規定を改正する場合は、中央委員会の議を経て理事会の承認を必要とする。

(2)　本規定は、平成3年5月24日より施行する。

創立50周年記念事業協賛者芳名

都道府県芳名協賛者

北海道高等学校体育連盟

〒007-0810　札幌市東区東苗穂10条1－2－21
道立札幌東陵高校内
TEL　011（792）2060
FAX　011（792）2060

北海道高等学校体育連盟会　長　作田　昌明
北海道高等学校体育連盟副会長　浅利　　徹
北海道高等学校体育連盟副会長　大室　雄治
北海道高等学校体育連盟副会長　前東　　昭
北海道高等学校体育連盟理事長　西谷内隆幸
北海道高等学校体育連盟副理事長　武田　憲政
北海道高等学校体育連盟陸上競技専門部
北海道高等学校体育連盟体操専門部
北海道高等学校体育連盟水泳専門部
北海道高等学校体育連盟バスケットボール専門部
北海道高等学校体育連盟バレーボール専門部
北海道高等学校体育連盟卓球専門部
北海道高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
北海道高等学校体育連盟ハンドボール専門部
北海道高等学校体育連盟サッカー専門部
北海道高等学校体育連盟ラグビー専門部
北海道高等学校体育連盟バドミントン専門部
北海道高等学校体育連盟ソフトボール専門部
北海道高等学校体育連盟相撲専門部
北海道高等学校体育連盟柔道専門部
北海道高等学校体育連盟スキー専門部
北海道高等学校体育連盟スケート専門部
北海道高等学校体育連盟漕艇専門部
北海道高等学校体育連盟剣道専門部
北海道高等学校体育連盟レスリング専門部
北海道高等学校体育連盟弓道専門部
北海道高等学校体育連盟テニス専門部
北海道高等学校体育連盟登山専門部
北海道高等学校体育連盟自転車競技専門部
北海道高等学校体育連盟ボクシング専門部
北海道高等学校体育連盟ホッケー専門部
北海道高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
北海道高等学校体育連盟ヨット専門部
北海道高等学校体育連盟フェンシング専門部
北海道高等学校体育連盟空手道専門部
北海道高等学校体育連盟アーチェリー専門部
北海道高等学校体育連盟少林寺拳法門部
北海道高等学校体育連盟研究部

青森県高等学校体育連盟

〒038-0042　青森市新城字平岡266－20
県立青森西高校内
TEL　0177（88）0511
FAX　0177（88）1600

青森県高等学校体育連盟会　長　小野　次郎
青森県高等学校体育連盟副会長　成田　清則
青森県高等学校体育連盟副会長　坂本　恒樹
青森県高等学校体育連盟副会長　伊藤　龍一
青森県高等学校体育連盟副会長　岩見　幸夫
青森県高等学校体育連盟副会長　花田　明彦
青森県高等学校体育連盟副会長　水木　厚美
青森県高等学校体育連盟副会長　角田詮二郎
青森県高等学校体育連盟理事長　工藤　徳美
宮城県高等学校体育連盟専務理事　佐々木孝之
青森県高等学校体育連盟陸上競技専門部
青森県高等学校体育連盟体操専門部
青森県高等学校体育連盟水泳専門部
青森県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
青森県高等学校体育連盟バレーボール専門部
青森県高等学校体育連盟卓球専門部
青森県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
青森県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
青森県高等学校体育連盟サッカー専門部
青森県高等学校体育連盟ラグビー専門部
青森県高等学校体育連盟バドミントン専門部
青森県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
青森県高等学校体育連盟相撲専門部
青森県高等学校体育連盟柔道専門部
青森県高等学校体育連盟スキー専門部
青森県高等学校体育連盟スケート専門部
青森県高等学校体育連盟漕艇専門部
青森県高等学校体育連盟剣道専門部
青森県高等学校体育連盟レスリング専門部
青森県高等学校体育連盟弓道専門部
青森県高等学校体育連盟テニス専門部
青森県高等学校体育連盟登山専門部
青森県高等学校体育連盟自転車競技専門部
青森県高等学校体育連盟ボクシング専門部
青森県高等学校体育連盟ホッケー専門部
青森県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
青森県高等学校体育連盟ヨット専門部
青森県高等学校体育連盟フェンシング専門部
青森県高等学校体育連盟空手道専門部
青森県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
青森県高等学校体育連盟なぎなた専門部
青森県高等学校体育連盟研究部

岩手県高等学校体育連盟

〒020-0114　盛岡市高松４－17－16
県立盛岡第三高校内
TEL　019（661）8115
FAX　019（662）9884

岩手県高等学校体育連盟会　長　長澤　佳彦
岩手県高等学校体育連盟副会長　原　久雄
岩手県高等学校体育連盟副会長　三浦　五郎
岩手県高等学校体育連盟副会長　小野寺哲汎
岩手県高等学校体育連盟理事長　松尾　光則
岩手県高等学校体育連盟事務局長　鷹觜　文昭
岩手県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
岩手県高等学校体育連盟サッカー専門部
岩手県高等学校体育連盟レスリング専門部
岩手県高等学校体育連盟柔道専門部
岩手県高等学校体育連盟卓球専門部
岩手県高等学校体育連盟ラグビー専門部
ストロングスポーツ（フェンシング専門部）

宮城県高等学校体育連盟

〒981-3132　仙台市泉区将監10－39－1
県立泉高校内
TEL　022（374）6674
FAX　022（374）0285

宮城県高等学校体育連盟会　長　高橋　郁夫
宮城県高等学校体育連盟副会長　小澤　仁邇
宮城県高等学校体育連盟副会長　武藤　俊男
宮城県高等学校体育連盟副会長　久保田　齊
宮城県高等学校体育連盟副会長　安藤　学
宮城県高等学校体育連盟副会長　鈴木　陸男
宮城県高等学校体育連盟理事長　庄子　利也
宮城県高等学校体育連盟副理事長　岩槻　芳夫
宮城県高等学校体育連盟副理事長　佐藤　彰
宮城県高等学校体育連盟陸上競技専門部
宮城県高等学校体育連盟体操専門部
宮城県高等学校体育連盟水泳専門部
宮城県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
宮城県高等学校体育連盟バレーボール専門部
宮城県高等学校体育連盟卓球専門部
宮城県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
宮城県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
宮城県高等学校体育連盟サッカー専門部
宮城県高等学校体育連盟ラグビー専門部
宮城県高等学校体育連盟バドミントン専門部
宮城県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
宮城県高等学校体育連盟相撲専門部
宮城県高等学校体育連盟柔道専門部
宮城県高等学校体育連盟スキー専門部
宮城県高等学校体育連盟スケート専門部
宮城県高等学校体育連盟漕艇専門部
宮城県高等学校体育連盟剣道専門部
宮城県高等学校体育連盟レスリング専門部
宮城県高等学校体育連盟弓道専門部
宮城県高等学校体育連盟テニス専門部
宮城県高等学校体育連盟登山専門部
宮城県高等学校体育連盟自転車競技専門部
宮城県高等学校体育連盟ボクシング専門部
宮城県高等学校体育連盟ホッケー専門部
宮城県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
宮城県高等学校体育連盟ヨット専門部
宮城県高等学校体育連盟フェンシング専門部
宮城県高等学校体育連盟空手道専門部
宮城県高等学校体育連盟なぎなた専門部
宮城県高等学校体育連盟研究部

秋田県高等学校体育連盟

〒010-0974　秋田市八橋運動公園１－５
県立スポーツ会館内
TEL　0188（66）5999
FAX　0188（66）6988

秋田県高等学校体育連盟会　長　高田屋敏夫
秋田県高等学校体育連盟副会長　仲澤　鋭蔵
秋田県高等学校体育連盟副会長　長澤　忠雄
秋田県高等学校体育連盟副会長　阿部　正紀
秋田県高等学校体育連盟副会長　佐々木久吾
秋田県高等学校体育連盟副会長　山崎　芳宏
秋田県高等学校体育連盟理事長　大塚　三男
秋田県高等学校体育連盟事務局長　千田　典夫
秋田県高等学校体育連盟陸上競技専門部
秋田県高等学校体育連盟体操専門部
秋田県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
秋田県高等学校体育連盟バレーボール専門部
秋田県高等学校体育連盟卓球専門部
秋田県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
秋田県高等学校体育連盟サッカー専門部
秋田県高等学校体育連盟ラグビー専門部
秋田県高等学校体育連盟バドミントン専門部
秋田県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
秋田県高等学校体育連盟相撲専門部
秋田県高等学校体育連盟剣道専門部
秋田県高等学校体育連盟柔道専門部
秋田県高等学校体育連盟弓道専門部
秋田県高等学校体育連盟漕艇専門部
秋田県高等学校体育連盟ボクシング専門部
秋田県高等学校体育連盟レスリング専門部
秋田県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
秋田県高等学校体育連盟フェンシング専門部
秋田県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
秋田県高等学校体育連盟テニス専門部
秋田県高等学校体育連盟自転車競技専門部
秋田県高等学校体育連盟登山専門部
秋田県高等学校体育連盟ホッケー専門部
秋田県高等学校体育連盟空手道専門部
秋田県高等学校体育連盟なぎなた専門部
秋田県高等学校体育連盟水泳専門部
秋田県高等学校体育連盟スキー専門部
秋田県高等学校体育連盟ヨット専門部
秋田県高等学校体育連盟馬術専門部
秋田県高等学校体育連盟研究部

山形県高等学校体育連盟

〒990-2492　山形市鉄砲町２－10－73
県立山形中央高校内
TEL　023（624）0929
FAX　023（634）6752

山形県高等学校体育連盟会　長　鈴木　正浩
山形県高等学校体育連盟副会長　石田　祐一
山形県高等学校体育連盟副会長　知野　弘
山形県高等学校体育連盟副会長　川村　勝夫
山形県高等学校体育連盟副会長　星野　武雄
山形県高等学校体育連盟副会長　小原　正隆
山形県高等学校体育連盟理事長　梶原　賢
山形県高等学校体育連盟事務局長　高橋　正治
中澤　健一（陸上競技専門部長）
川村　勝夫（体操専門部長）
後藤　廣志（水泳専門部長）
細谷　壽守（バスケットボール専門部長）
田口　健一（バレーボール専門部長）
佐々木幹男（卓球専門部長）
後藤　晋也（ソフトテニス専門部長）
遠藤　正友（ハンドボール専門部長）
井上　尚（サッカー専門部長）
高田　裕之（ラグビー専門部長）
岩井　貞善（バドミントン専門部長）
兼子　正克（ソフトボール専門部長）
相田　良一（相撲専門部長）
森　義矩（柔道専門部長）
山科　博（スキー専門部長）
原田　清廣（漕艇専門部長）
丹　勝彦（剣道専門部長）
庄司　昌弘（レスリング専門部長）
星野　武雄（弓道専門部長）
前田　博（テニス専門部長）
青木　桂（登山専門部長）
石田　祐一（自転車競技専門部長）
鈴木　勉（ボクシング専門部長）
平塚　紀男（ホッケー専門部長）
太田　孝之（ウエイトリフティング専門部長）
稲泉　真彦（ヨット専門部長）
巻　久（フェンシング専門部長）
鈴木喜久夫（空手道専門部長）
菊池　正明（アーチェリー専門部長）
安食　和彦（なぎなた専門部長）
菅原　文徳（カヌー専門部長）

福島県高等学校体育連盟

〒960-8002　福島市森合町５－72
県立福島高校内
TEL　024（531）3890
FAX　024（536）3004

福島県高等学校体育連盟会　長　高城　俊春
福島県高等学校体育連盟副会長　門馬修一郎
福島県高等学校体育連盟副会長　結城　勝夫
福島県高等学校体育連盟副会長　小野　孝雄
福島県高等学校体育連盟副会長　石河　強
福島県高等学校体育連盟副会長　永井　祥一
福島県高等学校体育連盟理事長　浅尾　晃左
福島県高等学校体育連盟副理事長　渡辺　正昭
福島県高等学校体育連盟事務局長　菅野　一治
福島県高等学校体育連盟陸上競技専門部
福島県高等学校体育連盟体操専門部
福島県高等学校体育連盟水泳専門部
福島県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
福島県高等学校体育連盟バレーボール専門部
福島県高等学校体育連盟卓球専門部
福島県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
福島県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
福島県高等学校体育連盟サッカー専門部
福島県高等学校体育連盟ラグビー専門部
福島県高等学校体育連盟バドミントン専門部
福島県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
福島県高等学校体育連盟相撲専門部
福島県高等学校体育連盟柔道専門部
福島県高等学校体育連盟スキー専門部
福島県高等学校体育連盟スケート専門部
福島県高等学校体育連盟漕艇専門部
福島県高等学校体育連盟剣道専門部
福島県高等学校体育連盟レスリング専門部
福島県高等学校体育連盟弓道専門部
福島県高等学校体育連盟テニス専門部
福島県高等学校体育連盟登山専門部
福島県高等学校体育連盟自転車競技専門部
福島県高等学校体育連盟ボクシング専門部
福島県高等学校体育連盟ホッケー専門部
福島県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
福島県高等学校体育連盟ヨット専門部
福島県高等学校体育連盟フェンシング専門部
福島県高等学校体育連盟空手道専門部
福島県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
福島県高等学校体育連盟なぎなた専門部
福島県高等学校体育連盟研究部

茨城県高等学校体育連盟

〒310-0045　水戸市新原２－11－１
堀原運動公園内
TEL　029（254）0855
FAX　029（254）0855

茨城県高等学校体育連盟会　長　高野　惣一
茨城県高等学校体育連盟副会長　小祝　仁晃
茨城県高等学校体育連盟副会長　大木　弘寿
茨城県高等学校体育連盟副会長　佐藤　剛
茨城県高等学校体育連盟副会長　篠塚　久
茨城県高等学校体育連盟副会長　菊池　隆
茨城県高等学校体育連盟副会長　荒川　汪
茨城県高等学校体育連盟理事長　田口　弥
茨城県高等学校体育連盟副理事長兼事務局長　横須賀正治
茨城県高等学校体育連盟副理事長　安蔵　貞夫
茨城県高等学校体育連盟副理事長　藤田　力雄
茨城県高等学校体育連盟副理事長　小圷　洋一
茨城県高等学校体育連盟陸上競技専門部
茨城県高等学校体育連盟体操専門部
茨城県高等学校体育連盟水泳専門部
茨城県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
茨城県高等学校体育連盟バレーボール専門部
茨城県高等学校体育連盟卓球専門部
茨城県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
茨城県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
茨城県高等学校体育連盟ラグビー専門部
茨城県高等学校体育連盟サッカー専門部
茨城県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
茨城県高等学校体育連盟柔道専門部
茨城県高等学校体育連盟剣道専門部
茨城県高等学校体育連盟相撲専門部
茨城県高等学校体育連盟軟式野球専門部
茨城県高等学校体育連盟レスリング専門部
茨城県高等学校体育連盟弓道専門部
茨城県高等学校体育連盟バドミントン専門部
茨城県高等学校体育連盟登山専門部
茨城県高等学校体育連盟ボクシング専門部
茨城県高等学校体育連盟ヨット専門部
茨城県高等学校体育連盟漕艇専門部
茨城県高等学校体育連盟自転車競技専門部
茨城県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
茨城県高等学校体育連盟ホッケー専門部
茨城県高等学校体育連盟テニス専門部
茨城県高等学校体育連盟フェンシング専門部
茨城県高等学校体育連盟空手道専門部
茨城県高等学校体育連盟馬術専門部
茨城県高等学校体育連盟スケート専門部
茨城県高等学校体育連盟ライフル射撃専門部
茨城県高等学校体育連盟なぎなた専門部
茨城県高等学校体育連盟スキー専門部
茨城県高等学校体育連盟少林寺拳法専門部
茨城県高等学校体育連盟アーチェリー専門部

栃木県高等学校体育連盟

〒320-0057　宇都宮市中戸祭１－６－３
スポーツ会館内
TEL　028（622）8660
FAX　028（622）7579

栃木県高等学校体育連盟会　長　神原　彰夫
栃木県高等学校体育連盟副会長　大森　俊雄
栃木県高等学校体育連盟副会長　須賀　　淳
栃木県高等学校体育連盟副会長　速水虎之助
栃木県高等学校体育連盟副会長　鈴木　良治
栃木県高等学校体育連盟副会長　寺内　正毅
栃木県高等学校体育連盟理事長　吉田　忠征
栃木県高等学校体育連盟副理事長　諏佐　　収
栃木県高等学校体育連盟副理事長　飯田　道彦
栃木県高等学校体育連盟副理事長　川井　　章
栃木県高等学校体育連盟陸上競技専門部
栃木県陸上競技協会　西前　一雄
株式会社イノマタ（陸上競技専門部）
栃木県高等学校体育連盟軟式野球専門部
栃木県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
栃木県高等学校体育連盟バレーボール専門部
栃木県高等学校体育連盟サッカー専門部
栃木県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
栃木県卓球連盟
栃木県相撲連盟
栃木県高等学校体育連盟体操専門部
栃木県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
栃木県水泳連盟
栃木県高等学校体育連盟スキー専門部
栃木県高等学校体育連盟スケート専門部
栃木県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
栃木県高等学校体育連盟ダンス専門部
栃木県ラグビーフットボール協会
栃木県高等学校体育連盟バドミントン専門部
栃木県高等学校体育連盟柔道専門部
栃木県高等学校体育連盟弓道専門部
栃木県高等学校体育連盟剣道専門部
栃木県高等学校体育連盟登山専門部
栃木県ウエイトリフティング協会
栃木県アマチュアボクシング連盟
栃木県レスリング協会
栃木県高等学校体育連盟自転車競技専門部
栃木県高等学校体育連盟テニス専門部
栃木県高等学校体育連盟フェンシング専門部
栃木県高等学校体育連盟ホッケー専門部
栃木県高等学校体育連盟空手道専門部
栃木県高等学校体育連盟なぎなた専門部
栃木県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
栃木県高等学校体育連盟ウォータースポーツ専門部
有限会社宮崎商店（ライフル射撃専門部）
津川商会
松本スポーツ服装店
株式会社アートプレス
株式会社グリーンメイト
東急観光（株）宇都宮支店

群馬県高等学校体育連盟

〒371-0805　前橋市南町４－35－１
県立前橋商業高校内
TEL　027（224）5046
FAX　027（221）9606

群馬県高等学校体育連盟会　長　中山　　傑
群馬県高等学校体育連盟副会長　田村　　功
群馬県高等学校体育連盟副会長　丸山　基紀
群馬県高等学校体育連盟副会長　小林　克茂
群馬県高等学校体育連盟副会長　大須賀正臣
群馬県高等学校体育連盟副会長　二宮　松寿
群馬県高等学校体育連盟理事長　松本　邦夫
群馬県高等学校体育連盟事務局長　林　　康宏
群馬県高等学校体育連盟陸上競技専門部
群馬県高等学校体育連盟体操専門部
群馬県高等学校体育連盟水泳専門部
群馬県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
群馬県高等学校体育連盟バレーボール専門部
群馬県高等学校体育連盟卓球専門部
群馬県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
群馬県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
群馬県高等学校体育連盟サッカー専門部
群馬県高等学校体育連盟ラグビー専門部
群馬県高等学校体育連盟バドミントン専門部
群馬県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
群馬県高等学校体育連盟相撲専門部
群馬県高等学校体育連盟柔道専門部
群馬県高等学校体育連盟スキー専門部
群馬県高等学校体育連盟スケート専門部
群馬県高等学校体育連盟漕艇専門部
群馬県高等学校体育連盟剣道専門部
群馬県高等学校体育連盟レスリング専門部
群馬県高等学校体育連盟弓道専門部
群馬県高等学校体育連盟テニス専門部
群馬県高等学校体育連盟登山専門部
群馬県高等学校体育連盟自転車競技専門部
群馬県高等学校体育連盟ボクシング専門部
群馬県高等学校体育連盟ホッケー専門部
群馬県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
群馬県高等学校体育連盟フェンシング専門部
群馬県高等学校体育連盟空手道専門部
群馬県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
群馬県高等学校体育連盟なぎなた専門部
群馬県なぎなた連盟
群馬県高等学校体育連盟定通制専門部
株式会社　オオタヤ

埼玉県高等学校体育連盟

〒336-0007　浦和市仲町３－５－８
県立武道館内
TEL　048（822）6792
FAX　048（822）0281

埼玉県高等学校体育連盟会　長　細田　信良
埼玉県高等学校体育連盟副会長　藤沼　貞夫
埼玉県高等学校体育連盟副会長　栗島　　裕
埼玉県高等学校体育連盟副会長　神山　英三
埼玉県高等学校体育連盟副会長　森　　正博
埼玉県高等学校体育連盟副会長　佐藤栄太郎
埼玉県高等学校体育連盟理事長　久保　正美
埼玉県高等学校体育連盟副理事長　関根　弘之
埼玉県高等学校体育連盟陸上競技専門部
埼玉県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
埼玉県高等学校体育連盟サッカー専門部
埼玉県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
埼玉県高等学校体育連盟卓球専門部
埼玉県高等学校体育連盟ラグビー専門部
埼玉県高等学校体育連盟漕艇専門部
埼玉県高等学校体育連盟柔道専門部
埼玉県高等学校体育連盟剣道専門部
埼玉県高等学校体育連盟体操専門部
埼玉県高等学校体育連盟水泳専門部
埼玉県高等学校体育連盟相撲専門部
埼玉県高等学校体育連盟バレーボール専門部
埼玉県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
埼玉県高等学校体育連盟バドミントン専門部
埼玉県高等学校体育連盟自転車競技専門部
埼玉県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
埼玉県高等学校体育連盟弓道専門部
埼玉県高等学校体育連盟テニス専門部
埼玉県高等学校体育連盟登山専門部
埼玉県高等学校体育連盟スケート専門部
埼玉県高等学校体育連盟レスリング専門部
埼玉県高等学校体育連盟ボクシング専門部
埼玉県高等学校体育連盟フェンシング専門部
埼玉県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
埼玉県高等学校体育連盟スキー専門部
埼玉県高等学校体育連盟ホッケー専門部
埼玉県高等学校体育連盟空手道専門部
埼玉県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
埼玉県高等学校体育連盟なぎなた専門部
埼玉県高等学校体育連盟研究部

千葉県高等学校体育連盟

〒263-0043　千葉市稲毛区小仲台5－10－1
県立千葉女子高校内
TEL　043（252）1691
FAX　043（252）1842

千葉県高等学校体育連盟会　長　佐藤　玉和
千葉県高等学校体育連盟副会長　伊藤　一郎
千葉県高等学校体育連盟副会長　佐野　暢俊
千葉県高等学校体育連盟副会長　青木　克己
千葉県高等学校体育連盟理事長　佐久間嘉宏
千葉県高等学校体育連盟副理事長　山﨑　成夫
千葉県高等学校体育連盟陸上競技専門部
千葉県高等学校体育連盟体操専門部
千葉県高等学校体育連盟水泳専門部
千葉県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
千葉県高等学校体育連盟バレーボール専門部
千葉県高等学校体育連盟卓球専門部
千葉県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
千葉県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
千葉県高等学校体育連盟サッカー専門部
千葉県高等学校体育連盟ラグビー専門部
千葉県高等学校体育連盟バドミントン専門部
千葉県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
千葉県高等学校体育連盟相撲専門部
千葉県高等学校体育連盟柔道専門部
千葉県高等学校体育連盟スキー専門部
千葉県高等学校体育連盟漕艇専門部
千葉県高等学校体育連盟剣道専門部
千葉県高等学校体育連盟レスリング専門部
千葉県高等学校体育連盟弓道専門部
千葉県高等学校体育連盟テニス専門部
千葉県高等学校体育連盟登山専門部
千葉県高等学校体育連盟自転車競技専門部
千葉県高等学校体育連盟ボクシング専門部
千葉県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
千葉県高等学校体育連盟ヨット専門部
千葉県高等学校体育連盟フェンシング専門部
千葉県高等学校体育連盟空手道専門部
千葉県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
千葉県高等学校体育連盟なぎなた専門部
千葉県高等学校体育連盟研究部
千葉県高等学校体育連盟定通制専門部

東京都高等学校体育連盟

〒100-0014　千代田区永田町2－16－2
星陵会館内
TEL　03（3581）5095
FAX　03（3581）6452

東京都高等学校体育連盟会　長　河上　一雄
東京都高等学校体育連盟副会長　高橋　邦郎
東京都高等学校体育連盟副会長　田中　正造
東京都高等学校体育連盟副会長　高田　日呂美
東京都高等学校体育連盟理事長　佐藤　幸夫
東京都高等学校体育連盟副理事長　藤田　幸康
東京都高等学校体育連盟副理事長　祖父江利久
東京都高等学校体育連盟副理事長　小久保敦央
東京都高等学校体育連盟事務局長　大杉　一男
東京都高等学校体育連盟男子陸上競技専門部
東京都高等学校体育連盟女子陸上競技専門部
東京都高等学校体育連盟男子体操専門部
東京都高等学校体育連盟女子体操専門部
東京都高等学校体育連盟男子バスケットボール専門部
東京都高等学校体育連盟女子バスケットボール専門部
東京都高等学校体育連盟バレーボール男子専門部
東京都高等学校体育連盟バレーボール女子専門部
東京都高等学校体育連盟男子ソフトテニス専門部長　吉野　尚也
東京都高等学校体育連盟女子ソフトテニス専門部長　渡辺　義正
東京都高等学校体育連盟ソフトボール専門部
東京都高等学校体育連盟スキー専門部
東京都高等学校体育連盟スケート専門部長　笠原喜四郎
東京都高等学校体育連盟男子卓球専門部
東京都高等学校体育連盟女子卓球専門部
東京都高等学校体育連盟軟式野球専門部
東京都高等学校体育連盟ラグビー専門部
東京都高等学校体育連盟サッカー専門部
東京都高等学校体育連盟ハンドボール専門部
東京都高等学校体育連盟アメリカンフットボール専門部
東京都高等学校体育連盟バドミントン専門部
東京都高等学校体育連盟剣道専門部
東京都高等学校体育連盟柔道専門部
東京都高等学校体育連盟水泳専門部長　金子　豊
東京都高等学校体育連盟相撲専門部　片桐誠一郎・武井　美男
東京都高等学校体育連盟弓道専門部
日新航空サービス株式会社（レスリング専門部）
東京都高等学校体育連盟ホッケー専門部
東京都高等学校体育連盟テニス専門部
東京都高等学校体育連盟登山専門部
東京都高等学校体育連盟ボクシング専門部
東京都高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部長　新藤　宣夫
東京都高等学校体育連盟漕艇専門部
社団法人　東京都ボート協会
東京都高等学校体育連盟自転車競技専門部

東京都高等学校体育連盟ライフル射撃専門部長　太田　浩一
東京都高等学校体育連盟フェンシング専門部
東京都高等学校体育連盟空手道専門部長　山本　慧彊
東京都高等学校体育連盟アーチェリー専門部長　桑ケ谷森男
東京都高等学校体育連盟なぎなた専門部

神奈川県高等学校体育連盟

〒221-0855　横浜市神奈川区三ツ沢町３－１
県立スポーツ会館内
TEL　045（311）8817
FAX　045（313）2669

神奈川県高等学校体育連盟会　長　斎藤　幸雄
神奈川県高等学校体育連盟副会長　大澤　一仁
神奈川県高等学校体育連盟副会長　大塚　喜英
神奈川県高等学校体育連盟理事長　城所　富夫
神奈川県高等学校体育連盟副理事長　吉田　秀志
神奈川県高等学校体育連盟副理事長　加山　春喜
神奈川県高等学校体育連盟陸上競技専門部
神奈川県高等学校体育連盟体操専門部
神奈川県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
株式会社安藤スポーツ（サッカー専門部）
神奈川県高等学校体育連盟ラグビー専門部
神奈川県高等学校体育連盟柔道専門部
神奈川県高等学校体育連盟スケート専門部
神奈川県高等学校体育連盟空手道専門部
神奈川県高等学校体育連盟ダンス専門部
JTB 教育旅行横浜支店

山梨県高等学校体育連盟

〒400-0001　甲府市和田町2564
県スポーツ会館内
TEL　0552（53）1846
FAX　0552（53）1823

山梨県高等学校体育連盟会　長　小笠原正人
山梨県高等学校体育連盟副会長　天野　　進
山梨県高等学校体育連盟副会長　山内　惟治
山梨県高等学校体育連盟副会長　斉藤　幸三
山梨県高等学校体育連盟副会長　中山　眞次
山梨県高等学校体育連盟副会長　大沢　　徹
山梨県高等学校体育連盟副会長　天野　　裕
山梨県高等学校体育連盟理事長　保坂　重機
山梨県高等学校体育連盟副理事長　杉田李久雄
山梨県高等学校体育連盟事務局長　鶴田　　誠
東海大学甲府高等学校後援会（陸上競技専門部）
山梨県高等学校体育連盟体操専門部
山梨県高等学校体育連盟新体操専門部
山梨県高等学校体育連盟水泳専門部
山梨県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
山梨県高等学校体育連盟バレーボール専門部
有限会社鈴木車体工業　代表取締役　鈴木　滋
石和温泉郷ビジネスホテル白扇
山梨県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
山梨県高等学校体育連盟サッカー専門部
山梨県高等学校体育連盟ラグビー専門部
山梨県高等学校体育連盟バドミントン専門部
山梨県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
山英建設株式会社
山梨県高等学校体育連盟柔道専門部
山梨県高等学校体育連盟スキー専門部
山梨県高等学校体育連盟スケート専門部
山梨県高等学校体育連盟剣道専門部
山梨県高等学校体育連盟レスリング専門部
むろい株式会社
エストテニスクラブ
エルク
山梨県高等学校体育連盟自転車競技専門部
山梨県高等学校体育連盟ボクシング専門部
ふきよせスポーツ白根店
山梨県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
山梨県高等学校体育連盟漕艇専門部
フコク生命　甲府支社
山梨県フェンシング協会
山梨県高等学校体育連盟空手道専門部
株式会社小林事務機
山梨県高等学校体育連盟なぎなた専門部
山梨県高等学校体育連盟銃剣道専門部
山梨県高等学校体育連盟研究部
山梨県高等学校体育連盟定通制専門部
株式会社長田玉夫商会代表取締役長田玉夫
山梨県銃剣道連盟会長山口廣敏
原メリヤス工業株式会社
株式会社マルモ　丸茂紀彦
有限会社甲府スポーツ
株式会社フジカワ紙販
株式会社ヨネヤ
東急観光株式会社甲府支店

新潟県高等学校体育連盟

〒951-8127　新潟市関屋下川原２－635
県立新潟高校内
TEL　025（266）2658
FAX　025（266）2658

新潟県高等学校体育連盟会　長　青木　一男
新潟県高等学校体育連盟副会長　池田　　齊
新潟県高等学校体育連盟副会長　濱田　達郎
新潟県高等学校体育連盟副会長　松井　　浩
新潟県高等学校体育連盟副会長　松縄　武彦
新潟県高等学校体育連盟副会長　渡辺　剛忠
新潟県高等学校体育連盟理事長　成田　　守
新潟県高等学校体育連盟副理事長　小杉　　仁
新潟県高等学校体育連盟副理事長　今西　博一
新潟県高等学校体育連盟陸上競技専門部
新潟県高等学校体育連盟体操専門部
新潟県高等学校体育連盟水泳専門部
新潟県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
新潟県高等学校体育連盟バレーボール専門部
新潟県高等学校体育連盟卓球専門部
新潟県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
新潟県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
新潟県高等学校体育連盟サッカー専門部
新潟県高等学校体育連盟ラグビー専門部
新潟県高等学校体育連盟バドミントン専門部
新潟県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
新潟県高等学校体育連盟相撲専門部
新潟県高等学校体育連盟柔道専門部
新潟県高等学校体育連盟スキー専門部
新潟県高等学校体育連盟漕艇専門部
新潟県高等学校体育連盟剣道専門部
新潟県高等学校体育連盟レスリング専門部
新潟県高等学校体育連盟弓道専門部
新潟県高等学校体育連盟テニス専門部
新潟県高等学校体育連盟登山専門部
新潟県高等学校体育連盟自転車競技専門部
新潟県高等学校体育連盟ボクシング専門部
新潟県高等学校体育連盟ホッケー専門部
新潟県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
新潟県高等学校体育連盟フェンシング専門部
新潟県高等学校体育連盟空手道専門部
新潟県高等学校体育連盟なぎなた専門部
新潟県高等学校体育連盟研究部
新潟県高等学校体育連盟ダンス専門部
新潟県高等学校体育連盟少林寺拳法専門部

富山県高等学校体育連盟

〒930-0097　富山市芝園町３－１－26
県立富山中部高校内
TEL　0764（42）0721
FAX　0764（42）0721

富山県高等学校体育連盟会　長　高邑　吉房
富山県高等学校体育連盟副会長　長谷川　進
富山県高等学校体育連盟副会長　斉木　義和
富山県高等学校体育連盟副会長　伊藤　正勝
富山県高等学校体育連盟副会長　梅崎　史郎
富山県高等学校体育連盟副会長　米井　　清
富山県高等学校体育連盟理事長　貫江　和夫
富山県高等学校体育連盟副理事長　魚躬　則夫
富山県高等学校体育連盟レスリング専門部
富山県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
富山県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
富山県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
富山県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
富山県高等学校体育連盟ボクシング専門部
富山県高等学校体育連盟空手道専門部
富山県高等学校体育連盟スキー専門部
富山県高等学校体育連盟登山専門部
富山県高等学校体育連盟漕艇専門部
富山県高等学校体育連盟フェンシング専門部
富山県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
富山県高等学校体育連盟サッカー専門部
富山県高等学校体育連盟卓球専門部
富山県高等学校体育連盟バレーボール専門部
富山県高等学校体育連盟なぎなた専門部
富山県高等学校体育連盟カヌー専門部
富山県高等学校体育連盟柔道専門部
富山県高等学校体育連盟相撲専門部
富山県高等学校体育連盟ヨット専門部
富山県高等学校体育連盟体操専門部
富山県高等学校体育連盟剣道専門部
富山県高等学校体育連盟水泳専門部
富山県高等学校体育連盟テニス専門部
富山県高等学校体育連盟陸上競技専門部
富山県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
富山県高等学校体育連盟ホッケー専門部
富山県高等学校体育連盟弓道専門部
富山県高等学校体育連盟バドミントン専門部
富山県高等学校体育連盟自転車競技専門部
富山県高等学校体育連盟ラグビー専門部
富山県高等学校体育連盟定通制専門部

石川県高等学校体育連盟

〒920-0818　金沢市大樋町16－1
県立金沢桜丘高校内
TEL　076（252）4273
FAX　076（252）4273

石川県高等学校体育連盟会　長　中谷　一男
石川県高等学校体育連盟副会長　村井　勉
石川県高等学校体育連盟副会長　河崎　勉
石川県高等学校体育連盟副会長　斉藤真一郎
石川県高等学校体育連盟副会長　有田　利一
石川県高等学校体育連盟理事長　西村　昭夫
石川県高等学校体育連盟副理事長　鹿野　昇
石川県高等学校体育連盟副理事長　太田　信
石川県高等学校体育連盟副理事長　大田　勉
石川県高等学校体育連盟陸上競技専門部
石川県高等学校体育連盟卓球専門部
石川県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
石川県高等学校体育連盟バレーボール専門部
石川県高等学校体育連盟水泳専門部
石川県高等学校体育連盟体操専門部
石川県高等学校体育連盟相撲専門部
石川県高等学校体育連盟ボクシング専門部
石川県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
石川県高等学校体育連盟サッカー専門部
石川県高等学校体育連盟ラグビー専門部
石川県高等学校体育連盟登山専門部
石川県高等学校体育連盟スキー専門部
石川県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
石川県高等学校体育連盟バドミントン専門部
石川県高等学校体育連盟柔道専門部
石川県高等学校体育連盟剣道専門部
石川県高等学校体育連盟弓道専門部
石川県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
石川県高等学校体育連盟テニス専門部
石川県高等学校体育連盟漕艇専門部
石川県高等学校体育連盟レスリング専門部
石川県高等学校体育連盟自転車競技専門部
石川県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
石川県高等学校体育連盟フェンシング専門部
石川県高等学校体育連盟ヨット専門部
石川県高等学校体育連盟ホッケー専門部
石川県高等学校体育連盟空手道専門部
石川県高等学校体育連盟トランポリン専門部
石川県高等学校体育連盟馬術専門部
石川県高等学校体育連盟なぎなた専門部
石川県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
石川県高等学校体育連盟カヌー専門部
石川県高等学校体育連盟ボウリング専門部
石川県高等学校体育連盟定時制専門部

福井県高等学校体育連盟

〒910-0021　福井市乾徳4－8－19
県立福井商業高校内
TEL　0776（22）1047
FAX　0776（22）1047

福井県高等学校体育連盟会　長　矢尾正次郎
福井県高等学校体育連盟副会長　齋藤　邦夫
福井県高等学校体育連盟副会長　高橋　正樹
福井県高等学校体育連盟理事長　筧　尚夫
福井県高等学校体育連盟副理事長　赤星　哲志
福井県高等学校体育連盟陸上競技専門部
福井県高等学校体育連盟体操専門部
福井県高等学校体育連盟水泳専門部
福井県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
福井県高等学校体育連盟バレーボール専門部
福井県高等学校体育連盟卓球専門部
福井県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
福井県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
福井県高等学校体育連盟サッカー専門部
福井県高等学校体育連盟ラグビー専門部
福井県高等学校体育連盟バドミントン専門部
福井県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
福井県高等学校体育連盟相撲専門部
福井県高等学校体育連盟柔道専門部
福井県高等学校体育連盟スキー専門部
福井県高等学校体育連盟漕艇専門部
福井県高等学校体育連盟剣道専門部
福井県高等学校体育連盟レスリング専門部
福井県高等学校体育連盟弓道専門部
福井県高等学校体育連盟テニス専門部
福井県高等学校体育連盟登山専門部
福井県高等学校体育連盟自転車競技専門部
福井県高等学校体育連盟ボクシング専門部
福井県高等学校体育連盟ホッケー専門部
福井県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
福井県高等学校体育連盟ヨット専門部
福井県高等学校体育連盟フェンシング専門部
福井県高等学校体育連盟空手道専門部
福井県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
福井県高等学校体育連盟なぎなた専門部
福井県高等学校体育連盟研究部
福井県高等学校体育連盟定通制専門部

長野県高等学校体育連盟

〒380-8515　長野市上松１－16－12
県立長野高校内
TEL　026（234）1205
FAX　026（234）1205

長野県高等学校体育連盟会　長　本山　綱規
長野県高等学校体育連盟副会長　白沢　寛人
長野県高等学校体育連盟副会長　丸山　　直
長野県高等学校体育連盟副会長　窪田　孝美
長野県高等学校体育連盟副会長　佐藤　貞治
長野県高等学校体育連盟理事長　布施　紀彦
長野県高等学校体育連盟副理事長　青木　　功
長野県高等学校体育連盟陸上競技専門部
長野県高等学校体育連盟体操専門部
長野県高等学校体育連盟水泳専門部
長野県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
長野県高等学校体育連盟バレーボール専門部
長野県高等学校体育連盟卓球専門部
長野県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
長野県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
有限会社文正堂スポーツ（サッカー専門部）
有限会社クラチスポーツ（ラグビー専門部）
スポーツプラザ　トーヨー（ラグビー専門部）
長野県高等学校体育連盟バドミントン専門部
長野県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
長野県高等学校体育連盟相撲専門部
長野県高等学校体育連盟柔道専門部
長野県高等学校体育連盟スキー専門部
長野県高等学校体育連盟スケート専門部
長野県高等学校体育連盟漕艇専門部
長野県高等学校体育連盟剣道専門部
長野県高等学校体育連盟レスリング専門部
長野県高等学校体育連盟弓道専門部
長野県高等学校体育連盟テニス専門部
長野県高等学校体育連盟登山専門部
長野県高等学校体育連盟自転車競技専門部
株式会社　太成食品（ボクシング専門部）
長野県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
長野県高等学校体育連盟フェンシング専門部
長野県高等学校体育連盟空手道専門部
長野県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
長野県高等学校体育連盟なぎなた専門部
長野県高等学校体育連盟定通制専門部
長野県高等学校体育連盟研究部

岐阜県高等学校体育連盟

〒502-0931　岐阜市則武清水1841－11
県立岐阜北高校内
TEL　058（231）7032
FAX　058（294）7990

岐阜県高等学校体育連盟会　長　荒井　強平
岐阜県高等学校体育連盟副会長　市川　忠男
岐阜県高等学校体育連盟副会長　永井　　寛
岐阜県高等学校体育連盟副会長　田中　恵順
岐阜県高等学校体育連盟理事長　今村　和正
岐阜県高等学校体育連盟副理事長　高橋　清生
岐阜県高等学校体育連盟副理事長　部谷　正巳
岐阜県高等学校体育連盟陸上競技専門部
丸大スポーツ（体操専門部）
岐阜県高等学校体育連盟水泳専門部
岐阜県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
岐阜県バレーボール協会
卓球専門店　カトウスポーツ
岐阜県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
岐阜県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
ユニオンスポーツ株式会社（サッカー専門部）
岐阜県高等学校体育連盟ラグビー専門部
岐阜県高等学校体育連盟バドミントン専門部
岐阜県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
中衛工業株式会社（相撲専門部）
岐阜県高等学校体育連盟柔道専門部
岐阜県高等学校体育連盟スキー専門部
岐阜県スケート連盟
岐阜県ボート協会
岐阜県剣道連盟
岐阜県高等学校体育連盟レスリング専門部
名古屋弓具店
岐阜県高等学校体育連盟テニス専門部
岐阜県高等学校体育連盟登山専門部
岐阜県高等学校体育連盟自転車競技専門部
岐阜県高等学校体育連盟ボクシング専門部
天龍工業株式会社（ホッケー専門部）
岐阜県ウェイトリフティング協会
県立海津高校ヨット部OB会
株式会社カワセスポーツ（フェンシング専門部）
岐阜県高等学校体育連盟空手道専門部
株式会社打保屋商店（アーチェリー専門部）
佐藤武道具専門店（なぎなた専門部）
県立中濃高等学校（ライフル射撃専門部）
株式会社センタースポーツ（軟式野球専門部）

静岡県高等学校体育連盟

〒420-8608　静岡市長谷町66
県立静岡高校内
TEL　054（248）7448
FAX　054（248）7071

静岡県高等学校体育連盟会　長　安達　忠勝
静岡県高等学校体育連盟副会長　清水　洋二
静岡県高等学校体育連盟副会長　野口　正武
静岡県高等学校体育連盟副会長　山下　　晃
静岡県高等学校体育連盟理事長　松浦　博實
静岡県高等学校体育連盟陸上競技専門部
静岡県高等学校体育連盟体操専門部
静岡県高等学校体育連盟水泳専門部
静岡県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
広野スポーツ（バレーボール専門部）
静岡県高等学校体育連盟卓球専門部
静岡県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
静岡県ハンドボール協会
静岡県サッカー協会高校部
静岡県高等学校体育連盟サッカー専門部
静岡県高等学校体育連盟ラグビー専門部
静岡県高等学校体育連盟バドミントン専門部
静岡県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
静岡県高等学校体育連盟相撲専門部
静岡県高等学校体育連盟柔道専門部
静岡県スケート連盟スピード部会
静岡県高等学校体育連盟漕艇専門部
静岡県高等学校体育連盟剣道専門部
静岡県高等学校体育連盟レスリング専門部
有限会社ヒライ弓具（弓道専門部）
静岡県高等学校体育連盟テニス専門部
静岡県高等学校体育連盟登山専門部
静岡県高等学校体育連盟自転車競技専門部
静岡県高等学校体育連盟ボクシング専門部
株式会社イヤマストアー（ホッケー専門部）
静岡県高等学校体育連盟ホッケー専門部
静岡県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
静岡県高等学校体育連盟ヨット専門部
静岡県高等学校体育連盟フェンシング専門部
静岡県高等学校体育連盟空手道専門部
静岡県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
静岡県高等学校体育連盟なぎなた専門部
静岡県高等学校体育連盟研究部
静岡県高等学校体育連盟軟式野球専門部

愛知県高等学校体育連盟

〒460-0007　名古屋市中区新栄1－49－10
県教育会館内
TEL　052（251）8115
FAX　052（251）8169

愛知県高等学校体育連盟会　長　小野田章二
愛知県高等学校体育連盟副会長　橋本　　卓
愛知県高等学校体育連盟副会長　藤村　正美
愛知県高等学校体育連盟副会長　小島　勇夫
愛知県高等学校体育連盟副会長　遠藤　隆之
愛知県高等学校体育連盟副会長　野澤　俊晴
愛知県高等学校体育連盟副会長　野牧　一雄
愛知県高等学校体育連盟副会長　伊藤　宏治
愛知県高等学校体育連盟副会長兼事務局長　都築　義之
愛知県高等学校体育連盟事務局長　坂　敬一郎
愛知県高等学校体育連盟陸上競技専門部
愛知県高等学校体育連盟体操専門部
愛知県高等学校体育連盟水泳専門部
愛知県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
愛知県高等学校体育連盟バレーボール専門部
愛知県高等学校体育連盟卓球専門部
愛知県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
愛知県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
愛知県高等学校体育連盟サッカー専門部
愛知県高等学校体育連盟ラグビー専門部
愛知県高等学校体育連盟バドミントン専門部
愛知県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
愛知県高等学校体育連盟相撲専門部
愛知県高等学校体育連盟柔道専門部
愛知県高等学校体育連盟スキー専門部
愛知県高等学校体育連盟スケート専門部
愛知県高等学校体育連盟漕艇専門部
愛知県高等学校体育連盟剣道専門部
愛知県高等学校体育連盟レスリング専門部
愛知県高等学校体育連盟弓道専門部
愛知県高等学校体育連盟テニス専門部
愛知県高等学校体育連盟登山専門部
愛知県高等学校体育連盟自転車競技専門部
愛知県高等学校体育連盟ボクシング専門部
愛知県高等学校体育連盟ホッケー専門部
愛知県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
愛知県高等学校体育連盟ヨット専門部
愛知県高等学校体育連盟フェンシング専門部
愛知県高等学校体育連盟空手道専門部
愛知県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
愛知県高等学校体育連盟なぎなた専門部
愛知県高等学校体育連盟研究部

三重県高等学校体育連盟

〒510-8562　四日市市大字日永字岡山4917
県立四日市南高校内
TEL　0593（46）2718
FAX　0593（46）2718

三重県高等学校体育連盟会　長　畦地　耕司
三重県高等学校体育連盟副会長　出口　義明
三重県高等学校体育連盟副会長　佐脇　功
三重県高等学校体育連盟副会長　星野　茂
三重県高等学校体育連盟理事長　溝口　宏憲
三重県高等学校体育連盟副理事長　服部　匠悟
三重県高等学校体育連盟副理事長　加治佐伊都
三重県高等学校体育連盟陸上競技専門部
三重県高等学校体育連盟体操専門部
三重県高等学校体育連盟水泳専門部
三重県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
三重県高等学校体育連盟バレーボール専門部
三重県高等学校体育連盟卓球専門部
三重県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
三重県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
三重県高等学校体育連盟サッカー専門部
三重県高等学校体育連盟ラグビー専門部
三重県高等学校体育連盟バドミントン専門部
三重県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
三重県高等学校体育連盟相撲専門部
三重県高等学校体育連盟柔道専門部
三重県高等学校体育連盟スキー専門部
三重県高等学校体育連盟漕艇専門部
三重県高等学校体育連盟剣道専門部
三重県高等学校体育連盟レスリング専門部
三重県高等学校体育連盟弓道専門部
三重県高等学校体育連盟テニス専門部
三重県高等学校体育連盟登山専門部
三重県高等学校体育連盟自転車競技専門部
三重県高等学校体育連盟ボクシング専門部
三重県高等学校体育連盟ホッケー専門部
三重県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
三重県高等学校体育連盟ヨット専門部
三重県高等学校体育連盟フェンシング専門部
三重県高等学校体育連盟空手道専門部
三重県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
三重県高等学校体育連盟なぎなた専門部

滋賀県高等学校体育連盟

〒520-8577　滋賀県大津市京町４－１－１
県教育委員会事務局保健体育課内
TEL　077（528）4614
FAX　077（528）4955

滋賀県高等学校体育連盟会　長　疋田　充穂
滋賀県高等学校体育連盟副会長　西村　勝晴
滋賀県高等学校体育連盟副会長　清水　忠和
滋賀県高等学校体育連盟副会長　堀江　泉
滋賀県高等学校体育連盟理事長　西本　良三
滋賀県高等学校体育連盟副理事長　山本　敬三
滋賀県高等学校体育連盟副理事長　橋爪　建治
滋賀県高等学校体育連盟副理事長　古我　幸二
滋賀県高等学校体育連盟事務局長　上野　幹雄
滋賀県高等学校体育連盟陸上競技専門部
滋賀県高等学校体育連盟体操専門部
滋賀県高等学校体育連盟水泳専門部
滋賀県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
滋賀県高等学校体育連盟バレーボール専門部
滋賀県高等学校体育連盟卓球専門部
滋賀県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
株式会社ヤススポーツ（ハンドボール専門部）
滋賀県高等学校体育連盟サッカー専門部
Sports ヤマウチ（ラグビー専門部）
ラケットショップイチムラ大津店（バドミントン専門部）
日本精工株式会社石部工場（ソフトボール専門部）
守山包装株式会社　代表取締役新井康文（相撲専門部）
セキュリティシステム株式会社大進（柔道専門部）
滋賀県高等学校体育連盟スキー専門部
桑野造船株式会社（漕艇専門部）
丸善産業株式会社（剣道専門部）
株式会社中島スポーツ（レスリング専門部）
有限会社大倉弓具店　代表取締役大倉公夫（弓道専門部）
滋賀県高等学校体育連盟テニス専門部
滋賀県高等学校体育連盟登山専門部
滋賀県高等学校体育連盟自転車競技専門部
滋賀県高等学校体育連盟ボクシング専門部
滋賀県高等学校体育連盟ホッケー専門部
滋賀県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
滋賀県高等学校体育連盟ヨット専門部
株式会社ストロング商会　代表取締役田中成男（フェンシング専門部）
滋賀県高等学校体育連盟空手道専門部
スポーツショップジェヌイン（アーチェリー専門部）
近畿日本ツーリスト株式会社彦根支店（なぎなた専門部）

京都府高等学校体育連盟

〒602-8570　京都市上京区下立売通新町西入
府教育庁指導部保健体育課内
TEL　075（414）5862
FAX　075（414）5863

京都府高等学校体育連盟会　長　村上　知生
京都府高等学校体育連盟副会長　池垣伊三郎
京都府高等学校体育連盟副会長　真木　意令
京都府高等学校体育連盟副会長　寺田　俊男
京都府高等学校体育連盟副会長(定通制)　中坂　　進
京都府高等学校体育連盟理事長　澤田　安之
京都府高等学校体育連盟総務部長　中野　成治
京都府高等学校体育連盟総務部長(定通制)　田口　終男
京都府高等学校体育連盟事務局長　浅野　賢一
京都府高等学校体育連盟総務部(全日制･定時制･通信制)
京都府高等学校体育連盟バスケットボール専門部
京都府高等学校体育連盟バレーボール専門部
京都府高等学校体育連盟ハンドボール専門部
京都府高等学校体育連盟テニス専門部
京都府高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
京都府高等学校体育連盟卓球専門部長　山崎宏賢
京都府高等学校体育連盟バドミントン専門部
京都府高等学校体育連盟ソフトボール専門部
京都府高等学校体育連盟サッカー専門部
京都府高等学校体育連盟ラグビー専門部
京都府高等学校体育連盟陸上競技専門部
京都府高等学校体育連盟水泳専門部
京都府高等学校体育連盟漕艇専門部
京都府高等学校体育連盟体操専門部
京都府高等学校体育連盟柔道専門部
京都府高等学校体育連盟フェンシング専門部
京都府高等学校体育連盟弓道専門部
京都府高等学校体育連盟相撲専門部
京都府高等学校体育連盟登山専門部
京都府高等学校体育連盟スキー専門部
京都府高等学校体育連盟スケート専門部
京都府高等学校体育連盟ヨット専門部
京都府高等学校体育連盟野球専門部
京都府高等学校体育連盟ホッケー専門部
京都府高等学校体育連盟なぎなた専門部
京都府高等学校体育連盟アーチェリー専門部
京都府高等学校体育連盟自転車競技専門部
京都府高等学校体育連盟空手道専門部
京都府高等学校体育連盟レスリング専門部長　垣中　均
京都府高等学校体育連盟レスリング専門部委員長　三村和人
京都府レスリング協会会長　岩野悦真
京都府高等学校体育連盟少林寺拳法専門部
京都府高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
京都府高等学校体育連盟ボクシング専門部
京都府高等学校体育連盟カヌー専門部
京都府高等学校体育連盟アメリカンフットボール専門部
京都府高等学校体育連盟ゴルフ専門部
京都府高等学校定時制野球連盟
正春武道具株式会社

大阪高等学校体育連盟

〒540-0008　大阪市中央区大手前二丁目
府教育委員会保健体育課内
TEL　06（6941）3430
FAX　06（6941）4815

大阪高等学校体育連盟会　長　神内　隆司
大阪高等学校体育連盟副会長　石黒　典夫
大阪高等学校体育連盟副会長　下田　一靖
大阪高等学校体育連盟副会長　草島　一
大阪高等学校体育連盟副会長　吉田　武
大阪高等学校体育連盟理事長　上田　俊次
大阪高等学校体育連盟幹事長　平井　文徳
大阪高等学校体育連盟陸上競技専門部
大阪高等学校体育連盟体操専門部
大阪高等学校体育連盟水泳専門部
大阪高等学校体育連盟バスケットボール専門部
大阪高等学校体育連盟バレーボール専門部
大阪高等学校体育連盟卓球専門部
大阪高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
大阪高等学校体育連盟ハンドボール専門部
大阪高等学校体育連盟サッカー専門部
大阪高等学校体育連盟ラグビー専門部
大阪高等学校体育連盟バドミントン専門部
大阪高等学校体育連盟ソフトボール専門部
大阪高等学校体育連盟相撲専門部
大阪高等学校体育連盟柔道専門部
大阪高等学校体育連盟スキー専門部
大阪高等学校体育連盟漕艇専門部
大阪高等学校体育連盟剣道専門部
大阪高等学校体育連盟レスリング専門部
大阪高等学校体育連盟弓道専門部
大阪高等学校体育連盟テニス専門部
大阪高等学校体育連盟登山専門部
大阪高等学校体育連盟自転車競技専門部
大阪高等学校体育連盟ボクシング専門部
大阪高等学校体育連盟ホッケー専門部
大阪高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
大阪高等学校体育連盟ヨット専門部
大阪高等学校体育連盟フェンシング専門部
大阪高等学校体育連盟空手道専門部
大阪高等学校体育連盟アーチェリー専門部
大阪高等学校体育連盟なぎなた専門部
大阪高等学校体育連盟少林寺拳法専門部
大阪高等学校体育連盟アメリカンフットボール専門部

兵庫県高等学校体育連盟

〒650-8567　神戸市中央区下山手通5－10－1
県教育委員会事務局体育保健課内
TEL　078（362）3787
FAX　078（362）3959

兵庫県高等学校体育連盟会　長　中谷　元紀
兵庫県高等学校体育連盟副会長　堀井　隆水
兵庫県高等学校体育連盟副会長　田中　勇
兵庫県高等学校体育連盟副会長　旭　次郎
兵庫県高等学校体育連盟副会長　吉井宏一郎
兵庫県高等学校体育連盟理事長　折戸　善信
兵庫県高等学校体育連盟事務局長　吉井　和明
兵庫県高等学校体育連盟陸上競技専門部
兵庫県高等学校体育連盟体操専門部委員長　千種川一夫
兵庫県高等学校体育連盟水泳専門部　宮内雄治　津田孝男
兵庫県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
兵庫県高等学校体育連盟バレーボール専門部
アイガースポーツ（卓球専門部）
兵庫県ソフトテニス連盟
スポーツウイング（ハンドボール専門部）
兵庫県高等学校体育連盟サッカー専門部
兵庫県高等学校体育連盟ラグビー専門部
兵庫県高等学校体育連盟バドミントン専門部
㈱日本旅行　西兵庫教育旅行支店（ソフトボール専門部）
兵庫県高等学校体育連盟相撲専門部
兵庫県高等学校体育連盟柔道専門部
前兵庫県高等学校体育連盟漕艇部長　高石　信
財団法人　兵庫県剣道連盟
佐藤洋服店（レスリング専門部）
兵庫県高等学校体育連盟弓道専門部
兵庫県高等学校体育連盟テニス専門部
神戸ザック（登山専門部）
西宮市アマチュアボクシング協会
西垣ギャレックス株式会社（ウエイトリフティング専門部）
マリンエージェンシー・バルコ（ヨット専門部）
兵庫県高等学校体育連盟空手道専門部
兵庫県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
兵庫県高等学校体育連盟なぎなた専門部
さくら印刷

奈良県高等学校体育連盟

〒630-8113　奈良市法蓮町757県法蓮庁舎
県教育委員会保健体育課内
TEL　0742（22）1101
FAX　0742（22）3995

奈良県高等学校体育連盟会　長　上野　傳美
奈良県高等学校体育連盟副会長　竹村　菊郎
奈良県高等学校体育連盟副会長　松浦　史郎
奈良県高等学校体育連盟理事長　西岡　英明
奈良県高等学校体育連盟副理事長　播磨　勝行
奈良県高等学校体育連盟副理事長　向井　弘昌
奈良県高等学校体育連盟陸上競技専門部
奈良県高等学校体育連盟体操専門部
奈良県高等学校体育連盟水泳専門部
奈良県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
奈良県高等学校体育連盟バレーボール専門部
奈良県高等学校体育連盟卓球専門部
奈良県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
奈良県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
奈良県高等学校体育連盟サッカー専門部
奈良県高等学校体育連盟ラグビー専門部
奈良県高等学校体育連盟バドミントン専門部
奈良県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
奈良県高等学校体育連盟相撲専門部
奈良県高等学校体育連盟柔道専門部
奈良県高等学校体育連盟漕艇専門部
奈良県高等学校体育連盟剣道専門部
奈良県高等学校体育連盟レスリング専門部
奈良県高等学校体育連盟弓道専門部
奈良県高等学校体育連盟テニス専門部
奈良県高等学校体育連盟登山専門部
奈良県高等学校体育連盟自転車競技専門部
奈良県高等学校体育連盟ボクシング専門部
奈良県高等学校体育連盟ホッケー専門部
奈良県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
奈良県高等学校体育連盟ヨット専門部
奈良県高等学校体育連盟フェンシング専門部
奈良県高等学校体育連盟空手道専門部
奈良県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
奈良県高等学校体育連盟なぎなた専門部

和歌山県高等学校体育連盟

〒640-8464　和歌山市市小路388
県立和歌山北高校内
TEL　0734（53）3657
FAX　0734（53）3657

和歌山県高等学校体育連盟会　長　古谷　多市
和歌山県高等学校体育連盟副会長　西下　博通
和歌山県高等学校体育連盟副会長　中村　靖夫
和歌山県高等学校体育連盟副会長　數見　之男
和歌山県高等学校体育連盟理事長　山本　良和
和歌山県高等学校体育連盟副理事長　濱口　晃夫
和歌山県高等学校体育連盟副理事長　小林　康伸
和歌山県高等学校体育連盟副理事長　西端　秀高
和歌山県高等学校体育連盟陸上競技専門部
和歌山県高等学校体育連盟体操専門部
和歌山県高等学校体育連盟水泳専門部
和歌山県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
和歌山県高等学校体育連盟バレーボール専門部
和歌山県高等学校体育連盟卓球専門部
和歌山県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
和歌山県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
和歌山県高等学校体育連盟サッカー専門部
和歌山県高等学校体育連盟ラグビー専門部
和歌山県高等学校体育連盟バドミントン専門部
和歌山県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
和歌山県高等学校体育連盟相撲専門部
和歌山県高等学校体育連盟柔道専門部
和歌山県高等学校体育連盟漕艇専門部
和歌山県高等学校体育連盟剣道専門部
和歌山県高等学校体育連盟レスリング専門部
和歌山県高等学校体育連盟弓道専門部
和歌山県高等学校体育連盟テニス専門部
和歌山県高等学校体育連盟登山専門部
和歌山県高等学校体育連盟自転車競技専門部
和歌山県高等学校体育連盟ホッケー専門部
和歌山県高等学校体育連盟ウェイトリフティング専門部
和歌山県高等学校体育連盟ヨット専門部
和歌山県高等学校体育連盟フェンシング専門部
和歌山県高等学校体育連盟空手道専門部
和歌山県高等学校体育連盟なぎなた専門部
和歌山県高等学校体育連盟研究部

鳥取県高等学校体育連盟

〒690-8528　鳥取市布勢146－1
布勢陸上競技場内
TEL　0857（28）4991
FAX　0857（28）4991

鳥取県高等学校体育連盟会　長　田中　昭文
鳥取県高等学校体育連盟副会長　渡橋　由章
鳥取県高等学校体育連盟副会長　高木　敏行
鳥取県高等学校体育連盟副会長　岡田　　薫
鳥取県高等学校体育連盟理事長　前田　達雄
鳥取県高等学校体育連盟副理事長　牧野　紀史
鳥取県高等学校体育連盟副理事長　久葉章一郎
鳥取県高等学校体育連盟事務局長　小倉　健一
鳥取県高等学校体育連盟陸上競技専門部
鳥取県高等学校体育連盟体操専門部
鳥取県高等学校体育連盟水泳専門部
鳥取県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
鳥取県高等学校体育連盟バレーボール専門部
鳥取県高等学校体育連盟卓球専門部
鳥取県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
鳥取県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
鳥取県高等学校体育連盟サッカー専門部
鳥取県ラグビーフットボール協会会長　戸口田和也
鳥取県高等学校体育連盟バドミントン専門部
鳥取県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
鳥取県高等学校体育連盟相撲専門部
鳥取県高等学校体育連盟柔道専門部
鳥取県高等学校体育連盟スキー専門部
鳥取県高等学校体育連盟漕艇専門部
鳥取県高等学校体育連盟剣道専門部
鳥取県高等学校体育連盟レスリング専門部
鳥取県高等学校体育連盟弓道専門部
鳥取県高等学校体育連盟テニス専門部
鳥取県高等学校体育連盟登山専門部
鳥取県高等学校体育連盟自転車競技専門部
鳥取県高等学校体育連盟ボクシング専門部
鳥取県高等学校体育連盟ホッケー専門部
鳥取県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
鳥取県高等学校体育連盟ヨット専門部
鳥取県高等学校体育連盟フェンシング専門部
学校法人　翔英学園　米子北高等学校(空手道専門部)
鳥取県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
鳥取県高等学校体育連盟なぎなた専門部
鳥取県高等学校体育連盟駅伝専門部
鳥取県高等学校体育連盟軟式野球専門部
鳥取県高等学校体育連盟カヌー専門部
鳥取県高等学校体育連盟定通制専門部
鳥取県高等学校野球連盟（硬式野球専門部）
鳥取県立境高等学校学校長　高木敏行(ハンドボール専門部)
鳥取私立米子商業高等学校学校長　奥田　薫(駅伝専門部)
長生漁業株式会社代表取締役　長島　勤(ヨット専門部)

島根県高等学校体育連盟

〒690-8528　松江市古志原町４－１－10
県立松江工業高校内
TEL　0852（26）3842
FAX　0852（26）3695

島根県高等学校体育連盟会　長　森脇　健臣
島根県高等学校体育連盟副会長　岡本　修治
島根県高等学校体育連盟副会長　仲谷　毅
島根県高等学校体育連盟副会長　加藤　武行
島根県高等学校体育連盟理事長　荊尾　俊
島根県高等学校体育連盟副理事長　園山　哲也
島根県高等学校体育連盟陸上競技専門部
島根県高等学校体育連盟体操専門部
島根県高等学校体育連盟水泳専門部
島根県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
島根県高等学校体育連盟バレーボール専門部
島根県高等学校体育連盟卓球専門部
島根県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
島根県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
島根県高等学校体育連盟サッカー専門部
島根県高等学校体育連盟ラグビー専門部
島根県高等学校体育連盟バドミントン専門部
島根県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
島根県高等学校体育連盟相撲専門部
島根県高等学校体育連盟柔道専門部
島根県高等学校体育連盟スキー専門部
島根県高等学校体育連盟スケート専門部
島根県高等学校体育連盟漕艇専門部
島根県高等学校体育連盟剣道専門部
島根県高等学校体育連盟レスリング専門部
島根県高等学校体育連盟弓道専門部
島根県高等学校体育連盟テニス専門部
島根県高等学校体育連盟登山専門部
島根県高等学校体育連盟自転車競技専門部
島根県高等学校体育連盟ボクシング専門部
島根県高等学校体育連盟ホッケー専門部
島根県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
島根県高等学校体育連盟ヨット専門部
島根県高等学校体育連盟フェンシング専門部
島根県高等学校体育連盟空手道専門部
島根県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
島根県高等学校体育連盟なぎなた
島根県高等学校体育連盟軟式野球専門部
島根県高等学校体育連盟カヌー専門部
島根県高等学校体育連盟ダンス専門部
島根県高等学校体育連盟ライフル射撃専門部

岡山県高等学校体育連盟

〒703-8278　岡山市古京町２－２－21
県立岡山朝日高校内
TEL　086（271）0264
FAX　086（271）0264

岡山県高等学校体育連盟会　長　平田　賢治
岡山県高等学校体育連盟副会長　國定　義信
岡山県高等学校体育連盟副会長　内山　克良
岡山県高等学校体育連盟副会長　近藤　春生
岡山県高等学校体育連盟副会長　上田　敏博
岡山県高等学校体育連盟理事長　屯倉　紀正
岡山県高等学校体育連盟副理事長　鎌木　孝二
岡山県高等学校体育連盟陸上競技専門部
岡山県高等学校体育連盟体操専門部
岡山県高等学校体育連盟水泳専門部
岡山県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
岡山県高等学校体育連盟バレーボール専門部
岡山県高等学校体育連盟卓球専門部
岡山県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
岡山県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
岡山県高等学校体育連盟サッカー専門部
岡山県高等学校体育連盟ラグビー専門部
岡山県高等学校体育連盟バドミントン専門部
岡山県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
岡山県高等学校体育連盟相撲専門部
岡山県高等学校体育連盟柔道専門部
岡山県高等学校体育連盟スキー専門部
岡山県高等学校体育連盟スケート専門部
岡山県高等学校体育連盟漕艇専門部
岡山県高等学校体育連盟剣道専門部
岡山県高等学校体育連盟レスリング専門部
岡山県高等学校体育連盟弓道専門部
岡山県高等学校体育連盟テニス専門部
岡山県高等学校体育連盟登山専門部
岡山県高等学校体育連盟自転車競技専門部
岡山県高等学校体育連盟ボクシング専門部
岡山県高等学校体育連盟ホッケー専門部
岡山県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
岡山県高等学校体育連盟ヨット専門部
岡山県高等学校体育連盟フェンシング専門部
岡山県高等学校体育連盟空手道専門部
岡山県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
岡山県高等学校体育連盟なぎなた専門部
岡山県高等学校体育連盟研究部
岡山県高等学校体育連盟軟式野球専門部
岡山県高等学校体育連盟駅伝専門部
岡山県高等学校体育連盟少林寺拳法専門部

広島県高等学校体育連盟

〒730-0011　広島市中区基町４－１
県立総合体育館内
TEL　082（223）7677
FAX　082（223）2022

広島県高等学校体育連盟会　長　村瀬　俊之
広島県高等学校体育連盟副会長　船木　　勝
広島県高等学校体育連盟副会長　宮田　海山
広島県高等学校体育連盟副会長　黒瀬真一郎
広島県高等学校体育連盟副会長　高山　正義
広島県高等学校体育連盟理事長　万治　　功
広島県高等学校体育連盟事務局長　藤本　隆弘
広島県高等学校体育連盟陸上競技専門部
広島県高等学校体育連盟体操専門部
広島県高等学校体育連盟水泳専門部
広島県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
広島県高等学校体育連盟バレーボール専門部
広島県高等学校体育連盟卓球専門部
広島県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
広島県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
広島県高等学校体育連盟サッカー専門部
広島県高等学校体育連盟ラグビー専門部
広島県高等学校体育連盟バドミントン専門部
広島県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
広島県高等学校体育連盟相撲専門部
広島県高等学校体育連盟柔道専門部
広島県高等学校体育連盟スキー専門部
広島県高等学校体育連盟漕艇専門部
広島県高等学校体育連盟剣道専門部
広島県高等学校体育連盟レスリング専門部
広島県高等学校体育連盟弓道専門部
広島県高等学校体育連盟テニス専門部
広島県高等学校体育連盟登山専門部
広島県高等学校体育連盟自転車競技専門部
広島県高等学校体育連盟ボクシング専門部
広島県高等学校体育連盟ホッケー専門部
広島県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
広島県高等学校体育連盟ヨット専門部
広島県高等学校体育連盟フェンシング専門部
広島県高等学校体育連盟空手道専門部
広島県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
広島県高等学校体育連盟なぎなた専門部
広島県高等学校体育連盟少林寺拳法専門部
広島県高等学校体育連盟研究部
広島県高等学校体育連盟女子部
広島県高等学校体育連盟定通制専門部

山口県高等学校体育連盟

〒753-0851　山口市黒川2580－１
県立西京高校内
TEL　0839（23）8582
FAX　0839（21）0341

山口県高等学校体育連盟会　長　山下　　浩
山口県高等学校体育連盟副会長　田中　　功
山口県高等学校体育連盟副会長　東條　博徳
山口県高等学校体育連盟副会長　竹田　信義
山口県高等学校体育連盟副会長　小林　俊彦
山口県高等学校体育連盟副会長　瀬口扶佐夫
山口県高等学校体育連盟副会長　福田　信義
山口県高等学校体育連盟理事長　竹内　之保
山口県高等学校体育連盟副理事長　岩本　和是
山口県高等学校体育連盟陸上競技専門部
山口県高等学校体育連盟体操専門部
山口県高等学校体育連盟水泳専門部
山口県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
山口県高等学校体育連盟バレーボール専門部
山口県高等学校体育連盟卓球専門部
山口県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
山口県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
山口県高等学校体育連盟サッカー専門部
山口県高等学校体育連盟ラグビー専門部
山口県高等学校体育連盟バドミントン専門部
山口県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
山口県高等学校体育連盟相撲専門部
山口県高等学校体育連盟柔道専門部
山口県高等学校体育連盟スキー専門部
山口県高等学校体育連盟スケート専門部
山口県高等学校体育連盟漕艇専門部
山口県高等学校体育連盟剣道専門部
山口県高等学校体育連盟レスリング専門部
山口県高等学校体育連盟弓道専門部
山口県高等学校体育連盟テニス専門部
山口県高等学校体育連盟登山専門部
山口県高等学校体育連盟自転車競技専門部
山口県高等学校体育連盟ボクシング専門部
山口県高等学校体育連盟ホッケー専門部
山口県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
山口県高等学校体育連盟ヨット専門部
山口県高等学校体育連盟フェンシング専門部
山口県高等学校体育連盟空手道専門部
山口県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
山口県高等学校体育連盟なぎなた専門部
山口県高等学校体育連盟調査研究部
山口県高等学校体育連盟定通制専門部

徳島県高等学校体育連盟

〒770-0853　徳島市中徳島町１－５
県立城東高校内
TEL　0886（25）8060
FAX　0886（56）2080

徳島県高等学校体育連盟会　長　中西　　知
徳島県高等学校体育連盟副会長　梅枝　紘一
徳島県高等学校体育連盟副会長　中原　祐一
徳島県高等学校体育連盟副会長　鎌田　　毅
徳島県高等学校体育連盟理事長　松田　　弘
徳島県高等学校体育連盟事務局長　分木　秀樹
徳島県高等学校体育連盟陸上競技専門部
徳島県高等学校体育連盟体操専門部
徳島県卓球協会
徳島県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
徳島県ハンドボール協会
徳島県バドミントン協会
徳島県高等学校体育連盟ソフトボール専門部　委員長　高田興一
徳島県高等学校体育連盟相撲専門部
徳島県レスリング協会
徳島県テニス協会
徳島県高等学校体育連盟登山専門部委員長　蔦　隆司
徳島県高等学校体育連盟柔道専門部
徳島県ホッケー協会
徳島県空手道連盟
徳島県高等学校体育連盟アーチェリー専門部　委員長　住友和雄
徳島県高等学校体育連盟なぎなた専門部
眉山会館
サコースポーツ

香川県高等学校体育連盟

〒760-0017　高松市番町３－１－１
県立高松高校内
TEL　087（862）6908
FAX　0878（33）8070

香川県高等学校体育連盟会　長　関　　博徳
香川県高等学校体育連盟副会長　永窪　啓治
香川県高等学校体育連盟副会長　山地　雅幸
香川県高等学校体育連盟副会長　土居　一郎
香川県高等学校体育連盟理事長　山下　正敏
香川県高等学校体育連盟事務局長　堀家　俊一
香川県高等学校体育連盟各専門部
ミズノ株式会社
銀星旅館
タナカ印刷株式会社
株式会社中央
株式会社西武食品
一橋出版株式会社
株式会社赤松商店
株式会社スポーツマンクラブ
有限会社伊藤久芳堂商会

愛媛県高等学校体育連盟

〒790-0846　松山市道後北代３－３
TEL　0899（25）1634
FAX　089（925）1634

愛媛県高等学校体育連盟会　長　近藤　雅美
愛媛県高等学校体育連盟副会長　砂田　政輝
愛媛県高等学校体育連盟副会長　西村　義臣
愛媛県高等学校体育連盟副会長　清家　正行
愛媛県高等学校体育連盟理事長　井手　盛章
愛媛県高等学校体育連盟事務局長　白石　隆保
愛媛県高等学校体育連盟陸上競技専門部
愛媛県高等学校体育連盟体操専門部
愛媛県高等学校体育連盟水泳専門部
愛媛県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
愛媛県高等学校体育連盟バレーボール専門部
愛媛県高等学校体育連盟卓球専門部
愛媛県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
愛媛県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
愛媛県高等学校体育連盟サッカー専門部
愛媛県高等学校体育連盟ラグビー専門部
愛媛県高等学校体育連盟バドミントン専門部
愛媛県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
愛媛県高等学校体育連盟相撲専門部
愛媛県高等学校体育連盟柔道専門部
愛媛県高等学校体育連盟漕艇専門部
愛媛県高等学校体育連盟剣道専門部
愛媛県高等学校体育連盟弓道専門部
愛媛県高等学校体育連盟テニス専門部
愛媛県高等学校体育連盟登山専門部
愛媛県高等学校体育連盟自転車競技専門部
愛媛県高等学校体育連盟ボクシング専門部
愛媛県高等学校体育連盟ホッケー専門部
愛媛県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
愛媛県高等学校体育連盟空手道専門部
愛媛県高等学校体育連盟なぎなた専門部
愛媛県高等学校体育連盟研究部

高知県高等学校体育連盟

〒780-0850　高知市丸の内２－２－40
県立高知丸の内高校内
TEL　0888（72）0865
FAX　0888（72）2629

高知県高等学校体育連盟会　長　眞鍋叡一郎
高知県高等学校体育連盟副会長　公文　信二
高知県高等学校体育連盟副会長　吉田　圭一
高知県高等学校体育連盟理事長　清岡　栄一
高知県高等学校体育連盟副理事長　谷岡　敏男
高知県高等学校体育連盟陸上競技専門部
高知県高等学校体育連盟体操専門部
高知県高等学校体育連盟水泳専門部
高知県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
高知県高等学校体育連盟バレーボール専門部
高知県高等学校体育連盟卓球専門部
高知県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
高知県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
高知県高等学校体育連盟サッカー専門部
高知県高等学校体育連盟ラグビー専門部
高知県高等学校体育連盟バドミントン専門部
高知県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
高知県高等学校体育連盟相撲専門部
高知県高等学校体育連盟柔道専門部
高知県高等学校体育連盟漕艇専門部
高知県高等学校体育連盟剣道専門部
高知県高等学校体育連盟弓道専門部
高知県高等学校体育連盟テニス専門部
高知県高等学校体育連盟登山専門部
高知県高等学校体育連盟自転車競技専門部
高知県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
高知県高等学校体育連盟空手道専門部
高知県高等学校体育連盟なぎなた専門部
高知県高等学校体育連盟研究部

福岡県高等学校体育連盟

〒816-0052　福岡市博多区東平尾公園2－1－4
県立スポーツ科学情報センター内
TEL　092（621）9394
FAX　092（621）9431

福岡県高等学校体育連盟会　長　隈本　豊
福岡県高等学校体育連盟副会長　齋藤　吉紀
福岡県高等学校体育連盟副会長　杉本　努
福岡県高等学校体育連盟副会長　角　忠一
福岡県高等学校体育連盟副会長　宮本　洋
福岡県高等学校体育連盟副会長　大山　敏彦
福岡県高等学校体育連盟副会長　松本　俊二
福岡県高等学校体育連盟理事長　城戸　英敏
福岡県高等学校体育連盟副理事長　山口　悦朗
福岡県高等学校体育連盟陸上競技専門部
福岡県高等学校体育連盟体操専門部
福岡県高等学校体育連盟水泳専門部
福岡県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
福岡県高等学校体育連盟バレーボール専門部
福岡県高等学校体育連盟卓球専門部
福岡県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
福岡県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
福岡県高等学校体育連盟サッカー専門部
福岡県高等学校体育連盟ラグビー専門部
福岡県高等学校体育連盟バドミントン専門部
福岡県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
福岡県高等学校体育連盟相撲専門部
福岡県高等学校体育連盟柔道専門部
福岡県高等学校体育連盟漕艇専門部
福岡県高等学校体育連盟剣道専門部
福岡県高等学校体育連盟レスリング専門部
福岡県高等学校体育連盟弓道専門部
福岡県高等学校体育連盟テニス専門部
福岡県高等学校体育連盟登山専門部
福岡県高等学校体育連盟自転車競技専門部
福岡県高等学校体育連盟ボクシング専門部
福岡県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
福岡県高等学校体育連盟ヨット専門部
福岡県高等学校体育連盟フェンシング専門部
福岡県高等学校体育連盟空手道専門部
福岡県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
福岡県高等学校体育連盟なぎなた専門部
福岡県高等学校体育連盟研究部
福岡県高等学校体育連盟野外活動専門部

佐賀県高等学校体育連盟

〒840-0014　佐賀市北川副町大字木原100
県立佐賀東高校内
TEL　0952（24）0303
FAX　0952（24）0224

佐賀県高等学校体育連盟会　長　相良　哲朗
佐賀県高等学校体育連盟副会長　井上正一郎
佐賀県高等学校体育連盟副会長　寺田　範男
佐賀県高等学校体育連盟副会長　笠　慶宜
佐賀県高等学校体育連盟理事長　北御門哲男
佐賀県高等学校体育連盟副理事長　大高　正道
佐賀県高等学校体育連盟副理事長　大坪　郁弘
佐賀県高等学校体育連盟陸上競技専門部
佐賀県高等学校体育連盟体操専門部
佐賀県高等学校体育連盟新体操専門部
佐賀県高等学校体育連盟水泳専門部
佐賀県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
佐賀県高等学校体育連盟バレーボール専門部
佐賀県高等学校体育連盟卓球専門部
佐賀県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
佐賀県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
佐賀県高等学校体育連盟サッカー専門部
佐賀県高等学校体育連盟ラグビー専門部
佐賀県高等学校体育連盟バドミントン専門部
佐賀県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
佐賀県高等学校体育連盟相撲専門部
佐賀県高等学校体育連盟柔道専門部
佐賀県高等学校体育連盟漕艇専門部
佐賀県高等学校体育連盟剣道専門部
佐賀県高等学校体育連盟レスリング専門部
佐賀県高等学校体育連盟弓道専門部
佐賀県高等学校体育連盟テニス専門部
佐賀県高等学校体育連盟登山専門部
佐賀県高等学校体育連盟自転車競技専門部
佐賀県高等学校体育連盟ホッケー専門部
佐賀県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
佐賀県高等学校体育連盟ヨット専門部
佐賀県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
佐賀県高等学校体育連盟なぎなた専門部
佐賀県高等学校体育連盟調査研究部
有限会社和光企画印刷
有限会社マルゼン看板
株式会社佐賀東急イン
山田武道具　山田　信行
日本教育ヨシエイ株式会社
日本教育シューズ協議会　佐賀県事業本部
JTB佐賀教育旅行センター
大同印刷株式会社

長崎県高等学校体育連盟

〒852-8014　長崎市竹の久保町12－9
県立長崎西高校内
TEL　095（862）8231
FAX　095（862）8255

長崎県高等学校体育連盟会　長　小山　曙美
長崎県高等学校体育連盟副会長　中山　正路
長崎県高等学校体育連盟副会長　浦口　謹右
長崎県高等学校体育連盟理事長　小野　良介
長崎県高等学校体育連盟副理事長　角谷　昌志
長崎県高等学校体育連盟副理事長　倉橋　　徹
長崎県高等学校体育連盟陸上競技専門部
長崎県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
長崎県高等学校体育連盟バレーボール専門部
長崎県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
長崎県高等学校体育連盟卓球専門部
長崎県高等学校体育連盟体操専門部
長崎県高等学校体育連盟相撲専門部
長崎県高等学校体育連盟弓道専門部
長崎県高等学校体育連盟剣道専門部
長崎県高等学校体育連盟柔道専門部
長崎県高等学校体育連盟サッカー専門部
長崎県高等学校体育連盟ラグビー専門部
長崎県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
長崎県高等学校体育連盟バドミントン専門部
長崎県高等学校体育連盟登山専門部
長崎県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
長崎県高等学校体育連盟ホッケー専門部
長崎県高等学校体育連盟レスリング専門部
長崎県高等学校体育連盟ボクシング専門部
長崎県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
長崎県高等学校体育連盟テニス専門部
長崎県高等学校体育連盟フェンシング専門部
長崎県高等学校体育連盟ヨット専門部
長崎県高等学校体育連盟漕艇専門部
長崎県高等学校体育連盟水泳専門部
長崎県高等学校体育連盟空手道専門部
長崎県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
長崎県高等学校体育連盟調査研究部

熊本県高等学校体育連盟

〒860-0877　熊本市清水町楡木327
県立熊本北高校内
TEL　096（339）7224
FAX　096（339）7266

熊本県高等学校体育連盟会　長　城本　和博
熊本県高等学校体育連盟副会長　東　　正隆
熊本県高等学校体育連盟副会長　土山　研三
熊本県高等学校体育連盟理事長　高木　三朗
熊本県高等学校体育連盟陸上競技専門部
熊本県高等学校体育連盟体操専門部
熊本県高等学校体育連盟水泳専門部
熊本県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
熊本県高等学校体育連盟バレーボール専門部
熊本県高等学校体育連盟卓球専門部
熊本県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
熊本県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
熊本県高等学校体育連盟サッカー専門部
熊本県高等学校体育連盟ラグビー専門部
熊本県高等学校体育連盟バドミントン専門部
熊本県高等学校体育連盟ソフトボール専門部
熊本県高等学校体育連盟相撲専門部
熊本県高等学校体育連盟柔道専門部
熊本県高等学校体育連盟スキー専門部
熊本県高等学校体育連盟漕艇専門部
熊本県高等学校体育連盟剣道専門部
熊本県高等学校体育連盟レスリング専門部
熊本県高等学校体育連盟弓道専門部
熊本県高等学校体育連盟テニス専門部
熊本県高等学校体育連盟登山専門部
熊本県高等学校体育連盟自転車競技専門部
熊本県高等学校体育連盟ボクシング専門部
熊本県高等学校体育連盟ホッケー専門部
熊本県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
熊本県高等学校体育連盟ヨット専門部
熊本県高等学校体育連盟フェンシング専門部
熊本県高等学校体育連盟空手道専門部
熊本県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
熊本県高等学校体育連盟なぎなた専門部
熊本県高等学校体育連盟研究部
熊本県高等学校体育連盟駅伝専門部
熊本県高等学校体育連盟カヌー専門部
熊本県高等学校体育連盟ダンス専門部
熊本県高等学校体育連盟馬術専門部
熊本県高等学校体育連盟定通制専門部

大分県高等学校体育連盟

〒870-0938　大分市今津留１－19－１
県立大分舞鶴高校内
TEL　0975（53）5382
FAX　0975（53）5392

大分県高等学校体育連盟会　長　秦　　美正
大分県高等学校体育連盟副会長　幸重　和治
大分県高等学校体育連盟副会長　麻生　廉彦
大分県高等学校体育連盟副会長　田崎　弘泰
大分県高等学校体育連盟副会長　古長　司朗
大分県高等学校体育連盟副会長　寺下　楠一
大分県高等学校体育連盟副会長　原尻　正信
大分県高等学校体育連盟理事長　田中　和彦
太星海運有限会社（陸上競技専門部）
大分県高等学校体育連盟体操専門部
利光電業社（水泳専門部）
株式会社松喜屋（バスケットボール専門部）
大分県高等学校体育連盟バレーボール専門部
大分県高等学校体育連盟卓球専門部
大分県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
九州オザキ株式会社大分営業所(ハンドボール専門部)
保月建設工業株式会社（サッカー専門部）
パルプリンツ（ラグビー専門部）
赤尾里美酒店（バドミントン専門部）
二豊土建株式会社代表取締役　恒藤　武(ソフトボール専門部)
タイヤセンター瀬口（相撲専門部）
有限会社伊藤スポーツ（柔道専門部）
大分県高等学校体育連盟漕艇専門部
大分県高等学校体育連盟剣道専門部
有限会社スポーツショップナカガワ(レスリング専門部)
安部弓道具店（弓道専門部）
大分県高等学校体育連盟テニス専門部
サニースポーツ（登山専門部）
有限会社スポーツフジワラ（自転車競技専門部）
株式会社日栄（ボクシング専門部）
大分県高等学校体育連盟ホッケー専門部
株式会社フジタ九州店(ウエイトリフティング専門部)
大分県高等学校体育連盟ヨット専門部
大分県高等学校体育連盟フェンシング専門部
株式会社九州守礼堂（空手道専門部）
大分アーチェリーショップ（アーチェリー専門部）
大分県高等学校体育連盟なぎなた専門部
大分県高等学校体育連盟カヌー専門部
大分県立三重農業高等学校馬術部

宮崎県高等学校体育連盟

〒880-0926　宮崎市月見ケ丘５－２－１
県立宮崎南高校内
TEL　0985（51）4109
FAX　0985（51）4298

宮崎県高等学校体育連盟会　長　山下　兼紀
宮崎県高等学校体育連盟副会長　井上　洋一
宮崎県高等学校体育連盟副会長　西園　隆弘
宮崎県高等学校体育連盟副会長　渡会　武徳
宮崎県高等学校体育連盟副会長　帖佐　利昭
宮崎県高等学校体育連盟理事長　後藤　憲一
宮崎県高等学校体育連盟陸上競技専門部
宮崎県高等学校体育連盟体操専門部
宮崎県高等学校体育連盟水泳専門部
宮崎県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
宮崎県高等学校体育連盟バレーボール専門部
宮崎県バレーボール協会
宮崎県高等学校体育連盟卓球専門部
宮崎県高等学校体育連盟ソフトテニス専門部
宮崎県高等学校体育連盟テニス専門部
宮崎県高等学校体育連盟サッカー専門部
宮崎県高等学校体育連盟ラグビー専門部
宮崎県ホテル旅館組合
宮崎県高等学校体育連盟ハンドボール専門部
宮崎県高等学校体育連盟ウエイトリフティング専門部
宮崎県高等学校体育連盟登山専門部
宮崎県高等学校体育連盟レスリング専門部
宮崎県高等学校体育連盟柔道専門部
宮崎県高等学校体育連盟剣道専門部
宮崎県弓道連盟
宮崎県高等学校体育連盟相撲専門部
宮崎県高等学校体育連盟バドミントン専門部
宮崎県高等学校体育連盟ホッケー専門部
宮崎県高等学校体育連盟空手道専門部
宮崎県高等学校体育連盟漕艇専門部
宮崎県高等学校体育連盟フェンシング専門部
宮崎県高等学校体育連盟ヨット専門部
宮崎県高等学校体育連盟自転車競技専門部
宮崎県高等学校体育連盟ボクシング専門部
宮崎県高等学校体育連盟馬術専門部

鹿児島県高等学校体育連盟

〒891-0116　鹿児島市上福元町5255
県立鹿児島南高校内
TEL　099（268）8391
FAX　099（268）0234

鹿児島県高等学校体育連盟会　長　中川　征人
鹿児島県高等学校体育連盟副会長　池上　成昭
鹿児島県高等学校体育連盟副会長　宮内　俊明
鹿児島県高等学校体育連盟理事長　新留　泰典
吉田　正孝（陸上競技専門部委員長）
下田　富良（体操専門部委員長）
福重　澄雄（水泳専門部委員長）
中村　俊次（バスケットボール専門部委員長）
今和泉省蔵（バレーボール専門部委員長）
前村　義則（卓球専門部委員長）
川城　　城（ソフトテニス専門部委員長）
中原　房雄（ハンドボール専門部委員長）
松沢　隆司（サッカー専門部委員長）
原　　豪（ラグビー専門部委員長）
前野親二郎（バドミントン専門部委員長）
愛甲　博文（ソフトボール専門部委員長）
慶永　建吾（相撲専門部委員長）
吉井　　朗（柔道専門部委員長）
宮川　　進（漕艇専門部委員長）
大口　昭三（剣道専門部委員長）
糸永　三郎（レスリング専門部委員長）
増利　裕之（弓道専門部委員長）
川畑　正一（テニス専門部委員長）
水迫　達郎（登山専門部委員長）
大山　真司（自転車競技専門部委員長）
瀬戸山伸一（ボクシング専門部委員長）
鶴田　　稔（ホッケー専門部委員長）
石原　和弘（ウエイトリフティング専門部委員長）
常山　隆光（ヨット専門部委員長）
四元　一志（フェンシング専門部委員長）
竹之内秀晴（空手道専門部委員長）
溝口　純正（アーチェリー専門部委員長）
喜入みどり（なぎなた専門部委員長）
木原　紀幸（研究部委員長）

沖縄県高等学校体育連盟

〒900-0026　那覇市奥武山町45
奥武山陸上競技場2F
TEL　098（858）4835
FAX　098（859）1537

沖縄県高等学校体育連盟会　長　玻名城英介
沖縄県高等学校体育連盟副会長　中野吉三郎
沖縄県高等学校体育連盟副会長　津嘉山るり子
沖縄県高等学校体育連盟理事長　知念　正勝
沖縄県高等学校体育連盟副理事長　富永　　登
沖縄県高等学校体育連盟副理事長兼事務局長　知念　正則
沖縄陸上競技協会会長　津嘉山恵福
沖縄県高等学校体育連盟バスケットボール専門部
スポーツショップ　アシスト
沖縄県高等学校体育連盟柔道専門部
印刷総合企画　パレット
沖縄県自転車競技連盟会長　嘉数昇明
沖縄県アマチュアボクシング連盟
沖縄県高等学校体育連盟アーチェリー専門部
パシフィックホテル沖縄
株式会社沖 産業
パシフィック観光産業

陸上競技専門部

〒192-0354 八王子市松が谷1772
都立松が谷高校内
TEL 0426－76－1231
FAX 0426－75－1237

卓球専門部

〒464-8540 名古屋市千種区若水3-2-12
愛知工業大学名電高校内
TEL 052－721－0311
FAX 052－722－8302

体操専門部

〒543-0031 大阪市天王寺区石ヶ辻町12-16
清風高校内
TEL 06－6771－5973
FAX 06－6771－5974

ソフトテニス専門部

〒206-0025 多摩市永山5-22
都立永山高校内
TEL 0423－74－8460
FAX 0423－71－5615

水泳専門部

〒192-0905 八王子市明神町4-20-1
都立南多摩高校内
TEL 0426－42－2431
FAX 0426－42－2195

ハンドボール専門部

〒241-0038 川崎市多摩区生田4-32-1
県立生田東高校内
TEL 044－932－1211
FAX 044－934－4648

バスケットボール専門部

〒112-0012 文京区大塚1-5-9
跡見学園高校内
TEL 03－3941－8161
FAX 03－3941－8685

サッカー専門部

〒154-0002 世田谷区下馬4-1-5
学芸大学附属高校内
TEL 03－3421－5151
FAX 03－3421－5152

バレーボール専門部

〒545-0011 大阪市阿倍野区昭和町3-1-64
桃山学院高校内
TEL 06－6621－1181
FAX 06－6629－6111

ラグビー専門部

〒571-0038 門真市柳田町29-1
府立門真西高校内
TEL 06－6909－0318
FAX 03－6909－0798

バドミントン専門部

〒400-0502 南巨摩郡増穂町最勝寺1372
県立増穂商業高校内
TEL 0556－22－3185
FAX 0556－22－3187

スケート専門部

〒394-0033 岡谷市南宮2-1-17
県立岡谷東高校内
TEL 0266－23－3161
FAx 0266－21－1016

ソフトボール専門部

〒410-0033 沼津市杉崎町11-20
県立沼津中央高校内
TEL 0559－21－0346
FAX 0559－24－7158

漕艇専門部

〒332-0001 川口市朝日5-9-18
市立川口高校内
TEL 048－224－2211
FAX 048－224－0508

相撲専門部

〒037-0200 北津軽郡金木町字芦野200
県立金木高校内
TEL 0173－53－2079
FAX 0173－52－3739

剣道専門部

〒130-0022 墨田区江東橋1-7-14
都立両国高校内
TEL 03－3631－1815
FAX 03－3846－6682

柔道専門部

〒203-0052 東久留米市幸町5-8-46
都立久留米高校内
TEL 0424－71－2510
FAX 0424－75－8400

レスリング専門部

〒107-0052 港区赤坂4-1-26
日本工業大学附属東京工業高校内
TEL 03－3589－1171
FAX 03－3589－1139

スキー専門部

〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条18丁目
北海道札幌平岸高校内
TEL 011－812－2010
FAX 011－811－7557

弓道専門部

〒350-0036 川越市小仙波町5-14
県立川越総合高校内
TEL 0492－22－4148
FAX 0492－29－1050

テニス専門部

〒791-3102 伊予郡松前町北黒田119-2
県立伊予高校内
TEL 089－984－9311
FAX 089－985－0622

ウエイトリフティング専門部

〒285-0841 佐倉市下志津263
県立佐倉西高校内
TEL 043－489－5881
FAX 043－462－0641

登山専門部

〒420-0839 静岡市鷹匠2-4-18
静岡精華高校内
TEL 054－254－7334
FAX 054－255－2287

ヨット専門部

〒249-8510 逗子市新宿2-5-1
逗子開成高校内
TEL 0468－71－2062
FAX 0468－73－8459

自転車競技専門部

〒619-8102 京都市西京区川島松ノ木本町27
府立桂高校内
TEL 075－391－2151
FAX 075－391－2153

フェンシング専門部

〒464-8540 名古屋市千種区若水3-2-12
愛知工業大学名電高校内
TEL 052－721－2062
FAX 052－722－8302

ボクシング専門部

〒329-2712 那須郡西那須野町下永田6-4
県立那須清峰高校内
TEL 0287－36－1155
FAX 0287－37－2458

空手道専門部

〒152-0023 目黒区八雲2-14-1
八雲学園高校内
TEL 03－3717－9062
FAX 03－3717－9063

ホッケー専門部

〒369-1623 秩父郡皆野町大淵19-1
県立皆野高校内
TEL 0494－62－2076
FAX 0494－63－1001

アーチェリー専門部

〒330-8567 大宮市堀ノ内1-615
大宮開成高校内
TEL 048－641－7161
FAX 048－647－8881

なぎなた専門部

〒468-0014 名古屋市天白区中平2-901
東海女子高校内
TEL 052－803－8432
FAX 052－804－0647

研究部

〒331-0061 大宮市西遊馬1601
県立大宮武蔵野高校内
TEL 048－620－1903
FAX 048－620－1903

定時制・通信制専門部

〒144-0051 大田区西蒲田2-2-1
都立大森高校内
TEL 03－3753－3161
FAX 03－3754－0978

祝

全国高等学校体育連盟50周年

第78回 全国高校ラグビー大会

HBC	北海道放送	TUT	チューリップテレビ	BSS	山陰放送
ATV	青森テレビ	MRO	北陸放送	RSK	山陽放送
IBC	IBC 岩手放送	FBC	福井放送	RCC	中国放送
TBC	TBC東北放送	SBC	信越放送	TYS	テレビ山口
ABS	秋田放送	SBS	静岡放送	JRT	四国放送
TUY	テレビユー山形	CBC	中部日本放送	ITV	あいテレビ
TUF	テレビユー福島	GBS	岐阜放送	KUTV	テレビ高知
TBS	東京放送	MTV	三重テレビ	RKB	RKB毎日
GTV	群馬テレビ	BBC	びわ湖放送	NBC	長崎放送
TVS	テレビ埼玉	KBS	KBS京都	RKK	熊本放送
ctc	千葉テレビ放送	MBS	毎日放送	OBS	大分放送
TVK	TVKテレビ	NVN	奈良テレビ放送	MRT	宮崎放送
UTY	テレビ山梨	SUN-TV	サンテレビジョン	MBC	南日本放送
BSN	新潟放送	WTV	テレビ和歌山	RBC	琉球放送

私ども民間放送加盟42社は、高校ラグビーの放送を通じて、地域社会のアマチュアスポーツの健全な発展に寄与したいと念願致しております。

祝全国高等学校体育連盟50周年

私たちは

「インターハイ」

を応援します。

人が好き。地球が好き。旅がスキ。

近畿日本ツーリスト

SENOH QUALITY

スポーツ器具には驚くほど広範囲な種類の素材が使われます。競技者が直接触れるのですから、計算上の安全性だけでなく、“使いやすさ”も要求されるのです。強いだけでなく弾性に富んだ特殊鋼管、プレー中でも汗ですべることのない吸湿性のある素材など、用途に応じて最上で高品質の素材が吟味され、セノー製品が生まれます。

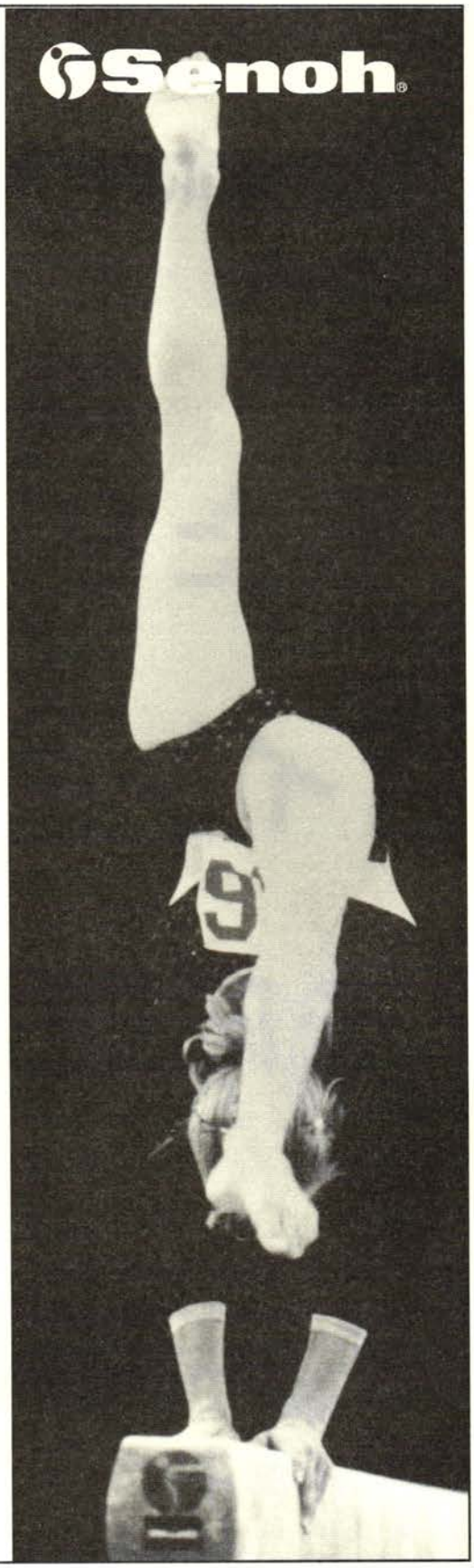
国際体操連盟公式競技認定品製造工場
日本体操協会器械器具検定工場

セノー株式会社

〒140-0004
東京都品川区南品川2-2-13
TEL:(03)5461-4111

営業品目

体育館施設器具・体操施設器具・球技施設器具・フィットネス施設器具・トランポリン・スイミング施設器具・格技施設器具・陸上遊園施設器具など



asics

SCOOP!!!

これがスピーバ搭載モデルだ!!

スタミナをつけたミッドソール

品名／ターサースピーバCF 品番／TJG677
メーカー希望小売価格／¥15,500(税抜き)
カラー／5001 ネイビーブルー×ホワイト
サイズ／24.0～29.0cm

シリーズ最高峰モデル、ターサースピーバCFデビュー

今回発売される「ターサースピーバCF」には、着地時の衝撃を和らげるクッション性はそのままに、蹴り出しの推進力を高める「反発性」を約20%もアップさせた「スピーバ」がミッドソールに搭載されている。さらに特筆すべきは、この「スピーバ」がもたらす性能がシューズを履き込んでからも長く持続される点だ。他にもホールド性、通気性に優れた機能が盛り込まれており、まさに、レーシングシューズのトップモデルと呼ぶに相応しい1足だ。

SpEVA

株式会社アシックス

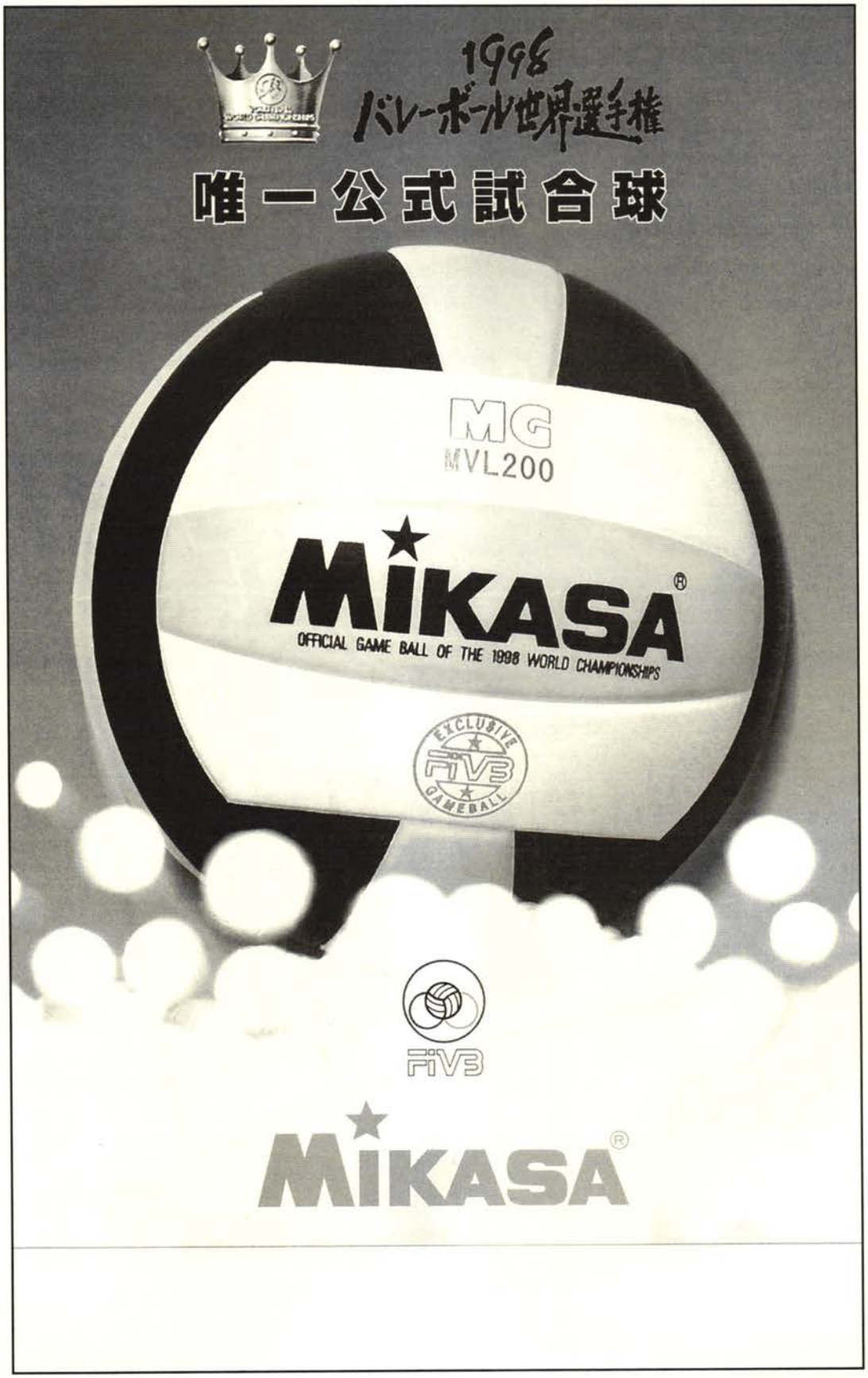
●インターネットでシューズの情報を提供しています。http://www.asics.co.jp/

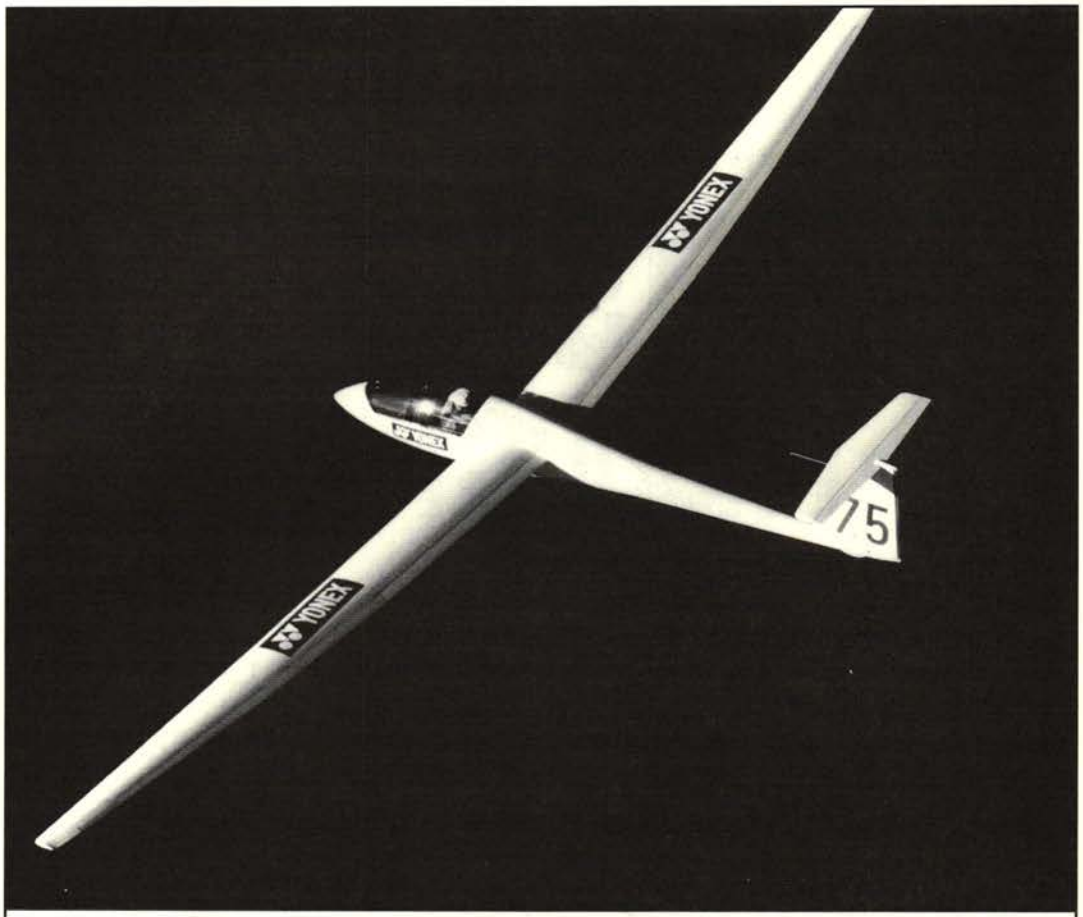
●Ⓡは㈱アシックスの登録商標です。●商品についてのお問い合わせは株式会社アシックスお客様相談室までどうぞ。

本　社／〒650-8555 神戸市中央区港島中町7丁目1番1 TEL(078)303-2233(専用)
東京支社／〒130-8585 東京都墨田区錦糸4丁目10番11号 TEL(03)3624-1814

スポーツあげたい、
スポーツほしい。
全国共通スポーツ券

本気なら、アシックス。


1998
バレーボール世界選手権
唯一公式試合球
MG
MVL200
MIKASA
OFFICIAL GAME BALL OF THE 1998 WORLD CHAMPIONSHIPS
EXCLUSIVE
FIVB
GAMEBALL
FIVB
MIKASA



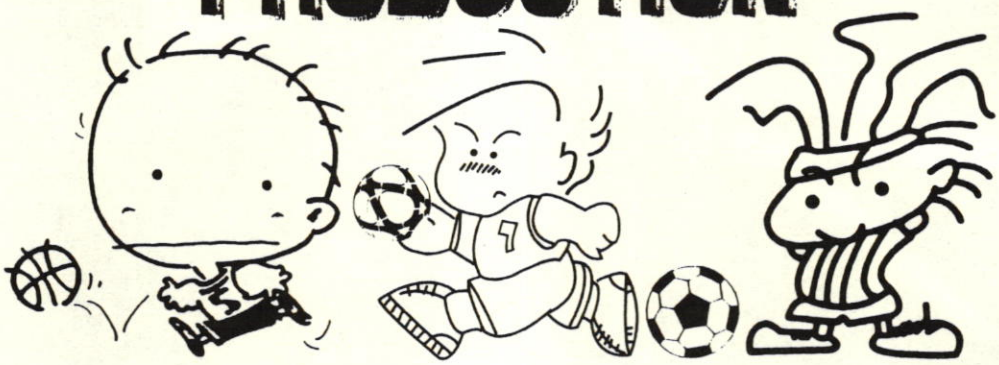
新たなる挑戦。'99ヨネックス

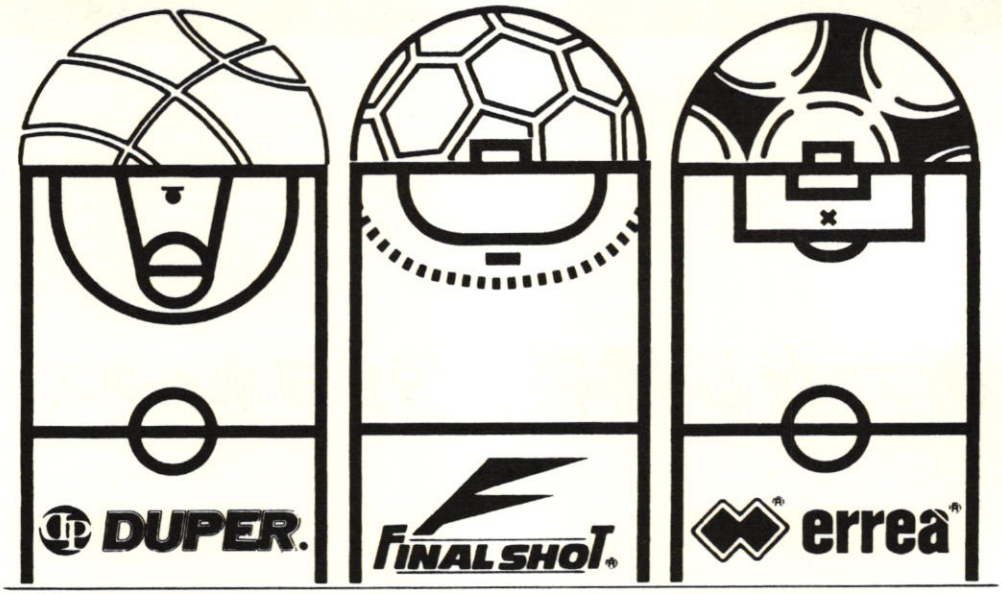
ヨネックス株式会社 お問い合せ先
東　京／TEL.03-3836-1221(代)　仙　台／TEL.022-232-1221(代)
大　阪／TEL.06-768-7261(代)　福　岡／TEL.092-472-8751(代)
名古屋／TEL.052-323-5541(代)
インターネットホームページ http://www.yonex.co.jp

YONEX®

祝 全国高等学校体育連盟創立５０周年

SPORTS TALENT PRODUCTION





DUPER FIVE CO.,LTD.

3-5, TATEKAWA3-CHOME, SUMIDA-KU, TOKYO, 130-0023JAPAN

TEL, TOKYO(03)3632-7045 FAX, TOKYO(03)3632-8327

ご健闘を、祈る

抜群の実績と信用

株式会社 ニッコー

群馬県前橋市文京町４－22－23☎027224-2688

祝

創立50周年記念

MIZUNO

特約店

スポーツ品 (株)タキモト

代表取締役　瀧本 明生
和歌山市吹上2丁目6番50号
TEL　0734-26-3939
FAX　0734-26-3966

オールラウンドに
『ユニフォーム』を提案します。

東海衣料株式会社

〒510-0071　三重県四日市市西浦2丁目4-14
Phone:0593・53・0258(代)　Fax:0593・51・4690
●スクールユニフォーム●スクールスポーツウェア●ビジネスユニフォーム

祝　全国高等学校体育連盟創立50周年

店名	住所	TEL	FAX
（有）内川スポーツ 代表者　内川　峯子	〒780-0841　高知市帯屋町2丁目4-12	（23）5331	（23）5332
（株）サンエス　アスリート 代表者　久保　純子	〒780-0844　高知市永国寺町1-1	（72）2033	（72）7135
（有）稲門スポーツ 代表者　浜田　耕三	〒780-0841　高知市帯屋町1丁目14-12	（75）4428	（75）7626
（有）にしむらスポーツ 代表者　西村　安久	〒780-8011　高知市海ノ辻8-12	（32）8191	（32）5478
（株）ヒロマツ 代表者　前田　一彰	〒780-0870　高知市本町3丁目5-20	（22）6151	（22）6223
（有）プロエース 代表者　門田　忠尚	〒780-0822　高知市はりまや町2丁目11-24	（83）8600	（83）8669
（有）サンコウスポーツ 代表者　玉城　秀葉	〒780-0814　高知市稲荷町7番29号	（84）2411	（84）2412
第一スポーツ 代表者　宅間　志郎	〒780-0250　高知市瀬戸1-2-78	（42）8645	（42）8645
（有）ミマスポーツ 代表者　美馬　義一	〒780-8122　高知市高須714-8	（83）2532	（85）0835
スポーツショップフットワーク 代表者　松井　智治	〒780-8015　高知市百石町1-18-14	（32）8939	（32）8940
（有）ヨシダスポーツ 代表者　吉田　雄三	〒780-0043　高知市寿町7-6	（23）0355	（23）0420

高知中央スポーツ用品小売商組合

Chugai
伝統と新しいセンスを誇る！
中外の記章・賞品・記念品

企 画→製 作→販 売

社章・会員章・メダル・キーホルダー・タイ止・カフス・プラスチック名札・各種看板
優勝カップ・トロフィ・特註楯＆額・金銀盃・美術工芸品・胸像・ネームプレート
社旗・団体旗・優勝旗・腕章・ペナント・造花胸章・大会用＆表彰用賞品・各種記念品

CHUGAI KISHO
中外徽章
株式会社

本社　千代田区神田小川町3—2(神田小川町一駿河台下・靖国通り)
☎(3294)3431(代)・FAX(3294)3436

練馬営業所　練馬区豊玉北1-6-13 カエサル江古田201号
☎・FAX(3991)6623

あなたのスポーツライフを
お手伝いします

DIW タイワスポーツ 株式会社

本　社・外　商　065　札幌市東区北17条東4丁目 江端ビル
TEL 751-7111(代)　FAX 751-1500
ウエアーショップ　060　札幌市中央区南3条西2丁目
HBC三条ビル2F
TEL 231-2205(代)　FAX 231-2209

FUKUSHI SPORTS

ストリートであおうよ！

フクシスポーツ

(株)スポルタアオモリ

青森市古川1丁目14番地5号　TEL.0177(23)3567(代)

祝 全国高等学校体育連盟創立50周年

EVENT SOUVENIR
TOTAL PLANNER

Kodaira

総合記念品メーカー

楯・徽章・メダル・カップ・トロフィ・優勝旗・テレホンカード・Tシャツ・タオルetc。

贈られる喜びの創造

イベントショップ

(日本スポーツ記章協会正会員)

Kodaira

株式会社 コダイラ青森

代表取締役 児玉春男

〒038 青森市西滝字菅野屋41－25

TEL.0177-66-4184(代) FAX.0177-66-4154

千葉市旅館ホテル協会

理事長　島崎幸次郎　役員一同

ご宿泊のご相談は千葉市旅館ホテル協会へ

住　所　〒260　千葉市中央区富士見1-12-7
千葉県観光物産センター4F
TEL　043－227－5036
FAX　043－227－9355

《直接製造・販売》

バッチ・メダル・タイ止・カップ・トロフィー・楯
旗・略旗・文鎮・銀盃・賞杯・名札・アクリル製品・etc

(有) 大東徽章製作所

本　　社　〒113-0033　東京都文京区本郷２－３－４
TEL03-3815-1788　FAX03-3815-1690
尾久工場　〒116-0011　東京都荒川区西尾久７－39－５
TEL03-3810-2355

世界のボールシーンを支えるのは…モルテン。

地球人はボールという共通語をもっている

肌の色や習慣は違っていても、スポーツを愛する人間同士、
いつでもどこでも通じ合える。
ボールは、私たち地球人の共通語なんだ。

VOLLEYBALL
- ●Vリーグ公式使用球
- ●全日本バレーボール小学生大会指定使用球
- ●日本レクリエーション協会推薦球

DODGEBALL
- ●日本ドッジボール協会公認球

RUGBYFOOTBALL
- ●日本ラグビーフットボール協会認定球

HANDBALL
- ●日本リーグ唯一の公式試合球
- ●全日本大学選手権唯一の公式試合球
- ●全国高等学校大会試合球
- ●全国中学校大会試合球
- ●全国小学校大会唯一の公式試合球

SOCCER
- ●AFC主催大会唯一の公式試合球
- ●Jリーグ唯一の公式試合球
- ●トヨタカップ唯一の公式試合球
- ●全日本少年サッカー大会唯一の公式試合球
- ●トヨタチャレンジカップ唯一の公式試合球
- ●日本サッカー協会主要7大会唯一の公式試合球
- ●全国高校選手権大会試合球

BASKETBALL
- ●FIBA主催国際大会唯一の公式試合球
- ●バスケットボール日本リーグ機構（JBL）主催大会唯一の公式試合球
- ●abc主催大会唯一の公式試合球

molten®

株式会社 モルテン

東京本社 東京都墨田区横川5丁目5-7
大阪・名古屋・福岡・広島・四国・仙台・札幌・リノUSA・デュッセルドルフG

スポーツ写真 記録 報道

PROPHOTO SUNNY

その一瞬・その瞬間を キャッチ

感動の一瞬
一生の思い出に

企画制作
有限会社 プロフォートサニー

〒178-0062 東京都練馬区大泉町2丁目54番地3号 TEL (03)3925-4118(代)
FAX (03)3925-4438

トレーニングバッグ用スタンド［個人用］

Winning FIGHTING SPORTS WORLD

ドラム付スタンドセット

HG-2000：¥131,000

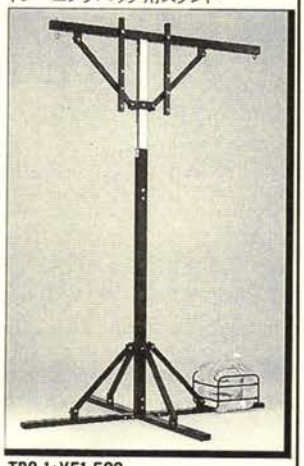
●スタンド(TBS-1)、ドラム(F-13)、パンチングボールS型(SB-6000)とダブルエンド型(SB-7000)、トレーニングバッグ(90×35φcm、25kg)、パンチンググローブのセット。

スタンドセット

HG-1000：¥99,000

●スタンド(TBS-1)、パンチングボールダブルエンド型(SB-7000)、トレーニングバッグ(90×35φcm、25kg)、パンチンググローブのセット。
※別売ドラム(F-13)取り付け可能。

トレーニングバッグ用スタンド



TBS-1：¥51,500

●サイズ：縦165×横160×高さ(最低時222～最高時242cm)
●重量：27kg ●高さ調節：4段階
●最重量限度：40kg
※トレーニングバッグ、パンチングボールは別売です。
※別売ドラム(F-13)取り付け可能。

意匠登録番号PAT第882303号

●カタログご希望の方は、ハガキでお申し込みください。

株式会社ウィニング TEL.03(3828)8136
〒113 東京都文京区千駄木3丁目40番14号

MEMORIAL GOODS

JFA
Japan Fair Assist

株式会社ジェイエフエー

東京本社 〒111-0035 東京都台東区西浅草3-5-12 TEL. 03-3845-6319 FAX. 03-3845-6372

EVENT SOUVENIR TOTAL PLANNER

いい汗を
流してつくる
明るい社会

土木建築の設計～施工

Tanikawa Construction

谷川建設株式会社

長野県佐久郡軽井沢町追分1404
〒389-0115　TEL（0267）45-1711
FAX（0267）45-1715

マルチ時代を超える

メールアドレス　nagahashi@mail.wbs.or.jp

MACに代表されるマルチメディアパソコンの
登場と情報スーパーハイウェイ構想によって
今、社会が、文化が、大きく変わりました。
ナガハシはマルチを飛び超えます。

ナガハシ印刷株式会社
クリエイティブルーム NACO
〒421-0115 静岡市みずほ1丁目35-3
TEL 054-257-0111 FAX 054-257-1131

一般スポーツ用品・体育施設・遊具販売

タ キ スポーツショップ

〈静　岡　店〉
静岡市羽鳥1070－9
ＴＥＬ〈054〉278－3588
ＦＡＸ〈054〉277－1908

〈焼　津　店〉
焼津市三ケ名字宮島327-7
ＴＥＬ〈054〉627－7891

〈ドルフィン〉
県立西ケ谷水泳場内
ＴＥＬ〈054〉296－3675

SPORTS SHOP TAKI

TEA ROOM Dolphin

静　岡　県　立　水　泳　場

明日の子供たちへ。

財団法人河本文教福祉振興会は滋賀県の教育行政の発展と福祉振興活動の充実につとめ、目的をもって学業に励む高校生への奨学金の給付や小中学校・高等学校への優良図書・教材の寄贈等、その他文化・スポーツを問わず幅広い分野で地道な活動をつづけています。

財団法人 河本文教福祉振興会
〒520-0801 滋賀県大津市におの浜一丁目1番3号 TEL 077-525-3219

心に残る、
文字で残す。
過去・現在・未来を文字にしよう。

空気と夕日のきれいな印刷工房
藤尾工房
フリーダイヤル 0120-24-2763
有限会社 竹田謄写堂

Tennis Soft Tennis Badminton
時代はソフトフィーリング
カタイチタンに
スーパーソフト
ROOTS 最強伝説
～序章～

GOSEN
株式会社ゴーセン 〒540-0038 大阪市中央区内淡路町3-1-17 TEL 06-6942-5871 FAX 06-6944-1766

きらめく瞬間(とき)を未来に伝えたい。

好きなことをしている時、
感激で胸がいっぱいになった時、
誰もが、とってもいい顔をしています。
あなたの記念すべきその時を、あなたの素敵にきらめくその一瞬を、私達はのがしません。
未来に残す素敵な記念写真をお届けするために、いつもいっしょうけんめいの
大阪フォトサービスです。

OSAKA PHOTO SERVICE

株式会社 大阪フォトサービス
〒550 大阪市西区江之子島1丁目5-17
TEL.(06)443-7608(代表)
FAX.(06)443-4437

SPORTS yano

われらスポーツ仲間

ヤノスポーツ

ヤノスポーツ

ヤノ運動用品株式会社

本店 神戸市中央区三宮町3丁目8-1(三宮センター街)

本店
☎(078)391-1121
FAX(078)331-1358

外商部
☎(078)731-1812
ﾌﾘｰ 0120-071812

兵庫県庁売店 内線6625
☎(078)341-7711

名谷店
☎(078)792-6822

北六甲店
☎(078)987-1500

高砂店
☎(0794)43-1527

姫路店
☎(0792)95-5113

加古川店
☎(0794)27-3448

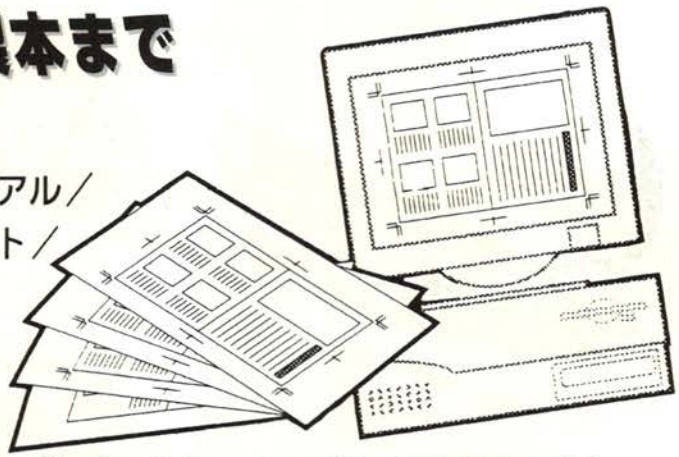
スポーツ用品

株式会社 橋尾スポーツ

本　　店　鳥取市扇町115-1　TEL㉓5321(代表)
FAX㉒4166
米子支店　米子市明治町127番地　TEL㉝3578(代表)
FAX㉞2696

Windows'MacによるDTP編集から
出力、印刷製本まで

出版物／名簿／マニュアル／
カタログ／パンフレット／
シール／一般印刷物



株式会社 矢谷印刷所
☎(0857)23-7551 FAX (0857) 26-3464
〒680-0823 鳥取市幸町96番地

JESの新しい保健用品

校内履 呼吸(吸圧)シューズ

実用新案第1831277号　特許第1615420号　意匠登録出願中(靴底)

足の健康を守る4つの効果

1 呼吸効果

靴底の通気孔は、足の発汗による熱気や湿気を放出します。また水や塵埃の侵入をシャットアウトします。

2 清潔効果

甲布のウレタンメッシュは抜群の通気性と強度をもっています。スコッチガード加工は泥水・油をはじき汚れにくく、洗濯機で洗え手入れも簡単です。

3 消臭・抗菌効果

中敷の消臭・抗菌(バクテキラー)加工は、雑菌やニオイの元を抑え清潔で爽やかな履き心地が持続します。

4 吸圧効果

カカト部の衝撃吸収構造はヒールストライクを緩和し、疲労骨折など足の損傷を保護します。

日本教育シューズ協議会　TEL 086-272-5463

〒703 岡山市西川原1丁目11番6-1号　FAX086-273-9439

グランド印刷株式会社

本　　社　徳島市万代町6丁目20－15

〒770-0941　**TEL 0886-22-8448（代）**

FAX 0886-22-8418

東京営業所　東京都港区虎ノ門1丁目22番1号

〒105-0001　徳島県虎ノ門ビル2F

TEL 03-3502-6918

大阪営業所　大阪市中央区南船場3丁目9－10

〒542-0081　徳島ビル7F

TEL 06-258-9328

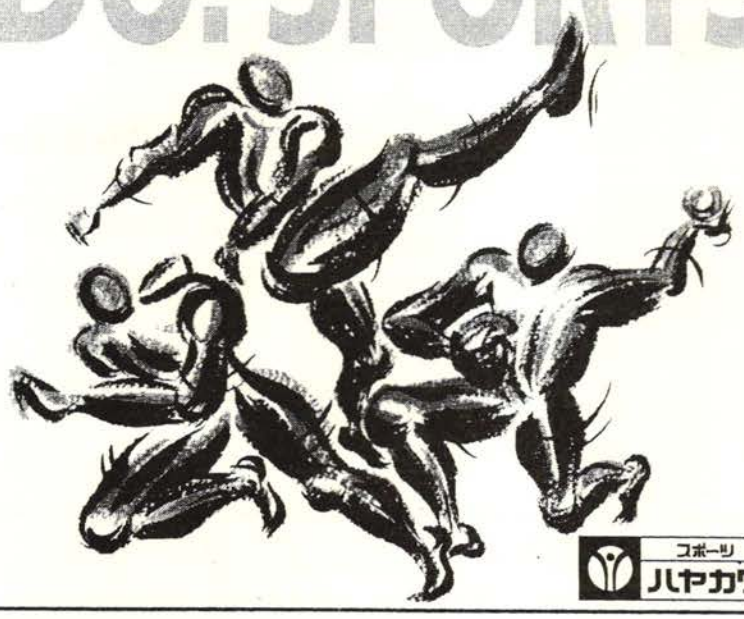
石井工場　名西郡石井町藍畑字第十159

〒779-3214　**TEL 0886-75-0836**

FAX 0886-75-0777

DO! SPORTS

スポーツの楽しさと感動をお届けします。



スポーツ ハヤカワ

スポーツハヤカワ〈熊本〉
●ハヤカワスポーツ館 096-324-3700
●フィラスポート 096-326-0148
●ナイキショップ熊本 096-326-3120
●武蔵ケ丘店 096-339-7751
●健軍店 096-365-6666
●サンリブ店 096-370-1011
●サンピアン店 096-389-6620
●クリスタルモール店 096-334-1633
●Bip'sハヤカワ 096-353-1123
●キャンパーク 096-337-3955
●ドアジャック 096-337-4443
●玉名店 0968-72-5777
●宇土シティ店 0964-26-1177
●八代店 0965-34-0555
スポーツハヤカワ〈福岡〉
●天神本店 092-734-1114
●ナイキコーナー 092-714-5928
●アディダス・スタイルス 092-714-5961
●リーボックプラネット 092-734-4865
●フィラショップ天神 092-734-5007
●キャンパーク天神 092-712-6200
●ナイキショップ天神 092-722-3355
●小倉店 093-651-6565
スポーツハヤカワ〈大分〉
●大分店 0975-37-3611
スポーツハヤカワ〈鹿児島〉
●鹿児島本店 099-253-3388
スポーツハヤカワ〈佐賀〉
●佐賀店 0952-40-0555
ハヤカワ営業本部
●熊本営業部 096-371-6688
●八代営業部 0965-34-0555
ハヤカワフランチャイズ店
●小国FC店 0967-46-2188
●デュオFC店 096-384-9828
●牛深FC店 09697-2-2384
●蘇陽FC店 0967-83-0535
●田川FC店 0947-32-7768
●西部スポーツ 096-329-2360
スポーツクラブ
●サンリブアレスト 096-370-1010

21世紀へ　あなたの夢のお手伝い

大分銀行は地域の文化・芸術
スポーツ活動を応援します。

地域をみつめ 未来をみつめ
大分銀行

自然とともに歩んでいきます。

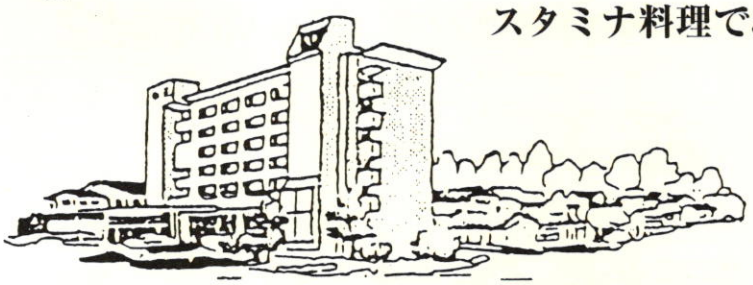
三和酒類株式会社

大分県宇佐市大字山本・虚空蔵寺丁

TEL.0978-32-1431
FAX.0978-33-3030

読売巨人軍宿舎
スポーツマンの宿

スタミナ料理でおまちします。



宮崎総合運動公園に最も近い
スポーツマンを応援します。
宮崎での大会合宿等に御利用ください。

青島温泉
青島水光苑ホテル
宮崎市青島海岸　TEL（0985）65－1234（代）
FAX（0985）65－1021

汗いっぱい、
夢いっぱい。

ひたむきな気持ちをうるおしたい。
オリンピックからみなさんの地域の大会まで、
がんばる姿はとっても素敵です
たから、あなたの住む街でも、
スポーツを愛し楽しむすべての人を、
コカ・コーラは積極的に応援しています

南九州コカ・コーラボトリング株式会社
MINAMI KYUSHU COCA-COLA BOTTLING CO., LTD. (コカ・コーラ指定会社)
Coca-Colaとコカ・コーラ、Coke は、The Coca-Cola Company の登録標章です。
コカ・コーラは、世界約200ヵ国で愛され親しまれています。

Enjoy Coca-Cola

コカ・コーラは、オリンピックのオフィシャルスポンサーです。(T-101)

祝

全国高等学校体育連盟創立50周年記念

スポーツ用品
スポーツ服装 } 全般卸商

株式会社 沖縄統合スポーツ

TEL・(098) 885－9794 (代)
FAX・(098) 886－8830

所在地：那覇市首里末吉町3－60－1
(内間インター近く)

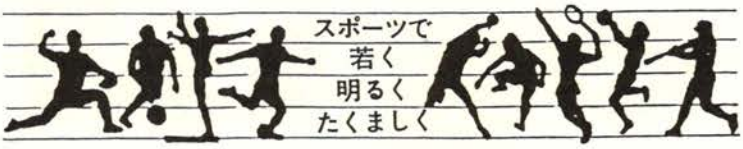
日本旅行は、明治38年創業以来、旅づくり一筋に専念し、夢を育み、心を豊かにし、知を深める平和産業の代表格として愛されています。私たちの活動領域は、旅を越えた新分野へも広がりを見せ様々な分野で大切な役割も担っています。日本旅行は、21世紀に向けて常に新しい旅を創造し、「世界人類と自然との豊かな共存」をめざし、積極的に活動しております。
地球サイズの楽しさや感動を最高のサービスでお客様にお届けしてまいります。

国内旅行は
赤い風船

海外旅行は
MACH マッハ

日本旅行
運輸大臣登録旅行業第2号 (社)日本旅行業協会会員

祝
全国高等学校体育連盟創立50周年記念



与勝スポーツ店

スポーツ用品全般・マーキング・刺繍
代表者 長浜健昇

沖縄県与那城町字屋慶名711番地の1
電話 978－2406
FAX 978－3638

おかげさまで 40 MANY THANKS 周年。

これからも、ますます「よりよい旅」を提供してまいります。

地域に根ざし、世界にはばたく。

沖縄ツーリスト

那覇市松尾1-2-3　☎(098)862-1111

信用と実績。

八光印

武道具

武道

多田産業株式会社

■小売部　武道具専門店　八光堂

株多田運動具店

スポーツショップ タダ

祝

全国高等学校体育連盟創立50周年記念

有限会社 森印刷所

■カタログ印刷・雑誌名簿印刷・一般印刷

東京都世田谷区奥沢2丁目2番28号
電話03－3723－3215（代表）

ミズノ株式会社 北海道営業所 札幌市豊平区2条8丁目 TEL 011－815－5674	株式会社六甲出版 神戸市灘区岩屋北町3－3－18 TEL 078－871－1234
株式会社辻孔版社 札幌市中央区南27条西11丁目 TEL 011－561－5252	株式会社昭和印刷 代表取締役 丸山 明 宮崎市高洲町50－4 TEL 0985－27－8899
株式会社渡邊運動具店 代表取締役 渡邊 晋 大津市長等2－2－22 TEL 077－522－4928	大里印刷有限会社 代表取締役 崎山 用照 沖縄県島尻郡大里村字古堅962-2 TEL 09894－5－0057

スポーツあげたい。
スポーツほしい。
全国共通スポーツ券 JST

●ミズノ・インターネット情報は——— http://www.mizuno.co.jp
●記載価格はすべて税抜き価格です。消費税相当額はお客様にご負担いただくことになります。
●ミズノ製品についてのお問い合わせ・ご相談は———「ミズノお客様相談センター」
東京 TEL.(03)3233-7110 FAX.(03)3233-7217 大阪 TEL.(06)614-8110 FAX.(06)614-8463

Enjoy!
Coca-Cola
Trademark Regd.
コカ・コーラボトラーズ

創立50周年記念事業実行委員会委員

委員長	高田日呂美（全国理事長）
委員	大杉　一男（全国事務局長）
〃	松本　邦夫（群馬県理事長）
〃	横須賀正治（茨城県副理事長）
〃	佐久間嘉宏（千葉県理事長）
〃	城所　富夫（神奈川県理事長）
〃	荒井　昭雄（ラグビー部長）
〃	松浦　博實（静岡県理事長）
〃	水谷　　弘（陸上競技部長）
8・9年度	阿久津　巌（陸上競技部長）
8年度	山口　一三（静岡県理事長）

記念誌編集委員会委員

委員長	佐久間嘉宏（千葉県理事長）
副委員長	城所　富夫（神奈川県理事長）
委員	久保　正美（埼玉県理事長）
〃	高橋　祐司（神奈川県広報委員長）
〃	小久保敦央（東京都調査研究委員長）
〃	深井　英吾（千葉県年報編集委員長）
〃	杉田季久雄（山梨県副理事長）
8・9年度	川崎　数馬（山梨県事務局長）
9年度	由利　　聡（千葉県事務局長）

【あとがき】

平成８年12月16日星陵会館において、全国高体連創立50周年記念事業第１回実行委員会が開催され、記念事業の一環として、「50周年史」を発刊することが決まりました。

その後、実行委員会で概要が検討され、平成９年７月18日に第１回記念誌編集委員会がスタートし、具体的作業に入りました。

「50年史」の企画・編集方針として、

(1)　40年史を踏襲し、50年間の通史とする。

(2)　50周年記念式典関係資料を掲載することとし、式典終了後の発刊とする。

(3)　記念座談会や部員数統計等、新たな企画を掲載し魅力あるものとする。

(4)　歴代役員や各種規約等を整理・収録し、記録として掲載する。

(5)　原稿をワープロやパソコンで作成し、フロッピーを提出することにより事務作業軽減を図る。

などを原則に編集を進め、発刊までに通算13回の編集委員会を開催し、内容の充実に努めてきたつもりです。

原稿の作成から校正に至るまで意欲的に取り組んでいただきました都道府県高体連並びに加盟専門部の執筆担当の皆様や、貴重な写真や関係資料を提供していただきました関係各位の御協力に対し、衷心より感謝を申し上げます。また、10年前に発刊された「40年史」が貴重な参考資料となり、改めて発刊に携わられた諸先輩に敬意と感謝を申し上げます。

半世紀を迎えた全国高体連の更なる飛躍を願い、本誌の発刊が少しでも役立つことができれば幸いです。

おわりに、通常業務をぬっての積極的な御協力・御指導賜りました全国高体連事務局はじめ編集委員の皆様に心からお礼申し上げます。

平成11年３月吉日

記念誌編集委員長

佐久間嘉宏（千葉県高体連）

全国高体連五十年史

発行日　平成11年3月4日

発　行　全国高等学校体育連盟
創立50周年記念事業実行委員会
〒100-0014　東京都千代田区永田町2－16－2
星陵会館内
TEL 03－3581－5094
FAX 03－3581－6452

編　集　創立50周年記念誌編集委員会

印　刷　有限会社　森印刷所
〒158-0083　東京都世田谷区奥沢2－2－28
TEL 03－3723－3215